

# モンハン飯

しばりんぐ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あなたは斬り落としたモンスターを、『美味しそう』と思ったことはありませんか。剥ぎ取った素材が、どんな味がするんだろうって。考えたことは、ありますか？

食事とは、替えようのない生の特権なのです。つまり何が言いたいのかといえば、全てのハンターがただ武器防具のためにモンスターを狩るわけではない、ということですよ。

※ さあ、調理特を始めましょう。本日のメニューは――。

※ ・クロスオーバーではありません。ダンジョン飯のオマージュ的なモンスターハン

ター二次創作です。

- ・ 食文化含め、独自解釈要素も多少あります。
- ・ ハンターローグポータブル様に同名の作品がありますが、あちらには全く関与しておりません。

# 目次

狩人実食歴 　↳ Life for ea

ting

嗚呼美しき飛竜卵

1

美食は日々の積み重ね

20

味も掘り下げるこの心

38

煮込む心に崩れる気持ち

64

美味との遭遇

87

孤独は食事のパートナー

112

煮ても駄目なら揚げてみる

135

憂うネコは空を見上げる

163

良薬口に美味し

184

ガレオスの砂流れ

205

盗んだハートを噛み締める

231

讀えよ丸いゴールデン

259

幻を喰らうもの

288

渡らぬ先にストントン

317

狩人遠征録

↳ Cigarette、s

true face

月に叢雲花に風呂

341

旅のお供は味覚のお供

365

漁夫の利狙う魚と漁夫

382

味の八方美人

405

豚に真珠、米と酢橘

424

竹に映える丘に生える茸

447

魚心あれば飯心

473

覆	ス	ー	プ	器	に	返	ら	ず	494					
吐	い	た	蜜	は	飲	め	ぬ	516						
熊	の	手	も	借	り	た	い	538						
伏	せ	る	鮫	鰈	に	タ	レ	558						
徒	花	に	実	は	生	ら	ぬ	581						
幻	の	果	実	は	甘	美	な	り	606					
禍	い	と	飯	と	は	今	の	間	に	で	き	る	629	
霜	を	履	み	て	凍	土	へ	至	る	650				
鍋	の	中	に	も	三	年	673							
人	は	パ	ン	の	み	に	生	く	る	に	あ	ら	ず	698
医	食	同	源	721										
狩	人	真	生	譚	く	E	a	t	o	r	b	e	e	

旨	い	物	は	宵	に	食	え	740			
蟹	で	鯛	を	釣	る	762					
小	さ	な	小	さ	な	ネ	コ	の	舌	783	
餅	は	餅	屋	803							
弱	肉	強	食	827							
淡	紅	の	石	鹼	が	た	ゆ	た	う	か	851
極	限	鎮	静	カ	タ	ル	シ	ス	874		
五	里	霧	中	898							
鬼	も	十	八	、	番	茶	も	で	ば	な	920
食	い	物	の	恨	み	は	恐	ろ	し	い	941
げ	ど	く	草	に	塩	968					
鯛	も	一	人	じ	ゃ	旨	か	ら	ず	991	

a t e n く

魚懸甘餌

雨後春筍

一汁一菜椀一つ

含哺鼓腹

えぐい渋いも味のうち

沖のサシミウオ

星に願いを

狩人望濬抄

く Best of joy

く

魚遊釜中

オムライスに鎧

竜の目にも涙

尾ひれがつく

1259123312051182

1159113611111090106610391015

星が願いに

桃栗三年柿八年

一網打尽

睡眠朦朧

拉麵食いの若死

食生夢死

画餅充飢

絶体絶命

脂肪遊戯

猫心あれば人心

白い魚は尾びれも白い

お上手ですね。

ゆく飯くる飯

1545152015001477144814241402138213631342132113051282

美食眠りし福袋

グルメの顔も三度まで

我が名はヴォルガノス

流行りとはかくも厳しきもの

託せ目映いゴールイン

雲と羊とチーズと甘露

鳥の皮の一枚張り

空腹、人情、天彗龍の炎

旨みと野望を挟み込め!

旨いものは最後に食べる

骨の功より飯の功

旨いものには神経を締めよ

生きることは食べること

1881184818251799176817451724170116741648161815911569

医食同源G

狩猟飯 | モンハン飯 |

狩人飯道中 | To live and

eat as I please |

沼地の山海鍋

1968

19421914





狩人実食歴 〈Life for eating〉  
嗚呼美しき飛竜卵

煌めくような眩しい日差し。蒼く澄み切った空。靡く風に、揺れる黄金の草原。

——騒ぎ立つ、肉食モンスター。

「だ、旦那さん！ これは無謀にや！」

「ええいうるさいぞ！ ジャギイ程度に怯える必要はない！」

俺の周りからあのジャギイ特有の鳴き声が鳴り響く。仲間を呼ばんとするそれはこの遺跡平原に大きく響き渡り、それに反応するように薄暗い巣穴から、新たなジャギイが次々と顔を出す。そうして増えゆくジャギイの群れが、まるで俺の行く手を阻むように並び立った。

大量の鋭い瞳が俺を——いや、俺の手の内にある卵を睨む。俺が苦勞して、“奴”の巣穴から運び出したこの卵。圧倒的な質量と重量を持つこの卵。

「だってこんなに出て来たら……ふにゃあ、ジャギイノスまで……。旦那さんタツクル

されて終わりにや」

「勝手に人を終わらせんな。俺がこんな所で吹っ飛ばされる人間だと思ふなよ……ッ！」

巣穴から顔を出したジャギイノスを認識して、ただひたすらネガティブ思考に走るコイツ。俺に牽制という名の文句を垂れ続けるコイツ。

マフモフSネコシリーズに身を包んだこの真つ白なこのアイルーは、『イレル』と名付けた俺のオトモだ。この絶望的な状況を前に、幾つものジャギイの視線を感じて身震いしている。

全く、何時まで経っても臆病が抜けないな。このまま直進してキャンプまで走り続けるなんて、この俺の手の中の卵のことを思えば十分価値がある行為だというのに。

「見てろ！ 卵運搬に命をかけた俺の体術！」

自らを鼓舞するようにそう吠え、こちらに駆け寄ってくるジャギイを半身翻すことで躲す。急に標的が視界から消えたことに驚くそのジャギイをすり抜けて、その勢いを留めながら群れの中に突っ込んだ。

「だ、旦那さんっ!?!」

「お前はブーメランか何かで牽制しな！」

俺の行為に目を丸くするイレルにそう指示すると、何だかへにやへにやとしたやる気

のなさそうなブーメランが、俺の視界に入ってきた。

それはジャギイに当たることなく、弱々しく地面に落ちる。偶然の結果か、それに唾然としたジャギイは少し動きを止めたのだが。

「…………おい」

「にや、にやあ…………」

動揺と恐怖を隠し切れていないネコの鳴き声が、背後から聞こえてくる。その全く役に立たないコイツに、俺は思わず呆れてしまった。この危機的状况では、ただ怯えるのではなく、如何に危機を回避するか。そして、そのためにどう動くかが重要だということに。

迫り来るジャギイノスのタツクルを回転するように躲した俺は、怯えているのか全然戦えていないイルルを叱り付けようと振り向く。そうすることで、何故アイツが戦えていないのか、動揺しているのかを理解した。

180度回転した視界に映ったのは、諤々震えるイルル——の奥からこちらに飛んでくる、卵リオレイアの主の姿だったのだ。

「…………うツ…………おおおおおおツ!?!」

「みやああああああつ!」

圧倒的な重量が大地に降り立った。その質量たるや凄まじく、大地は大きく振動す

る。

そうして雄大な翼を収めた奴は、その怒りに満ちた瞳を爛々と輝かせて俺を睨んだ。自らの子を盗む不屈き者、として。

「やつべえ……！　　気付かれたのか……!?!」

周りのジャギイ達も俺たちと同様に怯んでいた。恐ろしき乱入者を前に、立ちつくしてしまふ者もいれば、慌てて巣穴に逃げ込む者もいる。

一方のリオレイアは、目の前に立ち並ぶ障壁を粉碎しようと口に光を溜め始めた。リオレイアが雌火竜と呼ばれる所以——その恐ろしいまでの灼熱のプレスだ。

瞬間、空気が弾け飛ぶような音と共に光が暴発した。その燃え盛る火球は、一寸の狂いも無く俺に迫ってくる。

「……ちつー！」

俺の両手で眠るこの卵に機動力を奪われた今、あのプレスを回避することは不可能だろう。卵を犠牲にすれば可能かもしれないが、そんなことをすれば今までの苦労が儚い泡と化してしまう。

それならば。

「もうお前で良いわー！」

パニックを引き起こしながら俺の横を走り抜けようとするジャギイ。勢いよく屈ん

だ俺はそいつに足払いを仕掛け、体勢を崩させる。その細い脚のおかげで、奴はあっさり身を宙に投げ出した。

「ギユアツ!？」

「もういつちよー!」

その足払いの流れのままに身を回す。そうして派生させた回転蹴りで、宙でもがくそのジャギイを、迫り来る火球に向けて蹴り飛ばした。

直後、凄まじい轟音と閃光が平原を包む。全身で火球を受けることとなったジャギイは、その余りの熱量に煙を上げながら吹き飛んだ。皮膚の表面が炭化してしまったのか、焦げ臭い臭い<sup>くさ</sup>臭い<sup>にお</sup>が鼻を貫く。しかし、そんなジャギイの犠牲のおかげで俺たちは退路を確保することが出来たのだった。

「今だ! 行くぞイルル!」

「うにゃああああっ!」

慌ててイルルに声を掛けると、彼女は何とも奇妙な悲鳴と共に俺の下へ走ってくる。それを確認するや否や、第二波を打ち出さんと唸るリオレイアを背に、俺たちは一目散に逃げ去った。



「——という訳で、無事火竜の卵をゲット!」

「にやあ……死ぬかと思つたにや……」

赤い建造物で構成された遺跡群。そこに設置されたベースキャンブに命からがら辿り着いた俺たちは、思わず安堵の声を漏らした。

クタクタだと言わんばかりに座り込むイルル。ネコ特有の喉を震わす声を上げては、そのふさふさの尻尾を左右に振り回す。もちろん俺も、疲れたことには疲れたのだが——どうにもこの手の中にある卵に興味が惹かれ、休むに休めなかった。

「なあ、イルル」

「にや? 何にや?」

「……飛竜の卵つて、どんな味がするんだろ?」

思わず口から漏れた素朴な疑問。それを口の中で反芻させる俺に向けて、イルルはその大きな眼を見開いた。まるで変態を見るかのような視線で、わなわなとそのふわふわな口を震わせる。

「なつ……何バカなこと言ってるんだにや! それは今回のターゲットにやんだから納品するにや! 食べちゃダメにやーっ!」

毛を逆立てて俺にそう怒鳴りつけてくるイルルだが、俺は自分を抑えられずにはいら

れなかった。彼女の注意を無視して、早速卵の調理に取り掛かる。

なあと、このクエストは飛竜の卵二個納品がメインターゲットではあるが、先程あの巣を見た限りでは少なくとも五個は卵があった。つまり、俺がこれを食べてもまだ最低二個分の余裕があるということだ。

「……って！ 言ってる傍から準備し始めるし……！ またあの雌火竜に会うなんて嫌にやあ……」

「まあそう言うな。あんまり脅威になるならコイツ使うから」

「……ハイガノススパイク……討伐する気はさらさらないんだにやあ」

俺の腰に携えられたハイガノススパイク。ほかほか島で釣り上げた水竜ガノトトス、その素材を使ったこの片手剣は、非常に高い睡眠属性値を持つ。つまりコイツでリオレイアを眠らせれば、わざわざ討伐しなくても良い、という訳だ。

「さて、ここは無難にオムレッツにでもしてみるか」

「……無難っていったらゆでたまごじゃやないのにや？」

「んー。なんか、芸がないしな。今フライパンしかないし。それはまた今度やろうぜ」

「旦那さん……。目がマジにや」

とはいったものの、そのオムレッツを作るにも一体どのようにするべきか。

卵だけで作っても何だかもったいないし、何か具材を入れたいな。ポーチに何か良い

ものでも入っていないだろうか。

「……お、アオキノコ。そういえばさつき獲れたんだった。……焼けば食えるかな？」  
 「焼かなくても、旦那さんならきつと喰えるにや」

自然界に自生するキノコは、基本的に生で食べられない。味的な問題から毒の危険性など、その理由は様々だが――。

まあアオキノコは調査すれば回復薬となる、比較的安全で栄養価も高いキノコだ。焼いておけば青臭さも苦みも薄れるだろう。

「取り敢えず、細かく刻んどこう。形は、立方体のような感じで」

腰に収納していた剥ぎ取りナイフを取り出し、自前のまな板の上に乗せたアオキノコを細かく刻む。形はなるべく整えておこう。その方が焼いた時の火の通り具合もある程度均一になるだろうし、食感にも影響が出る。

「にやー。この人本格的にやあ……」

「ほら、イルルも見てないで。そこの焚火を頼む」

「……しようがないにや。こうなつた旦那さんは梃こてでも動かないにや」

グチグチと不満を漏らしながらも、イルルは火起こしに取り掛かり始めた。そんなイルルを横目に、俺は刻み終えたアオキノコを集めておく。

さて、アオキノコ以外の具はどうしようか。もつと他に良いものがないものか。



「……………ん？ 何この冷たいの」

ポーチを漁っていると、何やらひんやりとした何かが手に触れた。

恐る恐る取り出してみたそれは、この前地底火山に行った時に持つていったものだった。熱い所でも問題なく食べることができ、かつスタミナもつけられる優れたもの。

「……………クーラーミートだ」

氷結晶とこんがり肉を調合して出来るそれ。こんがり焼き上げていながらも、保冷効果を得られるという摩訶不思議アイテムだ。

冷えているくせに身はそこそこ解ほくれており、そこまで味は悪くないのが美点だと、俺は考えている。正直に言えばただのこんがり肉の方が美味しいが、生憎今回はこんがり肉も肉焼きセットも持つてきていない。つまりこのクーラーミートが現在俺たちが摂取できる唯一の肉、ということだ。

まあ、どうせ焼き直すし大丈夫だろう。

「旦那さんく。火ついたにや〜」

「おー、ありがとなー」

「あと、さつき拾ったこのネンチャク草にやんだけど……………もう先に渡しておいて良いかにや？」

クーラーミートとにらめっこをする俺に、イルルはネンチャク草を見せてきた。そう

いえばさつき草むらを漁っていたな、コイツ。その時拾っていたのか。

ん？ ネンチャク草？

「なあ、イルル」

「……にやんか嫌な予感が……」

「ネンチャク草って、美味しそうじゃないか？」

そんな俺の言葉を認識したイルルは、自らの手にあるネンチャク草を見ては溜息をついた。

ところで、狩り団子【白玉】という双剣のことは御存じだろうか。驚くことなかれ。あの白玉は、何とネンチャク草とハチミツで作られている。つまり俺は何の根拠もなくネンチャク草を食べようとしているのではない。ネンチャク草は食べることができる。それが事実なのだ。

余談だが、もち米を用いれば白玉は調理可能だ。そしてそのもちもちさ——つまり粘り気はもち米のデンプンの成分によって構成されている。

何故こんなことを急に言い出したのか疑問に感じたかもしれないが、これは非常に重要なことだ。水分を失い、冷えたデンプンはどうなるのか。床に落としたココットライスを思い出せば分かってもらえらるだろうか？

そうなってしまつてはそのデンプンの力、ひいてはその粘り気を維持出来なくなつて

しまう。つまり、冷やせばその難儀な粘り気を消すことが出来るのだ。

「……つまりここでクーラーミートの出番だな」

「にや？」

「この冷たさを利用すれば、ネンチャク草の過度な粘り気を弱めることが出来るんだ。要は食べやすくなる」

「……にやんと」

その理論が想定外だったのか、イルルは驚いたように呆ける。

そんなネコの手には、俺はクーラーミートを乗せた。剥ぎ取りナイフも丁寧に添えて。

「……つまり斬れつてことにや？」

「ああ。細かく刻んどいてくれ。その間に俺は卵を割っておく。あの大きさじゃあ、お前には割れそうにないからな」

実際アイルルの体程ある大きさの卵だ。イルルに任せては中身を地面にぶちまけるのがオチだろう。そんな危険なことをやらせる訳にはいかない。喰えなくなるのは困るし。

なんて、理屈を並べつつその大きな卵を両手で持ち上げると、その圧倒的な重量に改めて驚かされた。大きくなればあの巨大な火竜となるのだ、この重量も当然のことと言えるが。それにしても、あの火竜となる前の味とは一体どのようなものだろうか？

「……じゅるり」

いかん、口の中が唾液で滲んできた。早いとこ料理して食べてしまおう。

その重さと大きさ故、普通の卵の如く鍋に打ち付けてもきつと無残な割れ方をするだけだろう。ここは片手剣で殻に穴を開けるのが正解か？

そんなこんなで、片手剣の柄の先を殻に向けて数回打ち付ける。強固な殻が内部で共鳴する音が響き、打ち付ける度に殻に走る罅ひびが増えていった。それを何度か繰り返し、六度目くらいだっただろうか。打ち付けた瞬間、丸い柄の如く綺麗な円を描く穴が出来た。よし、ここから中身を熱した鍋に流し込もう。

「旦那さん。出来たにやあ」

「ん、おお。綺麗に切れてんな」

イルルが見せてくれたそれは、丁寧に切り分けられたクーラーミートとネンチャク草。まるで香草焼きを思わせるそれは、見ていて非常に食欲をそそられる。

「よし、じゃあ俺が今からこの卵を熱するからお前は具を入れ込めよ。肉、キノコの順でな。……取り合えず油敷くから肉ちよつとくれ」

「了解にやー！」

ネコの返事を背中で聞きながら、まず始めに肉を鍋底に押し付けた。ぶつぶつと泡を立てる肉は、じつくりと油を染み出し始める。それを軽く箸で摘まみ、鍋底を走らせれ

ば、簡単な油敷きの完成だ。

それが完了するや否や、俺は持ち上げた卵の穴が開いている方を傾ける。するとそこから黄色——というよりはやや橙色に近い、鮮やかな卵黄が現れた。それに続き、透明な卵白も流れ出る。

「……すげえ。こんな中身なのか……」

想像していたよりも圧巻な光景だった。圧倒的重量に包まれたそれは、圧倒的な濃度も兼ね備えた卵だったのだ。そんな綺麗な卵を、俺は自前の菜箸でかき混ぜていく。鍋の熱を一身に受けるそれは、徐々に沸き立つように泡を生み出して——。

それが固まらないように混ぜていると、横からイルルが肉とネンチャク草を流し込んできた。

「……おお……俄然<sup>がぜん</sup>旨<sup>が</sup>そうに見えて来たな……い！」

「にゃく……良い匂いにゃく」

卵の芳醇な香りに、肉の脂が織り交ぜられていく。

その濃過ぎる両者がお互いを高め合っていくのを、ネンチャク草は鎮める様に深い青い香りを放ち始めた。正に狩場の香草焼きだ。

「次はアオキノコにゃー」

「よっしや、どんどん入れろく」

肉が熱気を取り戻し、良い色を放ち始めた段階。

そこへ切り揃えられたアオキノコの群れが一気に雪崩れ込む。我先にと卵に身を投じていく彼らの姿は、どこか果敢だった。

「ふにゃあ、アオキノコの良い香り……」

「もしかしたら滋養効果もあつたりしてな!」

回復薬に使われるアオキノコに、スタミナ回復に良い肉だ。それらを取り入れたこのオムレツの栄養価は間違いなく抜群だろう。

そうして、数分間焼き続けて。

「味付けは特製の塩だ。……というかこれしか無いのだが」

「にゃ〜、それでも氷海で獲れた高級な塩にゃ。味は保証されてるにゃ!」

イルルの言う通り、俺がいつも持ち歩いているこの塩は氷海という凍て付く海で獲れた高級塩だ。自然の冷凍庫で育まれたために、当然需要も値段も高い。バルバレがこれの塩の売り出しで賑わう時が、定期的にあつたりするのだが、それはまた別の話。

そんな美味しい塩を適度に振り掛け、味付けしたオムレツを丁寧にひっくり返し焦げ

目が見つからないように気を配る。肉やキノコを上手く中身に入れ込めたのは良いが、それを包む卵を焦がしてしまつては意味がないのだ。

「おお。良い色にや」

「そうだな……。そろそろ良いかな？」

そんな卵は、鮮やかな黄色で広がっていた。いや、若干市販の卵より赤みを帯びているが、それがこの卵の特徴なのかもしれない。

一方、中身のキノコが多られた匂いを放ち始めた。内部までしっかりと火が通っている証拠だろう。これならもう完成といつても良さそうだ。

「よし、盛り付けて……。食べようか！」

「にやー！」



かくして完成した飛竜オムレツ。少し赤みが掛かった黄色が光る、色鮮やかなオムレツだ。

それもその卵の大きさもあつてか、非常に量は多い。箸でその卵を切り裂いていくと、そこから強い肉の香りと何処か上品な草の香り、そして奥の深いキノコの風味が広

がつてくる。中までしつかり火が通っており、焼き加減は丁度良さそうだ。

「……じゃ、いただきまーす」

「いただくにやー!」

分厚い卵で肉とキノコを包み込み、それをゆつくり口の中に入れる。まず始めに舌に接触したのは、その柔らかい卵だ。

幾重にもなったその層は複雑な味を形成していた。卵本来の仄かな甘みと、氷海塩による鮮やかな塩味。そしてその奥に佇む肉がじわじわと、卵の後に顔を出してくる。肉本来の飾り気のない旨みが、卵の深みを引き立てた。しかしこの両者だけではどんどん味の濃さが膨れ上がり、いずれ食べる者の口の中を飽和させてしまう。ネンチャク草やアオキノコはまるでそうなるのを防ぐように優しい植物としての味と、キノコ特有の歯ごたえを奏で始めたのだった。

まあつまり、一言で言うところ――。

「――旨いつ!」

「にや、にやあ……火竜の卵ってこんなに美味しかったのにや。これは驚きにや!」

「このレシピ特許出しても良いんじゃないか? いけるぞコレ……」

「でもバルバレのアイルーならもつと旨いもの作れるにや。特許出すほどこれは対抗出来るかというところ……微妙だにや」



「むっ……」

冷静さを取り戻したイルルの発言に、俺は思わず言葉を詰まらせる。

確かに言われてみれば、あの我らの団というキャラバンに属しているイルルの料理は、はつきり言ってこれよりもっと旨かった。悔しいが、その事実からは眼を逸らせない。

「……そうだな。それにこれは些か単純すぎる。もっと面白い具材を使った物を狙うかあ」

「にや？ 例えばどんな？」

「粘菌とか。ほら碎竜の」

「却下にや」

さて、食った食った。

かなりの量があったために食べるのに少し時間が掛かってしまったが、まあその甲斐あつてか随分元気が出たな。今ならあの雌火竜をわざわざ眠らせなくとも、ブレスを掻い潜って卵を運べるような気がする。まあ、気がするだけだが。

「よし、そろそろクエスト再開するか。行くぞイルル！」

「いやあ！」

その瞬間だった。

この猟場、遺跡平原に、澄んだ笛の音が鳴り響く。明らかにモンスターが鳴らしたものではないその音を、俺は何度か聞いたことがあった。それもこのように、猟場で食事を終えたその時に。

「……タイムアップにや？」

「……みたいだな」

そう、それはクエストに設けられた制限時間を超えてしまったことを示す笛。事実上の、クエスト失敗を告げる笛の音だった。

このクエストに設けられた制限時間。その全てを、卵一個運ぶこと、そしてその卵を調理し、実食することで軽く使ってしまったのであった。

「……一体何度目にや？」

「……知らん」

こんなことは別段今日が初めてという訳ではない。実のところ、何度も経験している。もちろん今日と同じような理由で、だが。

だから落ち込むこともない。世界にはまだ見ぬクエストと、それに伴うモンスターが存在する。つまり、まだまだ俺の知らない味があるのだ。だから、そう気を落とさずに、

新たな食を探していけば良い。

——世界はこんなにも、未知なる味に満ちている。

く本日のレシピく

『飛竜卵のオムレツ』

- ・ 飛竜（リオス種）の卵 …… 1個
- ・ アオキノコ …… 3本
- ・ クーラーミート …… 1個
- ・ ネンチャク草 …… 2枚
- ・ 氷海塩 …… 適量

## 美食は日々の積み重ね

広い広い大砂漠付近に位置する大市場、バルバレ。

移動式の船型集会所を核とした、多数のキャラバンで構成された特異な町だ。その特徴故一ヶ所に定まらないことは、いつも様々な土地を求め放浪している。そのためこの町は地図には載っていない。キャラバン隊同士で情報を交換し合って、位置を確認するというこれまた変わった特徴ももつのだった。

世界中を回っているために様々な情報が集まるここは、商人やハンターに人気の場所なのだ。そのせいか、俺のような情報に飢えた人間が常に蔓延はびこっているという――

「……モンスターを食べたいなんて理由でここを利用するハンターは、きつと旦那さんだけだと思ってる」

「何を言う、実際食べたがってる奴は他にもいるぞ」

「……例えば？」

「ほら、アレだ。何か虫を煮込んで食べたいとか言ってた依頼者」

俺の横でただひたすら文句を言うコイツは、俺のオトモアイルーであるマフモフSネコだ。名前はイルル。昔俺が名付けた名前だが——まあ、それはともかくとして。

その依頼者とは、『酔狂な美食家』と名乗っていた爺さんだ。何でも、何処かの昆虫食文化に感化されてアルセルタスを煮込んで食べたそう。結果の方は、それはそれは凄惨なモノだったらしいが。

「……何か、モンスター食の人間は一種のサイコパスかもしれないにや」  
「違う。ちよつと高尚な趣味を持ち合わせているだけだ」

俺の顔とあの依頼者の顔を知っているイルルは、その両者の共通点を何故かサイコパスに繋げてきた。全く、モンスターの良さを知らない奴はこれだから困る。

確かに、一般的に凶暴なモンスターの肉がそれ程需要があるかといえば、そうではない。その強靱な体躯故、ほとんどが武器防具や研究材料に使われているのだ。そのためモンスター食はそれほど広まっておらず、コイツのように不意な言葉を垂れる者も少なくないのが現実である。

だが、分かってほしい。その如何にも調理しにくそうなモンスターたちだが、適切な配慮と調理法を駆使すれば、何とも美味な食材へと変貌するのである。まあ言うなれば、食わず嫌いは良くない、ということだな。

「……と、ここで今からどこへ行くのにや？」

「我らの団のアイルーの店だ。アイツの飯が食べたい」

「……ああ、この前そんな話をしたもんにやあ……」

ただバルバレを歩き続ける俺に対し、その目的を尋ねて来たイルル。何日か前に遺跡平原で我らの団アイルーの話が持ち上がったことを思い出せば、納得したように頷いた。

そう、今日の目的はあのアイルーに会うこと。そして旨い飯を提供してもらうことだ。

「……でも旦那さん、今さつきクエスト行つたばかりにや。それなのに飯を食うのにや？」

「当たり前だろ。たくさん動いて腹がぺこちゃんなんだ。ここで喰わずとして何とする」

別に狩りに行く前にしか食べてはいけないなどというルールはない。むしろ、狩りの疲れを癒すために食べるのも、また理に適っているのだ。

そんなこんなで行き交う人の隙間を潜り抜け、大きな中華鍋を巧みに操る一匹のアイルーの前に辿り着いた。『屋台の料理長』と名乗るこのアイルー。少し独特の言葉遣いが特徴の彼は、ホラは吹くものの飯は旨い実力派アイルーだ。

「お面白髪の旦那、久しぶりニヤルよ。飯食つてくニヤルか？」

「おう料理長。一狩り行つて疲れたんだ。飯食わせてくれ」

「あい分かつたニヤル。……それにしても狩りの後でわざわざ食べにくるハンターは旦那くらいニヤル。ま、私は儲かつて催行……違う、最高ニヤルけどね」

「……やつぱり旦那さんくらいなんだにや……」

快活な笑顔を浮かべて俺を迎えてくれる料理長。その笑顔に安心しつつも、俺はテーブルに腰かけた。

旨そうな料理の香りが十分に届くこの位置は、容赦なく俺に香りをぶつけてくる。そんな香りに当てられた俺の口の中は、もう既に涎の大渦だ。ラギアクルス

「さて、どんなメニューにするニヤル？」

「……えつと……」

取り敢えず、今日は色々走り回つて疲れたからな。何かがつつりとしたものを口いっぱい頬張りたい。ここはキングターキーを主体にするか。そうすると、一体どのようにその肉の旨みを活かすかが重要になってくる。

うん。ここは、ソテー風に仕立ててもらおう。そしてその引き立て役は、オニオニオンと、こつそり狩場から持ってきた『これ』が適任か？

「よし、キングターキーをソテー風にしてくれ。オニオニオンと……この特産キノコを添えてな……」

「にや……にやあ!」 旦那さん何で清算アイテム持ってきてるのにや!」

「鎧の隙間に入れて来ちゃっただけだ、他意はない」

「はは、旦那らしいニヤル。……それで今日は珍しくボウガンを背負ってるニヤルね」

他意しかないと驚き呆れるイルルに対し、料理長は大らかな態度で注文と特産キノコを受け取った。流石は料理長、器が違う。

今日の俺は、確かにライトボウガン——業火竜砲を背負っている。ついでに装備はハプルシリーズ一式だ。別に俺の食欲を反映しているとかそういう訳ではなく、ただ弾丸を収納するスペースが多いという理由からだ。

「珍しくガンナーで行くと思っただらそうしたことだったのにや……」

「ふむ……奇食ハンター『シガレット』、ボウガンを背負うの巻ニヤルね」

「奇食じゃない、美食だ」

そう、俺——シガレットは基本的には剣士として狩りに赴くハンターだ。

そんな俺が珍しくボウガンを背負ったのは、この収納スペースが多いハプルシリーズに清算アイテムである特産キノコをこっそり入れて、持っていこうと考えたからである。ポーチにしまうと、狩りの清算時にギルドが持って行ってしまふのだ。

「ま、どんな武器を使うかは旦那の自由ニヤルね。私は旦那が喜ぶ料理を作るだけニヤル」



「流石は料理長。俺はアンタを心から尊敬するぜ」

「……料理長くらしいの清々しさが欲しいにやあ」

そんな素晴らしい豪語の下、料理長は早速料理に取り掛かった。まず大きなキングターキーを取り出した彼は、素早い手付きでそれを細かく切り分ける。ソテーする場合一度良く熱する必要があるので、表面積体積共に細かく出来るその切り分けは、調理時間の短縮に繋がるのである。

その肉を横に油を敷いたフライパンをじっくり熱し、その微妙な空き時間を使って彼は、オニオニオンと特産キノコを丁寧に切り分け始めた。

「特産キノコってことは、遺跡平原にでも行ったニヤルか？」

「ああ、遺跡平原でケチャワチャとイチヤイチヤしてきた」

「あれがイチヤイチヤというのかにや。散々引つ叩かれてまるでえ、えすえむ？ ……  
のようだったにや」

「仕方ないだろ、ボウガンの操作慣れてないんだから」

実際ボウガンの運用は武器訓練を除けば、バルバレに来る以前の頃を合わせてもほとんど皆無で、全くと言って良いほど使いこなせなかつたのだ。取り敢えず火炎弾を撃ち、操作に手間取った時にケチャワチャに殴られ、回復薬を飲んでの繰り返し。無事討伐した時には、クエスト開始から悠に制限時間の七割は過ぎていた。

そんな俺のボウガン捌きとは、天と地の差があるほど卓越したフライパン捌き。そんな魅惑的な腕で、具材を熱し始める料理長。キングターキーの脂の匂いが十分に漂ってくるため、俺の鼻孔はもう飽和状態だ。完成が待ち遠しくてたまらない。

「仕上げニヤルよ」

キングターキーから染み出る肉汁を上手く利用し、彼はフライパンに少量のブレスワインを注ぎ出した。要はデグラッセ。簡単に言うと、キングターキーのソテーに最適なソースを作り出しているのだ。

フライパンの熱で煙を上げながらも、肉汁と絡み合っていくブレスワイン。それが、キングターキーの香りをより一層深くする。もう待ち切れない俺には、その香りは少々凶悪過ぎた。

「あく、辛抱たまんねえ……」

「良い匂いにや……。これ最高にや〜」

「さ、お待ちどうニヤルよ!」

黄色を帯びた透き通るようなソースのかかった肉。溢れんばかりの肉汁を滴らせるそれは、熱気と共に深い肉の香りを放っていた。その肉を引き立てる様に添えられた細かな特産キノコと薄くスライスされたオニオニオンは、ソースに塗り潰されてもその個を失うことはない。

引き立て役でありながらも、最後に爽やかな後味を作り出す彼ら。この料理を兵部隊に例えるとしたら、キングターキーはその隊長であり、彼らは殿しんがりなのだ。つまり彼らがいなければ部隊は成り立たない。

「旦那、見てないで早く食べるニヤル。冷めると勿体ないニヤルよ」

「……あ、ああ。そうだな。いただきます」

「いただきますにやー!」

手にすっぽり包まれるくらい小さく切り分けられたその肉。それをよく噛み締める、ただの肉の塊ではない、肉が何重もの層で構成されているということが分かる。その層の隙間から染み出る油が肉を包み、その味と歯ごたえを変えていくのだ。

初めは少し固く、コリコリとしていたそれは徐々に柔らかくなっていく。噛みほぐしやすくなつてはブレスワインの深みを残すソースと混ざり、俺の舌をしっかりと肥やしていった。

「……すげえ。食感が変わっていくな」

「固めから柔らかめまで、楽しめるのにやあ〜」

「ブレスワインは脂の固まりをほぐす効果があつたりするニヤル。……これ、あまり知られてないニヤルよ」

ブレスワインを料理に用いるとそんな効果があるのか。普段そのまま飲むだけだつ

たから知らなかった。となると、脂の多い肉料理には重宝するかもしれない。

それにこの肉だけではない。よく焼くことでオニオニオンは優しい甘みを生み出し、特産キノコは深いキノコの香りとクセのない味を広げていく。

これは正に、バルバレの縮図だ。皆を先導する強いギルドが、周りの細かなキャラバンをまとめ、それらを包む空気が豊かな町を作りだす。皆が協調し合ってこそ出来る、この町その物なのだ――。

「……旦那さん、絶対変なこと考えてるにや」

「まあ、私らには理解出来ないだろうからほつとくのが良いニヤル」



「――さて、美味しい飯も鰯腹食ったし、そろそろ始めるか」

夜も更けてきた頃、俺はバルバレ郊外にあるマイハウスに戻っていた。

狭く小汚いマイハウス。バルバレに渡ってきた時のなけなしの金で買ったここは決して良い家とは言えないが、長い狩猟生活を共にしてきたのだ。綺麗汚いではなく、愛着を持って暮らしている。

そんな部屋の隅に置かれたボックスの前で腕を組む俺に、イルルは不思議そうに首を

傾げた。

「……何を始めるんだにや？」

「美味しいホットドリンクを調査する」

「……にや？」

「いやだから、美味しいホットドリンクを調査するんだよ」

あからさまに顔を歪ませるイルルは、「何言っているんだコイツ」と言わんばかりの視線を俺に向けた。

だが、考えてみて欲しい。環境適応能力が高いアイルー達には縁がないだろうが、人間にとつてはドリンクがなければ熱い所でも寒い所でもろくに動けないのだ。つまりそのような地域で狩りを行う場合、ドリンクの飲用は必須となる。

避けられないのなら、少しでも旨くしたいじゃないか。

「ということ、ホットドリンクを用意してみた」

「……三つもあるけど。一体どんな違いがあるのにや？」

「これはバルバレの。んで、こっちはモガの村。最後にロックラックのモノだ」

「……もしかしてわざわざ取り寄せたのにや？」

『わざわざ』、とは？

本来なら、それをしなくても良いことを行う時に、もしくは格別の意味を込めてそこ

まで必要としない状況であつてもそれを実行する時に用いる言葉。

何を言っているんだ、コイツは。ホットドリンクを美味しくすることが不要とでも言いたいのだろうか。ならば、逆に問いたい。何故わざわざ不味いままのホットドリンクを、毎回飲まなければならぬのか、と。

「よしイルル。お前取り敢えずこれ飲んでみる。バルバレの……というよりは、調合書通りに作った奴だ」

「にやあ……アイルルは飲まなくても良いのに……」

「ちよつと舐めるだけで良いから。ほら」

「にやう……」

見るからに嫌そうな顔をするイルルは、その可愛い肉球でおずおすとホットドリンクを持ち上げた。深い赤色に濁るその奇妙な液体を、彼女は顔をしかめながらもちよびつと舐め上げる。

猫舌で口に運んだそれを、訝しみながらも口の中で確かめて――。

「……にやあ、ふにやあああんっ！ 辛くて苦いにやああ……！」

その余りの不味さに、イルルは何と泣き出してしまった。見たか、これがバルバレのホットドリンク。オトモも泣き出すホットドリンク。

流石に可哀想だったので、わんわん泣くイルルを両手で抱き上げる。その柔らかな毛

並みを優しく撫でて、ぐずる彼女を宥め続けた。

「旦那さんのばかあ……」

そう悪態をつきながらも、イルルは俺の胸に顔を埋めてくる。これで少しは俺への理解をもつてくれると良いのだが。

バルバレのハンターは、寒冷地に行く度にこんな不味いモノを飲んでいるのだ。少しは俺のホットドリンクを美味しくしたいというこの情熱を分かってもらいたい。

どうでも良いが、コイツ本当にふわっふわだな。

「……ま、分かっただろ？ トウガラシの辛さは兎も角、問題はにが虫だ。あれは尋常じゃなく不味い」

「……ボクにはトウガラシもダメにやあ。流石にこれは味を何とかした方が良いにや。……わざわざ言言ってごめんになやさい……」

「よしよし、俺も少し悪戯が過ぎたな。お詫びに後でマタタビやるからチャラにしてくれ」

「みい……にやーんっ！」

その鶴の一言で、イルルは満面の笑顔を輝かせた。現金な奴である。

さて、これで分かっただろう。今のがバルバレ製のホットドリンクだ。イルルの感想の通り、辛くて苦いという最早苦行に近い味なのである。毎回寒冷地に行く度にこれを

飲むというのは、ハンターにとって精神衛生上危険なため、敢えて強走薬で代用するハンターも少なくない。

そんな困ったホットドリンクだが、実は地域によつては味付けが異なる。このモガの村のモノはミソ味、ロツクラックで作られたこれはしょうゆ味なのだ。つまり今回はこれらを参考に、美味しいホットドリンクを調合しようという腹なのである。

「俺はどちらかと言うとロツクラックの方が好きだな。ということでこれをベースに調合していこう」

「……にや、クセは強いけどしょうゆの様な味にや……」

「そう、しょうゆ味。しかしにが虫の苦味は消せてはいない。……逆に言えばこれを何とか出来ればこつちのものという訳だ」

とは言ったものの、一体どうすれば良いだろうか？

無難に薬草、と言いたいだが、これはダメだ。そもその問題として薬草自体が苦い。地域によつてはハーブのように風味豊かな薬草もあるが、生憎俺が持っている薬草は苦いものしかないのだ。これでは苦さの相乗効果になってしまう。

しかし、そうだな。植物系で何か考えてみるのはアリかもしれない。早速ボックスを漁ってみるか。

「何か良い草は……火薬草、駄目だこれは。……これはネムリ草か。寒冷地で眠ったら



軽く死ねるぜ。そして、こいつは——」

「くんくん……良い匂いにやあ〜」

続いて出て来たのはマタタビだった。植物という括りで、一緒に詰め込んでいたのかもしれない。

先程イルルにやると言ってしまった手前、期待するようにソワソワしてるコイツに渡すのが道理だろうか。

「ほい、マタタビ」

「にゃーん、旦那さん大好きにゃー!」

マタタビを受け取るや否や、早速それにじやれつくイルル。嬉しそうに微笑む彼女の姿は、何だか癒される。

まあそれはともかくとして、何か他に良いモノはないものか。そんな軽い期待を織り交ぜながら、もう一度ボックスの中に手を突っ込むと、今度はあまり感じたことのない植物の感触が顔を出す。

その正体は。

「何だっけこれ……。落陽……。花……。だっけ?」

俺だけではなく、他のハンターさんたちもこの存在はあまり記憶に留めていないのではないだろうか?

落陽草の花。陽の光に弱いため、洞窟など薄暗いところでしか咲けない不可思議な花だ。良い香りを放つと共に、滋養強壮や癒し効果があると聞く。

その癒し効果とは、一体どのようなものだろうか？

「……もしかしてこの苦みも癒してくれたら？」

花を軽く磨り潰し、その粉末をホットドリンクと組み合わせ軽く混ぜる。薄白いその花の粉は、真っ赤の液体を仄かに和らげた——ような気がする。ホットドリンクの中を舞うそれは、静かに煌めいていた。

そんな一風変わった液体を、少し舐めてみると——。

「……んー。ちよつとはマシにはなったが……。まだ改善の余地があるな」

苦味自体は確かに改良されたものの、消えている訳ではなかった。多少の苦味は癒してくれてはいるが、じわじわと舌に残る苦味は残っている。

ここは、別の味で中和してみるのが適切だろうか？

「……じゃあ……ハチミツを隠し味に？」

苦みには甘みを。舌が苦みで痺れるならば、甘みでそれを中和すれば良いのでは？

しかしこれには注意点がある。ペースはあくまでもしよゆなのだ。故にあまり多く甘いものを入れてしまうと、その味のバランスが崩れてしまう。では、どうすればよいのだろうか。

「……でそのまま入れたら……駄目だ、味が変わってしまう。ならば調合する前に……」  
そう、敢えて全て同時に調合する必要性はない。ホットドリンクをホットドリンクたらしめるのは、トウガラシの辛さと苦虫の栄養分なのだから。

故に、ここは少量のハチミツに予め<sup>あらかじ</sup>にが虫を浸しておいてから調合する、という手段で行くのはどうだろうか？ そうすれば、苦味が緩和された状態でホットドリンクへ変わる事が出来る筈。

何にせよ、試してみる価値はありそうだ。

「旦那さん旦那さん」

「ん、どうした？」

「そういえばこの前旦那さんが注文してた品が届いてるにや。一体これは何にや？」  
ずっとマタタビで遊んでいるかと思っていたイルルが、何やら木箱を持って俺の横に駆け寄ってきた。

その木箱は俺が先日注文した木箱。凍土付近の村に注文した、『ギイギエキス』だ。

「おー、届いてたのか。それはギイギエキス。飛竜の幼体から絞ったエキスだぞ」

「……ギイギ……フルフルみたいな奴って聞いたことあるにや」

そう、ギイギとはギギネブラの幼体だ。吸血能力を有する彼らは動物に噛み付いて血を吸い、その吸血量に応じて大きくなる。

そんな彼らの生命力は、強靱な滋養効果のあるエキスを生み出すのだ。そしてそのエキスは何故か出汁のように、調合物の味に深みを加えるという。

「……よし、これも混ぜよう」

「にや……!?!」

「味に深みが出て旨いぞきつと」

「……考え直して欲しいけど……きつと言つても無駄にや。もうボクにはどうすることも出来ないにや」

「だが、今日中では無理だな」

「……にや?」

この新鮮なギイギエキスだが、新鮮過ぎて生臭みが酷いのだ。数日置いておいてから使用しなければ、にが虫よりも危険な味に成りかねない。

それにロツクラツク製ホツドリソクの成分解析をしなければ、ハチミツに浸したにが虫を調合し直すのも不可能である。そもそも浸すのに時間が掛かる。結果として今日中に完成させることは不可能、という訳だ。

取り敢えず今日のところは保留だな。もう少し時間を掛けて研究する必要がある。資料を用意しなければならぬし、ギルドに分量を測る機器などを借りに行かなければならぬ。

よし。そうと決まれば借りには行けども、狩りになんか行つてられないな！

「しばらく狩りは休んで……調合に費やすぞ！」

「……この人ほんとにハンターなのかにやあ？」

く本日のレシピく

『キングターキーのソテー』

・キングターキー ……250g

・オニオニオン ……2個

・特産キノコ ……4本

・ブレスワイン ……150ml（これは目安のため、お好みで変えても良

い）

・塩、胡椒 ……適量

## 味も掘り下げるこの心

燃え盛る火柱。煮え滾る湧き水。じつくりと岩盤を溶かすマグマが、額に汗を滲ませる。

いや、マグマだけのせいではない。そのマグマの向こうから俺を仕留めようとする奴の存在も、その一因かもしれない。

焦りだろうか、恐怖だろうか。それとも、好奇心だろうか。武者震いを抑えられない俺の額に、頬に、背中に、じつとりと冷や汗が流れ落ちていく。

「……ッ！ あーくそッ！」

そんな俺に対し、奴は口内を光らせた。体内に圧縮された濃密なエネルギーが、徐々にその口の中へ集められている。奴から放出されるのは圧倒的な熱量を持った高密度の光。まるで噴火を思わせるような無慈悲な破壊現象。

奴、グラビモスの代名詞とも言える熱線だ。

「あぶっ………！」

「みゃあッ！」

慌ててしやがんだ俺の頭上を走り抜ける熱線。地面も貫通するその威力。

この地底火山の厚い岩盤を焼き尽すそれは、人間程度の耐久力ではとても耐える事が出来ないだろう。そんな目に見える脅威に俺の脚は少し震えるが、自分を奮い立たせるように、何とかその場から転がって離れた。

「……おいおい、またかよ……！」

再び奴が口を光らせる。

その大柄な体躯に一体どれほどのエネルギーを詰めているのだろうか。休みなくあの熱線を何度も放つ奴は全く疲弊の色を見せない。

「だ、旦那さん……！」

「大丈夫だ、問題ない……！」

俺の目前まで迫った熱線を、当たるか当たらないか危ういその瞬間に身を翻して避ける。大きく身を振った動きで躲し、本来ならばその勢いを利用してグラビモスに斬りかかるのだが。

残念ながら今回はそうもいかない。非常に腹立たしいことに、奴は溶岩の海に入り込んだまま延々とそこから熱線を撃ち続けているのだ。おかげで俺は反撃が出来ず、この通り回避に徹しているのである。

はあ、何故こうなってしまったのか。それは数時間前に遡る。



「……あれ？ 団長？」

「おお！ シガレットじゃないか、久しいな！」

先刻、ナグリ村。

その日、俺は未知の樹海で掘り上げた謎の武器を研磨するためにナグリ村に来ていた。深い森に吞まれた遺跡の中で見つけたそれはきつと質の良い武器なのだろう。

そんな期待を込めて訪れたこのナグリ村で、なんと我らの団と鉢合わせたのだ。

「アンタたちもこの村に来てたのか」

「ムスメっ子がみんなに会いたいか言っていたからなア。それでみんなで訪ねたという訳さ」

「ふーん……」

ムスメっ子——確か、加工屋のところで修行している女の子だったか？ 残念ながら俺はあの子とは話したことがないから、彼女については何とも言えないけど。見た目の印象はアレだな、ロアルドロスに似てる。

見渡せば。溶岩流れるこの活気付いた町の港に、赤い魚のような形をした船が隣接し



ているのが分かった。その他に、キャラバンの施設がいくつも町の中に展開されていることも。

大柄な竜人が営む加工屋、かの料理長が鍋を振るう店に、商人風のご老体が座る奇妙な箱。

そして、彼女が座るあのクレストボード。

「あら？ あらあらあら？ 何やら懐かしいお方が来てますね」

運が悪いというべきか、認識されるや否や早速絡まれた。

緑色の帽子や服に身を包んだ女性。黒く滑らかな髪に眼鏡と、どこか知的な印象を抱かせる旅団の看板娘。ソフィアだ。

「…………どうも」

「ナグリ村になんて珍しい、一体どうされたんですか？ ……またご飯ですか、まあ、そうですね」

眼鏡を光らせた彼女がひとりでにそう納得し始める。俺はまだ何も言っていないというのに。

ここだけの話だが、俺は一時期この我らの団に所属していたこともあった。それこそ、旅団の専属ハンターとして。だがそれも一週間と長くは続かず、結局独り立ちしたのだった。

原因は彼女。ソフィアとの決別である。

「貴方の様な猟奇的な方がいらつしやるとは……少し困りましたねえ」

「誰が猟奇的だ、誰が」

「モンスターを食べるなんて、忘れませんよ。貴方が彼を食べようとしたのは」

彼？ ああ、ブラキディオスだ。

確かに俺がまだ下位ハンターだった時、たまたま遭遇したブラキディオスを興味本位で食べようとしたのは事実。まあ、調理法が分からずどうしようもなかったけど。

しかし、それ以来何故か彼女とは冷戦状態なのである。全くもって意味が分からない。

「別に何でも良いだろ。俺にはお前が何に怒っているのかが分からない」

「今のままでは分からないでしょう。それに分からなくても別に良いです、我らの団には新しい専属ハンターさんがいらつしやいますから」

「……へえ」

俺にはもう用はない、とでも言うような口振りでもソフィアはそっぽを向いた。お前から話し掛けてきただろ、というツツコみは自重しておこう。俺としても話していて楽しくはないので別に構わないし。

それにしても、我らの団に新たな専属ハンターがついたのか。俺が知らない内にメン

バーの変遷があったみたいだな。そもそも話、屋台の料理長がこのキャラバンに加入していたのも最近——それこそ飛竜オムレツを作った頃に知ったばかりなのだから。

「あいつはまだまだ駆け出しだが……きつと大物になるぞ！」

「……何だ、団長か。一体どんな奴なんだ？」

「インナーでダレン・モーランに立ち向かったハンターさんです。誰かのために戦う……ああ、何と素晴らしいことでしょう。ご飯のためなどというどこぞの利己的なハンターさんとは違いますね」

唐突に絡んできた団長の口振りからに、キャラバンからはかなり信頼されているようだ。

それにしても聞いたことがある。パンツ一丁で古龍に相對したという、まつ毛の長いハンター。それが今このキャラバンにいますということか。

「……ちよつと会ってみたい気もするな、そいつ」

「残念ながらアイツは今原生林まで飛んでいるからなア、今は難しいかもしれないぞ」

「別に会わなくていいので、貴方は貴方でやる事をやれば良いじゃないですか？」

「……はいはい」

素っ気ないソフィアの口振りに俺は思わず溜息をついた。

彼女がモンスター好きなのは知っている。その情熱故にモンスターの味まで探求す

る俺のことが気に入らないのだろう。俺とてモンスターは好きだから、初めは彼女と意気投合したものだ。

まあ過去に縋りついてもしようがない。昔は昔、今は今だ。真のモンスター好きはモンスターの味まで知りたくなる、俺の中のその思いは変わらないのだから。

俺は俺で、さつさと武器を研磨して次の獲物を探せば良い。

そう思った、その時だった。

「大変だ！ 地底火山にグラビモスがっ!!」

慌てて村に駆け込んで来た土竜族の男の切羽詰まった声が、この煮え立つナグリ村で木霊した。



まあそんな訳で、ナグリ村にいたハンターは俺だけだったから、見事にグラビモス狩りに引つ張り出されたのである。

人間が入れないところから延々と熱線を放ち続けているこの腰抜けグラビモス。正直鬱陶しくてたまらない。

「これで六回目だぞ……！ 何なんだよコイツ！」

「あーうー……卑怯にやあー」

イルルは頑張ってブーメランで応戦しているが、それもあの分厚い外殻には全くの力不足だ。何度も弾かれ、弱々しく溶岩の中に落ちていく。

奴の外殻は灼熱の溶岩にも耐えうるほどの耐久力を持ったため、ブーメランが大して効かないのかもしれないと言えるが。

「……ちっ！」

大きく跳び退いて熱線を躲したものの、これではこちらが消耗されてばかりだ。何という出来レース。

相当臆病なのか、それとも狡猾なのか。いずれにせよ奴はあくまでも熱線で勝負を決めようとしているらしい。

「……仕方ない、コイツを使うか」

腹を括った俺は、今回の狩猟に持ち込んだアレを勢いよく地面に押し付けた。ドクロマークが描かれたそれは、一見すると何の変哲もないただのタル爆弾だ。しかしこれは他の爆弾とは決定的に違うポテンシャルを秘めている。

王都ヴェルドに雷名を轟かせる、とある出版企業が手掛けたこの爆弾。こいつは何と、跳ねるのだ。文字通りジャンプし、遠距離爆破をすることが出来る非常に型破りな爆弾なのである。

その名も――。

「ジャンプタル爆弾だ！ 吹っ飛べ！」

「にやー……そのまんまのネーミングだにや」

イルルの憂いを掻き消す様に火薬音を響かせるそれは、大きく跳ね上がった。そしてそのまま弧を描くように溶岩の上を跨ぎ、見事グラビモスの鼻っ柱に直撃する。

その瞬間、溶岩の上に新たな光が瞬いた。

「グオオッ!？」

予想だにしない攻撃手段に、グラビモスは驚いたのか何とも頼りない声を上げる。

爆炎に包まれて。臉を射抜く閃光に飲み込まれて。

そうして爆心地となったその鼻の角は、ものの見事に折れていた。

「ハッ！ ざまあみろ！」

「……にや、あのグラビモス怒ったにや！」

その痛み故か、それとも大事な角をへし折られたからか。

荒々しく鼻から息を吹き出す奴は、重苦しい声で低く響く咆哮を上げた。そして少し頭を下げるような姿勢を取り、両脚で地面を蹴り上げる。豪快に溶岩を押し退けてこちらに走り出す荒技。俗に言う突進だ。

「良いぞ、ハッつちに来い！」

その巨体を余す事無く使った突進。並のハンターならばその凄まじい迫力に思わず背を向けて逃げ出すだろう。そうでなくとも、一旦奴の射線から離れるのが普通だ。

だが、生憎俺は普通じゃない。

「にやつ!?! 旦那さん!?!」

迫り来る奴の巨体が俺を押し飛ばす、その瞬間に俺は大きく身を翻して跳んだ。

まるで俺の周りの空気を押しつけるかのような勢いで跳び避けて、その勢いを保ったグラビモスへと斬りかかる。空回りした奴の、その背中へ。

「せいッ!」

大きく飛び上り、その加速力を利用した斬り上げは、奴の肉を綺麗に斬り裂いた。勿論何も考えずに斬り込んでも、その熱い甲殻に弾かれてしまう。

だが甲殻と甲殻の隙間なら話は違う。接合部だけに、その耐久性は非常に低いのだ。だからリーチの短い片手剣でも、そこを狙えば効率良く奴を弱らせることが出来る。

「旦那さん! 尻尾くるにゃ!」

「むっ!」

しかし、当然奴も無抵抗ではない。怒りのままに全身を使い、まるで巨大な鎧のように尾を振り回した。当たればただでは済まないその尾だが、逆に言えば、当たらなければ

ばどうということはない。足と尾の隙間をスライディングで潜り抜ければ、全く問題ないのだ。

「よっ！いっしょっ！とー！」

そうして生まれた隙に、俺は肩に担いだ大タル爆弾を設置する。

片手剣はその軽さと小ささ故、抜刀していても動きを阻害しない。剣を口に咥えていれば、残った腕の隙間でアイテムを使うことができるのである。

そうして手早く設置したそれを、奴が慌てて振り向いたそのタイミングに合わせ――

「グオオオオッ!?!」

振り被った片手剣の端で起爆。すぐさま回避で爆風から身を守る。

瞬発力がモノを言うこの技で、手痛い一撃を負ったグラビモスは苦しそうに声を上げた。そのまま、踏ん張り切れなくなったかのように横転した。痛み悶えるように、奴は身を擦らせ呻いている。

一方の俺は何か爆風を躲し切り、勢いよくグラビモスに片手剣を突き立てた。そこにイルルも加わり、総攻撃を仕掛けていく。

「これでも食らえにやーっ！」

「……やっぱこの甲殻は食えそうにないな……!」



苛烈な斬撃の嵐にグラビモスは唸り、それを振り払うかのように立ち上がった。

そして怒りのままに俺たちを薙ぎ払わんと口の中に再び熱を溜め始める。

「まずいにや！ また熱線にや！」

「分かつてる、下がるぞ！」

攻撃の手を止め、脱兎の如く奴から離脱。あと数秒でも遅れていたら、こんがりハンターになっていただろう。

薙ぎ払った熱線は物凄い勢いで地を焼き、グラビモスの周りを文字通り一掃した。さらに熱線を放てば、奴はまるで排熱するかのように、腹から橙色のガスを出す。地面に生えたキノコまで、容易に焼け焦がしてしまう熱風だ。なんともつたいない。

「にや……っ!?」

「ん……っ?」

そんな恐ろしい一連の動作だったが、奴の反撃はそれだけでは終わらなかつた。熱線を放つても休むことなく、すぐさまその力強い翼をはためかせたのだ。

そう。あろうことか、奴はその巨体を浮き上がらせた。圧倒的重量を秘めた、その甲殻の塊を。それを持ち上げるほどの翼とは――。

「……もしかして美味いかも?」

「い、こんな時に何言ってるんだにや！」

イルルの焦りの声と共に、奴が地面に降り立った。いや、正確にはその重量を生かしたボディプレスと言ったところか。

そんな見え見えの攻撃には当たらない。勢いよく飛び避けた俺は、まるで風を切り裂くように片手剣を構え、グラビモスに向かって走り込む。そうして、すれ違いざまに脚を切り刻んだ。

「にゃ〜……旦那さん、惚れ惚れするにゃ〜」

「イルル、ぼさつとしてないであいつを引き付けてくれ。その間に俺は爆弾の調合をするから」

「にゃ、了解にゃ!」

四つん這いになってグラビモスの足元に駆け寄ったイルルは、その手に持った王ネコ剣ゴロゴロで懸命に奴の脚を叩き始める。それを鬱陶しそうに見たグラビモスは追っ払う様に尻尾を振り回し始めるが、やはりその高さ故に当たらない。

その隙に俺はせっせと爆薬を空きタルに詰めては、大タル爆弾を二個新たに用意した。それに加え、ポーチに入ったカクサンデメキンの擦り下ろし粉末を投入。

「……よし、さあ畳みかけるか!」

イルルを撃退しようと体を錐揉みさせるグラビモス。

そんな、奴の足場にある段差を利用して一気に飛び上った俺は、勢いそのまま斬り上げ、

直後重力のままに落下する。その落下運動に身を任せ、俺は再度剣を振り下ろした。

その勢いが功を奏したのか、グラビモスは弱々しい声を上げて倒れ込んだ。

「背中もらいつー！」

「手が滑っちゃったら、ボクが受け止めるから安心してにやー！」

そんなながら空きの背中に飛び乗った俺は、固い甲殻の隙間に剥ぎ取りナイフを突き立てる。

背中に人間が乗ってきたら、どんなモンスターだって間違いない嫌がるだろう。グラビモスもその例外ではなく、懸命に俺を振り落とそうと暴れ始めた。

そんな奴の上で攻撃を続けるのは至難の業だが、この攻防に打ち勝てば、こちらにとつて非常に有利になる。故に俺は必死にナイフを振るい続けるのだ。

何度目だろうか。ナイフを突き付けた瞬間、岩が割れるような、鋭い音が響いた。それと同時に、背中の甲殻が音を立てて剥がれ落ちる。その音は、甲殻は、踏ん張りが効かなくなつて倒れ込むグラビモスの、下敷きになった。

「にやー！ チャンスにやー！」

「おう、行くぞー！」

勢いよく飛び出したイルルの突進と、俺の片手剣が火を噴く。彼女の王ネコ剣ゴロゴロがスパークを散らし、俺の苛烈な斬撃は大きな血飛沫を生み出した。

この立て続けの負荷には、流石に堪えたのか。グラビモスは何とか立ち上がったものの、その動きはどこか苦しそうだった。身を震わせて俺たちを威嚇しながらも、疲労の色は目に見えている。

チャンスだ。そう感じた俺は、勢いよく剣を振るった。今までの攻撃よりもっと早く、強く。疲労した奴にできる限りの傷を与える。早く味を確かめたい俺は、その考えで頭が一色に染まった。

となれば、当然足の反応速度は落ちる訳で。疲労困憊ながらも突然屈ませた奴の体に、俺は反応する手を逃す。

「……ッ！ しまつ——ぐっはっ!!」

「だ、旦那さん！」

視界が反転する。強く頭を打ちつけられ、芯の方が鈍く痛む。

自分に群がる敵を追い払う様に繰り出されたタツクルは、懐に飛び込んだ俺をしつかりと射止めたのだ。それによって、俺は大きく吹き飛ばされる。

幸いなことに、俺に直撃したのは威力高まる胴体部分ではなく、軸となる脚であったため致命傷にはならなかったが、それでも十分に痛い。痛すぎるぞちくしょう！

「す、すぐ笛吹くにゃー！」

「ば、馬鹿！ 前を見ろ！」

俺が怪我をしたことで動揺したのか、イルルは慌てて回復笛を取り出して奏でようと試みる。

そのせいで、前から迫るグラビモスを見ていなかった。俺の指摘も、もう遅い。彼女が振り返った時には、白い鎧は目の前に――。

「にやつ!!」

「イルルーーツ!!」

グラビモスの突進をモロに食らったイルルは、大きく弧を描いて跳ね上がった。

痛む体に鞭を打って、俺は彼女が地に身を打ち付ける前にスライディングで受け止めるのだが。

「……………」、これは効いたにや……………」

「大丈夫か!? おい! しつかりしろ!」

脳震盪でも起こしたのか、イルルは意識がやや混濁しているようだった。それに打撲の影響か、身体を動かすのも苦しそうだ。

このまま戦闘を続行することは出来ないだろう。そう判断した俺は、取り敢えず彼女を優しく地に寝かし、再びグラビモスに相対する。

「……………」めんな、俺のせいだ。……………待ってる。すぐにコイツをバラシて、美味しいもん食わしてやつから!」

その言葉が彼女に届いたかは分からないが、背後から安心したようなネコの鳴き声が聞こえた気がした。

一方のグラビモスは、力強く唸りながら再びこちらに突進を仕掛けて来る。たった今イルルを打ち払った力。まさに暴力そのものだ。その圧倒的な迫力に、思わず回避しなくなってしまう。

だが、今度は避けない。背後のイルルのためにも避けられない。だったらどうするか？ このまま奴の暴力を受け入れるのか？

——否。

「……鬱陶しいわッ!!」

突進してくる奴に向けて敢えて走り込んだ俺は、今の俺にとって奥義とも言えるこの技、『昇竜撃』を繰り出した。

左手の剣で、奴の頭を左から右へ弾く。その勢いのままに、奴の下顎を、右手の盾で打ち付けて。その瞬間に、俺は両脚に渾身の力を込めて飛び上った。つまりこの技は、

盾を用いた強烈なアツパーなのだ。

そんな衝撃に、頭を揺さぶられた奴はというと。

「ゴオオオオオ……っ？」

スタン  
目眩。

そう、余りあるその衝撃に耐え切れず、グラビモスはその巨体を投げ出して倒れ込んだ。脳に響いているのか、混乱したかのように呻き声を上げている。懸命に手足を動かしてはいるものの、立ち上がる気配はなかった。

「おつかれさん、お前……強かつたぜ」

そんな奴の目の前に、俺は先程調合しては段差の影に隠すように置いていた大タル爆弾『G』を、二個。奴の頭のすぐ真横に二個、そつとずらす。

そうして、圧倒的な危険度を孕むそれを、迷いなく片手剣で振り抜いた。

直後、地底火山に噴火の様な轟音が鳴り響く。竜の悲鳴が、爆音に紛れて反響していた。



「……にや……っ？」

「イルル、大丈夫か？」

無事狩猟を全うする事が出来た俺は、せっせとグラビモスの剥ぎ取りを始めていた。

丁度その時に、イルルが意識を取り戻したようで、弱々しい彼女の声が俺の耳に届いた。振り向いた先には、ゆっくりと体を起こす彼女の姿。

やや危うい動きで立ち上がろうとするイルルを、慌てて支え、抱き上げる。それでようやく現状を認識したのか、彼女は感嘆の声を上げた。

「にやあ！ 旦那さん、討伐したのにや？」

「ああ、何とかな」

彼女の視線の先で佇む、全く動かないグラビモスに、剥がされた甲殻。そしてその横で用意された串。

「……グラビモスも食べる気にや？ ……本気かにや？」

「こいつはせせりが美味いと聞いたからな、焼き鳥風にしてみようと思う」

まるで椅子のような絶妙な段差の岩壁にイルルを座らせてから、俺は剥ぎ取りナイフを取り出した。

その切れ味をよく確認してから、奴の首の甲殻に刃を通す。隙間から忍び込ませたそれを巧みに使い、ゆっくりと首の甲殻を引き剥がしていく。すると、中からは、何とも良く脂の乗った赤い身が見えて来た。



「グラビモスのせせり……。飛竜は鳥じゃないにや」

「同じことだよ。どちらもよく動かす分首の筋肉が多い。だからとても締まっていて食感が良いんだ。何かこう、弾力があってだな……。噛むほど脂が出てくる感じかな？ いやこれは鳥の——もつと言えばガーグアのなんだがな。何にせよ一羽からはちよつとしか取れないし、それはグラビモスも変わらないから凄く貴重で美味しいと思うんだよ、俺は」

「……相変わらずご飯のこととなると饒舌だにやあ」

呆れたような声を漏らすイルルは放っておいて、俺は改めてそのせせりを見る。

普段目にする甲殻とは、天と地の差があるくらいのは、見るだけで、肉の柔らかさと保有している脂が分かってしまう。どころか、まだ食べてないというのに、俺の口の中に涎を染み出させるほどのインパクトがあった。

「よし……。早速切り分けるか」

見ているだけでは意味がない。改めて自らを奮い立たせ、その赤い身にナイフを突き立てた。すると、思った以上に滑らかな感触が伝わってくる。もう少し固いかと思っていたのだが。

まあ、それはそうと切り分けるこちらとしては有り難い。そのせせりを少しずつ、一口サイズに切り分けては串に刺していく。せせりの量は少ないというが、グラビモスは

その体軀故に大量にとれそうだ。手持ちの串は十本しかなかったが、それも簡単に埋まってしまった。

「よし……これで良いな。イルル、そこにあるポーチから塩を出してくれ」

「塩？」

「下味つけという奴だ。焼く直前に振ると良いんだぞ」

渋々と動き出したイルルは適当に投げ出されているポーチを漁り出し、面倒臭そうな顔をしながらも中に入っている塩を取り出した。

——のだが。そのポーチに入っていた、別のビンも見つけたらしい。不思議そうに見つめては、首を傾げていた。

「ビン……？ 弓でもないのに？ ……旦那さん、これ何にや？」

「お、それは俺がこの前作ったタレだよ。それを試したかったから今回は焼き鳥風って訳さ」

「にや、にやるほど……」

そう、このナグリ村に来る前に作っておいたタレ。焼いた肉と好相性なタレだ。そこそこの手間をかけて作ったから、それなりの自信はある。

取り敢えずイルルから受け取った塩を軽く振り掛けてから、その肉をじっくり溶岩に近付ける。一度に焼けるのは二本ずつだが、まあ良いだろう。

「ちよ、ちよつと旦那さん、溶岩で焼くのによ？」

「触れない程度に近付ければ大丈夫。それにこれくらい高熱の方が良いし。普通の炎じゃグラビモスは中々焼けないんじゃないかな」

「……確かに、にや」

溶岩の中を潜行するグラビモスだ、きつと並の炎では焼けないだろう。それに納得したのか、イルルもハツとした顔で頷いた。

さて、ここで突然尋ねてみるが、どうして肉は焼くと美味しくなるか知っているだろうか？

「……にや？」

そう尋ねてみれば、分からないらしいイルルは可愛らしく首を傾げる。仕方ない、彼女のために説明しよう。

その答えは、焼くことで肉の表面——タンパク質が固まり、その肉の中にある旨みが逃げることが出来なくなるからだ。さらに焦げ目のおかげで風味や香りが加わるのも、美味しくなる一因だろう。

そしてそのように美味しくする絶対的な要素がこれ。初めは強火で一気に焼く。そうすることですぐに肉の表面が固めるのだ。逆に言うと、弱い火力で焼いていると旨みの消失を防ぐ壁が出来ず、どんどん旨みが逃げて行ってしまうのである。

他に焼く時には調理器具を温めておく必要があるが、今回は溶岩であるため割愛しよう。というか、そもそも温まっている。それも尋常じゃないほどに。

「ぎゅっ！こんなもんだな」

とまあ、そんな点に気を付けて焼けば、この通り綺麗な焦げ目をつけた美味しそうな焼き鳥——じゃない、焼きグラビモスの完成だ。

じゅうじゅうと音を立てて泡を作る脂と、それに伴い漂う肉の香り。それを間近で感じていた俺の口角は自然と上がっていた。



そんなこんなで十本全て焼き上げ、さらにそこに俺特製のタレをじっくりとかける。煌めくしょうゆベースのタレが、焼けた肉の表面を潤していく。見た目、香りとも非常に素晴らしいものだ。

そして、その味もきつと旨いはず。

「いただきますーすー！」

「いただきますーすー！」

もう辛抱堪らない俺は、思いのままにそのせせりに噛り付いた。

その身は、一般的に親しまれるガーグアのモノよりやや固い。重く、豊かで、非常に噛み応えのある感触だ。軽く噛むだけでは歯が押し返されてしまうその肉を、顎に力を入れて噛み締めると、今度はそこから肉の脂が溢れ出してきた。

その量は並の肉より多く、また非常に強い香りをもっている。芳醇とでもいうべきだろうか。濃厚な脂が、俺の口内を支配していく。

そんな美味いグラビモスのせせりだが、今回はそれに絡むタレもある。しょうゆベースに、まだらネギとユクモニンニクの風味を効かせた味わい。ネギ特有の喉にかかるような青い香りを放ち、ニンニクはその肉故の臭みを押し殺した。その代わりのように、柔らかかな、甘みに近い旨みを生み出していく。

単体だけでは味は良いものの、少し肉としての旨みが強過ぎるそのせせりを、タレはそのあつさりとした味でバランスを整えている。肉の臭いを和らげ、爽やかな風味に整えているのだ。脂が豊富なのに爽やかと、非常に矛盾した現象だが、これは確かにその矛盾を体現していた。

「美味しいな、これほんと……」

「肉だけだと味が偏っちゃうけど、このタレが良いにや。味が整えられるにや」

「あー。タンジアビールが欲しくなってきた」

「たんじあ?」

「ここよりずっと向こうにある港町だ。ビールが旨いんだ」

さて、これで村の脅威となるモンスターを討伐することができた。

それにグラビモスという思いがけないモンスターから、新たな旨みを知ることでもできたのだ。怪我させられたのもどうでも良くなつてくるくらい旨み。

これだ。これだから、狩猟地での飯はやめられないのだ。

く本日のレシピく

『グラビモスのせせり 焼き肉風』

・グラビモスのせせり ……35g

・タレ ……お好みに。

(1本あたり)

『シガレット特製タレ』

- ・しょうゆ ……120CC
- ……ユクモ大豆
- ……ウオーミル麦
- ……モガ塩、その他
- ・みりん ……120CC
- ……ココットライス等
- ・砂糖 ……大さじ1〜2杯
- ・まだらネギ ……まだら部分を10cm程度
- ・ユクモニンニク ……1個
- ・ガーグアの鳥皮 ……少量

## 煮込む心に崩れる気持ち

「……ねえ、旦那さん」

「ん、何だ？」

「……何でボクたち、燃石炭を集め回ってるのかにゃあ？」

地底火山の奥深く。

煮え立つ溶岩に囲まれたまるで世界の終わりの様な、大地の力強さを感じさせられるこの場所で。

俺とイルルは、燃石炭を見つけるために鉱床を漁り続けていた。それも、先程グラビモスを討伐し終えてそのせせりを実食した直後に、である。

「そりゃお前……美味しい飯のためだろうが」

「ボクもう疲れたにゃあ……」

グラビモスとの戦闘が響いているのだろうか。

まるで駄々を捏ねる子供のように、イルルは不満を露わにしていた。一方の俺はというと、突然降って湧いた新たななる美味の可能性を感じてしまっている。故に普段は敬遠



する、この俗に言う炭鉱夫のような作業を続けているのだった。

「……これが終われば美味しい飯が食えるぞ、きつと」

「ボクはご飯も良いけど……もう眠いにや」

「じゃあ後で膝枕してやるから」

「……ほんとにや?」

冗談のつもりでそう言ってみれば、意外や意外。彼女は何か期待するように俺の顔を窺ってきた。

「ご飯よりも俺の膝枕の方が良いのか?」

そんな困惑を、胸に抱かせるくらいの変貌だ。先程までの態度とは一変、彼女は自らに喝を入れ始めていた。

——まあ何て言うか、アイルーの考えていることはよく分からないや。

「取り敢えず……五個くらいは集めるぞ、次はこっちのエリアを見に行こう」  
「分かったにや!」

何とか元気を取り戻したイルルの返事を背中中で聞きながら、俺は硫黄の密集する地底火山最奥地に身を沈めていく。

一体どうしてわざわざこんな作業を、それも狩猟後に行っているのか。それは数十分前の出来事が原因だった。



「——さてと。それじゃ、村に戻ってギルドに報告するか」

「その前に旦那さん、もう少しグラビモス剥ぎ取っても良いはずにや。旦那さんせせりしか剥ぎ取ってないし……」

「む、そうか……」

「相変わらず、ご飯以外に興味なしかにや」

地底火山の溶岩溢れる非常に活発なエリア。

その上で四肢を剥げ出して横たわっている、鎧竜グラビモスの亡骸。その横で、軽い食事をしていた俺とイルルは、焼き上げた十本の串焼きグラビモスを無事完食した。

とは言っても、飛竜の中でも大柄な部類に含まれるグラビモス。はつきり言って剥ぎ取り一回分の量しか食材に使っていないため、まだまだ剥ぎ取れる部分が多く残っている。

しかし、ハンターが何も討伐したモンスターの全てを所有出来る訳ではない。ハンターはギルドと契約を結んでいるため狩りが出来るのであり、狩猟したモンスターの素材の大半はギルドが管理する、というルールが存在する。

つまるところ、俺が折角討伐したこのグラビモスでも、そこから貰えるものはこの巨体のほんの一部。そして、変動の激しい報酬金だけなのだ。

一応、無事討伐することが出来たのなら、そのハンターもモンスターの体の一部を剥ぎ取る権利が与えられるのだが。

「……お、鎧竜の翼。これは中々……」

「旦那さん涎、涎！」

「……じゆる。すまん」

「もう……さつき食べたばかりにやあ」

剥ぎ取ったのは、大きく固い鎧竜の翼。

そのずっしりとした重量も目を見張るものがあるが、それよりも俺の興味を千刃竜掴みしたのは、その中でひっそりと佇む肉だ。聞くところによると、グラビモスの手羽先もまた締まっており、なんとも美味なのだとか。

「……俺とお前で五本ずつ。つまりあのせせりは料亭で言うオートブルという訳だ」

「旦那さん、まさか……」

「この翼持つて帰って、もつと美味しいものに出来ないかな？」

「はあ……貴重な剥ぎ取り素材をくじんと尽く食べてしまおう旦那さんにや、そんなんだから装備を作る素材もないんだにや……」

イルルの鋭い嘆きを、冷や汗を垂らしながらも受け流し、何とか表面上は素材の剥ぎ取りに専念する。

確かに俺は、数か月前の闘技大会の報酬で作ったこのクロオビヘルムを最後に、新しい装備品を作っていなかった。その原因も彼女の言う通り、頂いた素材を尽く食材に使ってしまったからなのだが。

まあつまり、俺に反論の余地はないという訳だ。ここは話題を変えて、受け流してしまおうのが無難かな。

「……イルル、手羽先はどう料理しようか？」

「無視かによ。……手羽先にゃあ。また串焼きにでもするかによ？」

サラッと受け流しながらイルルに意見を聞くと、呆れながらも彼女は考え始めた。何だかんだ言いながら俺に協力してくれるところが、彼女の美点だな。可愛い奴め。

まあそれはともかく、串焼きか。先程食べてしまったし、あまり良い案とは言えないな。味や食感は違うだろうが、同じタレで食べるのは些か胃が飽きるというものだ。

そうだな。そもそもの話、肉は焼くという終着点を一度取り払ってしまうのはどうだろうか？ それこそ、焼く以外の手段での調理法がいい。

何かないか。何か――。

「――煮込むというのはどうじゃ？」

「あん?」

「にゃん?」

思考に耽る俺と、ふわふわした尻尾を揺らしながら考えるイルル。そこへ話しかけてきた、しわがれた声。狩獵地という危険地帯で、毎日毎日うるついでているあの人物の声。普段は快くアイテムをくれたりするものの、すぐヘソを曲げる気難しいご老体。

「……山菜ジイさん」

「グラビモスか、これまた大きいのう。調理法に悩んでおるのじやろう?」

グラビモスの巨体と、俺が剥ぎ取った翼の一部を交互に見ながら、ジイさんは試すような口振りで俺に問い掛けてきた。

俺はこの人とはあまり面識がないため、一体何を企んでいるのかが量れない。イルルもイルルで、突然現れたこの人物に少し警戒しているようだ。尻尾の毛を少し逆立てている。

「煮込んでシチューにするとするのは如何かな? 手羽先入りクリームシチュー。嬉しいワシは幻獣チーズを持って来ておるしな」

「にゃ……いきなり現れて何を——」

「良いねそれ!」

「だ、旦那さん!?!」

訝しむイルルを押し退けるように、ジイさんの話に乗り掛かる。すると彼は、満足そうに頷いた。一方のイルルは驚いたように、まるで裏切られたかのように俺を睨む。何だコイツ。

さて、それはさておき、シチューだ。上品でとろみのある味を秘めた、雪国の宝。串焼きとはまた違う味の美しさと満足感を与えてくれるような。そんな可能性を俺に感じさせた。

「うむ、良い返事じゃ。ではワシはベースキャンプにて調理の準備をするから……燃石炭を幾つか持って来てくれんかの？」

「な、なんでボクたちがそんなこと」

「よし、行くぞイルル！」

「にや、ちよ、ちよつと待つ——」

シチューという食べ物、何もどこの村にも普及している訳ではない。恥ずかしながら俺も、実のところ一度しか食べたことがないのだ。確か、ベルナ村に訪れた時だったかな。

そこであのキッチンアイルー希少種——じゃない、ニャンコツクとかいう巨大なアイルーが手掛けるチーズ料理の応用として、紹介してもらったのだった。

あのとろみ、深い味わい。

ああ、あの味わいを俺の舌は忘れていない。今でも明確に舌の奥で思い出すことが出来るようだ。いかん、唾が溢れてきたな。

よし、そうと決まれば善は急げだ。早速燃石炭を回収しに行こう！



「——さて、この崖を登り切ればベースキャンプだ。あと少しだな」

「やつとにや。あと少しで……」

そんな事情を経て、火山を彷徨い数十分。俺たちはやつとの思いで燃石炭を六個集めることが出来た。これでシチューはもう目前だ。

俺のポーチに収められたこの燃石炭。炭鉱夫ハンターたちの間では、いざ集めようとすると中々出ない癖に、風化した古代の破片を集めようとする時に限ってやたら出てくるといふことで、正直言ってあまり評判が良くない。

だが、忘れないでほしい。この燃石炭は圧倒的な火力を持つため、グラビモスのような火に強いモンスターの調理には重宝するということ。

「……む！ 何か良い香りが漂ってくるぞー！」

「出た。旦那さんのご飯に限ってはアイルーをも凌駕する嗅覚。……それと、何かを温

めているような音も聞こえるにや」

「ほう。この匂いは……ヤングポテトと激辛ニンジンだな。さしずめ、それを加熱して柔らかくしているという訳か」

「にやつ！ 辛いのは苦手にや……！」

かのニヤンコックが語るには、ポテトやニンジンなど固いものは時短で煮えるように予め蒸すなどして過熱し、柔らかくする必要があるのであるらしい。それを平然とこなしているとは。山菜ジイさん、只者じゃないな。

——うん、匂いを嗅いでいたら俄然やる気が湧いてきた。ここはスタミナを使い切っても良いから、一気に駆け上ろう。

「おーい、ジイさん、燃石炭採ってきたぞ」

「おお、早いほうハンターさん」

案の定ポテトとニンジン<sup>を</sup>を温めていた山菜ジイさんは、穏やかな笑顔で俺たちを迎えてくれた。そんな彼にこの燃石炭を渡すと、興味深そうに眼を細めて観察し始めた。

「ふむ……これは中々上質な……。よし、これなら大丈夫じゃろう。ではワシがとくと振る舞おうぞ」



やけに演技がかったポーズで菜箸とへらを構えた彼は、早速鍋に切り分けられた手羽先を放り込んでいく。いくら甲殻の下の肉とはいえ、固いことには変わらないこの肉を、このジイさんはもう既に切り分け終えていたらしい。

竜人というのは歳をとつても活力溢れるものだと思いが、これは予想の斜め上をいつていた。そういうえば、タンジア地方にも、かなりの高齢だというのに現役で加工屋を営む人物がいたような気がする。やはり体の作りは、人間のそれとは違うようだ。

そんなことを考えながら、オリーブオイルらしきものを注ぐ彼を見ていると、何やらイルルが、そのプニプニした肉球を俺の太ももに当ててきた。

「ん？ どうした？」

「あ……あの、旦那さん、ボク、その……えつと——」

「……？ あ。もしかして、膝枕か？ よし、おいで」

「にや、にやあう……」

おずおずと恥ずかしそうにしながらも、彼女は俺の膝の上に乗っかり丸くなる。

ネコは炬燵で丸くなるという格言を、ユクモ村で聞いたものだが、うちのネコは炬燵ではなく鍋の前みたいだ。炬燵に頬ずりするとかも聞いたことがあるが、イルルが頬ずりするのは、どうやら俺の上のようだ。

「うにやあ」

「何だ、くすぐつたいぞ」

まあ、流石にアツアツの鍋に頼ずりなんてしたら大参事になるだろうし、しようがないけど。それにしてもコイツ、本当にふわふわだな。毛並みも綺麗だし、撫で心地も抜群だ。それに柔らかいし活きも良いし。

ちよつと美味しそうかも？

「ハンターさんや、その籠かごに入ったレアオニオンをとっておくれ。もう既に切り分けておるからの」

「……あ、ああ。これか？ ジイさん準備が良いな」

「当たり前じゃ。調理はテンポ良く、それでいて丁寧に行うことが美味しくする秘訣なのじゃ」

「ふむふむ……メモメモつと」

早速ハンターノートを取り出して、山菜ジイさんの語る調理の秘訣をメモしていく。

例えば今回使われるこのヤングポテトだが、これもただ切り分けるのではなく、一個一個大きさを統一して切り分けたい。何時かのオムレッツで俺がやったように、火の入り方を均一にするためだとか。

それだけならまだしも、彼は何と面取り——つまりポテトの角も整えて、丸みを帯びた形にする作業もこなしていた。そうすることで煮崩れしにくくなるという。

「よし、それではこの手羽先とレアオニオンの炒め物に……件のポテトとニンジンを加えよう」

簡潔に俺に話す彼は、非常に慣れた手付きで、既に温められた他の具材を菜箸で鍋に落としていく。

オリーブオイルと手羽先の脂。それに身を浸した野菜たちは、先程までとは違う炒められるという現象に、植物特有のあつさりとした香りを放ち始めた。それと同時に、顔を出す仄かな辛さ。辛さを溶かした香りを前に、イルルは鼻を鳴らして呻き出す。

「にゃあー、辛い匂いだにゃ。鼻がツーンとするにゃあ」

「イルルは辛いのが苦手だったな。んじやお前のはニンジン抜きにしとこうか」

眉間に皺しわを寄せるイルルの、ふわふわとした顎を撫でて彼女を落ち着かせると、これもまた幸せそうな猫撫で声を漏らし始めた。

うんうん、そんなにニンジンを抜いてもらえるのが嬉しいのか。好き嫌いは良くないが、嫌いなモノを無理に食べて食事を楽しめないのは本末転倒だからな。

「……そろそろか。どれ、ハンターさん。少しこの炒め物を見といてくれんかの」

「あ、ああ。分かった」

突然、意味有り気に呟いたジイさんが、俺に菜箸を渡してきた。

快く応えれば、彼は背中中の巨大なりユックおもむくを徐に漁り始める。そして、白濁色の摩訶

不思議な液体が詰められた瓶を取り出した。

一見ミルクのような見た目だが、よくよく見ればその中には細かく刻まれた白い固形物が浮かび、その液体自体も何処かとろみのあるものだ。一体、何だろうこれは。

「ジイさん、何だそれ？」

「これはワシ特製シチューの元じゃよ。最近よく売れているベルナミルクを基盤に、ユクモ豆腐と霊峰山薬……ヤムイモと言った方が伝わるかの？ それを混ぜ込んだ一品じゃ」

「へえ……。何か凄いなそれ。体に良さそうなものばかりだし……」

「何事も重要なのはバランスじゃよ。狩りにしろ、調理にしろ、な。この場合は手羽先の脂分を考慮して、シチュー自体は少し軽い方が良いと思つてのう」

確かにその通りだ。

芳醇とも言えるグラビモスの脂身は、些か味が強すぎる。それに濃厚なシチューが合わさると、人によっては食べ辛くなるかもしれない。実際膝の上でゴロゴロしているイクルは、諄<sup>と</sup>い食べ物<sup>と</sup>が少し苦手であるし。

「これと水、ガーグア式鶏ガラスープを注ぎ煮込むぞい」

「目安はどれくらいなんだ？」

「そうだのう、フタして弱火で十分程度……と言ったところか」

そう言いながら、彼は丁寧に金属製のフタを乗せた。本来放出されるべき熱が、フタに阻まれ放出できず、鍋の中身は香りと湯気の奔流に包まれていく。

なるほど、弱火でコトコト煮込むという訳か。香りも味も押し留め、味と風味をよく染み込ませようという腹だな、きつと。

そう予測する俺に対し、その十分の暇潰しのためか。ジイさんが何やら感慨深そうに話し掛けて来た。

「それにしても珍しいハンターさんじゃの。モンスター食の良さに気付くとは」

「……いやあ、あんな魅力的なの見せつけられたら涎が止まらないって」

「いやいや、お前さん若いのに見所があるぞい。今時のハンターは、どいつもこいつもモンスターを狩ってはそれで武器防具を作ることしか頭にない。モンスターの<sup>かえり</sup>ことを顧みないのだ。彼らはモンスターに対する感謝の念がないのじゃよ」

「……感謝、ねえ」

少し自嘲めいたように俺が呟くも、彼はうんうんと頷いていた。

感謝などという大仰なことは、考えてたことはなかった。それに俺自身も昔は彼の言う、感謝の念がないハンターだったのだ。故に彼の言葉には素直に頷けない。

「だがお前さんは違うの。彼らに向き合っておるようじゃ。そうでなければ彼らを喰おうとはせん。喰うこととは生の特権。そして、命に対する感謝そのものじゃからな」

「……………」

生きること、すなわちそれは食べること。誰しも生きていくには、何かを犠牲にしなければならぬ。だから食べることは感謝だと、彼は語った。

「……聞いたか、イルル。つまり俺はモンスターに感謝してるから装備の方に手を回してないんだよ」

そんな彼の言葉を借りて、俺は先程のイルルの呆れに今更ながらも反論する。装備を作らないのは、別にそんな高尚な理由ではないのだが、彼女に反論するには打って付けだった。

一方のイルルは、モンスター食に秘められた素晴らしい意味を感じ取ったのか、自らに反論の余地がないと悟ったのか。慌てて鍋の方に視線をずらし、わざとらしくもその可愛らしい肉球で鍋の方を指して、煮え具合を訴えた。

「も、もう煮えてきてるにや。そろそろかにや?」

「む? ふーむ、良い感じじゃのう。ではここでとろけるアレを混ぜようか」

イルルに促されるままに、彼は再びリュックに手を突っ込んで、何やら透明な固形物を取り出した。あれは確か、時々食料品店に並ぶ珍しい品。それと同時に、先程ジイさんが言っていた『あの食材』でもある。

「……幻獣チーズにや?」

「そうじゃよ、幻獣バターの応用品じゃな。これを混ぜ合わせ、よくかき混ぜる……つと」

へらを片手に、彼は鍋の中身を転がし始める。そのシチューは俺がかつて食べたシチューほどとろみはなく、どこか滑らかで水分の多いものだった。

「これくらいで良いじゃろ……。では再び数分弱火で煮込もうかの」



数分後。煮込んだシチューに塩を振りかけて、山菜ジイさんは満足げに頷いた。味が整った。優しい声で、彼はそう言った。

そんな彼の目の前にあるシチューは、仄かに黄色がかつた白で染められている。そこから溢れる湯気には、シチューに潜むミルクの香りと、よく煮えた手羽先の香りが漂っていた。

「完成じゃ！ どれ、早速食べようかの」

楽しそうにシチューを盛り分けた彼は、俺とイルルの分のスプーンまで用意してくれた。

ミルクのように白いそのシチューには、細かく崩された豆腐が浮かんでおり、チーズ

とヤムイモによるこれまた独特かつあっさりとしたとろみが、具である手羽先やヤングポテトに絡みついている。

「美味しそうにや〜」

元々ミルクが好きなイルルは、何時にも増して嬉しそうだった。ちゃんと激辛ニンジンのは抜いてあるのもその一因だろうか。

「……それじゃ、いただきます」

「うむ、いただこうかの」

「いただきますすにや〜」

早速スプーンでシチューのスープを掬ってみる。見た目の印象は、あっさりとしていたためか少し味が薄そうだ。しかし、実際はどうだろうか？ そんな疑問を胸に、俺はスプーンごとそれを口に含んだ。

初めに顔を出すのは、ミルクの甘み。俺も愛用しているベルナミルクのまろやかな甘みだった。その直後、ユクモ豆腐の淡泊な味が広がっていく。想像通りあっさりとした味だったが、想像以上に滑らかな口どけだ。ニャンコックシチューのような濃厚なとろみではなく、軽く舌を滑るものの味をしっかりと舌に残していくような。

「へえ、淡泊なものだな。それに口どけがとても良い」

「じゃろう？ 健康重視ならこれがお勧めじゃよ」



「シチューでもくどくないものじゃ。心なしか手羽先もあっさりしてるような気がするじゃ」

イルルの眩きに乗せられるように、俺も切り分けられた手羽先を、スプーンに乗せて咀嚼してみる。

じっくり煮込まれることで、かなり柔らかくなったそれ。あのせせりとは違って、非常に食べやすい。

噛むにもそこまで顎の力を必要とせず、それでいて肉の旨みが口いっぱいに広がっていく。いや、肉の旨みだけではない。幻獣チーズやヤムイモの風味も混ざっているためか、しつこくない口触りに、イルルの言った通り少しあっさりとした味になっていた。

これは、十分に煮込むことで肉の脂を分解したのだろうか？

「ふむ、肉の脂かね？ 答えはレアオニオンよ。そいつが肉の脂を吸っておるのじゃ」「そうなのじゃ？ ……これが？」

「おお。柔らかくなっておるじゃろう？ レアオニオンは肉と一緒に炒めると、その脂を吸って柔らかく、そして甘みを生み出すんじゃない」

「この激辛ニンジンも…そんなに辛くないな。シチューともよく調和しているし。もしかして初めに熱した時に秘密が？」

「ふむ、目の付け所が良いのう。だが生憎そこは研究中でな、まだ公表は出来んの」

軽く探ってみたものの、この頑固爺は激辛ニンジンの秘密は公表しなかった。俺の知らない、何らかの方法を使ったようだが、もしかしたらこちらのヤングポテトに秘密があるのかもしれないな。

この煮込まれて柔らかくなったポテトの旨み。アツアツのシチューと絡み、ホクホクとした味わいを作りだしていく。

秘密云々の前に、とにかく旨くて堪らない。

「美味いじゃろう？　素晴らしいじゃろう？　これが食事、そして感謝じゃよ。よく味わうんじゃよ」

そう言つて頷く彼は、何時もの頑固爺ではない、非常に穏やかな笑顔を浮かべていた。普段なら決して見ることの出来ないその表情が、とても印象的だったと、俺の記憶にシチューと共に刻まれたのだった。



「なあ、イルル……」

「何にや、旦那さん？」

あれから、数時間ほどは経つただろうか。

シチューを完食した俺たちは、まだ狩猟地に残ると言った山菜ジイさんと別れ、アップトノスの引く童車でナグリ村への帰路に就いていた。そんな童車の上に座る俺は、何もなしに、膝の上のイルルに話し掛けてみたのである。

「……モンスター食は好きだけどき、ただ好きだから今までやってきたんだよな」

「そうにや。旦那さんの気まぐれと好奇心には困ったにやあ」

「感謝なんて、考えたことがなかったよ。バルバレに来る前ならなおさら」

「にやあ、ボクはその時の旦那さんは話でしか聞いたことないから、何とも言えないけど……旦那さんは変わったんだにや？」

「変わったのかなあ……」

一応弁明しておくが、俺としてはじめからここまでモンスター食に情熱を燃やしていたわけではない。それなりの経緯を経て今のような心持ちになったのだが。

何にせよ、イルルにあのような反論したものの、俺にはどこか納得出来ない気持ちがあつた。

「本当に向き合ってるのかなあ」

いつの間にか漏れ出ていたその言葉。

山菜ジイさんの言う向き合い方と、俺の向き合い方は何か違うような気がする。その違和感というか、矛盾というか。それがまるで、魚の小骨の如く喉に引っ掛かっていた。

一方の、俺の眩きを聞いていたイルルは、膝の上だというのに危うい動きで立ち上がる。そうして、その小さな両手を俺の頬に当ててきた。

「……イルル？」

「……確かに旦那さんの向き合い方は少し異常だと思ふにや」

「い、異常ってお前……」

その仕事の割に辛辣な一言。それに思わず反論したくなつた俺は口を開いたものの、それは彼女の柔らかい肉球に阻まれる。でも、という一言を添えて。

「でも……旦那さんは善も悪もなくただ自然の一部としてモンスターに関わつてるにや。それは、それもきつと、一つの向き合い方にや。少なくともボクはそう信じてるにや」

「……それって」

「それに、そんな旦那さんの向き合い方がボクと旦那さんを引き合わせてくれたんだから。だからボクは感謝してゐるんだにやあ」

そう言つて、彼女は優しく俺の頭を抱き締める。ふわふわとした毛並みが俺の視界を遮つたが、彼女の体はとても温かかった。俺の心は、まるであのヤングポテトのように、じつくりと溶け出すよう。喉に引つ掛かった魚の骨も、ゆつくりと溶け始めていく。

そんな、心底安心させられる温もりの中で、俺は静かに目を閉じる。肌を通して感じ

られる、彼女の滑らかな毛並みと柔らかな感触。温かな鼓動と、何処か心を落ち着かせてくれるような匂い。

何だか、何だかこれは――。

「なあ、イルル」

「……なあに？」

「……お前つて結構美味しそうだよな」

「にやつ!? 今の流れでそれを言うかにやつ!? とうかそういう向き合い方はやつぱり勘弁にやーっ!!」

く 本日のレシピく

『鎧竜手羽先のクリームシチュー』

・ 鎧竜の手羽先 …… 400g

・ ヤングポテト …… 2個

・ 激辛ニンジン …… 1本

・ レアオニオン …… 1個

・ベルナミルク	……	250cc
・ユクモ豆腐	……	1個
・ユクモ霊峰山薬	……	半分ほど
・水	……	150cc
・オリーブオイル	……	少量
・ガーグア鶏ガラスープ	……	大さじ1杯
・塩	……	適量
・幻獣チーズ	……	40g

## 美味との遭遇

耳障りな金属音が、乾いたように青い空に響く。軋むように甲高い音を立てるそれは、かなり年季が入った人工物であることを訴えているかのようだ。その証拠のように所々剥がれ落ちていたり錆びていたり。

超低温の波に揺られ、その度に聞くものを不安にさせるような音が響く。だが、余程良い素材が使われているのか、崩壊するような気配は全くなかった。

ここは氷海。極寒の海に浮かぶ、巨大な氷の島。そこに、無造作に船が寄せられている。

古龍、ダレン・モーランの素材を使い建造されたこの船は、軋むことはあってもその骨組みを崩すことはない。そういった安全性を保障されているが故に、この船は氷海に赴くハンターを運んでいるのだ。

本日もベースキャンプごと乗せたこの船は、吹雪に荒れる氷海の巨氷に到着したのだった。

「さみしくつ、こいつは骨身にしみるう」

「相変わらずにや。旦那さんも、ここも。……寒いにや?」

「……ベースキャンプはまだマシだからな。取り敢えず支給品支給品」

数々の流水を一望出来るこのベースキャンプ。ベッドやテントは船に乗せられているものの、支給品ボックスや納品ボックスは船の外に置かれている。そのため漁りに行くには、船から下りなければならぬのだ。

甲板から下りれば、もうそこは一面雪の絨毯。歩く度に、足裏に何とも形容し難い陥没感を感じる。この陥没感のせいで、雪の上を歩くのに体力を持って行かれるのだ。そのため人によっては、このような地での狩りは敬遠しがちだったりする。

「……取り敢えず地図と応急薬、あとペイントボール」

「相変わらず携帯食料は取らないのにや……」

「当たり前だろ」

そう。イルルの言う通り、俺は基本的に支給品の携帯食料は口にしない。

その理由は言わずもがな、不味いことこの上ないからである。味は名状し難いわ、触感もパサパサとして口触りが悪いわ、と全国のハンターさんも口を揃えて不味いと言うことで有名だ。挙句の果てには、噛まずに呑み込んでいる者もいるのだとか。

「こんなものでスタミナつけるよりは、こんがり肉をじっくり食った方が良い」

「にや……旦那さんらしい理由にやあ」



「大体これは一体何を具材にしてんだ？　もしや食用じゃない肉でも使ってるんじゃないだろうな」

流石の俺も嫌がるようなモンスターが使われているのかもしれない。例えば、成体のフルフルとか。

幼体ならば全然いけるフルフルだが、成体になると全く食えなくなるのである。肉がかなり異常な脂に包まれているため、まるで加工屋の油を誤って飲んでしまったのかと、そう錯覚するほどの不味さなのだ。

まあ、流石のギルドもそんなことまではしないだろう。精々不味い合成食材とか、そんなところだと予想する。

「……よし、準備は出来たな。それでは早速コイツを飲もう」

「あ、それって」

「そう。俺が以前、三週間掛けて開発した美味しいホットドリンク！　……の記念すべき試作品第一号だ」

「三週間……。この人ほんとに籠もりっぱなしだったにや。もはやハンターにあらずにや」

かのグラビモスを討伐する以前の話だ。俺は三週間という短くも長い時間を使い、寝食を惜しんで——いや、食は惜しんでいないが、とにかく必死に開発に取り組んだ。沢

山のキッチンアイルーに調理のコツを聞き、ギルドの知り合いに頼んで良い調合機器を借り、様々な具材を試したのだ。

そんな苦労を経て完成した、このホットドリンク。試作品とはいえ、自信は大いにある。きつと保温効果を保ちながら、美味しい味を昇華させてくれるだろう。

「これで不味いホットドリンクとはおさらばだ。これが美味ければ今日のターゲットも一捻り出来るぞ、きつと」

「……にやー。ティガレックスを一捻り……想像出来ないにや」

本日は、氷海に現れたティガレックスがターゲット。

奴は食い物を求めては、様々な場所を転々とする習性を持つ。そのため今こそ氷海に來ているものの、また勝手にどこかへ行ってしまうだろう。故に今回のクエストは特に急を要するものではない。ただの娯楽人の余興に應えるだけの、至ってつまらないクエストだった。

とはいえ、そのおかげでこうして試作品を試すことが出来る訳だが。

「よーっしー！ いったきまーすー！」

ほんのり橙色を帯びたそのホットドリンクを、一気に口に流し込む。

すると、口の中で三日間ハチミツに浸すことで苦味を緩和した苦虫と、しょうゆに近い味付けされたドリンクがトウガラシの辛みをアクセントに華を開き、その鮮やかな味

を立てるように、ギイギエキスの出汁が風味を深めていく——。

「……………」

——ことはなかった。

そんな幸福の象徴とも言える旨みとは正反対の、ただ不味さという不味さを追求したような味が、口いっぱい広がっていた。何というか、薬品臭い味だった。

「——ッ!? げほっげほっ! な、何だこれ!? 馬鹿か!? 馬鹿なのかッ!」

「にゃ!? だ、旦那さんどうしたのにゃ!? しっかりするにゃ!」

噎せ返るようにそれを吐き出そうとするが、一気に飲んでしまったため、大半は胃の中に消えて行ってしまった。

とんだミスをしたものだ。何ということか、同じ赤色だから、ホットドリンクと間違えてしまったのだ。あの液体を飲んでしまったのだ。

「うえ……………これやばい、やばい奴これ……………ちよ、マジで駄目だこれ……………」

思い返せば、今日の俺は朝寝坊をやらかした。寝坊してしまうと、この船の出港時間に間に合わず、狩りに行くことが出来ない。そのため俺はあまり確認せずにボックスからアイテムをポーチに詰め込み、大慌てで出発したのだった。

その結果がこれである。

「だ、旦那さん……………だ、大丈夫かにゃ……………」

「……イ、イルル……。すまん……」

心配そうに、俺の足元で様子を窺っているイルル。

しかし彼女の心配虚しく、俺の意識はだんだん薄れていった。まるで、深い眠りに誘われるように。ドスバギイの涎を浴びせられた時のように。

「……だ、旦那さん!? 旦那さん! 旦那さーんっ!!」

間違いない、俺が……。俺が飲んだのは――。



「にゃ……。だ、旦那さん……」

何ということか。

イルルの目の前でホットドリンクを一气飲みしたシガレットは、弱々しく狼狽えながら、ばったりと倒れ込んでしまった。まるで気を失ったかのように。襲い来る眠気に呑み込まれたかのように。

そんな驚愕の事態に、イルルは彼がホットドリンクの調合を失敗したのかと考えたが。

ふと鼻につくような奇妙な臭いが、彼の飲み干した瓶から漂っていることに気付い

た。ホットドリンクのようなトウガラシの香りでない、明らかに薬品を思わせるような科学的な異臭。

そんな瓶を恐る恐る手に取った彼女は、ゆっくり鼻を近づけて——。

「……にや、これ……捕獲用麻酔薬にや。旦那さん間違えて飲んだのにや？」

モンスターを捕獲する時に用いられる薬品。素材玉と合わせ捕獲用麻酔玉にする、もしくは弾丸と調合することで麻酔弾へと変貌するこの液体。真紅に染まったこの液体。

そう、ホットドリンクと捕獲用麻酔薬の色合いは、ほとんど同じなのだ。故に、寝坊した彼は色だけで判断し、麻酔薬の方をポーチに詰めた。その結果がこれである。

「……それにしても旦那さんが間違えるなんて……珍しいにや」

今まで長く彼のオトモをしていたイルルだからこそ、彼がこのようなミスをするところを見るのは新鮮だった。余程慌てていたのか、それとも疲れていたのか。

「思えばオトモを始めて数ヶ月……こんな旦那さんは初めてにや。……ふふ、初めて会った時とは逆にやあ」

初めて彼らが出会った時は、構図が全くの逆だった。眠るシガレットをイルルが見守る今とは逆で、気を失ったイルルをシガレットが看病していたのである。

——そう、それは数ヶ月前の出来事だった。

「にゃ〜……また駄目だったにゃ……」

何の因果か、舞台は同じく氷海。その中の一角にある、木々が群生するエリア。そこで悲しそうに佇むアイルーの姿があつた。

全身が雪のように白い滑らかな毛並み。異物が入り込まないよう、細い毛並みで豊満に満たされた耳。ふさふさとした、大きな尻尾。そう、彼女はハンターにスカウトされることを狙つてこの危険地帯に顔を出す、俗にいうノラオトモなのだ。

そんな彼女から漏れる、憂いに満ちた溜息。それが、彼女が中々スカウトされないという厳しい現実を物語っていた。

「うう……挫けそうにゃ……」

——何だよ、ぶんどりかよ……。そんなトレンドのネコに用はねえよ！

——私、回復トレンドを探してるの。だから……。ごめんね？

——時代はピーストだぜ？　ぶんどりとかどこに需要があるんだよ。

——ホップ！　ステップ!!　ジャンプ!!!

——役立たずの穀潰しは要らん。

「……にゃあ」

通りすぎるハンターたちの心ない言葉。彼らとしては何気なく、平然と口にしたのかもしれない。しかしそれが如何に彼女の心を傷つけたか、彼らには分かるのだろうか？  
そう、まだ名のないこのアイルーのトレンドはぶんどり。ブーメランの扱いに優れるそのトレンドだが、その真骨頂はぶんどりだ。文字通り、モンスターから素材をぶんどることが出来るのだ。

そう聞くと、非常に良い働きをしてくれそうな気がするが、問題は他のトレンドにある。

回復笛を巧みに使い、ハンターを癒す回復トレンド。

強走咆哮でモンスターからスタミナを奪い、それをハンターに還元させるビーストトレンド。

さらにはハンターの踏み台となり、立体空間を活用させるジャンプトレンドという存在。

オトモアイルーのトレンドは、正に激戦区なのだ。そのため、ぶんどりというトレン

ドも、このような眩しい存在を前にかき消されてしまうのが現実である。

「……ボクはもしかしてオトモに向いてないのかにやあ？ 人間と仲良くしたいけど……こつちでは中々雇用されないにやあ……」

大きな瞳に涙を滲ませる彼女は、哀しそうにそう眩くと、強まる吹雪から身を隠すように木々の奥の洞窟を見据えた。頬を濡らす涙がゆつくりと凍っていく。気温は確実に下がっていた。

「……取り敢えず洞窟の中に入ろう。寒いにや」

氷海上部のエリア。ここは広い洞窟で占められた薄暗いエリアだった。

外で吹き荒れる吹雪の脅威に晒されることはないが、寒さは変わらない。どころか、壁や天井まで凍り付いているせいで、心なしか外よりも寒いのではないか。そう感じるハンターも少なくない。

「にやー……相変わらず寂しいところだにや」

そんな冷たい空間に脚を踏み入れるアイルーは、まるで慣れているかのような口調でそう眩いた。



彼女はここで、ハンターを探し始めて随分と経つ。そのため、氷海の地形や構造は熟知しているのだ。

「何か食べれる物はあるかにや?」

この洞窟に、吹雪を逃れ訪れるモンスタースターは多い。それこそ、洞窟奥に繋がっているザボアザギルの巣からは、一日に何匹ものスクアギルが流れ込んでくるのだ。そのため彼女は自分でも狩ることの出来る小型モンスタースターを求め、洞窟深くに身を沈めていった。

誤算だったのは、本日はいつもとは違う何かもまた、この洞窟に入り込んでいたこと。彼女はそれを痛感することとなる。

「……おかしいにや。いつもならいるモンスタースターがないにや……」

洞窟内を蔓延るスクアギルは、一匹も見当たらなかった。我が物顔でうろつく彼らのはずが、今日はまるで、何かから逃げるかのように洞窟を後にしたのである。

「……しようがないにや。この際ブナハブラでもいいにや」

洞窟内を飛び交うブナハブラ。大型の虫である彼らは、普段から洞窟の天井に止まり、獲物が現れるのを待っている。味は不味く、力を加えると四散してしまう程脆いた

め、あまり食用には向かないのだが、

「にやあ。背に腹は抱えられないのにや！」

このアイルーは自らの空腹とにらめっこし、件のブナハブラを捕らえようと天井に顔を向けた。そうして映りこむ凍り付いた天井。飛び交うブナハブラ。

——口しかない顔を向ける、白い飛竜。

「……にやつ!？」

彼女がそう反応した時には、その飛竜は覆い被さるように彼女に向けて落ちてきた。

慌てて跳んだ彼女は、押し潰されずに済んだのだが、着地までは考えてなかったのか、転がるように地面を滑っていく。

「にや、一体何が……?？」

獲物を見失ったためか、その飛竜は不思議そうに首を傾げ、しきりに鼻を動かし始めた。まるで臭いを確かめるようなその行為。

そして、静かにアイルーの方へとその首を向ける。無い眼の代わりに鼻か、それとも他の何かの手段で、腰を地に着ける彼女の位置を探り当てていた。

「……にや、何このモンスター……」

見るからに醜悪なその容貌に、アイルーは恐怖に震えた。今まで氷海でスカウト待ちをしてきた彼女だが、この飛竜——フルフルは見たことがなかったのだろう。

一方のフルフルは開かずの瞳でアイルーを見定め、凄まじい咆哮を上げた。まるで人間の断末魔を思わせるような不気味なその声は、洞窟内で反響し、その迫力の余り彼女の全身の毛を逆立たせた。

フルフルは、ただでさえ奇妙なその頭を、さらに奇妙な動きで首を伸ばしてアイルーに近付ける。そこに付いた不気味な口が、まるで彼女を喰わんと開き切ったその時。

「はっ……い！」

彼女の中の危機感が、恐怖心に打ち勝った。

寸でのところで跳び避けたアイルーは、フルフルの足元を潜り抜けるように走り、迫り来る牙から慌てて離れる。そんな彼女の肩は、大きく震えていた。

一方の飛竜は、またもや獲物がいなくなったことで、困ったように鼻を唸らせ始める。「じゃあ……」

アイルーとは比較にならない大きな体。鋭い牙に不気味な皮。戦っても勝ち目がないうことに、彼女はとつくに気付いていた。

だから彼女は、とにかく足に力を込める。

「三十六計逃げるに如かず、にゃ！」

距離を開けたまま、一目散にアイルーは飛び出した。飛竜に背を向けて、四つの手足に力を込めて。

不意に、何か弾ける音が響く。

懸命に走る彼女の背後から、洞窟内を照らす何か駆けて寄ってきた。目に痛い光を放つそれは、耳障りな音を立てながら、駆けるアイルーへと勢いよく飛びかかる。

「……………にやつ——にゃあああああああつ!!?」

直後、洞窟内に凄まじい閃光が走り、大気を焦がすようなスパークが暴れ出した。そんな異常現象の真つただ中にいる彼女は。

「……………にゃ、にゃあ……………」

何かを抜けるような音と共に、体毛を焦がしながら倒れ込んだ。全身に重い負荷を負った彼女は、まるで力をなくしたように動かない。そう、彼女はフルフルの放った電気の塊を当てられた。その強烈な電圧に彼女の神経は麻痺状態に陥り、満足に動くことも敵わないのだった。

そんな彼女の下へ、フルフルはゆっくり首を動かした。逃げ回っていた獲物を仕留めることが出来たためか、満足そうな声を漏らして口を開く。

(……………もう、ダメにゃ……………)

その口から滴る唾液なのか、彼女の涙なのか。いずれにせよ、何かによつて彼女の頬は徐々に湿つていった。そんな絶望の淵で全て諦めた彼女は、静かに眼を閉じて——

。

その瞬間だった。

突如、火薬が弾ける音が鳴り響く。まるで大銅鑼のように洞窟が反響させるその轟音と、それに伴う衝撃波がフルフルを怯ませた。同時に何かの転がり込み、倒れるアイルーを巻き込んでいく。

しかしその巻き込み方も、乱雑なそれではなかった。むしろ抱きかかえるように、庇うように。そんな優しい巻き込み方で、彼女をフルフルから遠ざけたのだった。

「……チツ！ 何だこの状況は……！」

忌々しそうにそう吐き捨てる、男の声。アイルーを抱きかかえる彼は、興奮するフルフルと憔悴し切ったアイルーを見比べて。即座に緑色の煙を放つ玉を、地面に投げつけたのだった。



——何だろう？

何か、温かい匂いが俺の鼻を擦くすくっている。

「……んが？」

「あ、旦那さん、起きたにや?」

グラグラと揺れる視界と頭を押さえながら、匂いを頼りに目を覚ます。ずっと眠っていたのか、相当深く眠り込んだのか。何にせよ寝起き特有の不快感が俺を支配していた。

だが、それを我慢してでも起き上がる価値のある香り——すなわち飯の香りが漂っている。それだけで十分だった。俺が目覚めますのには。

「……うえ」

「無理しちゃダメにや。はい、お水」

「あ、ああ……。すまん……」

まるで二日酔いのような感覚というか、俺ががぶ飲みした捕獲用麻醉薬の影響で非常に気分が悪い。

イルルが出してくれた水がなかったら、危うくもりバスしていたところだ。

「あー……潤う……」

「大丈夫にや? 頭痛いとかは……」

「まあ、大丈夫。それよりもそっちは?」

嬉しそうに微笑むイルル。その横には、コトコトとフタを叩く鍋があった。

俺が先程感じたあの香りを放つそれは、身に受ける熱を排出するように、フタとの隙

間から白い湯気を上げていた。

「にや、ボク……頑張ってやってみたのにや」

「……イルルが？」

「にやつ、何にや！ その怪しむような目は！ ボクだつて……ずっと旦那さんを見てきたから。少しは出来るにやあ……」

少し力んだような様子でそう物申すイルルは、そつと鍋のフタを開けた。するとそこから、先程まで押し込められていた香りと湯気が一齐に舞い上がる。どこか氷海に似つかわしくない、不思議な雰囲気を描き出した。

そんな鍋の中で湯に浸かっていたのは、緑の葉が球状に丸められたもの。

「……ロールキャベツか？」

「にやあ。砲丸レタスしかなかったからロールレタスにや」

「……何だか懐かしいな」

何の因果だろうか。初めて俺とイルルが会った時。この氷海でフルフル狩猟クエストに来ていたあの時だ。俺は傷だらけのこいつを見つけ、慌てて介抱したのだった。当時この地方での駆け出しだった俺にとつては、貴重なモドリ玉まで使つて。あれ別料金のネコタクだから、後からどつとゼニー取られるんだよなあ。

そんなこんなで、俺は怪我した此奴に薬草と肉を混ぜたロールキャベツを振る舞つた

のだが。

「立場は逆にや！」

「はは、確かにそうだ」

情けないことに、今回は俺が介抱されていたようだ。それもご丁寧に、あの時のような料理まで用意して。まあキャベツじゃなくてレタスだが。

それにしても、イルルは一体どのような具材を入れたのだろうか？

「レタスとフルフルベビー、それと旦那さんの目を覚ますためにハチミツにニトロダケも入れたにや」

「……成程、元氣ドリリンコの調合具材か」

目覚ましに最適ということでは有名な元氣ドリリンコ。全国で三万人の方に愛飲いただいているという元氣ドリリンコ。まさかその調合素材であるハチミツにニトロダケまで入れているとは。

恐らくハチミツは、フルフルベビーをミンチ状にした時に混ぜ込んだのだろう。するとロールキャベツ、ならぬレタスの横で一緒に熱されているのがニトロダケか？

「……なあ、爆破防止はしてあるのか？」

「大丈夫にや。ハチミツ染み込ませたにや！」

「あー……」



「水分に浸しておけば、胞子は炸裂しない。旦那さんが教えてくれたやつにや」  
「そうそう。粘性のある水分ならなお良しつてな」

そのままニトロダケを熱した暁には、小タル爆弾程の被害を齎もたらしてしまう。それを防ぐためにも、元氣ドリニコにはハチミツが使われている。まあ、いつも一緒に過こしてきたイルルのことだ。そう心配する必要はないかもしれない。

そんなイルルはというと、味を確認すると嬉しそうに尾を立てる。そうして、盛り付け皿を用意し始めた。

「長時間熱して味を染み込ませたからもう食べれるにや！」

「……俺って一体どれくらい寝てたんだ？」

「数えてないけど、かなり長かったにや。でもご飯作り始めたらこれにや。流星は旦那さん。ご飯の匂いで麻酔を克服するにやんて」

かなり長い時間。

そんな彼女のニュアンスは、静かにクエスト失敗という事実を俺に突き付けていた。あろうことか、クエストに設けられた時間のほとんどを俺は睡眠に使ってしまったようだ。

まあ、そんなことはどうでも良い。今重要なのは、イルルが盛り付けているロールレタスなのだから。

「出来たにや！」

彼女が丁寧に盛り付けたそれは、淡い緑色の巻かれた葉。そしてそれを彩る赤い切り身のキノコだ。熱い湯気を放つそれを箸で割いてみると、そこから肉汁を滴らせる白いミンチ状の肉が見えてきた。

幼体なら美味なフルフル。それをミンチにしたことで、熱したレタスの葉に効率良く味を染み込ませ、深い葉の香りと溢れる肉の勢いのハーモニーを生み出している。その食欲揺るがす様相が、腹を強烈に打つ。

「おお。良いじゃないか」

「にやあく。旦那さんも早く食べようにや」

「ああ、いただきます」

普段は固い砲丸レタスだが、熱とお湯、さらに肉汁によって十分に柔らかくなっているようだ。

それでフルフルベビーの肉を包み、そのまま口へ運び込む。アツアツのそれは猫舌のイルルには食べにくいだろうが、俺はそのまま口を閉じて十分に咀嚼そじやくした。

はじめに顔を出すのは、甘みに近い柔らかかなレタスの旨み。しかし歯がレタスの層を斬り裂いていけばいくほど、そこからどんどん肉汁が溢れ出てくる。その奥に眠るフルフルベビーの淡泊な味わいが、主張し過ぎずにじつくりと染み出るのだ。そうしてミン

千状故に噛みやすい歯触りが口をなぞり、肉汁の割に諄くどくない味を形成していく。

「レタスにしても良いもんだな、若干食感が残っていて、それがまた歯触りが良くて旨うまい」

「でも、あの時の旦那さんほど美味しくはないにや」

思わず感嘆した俺に対し、イルルはやや残念そうに溜息をついた。

イルルの言う、あの時俺が作ったロールキャベツ。あれはポポの肉とハーブの様な風味の薬草、アオキノコを織り交ぜ、さらに幻獣バターと薄力粉のホワイトソースも加えたものだ。労力を考えれば、差が出るのもしょうがない。

「いや、それでも美味しいぞ。イルルが頑張って作ってくれたからな」

「……でも」

「つべこべ言うな！」

「ふもっ!？」

勢いのままにロールレタスをイルルの口に突っ込んだ。瞬間イルルは驚いたように手足をジタバタさせたが、それも気に留めず話を続ける。

「俺がお前のためにロールキャベツを作った時は、お前のことを考えて作ったんだぞ。今回のお前はどうか？」

アツアツのロールレタスに奮闘するイルルは、慌てて水で口の中を冷やしながらも、

涙目で答えを探り始めた。

俺はあの時、コイツの傷を加味して薬草やらアオキノコやらを混ぜ込んだのだ。そんな工夫が、今回もあつたじゃないか。

「……旦那さんのために、目が覚めるように……」

「そう、ハチミツとニトロダケを入れてくれたよな？　いいか、こういうのを人情と言うんだ」

「……人情？」

「そう、人情は準最高のスパイスなんだよ」

俺のために作ってくれたロールレタス。イルルが工夫を凝らして作ってくれたロールレタス。こんなに美味うま嬉うれしいことなんて中々ないだろう。その人情が不思議と味に、それを感じる心に深みを増してくれるのだ。

「……ついでに最高のスパイスは？」

「空腹だな、これは譲れない」

「……しかし懐かしいな」

「ほんとにや。そういえば、ボクをスカウトしてくれたのもこんな感じだったにや」

流れる氷河を見ながら何となくそう眩くと、イルルは嬉しそうにそう言っは、俺の膝に飛び乗ってきた。そんな彼女の顎をわしゃわしゃと撫でながら、彼女の言うその時を思い出す。

—— お前ぶんどりか？ って事はモンスターの食ぎ……素材集めるの得意だよな？ よし、スカウト。

思えば、あまり深く考えずスカウトしたものだ。まあ治療を施したのもあつてか、情がコイツに移ってしまったのかもしれない。その時のイルルの喜びようと言えはそれはそれは凄かったし、なかなかハンターにスカウトされず打ちひしがれていたことも、ここでスカウト活動始める前の事情も聞いたのだし。

まあ雇ってみれば、モンスターの素材をしつかりぶんどるわ、美味しいキノコとかを持つてくるわ。今では唯一無二の相棒だ。

「ボクに名前をくれたのもここだったにや」

「あー。そうだったな」

数か月前の、氷海のベースキャンプ。そこで使ったあのキャベツ。

あれはイルル村という農作物豊かな村で獲れたキャベツであり、その名もイルルキャベツというブランドものだったのだ。

だからそこから取ったのだ。変な名前かもしれないが、当の本人が気に入っているよ

うだからまあ良いか。

「旦那さん……」

「ん？」

「こ、これからも、よろしくにや……!」

恥ずかしそうに、それでいて確かめるように。そんな様子で、おずおずとそう告げてきたイルル。そんな彼女の可愛らしい頬を撫でながら、俺は真っ直ぐ頷き、その小さな手を握った。

——氷海に鳴り響く、クエスト失敗の笛を背景に。

く本日のレシピく

『ロールレタス (4個)』

・ 砲丸レタス	……	4枚
・ ニトロダケ	……	1個
・ フルフルベビー	……	150g
・ 卵	……	1個
・ 氷海の海水	……	100ml

・胡椒  
・ベルナミルク

……適量  
……150ml

## 孤独は食事のパーティナー

騒がしい狩人たちの声。

グラスとグラスを打ち付ける音が響き、それに伴い勇ましい男たちが大きな笑い声を上げた。同時に漂ってくる、食材の濃厚な香り。そしてそのグラスの中身であるアルコールの匂いが、豪快に俺の鼻を刺激する。そんな喧噪を、鎮めようとするかのように鳴り響く大銅鑼の轟音。

ここはバルバレギルドの集会所。バルバレ一大きな建物だ。

「おい聞いてくれよ！ この前イヤンクツクが——」

「何だそんなの、俺なんかア——」

「私の話も聞いてよ！ 前のクエストでリオレウス様が——」

「フルフルたん可愛いよおおおおお！」

とまあこんな感じに、ここには様々な依頼、仕事、そして我の強いハンターが訪れる。集会所、という名は伊達ではないのだ。

ハンターをやるうとする人間なんて、かなりの変人か、相当酷な出自があるかの二択。



だからまああんな風に馬鹿騒ぎするような奴らが集まりやすい。

ハンターという人種は、基本騒がしいのだ。

「……はあ」

小さなため息が耳に届いた。

テーブルの向かいに座っている、あの女ハンター。漂う雰囲気は、恐らく後者だ。

大剣にジンオウウシリーズで身を包む彼女は、寡黙そうにシモフリトマトを挟んだマスターベークルを食べている。周りの喧騒には一切混じろうとせず、ただ黙々と狩りに向けて英気を養っているようだ。

少し橙の掛かった金の髪に、鋭く光る翡翠色の瞳。端正な顔立ちだが、その瞳の印象のせいかな、やや気難しそうな印象だ。その装備や佇まいから、彼女はそこらのハンターとは違う、実力者だということが窺える。

装備から察するに、ジンオウガ亜種を制したんだろう。だからあの強そうな雰囲気も納得だ。きつと彼女も、モンスターに故郷を潰されたとか、そんなクチだろう。

「……別に何でも良いか」

俺とて折角バルバレギルドに来たのだから、たまにはここの飯を食べたくなるつてもんだ。

——というわけで、早速注文したピンクキャビア入りヘブンブレッドに齧り付く。

そこらの小麦とは比較にならない濃厚なパンの香りに、ピンクキャビアの鮮やかな旨みとほどよい苦み。口の中で広がるそのコクのある珍味を、パンはじつくりと包み込んでいく。

さて、このピンクキャビアの味だけで楽しむのも悪くないが、何とここの各テーブルには氷海オイスターソースが置かれていることも忘れてはならない。

実はこれ、なかなかの高級調味料だ。相当羽振りが良いのか、ギルドでは各々が好きな量掛けて良いこととなっている。つまりこれを掛ければ、またまた違う味を楽しむことが出来るのだ。そんな素晴らしい助っ人を使わないでいることが出来るだろうか？

いや、出来ない。

「つてことで、俺もいただきましようかね！」

空きビンに詰められた薄い黄色のそれが、キャビアの桃色に光を差した。そんな海の芸術を一度口の中で味に昇華させると、俺は言いようのない幸福感に包まれる。

まるで長年閉じ続けていた貝が、その身に宿した真珠を解き放つように。貝のクセのある旨みがキャビアの苦味を助長させ、より食べ応えのあるモノへ変えていく。その大人向けの、まるで海のように深い旨みが堪らない。

——自分でも気付かぬうちに、俺は眼を閉じて味を楽しんでいた。それを認知するまで、外からの騒音は一切遮断して、ただ真摯に味に向き合っていたのだ。

「美味い……」

実のところ、俺はこの組み合わせが好きだ。何なら、ここで食べることの出来る飯が一番好きだったりする。何ととっても味の調和が素晴らしいのだ。キャビアの濃厚な味を、氷海オイスターソースの独特の風味を、ヘブンブレットが優しく受け止める。まるでモンスターを優しく受け止め、時には揺り籠ゆりかごにもなる落とし穴のようだ。

「うおおおおおっ!!」

——だが、何時までも飯を楽しんではいられない。

熱くなった男たちが、腕相撲をし始めたのだ。それに伴いギャラリが集まっていき、集会所は暑苦しい熱気に包まれる。ヘブンブレットのような優しい包み方ではなく、ガララアジャラの囲み技を思わせるような不快な包み方。それが、俺を味覚の海から無理矢理引き上げた。

「……チツ」

これだ。これだから集会所は嫌いなのだ。ここに来る奴らは、飯を楽しむという高尚な嗜好を持ち合わせていない。そういう点ではモンスターと大差ない連中ばかりだ。

こんなところでゆっくり飯を食うなど、夢のまた夢。いつそのこと、ここの飯を不味

くしてもらえれば、まだ俺も納得出来るのだが。しかし、世の中というのはうまく行かないもの。ここの飯は、俺が思わず足を運びたくなくなってしまふほど美味かったりする。

「……それでもやっぱり嫌だなあ。食い終わったこの瞬間が最悪なんだ」

思わず溜息が漏れ出たものの——それもまた、男たちの荒ぶる声に呑み込まれていった。



「相変わらずだね、君は。ここはやっぱり苦手なのかい？」

「……まあな。慣れないもんだよ。バルバレに来てから結構長いんだけどな」

「ほっほほ。まあそこは人の好みというものがあるからね。無理に適応しなくても良い」

暇を持て余した俺は、何ともなしにギルドマスターに近付いてみた。

顔馴染ではあるので、俺に気付くや否や、快く話しかけてくれるこの好々爺。小柄なご老体ではあるが、実はこのバルバレギルドのギルドマスターという超高等身分なお方だ。

「何か面白いクエスト来てない？」

「ふむ……そうだね。とある国の第三王女殿から——」

「パス。絶対めんどくさい奴だろそれ」

とあるとか言っておいて、全然隠す気のないギルドマスターの呟きに、俺は思わず溜息をつく。

第三王女といえば、訳の分からない我儘を振り撒く超絶迷惑なお方だということ有名だ。一体何時だっただろうか。雪遊びに行ってしまったなどという理由で、凍土に駆り出されたこともあった。まあ、”あの頃”は色んな意味で嫌な思い出ばかりだ。思い出すのは止しておこう。

——何の因果か、あの時俺を苦しめた獄狼竜モンスターの装備を着込んでいる女が、今同じ空間にいたのだが。

「では、そうだねえ……」

取り敢えず受け流しておく、彼はそれも全く気に留めず白い豊かな髭を擦り始める。

丁度その時だった。優雅に髭を弄る彼の元へ、受付嬢が駆け寄ってきたのだ。それもらしくもない、非常に慌てた様子で。

「マ、マスター！ 大変です！ 救難信号です！」

「何っ、本当かい？ 一体何処から？」

「ば、場所は原生林！ 移動中の商隊が付近で、ゲネル・セルタスを目撃したそうです！」  
彼女の声が、集会所中に響き渡る。それに気付いたのか、馬鹿騒ぎしていたハンターたちも自ずから静まり、事の成り行きを見守り始めた。

ゲネル・セルタス。現在確認されている中で最大の甲虫種。圧倒的な巨体と、凄まじい馬力を持つ虫だ。危険度もかなり高く、そこから馬鹿騒ぎしていたハンターたちには太刀打ち出来ないのではないだろうか？

「みんな、聞いたかい？ 早速高速飛空船を用意する。是非ここにいる上位ハンターに討伐に向かってもらいたい。誰か名乗り出る者は——」  
「行くわ」

ギルドマスターが、何時ものお道化た様子ではなく、眉間に皺を寄せた表情で集会所内を見渡した。そうして狩人を募ろうと声を上げると、早くもそれに乗り掛かった人物が一人。若い少女の声だった。

「……ふむ、ヒリエッタくんか。よし分かった。あと三人、誰かいるかな？」  
ギルドマスターが呼んだ、ヒリエッタという少女。

彼女は先程から微かにチラついていた、ジンオウUシリーズに身を包むあの少女だった。よくよく見れば、背負う大剣は煌剣リオレウス。青い刀身に幾つもの鋭い棘の付いた武骨な大剣だ。つまり彼女はジンオウガ亜種だけでなく、リオレウス亜種まで制した

ということになる。

一方、ギルドマスターの掛け声に、さらに二人の男が名乗り上げた。それも少女の様子を気にしながら。見た目の印象をまとめると、ランスを背負った背の高い男に、弓を抱える小太りの男。

「じゃ、じゃあ俺たちも行くぜ！」

「おう、甲虫種なら楽勝だな！」

彼らもマスターの知る上位ハンターだったのか、マスターは頷いて二人の同行をあつさり認めめた。

己の武勇を見せびらかそうとするかのように佇むグラビドシリーズのランサーと、バサルシリーズの弓使い。普段から共に狩りをしているのか、二人は仲良さげな様子で少女に近付いて何やら話しかけ始めた。つまるところ、ナンパだろうか。

「それじゃあ、あと一人……。シグくん、行ってくれるかい？」

「……は？」

ギルドマスターが残る一枠に俺を名指しする。同時に集まる、俺への視線。ギルド中の、いくつもの瞳。

その面倒ごとに俺が思わず顔を顰めると、偶然ながらもランスを担ぐ男が口を窄めすぼた。だが、マスターは厳しい表情で彼を諫め始める。

「おいおい、マスター。俺たち三人だけで充分だろ？」

「いけないよ、これは人の命が懸かった緊急要するクエストだ。だったらより確実に狩猟を成功させないとね。だから、ここは君たち四人で狩りに行ってもらうよ」

焦っているのだろうか。俺の意見も全く聞かずに依頼書に印を押し始める受付嬢たちに、静かに頷くギルドマスター。つまるところ、俺の逃げ場が封鎖されたのだった。

少女は至って無表情。二人組の男は明らかに不満そうな顔をして俺を睨む。一方の俺はというと、溜息をつくしかない。

——またか。

女一人に雄二人。俺はぼつちでお邪魔虫。こんなシチュエーション、度々あったなあ。漏れ出た溜息は、淡くも集会所の喧噪に掻き消されてしまった。



「なあお嬢さん、お堅いなあ。緊張してるのかい？」

「俺たちがついてるから大丈夫だよ！」

「……別に緊張なんてしてないわ」

飛空船が、雲を切り裂いて飛んで行く。



本来翼を持たない人間は、飛ぶことなど敵わない。しかし人間には、翼の代わりに知恵がある。その知恵を用いて作られたこの飛空船は、人を飛竜のように飛ばすことの出来る、まさに叡智の結晶なのだ。そんな空の旅は本来とても清々しいものであるのだが。

「……はあ〜」

俺はというと、ただいま絶賛落胆中だ。

もう先程までの流れから分かるように、俺は完全にハブられていた。同行する彼らにとつては、ヒリエッタという少女をナンパしたいがために名乗り上げたのであろうから、そこに加わった俺が邪魔で仕方ないらしい。明らかに俺を遠ざける形で、ひたすら少女に話し掛けている。

一方の少女はというと、さも面倒臭そうに彼らの質問を受け流していた。容姿が整った女性ハンターはこのようによくナンパを受けるらしく、それから逃れるのがなかなか大変なのだとか。

「ハンター歴何年なの？」

「別にどうでも良いでしょ」

「ギルドカード交換しない？」

「……悪いけど今日は持つてきてないの」

彼女は慣れているのか、巧みに彼らの質問を避けていく。その全く揺るがない態度に、男たちもどかしそうに顔を歪めた。

その様は、見物している俺からすれば「ざまあみろ」としか言いようがない。可笑しくて顔が歪みそうさ。まあ、バレないように顔を逸らしているのだが。吹き出さないように気を付けようつと。

「ハンターさんよ！ そろそろ原生林上空だ、パラシュートの準備をしてくれ！」

そんな俺たちに、船を動かす竜人がその声を掛けてきた。

上位クエストは、強力なモンスターの影響で何が起ころるか分からない。故に猟場には、近場でない限り、飛空船を使うこととなっている。ということは当然、ハンターはパラシュートなどを用いて降り立たねばならないのだ。

そんな訳でせつせとパラシュートの準備をしていると、弓を背負ったあの小太りの男が俺に話し掛けて来た。

「おい、その白髪」

「……あ？ 何だよ？」

「ゲネルが来るなら当然アルセルタスも来るだろ？ 俺たち三人でゲネルの相手するから、お前アルセルタス引き付けておけよ」

「は？ 何だそれ……って、おい！」

早口にそう俺に言いつけると、奴は返事も待たずに背を向けて、ランス男の方へ戻っていく。一方の彼は、まるでドスを利かせるように静かに俺を睨んでいた。

——別に同行するくらいで、そんなに邪険にしなくても良いのにな。

そんな思いを何とか胸の中で押し留め、俺は静かに降りる準備を再開したのだった。



「さてと……」

今日は随分と気流の機嫌が悪いようで、一齐に飛び出した俺たち四人はそれぞれ別の場所に流されてしまった。

俺が到着したのは、ベースキャンプ下にある水が豊かに湧き出るエリア。青く澄んだ水に包まれた、深い森の中だ。そんな水辺ではズワロボスが、穏やかな様子で水浴びをしている。

「……あ、いた」

エリアの上空を、穏やかに飛んでいる大きな虫。まるで角のように発達した巨大な甲殻が特徴的な甲虫、アルセルタスだ。

——アルセルタスか。

そういえば随分前に、あいつを単体で狩猟するクエストを受注したなあ。それも、依頼主はあの酔狂な美食家と名乗る謎のご老体。あのアルセルタスを煮込んで食べようとしたものの、結果は泣き寝入りせずにはいられなかった、とか。

俺としては調理法に問題があると思うんだよな。あんなデカイ虫を丸々鍋に入れて煮込んだところで、美味しくなる訳ないだろう？ 試したことはないが、あれはアルセルタスが不味かったのではなく、調理法がマズかったというわけだ。

「……いや、待てよ？」

それならば、今ここで試してしまうのはどうだろうか。

いつそのこと今試してしまえば、俺の理論を手取り早く証明することも出来るし、あの美食家爺に伝えることも出来る。小太り弓使いの命令通りになるのは少し癪だが、全体で見れば安全面の向上にも貢献できるだろう。そして一番大事なこと、つまり俺が美味しい物を食べることが出来る。

うん、いまいちモチベーションを持ってないクエストだったが、そうと決まれば話は違う。早速あいつを料理してやろう。勿論二重の意味で。

「……うーん、調理法はどうしようかな……」

そう決めたものの、ただ煮込むのでは彼の二の舞になるだろうな。それよりもっと良い調理法が必要だ。

「ブオオッ!!」

丁度その時だった。自分たちの縄張りを飛ぶアルセルタスを追い払おうとしたのか、ズワロポスが不機嫌そうな声を上げた。アルセルタスは特に敵対する素振りを見せないものの、少し警戒はしているようだ。それにしてもうるさいな、このズワロポス。

——ズワロポス？ 待てよ。ズワロポスといえはば？

「……垂皮油？」

そうだ。コイツからは、薬にも使われるほど良質な油を採れるのだ。つまり、上手くコイツを使えば、油を使った料理が出来る。

「……油かあ。丸焼き？ いや、違うな。油炒め……フライ、唐揚げ……」

熱々としたその物体は、じゅわじゅわと油の気泡で音を奏で、魅惑的な色と香りを放っている。ひとつ口にしてみれば、サクリとした衣に包まれた肉厚な味が口一杯に広がっていく——。

「……唐揚げッ!!」

瞬間俺は懐から閃光玉を取り出して、アルセルタスに向けて投げ付けた。

一瞬の静寂と共にその身を弾けさせ、辺りを強烈な光で包むこの道具。これは直接的にモンスターを傷付ける道具ではないが、空を飛ぶモンスターを叩き落とすには非常に有用なアイテムだ。事実、強烈な光で平衡感覚を狂わせたアルセルタスは、頼りない声

を上げながら墜落していた。大きな水飛沫が、虫に合わせて湧き上がる。

「よし、アルセルタスの……唐揚げだッ！ 今日晩はそれに決めた！」

もがく奴に向かつて走り、腰に備えた火属性の片手剣——イフリートマロウを抜き放つ。まるで炎を無理矢理固めたようなその刀身は、溢れんばかりの高熱を帯びている。さながら、素材となったりオレウスの吐息のようだった。

セルタス種は熱に弱い。属性的にいえば、火属性や雷属性を弱点とする。つまりこの武器は、奴らに好相性という訳だ。そんな片手剣に勢いよく斬り付けられ、訳も分からないままアルセルタスは悲鳴を上げた。

「おお、熱が甲殻を溶かすからサクサク斬れるな。……これは斬り過ぎると調理し辛くなりそうだし注意しないと」

突然の外敵に、アルセルタスは混乱する。しながらも、その発達した両腕を振るって俺を追い払おうとした。俺は転がって離れつつ、爆薬の準備。手取り早く片付けるなら、この戦法が一番だ。

鼻息荒く、俺をその複眼で睨むアルセルタス。奴に向けて、左手のイフリートマロウを挑発するように振り回すと、奴はその挑発に乗り始める。短気な奴だ。

カサコソと、昆虫らしい動きで急接近。その両腕を大きく振り被るもんだから、いつも以上に大きく見えた。

「おっと危ない！」

そうして振り回される腕を右手の盾で受け流し、俺はすれ違うように奴の背後に回り込む。

己の後ろに回り込まれば、自然と振り返ってしまうものだ。アルセルタスもその例外でなく、慌ててこちらを振り向いてきた。一方の俺は、既に準備した爆薬を振り被る。

「そらっ！」

瞬間、原生林に爆音が響く。それに伴うように、水が大きく弾け飛んだ。その轟音と衝撃に、辺りで鳴いていた鳥たちは飛び立ち、ズワロポスは驚いたように爆風から顔を逸らす。

そして爆心地となったアルセルタスは――。

「……………あれ？」

爆風をモロに浴びた直後だというのに。

なんと彼は、健気にも背中中の羽を唸らせていた。

「おお？ ……まさか、フェロモンか？」

臭いはしない。しかし、空气中を微かに漂う何かを感じられる。それも、セルタス種の雌がいる時に発せられる特徴的な違和感だ。つまりこれは。

「なるほど、奥さんに呼ばれたんだな……………っ！ くそっ、逃がすか！」

勢いよく突進をかます奴。その切っ先を転がり避けて、閃光玉を構えたもの——残念ながら、あの速度のまま逃げられた。

羽音が徐々に遠ざかっていく。見上げれば、崖を昇っては小さくなつていく奴の姿があった。

「……ちえ、逃げられた」

仕方がないので片手剣と閃光玉を収め、飛び行く奴をじつと見つめる。

フェロモンによつて呼ばれたということは、おそらくあの崖の上にゲネル・セルタスがいるということだ。つまり、俺も奴を追つて崖を登れば良い訳だが。

「……崖登り、めんどくさいなあ。先に油の準備でもするか」

やるせなく頭を掻きながら、取り敢えず一番近くにいるズワロポスに向けて、俺は再びフリートマロウを抜いた。



「……よし、こんなもんで良いかな」

それから十数分。

特に問題なく垂皮油を入手できた俺は、早速ベースキャンプに戻り調理の準備をして



いた。薬味成分溢れる、澄んだ油だ。美しいくらい上質な油だ。

それを大鍋に注ぎ、軽く蓋を閉めることで一時的に保管しておく。これでひとまず、油の用意は出来た。出来たものの、肝心のアルセルタス自体はまだ入手出来ていない。早く獲りに行かなければ。

「……あの腕と身の部分、それと羽か。その辺を揚げてみようかな？」

鋭く発達したその両腕は太く肉厚で、きつと豊富な栄養分が含まれているに違いない。あの身の中にも肉が詰まっているだろうし、薄い羽はきつと煎餅のようにパリパリとして美味しいのだろう。

いかんな。想像しただけだというのに、口の中でどんどん涎が溢れてくる。その勢いはロアルドロスの水ブレスにも対抗出来るほどだ。もちろん、比喩だけど。

——その時だった。

想像しては口角が上がっていくのを抑えられない俺の耳に、何やら騒がしいネコの声がか聞こえてくる。それと同時に、何かを走らせるような荒々しい音も。

その音の発生源——キャンプの入り口に視線を滑らせてみれば、あの小太りの弓使いがネコタクで運ばれてくる姿が映り込んできた。

「力尽きたのか？ おい、しっかりしろ！」

その男は氣を失っているようで、俺の声に反論することはない。ただ体中をポロポロ

にし、死んだように眠っている。

それにしても、彼は動機こそアレだがギルドマスターが同行を許可した上位ハンターだ。つまりある程度の実力を備えているはず。そんな彼を下したゲネル・セルタスは、もしや相当強いのか。それとも、彼自身がただ弱いだけなのか。

「……仕方ない。アルセルタスのついでに救援に行くか」

彼らの失態でクエスト失敗と判断されては堪らない。それで強制退却させられたのならば、俺のアルセルタス実食が月迅竜のように月隠れしてしまう。

後は熱するだけの油に。その油を静かに寝かす大鍋に。そしてただただその身に掛かった負荷のまま、気を失っている小太りハンターに背を向けて、俺は再び狩猟地に向けて歩き出した。



「……近い。やっぱあの崖の上か」

再び、ベースキャンプから飛び降りて。

先程の水源に降り立った俺は、アルセルタスを追うように奴が越えた崖を駆け上っていく。方向から察するに、恐らくこの先にいるのだろう。微かに漂ってくる虫特有の

酸っぱい刺激臭が、俺の予想を確信に変えていた。

「うわ、いたー！」

長い崖を登り終える。そうして、こつそりと目線だけで様子を窺えば、その高台の状況をあつさりと確認することが出来た。

息苦しそうに盾を構えるあのランサー。ただ静かに敵を見ながら、大剣の柄に手を添えるヒリエツタという女ハンター。エリアを飛び交うあの美味しそうなアルセルタスに、暴れ狂う女王、ゲネル・セルタス。

「アイツ……何か」

そのゲネル・セルタスの様子が、明らかにおかしかった。何故か口から黒い吐息が漏れている。

まさか、あのゲネル・セルタス——。

「……っ!! お前来るのがおせえんだよ! 相棒が力尽きただろうが!」

サツと崖から飛び出した俺に気付いたのか、ランサーは怒りに満ちた声で俺に怒鳴りつけてきた。あのゲネル・セルタスの脅威を感じ取っているのか、その口調には全く余裕がない。それと同時に、注意力もかなり散漫した様子だった。

「俺に何か言う暇があるなら、ガードに徹した方が良いぞ……って、前! 前!!」

「何——ぐあつ!!」

言わんこっちゃやない。俺の存在を意識し過ぎた彼は、突進してきたアルセルタスにガードを捲られ、そのままはね飛ばされた。

アルセルタス最大の特徴とも言える、その固く大きい立派な角。そんな凶器に弾き飛ばされた彼は、その勢いのままに身を宙に投げ出していく。

身動きがとれない無防備な彼に向けて。ゲネル・セルタスはその不気味な口から、これまた黒く濁った水流弾を撃ち放った。ロアルドロスとは比較にならない、圧倒的な激流の塊だ。

「……ヒュウ。なんちゅーコンビネーションだ」

腰に携えた小タル爆弾を手にとって。

彼を撃ち抜かんとするその水の塊に、危ういタイミングながらもそれをぶつけた。瞬間に凄まじい破裂音を放ったそれは、その爆風によって水の動きをかき乱し——果てには塊そのものを四散させる。

何とか彼に直撃するのだけは避けたものの、きつと彼ももう戦闘不能だろう。地面を力なく転がっていく様子が、それを如実に表していた。

それにしても。

「狂竜ウイルスか。どうしてこんなところに……」

「やっぱりあれは狂竜ウイルスなのね、納得だわ」

警戒しながら片手剣を抜刀する俺に対して、逆にその大剣を納刀した少女が話しかけてきた。余裕がある、という訳ではなさそうだが、焦った様子も見られない。冷静に頷く姿から、狩りに慣れていることが感じられる。

まあ、ジンオウガ亜種の狩猟を認められるほどの腕を持つ彼女だ。きつと、何度か狂竜ウイルスに遭遇しているのだろう。

「厄介だな。あれ色々と面倒なんだよな……」

「そうね、私たちにとつても危険だし、モンスタアの動きも分かり辛くなるし」

「……それもそうなんだが、それよりも」

俺にとつて、最大の死活問題。

それは、狂竜ウイルスに感染すると、その身の味を著しく劣化させてしまうことだ。一度感染してしまえば、そのウイルスがどんどん肉を蝕んでいき、終いにはとても食べたものじゃない肉となってしまう。ウイルス性腐肉症——俺はそう呼んでいる。

今感染しているのは、ゲネル・セルタスだけ。幸いなことに、アルセルタスはまだ感染していない。ならば、感染する前にアルセルタスを狩猟して、さつさと実食するのが望ましいだろう。ゲネル・セルタスの方は残念ながらもう食べることは出来ないが、仕方ない。今回はアルセルタスの方に集中しよう。

「……よし、ヒリエッタだったか？ 集中してあのデカブツを叩くぞ」

「分かったわ。……小蠅は無視する方向で？」

「ああ、虫だけにな」

作戦を提案すると、意外にも彼女はあっさり乗り掛かってくれた。何故か俺に冷ややかな視線を向けてくる、という条件付きだが。

まあ、そんなことはどうでも良い。なるべく早く、現状邪魔でしかないゲネル・セルタスを狩猟して——アルセルタスの実食だ！

く本日のレシピく

『キャビアたっぷりヘブンブレッド』

- ・ヘブンブレッド ……1個
- ・ピンクキャビア ……90g
- ・氷海オイスターソース ……お好みに
- ・氷海塩 ……適量

## 煮ても駄目なら揚げてみる

徹甲虫アルセルタス。

俺ですら未開の地である甲虫種の味。

大失敗に終わったという酔狂な美食家の前例を踏まえて、俺は自らが満足出来る味を作りだしてみたい。そんなこんなで選んだ『唐揚げ』という調理法。甲虫種ならではの固さの下には、一体どのような味が詰まっているのだろうか？ カラッと揚げれば、じっくりと油が染み込ませた肉が黄金色に輝いているに違いない。

「……じゅるり」

「……どうしたの？」

だが、そうゆっくりはしてられない。

美味しそうなアルセルタスを呼び寄せた、暴虐の女王、ゲネル・セルタス。彼女はあろうことか、狂竜ウイルスに感染していたのだ。狂竜ウイルスはその見た目を見れば一目瞭然だが、感染源の肉を舐んで劣化させてしまう。

本来ならば美味しいモンスターも、感染した途端にゆっくり不味くなってしまおうので

ある。つまりモタモタしていたら、アルセルタスまでウイルスに蝕まれて、俺の唐揚げ計画は、月迅竜の如く霧散してしまうのだ。

「やばいな。急がないと……」

「う、うん？　そ、そうね……」

理解出来ているのかいないのかよく分からないが、ジンオウガ亜種装備に身を包む少女——ヒリエッタが不可解な相槌を打った。

そんな彼女が持つ大剣、煌剣リオレウス。火属性を帯びたこの強力な大剣は、セルタス種の熱の弱さを突けるためこの上ないほど頼もしい。彼女の力があれば、きつとあの邪魔なゲネル・セルタスを早く討伐することが出来るだろう。

「よし、行くか！」

そうと分かれば善は急げだ。

エリアの隅に置いておいた大タル爆弾。それに巻き付けられたベルトを右手で掴み、どすりと肩に担いだ。そんな重しも無視して、全力疾走でゲネル・セルタスとの距離を詰めていく。

一方のアルセルタスは、この恐ろしい妻を守るために粘液を幾つも射出し始めた。黄色く粘ついたその粘液。一つ一つの速度は大したことないが、範囲は広い。さらに、液体であるため着弾時に飛び散ってしまう。そのため俺は、やや大振りな回避を強いられ



た。

「ちっ、鬱陶しいわ!」

煩わしい羽虫のために、懐から取り出した閃光玉を炸裂させる。

一瞬で原生林を包む強烈な閃光。目を眩ませたアルセルタスは、奇声を上げながら再び地に墜ちた。

「閃光するなら、先に言つてよね!」

ヒリエツタは大きく迂回する形でゲネル・セルタスに回り込み、俺に悪態をつきながらもその大剣を力任せに振り下ろす。強烈な威力と剣が帯びる高熱に、ゲネル・セルタスは苦しそうな声を上げながら体勢を崩した。

「敵を騙すならまず味方からつてな!」

「別に騙しじゃない……じゃんっ!」

鬱陶しい羽虫が地に墜ちた今、俺の邪魔をする奴はこの跪いたゲネル・セルタスだけだ。そんな邪魔者にはさっさと退場してもらいたい。

一方のヒリエツタは、俺にツツコみを入れながらも冷静に大剣を振り回していた。俺が抜刀攻撃を仕掛けるまでに、強溜め斬りを踏み込み始め――。

「はあっ!」

大剣の重みを生かした最大の溜め攻撃。

それが炸裂し、ゲネル・セルタスの固い甲殻を大きく斬り裂いた。熱に弱い甲殻を、剣が宿す属性で溶かしているのだろう。俺のイフリートマロウも、容易に奴の甲殻を剥がしていく。燃え盛る火炎に、奴の内皮は痛々しく爛れていった。

だが、当然奴も無抵抗ではない。俺たちを追い払おうとしたのか、その発達した尾で自らの周囲を薙ぎ払い始めたのだった。

「おお！ 暴れてんなあコイツ！」

「変なこと言っていないで回避しなさいよ!？」

横に転がって避けたヒリエツタ。

そうして開けた距離と、安全を考慮してだろうか。彼女は冷静に大剣を背に収め、ゲネル・セルタスの動向を窺い始めた。

一方の俺は、ゲネル・セルタスの長い尾を踏み台にして、跳んだ。そのまま奴の上を陣取って、そつと右手の力を抜いた。するりとベルトが抜け落ちて、そのまま爆弾が舞い降りる。その拍子に、安全装置のピンが抜けた。

「ッ!?! 何を……」

「ドカン!」

落ちる爆弾。奴が反応する、その一瞬。

奴のどてつばらの下に転がり込んだそれが、起爆する。いきなり腹の下で爆発が起こ

れば、誰だつて驚くだろう。ましてや大タル爆弾なら尚更だ。

背後に感じる熱と、強い爆風。さつと右手の盾を背に構え、身を守りながら風に乗る。煽られるようにして飛距離を稼ぎ、奴との距離をとった。

「何て無茶な戦法よ……!?!」

「気にするな! ほら、次が来るぞ」

ヒリエツタは唾然と口を半開きにする。その一方で、爆風をモロに受けたゲネル・セルタスは鼻息を荒げ、地団太を踏み始めた。いや、怒りに我を忘れているという表現の方が適切だろうか。

そんな奴を気遣うように、何とか起き上がったであろうアルセルタスはゆっくり飛んで近づいてくる。しかし非情にも、ゲネル・セルタスはその凶悪な尾の鋏を構え、謎の液体を滴らせた。

「……あれは、フェロモンね。面倒だわ……」

「まずい! アルセルタス……ッ!」

余り近づけさせると、ウイルス感染のリスクが高まる。そうなれば、俺のアルセルタス実食は叶わぬ夢になってしまう。そんなこと、認めるわけにはいかない。

極太の尾が、アルセルタスを拘束しようと大きく鋏を唸らせた。彼に迫るその危険から彼を守るため、俺は急いで感染源の女王に向けて走り込むのだが。

「つちー！」

健気にも、それを阻止しようと、アルセルタスは俺に突進を仕掛けてきた。

先程ナンパンサーを吹っ飛ばしたあの鋭利な角。それが俺の目前まで迫ってきており、慌てて突き出した右手の盾で、何とか角を弾き飛ばす。

——それが悪手だった。

「ギイイツ!?!」

金属と金属が擦れるような音——いや、違う。固い甲殻に鋭い鋏が喰い込む音だ。

俺が慌てて放ったシールドバツシユで、思わず奴が怯んでしまい、その隙を狙ったかのようにゲネル・セルタスは動いた。その醜悪な鋏が、彼を乱雑に掴んだのだ。

そしてそのまま、もがく彼に向けて滴る不気味な液体を染み込ませていく。

「てめっ！　そいつを離せ！」

小タル爆弾とイフリートマロウの斬撃でゲネル・セルタスの動きを止めようと試みたものの、現実はいつも無情。

まるで憑り付かれたように生気のない瞳を輝かせ、アルセルタスはゲネル・セルタスの背に飛び乗ってしまう。俗にいう、合体に至ってしまったことで、俺の努力は虚しくも水の泡と成り果てたのだった。

「くっそ、この虫アマが……！」

マズい。

非常にマズい。

何がマズいって、俺にとっての最大の危機が今顔を出しているのだ。アルセルタスとゲネル・セルタスが直接的に触れているということは、感染の危険性が今非常に高まっている。このままでは、アルセルタスが狂竜症を発症させるのも時間の問題だ。早く二人の仲を切り裂かなければならない。

「下がって！ 突進が来るわ！」

思わず懐に潜り込もうとした俺を、ヒリエッタの声が引き止める。

見れば俺を轢き殺そうと、突進の構えをとるゲネル・セルタスの姿が。ご丁寧にアルセルタスの勇ましい角を地面擦れ擦れまで近づけ、より確実に俺を仕留めようとしている。

「くっそ……！」

地面を抉る、豪快な突進。それもただ一直線に走るのではなく、大きくドリフトを重ねる荒々しい突進だった。

もちろん俺は、それにむぎむぎ轢き殺されるような真似をしない。しないのだが、回避ばかり強いられることになる。それは非常に癪でもあるし、狩猟が長引いてしまう。今は一分一秒でも早く奴らを引き離さなければならぬというのに。

——仕方ない、罨を使わせてもらおうか。

「ヒリエツタ！ 俺が隙を作るから、お前は溜め斬りの準備しとけ！」

「何？ 命令？ アンタ何様よ？」

「あー？ やる気ないなら別に聞かなくて良いぞ」

駆け抜けるあの巨体を躲した俺は、片手剣の柄を勢いよく噛む。

口で剣を掴んで空けた両腕。フリーになったそれらでポーチからシビレ罨を取り出し、勢いよく地面に押し付ける。

その衝撃で、中に潜む雷光虫は自己防衛本能を働かせた。そう、放電だ。それが罨の電気回路で増幅されていき、苛烈なスパークを弾けさせる。敵がUターンを決めてこちらに向かってくる頃には、もう準備完了だ。

「ギユアッ!」

その凄まじい脚の力に、踏まれたシビレ罨は破損してしまいかねない。しかしそんな心配は杞憂だった。案外あっさり、仕込まれたシビレ針は甲殻に穴を開け、女帝の凶行を停止させたのだ。

全身に回る電気ショックに、ゲネル・セルタスは体を震わせながらも困惑する。同時に急停止させられたことで、慣性に乗って吹き飛ばされたアルセルタスは、勢いよく全身を地面と擦らせた。

「よっしー！」

「仕方ないから頼まれてやるわよー！」

動きを止めたゲネル・セルタスの元へ、ヒリエツタはその大剣に手を伸ばしながら駆け寄った。

その重さ故に取り回しと連撃性に優れない大剣だが、威力だけははずば抜けている。それが動けない相手に炸裂した暁には、その被害は計り知れない。

「はあああつ!!」

彼女の鋭い溜め斬りがあの太い脚を斬り裂いていく。同時に発する高熱が割れた甲殻を軟化させ、続く大剣のコンボをさらに苛烈にしていた。一方の俺は、適当に爆弾をぶつけてから、足早に吹っ飛んでいったアルセルタスにターゲットを切り替える。

狂竜ウイルスは生きている生物を蝕んでいく。逆に言えば、死んでいるものに対しては大した害を与えることが出来ないのだ。

だから今の最善手は——奴が発症する前に仕留める。これだろう。

「取り敢えず、その邪魔な角を貰おうか！」

常時赤熱化しているこのイフリートマロウを、アルセルタスの角に向けて振り回す。

縦斬り、横斬り、逆袈裟斬り。そしてとどめのシールドバツシュ。リオレウスの甲殻と鋭い棘で作られたこの盾の一撃が、ものの見事に奴の鋭い頭を粉碎した。固い甲殻が

細かな欠片となり、それが宙を舞う。

「ギイイ……」

自らの象徴とも言えるものが、粉々に砕かれたのだ。彼のシヨックは、言い様もないほど酷いものかもしれない。だがまあ、お前はこれから俺の胃袋に収まるんだ。これくらいどうってことないだろう？

そんな思いを乗せて刃を滑らせると、アルセルタスは必至の形相で起き上がり、何とかその熱から身を遠ざけた。

「ちよつとー。 そんな奴よりこつちを手伝いなさいよー」

俺の背後から、糾弾するような甲高い声が響く。

何とか痺れを克服したであろうゲネル・セルタスが暴れ回り、湧き起こす暴力の嵐をヒリエツタは大剣を盾にして凌いでいた。

暴れる本人ならぬ本虫は鼻息荒く、それと同時に疲労の色もチラつかせている。そうして一心に俺を——いや違う、俺の背後で唸るアルセルタスを見続けている。

「……っ！ まさかあいつ、旦那を喰う気か!？」

思わず漏れたその叫びに反応するように、女帝はその逞しい脚を奮ってアルセルタスに近付いてきた。間に立つ俺は全く眼中になく、ただ一心に、地を這う虫を睨んでいる。アルセルタスは、まるで蛇に睨まれた蛙のように身を竦ませていた。迫る死の足音に



怯えているのだろうか。

女帝は尾に付いた鍔をガチガチと鳴らす。死神の鎌のように、愛する旦那へと振りかざした。

「させるかっ！ うらっ！」

閃光、そして衝撃波。

女王の凶行を、さらに凶悪な大タル爆弾Gが悠然と阻む。分かりやすく言えば、彼女の目前まで転がしたロープ付き爆弾二個を、石ころで炸裂させたのだ。その圧倒的な衝撃にゲネル・セルタスは思わず後退し、悲鳴を上げる。剣をも弾く凶悪な顎は、爆風で吹き飛んでいた。

同時にアルセルタスもまた、その体重の軽さ故に吹き飛ばされ、またもや地面に身を擦らせる。何というか、とにかく不憫だ。

「な、な……なんて無茶を……!?!」

わなわなと肩を震わせるヒリエツタは、俺を非難しようとしてか口を動かそうとする。

しかし上手く言葉が出ないらしく、ただ下顎を震わせていた。こっそり爆弾を、いくつかこのエリアに置いていたけれど。伝えておけば良かったかな。

「別に何でも無い、それよりも」

彼女の声を適当に受け流しながら、モロに爆風を受けたゲネル・セルタスの方へ目を向ける。

爆発の衝撃の影響か、彼女は混乱しているようだった。そうして、焦ったように地面を掘り始める。

「……え、エリア移動かしら……？」

「みたいだな。……さて、あとは」

その巨体で地面を盛り上げながら、西に向かって進み始める雌虫は無視。それよりも、爆破の影響で転がっているアルセルタスだ。

手足をジタバタとさせながら奇妙な声を上げる奴。彼も爆風で混乱しているのかもしれない。

「あいつを料理するだけだな！」

「えっ——ちよっ……ええっ!？」

嬉々としてアルセルタスに突撃する俺に、ヒリエツタが驚いたような声を上げた。見れば、ゲネル・セルタスが移動したエリアの方に指を向けている。まるで敵はあちらだと言わんばかりに。

しかし、俺はそんなものは完全無視。剣と盾を織り交ぜた連続攻撃をアルセルタスに叩き込んだ。それに悲鳴を上げて、彼が必死に両腕を振るい始めたから、俺はガードの

反動で引き下がり、ポーチから小タル爆弾を取り出した。

「ギギイ……………」

一方のアルセルタスは、自分を呼び寄せた雌の姿が見えないことに気付いたのか、しきりに辺りを見渡し始めた。そうして漂うフェロモンを追い、背中の逞しい羽を唸らせ始める。

「料理中に席を立つのはいただけじゃない！」

そんな彼を諫めるように、俺は爆弾を投げつけた。

奴が浮き上がったタイミングで起爆した小さなタル。それが奴の薄い羽を、根元から弾き飛ばす。再び襲い来るその衝撃に、奴は思わず体勢を崩した。

本日三度目の地面との擦れ合い。

あまりにも不憫なその様子に、ヒリエツタは思わず顔を覆い、俺は滑る奴に駆け寄ってとどめの一閃を放った。横薙ぎに放ったその熱を帯びた斬撃が、確実に彼の節と神経を破壊する。

かつてないほど苦しそうな声を漏らし、アルセルタスは静かに絶命を迎えた。昆虫の節の影響か、手足を痙攣させながら。

「よし。狩猟完了〜」

「……………アンタ、容赦ないわね……………」



そんなこんなで、取り敢えずアルセルタスとはいえ狩猟は完了したのだ。

俺とヒリエッタはひとまず彼の剥ぎ取りを行うことにした。俺が欲しいのは、この大きな腕と、そして身や羽だ。

ゲネル・セルタスと接触した部分は、食べられないと判断した方が良くかもしれない。直に触れていたのだ。ウイルスが行き渡っていない方がおかしいだろう。

ということ、俺は腕と羽を剥ぎ取った。なるべく安全に食べることが出来る部位。他にも食べることが出来るような腹の中は、生憎モンスターの濃汁だらけでとても食べられそうではなかった。非常に残念だ。

まあ考えてみれば、あんなに液体を放出させるのだから、当然と言えば当然なのだが。「おーい！ ヒリエッタさんー！」

俺の横で丁寧に剥ぎ取りを行うこの少女に向けた、何やら騒がしい男の声が森の中で響く。

そちらの方へ振り向いてみれば、先程ダウンしてベースキャンプに運び込まれたあの男二人が駆け寄ってきていた。

「だ、大丈夫かい？ 俺たちが来たからにはもう安心だ！」

「おうよ！ 先程は少し油断したただけだし、次はしっかり君を守ろう！」

「……そ、そう……」

目の前まで来るや否や、まるで誓い立てるような素振りです二人は声を張り上げる。その様子に少し引きながら、彼女は小さく「ブレないわね……」と呟いた。

彼女の言う通り、本当にブレない。彼女の横にいる俺も、またもや完全無視と決め込んでいるようだ。ちよつと納得はいかないが、これからの予定で考えればかえって好都合かもしれない。

さて、この二人が来たならもう良いだろう。

「……じゃ、俺はベースキャンプに戻ってるから。あとよろしく」

「えっなんで！ メインターゲットはまだ向こうにいるのよ!？」

剥ぎ取った素材をポーチに詰めながらそう言うと、ヒリエツタは動揺した声を上げる。俺に狩猟を続行しろという主張。それを身振り手振りを織り交ぜて訴え続けるのだが。

一方の俺はあの小太り弓使いの男を指差して、冷やかに反論した。

「だって俺はこいつに頼まれたじゃん？ アルセルタスを倒しとけて。んでそれはもう終わったから、俺は御役御免だろ？」

その言葉にあの弓使いは何か反論しようと口を開け——たのだが、ヒリエツタに鋭く睨まれ、どうしようもなさそうに肩を竦めた。ランサーの男も何かフォローしようとしたようだが、彼女の気迫に圧されて何も言えないようだった。

そんな冷えた雰囲気の中、三人を横目に、俺は歩き出す。それに気付いたヒリエツタは再び何か言いかけたが。

それが届く前に、階下のエリア3に向けて俺は跳んだ。

「……さてと」

ベースキャンプでは、猟場とは打って変わって落ちて着いた雰囲気の流れていた。

先程去った時のまま、油の用意は完了している。それでは、早速調理にとりかかるとするか。取り敢えずキャンプに置かれている底の深い鍋と、ハチミツやら調味料やらを用意して、と。

「まずは甲殻を剥がすかね」

剥ぎ取ったアルセルタスの太い腕。そこへイフリートマロウを翳し、その刀身から漏れ出る熱を直に浴びせていく。

元々は固いこの甲殻だが、熱には弱いためこの通り少し熱しただけで甲殻が溶け、強度が弱まる。しかれば、甲殻の隙間に剥ぎ取りナイフを忍ばせ、両端を剥がすのだ。これによって甲殻の一面が剥がれ、中の身が露わになる。

「おお！ 薄ピンク色のぷりっぷり！」

触れれば、弾力のある手触りを残してきた。やはりここにはウイルスは届いていない。活力に満ちた感触だ。

身と甲殻の結合部に、ゆっくり指を這わせる。そのままぶちぶちと、繋ぎ目を剥がしていけば。

「二丁上がり。……なんていうか、剥き海老みたいだ」

そう。海老の殻を剥いて身を取り出すあの作業。この行程は、あれに酷似している。固い殻の下の身は思った以上に弾力性があり、汁を抜けば全然食べれそうな見た目だった。想像ではもう少し筋張っているものかと思っていたが、よく動かすだけに他の部位より締まっているのだろうか。

「それではこれを、大きさを整えつつ切り分けて……」

食材に通る火の強さを整える。ムラが出ないように大きさを均一に切り揃えるのは、基本中の基本だ。

さらにワンポイントとして、手持ちの串で切り分けた身に少しずつ穴を開けていく。

こうすることで味がよく染み込むようになるのだ。

普段ならイルルに話し掛けながら進めるのだが、生憎今日は一人。少し物足りない。

「よし、ではこれに……あつた、このハチミツを揉み込もう」

普段からハンターに重宝されるこのハチミツ。実はこれには、回復薬グレート以外にも有用な使い方ががある。それがこれ。下味付けだ。ハチミツは何も、甘みを付けるだけではない。他にも、料理するに当たって非常に有用な特徴があるのだ。

まず一つ。ハチミツを揉み込ませた肉は、味の染み込みを促進させる。味の吸収がハチミツの有無によって大きく変わるのだ。それこそ、昆布出汁をとったスープがそうではないスープとは深みが段違いというくらいに。

そしてもう一つ。旨みを閉じ込める。いつぞやに話した肉の焼き方のように、ハチミツを染み込ませると、そこに味を留めさせる効果もあるのだ。

より多く味を吸収し、それをじっくりと肉に染み込ませる——これがハチミツの真骨頂なのである。

「……そうして出来たハチミツ入りアルセルタスの肉に、追加の下味をつと」

ハチミツを揉み込んだのならば、次の段階だ。

ハチミツだけでは甘くなってしまうので、唐揚げらしく塩味のあるものにしなければならぬ。まず雑貨屋で購入した生姜をまぶし、次に料理酒を注ぐ。あとはしようゆと



塩を加えて数分寝かしておこう。

「一人で淡々とこなすのは、何か寂しいよなあ。帰ったらイルルをもふりたい」

そんなことを思いつつ、剥ぎ取ったアルセルタスの羽をポーチから取り出す。

思ったより厚みのあるそれは、軽く力を加えただけでも折れてしまいそうな印象だ。これは、形を整えれば食べられそうだな。きつと揚げ煎餅のような感じになるのではないだろうか？

「それじゃ、羽を切り分けつつ衣の準備もしようかな！」

「……………これでよし。油もしつかり熱したし」

丁寧に切り分けた羽に、しつかり味を染み込ませた腕の肉に。

片栗粉を満遍なくまぶしたことで、残るはこの茹った油に落とすだけとなった。煮える油に菜箸を入れてみれば、箸の先端から気泡がゆつくりと顔を出す。

「……………ざつと百七十度ほどか？ これなら大丈夫だろ」

唐揚げを行うには丁度良い温度。そんな油の中に、一つずつ肉や羽を落としていけば、パチパチと油が跳ね始める。その小気味良い音と鼻をくすぐる油の香りに、俺の心も不思議と跳ね始めた。

汁を抜いたおかげか、香りもそこまで悪くなく、むしろ染み込ませたハチミツや生姜の香りが強い。何とも香ばしい香りだ。

「……揚げ始めは、なるべく弄らずに衣を固めさせてっ」と

無数の泡を生み出すそれらを見つめながら、油によって衣が定着するのをじつと待つ。

すると唐揚げの一つ一つが、ゆつくりと沈み始めた。溢れ出す気泡も心なしか大きく、徐々に透明な油の中に潜っていく。

「む、何か良い香りがするな……」

「……本当、一体何が」

丁度その時だ。ここから揚げものの勝負だというのに、まるで乱入モンスターのように、あのハンターたちが帰還してきた。

ポーチに入り切らない素材を、手で持ち運んでいるということは、無事ゲネル・セルタスを討伐することが出来たようだ。そういえば、さつきクエスト完了を知らせる笛が鳴り響いていたかもしれない。

そんな考察をする俺の一方で、訝しむようにキャンプを覗いたヒリエッタ。彼女は、調理中の俺を確認するや否や甲高い声を上げた。

「……あつ!? あんた!? こんなとこで何を……ほ、本当に何してるのよっ!」

「うるさい、今調理中なんだ。静かにしてくれ」

唐揚げの揚げ具合の見極め。

それは目で気泡の具合——詳しくは気泡が小さくなっているか——をよく見ることで。そして、揚がる音が高音になっているかどうかを耳でしっかり確かめることだ。

より良い味に仕立てあげるのなら、それ相応に集中して見極めなければならぬというのに、それをこの乱入者たちに邪魔されてしまつては堪つたもんじゃない。

「……む、今だ!」

気泡が徐々に小さくなるそれを菜箸で掴むと、そこから微かな振動が伝わってくる。これは、食材の中の油と水分が交換されている証。丁度これくらいが良いところだろう。

一方、男たちは不審そう鍋を覗き込み、俺が掴まむ唐揚げを不思議そうに見つめた。

「……何だこれ、唐揚げか?」

「おい、まさかとは思うが、後ろに散らばつてる甲殻つて……」

「まさかも何も、アルセルタスのだけだ」

男たちは、まるでモニターを見るかのように畏怖を込めた瞳で俺を捉え、ヒリエツタは唾然としながら俺と唐揚げを交互に見た。そんな彼女に適当に頷いてから、残りの良さそうな唐揚げを油から上げていく。

「よし、後は温度を少し上げて……二度揚げだ」



「正気の沙汰じゃないわ。これを食べようと思うかしら？ 普通……」

呆れかえったヒリエツタがどうしようもないと言わんばかりに首を横に振ってそうぼやいた。ランサー男と小太り弓使いは彼女に同調するようにしきりに首を縦に動かす。

まあそんなことはどうでも良い。今重要なのは、アルセルタスの唐揚げが無事揚がったという事実だけだ。

「……よし、完成！」

「……聞いてないし、はあ……」

出来上がったものを、油取り紙を敷いた皿に盛りつけていく。腕の中の身は油を滴らせ、それが反射させる太陽の光が眩しかった。

羽の唐揚げは揚げ煎餅のようと言えそうだが、一般に知られている揚げ煎餅よりは薄い。どちらかといえば女帝エビ煎餅のそれに近いな。

メインとなる腕の方の印象は、とてもアルセルタスの肉とは思えない、と言ったとこ

ろだろうか。弾力性のあるその肉は、やはり海老を思わせる。放つ香りも相まってとても美味しそうだ。

「それじゃ、いただきまーす」

「ほ、ほんとに食べる気だぞアイツ……!」

箸で摘まんだそれは、まだほんの微かに震えていた。箸越しに伝わる感触は少し柔らかく、アルセルタスの固いイメージとは程遠い。

そんな一風変わった唐揚げを、そつと頬張ってみる。それと同時にランサーの男は悲鳴のような声を上げ、弓使いは顔を覆った。同時に目を丸くさせるヒリエッタに見守られるまま、ゆっくりと口の中のそいつを咀嚼する。

「……………これは……………っ!」

カリツとした衣。そこから染み出るズワロボスのあつさりとした油の風味。そしてそれらに包まれたアルセルタスの身。

甲虫種と甲殻種は、生物学的に近いのかもしれない。そんな何処かで聞いた一説を裏付けるかの如く、その身は菌応えのある弾力とどこか淡泊な味を秘めていた。噛めば噛むほど繊維を解いていくその身からは、濃汁の風味は若干残るものの、あつさりとした味が生姜やしょうゆの香りを含んでいる。噛み続ければ、ハチミツのほんのり甘い香りも顔を出してきた。

「おお、美味しいな！ 凄いでこれ……！」

「……お、美味しいの？」

俺が美味そうに食べる様子に感化されたのか、ヒリエツタが興味深そうにそう問い掛けてくる。そんな彼女の細い首は、ごくりと飲み込んだ涎で上下した。

「……食べてみるか？ ほら、お前らも突っ立ってないで」

盛り付けた皿を彼女や後ろの男たちに向けて突き出すと、どうやら彼らも満更ではないようだ。この魅惑的な唐揚げを食い入るように見つめ始める。

考えてみれば、狩りというのは腹が空くものだ。ましてや今は、無事狩猟完了したという状況。安心感が食欲を促進させるのも無理はない。

「い、いただきます……」

パリパリとした歯触りが愉快なこの羽揚げ。それを頬張りながら彼女たちの様子を見ていると、ヒリエツタが唐揚げを掴まんで口に入れた。それを皮切りに、男たちもおおずと食べ始める。

始めこそ不安そうに咀嚼していた彼女らだが、それも一転。目を見開いて、この深い味を認知した。

「……う、うっそ!? お、美味しい? これ……美味しい!」

「は、歯応えめっちゃ良い……! 味もあっさりしててすげえ……!」

「羽も良いぞ！。パリパリしてて、まるで煎餅みたいだ！」

嬉々とした表情で食べ始める彼らの様子に、俺は思わず頬を緩ませてしまった。はじめは理解されなかったこの行為も、ここまでの共感を得ることが出来たというのなら、下剋上を果たせたもんだ。それも、随分と手の込んだもの下剋上を。

カラッと揚げたそれは、外はパリパリだ。しかし中は、ジューシーな噛みごたえとあつさりとした旨味を持つ。うーん、レモンとか持つて来たらもつと良かったかもしれない。

「ね、ねえ、えつと……」

「ん。ああ、シガレットだ。何だ？」

「シガレット、凄く美味しいよ……これ」

もう既に三個目に突入したヒリエツタが感慨深そうにそう言えば、その美味しさを表現するかのように幸せそうに息を吐いた。

一方でランスを担いでいた男は、興味深そうに唐揚げを見ては俺に話し掛けてくる。

「なあ、何で二度揚げしたんだ？ あれには一体どんな意味が？」

「ん、それはこのパリツとした感触のためだよ」

この二回に分けられた揚げ方。それをざっと説明すると、第一段階はまず中までじっくり火を通すために行っている。中火で熱することによって、中まで温め衣を定着させ

るのだ。そして第二段階にて高温でサツと揚げる。これによって、カリツとした衣が出来上がるという訳だ。

その説明に、弓使いの男は感嘆の声を上げて唐揚げを見る。どうやらこの揚げ具合が相当お気に召したらしい。

「……いや、何か凄いなお前。これ店に出したら売れるぞきつと」

「そうだな……。どこの店もアルセルタス料理は扱ってないからな。ゲテモノ食で売れるかもしれないぞ」

検討してみる価値はありそうだなあその話。

だが、その前にあの爺さん——酔狂な美食家に、報告と自慢をまずしなければならぬ。そしてアルセルタスは食べることが出来る、という概念を植え付けてやらなければ。

そんなことを画策していると、ヒリエッタが困ったようにはにかみながら俺に話を振ってきた。

「……そうか、アンタがあんなに焦ってたのはこのためね？　早く食べたかったからでしょ。」

「おうよ。ウイルス感染を阻止しなきゃ食べなかつたし」

「へ？　ど、どういうことだ……？」



「だから、ウイルスに感染したら食べたもんじゃないってことだよ」

狂竜ウイルスに感染した個体の味は著しく悪化する。そうなれば、いくら美味しいアルセルタスでも食べることは出来なくなるのだ。だから今回は直に触れてしまった部分は泣く泣く諦め、腕と羽しか食べることが出来なかったが。

しかし全身を食べることはどうやら出来ない、剥ぎ取りしてみた様子や酔狂な美食家の話から擦している。これもまた、結果オーライという奴だろうか？

「食べたもんじゃないって……食ったことあるのかよ？」

「ああ。すつげー不味いぞ、アレ」

先程までやや険悪な雰囲気だったこの四人パーティも、今はみんなで仲良く料理を囲っては笑顔で唐揚げを頬張っている。ランサーや弓使いも俺を邪険にするでもなく、ヒリエツタという少女も先程までの寡黙そうな雰囲気とは一転、楽しそうに顎を動かしていた。

これが——これこそが食の真骨頂だ。人の気持ちも、その場の雰囲気も、全てひとまとめにして包み込む寛容さ。

それこそが食事本来のあり方だと、俺は思っている。

く本日のレシピく

『アルセルタスの唐揚げ』

・ 徹甲虫の腕	…… 160 g
・ 徹甲虫の羽	…… 20 g (1枚)
・ 垂皮油	…… 600 ml
・ ハチミツ	…… 少量
・ 生姜 (霊峰産)	…… 適量
・ 料理酒	…… 大さじ2杯
・ 塩	…… 適量
・ しょうゆ	…… 大さじ3杯
・ 片栗粉	…… 適量

## 憂うネコは空を見上げる

「……にゃ〜」

青く澄み切った空に、照りつける太陽。

黄色ともとれる色に染まった砂浜がこじんまりと浮くこの『ぼかぼか島』にボク——  
イルルは来ていたにゃ。

ボクの旦那さんが、何やらギルドマスター直々にクエストを言い渡されてしまったからとかで、四人で狩りに行っちゃったの。そうなれば当然オトモであるボクはついていけないから、暇潰しのようにこのぼかぼか島に遊びに来てるのだ。

旦那さんが向かったのは原生林。そこはこのぼかぼか島付近の村、チコ村に隣接する狩猟地ということでは実はとっても近くにある。だからボクは別ルートを使ってここで旦那さんをお迎えしようという腹だったりする。どんなルートかと言われたら、それはアイルーだけの秘密、にゃ。

ここで合流することは両者確認済みだから、ボクは旦那さんを待つばかりなのだ。入れ違いの心配は無用にゃ。

「暇にや。考えてみれば一体いつクエスト終わるのかにや……う？」

「あのハンターさんならさつと済ますんじゃないですかニヤ？ きつともうすぐですわニヤ」

何となくぼやいていたら、後ろから飛んできた声がボクの耳に入ってきた。

振り向いてみれば、せつせと箒を動かすアイルーの姿があった。ピンク色のエプロンにバンダナと、姉御肌を垣間見せるアイルー。このぼかぼか島の管理人さんだ。

「でも旦那さん、帰りによく寄り道するにや。だから何とも……」

「そうなのニヤ？ 自由なハンターさんですニヤ。イルルちゃん、彼のことをよく知ってるんですのニヤ？」

「……まあ、大分長いことオトモしてるから……にや」

ボクと管理人さんは何も初対面でもなく、随分前からの知り合いにや。昔ボクが紆余曲折あって、このぼかぼか島に流れ着いた時からお世話になってるんだにや。ボクにとつてはお姉ちゃんみたいな感じの存在にや。

ついでに、ボクに氷海でスカウト待ち出来るように斡旋してくれたのも彼女だった。アイルーのスカウト待ちには、アイルー間での順番があつたりするんだにや。

「実際どう？ 仲良くやれてるニヤ？」

「うーん、旦那さん色々勝手な人だけど……ボクには優しいにや」

「ご飯にこだわりすぎるあまり、何回呆れさせられただろう？ 何回クエストを棒に振っただろう？ ハンターとしてはどうかと思う人だけど、それでいてボクには結構優しかったりする。」

ボクをスカウトしてくれて、優しく迎え入れてくれて。美味しいご飯や温かい寝床を与えてくれて。ボクが寂しくて眠れない夜は、そっと抱き寄せてくれて――。

ダメにや、考えていたら旦那さんが恋しくなってきたにや。

「本当？ 酷いことされてないかしらニヤ？」

「……美味しそうとは言われたけど……大丈夫にや」

「ニヤツ!? 美味しそうっ!?!」

その言葉に管理人さんは驚いて跳び上がって――あ、折角集めたゴミが飛び散ったにや。砂も舞い上がっちゃって、これは掃除し直すのを避けられないにや。

なんて考えながらその様子をボーっと見ていたら、管理人さんが凄い勢いでボクに問い詰めてきた。

「そ、それ！ 大丈夫なのニヤ!? イルルちゃんほんとは辛いんじゃないのニヤ!? ど、どこかに噛まれた痕とか……!!」

「だ、大丈夫にや。言われただけだし噛んだりなんて……」

あ、そういえば。この前じゃれてたら、耳を甘噛みされたような気がするにや。まあ、

痛くないから別に良いんだけど。これ言ったら管理人さんが益々荒ぶりそうだから、黙っておいの方が良いかな？

「管理人さんは心配し過ぎにや〜」

「だ、だって、イルルちゃんの身の上を知ってるから……私……」

「にやあ。管理人さんは優しいにや。旦那さんと同じくらい優しいのにや」

悲しそうに目を伏せる管理人さん。そんな彼女の仕草が何だかくすぐつたい。ボクのことをいつも考えてくれるその姿勢は、旦那さんとどこか似ていて、一緒にいると何だか安心する。

それにしても、身の上かあ。ボクがこのぼかぼか島に流れ着く前の話だにや。それも今とは全然違うハンターさんにオトモとしてついていた。

「……ボクは今の生活に満足してるにや。心配しなくても大丈夫にや」

「で、でも……うう……。こ、こうなったら帰ってきたハンターさんに直談判ですわニヤ！」

何やら喝を入れるように肉球で頬を叩いて、管理人さんはチコ村の方へ行ってしまうにや。

これは旦那さん、帰ってきたらネコパンチされるかもしれない。別に旦那さんが悪い訳じゃないし、管理人さんが悪い訳でもないけど。でも管理人さん、心配性だしにやあ。

「……あ、あのイルル、さん」

「にゃ?」

とてとてと走っていく管理人さんを見つめていれば、何やらボクに話しかけてくるアイルーの姿が。

弱々しく垂れ下がった耳に、自信がなさそうにボクを見る大きな瞳。いつもはチコ村の浜辺でウロウロしている臆病なアイルー、ニコだ。今日は珍しくほかほか島にまで訪れているみたい。正直、ボクに話しかけてくるのも珍しい。

「どうしたのにゃ?」

「み、身の上って何かあったのニヤ? 何だか不穏そうで……」

「あー……盗み聞きとは感心しないにゃ?」

悪戯っぽくそう言うと、彼は申し訳なさそうに垂れた耳をさらに垂れさせた。

とまあそれはともかく、尋ねられたのなら答えるのが筋つてもものかな。旦那さんならきつと、そう言うと思うにゃ。

「何のことはないにゃ。ただボクが以前オトモしていたハンターさんが、ちよつと問題ありだったただけだにゃ」

「も、問題……?」

「とつても強いハンターさんだったけど……凄く粗暴で怖い人だったのにゃ」

ボクがここに流れ着く前——それは、そう、ドンドルマ。ドンドルマという町で暮らしていた頃だ。

その時もボクはあるハンターさんのオトモをしていた。G級と呼ばれる凄腕のハンターさんで、町に来襲する古龍も撃退してしまうとても強い人だったのにや。だけどその性格はちよつと歪んでいて、周りの人間にもアイルーに対しても粗暴で近寄り難くて。ちよつと失敗しただけで殴る蹴るは日常茶飯事で、とにかく生傷が絶えない日々が続いたにや。

それでもその功績のせいか、そのハンターさんはギルドからの信頼は厚かった。だから突如出現した強力なモンスターへの撃退や、危険が蔓延した他の地区への遠征など、様々な依頼を請け負っていたのだけだ。

「……そ、それにはイルルさんもついていったのだけだ。」

「もちろんにや。オトモだからにや」

「……こ、怖くはなかったのニヤ？ 嫌になつたり……しなかったのニヤ？」

しよぼんとした顔をしながらも、ニコは的確にボクの心の痛いところを射抜いてきた。管理人さんがボクを心配する所以とも言える、あのハンターさんの態度と行動。

「……怖かつたにや。失敗したら痛いことされるから、狩りの時間は何時も緊張で息苦しかつたにや」



まるで綱渡りをしているようだった。少しのミスで激しく糾弾されるから、失敗しないように常に気を配っている。

ちよつと足を滑らしただけで真つ逆さまに落ちてしまう、綱渡りのような時間だった。

「でも、逃げようとかは思わなかったか。頑張ってオトモを続けたにや」

「ど、どうして? どうしてイルルさんは……」

非常に困惑した様子でボクの話を反芻しては、ニコは理解できないと言わんばかりにオロオロと首を振った。まるで出口のない迷路に迷い込んだように。答えのない問題を前に狼狽するように。

彼がそう思うのも無理はないかな。誰だって、この話の流れならボクがオトモを続けるのは違和感があると思う。だけど、ボクは思考放棄していたわけじゃない。ちゃんと意志を持ってオトモをしていたにや。

「——だって、ボクは人間が好きなんだにや。当てが他になかったのもあるけど、それ以上にハンターさんの役に立てるのが嬉しかったのにや」

「う、嬉しい……?」

不思議そうに首を傾げたニコに、ボクは満面の笑顔で頷いた。

ボクの両親は、それはそれは人間にお世話になったのにや。ボクが物心つく前から

ずっと、人間と助け合いながら暮らしてきたようで、ボクも人と暮らすことの大切さと楽しさを教わってきた。

だから、二人がいなくなっただけから、二人の教えを胸にハンターさんの戸を叩いたの  
にや。

「分からない……。僕には分からないニヤ。どうして、どうして……」

「……でも、そんな時間も終わりが来たのにや」

数か月間か、もしくはは一年間だったかもしれない。長いことそのハンターさんにお世話になっていた頃、随分珍しい依頼が流れ込んできた。それは海を越えた町からの緊急要請。詳しくは分からなかったけど、何やら危険なモンスターが現れたようだったにや。それには移動手段として船が必要で、数日間船旅をしなければならなかった。

その時だった。海の上で、見たことのないモンスターに襲われたのは。

「……ニヤツ！ こ、怖いニヤ……！ 一体どんなモンスターが……!?」

「ボクが覚えているのは、紫交じりの黒い体と口しかない顔、そして……まるで腕のような翼だったにや。それで黒い煙を湧き出して……」

モンスターリストにも載っていないモンスター。ボクもハンターさんも初めて見るモンスターで、その悍ましい風貌に戦慄した。

船旅というのもあって、ハンターさんも油断していたのだろう。懸命に応戦したけれ

ど、準備もままならなくて歯が立たなかつた。そうして激戦に耐え切れず船が大破して

「……もしかして、それでイルルさんはここに流れ着いたのニヤ？」

「そうにや。ボクは運が良かったにやあ。……だけど、あのハンターさんがどうなつたかは分からないにや」

ボクは幸いにもこのほか島に漂流して、管理人さんに助けてもらえた。だから今こうして元気に生きています。

でも、ハンターさんはどうなつたのだろうか？ 普通に考えたら、生存は絶望的だ。だけど、プライドの高いあの人のことだ。もしかしたら生き延びているかもしれない。

「や……やつぱり怖いニヤ。ハンターさんもモンスターも怖いニヤア……」

「にやあ。間違つてないかもにや」

ニコが漏らしたその声に、冗談めかしてそう返す。別に、深い意味を込めた訳ではないけれど。

しかしそえおどけたせい、ふと彼は何かが思い当たつたかのように、不思議そうな顔をした。その小さな尻尾を軽く振りながら、ボクの目をおずおずと見始める。

「……何にや？」

「あの、そんなことがあつたのにどうしてオトモを今も続けてるんだニヤ？」

——何だ、何を聞いてくるかと思えばそんなことかにかや。わざわざ改めて聞き直すから、少し緊張したけれど、いらぬ手間だったにかや。

その理由なら、ボクはもう話している。だから、はつきりと答えることが出来るのかにや。

「決まつてるにかや。ボクは人間が好きで、人間の役に立ちたいから……にかや！」



彼——ニコは、臆病の抜けないアイルーにかや。ボクも旦那さんに臆病だ臆病だとよく言われるけど、ニコはそんなボクよりも数段臆病なのだ。それも彼なりの理由があるからだとかで、ボクが偉そうに口を挿むのも野暮つてもものだけど、どうしたものかなあ？

「うう……。理解できないニヤ……」

「……もしかしてニコは人間が嫌いなのかにや？」

この子はモンスターだけじゃなく、人間にも怯えている節がある。もしかしたら生粋の人間嫌いでもあるのかもしれない。

なんていうボクの考えは、大した働きもしないまま消滅した。彼が首を左右に振ったのだ。

「そんなことないニヤ。怖い人はちよつと苦手だけど……でも人間が嫌いなわけじゃないのニヤ」

「そうなのになや？　じゃあ何がそんなに理解できないのになや？」

「……イルルさんがそれでもオトモを続けるのは、それは怖さを克服したついで良いのニヤ？」

不安そうに、それでいて瞳の奥にうつすらとした期待を潜ませながら、ニコはボクにそう尋ねてきた。

怖さを克服した、か。そうと言われればそうかもしれないし、違いかもしれない。今でもあの時の怖さはぶり返す時もある。夜、悪夢に魘うなされることもある。

それでも。それでも今は、シガレットださんがいてくれるのにな。怯えたり、震えたりするボクを優しく撫でてくれる。悪夢に魘うなされて眠れないボクをそつと包み込んでくれる。だから――。

「……ニコも勇気を出して優しいハンターさんを探してみるにや。良いハンターさんは、きっとニコのことを優しく迎えてくれる。……ボクは旦那さんに救われたんだから、にやあ」

「……それが克服の鍵……ニヤ？」

おずおずと尋ねてくるニコに、ボクははつきりと頷いた。そんなボクの顔を何度も確

かめては、彼は少し緊張した様子で細い髭をピンと張る。そうして、自分の肉球を見ながら、「僕にも出来るかニヤ？」と小さな声で呟いた。

ボクは、そうやって戸惑う彼に向けて一歩前に出て、彼のその頭をそつと撫でた。旦那さんが、いつもボクにしてくれるように。

「大丈夫にや。ニコならきつと克服できるから、もつと自信を持つにや！」

「——それとさらに求めるなら、美味しい飯も弱点克服に良いんだぞ。それこそ穀物と野菜類の組み合わせのようにな」

「フニヤツ!?!」

ボクにされるがままだったニコが、全身の毛を逆立てる。

というのも、いきなり声を掛けてきた人間——シガレットこと旦那さんが乱入してきたからだ。ボクがニコと話し込んでいるうちに帰ってきてたのかにや——つて!

「だ、旦那さん!?! ど、どうしたのにやその傷!」

見れば旦那さんの頬や腕には、まるで牙獣種の爪のような鋭い何かで引つ搔かれた痕があった。旦那さんが狩りに向かったのは甲虫種だから、こんな傷はつかない筈なのに。

しかし旦那さんは何食わぬ顔で、特に気にする素振りもしないまま「あー……」と無気力そうに答え始めた。

「いやな、管理人さんに急に引つ掛かれてな。……てか今も頭に噛み付かれてるんだよ」  
そう言う旦那さんの頭の上には、牙を剥き出しにして噛りつく管理人さんの姿があった。

荒い鼻息で、旦那さんの白髪に牙を埋めている。まるで憑りつかれたような顔の管理人さんだったけど、ボクとニコの姿を確認するや、静かにその牙を収めた。あんな管理人さん、初めて見たにや。

「……か、管理人さん……どうしたのニヤ？ 一体何が……」

「ニヤア、イルルちゃん……困ったハンターさんですわニヤ……」

ニコが困惑しながら彼女に問い掛けると、憂うような素振りで、管理人さんは旦那さんの頭から飛び降りた。その様子を何食わぬ顔で見ている彼。一体どんなトラブルがあったのかな？

「旦那さん……。管理人さんと何があったのにや？」

「いやさ、チコ村に着いたら何かこいつが待ち構えててな？ それで俺に聞いてきたんだよ。『イルルのことをどう思ってるのか』って」

な、何てこと聞いているの管理人さん。そんなまるで、姑のような質問を。

それで、旦那さんは何て答えたんだろう？ 心なしか、期待にボクの胸は高まつてきたにや。

そんな鼓動を抑えながら、ボリボリと頭を搔く旦那さんの答えを待つていれば。ニコは不思議そうに首を傾げ、管理人さんは呆れたように大きな溜息をついた。

そうして、旦那さんが放った答えは――。

「それで俺は言ったんだよ。『美味しそうなくらい可愛い』つてな。……そしたらこの体たらくだ」

何だか、期待したボクがバカだったにや。

管理人さんが襲い掛かる訳だにやあ。



「――それでさっきの続きだがな。飯を食えば大概の弱点は克服できるんだよ」  
「ほ、本当なのニヤ!?!」

話がひと段落ついて――ボクが管理人さんに一生懸命説明して、何とか分かってもらえたにや――浜辺でのんびりすること数十分。

一方で何やらせつせと鍋を二個も取り出しては、その火加減とにらめっこしていた旦那



那さんが、おもむろに口を開き始めた。顔こそ鍋に向けたままだけど、その口振りには明らかに独り言ではなく、ニコのに向けての言葉のように思える。実際ニコは旦那さんの言葉に反応し、期待するような眼で彼を見上げていた。

「弱点属性を適切な食事さえ取れば抑えられるように……な」

「……ネコ飯の話にや？」

首を傾げるニコの代わりにツツコみを入れてみるものの、旦那さんは鍋の中身の不思議なスープの味見をし始め、ボクのツツコみをスルーしてしまう。

彼が準備した二つの鍋には、それぞれ異なるものを熱しているみたい。一つは鍋から漂ってくる香りからして、それはお米を炊いているというの分かるだけ——もう一つは、一体？

「……うん。良い味だ。あとは少し火を弱めて……つと」

そのもう一つの鍋は、どうやら汁物のように見える。その味を確認した旦那さんは満足そうに頷いて、鍋の下に広がる火を弱め始めた。

匂いから察するに、しょうゆベースの何かかにかや？

「……あ、あの、ハンターさん……。僕の弱虫は……治せるのニヤ？」

「んー……ちよつと待ってな」

待ち切れないと言わんばかりにニコが問いかけるものの、旦那さんはそれを適当に流

してポーチから焦げ茶色の固形物を取り出した。

あの形状、色、そして香り。間違いないにや！ あれはハリマグロの肉を焼いてから乾燥させた保存食、マグロ節だにや！

「にやあ。マグロ節だにやあ。良い香りにやあ！」

「ニヤ……お腹空いて来たニヤ」

基本的に、アイルーメラルーは魚が大好きだ。そんな大好物を旦那さんが丁寧に削り出した日には、もう涎が止まらないのにや。

それにしても、旦那さんは何を作ろうとしているんだろう？ お米にマグロ節、そして謎のしゅうゆスープ。ボクにもニコにも想像つかない。まさに旦那さんのみぞ知るってことかな。

「よし、それじゃご飯盛り付けるか！」

マグロ節を削り切った旦那さんは、お皿に炊けたライスを盛り付けて、その上にマグロ節を塗<sup>まぶ</sup>していった。さらにその上からあのスープをかけていく。汁かけご飯のような印象だけど。

そんなホカホカのご飯に、旦那さんはさらに不思議なものを振り掛けた。透明の小さな容器に詰められたそれは薄い色をした粉末状の物体で、見た目はふりかけそのもののように見える。

「完成だ。我流マグロネコまんまー」

そんなこんなで、旦那さんが完成と定めたその料理。

旦那さんがネコまんまと称したそれは、キッチンアイルー間でまかないとかで出されていそうなご飯だったにや。

それを旦那さんは、スプーンを添えながら優しくニコに渡した。その行為に困惑する彼に向けて、優しく微笑みながら。

「ほら、イルルも食べな」

「……あ、有り難う、にやあ」

わざわざボクに分まで盛り付けてくれた旦那さん。その手に乗ったホカホカご飯を、ボクにも優しく渡してくれる。ボクはそれを受け取りながら、鼻をくすぐる良い香りに思わず口角を上げてしまった。

「まあ……つまり俺が言いたいののは、美味しい飯を食べば元気が出るってことだよ」

「元気が出れば克服できるニヤ？」

「ああ。元気が全ての源だからな。……さあお食べ」

少し緊張しているようなニコだったけど、彼に促しに頷いてご飯を食べ始めた。それを確認しつつ、ボクもゆっくりそのご飯を掬ってみる。

白く光るお米が、薄い醤油色のスープで身を濡らし、その上でマグロ節が静かに風に

靡いている。ご飯に降りかかったこの粉末は、陽の光を反射してキラキラと眩しい。

そんな魅惑的な一杯を、ボクは一息に口の中に入れて頬張った。香りの通り、あのスープはしようゆベースだったみたい。しようゆのあっさりとした味が、口いっぱい広がってくる。勿論ただしようゆだけで作られているのではなく、深い味わいが形成されていた。きつと何かを出汁に使っているのにや。

一方で、その味に絡まれたお米は、もちもちとした食感を十分に残していて、その食感故にしようゆスープによく合っていた。そしてボクたちアイルーにとっての本命、マグロ節が、魚特有の濃厚な風味を醸し出す。カツオ節があっさりとした淡白な味を主体としていいるならば、マグロ節はそれよりも濃厚で力強い味が特徴的なのだ。それが口いっぱい広がれば、ネコにとってはもう堪らない。一度食べたらやみつきになるような調和具合が、ボクのスプーンを動かす手を止めさせなかった。

「……美味しいニャ。スープの味が味わい深いニャア」

「ああ、そいつはワカメクラゲで出汁を取ってるんだ」  
「そうなのになや？　出汁を取ったら美味しいのにや！」

ワカメクラゲと言えば、あまり高級でもない食材だ。味もそれほど評判が良い訳でもなく、知名度もあまりない。

だけど、出汁を取ったらこんなに味が深くなるみたい。それは初めて知ったにや。毎

回思うけど、旦那さんはどうしてこういう細かい知識に詳しいのだろうか？

「ハンターさん、ハンターさん。このふりかけみたいのは何ニヤ？」

「これはな、アルセルタスの羽だよ。唐揚げにしたそいつを粉末状に砕いたんだ。塩気が効いてて美味しいだろ？」

「にやあ!?! アルセルタス……にや!?!」

驚いたにや。まさかこれ、アルセルタスだったなんて。

でも言われないと気付かないかな。味も旦那さんが言う通り、良い具合の塩気が効いていて良いアクセントになるし、パリパリとした食感もまた面白い。甲虫種も馬鹿には出来ないにやあ。

「……食は命のエネルギー源だ。何事もまず食ってこそ……ってな。だからもつと食え」

飯を喰わねば、強くはなれない。

そう言つて旦那さんは、ニコとボクの皿におかわりを注ぎ始めた。旦那さんいつも盛り付け量が多いから、アイルーのお腹なら一杯で十分なのに。

それでもニコは一生懸命食べ始める。きつと彼も、自分の弱点を克服したいと思つているのだろう。そんな彼の様子に、旦那さんは満足そうに頷いた。ボクは少し呆れながらも、ニコがいつか自分の弱さと向き合える日が来る。何となくだけど、そんな風に感

じた。

チコ村——ぽかぽか島も含む——は狭い。

だから旦那さんがあんな料理を作り始めれば、その良い香りは村中に充満してしまつた。そうしてアイルーたちから旦那さん式ネコまんまの注文が殺到し、旦那さんはしばらく疑似料亭を開くことになつちやつたにや。

——ニコは食べ過ぎで動けなくなつていたにや。

く本日のレシピく

『シガレット式マグロネコまんま』

- ・ゼンマイ米 …… 4合（今回）
- ・マグロ節 …… 260g
- ・しょうゆ …… 適量
- ・ワカメクラゲ …… 少量（出汁）

・徹甲虫の羽唐揚げ粉末  
……大きじ1／3杯

## 良薬口に美味し

「何が悲しくてピツケル振らねばならんのだ……」

「頑張るにや、旦那さん。こういうコマメな行動が、後々効いてくるのにや」

寒々しい風が流れ込む。灰色に染まった空と大地は、何とも無機質だ。至るところから剥き出しになっている、古代の遺跡群がその印象に拍車をかけていた。

まるで中吊りのように浮かぶこの山は、非常に険しく、それでいて不安定。しかし奇妙なことに、落石こそあれど崩れることはなく、資源もまた豊富だった。特に鉱脈は地底火山に続き優れているため、一種の『炭鉱夫』と呼ばれる人種には聖地の一つとも数えられている。

「陽翔原珠……。その辺に転がってたら良いのにな」

「でもそれだったら、モンスターが食べちゃうかもしれないにや？」

「……この山には鉱石食う奴はいないし大丈夫だろ、きつと」

陽翔原珠。それが、今の俺が欲してやまないものだ。

防具には、スロットと呼ばれる隙間が存在する。それはそれは小さな物だが、侮って



はならない。加工屋は陽翔原珠という素材を筆頭に、様々な装飾品を作るのだ。それとその隙間を埋めるように嵌め込むことで、防具の特徴をさらに伸ばすことが出来るのである。

動きやすさに特化することで回避性を高めたり、モンスターの咆哮から身を守る耳栓をヘルムに取りついたり。用途は様々だ。その幅広さ故に、ハンターは装飾品まで考えて装備を新調する。そして今回は俺もそれに準じている、という訳だ。非常に珍しく、と後に付けて。

「火山だったらいるのにや。あの固いモンスター……」

「まあこの前食ったけどな！」

モンスターの中には、鉱物を主食とするものもいる。岩を分解できる酵素があるのなら、それは不可能な話ではない。それでも、俺には理解できない。無機物なんて味気のない食事、俺は絶対にごめんだ。

しかし鉱石を食べるからって、そいつ自身が味気ないとも限らない。美味しいモンスターも存在することには存在する。それこそ、この前実食したグラビモスが代表的だろう。

「あのシチューは美味しかったにや」

「そうだな、あのジイさんやるもんだよな……つと。お、出た出た」

イルルと談笑しながら岩をピッケルで砕いていると、特徴的なそれがかひよっこりと顔を出した。

陽翔という名の付いた、明るいい色で濁る球体。原珠とは、どうも化石の一種らしい。その元々の物体の影響が、この原珠を陽翔原珠たらしめているのだろう。

「おー……中々の上物にや。綺麗にやあ」

「そうだな。良いモノが採れたよ。これで装飾品も作れるし」

「じゃあ、そろそろ採取ツアー終えてネコタク呼ぶにや？」

「おう。じゃあモドリ玉で——」

そう言いかけたその瞬間。

モドリ玉を取り出そうとしたその瞬間。

ポーチに手を伸ばそうと、顔を動かした俺の視界に映り込んだのだ。アレが。

霞のように淡く、それでいて青く深い色に染まった葉。力強い流れを感じさせる葉脈。心なしか、爽やかな植物の香りが俺の鼻をくすぐ擦ってくるような。

「……どうしたのにや？」

「——ケ草だ」

「にや？」

「霞みいッッ!!」

俺の言葉を聞き直すように、イルルが声を上げる。

それと同時に、俺は地を強く蹴った。テツカブラも顔負けの跳躍力で、その香りの元へと一気に距離を詰める。その視界を、それは鮮やかな緑が彩っていく。

「……うん、間違いない。霞ヶ草だ」

「にやあ……。何かと思ったらそんなものか」

突然の俺の行動に驚いたイルルだが、その真意を知っては呆れたような声を上げる。その気持ちを表現するがの如く、その小さな両手を仰がせながら。

俺はそんな彼女の呆れを無視し、手に乗せた霞ヶ草をまじまじと見つめた。そこまで大きくはないものの、その活力には目を見張るものがある。脈動する葉脈が全身に養分と生命力を回し、深く青い香りが鼻をくすぐった。

「……うん、上物だな」

「どうせ清算されるにや。上物だと言ってもそんな」

霞ヶ草。

それは、この天空山に植生する一風変わった山菜だ。深い緑に染まるこの葉は、至って普通でどこにでも繁殖していそうな印象がある。

しかし実際はそうでもなく、効能もまた普通ではない。そのため、この天空山付近に位置するシナト村でも幅広く使われているそうだ。

「確かこれは、腰痛に効くんだったよな」

「そういえばそんな話あったにやあ」

「向かいん家の壮年アイルー、最近腰痛いとか言ってたよな」

バルバレにある俺のマイハウス。その向かいにある小さな雑貨屋には、壮年ながらも店を切り盛りしているアイルーがいる。我が家から非常に近いのもあり、同時に面白い調味料や食材が仕入れられることもあるため、俺はいつもお世話になっているのだ。

そんな彼だが、最近は歳のせいかわ腰痛を感じることもあるとぼやいていた。ならばこの霞ケ草で、少しは癒してあげられないだろうか？

なんて算段を頭の中で組み立てる俺に対し、イルルは困った様のため息をついた。

「でも、霞ケ草は清算されるものによ。持つて行ったところでギルドの人に持つてかれちやうにや？」

「それは霞ケ草そのまんまだったらっていう話だろ？」

確かに、霞ケ草はギルド指定の清算アイテムだ。そのため解毒草やネムリ草などとは違い、ハンターがそのまま持ち帰ることは許されていない。そのまま、ならば。

俺の意図に気付いたのか、イルルはその青く大きな瞳を目一杯見開いた。

「つま、まさか！ まさか旦那さん……！」

「そう、調理済みのものならきつと清算されないだろ。特産キムチキノコとか、氷結イチ

「ゴみたいに」

俺が以前持ち帰ったことがある清算アイテム、例えば特産キノコは、防具の隙間にこっそり入れて持つて帰ることが出来た。しかし今は、あの時と違い剣士装備だ。隙間のないこの装備は、物を収納するにはあまりにも向いていない。

ならばやはり、調理するしかないだろう。だったら、どんな料理にしようか。この爽やかな香りを生かせる野菜料理。豊かな風味を伸ばせる料理法がいい。

「……おひたし」

「にゃ？」

「霞ケ草のおひたし。何と良い響きか」

「……にゃあ」

あくまでもギルドは、清算アイテムを未加工のものを求めている。それをハンターから集め、市場で販売、もしくは加工するのだ。つまりギルドが求めている清算アイテムとは、採取したままの形なのである。

それならば、俺が霞ケ草をおひたしに変えてしまえば、その目的にそぐわない為、きつとギルドは清算出来ないだろう。いや、清算などさせるものか。

「という訳で早速キャンプに戻って調理しようか」

「……分かったにゃ」



「……それにしても旦那さん」

「ん？」

キャンプに用意された鍋で水を温めること数分間。

オンボロ鍋とにらめっこしている俺に、イルルは少し引つ掛かったような顔で話しかけてきた。

「旦那さんって何だかイルルに甘い気がするにや。……いや、メラルーにも」

「あー……そうか？」

「そうにや。他のハンターさんにこかされたら鉄拳なのに、いくらイルルに爆破されても、メラルーに秘薬を掠め取られても、旦那さんは怒らないにや。何でなのにや？」

イルルの、海のように綺麗な瞳がまっすぐ俺を捉えた。その深い青に、思わず飲み込まれそうになる。

「んー……」

随分鋭いところをついてきたなあ。確かに、他のハンターが妨害してきたら殴るけど、ネコに対してはそんなことしない。精々、罰としてもふもふするくらいだ。

この前も旧友のライトボウガン使いと少し狩りに行ったのだが、奴は使いどころ間違えて俺ごと拡散弾で吹っ飛ばした。その厚かましい態度を腹パンで沈めたのはいい思ひ出だ。

「……まあ、アイルーメラルーが好きだから、と言っておこう」

「向いの雑貨屋アイルーのため、というのもそれかにや？」

「ああ」

「ほかほか島でみんなにネコまんま作ってあげたのもそれかにや？」

「うん」

イルルの質問を適当に流している——本当に好きだから別に嘘を言っているわけではない——と、何故か彼女はもじもじとしながら両手を背中で組み始めた。

そうして俺を見上げながら、上目遣いでその綺麗な瞳を向けてくる。

「じゃ、じゃあボクに優しくしてくれるのも……」

「おう」

「うう、そうかにや……」

適当に、聞き流すままに答えると、何やらイルルから残念そうな声が出た。

彼女は少し残念に目を伏せて、おずおずと置いたポーチの横に腰を下ろしていた。一体何なんだ？

まあ、いいや。丁度鍋の中の水も沸騰し始めたところだし、そろそろ次の工程に移ろうか。取り敢えずこの熱湯に塩を振り掛けないとな。

「イルル、そのカバンから塩取ってくれ」

「……にや」

頼んでみると、彼女は塩が入った容器を取り出ししてくれる。

しかし、その容器を俺に手渡ししながら、不思議そうに首を傾げ始めた。その瞳を容器と鍋へ、交互に滑らせながら。

「どうした？」

「にやあ。何で塩入れるのかなって……」

「何だ、そんなことか」

緑豊かな野菜たち。今回はこの霞ヶ草なのだが、これらは茹でる時に塩を入れることで、この鮮やかな色を保つ、もしくはさらに良い色合いにすることが出来るのだ。

料理というのは見た目もまた重要で、それだけでも味の捉え方は変わってくる。見た目も味の一部と言っても過言ではないのだ。事実見た目からの先入観で、味は変わってしまうように人は捉えるのだから。

「じゃあ、塩を入れることで見た目が良くなるのにや？」

「そういうことだ。それに塩を入れると野菜が柔らかくなるしな。……これは固い野菜



にも有効だぞ」

この手法は、激辛ニンジンとかヤングポテトとか、固い野菜に対して特に重要な手段だが——今回は関係ないので、説明は割愛させてもらおうか。

それでは早速、霞ヶ草を熱湯に加えよう。と、言いたいところだが、生憎この草の根元部分が無視出来ない。草の中核とも言える根元。これが随分と太いため、火の通りが些か悪そうなのだ。

「……これは切り込みを入れておくべきかな」

「切り込み？」

根元が太い場合、中まで火が通らないなんてことがざらにある。しかしそのまま火を通そうと思えば、葉の部分が先に萎れ、結果味が落ちてしまうのだ。ならばどうするか？

答えは簡単だ。根元に十字型の切り込みを入れてやれば良い。そうすれば、熱の通りやすさは格段に上昇する。

「と、いう訳でだな。……こんな感じだ」

「おー……相変わらず器用にや」

丸っこく固い根元に切り込みを入れ、隙間を作る。あまり欲張って切ると、葉がばらけてしまうので注意が必要だが、それさえ意識しておけば問題ない。下準備はこれで完

了だ。

「……それでは根元の方から丁寧にお湯につけていこう」

「根元の方が固いからにや？」

「その通り。固いところから茹でないとな」

調理の基本的なルール、固い部分から茹でていく。

今回のように部位ごとに固さが違うものや、固さの違う野菜を鍋で調理する時に投入する順番を考えるなど、幅広い場面で重宝されている手段だ。

今回もその例外でなく、霞ヶ草を根元の部分からじっくりと茹でていく必要がある。

「茹で時間はどれくらいにや？」

「ざっと一分程度だ。茎がくにやつと曲がればもう十分……」

「くにやあ？」

「くにやつと」

細胞壁の関係で、植物の茎は側面から力を加えられると折れてしまう。しかし茹でれば、その細胞壁の固さを緩和させることが出来、さらに柔らかさと程よい歯応えを作り出すことが出来るのだ。

細く薄い葉物野菜なら、一分もあればすぐに柔らかくなる。それこそ、今俺が鍋から引き上げた霞ヶ草のように。

「……まあ、こんな感じだな」

「にやあ。しつとりとした感じだにや」

熱の通った霞ケ草は、菜箸に摘まみ上げられて、力なく下を向く。重力のままに、柔らかくなった体を支えることが出来ないようだった。

柔らかくなった葉は、しつとりとした表面と、それを伝う水滴で光を反射させている。見るだけで新鮮さが伝わってくるその姿は、非常に魅惑的だ。心なしか、漂う香りも少し上品になったような、そんな気さえする。

「よし、イルル。ポーチに入ってる水をボウルか何かに入れてくれるか?」  
「分かったにや!」

菜箸を軽く振り、霞ケ草につく水滴を振り払う。その間に、イルルは水を入れた容器を用意してくれた。それも、氷結晶で加えるという粋なサービスも添えて。

受け取った容器に霞ケ草をサツと入れ、染み付いた熱を逃がしていく。冷水の中で、霞ケ草は優雅に手足を伸ばし始めた。

「冷やすためのなににや? 氷結晶も使って正解だったにや」

「まあそれもある。おひたしは温度が命だ。冷たくないと爽やかじゃないしな。……それと、冷水にとるのはまた違う効能があるんだよ」

「にやあ?」

茹でた野菜を水につけるこの行為、通称『色止め』は、もちろん熱した野菜を冷やす効果もある。しかし本来の目的は、その名の通り色を留めることだ。

野菜は熱を保ったまま放っておくと、みるみるどす黒く変色してしまう。色止めは、急激に野菜を冷やすことで、その見た目の変化を止める技。新鮮な見た目を保つ、欠かせない手段だ。

「この鮮やかさが霞ヶ草の魅力の一つだからな。……こんなもんで良いか」

「次はどうするのにな？」

「絞って余計な水分を抜く、これに限る」

熱湯、冷水とたらい回しにされた霞ヶ草だ。その間に内包させられた水分は非常に多く、それを搾り取らなければ味が薄まってしまう。

まずは両手である程度絞ってから、『巻き簾』を用意する。厚みのある竹と木綿を、まるで巻物のような形に仕立てているこの巻き簾は、巻き寿司や卵焼きにも用いられる便利な道具だ。その名の通り、巻いて作る料理にはもちろん、今回のように野菜を絞るのにも打って付けなのである。

「……それって、この前旦那さんがバルバレの競りで獲った奴にな？」

「おう、ユクモの竹林からとれた竹だ。値は張ったけど、性能は抜群だぞ、きつと」

「……この前狩ったグラビモスの報酬金とか全部持ってかれたもんにゃあ。そうじゃな

いと割に合わないにや……」

彼女の言う通り、総計で新しい武器を製造するくらいに費用はかかった。しかしその代償として、美味しい飯が食えるのだ。そう思えば安いもの。

巻き簾の上に霞ヶ草を乗せ、軽くしようにゆを振り掛ける。ここでのコツは、薄くとも全体にしつかり振り掛けておくことだろうか。

そうして再び水分を得た霞ヶ草を、巻き簾で絞り上げる。両手に力を加えると、巻き簾を通して霞ヶ草の弾力が手に伝わってきた。これは噛み応えが良さそうな気がするな。

「しようにゆかけたのにまた絞るのにや？」

「これはあくまでも下味付けだからな。本格的な味付けは次だ」

本当の味付けは、もちろんしようにゆだけなどではない。しようにゆ、出汁、みりん、料理酒ときつちり調味料を使う。この調味料たちにも、当然混ぜるに当たつてのバランスがあるために、少し丁寧な量を測らねばならない。

よし、ここは分担作業と行くか。

「イルル、俺は味付けやるからさ。お前は霞ヶ草を切ってくれ。五センチ程度で、長さは根元で揃えてくれな」

「はいにやー！」



切り分けた霞ケ草を、今一度絞って水分を押し出す。それを済ませば、あとは俺お手製の調味液の入った容器に十五分ほど浸せばいい。その際には、しっかりと蓋をして外気に触れないように考慮しなければならず、乾燥にも気を付けなければならぬ。

そんな注意は必要であるものの、すっかり十五分浸せば霞ケ草全体に味が馴染む。味の向上のためには欠かせない行為であり、そのためならば十五分の注意など大したことじゃないのだ。

「そろそろ十五分にや」

「そうだな。それじゃ、少し味見してみるか」

「にやあ！」

霞ケ草のおひたし。

それは天空山で獲れる希少な山菜を、様々な調味料と高級な巻き簾で味付けした贅沢な一品だ。みずみず瑞々しく光を反射するその新緑の葉が、内包する美味みを表現しているかの

よう。俺が仕上げた調味液がもとても豊かな香りを放ち、霞ヶ草の爽やかな香りをより一層引き立てている。

「……それじゃ、いただきますにや」

「そうだな、早速いただこう」

一切れだけ。その小さな葉一枚を箸で摘み、持ち上げる。重さもほとんど感じられず、食べる身としては少し物足りない。しかし、今の俺はあくまでも味見役なのだ。細かいことは気にしていないで、さっさと食べてしまおう。

全体の半分ほど。その辺りで歯を止めて、顎に力を入れる。すると、巻き簾で絞った時に伝わってきたような、薄いながらもどこか厚みのある弾力が俺の顎に伝わってきた。決して噛み辛い訳ではない、シャキツとした鮮やかな食感だ。葉物野菜特有の顎に嬉しい噛み応え。

それと同時に、断たれた葉から、力強い葉脈から。深い葉の香りと、調味液の風味豊かな味がじつくりと顔を出し始めた。

霞ヶ草はその見た目通り、爽やかで主張し過ぎない味が特徴的だ。しつこくなく、あつさりとしていて。それが調味液に、しろうゆの深みやみりんの甘みによつて染められていく。深く鮮やかな風味へ、まるでこの天空山のように、天に浮かぶような爽やかな味へと変わっていく。

「……ウン、うまい」

「あつさりしてて美味しいにや。……何だか野菜つて珍しい感じがするにや」

「そうだな。いつも狩ったモンスター肉ばつか食ってるもんな」

「でも、こういうあつさりしたのも好きにや」

「忘れてはいけないのは、こいつは腰痛に効くって効果もあることだ」

「にやあ。向かいの雑貨屋さんにあげるんだし、効くと良いにやあ」

そう、この料理の本来の目的は、俺のマイハウスの向かい、雑貨屋を営む壮年アイルルの腰痛のためだ。

そのため俺たちは、この美味さを前にしても、全て食べることが許されていないのである。

我ながら酷なことをしたものだ。その悲壮感はきつと、俺の表情にも表れているのだろう。

「……にやあ。別に頼まれてる訳じゃないからそんなに重く捉えなくても良いと思うにや」





現在、ハンターの腕自慢大会に備えているこのバルバレは、大砂漠付近に常駐している。そのため天空山から俺たちが帰還した頃には、すっかり日も落ちて、砂漠特有の冷気が町を闊歩していた。

しかし住民も負けてはおらず、せつせと商売に汗水流している。夜になれば酒場が盛り上がり、辺りからは賑やかな声で溢れていた。

そんな中、俺は路地裏とも言える狭い道を歩いてマイハウスを目指していた。いや、正確にはマイハウスの向かいにある雑貨屋なのだ。

「美味しいって言ってもらえるかにゃ?」

「大丈夫だろ、きつと」

クエストを終えた俺のところへきた、ギルドの役員。彼は、アイテムの清算にやって来たものの、調理済みの霞ヶ草には度肝を抜いていた。流石にこれは受け取れないようで、あっさり通してもらえ、今に至るのである。

あとは、あのアイルーにこれを渡して食べてもらえばよい。

「にゃ、見えてきたにゃ!」

「お。……あれ?」

こじんまりとした小汚いマイハウス。その向かいに君臨するあの雑貨屋。見えてきたと言えば見えてきたのだが。

おかしい。いつもなら、この時間ならお客で賑わっているはずのあの店が、今は誰もいない。それどころか明かりすらついていない。店の入り口は、まるで来る者を拒むように口を閉じていた。

「……やつてないにゃ？」

「おかしいな。何かあつたのか……？」

「あ、旦那さん。店の前に何か貼つてあるにゃ」

イルルが、そのぶにぶにした肉球で店の方を指す。

その先には、貼り紙が無造作に店に貼られていた。適当に書いたような字に、適当に選んだような紙。書いた本人が、乱雑に書いたことが窺える。急いで書いて貼り付けるほどのことがあつたのだろうか。

「……取り敢えず、読んでみるか」

「にゃあ」

結局その日は帰宅した。残った霞ヶ草のおひたしは、俺とイルルで食べ切った。全部食べる事が出来るのは、嬉しいと言えば嬉しいのだが、俺の心はどこか納得いかないものがある。

そもそもこの話、今回霞ヶ草で料理に取り組んだのは、あのアイルーのためだったのだ。そのため本来の目的は未達成。クエストでいうなら、メインターゲット達成ならず、である。

何故渡せなかったのか？ 答えは簡単だ。店の前の紙には、こう書かれていたから。

『腰痛回復のため、しばらくユクモ村に湯治してくるニャー！ 店も閉めるから、ごめんニャー！』

——先に言ってくれよ、それ。

く 本日のレシピく

『霞ヶ草のおひたし』

・ 霞ヶ草

……180g

・ しょうゆ

……小さじ1杯

・ 調味液

・ 出汁

……60cc

・しょうゆ  
・みりん  
・料理酒

……小さじ1杯  
……小さじ1杯  
……小さじ1杯

## ガレオスの砂流れ

「なあ、どういふことだよ？」

「……それは、僕の方が聞きたいです」

熱い暑い旧砂漠。

真夏のような熱砂で包まれたこの世界は、まるで水分を無くした生地のように。オーブンで焼いたトーストを彷彿とさせるこの景色。その中でも、特に岩場に囲まれたここ——ベースキャンプでは、二人のハンターの覇気のない声が漂っていた。俺と、もう一人の。

「……なんでお前がいるんだ？ トレッド」

「二応、任務なんです」

トレッド。そう呼ばれた目の前の男性は、にこやかな笑顔に汗を垂らしては困ったように頬を掻いた。

フロギイXシリーズに身を包んだ彼は、見たことのないライトボウガンを背負っている。薄い桃色に彩られた細長い銃。それにも負けない、細く長い目で困惑を表現して

は、困ったような愛想笑いを溢した。

目の前の茶髪の彼は、かつて俺が所属していたタンジヤギルドの抱えるハンターだ。それも数少ないG級ハンターの一人で、俺の数少ない友人の一人でもある。

「任務だあ？ タンジヤから？ バルバレまで？」

「ええ。僕は何かと遠征の仕事をよく任されるもので」

そう言つては、彼は困つたように笑つた。

思い返せば、彼はタンジヤギルドに属しながらもミナガルデに赴いたり、ポツケ村を訪ねたりと確かに各地を転々としていたハンターだ。バルバレに来るくらい、何の不思議もない、か。

「ふうん。仕事は順調か？」

「芳しくないですね。以前のよう君にも手伝ってもらいたいものですが」

「冗談よせよ。人間の関係にはあんまり首突つ込みたくないんだ。モンスターの相手の方がよっぽど気楽でいい」

何も考えなくていいから、と付け加えては彼の言葉を一蹴した。

以前はコイツとよく組んでいたが、今となつてはそれも昔の話。タンジヤを離れた俺には、コイツと狩りに行く理由はもうない——はずなのだが。

二度目になるが、何故コイツがここにいるんだ。

「……で？ 何の任務なんだ？」

「正体不明の獣竜種に関する目撃情報がありました。……もしやと思つてね」

「何だと……。それは本当なのかッ!？」

思わず身を乗り出した。正体不明の獣竜種と言われれば、俺はアレしか思いつかなかつたのだ。俺の狩人人生に大きく響いた、あのモンスター。俺がハンターをやり続ける所以ともいえる、あのモンスター。

だが、一方の彼は落ち着いた様子。俺の手を払いのけて、静かに言葉を繋いだ。

「安心してください。情報を重ねた結果、君の探してるモノではありませんでした」

そう言つては見せてくるメモ書き。線の細い見た目をしていくせにやたら乱雑で豪快に書かれたその文字の羅列を、俺は目に入れる。

燃え盛るような甲殻。赤とも青とも言える体色。長大な尻尾。強靱な足腰。

そのメモには、様々な目撃情報を合わせたらしいモンスターの情報が注ぎ込まれていた。何とも聞き慣れない情報ばかりだ。俺の知っている獣竜種とはほとんど一致しないその情報に、俺は思わず首を傾げてしまう。

「これらがそのモンスターの情報です。これに似た記録が、ベルナ村というところで発見されましたね……。要は、確認作業のようなものですよ」

「ベルナ……。あの高原の村か。チーズが美味くて、でっかいアイルーがいて……」

「そうそう、その村です」

ぼんやりとあの高原地帯のことを思い出しながら、印象に残っているものを口にす。トロトロのチーズに、やけに肥えたアイルー。それくらいしか出てこなかった。

一方の彼はそのメモ書きをポーチにしまつては、キャンプに開けられた小さな洞窟に向けて歩き出す。小さく、俺にどうするのかと尋ねて。

「……元々はサポテン採取のクエストだったんだがなあ。ギルドの管理不足で訳か」  
「まあ、否めませんね。連絡はしてたんですが」

「でも考えてみれば、これはフリーハントに含まれるかも。折角だし俺も同行しようかな」

「……お好きにどうぞ」

フツと笑みを溢しては、トレッドは少し嬉しそうにそう言った。地図を広げながら俺に背を向けるその姿に、俺は懐かしさを感じてしまう。かつて共に狩りに行っていた時のような、そんな気分だ。

普通、クエストに赴いたハンターが予定外のモンスターと遭遇した場合、事後必ずギルドに報告するという条件でそれを狩猟することが認められている。一般にフリーハントと呼ばれるこの制度。俺も活用してみようじゃないか。

「そのモンスターって、喰えるのか？」



「やい、やいあ……」

彼の後に続きながら、俺は何ともなしにそう漏らす。その問いを驚いた様子で聞いた彼は、返答に困ったようなような返事をした。

何を言っているんだコイツは、とでも言いたげな、困惑に満ちた声だった。



赤と青の甲殻。

言葉としてそれを取り入れれば、ただの矛盾の塊でしかない。しかし、その証言は確かに合っていた。目の前のモンスターは、その証言の通りだったのだ。まるで揺らめく炎のような甲殻。物々しい見た目に、俺は思わず歯を食いしぼる。

「なんツ……だコイツ！ 尻尾なっが！ 厳つツ！」

「ふむふむ、やはり斬竜——デイノバルド。間違いないようですね！」

デイノバルド。恐ろしい風貌をした奴だ。

喉奥に光を燈しては力強く唸る奴に対して、トレッドは嬉しそうに声を張った。声を張りつつ、ボウガンのリロードをする。力強く銃を構えては、そのボウガン、『あまとぶや軽弩の水珠』をデイノバルドへと向けた。

細く軽そうなの見た目に反して、どうやら高性能のライトボウガンらしい。何でも、最近ギルドの注目を集めるようになった海竜種のモンスターから出来ているのだから。

「とりあえず、小手調べです！」

構えた銃から飛び出した弾、水冷弾。

ブレなく飛んだその弾は、奴のその厳めしい頭部に着弾する。炸裂と共に内包された水属性エネルギーが飛び出す、奴はそんなことも知らんぶりだ。弾一発程度では全く怯まないその風格に、このモンスターの生物としての強さを垣間見た。

「水冷弾つつーことは、コイツは水に弱いつて訳か」

「ええ、ベルナの情報ではそのようです。僕はとにかく銃撃しますので！」

そう言つて駆け出すトレッド。ガンナーは離れて戦うという暗黙のルールを鼻で笑うその動作に、デイノバルドは雄叫びを上げた。その声と共に体を捻り、その巨大な尻尾を振りかざす。その仕草は、まるで薪割りでもするかのようにだった。

「ガアッ！」

「おっと！」

それをトレッドは華麗に躲した。錐揉み回転するように、大きく飛び避けた彼は、着地と共に弾倉を切り替える。機械らしい音を立てるその銃を構え直しながら、彼はお返

しのように乱射を始めた。

「水冷貫通弾か……。見るのは初めてだ」

空気を貫くように飛ぶそれは、着弾と同時に針のように鋭い弾頭を弾けさせる。甲殻に穴を開け、肉を抉り、水溶性エネルギーを撒き散らしていく。

それを何発も連射しては、確実にデインバルドの胴に穴を開けた。音を立てて皮膚が剥がれるその様に、俺は思わず舌を巻く。

「すっげえ威力だな、それ」

「特定射撃強化を施してますからね、負けませんよー」

打ち切っては弾倉を交換し、レベル別の水冷貫通弾に切り替える。

その猛烈な弾幕に、デインバルドは忌々しそうに唸り声を上げた。そうして、その巨大な尾を隠すように引き絞る。先程は薪割りのように振り下ろしてきたが、今度はまるで動きが違う。尾を地面に擦りつけるような、そんな動作だ。

「……………っ！ 何かくる……………！」

「あん？ ……あ？」

瞬間、トレッドは再び跳んだ。地上を平行移動するかのようには跳び避ける彼に、俺は少し呆気にとられる。そうかと思えば、一瞬にして視界が緋色に染まった。

随分と素つ頓狂な声を漏らしてしまったものだ。そう感じた瞬間には、俺は勢いよく

吹き飛ばされていった。防具の端々を燃やしながら。

「あつっ……っ！ 何だ!? 火球飛ばしてきやがったぞアイツ！」

「尾の摩擦熱で火を起こすとは。やりますね……！」

見れば、デインバルドのその巨大な尾は、赤い紅い熱剣へと変貌していた。青くくすんだ甲殻に覆われていた先程までの見た目とは大違いだ。まさか振りかざしたそれで大気ごと燃やしてくるとは。

一方、それに感づいて躲し切ったトレッドは、感嘆しながらも銃を撃つ手を緩めない。貫通弾に切り替えては、瞬時に弾倉を空にした。

「ガアアアアッ！」

それを鬱陶しく思ったのか。デインバルドはその燃え盛る口内を彼に向けて、紅蓮の炎を撃ち放つ。まるでとろろのような半固体のそれは、一寸の狂いもなくトレッドを穿った。

いや、正確には、彼がいた空間を。当の本人は、余裕を持ったステップでそれを躲していたのだから。

「むっ、しばし地面に滞留しては炸裂する性質をもったゲロですか。厄介ですね……っ」  
先程までののにこやかさとは打って変わって、随分と目つきの悪い顔でそう吐き捨てるトレッドは、再び銃を乱射した。空気を切り裂く貫通弾が唸り声を上げる。同時に弾け

飛ぶ甲殻の数々に、デイノバルドは大きく顔を仰け反らした。

「やるなあ、俺も負けてらんねえぜ！」

荒涼とした世界を撃ち抜く銃声の中、俺はデイノバルドの足元へと駆け寄った。トレッドの射線を気にしながら、その獣竜種らしい力強い脚へと向けて剣を抜く。腰の剣は風のように唸り、振れば振るほど特徴的な音色を奏で始めた。

——にやああん、みやおん！　なあゝごゝ、にや、うみやあ！

「シグ、それって……」

「オラア！　麻痺しやがれ！」

啞然としては銃を撃つ手を止めるトレッド。そんな彼の乾いた呟きも気に留めず、俺はひたすら剣を振るった。

にやんにやんぼう。野良アイルーが持っているようなネコの手の形をしたそれは、振る度にネコの鳴き声のような音を鳴らす。閑散としたこの峡谷の中に、華やかな音色が舞った。

「ガアアツ！」

もちろん斬竜もただされるがままなんて、そんな訳もある筈もなく。その口から火炎を漏らしては、俺に向けて牙を振るった。まるで油を差した焚火たきびのようなそれが、一心に俺に迫り来る。

「おつとお！」

それを飛んで躲しては、その勢いのまま奴の腹に剣を浴びせた。生憎甲殻に弾かれましたが、気の抜けたネコの鳴き声とその金属音を掻き消した。

さらにそれを掻き消そうとする、銃撃音。見れば、トレッドが水冷弾を速射しているではないか。

「ナイスです、シグ！」

丁度口を開けた瞬間を狙っていたのか、トレッドは俺を喰らい損ねた奴のその口に、連射される水冷弾を綺麗に撃ち込んだ。その度に奴の体内でそれが弾け、何とも苦しそうな声を漏らす。効果は靦面てきめんのようだ。

「かっつえなコイツ……！」

着地から水平斬りと斬り返しを繋げていくが、奴の甲殻の前ではあっけなくそれが弾かれてしまう。

その隙を突くように繰り出される尾の薙ぎ払い。空かさず出した右手の盾でそれを受けつつ、体勢を低くしては衝撃を逃がす。それでも、地面を滑ることを余儀なくされたが。

「大丈夫ですか？」

「問題ない！ ……あれ、盾が」

盛り上がる土から両脚を引き抜き抜きつつ、剣を構え直す。すると右手の盾が、ぱきよつという小気味良い悲鳴を上げた。

見れば、まるで剣でも受け止めたかのような傷が盾に広がっており、風に押されるようにその腰を折っていた。ぽとりと、力ない木の板が地に墜ちる。

「全く！ そんな武器で来るからですよ！」

「お前にやんにやんぼうを甘く見んなよ！ 採取にはピツタシなんだぞ！」

憂う声を漏らしながら、引き続き水冷貫通弾の弾倉に切り替えるトレッド。そんな彼への文句は、デイノバルドの凄まじい轟音によって阻まれた。

三連弾。その劫火は、その呼び名が相応しい。トレッドに向けられたその火球は、リオレウスのものよりもずっと早く、彼に飛びかかった。

「おい……ッ！」

銃を構えた彼は、そつと半身ずらし、その火球を躲す。躲しながら、水冷貫通弾を放つた。入れ違うように飛ぶそれは、デイノバルドの甲殻をその肉ごと剥がしていく。その様は、まるで紙吹雪のようだ。

続く火球はジャンプで段差を超えるように躲し、宙に漂いながらカウンター狙撃をかます。それはデイノバルドの脚を狙い澄ましたかのように穿ち、三発目を放ったばかりの奴の体勢を崩すには十分の威力だった。バランスを崩す奴の様が、それを如実に物

語っている。

「さあ、どんどん行きますよ！」

余裕の表情で全て躲し切った彼は、ライトボウガンから青い炎を噴出させた。パワーリロード。

ライトボウガンの技法のそれは、仕込む火薬を少量ではあるがより強力なものに切り替え、弾の威力を底上げさせるというもの。それをこなしたトレッドは、再び水冷貫通弾の弾幕を張った。転倒してはもがく、デインバルドのその額に向けて。

「トレッド、俺は罨を張る！ 援護頼む！」

「了解、手早く頼みますよ！」

甲高い音を立てるその射線から逃れながら、空いた距離を埋めるように脚を前に押し出した。そうして、苦し気に立ち上がる奴に向けて片手剣を抜刀する。

その瞬間だ。奴がそつと、その剣を振り上げた。俺にでも、トレッドにでもなく、自らの口に。

「……あん？」

「……何か、マズそうです！」

思わず呆気にとられる俺と、慌てて銃を背負うトレッド。そんな二人の獲物に目もくれず、その重厚な牙で尾を研ぎ続けるデインバルド。



と、思いきや。瞬間、静かな、それでいて豪快な剣閃が走る。まるで音ごと斬り裂くが如く。片手剣のあの狩技を彷彿とさせる、凄まじい剣圧で。

居合斬りのように振り抜かれたそれは、この峡谷一帯を超速度で斬り結んだ。周囲のサボテンごと、たった二人のハンターを狙って。

「ぐあッ!？」

「あうっ……い！」

俺は防具に包まれた腹を。トレッドは、掠るように斬られたその肩を。

これまでとは段違いの衝撃に、思わず悲鳴が漏れた。胴のユクモノドウギ・天には深々と斬り込みを入れられ、その奥の腹からは血が噴き出していた。深く斬られた訳ではないものの、その傷は鋭く、熱い。まるで火傷のように、傷口が爛れている。トレッドのものも同様のようだ。

「チッ……くっそがー！」

回復薬を一気に飲み込んで、何とか立ち上がる。苦い薬草の味と、何やら生臭いアオキノコの味が鼻腔を占めた。マズい不味いその味だが、喉を滑り落ちることに少しずつ体に染み込んでいくのを感じる。回復力を底上げするような滋養強壮効果。傷はまだ痛むが、動けないほどのものでもない。

そうして斬り付けた、その一太刀。銃創の目立つその脚を抉るように、剣先についた

ネコの爪が炸裂した。甲殻より、表皮より。その中の肉を薙ぐように、そつと。

「おつ……」

瞬間、デインバルドは奇妙な悲鳴を上げた。見上げれば、その敵つい顔を捻じ曲げては、全身を痙攣させている。口からは涎が滴り、手足は随意を失ったように震え始めていた。

そうか。とうとう、にやんにやんぼうの真価が顔を出したのか。秘められた、麻痺薬の効能が。

「ナイスです、シグー！ いつの間にシビレ罫を仕掛けてたんですかーもうっ！」

「……は？」

先程の大回転によって砂塵で溢れたこのエリア。燃えるサボテンからは煙が溢れ、砂と合わさってはこの峡谷に深い色を付ける。

そんな視界が霞むこの中から、不可解なトレッドの声が聞こえた。そうかと思えば、数発の銃弾がそのボールを裂いて飛んでくる。苦しむデインバルドの、その腹に向かつて。

「え——ちよッ、おい!？」

太く、重いその銃弾。着弾すれば、すかさずその巨大な身を破裂させ、中からいくつもの爆薬を散乱させる。

俗に言うこの『拡散弾』は、デイノバルドの腹で着弾しては一気に爆薬のドームを作りだした。足元で剣を握る、俺をも囲うように。

「……………あれ？」

連鎖する爆破の華は、俺ごと巻き込んでデイノバルドを包み込む。ばら撒かれたいくつもの爆薬が、周りの爆風に感化されたように炸裂し続け、数秒に渡る爆炎としてデイノバルドを襲ったのだ。もちろん、その場に居合わせた俺も一緒に。

「ぐっはあッ！」

「あ、ありやりや……………。やってしまいました」

視界が紅蓮に染まっては、凄まじい勢いで流れ始める。爆破の色も、空の青色も、峡谷の岩の色も、全て流線的に混ざっていく。それが爆破の衝撃によって吹き飛ばされた視界だと認識するには、少し時間がかかった。

「むむむ。今のは罨ではなく、片手剣による麻痺でしたか……………。迂闊でしたね」

地面を転がる俺に向けて、淡く光る粉が降り掛かる。重い頭に揺れる視界を動かせば、トレッドの撒いた生命の粉塵がこのエリアを漂っていた。火傷に舞い落ちるそれらは、そつとその傷に染み込んでいく。その度に、少しだけ痛みが引いた。

「てめえ、この……………ッ」

痛む体に鞭打って、起き上がったのはトレッドに詰め寄る。

すると彼は、困ったように言い訳を垂れ流し始めた。さっきまでの表情とは一変、胡散臭い、へらへらとした笑顔で。

「あ、待ってくださいよ!? す、砂が舞い上がってよく見えなかっただけで、シグはもうデインバルドから離れてるかなーって……!」

「うっせえこの野郎ッ」

「ぐふっ……」

防具に包まれた腕で、未だ喋り続けるコイツの腹に拳をあてがう。そうすることで、やっとトレッドは静かになった。

細い細い目で苦しみを表現しては、歯を食いしばる。その歯の隙間から漏れ出る唾液。ちよつとだけ、胃酸のような臭いがした。

「……申し訳ありませんでした」

「分かりやあいんだ、分かりやあ」

喉仏を鳴らしつつ、トレッドは改まっては謝罪を述べる。それを適当にあしらっては、ようやく爆破の渦が収まったデインバルドの方を見た。一体どれだけの拡散弾を撃ち込んでいたのか、考えるだけで気が滅入ってしまった。そうだ。

その渦中にいたデインバルドといえ、何とも苦しそうな声を上げてはいるものの、麻痺から立ち直っていた。懸命に四肢を働かせ、甲殻の剥がれ落ちた首を動かす。俺た

ちに、ではなく、泉のあるエリア3に向けて。

「逃走、か」

「随分しぶといですねえ。ま、逃しませんか」

再び影のある笑みを浮かべては、トレッドは弾の調合を始めた。随分の量を撃つただ。消耗するのも避けられないのだろう。

鳥竜種の牙やハリマグロ、ツラヌキの実といったものを並べながら、一つ一つ貫通弾を増やしていくトレッド。その傍らで、俺に向けてその薄い口を動かし始めた。

「シグはどうしますか？ まだ戦いますか？」

「……もう爆破されたくないから行かん。あとは勝手に頑張れ」

「やっぱりですか……。ま、にやんにやんぼうくらいの戦力が落ちてもどうってことはないですね」

少し癪に障る言い回し。いつものにこやかな表情が、今では嘲笑のように見える。

腹は立つ。しかし、否定も出来ない。思わず言い返しに詰まっていると、準備を終えたトレッドはゆっくり口を開いた。静かに、しかし核心的に。

「——それじゃ、左目は潰しくそうですね」

「……あ？」

「シグ。あの武器は、もう使わないんですか？」

「……何の話だ？」

「片手剣、じゃないでしょ？ 君の武器は」

返答も打ち払うように、そう圧を掛けてくるトレッド。薄ら笑いのために細める目を開けては、その目つきの悪い、されど真摯な眼差しを向けてくる。

いい加減偽るのはよせとでも言いたげな、ドスの効いた瞳だった。

「……俺は」

思わず言葉に詰まった。イルルとも、ギルドマスターとも、あの唐揚げ女とも違うその言葉。俺のことをよく知っているその言葉に、俺は思わず答えを探りあぐねてしまふ。

一方のトレッドは、聞いてきた癖にあまり興味がなさそうだ。早く答えろとでも言わんばかりに眉を顰<sup>ひそ</sup>めている。

その時だった。

「おーっ、こりやまた……。サボテンがちよん切られとるわい！」

唐突なしやがれた声。この前、シチューを食べながら聞いていたあの声。

見上げれば、高台の上からこのエリアを見渡している小さな影があった。小柄な体軀に、薄赤い肌。白い髪に、白い髭。そう、先日世話になったあの山菜ジイさんだ。

「……ジイさん、来てたのか」

「おう、ハンターさんや。何かモンスターでもおったのかの?」

そこら中に散らばっているディノバルドの甲殻の破片を拾っては、彼は興味深そうにそれを見つめている。初めて見るのか、ご丁寧にルーペまで取り出して。

一方で、トレッドは態度を急変。冷や汗を垂らしながら、俺に話し掛けてきた。彼にしては珍しい、何とも焦った様子で。

「山菜組のご老体ですか。参りましたねえ……」

「ん? 何だよ、気の良いジイさんなの?」

「いやあ、以前彼の前で貰ったポロピツケルを捨てたことがあって……。そしたらもう、ね。……分かるでしょ?」

「……逆に聞きたいが何で捨てたんだよ。それも目の前で」

「だってポロですもん。要りませんよ」

「あつそう……。んで? それで以降関係悪いつてか?」

呆れたようにそう聞くと、彼は小さく頷いた。何とも理由が阿保らしい。いつぞや聞いた、貰ったアイルー食券を目の前で売り払ったハンターの話を彷彿とさせるエピソードだ。

「……ですので、僕は絡まれる前に去りますね。ディノバルドは僕が相手するので、彼の相手は任せますっ」

「……身勝手な奴」

そんな俺の悪態にも応えず、トレッドはずんずんと歩き出す。山菜ジイさんがこちらに向けて歩いてくる頃には、彼の姿は峡谷の影に消えていた。

一方の山菜ジイさんといえば、手に持った青い甲殻を嬉しそうに手に取っては、斬り落とされたサボテンを興味深そうに眺めている。こちらに向けて、というよりはこちら側にあるサボテンに向けてと言った方が正しいか？ 彼の足取りは、そんな感じだった。

「ジイさん、どうしたんだ？」

「……ハンターさん。サボテンカレーには、興味が無いかな？」

そつと声を掛けてみれば、ニヒルに笑うクエストの依頼人山菜ジイさんは、俺にそう問いかけてくる。峡谷の奥で響く銃声を背景に。



ぐつぐつと煮込まれる、緑色。恐ろしいまでに緑に染まったそれは、香辛料のよく効いたカレー特有の香りを上げていた。

その中に混じる、ただのカレーにはない不思議な匂い。立ち昇る、色の付いた湯気。



これが自らを凡庸ではないと主張するような、そんな力強さだ。

「サボテンって、何か味気ないな」

「そうじゃの。そのまんまじゃ、あんまし美味しくはないのう」

デデノパールと呼ばれるそのサボテンを、山菜ジイさんは見事な手付きで捌いていた。もともとデイノバルドによって焼き落とされた部位であるため、彼による加工は棘落としと切り分け程度のものであったが、やはりその手付きには目を見張るものがある。

そんなこんなで、一部分をスティック状にカットしてもらい、それを食べてみたのだが、これが予想以上に味が無い。ゴーヤのような、濃い苦味を想像していたのだが、無味といつても過言でないような、そんな味だった。

「ちよつと……酸っぱいか？ でも、薄いな」

「サクサクとしとるのに味が無いとは、面白い食材じゃのう」

ポリポリとそれを頬張りつつ、山菜ジイさんは嬉しそうに笑う。

そんな彼が掻き混ぜる鍋には、緑色と化したカレーが漂っていた。その細かくカットされたデデノパールと、挽肉状に溶かしたデイノバルドの肉を混ぜたカレーが。

「……肉少ないかな」

「甲殻についてたのを剥いだけじゃからな。やや物足りんかもしれん」

少し寂しそうな顔で、彼はそつとカレーをお玉で掬い上げる。濃厚な緑色と、それを

吐き出す細かなサボテン。そのとりまきのように漂う小さな肉たちは、カレーに身を任せるように流れ落ちていく。

斬竜、ディノバルドの肉。トレッドが放った弾で剥げ落ちたそれらにくつついていた小さな肉を、丁寧に剥いだ貴重な肉だ。未だ研究の進んでいない獣竜種。一体どのような味がするのだろうか？

「もう十分とろみがついたと思うんだが」

「……そうじゃの。そろそろか……」

ぐつぐつと音を立てるそれを掻き回しながら、彼は満足そうに頷いた。

気付けば、この旧砂漠で鳴り響いていたあの銃声は、もう聞こえていない。モンスタの怒号も聞こえず、ただ荒涼とした風の音だけが響いている。

トレッドはあのモンスタをもう仕留めたのだろうか？ そう考える程度には時間が経っていた。それだけの時間を、このカレーの製作に掛けていたのだ。俺ではなく、山菜ジイさんが、だが。

「よし、もうええじゃろ。ハンターさんや、そこの鍋のご飯を盛り付けておくれ」

「任せろっ」

背後にあった鍋から蒸かされた米を器によそいつつ、それを山菜ジイさんに手渡していく。このベースキャンプの一角に、まさか米まで用意していたとは。感心通り越して

むしろ恐れ入る。

そんな、おそらくそこらのハンターよりよっぽどベースキャンプを有効活用している彼は、渡された白米にとろりと、そのサボテンカレーを注いでいく。白と深緑のコントラストが、何とも美しい。

「さあ、食べようかの」

「よっしゃ。いただきますすー!」

カレー特有の鼻につく香り。荒く、それでいてさばさばとしたその香りは、いつものカレーそのものだ。だが、そこに混じる淡い匂い。先程食べたあのサボテンのように無臭に近い、されどうつすらとした酸味を感じさせるこの匂い。何だか、こそばゆい香りだ。

そんな一口を、そつと俺は口に入れた。辛味。甘味。そして酸味。口の中で弾けたそれらは、一瞬にして様々な味を弾けさせる。まるで味の雑貨屋。まるで味の属性強化。

スパイスのよく効いたこの風味。鼻腔を突き抜けるその風味は、まるで飛翔する竜のように辛さを振り撒いた。さながら某古龍の粉塵のよう。そうして塗りたくられるその辛さは、舌の細胞を細かく刺激する。辛い。辛いのが美味しい。辛味が別の味に絡まって、それがまた楽しい。

ルウ自体は辛くとも、控えめな甘さをもっていた。辛さで冷や汗を垂らす口内をそつ

と落ち着けるような、そんな甘味。味にすれば、中辛といったところか。辛さに溶け込む甘さが、カレーの風味を底上げする。混ざり込んだ斬竜の挽肉もひとまとめにしたその味。ぽろぽろと噛みやすく、その度に肉の脂を引き出すその味は、カレーによく合っている。挽肉を入れるカレー、中々相性がいいようだ。

「サボテン、どうじゃ？　カレーに染まっておるじゃろ？」

サボテン。そう、カレーに入れられた細かいカットサボテンは、見事にカレーの味に染まっていた。

あの無味に近い味とは程遠い濃厚な味。よく煮込まれたことによつて食感を柔らかくしたそれは、噛む度にカレーの味を染み出してくる。そのカレーに、ちよつとサボテン由来の酸味をかけて、それがまた美味しい。この酸っぱさがまた、香辛料の辛さを引き立てた。

「ん、美味しいなこれ」

辛味。甘味。そして酸味。

肉の脂も相まつて、これらの味は芳醇な旨味をより深く引き出している。とろみに溶け込んだような旨みとコク。米に絡んだこのカレーが、何とも美味しい。スプーンが止まらない。

「そうじゃろそうじゃろ？　さあ食べなさい」

「おつ、センキュ」

平らげてしまった器に、再びカレーを注ぎ直してくれる山菜ジイさん。その快い態度に感謝しながら、俺はおかわりにありつく。辛さによって、丁度良いくらいの汗が噴き出してきた。暑いところでの辛い飯つてのも中々悪くないぞ。

「しかしなんだ、依頼人がわざわざ出向いてくるとは思わなかったよ」

「現地で食えればそれが一番じゃろ？ そのためとあれば十分価値のある行為じゃとわしは思うよ」

「……ま、俺は有り難かったけどさ」

ぱくりとカレーを含みつつ、そう返す。山菜ジイさんらしいその行動に、少し笑ってしまった。俺にサボテンを集めるように依頼した彼が、待ち切れず米を炊きつつもあのエリア4へ訪れるとは。

全く、こんな面白い人物と仲互いするなんて。トレッドは本当に無駄なことをしているな。丁度良い交友関係を築けば、この通り美味しい飯を作ってくれるというのに。

「……俺は目の前でポロピツケルを捨てたりしないからな」

「おお、そうか。もしそんなことしたら、このカレーに毒けむり玉を仕込んでやるわい」  
全く目が笑っていない顔でそう笑う山菜ジイさん。

冗談っぽい響きだったが、そう言った彼の荷物からころりと転がってきた毒けむり玉

が、妙に印象的だ。俺の頬を垂れる汗が、本当に辛さからの汗なのか、分からなってきた。

「それか毒生肉でも混ぜようかの？」

「……どっちにしろ殺す気じゃんか……」

く 本日のレシピく

『アデサボテンカレー』

・ 山菜組式スパイス粉	……	1パック
・ カレー粉	……	大きじ1杯
・ 小麦粉	……	大きじ1杯
・ 斬竜挽肉	……	160g
・ ココナッツオイル	……	大きじ1杯
・ ブレスワイン	……	少量
・ 水	……	600cc
・ デデノパール	……	70g
・ モガモガーリツクソース	……	適量

## 盗んだハートを噛み締めろ

照り付ける太陽。荒涼とした景色。

まるでありとあらゆるものを風化させんとするその強い風は、この狩猟地を激しく唸らせる。突風により舞い上がった大量の砂は、俺の視界を阻害し、喉に不快な感覚を齎もたらした。

ここは旧砂漠。熱く乾いた、厳しい熱砂の世界だ。

「下から来るぞ！ 気を付けろオ！」

「にや……にやにやつ！」

そんな過酷な環境で行われる狩猟。今回のターゲットは、この砂地を泳ぐ大型の飛竜。一角竜、モノブロスだ。

奴らは非常に聴覚が発達しており、その研ぎ澄まされた感覚を用いては、地上でうろつく獲物を捕らえるのである。つまり今の俺たちは、正にまな板のサシミウオ。

直後、奇怪な衝撃音と共に目の前の砂が大量に捲り上げられた。視界が一瞬で砂色に埋まる中、その奥から唸る茶色が迫ってくる。

「ちいつー！」

目測も揺さぶられた今、回避するのは危険だろう。心許ないが、右腕の盾に頼るしかない。そんな判断の下突き出した右手に、不快な衝撃が伝わってくる。まるで集会所に取り付けられた大銅鑼を、腕の中で鳴らされたような。

それと共に襲い掛かってきた急激な負荷。それに体ごと吹っ飛ばされぬよう体勢を低くしつつ、体を腕で地面に縫い付ける。

「だ、旦那さん！ 大丈夫かにや!？」

「ああ……何とかな」

駆け寄ってくるイルルに応えながら、急いで振り返った。俺を突き抜けて走り去ったモノブロス。第二波の突進が来るのかどうか。それで次にとる手段が変わってくる。

だが、奴は突進を仕掛けてくることはなかった。ただ憎々し気に俺を睨み、その大きな頭を振りながら持ち上げる。

直後、まるで鼓膜を突き破るような勢いの大音響が、この広い砂漠で破裂した。一体何が起こったのか？ 簡単なことだ。モノブロスが吠えた、ただそれだけである。

「……ッ！ うるさ……ッ!!」

「にやつー！ ふにやああ……」

しかし奴ら——重殻竜下目角竜上科ブロス科は、飛竜の中でも訳が違う。その声量は



非常に鋭く豪快で、聞くものを戦慄させるような咆哮を放つのだ。その衝撃を前に、俺は耳を塞がずにはいられなかった。

聴覚が人間より優れているアイルのイルルは、俺よりもつと痛いのだろう。この咆哮力に対抗できる並の飛竜なんて、轟竜ティガレックスくらいなものか。

奴ら角竜は、休みなく暴れる。咆哮で硬直する相手のことなど、お構いなしに暴れ出す。目の前のモノブロスもその例外ではなく、動けない俺に向けて、その鋭い一本角を光らせた。

「にやあ！ しつかりしてにや！」

「うおっ……！ すまん、助かった！」

奴がその角を引っ下げ、突進を繰り返すその直前に。イルルが、懸命な表情で俺に喝を入れてきた。それが刺激となり、俺を蝕んでいた硬直を霧散させる。俺よりもあの咆哮が響いているはずなのに、苦労かけるな。

だが、ゆっくりお礼も言ってもらえない。やっと動けるようになった時には、モノブロスは一直線に俺に向けて走り出していた。その太い両脚が、砂を蹴り上げていく。

そんな威圧的な光景を流し見しながら、俺は奴の射線から離れようと前転回避。直後、背後から凄まじい量の砂が舞い上がる。

舞い上がった砂が煌めく中、奴はその角を高々と上げていた。まるで天を貫かんとす

るその様はとても勇ましく、猛々しい。強靱な両脚に大きな翼。武骨なその甲殻は、奴の好戦的な気性を如実に表していた。

「……おっと、見惚れてる場合じゃねえや」

突進から、ちょうど俺の背後で角突き上げを繰り返したモノブロス。

その突き上げは、角から察すれば分かるように、非常に恐ろしい威力を有している。だが、実はこの行動、足元ががら空きだ。揺れる鎚のような尾には注意が必要だが、脚に張り付いて戦えば特に問題ないのだ。

そんなわけで、俺は左手の片手剣を振り回して奴の脚を集中攻撃するのだが、当然奴も無抵抗ではない。うざったそうに低く唸り、張り付く虫を払いのけんとその尾を大きく回し始めた。

「ちっ！ 危なっ！」

「ふにゅあっ!?!」

その高速回転は、遠心力も相まって非常に恐ろしい威力を持つが、これも尾の回転に合わせて脚に張り付いていればそうそう当たることはない。その大きな尾は地を擦るように回るため、咄嗟の判断が必要にはなってくるが。

そして尾が地を擦れば、当然砂も舞い上がる。そうして撒き散らされた砂を、イルルは大量に被っていた。さっきの変な声はそれが原因か。

「ふにやつ、口の中がザラザラするにやあ……」

「元から猫舌でザラザラなんだから大丈夫だろ」

「にや！ 心外だにや！ ボクのはもつと……けふっけふっ」

砂が喉にまで入ったのか、イルルは急に咳き込み始めた。放っておくと被弾しかねない。そう思うや否や、体は動き出していた。

毎度お馴染みの体術でモノブロスの尾を飛び避けて、咳き込むイルルを両腕で抱え込む。そうして転がるように彼女ごとモノブロスから離れ、やつと一息。

「だ、旦那しゃん……」

「あー……まあ取り敢えず回復に専念しときな」

彼女を優しく下ろしてから、再びモノブロスに相對する。後ろから響く穴を掘る音を聞き流しながら、再び腰に携えた片手剣を引き抜いた。

一方の奴は、張り付かれたことが相当ストレスだったのか、今度は地面に潜り始める。荒々しく砂を掻き分けて、その逞しい翼を地に埋めていく。

「させるかよっ！」

それを黙って見逃す手はない。奴が潜り切るその直前に、音響弾が収まった右手を振り回す。遠心力に従って手を離れたそれは、丁度尾の先まで砂に埋めた奴の真上で炸裂した。

すると奴ほど強烈ではないものの、精神を掻き乱すような鋭い音が鳴り響く。

「ヴオオオオオツ!？」

奴らは地に潜る時、音で獲物を探す。そのため、地中に潜った時はただでさえ強力な聴覚をより研ぎ澄ますのだ。

そんな中であの嫌な音を鳴らされた暁には、あいつのように砂から顔を出してもがき苦しむのも分らないでもない。

「さあさあ、<sup>なぶ</sup>翔つてやるか……!？」

無防備に頭を曝け出す奴の、その目の前で。俺は片手剣を激しく振るう。左手で剣を、右手で盾を。斬撃と打撃を織り交ぜたその乱撃は、確実に奴の角に傷を入れ、脳を揺さぶった。

だが、ようやく落ち着きを取り戻したのか。モノブ羅斯はその大きな翼をはためかせ、普段は行わない飛行によって埋もれる体を砂から掬い上げる。

しかし、そう易々と逃がすものか。

「落ちて来な!？」

滞空中の奴の目の前に。懐から取り出したあれを放り投げた。

素材玉と光蟲を調査することで出来るそれは、モノブ羅斯の目の前でその身を大きく引き千切る。その瞬間、砂漠を一筋の閃光が駆け巡った。そう、閃光玉だ。

右手の盾でその強烈な閃光を遮った俺は、特に影響もなく次の行動の準備にかかる。しかし目の前で、モロにその閃光を浴びたモノブロスは。

「やったぜ、ビンゴォー！」

そんな俺の叫びを掻き消すように、衝撃音と呻き声、そして大量の砂が舞い上がった。強烈な閃光を浴びたために、平衡感覚を失ったモノブロスが落ちてくる。ただそれだけなのに、その副次効果は非常に派手なものだ。片手剣は盾があるから特に影響ないが、防ぐものが無い武器では些かやり辛いのもかもしれない。

ふとそんなことを考えたものの、目の前で呻くモノブロスを見て気を取り直す。今はとにかくコイツを料理することだけを考えよう。それも美味しく、二重の意味で。

そんな思いを顎に込めて、手にした片手剣の柄を啜える。そうして、自由を得た両手でロープを手繰り寄せた。

「取り敢えず、爆弾かな」

砂に埋まったロープが呼ぶのは、巨大な火薬の塊。砂を掻き分け、その身を転がし、もかくモノブロスの前へと躍り出る。呻く奴の鼻っ柱に、その大タル爆弾Gがそびえ立った。

非常に重いそれだが、狩猟時間の短縮のためには欠かせないものだ。ましてや火力の低い片手剣ならなおさら、である。

エリアの隅に置き、隙あらば手繰り寄せるのは中々の重労働だが、メインターゲット達成を早める、つまり実食までの時間を早めるのなら丁度良い食前の運動だろう。

そんな大タル爆弾Gは、この砂漠に再び閃光を齎もたらした。それも今度はシャレにならない爆風も添えて。どれくらいシャレにならないかという点、モノブロスの象徴とも言えるその一本角をあつさり折ってしまふほどだった。

「グオオオオオツ!!」

痛みに反応して、大きく頭を振るモノブロス。それに伴って散らばる破片を、奴は不思議そうに眺め始めた。

まさか、自らの誇りとも言える角が折られるとは思っていなかったのだろう。反射する欠片と、鼻先の虚無感が奴を包み込み始める。

「……怒った」

重苦しい重低音。それがモノブロスから滲み出ていると気付くまでには、そう時間か掛からなかった。

体勢を低く、威嚇するように。荒々しい鼻息が砂を舞い上げる。

一本角が折れたはずなのに、そのプレッシャーは大して衰えていない。それどころか、口から漏れる黒々しい息がより恐怖感を煽ってきた。

「……良いね。命タマの取り合いはこれくらい緊張感あるくらいが丁度良い」

怒り状態に陥ったモンスターは、形振り構わなくなる。コイツの場合は、音響弾のシヨックも無視するほどだ。故に音響弾を構えていても、意味ないだろう。ここは武器一筋で攻めるのが吉だろうか。

「グオオオオオオ……！」

「良いぜ……来い、来いよ！」

俺の挑発に応じるように、奴は再び地を蹴った。怒りに任せたその運動神経は驚異的な伸びをもたらし、先程までとは比べ物にならない速度を見せつける。

砂塵舞うその一撃は、回避した俺の横を通り過ぎてもなお止まらず、接触した巨岩を簡単に破壊した。直撃したらこの防具とはいえ、ただでは済まないだろう。

「ひゆう、あつぶねえ……！」

転がって体勢を立て直し軽く一息つく。

一度肺の中の空気を取り換えながら再び片手剣を握りしめ、いざ攻めんとしたその時、突然目の前の砂が盛り上がった。もこもこ何かが懸命に砂を掻き分け始め、ひよっこりと可愛い顔が現れる。

「ふみやあつ」

「……何だ、イルルか」

ヤオザミでも乱入してきたのかと思いきや、先程退避したイルルが戻ってきただけ

だった。

全身をふるふると震わせて、絡みついた砂を撒き散らすイルル。そんなコイツに呆れていれば、視界の端で再びこちらに向けて走り出すモノブロスの姿が過ぎる。

自らを狙う人間を、そのオトモであるアイルルをまとめて蹴散らそうと、あの武骨な頭が牙を剥いた。

「……っ！ イルル、準備しろ！」

「ふにゃ!? ……にゃっ！」

俺の声に慌ててイルルは反応するものの、モノブロスはもう目前まで迫っている。何というスピードか。平常時はどれだけ手を抜いているのやら。

それはそうと、このままでは俺もイルルも弾き飛ばされる。何とかここを切り抜けな  
いと。

あれを使うしか、ないか。

「——ふう」

奴の全身が俺を潰すまで物の数秒。その短い時間の中で、俺は小さく息を吐いて左腕を背後へ回す。

そのまま体勢を低め、奴の首の下を目掛け軸合わせを行って。

「はッッ!!」



接触するその瞬間。俺は左手を解放した。

極限まで力を溜めた筋肉は、圧倒的な運動エネルギーを生み出し、その解放に準じるまま弧を描く。それに伴うように体は一回転し、遠心力まで左手の刃は上乘せされた。

まるで俺の周囲を薙ぎ払うような軌跡。それは我武者羅に突進してきたモノブロスの頭を弾き飛ばし、それどころか軸を合わせたその首下を大きく斬り裂いた。亀裂のように走るその傷は、黄色の砂漠を紅く染め上げる。

「ハッ、ざまあみやがれ……!」

片手剣を代表する狩技、ラウンドフォース。俺が放ったその技は、ベルナ地方でそう呼ばれている。

極限まで筋肉を酷使うことで、圧倒的な勢いの回転斬りを放つこの技。火力は申し分ないが、如何せん負担も大きい。俺の左手も若干痺れており、しばらく使い物にならなそうだった。とりあえず右手の盾で何とかするしかない。

「にゃーっ!!」

「うおっ!?!」

左手と右手を相談させ、右手の盾を構えようとしたその瞬間。背後からイルルが急に飛び出し、モノブロスの懐に潜り込んだ。

怯むモノブロスはイルルに反応出来ずにただ驚きの声を上げ、一方の彼女はそんなも

のもお構いなしに、手にした王ネコ剣ゴロゴロで俺が作った傷をさらに抉る。それも一切の容赦なく。

「グオオオオツ!!」

悲鳴に近い声を上げたモノブ羅斯は混乱したのか、もしくは不利だと判断したのか。慌てて砂の中に潜り始めた。一心不乱に両翼を振るい砂を掻き分けていった。

そんなことをしたら余計その傷痛みそうな気がしないでもないが、敵から退避するのは最優先事項だろう。砂煙を上げながら砂中を潜行して逃げる奴の姿が、そう感じさせた。

「……逃げたか。いや、逃がさんぜモノちゃんよ」

「……だ、旦那さん……」

サツと取り出した砥石で片手剣を研ぎ上げながら、モノブ羅斯の逃亡方向を確認する。見たところ退、避したのは旧砂漠の北。岩壁に囲まれたエリア10か。少し狭い場所だが、罨なり何なり駆使すれば問題ないだろう。

問題なのは、先程突進したイルルが何故か動揺し始めたことだ。振り回した王ネコ剣ゴロゴロと、その先についた何かを見比べては、ふるふると震えている。

「どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「……ぶ、ぶんどりをしたんだにやあ……」

「お、何だ？ 何が獲れたんだ？」

何に動揺しているのかと思つたら、ぶんどりをしただけか。それだつたら特に動揺することも震えることもない、はずなのだが。コイツは一体何を獲ってきたんだ？

そんな疑問を胸に、俺は彼女の持つ剣の先に視線を滑らせた。そうして映りこんで来たのは、ドクドクと唸る赤黒い塊。幾つもの管を付けた筋肉の塊だった。

もしかして、いや、もしかしなくても。

「モ、モノブロスハート……にやあ」

「……マジかよ……」



バルバレの日常とも言える喧噪。

人やネコの声が入り混じつた往来は毎度の如く商売が活発で、競りで盛り上がっている店もあれば値切りに苦しんでいる店もあった。

そんな騒がしい日常と壁を挟むマイハウス。狭い路地裏にあるこの家は、その往来とは少し離れているために、喧騒を煩わしく思うことはそうそうない。

そのマイハウスで、俺はせっせと囲炉裏を熱しては大量の灰を積もらせていた。

「……旦那さん、どうするんだにや？ そんなに灰を用意して」

「いやな、折角イルルがモノブロスハート獲ってきてくれたんだ。だったら食わなきやだからな」

そう、昨日のモノブロス狩猟クエストで、何とイルルはモノブロスハートをぶんどってきたのだ。

まさかまさかのモノブロスハート。つまりは心臓だ。ガーグアやファンゴのハツは食べたことあったが、モノブロスは一度もない。一体どのような味がするのか？ 実食して確かめる他ないだろう。

——知ってます？ シグさんっ。砂原にはディアブロスが住んでるんですけど、あれって食べられるらしいですよ！ 残念ながら、人間の舌にはあんまり合わないんですけど。それにそれに、ドンドルマの管轄内ではモノブロスっていう別の角竜が生息しているんだとか。そっちの方は、一体どんな味がするんでしょう……？

ふと、以前聞いた言葉が蘇ってきた。海の風に紛れて聞いたあの言葉。熱く語る”彼女”のあの言葉。

彼女が言っていたモノブロスの肉、それが目の前にあった。奇しくも、バルバレでそ

の興味を追求することができてしまったようだ。生憎、彼女は不在なのだが。

そんな物思いに耽る俺には気付かず、イルルはため息をついた。やれやれと言わんばかりに首を振る。揺れる尻尾から、彼女が戸惑っているのは明白だ。

「やつぱり食べるんにや……。それにしても不思議にや。ぶんどった後もモノブ羅斯はピンピンしてたにやあ」

「ん……。そうだな、結局あの後も狩猟続行だったからな。……案外モノブ羅斯にとって、心臓は生命維持に携わっていないのかもしれない」

「にや？」

人間に腎臓が二つあるように、モノブ羅斯には心臓が複数あるのかもしれない。それとも、モノブ羅斯の心臓は血液を送る役目ではなく、生命維持には関わっていないとか。怒った時の変わり様から、運動を司る何かの機能でしかないとか。

まあ、考えていても仕方がない。そういうことはギルドのお偉いさん達がやることだ。ハンターがやるべきことはただ一つ。モンスターを狩って、食べる。これだけだ。

「……今回はホイル焼きにするつもりだ」

「モノブ羅斯ハートを、にや？」

「ああ。丁度良いことに、砂漠付近の村でインセキホイル売ってたからな」

そう言いながら、ポーチからその銀紙の筒を取り出した。

旧砂漠の洞窟には、落下してきたらしい隕石が鎮座している。『隕石の大塊』と呼ばれる脆くも貴重な材質のそれは、溶かして固め直せば優秀な素材となるのだ。

そんなこんなで作られたのがこれ、インセキホイルだ。保温性の高いこの素材だからこそ、ホイル焼きには打って付けなのである。

「にゃあ……。用意が良いにゃ」

「料理は準備が大切だぞ？ これくらい当たり前だ」

「昨日の帰りの竜車でせっせとハートの下処理をしたのも……」

「ああ、まさにそれだ」

ハツは余分な脂肪や血管、スジなどがついていてそのためそのまま食べるには適さない。丁寧に unnecessary な部分と切り分け、塩をまぶして水に付けて置いておくなど、それなりの処理が必要なのだ。

さらに今回は塩麴をまぶし一日寝かしてある。きつと味の深みも段違いだ。逆に言うなら、美味しいものを作るには適切な下準備が欠かせないという訳だ。

また、料理全体として見れば、部屋の奥で温めているアレも準備の一つと言えるだろう。

「イルル、奥の鍋で温めているアレを持って来てくれ」

「にゃ？ これかにゃ？」

「そうそう、それ」

ネコ用ミトンを渡しては、イルルにその鍋の中身を持って来てもらう。彼女が不思議そうに覗き込んだその鍋の中には、じつくりと蒸されたユクモニンニクが一つ。

蒸かされて、ニンニクの独特の香りとその中に潜む仄かな甘い匂いが俺の鼻を擽った。間近で感じているイルルならなおさら、だろうが。

「ふにゃ……ニンニク?」

「そうそう。それを持って来てくれ。……あ、あとその籠に入ったレアオニオンも」

ニンニクの風味を生かし、レアオニオンを引き立て役とする。そんな仲間に囲まれたこの料理の立役者、モノブロスハートは一体どのような味になるのだろうか?

そう考えると勝手に滲み出てくる涎を手の甲で拭きながら、イルルが持つて来てくれたレアオニオンを受け取った。朝市に買ってきたコイツは鮮度抜群だな。

「あれにや、旦那さんはユクモ地方の物が好きにや?」

「……確かに塩麴といひニンニクといひ、ユクモ風ではあるな」

イルルにはニンニクの皮を剥いてもらい、その間に俺はレアオニオンを薄くスライスする。その分業中に、イルルがそう尋ねてきた。

言われてみれば、確かに俺はユクモ村のものをよく料理に使っている気がする。ユクモニンニクに生姜、大豆など、思い返してみれば色々使っていた。まあ、大陸的に見れ

ば、故郷に近いために何となく愛着があるから、かもしれないが。

まあ、そんなことはどうでもよく。

「イルル、ニンニク出来たか？」

「出来たにや、こんな感じで良いかにや？」

肉球と爪を器用に活用し、イルルは丁寧にくくモニンニクの皮を剥いてくれた。

その十分な出来に満面の笑みで頷いてから、インセキホイルの中にモノブロスハート、ユクモニンニク、レアオニオンを入れていく。最後に幻獣バターを入れ、隙間なく包み込めば完了だ。

「さて、ではこれをアツアツの灰の中に入れて蒸し焼きするぞ〜」

「……そのためのインセキホイルなのにや、なるほどにやあ」

囲炉裏の中で大量に積もった白い灰を、さながらあのモノブロスのようにスコップで掻き分ける。そうして窪みを作り、その中にこのモノブロスハート入りインセキホイルを包ませた。

時間としては、二十分かそこらだろうか。十分熱を保ちながら蒸し焼きにしなければならぬ。火の調整には注意が必要だな。

それにしても、だ。

「……しかしまあ、ウチに設置された調理道具も微妙なものばつかだな、そういえば」



「にやあ。年季が入っているというか、味があるというか……」

「つまりオンボロというわけだ。……そこでだな」

「にや？」

話を改めるように、イルルの方を向いた。イルルもそれに合わせて、俺の目を真っ直ぐ見つめてくる。彼女の青く大きな両目に俺の姿が映り込んでいた。

考えるような、期待をするような。少し不安を感じているような。

自分の表情だというのに、そこに秘められた色は自分でもよく分からなかった。

「近いうちに引越そうと思う」

「にやあ、引越す？ どこへ？」

「——ドンドルマだ」

ドンドルマ。

それは、この周辺地域の中でもとりわけ都市機能が発達した、文明の中枢とも言える都市だ。様々な武器がそこで開発され、同時にモンスターの生態について詳しく調べる機関も設置されている。そして大老殿、つまりハンターズギルドの総本山がある。

とにかく最高レベルの都市と言っても過言ではない。地域の特性上モンスターの襲来に遭いやすいのも特徴だが、あの都市にはG級というランクまで用意されている。そのため、モンスターの撃退も容易いものなのだ。

「にや……ドンドルマ……」

「やつと旅費が貯まったからな。そろそろギルドカードの更新ができるし、それにG級許可証も受け取れそうなんだ」

「そうかにや……そうだったにや……」

許可証とは、大老殿への立ち入りが許されたハンターのみが持つ証。G級ハンターである証明そのものだ。

このバルバレでの功績によって俺はG級昇格の条件を満たし、あとは発行するだけなのだが、紆余曲折があり俺は金欠に悩まされており、ドンドルマに行けないでいた。つまり発行出来ていないのだ。

まあ紆余曲折というか、食にこだわりすぎるあまりクエストの失敗が多いことが主な原因なのだが。

そんな俺だが、この前のモノブロス討伐を経てやつと安定した旅費を手にすることが出来た。これでやつとドンドルマに行くことが出来る、のだが。

「お前の事情も知ってる。嫌だったら拒否してくれていい。良いハンター紹介してやるし、ほかほか島で暮らしても……」

「……何で、ドンドルマなのにや?」

戸惑いながら、ためらいながら。それでもなお、イルルは俺に問いを投げかけてくる。

どうしてドンドルマを目指すのか。自分が行きたくないという気持ちより、俺自身のことを知りたいというような、そんな瞳だ。何となくだが、そう感じた。

だから俺は、その心に応えるように、胸の内から言葉を投げる。今まで彼女が踏み込んだことのない、俺の深い部分を。

「……探してるモンスターがいるんだ。そいつに会うには、ドンドルマが最も都合がいい」

「にやあ……。旦那さんは、どうしてもドンドルマに行くのにや?」

「ああ。俺はそのためにこちらの地方に来たと言っても過言じゃないからな。まあすぐに答えを出せとは言わない。ゆっくり考えてくれ」

俯いて悩むイルルの頭をそつと撫でながら、俺は静かに灰の様子を眺め始める。

沈黙と、火が燃える音と、鼻孔を刺激するニンニクと肉の香りだけがこの空間を支配していた。



「そろそろ良いかな?」

火の様子を眺めること二十分。

よく熱された肉の香りが、灰の中から懸命に顔を出していた。その香りの周りを漂うように、ニンニクや塩麴の香りもまた主張を始める。香りから判断するに、もう食べても良さそうだ。

スコップで灰を掻き分け、アツアツのインセキホイルを回収する。十分に熱されたそれはとても素手では触れないが、ミトン越しなら問題はない。

そうして丸められたホイルを剥がしていくと、漂う香りはさらに厚みを増した。ホイルの中で凝縮された香りが、今解放される。

「あー、めっちゃ良い香り……」

「いやあ、美味しそうにやー」

イルルもその香りに思わず口角を上げていた。心なしか尻尾も揺らしているようで、料理を前に心が昂ぶっているのが分かる。

それは俺も同様に、早くアツアツのそれを箸でつつきたくて堪らなかつた。だがあと一時間。刻んだまだらネギと七味を加える。これで仕上げだ。

「さあ、完成だー！」

「いや、いただきますー！」

密閉空間で芯まで熱されたモノブロスハート。赤いその身からは煌めく様な脂が滴り、それを彩るように乗った麴や七味が食欲を刺激する。

漂う肉の香りとニンニクの匂い。そしてその中で眠る溶けた幻獣バターも、うつつらと目を覚まし始める。香りを鼻で頬張るとでも言うべきか。矛盾しているようだが、この香りの素晴らしさを表現するにはその言葉が相応しいように思える。

だが、香りだけではない。最も肝心なのはその味だ。

ということ、早速箸で摘まんだそれを口の中に放り込む。口いっぱい広がるその豊かな香りだけでも美味しく感じそうだが、本領はまだまだこれからだった。舌に乗ったその身からは芳醇な脂がじつくりと染み出し、肉の旨みを広げ始める。

まだ噛んでいないのにこれなのだ。そう、噛んでみればそれは想定以上。心筋は筋繊維が細いため、肉厚でコリコリとした食感が特徴的だ。

モノブロスハートもその例外ではなくその抜群の歯触りを俺の口の中に刻み、同時に溢れ出る脂が口の中を染め上げていった。その量の割に諄くはなく、思った以上に淡泊な味わい。

内臓でありながらも、臭みが少ないのが特徴的だろうか。同時に温めたニンニクやレアオニオンの風味が、臭みを上書きしているのかもしれない。仕上げとして加えたまだらネギや七味のピリツとした辛さも良いアクセントとなり、顎を動かすのを飽きさせなかった。

「美味しいにやあ……」

「そうだな、これは美味しい。マジで美味しい」

イルルは内臓の独特な風味が若干苦手なイルルだが、そんな彼女もこんなに笑顔で食べる事が出来るのだ。ニンニクやレアオニオンを加えたのは正解だったな。匂いにも、もちろん味の面でも。

予想を裏切らない——いや、良い意味で裏切る勢いのこの旨さ。モノブロスと、こんな美味しいものを持って来てくれたイルルに感謝しながら、俺はひたすら食に徹する。

「イルル」

「にや、何にや？」

「こんな美味しいの持って来てくれてありがとうとな」

「……うにやあ。どういたしましてにや！」



「ふう、食った食った」

「美味しかったにや〜」

狩猟時間に捉われない、優雅な食事のひと時。

狩猟地で食う飯にはそこで食べるこそその美味さや良さがあるが、たまにはこうして

ゆっくり食べるというのも乙なモノだ。

俺とイルルはすっかり完食。お粗末様でした。

「さて、そろそろ片付けるか……」

食事を終えたのなら後片付けもまた重要。気怠いことには気怠いが、これを済まさねば次回の食事には移行できない。料理したものとして必要不可欠な行為の一つだ。

ということ、早速近くにあったインセキホイルを素手で掴んだ、のだが。

その行動は早計だったとしか言いようがない。

「……? ——アツツっ!」

「にや!?! 旦那さん!?!」

触ったそのホイルはまだかなりの熱を内包しており、軽く掴まんだ俺の指先をうつすらと焼いた。そこからじんわりと、嫌な痛みが込み上げてくる。

どうやら、このインセキホイルはかなりの保温効果があるらしい。保温に優れているとは聞いていたが、まさかここまでとは。流星は隕石。未知の物質なだけある。

「だ、大丈夫かにや? 火傷にや?」

「あ、ああ。まあそんな大したことないよ……」

小さな両手で俺の指先を抱えるイルルは、その火傷を見ては哀しそうに目を伏せた。

何もお前がそんな顔をする必要はないだろうに、と心の中で思う俺を余所に、イルル

はその肉球で優しく包む。そして火傷の具合を確認し、何か決心するように、伏せていた目に光を灯らせた。

「……筆頭オトモさんが言ってたにや」

「あん？ 筆頭オトモ？」

「……傷は舐めておけば早く治るって」

「は——ちよっ!？」

何を血迷ったのか。イルルは、俺の火傷の部分をそつと舐めた。猫舌のザラザラで舐められたらもつと痛いじゃないか。そう思つては襲い来るであろう痛み思わず身構えた、が。

その痛みはこなかった。代わりにやって来たのは、まるで包み込むように優しい、滑らかな感触。ゼラチンのような、俺の想像以上に柔らかなものだった。

「イルル……お前」

「旦那さん、痛みは……少しは引いたかにや？」

「……ああ、大分マシになったよ」

空いている方の手でイルルの頭を撫でながらそう言うと、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

昨日はザラザラとか言ったが、改める必要があるかもしれない。



それにしても、筆頭オトモはどんな持論を持つているのか。確かに唾つけときや治るとか言うが、実際そんなもんじゃないだろうに。

だがまあ、嬉しそうに微笑むイルルを見ていたらそんなこともどうでも良くなってきた。

こうしてゆっくり、準備もちよつと後回しにしてゆっくり食事の余韻を楽しむのも悪くない。後片付けまでが食事とも言出し、それをちよつと長引かせて、こうして食事の時間を多くとるのも悪くないなど、そう思った。

く 本日のレシピく

『モノブロスハートのホイール焼き』

- ・モノブロスハート …… 300 g
- ・塩麴 …… 適量
- ・ユクモニンニク …… 1 個
- ・レアオニオン …… 120 g
- ・幻獣バター …… 18 g
- ・まだらネギ …… 少量

・七味

……適量

## 讚えよ丸いゴールデン

ざわざわとした、騒がしい人の声。

狭い路地を超えた裏通りにあるこの家に、微かにとはいえ届いてくる市場特有の喧噪。けたたましい声で商売に花を咲かす音が聞こえれば、その花に止まる蟲のように商売に食い入る客の声も聞こえてくる。

——時刻は早朝。大砂漠が日の出の光を浴びて輝き始める時間である。

「旦那さん、朝だにゃ」

バルバレの朝は早い。市場というだけあって商品の鮮度を重視するここの商人たちは、早朝からせつせと行商に営むのである。そしてそれに食いつく客たちも、また少しでも良いものを手に入れようと早朝から動き出す。

日の光が砂漠に差し込む時には、バルバレの大通りは既に人で飽和しているのだ。

「もう日は昇ったにゃ」

しかし現在バルバレは大砂漠付近に位置する。するとどうなるか。

答えは簡単だ。砂漠の影響が色濃く出てしまうのである。もっと具体的に言えば砂

漠の急激な気温変化を直接被ることになる。

——つまり早朝のバルバレは非常に寒いのだ。

「そろそろ起きて、朝の準備しようにや?」

そんな寒い中でも商売に徹する商人や、それにありつこうと蠢く客たちには素直に感心する。こんな寒い朝には、温かいベッドの中でゆっくり惰眠を貪るのが一番だ。もつと言うと、温かい何かがあると良いのだが。温かい枕とか、湯たんぽとか。

「旦那さん、起きて……って、何にや? 急にボクを掴んで……えっ!」

それを求めて両手を伸ばすと、それは案外近くにあった。

掌から直に伝わる温もり。ふわふわと柔らかく、それでいてサラサラと撫で心地の良い毛並み。その毛並みから漂うふんわりとした花のような香りが、俺の鼻孔を擦ってくる。大きさも抱きかかえる事が簡単に出来るほど小柄で、とても軽い。

一体それが何かは分からないが、その温かいものは案外すつぽりと俺の腕の中に収まった。

「にや、にやあ……。だ、旦那さん……寝ぼけてるのにや? ボクは枕じゃないにやあ……」

その温かいものが何か言っているような気もする。それどころかまるでがくようにバタバタと動き始めるが、それでも俺は腕を離す気はない。思いのままにこの温かい

毛並みに顔を埋め、秘められた温もりを精一杯感受する。

「ふにや……にやあ……」

結局その温もりも動くのを止め、満更でもなさそうな声を漏らした。

ぬくぬくとした毛並み。心地良い温もり。そんな温かいベッドの中で、俺は再び微睡まじろみの沼の中に身を浸すのだった――。

「……さあ、朝飯食うか」

「旦那さん、もう日は昇り切ったにや」

耳を削ぎ落としたジャンボパンを手頃なサイズに薄く切り分け、その中にシモフリトマトやら砲丸レタスやらモスハムやらを挟んでいく。今日の朝食はさっぱりとしたサンドイッチ、と言ったところだろうか。

しかしイルルはつれない態度でそう呟いてから、そのサンドイッチを齧り始めた。

「……もうお昼なのにや」

「しかし俺は今日が覚めた。つまり俺にとっては朝なのさ」

どんな極論だにや、と彼女は呆れたように小さく吐き、サンドイッチの中からシモフリトマトだけを器用に引っっこ抜く。どうやらそれは彼女の好物らしく、口いっぱい頬

張りたいらしい。

まあそれはともかく、まだ目が覚め切っていない俺にとってはまだ朝だ。取り敢えずゆつくり朝食を取らせてもらおう。

新鮮さを重視しようとする前の氷結晶ボックスで保管していた砲丸レタスとシモフリトマトはよく冷えており、細胞壁を噛み砕くこの野菜特有の食感を色濃く残していた。

爽やかな風味にシャキシャキとした食感のレタスと、ジューシーでとろみのあるシモフリトマトの果汁。トマトは果物ではないが、この水分の内包量は果汁と表現する他ないだろう。それらに浸された柔らかいジャンボパンはしつとりとした甘みを形成し始め、それが比較的淡泊な味のモスハムに絡み合っていく。醇とくなく、あっさりとした味の野菜の風味が強い、フレッシュな味わい。寝起きの体を活気付ける朝食にはピッタシだ。

だが、何か、何か足りない気がする。味、量、バランスと特に問題ないのだが、何か物足りない。あと一つ、あと一つ何かを加えれば。そうすれば、この一つだけ空いたパズルのようなもどかしさが、消え失せるような気がするんだが。

「ううむ……」

「朝から唸ってどうしたのにや?」

「あと一押し、あと一押し何か欲しいな……」

「……？ 何を——ああ、ご飯のことかにや……」

唸つても中々思い付かない。寝ぼけた頭ではいくら考えても出てこない。

小さくオンボロなマイハウスの中で、俺の唸り声とイルルの溜息だけが響いていた。



昼過ぎのバルバレ。斜めから光を差す太陽に顔を顰めながらも、午前中から全く衰えない人の往来の中に俺は身を投げた。要は買い物である。

この地方で一番の市場都市と謳うだけのことはあり、バルバレには様々などころから様々なものが集まってくるのが特徴だ。ポツケ村農場やココットキノコ村、モガ養蜂所にドンドルマ市場からも品が届く。

ついでにいつもお世話になっている向かいの雑貨屋は時折ユクモ地方の商品を扱うこともあり、言わずもがな俺はそこからユクモの品を仕入れている。先日俺が活用したあの巻き簾も、ここで手に入れたものだ。

——まあ、今日は市場の生命線とも言える大通りを彷徨っているわけだが。

「あつちいーなあ……」

「にや、朝の寒さが嘘のようにやあ」

現在の太陽は頂上から少し傾き、西の空に落ちようとしている。地表と大気の温まりの中に起こるタイムラグから考えると、暑さは今がピークだろう。ましてや砂漠は昼夜の温度差が激し過ぎるため、違和感と疲労感水増しされているような気がしないでもない。

「人も多いし暑苦しいし、さっさと目当ての店に行くとするか」

「にやあ。どこに向かつてるんだにや？」

「武器屋だ。ほら、あの奥の」

俺が指差すその延長線上。そこにはゴマすりをしながら客を集めようとする男と、その奥で並ぶいくつもの武器の姿があった。

新人ハンターが主にお世話になる武器屋。ある程度クエストを熟こなすようになると、ほとんどのハンターは加工屋に入り浸るようになる。が、ここの武器屋はただ安い武器を取り扱っているだけの店ではないのだ。

「いらつしやい、ハンターさん！ ……って、何だ。シグの旦那か」

「何だとは何だ、客だぞ俺は」

「あはは、見知った方ならな。旦那なら尚更つてもんよ。 ……んで、今日は何の御用で？」

「武器 ……じゃないよな？」

「ああ、取り敢えず大通りで話すのはマズい。少し店の奥で話すぞ」



苦笑いを混ぜながらも笑みを隠すことが難しそうな武器屋の主の横を通り、薄暗い武器屋の奥に身を沈める。数多くの武器に囲まれたこの金属臭い店の中で、奥にある適当な椅子に腰かけると、何やら困惑したような表情で、俺の後についてきたイルルが疑問を露わにした。

「旦那さん……。な、何にや？ 何でわざわざ店の奥へ……？」

「イルル、ここからは極秘事項なんだ。聞かれちゃマズいことを大通りで話すバカなんていないだろ？」

俺の返答が理解できないのか、イルルは可愛らしく首を傾げる。

そんな彼女の姿を認識した武器屋の主は、不思議そうな顔で俺を見た。イルルが部外者かどうか、嫌疑一色に染まった瞳である。

「ん？ ……シグの旦那、このアイルルは？」

「安心しろ、こいつは同志だ。話に混ぜても問題ない」

「にやつ？ ど、同志……？」

「……まあ旦那がそう言うならそうなのだろうよ。もし違ったのならチコ村の奴に連絡だが、な」

明らかに動揺するように、イルルは震えながら俺と武器屋を交互に見た。その瞳は正に困惑一色。面倒ごとに巻き込まれたと言わんばかりの表情だ。

そんな彼女の後ろに立つ武器屋の彼は、渋々と納得したように頷いているが、その心の奥底では嫌疑が拭いきれていないらしい。穏やかそうな瞳の奥底で、一種の狂気が爛々と輝いている。

「それはともかく、最近はどうだ？　ボスから何か回ってきているか？」

「いやあ、ナグリ支部で少しゴタゴタがあつたつてくらいか？　特にこれといったことは回ってきてねえぜ」

「どうも天空山の方は生態系がおかしなことになっているとかいう噂もあるしな、ボスも忙殺真つ最中かもしれん」

この前霞ヶ草のおひたしを作った後くらいからか、どうやら天空山のモンスターに変が起こつたらしく奇妙な現象が度々報告されているらしい。『山を黒い風が覆つた』とか、『モンスターが瘴気に侵された』とか。それでギルドからも調査が入り、シナト村の方も多忙の極みなのだろう。

それと、我らの団も今シナト村を訪問しているらしい。それも多忙の要因の一つかもしれない。

「んで、早速本題に入りやしよう。わざわざこの小汚い店にまで出向いたつてことは……シグの旦那、俺の求めてやまない例のブツを……？」

「ああ、そうだ。今日はお前の依頼に応えようと思つてな」

「マジかよ……！ やったぜ。それじゃ早速、詳細を話すとするか。ちよつと待つてな……」

昂ぶる気持ちを抑えられないように上がる口角を何とか手で押さえるもの、それでも抑えきれないように微かに肩を震わす武器屋は、そう言つて店の奥へと姿を融かしていく。

どうやら何かしらの道具を取りに行つたらしい彼が消えたところで、イルルは動揺を隠せないまま体を震わせた。まるで体についた水滴を払う様に。

「旦那さん……一体何の話にや？ ボスとか例のブツとか、ボクにはさつぱりだにや」  
「イルル、ちよつといいか」

困つた様に首を傾げる彼女をそつと抱き上げ、まるでひそひそ話をするかのように彼女の耳を俺の口まで近づける。ほんのり伝わる彼女の温かみと柔らかな匂いを感じながらも、そのふさふさとした耳に向けて俺は小さく呟いた。

「これは完全極秘事項だ。絶対に他言するな。何も見なかつたと、外ではそういうことしておくように」

「にや……まさか、旦那さん……良くないことを……!?!」

イルルは、その大きな瞳を見開いて俺を見た。

まるで信じていたものが崩れ去るような、絶望感と喪失感を思わせるようなその瞳。

微かに震えながら俺の瞳をじつと見て、何かを言おうとして、でも言葉にならなくて。もどかしさを噛み締める様に、イルルは顔を歪ませた。

「待たせたな旦那……って何してるんでい？」

「いや、何でもない。んで？ 何を取っていたんだ？」

「ああ、これさ。遺跡平原の地図だ」

店の奥から姿を現した彼が持つてきたのは、何のこともないただの遺跡平原の地図であつた。ハンターならいつも目にする、支給品ボックスに詰められているそれ。

それを小さな机の上に大きく広げた彼は、地図に描かれた平原の北東あたりを強調するように筆で印をつけ、俺に顔を向けてくる。先程抑えられそうになかった笑みはいよいよ荒ぶる金獅子のように拘束の仕様がなさそうだった。

「このあたり。このあたりに、あいつがいるんだ。世にも珍しいあいつが今現れてるんだよ……！」

「そうか、とうとうこの時期が来たんだな。よし分かった、行つてこよう。表向きは採取ツアーで良いよな？」

「ギルドの中にも組織の人間はいるからな。連絡を回しておくよ」

クエストを依頼者がギルドを通してハンターに伝えるには、それ相応の時間が掛かる。緊急クエストのような事態が深刻なケースは話が別だが、今回の様な分類のクエス

トは必ず後回しにされてしまうだろう。

ならば表向きは採取ツアーとして出発し、裏ではギルドの職員と工作して例のブツを持ち帰る。この方法がベストだろうな。

「旦那、気付かれないようにこっそり後ろからドスリ、だぜ？」

「分かつてるって。俺を誰だと思ってるんだ？」

「シグの旦那……いや、『卵シンジケート』のナンバー4、シガレット。健闘を祈るッ！」

武器屋の野太い声が、この小さな部屋の中で木霊した。

その声を俺は背中中で聞きながら適当に手を振って応えておく。その一方で、終始不思議そうな顔をしていたイルルは困ったように、鳴き声を一つ上げた。



谷を抜ける風特有の耳に残る音。それが脳を掻き乱すように俺の耳から通り抜けていくが、敢えてそれを無視しつつ岩陰の奥で例のブツを持つ標的を見定める。

山に囲まれた、この小さな泉。付近にネコの巣があるこの泉で、ゆつくりと水を飲む奴——丸鳥、ガーグア。鳥竜種竜盤目鳥脚亜目真鳥下目丸鳥科に分類される奴は臆病な性格が特徴的な、ただ丸い鳥。とはいえ、それだけではない。実は、奴らは非常に良質

な卵を落とす。

それも武器屋が喰るこの時期は、組織の中でも崇拜の域に達するまでの極上卵——俗に言う金の卵を落とす個体が現れるのだ。比較的大柄で、立派な嘴くちばしを持ち、野太い鳴き声を放つ個体。俺の目の前で水を飲むアイツは、この条件の全てに当てはまっている。

「旦那さん。……もしかして、あれのことじゃ?」

「シツ、静かに……騒ぐなよ。物音を立てたらチコ村支部の、あの刑に遭わすからな……!」

幸いこちらは風下で、奴にはまだ気付かれていない。そして水辺の岩場のおかげで俺は身を隠しながら奴に近付くことが出来る。これは願ってもないチャンスだ。いや、むしろ願ってやまないチャンスか。

「いいか、イルル。俺が行くからお前はここで待つてろ。音を立てるなよ」  
「だ、旦那さん……かつてない程目がマジにや……」

呆れるような彼女の眩き。いつもなら気の利いた返しを考えるものだが、生憎今回はそんな余裕がない。血走る瞳と脈打つ心臓を理性で抑え、周りに聞こえるのではと感じるほど荒れる鼓動を押し殺し、ただ一心に脚に力を込める。

水溜まりは避けて、枝は踏まないように。物音を立てずに、岩場に身をひそめつつ、確実に奴との距離を縮めていく。

「落ち着け、落ち着けよ……俺……」

過度の緊張で視界が赤く染まり始めた。一種の幻覚のような、不思議な感覚が俺を支配する。奴との距離はほんの数メートルなのに、まるで永遠に縮まらないような。そんな一種の不安感に、押し潰されてしまいたいそうだ。

一步、また一步。永遠と錯覚しそうなその大きな一步を、俺は懸命に踏み締めていく。踏み締めて、踏み締めて。奴にじつくり近付いて。

極限の状態は案外あっさりとはなくなるものだ。永遠など存在しない。今俺の目の前に存在するのは、俺に気付かずただ水を飲み続けるガーグアだけだった。

とうとう、とうとうこの瞬間がッ！

乾いた俺の口の中に大量の唾液が染み出し始める。まるで干上がった土地に雨が降るように、乾き切った俺の精神は一筋の光明を感じその身を奮い立たせた。

あとは、蹴りだ。たった一発の蹴りで全てが終わる。さあ、準備は良いか？ ゆつくり、ゆつくりと右脚を上げて――。

「……そおいつー！」

「グアッ!？」

光に照らされ反射する水滴。

力のままに蹴り上げた脚に付着していた泉の水は、放物線を描くように宙を舞う。そ

の軌跡を置いていくように昇り詰めた俺の脚は確実にガーグアの尻を捉え、不快な肉の感触を残した。骨と骨が擦り合うような感覚が肉越しに伝わってくる。

それと同時に水面が跳ねた。響くのは、物体が水面に落下した時特有の、あの鈍重な音。音の発生源に視線を滑らせてみれば、そこにあるのは太陽の恵みを全身全霊で吸収するかの姿。俺たちが崇拜してやまない、ありのままの生命の姿。

「——出た。……金の卵だ!!」

黄金色に輝くその卵殻は太陽の光を眩く反射して。湧き出る麗水に身を浸すその姿は見る者を魅了して。

極限状態を乗り越えたその先にあつたのは、黄金の結晶。生命の神秘の代名詞を取るような、信仰を集めることすら容易に出来そうなほどの神々しさを持つ光。

「にやつ、ほんとに金色にや!」

「グアツグアツ!!」

大きな瞳を驚きの余り限界まで見開かせるイルルは、衝動に身を任せるように飛び出しては卵の近くに駆け寄ってきた。

一方で俺とイルルの存在を認知したこの卵の主は、狼狽える様に鳴き喚いては転がるように逃げ始める。自分の産んだ卵も省みず、ただ一心不乱にその細い脚を動かしていった。それと同時に周りで共に水を飲んでいた他のガーグアも異変に恐れ、雄叫びを



上げながら走り始める。

「グアーツ!!」

「……旦那さん、どうするにや? 放っておくのかにや?」

「ああ、別に親まで狩ってもそんな……いや、待てよ? ガーグアの肉で親子丼……」

ガーグア特有の筋の細い、噛み応えのある鳥肉。ファンゴなどと比べると比較的淡泊なその味を、卵の濃厚な味とろみ包み込む。それをモガモガリックで味付けてコトツトライスに絡めた日には、俺は死んでも一片の悔いがないだろう。

「親子丼、素敵な響きだな」

「……現実的に考える一家皆殺しにや。無慈悲過ぎる料理にやあ」

「この世は所詮弱肉強食。これもまた自然の摂理だろ」

イルルの憂いを聞きながらも、逃げ惑うガーグアに向けて武器を抜こうと、奴らが走る山岳の方へ振り返る。一番最後尾で走っている太ったガーグア。アイツで良いだろう。

とはいっても、卵を放っておくことは出来ない。取り敢えず、イルルに運んでもらおうか。

「イルル、お前はこの卵をキャンプまで持って行ってくれ」

「にや? ボ、ボクがにや?」

「ああ。絶対に、落とすなよ？ 落としたりどんぐりロケットで空の彼方だからな」

ドスを利かせる様な声でそう念を押すと、イルルは少し怯えながらも「分かったにや……」と了承してくれた。

まあ俺は彼女の腕前を信頼しているからこそ卵を預けることが出来るのだし、そこまです心配する必要はないだろう。今俺がすべきこと、それはあのガーグアを狩って立派な親子丼に仕立て上げることだ。

「じゃ、任せた。俺は早速アイツを確保してくるよ」

「にや、いつてらっしやいにや」

手を振る彼女に背を向けて、俺は脚に力を込める。そうして逃げ惑うガーグアまで距離を詰めて、腰に付けた片手剣を抜き放った。風を斬るように唸るその斬撃が、ガーグアの羽を切り裂こうとするその瞬間。

——異変は、起きた。

「……にやつ!? だ、旦那さん！ 危ないにや！」

「え——なっ!?!」

突然飛来した黒い影。赤黒い甲殻に身を包んだそれは、豪快な音を立てながらこの狭い谷間に飛来した。そのまま一直線に、脚についた鋭い爪で俺が狙っていたガーグアに襲い掛かる。

強靱な翼。毒気を含む液体を滴らせる爪。厳つい甲殻に鋭く青い瞳。その姿は天空の王者と謳われるあの飛竜、リオレウス。

——のはずなのだが。

「……!? 何だコイツ……何かが違う……!?」

俺とてリオレウスと対峙したことは何度もある。だが、俺が今まで見てきたリオレウスとは少し違った。

焦げたような色で染まる甲殻。赤熱化するように勇ましい鱗。俺が今まで見てきたリオレウスは、ここまで黒く染まった甲殻を持つていなかったはず。

それに翼の模様も何かが違う。まるで炎の揺らぎのような、奇妙な模様。

リオレウスの力を象徴するような、見る者を戦慄させるような。その見たことのない迫力に、俺は思わず生唾を飲み込んでしまう。

「ゴアアアアアアアアアアアツツ!!」

瞬間、大銅鑼を打ち鳴らしたかのような衝撃が、大気を震わした。音の爆弾というべきか——並のリオレウスとは違う圧倒的な音量が、この狭い空間を反響させる。

俺もイルルも思わず耳を塞ぎ、鋭い爪で押さえつけられながらその怒号をモロに浴びたあのガーグアは、何とそのまま息絶えた。

「……コイツ。コイツは、何かやばい! イルル、早く卵を持って逃げろ!」

「にや、にやにや！　だ、旦那さんは?!」

「俺のことは良いから！　さっさと行け！」

慌てて卵を抱えるイルルを急かしながら、俺は剣を構えて奴に対峙した。イルルに気付かせないように、俺に注意を引き付けるように。

重い卵を懸命に運び始めるイルルと、俺に向けて敵意を露わにするリオレウス。その鬼気迫る迫力に、俺の中で少し恐怖感が芽生え始める。

だが、こんなところで震えてはいられない。何とか奴の注意を引き付けて、イルルを逃がさねばならないのだから。

突如、奴が俺に向けて走り込み——その口から溢れる炎を大きく吹かせた。まるで油が注がれた火炎のように燃え盛るその火は、俺が今まで見てきたリオレウスの炎とは違う。溢れんばかりのその熱に、目測を誤った俺はあっさりと吹き飛ばされた。

「——がつ……!?!」

体に付着した火の粉は泉の水が消してくれる。おかげで大した損傷はなかったものの、今の一撃だけでこのリオレウスの実力を垣間見てしまったような気がする。

そんな俺に対し、奴は悠然と飛び上がっては再び口の中で光を溜め始めた。リオレウスが得意とする空中からのブレス。ここら一帯を、焼き払うつもりか。

「ちっ……当たるかよそんなもん！」

弾ける水と、破裂する炎。

それらを掻い潜りながら全て避け、その一瞬の隙を突くように懐から閃光玉を取り出した。飛竜の平衡感覚を狂わすほどの強烈な光。それを、口の中の熱を振り払う奴の目の前へ。

その直後、この狭い谷の中で強烈な閃光が炸裂する。リオレウスもリオレイアも、セルレギオスも。滞空を好む飛竜を容赦なく叩き落とすその閃光が奴の眼に直撃したのだ。これで奴は耐え切れず落ちてくるだろう。そうして出来た隙に爆弾を叩き込めれば良い。

そう、思っていた。

「ガアアアッ！」

「……………ッ!? 嘘だろう!」

閃光玉で落ちるのはあくまでも並の個体であって、ここまで強靱な個体には通用しない。

そう証明するがの如く、奴はあの強烈な閃光をもともせず滑空し、俺に向けて突進を図ってきたのだった。咄嗟のことだったが何とか躲した俺は、もう一度イルルの様子を窺う。

上手く逃げ切ったのだろうか。彼女の姿はもう見えず、ただ卵の重みでやや陥没した

ネコの足跡だけが残っていた。

「ふう……。後は如何にコイツを引き付けておけるか、か」

今の俺の装備では、コイツには太刀打ち出来ない。

これまでのやり取りでそれが分かった気がする。挑み続けたところで返り討ちに遭うのは目に見えているだろう。だったら問題になるのは、イルルがキャンプに辿り着くまでの間に如何にコイツを引き付けていれるか、だ。

「イルル……なるべく早くしてくれよ……！」

唸るコイツの目の前で乾いた声が漏れる。

コイツさえ、コイツさえ乱入してこなければ、今頃俺たちは無事キャンプに辿り着いて、竜車に乗ってバルバレに戻って、美味しい美味しい親子丼したうづみを舌鼓したうづみしていることだろう。

そう、コイツさえ——コイツさえ現れなければ。そう思うと、腹の中から奇妙な感覚が込み上げてきた。

何だろう、この感覚は。怒りだろうか、それとも憎しみだろうか？

——グギユルル……。

「……ああ、腹減ったなあ」

そうか。そうだった。

俺の腹からこみ上げるのはただの空腹。されど、空腹。食事の邪魔をされた俺は、ただただ腹が減っているんだ。

何故腹が減っている？ それは、目の前のコイツに邪魔されたからだ。

どうすればこの感覚から逃れられる？ 目の前のコイツを何とかしなければ、始まらない。

「そうだ……どけ、どけよこの野郎……！」

空腹か、もしくは飢餓感か。

腹の内から込み上げるこの衝動的な感覚に、俺は体の全てを委ねた。まるで血走った獣のように。死に物狂いで暴れる竜のように。——飢え喰らう“餓狼”のように。

揺れ動く視界の中でリオレウスはその首を擡もたげ、突如凄まじい勢いで火炎を大地に擦り付ける。それと同時に大地は溶岩が染み出るように赤く染まり、融解するかの如くさらに赤の染まりを広げていった。

その衝撃を躲した俺は、霞み揺れる視界の中で剣を振るい、同時に熱を享受する。極限の状態の中で、弾けるような巨大な爆発が俺の視界を震わして。

凄まじいほどの熱と、ただただ狂おしい飢餓感が最後まで俺の感覚を支配していた。

◆ ◆ ◆  
気付いた時には、俺はあの武器屋の中にいた。武器屋の奥の、乱雑に並べられた椅子の上で、薄い毛布に包まれながら横たわっていたのだ。ところどころに包帯が巻かれた体は、少し軋むものの、そこまで問題は無い。

何とか身を起こし、掌についた火傷を見ながら俺は少し息を吐いた。

「——負けたのか、俺は……」

全く見たことのないリオレウス。

特異中の特異な個体だったのか、あそこまで力を付けた個体など聞いたことがない。天空山で狩った奴も、孤島で狩った奴も、あそこまで桁が外れた強さなど持つていなかったが。

「……旦那さん、起きたのにや？」

「シグの旦那、大丈夫か？ アンタがそんなになるなんて珍しいぜ」

横から掛けられた突然の声。

振り返れば、何とか無事だったらしいイルルとこの店の主の姿があった。心配するようにイルルは俺の傍まで寄ってきて、少し潤わせた瞳で見上げてくる。見たところ火傷



も怪我もなさそうで、何とかキャンプに戻れたようだ。

「イルル……大丈夫か？ 怪我は——」

「ボクは大丈夫にや、それよりも旦那さんは……」

俺の怪我を見ては少し声を震わせて、イルルはおずおずと口を開いた。

しかし、そんな彼女の言葉は突然鳴り響いた別の音によつて遮られる。低く唸るような奇妙な音。

「……あ」

俺の、腹の音だ。

あまりにも空気の読めない俺の腹に、イルルは啞然と口を開き、俺は少し溜息をついた。口元を抑える武器屋からは、笑い声が漏れている。

「にや……」

「す、すまん……」

「ハハ、やつぱ旦那らしいな。ほれ、取り敢えずこれを食いな！」

空気の読めない腹で申し訳ない、という気持ちを含めながらイルルの頭を優しく撫でると、武器屋の彼は何やら輪切りにされたものが乗った皿を手渡してきた。

そこに乗っているもの、黄金色に輝くような気高さを持つ黄身と、誠実さを象徴するような純白の白身。間違いない、ゆで卵だ。

それも今まで見てきたガーグアの卵とは決定的に違う、非常に上質な卵。

「これは……まさか——」

「このネコちゃんを持つて来てくれたんだぜ、ありがとよ」

「にや、にやあ……」

照れる様に髭を震わせたイルル。そんな彼女の頭を撫でながら、武器屋の彼はざっくりとした経緯を話してくれた。

どうやら彼女は無事卵を納品することが出来、その後ネコタクで運ばれてきた気絶中の俺と合流して、早々にネコタクチケットを使って戻ってきたらしい。まあつまるところ、彼女のおかげで依頼は達成出来たということだ。

言いたいことはたくさんあるが、取り敢えず、俺は自らの空腹を抑えることが出来ない。震える手で、目の前に佇むその香かぐわしい卵を摘まみ、そつと舌の上に落とした。

芳醇という言葉と濃厚という言葉。

それらが手を組み合って共存するような、そんな奥深い味を秘めた黄身。茹で具合が丁度良いのか、少し半熟的な部分を残しながらも形を残すその食感、舌の上でゆつくりととろける様だった。唾液と混ざる事でその内に秘めたとろみを目覚めさせ、如何にも卵らしいこのほんのり甘く温かい味を舌に塗り始める。

それと同時に口の中を転がるのは、白く滑らかな白身。つるんとしたその独特な柔ら

かさは、少し顎に力を込めるだけで崩れてしまう。そんな繊細な感触を歯で楽しめば、おそらくその身に振りかけられたであろう質の良い塩味が効いてきた。やや淡泊過ぎる味という面では少し弱い白身を後押しするような程よい塩味が、口の中で転がる白色を加えていく。

そんな二つの味は喧嘩することなく絡み合い、俺の舌を、喉を、胃袋を。優しく、温かく、包み込むように。正に生命の神秘とも言える卵、その素晴らしさを突き詰めたような味が俺の虚無感を埋め尽くした。

「——美味い……」

武器に付いたスロットが埋まり、その装備の性能を向上させることが出来たような。そんな多幸感というべきか、空いた部分を埋める事が出来る感覚。

それを感じた頃には、俺の口は勝手に動いていた。「美味い」というたった三文字の言葉。しかし何事にも替え難い、非常に尊い言葉——。

「いやあ、シグの旦那とネコちゃんのおかげだよ。ありがとな二人とも！」

「……ああ、イルルが持つて来てくれたからな。本当に有り難う、イルル」

「にやあ……ど、どういたしまして、にやあ……」

恥ずかしそうに尻尾を揺らし、イルルは少しぎこちないままに微笑んだ。

そんな彼女の様子を見つつも、俺は確信する。イルルにはれっきとした才能がある。

ぶんどりの、伝説の卵をもぶんどれるという才能が、な。

「さて、組織幹部の俺からの推薦だ。イルルを我ら組織の一員に推薦したい」

「……みい？」

「おお、それは良い！俺も賛成だぜ、シグの旦那！」

「ふにゃ!? にゃ、にゃ……っ!?」

俺の発言に首を傾げるイルル。その一方で武器屋は、満面の笑みで頷いて賛成するよ  
うにガッツポーズを決めた。当の彼女は、いまいち何が起きているのか分からずあた  
ふたしているが。

最近の組織には、大きな行動に出ることが出来る人材が少ない。蔓延的な有能構成員  
不足だ。だからこそ今回は、その問題の解消のためにイルルをここに連れてきたのだ  
が、俺の目にやはり狂いはなかったな。

「まあ、また俺からボスに話を付けるとして……今は卵を楽しむとするか」

「そうだな！酒とかつまみとかも持ってくるぜ！」

いそいそと忙しない様子で武器屋の彼は店の戸棚を漁り始める。

卵の美味に酔い痴れる俺の隣で、ただ一人置いてけぼりなイルルは、まるで魂が抜け  
たようにボーっとしていた。

「……一体何がどうなってるのか、訳分かんないにゃ……」

「まあ知らない内によく分かってくるさ。……そして卵の魔力に侵されるだろうよ」

どうしようもなさそうに座り込む彼女にその声を掛けながら、また一つ卵を摘まむ。

濃厚芳醇な旨みと卵白の透き通るような味。薄く散りばめられた程よい塩味のハー

モニー。

やはり卵は最高だな。単体でも美味しいし、他の料理との適応力も群抜いている。ジンオウガ亜種の適応力も目じやないだろう。肉料理にも、サラダにも、米料理にも、もちろんパンにも。

「……あつ」

「どうしたのにな？」

「昼間感じた、あの足りないもの。アレを埋めるにはこれしかないかも……」

朝ご飯にフレッシユなモスハムレタスサンドと濃厚な卵サンド。朝から爽やかで、味も良く栄養価も高い朝食を取ることが出来れば、それはそれは良き狩猟生活を営むことが出来そうな。

取り敢えず、まとめ切れない言葉を何とか形にするならば、『卵こそ最強ッ！』ってところかな。生命の神髄よ、どうか大空へ——ってそれじゃ孵化してしまっているじゃないか。

まあ、孵化したら孵化したで美味しいから、卵はやはり最強ということか。

「やつぱり、卵は……最高だなッ！」

「にやあ、何だか面倒なことに巻き込まれたってことだけは分かったにや……」

く 本日のレシピく

『フレツシユサンド』

- ・ ジャンボパン …… 2枚 (耳は除く)
- ・ モスハム …… 2枚程度
- ・ シモフリトマト …… 輪切り1つ
- ・ 砲丸レタス …… 葉2く3枚
- ・ ベルナバター …… 適量

『特製卵サンド』

- ・ ジャンボパン …… 2枚 (耳は除く)
- ・ ガーグア卵 …… お好みで
- ・ ベルナマヨ …… 適量
- ・ 砂糖 …… 適量

・  
塩  
胡  
椒

⋮  
⋮  
⋮  
適  
量

## 幻を喰らうもの

毎度の如く人に溢れ、人に満たされるバルバレ。

その街を大きく飾る、バルバレギルドの本部。我々が集会所と呼ぶこの場所も、本日もハンターという人種によって溢れ返っていた。さながら大量発生した飛甲虫フナハブラのように。ボスに統制された狗竜ジャギイの群れのように。

そんな騒がしいこの集会所内で、重厚な音を立てる巨大な球体を背にした小柄な老人——つまりこのギルドの長、ギルドマスターと顔を向かい合わせながら俺はエビをつまんでいた。

「シグ君、災難だったね。アレに遭遇することとなるとは……」

「ん？ あのリオレウスのことか？」

噛み応え抜群の、それでいて繊維を解いていくような繊細な味の女帝エビ。

海底で凝縮された旨味を噛めば噛むほど溢れ出させるそのエビは、程よい塩味も相まって非常に風味豊かだ。だが、俺は敢えて顎を止めることで少し味覚を休ませる。空いたその顎を言葉に働かせれば、ギルドマスターは顎に生えた量の多い髭を擦って、た



だ困ったようにため息をついた。

「アレは我々の管轄外だった。まさかのこの地にまで飛来してこようとはね……」  
「明らかに並の個体ではなかったな。あいつは一体何なんだ？」

先日出かけた採取ツアーという名の重要な任務の中で、俺はそいつと出会った。

赤黒い甲殻が、まるで焦げたようにさらに黒々しくなったその姿。揺らめく炎を連想させる紋様を広げた、巨軀を支える強靱な翼。そして何より、並の個体とは比べ物にならないほどの圧倒的な火力。大地を融解させ、あらゆるものを焼き払うただただ無慈悲な息吹。

俺もまるで歯が立たなかったそいつは、ギルドマスター曰く遠方から来た個体らしい。

「黒炎王」。龍歴院では、奴をそう呼んでいる」

「黒炎王？ 何とまあ、見た通りとか何とかというか……」

龍歴院——それはこのバルバレギルドから離れた高山の上に位置する、これまた大規模な独立組織だ。

ベルナ村という高山の小さな村と、ギルドと龍歴院。それぞれ異なる組織や集落が集まり、それに伴いハンターや研究者など様々な人種も集まった結果、今のベルナという集落が存在する。古代林というこれまた謎の多い広大な森林地帯を主な研究対象とし、

日夜研究員とハンターがその森の謎の解明のために奮戦しているらしい。

俺も一度その村を訪ねたことはあるが、生憎ベルナチーズを使ったフォンデュ料理が非常に美味かったことしか覚えていない。濃厚でコクがあり、舌の上にしつとりと絡みつくチーズ。それを贅沢に使ったフォンデュの中に様々な野菜や肉を浸して、溢れんばかりのその旨味を絡み合わせ、鼻孔を擦るその蠱惑的な香りを精一杯享受する。同時に染み出る唾液を飲み込み、空虚な口内にその旨味を広げていく――。

「シグ君? どうしたんだい?」

「――じゆる。……な、何でもない。それで? 黒炎王つてのは?」

「あれは特異中の特異個体だよ。龍歴院では『二つ名』を持つモンスターとして、非常に危険なモンスターとして動向を探っているらしい」

「ふうん。二つ名、ねえ」

非常に危険なりオレウス。その特性と危険度を考慮して与えられた二つ名、黒炎王。

余りあるその力に敗北を喫するハンターは後を絶たず、それどころか死傷者の数は留まることを知らないために、龍歴院は特別な許可がない限り狩猟を許可しないよう方針を変えたらしい。

そんな監視対象をみすみす逃がしてこの地方まで飛来させるとは、龍歴院も有能なハンターをあまり所持していないと見える。まあ、基本的にモンスターは神出鬼没であ

り、ましてやりオレウスは広範囲を飛翔して度々移動する、活動範囲が非常に広いモンスターだ。このような事態を招くのも仕方がないと言えるが。

「結局あの火竜はどうなったんだ？」

「特に居つくこともなく、またどこかへ飛び立っていったよ。方向から察するにココツト村の方かもしれない。依然として警戒態勢は続いているね」

「狩猟したハンターは……いないのか」

「——この爺さんがね、許可出せないって言って誰も狩りに行けなかったのよ」

残ったエビの尻尾を口に放り込みこみながらギルドマスターの話を察して、奴を倒したハンターがいらないことを何となく呟いてみれば、まるで補足するかのような声が後ろから飛んできた。その声に振り返ると、声の主は少し不機嫌な様子で俺の隣にどすりと腰を下ろす。

橙が少し混じった金の髪に、翡翠のように透き通った瞳。ジンオウUシリーズに身を包んだ、どこかで見たことある少女だった。あの時——そうだ、ゲネル・セルタスを共に狩猟した時以来だ。

名前は、何と言ったかな。確か——。

「おお、久しぶりだな。……えっと、カラアゲツタさん？」

「誰よそれ!? 確かに唐揚げは食べたけど混合させないでよ! ヒリエツタよ、ヒリ

エツタ！」

ヒリエツタ——そうだそうだ、確かそんな名前だった。

如何せんあの時食べた徹甲虫唐揚げが美味し過ぎて、あちらに全ての印象が持つていかれてしまったようだ。

当時と変わらず、鋭い目つきと近寄り難い雰囲気を持っている。が、少し顔を見知っただけにあまり他人行儀な感じではないな。こういう接し方をされた方が、俺としても話しやすい。

「そんなことよりよ、どういふことだ？ 許可が出せない？」

「あの危険度を考慮してこそ、だよ。特別な許可が与えられたハンターしか許可できないというギルドの意向さ。君たちの安全が第一なんだ、分かっておくれ」

ヒリエツタのどこか引つかかる発言をギルドマスターに問い掛けてみれば、彼は申し訳なさそうに目を伏せた。いつもの愛嬌ある笑顔とは程遠い、憂いに満ちたその表情に彼女は小さくため息をつく。まるで行き場のない思いのために何とか行き場を捻出しようとしているような、そんなため息だ。

穏健派であることで有名なこのギルドマスターは、どうやら全バルバレハンターの安全を考慮し、狩猟許可を出さなかつたらしい。まあ、体験したからこそ分かるあの危険度だ。みすみす行かせたとしても消し炭になって帰ってくるのが関の山だろう。だか

「ま、結局どつか行っちゃったんだろ？ 今更どうこう言ってもな」

「……そうね、過ぎ去っちゃったものは仕方ないか。マスター、他に何か依頼来てない？」

案外あっさり切り替えた彼女は、たてがみマグロその他盛り合わせの刺身を注文しつつ、マスターに向けてそう尋ねた。その瞳は暇を持って余した狼のようで、退屈しのぎに何か依頼おもちゃを求めているようだった。

そんな彼女の態度にギルドマスターは苦笑いしながらも、書類の山にその小さな手を伸ばす。どうしたものかと書類とのにらめっこを続けるギルドマスターを横目に、俺は粗茶を飲み干しながらその様子を窺った。

それにしても、このギルドの粗茶も良い味が出ているな。渋みが強いが、それが舌についた脂を優しく掬い取ってくれるような。

「相変わらずこのお茶は熱いわね……。氷結晶使おうかしら」

「——あん？」

熱いから氷結晶を使う、だと？ この女はいったい何を言っているのだろうか。

料理を食べ終わった後の、言わば上がりのようなこの粗茶。ギルドで支給される、おそらくそこまで高級でもない普通のお茶だろうが、ここで重要になってくるのはその温

度なのだ。すなわち、熱さ。

しかしこの女は何と言った？　あろうことか、氷結晶を使うだと？

「おい、ヒリエッタ」

「……何よ？」

何も考えていないような顔を、気怠そうに俺に向けてくる彼女。

黒い籠手に包まれた腕がポーチを弄ろうと動き始め、俺はその手を掴むことで引き留める。その突然の行動にヒリエッタは驚いたように目を見開いたが、この際そんなことはどうでもいい。それよりも、だ。

「……氷結晶を使うだと？」

「何よ。なんか文句ある？」

「お前、なんで熱いお茶が最後に貰えるのか、分かっているのか？」

例えば、孤島地方の魚料理専門店。例えば、ユクモ村の川魚刺身料亭で。

魚を、それも生で取り扱う店には、必ずと言っていいほど熱い茶が出される。どんなに暑い夏でも、どんなに厳しい熱波でも。これらの店が熱い茶を出すのは変わらない。これは一種の伝統、守るべき人類の叡智といっても過言ではない。

何故熱い茶を出すのか？　それは生の魚の味の薄さと繊細さが影響しているのだ。

このような店は魚本来の味を大切にしているが、それ故に魚の味の薄さが顕著になって

しまう。食べ合わせになると、先ほど食べた魚の脂が口に残る可能性があり、それが新たに入れた魚の旨味を阻害してしまうこともあるのを忘れてはならないのである。

「……それが？」

「分かんないのか？ 熱い茶はその残った脂を熱で溶かして落としてくれる。つまりお前が食べてる刺身盛り合わせとかではなあ、熱い茶が欠かせないつつー訳よ」

論破したと言わんばかりにそう指摘すると、彼女はお茶と料理を見比べながらも納得いかないと言わんばかりの顔で首を傾げた。

そうして数秒を思考に費やした彼女は握る俺の手を振り払い、あろうことか俺のその指摘を無視して氷結晶を取り出し始める。この女は一体何を聞いていたのだろうか。

「おいおいおい、お前話聞いてたか？ だからお茶は熱い方が——」

「うるさいわね、私は猫舌なのよ。そんな細かいこと言われても別にとって感じだし、冷たい方が好きだし」

その態度は、まるで氷結晶のよう。

呆れたような、どうしても良さそうな態度で彼女は俺の助言を軽くあしらひ、とうとうその茶を冷やし始めてしまった。茶に満たされた容器に結晶から伝わる冷気が襲い掛かり、徐々に霜が降りてくる。脂を溶かしてくれるその熱は儚くも霧散していき、溢れ出ていた湯気も徐々に力尽きていった。

「あ、ああ……お前、何てことを……！ ウルクススみたいな奴め！」  
「はあー？ 私をあんなデブと一緒にしないでくれる？」

俺と彼女の視線がさながら轟竜のように衝突し合い、熾烈な火花が散り始めた。まるで氷結晶のような冷戦状態。氷海の寒波が到来したかのような雰囲気、ギルドのカウンターを包む。

このままではいよいよ彼女が氷の鎧を纏いかねない。そう思ったその瞬間、先程まで書類と見詰め合っていたギルドマスターがゆっくり顔を上げ、ヒリエッタに向けてこう告げた。

「——じゃあ、そんなヒリエッタ君に。こんな依頼はどうだろうか？」



「で、調査指令ね。確かに、ちよつと寒いわ……」

「おーい、何で俺まで連れてこられたんだ？ なあ、おい？」

深い深い森。

鬱蒼とした木々の海がどこまでも広がり、何やら不穏な獣の遠吠えや耳障りな鳥の声に満たされたこの森。ギルドはここを未知の樹海と呼び、現在進行形で調査にそれなり



の労力を費やしている。どこまで行っても終わりが無い。そんな錯覚するようなこの森は特殊な磁気で覆われているのか、何度足を踏み入れても地形を把握することが出来ない。まるで入る度に姿を変えているのではないか、と有り得ない話だがそう考えてしまふほど奇妙な森なのだ。

そんな森で行われる調査指令。今回は、急激にこの樹海の気温が低下した原因を探つて欲しいとのことだ。何やら凍り付いたモンスターの死体が発見されたり、不自然な結露が発生していたり、不凍湖の筈だった水源が凍り、生息する生物に大きな被害をもたらした——などなど。

数え切れない異常現象が発覚しており、未知のモンスターの仕業という可能性もあるために、腕の立つハンターに調査してほしいとのことだ。

「あつ、確かにこの木も冷気を帯びたような痕がある。……やつぱりモンスターの仕業かしら?」

「なあ、聞いてる? 何で俺」

「うっさい。どうせ暇でしょ? 二人いた方が調査も捗るんだし手伝いなさいよ」

鬱陶しそうな顔でヒリエツタは俺の愚痴をあしらって、目の前にある奇妙な樹木を見つめた。

一見するとただの樹木だが、その幹には大きな傷が刻まれている。まるで鋭い氷で引

き裂いたような、そんな傷痕だ。木の年輪もうつすらと湿っており、凍り付いた当時は相当な負荷を掛けられたと容易に想像できる。

まあそれはともかく、彼女の言い分には少し納得いかないな。俺とて暇だった訳でもないし、あの後用があつたのだから。

「悪いけどさ、俺だつて用があつたんだよ。いくら樹海がバルバレの近場だからと言って無理矢理連行するのはどうかと思うぞ」

「へえ、何するつもりだつたのよ？ どうせしようもないことだと思っうけど」

「しようもないことあるか。うちのオトモがもうすぐ誕生日だから、何か贈つてやるつもりだつたんだ」

うちのオトモアイルー、イルルの誕生日。それがもうすぐ訪れる。いつも世話になつている身としては、日頃の礼も兼ねて何か贈りたい。

なんていうささやかな俺の願いは、目の前のこの女によつてあっさり打ち砕かれてしまったが。しかも当の本人は悪びれもせず、興味なさげに木から目を離して奥のエリアを覗き始める始末。

「ずっとマフモフシリーズだったしな。モンスターの毛皮とか使つて良い装備を揃えてやろうと思つたのになあ……」

「じゃあその辺で草食べてるケルビの皮でも剥けば良いんじゃない？」

「ケルビって……」

ヒリエツタが覗いていたエリア。普段の樹海なら、そこではケルビ達が和やかに草を頬張っていることでハンターに知られている。

そこは奥に古代遺跡を思わせる人工物が立ち並び、溢れんばかりの豊満な水が心地良い水流を奏でている、開けたエリア。水源豊富なこの場所でケルビ達はゆつくりと食事を楽しんでいるらしい。立派な角を持ったケルビが一つ欠伸を上げ、そこへ垂れた耳の雌ケルビが首を擦り付ける。

「……ん？」

そんな微笑ましい光景が、いつもはあるはずの光景が、ここにはなかった。あるのは、一際目立つ奇妙なケルビ、ただ一匹だ。

全体的に黒く染まった体毛に覆われた体。他のケルビよりやや大柄で、太く逞しい体。細い脚にはまるで竜の爪のような、蹄ひづめらしからぬ爪先を持つ。そしてその頭には、まるで氷を固めたような鋭い角が、天を貫かんと伸びていた。

「……なあヒリエツタ。あれってケルビか？ ドスケルビ？」

「え……何あれ？ ドス……ケルビ？」

俺もヒリエツタも、違和感を隠せなかったその姿。

明らかにただのケルビではないその佇まいは、思わず畏怖を抱きかねない神々しさの

ような何かを持っている。それはケルビとは本質的に異なる生物であると、厳かに伝えてくるようだった。

そんな奴の体から染み出てくるもの。地を引つ掻くように優雅に歩く奴から流れ出る、露骨なほどに主張してくるそれ。俺もヒリエツタも思わず身震いしたそれは——冷気だ。

ただの冷気、されど冷気。ホットドリンクが欲しくなるようなこの寒さをもたらず奴は、先程の樹木や数々の報告を引き起こした原因。俺も彼女も、瞬時にそれを悟った。

「おい、まさかとは思うが……あれつてもしやキリン——その亜種か?」

「う、嘘でしょ? ただでさえ稀なキリンの、亜種? そんなのが存在したの!」

俺や彼女も思わず驚愕した。されど、それも無理はない。

キリンとは、古龍種に分類された謎の塊のようなモンスターだ。それも幻獣とも呼ばれるほどの神出鬼没性と個体の少なさ、そして解明されない謎を孕んでいる。そんな世にも珍しいキリン、その亜種だ。

亜種に分類されるモンスターは目撃例が少なく、ヒリエツタの持つ大剣に使われたりオレウス亜種ですら、遭遇できるハンターなどほとんどいないということ知られている。実際俺も遭遇できたことは一度もない。だが、アレはそれとは格が違う。火竜などとは訳が違うのだ。

「この途轍もない冷氣……あいつが件の事例の原因と見て間違いないだろ」

「え、まさか……狩る気？ キリンは古龍よ、今までのモンスターとは訳が違うわ！」

武器を構える俺に対し、ヒリエツタは声を荒げた。古龍、それは他のモンスターとは一線を画すカテゴライズだ。

平たく言えば謎が謎を呼ぶ、とても人間が把握することが不可能なモンスターの区分としてそう呼んでいる。まあ、古龍と認定するにはその寿命や生態、古龍の血など様々な要素があるようだが、今はいいだろう。とにかく、あれは今まで見てきた飛竜種や甲虫種とは段違いの危険度を有しているということだ。それだけに、ヒリエツタが焦る気持ちも分かる。

だが、それをゆつくり宥めることも、残念ながら叶わないだろう。このエリアに漂っていた空気が、明らかに表情を変えたのだから。

「ヒリエツタ、声でけえよ。……気付かれたぞ」

「えっ——っツ!!」

慌てて大剣の柄に手を掛ける彼女。その視線の先では、俺たちを敵として認知したのか、荒々しい鼻息で足踏みのように地に蹴るキリンの姿があった。

木々から漏れた光がその勇ましい角の中で乱反射し、幻想的な光を醸し出している。だが、そんな神々しい姿とはかけ離れたような気性の荒さ。それを主張するかのよう

に、キリンは静かな怒気を漂わせていた。

「どうしよう、古龍なんて戦ったことないし、うう……」

「……まあ見つかったもんはしようがない。応戦すつぞ」

いくら自己問答を繰り返してもキリンは待つてくれない。甲高い声で嘶いななきながら、その美しい角を振り翳して突進を繰り出した。鋭い爪で地を駆るその速度は体格もあつて非常に早く、ものの数秒で俺たちを隔てていた距離を詰める。

その鋭い突進をヒリエツタは走り避け、俺は身を翻して避けると同時に背後に回り込んだ。そうして出来た隙を突くように、腰に差した片手剣を引き抜いて——その勢いそのままに振り下ろす。

橙に彩られた派手な装飾の片手剣、テオIIスパード。炎王龍と呼ばれる『古龍』の素材から作られた片手剣だ。その鋭い刀身はキリンの皮膚を斬り裂くと、同時に橙色の粉塵をまき散らした。その粉塵は、揺れるように身を擦り合わせながらも徐々に色を赤らめていく。微かに漂うその粒子を鬱陶しそうに振り払うキリンは、再び俺に目掛けてその体を打ち付けようと地を蹴った。

「……つとー 危ねえな！」

すれ違うように避けた。避けたのだが、奴から漂う冷氣からは避けられず、その内包された冷氣の質には驚かずにはいられない。そう、それはまるで氷結晶の塊のようだ

一方のキリンは、まるで標的を変えるように首を擡もたげ、警戒するように剣を構えるヒリエッタを見定めた。霜がうつすらと顔を出し、それと共に水滴が凍り付く。

そんな異常な光景に目を奪われたヒリエッタを睨みながら、キリンはその角を振り回した。いくら立派な角と言っても、両者の間には決定的な隔りがある。その場で振り回そうと当たるはずはないのだが。

「……っ！ ヒリエッタ！ 下だ！」

「わっ?! 嘘っ?!」

キリンの角と同調するように。大気中の水分を、遠隔操作するかのよう。

突然大気が凍り付き、何もなはずの空間から氷柱が現れる。その数は一つや二つではなく、十数本。それが休みなく連続で現れては消え、消えては現れる。

その理解不能な光景に俺とヒリエッタは困惑しながらも、危うく回避。再び対峙する様にキリンの正面に立ち直した。

「全く、古龍つてのはどいつもこいつも意味分からん力を持つてんな」

「……アンタ、戦ったことあるの？」

「ジエン・モーランとか、テオ・テスカトルなら。……ま、四人がかりでも撃退がやつとだったけど」

「へ、へえ……」

劍が収納された大きな盾と、切っ先が伸びた広刃の片手劍。爆炎を司る古龍から作られたこの武器は、素材元らしく爆破属性を持つ。敵を選ばないこの属性は、今回のような未知の調査をする際に打って付けと言えよう。

一方のキリンは、今の手で俺たちを粉碎できると思っていたのか。思い通りに行かないことを不満に感じるように、これまた奇妙な声で威嚇するような声を上げた。

「……どうやら、逃げるのは無理そうね」

「だな。ほっとくのも危険だし、食べてみたいし。狩っちゃおう」

「アンタ……。ああもう、ツツコむ余裕もないわー」

アイコンタクトで頷くと、それぞれで片手劍、大劍を構える。

件の原因はここで断つ。そう言わなければかりに戦意を露わにした俺たちに対し、キリンは再び大きく吠えて怒りを露わにした。相当短気なのか、プライドが高いのか。いずれにせよ、討伐には時間が掛かりそうだ。

「俺が奴を崩して隙を作る！ お前は様子を見ながら溜め斬りを頼む！」

「分かったわ！ 粉塵はあるけど、無理はしないでね！」

俺は正面からキリンに斬り掛かり、ヒリエツタは回り込むように走り出す。

キリンは目の前に迫る俺を見定めるや否や、突進を繰り出してきた。斬り掛かりが角に傷を付けたと同時に俺は横へ転がり、その鋭い突きを躲す。



一方のキリンは避けられてもその勢いを殺さずに、むしろ隙を覗うヒリエツタに向けて走る脚に力を込めた。

「くう……こんなもの！」

彼女は慌てながらもそれを何とか転がり避け、キリンの後ろを取る。そうして出来た隙に、大剣の重い一撃を叩き込むのだが。

直後、まるで金属と金属が弾き合ったような、そんな耳障りな音が響いた。鱗でも、甲殻でもないというのに、キリンの皮は何と大剣の一撃を弾き返したのだ。

「えっ!? ど、どうなってるのよ!」

「相当硬化しているってことか? マジで訳分かんねえなコイツ……!」

弾き返され、大きく隙を晒した彼女と再び牙を剥くキリン。その間に割って入った俺は、奴の顎を剣で斬り上げた。

今回は弾かれるようなことはなく、うっすらと顎の皮に斬り込みを入れる。どうやら硬化するのは下半身だけのようで、頭部は特に影響ないようだ。

「頭は柔らかいみたいだな。ヒリエツタ、頭を狙うぞ」

「そんなこと言われても、こんな動き回る奴の頭なんて……!」

そう絞り出した彼女の指摘の通り、キリンは再び駆け出した。ケルビのように跳躍しながら走り出し、俺たちの目測を掻き乱す。何とか追い付いたとしても、湧き上がる氷

柱が壁となり攻撃することも難しい。追っては避けられ、手痛いカウンターの喰らう。小柄な体躯が、そのスパイラルにさらなる拍車を掛けているようだ。

非常に戦いにくい厄介なモンスター。この凍てつく狩場の中には、ただ焦りと傷と冷気だけが降り積もっていった。



「ハア……ハア……しぶといなコイツ……」

「ほんとに……。厄介なモンスターね」

一体何回斬り掛かっただろうか。何度冷撃を躲し、防ぎ、彼女と連携しながら戦闘を続行したのだろうか。キリンはその小柄な体躯に似合わぬ耐久力を持ち、苦しい戦いが募っていく。

確実に奴の体力は削っている。そのはずなのだが、奴からは一向に疲労の色が窺えない。このまま戦い続けたとしても、本当に奴の体力を削り切ることが出来るのか。そんな不安が募っていく。

「でも、そろそろ倒れるはずっ！ ここは私が行くわ！」

巨大な刀身がもたらす圧倒的負荷。様々な武器の中でも段違いな破壊力を持つその

大剣を持ち直し、ヒリエツタは大きく踏み込んだ。

巨大な刀身を振り回し、地に擦り付ける。そうして溢れる大量の火花を軌跡のように揺らしながら、彼女は唸るキリンに向けて猛然と走り出した。

「はあああつ!!」

危険を察知したキリン。だが、奴よりもヒリエツタの斬撃の方が速かった。

地盤ごと捲り上げるように振り上げられたその大剣は、絶妙な角度でキリンの頭部を斬り上げる。その余りの威力にキリンは悲鳴を上げ、同時にその美しい角は砕け散った。

雪が舞うように、煌めく氷河のように。粉々になったその角は光る欠片となり、この樹海の中に溶け込んでいく。

まさに幻想的な光景だ。それだけなら非常に綺麗で、一種の感動の念を呼び起こす—ののだが。かの古龍から発せられる、今までにない怒気がその念を打ち払ってしまった。

「ヒリエツタ! 下がれ!」

「うん——つて、ひっ!? 何これ!?!」

キリンから発せられる甲高い嘶き。同時に奴の周囲が白く染まる。白兎獣の雪遊びとは段違いなその冷気。それがキリンの周囲を凍て付かせ、この常温の筈の空間に白銀

の世界を創り出したのだった。

至近距離にいたヒリエツタもそれから逃れられず、武器防具を大きく凍り付かせ。凍傷の問題も勿論あるが、今最も問題なのは――。

「う、動けないっ……!」

「ちいつ! マズい!」

己の自慢の角を砕いた、憎き人間。そんな彼女を、死をもつて償わせようとキリンはその頭部に冷気を集約させた。疑似的に角を創り出すような、そう思わせる程の冷気が鋭い形に研ぎ澄まされていく。それを、奴はヒリエツタに向けて一心に薙ぎ払った。

我ながら自分の瞬発力を褒めてやりたいものだ。瞬時に気付いた俺は、無防備な彼女の目の前に躍り出て、この頼りない片手剣テオリスバスターの盾を構えたのだから。

瞬間、堪え切れない程の衝撃が俺の右手に襲い掛かる。

「ぐっ……!」

角から放たれた冷気は、一筋の斬撃となって地を裂いた。

まるで大地と大気を縫うように放たれたそれは、何本、何重もの刃となって右手の盾に斬り掛かる。その圧倒的な威力と連撃に、俺の右手は大きく軋んだ。同時に盾からは、どこか耳障りな音が響いた。

「シ、シガレット!」

「ちい、受け流せ！ 盾がもう……ッ！」

そう言うのが先か、不快な破裂音が先か。甲殻が砕けるような、金属が折れ曲がるような嫌な音と共に、右手の盾は音を立てて砕け散る。何とか今の一撃を受け流すことが出来たものの――盾としての機能は失われたと思っただろう。

が、今の衝撃のおかげでヒリエツタを覆っていた氷は砕け、彼女は自由を取り戻した。大した怪我もないようだし、盾の犠牲は無駄ではなかったようだ。

「ふう、大丈夫か？ 何とか無事みたい、だな？」

「う、うん……ごめん、シガレット。盾が……」

「……あーあ、せつかく作つたのにもう壊れちゃった。この落とし前は高くつくぜ、ドスケルビー！」

砕けた右手の盾を振り払い――その盾に収納されていたもう一本の剣を引き抜いた。右手に剣を、左手に剣を。

両手の剣を交差させて構え、俺は自身のスタミナを犠牲に精神を研ぎ澄ませる。順手で持ったそれらを、くるりと逆手に翻いた。

揺れる視界の中で映つた、俺を睨むキリン。そんな奴が怒りのままに俺に向けて突進を仕掛けてくれば。

「遅いっ！」

身を翻すように跳躍。そうしてキリンの突進を躲しつつ、すれ違いざまに斬り刻む。回転を加えられたその斬撃は、キリンの強靱な上皮を穿つように刻み、同時に赤い血飛沫と大量の粉塵を宙に舞わせた。

対象を見失ったキリンは、爪を地面に喰い込ませるように急停止。一方で、ヒリエツタは開いた口が塞がらないと言いたげな顔で俺の剣を指差しては、忙しく顎を動かした。

「ア、アンタ……それ、え？ 片手……剣じゃなかったの？ え、そ、双剣……？ な、何がどうなって……」

「ボヤボヤすんな！ 次が来るぞ！」

再び鼻息荒く向き直したキリンは、縦横無尽に跳躍。ケルビを思わせるあのステップだが、今度は飛ぶ度に氷柱を交えてきた。

着地点の大気を急激に冷やし、大きな柱を建てながら迫るその様は圧巻と言えよう。だが、何度も見ればタイミングなんて分かってくるもんだ。

「くっ……！」

「当たるかそんなもん！」

ヒリエツタは咄嗟に抜刀し、大剣のその広い刀身を盾にして防ぐ。一方の俺は奴の着地を狙い、再び錐揉みの回転斬りを繰り返した。

今度は脚を集中して斬撃を加え、その細い脚の筋を大きく抉る。並の生物ならそれで体勢を崩しそうなものだが、キリンは健気にもそれに耐え、危うい足取りで着地した。脚に付着した赤い粉塵を鬱陶しそうに見ながらも、再度俺を睨みつける。

直後に放たれる、天を揺るがすような嘶いななき。耳に残る、嫌な鳴き声と共に、奴は再び、その頭部に冷気を集約させ始めた。

先程俺の盾を砕いた、無慈悲な斬撃。それを再び放とうとしているのか。

「——ふう」

だが、今は先程とは違う。俺の背後に守るものは何もない。わざわざ守りに転じる必要なんてない。ただ、攻め込めばいい。そう心の中で言い聞かせ、俺は静かに剣を構える。

力を集約し終えたのか、キリンは再びその青白い光を振り翳かきした。瞬間、強烈な冷気が爆発的に散り、同時に耳を劈くような音と共に大地から鋭い氷刃が俺に向けて牙を剥く。

「……無駄だツ！」

だが、それも功を奏すことはなかった。その分かり切った斬撃の軌跡は避けるに容易く、避けると同時に距離を詰める。

そうして迫る斬撃と、着地と同時に繰り出した斬撃が連鎖し、漂う粉塵が火花のよう

に光を燈し始めた。まるで粉塵を引火させるかの古龍のように、連鎖に連鎖を重ねたその光は徐々に赤く染まっていく。

「ヒリエッタ！ 今だ！」

「っ！ 分かったわ！」

直後響き渡る、連鎖するような爆音。それが樹海の木々を荒く揺らした。

キリンを覆っていた粉塵がどうとう爆発し、それがキリンを包み込む。強烈な負荷を掛けられた奴は、先程の脚の傷も相まって、爆風のままに吹き飛ばされた。

その落下点には、かつてないほど力を溜めるヒリエッタの姿が。

「はあああああっ!!」

大量の熱と、余りある重さが炸裂したその衝撃音。

最大級の溜め斬りは、先程までの苛烈さとは対極に当たるほど静かに、この戦いに幕を下ろしたのだった。



「……よし、こんなもんかな」

「はあ、やっぱり食べるのね……」



穏やかな竜車に揺られながら、俺はあのキリンのたてがみあたりから剥ぎ取った肉を捌いていた。

冷気を操っているだけある、少しひんやりとしたその肉は、ベトつかず、それでいて程よく脂が含まれており非常に食欲をそそる。黒い体毛に覆われていたその肉は鮮やかな赤に染まっており、煌めくような細かい肉繊維が特徴的だ。如何にも肉らしいその見た目だが、意外にも生臭みや不衛生さは皆無と言っている。古龍という摩訶不思議な生態だからこそ、我々の持つ常識とはかけ離れているのかもしれない。

「うん、刺身でいけそうだな。キリン刺し、美味そう」

「刺身？ その……タレみたいなのにつけるの？」

ヒリエツタがそう言っつて首を傾げるもの。それは俺が用意した特製調味料だ。

光を浴びて優しい色を見せるユクモ大豆製醬油に、おろしたモガモガーリックやまだらネギを葉味として加えたこの一品。さっぱりとした味わいが口いっぱい広がらるろう。

そんな魅惑的な液をキリン刺しに滴らせ、ゆつくりと引き上げる。赤い身が薄く醬油の茶とも紫とも言えないあの色に染まり、木々を縫って差し込む太陽光を反射させた。

「うんうん、これですよ……。こうやって食べるのがたまらんのだな。んじゃ、いただきます」

鼻孔を擽るニンニクとネギの香り。そしてそれに包まれたありのままの肉の香り。それを精一杯感受しながら、そつと舌の上にそれを落とす。舌に乗ったそれは、始めこそ特に態度を変えることなく座り込んだものの、じつくりとその形を融かしていく。意外にも人の口内でゆつたりと溶け始めたそれは、油脂自体の融点は低いのかもしれない。

それと同時に、薬味に彩られた肉の味がじわじわと顔を出した。正に味の凱旋。気高き幻獣が闊歩するように、肉の旨みが口の中に広がっていく。先程感じた匂いのように、生臭みはほとんどない。生の肉特有のクセの強さはあまり目立たず、じつくりと溶ける肉の旨みと脂の甘みが強く主張していた。グラビモスの噛み応えのある肉や、モノブロスの独特な歯応えのある肉とは違う、口の中でそつと溶けて舌を優しく肥やしてくれるこの味。甘みに近い、クセの無い味が魅力的な脂はかなりの量だが全く諄くなく、口触りもとても滑らかだ。喉に引つ掛かることもなく、するんと胃袋に落ちていく。

如何にも肉らしいこの上質な味を、薬味のついた醤油は鮮やかに彩っていた。あの神々しさを持つ幻獣らしい、厳かで、飾り気なく、透き通るような透明度のあるこの味。古龍の肉というものは初めて食べたが、やはり古龍もただの生物なのだろう。食べたら美味しい。これが真理だ。

「……あー、これは最高だわ。めっちゃ美味しい」

「ほ、ほんと？ 古龍つて食べれるもんなの……？」

舌に残った脂分はこれまた段違いだ。脂分豊富なことで有名なアプトノサーロインステーキにも負けないほどのこの脂。仄かな甘みが残るこの味は、いつまでも楽しんでいたいという欲求に駆られるが、一つ問題がある。

あまりに強いこの脂。単体で食べるのなら兎も角、他のものとの食べ合わせになる。と些か問題が生じるな。如何せん舌に脂が残り過ぎる。それを解決するには、あれしかない。それは――。

「あ、あのさ、良かったら私も」

「――熱い茶が欲しい味だな、これは」

「……やっぱ何でもない」

く 本日のレシピく

『キリン刺し』

・キリン（たてがみ部位）……………300g

・醤油（ユクモ大豆）……………80ml程度

・モガモガーリック……………少量

・まだらネギ……………適量



## 渡らぬ先にストントン

年末の慌ただしさを抜けたこの市場都市、バルバレ。

今年最後の卸売りという謳い文句で各地から客を集めたこの町は、最後の最後に一年の中で最高の買い物客数を叩き出した。そんな圧倒的な賑わいの中、とうとう年越しを迎えている。

年貢の納め時と言わんばかりに商人たちは店をたたみ、バルバレはまるで火が消えたかのように静かな年末を迎えた。まあ、たった一日だけなのだが。

日が一番に顔を出す頃には一転、まるで彩鳥が吠え合うような喧噪を再び生み出していている。

これがバルバレ流年越しの仕方。俺がここに住み始めてから迎えた第一の年越しは、中々慌ただしいものだった。

「本当に慌ただしかったぜ」

「……旦那さん、鬼気迫る表情で買い物してたにゃあ」

「そりゃあ人の群れがやってきたからな、欲しいものが次々と消えるし……まあ、早い者

勝ちつて奴だ」

今年最高の買い物客数。それが何を意味するか。

非常にたくさんの人間が訪れることでバルバレにある、本来なら余るくらいの量の商品が売り切れるという非常事態が発生するのだ。

年末に食べる物といえは？

今年最後の晚餐、年越し蕎麦、様々なつまみ、そしておせち料理——ユクモ地方での伝統とされるこの特徴的な品々は、勿論このバルバレにも流通している——などなど。

その量、そのバリエーションともに非常に多岐に渡るのだ。それを突如金獅子の如く乱入してきた、どこのケルビの骨とも分からない買い物客が買い漁ってしまったのなら、あとは言わずもなだろう。

「大体な、俺の頑張りのおかげで年末に美味しい飯食えたんだぞ。少しは感謝してくれよな」

「にや……感謝はしてるにやあ」

行き交う人込みにアタフタしながらも、イルルは俺にそう言うってくる。が、相も変わらず、人の多いこの往来では会話もままならない。

年を越えた今、このバルバレでは新年大売出しと謳いさらに客を集めようとしているのだ。年末ほどではないとはいえ、客の数は十分多い。うっかりしているとイルルとは

ぐれかねないな。

「よつこいしよ」

「にや、にやんつ!? ふ、ふにや……」

まあそういうわけで、危なっかしい彼女を軽く抱きかかえる。こうすれば逸れることはないだろう。一方の彼女は少し驚いたような素振りを見せたものの、とりわけ乱れることもなく、その両の肉球で俺の服をつまんでくる。

これで歩く速度を考える必要はなくなった訳で、俺は脚の筋肉にもうひと押し力を込めた。買い物客は非常に多い。ならば、なるべく早く目的の店に行き、お目当ての商品を手に入れたらいいというのが人の性さがだろう。

「……だ、旦那さんは何処に向かつてるんだにや?」

「雑貨屋だ、大通りにあるあの店。ちよつと欲しい具材があつてな」

「今夜のご飯? それも狩りに行かずにとは珍しいにや」

「いや、明日の朝食用だ。……狩りは、そうだなあ」

年越しの時期は、このバルバレのような市場から移動に携わる童車、船などがごつた返しになる。そのためギルドの情報、管理もまた複雑化するため、クエストなど依頼の対応が遅れることがよく起こるのだ。そうなれば当然起こるのは、クエスト数の減少。

まあ、そもそも年明けシーズンに依頼してくる人間はそう多くないのだが。いるとす

れば、余程の暇人か、相当切羽詰まった人間かの二択だろう。平凡な価値観の持ち主ならば年末くらい身を休めたいと考えるはず。

「依頼少ないし、かと言って探索に行くのもアレだし」

「……未知の樹海かじゃ」

確かにクエストがなくとも未知の樹海に探索に行けば、自由に狩猟地で採集に勤しむことが出来る。あれは依頼に應えるのではない自主的な行動のため、ギルドに報告さえすればいくらでも探索を行えるのだ。

だが、そうだといって「では探索に行こう」とはならない。年末とは、忙しい時期である、と同時に家族とゆつくり過ごす時期でもある。それは人間でもアイルーでも変わらない。

つまり何が言いたいのかというと、童車を動かすアイルーも本来なら休んでいたいのだ。

「言いたいことは分かるよな?」

「にやあ。つまりお金にや?」

「ああ、この時期はかなりぼったくられるぞ」

この休みたい時期だというのに。家族と共に年末年始を過ごしたいというのに。

そんな今この時に業務に駆り出され、労働を強いられるとなれば、如何に温厚なアイ



ルーといえど黙ってはいない。さながら牙獣種のように吠え、恐ろしい勢いでアプトノスを走らせるだろう。そして、ハンターから恐ろしい額を吸い取っていく。

「……ま、とにかく。この時期は大人しく買い物してようぜ」

「にや、分かったにや。……ボクもあつたかい部屋で休んでいたいし、賛成にや」

まふまふと口元を動かすイルルに同意を貰った上で、俺は集会所へと続く大通りで仁王立つ、目的の雑貨屋へと辿り着いた。その店の前では黒く焼けた大柄の女性が、これまたよく響く声で客を集めている。

彼女はこの店の看板娘——ではなく、女手一つで店を繁盛させた凄腕の商い屋。今日もまた、張りのある声をバルバレ内に響かせている。

「おつす女将さん。精が出るな」

「おや？ シグの坊主じゃないか、よく来たね！ ……ん、イルルちゃんも一緒かい？」

「にや、こんにちにはにや！」

そんな彼女に向けて声を掛けてみれば、彼女は嬉しそうにその大きな口を横に伸ばした。

日差し強い地域で暮らしてきた事がよく分かる、その大きな手。それでイルルの頭を一通り撫でてから、今度はじつと俺を見る。大海のような青に染まった大きな瞳に、俺の顔が映り込むくらいじつと。

「買い物かい？ 何が欲しいか言つてごらん」

「えーつとだな……薬草と、げどく草をくれ」

薬草とげどく草。普段ならばまだまだ駆けだしのハンターたちが買い求める、最も底辺とも言える治癒用品。上位、もしくはG級ともなれば単体でお世話になることはほとんどないであろうその草を、俺は今欲している。

それを聞き間違いだと思つたのか雑貨屋の主は不思議そうに耳を穿り、目をパチクリさせたものの——確認するように、その唇を震わせた。

「そ、そんなものでいいのかい？ ほらもつと、回復薬とか解毒薬とか」

「いや、いいんだ。あ、あと雪山草とか霜降り草とかも入荷してる？」

商売が繁盛するこの時期だ。ある程度成熟した商人たちはいつ、どのタイミングにどれくらい幅を利かせた商品を入荷させれば儲かるかを把握するようになる。そしてそのタイミングこそ今の時であり、ましてや彼女はこのバルバレでもトップレベルの腕を持つ商人だ。いつもなら店頭には置かないような商品も、きつと扱っているだろう。

「ま、まああることにはあるけどね……。ちよつと待つておくれよ！」

「おう。助かるよ」

やや納得いかないような表情を見せながらも、彼女は店の奥へ潜つていった。俺の予想通り、この店は普段置いていない雪山草と霜降り草を扱っていたようで、計画通りに

ことが進んでいるのを実感してか、俺の口角は静かに上がり出す。

そんな俺を肩の上でじっと見ていたイルルは、不思議そうに首を傾げた。彼女としても、何故俺が今更になって薬草などを求めるのかが分からないように、どうしたものかとその口を震わせる。

「旦那さん……草なんて買って、どうするのにや?」

「——粥を作るんだよ。七草の粥をな」



「……随分まあ、集まったにやあ」

「えーつと……薬草、げどく草。雪山草に霜降り草。落陽草からネンチャク草、そしてトウガラシ。こんだけあれば充分だろ」

そんなこんなで買い物を終えた俺たちは、陽が沈んだ事で瞬く間に底冷えする街路から逃れてきた。要は帰宅し、早速調理に取り掛かっているという訳だ。

我がボロ屋の台所。老朽化故に多く残る隙間から冷たい風が入り込むこの場所で、俺は数々の薬草たちを広げてはその鮮やかさに唸っていた。

「……うん、良い色だな。中々彩豊かになるかもしれん」

「確かに色は綺麗なんだけど……にやあ」

深く取り込むような緑に染まつた薬草。

まるで雪の様に、降り積もらんとする白を帯びた雪山草。

粘つきを残しながらも、白玉を彷彿とさせる透き通った色を持つネンチャク草。

また、赤みを帯びたトウガラシも鮮やかなものとなっている。これを草と判断するかは微妙なところだが、少しピリツとしたアクセントを用意したいという俺の粋な計らいの結果、投入することとなった。

そして、辛味が苦手なイルルはそれが御不満なようで、何度かそのトウガラシを見てはどうしようかと溜息を吐いている。

「そんな心配すんな。量は少なくするし、ピリツと美味しくするだけだから」

「量……旦那さんの基準は当てにならないにや」

「何だよ、つれないな」

俺が普段盛り付ける量がそんなに気に入らないのか。彼女は不満そうにそう言っただけで鼻を鳴らした。俺としては、小食な彼女はもう少し肉を付ける必要があるという考慮ののだが——彼女としては余計なお世話だったりするかもしれない。

まあそれはいいとして、早速調理に取り掛かる。確か、調理に当たつての作法のようなものがあった気がする。

「取り敢えず、礼式通りにやらないとな……」

「……? 包丁としゃもじ? わざわざ両手に持つて……どうするのによ?」

「こうするのさ!」

右手にしゃもじを。左手に包丁を。

立てたしゃもじと包丁の背を、まな板の上で転がる様々な葉草に小気味良いリズムで打ち付ける。まな板としゃもじに板挟みにされた霜降り草はその繊維を解し、包丁に打ち付けられたげどく草は茎と葉を粗く分離させた。固いものが打ち合う音が鳴り響き、その音が層を重ねるごとにまな板の上の葉草はその層を崩していく。

「七草げどく、凍土の竜がユクモの国に渡らぬ先にストントン」

「な、どうしたのによ旦那さん……。すつゝい変な歌……というよりは音痴?」

「失礼な奴だなお前」

七草粥といえはこの曲。それを何となく口ずさんでみれば、イルルからは最早嘆きとも言えるような、如何ともし難い憂いが漏れた。マイルドな発言とは到底離れた彼女の言葉。流石の俺も、心に剥ぎ取りナイフを突き付けられたように少し痛い。

「これはな、ユクモ村の知り合いが教えてくれた歌なんだよ。あっちの方はこう歌いながら七草を砕くらしい」

「……なるほどにや。そういえば聞いたことあるにや。知り合いで口ずさんでいた子が

いたにや」

バルバレに流れる前だ。ユクモ村在住の同業者が、この歌を口ずさみながら粥を作ってくれたのがそもそもの始まりだった。あの時は狩猟地で適当に混ぜ合わせた具材だったが一。

イルルはイルルで、アイルー間でのネットワークのようなものがあるのだろう。実際、ネコ用ユクモシリーズを身に付けたアイルーを時折見かけることもある。彼らも彼らで様々な土地を渡り、己の郷土の技を広めているのかもしれない。

「伝統なんだとき。礼儀というか何というか、こうやって調理するのが大事らしい」  
「……旦那さんの歌はむしろ失礼なんじゃないかにや？」

「おまつ……ッ！ ……じゃあ、そこまで言うならお前が歌ってくれよ」

俺の歌唱力へのダメ出しを緩めないイルル。我ながら自信があつたそれを、さながら砕竜の如く粉々に打ち砕いた容赦のない一言に、俺は思わず歯を食い縛つた。

そんな彼女はというと、俺の促しに応え意気揚々と歌い出す。楽しそうな様子で彼女の声色は高らかで、そうかと思えばどこか和やかで。ネコだからといって馬鹿に出来ない歌唱力。俺の想像していたもの以上に綺麗で、透き通っていた。

悔しいが、とても上手だった。

「……凍土の竜がにや」

「可愛いな、畜生……」

可愛らしい彼女の様子に少し声を漏らしてしまつたが、彼女は気付くことなく歌い続けている。

そんな彼女の歌声の下、七草を綺麗に細かく砕いた俺は米の用意だけを済まし、早々に切り上げた。米は五穀豊穡米。これもまたユクモ地方でよく用いられる、風味豊かな米。それも雑穀入りだ。

豊穡の象徴とも言えるほどの豊かな質と量を誇るこの米は、ユクモ地方産のこの粥に最も相応しいと俺は確信している。

「んにゃ？ お米は炊かないのにゃ？」

「ああ、それは明日の朝やるのさ。これもまた礼儀作法よ」

「……相変わらずのこだわり具合にゃあ」

結局その日は適当に後片付けを済ませ、早々に床に就いた。イルルの口ずさんでいた歌が耳に残っていたからか。はたまた昔の友人のことを思い出したからか。

俺は夢を見た。

夢の中で俺は、彼と共にリオレイアと交戦していたのだ。青く澄み渡つた空と、どこ

までも広がっているように見える大海。そんな双蒼に囲まれた孤島の、海水が我が物顔で寝そべる広いエリア。

雌火竜との激闘の最中、彼の大振りな太刀捌きが俺を転ばして、そのまま女王の巨大な尾が俺を弾き飛ばす。

嫌な目覚めだった。



「……………ふにや、にやあ……………。旦那さん、おはようになやあ……………」

「お……………おはようイルル」

早朝。

煌めく朝日が砂丘に反射して。黄金色に輝く大砂漠が熱を貯め始め、それに伴うようにバルバレも少しずつ体温を上げていく。そんな清々しい朝の中。寝汗が目立つ寝間着のままに、俺は台所で鍋とにらめっこを続けていた。

そんな俺の背後からは、覚束ない足取りのイルルが目を擦りながら歩いてくる。ようやく目を覚ましたらしい彼女は、開き切つてない瞳で俺の寝間着を見て、不思議そうに首を傾げた。



「……みや？ 旦那さん、どうしたのにや？ この時期に珍しい寝汗にや」

「気にすんな、ちよつと変な夢見ただけだ」

昔の俺の思い出が、わざわざ夢の中でぶり返してくるとは。そう叫びたいほど、リアリティのある夢を見せられたものだ。あの時リオレイアのサマーソルトをモ口に喰らってしまった俺は、肋骨を何本か持つてかれてしまったものだ。

本当に、あのユクモハンターと関わりとロクなことがないな。いや、彼がいなければ俺は今この粥を作っていないのだから、多少のミスも御愛嬌、か。

「さて」

そんな彼が教えてくれた作り方。早くから起きたのは米の下拵えとも言える準備があるからだ。一合分の五穀豊穰米を水につけ、三十分ほど寝かす。この工程はあつてもなくても良いのだが、あればやはり味は変わると彼は語っていた。

まあ、彼が料理した時はクエストの真つ最中だったため、あえなく飛ばすことになったのだが。つまりこの工程ありきの七草粥は、これが初というわけだ。

「この米を土鍋にかけて温めるとするかねえ」

水に浸けたそれを土鍋に移し、囲炉裏に火をつける。まずは沸騰させてから。それが米の味をよく引き出す秘訣なのだとか。

まあそんなわけで、火打石で芽生えた火炎に、炭と木材をどんどん投入していく。強

火で沸騰させるにはそれなりの量が必要だろう。こんな時に燃石炭でもあればと思つてしまふあたり、随分狩獵飯が染み付いたものだと思う。まあ、アレの火力は尋常でないためこんな狭い家で使うのは御法度だが。

「旦那さん、沸いたにや」

「お、ほんとだ。じゃあ蓋をして……二十分程度かな。少し火を弱めるか」

「弱火でじっくり、にや？」

「そんな感じそんな感じ」

土鍋の上に蓋を置いて、囲炉裏の火を調節する。一見ただの細かな作業だが、これが粥の味を大きく変えてしまうこともあるため、油断ならない作業だ。また、鍋で土鍋の中を完全に塞いでしまつては内部で蒸気が滞留してしまふこともある。少し傾けるなどの考慮も必要だ。

後はイルルが言つた通り、弱火でじっくり米を潤わせていけば良い。弱火でじっくり——何とも食欲をそそる響きだな。

「うにや……旦那さん、膝乗つても良いにや？」

「ん、別に構わんが。どうしたんだよ……」

共に鍋の様子を見守つていたイルルは、何やら俺の膝の上に座りたいらしい。眠気のせい或少し潤ませた瞳で、じつと俺の顔を見上げてくる。まあ俺としても断る理由はな

いので一向に構わないのだが。

そうしてすとんと、彼女は俺の上で腰を下ろした。彼女の小さな体は俺の脚の上ですつぽり収まり、それが心地いいのか、彼女は嬉しそうな声を一つ上げる。

「ふにゃあ……落ち着くにゃあ」

「……全く、お前も変な奴だよな」

幸せそうに体を伸ばす彼女の柔らかな毛並みを軽く撫でると、彼女はネコらしく喉をゴロゴロと鳴らした。

前々から分かっていたことだが、彼女は随分と甘えん坊な性格のようだ。まあ、可愛いらしいことこの上ないため俺としては別にいいのだけれど。

ああ、そうだ。そういうえばこの前の話の答え、聞いてなかったな。折角二人でゆつくりできる時間なのだし、そろそろ彼女に答えを出してもらうべきか。

「——なあ、イルル」

「……? 何にゃ?」

「お前さ、結局どうするんだ? ドンドルマ……行くのか、行かないのか」

この前彼女に尋ねた、ドンドルマ出立の答え。考える時間を用意して、彼女の中で答えをはつきりさせるのを待っていたのだが、そろそろ彼女の答えを聞いておきたい。俺としてそろそろ出立を考えたいし、ギルドマスターに話も付けるなど、後の予定も詰まっ

ているのだ。

一方の彼女はそんな俺の言葉に少し体を硬直させたものの、一拍。短い深呼吸を置いて、口を開こうとした。

そう、開こうとしただけであって開いたわけではない。

ばちんという、やけに景気の良い音と共に弾けた一筋の火の粉と、同時に走った鈍い痛みが彼女の言葉を妨げたのだった。

「……………?! あっつ!」

「にや、旦那さん、大丈夫かにや!」

何のことはない。

燃える囲炉裏から薪が弾け、それが軽く俺の左手の甲を焼いただけなのだが。イルルはその突然の出来事に狼狽え、心配そうに俺の左手を抱え込む。

火傷自体は別段大したことなく、そう気にする必要もないものなのだが。イルルは慌てて救急箱を取りに行こうとするこの始末。

「け、怪我にや! 回復笛……………?! にや、傷薬……………?!」

「大げさだなあ。別にこれくらいどうってことないよ。唾付けときや治るだら」

「うにや……………むう」

少し恥ずかしそうに、それでいてバツが悪そうな様子で彼女は俺の膝の上に戻り、あ

の時と同じように俺の傷口をそっと舐めた。俺がこの話を振った時と、同じように。

今回はあの時よりも全然軽い傷であるため、そこまで気にする必要もないだろう。痛みもそれほどなく、むしろ彼女の舌の感触の方がくすぐりたい。

「……旦那さんがボクに尋ねた時と同じだにやあ」

「そうだな……。何でだろうな、火傷しやすい性質なのか……」

「ふにや……旦那さん」

やたら優しい声で。やたら優しい表情で。

改めるように俺を見上げた彼女は、少し照れるようにそわそわしながらも、じつと俺の瞳を見つめた。碧く大きいその瞳には、彼女がどんな答えを出すか、やや緊張している俺の顔が映り込んでいる。

そんな瞳を、彼女は一度閉じて。そうしてもう一度俺を見つめ直してから、そっと口を開いた。

「ボクね、色々考えたけど……答えはシンプルだったにや」

「……というと？」

「ボクは、旦那さんと一緒にいたいにや。こうしてたいにや」

宣言通りシンプルな言葉。しかしそこに詰められた想いは重厚なその言葉。彼女には、彼女なりの思いや不安はあつただろう。だが、それを差し置いてでも彼女は俺につ

いて来てくれると、そう言った。

どんな答えでも俺は彼女の意見を尊重しようとしていたが、やはりこの答えは嬉しいものだ。

「……そ、そうか。いや、うん。そう言ってくれと……何て言うか……嬉しい」  
「……にやあ」

中々言葉がまとまらず、しどろもどろと話す俺。イルルはそんな俺を微笑ましそうに見つめては、嬉しそうに鳴き声を一つ上げた。

それと同時に、背後で熱を享受し続ける土鍋から、カタカタと蓋が蠢く音が聞こえてくる。どうやら中身が十分に煮えたようで、グツグツと音を立てるその鍋からは、香ばしい炊飯の香りが漂ってきた。

「もうそろそろいいのにかにや？」

「……あ、ああ。えっと、あとは昨日崩した七草と塩を注ぎ足してっつと」

煮立ち、鮮やかな雑穀色を生み出すその豊穰米の中へ、昨夜調理した薬草やげどく草など七草を投入した。

熱い湯気に当てられた草たちは、その葉脈を耐え切れなくなつたかのように撓しおらせながら米の海に溺れていく。そうして雑穀と七草に彩られた土鍋の中は、質素で慎ましかな世界を創り始めた。そんな世界に少し塩の雪を降らせ、仄かな白を重ねていく。

「じつくり掻き混ぜて、出来上がり」

「にやあ、ボクには分かるにや。細かくなつたトウガラシが隠れてるのが」

「ま、そう言うな。それほど辛くないから大丈夫だ」

ヒゲをピンと立てながら、イルルはスンと鼻を鳴らした。丁寧に細かく刻んだトウガラシが混ざり込んでいることを見逃さなかつたようで、この粥を食べることに少し尻込みしているらしい。

だが、俺とて彼女の許容量を考えてトウガラシを投入したのだ。きつと、彼女が思っているほど辛くはなっていないだろうが。

まあ、一度ご賞味あれつてな。取り敢えず二人分装よそつておこう。

「さあ、新年腹の大掃除。食べようぜ」

「……んにや。じゃあ、いただきますにや……」

葉草の緑。雑穀の赤紫。トウガラシの赤。雪山草の白。げどく草の青。

様々な色が舞い降りたこの一杯は、光を帯びる豊穰米を様々な色が我こそはと彩り、非常に鮮やかな光を放っていた。心なしか、舞い上がる湯気も彩色に染まっているような。そんな錯覚が、俺を蝕んでいく。

お椀に盛られたそれを、まずは一口。用意したレンゲで軽く掬つたそれは口内の半分も満たない量だが、味を確かめるには丁度良い。むしろ程よい空間があつた方が、風味

を楽しめるといふものだ。

そして肝心なお味はというと。

「……にや、そんなに辛くない……。優しい味にやあ」

「……だな。さっぱりしてて朝食にいいよな」

一口咀嚼すれば、歯茎に伝わる米の柔らかさ。もちつとした食感と共に広まる五穀豊穡米の味はというと、パラパラとした淡泊なココットライスとはまた違う、仄かで、それでいて豊かな甘みとコクが特徴的だ。塩を基盤としたシンプルな味と、微かに顔を出すトウガラシのピリツとした辛味が絡み合い、豊穡の象徴らしい層の厚い味を形成していく。

そんな米に寄り添うように。細かく散布した七草は、それぞれの苦味や渋みを徐々に粥の中へ浸していった。

駆け出しの頃よくお世話になったげどく草の純粹な苦味。青味のような味をゆつくりと米に混ぜ込む霜降り草。柔らかい甘みを控えめながらも滲ませる落陽草。米の感触とはまた違う、少しふやけたような噛み応えを残すネンチャク草。そして、香草の如く深い味わいを口内に染み渡らせる駆け出しハンターの友、葉草。様々な味わいが交差するとともに、塩で彩られたこの粥に味の色を差していった。

「にやあ、雪山草……。美味しいにや。苦味もほとんどないし……」



「雪山草は雪山の極寒の最中で育つからな、葉の中に旨みを閉じ込めてるらしい。……ん、うまつ」

苦みや渋みとはまた違う、旨みに分類されるような味。粥の塩味によく合うその味は、五穀に混ぜ込められた雑穀を包み込むことで雑穀特有の後味の悪さを和らげ、逆に雑穀の食感を引き立てていた。噛むごとに溢れる旨みと、ポリポリとした噛み応えが実に堪らない。

味もよく、健康にも良い。様々な具材を入れてこそこの味。イルルからの辛味に対する不評もない、洗練された味を生み出すことが出来たと言っても過言ではないだろう。

「あー……身に浸みる。味もよし、健康にもよし。もう素晴らしい」

「色んな薬草入ってるからにやあ。体には良さそうにや」

「七草は胃腸に負担があまり掛からないしな。濃い味が多い年末年始には丁度良い」

友が語るには、七草粥はただの伝統文化などではなく、とても理に適った習慣であるらしい。

何でも、様々な料理で疲れた胃腸を回復させるに丁度いいのだとか。おせち料理など味の濃い、胃腸に負担を掛ける料理との相性が抜群という、ユクモの心から生まれた一品……と、彼は鼻高々に語っていた。実際のところその話の信憑性は何とも言えない

が、腹に良いことは確かであると、それだけは確信をもって言える。

「正に腹の大掃除だ、うんうん」

「……大掃除を語るなら、お腹でだけじゃなくてマイハウスもしようにやあ」

呆れたように溜息をついたイルルの視線の先には、中身が収まり切っていない収納ボックスや、雑にインナーが重ねられた布の山が鎮座している。

彼らは年末の買い物への代償。買い物に明け暮れた故に、整理も掃除もされなかった負の遺産である。正直手を付ける気は竜のナミダほど湧かない。

「いい加減服くらい整理した方がいいにや。あとあと使うしにやあ」

「む……まあ、それもそうだが。……面倒臭いなあ」

呆れるイルルの正論を頭に打ち込まれ、俺は思わずその頭を両手で覆いたくなくなった。しかし、そんなことをしたところでこの目の前の現実が消え去らない。彼女の言う通り、いい加減インナーを整理しなければ、裸の上に鎧を着なければならなくなってしまうだろう。

仕方ない。取り敢えず床に転がった邪魔な衣服だけでも集めておくことにしよう。

そう決めた俺は、お椀とレンゲを手から降ろし、空いたその両手で荒れたインナーをそつと掴んだ。その瞬間、ふと彼が言っていたとある言葉が脳内をドスファンゴの如く駆け回る。雪に足跡を残すように、記憶の軌跡に声走った。

「…………あ」

「どうしたにや、旦那さん？」

「そういえば、放置した着衣にキノコが自生したのを見たことあるってあのユクモハンターが言ってたな…………ふむ、となると」

「やめるにや、絶対にやめるにや」

く 本日のレシピく

『ユクモ流七草粥』

・ 五穀豊穰米

……………1合

・ 七草 ……・ 葉草

・ げどく草

・ 雪山草

・ 霜降り草

・ 落陽草

・ ネンチャク草

・ トウガラシ

……………計17g

・水  
・氷海塩

……1000CC  
……適宜

狩人遠征録 〔Cigarette、struef

ace〕

## 月に叢雲花に風呂

水分が枯渇した世界。乾いた大気に舞い上がる粒砂は擦れ合い、より一層閑散とした世界を彩っていく。

潤いを完全に失った大地は大きく罅割れ、この乾き切った世界の過酷さを主張しているかのようだ。そんな大地を、大気を、流砂を。甲高い声を上げながら泳ぐ魚竜種と、怒号を上げる人間、そしてネコの鳴き声が震わせていた。

「さあ大人しくしろー！」

「や、やめろニヤー！ 近付くニヤー！」

旧砂漠の一角。砂漠と割れた大地が混ざりかけた様なこの場所で、俺は左手のポーン

ククリを振り抜いた。

一度も強化をしていない、レア度も性能も最底辺のそれ。そんなボーンククリが弾き飛ばしたのは、原始的な装飾がなされた木の棒。狩場で見かけるネコたちが持っているような、シンプルなもの。

「そももいかない、このままもふもふしてやる！」

「ミヤア！ や、やめっ——」

そうして無防備にされた、目の前の黒い獣人——俗に言うメラルーは、迫り来る俺に對して怯えたように、ジリジリと後ずさる。が、そんなことをしても当然逃げ切れる訳もなく、伸ばした腕に絡み取られた。そして抵抗することも敵わず、今に至る、という訳だ。

何もわざわざメラルーを襲うことが今回の目的ではない。用があるのは、このメラルーが持っているポーチなのだ。しかし、ネコから痛めつけて奪うというのは俺のポリシーに反する。ならば、俺らしい他の方法を取るのが良いだろう、要は懲らしめれば良い訳なのだから。

「フニヤ、ニヤアあ……う、うう……ニヤア……」

「ほれほれ、ここが良いんだろ？」

「ニヤ、ニヤア!？」

くすぐるように忙しくこのネコの腹を掻き回してみれば、メラルーは驚いたような声を上げる。しかしその表情は満更でもないようで、身を振りながらも少し恍惚のような声を漏らした。

少しの間、目を細め、幸せそうにもたれ掛かってくる――。

「……はっ、やめ、やめるニヤア！」

「ん、おっと」

猛烈な勢いと羞恥心に任せ、焦ったように身をくねらせたメラルー。そのネコ特有の柔軟さと何処にしまっていたのか分からない腕力で無理矢理俺の腕から抜け出たコイツは、荒い息で肩を揺らしながらも俺を睨みつける。茶色の大きな瞳に力を込めながらも、どう罵倒すればいいか分からないように。力なく顎を震わせるものの、響かせることはなかった。

そうして居た堪れたまなくなったように、メラルーは両手の爪で砂を掻き分け始める。懸命に両手を振るうその姿は、どこか悔しさや名残惜しさを孕んでいるようにも見えたのは気のせいだろうか。

「氣い付けて帰れよ〜」

「……おっ……覚えてろニヤッ！」

最後にそう捨て台詞を残し、頭を砂の中に突っ込ませる。そうして懸命に体を砂に吸

い込ませ、短い尻尾も全て埋めてしまった。余程焦っていたのか、腰に巻いていたポーチも落としてしまう勢いで。

照り付ける太陽光を反射するように光るそれを拾い上げてみれば、そこには小物や化粧品など一般人が好みそうな道具が乱雑に詰め込まれているポーチの姿が一つ。『彼の言っていた秘密のポーチだった。』

「よし、これで十個目だ。さあキャンプに帰ろうか」

「……旦那さん、本当にぶれないにや」

俺から数メートル空けたところで、事の成り行きを黙って見守っていた俺のオトモアイルル、イルルは呆れたように溜息をついた。

今回の依頼は秘密のポーチを十個集めてくること。メラルーに盗まれたアイテムを回収するために、この旧砂漠に散らばった彼らから荷物を取り戻すのが俺の仕事だ。しかし当然メラルーを痛めつけて奪うなど俺がする訳がない。ではどうするか？

「まさか全てのメラルーを撫で回してポーチを奪うなんて……前代未聞だにや」  
「いいじゃないか、平和的な方法だろ？」

メラルーも痛い思いをせず、俺は安全にポーチを回収することが出来る。両者有益、至つて平和的な解決法だ。

それだというのに、イルルは少し不服そうな表情を崩さない。心なしか俺を見る視線



もやや冷ややかだ。まるで、不倫をした旦那でも見るかのような。

「大体何でそんなにネコをあやすのが上手いのにな……謎にやあ」

「んー? ……慣れてるから、とでも言っておこう」

呆れたように。困ったように。行き場のない思いを吐き出すようにそう呟いたイルルの言葉。それを適当に流しながら、俺は拾い上げたメラルーのポーチを自身のポーチの中にしまい込んだ。ポーチにポーチを入れるとは、これ如何に。

まあ、これで依頼は完了目前だ。あとはこの秘密のポーチたちを納品ボックスに収めればいいだけのこと。

「さ、行くぞイルル」

「にやー……」

であれば、意気揚々とベースキャンプに戻ればいい。それでメインターゲットは達成され、無事クエストクリアだ。

それで終着のはずなのだが、どうもイルルの機嫌が悪いようで。尾をくねくねと揺らし、俺の促しに対する返事も不機嫌さを全面に押し出したような声だった。

足取りも少し乱雑で、俺の後ろを歩く彼女は地面を覆う砂を鬱陶しそうに蹴り上げている。一体どうしたというのだろうか。

「イルル? 一体どうしたんだ?」

「……別に……。何でもないにや」

しかし問い掛けてみても返事はやたらと簡素。素っ気ない声しか返ってこない。俺とも目を合わせようとせず、顔を背けてしまう。まるで倦怠期に突入した夫婦の中に漂っているような空気が、何故かこの旧砂漠の端に漂っていた。

どうして急に機嫌を悪くしたのだろう？ 俺がこのクエストを受注したから？ 旧砂漠という環境が気に入らないから？ 相手がメラルーだから？ 俺がメラルーを好き放題したから——？

「……あ。イルル、お前もしかして……。妬いてんの？」

そう問い掛けた瞬間、ピクリと彼女の肩が震えた。同時に足取りも不安定な動きへと変わる。動揺を堪え切れなくなったように震わした体は、彼女の平衡バランスを奪い去るように。そのまま、重力のままに地へと押し倒そうとした。

そう、まるで糸が切れた人形の如く。

「……おっと」

「にや、ふにやあ……」

そんな倒れかける彼女を優しく受け止める。倒れかけるその小さな体を両腕で掬い上げたために、両腕の中に収まった彼女の顔と俺の顔がもの数cmという距離に迫った。

大きく見開かれた彼女の青い瞳に、俺の不思議そうな顔が映り込むほどの距離の近さ。その突然の事態に、イルルは先程までの態度とは一変。焦りと動揺を最大限に含んだ表情で口元を引き攣らせた。

「大丈夫か？ ……凶星みたいだな。もふもふされたいんだろ？」

「にやつ、ち、違う……つにやあつ！ ボ、ボクはそんな……つ！ ……にや、にやああ  
く……」

そんなこんなで、旧砂漠には新たなネコの鳴き声が響き渡ることとなり――。

俺が回収したこのポーチが『彼』の手元に戻るのには、もう少し時間が掛かりそうだ。



「ただいま戻ったぞ。ニャン次郎、これでいいか？」

「ニヤニヤ！ 旦那、助かったでさア。おかげで全部回収できたでやすニヤ」

所変わってバルバレ集会所。無事納品を終えた俺は、旧砂漠からバルバレへの長い旅路を終え、ようやくこの集会所に戻ってきたのだった。そんな集会所の広間でキヨロキヨロと辺りを見回す風来坊風のメラルー、『転がしニャン次郎』は、俺を見つけるや否や嬉しそうに飛び跳ねた。

そう、彼こそ今回の依頼人。散らばった荷物を回収するために俺に依頼した、運搬業を営むネコだ。

「しかしまあ相変わらず手癖の悪いネコたちだったな。……おつと悪い、別にメラルーを悪く言うつもりはないんだが」

「いやいや、世間一般のメラルーどもの評価はそんなもん。気にしなくて良いですニヤ」  
バサツと首に巻いたマントを仰がせながら、ニャン次郎は静かにそう呟いた。彼は数少ない、人間社会に溶け込んだメラルーだ。基本的にメラルーというのは好奇心が有り余るほど旺盛で、同時に気になったものは掠め取つてでも奪おうとする習性をもつ。そのため、アイルーに比べるとどうしても信用されにくいのだ。

ニャン次郎はそれを理解しながらも、心の何処かで憂いを感じているらしい。ぶちまけてしまった運搬中の荷物を根こそぎメラルーに奪い取られるという、このような事態になればそう思うのも仕方がないだろうが。

「……ま、とにかく。これで仕事は再開できそうか？」

「ええ、おかげさんで。……と書いてえところですがねエ……」

「にや？ まだ何か……後ろのアイルー……誰にや？」

どうも歯切れの悪い返答で口籠るニャン次郎に、イルルは少し不信そうに首を傾げる。

だが、詰問しようと開いた口は、彼女の視界に映つたもう一匹のネコの影に阻まれた。様子を窺うようにニヤン次郎の後ろから事の成り行きを見守っていたアイルー。ねじり鉢巻きを頭に巻いた、どこか威勢の良さそうなアイルーだった。

「ん……………？ お前は……………」

「おお旦那！ 聞いてくださいえ聞いてくださいえ！」

「にや……………何か元気の良さそうなアイルーだにや……………」

目線が合うや否や、このアイルーは滑舌の良い、よく響く声を上げる。まるで板前や大将を思わせる威勢のいい声に、イルルは思わず体を震わせた。ピクリと、雪の様に白い毛並みを靡なびかせる。

一方の俺はこの突然の接触到に思わず顔を蹙しかめるが、それに気付いたこのアイルーはおもむろに自己紹介をし始めた。『ユクモ村のしがなないドリンク売り』、それが彼の名乗りだった。

「こちらのニヤン次郎の旦那から評判のハンターさんがいると聞いてやってきやした！  
何でもネコ助けに魂を注いでるのだとか！」

「……………ちよつと話が盛られてる気がするが。まあいいや、ニヤン次郎の紹介か？」

「いやあ、コイツが困って困ってどうしようもないとのことできア。ここは旦那の出演しかない、つてわけでやすニヤ、ええ！」

「……またユクモ村絡みかにはあ……？」

若干たじろいでいるイルルとは対照的な、元氣も凶々しさも人一倍なドリンク売りのアイルー。経緯は兎も角、俺を頼りにわざわざこのバルバレまで訪れたという。ここは期待に依って依頼を聞くというのが筋というものだろう。

そんなドリンク売りの彼が語る事情とは、一体どのようなものだろうか。彼は荒げる声に一休みを置いてから、舌顎を上下させ始めた。

「実はね、ユクモ村が現在観光客が爆発ユクモ的に増えてましてね！　ドリンクの材料が追い付いてないんでござんす。このままじゃお客さん方に迷惑かけちまう！」

「お？　ドリンク？　それってどんな奴なんだ？」

「よくぞ聞いてくれやした！　温泉といえばドリンク！　ドリンクといえば温泉！　ドリンク無し温泉なんざ、ただの熱い水でさア！」

「……つまり、温泉に入りながら飲む、美味しい飲み物のことでやんすよ、旦那」  
氣を落ち着かせたはずが、ドリンクを語るに再び熱を入れ始めるドリンク売り。熱く語るあまり俺の質問に対する回答は発せられなかったが、横で聞いていたニャン次郎が呆れながら補足してくれた。

つまり、彼の言葉を意識すれば、そのドリンクとは温泉のお供として欠かせないものらしい。ユクモ的には、紅葉の下で温泉に浸かりながら飲むドリンクが最高のひと時な

のだとか。

熱く、それでいてサラサラとした上質な湯に全身を包ませながら。夜空に浮かぶ満月とそれを彩る紅葉を楽しみながら。そこで飲むドリンクは言い様のない幸福感を与えてくれるのだと、かつてのユクモ村在住の友人は熱く語っていた。

「……ふむ、面白そうだな。分かった、受けようその依頼」

「おお！ 流石は旦那、男前でやんすな！」

「にや……やっぱりそうなるのにやあ……」

まさに美味との遭遇。ネコとネコの諍いに首を突っ込んだら思わぬ味に巡り合えたものだ。彼が作るドリンクとは一体どのような味なのか。友が言っていた楽しみ方は俺にどんな刺激を与えてくれるのか。俄然興味が湧いてきた。

どうしようもなさそうに溜息をつくイルルと、満面の笑みを浮かべながら肉球で拍手をこなすドリンク売り。そんな彼から依頼書を受け取ると、そこには今回のメインターゲットが記入されていた。その依頼書を飾っていたのは、流石の俺も予想外だったそのモンスター。

「えつと……え？ コイツを狩ればいいのか？」

「いや、正確にはコイツに取り付いているアレでやす、アレ。その名も——」



「ウオオオオオオオンッ!!」

「おつと危ねえ!」

まるで狼の遠吠えのような怒号と共に、俺に大きな影が差し掛かる。巨大な手の形をしたそれは、木漏れ日を大きく享受しながら。跳ね上げた水滴を振り撒きながら。一心に俺を叩き潰そうと、強烈な速度で大地を打ち付けた。そのあまりある勢いに、エリアを覆う水も盛大に跳ね上げる。

舞い上がる大量の滴と、それに紛れて大きく回り込む俺。全身を込めて前脚を振り下ろしたその隙を突くように、俺は回り込みつつ手にしたフロストエツジで奴の後ろ脚を斬り付けた。

「旦那さん、気を付けてにや!」

「分かつてる、大丈夫だ!」

躲されたことにすぐさま気付いた奴は、振り向くように俺を睨みながら——今度はその四肢全てに力を込める。そうして力任せに俺を振り払おうと、凄まじい勢いで大地を蹴った。流石は無双の狩人、その通り名は伊達じやない。

突進に持ち込んだその巨体は、群がるハンターを弾き飛ばすのも目に見えるような速



度だ。だが、如何に強力な技であろうと、当たらなければどうということはない。

「よつとー!」

ギリギリまで迫ったそれを、俺は身を翻して躲す。同時に吹き飛ばされた大量の水滴が、まるで雨のようにこの原生林の一带に降り注いだ。

俺もアイツもそんなことにはお構いなしに、再び向かい合うように対峙する。その大きく発達した前脚で滑る体を地に縫い付けつつ、俺に振り返るその姿。その様は、俺と奴のどちらが狩る者なのか、分からなくさせてくれる。

「まずいじゃ旦那さん! 充電を始める気だにや!」

「分かっている! 目を塞げよ!」

俺と向かい合いながら唸り声を上げる奴——無双の狩人、ジンオウガ。その体が唸り声と共に青く発光し始め、同時にあたりから青い粒が吸い込まれるように集まってくる。く。いや、あれは粒ではない。

今回俺が持ち帰らなければならないもの。

ドリンク売りがドリンクを作るために欲しているもの。

そう、雷光虫だ。

「こいつを——」

ジンオウガは、雷光虫と共生関係を持つ風変わりなモンスターである。この場合、ジ

ンオウガが自らを活性化させるため、より多くの電力を得るために、周囲の雷光虫を掻き集めているのだ。

そして、それこそが今回の標的。ジンオウガに寄生し、自らを活性化させた『超雷光虫』。かのドリリンクの材料となると、今俺の目の前に集まっている。

「食らいなッ！」

「ガウアッ!？」

そんなジンオウガだが、一定以上雷光虫を集めている最中はほぼ隙だらけと言っている。雷光虫を集めることに集中し過ぎるあまり、本来躲せるものも躲せなくなってしまうのだ。

そんな奴は閃光玉の恰好の的。目が眩むあまり、隙を晒してまで雷光虫を集める行為を中断してしまうその様は、どこか皮肉めいているようにも見える。

「突撃にやーっ！」

「うおっと、無理すんなよ！」

刃薬を取り出して剣を強化しようとした矢先、俺の横を白と黒の影が駆け抜けた。靡かせる雪のように白い毛や、黒い装飾と青く透き通った光を放つ角が彩るその影。手にした武器を振り回しながら果敢にジンオウガに突っ込むその姿は、この狩猟場にはどこか不釣り合いな可憐さも同時に孕んでいる。

察しの通り、その影の正体はオトモアイルルのイルル。しかし、今までのマフモフSネコ装備ではない。以前狩ったキリン亜種の素材を用いたキリンUネコシリーズだ。

「にや、にやにやつ！」

「グルルウ……！」

懸命に武器を振り回すイルルに、視界を遮られながらも振り払おうとジンオウガはその体を無理矢理一回転させた。遠心力も相まって強烈な勢いを生み出したその回転に、イルルは巻き込まれ吹き飛ばされる。

思わず悲鳴を上げそうになるその瞬間。だが、その心配は杞憂だった。軽い体が宙を舞うものの、彼女は平然と着地をこなしたのだ。

「大丈夫か!？」

「全然問題ないにやー！」

やはりと言うべきか、今までの装備とは段違いの性能を誇るキリンUネコシリーズ。キリンの上皮を思わせるその圧倒的な防御力は、装備となっても失われていない。彼女へのプレゼントとしてあの装備を贈ってみたが、どうやら予想以上の功を奏しているようだ。

一方、何とか視力を取り戻したジンオウガは、目に見えて不機嫌そうに唸る。唸りつつ、その鋭い瞳で俺を睨んだ。そうして、犬歯を露わにしたその口で酸素を吸い、背中

の光を強めながら身を屈ませる。

「……ッ！ 何か来る！」

そう思ったが早いか。屈んだ体を大きく振ったジンオウガの背中から、青く輝く球体が緩やかに飛び出した。

大気を滑るように走るそれは、まるで意思を持っているかのように弧を描く。その奇妙な加速がさらに続き、いよいよ俺の視界を埋めるほどに迫った。原生林の青い水を塗り潰すような、光る青。電気が意思をもったような、青い光——。

「つとー やべっ！」

咄嗟に振り上げた右腕。そこに装着された氷を固めたような盾が、その光弾を危うげながらも弾き飛ばす。盾に遮られた光は、衝突の瞬間、まるで統制を失ったかのように四散した。一つの塊だったはずのそれは、いくつもの粒子となって散り散りになっていく。

いや、粒子ではない。この一つ一つがまるで意思を持つかのように大気に溶け込んでいる。つまり、これは。

「雷光虫……？ 今のも雷光虫か。つーことは……」

「淡い期待を胸に右手の盾を見やれば、そこにはまだ数匹が盾に付着していた。」

氷の盾の上を動揺するように這っているそれらは、そこらの雷光虫と何ら変わりのな

い普通の雷光虫のようだ。今回必要なのは活性化された超電雷光虫。この雷光虫では少々物足りない。

「どうやら放出されたらある程度の力を失うようだな。こいつらを持って帰ったところで意味なし、か」

「旦那さん、大丈夫かじゃ!?!」

盾の虫を振り払い、刃薬で光るフロストエッジで風を鳴らす。懸命にジンオウガを引き付けようとしているイルルが、俺の様子を心配してか声を掛けてきた。

そんな彼女を鬱陶しそうに見ていたジンオウガだが、再び俺が近付いてくるのを見るや否や、警戒するように唸り声を上げる。そうして、今度こそ俺を轢き殺そうと、再び両前脚後脚で大地を蹴り飛ばした。

瞬間、大量の水飛沫が舞い、ジンオウガの体が俺の視界を一瞬で圧迫する。このまま弾き飛ばされてしまいそうなその勢い。勝負の行く末を簡単に決めてしまうその威力。

だが、それを攻撃に転じてしまえば、どうということはない。

「遅いッ!」

バックステップ。

ただのバックステップが、ジンオウガのタックルを空を斬らせた。着地と着水が同時に起こり、再び原生林に雨が舞う。その中で、雨と共に躍り出た一筋の斬撃がジンオウ

ガの胴を斬り上げ、同時に上から斬り下ろした。

「グオオツ!」

何のことはない、回避の勢いを利用したジャンプ斬りと斬り下ろしの二連撃。だがそれがジンオウガの平衡感覚を器用に打ち抜き、結果奴は転ぶように怯んだのだった。

そうなればもうこちらのものだ。大きく隙を晒したその背中。その背中に向けて、俺は大きく跳躍する。

「流石だにや旦那さん! 頑張つてにや!」

「おう、任せろ!」

加速によって急激に流れる視界の端で、俺を鼓舞するように武器を振るうイルルの姿が走った。同時に気流が耳を渦巻く音と共に彼女の声援も届く。

そんなオトモの期待も込めるように、雷狼竜の背中に飛び乗った俺は、その白と青の堅殻を削るように剥ぎ取りナイフを突き立てた。火花が散るほどに電流が溢れるその背中は、人間が乗り込むには些か過酷の様にも思えるが、ここは時間との勝負。

俺がジンオウガを怯ませるのが先か、ジンオウガが俺を振り落とすのが先か。

「——クウウウンツ!」

勝ったのは、俺だ。勢いよく、執拗に。同じ部位を何度も何度もナイフで削った結果、とうとう耐え切れなくなったかのようにジンオウガは大きく体勢を崩した。

痛みを放出しようとするが如く、全身を転がす狼。露わになる、その背中。

「背中がガラ空きだ！ それチャンスチャンス！」

「いたにや！ 雷光虫だにや！」

転げ回り、露わになったその背中。幾つもの青い粒子が付着したように見えるそれは、背中を覆う体毛に隠れつつも、完全に隠れ切れてはいないらしく。

つまり——本来ジンオウガに隠れている筈の超電雷光虫が、取ってくださいと言わんばかりに俺の目の前で曝け出されたのだった。

「ほれほれ獲れ獲れ！」

「にやにや！ 逃がさないにやーっ！」

突然外気に晒された超電雷光虫は、目前に迫った捕食者たちを前にその身を電流で焦がす。懸命に身を守ろうと、俺たちを退けようと輝くものの、所詮は無駄な足掻き。

ドリンク売りが支給してくれたこのボロ虫あみは、彼らの抵抗虚しくもあつさりとう雷光虫を吸い込んだ。

「よっしや！ 獲れた獲れた！」

「一、二、三、四……。やったにや！ 依頼達成にや！」

俺とイルルが振るった虫あみの中には計五匹の超電雷光虫が収まっていた。ドリンク売りが要求していた虫の必要個数は三匹。あとはこいつらをベースキャンプの納品

ボックスに収めれば、クエストは無事完了だ。

一方でようやく体勢を立て直したのか、ジンオウガは荒い息と共にその身を転げ起こした。そうして憎々し気に俺とイルルを睨みつけるのだが――。

「んじやあなジンオウガ！ 達者に暮らせよ！」

そんな奴の視界に映り込んだのは、ハンターが地面に謎の玉を投げつける光景と、そこから湧き上がる緑色の奇妙な煙だけだった。



「さあ旦那、出来たですぜえ。是非ご賞味してくんせえ！」

「お、きたきた。それじゃいただこうかな」

「……見た目は思ったより普通だにや」

夜も更けてきたバルバレ。

その町並みは、今宵も変わらない満点の星空と空に浮かぶ上弦の月に彩られていた。漂う大砂漠の空気は少し肌寒いが、今俺が身を浸しているものはそんな冷えた大気から俺を守ってくれている。

バルバレの大通り。その隅で静かに佇む、とある事情でバルバレに残された我らの団



の料理長のキッチンには一人の人間と、二匹のネコの姿があった。

「しかし料理長も粹なことしてくれるねえ。まさかこの大鍋を風呂代わりに貸してくれるとは」

「……まあ、洗って返せという条件付きだけど、にゃ」

そう、今俺が身を浸しているのは鍋風呂。残念ながらただ水を熱しただけの——それも鍋で——風呂だが、空に浮かぶ美しい夜空を楽しむことは可能だ。そんな条件の下、ドリンク売りの彼は俺へのお礼としてドリンクをご馳走してくれるという。

そうして彼が俺の下へ届けてくれたドリンク。製法は企業秘密ということで隠し味に超電雷光虫が使われていることしか分からなかったが、そのドリンク自体は薄い黄色で輝く、ごく一般的なドリンクのようにも見えた。しかし中には細かい気泡が幾つも浮いており、その見た目はラムネのような炭酸飲料のようでもある。

「んじや、あの月に乾杯と洒落込もう」

「……キザつばいにゃ」

「乾杯ニャー！ さあさあいただいで！ グイツといっちゃって！」

やたら熱く鼓舞するドリンク売りに苦笑いを浮かべながらも、俺はそつと彼が渡してくれたビンに口を付けた。ガラスでできたそれは、冷やかに俺の唇に触れるが、その温度差を埋めるように、そつとビンから液体が流れ込む。

味わいとしてはレモン風味の飲料といったところか。ほどよい酸味と、ほんのり口内に広がる甘さがそう感じさせた。まるで麗水を滴らせる滝のように緩やかに流れ込んできたそれは粘り気もほとんどなく、あつさりとしたのどごしが魅力的だ。口内を洗うように弾ける炭酸が、静かな刺激を孕んでいるようにも感じられる。舌をそつと撫でる優しい甘さと、少し喉奥を覆うような苦味。そして柑橘類特有の爽やかな酸味が、口内から喉へ流れ落ちる麗水を彩っていた。

超電雷光虫は一体どのような要素だったのだろうか。虫らしい味は一切感じられず、ドリンクらしいさつぱりとした風味だけがただただ口内に残っている。もう少し強いクセがあるのかとかと思つたが――。

「旦那、もしや雷光虫を探してやすかア？　ご安心を！　雷光虫は隠し味！　そう口に残るものではないですぜえ」

「ん、おお。確かに言われてもなかなか気付けないな、これは。まさに隠し味だ」  
「ちよつと残つてる苦味がそれかによあ……？」

ドリンク売りの言う通り、確信をもつてこれが超電雷光虫の味と言える結果とはならなかつた。一体どのような製法でここまで味の精度が高いドリンクを作ることが出来るのか、俺には想像もつかない。彼のプロとしての技量を垣間見たような気がする。

見上げれば、満点の星空。淡く輝く半月。生憎今宵は満月ではなかつたが、上弦の月

というのも中々風流だろう。少し肌寒い風は反って風呂の温かさを助長させ、より風呂とドリンクの濃い関係性を強くする。ただの風呂でさえこれなのだ、本場の美しさはこれとどれほどの差があるのだろうか？

「……こりやあ爆発ユクモ的に人気が出るわけだ。納得するよ」

「にやあ、ボクも温泉つてやつに入つてみたいにやあ。ただのお湯じゃないんだにや？」  
「ええそりやあもう！ 肌に良し健康に良し、素晴らしい名湯が待つてますぜ！」

ドリンクの滑らかなのどごしに思わず吐息が漏れた。美しい夜空を見ながら、風呂に身を浸しながら一杯。何と風流なことか。

近年、爆発ユクモ的に観光客が増えた結果、大海原を運行するユクモ村行きのお客様なども用意され始めたそうだ。その話を聞いた時こそ何のことやらと一蹴したのだが、こどもドリンクと風呂の良さを思い知らされては考え直す必要があるそうだな。

それどころか、俺自身もユクモ村に少し興味を抱き始めた。数年前に何度か訪れたきり、食材以外の情報を一切取り入れなかったユクモ村。今は一体どのようなになっているのか？ 村はどのように発展しているのだろうか？ 郷土料理や懐石料理は、一体どんな風になっているのだろうか？

「……よし、決めた。イルル、俺たちもユクモ村に観光に行こう」

く本日のレシピく

『ユクモドリンク』

☆ドリンク売りアイルーの頑なな拒否により、今回のレシピは非公開である。

## 旅のお供は味覚のお供

まるでインクのような、絵の具のような。あからさまな青と緑が混じり合ったような奇妙な色が、このどこまでも伸びる世界を形作っていた。

果てに見えるのは空と交わるような水平線。太陽を隠すように広がった薄暗い雲と、濁るように広がる遠海が吸い込み合い、まるで世の果てのような景色を描き出している。

そんな世界を映すこの窓は、薄いガラスに覆われていた。その心許ない厚みが潮風を遮り、この穏やかな空間を外界から隔てている。潮の風も香りも遮断しているおかげで、この狭い空間にはどこか安らかなで落ち着いた空気が漂っていた。

「食べ物や飲み物はいかがですかニヤ〜」

十席程度の座席と、その座席に沿うように備え付けられた窓ガラス。座席は空間の筋となる通路を挟むように左右に広がり、この空間の設計的美を形成している。

その通路を音を立てながらゆったりと進むのは、客室乗務員風の衣装を纏ったアイルー、そして彼がひく小柄な台車。その台車には、スナックやスイーツなどの間食系食

料品とドリンク、お茶といった飲料が所狭しと敷き詰められている。一目瞭然だが、これは俗に言う”船内販売”という訳だ。

「なあ、そのアイルーよ」

「はいニャー！ 何か買われますかニャ？」

「いやな、もつとがつつりしたものが食いたくてな……。他に何かないか？」

波に揺られ、船内の壁が小さく軋む。その船特有の音も既に慣れたと言わんばかりに気にしない彼は、台車の裏に収納されていたメニュープレートを器用に取り出し、そんな厄介な注文をしてきた客ーもとい俺に見せてきた。それも嫌な顔一つせず。

「今なら特製ローストイェンクック弁当が人気ですニャ。在庫も僅かですし、船内食なら特にお勧めですニャよ！」

「ほう……これはなかなか」

彼が提示するそのメニューには、仰々しくローストチキンの乗った弁当が紹介されていた。怪鳥イェンクックの強靱な脚周りを用いた噛み応え抜群のロースト。こつてりしたブレスワインのタレで十分に焼かれたそれは、肉の繊維が口の中で解けていくような食感で、噛む度に肉汁がどんどん溢れてくるという。そのジューシーさがウリであり、同時にリピーターも生み続けていることで有名なのだとか。

そんなローストイェンクックを乗せているのは、丁寧に炊き込まれた米らしい。怪鳥

のダシで炊かれていますというそれは、ふつくらとした形に風味良い香り、そして何よりも奥深い味で人気を博している、と。

防具の特徴を補助する珠のように添えられた山菜も、弁当をより鮮やかに、それでいて慎ましやかに彩っている。

船旅で、囁くように身をくねらす波に揺られながら。薄く軋む船らしい音色に耳を傾けながら。窓から見える空と海のコントラストで瞳に色を加えながら。

そうして咀嚼するローストイアンクックとは、一体どのような味の美を生み出すのだろうか？ そう考えるだけで、不思議と俺の口内に唾液が染み出し始めた。

「じゃあ、それを。イルルはどうする？」

「にゃ……ボクはお腹空いてないからいいにゃあ」

「……ということですね一つくれ」

「ニャー！ まいどありニャー！」

快活な笑みを浮かべて料金を受け取った彼はその台車から弁当を取り出し、魅力的な光を放つそれを俺に渡してくれる。仄かに肉の香りを漂わせるそれはまだ温かく、出来立てであることを厳かに証明していた。

俺の受け取る姿を見ては満足気に頷いた彼は、乗務員室に向けて再び台車を走らせる。一方で、俺の横に座りながら窓の外を眺める俺のオトモイルルことイルルは、少

し萎縮するような顔で頻りに空や海に向けて瞳を走らせていた。まるで怯えるように警戒するように。

「……イルル、大丈夫だつて。この船は元撃龍船の大型客船。何かあつても、ちよつとやそつとじゃ沈まないよ」

「にや、分かつてるんだけど……にやあ。うう……」

俺の声掛けに反応しながらも、やはり恐怖感が収まらないのか俺の体にそつと身を預けるイルル。海上での移動。これは彼女にとつてトラウマとも言えるかもしれない。彼女がチコ村に流れ着いたのも、海上難破が原因だったらしいのだから。

それでも頑張つて俺に合わせてくれるあたり、イルルの人の良さが窺える。

そんな彼女が、俺にもたれ掛かることで引き攣らしていた表情を少し緩ませた。そうして、少し躊躇いながらも俺の顔を見上げてくる。

「……旦那さん、その、ボク……」

「……ああ。それで安心するんだつたら、もう少しそうしていてもいいぞ」

その言葉に少し安堵したように、イルルは小さな鳴き声を上げて俺に全体重をかけてきた。とは言つても、所詮はイルルの体重。人間にとつては大した負担でもない。

そうして静かに目を閉じる相棒を見ながら、俺は弁当に添えられた割り箸を二つに分ける。特に偏りなく綺麗に分けたそれを右手で構え、左手でそつと、その弁当の蓋を開



けた。

耐水性をもち、かなりの分厚さを誇る加工紙に囲われたその弁当。そこには所狭しと敷き詰められた炊き込みご飯があり、その上にローストされたイヤンクツクが一切れ。そしてその周りにユクモ地方で採れる特産タケノコやドスマツタケなどといった山菜が散りばめられていた。

山菜に使われたこれらも中々価値のある食材だが、やはりこの弁当という世界の中では主役を立てる脇役という扱いらしい。薄く切り分けられたそれらの量は、やはり言うべきか少なめである。だが、その代わりとでも言わんが如く、ローストイヤンクツクは自らの存在を強く主張していた。

大きく切り分けられたその一切れは、弁当箱の面積の半分は占めるかとうかという程大きく、その厚みも十分すぎるくらい豪華である。プレスワインが使われているというそのタレは濃厚な香りを強く放ち、空腹に揺らぐ鼻孔を大胆に擦くすくった。

「あく、たまんねえなこりや……」

十分に見た目と香りを楽しんだのなら。

とうとう真にこの弁当に迫ろうと、俺は右手の指に力を込めた。箸越しに伝わってくる米の感触。柔らかかそうなその見た目通り、ふつくらとした感触が箸から存分に伝わってきた。

イヤンクツクという貴重な鶏肉のダシを贅沢に使い炊き込まれたその米は、窓から入り込む光を妖艶に反射する。その米を染める色は本来薄い茶色なのだが、光を帯びて神々しい白色に僅かながら染まっていた。

立ち昇る湯気の色も相まって。発せられる風味豊かな香りに助長され。

これ以上我慢するのは酷だ。そう訴えるかの如く、俺の口内はいよいよ唾液で溢れかえりそうになる。そんな水中闘技場のような口内へ、俺は摘まんだ米を一心に放り込んだ。

「いただきます。……んっ、これは……ッ！」

濡れた舌に舞い降りた奇跡。ほんのりとした甘みと、米らしいはつきりとした旨み。

怪鳥のダシに包まれたその味は、しっとりとした食感とのマッチ具合が素晴らしい。噛むごとに、口内をダシの香りで染め上げていった。五穀豊穰米ほどでないにしても、そのもっちりとした米らしい食感は、炊き込みご飯には打って付けと言えよう。そう感じてしまう程重厚で、奥が深い味覚がじっくりと舌や顎を肥やしていく。

ダシには鶏肉らしいさっぱりとした旨みが含まれているようで、どこかガーグア鶏ガラスープとも通ずるような味ようだ。あっさりとした脂分はしっとりもっちりの特徴のこの米の旨みを控えめに、しかし確実に助長しており、鶏飯という名の矜持を過不足なく表現している。

米に添えられた特産タケノコは、どうも薄く鯉節で染められているようで、如何にもユクモらしい味を構成していた。ドスマツタケは濃厚なキノコの風味と、キノコらしい歯に残る噛み応えを残している。脇役といえど、ユクモ村を代表する食材だ。味に関しては文句の付け所がない。

「いいねえ……。気持ちも舌もあつたまつてきた」

口の中で広がる穏やかな味覚。それに満たされた舌は、ふといつかの味覚を思い起こしていた。

バルバレ集会所で、たまたま本日限定ということで用意されていた炊き込みご飯。鶏飯でこそなかったが、ダシの風味とさつぱりとした後味はこの味とよく似ている。同時に配られていた黄金芋酒の独特な風味とも、それはそれはよく合っていた。

「……黄金芋酒、飲みたいなあ……」

残念ながら、ここには黄金芋酒はない。あるのは、このローストイャンクックのタレに使われたというブレスワインだけだろう。

だが、舌が味覚の記憶を思い起こすままに、何となく黄金芋酒が懐かしくなってしまう。そういうえば、今回の旅を執行する要因の一つとなったものにも黄金芋酒は関わっているのだから、当然と言えば当然だろうか。

箸で摘まみ直したローストイャンクック。それを口に含む前に、俺は舌に残る味を、

そしてその記憶を再び咀嚼し始めた。



「——シグ君、ドンドルマに出発する見通しを立てたというのは本当かい？」

「ああ、マスター。世話になったな。近いうち旅立つとするよ」

そう、それはニヤン次郎の依頼を受けるよりも前の話。どこから嗅ぎつけてきたかは知らないが、バルバレのギルドマスターが、俺にそう問い掛けてきたことが始まりだった。

元々俺が目指していたのは、ユクモ村ではなかった。本当の目的地はドンドルマ。ハントーズギルドの最大勢力の地へ向かうことが、そもそもの目的だったのだ。

ところが、そんな俺の強かな計画も、洩るように髭を擦るギルドマスターの一言により瓦解することとなる。

「率直に言うよ。今はドンドルマに行かない方が良い。……というより許可できない」  
「……は？ え、どういうことだよそれ……」

突然彼から放たれた禁止を意味する言葉。当然容認されると思っていただけに、その突然の行動制限に俺は不覚にも呆気にとられた。

だが、何も意地悪でそう言っているのではないということは、彼の表情を見れば火を見るよりも明らかだ。きつと何か、何か理由があるはず。

「これはまだあまり浸透してない情報なんだがね……ドンドルマが機能停止寸前に陥っている」

「……え、それって……」

「うむ。どうやら鋼龍の突然の襲撃に見舞われたらしい。町の被害、ギルドの損害が著しくてね。現に活動休止状態だ」

鋼龍、クシャルダオラ。古龍種に属するその古龍は鋼の如き鱗を纏い、嵐の如く山を崩す。嵐を起こし、纏い、操るといふ超常的な力を持つまさに天災そのものであり、危険度も戦闘能力も並のモンスターとは比較にならないという。そんな古龍が、ドンドルマを嵐で飲み込んだと？

確かにドンドルマはその地理的關係上、モンスターの襲撃に遭いやすいという特徴を持つ。故に対古龍の防衛機構は十分に存在していただろうが——それをものともしいとは、本種の戦闘能力の高さを、否が応でも感じてしまう。

「……それでね、今はその復興作業を筆頭ハンターたち……そして我らの団に行ってもらってるんだ」

「我らの団？ 団長やソフィアとかがか？」

「ああ、そしてキャラバン専属のハンターも一緒にね」

聞けば、このバルバレギルドに属する筆頭ハンターら四人と、我らの団が協力して現在街の復興に勤しんでいるらしい。件の生態異常の根源であったという謎の古龍、シャガルマガラの討伐を成し遂げた我らの団ハンター。未だ会ったことのないその人物も、今ドンドルマで汗水を流しているのだとか。

そう語るギルドマスターは、そのような危機的状况にも関わらず、何処か自信に溢れるような、信頼で満たした表情を崩さなかった。彼がそこまで入れ込んでいるらしい我らの団ハンター。どうやら、相応の実力を併せもっているのだろう。

「だけどさ、それで俺の出立を許可できないというのはどうということなんだよ。どうせなら俺も手伝って——」

「いや、これ以上の混乱を避けるため。そして安全管理のためにも、ドンドルマの復興作業は彼らに集中させることになってね……」

それでも抵抗がましく俺が口を挿むと、彼は目を伏せながら首を横に振った。まるで子供を諫めるような表情で、俺が諦めることを願うように。

量より質。ギルドから信頼されたハンターを少数精鋭で集め、彼らに復興作業に従事させる。それがバルバレギルドと大老殿が決めた方針だという。それ故に、人物の出入りには厳しい制限が設けられているのだと彼は語った。

「……ギルドの信頼、ねえ」

「勘違いしないでおくれ。私はシグ君のことを信頼しているよ。腕のいい、頼れるハンターだって。……けれど、けれどね……」

「分かっている、分かっているよ。……過去の行いは、どう足掻いてもなかったことには出来ないって」

嘲りを含むような声が漏れる。マスターが言葉を繋ぎ終える前に。その言葉を上書きするように。

大方ギルドのことだ。かつてのハンター活動は目を通しているだろう。そして、俺の今までの活動——それもバルバレに来る前のこともチェック済みという訳か。

「まあ、気にしないでおくれ。昔は昔、今は今だ。酒に流してしまおうじゃないか」  
「あ……ああ。すまない」

そんな優しい声と共に、彼はトクトクとおちよこに酒を注ぎ始める。独特な匂いを放つ黄金芋酒の香りは、少し鼻を突くようで。鼻がむず痒くなつたようにも感じた。

そんな黄金色の表面に映る景色を見ながら、俺は思わず憂いを漏らしてしまう。自らの計画が見事に瓦解したことに對する、乾いた憂い。

「……あーあ。折角旅費貯めたのになあ……」

独り言のつもりだった。ギルドマスターとの会話の起点にするつもりは毛頭なく、そ

のまま流してもらうつもりだった。

しかし、そんな俺の思惑からは大きく外れ、その言葉に対してギルドマスターは不思議そうに首を傾げる。そうしてその疑問を言葉に変えた。

「旅費？ ……まさかシグ君、ドンドルマへの旅費を用意していたのかい？」

「ん、まあ、そうだけど」

今となつてはそれも意味を為さない。そんな意味を込めて嘲るように肯定する――何故かギルドマスターは、唐突に頭を抱え始めた。人の間違いを憐れむような、そんな頭の抱え方。

一体どうしたのか。今度は俺が湧き上がる疑問を口にしてみれば、彼の口から驚くべき事実が解き放たれた。

「……えつとだね、ハンターの都市移動はギルドが旅費を保証するという制度があつてね――」

「――にやつ……にやあッ!!」

「……あつ」



突然の衝撃が、俺とイルルを意識の深淵から引きずり上げる。

風斬り音と共に響く生物独特の咆哮音。それと同時に、船が大きな唸り声を上げた。まるで上から押し付けられたかのような衝撃。それに船は勢いよく海に押し込まれ、船内が嫌な悲鳴を上げる。その揺れに、乗客も触発されたように悲鳴を上げ、アイルーのひく台車は轟音を立てて崩れ落ちた。

しかし衝撃は、それだけでは収まらない。船が何とか浮き上がったと感じた、その瞬間だった。今度は投げナイフの如く鋭い何かが、船の側面を打ち鳴らす。その飛来したものの幾つかは、見事に窓ガラスを射止め、脆く薄いそれを粉々に斬り碎いた。

まるで狙い澄ましたかのように風を斬るたった一枚の刃。それは窓を碎いても速度を全く緩めずに、箸に摘ままれ宙に浮いていたこのローストイアンクックを射抜いた。射抜いてしまった。

「何にや！ 何か飛んで来たにや！」

突然の出来事に。パニックを起こす乗客。その乗客を見て事の重大を察したのか、顔を青く染める乗務員。イルルは身を起こしては、この事態にはつと剣を構えていた。

しかし、当の俺はといえば茫然自失。目の前で、この右手の箸で。しっかりと掴まんでいた箸のローストイアンクックは、肉片すら残さずに消えていたのだ。掴んでいたはずのものを突然失った箸は、虚しく何度も空を掴み直していた。消えたローストイアン

クックを、追い求めるように。

「だ、旦那さんしつかりするにや！ 何かが来たみたいにやつ」

「……あれは？ もしや……鱗、か？」

平静さを失いかけた彼女の声が俺の耳元で奏でられる。ようやく事態を飲み込めてきた俺は、そつと目線を弁当から船内へ逸らした。メインディッシュが失われたという現実から目を逸らすように。

そんな俺の視界に映り込んできた事態の犯人。それは船内の壁に残っていた。残念ながら、俺のローストイアンクックを奪ったものは窓を通して海の深淵へと消え去ってしまったようだが——その同胞は幾つも船内に残っている。

窓を貫いたのは、船内の壁に突き刺さっていたのは、それは、黄金色の刃だった。鋭く加工されたようにも見える。深々と壁に喰い込むほどの斬れ味だ。しかし、それは人の手によつて生み出されたものではないことは一目瞭然だった。

何よりも、その形。鱗なのだ。刃の如く鋭く光る鱗なのである。

「み、皆様！ 落ち着いて聞いてくださいニヤ！ モンスターの襲撃ですニヤ！」

ひっくり返った台車の横で、震える体を押さえながらそう声を張り上げたのは、あの乗務員アイルーだった。それが起爆剤になったかのように、乗客たちが悲鳴を上げる。このまま自分たちは、海の藻屑となってしまう。そう悟ったような、悲痛な叫び。

この船は元撃龍船ということもあり、峯山龍クラスの衝撃でなければそうそう破壊されることはないだろう。だが、それも結局時間の問題でしかない。誰かが襲い来るモンスターを撃退しなければ、この船はいずれ沈んでしまう。

「チツ……仕方ない！ 迎撃するぞ！」

「ふにやつ……りよ、了解にやあ……っ！」

武器を取り、船を襲うモンスターを確認しようと窓から外を覗く。

空はいつの間にか苦悶の表情へと変わっており、まるで唸るような声を上げていた。乱気流に見舞われるように。轟く雷鳴を内包するかのよう。

そんな荒れる空と海のコントラストは、踊り飛ぶ一頭の飛竜による独壇場となっていた。俺にとってローストイェンクックがご飯なら、アイツにとってのご飯は俺たちということか。

「お、お客様!? も、もしかやハンターでしたかニヤ!?」

「ああ、アイツの相手は俺たちに任せな」

甲板に繋がる扉へと続く通路。そこで横転する、先程弁当を買ったあの台車。横で譁々と震えていた乗務員アイルーは、俺たちの姿を確認するや否やその曇り切った表情を一変させた。降って湧いた希望に縋るように、俺の方へと駆け寄ってくる。

そんな彼の背後で地に伏せる台車は、見事なまでにその中身を散乱させていた。袋詰

めされたタンジアチップスは粉末状にまで砕け、ビンに貯められていた筈のボゴボゴラは床の木材を薄く染め上げている。

そして、乗務員アイルーの「在庫も僅か」という言葉が差していたであろう残りのローストイヤンクック弁当は、見るも無残な姿になっていた。

「……絶対許さんぞ、あのクソ竜が……！」

青い光を放つ海と、白い光に染まる空。空と海を繋ぐように雷鳴が駆け巡る。まるで大銅鑼のように大気を打ち鳴らすそれは、荒れる船を軋ませるほど重圧的だった。

そんな空を舞う竜は、響く雷名に抵抗するように。鳥のような、甲高く響く声を震わせその身を奮い立たせる。

千刃竜、セルレギオス。

その声の主——大型客船を襲った張本人は。荒れる海に濡れる甲板の上へ舞い降りたのは。金の刃を幾重にも巻いた、鋭い手足を持つ鳥のような姿をした飛竜。

その正体の名は、俺の大切なローストイヤンクックを台無しにしたそいつの名は、それだった。

く本日のレシピく

『ローストイェンクック弁当』

・ローストイェンクック	……280g
・ブレスワインのタレ	……たつぷりと
・怪鳥ダシの炊き込みご飯	……1/2合
・鰹節込み特産タケノコ	……10g
・ドスマツタケの切り身	……8g
・その他各種山菜	……少量

## 漁夫の利狙う魚と漁夫

千刃竜、セルレギオス。

その声の主——大型客船を襲った張本人は。

荒れる海に濡れる甲板の上へ舞い降りたのは。

金の刃を幾重にも巻いた、鋭い手足を持つ鳥のような姿をした飛竜の名は、それだった。

何故こんな所にいるのか。これが最初に感じた疑問だ。そもそもこの飛竜は、今まで調査こそされど、狩猟依頼を出されることはそうそうなかつたのだ。それは本種の戦闘能力も起因しているが、一番の理由は生息域にある。

「……ここは海上だぞ。何で森からこんなところまで飛んできたんだよ」

「うう、迷惑過ぎるにゃ」

獲物を測るようなその眼。目の前で構える人間を威嚇するように口を開くこの飛竜は、本来未知の樹海の奥地に住まい、そこから出ることは滅多にないのである。

それが、今ここにいるということは。コイツが余程変わった個体なのか、それともコイツの住処で何かあったのか。

「ギイイ……」

ただ戦う、というよりは、疲弊を癒すため仕方なく獲物を狩る。そう主張するように、弱々しくも意志の強い声で千刃竜は唸った。消え入りそうなくらい弱々しい音色で。

見れば、奴の体は何処どこも彼処かしこも傷だらけだった。両翼の爪は欠け、身体を覆う鱗は何枚も剥がれ落ちている。まるで焼けたように爛れたその体は、激戦を繰り広げた証でもあるようだ。

唯一綺麗なのは、頭から伸びる刀角。雷光を反射させるそれだけは傷一つなく、飛竜としての矜持を表しているようにも見える。

「とにかく、ローストイェンクックの恨みだオラアッ！」

負傷個体。一体何があつたかは知らないが、船を守つて戦わなければならないというこの状況なら、却つて好都合だ。

修理し直したテオースパーダ。腰から引き抜いたそれを、鳥脚のように細く堅牢なその脚に打ち付ける。剣は弾き返されることなく、そのまま脚の皮膚を裂いた。斬撃を覆うように舞う橙色の粉塵に、疲弊しながらも危機を察したのか。セルレギオスは傷だらけの体に鞭打つて、勢いよく船を蹴る。

「うおっと、待ちやがれてめっ！」

その鋭い翼をためかすことで巨体を浮かし、千刃竜は風に乗るように船から飛び

立った。甲板から大きく距離を離し、上空から船を——剣を構える俺たちを見定める。憎々し気に唸り声を上げながら、その削られた鱗を撒き散らし、何とか俺たちを仕留めようと画策しているようだ。

残念ながら、もう余裕をもって撒き散らせるほど健常な鱗は残ってないようだ。音を立てて碎ける刃鱗は、虚しくも甲板に傷をつけるだけだった。

「無駄無駄！ さっさと降りてこいクソ肉！」

「にや……いつも以上の気迫だにや。……み？ にやあつ！ 旦那さん、あれ！」

威嚇し返すように剣を振り回す俺に、呆れた声を漏らすイルルだったが——セルレギオスが浮かぶ空の向こうを見ては、驚いたような声を上げる。

そんな彼女が指差す先には、奇妙な色をした水平線が映っていた。青く鋭い光を放つ渦が、大きく波をうねらしている。光が走るそれは、自らをただの自然現象ではないと力強く主張しているようにも見えた。

「……何か、いる？」

「にやあ、何……あれ……」

苛烈に走る青い光。それだけでもかなり不自然な光景なのに、その横をぼんやりとした薄赤い光が漂っている。ここからかなりの距離があるというのに、その光が相当の大きさであることは一目瞭然だ。



一体何が起きているのか。異常事態なのは、突然飛来したこのセルレギオスだけではなさそうだ。

「…………ツ！ つと、危ねえな！」

映るその景色に目を奪われていたその瞬間、千の鱗が鋭い脚を向けて滑空する。空気ごと斬り裂かんと飛ぶその姿は、まるで大量の刀剣が降り注いでいるようだった。

危うく巻き込まれかけたそれを飛び避け、同時に荒々しく甲板に着地した奴の背後に回り込んだ。そうして晒された隙を突くように、斬り上げと斬り下ろしを織り交ぜる。

「ギイアッ!？」

懐から繰り出された二重の斬撃に、セルレギオスは悲鳴を上げた。

やはり相当弱っているらしい。思うように動かない自らの体を見ては、苦々しく目元を引き攣らしている。獲物を得るためにこの船に襲い掛かったというのに、それすらも一人の人間に阻まれてしまうこの状況を呪うような、そんな瞳だ。

「…………にやあ、この飛竜、一体何があつたのにや…………？」

「分からん、そしてどうでもいい！ さっさと果てる！」

こんな隙を見せられたら即座に爆弾を起爆、といきたいところだが、今回はそうもいかない。お生憎様、今回は海上。それも、船の上だ。大タル爆弾で引火どころか甲板が吹っ飛ばされるなんてことが起きたら、まさに本末転倒。セルレギオスの思うツボだろ

う。

というわけで、今は大人しく斬りかかった方が得策というべきか。その考えを肯定するように、突進に威力を上乗せした片手剣が唸り、イルルの持つ王ネコ剣ゴロゴロが吠えた。

「ギユアウ……」

一方のセルレギオスといえば、斬撃に対する反応もあまり見せようとしない。

というよりは、反応を示すことが出来るほど体力も残っていないようだ。やや半開きに瞬くその瞳は、意識が半ば混濁しているようだった。

そんな奴の頭に付着した、俺の片手剣——テオニスパーダから溢れる粉塵は、まるで星の瞬きのように徐々に光を赤らめていく。

「にやつ……これならどうにや！」

そんなセルレギオスの顔に向けて、イルルは懐から大きなブーメランを取り出した。

巨大ブーメランの術。より巨大なブーメランを取り出し、より苛烈な遠距離攻撃を繰り出すネコの技。王ネコ剣ゴロゴロの光を受けたそのブーメランは、空を覆う雷雲の光も享受したかのように電光を帯びていく。

「ギイイツー！」

その軌跡は、確実にセルレギオスの額を射抜いた。その威力と衝撃に、流星の奴も耐

え切れなかったのか、大きく仰け反ってその苦痛さを体で表現する。

だが、それだけでは終わらない。その衝撃が火打石になったかの如く、ブルーメランから伸びた電光が粉塵の尻を蹴った。

青い電光が伝ったのは緋色の揺らめき。

その青が加わることで、赤の世界に色が差す。

赤から橙へ。橙から黄へ。黄から白へ。

「ギッ——ピイイイツ!」

瞬間、セルレギオスを覆っていた粉塵は一斉にその身を弾けさせた。苛烈な衝撃波へとその身を変貌させたそれは、真つ先に奴の脳を揺らし、その刀角に罅を入れる。光を反射し、金色に染まったその角に、一筋の亀裂が走ったのだ。

その思いもしなかったであろう衝撃によるめいたセルレギオスだが、気丈にも倒れることを拒み、右脚を軸に体を支え直した。

「しぶといな。……なら、これならどうだ!」

体を支えることに集中し過ぎるあまり、がら空きとなったその頭。

俺はその隙を射抜くように、自らの体を奴の懐に忍び込ませる。そうして、甲板を蹴り上げるその両脚で、まるでばねのように身を屈めた。

「はあっ!!」

その力を解放するように、俺は奴の頭の真下で甲板を踏み抜いた。それと同時に、この右手の盾を鈍い感覚が走る。まるで剣に盾を打ち付けたような、そんな感覚。

テオースパーダの分厚い盾と、セルレギオスの剣のような頭がぶつかり合う。起こった現象を表現するならこれが最も分かりやすいだろう。その衝撃音があまりにも強烈で、同時に大気を鳴らした破裂音は掻き消されてしまった。セルレギオスの刀角を根元から折り砕く、何とも空虚な破裂音が。

「にや、あ、危ないにや！」

驚きのあまり飛び退いたイルルの足元を、突き刺すように刀角が射抜く。

そう、罅の入ったその刀角は、今俺の繰り出した「昇竜撃」によってとうとう破壊されてしまったのだ。根元から綺麗に折れたそれは、正に重力に乗った刀剣のように甲板を斬り裂いていく。一体どれほどの斬れ味を、折れてもなお内包しているのだろうか。

雷鳴と、不可解なスパークの振動が伝わる中。

海が何かで荒れるような音を立てる中。

そんな中で、その刀角の持ち主であるセルレギオスは痛みを振り払おうと頭を震わせる。未だ滞空し続けている俺になど、全く眼も向けずに。

「お背中いただきッ！」

まるで殴ってくださいいとも言わんばかりに剥き出しにされたその背中。その剥が

れた皮膚を撃ち抜かんと、俺は再び右腕に力を込めた。

重力に捕まり、急速に落下するこの体。その重力をも上乗せした右手の盾は、千刃ごと奴の体を打ち砕く。鈍い音が雷鳴に負けじと鳴り響く。同時に、かなりの質量のものが横転した音も轟いた。

地に伏せ、先程以上に剥き出しにされたその背中。ここぞとばかりに俺は剥ぎ取りナイフを取り出して、がら空きになったそれへ飛び乗った。

突然背中に何か張り付く感覚に怖気が差したのか、セルレギオスは渾身の力で暴れ出す。

「ふ、振り落とされたら海に真つ逆さまにや！ 気を付けて旦那さん！」

心配と焦りを含んだ声を上げるイルル。息を整えようと隙を晒すその背中から、彼女に応えようと顔を上げた。その瞬間、俺の視界に突飛なものが映り込む。

「大丈夫、そんなヘマは——は？」

言葉にするなら、青い光だ。

スパークとプラズマを足して二で割ったかのようなそれは、耳障りな音を立てながら宙を駆けて、一直線に、隙を晒したセルレギオスへと飛び付いた。

「ピイイッ!?!」

直後、凄まじい電撃が走る。まるで落雷の衝撃を思わせるそれは、全身を覆うその千

刃を無慈悲に焼いた。その体質故、普段から電気を苦手としているセルレギオスだ。痛みを我慢することなど出来なかったのだろう。そう思わずにはいられないほど激しく、大きくその身を仰け反らした。

普段ならば、それは大きな隙となる。狩猟に当たって逃さずにはいられない絶好のチャンスだ。

だが、今はどうか？ 背中に人間が張り付いている状態で、その身を大きく仰け反らしたら。そうなると当然、背中に張り付いた人間は。

「うおっ……嘘だろ……ッ!？」

「だ、旦那さーんっ!!」

手に持っていたナイフは一直線に海へと落ちた。いや、ナイフだけじゃない。放り出された俺の体も、海に落ちるまでももの数秒もない。

命綱も何もないこの状況、荒れた海に落とされたとなった暁には、俺は。

「うにやつ……が、頑張つて旦那さん……い、今、上げる……からあつ……!」

全身で鈍い水の音を感じる。そう身構えていたが、その瞬間は訪れなかった。

代わりに感じたのは、虚を掴んでいた筈の右腕を包む柔らかいもの。そう、まるでネ

この手のような。

「……イルル……お前……」

「にやつ……にやあああつ！」

その小さな腕で。その小さな体で。甲板の端という落下と紙一重な位置で、俺の右手を何とか掴んだらしいイルル。彼女は、何とか俺を引き上げようと懸命にその身を奮わせていた。

一人の人間の重さは、イルルの体重の数倍を軽く超える。彼女も巻き込まれて落ちるのは、最早時間の問題だ。そんな、無謀とも言える彼女の行動に、俺の命は何とか繋ぎ止められていたのだった。

「イルル……ツ！ そんな、無茶だ！ それより後ろ、狙われるぞ！」

「そんなこと言うならつ……早く左手で身を……にや、支えてほしいにや……つ！」

何とか振り絞ったようなその声に、いよいよ彼女にも限界が近いことが察せられる。そんな促しに応じるまま、幾度と空を掴んだ俺の左手は、筋を軋ませながらも何とか甲板を握り締めたのだった。

両手で体を支え、何とか上半身を甲板に乗り上げさせる。イルルは安心したように力を抜き、濡れる甲板に尻餅をついた。その表情を染めていたのは途轍もない脱力感、そして心の底からの安堵感だろうか。

荒れる息を整えながらも、何とか彼女に礼を言おうと顎を動かした瞬間だった。そんな暇も与えないと言わんばかりに、船が大きく揺れたのだ。まるで人間の何倍も巨大な何かが乗り上げたような、そんな揺れ。

「グウルルル……」

身を竦ましかねない重低音。圧倒的な質量。力強い肢体。俺が認知したものはそれだった。

海のように青い甲殻。厳つい顔つきに無骨な角。薄く光を帯びたその背中では美しく、長く強靱な体は勇ましい。王者の風格とでも言えればいいのだろうか。流星は大海の王者にして、種を代表した名を与えられただけはある。

海竜、ラギアクルス。突然の乱入者、そして先程の横槍をした張本人だろう。

「にや……何、何にやこの状況……!」

「そうか、孤島地方の海域だもんな。コイツが現れるのだから不思議じゃない、か……」

凍り付きそうになるほど鋭いその瞳は、鎌首を擡もたげげながら甲板全体を見回し、底を尽きそうな体力を振り絞って威嚇するセルレギオスを見定めた。

セルレギオスは、畏怖の込めた色を瞳に燈しながらも、懸命に雄叫びを上げる。直撃した雷球によって新たに刻まれたその生傷故か、まるで慟哭のような声で。



「……旦那さん、もしかして……あの飛竜が怪我していたのは」

「ああ、十中八九ラギアクルスと戦っていたんだろう。……だけど、少し腑に落ちないな」

遭遇時から目立っていたセルレギオスの火傷。今し方ラギアクルスに刻まれた傷を見る限り、奴らが先程から争っていたことは間違いないだろう。大方、相性の悪いセルレギオスが分の悪い展開に持ち込まれ、スタミナ回復のために目に付いたこの船を襲ったとか、そんなところだろうが。

だが、それでも腑に落ちない部分がある。それはラギアクルスの損傷具合だ。

「角も、爪も……ところどころ欠けて、胸の甲殻にも罅が入ってるにや。随分激しい戦いだつたみたいになね……」

「それはそうだけだよ……少し変じゃないか?」

にや、と不思議そうにイルルは俺を見た。

一体何が変なのか。全く見当がつかないらしいが、ラギアクルスの甲殻をよく見れば分かるはずだ。

角は片側のものが見事に折れ、その根元が露わになっている。爪や甲殻も砕けた部分があり大きな負荷を掛けられたことは明白だ。巨大な尾はより一層損傷が激しく、辛うじて骨と皮で繋いでいるくらいだ。

だが、これらはセルレギオスとの戦闘で生まれた傷であるとするならば妥当なものだろう。俺が感じた違和感は、これらの傷に隠れた――されどその全身に広まった、大きなものだった。

「にや……あれ？ 右側が……」

「分かった？ そう、それだよ。打撲の痕だ」

イルルが気付いたように首を傾げた。彼女の視線の先で唸り声を上げる海竜。その右半身こそ、俺の感じた違和感の正体だった。

打撲痕。

一部だけではない、右半身を満遍なく覆うようにそれは広がっている。腫れ上がっている部分もあれば、内出血したように青い染みが出てくる部分もある。下半身側に至っては血腫が出てくるほどで。

とてもではないが、セルレギオスの体格で付けられるような傷とは思えない。では、一体何故このような怪我をしたのだろうか。

巨大な物に体当たりしたのだろうか。それとも、巨大な者に体当たりされたのか。

「ゴアアアアアアッ！」

詮索するなどでも言わんばかりに、ラギアクルスはその大きな顎を開いた。開いた顎が震えるように、そこから爆音が打ち出される。海竜の強烈な咆哮は海を打ち、空を

穿った。

その咆哮音の反響が収まり切る前に、奴は再び喉を光らせる。雷光を凝縮したような、青く鋭い光が奴の喉からじわじわと漏れ始める。

「にやつ！ 眩しいにゃあ……！」

ラギアクルスはその長い首を振り回し、口内に貯めた雷光を解き放った。直後目を射抜くような光と共に、再び雷球がセルレギオスへと迫る。またもや、新たな火傷を刻んでしまうのか。

ところが、奴は文字通り全身全霊でそれを避けた。砕けた両翼で宙を押し、痛んだ両脚で甲板を蹴って。乱気流に乗り上げるように、その光から身を躲したのだった。

「ギイイッ！」

そうして飛び上った奴は、まるで尾を軸にするかのように両脚を上げた。大気に脚を乗せるが如く。重力などないものとして。そうして振り上げられた両脚の爪は、天を駆ける雷光を反射させ、見る者を魅了するような幻想的な絵を創り出す。

だが、その絵のインクはあっさりと流れ落ちた。

「イルル！ 伏せろ！」

「にやつ！」

甲板に体を押し付けて。四肢を四つん這いにさせて。そうして身を伏せた俺たちの

上を、凄まじい勢いの風が削いだ。まるで斬撃のように鋭いその風は、大気ごと甲板へ——甲板の上で唸るその海竜へと襲い掛かったのだ。

軸にした尾を囲うように斬り吹いたその風は、一振りの刃と言っても過言ではない。そしてその風は、甲板の上を滑るように飛び、海竜の尾へと直撃した。

皮が斬り裂かれる音と、骨が断ち切られる音。

それが響いたと思えば、今度は何かが甲板に落下する音が響く。雨と海水で潤うその甲板に、鈍重な落水音が響く。

「……マジかよ。尻尾斬りやがったぞアイツ……」

「にやつ……気を付けて旦那さん！ ラギアクルスは怯んでないにやー！」  
イルルの驚愕の声が漏れた。

そう、彼女の言葉が示した通り、ラギアクルスは尻尾を切断されたというのに全く怯むことはなかったのだ。まるで平然と、風のように宙を舞うセルレギオスを睨み続けて機会を待っている。

思えば、奴の尾は最も損傷が激しかった。それも肉はほとんど切り裂かれ、骨と皮で何とか繋ぎ止めているという状態。最早、感覚が麻痺し痛みも何も感じていなかったのかもしれない。

「ゴアアアツー！」

ラギアクルスが、とうとう動き出した。

体に纏わりついた雨と風、そして負荷を振り払うように宙で態勢を立て直すセルレギオス。そんな奴の翼に向けて、その長い首を撃ち放ったのだ。

その巨大な頭部と鋭い牙、そして強靱な顎は、かつての水棲生物の頂点であったジャングルガビアルのものとは比較にならないほどの脅威を孕んでいる。そんな顎が、刃の翼を噛み砕いた。

「ペイイイツ!?!」

あまりある力に、セルレギオスは悲痛な声を上げた。その甲高い音に隠れるように、剣が折れる鈍い音が響き渡る。剣が折れ、堅が折れ、腱が折れて。

噛み砕く勢いで顎に力を送るラギアクルスは、自身の口内が斬り刻まれていくことも全く気に留めず、むしろその顎を離すまいと目を爛々と輝かせた。

セルレギオスの悲鳴は続く。もう自分は飛ぶことができないと悟ったような、絶望を孕んだ声だった。

「……ッ! イルル、下がるぞ! このままじゃ轢かれる!」  
「にやあつ!」

顎を軋ませながら、その四肢の筋肉を強張らせる海竜の姿。それが目に入った時には叫んでいた。この海竜は、次に、走り出す、と。

俺とイルルが甲板の端に身を逃避させたその瞬間。投げ出すように飛ばしたその身の背後を、強烈な風が吹き荒れる。野太い海竜の声と、飛竜の慟哭を飲み込むようなその風の音は、甲板を剥がしながら海へと流れ込んだのだった。

「にやつ、まさか……引きずり込んだにや!？」

「俺らがセルレギオスにとつての餌なら、ラギアクルスにとつてはアイツが餌つか……!」

身を起こし、荒れた甲板に目をやれば——あの二種類のモンスターの姿は既に海の中へ消えていた。

目に入ったのは、剥がれ落ちた甲板と空けていく空。雷雲が去ったようにその色を薄めていき、その隙間を射抜くように光が差し込み始める。あれだけ降っていた嵐のような雨はもう一滴も落ちてこず、心地良い穏やかな潮風が肌を撫でた。

「にやあ、とにかく一件落着にやあ。良かったにやあ……」

「……チツ、クソ飛竜を喰つてやろうと思つたのに。あの海蛇野郎……」

横取りしやがって、と吐き捨てるように漏れた声に、イルルは呆れたような鳴き声を上げる。彼女の言う通り、何とかモンスターの襲撃から船を守ることは出来たのだ。その点に関しては、クエストのメインターゲット達成と言つても過言ではないだろう。

しかし、肝心なローストイェンクックの代わりとなる飛竜の確保には失敗してしまつ

た。こうなれば、少なくとも俺としてはクエスト失敗の烙印を押さざるを得ない。

「はあ。全く、萎えるのもいいところ……ん？」

「にや？」

残っていたのは、捲れた甲板だけではなかった。ヒレのように薄い、されど締まっているその姿形。質の良い色と、弾力性に富んだその筋。切断面からは、肉厚な内部が露わになっている。

セルレギオスが切断した、ラギアクルスの尻尾。陽の光を優雅に浴びているそれは、甲板の上で静かに佇んでいたのだった。

「……いいじゃん、いいもの残ってんじゃないかよ！」

ローストイェンクツクの代わりに。

セルレギオスの代わりに。

何とも面白い置き土産を残してくれたものだ。海竜の尻尾、それは俺も未開拓な味だ。

余談だが、海竜の尻尾はササミのような味がするとか何とかで、孤島地方では食材として嗜まれているそうだ。モガの村には、漁師でありながらもラギアクルスを狩猟することが出来る屈強な集団がいるらしく、普通に出回っているのだとか。

だが、一体どうするべきなのだろうか。目の前にあるというのに、俺はその尻尾を剥

ぎ取れないでいた。まるでお預けを喰らった犬のような気分だ。

「……剥ぎ取りナイフ、海に落としましたったんだ。どうしよう……」

「にやあ、ナイフだけで済んだだけまだ良かったと思うけど……」

不満そうにそう呟いたイルル。確かに、俺を救ってくれた彼女にそう言われてしまえば、俺には反論の余地はないのだが。

そんなどうしようもない気持ちに胸に、憂いを漂わす彼女の方へと振り返れば――彼女の横に立つあるものが俺の視界を独占した。

太陽の光を浴びて金色に輝くそれは、見る者を魅了して。いとも簡単に甲板を斬り裂くその斬れ味に、料理人は羨望して。

そう、先程俺たちが砕いた千刃竜の刀角。それが未だ甲板に残っていたのだった。

「そうだ……コイツを使えば剥ぎ取れるじゃないか」

「にや……っ!? 剥き出しの素材を使うの……にやつ!」

刀角の先端の斬れ味は、見ての通り非常に鋭い。しかし砕けた根元部分なら、斬れ味はほぼ皆無のようだ。そこを掴めば、全く問題なく剥ぎ取りナイフとして代用が可かもしれない。

手にとつて振るってみれば、斬れ味はやはり極上そのもの。肉厚なこの尻尾も、簡単に斬ることが出来るほどだった。



血抜きをしながら尻尾の可食部分を剥ぎ取ろうと試行錯誤していると、甲板へと続く扉が乱暴に開かれた。そこから姿を現したのは、あの乗務員アイルー。どうやら随分と静かになったことに気付き、様子を見に来たようだ。

「ニヤ、もしかして……ニヤッ、ハンターさん！ モンスターは……!?!」  
「無事撃退したよ、大分甲板は荒れちまったが」

甲板が証明する激戦の爪痕に彼は驚愕しながらも、九死に一生を得たような声を漏らした。

雲も流れ去り、晴天に晒されたこの甲板を満たす嵐の後の静けさ。その静けさを、船に乗り合わせた者達の安堵の聲が塗り替えていく。

そのはずだったが、そこに肉を剥ぐ音と、一人のハンターの突拍子のない一言が加わった。

「この船って厨房もついてたよな？ 怪鳥の代わりにコイツを是非ローストしてくれないか？」



「さあさあ、やっとこの時がきましたよ。待ちに待った実食タイムだ」

「旦那さん……。多分こんな注文するのは旦那さんが初めて最後だと思うにや」  
荒れた甲板。吹き荒れる潮風。晴れ渡る、何処までも澄んだ空。

その開放感溢れる空間で、俺は右手に収まった“ローストラギアクルス”の香りを十分に享受した。あつさりとした淡泊な印象が目立つラギアクルスの尻尾に、濃厚なブレスワインのタレをたっぷりと掛けられたこのロースト。陸で生まれたワインと海で育まれた肉。その二つの味が混ざり合い、正に陸と海の共震を創り出している。

横で呆れ返るイルルにも満足な返答が出来ないくらい、俺はこの肉に喰らい付こうとする自分を抑えることが出来なかった。そうして、思いのままに肉を噛み締める。

「んも、これは……ッ！」

歯に伝わってくる、柔らかな内皮の感触。弾力を豊富に盛り込まれているその皮は、ただ噛み付いただけでは簡単に噛み千切れず、顎を引けば負けじとその伸縮性を露わにし始めた。ガーグアの鳥皮を感じさせるようなその感触は、皮に包まれた内部の肉も同時に感受させる。こつてりとしたタレに彩られながらも、自らの象徴とも言えるあつさりとしたその味を感じさせるその風味。

その何処か鶏肉に似通ったような食感も是非、いつまでも楽しんでいたいものだが――俺は次なるステップを求め、引き千切るようにその皮と肉を分離させた。そうして、程よい大きさに噛み切った肉を口の中に投げ入れる。

上顎と下顎を存分に使つてその食感を楽しめば、いよいよ肉らしい噛み応えが顔を出してきた。それでいて、そつと口の中で解けていく感触が口内を満たしていく。

ブレスワインの、アルコールを感じさせないこつとりとしたタレが舌を覆い、その上から海竜の淡泊でありながらも芯の強いその味が舞い踊る。

陸と海のハーモニー。大地と海が育んだその味は、双界の覇者と言つても過言ではないのかもしれない。

「……美味しい、如何にも肉らしいこの味が堪らない。あー、達人ビール欲しいなあ」

「無い物強請りにゃあ、ユクモ村に着くまで我慢してにゃ」

漏れ出た俺の呟きに、イルルの溜息交じりの声が混ざり込む。それを潮風が静かな音を立てて海へと流していき、穏やかな波の音が上から塗り替えしていった。

緩やかな波に揺られて。心地良い潮風に撫でられて。美しい青空に見守られて食べる飯は素晴らしいの一言だ。風味よいこの味も、船旅の中で食べてこそ、とも感じる。

澄み渡る空のその先、遠海の方へ目をやれば、再びあの光が目映った。

嵐の中、憤怒に燃えるような緋色に染まっていたその光。それは、今は穏やかな、それでいてボンヤリとした光へと変わっている。

この船からではその光が一体何なのかは分からないが、このローストラギアクルスを彩る脇役としては十分だ。青い海を静かに彩るその光は、咀嚼されるこの味の華も煌び

やかに輝かせてくれる。

陸と海の共震は、俺の心を海のように深い感動で震わしていた。ローストラギアクルスを完食するまで、ずっと。

く 本日のレシピく

『ローストラギアクルス』

・ 海竜の尻尾

……250gほど

・ ブレスワインのタレ

……たっぷり

## 味の八方美人

付近に火山が存在するのであろうこの場所。地下には活動的なマグマが満ち溢れているであろうこの場所。温泉地特有の、鼻を突くようなこの香り——しかし臭いとかそういうものではなく、ただ優雅に、そして美しく。こちら一体を漂う空気は妙に澄んでおり、それがこの地特有の香りをより一層際立たせている。

ユクモ村。一種の観光地ともなったその村に、俺たちが目指していた村に。長い長い旅路の果てに、やっと辿り着いたのだった。

「懐かしいな。何だ、全然変わってないじゃないか」

「にやあ、嗅ぎ慣れない匂いだにやあ……」

雑草が控えめに顔を出している石垣。それが階段状に積み重ねられており、その段を彩るようにバルバレではまず見られない独特の意匠の門が待ち構えている。

ガーグアが引く荒々しいネコタクに運ばれながら辿り着いたその道は、やはり観光街

化が進んでいるのだろうか。集落の見所を幾つも提示したような旗が立ち並んでいる。  
「……ちよつと現金な感じにもなった気がする」

「稼げてるんにやね、きつと」

その陳列した荒稼ぎの代理役に、俺は思わず溜息をついてしまう。自分の記憶の中のユクモ村はもつと上品で御淑やかな印象があつたのだが。

まあ、当時は町の様子にも住民の態度にもまるで気に掛けなかつたものだから、そんな記憶も信憑性に関しては頼りないかもしれない。あまり気にしない方向で良いだろう。

「取り敢えず、入ろうか。宿とかの手続きしなきゃだし」

「にやんつー!」

「……おや、旅のお方かい? ユクモ村へようこそ!」

そうして踏み出した俺たちに向けて、威勢の良い声が響く。見上げれば、この石垣の階段に腰かけながら、人の良さそうな笑顔を浮かべる男の姿があつた。見た目まだ若い青年といったところで、この村らしい落ち着いた配色の衣服を着込んでいる。

さながら門番だというように座りながらも腕を組んで、新たな来客の姿を見ては嬉しそうに頷く彼。間違いなくこの村の住人だろう。

「やあどうも、俺たちはしがない旅行者だ。通つていいかい?」

「もちろん！ この村は温泉もあるし飯も美味しい！ 楽しんでいってくれ！」

満面の笑顔でそう鼓舞する彼に会釈しながら、キヨロキヨロと辺りを見回すイルルと共に石垣を越え、いよいよユクモ村へと入っていく。同時に目に入ってくる独特の建築模様。赤色を主体とした装飾が施された町並み。そして鍋に煮えられ、コトコトと揺れる卵のような何か。漂う硫黄のような香りも相まって、いよいよユクモ村へ来た実感できる。

「聞いたかイルル、飯も美味いってよ」

「にや……旦那さんはそればかりなんだから、もう」

薄く漂う温泉の香りの中に、うつすらと嗅いだことのある香りが混じっている。数日前にドリンク売りを名乗っていたアイルーが手掛けたドリンク。あれと似たような匂いが混ざり込んでいるのだ。彼も品を無事に仕入れることが出来たらしく、今はここでドリンクの販売に精を出しているのだという。機会があればまた覗いてみるのもいいかもしれないな。

そしてもう一つ。目の前の音を立てる卵の形をした模型のようなものからも、何だかいい香りが漂っている。温泉のような温かみのある匂いに乗せられているのだろうか。何とも不思議な香りだ。

「にやあ、これって……」

「イルル、気付いたか？ この卵みたいな奴から出てるよな」  
「にや……卵の中に卵か、にや？」

首を傾げるようにそう言うイルル。そんな彼女の言う通り、この卵の模型から漂っているのは確かに卵の香りだ。しかし、俺が今まで取り組んで来た調理法とは少し異なる香りを漂わせている。

というよりは、調理する環境の違いからくる香りの違いだろうか？

「あうあう！ あんちゃんよ、それが気になるのかえ？」

「ん、ああ。まあ……な」

思わず模型の前で考察に耽っていた俺に、突然横から声が浴びせられた。熟した声帯特有の、少し空気を貯めたような声。それでもまだまだ活気のある、よく張った声。

振り返ってみれば、そこには小柄な竜人の姿があつた。白い髪と皺をよく肥やすその姿は、竜人としてもかなりの年月を経験してきたことが分かる。

「アンタは？」

「ワテはこの村の加工屋よお、あんちゃんらは……観光客といったところかいのう？」

「にやあ、そうですにや」

人の良さそうに笑う彼は、少々甲高い声を上げながら左手で担いでいる大きな鎚を持ち直した。その様から、彼の言葉通り加工屋ということは一目瞭然だ。そんな彼の背後



には燃え滾る釜を飲み込む店が悠然と構えられている。十中八九彼の店なのだろう。

「なあおつちゃん、この卵は何なんだ？」

「これは……蒸し器みたいなものかろう、温泉卵を作つとるんやあ、あう！」

「にや？　温泉……卵？」

聞き慣れない響きに、イルルは不思議そうに首を傾げた。温泉という言葉と卵という言葉。全く別の意味を指すそれらを組み合わせた独特の言葉に、聞いたことがない者は思わず聞き返してしまうのも仕方がないと云えるかもしれない。

そんな彼女に対し、加工屋の老人は意気揚々と頷いて、その卵の模型の揺れる蓋を持ち上げた。

「ほい、これ見てみんなさい。こいつらが温泉卵だよ」

「……にやあ？　ゆ、ゆで卵かにや……？」

湧き上がる湯気と硫黄の香り。沸き立つ熱湯に浸かるように、コトコトと茹でられていたのは何の変哲もないただの卵だった。

しかしお湯で茹でられたのか、温泉で茹でられたのか。一体どのような分量で調理されているのか、という違いはある。つまりこれらは一見ゆで卵のように見えても、決してただの茹でた卵ではない、ということだ。

「うーん、割つてみた方が早いんだけどなあ。おつちゃんよ、これつて貰つていいのか

「？」

「あうあう！ 折角だしなあ、一個ずつ持つて来なあ！」

納得がいかないとでも言わんばかりに尾を振るイルルに、是非ともこの卵の中身を見せてやりたい。そんな思いで加工屋の童人にそう尋ねてみれば、彼は柔らかな笑みを浮かべながら卵を一個取り出し、器に乗せて手渡してくれた。ご丁寧に、つゆも添えて。

一方、受け取ったイルルはこれまた不可解は表情で鼻をひくつかせている。何故塩ではないのかとでも言わんばかりの、何とも微妙な表情だ。

「有り難うよ、おっちゃん。よしイルル、その辺のベンチ行くとぞ」

「にや、にやあ……」

納得いかなさそうなイルルの手を引き、湧き出るお湯に揺れる奇妙なオブジェを目指す。加工屋付近に設置されているそれは、一種の休憩場としての役目も果たしているようだ。さながら噴水とベンチを用意された公園のような造りとなっていた。

沸き立つお湯と紅葉が織り成す風情豊かな景色の下で、ユクモの木を使って出来たであろうそのベンチに腰を降ろし温泉卵を食べる。中々に風流なシチュエーションじゃないか。

「さて、じゃあ割ってみようか」

「にやあ、旦那さん……そんな割り方でいいのにや？ 何だか生卵でも割るみたいにな

あ

「うん。これでいいんだよ、これで」

卵の腹を器の縁と合わせ、ある程度の力で数回打ち付ける。一番膨れ上がった部分は何度も打たれ、卵の腹は徐々に割れながら凹<sup>へ</sup>んでいった。それと同時に、罅割れる音を奏でていった。

そうして漏れ始めたのは、水分を多く含んだもの特有の音。その音が響き始めたのなら、殻はもう破れたと言つて良いだろう。では、それを半身ずつ裂くように両手を添えて。

「にや……? あれ? こ、これは……」

「ああ、これが温泉卵だよ」

そうして引き離されたその空間を埋めるように、一つの小さな塊が落ちた。

白い膜に包まれた半固体のようなそれは、しつとりと器に寝そべつてはその柔らかな身を震わせる。紅葉から漏れる光を浴びて。温泉から湧き立つ香りを帯びて。そうして輝くその卵はゆで卵にはない瑞々しさと、生卵にはない上品さを併せ持っていた。

「さて、じゃあこれにつゆもかけてつと……」

「にやあ、不思議だにやあ。茹で方次第でこんな風になるのにや?」

「茹で方だけじゃないぞ、ユクモ温泉だから味も格別なんだよこれが」

イルルも俺のやり方を真似、自らの器に温泉卵をそつと落とす。その満月のように美しい円は、器の表面を緩やかに滑りながらその白を擦り付ける。

そんな月を彩るようにつゆという秋雨を注げば、それは一つの秋の景色となるだろう。反射するようにつゆに映る紅葉の模様もまた美しい。

「さて、こうしてつゆに浸した卵はな……崩さずにつるんといただくのが良いぞ」  
「にや、一口で食べるってことかにや？」

少し自信なさげにそう尋ねるイルルに頷いて、俺は器の縁を口で啜えた。そうして伝ってくるつゆと白身を飲み干すように、そつと器そのものを傾ける。

滑らかな表面はそのまま重力に従うように流れ始め、縁と唇を繋ぐようにゆっくり口内に潜り込んでくる。舌の上には柔らかな膜のような感触が横たわり、同時に風味良いつゆの香りも湧き上がってくる。

「にやあゝつ」

そんな俺の様子を見ては、イルルも決心したように器を持ち、一口にその卵を口の中に入れた。彼女の小さな口に丸々一個の卵が入り込み、同時にその身を弾けさせる。

おそらく初めて体験したであろうその食感に、彼女は驚いたように眼を見開いた。そう、半凝固状態に留まった卵白。そして半熟にしてとろみを生かし続けている卵黄のその独特な食感に。

先程まであの卵型蒸し器で茹でられていたこの卵は、まだ仄かな温もりを残していた。まるで親鳥に温められた卵のような、安心感溢れる豊かな温度。それが舌に伝わりと同時に、その卵白の張りのある食感、そしてそれを包むように広がったつゆの、それも出汁の効いた味わいが広がってくる。魚介類系の出汁でも使っているのだろうか。

この出汁の中でひっそりと佇む隠れた旨みに、俺は思わずそう邪推してしまう。この辺りには溪流と呼ばれる水源豊かな土地もあり、そこから獲れた川魚を使っているのかもしれない。

そんな出汁と卵白に包まれた卵黄は、外界と関係を断つが如く空気に触れようとしてこなかった。ずっと卵白と殻の中に閉じこもり、外気を一切浴びず、その身をゆっくり熟させている。

だが、その時間もとうとう終わりを迎える事となったのだ。俺の口の中で、俺の舌の上で。ゆっくり佇むその卵に向けて、下顎と上顎が動き出す。合わさるように当てがった俺の歯は、容易にその卵白を斬り裂いていく。

「……うん、うんうん。これこれ……！」

そうして溢れ出た卵黄。ねっとりとしつとりと。とろみと粘り気を混ぜ合わせたような、その食感がつゆと卵白で濡れた舌を上書きした。まるで塗り潰すように、覆い隠すように。

卵白の薄い味とは、対極とも言える程主張の強い味。旨みと甘みを内包したその卵らしい味に、長々と熟すことに労力を費やしたであろう温泉特有の風味が混ぜ込まれている。口の中をとろとろと撫でるその味わいは、まさに味の芸術。紅葉に浮かぶ満月に勝るとも劣らない美しさ。

「……な？ イルル。生卵ともゆで卵とも違う、面白い味だろ？」

「にやあ、その二つを足して二で割ったような……そんな味にやあ」

口周りの毛を黄身で濡らしながら、感嘆するようにイルルはそう呟いた。どうやらその予想外の味に驚いたのか、器や卵の殻を見ては感嘆したように尾の先を軽く揺らしている。

そんな彼女の姿に苦笑しながらも俺はハンカチを取り出して、そつと彼女の口周りに押し当てた。そうしてやつと口元が汚れていることに彼女は気付いたらしく、少し恥ずかしそうな鳴き声を上げる。

「……これでよし、気に入ったか？ この卵」

「にや、にやあ。……でもちよつとボクには熱くて、最初はよく分かんなかったにやあ」



「あう? 猫舌にもいい温泉卵……かえ?」

「ああ。如何せん、あの卵はコイツには熱かったようだな」

空になった器と空になった殻を先程の店に返した後、俺たちはもう一度先程の加工屋の老人に尋ねた。もう少し温い温泉卵はないものか、と。

そんな突然の注文に彼はどうしたものかと顎を撫でながらも、困った客は放っておけないとでも言わんばかりに鎚を構え直す。そうして鎚を向かいの雑貨屋の方に向けながら、少し躊躇する仕草を見せつつも喉を震わせ始めた。

「あう、あの雑貨屋がなあ。何やら開発中の新しい食を試してえそうでなあ。何だったら、行ってみるか?」

「にや……まだ試作ってことかにや?」

「い、一体どんな奴なんだそれ!」

その妙に歯切れの悪い口振りにイルルは不思議そうに首を傾げ、一方の俺はというと『新しい食』と称された魅力的な単語に思わず脳を揺さぶられてしまう始末。

新しい——それも開発中という。つまりまだ世に出回っていない味……言うなれば、未開の味という訳だ。何とも、興味の尽きない話題性を孕んでいるように感じるのも無理ないだろう。

そんな俺たちの反応に加工屋の老人は少し苦笑いしつつも、まるで話を仕切り直すように指を立てた。まるで、交換条件でも提示するかのようにな。

「ワテは加工屋よお。何か作らしてくれたらこの話、教えてもいいでえ？」

「……成程、ギブアンドテイクって訳ね」

これ以上の情報には対価が付く。そう言い放った彼に俺は少し溜息を吐くものの、あの種の真理だと納得しながらポーチから『アレ』を取り出した。

先日の海路で手に入れた乱入者の置き土産。

落としてしまった剥ぎ取りナイフの代用にもなった、素晴らしい斬れ味を内包したものの。

「千刃竜の伐刀角。これを剥ぎ取りナイフに加工してくれないか？ 言い値で払おうじゃないか」

武器とくるか、防具とくるか。それとも装飾品だろうか。そう期待していたであろう彼の予想を斜め上に行くその注文に、彼の柔らかな細い眼は大きく見開かれた。

まさかまさかの剥ぎ取りナイフ。それもわざわざモンスター素材を贅沢に使ったものとは。そう言わんばかりに感嘆の声を漏らす彼だったが、彼の加工屋魂に火が付いたのか、口角を上げながら俺の目を見つめ返してくる。

「ああああ！ 任されたい、やつとくでえ。……んじゃ、雑貨屋にこう言つときなあ。――



—『温玉アイス』つてなあ!—

ユクモ村は山間の谷を中心に栄えているために平地が少なく、町の構成も全体的に詰め寄つたものとなつている。そのため村の最奥——集会浴場前広場も、広場というにはやや狭いと感じる旅行者が多いようだ。

だが、ここには昨今の観光客増加に伴つて足湯場を新たに設置させたようで、住民や観光客の憩いの場ともなつている。

「さあ、足湯に浸かりながら食べようじゃないか。この『温玉アイス』というものを」  
「にやあ。す、凄い組み合わせだにや……」

そんな足湯場に腰かけながら、足をお湯へ投げ出す俺とイルル。

足の皮膚を、毛穴を、節々を。包むように絡みつくしつとりとしたその温泉は、やはりただ沸かした風呂とは根底から異なつていようだ。肌触りは勿論、心地よさも段違いである。お湯自体にとろみのような感触が混じつており、温度も血流をよく促進させてくれそうだと思わせるくらいに高い。

「紅葉見て、足湯浸かつて、アイス食う。何というか、独特だよな」

「……それを言うならアイスに温泉卵が乗ってるのも独特過ぎるにやあ」

そう。イルルの指摘の通り、現在雑貨屋で開発中である温玉アイスという代物は、何とポピュラーなソフトクリームアイスに温泉卵が乗っているという革命的な品だったのだ。

温泉卵にさえ目を瞑れば、見た目は透明なカップに入った特に変哲もないアイスである。底には輸入したのであろうチョココーンのコーンフレークが散りばめられ、それを覆い隠すようにソフトクリームが広がっている。ゆったりとカップの中で横たわるバナナソフトはとて白く、滑らかそうな見た目と濁りない甘い香りが魅力的だ。

とまあ、ここまではいいのだが。何とその上にはあの温泉卵の姿がある。まるでバナナソフトという雲海の上に美しい満月が輝いているかのようだ。

「雑貨屋のおばちゃん曰く、卵を溶いてクリームに混ぜ込むのが良いらしいな。これなら熱くないし、イルルも食べやすいんじゃないか？」

「いや、そうだけど……。でもやっぱりこの組み合わせは謎すぎるにやあ」

今まで肉料理との組み合わせに多く使ってきたからだろうか。イルルはアイスという甘いものと卵を組み合わせることにまだ抵抗があるようだ。その料理を作ってきたのは主に俺なのだから、そうなった責任は俺にもあるわけだが、俺としては案外この組み合わせも別に悪くないと思う。

「イルル、考えてみなよ。ホットケーキとかの甘いもんだって卵使ってるんだぜ？　そう考えたらこれだって全然アリだろ？」

「いや、でもあれは焼いてるし……。みい、食べたら一緒、かなあ……。？」

配布されたスプーンでアイスを掬ったものの、まだ納得がいかず渋り続けるイルル。そんな彼女を横目に、俺は一口そのバニラアイスを口に含んでみた。

取り敢えず、バニラ単体のお味をば。

舌に乗ったそれは、口内の熱でさらりと溶けてしまう。それと同時に、内包していたであろうバニラの甘みを舌に向けて一気に拡散した。

まるで拡散弾のように広がったそれはいとも簡単に俺の舌を包み込み、爽やかな甘みを浸透させ始める。するりと味覚を通り過ぎ、まるで残り香のように後腐れなく感じさせるような。

そんな、すつきりとした甘さだ。

「さて、ではこれに卵を混ぜ込んで……。つと」

今度はスプーンを使ってその白を裂いた。張りも固さもあまり感じさせない柔らかな感触。それがスプーン越しに伝わったかと思えば、そこからまるで湧き出る源泉のように、黄身が顔を出し始める。濃く、深い黄色。口内では確認できなかつたその色に、何とも鮮やかで美しいその色に。そんな風流な絵を前に、俺は思わず感嘆してしまう。

生卵のようにありのままの黄身なのかと言われればそうではなく、あくまでも加工された食材である。そう主張するかのようには、独特なとろみと明暗が醸し出されていた。その色合いが、何とも美しい。

「にやあ。……これは綺麗だにやあ……」

白いソフトクリームに絡み付くように、濃い黄色がとろりと染み込んでいく。白と黄色のコントラストは、コーヒーにミルクが溶け込むように徐々にその境界線を曖昧にしていき、やがて白とも黄色とも言い難い奇妙な色へと仕上がった。同時にその感触もアイスのような軽やかものから、重厚感が妙に増えているようにも感じられる。黄身が溶け込んでいるからだろうか。

「さて、これならどうだ……?」

そうしてとうとう混ぜ込まれた温玉アイス。イルルも感化されたように卵を混ぜ込み、アイスの甘い香りと温泉卵の濃厚な匂いを絡ませた。それをそつとスプーンで掬っては、その魅力的な色彩に瞳を輝かせる。

「いただきますにやっ!」

「おう、いただきます」

今度はそれを、そつと口の中で含んでみれば。

まず待ち構えていたのは、卵の濃密な食感。そしてあの幾層にもなった奥深い味だ。

今回はつゆこそないものの、このとろみと風味は温泉卵ありのままの味とも言えるだろう。

そんな卵は今、つゆの代わりにポポミルクソフトに溶け込んでいます。そつと口の中で溶けるその甘みを、まるで卵が引き止めんと包み込んでいるようだ。

するとどうなるか？　アイスが簡単には溶けない。つまりそつと現れるはずのあの甘さが、卵のおかげでじつくりと舌に染み込むように現れる。あつさりとし過ぎてやや物足りなかつたあの味を、より長く感じられるようになっていた。

いや、それだけではない。助長されているのだ。アイスのその甘さが。卵の濃厚な風味が。卵の旨みがアイスの甘みと共に混ざり合うことで、より風味豊かに味の層を深めている。

「……にゃああん、これは美味しいにゃあ。冷たくて食べやすいし、甘くて卵も美味しく……最高にゃあ！」

「うんうん、コーンフレークもいいぞ。カリカリとした食感に卵のとろみがついて口に優しい」

噛むと細かく崩れていくのが普段のコーンフレークだが、卵のしつとりとしたとろみに浸されることでその食感は崩れ、そつとクリームに溶け込むような——そんな食感へと形を変えている。

それはコーンフレークの良さを潰してしまうのではとも思うが、むしろコーン本来の甘さが卵によって触発されたように染み出し始め、どこか懐かしい甘みを創り出しているようでもあった。

「うん、温玉アイス……いいじゃないか。この組み合わせは大正解だ」

「にやあ、美味しいにやあ……。ネコにも嬉しい一品だにや」

イルルは大層このアイスが気に入ったようで、満面の笑みで咀嚼し続けている。

元々、猫舌の彼女が食べやすい温泉卵を求めて加工屋の老人に話を聞いたのだ。特性剥ぎ取りナイフのためにそこそこ良い値段を持つてかれたが、イルルのこんな笑顔が見られたなら、その甲斐あったというものだろう。

「卵って八方美人だよな。どんな食材にも同調出来るし」

「にや、ちよつと棘のある言い方にやあ……言いたいことは分かるけど」

「八方美人って言葉はさ、何処から見ても欠点のない人って意味から転じたって説もあるんだ。卵はその点では通ずるよな、我らが卵に欠点はないのだから」

肉料理にも。汁物にも。麺にも、ご飯にも。そして、アイスにも。卵というのはどんな料理にも合うのではないだろうか。そう思うほど、卵の順応性は高い。

そしてその新たな順応の道を切り開いたこの村には是非恩恵に与りたいものだ。ならば、早めに手を打つべきかもしれない。

「ふむ……組織に伝えるか。ユクモ支部を作るべきだつて」  
「みい、チコ村に連絡しとくにや！」

『本日のレシピ』

く 温玉アイスく

- ・ ユクモ温泉卵 …… 1 個
- ・ ポポミルクソフト …… 90 g
- ・ チココーンフレーク …… 20 g

## 豚に真珠、米と酢橘

「……プゴツ」

「む……」

ユクモ村、その北西にあるゲストハウス。

集会浴場とも隣接するこの大型の建物は、言わばハンター用の宿泊施設という役目をもち、俺のような旅行などで一時的に滞在するハンターがこぞって利用する人気の物件だ。

今日もまた、最近この村にやってきた旅行のハンターがこの部屋を借用しては、その部屋でくつろぐプーギーと戯れていた。

「プーギー？」

「よしよし、ほれほれ」

プーギーとは、言ってしまうえば小さな豚だ。まだまだ幼い子豚で、つぶらな瞳がチャームポイントだろうか。その可愛らしい見た目からペットとしての人気が高く、その人気っぷりは一家に一匹とまで言わせしめるほど。



何と言ってもそのスベスベの美肌が特徴的で、その肌を撫でればプニプニとした感触が伝わってくる。アイルーとは違う撫で心地の良さに、心を奪われる人間は後を絶たないとか。

「フゴツフゴツ」

「こいつめ、こいつめー」

そんなプーギーの背中やらお腹を撫で回し続けること数十秒。しばらくの間鼻を鳴らし、俺の手の匂いを嗅ぎ続けていたプーギーはとうとう跳ねた。俺への警戒心を解くかのように跳ね上がるその姿に、俺は一種の達成感を感じてしまう。ぴよんぴよんと跳ねては俺に擦り寄ってくるプーギー。中々どうして可愛いじゃないか。

そんなプーギーを見ていたら、とある考えが頭を過ぎよった。忙しなく鼻を動かすプーギーの姿に、図らずとも既視感を感じたのだ。

「フゴゴツ」

「——なあ、イルル。お前って豚肉好きか？」

そんな思いをそのまま口にしたその言葉。言葉を理解できている訳ではないだろうが、俺に擦り寄ってきていたプーギーはその動きをピタリと止める。まるで氷やられにでもなってしまったかのように。

一方で、部屋のベッドの上でせつせと毛づくろいしていたイルルは、驚いたかのように

に顔を上げた。その反動で、口元に引っ掛かっていた毛が静かに舞い落ちる。

「……にやつ、まさか旦那さん——」

「ああ、折角だから豚肉でも使った飯を用意しようかと思つてな」

その言葉は、固まっていたはずのプーギーを震えさせ始めた。プルプルと、肉厚のその肌が揺れる。手にその感触が伝わってくる。

一方のイルルは困つたような、焦つたような、そんな表情で顔を染めた。まるで俺の心配でもするかのような、深刻そうな表情だ。

「だ、旦那さん？ 大丈夫かによ？ 疲れてるのかによ？」

「え？ いや別に疲れてないよ。それよりも豚、食べたくないか？」

イルルの言葉は、俺を気遣うものだった。一体どのような捉え方をしたのかは知らないが、どうやら俺の心配をしていることには間違いないさそうだ。

だが、俺としてはそんな言葉は求めていない。今求めているのは、豚肉が好きか嫌いか。食べたいか食べたくないか、それだけである。

「え、にや、えつと——」

そんな意思を込めた目でイルルを見つめると、彼女は困惑しながらもその質問に対する答えを模索し始めた。まふまふと口を動かしては言葉を綴ろうとする。

だが、彼女の言葉の続きが綴られることはなかった。プーギーの雄叫びが、それを搔

き消したのだ。

「プギーーツ!!」

「え——うわツ!？」

それは突然の突進だった。猪突猛進とはよく言ったもので、その小さな体でどうやってそんな威力を生み出すか分からない。しかし、その突進は油断していたとはいえ俺を突き飛ばすには十分な威力だった。

「プンギヤーっ!」

思わず腰を着いてしまった俺を尻目に、プーギーは鳴きながらも走り出す。埃を立てながら、乱雑に部屋の扉を押し開けては何処かへ逃げ去ってしまった。俺もイルルも、目を点にするしかない。

「……逃げられちった」

「あの子の前で豚肉なんて言うからにや。……それにしても、プーギーまで食べようとするなんてボクでもちよつとどうかと思うにや」

「はあ? いや別にプーギーは食う気ないけど」

「……みゃ?」

溜息を吐きながらも、イルルは呆れたようにそう言った。それも俺の意図とはすれ違うような内容で。

確かに今思えば紛らわしい状況で言ってしまったとも思うが、俺が言う豚肉は別にプーギーのことではない。プーギーを食べようとするならば、バルバレでとつくにやっている。俺が食べたいのは、このユクモ地方にはおり、かつバルバレ管轄領域にはいない豚だ。

「俺が言うのは野生のモンスターだよ。それもこの村付近にいる、ね」  
 「にや……ど、どういうことにや？」



山を抜け、森を抜けて。高い山が幾つも連なる景色に取り囲まれた世界へと身を投じる。

——ここは溪流。ユクモ村のすぐ傍に位置する、この村にとつては最も馴染み深い狩猟地だ。

「相変わらず過ごしやすいところだな」

「にや。何て言うか、風流だにや」

澄んだ空に浮かぶ紅い色。沈み始める陽が山陰に隠れ、その輪郭をなぞるように橙色の光が見え隠れする。白い雲と緑の山々、それらを彩るその橙は非常に美しい。

溪流とは、イルルの言う通りその風流な景色に定評がある、有数の絶景狩猟地なのだ。月刊『狩りに生きる』でも何度か掲載されており、この景色のために素材ツアーに出かけるハンターの後が絶たないのだとか。

「夜になる前に獲物を探しちまおう……」

「にや、ドス……何とかは森の方にいるらしいにや」

「ドスファンゴ、だな。そうか、地図でいうなら中央部辺りかな？」

ユクモ村の住民からの依頼。溪流に現れたドスファンゴが凶暴過ぎて困るといふ愚痴を綴った依頼書を握り締め、俺はベースキャンプから出た。

後から続くネコの足音が、次第に水気を含んだものへと変わっていくのを聞きながら、エリアーへと足を踏み入れる。水の湧き出る泉となっているこのエリアでは、数匹のガーグアが屯たもとっていた。

「にや……これはガーグアにや？ この地方にもいるのにやあ」

「むしろ生息を確認されたのはこっちの地方が先なんだぜ。さ、先に進もう」

そんな小さな雑学を吐きながら、俺はガーグアの横を通り過ぎる。その事実にはイルルは感嘆しながら、再び水の上を跳ね始めた。

一方で、突然見慣れない人物が現れたためかガーグアたちは驚き慌て、悲鳴と共に逃走。臆病なのはどこの地方も同じということだろうか。そんな旨そうな肉に涎を滲ま

せながらも、俺は敢えて目を逸らす。

「ガーグアも美味いけど、今はファンゴファンゴと……」

「にや、にやにや?」

そんなエリアーを抜けた先。そこには狩猟地らしくない、荒れ果てた廃村が鎮座していた。老朽化に老朽化を重ねた木材を重ね合わせた廃屋、それが幾つも立ち並んでいる。生憎人の気配はないが、その建物の周りには忙しなく鼻を鳴らす牙獣種の姿が数匹あった。

そう、ブルファンゴだ。厳つい牙に焦げ茶色の体毛を震わす奴らは、我が物顔でこのエリアーをうろついていた。

「おつ……」

「にや、豚にや! 旦那さん、あれかにや?」

「惜しい。こいつらじゃないんだよなあ」

その姿を見ては、イルルは飛び跳ねる。彼女の想像に一致したのであろうその姿に、あれこそがターゲットかとそつと俺の顔を覗き込んできた。そう思う気持ちも分かるが、残念ながらあれはターゲットではない。強いて言うなら、取り巻きといったところか。

一方で、嗅ぎ慣れない気配にでも気付いたららしい数頭のブルファンゴ。荒い鼻息を隠

さない彼らは、その厳めしい蹄で大地を掻き始める。

「ブルルル……」

「にや、何か嫌な予感……にや」

「こいつらの肉も美味いが、今は親玉目当てだ。無視していくぞ」

ファンゴと俺を見比べてはおどおどするイルル。そんな彼女の手を引きながら、俺は隣接するエリア5に向けて脚を前に出す。

俺としてはこのエリアには特に用がなかったため、奴らの縄張りに踏み込むつもりなど毛頭なかったのだが、奴らとしてはそうはいかないらしい。溢れる敵意を盛大に漏らしながら、ついに駆け出した。一心に、俺らに向かって。

「にや、旦那さん！ こっちに来たにや！」

「無視無視、避けるくらいなんてことないだろ？」

ブルファンゴの突進力は小型モンスターの中でも目を見張るものがある。これに対応できるとなればリノプロスくらいしかいないのではないだろうか。アプケロスという鎧に包まれた別の生肉も存在するが、これはまあ別の話。

と、褒めはするものの所詮は小型モンスター。避けるくらい造作もないことだ。

「モノプロスに比べれば全然大したことないよな！」

「ひつ、比較の対象がアレ過ぎるにや！」

危うい動きで飛び跳ねるイルルと、凄まじい勢いで転倒するファンゴ。激しい乱戦が繰り広げられる中、彼女は俺の軽口に声を荒げる。

そんなイルルの死角から、彼女目がけてもう突進する新たなブルファンゴ。回避の反動を抑えきれなかった俺は、それをそのまま蹴りに移行させた。飛び蹴りが宙を舞い、カブラSグリーヴがファンゴの横っ腹で炸裂する。

「ブギイツ!」

「にや、旦那さん!」

「数が多くねえか……。俺が引き付けておくからお前は先に行きな」

「わ、分かったにや!」

どんどん現れるブルファンゴたち。まるで何かの予兆のように、物凄い速度で集まってくる。俺が見たことのない個数。ここまで集まってくるのは珍しい。

外敵の排除だけでここまでするなんてことはないよな。まるで何かから逃げているみたいだ。

「にや……。旦那さん……」

「あん?」

増えゆくファンゴの動きを警戒しながらも、先に行ったはずのイルルの声に反応する。



エリア5に向けて走っていくのを確認したのだが、何故か彼女は立ち止まっていた。ただならぬ雰囲気を感じては、震えを隠せない。そんな印象だ。

「どうしたんだよ?」

「にや、にやにや……こ、この子もただのファンゴにや……?」

「へっ?」

動揺を隠しきれない彼女の言葉。違和感漂うそれを飲み込んで、彼女の方へ振り返る。

そこにあつたのは、俺の背後で立ち尽くすイルル。と、その奥で佇む一際大柄なファンゴの姿だった。他の個体よりもやや白みがかつた体に、より厳めく湾曲する牙。そして如何にも高慢そうなトサカ。

「……コイツだ」

「にや、にや?」

「……ドスファンゴだ! コイツだよコイツ! わざわざ自分から豚カルビになりきたか!」

「ブゴオオオオツ!」

俺の言葉に応えるように、奴は——ドスファンゴは猛烈な突進を仕掛けてきた。こちらのブルファンゴより一回り二回りは大きな体が、大地を抉り掻きながら爆走する。そ

の姿はまさに、猪突猛進の権化だ。

「イルル、どいてな！」

「にや、ど、どうするのにな!?」

「迎え撃つ！」

ぴよんと飛び避けるイルルを横目に、俺も奴へ向けて走り出した。大きくうねる牙が風を斬る。そんな奴の武器に対抗するように、俺も腰の武器をチラつかせた。

テオⅡスパード。粉塵煌めくこの刀身が、溪流の夕陽を浴びては紅蓮に染まる。

「ブルルラアアアアアツ!!」

「——なんちって」

その牙に接触する瞬間。真正面から斬り付ける——なんて、馬鹿な真似はしない。大体、ただの人間が真正面からモンスターにぶつかつたところで、押し負けるのは明白だ。ならば、避けて背後に回る。これに尽きるだろうか？

「にや、旦那さん何かセコいにや……!」

「セコいとはなんだ、立派な戦術だろうがよ！」

宙を斬るドスファンゴの牙。突き飛ばすはずだった人間の姿はそこになく、あるのは背後から訪れる鋭い痛み。鋭いジャンプ斬りはその剛毛の鎧を斬り裂き、奴は忌々しうに鼻を鳴らした。

「ブゴゴ……ッ！」

「……何か、滅茶苦茶興奮してないかコイツ？」

「にや、確かに……。すつごく荒ぶってるにや」

爛々と血走るその瞳が再び俺を捉える。興奮気味に鼻を鳴らすその姿から、奴が我を失っているのは火を見るよりも明らかだ。俺が背後から斬り付けたから、だろうか？

いや、どちらかと言えば、このエリアに現れた時からそうだったような気もする。

「ふうん……。あの大量のブルファンゴもコイツが原因かもな」

「にや——あれ？ ファンゴたちがいなくなってるにや」

辺りを見渡し、何となくだがこの状況の要因を理解した。それにはイルルも気付いたようで、彼女も驚いたような鳴き声を上げる。

そう、イルルの言う通りブルファンゴの姿が無くなっているのだ。あんなにたくさんいたはずのファンゴだったが、今は忽然と姿を消している。まるで何かから逃げるかのように。

「群れのボスがこんな調子じゃあ、そりや周りの豚も逃げるわな。人望……いや、豚望無くしてらあ」

「にやー。一体何があつたのかにや？」

「さあな。そう興味もない！ あるのはお前の肉だけだ！」

荒い鼻息と共に牙を振り回すドスファンゴ。そんな奴の大振りな動きをバックステップで躲し、隙間を縫うように斬り込みを入れる。緋色の刀身から溢れ出る粉塵に、奴は眉を顰めながら再び地を掻き始めた。

「旦那さん！ 突進来るにや！」

「分かつてる、大丈夫だ！」

そのやり取りが終わるか否か。会話を終えるのも待たずして、奴は激しく走り始めた。砂利や小枝が飛び交い、地面に大きな爪痕を残す。その速度もこれまでとは比較にならない。その突然の挙動に、俺も思わず大きく跳び避けてしまった。

「……………つと！ 思ったより速いな！」

「にや……………つ!?! と、止まらないのにや!?!」

「え——おおつとお!?!」

大きく回避し、隙を晒す俺。一方で、ドスファンゴも躲されてしまったために動きを止め、俺の方に向き直す——と思っていたのも束の間。イルルの驚愕の音が、そんな予想をあつさり瓦解させた。

振り返れば、突進の勢いを殺さずむしろ猛ダツシユで急カーブするドスファンゴの姿が。体を一度止めるより数段速いその捕捉力に、あえなく俺は弾き飛ばされた。

「いってえ……………！」

「だ、旦那さん！」

「ばっか！ ドスファンゴはまだ止まってないぞ！」

吹き飛ばす体を、片手剣で地面に縫い付けては何とか体勢を立て直す。そんな俺の様子に、慌てて駆け寄ってくるイルル。

その背後には、走る彼女を撥ね飛ばそうと、彼女以上のスピードで走り寄るドスファンゴ。

「いや——」

奴が駆け巡ったであろう軌跡が見える。縦横無尽に走るその生肉は、標的とした小さなネコに向けて速度をさらに上げた。そうして一直線に、彼女に向けて牙を震わす。

ダメだ。避けられない。イルルもはね飛ばされる。

——そう思った瞬間だった。

「にゃー！ 負けるかだにゃーっ！」

「ブゴオッ!？」

「はっ!？」

何と彼女は、その土壇場でネコまっしぐらの術を繰り出したのだ。一直線に走るその物々しい牙に衝突する、同じく一直線で跳ぶ彼女の鋭い一閃。両者どっちも引かず、擦れ合うその衝撃はやがて自然に逸れ合った。

牙の軌跡と、剣の軌跡が宙に掠れゆく。突進を完全に止めることはなかったが、すれ違いようにドスファンゴの横つ腹を大きく斬り裂いていたようだ。奴の動きが、痛みによるぎこちなさに蝕まれていく。

「……にや、焦ったにや……！」

「ナイスだ、イルル！」

フラフラと足取りの危うい奴に向けて、俺は剣を収めた右手の盾を振り被る。勢いも速度も失った奴の脳天で炸裂する一筋の打撃。それが溜めに溜めていた粉塵を、より大きく散乱させる。

頭を襲った打撃に悶えるドスファンゴは、その溢れる橙色の空気に気付いたようで、ヒクヒクと鼻を忙しなく鳴らした。

「カツオのたたきならず、ファンゴのたたきってな！」

そんな奴に向けて振り回した左手の剣。分厚い刃が何度も奴の頭を打ち付けて、その度に大気の色を緋色に染め上げていく。ドスファンゴが痛みから立ち直り、もう一度俺に対して鼻を鳴らす頃には、目の前は紅蓮に染まり切っていた。

「ブゴツ……ブギイ！」

「おおっと！」

そんな視界だというのに、奴は御構いなしだ。血走った眼で俺を睨むドスファンゴ。

認知できる視界は、粉塵が舞おうと舞うまいと赤で染まっているのかもしれない。

それを肯定するかのよう、奴は勢いよく駆け出した。目の先にいる敵を弾き飛ばそうと、その鋭い双牙を振り被る。

瞬間、鋭い金属音が響いた。固く鋭いその牙が、俺の右手の堅牢な盾へと突き立てられる。その切っ先と盾の表面が擦れ、あまりの勢いに火花まで散り始めて――。

それが引き金となった。溢れる細かい火花は、爆破の連鎖のように舞い上がる粉塵の尻を蹴り上げる。その小さな光は、漂う粉塵の一つ一つに飛び火していき、ついには大きな花へと開花した。

「プゴウツ!?!」

「そおれ、吹っ飛べー!」

そう言うが早い。その爆破の花は大口を開け、ドスファンゴを丸々呑み込んだ。そうかと思えば勢いよく弾け飛び、その巨体を勢いよく吹き飛ばす。奴が先程俺を吹き飛ばしたように、高く大きく。

「にゃあーん、ピンゴにゃ!」

「おっ……」

そんな奴の落地点。そこには、およそ自然界では形成されないであろう奇妙な文様が浮かび上がっていた。

まるでネットを思わせる、重厚に編み込まれた細い線。中央部で煙を上げる、小型の爆破装置。もしかして。いや、もしかしなくとも――。

「ブゴっ……」

「落とし穴か……!?!」

「そうにや、張つといて正解だったにやあ!」

何と云うことか。俺がドスファンゴを引つ叩いている間、イルルはせつせと落とし穴の準備をしていたらしい。それも、俺が奴を爆破で吹き飛ばすことを予想して。

彼女の思わぬ作戦に驚きながらも、俺はすかさずドスファンゴへの距離を詰めた。ネットに背中から嵌り、動こうにも動けないドスファンゴ。目の前で爆破を喰らったこともあつて、その混乱具合は深まるばかりのようだ。その度が過ぎた興奮具合が、それを如実に物語っている。

「イルル、グツジョブだ。これにてチェックメイトだな」

ネットに牙ごと絡み、荒れ狂うファンゴの長。そんな奴の首元に、そつと左手の剣を添える。重厚で太い刃を持つこの剣だが、斬れ味は鋭く優秀な部類だ。ドスファンゴ程度の毛の鎧を、そしてその下の肉を斬り裂くなど造作もない。

ネット越しに吹き出る鮮血。それを見ながら、イルルは小さく溜息をついた。

「にや、相変わらず容赦なしにや」



「しようがないだろ？ コイツの振る舞いには住民も困ってたしな。それに俺が食べた  
らっ」

「……ほんとに相変わらずなのにな。それにしても、どうしてあんなに荒ぶってたのか  
にやあ？」

「さあね。自然界の出来事なんて、理解しようとしても不可解なことばっかだ。あんな  
まり深く考えない方が良さぞ」

動かなくなったドスファンゴの脈を確認しつつ、俺はギルドから拝借した一般的な剥  
ぎ取りナイフで血抜き処理を開始する。邪魔なネットからまず斬り始める一方で、イル  
ルは静かに、ドスファンゴが現れた背後の森へと振り返った。

その森からは、木々の軋むような、碎けるような音が風に紛れて流れ込んでくる。そ  
んな奇妙な森を、イルルは静かに見つめ続けていた。



「——酢桶を絞るとどうなるでしょうか？」

「にや、果汁が溢れ出るにや」

「そうだな。じゃ、それをこの塩ダレに混ぜ込んだらどうなるか？」

「みゆ……酢橘の味がついた塩ダレに……なる？」

溪流の南東、高台に位置するベースキャンプ。そこで土鍋とフライパンを操りながら、俺とイルルは軽口を交わしていた。そんな会話で絞り出されたように、今回のポイント<sup>すだち</sup>は酢橘だ。酢橘とは一般的に知られる柑橘類の一つで、焼き魚や刺身にかける、もしくは食用酢にも用いられる料理人の愛用品。

そんな酢橘を、今回はドスファンゴに利用する。この試みは、俺も初めてだ。

「うんうん。というわけで、今回は豚塩カルビに酢橘入りというのはどうだ？　良い響きじゃないか？」

「にや……塩ダレをカルビに掛けて、そのカルビをご飯にかける？」

「こそ。まあ詰まるところ、ドスファンゴのカルビ丼だ」

そう言いながら、土鍋の蓋を湯気ごとずらす。その中で輝く五穀豊穡米をしゃもじでかき出しては、そつとお椀に盛り付けた。溢れる香りは深く、味わい深い。その良質な米に、俺は思わず涎を滴らせてしまう。いつかの七草粥で用いた五穀豊穡米、原産地直送だ。

「にや、ご飯にカルビの脂が染み込んで、その上からタレをかけるなんて。贅沢にやあ」

「酢橘の酸味が良い感じに効いてるといいけど。カルビに混ぜ込んだ刻みジャンゴ―ネ

ギも良い色だ。美味そう」

「よ、涎溢れてるにや。早く食べようにやあ」

白い米を濡らすように、そつと重ねるカルビの層。薄くスライスしたそれは、脂身も程よく含んでおり、薄橙色の肉と黄緑に染まる刻みジャンゴ―ネギのカラーリングが素晴らしい。そこに煌めく塩ダレの霞んだ透明は、米の白さと薄い肉の色をそつと染め上げた。

「あつさり仕上げてみたつもりだが……どうかな?」

「にゃん、いただきますにやっ!」

箸で摘まみ上げたその物体は、溪流の紅の夕陽を美しく反射した。光で煌めく海面を思わせるその美しさ。溢れる肉の香りと酢橘の酸味、塩ダレの鼻に優しい透き通るような匂いに俺は図らずとも心を躍らせてしまう。

これを口に入れたらどうなるか。想像するのも難しくない。口内で溢れる唾液にもいよいよ味が付いてしまったかのように、不思議な味覚に包まれてしまいうさだ。それを上書きするかのようには、俺は一口、肉と米を口に入れた。

まず初めに伝わってくるのは、以前も口にした五穀豊穡米の旨み。それも、粥状ではないただ炊き上げた、そのままの感触だ。一粒一粒がもちもちと柔らかく、その上で簡単に解れていく。食べやすく、飲み込みやすい。流星はユクモ村原産だけはある。産

地直送なその新鮮な旨みに、俺は唸る声を押さえられなかった。

そんな米にかかった肉の旨み、塩ダレの風味。意図にうまく沿ったその味はとてもあつさりとしており、塩特有の口どけの良さ、そしてキーンとなる酢橘の酸味をよく形成している。舌を刺激するその酸味がドスファンゴの脂をよく含んだ肉と絡み合い、非常に風味豊かだ。混ぜ込んだジャンゴンネギの、歯応えある食感もまた良い。噛むのが楽しい。

しかし、予想外な部分もあった。この丼のメインとなるドスファンゴだが、そのカルビが思ったよりも脂が多いのだ。その脂分相応に味も濃くなり、肉としての主張も激しくなる。これには少し予想外。塩ダレはあつさり仕上げたつもりだったが、肉としての味が強すぎる。全体としてはあつさりとは言えない、ややこつてりとした味に仕上がってしまった。

「……ううむ、思ったより味が濃いな」

「にや、ファンゴの味って濃いのにやね」

「くどすぎやしないか？ 大丈夫か？」

「にや、ボクは平気だにや」

イルルとしては特に問題ないようで、はぐはぐと食べ続けている。満足そうに微笑む姿は、作ったものとしては何だかこそばゆい気分だ。日頃俺に付き合わせてしまっ

るがために、彼女の舌もまた肥えているのだろうか。

「しかしなあ、もつとあつさりしたもんになるかと思っただがなあ。流石はドスファ  
ンゴ、そこらの豚よりも太く強い味だ」

「……にや？ 旦那さん他の豚も食べたことあるのにや？」

「おう。そりやもちろんプー……いや、ただのブルファンゴをな、うん」

「……もう、あえて触れないでおくにや……」

く 本日のレシピく

『塩ダレドスファンゴ并酢橘入り』

・ドスファンゴ(カルビ) ……200g

・五穀豊穰米 ……2合

・ジャンゴ―ネギ(刻み) ……20g

・酢橘 ……1個

・塩ダレ ……100ml

・にんにく ……1／4個

・胡麻油 ……大さじ1杯

- ・レモン汁
  - ・塩
  - ・胡椒
- 
- ……大さじ1杯
  - ……小さじ1／3杯
  - ……適量

## 竹に映える丘に生える茸

「にや? ユクモの木……にや?」

「ああ、この村は林業で栄えててな。ユクモの木つてのはブランドものなんだぜ」

ユクモ観光。

このユクモ村に訪れ、もう既に三日ほど経っていた。宿と村を行き来しながらこの村の味見をする日々。何と美味しい時間なんだろうか。

そんなこんなで、本日もまた新たな味を確かめてみよう、俺とイルルはユクモ温泉街に足を運んでいたのだった。

「それを……買ってどうするのにや?」

「先日加工屋に剥ぎ取りナイフ兼包丁を作ってもらっただろ? なら何故木材を欲しがるのか、分かるよな?」

新たな味、という言い方には少し語弊があったかもしれない。正確には、味へ到達するための手段を求めているのだ。

ユクモの木。

良質で、非常に強靱な木材だ。その特性ゆえ、ハンターの武器としての需要があるほどの高級ブランドとなっている。ユクモ林業の顔とも言える品であり、それ相応に需要も多い。この村の住人は勿論、商人や観光客など外部からこれを求め村に訪れる者も多いのだ。当然ながら、かく言う俺もその中の一人である。

「にやあ……もしかして、まな板かにや?」

「おつ、御名答〜」

首を傾げながらも、おずおずとイルルは解を導き出した。

包丁と対を成す、料理人の相棒。そう、まな板だ。

先日相応の額と引き換えに加工屋の主に提供してもらった剥ぎ取りナイフ。贅沢にも千刃竜の伐刀角を主素材として加工してもらったそれは、加工屋の粋な計らいで包丁のような形状へと生まれ変わっていたのだ。

偶然にしろ、加工屋の気分にして、俺にとつては好都合以外何者でもない。ならば、それと対を成す上質なまな板を用意せずして何とするか。

「ユクモの木はあの木材店に並べられてたし、買って行こう。……ほら、見えてきた」

「……みや?」

路地の角に差し掛かったあたり。俺の記憶が正しければ、この先には普段沢山の客で盛況している木材店があつたはず。



だが、疑問を漏らすようなイルルの声が、漂う違和感に現実味を帯びさせた。普段あ  
るはずの騒がしさが無い。熱気を帯びているかのような活気もない。列が出来るはず  
の客の姿も、今は店の前で立ちつくす男ただ一人のみ。

「あれ？ 何だこれ……俺たちがここに着いた日はもつと盛り上がったたよな？」  
「にやあ。今日は定休日かにや？」

「定休日……うーん、そういうのはもつとしつかり決めてるだろうけど」  
「あれかにや？ 店主さんの体調不良で臨時休業とか、にや？」

「——とところがどっこい、そんな柔<sup>やわ</sup>な事態じゃないんだよなあ、これが」  
その奇妙な光景に漏れ出た俺の声。よく分かってないながら軽く考察を漏らすイル  
ルの声。

そこに、一人の男の声が割り込んで来た。加工屋のようにしわがれている訳でもな  
い、成人男性らしい低くも高くもない声。そしてどこかで聞いたことある声。

どこだっただろうか。確か、孤島で雌火竜と交戦していた時に——。  
「あつ……ああ!! お前、まさか……『イズモ』か？」

「よーう。久しぶりだなっ、シグ！」

店の前に立っていた男。紫と白を基調とした装備に。袴といい着物のような形とい

い、如何にもユクモらしい装備に。何処か海竜種を彷彿とさせる、独特の質感をもつその装備に身を包んでいた男。リンゴを片手に、しゃくつとそれを齧りながら、彼は快活な様子で俺に手を振った。

かつて俺が組んでいた、そして七草粥の作法を俺に教えてくれたあのユクモ村のハンター、その人だった。

「にゃ? 旦那さんの知り合いさんかにゃ?」

「おうネコちゃん、オレとコイツは旧友よ。何度か狩りにも行ったもんさ。……そういう君は彼のオトモかな?」

「この子の名はイルル、俺の相棒だよ。……それよりもさ、何でお前ここにいるんだよ?」

俺とイズモの反応を交互に見ながらも、何となく察したのであろうイルル。それでも彼女はおずおずと、目の前のイズモという男に向けてお辞儀をする。

そんな姿を微笑ましそうに見るこの男は、昔と変わってない軽口を交えながらも、俺の質問に応えようと大仰に振る舞い始めた。

「ここはユクモだぜ? オレの駐留地なんだから、オレが何処に居ようと勝手にしてよ?」

「あー……言い方が悪かったな。じゃあ、何でわざわざ俺らの前に現れたんだ?」

「その言い方は酷くねっ!」

確かにこの村は彼——イズモが住居を構え、ハンター活動の拠点としている村でもある。故に彼が村の何処に居ようと彼の勝手というのは尤もだろう。

だが、何故わざわざ俺たちの前に現れたのか。いや、言うなれば何故あえてこの木材店の前で待ち構えていたのか、それが腑に落ちない。

「あの……イズモ、さん。柔な事態じゃないってどういうことなのによ？」

「おーネコちゃん、君はこの白髪と違つて話が早いコだねつ。お兄さん君みたいなきだよ」

「にやつ……」

彼の開口一番の、この事態の重さを示唆するような一言。それが引つ掛かっていたらしいイルルは、少し躊躇いながらもイズモに問いを投げかける。

早くも色々と問い詰める俺に嫌気が差していたのであろうか、彼は嬉しそうにイルルの頭を撫で回し、腰のポーチに手を伸ばした。そこから取り出されたのは、何枚も重ねてまとめられた書類の塊。

「ただの定休日じゃなくて、店主の体調不良でもなくて。——仕入れに問題が生じているために臨時休業……って言つたらどうする？」

「あ？ 仕入れに問題だあ？ 仕入れ先つて溪流だろ？ ……つて、つーことはもしや」

「モ、モンスターの仕業、かにや!!」

俺の言葉を繋ぐように響いた、核心を突く一言。柔らかな毛並みに覆われた彼女の口から放たれたそれは、一直線にイズモの下へと飛び、その答えに彼は薄く口角を吊り上げた。しやりつと、彼の齧るリングが快音を立てる。

溪流といえ、その快適な環境故に様々な生物が好んで住み着いた緑豊かな生態系だ。飛竜種や鳥竜種、牙獣種はもちろん、最近では海竜種もその姿を見せるようになってきたと聞く。それこそ、目の前で不敵な笑みを見せるこいつの装備も、おそらく海竜種のものではないだろうか。

「察しが良いねえ。尾槌竜、ドボルベルク。件の犯人はコイツだよ」

「うげ……。これまた面倒臭い奴が来たもんだ」

「……みい？ ど、どぼる……？ 旦那さん、知ってるのにや？」

イズモが答えた、件のモンスターの名。どうやら初めて聞くのであろうイルルは、その聞き慣れない響きに首を傾げながらも俺の方へと視線をずらしてくる。ドボルベルクとは何ぞやと、その瞳が訴えかけてくる。

ドボルベルク。尾槌竜という名が示す通り、尾がまるで槌のように発達した大型の獣竜種である。さながら丘のような巨体に、その体格故の圧倒的な体力、そして主食である樹木を薙ぎ倒して食い散らかすというのが主な特徴だ。

「にや？ じゃあ、そのど、どぼる……ってのは草食なのにや？ だったら、木材店が営

業できないのって」

「こそ、そいつが木を食うわ暴れるわで商売上がったりっ！ ……って訳だね。んで、これが狩猟依頼書」

「成程、つまりイズモがそいつを狩ってきてくれるんだな。いつてらっしやい早くしろよ」

「ちよつ、酷くねっ!?! 何で君らにここまで説明したかで察してくれよ!」

面倒な事態に巻き込まれそうだったのではぐらかしてみれば、イズモは大振りな身振り手振りで自分の行動をアピール。要は俺たちにも狩猟の手伝いをさせようという魂胆らしい。

コイツと狩りに行くことは出来れば避けたかったので——理由は明白だろう——素っ気ない態度をとったものの、イルルはイルルで俺の対応を諫めようとしたのか、俺の右手を両手で掴んではギュツと力を込めてきた。

「旦那さん、お友達には優しくしないとダメにや、めっ!」

「む……まあ、そうだな。コイツに任せてまな板作るの遅くなったら堪えないし」

流石にイルルに強く言われてしまえば、先日の船での負い目もあつてだろうか。俺としても少し躊躇ってしまう。丸く青い二つの瞳の圧力はなかなかどうして大きいように、俺は気圧されながらも首を縦に振らざるを得なかった。

「ああ、ネコちゃん！ 君は本当に良いコだ！ ご褒美に撫で回してあげるよ！」  
「にっっ……！」

一方で、イズモといえはイルルの言葉に感極まったのか。彼女を撫で回そうとその袴に覆われた脚を踏み出して――。

気安く触るなどという意味も込めて、取り敢えず腹に拳をあてがっておいた。さながら碎竜のように。



ドボルベルクというこのモンスター。

奴の最大の特徴とは、一体何だろう？

その丘のような巨体か？

湾曲した敵めしい角か？

まるで槌のように肥大したその尾か？

――俺が思うに、コイツの異色たる所以は獣竜種らしからぬその運動能力だろう。何故ならこいつは、獣竜種の中で唯一空を舞うことが出来るのだから。

「おっと、飛んだ飛んだ！」

「にやつ……うそお……っ!?」

まるで台風のように木々を薙ぎ倒したかと思うや否や、あの巨体はいつの間にか宙を舞っていた。

見上げれば、高く聳え立つ樹木に、天を貫く竹。縫い合わされた空と雲は色の明暗をはつきりとさせ、何とも美しい景色を創り出していた。その絵の中を悠々と泳ぐ竜の姿には、一種の感慨の念を抱いてしまう。

「離れよつか、危ないぜネコちゃん!」

「イルル……動けッ!」

だが、その絵もせいぜい一瞬のものだ。所詮翼を持たない獣竜に、空を浮き留まることなど叶わず、とうとう重力にその身を掴まれた。そうして風を斬りながら、一直線にこの大地へと身を落とす。その下の人間たちを、木々もろとも叩き潰そうと言わんばかりに。

そんな圧巻の光景に、初めて遭遇したであろうイルルは身が竦んでしまったのだろう。避けようとししないで、ただひたすらその光景に見入っていたのだった。

「はっ! ……みゃうっ!」

このままでは、彼女が潰れるのは避けられない。そう思った時には、俺は全速力で彼女の下に駆け付けて――。

彼女の体ごと、巻き込むように転がり込む。ネコの小さな悲鳴と、体が草木や地面と擦れる音。その直後に鳴り響く凄まじい地響きが、俺の耳の中を右から左へ一気に駆け抜けた。

間一髪であの巨体に巻き込まれることは避けたものの、少しでも遅れていたら、俺もイルルも原型を留めていなかっただろう。そう思うと、どつと嫌な汗が溢れてくる。

「ふう、何とかなったな。イルル、大丈夫か？」

「に……い……ご、ごめんなさいにやあ、旦那さん……」

取り敢えず一息ついて、未だ腕の中で震えるイルルの様子を窺ってみれば。彼女はおっかなびつくり俺の顔を見て、申し訳なさそうにそう漏らした。

まあ、獣竜種が飛び上がるなんて光景は、誰だつて初めて見たら驚くものだ。あまり気を落とす必要はない。そう返そうと口を開いた瞬間——イズモの軽口と、それを上書きするかのような斬撃音が鳴り響いた。それも俺の頭上で。

「ナイスう！ 相変わらずの瞬発力だねえ！」

「うわっ……あつぶねえな！ 俺らのすぐ上を斬るなよ！」

「だいじよぶだいじよぶ！ ちゃんと考えてつからさ！ ……さあて、気も練ってきたぞお……」

見上げれば、イズモの振るう太刀が俺の真上で弧を描く。尾槌竜の血を浴びて、刃が



より研ぎ澄まされていくようだった。妖しく光るその刀を静かに背中の中の鞘に納めながら、イズモは小さく息を吐く。まるで呼吸を整えるようなその吐息は、これからの展開に備えて心を鎮めさせようとしているかのよう。

そんな彼の持つ太刀——飛竜刀【朱】。火竜の甲殻を思わせるそれは、鋭い斬れ味と熱を併せ持つ一品だ。ましてやドボルベルクは火に弱く、相性は抜群と言えよう。

「……お前の太刀捌きは怖いんだよ、少しは自重しろよな」

「そう言う君は、前までガチャガチャ武器鳴らしてたのにねえ。今じゃ片手剣なのかあ。

……あれかい？ ギルドカードに合わせて初心に帰った的な？」

「うるせえ、どうでもいいだろそれはよお！」

武器を持ち直すイルルからそつと手を離し、今回担いできたイフリートマロウを引き抜いた。それも、彼の言葉を霧散させるような勢いで。居合を思わせるその鋭い斬撃は、ただ一直線にその太い尾へと飛び込む。

甲殻を何重にも張り合わせたかのようなその巨大な槌を。その甲殻の合間で静かに息を押し殺す弱点<sup>すきま</sup>を。勢いのままに、斬撃のままに、剣は文字通り火を吹いた。さながらそれは、火竜の吐息のよう。

「にやつ！ ど、どぼる……るくが立ち上がるにゃ！」

「ドボルベルクな、分かってる！」

あやふやなイルルの指摘。彼女の言う通り、しばらく地に伏して沈黙していた尾槌竜だった。

一転、荒い鼻息と共にその両脚を再び地に立てた。同時に土を抉っていたその槌も浮き上がっていく。危うくそのままかち上げられそうだった俺の体だったが、タイミングを合わせてバックステップ。軽い跳躍でその槌を躲しながら、回し蹴りならぬ回し斬りを仕掛けて一呼吸置く。

「さて……一体どれくらい交戦してるっけ？」

「大体日が昇り切る前から戦ってるにや。凄いタフにやね……」

「コイツのタフさは折り紙付きだからねっ！ きついきつい！」

そう。クエストが開始されてから、早くも日は傾き始めていた。だというのに奴は一向に弱りを見せず、それどころかなお力強く地団太を踏んだ。そうしてその分厚い喉を震わせ、天高く吠え上げる。一向に去らない人間たちが気に喰わないのだろうか、いよいよ堪忍袋の緒が切れたらしい。

鼻から荒い息を漏らしながら、奴はそつと身を屈める。巨体を畳むように体勢を低め、尾の先に力を溜めるかのように。

「だ、旦那さん！ 尻尾にや！」

「だな！ イルルも下がれよ——つとお！」

言い終わらない内に、尾槌竜はその代名詞たる槌を解放した。尾の根元から先まで一瞬で振り切られたその塊は、遠心力も相まって凄まじい烈風を巻き起こす。同時に散らばるのは土、砂利、そして木々。ただ尾を振っただけのそれが、天然の散弾を作り出した。

俺はいつものように身を翻しながら大きく跳び避けて、イルルはでイルー特有の柔軟さを存分に生かした連続ステップで華麗に躲した——のだが。イズモだけは違った。彼は右手で太刀の柄を握りながら、勢いよく飛び込んだのだった。

「——ッ!? イズモ、お前何を——」

「——だあー！」

強烈な勢いで振り抜かれた巨大な槌。まだ勢いが殺し切れていないそれに、イズモは——何と、飛び乗った。

いや、それだけではない。飛び乗って、そのまま勢いよく跳躍。驚いたことに、彼はあの尾を土台に天高く舞い上がったのだ。靡く黒い髪と、揺れる衣装が空に溶け込んでいく。

「行くぜい……い！」

そして、彼は宙を舞いながらも背中の中の太刀を抜き放った。練り込んだ気を解放し、光る刀身を縦横無尽に振り回す。

滑るような斬り払い、薙ぐような一文字。そして止めと言わんばかりの斬り下ろしに、ドボルベルクの背中のコブは大きく軋み、嫌な音を響かせる。その斬り下ろしと共に着地したイズモは、なんとこちらが本命と言わんばかりに、そのまま周囲一帯を大きく斬り結んだ。

「す、凄いにゃー！」

「へっへーん。どうよネコちゃん、オレ……格好いいだろ？」

「……最後の一言さえ無ければ決まっていたのによ」

彼が放ったそれ——俗に言う気刃大回転斬りが斬り裂いたのは、ドボルベルクのその太い脚。同時に血飛沫が舞い、奴は痛みそのままに体勢を崩す。

しかし怒り故の根性からか、そのまま倒れることはなかった。片足に踏ん張りを効かせ、怒りを露わにしながら向き直すドボルベルク。だが、その筋肉には疲労の脈があった。

「うーん、このまま転倒までもっていけると思ったのになあ。やっぱりしぶといねっ」  
「いや、きつとあと少しだ。俺に任せな！」

太刀を再び背に収めながら、イズモは困ったようにそう呟く。確かに奴はなかなか隙を見せようとしない。屈強な尾槌竜の中でも、特に力を付けた個体なのだろう。

だが、いくら強かろうが奴が生物であることには変わりはないのだ。生物であれば、

限界が必ずある。きつと奴も、そろそろ耐え切れないはず。

「……にや? 何にや、何で背を向けて……」

突然奴は俺たちに背を向けた。逃走でも図っているのか。そう感じさせるような、あまりにも露骨なその行動。イルルも思わず疑問の声を漏らしたが。

直後、奴は腰を振り上げ、その尾を高く高く舞い上げた。そう、背を向けるといふことは、同時に尾もこちらに向けるといふこと。わざわざ俺たちに背を向けたのは、逃げるためではなく——その自慢の尾で俺たちを叩き潰すためだったのだ。

「にや、にやあつ!」

「うおつとお、あつぶないねえ!」

「……つと、隙あり!」

だが、あまりにもその動作は大振り過ぎる。見え見えで避けやすいのだ。

もちろん、その尾の質量故に大地は大きく揺れるため、その震動に巻き込まれては堪ったものではないが。それこそイルルのように何とか避けたものの、その震動によって動きを封じられてしまう場合もある。

だが、跳んで避ければ問題は何も無い。

「シグ、腹だ! 腹を狙え!」

「分かっている!」

イズモは仰々しくも宙で一回転しながらそれを躲し、俺は跳びながらドボルベルクの側面へと回り込んだ。尻尾を引き上げることとで精一杯な奴に向けて、その隙を射抜くように地を蹴って。そうしてイズモのように跳躍し、その腹とは捉え難い分厚い腹に向けて剣を振るう。

するとどうだ、奴はやつと観念したかのようにその太い四肢を投げ出したじゃないか。

「転倒したにや！ 旦那さん、頑張つてにやあ！」

「シグ、コブだ！ 背中のコブを刺しちゃって！」

イルルは剣を振り回しながら、イズモはコブを狙えと鼓舞し始める。何ともツツコミたいその光景だが、俺はあえて無視してドボルベルクの、まるで丘のようなその背中に飛び乗った。

突然の衝撃に、ドボルベルクは驚いたかのように暴れ始める。が、そんなことは関係ない。指を喰い込ませ、必死にしがみ付いて。そうして、イズモの言うそのコブに向けて、金色に輝く新剥ぎ取りナイフを突き立てた。

「くう……こんのツ！ 暴れんな山野郎！」

「旦那さん、負けないで！ にゃんにゃあーっ！」

「……ところでネコちゃん、シグが乗ってるあのコブの秘密って知ってる？」

尾槌竜の野太い声と、イルルの黄色い声援。そして肉を抉る刃の音の中に——イズモから発せられた、魅惑的な言葉が鳴り響く。

その唐突とも言える台詞に、流石のイルルも困惑しながら彼を見上げた。その表情はどこか、俺と狩りを始めた頃のものに似ているような気もする。

「にや……？ な、何にや？」

「……実はな、あのコブは食べれるんだよ。奴の脂肪分が蓄えられてるんだよ！」

イルルの瞳は、「この人は一体何を言っているんだろう」と言わんばかりに見開かれていた。弱々しい声を上げて倒れ込むドボルベルクに目もくれず、目の前のハンターの言葉に唾然としている。デジャヴと言うべきか、何だか見たことある光景だ。

一方でイズモは、文字通り転がり込んで来たチャンスを当然逃す訳もなく。目を見張る切り替えようで、件のコブに向けて鋭く太刀を振るい、損傷した部位を激しく斬り刻んだ。

「……には濃厚な旨みが凝縮されててねえ、美味しいのさっ！」

「へえ、そいつは楽しみだ。んで？ 一体どういう傾向の食材なんだ!？」

「んー……結構トロツとしてて半固体っていうか。熱したらあんかけみたいになるぜえ、ほら大回転斬りイ！」

「ほう、ならあんかけスープとか良いかも……なツ！」

イズモが背中のコブを斬り刻む傍ら、俺は滅氣の刃葉を塗り込んだイフリートマロウで、その武骨な頭部を荒々しく打つ。剣を握る手を動かしながら、口は目の前で沈黙する味を語ろうと上下に激しく動いていた。それは彼も同じで、会話しながら剣を振るう。それも、尾槌竜が怒りのままに再び立ち上がる瞬間まで。

締めと言わんばかりに滅氣を上乗せしたブレイドダンスを打ち放つ横で、イズモは再び大回転斬りを放った。そう、再び「あの瞬間」が訪れたのだ。

「うおっ……と、つて……やっべ」

空を裂き、まるで血染めしたかのように紅く染まる刀身。その峰が、防具に包まれた俺の脚をそつと崩した。振り抜いた直後だったため威力はもう殺されていたが、足払いを仕掛けるには十分だった。

「あつ……てめっ！ またっつ……!!」

荒々しく身を振りながら起き上がる尾槌竜。バランスを崩した俺は、ものの見事にその巨体を押し当てられる。

武骨な甲殻が俺の胸を打ち、奇妙な感觸の何が俺の口へ――。



「もがつ!？」

「だ、旦那さん!」

そのまま吹っ飛ばされた俺の下へ、慌てた様子でイルルが駆け寄ってきた。そうして心配そうに俺の顔を覗き込み、口の中に入り込んだものを引っ張り出そうと手を添えてくる。

一方のドボルベルクは正に怒り心頭。鼻からも、背中のコブからも興奮に染まる息を吹き出して、太刀を収めるイズモを睨みつける。やはりコブは相当な弱点なようで、そこを一心に攻め立てたイズモを一番の脅威と見なしているようだ。

「うにやつ……にやつ? き、キノコにやつ?」

「げほっ……あー、ドボルトリュフかな? どうりで美味しいと思った!」

「みゅ……あの状態で味まで確認済みなのかにゃ……!」

イルルが俺の口からすっぽ抜いたのは、薄黒い光沢が魅力的な希少食材——ドボルトリュフ。ドボルベルクの表皮に自生するというこのキノコは、今し方実感したようになり、の旨みを含み、それ相応の価値をもった高級食材として知られている。これはあんなかけスープに入れたら美味しいんじゃないやなかるうか。

だが、ゆつくり考えてもいられない。まだ今回のメニューとなるあんかけは用意できていないのだ。

「おっ……何か徐おもむろに回転し始めたよ。これはまた飛ぶのかなっ？」  
「にやつ、またアレかにな……！」

怒りのままに尾を振り上げ、尾槌竜はゆっくりとその身を回転させ始めた。周囲を薙ぎ払うように、木々を薙ぎ倒すように。そうして、ゆっくりと運動の軸を脚から尾の先へとずらし始める。

「地味に痛かったが……良いキノコが獲れたからさつききの転ばしはチャラな、イズモ」  
「ごめんよ。……とここでそのキノコ、あんかけスープにするなら具材にピッタリじゃないかなっ？」

「そうだな、俺もそう思ってたところだ。……他には何が良いと思う？」  
「この辺りなら……特産タケノコとか？」

まるで台風のように荒れ狂うドルベルク。回転する尾は最早竜巻と言っても過言ではなく。奴の暴れる一帯の木々は、無事に立っているものが一本たりともない。これはユクモ林業も上がったらだろう。

そしてその速度もいよいよ最高速度へと迫り始めたようで、耳を劈つんくような音がこの森の中で反響し始めた。

「いいじゃないか。それと……何か肉類も欲しいな」

「ん、フアンゴとかガーグアとか？ この辺りならそれらがいんじゃないね？」

「んーそうだなあ。どうせならガーグア狙って、卵も獲って……」

「おつ、つまり卵あんかけか！ それ良いね！ 採用採用っ！」

いよいよ最高速度に到達したらしいドボルベルク。その回転速度は凄まじく、いよいよ周囲の木々や砂利を弾き飛ばすほどになった。回る尾の高さも目を追うごに上がり、身体と大地を縫い付けているその脚もいよいよ緩み始めている。飛び立つのもいよいよ目前だ。

「にやつ……飛ぶつ、飛ぶにゃ！」

「……じゃ、それでいこうか。鍋はキャンプの使えばいいよな」

「だなつ。じゃあアイツからはコブとキノコ獲って……別途タケノコやら肉やら卵を集めれば——」

——完成だっ！

目の前でじつくりと、温かな湯気を舞わせる鍋。その中には薄茶色のとろみと、柔らかな卵黄が絡み合っていた。

そのとろみの正体は、ドボルベルクの活動エネルギーともなっていたあの栄養満点のコブ——に貯められていた脂肪分を溶かしたものだ。やはりあの時にはもう相当弱っていたらしく、難なく討伐を終えたドボルベルクの戦利品の一つだ。

そう、ドボルベルクは既に一つの料理へと姿を変えていた。

そのあんかけに絡む卵黄はもちろんガーグアの卵であり、小さく刻まれたガーグアのもも肉もこのあんかけスープの中に沈んでいる。そして食べやすいサイズに切り分けられたドボルトリユフ、特産タケノコも――。

「うんうん、良い香り。いやあ上手く出来たみたいだねっ。さあさあ食べようぜ」

「にや、良い匂いにやあ。あんな武骨なモンスターがこんな香り放つなんて……びつくりにな」

「だな。アイツの肉はあんまり美味しそうじゃなかったが、コブは別だな。ほんとこれあんかけじゃないか」

これはごく普通のおあんかけです、とこの鍋を出されたら特に疑いもせず信じてしまっていた。そう感じるほど、あのコブの中に詰まっていた脂肪分はあんかけに酷似していた。

そんなあんかけスープの中に包まれた山菜や肉たちは、じっくり煮込まれた故にしつとりと、美しい食材としての色を放っている。如何にもユクモ風な出来栄え、といったところか。

「さて、じゃあ食べようぜっ！ オレはもう待ち切れないよ」

「にやあ、ボクもにや。早く食べたいにやあ」

「うん、じゃあいただきます」

それぞれの器に鍋の中身を装よそい、そのねっとりとしたスープで器を彩る。美しく咲いたそのスープは、まるで溪流の美しさを表しているかのよう。

そんな光景にうつとりしながらも、わざわざイズモが人数分用意していたらしいレンゲを用いてそのスープを一口、口の中にそつと落とす。

「んっ……これはうまいっ……！」

まず舌に絡みつくのは、この鍋の主役とも言えるドボルベルクのコブ——そのあんかけだ。

ねっとりとした食感。とろみを豊富に溜め込んだ感触。アツアツのそれに内包された旨みが、そのとろみから染み出してじつくりと舌の上で溶ける。まるで出汁や調味料を厳選した一流飲食店で出されるあんかけのような、深く甘く、そして濃厚な風味だ。

いや、あんかけだけではない。あんかけの中に混ぜ込まれたガーグアの卵が、柔らかく、甘く、温かな味をじつくりと広げてくる。あんかけと混ざり合うように。舌を優しく包むように。

特産タケノコは如何にもタケノコらしい、しっとりとした味とコリコリとした食感を口内で咲かす。ドボルトリュフはそこのキノコとは一味も二味も違う、風変わりな、それでいて奥の深い味を形成し始めた。肉の味にも負けない濃密な風味。しっとり

した食感でありながらも、肉の脂に拮抗するその味。流石は高級食材と言えよう。

だが、この二つの食材は、その味の強さ故に独特のクセを持つ。それが少し舌に残るために好みが分かれる要素でもあるのだ。

しかし、今回はどうだろうか？ タケノコやキノコだけではない。あんかけが、これらを包み込んでいる。つまりあんかけの優しいとろみが、この独特のクセごと包み込み、後味もやんわりと優しい味に仕立てているのだ。

「あゝっ、いいねえ。こういうのほんといいねえ！ 頑張つて狩猟した甲斐あつたなあ」

「にやあ。それに……これでユクモの木が採れるにやね、旦那さん」

「そうだな。ほれ、イルル。あんかけ鳥肉ガーグアも美味いぞ」

「にやつ……あむっ」

目的が達成されると言わんばかりの嬉しそうな顔で見上げてくるイルルに、俺はレンゲで掬ったガーグアの肉片を差し出した。イルルはそれを喜んで頬張つては、また一つ可愛らしい声を上げる。

引き締まったガーグアの、繊維の細いもの肉、淡泊で食べやすいそれはあんかけの濃厚な味によく絡み合っており、これまた面白い味になっている。口の中でゆつくり解ほどけていくこの感触が、実に堪らない。

「……にやー、それにしても二人とも息ピッタリだったにや。旦那さんの料理癖は、イズ

モさんが関係してたりするのによ？」

「おーネコちゃん。それがなあ、オレだけじゃないんだなこれが。実はコイツも青い頃があつてよ——」

「おいやめろ、余計なことするのは大回転斬りだけにしとけ」

「え、つ……よ、余計？ いや、転ばしたけど……余計？ ねえあれ余計？」

「旦那さん、イズモさん大活躍だったから余計じゃないのによ！ 親しき中にも礼儀あり……もつと優しく、にゃー！」

「うっ……わ、悪かったよ」

「あああつ！ 君は本当に良い子だよイルルちゃん！ ご褒美にお兄さんがもつふもふにしてあげるね！」

イルルに一喝されて、俺は大人しく肩を竦めた。どうしようもない気持ちを含み込むように、レンジで掬ったスープを一口飲み込んで気を静めようとする。するのだが——

そんな彼女の一言に感極まったのか。イズモは感激したように表情を咲かせ、イルルを宣言通りもふもふしようとう立ち上がった。そして、両手をわきわきと動かしながら彼女に迫る。

これには黙っていられるだろうか？

「にやつ……やめてっ……!」

答えはもちろん「否」である。こんな奴に俺の相棒を触らせるなど反吐が出る。

ということと迫るイズモの前に立ち塞がり、胸倉を掴んだ。今度は腹に拳など生温い。ブラキディオスだつて驚くような、ヘッドバットだ。

「てめえやつぱ死んでこいっ!」

「ぶっはっ!」

「にやつ、旦那さん!? イ、イズモさーんっ!」

く 本日のレシピく

『ドボルあんかけスープ』

- ・ドボルコブ ……160g
- ・ドボルトリユフ ……4個
- ・特産タケノコ ……5個
- ・ガーグア卵 ……1／2個
- ・ガーグアもも肉 ……200g



## 魚心あれば飯心

「——なあ、イルル。ネコ式突撃隊つてき、凄く素敵ない技じゃないか？」

「……と、突然何にや？」

青い空、白い雲。そして波打つ岸。どこまでも続くような水平線が、青く澄んだ空と混じり合うその景色。

緩やかな波の音が耳を攪り、穏やかな鳥の声が肌を撫でる。爽やかな潮風は妙に心地良く、快晴の空も相まって、釣りをするには絶好な環境であった。

そう、ここは孤島。その海岸である。

「ん、……おっ！ 掛かったぞ！」

「にやつ……何かにや？ 何かにや？」

孤島というのは、この孤島地方の代名詞とも言える狩猟地であり、この地方の駆け出しハンターが最もお世話になる場所でもある。

この孤島に存在するモガの村に住む者ならもちろん、付近に存在するタンジアの港から。そして俺のように、ユクモ村の集会浴場から出向く者にまで——。

「みい、あの色は多分キレアジだにや」

「むっ。……うん、その通りだったな」

そんな孤島の北に広がる海岸には、開けた空間が存在する。海の豊かさを享受できることは言うまでもなく、その海に住まう魚も姿を多く現すために、この場所は世界有数の有名釣りスポットなのである。

そんな場所で今し方俺が釣ったのは、キレアジと称される薄黄色い鱗をもった魚だ。小ぶりでは身は少ないものの、その背びれは非常に固く鋭い。それも何と、砥石の代用にも使えるほどに、である。

「活きがいいにやね」

「早速捌いてみるか……?」

釣り針に喉を喰い込ませながらも、激しく尾びれを振り回すキレアジ。その身に向けて、俺は金色に輝く剥ぎ取りナイフをチラつかせた。

千刃竜の伐刀角を贅沢に使用したこの剥ぎ取りナイフ。形状も包丁を模しているという粋なデザインであり、このような状況では正に打って付けの道具と言えるだろう。

だが、そんな俺の行動をイルルは肉球を向けながら止めた。ぶにぶにとした桜餅が、俺の前で咲き誇る。

「待って、旦那さん。キレアジは固すぎて刺身には向いてないにや」

「えっ、そうなのか……?」

「チコ村の釣り好きアイルーさんがね、キレアジにかぶりついては悲鳴上げてたにや。歯が折れそうなくらい固いつて」

「マジかよ。折角まな板用意したのに」

イルルの指摘通り、キレアジの鱗は非常に固かった。手で触ってみてもそれは実感でき、どころか一步間違えれば俺の手の皮も容易く斬り裂いてしまえそう。

この剥ぎ取りナイフは、大型モンスターのアーマーでも難なく刻むことのできるほどの斬れ味をもっているのだが。

捌いたところで、俺たちが刺身としてこの身を食えることが出来ないのなら、それはまるで意味がない。

「でもでも、キレアジは熱に弱いのにや。焼けばこんがり魚に大変身！ 焼いた方が美味しいにや！」

「……ほう。じゃあ、このよろず焼きセット使ってみるか?」

イルルの助言を考慮して、俺は背後で沈黙するよろず焼きセットに指を向ける。

バルバレに流れてきたこの品は、その需要の低さもあってか格安で売られていた。世間のハンターたちはただ肉が焼ければよいと、平凡な肉焼きセットを好んで使っているようだが、この『よろず焼きセット』は違う。

調査という手間がかかるものの、その手間あって肉焼きセットでは辿り着けない味の高みを創り出すのだ。そしてよろず焼きの名の通り、肉だけではなく魚も焼くことが出来る。

「にゃんつ、じゃあボクが焼くにゃー！」

「おつ、じゃあ任せませ。俺は新たな獲物を狙うとするから」

胸を張って名乗り出るイルルにキレアジを渡し、俺は新たな釣り針を用意する。今度は無難にサシミウオあたりでも狙ってみようか。確か、サシミダンゴもポーチに入れてきたはず。

一方で、よろず焼きセットの火を起こしているのか。少し焦げ臭い香りを潮風に乗せるイルルは、思い出したかのように口を開いた。

「ところで旦那さん、さっきの話は何だったのにや？」

「え？ ……あ、サシミダンゴあった。えっと、何だっけ？」

「何か、ネコ式突撃隊がどうのこうのって……」

「あー……」

彼女のそんな呟きに反応するように、再び顔を出してきたあの話題。先程俺が言おうとしていたあの話題。

ネコ式突撃隊——それはアイルーたちが独自に開発した航空技術であり、重要な攻撃

手段でもある。その本質は、何と飛行するドングリロケットに乗り込んでモンスターに特攻を仕掛けるという荒業。

まあその扱いの難しさ故に、相応の技術をもったアイルーが最低1匹、その計2匹掛かりでないと発動すらままならないのだが。

「ボクはドングリロケットの扱い分かんないし、旦那さんはボクしか雇ってないし。ボク、突撃隊は出来ないにやよ……?」

「いや別にやれって訳じゃなくてさ……。ほら、あれだ。突撃隊って、モンスターに突撃するじゃん?」

「まあ、そういう技だからにやあ。……それで?」

「突撃して、顔に張り付くよな。俺さ、あれが凄く羨ましくてな」

その一言に、彼女の手は止まった。驚愕の色に染まったその瞳は大きく見開かれ、その海のような色に俺の顔が映る。

また一つ、彼女の顔から「一体何を言っているんだこの人は」という声を聞くことが出来たところで、その理由を語ろうじゃないか。

「だってよ、顔にアイルーが張り付くつてことはそのもふもふを直接感じれるじゃん? 凄く素敵なことじゃないか。あの瞬間ばかりはモンスターが羨ましくて堪らないね」

「にや……そ、そういうもんかにや?」

目の前に。顔に直接くっついて。そうしてイルルの毛並みを享受できるあのネコ式突撃隊という技。顔の右半分と左半分に一匹ずつネコが張り付いているという何とも素敵な状況だ。

他のハンターがそれをネコに促しているのを見たことがあるが、初めてそれを見た時はそれはそれは感動したものだ。

一方で、このやりとりに疑問を感じたのだろうか。イルルは首を傾げながらも、そのままふとした口を動かして言葉を投げかけてきた。

「そういうえば旦那さん……どうしてオトモをボクしか連れないのにや？　というか、どうして未だにボクしか雇ってないのにや？　お金の余裕はもうあるにやよね？」

「ん？　どうしてつてそりや、他のオトモ雇ったらお前絶対ヤキモキするだろ？」

「……にや？」

「この前メラルーもふった時でさえ、むっちゃ妬いてたもんな」

そんな俺の率直な答えに、彼女の動きは固まった。

思い返せば、今俺がユクモ地方の旅行をすることになった原因ともなった出来事。そう、ニャン次郎の依頼を請け負ったあの時だ。

メラルーの秘密のポーチを回収して欲しいと、しかしメラルーを傷つけて欲しくはないと、彼はそう俺に頼み込んだ。それに応えた俺が選んだのは、メラルーをもふり倒し

て成敗する方法。ネコからすれば堪ったものではないその方法で、俺は見事に依頼を達成したのだった。

——ところが。そうすることで、不機嫌になった存在がいる。それが彼女、オトモアイルーのイルルである。普段から彼女をもふもふしているからだろうか、俺が別のネコをもふもふしている姿に苛立ちを覚えていたようだった。

「俺が仮に新しい子を雇うじゃん？ そしたらその子ももふもふしなきゃならんからなあ」

「にやつ……お風呂上がる時も？」

「そりやお前だけ拭いてあげる訳にはいかんだろ。全員を乾かしてやんなきゃなあ」

「にやにや……ぐ、グルーミングも……!？」

「そうだなあ。時間をもつと費やさなきゃなあ」

「にやあつ、じゃ、じゃあ……寝る時も……っ!？」

「もちろん、お前もいつもみたいに好きなどころで寝られなくなるぞ」

「だ、旦那さんのお腹の上は——」

「取られるかもな」

「脇の下にすっぽり収まるのも——」

「取られるかもなあ」

「旦那さんの首筋に寄り添って、ぴったりくつつくのも——」

「取られるかもな！」

「そつ、それは……！ にゃあ……それは、ちよつと……いや、かなり嫌にゃ」

「でつすよねえー。イルルならそう言うだろうなあと思つてな。だから俺はお前しか雇つてないんだよ。それにイルルがいてくれるだけで、俺も満足してるし」

「……にゃ？」

聞き直すように声を漏らしたイルル。そんな彼女に向けて、俺は思っていることをそのまま言葉にした。

元々俺と彼女の出会い、ただの氷海でのクエストだった。その頃は、何ともなしに彼女がぶんどりだったからこそ、何か面白い食材を集めてくれそうだと思つて雇つたのだが。

しかし、彼女は俺の予想以上に健気で、真面目なイルルだった。雇い始めの貧乏な俺を氣遣つて、ルームサービスマがいのことを始めたり。ベッドや床に抜け落ちた自分の毛は、頑張つて自分で掃除したり。

そして何より、珍しい植物や美味しい食材を見つけ、手に入れるスキル。それが何よりの、彼女の特技だった。先日のモノブロスハートが、記憶に新しい。

「お前さえいてくれれば、俺は文句無しだから」



「にや、にやあ……ほ、ほんとにや?」

「バツカお前、俺がお前に嘘ついたことがあったか?」

「にや……結構あるにや。でも、これは嘘じゃないにや?」

驚いたようにその大きな瞳をパクリさせながら、イルルは忙しくその細いヒゲを揺らしている。ふさふさとしたその尾はまるで塔のようにピンと伸び、上目遣いで確認するように俺の瞳を覗き込んで。

そんな彼女の顎に軽く手を伸ばし、その柔らかな毛並みを優しく撫でた。両手でその顔を包み、首周りのふさふさとした毛並みを掻き揚げる。

「みゆう……嬉しいにや。旦那さん、いつもこういうのはぐらかすのに……今日は素直にやのね」

「ん、はぐらかしてたっけ? ……まあいいや。とにかく、キレアジを美味しく焼いてくれよ」

「はにやつ、は、はいにや!」

慌てるように、イルルが飛び退いた。

焦げ臭い香りが潮風に乗る中、元気のよいネコの返事が海岸で木霊した。

◆ ◆ ◆

孤島の採取ツアー。それを名目にこのクエスト——という名の狩猟地探索を行って、早くも規定時間の半分を超えた。そのほとんどをこのエリアでの釣りに費やしたのだが、まあまああの収穫があつたものだ。

サシミウオ、キレアジ、オンプウオ、大食いマグロ、アロワナ——これだけあれば、お魚パーティーは出来そうだな。

「どれ……サシミウオやマグロは刺身にして、キレアジやオンプウオはもう焼けるか？」  
「にやつ、もうすぐにな。旦那さんの刺身はどうかにな？」

「このサシミウオで最後かな」

鼻歌を歌いながら、イルルはよろろ焼きセツトの火を強める。一方で俺はサシミウオの鱗を丁寧にとり、頭を落として——。

穏やかな波の音、前回のひと悶着を経て手に入れたまな板を魚の血で濡らした。上質なユクモの木目で彩られた表面が。分厚く濃いその木の一片が。そつと魚の血を染み込ませていき、切り分けられた身はその体を横たえていく。

「ほい、一丁上がり」

「相変わらず上手にやあ。新しいまな板の調子はどんな感じにや？」

「頗る調子がいいよ、いやあ斬りやすい斬りやすい」

「にやあ、良かったにや！ どぼるーくの狩猟も無駄じゃなかったにやん」

イルルの名前間違えはまあともかくとして、流石はユクモの木である。その性能、見た目、どれをとっても申し分ない。

先日のイズモの対応には悩まされたものだが、それを考慮してもあまりある結果をもたらしてくれた。それにあの時食べたドルベルクのおんかけスープも美味しかったし、あの狩りはまあ悪くなかったと今なら思う。

——イズモの対応さえ何とかなっていたら、だが。

「あの太刀野郎がなあ……。アイツといるとどうも調子狂うよ」

「みい……でも、何だかんだ息合ってたにや。やつぱり友達にやね」

「友達、ねえ。まあ気兼ねなく話せるつちやあ話せるけど」

「旦那さんの知り合いつてボクあんまり知らないから、この前はとっても新鮮だったにやあ」

焼き上がった魚を皿に乗せながら、イルルはそう呟いた。ほっこりとした顔でそう言う彼女だが、言われてみれば確かにイルルを他のハンターとの狩りに同行させたのは前回が初かもしれない。

とはいえ元々、他の人間と狩りに行くのも数えるほどしかないのだが。それこそ唐揚

げだか天ぷらだか忘れたがあの子くらいか、最近は。

何だか、俺が同行する人間はどうも変人が多い気がする。

「そういうえば旦那さんはこっちの方の出身って聞いたにや。バルバレより、こっちの方が知り合いが多いのにや？」

「……まあ、そりやあな。そうそう、知り合いが手紙送ってきてな、一応会う約束はしてる。というか、それが今回の旅の目的の一つなんだけど……あー、めんどい」

「折角そう言ってくれてるんだから会ってあげればいいのに……にや」

イルルが盛り付けた皿の空いたスペースに刺身を盛り付けながらそう呟くと、彼女は困った様な声を上げながらも俺を諫めた。

イルルの言う通り、俺はかつてこの地方——とりわけタンジアの港を停留地として活動していたために、知り合いの個数としてはこちらの地方の方が断然多い。ユクモ村は時折訪れただけだったので、幸いなことに今のところイズモにしか遭<sup>あ</sup>っていないが。

「こつちにいた頃はロクな思い出ないからな、出来ればあんまり会いたくないね。イズモに会つちまったのは不幸としか言えないよ」

「じゃあ何でわざわざ来たのにや……ってこれは愚問にやね、旦那さんだもんね」

「美食あるところにシガレットあり、つてな。……さあ、盛り付けたし食べようか」

もちろん、ただそれだけが理由ではない。確かめたいことが、仕入れたい情報がある。

手紙を送ってきたアイツから話を聞くこと、”あのモンスター”の情報を得ること。本来の目的は、それだ。もちろん今の目的は、間違ひなく魚だこれが。

この孤島で採れる魚はとりわけ美味しいことで有名だ。それこそ、氷海のものと同並べるほどに、である。ここまで栄養豊富な環境だからこそ、そうなるのも当然の結果とも言えるが。

さて、そんな海の幸だが、サシミウオとマグロの刺身盛り合わせに、キレアジとオンブウオによるこんがり魚という独特なコラボレーションが、今この海岸に光を差した。深い海の香りを漂わす刺身に、こんがり豊かな匂いを漏らすこんがり魚。何とも食欲を刺激させる。

「美味しそうにや〜。いただきますーすー！」

「うん、いただきます」

嬉しそうに箸を振るうイルルの傍ら、俺は早速彼女が焼き上げてくれたキレアジに手を付けた。一番最初に食い付いたこのキレアジは中々活きが良いようで、味の方もそれ相応によく締まっているのではないだろうか。

口内に含んだその身から溢れる芳こばしい香り。あつさりとした出汁醤油で味付けされていられるらしいその身。こんがり焼けているために表面はパリッとしており、舌の上にあつさりとしたその身を散りばめていく。同時に、その奥に眠っていた身がゆつくりと

顔を出す。

その表面とは裏腹に、身の方は柔らかな食感が特徴的だった。細い筋が束になったかのようなその食感は、さながら舌の上でその束を少しずつ解ほどいていくよう。その一本一本に染み込んだ出汁醤油は、薄味とはいえ深い風味を感じさせた。

いや、薄味だからこそ、だろうか。濃い口とは違う、元々の食材の味を上書きしないこの風味が、キレアジの旨みと上手く共存しているのだ。

「……うん、いいね。イルルも料理上手になったなあ」

「ほんとにや？ 旦那さんのおかげにやあ〜」

「いやいや、これほんとにいい焼き加減だよ。……む、オンプウオも美味しい」

オンプウオは魚の中でも独特な食感がウリである。その見た目もまるでオタマジャクシのようで、一見すると両生類のようにも見えるのだ。その判別は、熟練の料理人でも喰るほど分かり辛いらしい。

肝心なその食感だが、キレアジとは違い弾力性の高い身がもつとも目に——いや、舌に付く。柔らかく、しかし噛み応えがあるその食感。噛めば噛むほどその身は解れ、噛めば噛むほど旨みが染み出してくる。

キレアジの淡泊な味とは対照的な、濃厚でクセのある味。食感も相まって好みを分ける味とも言えるが、俺はこの味嫌いじゃないな。

「今繁殖期だったっけ？　そういえばコイツの卵には毒性を含んでるらしいが……」

「今でもないし、それにこの子は雄だったにや」

「なら問題なしだな。……刺身の方はどうだ？」

「サシミウオ、プリプリしてて美味しいにやあゝ」

そう言つてイルルが摘まむサシミウオ。薄く小さく切り分けたそれは、ネコでも食べやすいサイズであると自負している。

そんな小さな一枚を頬張つては、幸せそうに肉球を頬に当てるイルル。その表情に言葉を当てはめるのなら、『ほつぺたが落ちそう』——といったところか。

サシミウオは、その身に乘つた脂が特徴的だ。濃厚で、甘く、舌の上でそつと溶けるその脂。キレアジとは違う濃い味に、オンプウオとは違うクセのない味。誰にでも好まれ、魚店にも多く流通している。まさに魚の代表格だ。

ちまた巷では、魚好きたちによるサシミウオ談義が長く続いているそうだ。何でもサシミウオは刺身で食うべきだと譲らない連中と、煮るなり焼くなりの良さを広める連中での戦いが長年行われているらしい。俺としては、生でもよし、そしてひと手間加えるのも醍醐味だと思うが。

「……ま、サシミウオは何だかんだ刺身が一番美味しい気がする」

「身自体がかなり美味しいし、とろけるような脂も魅力的だにや」

「最近はトロサシミウオっていうもつと大きなサシミウオが発見されたらしいぞ。脂の乗りも段違いなんだとか」

「にゃ〜、魅力的だにゃあ。食べてみたいにゃん」

そう言つては次々とサシミウオを口に入れていくイルル。入れる度に表情をコロコロ変えて喜ぶものだから、見ていると何だか和んでしまう。

しかし、少し違和感があった。元より魚好きであるイルルはどんどん魚をその小さな体に入れていくのだが——何故かマグロだけは全く手を付けていないのだ。

以前俺が作ったネコまんまでは、マグロ節も喜んで食べていたため別にマグロが嫌いということはないはずなのだが。

「…………イルル。マグロ、食わないのか？」

「…………にゃ、にゃあ」

その疑問をそのまま口にすれば、彼女は箸を振る手を止めた。少し困ったように、迷つたように。動揺を含んだ瞳で俺を見ては、どうしようと言わんばかりにその眼を泳がせる。

そんな彼女の綺麗な瞳をじつと見返し続けたら、彼女は観念したかのように口を言葉のために動かした。

「…………え、えつとね。ボクね…………生のマグロにはちよつと色々あつてね…………」



「何だ？ あたったのか？ アイルーなのに？」

「そ、そうじゃないにや！ ……旦那さんは、ドンドルマグロって知ってるにや？」

ドンドルマグロ。

聞いた事があるかもしれない。確か、ドンドルマの水路に生息するマグロ——だった  
だろうか。

これといった特徴もそれほど聞かないが、何でも山菜ジイさんが欲しい欲しいとぼや  
いていたそう。しかし、それが一体どうしたというのだろうか？

「ドンドルマグロがどうかしたのか？」

「それがね……前のご主人のところに行った時にや——」

イルルが語るには、彼女がまだドンドルマにいた頃にその原因があるらしい。何でも  
空腹のままハウスに戻ったら、家主のハンターが置きっぱなしにしたドンドルマグロが  
部屋の中央に鎮座しており。

ドンドルマグロの価値自体はかなり低く、小遣い程度にもなりやしない。それを知っ  
ていたからこそ、イルルはそのマグロを食べてしまったようだ。

しかしそれがハンターの逆鱗に触れ、しばらくご飯抜きにされたとかで、結果的に生  
のマグロには抵抗を抱くようになってしまったのだとか。

「——だから、生のマグロを食べるのは恐れ多いのにやあ……」

「……心が狭いハンターだなあ。そんなの御愛嬌だつてのに」

「フェールピツケルが何とかつて蹴られたにや」

「えっ」

フェールピツケルといえは非常に有用かつ貴重なアイテムとして有名だ。サイズが小さすぎて採掘には使えないが、どうやら不思議な力を帯びているらしい。

何でも古代技術の結晶だとか、竜人族の秘術の具現だとか、そんな根も葉もない噂が実しやかに囁かれている。俺自身まだ一度も見ることがないそれが、何故マグロの引き合いに出されるかは分からない。分からないけど。

「……よく分からんが、このマグロは全然大丈夫だよ。それに俺がイルルを蹴ったりする訳ないだろ?」

「にや、にやあ。そうだけど……」

「な、安心しろ。それよりこの脂……見てみなよ」

それでも、そんなことで愛ネコを蹴るなんてことは許せない。そんなしょうもない主人のせいで彼女がマグロを苦手としてしまったのなら——俺は彼女の克服の手助けをしたい。

大食いマグロは水中を縦横無尽に泳ぎ回り、目に付いたものをとことん捕食しようとする凶暴な魚だ。しかしその分よく動いたために身が締まり、身に貯めた味を凝縮させ

る。つまりこの赤身にはよく円熟した味が詰まっている訳で。

「ドンドルマグロは食ったことないから分からんが、大食いマグロは赤身のこつてりした脂がいいぞ。口の中でよく残る、力強い味だ」

「にや、にやん。旦那さんがそう言うなら……じゃあ、ボクも食べていいのにやね？」

「ああ、もちろん。どんどんお食べ」

もう一度俺に許可を求めているから、イルルはおずおずとその小さな口を開いた。

鮮やかな赤身と、それにたつぷり乗った脂。晴天に煌めく日の光を反射するそれは美しく、そして食欲を否応なしに促進させてくる。

そんな魅惑的な一枚をそつと箸で掴んだ彼女は、それをゆっくり口の方へと運んで――

――瞬間、ボンツという小気味良い破裂音が鳴り響いた。マグロを口に入れた彼女の、真後ろで。

「みゆあつ!? ふにやああつ!」

「ふがっ――」

その音の正体は、俺もイルルもすっかり忘れていた魚。いや、正確には肺呼吸する超小型の魚竜種。絶命時にその身を弾けさせるという奇妙な生物、バクレツアロワナだ。

原因は不明だが、イルルの背後で沈黙していたそれが突然破裂したのだった。元より

弱っていたのか、忘れられた故の淋しさか。

いや、白兎獣じゃあるまいし、後者はあり得ないか。

「にやつ!!? 何にやつ!!? 何にやつ!!?」

「ちよつ、前見えね……ん、んん?」

それよりも、今注目したいのはイルルの方である。真後ろで起こった突然の爆発。それに心底驚いたらしいイルルはパニックを引き起こし、箸もマグロも放りだしては、そのまま一直線に俺に飛び付いて来た。

——いや。俺に、というのは些か雑な表現だな。正確には俺の顔に、と言った方が良いかもしれない。

つまり、俺の視界は彼女の雪のように白い体毛で埋められ、顔にはその柔らかな毛並みが密着しているのだ。心なしか、何だか良い香りが俺の鼻孔を擦ってきて——。

「みやああんつ、旦那しゃんう……っ!」

「——おお、これが本物のネコ式突撃隊かッ!」

く本日のレシピく

『お魚盛り合わせ』

- ・サシミウオの刺身 …… 2 匹分
- ・大食いマグロの刺身 …… 1 / 3 頭分
- ・こんがり魚(キレアジ) …… 3 匹
- ・こんがり魚(オンプウオ) …… 2 匹

## 覆スープ器に返らず

「旦那さん、今日は珍しくモンスターを食べなかつたにや」

「当たり前だろ。ロアルドロス亜種は流石に食べねえよ」

潮風香る海辺。照り付ける太陽と、青い空に浮かぶ雲が美しいこの景色。

——ここは孤島、その最南端に位置するモガの村だ。孤島の南海に板を重ねるようにして浮かび上がったこの村は、交易船を通してロックラックやタンジアの港と交流する、海路交易が特に発達した村だ。もちろん、資源が豊富であることで有名な孤島に存在するため、資材の枯渇に關しても全く縁のない、のどかな村である。

そんなモガの村の桟橋を相棒のイルルと歩きながら、俺は何ともなしに先程済ませた狩りの内容を思い出した。

「あんなに毒持ってたらなあ。海綿質にまで毒が染み込んじゃってるし、あれを食ったらいくら俺でも腹を壊すよ」

「にや、旦那さんでもとは相当なことになや……」

先程狩ったのは、ロアルドロス亜種。

水獣と称されるロアルドロスの亜種であり、原種は持たない『毒』を大量に保有している。本来原種が水分確保のために利用しているあの海綿質ですら大量の毒液に浸されており、ただの伸し掛かりでもそれを周囲に撒き散らすという厄介な生物だ。如何に俺がチャレンジャーであろうと、流石に何の用意もなしにそれを食べようとはしない。「手段が無いことも無いんだが……どちらにしろ無い物強請りだし。水獣って、別にそこまで美味しくないしな」

「みゆ、実食済みなのかにゃー！」

「原種の方だが、まあ一応」

ロアルドロスは、大型の海竜種の中でも比較的弱い部類だ。水没林や砂原で生息しているものともかく、先日遭遇した大海の王者ラギアクルスを筆頭に、強力な個体が多いのが海竜種である。

その中でも比べれば大人しめのロアルドロスは、経験の浅いハンターでも対峙するところが許可される、狩人にとってまさに登竜門とも言える存在なのだ。陸の登竜門がイヤクツクだとするならば、海の登竜門は間違いなくコイツだろう。

「原種の方は毒を使わないのにゃ？」

「ああ。大量の水を吐くだけだから、そんなに害はないぞ。美味くもないが」

「に、2度言うくらい旦那さんの口には合わなかったにゃね……」

吐き捨てるような口振りに、苦笑いするイルル。そんな彼女の考察の通り、ロアルドロスの味は別段優れているというほどでもないのだ。

味としては全体的に薄味。しかし食感がややボソボソとしており、口当たりがあまりよろしくない。水分を多く含んでいるだけに意外に感じたが、やはり大量の水分保有はあの海綿質に大きく依存しているようで、その他の部位の水分はこれといった特徴もなかった。

そしてその海綿質だが、臭みがあつて食べたものじゃない。まあ、直に海水に浸し続けているのだから、そうなるのも当然だと言われれば当然なのだが——少し納得のいかないものだ。

肝心な味も、まるでマングローブの葉のように塩分が多くて塩辛すぎる。歯触りも、歯に絡まるようで非常に不快だった。

マシンな部分と言えば尻尾だろうか。比較的淡泊で、かつ落ち着いた味であるそれは、尻尾らしい骨まわりの肉の噛み応えが中々良好であった。あれだけ剥ぎ取って肉焼きセツトにくべるのが、一番シンプルかつベストな調理法かもしれない。それか、あの海の王者のように口の中にエビが挟まっていたりしたら、それもまた一興なのだが。

——ラギアクルスとか、ガノトトスとか。海に住む大型のモンスターのお腹を調べる



と、時々キンググロブスタとかが出てきますよ！ 見つけてびっくり、食べて美味しい！ まさに一石二ガアグアですねっ！ ……うう、ガアグアなんて言ったら、お腹が……。シグさん、こんがり肉持ってたらしませんか？

エビというワードに反応するように脳を過ぎった、”彼女”の言葉。こんがり肉をせがみながら、悪戯つぽく微笑んでいた彼女の言葉。

ご丁寧に過ぎってくれたが、お生憎様。先程言った通り、ロアルドロスからエビが獲れることはない。

「……ま、とにかくアイツのことはもう忘れよう。無事討伐完了することが出来た。これでもいいだろう？」

「いや、確かにそうにや。で、どうするにや？ もうユクモ村に戻るのにや？」

「そうだな。交易船に乗せてもらいたいものだが……ん？」

彼女の言葉通り、クエストを完了した今ここに残る必要性もあまりない。そのため、なるべく早い便でユクモ村へと戻ろうとしたのだが。

村の中央部で、望遠鏡片手に空を見ては溜息を吐く交易船の船長の姿が目に入った。長く鋭い太刀を背負った大柄の竜人族の項垂れる姿は、中々に印象的だ。それにしても、もしかすると何かあったのだろうか？

「あの……船長？ どうしたんだ？」

「おお、ハンターさん。どうもこうもないゼヨ。見てくれ、あの空を」

細い目を何度も伸び縮みさせながら、彼は俺に望遠鏡を手渡してくる。そうして指し示した方角。

その遠方には、灰色とも黒色とも言える薄気味悪い色に染まった雲が、レンズ越しに浮かんでいた。

「にや……旦那さん、どうしたのにや？」

「……あっちゃー。こりやあ荒れそうだぞ」

「その通りゼヨ。これじゃあ船は出せそうにないゼヨー」

不思議そうに俺の脚装備を引っ張るイルルのために、俺はしやがんで彼女に望遠鏡を手渡す。それを持つては興味深そうに覗き込むイルルを眺めていると、船長は困ったようにそう呟いた。右手で、その立派な顎髭を擦りながら。

「あ？ マジかよそれ。じゃあ、ここで足止めつてか？」

「あの規模の雲なら、間違いなく嵐に突っ込むことになるゼヨ。長年にワシの勘がそう言ってるゼヨー」

何やら備忘録のようなものを取り出してはそれとにらめっこし、自信有り気にそう頷いた船長。勘より書物に頼り切っているというツツコみは置いといて、船に関しては彼

は間違いなくプロのはずだ。こういった事情にも詳しいだろう。

「嵐が過ぎるまで、この村で大人しくしてるのがいいゼヨ。なあに、ここは確かに小さいが、趣きのある良い村ゼヨ。ドントウオーリー……ゼヨ！」

熱いグッドラックサインでそう頷く彼に、俺は若干気圧されながらも頷き返しておいた。

何かがずれているというか、いまいち頼りにならなさそうな人物であるが、彼がああいうのならこの村から船が出ることもしばらくはらくないだろう。となると、その期間だけこの村に残らねばならなくなる。

「参ったな……どうするか。船は出せないらしいしな……」

「みやあ、嵐の航海は本当に怖いにや。大人しくしてようにや……」

両手を伸ばしては、その二つの肉球でそつと俺の服を掴まんでくるイルル。心なしか、瞳もやや潤み気味だ。必死に俺に懇願するような、そんな印象だろうか。

思えば彼女も、嵐の海にはかなりのトラウマがあったのだ。そんな彼女を再び荒れた海に放り出すなど、あまりにも酷過ぎる。

「……そうだな。折角だし、この村でゆっくりさせてもらおう。おいで、イルル」

「みい、にやあん……」

そつと微笑んでは、彼女の両脇を掴んで優しく持ち上げた。そうして腕に乗せなが

ら、俺は村の港部分に背を向ける。

イルルはイルルで大人しく俺の腕の中で収まっては、安心したかのように喉をゴロゴロと鳴らした。俺の首元に摺り寄せる彼女の毛並みがくすぐつたい。

風向きからして、先程確認した雲はいずれこの村にも流れてくるだろう。ならば、早いうちに宿を確保した方が良い。そう判断した俺は、温かいイルルを抱え直しながら、この村の村長宅に向けてそつと足を踏み出した。



モガの村は、小規模の漁村だ。

タンジアの港はもちろん、ユクモ村にも及ばない。木造の民家や屋台が連なるその様は、間違いなく田舎だろう。そんな何も無いはずの村だが、人情というものは溢れているのだろうか。

村長は、船が出るまでの間彼の家の一室を貸してくれると約束してくれた。

「わはは！ 災難じゃったなハンターさん。まあ、こんな何もない村だがゆつくりしていくとよ。」

「恩に着るぜ、村長。世話になるよ。」

「にや、よろしくお願ひしますにや!」

色の抜けた髪に浅黒い肌。長い時間を生き抜いてきたことがよく分かるその顔を微笑ましては、彼は愉快そうにそう笑った。

キセル片手に煙を吐くその姿は、まさに海の男といった風貌である。歳を重ねても、気力の衰えにはまだまだといった感じだろうか。

「時にハンターさん、アンタこの辺りの人間だな? 何年か前にもこの村に来てたのう。覚えとる覚えとる」

「えつ。ええーつと……人違いじゃないか?」

「いんや、ワシを見くびつてもらつても困る。まだまだもうろく耄碌しとらんわい。あれじゃな、毒怪竜の装備を着た剣斧使いのハンターさんじゃな?」

「……にや、旦那さん。その顔は合つて顔にやね?」

頑張つて思い出す、そんな素振りもせずにさりりとそう言った村長。その言葉は、武器も防具も的確に解を射抜いていた。

自信に溢れたその言葉の通り、どうやら俺のことは鮮明に覚えているらしい。開いた口が塞がらないとでも言うように自然に開いた口をイルルが見ては、悪戯っぽくそう言つてきた。

「忘れんよ。物凄い殺気出しとつたしな。仕留めた火竜の損傷具合もよく覚えとる。そ

うじゃ、左目を潰しておった。あんな惨たらしくモンスターを狩るハンターはそうおらんよなあ」

「……一応、面識はなかったはずなんだけど」

「返り血塗れのハンターなんぞ見たら誰だつて印象に残るわい」

「……あれかにゃ？ 旦那さんつて、昔は荒れてたのにゃ？」

不思議そうに、それでいて興味ありげにそう聞いてくるイルル。そんな彼女に向けて少し困つたような苦笑いを向けては、その毛並みの良い頭をそつと撫でた。

村長が言う俺は、タンジアギルド時代の俺だ。はつきり言つて黒歴史ものなので、なるべく話したくはない。純真無垢な彼女になら尚更である。

だというのに、彼の口は塞がらない。まるで壊れた蛇口のようなうだ。

「じゃがまあ、大分印象は変わつとるな。オトモとも仲が良さそうじゃないか」

「にゃ、旦那さんは素敵な旦那さんなのにゃ！」

赤の他人だというのに、まるで身内事のように嬉しそうに頷く村長。そんな彼に便乗しては、イルルは誇らしげに胸を張つた。

村長の厳つい手がイルルの頭をわしやわしやと撫でるのを見ながら、俺は少し笑みを零す。色々と口を挿<sup>はさ</sup>んできたが、悪い人ではなさそうだ。

「雰囲気も昔より柔らかい。やはりハンターはそうでないとな」

「……そ、そういうもんか?」

惜しげもない微笑みを俺に向けてくる。年長者故の余裕というか、矜持というか、そんな大らかな表情だ。幾重にも浮かんだ皺と焼けた肌が、夕陽を浴びては薄く光る。

いや、光るといえば彼のその瞳だ。その優しい表情の中で、彼の双眼だけが怪しく光っていた。その眼はまるで、ハンターのもそれだ。

「……だが、その瞳の色だけは変わってない。変わったのはあくまでも上辺だけ……かな? その奥で燃え滾るのは、まるで——」

核心を突くようにその言葉を綴り続ける村長。そんな彼の、射抜くような言葉が口から放たれる。

と思いきや、それは思わぬ形で阻まれた。くるるる……という、どこか気の抜けた音によって。

「……うん?」

「にや、ごめんなさい……」

振り返れば、顔を赤らめつつもお腹を押さえるイルルの姿があった。恥ずかしそうに髭を動かしては、尻尾を二、三度左右に振る。

どうやらお腹が空いたらしい彼女は、腹の虫を押さえることが出来なかったようだ。その顔は羞恥に溢れ、恥ずかしさからか青い瞳も若干潤っている。

「……お腹空いたよな。村長、この村でどこか美味しい店つてある？」

「お、おお。そうじゃな。ハンターならば、ギルドカウンターの横の屋台がもつてこいだろう」

「サンキュー、ちよつと行つてくる。ほら行くぞイルル！」

「にや、にやつ」

慌てる彼女の手を引いて、俺は足早に歩き出した。足をもつれさせながらも、イルルは俺に付いてくる。

そんな彼女に微笑みながら、村長に対しては静かに背を向けた。まるで、触れられない事実を蓋をするように。



その店は、カウンターの横に縮こまった、とても小さな屋台だった。

ほぼ一人用とも言えるくらい小さなカウンターテーブルに、一人用の座椅子。その奥で、せつせと何かを拵しらえているイルル。

「どうも、やつてるかい？」

「ニヤ、いらつしやいませニヤ。……お二人様ですかニヤ？」



「にゃー、それでお願ひするにゃ」

そんな彼は、俺たちの姿に気付いては快く迎えてくれた。

蒼と水色の縞模様が特徴的な頭巾に鮮やかな赤がよく映えたズボンと、全体的に派手な格好をしているそのアイルー。その手に持った木箱を柵に置いては、俺をマジマジと見始める。その瞳は、既視感に満ちていた。

「……? 何にゃ?」

「ニヤ、ハンターさんにどこか見覚えがあつて、ニヤア?」

「……人違いだろ。それより注文いいかい?」

座椅子は一つしかない。そこに腰かけて、その俺の膝の上にイルルを座らせては、流すようにそう言った。骨が喉に引つ掛かったような顔をしながらも、その言葉に対応するアイルー。イルルは彼からメニュープレートを受け取つて、興味深そうにそれを覗き込む。

何ということか、彼も俺に見覚えがあるらしい。孤島に赴いた時に立ち寄つた程度だったはずなのだが、現実には非情だった。タンジアの港にさえ行かなければ問題ないと思つていた俺の読みが、甘かつたのだろうか。

「みゆう、ハヤシライス風ドリア……にゃ?」

「おお、丸鳥と海藻の冷麺……美味しそうじゃん」

現実逃避をするようにそのプレートに目を移せば、そこには何とも食欲を誘う名前がいくつも並んでいた。

そうだ、確か彼はシー・タンジニヤで修行を積んだというさすらいのコックさんだ。ハンターズギルド公認の三ツ星レストランの腕前は伊達ではないということか。

「あー、ごめんなさいニヤ。船が止まって流通がその……アレでして。今そのプレートの上二つしか出せないのニヤ」

「……にや？」

「上二つ……？ ギイギハンバーグと、女帝エビフライ……これか？」

目を泳がせつつそう言うコックさん。その言葉が指すメニューを口にしてみると、彼は控えめながらも頷いた。その仕草に、思わず俺は落胆する。冷麺というのが非常に気になったが、食べれないのは残念だ。何だか出鼻を挫かれたような、そんな気分である。思い返せば、俺も交易船が停滞したがためにこの村から出られないのだった。他の船もやってこないからこそ、食材が手元にないのかもしれない。

そんなこんなで今食べられるのはギイギハンバーグと女帝エビのフライ。エビはともかく、ギイギとは。なんてタイムリーな食材なんだ。どころか、皮肉染みているようにも思える。

「じゃ、俺ハンバーグ」

「ボクはエビフライが良いにや」

「単品ですかニヤ？ セットにしますかニヤ？」

注文を質問で返され、慌ててメニューに視線を落とす。

そこには確かに注意書きでセットメニューの詳細が書かれていた。追加料金でライスとサラダ、トマトスープが付くらしい。

「……二人ともセットで」

「ニヤ、かしこまりましたニヤー！」

セットメニューと確認するや否や、彼はテキパキとした手付きで調理に取り掛かり始めた。頭の頭巾を気合を入れ直すように巻き直し、唾付けた肉球で髭をサツと整える。

一方で、俺の膝の上でくつろぐイルルはといえば、何かを企むような微笑みと共に俺に疑問を投げかけてきた。

「それにしても、旦那さんはもしかして有名な人だったのにや？」

「……いや、そんなんじゃないさ。ただ悪目立ちしてたとか、だと思う」

目を合わせずにそう返すと、彼女は耳をピクリと動かし始める。すんすんと鼻を鳴らしては、そつと俺の胸に擦り寄ってきた。「もつと詳しく聞きたいにや」というひとことを添えて。

面倒だったが、彼女の意思を無下にするのも気が引ける。どちらにしろ料理が出てく

るまで時間が掛かるだろうし、少し話してみてもいいかもしれない。もちろん余計な詮索をされないように、改竄に改竄を重ねるが。

「……じゃあ少し昔話をしよう。昔々、タンジアの港にとあるハンターさんがいました。彼はとつても強いハンターで、依頼書に載ったモンスターと対峙すればそれを片っ端から滅多打ちにする凄惨な日々を送っていましたとさ」

「滅多打ち……村長さんが言つてたような感じかによあ？」

「初めは鳥竜、果てには海竜。現れるモンスターを狩り続け、実力だけはギルドからも認められるくらいになつたそうです」

「にゃん、旦那さんは強いにゃ！ 当然にゃ！」

自慢話でもするように、やや尊大な語り口調で自伝を連ねる。それに反応しては、何故かイルルが誇らしげにそう頷いた。まるで自分のことのように、さも嬉しそうに表情を緩ませるイルル。

そんな可愛い相棒に向けて、「ところが」という言葉を落とす。

「そのハンターさんとはある目的のためにハンターをしました。でも目的のためにやりたい放題していたので、ついにはギルドに怒られちゃったのです」

「にゃつ？ 怒られたのにゃ？」

「そうしてハンターさんはタンジアに居られなくなり、船に乗ってバルバレに行つてし

「まったのだとき。めでたしめでたし」

「ま、待つてにや！ 終わるの早すぎだし、全然めでたくないにや！」

端折りに端折った自伝を並べれば、即座にイルルからの怒涛のツツコみが入ってきた。真面目に話せとでも言いたげな彼女はその二つの肉球でさらなる暴露を要求してくる。

そんな面白可笑しいアピールを適当にあしらいながら、ふと、その目的について思いを馳せた。

——まだ生きているだろうか、アレは。

「……お待たせしましたニヤ。ハンバーグセットとエビフライセット、お待ちどうニヤ！」

「お、待つてました」

「にやつ、話の途中にや！ ……にやんだけど、良い匂いにやあ」

思ったよりもお早い到着のディナーたち。狭いカウンターテーブルを彩ろうと、鮮やかな食の花々が顔を出した。赤と茶色を混ぜ合わせたような、綺麗な焼き目を残したハンバーグと、それに覆い被さるように広がった白と透明のコントラスト。その薄い色を

染め上げるように光る、橙色の小さな泉。

片や、薄めた茶色を丁寧塗り固めた長い物体が二本。薄い粉末を散りばめるそれは、ランプの光を魅惑的に反射する。その衣から顔を出す、立派な頭と立派な尻尾。濃厚な赤に染まったそれは、揚げられてもなお女帝と呼ばれた矜持を失っていないように見える。何とも鮮やかなエビフライだ。

「女帝エビフライは言わずもがな、添えられたタルタルソースを使つてくださいニヤ。ギイギハンバーグはユクモ風に、大根おろしとポン酢で仕立てておりますニヤ」

「にやあ、タルタルソースにや。たまごの白身がつぶつぶになつてるにやあ……」  
「ユクモ風、か。ハンバーグとしては珍しいな」

サラダとエビが皿を共有する傍ら、別の小鉢に乗つてやつて来たタルタルソース。それを箸で掬つては、クリーミーさとよく残るたまごの色の混ざり具合に感嘆するイール。

その一方で、俺はハンバーグの身を少し箸で割いて、その肉に染み込む白と橙の正体を理解した。今彼が言ったものだ。白と透明を広げる大根おろし、そして橙色の泉を湧き出させるポン酢である。

「ちよつと小粋に食文化のコラボを試してみた……それがそのハンバーグのコンセプトですのニヤ」

「ふうん……ギイギの肉っていうのもまた趣があるなあ。早速いただこうっと」  
「いただきますにや！」

先程切り込みを入れたハンバーグ。それをそのまま箸でゆっくり分離させ、その上に十分な量の大根おろしを乗せた。

そこから滴る水分が、薄く染まるポン酢がハンバーグの肉の隙間へと染み渡っていくのを確認しながら、ゆっくり箸で摘まみ上げる。するとどうだ、ギイギエキスの濃厚な風味が、その断面から染み出してきたじやないか。十分に中まで加熱したことで生臭みをなくしたそれは、ポン酢の風味も相まって非常に爽やかである。含まれる脂の量に反し、あつさりとした味が予想できるだろう。

なんて、いつまでも見ていてもしょうがない。この美しい景色をいつまでも見ていたい気もするが、肝心なのはやはり味だ。そう意気込んで、俺はその魅力的な物体を思い口に入れた。

瞬時に広がる、ポン酢の風味。酸味と旨味を黄金比率で混ぜ合わせたようなそれは、まるで鼻孔を貫くように、口に入れた瞬間俺の体の中を駆け巡った。

挽肉状にした肉を捏ねて、固め、焼き上げたそれ。断面はほろほろと崩れ、口の中でその塊を緩やかに溶かしていく。昆布の出汁を思わせる、凝縮した旨みが特徴的なギイギエキス。それを贅沢に閉じ込めたその一口は、肉らしい味をポン酢の中に落としてい

く。

柔らかく溶ける部分もあれば、頑固に残る固形部分もある。噛む度にそれが口の中で混ざり合つて、一枚肉ではない混ぜ合わせの料理だからこそ出来るハンバーグらしい食感を歯茎に残していった。

そこに覆い被さる大根おろし。シャリシャリとした歯触りの良い食感、肉の脂をすつと洗い流していく。大根らしい色の薄い味と、そこに染み込んだポン酢の風味。あつさりとしたその爽やかな味は、肉による味の偏りを防ぎ、ギョギョキスのクセの強さを飲み込んでいた。

ご飯に合わせてみてはどうだろうか。思い立ったそれを実行するように、俺は新たにハンバーグを裂き、口に入れる。それが溶け切らない内に急いで茶碗から米を大きくつまみ上げては、ハンバーグの味に染まり行く口へと放り投げた。

「……美味いっ！ 柔らかい米の味が、ポン酢とハンバーグの味でゆっくり染まってくのが分かる。まるで米もハンバーグと一体化したみたいだ。肉の食感に米の柔らかさが混ざり合つて、噛むのも面白いよ」

「にゃ、エビフライも美味しいのにゃ！ 衣はサクサク、中はプリップリ！ 味わいも濃厚で、タルタルソースのこつてりした味によく合うのにゃあ」

「ニャ、そう言ってもらえると嬉しいですニャ。スープ、今つけますんでちよつと待つて



くださいニヤ」

俺たちの感想を聞いては、彼は満足げに頷いた。そうして、厨房の大きな鍋が煮えるのを確認しつつ、器を二つ用意し始める。

そんな様子を見ながら、イルルは幸せそうな溜息をついた。箸越しに持つエビフライを、しゃおつと齧って。

「ふみやあ……。こんな美味しい魚介類を食べれるなんて、孤島地方は素敵だにやあ」

「……タンジニアの港にはな、シー・タンジニヤっていうもつとデカイレストランがあるんだ。その飯も凄いぞ、彼並の腕前のアイルルが何人も務めてるんだからな」

「にや。好きにやのね、やつぱり。……旦那さんは恋しくないのにや？」

そつと首を傾げながら、イルルはそう尋ねてきた。嬉々として語る俺を見ては、何かを感じ取ったかのように。どこか母性を感じさせる優しいげな表情で。

そんな彼女の言葉が指すのは、シー・タンジニヤのことだろうか。それとも、タンジニアギルドのこと、か？

「……まあ、しょうがないな。覆水盆に返らず、起こったことは覆せないものさ」

少し自嘲気味に、そう呟いた。お冷を飲んで一息つきながら、そつと目を伏せる。

俺とてタンジニアギルドに名残がない訳ではない。だがやはり、あそこで燻くすぶっている俺は俺の目的を果たせない。そう感じたのは紛れもない事実なのだ。

もし人生の中で大きな転機が起こるものとするならば、その時がそれだったのだらう。

「ニヤニヤニヤ……フニツ……フニヤアアツ!」

目を伏せ、黒に染まった視界。その向こうから聞こえる、鼻歌。

薄目を開けると、鼻歌を歌いながらよそつたスープを運ぼうとするさすらいのコックさんがあつた。

だが不幸なことに、突飛な声を上げては、彼は脚を躓かせ、大きく前のめりになる。前のめりになった彼はそのまま、両手の器を大きく放り投げて――。

瞬間、開きかけていた視界がトマト色に染まった。

そこに収まっていたスープは、しっかりとつぶり、俺へと目掛けて飛んできたのだ。サラダを掴まんでいた俺の頬を、赤いスープが垂れていく。トマトの熟れた香りが、鼻を通つた。

慌てふためくネコの声。潮風が濡れた肌を撫でるのを感じながら、ただぼうつと、ネコに体を拭かれていた。

それでも言えることがただ一つ。確かにこぼれた水をそっくりそのまま盆に返すことは出来ないかもしれない。だが、スープなら別だ。器に戻らずとも、口には入る。僅かに感じられたそのトマトの濃厚な旨みを味わい、俺は一言口にした。

「覆スープ器に返らず。でも、美味しいな」  
「……旦那さん。全っ然上手くないにや」

く本日のレシピく

『ギイギのユクモ風ハンバーグ』

- ・ギイギミンチ ……300g
- ・レアオニオン ……1個
- ・パン粉 ……50g
- ・山菜組大根 ……1／3本
- ・塩胡椒 ……適量
- ・ポン酢 ……たっぷり
- ・卵 ……1個

## 吐いた蜜は飲めぬ

目の前にあるのは、何にや？ 何だか見覚えがある気がするにや。

黄金色に輝く衣。光を反射する、燃えるような紅色に染まった殻。溢れる油の香り。潮の香りは、鼻を動かすたびに無遠慮にボクの中に入ってくる。

一体何だろう、これは。つい最近感じたような気もするし、結構前だったような気もする。

噛めばしゃおつと音がして、衣が口の中でポロポロとこぼれていつて。中で眠る肉は、綿密な繊維を束ねたような、そんな感触。噛めば噛むほどそれをゆっくりほぐしていくみたいで、歯応え抜群にや。

それどころか、噛む度に旨みが染み出してくる。海で凝縮されたさっぱりとした塩味。それが繊維の一本一本に染み込んでいて、ほぐればほぐれるほどその塩味が口の中に広がっていつて。口の中が一つの磯になっていくような、そんな気分になや。

やっぱり美味しいのにや、エビフライ。女帝エビという高級なエビを、それも栄養分豊富なモガ近海で獲れたらしいそのエビを贅沢に使った逸品にや。ボクの小さな手で

は、その大きなエビフライは収まり切らない。食べようとしても、何回かに分けて噛まないで食べ切れないにや。

にや、尻尾も残さずいただくにや。

尻尾は、衣以上に固く、独特の歯応えがある。衣の食感をサクサクと表現すれば、尻尾の食感はパリパリになるのかにや？ 噛めば、薄い煎餅のように細かくなっていく。若干染みついた衣の風味良い香りも相まって、何とも不思議な味が口内を過ぎる。

いや、味というよりは、やはり食感を楽しむものなんだろう、これは。生半可な力では中々割れないその尻尾。ぐっと力を込めれば、小気味良い音を立てながら割れていく。何というか、噛むのが楽しくなってくるにや。

それにしても、薄い煎餅みたいな食感、かにやあ？ 何だか、聞いたことがある——いや、食べたことのあるような気がするにや。一体何だったかにや？

何て思いながら、エビフライを呑み込んだ。サクサクパリパリのそれが、口の中でゆっくり柔らかくなって。ぷりっぷりの身は、口の中で細かく、細くなって。そうして呑み込むこの感覚は、何とも余韻に浸ってしまうにやあ。

……にや、二本目にや！

さっきのは、エビフライそのものの味を楽しんだ。今度は、別のアタッチメントを付け加えたいと考えてるにや。

そうして用意されたのは、薄黄色が白に混じる魅惑的な半固体。ツンとするマヨネーズの強い香りが特徴的な、タルタルソースにや。

マヨネーズを土台に、レアオニオンやジャンボピクルス、ケツパーにレアパセリといった野菜、そしてゆでたまごをみじん切りにして混ぜ込んだそれ。マヨネーズの香りに隠れて、たくさんの野菜の香りがこっそり顔を出してるにや。中でも、よく茹でた白身がしっかりと残っているゆでたまご。これがボクのお気に入りなや。

そんなソースをたっぷりエビフライに付けて……いただくにやー!

口いっぱい広がる潮の味。そうかと思えば、じつくりじつくりやつてくる乳製品の甘み。酢が入り込んだ、マヨネーズらしいうつつすらとした酸味。でもこれはマヨネーズじゃない、タルタルソースにや。この中には、たくさんの野菜が入ってるのにや。

玉ねぎの爽やかな風味。ピクルスの独特な味わい。酸っぱいような甘いような、不思議な味。そして何ととっても、ゆでたまごの濃厚な味わい。甘みも旨みも全部一緒に混ぜ合わせたような味に、まろやかでとろける様な口どけ。

そんな黄身に対して、白身は細かいながらもそのつるんとした食感をよく残してる。黄身と、野菜と、白身。別々の味が一つのソースの中で混ざり合っていた。全く違う味のはずなのに、逆にそれが味が華やかさをもたらしってるにや。

……にやにやつ、これは革命的なのにや!

甘くて、酸っぱくて、とつても美味しいこのソース。これがサクサクの衣に染み込んで、弾力溢れるエビのお肉に掛かり始めた。塩味に染まっていたそれに、タルタルソースの濃厚な味が重なっていく。何というか、フレッシュな味わいにや。

ぷりぷりとしたその食感に、ほぐれていく繊維の中に、タルタルソースの爽やかな味が合わさって、もう口の中が雑貨屋の品ぞろえのようだにや。海の幸と山の幸、農場の幸が融合していく。素材も味も全く違う品の数々が、喧嘩しないで仲良くしてる。とつても微笑ましくて、食べてるボクも笑顔になつてしまふにやあ。

……にや、まだまだおかわりがあるのにや？

タルタルソースの乗ったエビフライをまた一本呑み込んで、そつと目の前の皿に目を移す。するとそこには、山のような量のエビフライが積み上がっていた。

数え切れないくらいのおエビフライ。薄く焦げみを残した黄金色の衣、そして鮮やかな赤で染まる尻尾。それらで出来たこの大きな山は、僕にとつては魅力的で魅力的でしょうがなかったのにや。だから、もつといっぱい食べようと、その山に向けて手を伸ばして――。

……にや？ 旦那さん？

ふと、その奥から旦那さんが姿を現した。やや覇気のない表情で、ユラユラと危うい足取りを刻みながら、ゆっくりエビフライの山へと近付いてくる。顔には少し影が掛

かつていて、どんな顔をしているのか分からない。

旦那さん？ どうしたのにや？ 旦那さんも食べるにや？

食いしん坊な旦那さんのことだ。きつとこのエビフライを食べに来たんだろう。

こんなにくささんあるんだから、当然ボク一人じゃ食べ切れにや。それに、旦那さんにもこの美味しさを味わってほしいにや。だから、食べて？ 旦那さん——。

……にやつ？ そ、その手に持っているの——何、にや？

ようやくエビフライの山の目の前までやって来た旦那さん。そんな彼の右手には、どうにも怪しい透明の容器が収まっていた。

伸縮性のある透明なそれは、中に黄色と橙色を混ぜ合わせたような液体を溜め込んでいる。ただの水とは違い、ねっとりとした印象のあるそれ。何やらただならぬ存在感を感じるにや。

すると旦那さんは、突然その容器を振り被った。エビフライの山の頂上よりも高く、その上まで伸び切った彼の腕。そうしてエビフライの山へと照準を定める、透明な容器。

——何だか、嫌な予感がするにや。むしろ嫌な予感しかしないにや。まさか、まさか旦那さん。それを、それを——。

瞬間、その容器からその中に入っているだろう液体の香りが漂ってきた。



匂いで分かる、その甘さ。芳醇で、濃厚で、他に見ない強さをもつことがよく分かるその香り。甘くて、そしてどこか淡い酸味を含んでいるだろうそれ。そのねっとりとした粘液状の動きを相まって、ボクはいつか見た光景を脳内で再生したにや。

調合用のビンを巧みに操る旦那さん。中に細かく刻んだ薬草とアオキノコを入れ、そうしてあの黄色の液体を注いでいた旦那さん。ビンの蓋を閉じて、調合を始めた旦那さん。

つまり。つまりつまりつまり。旦那さんが握り締めて、中身を勢いよく押し出している液体の正体は。

重力に従うまま、エビフライへと降り注いでいくその液体の正体は。

全国のハンターさんが最も農場で栽培してる、もしくは商人に入荷を依頼しているあの――。

「――うわあああああん！ やめるにやーっ!!」

「へふっ!!?」

振り被ったボクの肉球は、何かに直撃した。

突然体に力が入ったかのように、違和感に染まったこの動き。それでも、ボクの肉球は確かに何かを弾いた。きつと、きつと名状し難い悪行を犯す旦那さんを成敗したんだろう。

「……っ！ イルル、お前！ 眠ってたと思つたらいきなりネコパンチかましてくんないよ！」

「……にゃ？」

え、眠ってた？ ボク、眠ってたの？

そんな旦那さんの悲痛な叫びに応えるように、ボクは起き上がった。は当たりを見渡した。あのエビフライの山はどこにもなく、あるのは勇壮と立ち昇る幾つもの山々。ボクたちを囲うように靡く、美しい森林。最近見慣れてきた景色、溪流だったにゃ。

「……あれは夢だったのかにゃ？」

「あ？ 夢だあ？」

重い頭を振り回しつつ、地に付いたお尻を持ち上げる。そうして立ち上がった視線の先には、何とも立派なハチの巣があったにゃ。

茶色をいくつも貼り合わせたようなそれは、ボクの体よりも大きく見える。小さなハチが何匹も飛び交って、この巣の規模の大きさを主張しているみたい。

「何だ、俺がハチミツ獲っている間美味しい夢でもみてたのか？ おはよう」

「にや、お、おはようにや……ごめんなさい……」

何てことだにや。旦那さんが採取に励んでいる間、ボクはうたた寝をかましてしまった。どころか、悠長に夢なんてみてたのかにや。こんなんじや、オトモ失格だにや——。

「気にすんな。それよりこれを見てくれよ、ロイヤルハニー！ 上物だぞ！」

「にや、ハチミツ……う？」

そんなボクを全く咎めず、どころかとつても嬉しそうに手に持ったビンを見せてくる旦那さん。その表情はまるで少年のようで、何だか微笑ましい。見てるとこつちまで顔が自然に綻ほころんでしまう。

彼が見せてくれたビンの中には、黄金色にそつと橙色を落とすような、鮮やかで濃い液体で満たされていた。そこから漂う香りは甘く、それでいて深い。そこらのハチミツよりも質が良いということは一目瞭然だった。

「ロイヤルハニーって、高級なハチミツだったかにや？」

「そうだよ。回復薬グレードに使うようなちやちなもんじやないんだぞ」

——思い出した。ボクたちは今日、ハチミツを獲りに溪流に出掛けてたんだつた。それもただのハチミツじゃない、ハチミツの王様であるロイヤルハニーを求めて。

元はといえば、旦那さんがロイヤルバターを福引で当てたのが事の発端だったんだつた。雑貨屋の福引で、八等という微妙な当て方をして、そうしてロイヤルバターを景品

としてもらつて。じゃあ、それを使った料理をしようということになつて。

バターにハチミツときたら、もうアレしかないや。

「よし、これだけ取れば充分だろ。そろそろ帰ろうか」

「にや、そうにや……にや？」

満足そうにビンをポーチにしまつては、僕に目線を合わせるようにしやがませていた脚を引き延ばす旦那さん。そんな彼の背後で、ユラリと立ち上がる一つの影。

大きく発達した、厳つい腕。青い体毛に覆われた大柄な体軀。唸るように震える喉と、涎を滴らせる獐猛な牙。

「グルルル……」

「んっ？」

そんな影は、まるでハグでもするかのようにその両腕を広げた。棘のような甲殻に覆われた腕で、旦那さんを抱き締めようと精一杯広げて。

そうして、一思いに旦那さんを抱き締める。というより、そのあまりある威力でハグをラリアットへと変貌させたにや。

「グオウツ！」

「は——ぐっはツ!？」

勢いよく吹っ飛んだ旦那さん。明らかに過剰なその勢いは、彼を地面へと転がしてい

く。

そんな様子を見ながら満足そうな唸り声を上げた影は、その敵つい手で足元に転がっていたビンを拾い上げた。

「……つてえな！ 何だ!？」

「にや、にやにや!?! く、熊にや……?」

腕装備で力強く受け身をとっては、吹き飛ぶ衝撃を押し殺した旦那さん。そうして素早く顔を上げて、現れたモンスターを見定める。

その姿は、何というか、熊としか言いようがない。青い熊さんだにや。

「……なんだ、アオアシラかよ。ハチミツの匂いを嗅ぎつけたな、コイツめ」

「にや、ハチミツ好きなのかにや? 見た目に違わず、にや」

そんなボクらの言葉に「はい、そうです」とでも答えるかのように、アオアシラと呼ばれたそのモンスターは拾い上げたビンを割り、そこに入っていたハチミツを取り出し始める。豪快にそれを舐めとっては、嬉しそうな声を上げた。

「にや、ハチミツ盗られちゃったにや!」

「……あれは俺のおやつ用のただのハチミツだ。幸いロイヤルハニーは無事だよ」

得意気に懐からビンをチラ見せしては、悪戯っぽく笑う旦那さん。

わざわざおやつ用のハチミツを別に獲っていたなんて、流星は食いしん坊さんなの

にや。食べ物に関してには抜かりがなさすぎなのにな。

「アオアシラの肉は……いいや。コイツは放っておこう」

「にや、放っておいていいのにな……？」

「別段危険なモンスターでもないしな。放っておいてもそこまで害はないだろ、多分」

抜刀していた剣を収めつつ、彼はポーチから別のハチミツを取り出した。

先程見せてくれたロイヤルハニーより、やや色の薄いそれ。特別高級でもない、普通のハチミツで満たされたその小瓶。

それを力強く握っては、旦那さんはちよつと悪巧みするような笑みを浮かべる。

「それっ、おかわりだ！」

「グオ？ ……グオッ！」

それをアオアシラに向けて投げ飛ばした旦那さんと、飛んできたビンに気付いては嬉しそうにそれをキャッチするアオアシラ。まるで餌付けするかのようで、心なしか闘技場の管理人さんの餌やりシーンを彷彿とさせる。何というか、狩場らしくない微笑ましい光景だにや。

おかわりのハチミツを食べてはご満悦な熊さんに背を向けて、旦那さんは歩き出した。どうやら、ハチミツを餌として使うつもりみたい。

「さ、帰るか。作るぞ、ホットケーキを」

「にや、やつぱりにや！ 甘いものにやあー！」

ハチミツのような、綺麗な夕陽に彩られた森を抜ける旦那さん。歩幅の大きい彼に、ボクは慌ててついていく。

背後でハチミツを食べるアオアシラは、何だか気の抜けた声を上げていたにや。まるでごちそうさまとも言ってるみたいだったにや。



「んじや、イルルはメレンゲ作ってくれ」

「ふにや？ めれん……げ？」

「あれだ、卵の白いのをこう混ぜ返して、泡立てた奴だ。ほれ、泡だて器」

ゲストハウスの一角、そのキッチン。

そこで数々の食材を並べては、旦那さんはボクに卵白の入ったボウルと泡だて器を手渡した。回転式銃槍などで使われるらしい機構を取り入れた、加工屋特注のこの泡だて器。まさか、そんなものをわざわざ用意してくるなんて。

「旦那さんはどうするのにや？」

「分担作業だな。俺はこつちを作るよ」

そう言つて彼が見せてきたのは別のボウル。彼は彼で手動の泡だて器を手にしていて、ボウルの中身は卵黄と、まるでボクとは対極のような在り方だった。

「俺が土台作つて、イルルはメレンゲを作る。焼く前に混ぜ合わせるから、しつかりな」  
「にや、りよ、了解だにや」

彼が砂糖を加えて卵黄を掻き始める傍ら、ボクは加工屋式泡だて器のスイッチを入れる。

すると泡だて器の先の金属部分が音を立てて回り始め、透明な卵白は激しく掻き乱された。激しい音を立てながら白い泡を無尽蔵に作り始める泡だて器。思わずびっくりしちゃつたにや。

「にやあ！ わわつわわつ！」

「おいおい、大丈夫か？」

「にや、にや！ 問題ないにや！」

ベルナミルクにベルナヨーグルト、そしてちよびつと溶かしたロイヤルバターを加えながらボクを心配する旦那さん。ボクの慌て様は想定外だったみたいだにや。

でも、問題ない。少し驚いたけど、ただ騒がしいだけで暴れたりなんかはしないみたいだにや。これくらい、ボクでも簡単だにや。

「ある程度泡立ってきたら、砂糖を加えな。そのカップに入つてる奴」



「にや、これくらいかにや?」

「お、いいじゃん。そんな感じそんな感じ」

薄力粉にベーキングパウダーを加える旦那さんは、ねっとりとした泡の塊が入ったボウルを見ては満足そうに頷いた。

なるほど、これくらいになれば砂糖を加えるのかにや。何だかクリーム状になつてきて、あの半透明な液体とは似ても似つかなくなってきた気がする。

「じゃあそれをもっと混ぜてな。数分混ぜたらチコンスターチも入れて、さらに混ぜてくれ」

「にや、たくさん混ぜるのにやね……」

「でもそつちは加工屋式だから、そんなに手疲れてないだろう?」

にや、そつか。

旦那さん、ボクのことを考慮してこの加工屋式泡だて器をボクに使わせてくれたのにかにや。

見れば、彼は手動の泡だて器で懸命に黄色の生地を混ぜ返している。あんなにたくさん腕を回していたら、きつと疲れるだろうに。生地も生地で少し重そうで、それが余計に腕に負担を掛けているみたい。

——相変わらず優しいのにや、旦那さん。ボクも彼の優しさに、しっかり応えないと。

「にや、頑張るにや！ チコンスターチにやー！」

チコンスターチというのは、トウモロコシを処理して出来たでんぷん食材だ。チコ村原産チココーンで出来たこれは、まるで片栗粉のような白い粉末状となっている。

そんなチコンスターチを四つまみ、そつとメレンゲの上に落としていく。ネコの手だから四つまみの量が人間のそれと少し違うかもしれないけど、気にしたら負けなの  
にや。たぶん。

「混ぜ混ぜ、混ぜ混ぜにや」

「……うん、そろそろ良さそうだな」

「にや、何かクリームみたい。これを、そつちに入れるのにや？」

「そうだな。三回に分けて入れるから、そのつもりで」

旦那さんの合図の下、とろとろのメレンゲを彼が手掛けた薄黄色の生地の中へ入れていく。

三回に分けられたその白は、黄色い世界にゆっくり身を投じていき、しつとりと、静かにその色を合わせ始めた。まるで離れ離れになった恋人が再会するかのように、離れ離れになった卵白と卵黄が手を取り合っていく。

「うんうん、良い感じ。残りも入れてくれ」

「はいにやー！」

全てのメレンゲが、旦那さんのボウルの中に落ちていった。入ってきたそれを旦那さんは混ぜ合わせ、生地がとうとう完成する。ここまで来れば、あとは焼くだけかにかや？「よし、じゃあ焼くか。ざっと十五分くらいだが……いけね、濡れタオル用意しなきゃ」「濡れタオル？」

「必要な工程さ。とりあえず、イルルはフライパンを加熱してくれ」

いそいそと棚を漁り始める旦那さんに応えつつ、ボクは釜戸の火を付けた。薪がパチパチと燃え上がり、温い熱風が頬を撫でる。モノが燃える特有の匂いが、ツンとボクの鼻を刺激した。

一方で、水の滴る音を奏でていた旦那さんだったが、水瓶から離れてボクの方へ寄ってきたにや。そうして、生地が入ったボウルをそつと覗き込むと――。

「この焼く前のタネってさ、こう……何か美味しそうじゃないか？ 甘そうだし」「気持ちは分かるけどつまみ食いはやめてにや。ほら、指突つ込まない」



何とか旦那さんのつまみ食いを阻止しつつ、ホットケーキを焼き上げることに成功した。出来立てはややほやの香りがボクの鼻をくすぐるにや。甘くて、温かくて、柔らかい

香り。嗅いでいると何だか心が穏やかになっていく。

もちろん香りだけじゃないや。焼き目も鮮やかで、薄茶色と黄色のコントラストが美しい。見ている人の心を踊らすような、そんな魅力的な色合いにや。

「にや〜、美味しそうだにや〜」

「たまんねえなこりや。んじや、早速皿に分けて食おう」

「にやあ!」

へらでフライパンにくつつくホットケーキをつつき始める旦那さん。その隙間を裂くようにへらを入れては、そつとホットケーキを持ち上げた。

ずつしりとした重みを感じさせるその見た目に、重さをもともせず形を保ち続けるその厚さ。手を取り合った生地たちは、決してその手を離さない。そう言っているだけにや。

「イルル、このホットケーキを半分に分けてくれるか?」

「任せてにや!」

棚に収納された包丁を取り出して、さつと水に浸す。刀身についた水滴が眩しくて、それを包丁を軽く振って落としつつ、今度はその刃先をホットケーキへと向けた。

薄く鋭いその刃が喰い込む、ホットケーキの重厚な焼き目。その感触は柔らかで、滑らかで、思ったよりも軽かった。重厚な見た目とは裏腹に、どうやらとても柔らかいみ

たい。

「お、上手いじゃん。ピッタリ半分だ」

「えへへ……。にや？ 旦那さん、それは？」

「本日の功労者、ロイヤルバター君とロイヤルハニーさんだ」

そう言つて旦那さんが机に並べた白いパックと透明なビン。パックには薄黄色の固形物が眠り、ビンには橙色のハチミツが息をひそ響めている。ホットケーキの無二の友たちとのご対面にや。ホットケーキの香りの中に別の色が入り込んで、何だか不思議な匂いになつてきたにや。

「たつぷりハチミツをかけて、控えめサイズのバターを乗せて……つと」

「にやあ、色合いが素晴らしいにや。黄色、橙、ホットケーキ色にやー」

「何だホットケーキ色つて。ま、何はともあれロイヤルホットケーキ完成だな」

ホットケーキの大地を満たす、ハチミツ色の湖。その上に浮かぶ、バター色の船。

見事な光景だにや。ホットケーキに沿うように流れるハチミツの滝も相まって、とても綺麗。早くそのバターを溶かして、ホットケーキを頬張りたいと、身体が疼いてしまふにや。

「早く食べたそうだな。食べようか」

「にや、いただきますすにやあ」

丁寧に肉球を合わせて、旦那さんが手渡してくれたナイフとフォークを受け取って。そうして、それを肉厚のホットケーキへと埋めていく。ナイフにほとんど抵抗せず、潔く切り分けられていくその様は、このホットケーキが如何に柔らかいかがよく分かる。先程包丁で切った時以上に、このしっとり感ともっちり感が伝わってくるにや。

そんなこんなで、食べやすいサイズに切り分けたホットケーキ。トロトロのハチミツと、それに混ざるように乗ったバターの切れ端が乗ったこの一口は、きつと甘党のボクを満足させてくれる——そう確信出来るにや。

「にや……あむ」

それをそっと口に入れては、目を閉じて咀嚼。口いっぱい広がるハチミツの甘い香りを感じながら、柔らかいケーキを噛み続けた。

軽く歯を当てても、ゆっくり裂けていく生地。ぐつと力を入れれば、それは簡単に細かくなる。噛む度にしっとりとした食感が顎に伝わって、ボクと旦那さんで丁寧に作った生地の旨味と甘味が広がってきて。比較的淡泊で味の薄いそれだけど、その控えめな味はとつても食べやすい。

そんなもっちりとしたケーキにかかったロイヤルハニー。芳醇な香りを鼻の奥にまで打ち出して、濃厚な甘みを口の中に塗りたくるそれは、この淡泊なホットケーキにとつても合っている。噛む度に生地に溶け込んで、柔らかな甘みの中に品の良い酸味と爽や

かな風味をそつと加えてくれるのにや。

「にやん、美味しいにやあ……」

「良い感じの甘さだな。ちよつと強いが、逆にこれくらいパンチが効いてる方が良い」

甘さだけじゃない。溶けたバターの淡い味。しょっぱいような、甘いような、そんな不思議な旨みが良いアクセントになっている。

ふわふわな噛み応えの生地、潤いを与えてくれるこのアタツチメントたちは、やはりホットケーキと切つても切れない存在だ。この組み合わせを考えた人には敬意を表さずにはいられない、にや。

「にや、これ最高にや。この前のエビフライ並みに最高にや。ボクの好きな食べ物ベストテンにランクインにや」

「へえ？ この前のエビフライ、そんなに気に入ったんだ」

「にや、そうにや。あれも美味しかったのにや」

ホットケーキとは全くベクトルの違う料理だけど、あちらもボクの舌を討伐するくらいの勢いで美味しかったのにや。今日の夢で見えてしまうくらい、ボクのお気に入りなのにやあ。

思い返しては笑みを溢す<sup>こぼ</sup>ボクを、旦那さんは意外そうに見ていた。そうして、咀嚼していたホットケーキをぐくんと呑み込んで、そつとその口を開いた。

「イルル、お前の後ろにゴキブリいる」

「にや、ふにや!? みやあ!？」

瞬時に振り向いたその視線の先には、黒光りする物体が確かに存在していた。

今の流れで言うことがそれかによ!？」

旦那さんへの呆れとゴキブリへの驚きで、ボクの頭は一杯になる。何とか言葉をまとめ、盛大に文句を言っつてやろうと思えば、旦那さんは既にゴキブリを捕獲していた。

「ゴキブリの羽つてエビの尻尾と同じ成分らしいぞ、そういえば」

「……にや?」

「どっかの国では食べるというし、コイツも……」

「や、やめっ! やめてにやあ!」

素早いネコパンチで旦那さんの手からゴキブリを叩き落とし、それを宙でキャッチしては窓から投げ飛ばした。村の裏の森林へ、儂いゴキブリは吸い込まれていく。

大きく肩で息をするボクに、旦那さんは残念そうな顔で溜息をついた。そうして、また無神経な言葉を並べ始める。

「でもお前、アルセルタスの羽は食ったじゃないか。そう変わらなかないか?」

「そつ、それとこれとは話が別にや!」

吐いた唾は呑めぬ。



見過ごし難い言葉をとめどなく垂れ流す旦那さんに、ボクは溜息をつくしかない。美味しい美味しいホットケーキの時間が台無しだにや。

——例えそれが蜜のように甘い話だとしても、吐いた蜜だって飲めないのにや。

く本日 of レシピく

『ロイヤルホットケーキ』

・ ベルナミルク	……	200 c c
・ 砂糖	……	80 g
・ 溶かしロイヤルバター	……	40 g
・ ベルナヨーグルト	……	80 g
・ ユクモ卵	……	4 個
・ 薄力粉	……	300 g
・ ベーキングパウダー	……	20 g
・ チコンスターチ	……	4 つまみ
・ ロイヤルハニー	……	お好みに
・ ロイヤルバター	……	少量

## 熊の手も借りたい

バルバレではあまり見られない建築様式。ユクモ風の代名詞とも言える襖に障子、そして畳。やや煤すすけた紅の塗料で塗りたくられたこの内装は、外の紅葉も相まって非常に風情豊かだ。

日が沈んだ今、この集会浴場へと続く廊下から月明かりでも差し込んでいれば、その美しさにさらなる拍車が掛かっていただろうが――。

「……雨、やまないな」

溪流を覆う空は薄暗く。霊峰を包む雲は低く唸り。

屋外へと開けた廊下に映るのは、見渡す限りの曇天であった。重い豪雨がこの村に降り注ぎ、荒れる風はそつと山を撫でていく。

この部屋はゲストハウス。ハンター専用の言わば集合住宅のようなもので、この村に常駐するハンターがこぞって利用する施設である。それこそ俺のような、一時的に滞在するハンターたちに最も好まれており、今利用しているのももちろん俺だけではない。

ついでに、イズモのように普段からこの村に住んでいる人間は一軒家を持っているこ

とが多い。そのため、幸運なことに彼はここにはいないようだ。

「……つたく、何でわざわざこんな時間に……」

そんな狭い部屋の中で、俺は静かに身支度をしていた。壁に立て掛けられた番傘を手に持ち、財布やポーチを背負ってはこの部屋をあとにしようと思ふに手を掛ける。その扉を開ける前に、もう一度部屋に目を転じた。

背後に鎮座するベッドには、自らの尾を枕に丸くなったアイルーの姿が一匹。俺のオトモアイルー、イルルがすやすやと可愛らしい寝息を立てていた。

「——ちよつと、行つてくるよ」

そんな彼女を起こさぬように、雨音に溶け込むような声でそう言つては——そつとその扉を閉める。

木の軋む音と廊下を踏む足音、そしてそれを洗い流すような雨音だけがこのゲストハウスを奏でていた。



まるで滝のような雨が続き、紅い瓦の上を滑るように流れていく。豪雨に見舞われたこのユクモ村はその身を激しく濡らし、それが数々の露店に閉店を余儀なくさせてい

た。そんな寂れた通りを傘差すままに歩き、目的地を一直線に目指す。

俺が目指すのは、この通りの奥にある小さな店。こんな雨の中だというのに健気にも営業し続ける飯処だ。

雨の匂いに乗せるように漂う、その店より出でる香り。醤油ベースの魅惑的な香りから、味噌の奥深い匂い。その他豚骨のようなものから、一体何か見当も付かない不思議な香りまで。

「……お、あつたあつた。ここだな……」

そんな香りに誘われるまま、辿るまま。雨に濡れた道に靴を濡らすこと数分。この狭いユクモ村の隅で、縮こまるように身を屈める一軒の店が、今俺の目の前に聳え立った。

おそらく個人経営なのだろうその小ぶりな店は、何とも香しい匂いと薄く光る紅い提灯を存分に輝かせている。

『熊手アシラーメン』——それがこの店の名前だった。

「いらつしやいませえ！ お好きな席へどうぞ！」

「どうもー。……えつと——」

「——シグ。こつちです、こつち」

店内も至つて普通の、個人経営らしい庶民的な内装が特徴的だ。威勢の良い壮年の男性と御淑やかな女性が厨房に立つ、おそらく夫婦であろうこの二人が営む小さな店。

そんな狭い店の真ん中に並ぶカウンター席。そこに座る一人のハンターが、俺に向けて手招きしていた。

「……全く、こんな時間指定しやがつて。しかも雨じゃんかよ畜生」

「雨については悪かつたつて思つてますけど……まあ、君なら来てくれると思つてましたから」

そう言つては薄く笑うこの目の前の男。フロギイXシリーズであろう、丁寧に拵こしらえられたガンナー装備で身を包んだこの男は、空いているのか閉じていくのか分からないくらい細かい眼で笑みを表現した。そつと、その薄茶色の髪を揺らしながら。

彼の名はトレッド。先日俺に手紙を送つてきた人物、そして先日共に狩りを行なつた人物、その人である。

「わざわざ俺のためにタンジアからここまで来たのか？ ぐ苦勞なこつた」

「いえ、仕事の関係ですよ。君に会うのはあくまでもついでです。タイミングが良かった

たもので」

からかうようにそう口にしてみては、彼は眉を顰<sup>ひそ</sup>めながら心外とでも言わんばかりに反論した。

昔からまるで変わってない理知的な態度でそう言つては、軽くお冷を口に含むトレッド。その口振りからして、どうやら未だにキナ臭い仕事を続けているようだ。

「……言つとくけど、今は協力はしないからな。やるならイズモでも連れてつてくれ」  
「いえ、情報収集が先です。」狩獵 にはまだ早い——」

影のある笑みでそう漏らしては、彼はカウンターに立て掛けられた本店のメニュー表を俺に手渡してきた。まるでこの話はこれで終わりともいうように。

そうして俺の手に渡ってきたメニュー表だが、そこには魅力的な品が幾つも描かれていた。この店はその名の通り、『ラーメン』と呼ばれる独特の料理を扱っている。

濃厚なスープをたっぷり包むどんぶりに、そのスープを泳ぐ麺。そしてその水面に浮かぶ様々なトッピングが最も特徴的な、物珍しい麺料理だ。

「僕はもう決めたから、君も何か頼むといい」

「んー、そうだなあ。どれも美味そう……そそられるな」

ガーグアの鶏がらスープを贅沢に使った一品。ファンゴの肉を十分に熟成させた特製チャーシュー麺。特産タケノコで出来たメンマを乗せる追加トッピング。

そんな、目移りしてしまうような品が並ぶ中で、俺は少し気になる名前を見つけた。それはこの店の名前を冠している品……そう、『熊手アシラーメン』だ。

「……なあ、店主さん。このアシラーメンってのは」

「おう、それはその溪流の青熊獣の手を贅沢に使った、この店目白押しだぜ！」

店主曰く、このラーメンが当店で最もオススメの品なのだとか。店の名前にも使われるほどのだから、そうなるのも妥当とも言えるが。

それにしても、アオアシラーの手を使った料理とは珍しい。あの厳つい手を食べるなど出来るものなのか。

「……じゃあ、俺はそれで」

「へい、アシラー一丁！ 隣のアんちゃんは？」

「僕はチャーシュー麺で。あ、メンマ乗せでお願いします」

見た目に似合わないガツツリとしたトレッドの注文に、店主は笑顔で頷いては奥さんらしき女性と早速調理に取り掛かった。複数並ぶ大きな鍋を掻き回したり、背後で佇むボックスから食材を出したりと、何とも忙しい。

そんな調理風景をぼんやり眺めていると、トレッドが一呼吸置いて口を開く。新たな話題を並べようとするように。

「そういえば、聞きましたよ？ 君が乗り合わせた客船がモンスターの襲撃に遭って、君

がそれを撃退したって」

「……ああ、あれな。別にそんな大した働きはしてないよ。……てか、それつてもしやタンジアにまで伝わってんの？」

「ええ、しつかり」

恐る恐る彼にそう尋ねてみれば、彼はにっこりとした笑顔でそう頷いた。そのあつきりとした肯定に、俺は思わず頭を抱えてしまう。

タンジアに俺の戦闘履歴が伝わった。つまり俺がこの地方に來ていることが、タンジアギルドにまで伝わってしまったということだ。

別に、だからといって何か問題が生じるわけでもないが、この論点は俺の内面にある。つまるところ、気まずいのだ。

「ギルドマスター……何か言ってた？」

「もう怒ってないからこつち戻ってこいつ……とか。あと、あの子も会いたがってたよ」

「あー……めんどくさいめんどくさい。いいいいいよ、俺は会いたくないから」

元々、あの頭の固い連中に属しては意味がないと感じてタンジアギルドを離れたのだ。今更戻る意味なんて全くない。会いたいと言われても——今会ったところで絶対に気まずいだけだろうし、俺は御免蒙りしょうむたいいな。



一方で、そんな俺の答えを聞いたトレッドは、呆れたように小さく鼻を鳴らした。絶妙に動いたその眉が、何だか挑発しているように見える。少し腹立たしい。

「まあ、君ならそう言うと思つてましたけど」

「……わざわざそんなことを伝えに、俺に会いに来たのか？」

「違いますよ。僕が君に伝えたいのは、君が海上で交戦したあのモンスターたちのことです」

妙に腑に落ちない言い方をしつつ、トレッドはその懐から一枚の報告書を取り出した。恐らくギルドから拝借してきたのだろうそれは、雨でその身を少しばかり湿らせていたものの、その内容ははっきりと保っている。

そんな薄汚れた書類を、彼は神妙な顔つきで俺に手渡してきた。俺の手に渡ったそれに描き残されていたのは、長つたらしい文章と、見覚えのある竜が描かれたスケッチ。

「……ん？ ラギアクルスとセルレギオス？ こいつらが——つて、これ……」

「ええ。つい先日、タンジアギルド近海の砂浜で発見されました」

そう、このスケッチはつい先日俺が交戦したであろうモンスターたちだったのだ。それも、あの時の姿のままではない。一体何があつたのか、浜に打ち揚げられた死体となつている。

刀角も翼爪も砕けたセルレギオスに、甲殻や尾が損傷したラギアクルス。何とも痛ま

しいその姿を砂浜に横たえる彼らだったが、両者とも俺が違和感を感じたあの特徴をもっていた。

「……打撲痕？ セルレギオスにも……つか、何でラギアまで死んでるんだよ」

「実は、あの海域に潜んでいたのは彼らだけじゃなかった。……つてことですよ」

お冷をグツと飲み干して、トレッドはそう静かに呟いた。彼が言いたいのは、あの海上にはまだ他のモンスターもいた、ということだろうか。

そう推察する俺に向けて、彼はもう一つ口を開いた。あの時、他に違和感はなかったか、と。やたら神妙な顔つきでそう尋ねてくるその雰囲気から、この事態をギルドが相当重く捉えていることが分かる。

「違和感……違和感……。あ、そういえば妙な光が見えたな」

「光……ですか？」

「ああ。燃えるように赤かったり、穏やかな青味を帯びてたり。遠すぎて何の光が分からなかったけど」

あの時の曖昧な記憶を掘り起こしながらそう答えると、トレッドはその答えを何度も反芻しては納得したかのように頷いた。昔から変わっていない、顎に曲げた人差し指を当てる癖のままに。

「……やはり、ギルドの見解は間違つてなかったようですね」

「一体どういう事なんだ？ 話が見えないんだが」

一人で勝手に納得されては俺が困る。一体どういう意図でこの話題を振り、どういう結論が得られたのかきっちり教えてもらいたいものだ。

そんな俺の思いを汲んでくれたかのように、トレッドはその薄い唇を引いた。垣間見える奥歯のその奥から、予想外の事実が顔を出してくる。

「……大海龍の出現ですよ。恐らく君が見たのは、ナバルデウスの発光……」

「……は？ あれって随分前にモガの村のハンターが討ったんじゃ」

「生き延びていたか、もしくは別個体か。いずれにせよ、ギルドの目を調査に回したのは正解だったようですね。やはり正体は古龍でしたか」

大海龍、ナバルデウス。その名の通り、海に住む非常に巨大な古龍だ。その大きさはラギアクルスなど比較にならず、その危険性もまた段違いである。

かつて孤島の近海に出現し、モガの村に大きな被害をもたらしたという報告があったと聞く。俺も書類上の情報しかもっていないが、その個体はモガの村専属ハンターが討ち、無事平穏を取り戻したのだとか。

「ギルドは……それなりに対策をとってるみたいだな」

「ええ。G級ハンターの派遣、観測号の周辺近海監視を強化。そして住民に向けての注意喚起……など」

今行われているのだろうその対策を、指の本数に準なぞらえて声に出すトレッド。そんな彼が属するタンジアギルドは、数人のG級ハンターを保有している大手ギルドであるため、このような事態にも迅速に対応できているようだ。

そんなG級ハンターの一人である彼なのだが——何やら、「これが主題ではない」と言わんばかりに眉間に皺をよせ、その細い瞳をさらに細めて俺を見つめ直した。

「……何だよ?」

「監視が集中した……ところまでは良かったんですけど、ね。それによって思わぬ隙が出来ちゃったんですよ」

「……? 他が手薄になった、とか?」

その口振りから予想できることを、何となく口にしてみれば、帰ってきたのは「御名答」という言葉。その芝居掛かった仕草に呆れながらも、彼の次の言葉を待った。その暇を埋めるようにお冷を口に含んで、溢れる潤いをそつと飲み込んで。

だが、彼が発した次の言葉はそう易々と飲み込めるものではなかった。

「そう、手薄になって……それで、あのモンスターを見失ってしまったんですよ。——君の探し求めてた、アイツがね」

「……それって、つまり……」

「君のような前例を出さないために、ギルドは躍起になって監視してたんですけどねえ。」

最後に火山で観測されてから、以降行方を眩ませてます」

空になったコップが掌からすり抜けて、小気味良い音を反響させた。ガラス質と木材が奏でる奇妙な音。それが、思考に溺れる俺の耳を横切っていく。

トレッドの話が本当ならば、あのモンスター——俺の故郷を喰い尽したアイツが今再び野放しにされたということだ。ギルドの監視を逃れ、今どこにいるかさえ全く分からない状態。そして、ギルドが制限をかけようもないという状況。

「一応言っておきますが、奴と遭遇したら即刻撤退が原則。命令無視の交戦なんて処罰対象レベルですからね? ……まあ、その制度を作った原因さんにはこんな忠告、余計な世話でしょうけど」

「——参考にしとくよ」

「……だといいんですけど」

お冷を注ぎ足しながらそう笑って答えたものの、トレッドは訝しむような顔で不満げな相槌を打った。その口振りから、まるで俺を信用していないことが分かる。

原因さんという言葉の通り、彼がそう感じるのも些か仕方がないのかもしれないが、この店の一角に何とも重い沈黙が流れ込ませるのは少し厄介だ。

そんな微妙な空気を吹き飛ばすように、店の主は野太い声でカウンターにそれを置いた。独特の装飾がなされたどんぶりに、湧き上がる湯気。そのどんぶりを満たす豊満な

味と、その香り。

やつときた。そう、ラーメンだ。

「へいお待ち！ アシラーメン一丁に、ファンゴ麺一丁ね！」

「おつ、きたきた。きましたよ……つと」

「ですね。この話はもう終わりにして、食べましようか」

俺の目の前に現れたそれは、豚骨ベースらしきスープに身を浸した黄金色の麺。それを覆うように広がった大量のもやしと刻まれたまだらネギ、そしてとろりとした肉汁を漏らす大盛りの肉。

これがアオアシラーの手、なのだろうか？

「へえ、それがアシラーメン……。僕も初めて見ましたよ」

「そういうお前のは如何にもチャーシュー麺って感じだな。……ん？ 俺のメンマないな」

「この店はデフォルトがもやし、注文でメンマに変更なんですよ。言えば良かったですか？」

「そうなのか。いや、もやしで全然大丈夫、問題ない」

生憎こないだつい此間特産タケノコは食べたばかりだし、俺としてはもやしの方が有り難い。そんなことより、早速いただこうじゃないか。

まずは香り。レンゲで掬ったスープより溢れるそれを、鼻孔を広げて精一杯味わう。よく効いた豚骨の深みに、薄い出汁の香り。豚特有の飽和脂肪酸で満たされたその香りは、独特の匂いと一種の臭みを内包していた。

だが、この臭みも豚骨ならではの香り。別段悪いことでもなく、むしろこれがなければ豚骨とは言えないだろう。

香りを十分に鼻で頬張って、今度はそのスープをそつと口の中に入れた。アツアツのそれは舌の上をゆっくり這い、一直線に喉へと流れていく。緩やかな河の流れのようなそれは、その流れに沿うようにじつくりと、念入りに舌へ味を塗り込んでいった。

こつてり濃厚、クセのあるこの味わい。豚の風味に、うつすら浮いたニンニクが舌の上で混ざり合う。

「……ああ、美味しいなあ。スープが良い感じ」

「匂いを感じ、スープを楽しみ、次は麺ですか？」

「おうよ。細麺が何とも美しいな」

レンゲを左手に移し、右手で箸を握り。そうして繰り出した箸の先に絡み取られたのは、白濁した濃厚なスープをよく滴らせた黄金色に光る細い麺。光を反射するその様は眩しく、何とも神々しい。

その魅力的な一本一本を、ゆっくり口付近に近付ける。これから舞い降りる美味が待ち切

れないのか、染み出る唾液も何だか味が付いているようだ。

「……いただきますっ！」

そう意気込んで、アツアツのそれを口一杯に頬張った。細い癖に妙に腰があるその何とも言えない食感を楽しみながら、歯でそれを細かく刻んでいく。

すると染み出るスープの旨み。何ということか、スープは麺に絡みついていては無く、その一本一本の奥深くにまで染み込んでいるようだ。麺事態の素朴の味が濃厚なスープに絡まることで、味の構造化により磨きがかかっている。紛れたニンニクが麵に乗って、喉奥でその風味を弾けさせるのもまた面白い。

「のどごしがまたね、いいねえこういうの。もやしもシャキシャキしてて、スープによく合うよ」

「シグ、熊の手の方はどうです？」

肉厚なチャーシューをかじるトレッドが、少し興味深そうに聞いてきた。そんな彼の視線の先にある肉。とろりとした肉汁を、豚骨スープに絡ませる件の肉——そう、アオアシラの手だ。

脂身を豊富に含んだその身は食べやすいサイズに刻まれているようで、かなり大きな肉の塊だったことが分かる。まあ、アオアシラの体格を考えればそれは当然なのだろうが。



「今食つてみるよ。おお、思ったより柔らかい感じ……」

「当店自慢のアシラ手だよ、是非ご賞味あれつてね！」

そう声を張り上げては満足げに頷く店の親父さんに会釈して、俺はその肉をゆつくり口に入れた。

第一印象は、つい先日食べたあんかけのそれに近い。肉を覆うなめらかな汁がどこかあんかけのようだが、その肉自体は物珍しい食感であった。ぶるりとしており、熱に溶けていくかのようだ。

「何かゼラチンっぽいな……。つか、豚足みたいな味だ。……親父、まさかこれ豚足だったり？」

「似てるのは否定しないが、それは正真正銘のアシラ肉だぜ。甲殻剥がして、毛をピンセットで抜いて……そりゃあもう手間が掛かるのさ」

「ほう、確かに。何だか、女性に人気そうな気がしますね。コラーゲンとか多そうですね」  
「おつ、分かつてんなア茶髪の兄ちゃん！」

訝しむようにそう漏らすと、店の親父は心外だと言わんばかりにそう反論した。その横から箸を伸ばしたトレッドが肉を摘まんでは感嘆し、そんな彼の言葉に親父さんは嬉しそうに頬を緩ませる。何ていうか、気さくな店主だ。

さつきまで漂っていた微妙な空気は、今はもうない。彼の手掛けたラーメンがそれを

流してしまつたかのようだ。もしくは、アシラのとろける食感の中に溶け込んだのだろうか？ 何にせよ、このような美味の前にはその他の有象無象など霞んでしまう。

——そんなことより、もっとこの味を楽しみたい。そう思った俺は、再び箸を繰り始めた。



あの魅惑的な一杯をスープの一滴まで平らげ、勘定を済ませた頃。ゲストハウスを出て、悠に一時間は過ぎたユクモ村。

降り続く雨は一向に止まず、どころか雷まで呼んでいたようで、何とも鈍重な太鼓の音色が空を覆っていた。

「……いい時間になってきたな。そろそろ帰るとするよ」

「ええ、話が出来て良かったです。何て言うか、シグは変わりましたね。イズモや”あの子”にちよつと似てきてませんか？」

「はっ？ ……何だそれ。ちよつと心外だな」

番傘を開く俺に向けて放たれたトレッドの言葉。妙に引つ掛かるその言葉。

思わず歪んでしまつた表情を見ては、何が可笑しいのだろうか、彼はクスリと小さな

笑いを溢した。俺としては全く面白くないのだが。

「だって、以前の君はモンスターを殺すことしか考えてなかったじゃないですか。それが今や美食家みたいに……。絶対あの二人の影響でしょうよ」

「むっ……いや、”アイツ”はともかくイズモと同列には見られたくないな、撤回しろよ！」

笑いをこらえるようにそう漏らすトレッド。その不本意な言葉に抗おうと声を荒げた瞬間、空に光が走った。

まるで閃光玉のように強烈なそれは、直後低く重い轟音を響かせる。空を覆う雷雲がただ唸っただけなのだが、その音は大気を震わす咆哮の如く凄まじい。その思いもよらぬ迫力に、少し肝を冷やしたのはここだけの話だ。

一方のトレッドは、その雷光を見て思い出したかのような素振りですら新たな話題を俺に投げかけてきた。それも、まるで何かを企んでいるかのような表情で。

「そういうえば、嵐龍って知ってます？ 君がタンジアを去った後でこのユクモ地方に現れた古龍なんですが」

「……？ いや、知らないな。どんな奴だったんだ？」

「何て言うか、空飛ぶワンタンみたいな奴でして」

「な……マジかよ!? 滅茶苦茶そそられる響きじゃないか……! 茹でたらいけるのか

「？」

ワントンのようなモンスター。

一体どのような味がするのか、茹でたら食べれるものなのか。そう考えるだけで俺の口内にじんわりと涎が染み出始めた。ラーメンを食べたばかりだというのに。

だが、そんな高揚も彼の薄い笑いに妨げられる。思った通りだと言わんばかりに笑うその様子は、俺を苛立たせるには十分だった。

「ふふ、イズモも同じこと言っていましたよ。茹でたら食べるか、とか。ほらやつぱり似てるー」

「……ッ!?!」

人を小馬鹿にするように眉毛を動かす彼に、決定的なその一言。してやられた、と思つた頃にはもう遅い。

言いくるめてやつたと鼻を鳴らす彼に反論も出来ず、俺の声なき声はゆつくり曇天に溶け込んでいった。まるで、口の中で溶ける熊の手のように。

く本日のレシピく

『熊手アシラーメン』

・ 麵	……	80 g
・ アオアシラの手	……	150 g
・ もやし	……	230 g
・ まだらネギ	……	適量
・ ユクモニンニク	……	1・5個
・ 特製豚骨スープ	……	500 ml程度

☆お好みで塩胡椒なども。

## 伏せる鮫鰈にタレ

「ふにゃああ……いい湯だにゃあ」

「お、気に入ったか？」

秋香る景色、落ちる紅葉。

バルバレでもドンドルマでも見られない景色が、ボクの視界を彩っていく。どこか静かで、どこか和やかで。流れゆく時間に、何だか体も心も蕩とろけてしまいそう。思わず声が漏れてしまうくらい気持ちが良い。

「アイルーって、意外と温泉好きなんだよな。結構嫌いそうなのに」  
「んー、それはネコによると思うにゃ」

ボクの横には、そんな率直な感想を溢す旦那さんがいる。小ぶりのタオルは丁寧に畳んでは、それをその白い髪に乗せて——と思ったら、ボクの頭に乗せてきたにゃ。タオルから染み出るお湯で、頭の毛がゆつくり温められていくのが分かる。何だか変な感じ。

そんな旦那さんは、ボクの言葉を聞いては「そんなもんか」と興味無さ気な返事を飛

ばした。

「……でも、こんなに良い湯なら大体の子は好きかもしれないやね」

「かもな、ユクモの湯は名泉だ。それこそこの前の鍋風呂なんかとは大違いだな」

そう遠い目で語る旦那さん。彼の言う通り、以前ボクたちはバルバレで巨大な鍋を用いた露天風呂を楽しんだの。

とはいっても、ただ水を温めただけのお風呂だからそんなにいいものでもなく、砂漠が近いから砂が入り込んできてて散々だったにや。あれなら、大体のアイルーは拒否するだろうなあ。

「にや……」

ボクの横に座る旦那さん。あの時と同じ、湯浴み姿の旦那さん。上半身には何も付けず、直接湯に触れている。俗に言う、裸ってやつにや。

あの時も思ったけれど、旦那さんの体は古傷だらけなの。随分古い傷みただけど、何だか棘の山が喰い込んだような、痛々しい傷が胸にも背中にも伸びているのにや。

そう。まるで、巨大な顎に噛み千切られたような――。

「旦那さん……」

「ん、どうした？」

そつとその傷痕に触れてみるけれど、旦那さんは特に気にするような素振りもない。

ボクと知り合う前からハンターをやっていたそうだから、傷があるのも不思議じゃないんだけど。

そんなことを考えながら、その傷痕を肉球で擦り続ける。すると旦那さんは、少し擦ったような声を漏らした。

「ちよ、やめろつて。くすぐりたいよ」

「あ……ごめんによさい、つい」

その声でハツとなつて、急いで手を引つ込めたけれど、今度は旦那さんがお返しと言つてはボクの顎を撫でてきた。こしよこしよと、何だか変な感じ。今は全身がお湯に濡れているし、余計に変な感触がするにや。

「……何かさ、濡れて毛が張り付いてるからか知らんけど、イルルの体がガリガリに見えるな」

「え、そうかにや?」

そう言つてはボクの体をそおつと撫でる旦那さん。

そんな彼が言う通り、お湯に浸かつてるせいで体が濡れて、確かに全身の毛がべつたり張り付いている。そのせいか、ボリユームも若干失われているかもしれない。

「もつと食わなきやダメだぞ」

「た、食べてるにや。いつもお腹一杯にや」



ボクのお腹を突つつきながら旦那さんはそう言うけど、彼との生活は本当に毎日満足いくまで食べさせてもらってる。前のご主人のところではご飯抜きとかあったから、なおのことそう思うのによ。

「お前結構小食だからなあ。もつと……そう、チャナガブルくらい大きく食わなきやな」  
「にや? ……ちやな?」

「チャナガブル。大口開けた食いしん坊なモンスターさ」

そう言つては、旦那さんは突然立ち上がった。ざぶざぶとお湯を掻き分けながら歩き出すあたり、別の場所に行こうとしてるのかな。

思えばさつきまでお腹辺りまでしか浸かれない浅い場所にいたから、そう思うのも納得だにや。

旦那さんが動くなら、もちろんボクもついていくにや。そう意気込んで、彼のいるところまで踏み込んで——。

「……にやあつ!」

突然地面がなくなつた。お湯の底の石を蹴り進んでいたはずなのに、唐突に床が消えてしまったのだ。力を込めたボクの脚はお湯の中を空回り、ボクの体を狂わせる。

掴めない水。蹴る場のない脚。沈む体。

もしかして、ここで深くなつてるの?

「おっと、大丈夫か？」

「ふにゆ……旦那しゃん……」

危うく湯船に全身を落とすところだったボクを、旦那さんは優しく掬い上げてくれた。

彼の大きくて逞しい腕が、軽々とボクを抱き上げる。お湯で一杯になったはずの視界に、古傷だらけのその胸が迫っていた。

「……深くなってるんだよな。すまん、言えばよかった」

「みい、旦那さんが抱っこしてくれるなら大丈夫にや」

旦那さんがボクに触れる手は優しく、でもちよつときこちなくて。大切にされてるって感じがするの。そのぎこちなさに、ボクは思わず安心してしまう。旦那さんの大きな手に触れてもらえるの、大好きなのにや。

旦那さんは旦那さんで、少し変な顔をしたものの、落ち着いたように腰を降ろしてボクを抱え直した。湯からはみ出た旦那さんの肩にもたれながら、ボクはこの温もりを楽しむ。温かくて、幸せにや。

「……そうそう、そのチャナガブルって奴な。こんな感じに深い水の底にいるんだよ」

「にや？　水棲モンスターなのにや？」

「ああ、一応海竜種なんだとき。見た感じただの魚だけど」

海竜種といえば、このユクモ村へ続く海路で現れたモンスターも、その一つだった気がする。

あんな嵐で荒れた海の中でも、自在に泳げるのが海竜種。そのちやななんとかってモンスターも、凄いやつなかもしれないや。

「そいつな、滅茶苦茶美味いんだよ。可食部多いし味も凄く良いし、もう最高なんだ。……あつ、涎が。食べたくなってきたな」

「だ、旦那さんらしい評価にやあ。……でも、水の中に籠りっぱなしなら手の出しようがなくないかんや?」

「ところがどっこい、実は良い手があるんだなーこれが。……何だと思う?」

素朴な疑問をそのまま口にしてみれば、旦那さんらしい無茶ぶりが唐突に返ってきたにや。そもそもそのモンスターが何かすら分からないボクには、どうすればいいかなんて分かんないのに。

でも、彼が言うなら本当に何か手段があるんだろう。水に籠りっぱなしの魚のようなモンスター。案外、アプローチはあまり変わってなかったりするのかなにや?

「にやあ、餌で釣るとか?」

「御名答、流石だな。そう、目には目を、歯には歯を。そして、餌には餌を……だ」

◆ ◆ ◆  
旦那さんが言っていた言葉。それは、まさに言葉の通りだった。

ここは水没林。高い湿度と豊満な水に満たされたこの密林は、淡い雨に満たされている。旦那さんが言うには、相も変わらず今日も雨らしい。

そんな水没林の岸、薄く濁った水の底。そこへ向けて、旦那さんはとあるものを放り投げた。丁寧に、釣り針の先に括って。

「ククク……そこにいるのは分かってんぜえ魚ちゃんー！」

「……千里眼の葉、がぶ飲みしてたもんにゃあ」  
意気揚々と釣竿を握る旦那さん。そんな彼が先程投げたのは、餌には餌をという言葉が指していたのは、何と釣りカエルだったのにゃ。

たった一匹の、小さな小さな生き物。ハンターが武器に活用できるほどの強靱さをもっているわけでもなく、とりわけ美味しいわけでもないそれ。それでも、餌にするならこれが最適解だって、旦那さんは笑顔で語っていた。

「……ほんとに釣れるのにな？」

「シツ、静かに……」

掠<sup>かす</sup>れるような旦那さんの声が、ボクの口を塞ぐ。何かの気配に気付いたかのようなそ

の雰囲気、思わずボクが息を呑んだその瞬間。

そう、丁度その瞬間、水没林の薄濁った水が大きくうねった。まるで巨大な何かが動いたような、そんな不自然な動きで。

「にやつ? にや、何……?」

「……きた。きたきたきたきた……!」

動揺するボクと、まるで獣のように口角を吊り上げる旦那さん。これから一体何が起こるのか、薄々と感じつつあったボクだけ。旦那さんの視線の先の光景が、その嫌な予感を確信へと変えた。

黒と紫が混じったような、ブヨブヨの皮膚。その皮膚には奇妙な模様が連なっていて、少し気味が悪い。そして、一番に目を引くもの——まるで提灯のような、淡い光を放つ丸い球。それが、その皮膚の上をゆったり漂っていたのにや。

「な、何あれ? 提灯……にや?」

「よっしゃあ! かかったア!」

そんなボクの戸惑いを掻き消すように、旦那さんが大きく吠える。それと同時に旦那さんの持つ釣竿は勢いよくしなり、弛んでいた竿の糸が千切れんばかりに伸びた。その余りある勢いに、糸の先の存在がどれだけ大きいかを知らせてくれる。今一瞬見えただけでも、大柄なモンスターが食い付いたのは間違いないにや。

それは、かなりの負荷が掛かるはずなのだけれど。

「うらア！ 大人しくしろオツ！」

鬼気迫る勢いで、旦那さんは両脚を地面に喰い込ませた。糸の先のモンスターに負けまいと、腕を引く。

両脚、腰、肩、腕。

旦那さんの体の節々が悲鳴を上げる。だけど、旦那さんはその体を休ませることはなかった。どころか、とうとうその両腕を高く振り上げた。

「……とつたー！」

「にやつ!? ……にやにやにやつ!?」

そう言うが早いのか、旦那さんは嬉々とした表情で釣竿を放り投げる。それと同時に、先程まで水底で糸を引っ張っていたはずの気配が消え、ボクたちの上に突然影が差した。

一体何かと見上げれば、ボクの視界に映ったのは——魚のような姿をした何かが宙を舞う姿だったのによ。

「にやつ……………、これは!?」

「チャナガブル、コイツのことだよ！」

薄く輝く提灯。紫交じりの分厚い皮。

とても海竜種とは思えない豊富な体形に、そこから伸びた小さな手足。旦那さんが言っていたチャナなんとかとは、ボクの想像とはかなりかけ離れた姿をしていた。あの嵐の海で出会ったモンスターはもつとスタイリッシュだったけど、海竜種は海竜種でもここまで掛け離れてるんだにやあ。

「何ボサボサしてんだ、仕留めるぞ！」

「にやつ……にやにやつ！」

勢いよく地面に打ち付けられたその海竜は、まるで魚のようにビツタンビツタン体を跳ねさせる。

鰓呼吸しているのか、肺呼吸しているのか。それすら全く分からないその歪な皮膚に、ボクは抜き放ったレウスネコブレイドを打ち付けた。旦那さんも同じく、新片手剣『アイズアイ』を引き抜く。どちらも火竜の息吹を塗り固めたような一品にや。見るからに火に弱そうなこのモンスターには、ピツタシにや。

斬撃が皮膚を裂き、溢れ出る息吹にその肉は焼け、モンスターは苦しそうな声を上げる。突然の急襲に混乱しているようだけど、ただされるがままではないようだ。慌てた様子で、その巨体をひっくり返した。

「ハッ！ 馬鹿が！」

空を掻いていたその四肢を地面に縫い付けたと思いきや、縫い付けるどころかその脚

は地面に潜り込んでいく。いや、四肢だけじゃない。その鈍重そうな体まで。

呻くモンスター。身じろぎする巨体。その体を包み込む、幾重にも重なったネット。もしかして、これは。

「旦那さん、いつの間に落とし穴なんて仕掛けてたのにや!？」

「竿を仕掛ける直前さ、張つといて正解だったな」

そう言つては、旦那さんは穴に仕込んでいた大タル爆弾を露わにし、一斉に火をつけた。燃える切つ先がタルの膜を突き破り、中の火薬を叩き起こしたのにや。

それを見るや否や、ボクは思わず目と耳を塞いだ。もちろんそれは、爆破による閃光と爆音から身を守るため。

「にや……い」

次に見えたのは、勢いよく飛び上る旦那さんの姿だった。爆音も爆風も物ともせず、まるで翼のように剣を舞わせ、風を斬るように肉を裂いていたのにや。

爆風で焼け爛れたその皮膚から迸るほとぼしのは、真つ赤に染まった鮮血。その苦痛のあまりか、大きな口からは悲鳴が飛び交っていた。

「よっしや、このまま——」

その手応えに、思わず余裕を感じてしまったんだろう。旦那さんは嬉々とした顔でモンスターと向き直し、勢いよく斬りかかった。



だけど、それは失策だったのにや。

「……にや、旦那さん！ 危ないにや！」

相当気が立っているのか、怒りに我を忘れていいのか。チャナガブルは、奇妙な変身を遂げて暴れ出す。

平たかったはずの背中から、鋭い棘が何十本も顔を出して。その針山のような体は、風船のように膨らんで。このチャナなんとかは、荒い鼻息を漏らしながら無理矢理ネットを引き千切り始めた。

「なっ——！」

流石にそれは予想外だったんだろう。その異様な動きに、旦那さんが絶句したその瞬間に。

突然、ボクたちの視界が白一色に塗り潰される。先程の爆破の閃光よりも強烈な、瞼を突き刺すような光。まるで、まるで旦那さんが愛用する閃光玉のような——。

「うわああああ！ 目があ、目がああああ！」

「何にや!? 何も見えないにや！」

眼が見えない。目を開けられない。ただ、ネットを引き千切る音と、巨体が這いずる音が聞こえてくる。鋭い針をしならすような、不気味な音も。

「……うがつ!？」

「にゅっ!? 旦那さん!」

這いずる音が、横転する音に変わった。そう思うが早いか、旦那さんの悲鳴と何かの衝突音がボクの鼓膜に飛び込んでくる。

一体何が起こってるの? 少し毛が逆立ちながらも、状況を探るために必死で耳を動かしたら、少し離れたところから、どぼんという音が。そう、謎の着水音が響いたの  
にや。

「がぼっ!? なっ、なっ……!」

水面を掻き乱す音。跳ねる雨音。もがく声。苦しそうな、旦那さんの声。

うつすら光を取り戻し始めた目。霞む視界に、薄暗い水没林が顔を出してくる。その  
掠れる世界を必死に動かして、旦那さんの声がする方へ振り向いたら。

「……旦那さん!」

「うぐっ……! い、息が——!」

水面を掻き回していたのは、もがいていたのは。紛れもない、旦那さん自身。必死に  
両手で水を掻いて、必死に体を浮かせてる。でもその顔は凄く苦しそう。

——もしかして旦那さん、泳げないのにや?

「……にやああ!」

ハッと振り向いた先には、大口開けたあのモンスターが。ボクを食べようとするかの

ようにその口を開け、鬼の形相で迫ってきていた。

あまりの恐怖にボクは半狂乱になりながら、腰のポーチに潜ませていたこやし玉を投げつける。それも、怖い怖いその大きな口に。

「うわああん！ どっか行けにやああ！」

流石にそれは効いたのかにや？ 魚のようなアイツは苦しそうに仰け反って、ゆっくり方向を変えた。ボクたちと距離をとるように、別の沼を求めて這いずり去っていく。こやし玉の術が思いの他の効果を上げていたみたいだにや。

そんなことよりも、旦那さん。旦那さんを助けなきや。

「にやつ、旦那さん！ 今行くにや！」

「ま、待てっ……がぶツ、イルル、お前……！」

ぬかるんだ地面を蹴って、ボクの体は宙を舞う。弧を描くように飛び、そのまま水へと流れ落ちて。

そんな一瞬の中で、旦那さんが何か言っているのが聞こえた。でも、その声も、耳を掻き回すような水の音に飲まれていく。

水中は、地上とはまた違う世界だった。奇妙な形をした魚が多種多様。少し濁った水は少々視界が悪いものの、何も見えないという訳でもない。見たことのない海藻や淡い地上の光、そして、もしかく旦那さんもしっかり見えてるにや。

「旦那さん、ボクに掴まつてにや！」

「うっ……けふ、すまん……」

両手両足、肉球を搔き回して水を搔く。一生懸命、旦那さんのところに少しでも早く辿り着けるように。

不意に、旦那さんの力ない手が触れた。冷え切った弱々しい手。何時もの旦那さんらしくない、覇気のない体。

——温泉の時は、旦那さんがボクを支えてくれたにや。だから、今度はボクが旦那さんを支えなきや。

「にやああ！ お、重いにや……！ で、でも頑張るにや！」

「イルル……」

ボクの体よりも大きい、旦那さんの体。アイルーが人間一人抱えるなんて、無茶だったのかもしれない。でも、旦那さんを捨ていくことなんてできないのだ。

ファイトだにや、ボク。ここが正念場。背水の陣なのにや。

水を背に、どころかむしろ水の中というツツコみは野暮だにや。



何でもこなしてしまおう旦那さん。出来ないことなんて何も無いんじゃないかって、そう感じるくらい旦那さんは何でもできる。今までボクは、ずっとそう感じてきたにや。

だから、何とか岸が上がった旦那さんが、恥ずかしそうに「……泳げないんだ」って言った時。ボクは不思議にも、何だか親近感を抱いてしまった。

何でもできると思っていた旦那さんにもできないことがあるんだって。旦那さんも超人じゃないんだって。

「……だから、今回はボクが旦那さんの代わりをしなきゃ、にやあ」

逆に、旦那さんは驚いていた。ボクが泳げるってことに。

確かに、温泉では驚いて溺れかけてしまったから、そう思われるのは仕方がないのかもしれない。だけど、ここで少し思い出してもらいたいにや。

ボクは元々、船の難破でチコ村に辿り着いていたことを。そう、こう見えて水には強かったりするんだにや。

「さあ、ちや……チャナブルル！ 勝負だにや！」

忌々しそうに光る眼。水に溶ける泥を掻き回し、さつきのモンスターはゆったりと姿を現した。水に没したこのエリア。旦那さんが踏み入れない、深い水に満たされたことで、ボクは再び奴と対峙する。旦那さんが狩れないなら、ボクが狩らなきゃ。

レウスネコブレイドとブーメランを構え、ボクは突撃した。

——という感じで、無事狩猟出来たにや〜」

「ニヤニヤニヤ。なんと、そんなことが!」

湯煙り溢れる岩場。漏れる木漏れ日に、風に靡く紅葉。硫黄のような、卵のような。そんな温泉独特の香りが鼻孔を擽る中、ボクは番台アイルーさんと談笑していた。

話の内容は勿論、ちやがなぶるの討伐、にや。

「まさかオトモアイルーだけでそんなことまでするなんて、あんまり聞きませんニヤ」  
「水中だとブーメランが思うように飛ばないから苦労したにやあ」

ボクは基本的にブーメランを使った戦闘を主軸としているから、水中という悪条件でしかない狩猟はもうコリゴリだにや。ブーメランは全然飛ばないし、動きにくいし。

それでも、元々下位個体だったみたいで、そこまで苦労することはなかったけれど。

「……ところで、あのハンター様は泳げない癖に何故わざわざ狩りに行こうとしたんですかニヤ?」

「最初は罾とかアイテムを駆使してハメるとか言ってたけど……思わぬ反撃に呼吸を乱

されたようだよ」

確かに、番台さんの言い分も最もだ。ボクがいなかったらどうするつもりだったんだろう。

困ったような、それでいてどこか蔑んだような目線で、旦那さんを見る番台さん。その視線の先では、ゆっくり入浴して傷を癒す旦那さんの姿があつて。

と思いきや、そうではなかった。あつたのは、よろず焼きセットで丁寧にかを焼いている旦那さんの姿。入浴するどころか、いつものように料理に勤しんでいる姿だけがあつたのによ。ここは集会浴場だというのに。

それを認識するや否や、今度は温泉の香りの中に何処か香ばしい香りが混じり込んでくる。濃厚でコクのある香り。そう、まるで蒲焼のような――。

「ちよ、ちよっと、ハンター様！ 何してらっしゃるんですかニヤ！」

「何、折角イルルが獲ってきてくれたんだ。飯にするのが筋つてもんだろ」  
「流石にボクたちしかいないからって……旦那さん自由過ぎにや」

そう、今この集会浴場を利用しているのは旦那さんとボクだけ。他のハンターさんはたまたま狩りに出かけているのか、それとも常駐していないのか。とにかく、ボク達しか客はいないのによ。

それを良いことに、旦那さんはわざわざここにまでよろず焼きセットを持ち込んで

は、あのちやながるるの料理をし始めてしまふ始末。温泉の香りが、ご飯の香りです書きされていく。

「骨抜きした身を串に刺して、素焼きして……仕上げの味付け。完璧だ、チャナガブルの蒲焼だ！」

「お、温泉で料理とかご法度ですニヤ！ 今すぐしまってくださいニヤ！」

「大丈夫だ、ドリンク屋にマタタビ十個で許可もらったから。おい、ついでにバニーズ酒も持って来てくれ！」

「ニヤツ！ 了解でさア！」

声を荒げる番台さん。しかし、垣間見えた旦那さんとドリンク売りさんの黒い取引の前に、その小さな膝をガクンと落としてしまう。二人を見る目は、まるで裏切られたかのような絶望の色に染まっているにや。

旦那さんの注文に元気よく答えたドリンク売りさんは、透明なグラスに入れられたそのバニーズ酒なるものを持ってきた。お酒の香りに、鼻がむず痒くなるにや。

「番台さん、こうなった旦那さんはここでも動かないから……ごめん」

「ハア……温泉が、風紀が……ニヤア」

嘆く番台さん。その悲しそうな声も、じっくり焼き上げられる肉の音に飲み込まれていく。



よろず焼きセツトで焼き上げられるその肉は、ねつとりとした濃厚そうなタレに全身を濡らしていた。一種の照り焼きのようなその焼き方、香りも風味も閉じ込めてしまいうようにや。

「もういいだろ。番台さんも食うか？」

「……ニヤ？」

焼き上がったのを確認した旦那さんは、余分なタレを落としてしつかり落として、二本、ずいっとボクらに差し出してきた。ボクと、番台さんの分を。

「……いや、私が……？ ハンター様が食べるんじゃないんですかニヤ？」

「俺はゆつくり酒でも飲んで温泉入るとするよ。味見の分でもう食べたし、それはお前達が食べな」

「にや……旦那さん」

そう言つて、無理矢理ボクらに蒲焼を持たせたら、旦那さんはいそいそと温泉の方に行つてしまつたにや。残されたボクらは、無言で顔を合わせる。

旦那さんも、旦那さんなりに負い目を感じているのかもしれない。だから格好つけて番台さんに手渡したのかにや。相変わらず素直じやない人だにや。

「イルルさん……ど、どうすればいいのですかニヤ？」

「旦那さんがああ言うんだから、食べようにや。それが良いと思うにや」

そんな彼がくれた蒲焼。あのモンスターらしい肉厚な身を贅沢に切り開き、骨を抜いたのであろうこの姿。

串に刺さったその身は大きく、そして脂も十分に含んでいるみたい。かかっているタレの醤油やらみりんやらが含まれた濃厚な香りも相まって、もう辛抱できないにや！

「……じゃあ、い、いただきますニャ」

「いただきますにや！」

焼きたてアツアツのそれを少しずつ息で冷まして、思いのままに一口齧る。

口に入れた瞬間、濃厚な香りとコクが一気に広がった。口から入り込んで、そのまま全身に広がっていくようなとても濃い風味。だけど、不思議にもあまりくどくもなく、飲み込みやすいこの香しさ。

その風味を十分に漂わすこの身。固くもなく、柔らかすぎることもなく。若干の焦げ味が表面をパリパリとさせているけれど、その中身は十分柔らかい。脂をしつかり含んでいるためかにや？ ふわふわとした食感がじつくりと口の中で溶けて、あのタレと混ぜり合っていくにや。

どちらかというど甘みのあるタレに、微量の塩っ気が含まれた身。それが混ぜり合つて、新たな旨みが生まれていく。もうこの組み合わせ、最高にや！

「美味しいにや、魚はやっぱいいのにや」

「……ニヤ、不覚にも美味しいですニヤ。外はパリパリ、中はジューシー。じつくり溶けるこの食感が堪りませんニヤ」

鉄の仮面で蒲焼を咀嚼していた筈の番台さんも、既に満面の笑顔。この番台さんをここまで変えてしまっただなんて、やっぱり旦那さんの料理は恐ろしいにや。

旦那さんは旦那さんで、やることは終えたと言わんばかりに温泉でくつろいでいる。酒を片手に入浴するその姿は、紅葉も相まってどこか哀愁のようなものが漂っていた。

「あのハンター様、いつもあんな感じなんですかニヤ？ その、料理癖というか」

「……にや、ボクを雇ってくれた時からあんな感じだったにや。長くていいなら、その話をしようかにや？」

「……え、遠慮しときますニヤ」

旦那さんの背中と、悪戯っぽく微笑むボクの顔を比べるように見ている番台さんは少し引き気味に首を振る。ボクはボクで少し話したかったけど、彼がそう言うならお預けかな。これはまたの機会に、にや。

「旦那さんったら、また格好つけたにやあ」

「ニヤ、あれは格好つけてたんですかニヤ？」

「多分。あんまり語らないで蒲焼渡して、そそくさと離れていってしまおうあたり、にや。きつとハードボイルドとかを狙ってるんだにや」

そんな旦那さんの特徴を並べ挙げてみれば、番台さんは困ったように溜息をついた。その視線の先には、タレの香りを色濃く残すよろず焼きセット。浴場に放置されたそれが、未だに沈黙していた。

「後片付けが出来てない辺り、ハードボイルドとしては二重ペケニヤ」

「……やっぱりあの人抜けてるのにな」

く本日のレシピく

『チャナガブルの蒲焼』

・チャナガブル切り身

……200g

・特製タレ

……たつぷり

## 徒花に実は生らぬ

「クエツクエツ！」

「……あー」

「……にゃー」

目の前で、踊る尻。

赤と、緑と、青と、黄と、白と。

様々な色が交差する、その鮮やかな色彩。華やかな羽毛。踊るように体を振らすその姿は、まるで求愛する鳥のよう。紅彩鳥と呼ばれるそのモンスターは、奇しくもジャングルで見えるような鳥の姿を彷彿とさせた。

惜しむらくは、ここがジャングルではない点だろうか。

「何かおちよくつてるみたいだな」

「……馬鹿にされてるような気分だにゃ」

奇声を発しながら踊り狂うその姿には、少しばかりの苛立ちを感じてしまう。

そんな俺たちに構わず踊り続けるクルペッコ亜種。俺たちのことをまったく気にし

ないその素振りも相まって、何だか小馬鹿にされているかのようだ。

「ちつせえ癖にデカい態度取りやがって……焼き鳥にすつぞ」

「クエツ……」

「にや、にやあ……」

片手剣、テオⅡスパードに滅気の刃葉を塗りたくりながら、吐き捨てるように言った俺の言葉に、少し顔を引きつらせる紅彩鳥。大きな態度を体格相応に委縮させるその姿に、俺は少し困惑する。

紅彩鳥、クルペッコ亜種。今俺の目の前にいるそいつは、紛れもなくその名を与えられたモンスターだ。だが、他の個体とは決定的な違いがあった。

何といっても、小さいのだ。大きく見積もっても俺の身長程度しかない。極小個体のクルペッコ亜種、それが今回のターゲットである。

「にやあ。少し気弱な姿を見せると、ますます鳥っぽいにや」

「……だな。美味しそう」

「クエ……クエエツ!?!」

そう言うが早いか。

紅彩鳥は焦ったような声を上げては、その小さな体で大量の空気を吸い込み始めた。そうして、限界まで膨らんだその胸を締め付けるように、一気にその空気を吐き出して

いく。けたたましい音色に変えて。

「ヴァアアアアアアアッ！」

まるで狼の遠吠えのような、野太い声。

如何にも鳥らしい、あの忙しい声とは大違いなその遠吠えに、イルルは驚いたように剣を構えた。嘴がラツパ状に開くその様は、独特としか言いようがない。初めてあの姿を見た時は、度肝を抜かれたものだ。

「にゃ、何？ 何にゃ!？」

「クルペッコの特徴だ。声真似、だな」

「こ、声真似……?」

若干不審げな瞳で、イルルは俺を見上げてくる。

確かに、モンスターが声真似をするときなり言われれば、疑問を感じるのは無理もない。真似という高等技術をこなすモンスターなど、聞いたことがないのだろう。

しかし、クルペッコに関しては、声真似をする他に類を見ないモンスターであると、ギルドも全面肯定している。それも、人間では判別できないほどの精度の声真似。最早、クルペッコの代名詞と言っても過言ではないだろう。

「……コイツが糞鳥って言われる所以だ。今の鳴き声は……フロギイのもんか?」

「こゃ……ふ、ふろぎー?」

クルペッコ亜種の鳴き声が、木霊するかのように響いていく。この『火山』内部の洞窟を反響し、そのまま麓の森を突き抜けるかのように。

その音と入れ違いになるように、別の音が響き始めた。

何かが大地を蹴る音。力強く、大地を踏み締める震動。こちらに近付いてくる、大量の足音。

「ゴウツ、ゴウツ、ゴウツ！」

「……ヒュウ。団体さんのお着きだい」

「にや、ジャギイ……じゃない？ 何だか、毒々しいにや！」

一体どれだけ耳が良いのか、はたまたこの近くにまでやって来ていたのだろうか。

クルペッコ亜種が吠えてから数分と経たず、招かれざる客たちは早くもこのエリアにやってきてしまった。毒狗竜、ドスフロギイ。彼が率いるフロギイの群れが、このエリアに乱入してきたのだった。

「ゴオオオオオツ！」

「ゴウツ、ゴウツ！」

「……やる気満々じゃん、いいね！」

荒々しい鳴き声で雄叫びを上げるフロギイの群れは、一斉に、餌を見つけたとでも言わんばかりに俺たちを睨んだ。



大量の視線を注がれたイルルは、委縮するようにその身を少し震わせる。俺の額から流れる汗は、火山の熱さのせいだけではなさそうだ。

「クアアアアツッ！」

「…………ツ！ おつと！」

その隙を縫うように、クルペッコ亜種は走り出した。小さな翼をはためかせ、そうして体を押し出すように突進を繰り返してきたのだ。

走るのが、飛ぶのか。はつきりしないその動きは、見る者を妙に惑わせる。

「ハッ、遅い遅い！」

「遅いにゃーっ！」

だが、所詮はただの突進。見た目はトリツキーだが、走行と羽ばたきという別の運動を並行してやっているのでは、速度はそう出ないのだろう。俺とイルルが、クルペッコ亜種を囲うように回り込むには、遅すぎる速度だった。

振り上げた片手剣が、風を鈍く裂く。滅気の刃葉によって切っ先の斬れ味が鈍くなった剣は、いつもとは違う風斬り音を奏で始めた。刃葉に付着していた粉末状の磁石がまとわりついて、切っ先は最早鈍器と成り果てていた。

そうして、無防備な背後へと攻撃を加える俺とイルル。剣撃の波状攻撃に、紅彩鳥は悲痛な鳴き声を上げる。

「ゴウアツ！」

すると背後から、野太い声が飛んできた。

見れば、俺を無視するなどでも言わんばかりに、ドスフロギイが力強く身を屈めているんじゃないか。狗竜系鳥竜種お得意の荒技、タツクルだ。

「当たるかそんなもん！」

それをバックステップで躲しつつ、クルペッコとの距離を開ける。

と思いきや、その空いた距離を埋めるように割り込むドスフロギイ。そのタツクルの勢いを抑えられなかったのか、威力十分のままクルペッコ亜種へと炸裂する。鳥竜二頭の驚愕の聲が、火山に咲いた。

「ゴアツ！」

「キュエアツ！」

「にや、ラツキーパンチだにや！」

ブーメランを振り回しながらそう叫ぶイルル。大型モンスター二匹が晒した隙を、彼女は巨大ブーメランの術に費やした。

一方の俺は、バックステップの着地と同時に腰を屈める。そうして、低く保った態勢を生かし、身体を一回転させた。

「喰らいな鶏肉！」

その回転力を推進力に転化させ、屈めていた腰を解放する。押し出した脚は、地面を勢いよく押し付けて、そうして一直線にクルペッコ亜種へと飛び出した。

宙を舞う、橙色の軌跡。爆発性の粉塵を撒き散らすその刃は、慌てて顔を上げるクルペッコの、その鮮やかな嘴を打つ。滅気の刃薬特有の、重く鈍い感触が手に残った。

「キュア……ッ」

「グウアアアア！」

新たな衝撃に放心するクルペッコ亜種。その横の、下手したら彼よりも大きな体をしているドスフロギイは、自らを覆うように舞う粉塵が鬱陶しいのか、その卓越した脚さばきでステップを刻み始める。

そうして、その場で尾を振り回し、奴は漂う橙色を吹き飛ばそうとした。その度に尾は、クルペッコ亜種を打ち据えていく。

「ギユツ、ギユエー！」

俺が再び手を出す前に、紅彩鳥は苦し気な声を上げる。周りのフロギイもそんな群れのボスに同調してか、その小さな体を振り回し始めた。

思わぬ大乱闘に、俺は追撃の手を止める。流星にモンスターに囲まれる状況は御免なのだ。

「イルル、任せた！」

「にや、了解だにや!」

俺の掛け声に元気よく答えた彼女は、引き続き巨大ブーメランの弾幕を展開する。空気を切り裂くその軽快な音が、フロギイの演奏をより軽やかに奏でていく。

すると、その中に妙に甲高い音が混ざり始めた。ブーメランの鋭い音でもない。フロギイの野太い声でもない。如何にも鳥らしい、甲高い声。

「キエエ、キエエ……ケエエイツ!」

「は——げっ……」

「にやあああ!?! 目があ! みやあああん!?!」

翼の爪を光らせるその動き。見たことがあるその動きを察知するや否や、俺は反射的に盾を構えていた。その横で、イルルは驚愕の声を上げる。

クルペッコ亜種が亜種たる所以、翼の先の電気石。打ち付けることで電光を発するその石が、強烈な閃光を打ち放ったのだった。

「ゴアアアアアツ!?!」

「グオウ、グオウ!」

直撃したイルルはもちろん、クルペッコ亜種の周りで群がっていたフロギイたちまで目をやられてしまったようだ。ドスフロギイも、訳が分からないとも言いたげな声で唸っている。

そんな様子を見ては、紅彩鳥は清々したと言わんばかりに喜びの舞いを始める始末。混戦模様は深まるばかりだ。

「嬉しそうだなコイツ……。ほら、イルル。しっかりしろ」

「にや、にやにやにや……」

頭の上で星を飛ばすイルルの頭をポンポンと撫でながら、庇うように前に立った。

一方のクルペッコといえば、今度こそ俺を攻撃しようとして、再び電気石を打ち付ける。素早く数回打ち付けたと思いきや、その細い脚に力を込め始めた。一気に跳躍する。そう予感させる動きだ。

「来いやアツ！」

俺は、吠える。勢いよく飛び出そうと、身体を浮かせた奴に向けて吠える。

その瞬間だった。

目が見えないことへのストレスを吐き出すような、ドスの効いた声が響く。その瞬間、喉袋を最大まで膨らませていたドスフロギイは、その口から大量の毒を吐き出した。それも、偶然にもクルペッコ亜種の、その顔に。

「クヤアアツ!?!」

気化していく毒の液を大量にかけられて、クルペッコ亜種はたまらず脚をもつれさせる。

飛び上った体に、絡まる脚。そのまま態勢を崩した奴は、その体色よろしく派手に地面に転げ落ちた。

「おっとつと……やるなあアイツ」

「にや……な、何が起きてるのにや……う」

肉球で目を擦りながら、開閉を繰り返す瞼で目の前の状況を探ろうとするイルル。そんな彼女の目の前では、紅彩鳥が地に伏せて悶え続けている。毒液を直接かけられ、なおかつ気化したそれを吸い込んだのだ。大ダメージは避けられないだろう。

このチャンスを逃す手はないと、俺は勢い良く踏み込んだ。突進斬りからの連打、水平斬り、斬り返し。そして止めの回転斬り。減気を含んだその斬撃は、鋭い斬撃と共に鈍重な衝撃を、この小さな鳥の脳に打ち込んだ。

「旦那さん、危ないにや!」

「むっ——チツ!」

イルルの叫びに顔を上げれば、視界に入ってきたのは大量のフロギイの姿。ようやく視力を取り戻した彼らは、怒りに満ちた荒々しい鼻息で俺を睨んでいた。そうして膨らませる、生々しい喉袋。

毒の霧を吐かれる前に、剣を振り抜いて紅彩鳥から距離をとる。それでも毒を吐くことを止めなかったフロギイたちだが、吐いた毒の先には残念ながら俺はいない。いるの

は、クルペッコ亜種だけ。

「キユウウウ……」

大量の毒を浴びせられ、鳥の苦しそうな声が漏れた。虚ろな瞳。荒い息。血相の悪い顔。空気に溶け込んだその毒を、空気ごと吸い込んでしまったのだらう奴は全身にそれを回し、とうとう毒に侵されてしまったようだ。

懸命に起き上がろうとするクルペッコ。しかし、ドスフロギイは無情にもそれを踏み付ける。そうして、その奥で剣を構える俺に向けてその牙を振り翳した。

「ゴオウ！」

「おっ、やべっ」

鋭く突くその牙を、半身ずらして躲す。そうして生まれた隙を突き返し、片手剣を鋭く斬り上げた。顎を減気で揺さぶられた彼は、子犬のような悲鳴を上げる。

そこに向けて展開されるブーメラン。流星にそれには当たりたくなかったのか、ドスフロギイは後ろに跳躍することで回避する。ものの見事に、クルペッコ亜種の上に着地して。

「キユツ……ケエエエツ！」

とうとう激昂したのだらうか。荒い鼻息を漏らしたかと思えば、クルペッコ亜種は忽ち咆哮を上げた。そうして体を振り回し、その立派な尾の羽を刃に変える。周りの外敵

たちま

を追い払おうと、必死な様子だ。

その奮戦ぶりに怖気付いたのか、フロギイの群れはクルペッコ亜種から距離をとる。ドスフロギイも、憎々し気に奴を睨むだけだった。一方のクルペッコといえば、周りのフロギイを振り払いながらも、回転しながら俺に近付いてくる。尾のブレードが、風を裂いた。

「……面白い。受けて立とうじゃないか！」

脚を軸に回転する奴のように、俺も左脚を軸にする。右脚をそつと引き、体勢を低く保って。左手の剣を握る腕に、力を込めた。

陽炎で揺れる視界。燃え上がる景色。熱気に舞う、紅彩鳥の姿。その回転に合わせるように、じりじりと、位置調整をする。距離を測り、速さを見て、左肩を大きく後ろに回して――。

「らあッ！」

ほとぼし

迸る左肩の奔流を、一度に解放した。走る斬撃は、空間を塗り潰す軌跡へと変わる。粉塵を纏うその光は、まるで鎧竜の熱線のように。二回、三回と高速で回転する俺の体は、その多重の斬撃を一度に紅彩鳥へと打ち付けた。走る尾の刃を打ち砕き、その鮮やかな頭部へと。

遠心力によって伸ばされたその斬撃は、クルペッコだけを斬ったのではない。俺や奴



の周りで彷徨くフロギイの群れまで一掃した。幾つもの影が、剣撃によって宙を舞う。

「にゃあ……い……！ 旦那さん、すつ……いにゃあ！」

超回転。俗に言うラウンドフォースで、紅彩鳥の回転を、周りのフロギイごと弾き飛ばしたのである。そのあまりある威力には、放った当事者である俺でも舌を巻く。それ相応に、身体に負担が掛かるのだが。

「ゴ、ゴアウツ！」

同胞が飛び交うその光景に、恐怖感でも抱いたのだろうか。ドスフロギイは踵を返し、このエリアを後にする。隊列を崩したフロギイたちも、群れのボスに置いてかれまいと必死に走り出した。

一方の紅彩鳥は頭部の連打が相当堪えたのか、危うい千鳥足をとうとう崩し、焼けた地面に倒れ伏せた。眼球があらぬ方向に向いてしまっているあたり、昏倒スタンでも引き起こしたのだろう。

「……おつかれさん」

そんな無防備な奴の喉に、そつとテオリスパーダを押し当てた。そうして、左腕を軽く振り払う。

吹き出る溶岩に紛れ、赤い水が宙を染めた。



「……参ったなあ」

「どうしたのにや? 旦那さん」

晩餐の解体作業をしながら、俺はそつと憂いを漏らした。その声に反応し、イルルは不思議そうに首を傾げる。

「だめだこりや。毒が回つちまつてる。……流石にこれは食えないかなあ」

「にゅ……確かに変な臭い……にや」

鼻をそつと動かしたイルルは、血の臭いに紛れた毒の香りに気付いたらしい。露骨に顔を歪ませて、溜息をついた。

顔に直接浴びて、さらに大量に吸い込んだのだ。あの毒が回ることは避けられなかったのだろう。

「……そういえば旦那さんって、折角片手剣使ってるのに毒の武器は使わないにや。それってやつぱり?」

「ああ。毒なんて入れたら食えなくなるだろ。使うわけないじゃん」

「にやあ、相変わらざるの徹底ぶりだにや」

呆れたように。むしろ感心したように。そんなまいちはつきりしないニュアンス

で息を吐いたイルル。

彼女もいい加減、俺の思想についてはある程度 of 理解を示してくれているようだ。雇い主としては嬉しいことだが、どこか諦められているような気もするのは気のせいだろうか。

「はあ……最悪だ」

「にやあ……」

まあ、俺が毒の武器を担ごうが担がまいがこの現状は変わらないのだが。折角のクルペッコ肉も食べられない。

クエストとしてのメインターゲットは達成しても、この火山に巢食う脅威の一つを取り除けたとしても、俺個人のメインターゲットは、完全に失敗なのである。

「——決めるのは、まだ早いかもしれんぞ？」

「……あん？」

「にやん？」

項垂れる俺に対し、声を掛けてくる人物。火山という危険地帯だというのに、ここにはハンター以外の人間なんているはずがないのに。

そんな疑問を振り落としながら、俺はそつと視線を滑らせた。クルペッコから、声のする方へ。

確かに、人間はいなかった。いたのは、人間よりも遥かに屈強な人種。竜人族のご老体、山菜ジイさんだ。

「あつ、ジイさん。……久しぶり？」

「久しいのう。食に通じたハンターさん」

あの時——グラビモスをシチューにした時と変わらない、にこやかな微笑み。それを向けてくるのは、紛れもない山菜ジイさんその人だった。

まさか、こちらの火山に来ていたなんて。以前会った地底火山とは全く座標の異なる場所なのだが。

とは言っても、あのサボテンカレーの旧砂漠の例然り、彼は何処にでも現れることで有名だ。いちいち口に出すのも野暮というものだろう。

「元氣そうじゃの。クルペッコか、えらく小さいのう」

「にやあ、極小個体らしいにや。幼体なのかにや？」

「ほう……。如何にも柔らかそうな肉じゃわい」

小柄なクルペッコの傍によつては、同じく小柄なジイさんは興味深そうに目を細めた。そうして、肉の様子を見ては、嬉しそうに顎を触っている。

そんな彼の様子と、彼の先程の言葉が俺の中で交差した。決めるのはまだ早い。確かに彼はそう言ったのだ。つまり、まだ食べられる可能性はある？

「ジイさん、もしかして、コイツって」

「うむ。大丈夫じゃ。この程度の毒なら何とかなる。ワシに任せんしゃい」

そう言つては、彼は懐から剥ぎ取りナイフを取り出して、もも肉の部位を切り分け始めた。自信に溢れたその言葉、その仕草。それだけで十分だった。俺に再び希望を抱かせるには。

「何を作る？ 何か手伝えることはあるか？」

「ほつほ。たまには丁寧に加工しようかの。鶏団子スープというのはどうじゃ？」

「団子にするのにな？ 何だか珍しいにや」

「んでな、ワシはその準備に取り掛かるから、お前さんたちにはドスフロギイの気を引いてて欲しいのう。邪魔されたくないんじや」

忌々しそうに目を滑らせる山菜ジイさん。その視線の先にあるのは、先程フロギイの群れが逃走したエリア。その岩陰から、数匹のフロギイがこちらの様子を窺っている。この鶏肉を漁ろうという魂胆だろうか。

「……そうは問屋が卸さんぜ。任せろジイさん」

右手の盾から、そこに収められた剣を抜く。虚の出来た盾は腰に収め、右手左手それぞれを剣で埋める。

細く鋭い、右の剣。厚く重い、左の剣。逆手に持ったそれらを軽く振り回し、エリア

の奥のフロギイの群れに照準を合わせた。彼らの空気が変わる。俺がこれから駆け出そうとしているのを察知したのか、先程より張り詰めた気配が漂ってきた。

「任せたぞい、二人とも」

「にや、おじいさんも気をつけて、にや！」



風のように舞う剣撃。一对の刃は、旋風のように逆巻いた。

前も後ろも、右も左も。隙を与えぬその斬撃は、囲み来るフロギイの群れもものともしない。隙を狙うように牙を向けるドスフロギイも、回転する刃からは逃れられなかった。吐き出す毒の霧も、まるで竜巻のような錐揉み回転で打ち払われる。

山菜ジイさんが作る料理にかかる時間。それよりも手早く、軽く、あっさり。言わばキツチンの害虫とも言えるそれらの料理は、いとも簡単に終了した。連鎖する、爆破の花によって。

「ご苦労様じゃ、ハンターさん。ご飯、もう出来るぞい」

「おお……！ すげえ良い匂い……！」

「にや、にやく。何だか優しい香りだにや」

役目を終えてベースキャンプに戻った俺たちは、まず始めに何とも魅惑的な香りを鼻にした。

硫黄と焦げ付く臭いで溢れかえる火山では、まず感じられないであろうその香り。出汁の効いた、深く、柔らかい香り。これを嗅ぐだけでも狩りの疲れが吹っ飛んでしまいうさだ。

「さあさあ。座んなさい。ほれ、器とスプーンじゃ」

「お、どうも」

「にや、ありがとなのですにや」

山菜ジイさんに促されるまま、薪に燃える鍋を囲うように腰を下ろす。渡された器を手にはしては、視線をそっと目の前の鍋へと動かした。

激しく湯気を立てるその鍋は、火山の噴出口を彷彿とさせる。溢れる香りに、蓋の間から現れる気泡。空腹時に見るには凶悪過ぎると思うのは、俺だけだろうか。

「よし。では蓋を開けて……おお、良い色じゃわい」

開け放たれたそれ。隔離された空間から、やつのことで大気に触れたその空間は、見る者を魅了する独特の色で占められていた。薄茶色とも、濃い黄色とも捉えられるスープと、そこに浮かぶ数々の具たち。

細かく削り、練り直したのであろうその鶏団子は、予想よりも大きかった。一口大ほどのそれが五、六個、スープの中でその身を浸している。形も美しく、大きさも均一だ。その周りには様々な野菜が浮いていた。山菜の名に恥じない、彼らしい粋な計らいだろう。メインは大根のようで、よく形を残したそれが丁寧に煮込まれていた。元々白いその色にスープの色がよく染み込んでおり、それが食欲を非常に促進させる。

他にもニンジンやゴボウ、白菜といったものも薄く切り分けられた上で混ぜられており、見た目の鮮やかさをより助長しているようだ。

「……おお。すげえ、何て言うか、凄いなこれ……」

「旦那さん、凄いしか言っていないにや。……でも、凄いにや」

そのあまりの完成度に呆気に取られてしまう俺とイルル。そんな俺たちの分までスープをよそつてくれた彼は、嬉しそうに微笑んだ。

「はっは。見た目に捉われるよりも、本質は味じゃ。さあ食べんさい」

鍋の奥で頷く彼と、音を立てて煮え続ける鍋。彼の眩しい笑顔も、湯気で隠れてしまいうさだ。

そんな一種の神々しさを感じさせるその瞬間を、俺は涎ごと飲み込んだ。そうして、スプーンでスープを掬っては、俺はそつと持ち上げる。

「……いただきます」



「い、いただきますにや」

近付くことでより近くで感じられる香り。

クルペッコの骨肉で出汁でもとったのだろうか、動物性の脂分が感じられる。あつさり薄味と思わせるその見た目と、ギャップを感じさせるその香り。もう自分を抑え切れず、俺はそれを、一思いに口に入れた。

口内に流れ込む、凝縮された旨み。滑らかで喉越しのよい口どけのそれは、撫でるように舌の上を這った。鶏肉特有のあつさりしつつも深く、芯の強い風味。それを色濃く残したこのスープは、強い味を保ちながらも飲みやすいと、そんな不思議な味を醸し出していたのだった。

「ああ、いいなあこの味。……さてさて、お次は本命の団子をつと」

そつと摘まんだその鶏団子。クルペッコ亜種のもも肉を使ったらしいそれは、丁寧にミンチ状にされ、よく捏ねられているようだ。きめ細かいその質感に、俺は思わず舌なめずりしてしまう。

思ったより軽い。それが摘まんだ感想だった。ただ肉を固めただけではないのだろうか、そんな感覚を俺に植え付ける。ではそんな団子を、そつと一口。

前歯に触れた瞬間、あつかりと歯が団子に埋まる。固さも抵抗もほとんどなく、柔らかな感触が歯茎から伝わってきた。柔らかく、どこかとろみを感じさせるその食感。歯

が肉を切り裂いていくごとに、肉の断面からはよく染みたスープの味が溢れ出て、旨みと深みを口いっぱいに広げていく。比較的淡泊な味で知られる彩鳥の例に漏れず、この肉団子もあつさりとした味わいだ。

だが、スープの出汁をよく含んだその味は、あつさりながらも強い肉の味を生み出していた。深みによって生み出される旨み。味の層がスープの深みによって作りだされ、その層にスープが染みるごとに旨みが強まるような——そんな不思議な感覚だ。

「鶏団子めちゃうめえ！ 何だこの食感……」

「実はこの団子な、とろろを混ぜとるんじゃよ。ふわとろじゃろ？」

「ふわとろ、ふわとろにや。ふわふわで、とろとろで、口の中で柔らかくなっていくにやあ」

白菜を口に入れてはシャキシヤキと音を鳴らす山菜ジイさん。料理の秘密を話してくれる彼はとてもいい顔をする。

白菜の菌触りを楽しみながら話すその言葉に、イルルは幸せそうに同調した。はふはふと鶏団子に息を吹きかけては嬉しそうに食べ続けている。

「団子も美味しいし白菜も美味しい。大根もよく味が染みてるよ。溶けるような食感もたまらんね」

「……ハンターさんや。ワシが何とかなると言ったのはな、その大根があつたからなの

じやよ」

「にや、これが？」

感慨深げにそう語り始める山菜ジイさん。そんな彼の言葉に、イルルは確かめるように大根を一切れ持ち上げた。そうして、不思議そうにそれを眺めてはそつと口に入れる。満面の笑顔で頬張る彼女は、山菜ジイさんの話にはあまり興味がないうだ。

「大根は古来から毒消しとして扱われておつての。種子も葉も過不足なく使え、かつ食べ合わせにも使える。素晴らしい作物よな」

「……もしかして、この前食べたギイギハンバーグの大根おろしって……」

「おお、あのメニニューな。あれもワシら山菜組の大根じやよ」

彼が語るには、あのメニニューを考案したのも元々山菜組らしい。彼ら竜人族の技術をもつて、解毒作用に優れた大根をつくる。やがてそれが山菜組大根となり、あのさすらいのコックさんが作ってくれたメニニューに繋がったのだとか。

元々毒素を生成するギイギである。ギイギと大根という組み合わせは必然だったのかも知れない。毒に侵されたクルペッコの出会いも、一つの運命のようにも感じる——  
気がしないでもない。

「へえ……。ならば、この大根使つて美味しい解毒飯作つたら、結構売れそうじゃないか？」

「もちろん考えとるわい。我ら竜人の秘術をもつて、鋭意作成中じゃよー！」  
 何となく思い付いたことを口にすれば、彼はさも得意気に胸を張った。俺が言わずとも、すでに考えて研究をしていたようだ。流星は竜人族。美容健康に詳しいだけはある。

もちろん俺としても、そんな解毒飯が流通されれば是非利用したい。げどく草とアオキノコを調合したただの解毒薬は、苦くて不味くて美食の概念とは掛け離れすぎているのだ。漢方薬など、言わずもがなである。

「……ちなみに、値段はどんな感じ？」

「流通や製作が難しいからの。とりあえず……50000Z！」

「にやつ!? ……何か、達人ビールみたいな末路辿りそうだにや……」

く本日のレシピく

『ふわふわ紅彩鳥団子の大根スープ』

- ・ 紅彩鳥団子（もも肉） ……280g
- ・ 山菜組大根 ……1／3個
- ・ 山菜組人参 ……1／2個

・ 山菜組牛蒡	…… 1 / 3 本
・ 山菜組白菜	…… 2 ~ 3 枚
・ 白湯スープ	…… 少々
・ とろろ	…… 1 / 5 本分
・ ユクモ生姜	…… 少量
・ ゼラチン	…… 控えめに
・ 醤油	…… 少量
・ 彩鳥ガラスープ	…… 多め
・ 酒	…… 大さじ 1 杯
・ 塩胡椒	…… 適量
・ 水	…… 1 ℓ

## 幻の果実は甘美なり

熱砂の温い風が、俺の頬を撫でた。

乾いた空気と、荒涼とした景色が囲うこの世界。水分が枯渇する過酷な世界、『砂原』は、本日も眩しいくらいに太陽によって灼熱の世界へと化していた。ジリジリと照り付くその日差しは、恐ろしいまでの熱を帯びているようだ。

クーラードリンクを飲んでいても、熱いことには変わらない。ましてやバルバレの調合機器がないこの環境だ。残念ながら、クーラードリンクは市販の、それも不味いものしか調達できなかった。体も、心も、熱と不味さが蝕んでいく。

「にゃ……旧砂漠とはまた違った景色にゃあ。変な柱が立つてる……にゃ？」

そんな暑さの中だというのに、イルルはピンピンとした様子で周囲を忙しなく見回していた。興味津々といった雰囲気の彼女の様子は、見る者を和ませる。

彼女もまたイルルの端くれという訳で、環境適応能力は随一のようなのだ。流石はクーラードリンクもホットドリンクも必要としない種族。人間とは体の構造が根本的に異なるらしい。イルルの中でも長毛の傾向があるイルルが、暑さをものもしないとい

う事実には些か納得がいかないが。

「ん……あれはオルタロスの巣かな？ ほら、あんまり乗り出すと危ないぞ」

「みい、にゃん」

足元が見えてなさそうなイルルにそう声を掛ければ、彼女は少し改まって俺の膝の上に腰を下ろす。

身乗り出す。彼女がしていた動作は、まさにそれだ。

俺たちは何も、砂原を歩いて進んでいる訳ではない。ガタガタと揺れる竜車に乗って、この過酷な世界を切り裂いているのだ。アプトノス二頭が牽引することじまりとした竜車。個人輸送業を営む商人のそれに、俺たちも乗り合わせているのである。

「今のところ危険なモンスターもいないな。狩猟環境は安定、か」

「にゃ、大助かりにゃ。乱入なんてシヤレにならないにゃん」

これまでも経路の中で、常に警戒は怠っていないが、特にこれといった危険なモンスターは確認できていない。精々リノプロスが鼻を鳴らしていたくらいで、ドスジャギイの姿さえ見当たらなかった。

ギルドからの情報でも、大型モンスターはある一匹のものを除いて、他には確認されていない。狩猟環境は安定。狩りをする上では、この上なくやりやすい状況だ。ましてや、行商車の護衛というこの状況ならば尚更である。

「おーい、ハンターさん。もうすぐ件のアイツがいる砂漠エリアに入る。準備してくれ！」

「お、そうか。イルル、そろそろキリンカチューシャつけときな」  
「にやー！」

アプトノスを操る男性——今回俺に護衛を依頼してきた商人から、そんな注意喚起が飛ばされた。

今俺たちが進んでいるのは、虫の巣が立ち並ぶ細い道であるエリア8。そんな道も次第に開け始め、続くエリア9——砂原屈指の大砂漠が見え始めていた。

そんなこんなで、俺はテオリスパーダを腰に掛けながらイルルにも声を掛ける。元気よく返事をした割には、少しずれたままカチューシャを装着する彼女。その愛嬌ある姿に、俺は小さな笑みを零した。

「ほら、ちよつとずれてるぞ」  
「みゆ、ふにやあ……」

そんなズレを直そうと、俺は彼女の頭に手を伸ばす。するとふわふわとした、ネコらしい柔らかな毛並みが伝わってきた。いつもならずと撫でていたいその毛並みだが、流石にこの乾いた世界ではそれも躊躇ためらわされる。

何故イルルを満足に触れられないようなこの場所に、それも行商の護衛として来てい



るのか。それは数日前の出来事がきつかけだった。



「面白いな、この団子」

「にや、この発想は無かったにや」

ユクモ村の北東部、集會浴場前の広場。そこに設置された足湯場で、俺とイルルは和やかにくつろいでいた。足は温泉につけ、手には饅頭のようなものを乗せて。

「みたらし団子……ねえ。まさか大福みたいにみたらしを中に詰めるとは」

「これなら手も汚れないし食べやすいにや。凄いにや！」

そう、それは饅頭だった。

いや、正確には饅頭のように見えるみたらし団子。従来の串に刺さったアレではなく、みたらしに濡れたアレではなく。少し焼き目が付いた饅頭にしか見えないこれが、みたらし団子という名を欲しいままにしていた。

そのぷにぷにとした柔らかな食感、中の空洞が液体で満たされていることを思わせる。そう、まるで大福のように。

「んじや、いただきまーす」

「いただきますすにゃあ!」

そんな一つのかたまりを、そつと噛んだ。すると伝わる、その柔らかさ。もちもちとしたその食感は、やはり団子というより饅頭のそれに近い。組織が柔軟に、それでいて固くつながつたその食感は、如何にも餅のような弾力性とほどよい生地を醸し出していた。

そうして噛み続けると、その生地の間からとろりとした液体が溢れてくる。重く、粘り気のあるそれ。甘みと旨みを黄金比率で混ぜ合わせたそれ。噛めば噛むほど、ほぐれた団子と混ぜ合わさるそのみたらしは、団子の淡泊な味を濃厚な旨みで上書きしていく。

旨味と思いきや、仄かな甘みも光る味。ユクモらしいその味付けは、秋の紅葉で彩られた足湯にはピッタリだ。心なしか、温泉の湯気でこの風味が一層深まっていくような。そんな気さえしてくる。

「美味しいにゃあ。甘くてトロトロにゃあ」

「ああ。うめえなあれ」

恍惚そうな笑みを浮かべるイルル。その幸せそうな様子に、俺は思わず笑みを溢してしまふ。

あのホットケーキ以来、どうにもこうにも肉つ気のあるものばかり作ってきたから、

スイーツ好きの彼女にとってはおまらないのだろう。嬉しそうに尻尾をピンと立てた彼女は、その団子をペロりと平らげてしまった。

みたらし団子をスイーツと称するべきかどうかは、俺もちよつと分からないが。

「……どうだい？ あつしのオススメ、包みみたらしは」

「美味いよ、これ。相棒もすつごく喜んでるし。感謝するぜ、商人殿」

そんな俺たちの横で優雅に足湯に浸かる、中年太りにターバンを巻いた男性。俺たちに話があると、この包みみたらしを用意してまで近づいて来た商人だ。

人と話す機会を作るために、その人が好むものを用意し興味を湧かせる。中々の交渉術を垣間見せる男だ。どうやら、そこらの凡庸な商人ではないらしい。

「——で？ 話つてのは？」

「そうだなあ。あつしはしがない商人なんだが、ハンターさんに是非護衛を頼みたいんだ」

「にや、護衛……にや？」

思わぬワードに、イルルは不思議そうに首を傾げた。

無理もない。彼女が俺のオトモになってから、俺に護衛の依頼が回ってくるなど一度たりともなかったのだから。当然聞き慣れないのは俺も同じであり、彼女に合わせて俺もそつと首を傾げた。

「参考までに、何故俺なんだ？ 他にもっと適任のハンターはいると思うが」

「……ハンターさん、アレだろ？ チャナガブルの蒲焼を集会浴場でやったっていうあのハンターなんだろ？」

「にや……そんなこともあつたにやあ」

理由を尋ねたら、質問を質問で返された。それも、あの蒲焼のことを引き合いに出して。当時のことをよく知っているイルルは、それを思い出しては儚い溜息をつく。

「そうだな。確かに、それは俺だ。だが、それが一体？」

「食に理解があるハンターさんって、あつしはすぐ分かったよ。だからこそアンタに頼みたいんだ。……幻のリングゴ探しの、護衛をね」

幻のリングゴ。まるで悪巧みするような笑みで、彼はそう語った。

思えば、フルーツに手を出したことはあまりなかった。精々、料理のアクセントとして取り入れる程度のもので、基本的にはフルーツ自体の追求というのはあまり行なつてこなかったように思える。だから、その話は俺を惹きつけるには十分な威力をもつてた。

——砂原には、それはそれは旨いらしい、幻のリングゴがあるんだぜつ。

以前共に狩りをしたイズモも、かつてそのようなことを話していた気がする。リングゴ好きな彼が言っていたのだから、その情報にはそれなりの信憑性がありそうだ。

「……詳しく聞かせてくれ」

「オーケー。助かるぜ」

彼の話はこうだ。

彼はとある商隊のメンバーで、そのグループはなんとリンゴ好きの商人によって構成されているらしい。彼らは商売をしながら各地を渡り歩いて、その幻のリンゴに関する情報を探し求めていた。しばらく不毛な日々が続いたそう、グループ解散の危機も訪れたようだが――。

「だが、そんな日々に光明が差した。砂原の奥地のオアシスで、それらしきものを見たという情報があつたんだ！」

「いやあ、なんでまた辺鄙なところに……」

「……それで、俺にその護衛をしろと？」

そう確認すると、彼は神妙な顔つきで頷いた。その瞳には、嘘の色は一滴も見えない。山菜ジイさんや、イズモや、"アイツ"と同じ、美食に強い関心を示すその色が、彼の瞳に灯っていた。

「……実は、付近にモンスターがいることが確認されてるんだ。それも非常に獰猛なハブルボツカだと」

「はーん、成程。要は俺がそいつを引き付けなければいいって訳か」

ハプルボツカ。

海竜種の癖に砂漠のような乾燥地帯を好むという奇異なモンスターだ。砂の中を自由に泳ぎ回り、そのあまりにも巨大な口でモンスターを丸呑みにする、大食漢とも称されるモンスター。奇しくも美食の前に立ち塞がるとは。何とも皮肉なものだ。

「報酬は？ おっと、金じゃないぜ？ 俺たちもそのリングゴを食べるんだろうな？」

「……ああ！ 発見した暁には、必ずハンターさんたちの分も用意すると約束しよう！」  
「その言葉を待っていた！ よっしや、乗るぜこの依頼！」

よく日焼けした彼の腕が、俺の固い腕を握り締める。固い固い握手が、この足湯の上で組み広げられたのだった。ちゃぼんと、足湯の湯が跳ね、ひらりと紅葉が湯に舞い降りる。

足湯に咲いた、熱い熱い男の握手。そんな奇妙な光景を黙って見ていたイルルは、また一つ、困ったような鳴き声を上げるのだった。



——シグさんつ、今日狩りに行くのは……ハプルボツカ？ えっと、潜口竜……だつ  
け。あのモンスターはすっごく大きく口を開けてご飯を食べますよね。あれじゃあ、お

腹の中も砂でいっぱいになっちゃいそうですつ。……え？ 私みたい？ も、もう！  
私はもつと上品に食べますよ！ だったらこんがり肉を出してください！ 証明しま  
すから！

熱い熱い熱砂の中で、いつか聞いた声が頭の中を跳ね回った。

冷やかしたらムキになって俺からこんがり肉を奪い取った彼女。そんな彼女のよう  
に、大きく口を開けて飛び出す影。

「おつ……おわあッ!？」

「だ、旦那さん!」

突如地面から飛び出たその口は、まるであのオルタロスの巣のように、高く高く聳え  
立つ。

厳つい甲殻に覆われた背中。青い斑点模様が妙に毒々しい腹。あまりにも不釣り合  
いな大ききの頭に、それに対して貧弱過ぎる手足。奴の体が、今露わになった。

潜口竜、ハプルボツカ。砂漠の大食漢だ。

「出たな……」

「にや……な、何このモンスター……!？」

あまりにも突飛なその外見に、イルルは唾然と立ち尽くす。地面から現れたのが巨大

な口だったのだ。驚くのも無理ないだろう。

そんな彼女を余所に、ハプルボツカのその鮮やかな腹を二、三度斬り付けた。肉の抵抗が弱々しく、どこか柔らかい感触がテオニスパーダを通して感じられる。やはり腹が狙いどころのようだ。

「おっと……」

すると奴は、そんな衝撃が気に障ったのか、その巨体を俺に向けて振り下ろしてくる。思わぬボディプレスが俺の視界を覆い尽くした。

声とも、超音波とも言えぬ奇妙な声。言葉に言い表せないその声が、舞い上がる砂に溶けていく。

「チツ、あぶねえなアイツ」

「にや、何だかチャナガブルを思い出させられるにや」

「アイツもコイツも海竜種。海とはこれ如何につてか？」

埋める体を少しだけ砂から出し、耳のような、鰓えらのような器官から張った空気を吐き出すハプルボツカ。バックステップで躲した俺を、その小さな目で忌々しそうに睨んでくる。

「旦那さんがたくさん斬り付けて、ボクもたくさん攻撃してるのに……全然堪えないにやね」



「……つーよりは、痛み感じてんのかアレ。理性も吹っ飛んでそうだけど」

他の海竜種と比べれば、幾分かは大人しい傾向がある潜口竜。しかし、目の前の奴はそうでもなかった。

出会った瞬間から極度の興奮状態に陥っており、俺たちを感知した瞬間すぐに襲い掛かってきたのだ。遠くを歩く竜車には目もくれず、目の前の俺たちしか見えていないかのよう。

「……ボクが小タル爆弾投げただけで激昂したにや、すごい獰猛にや」

「ま、そのおかげで商隊には影響なさそうだけどな。おら行くぞー」

「まず、と砂を押し退けて潜行するその背中に向けて、俺は片手剣を振りかざす。滅気の刃葉を塗りたくられたその刀身から、鈍い感触が震動になって手に伝わってきた。背中を打ち付けるそれは昏倒スタンこそ期待させないが、疲労を起こすには十分だ。

「そう、十分なのだが――」。

「一向に疲れる気配見せないにや、どうなってるんだにや!」

「怯むな! だつたら動きを止めてやればいい!」

全く怯まず、大口を振り翳すハプルボッカ。俺の背丈並のその顎に、イルルは危うく跳んで逃げる。砂と大気を弾き飛ばすその歯の力から、鋭くも重い歯の衝突音が奏でられた。

スタミナが無尽蔵にでもあるのかと、そう思わせる奴。疲労の色は無色透明で、ただただ狂暴性だけがそこにあった。極度の空腹でも抱えているのだろうか。

「おらよー」

そんな奴の口の中に、俺はアレを投げ入れた。

薄い円盤のようなその機械。音を立てて淡い光を放つそのアイテム。一般的にシビレ罨と呼ばれるそれを、俺は地面ではなく奴の口の中に設置したのだ。

「にや、にやあ!? そんなとこに!？」

「ハッー シビレ味一丁まいどありいー」

口の中にそれがあるとも知らず、勢いよく口を閉じたハプルボツカ。それで麻痺毒の針が刺さったのか、奴はまるで魚のように全身を痙攣させた。飛び上っては体勢を崩し落砂する。ようやく見せたその隙は、反撃の絶好の機会だった。

「にやにやにやにやー」

怒涛のラツシユを繰り広げるイルルは、これが本命と言わんばかりに大回転を始める。飛び上ったその体を、まるで歯車のように振り回し、潜口竜の皮膚を削るようになり裂いた。まさにネコの大きな車輪。

そんな相棒に負けじと、俺はブレイドダンスを繰り広げる。減気の効果を含んだ刀身が、縦横斜めと繰り広げられる斬撃に上乘せされた。踊るように振る剣を、とどめと言

わんばかりに奴の脳天に突き立てる。

「まだまだアー！」

甲殻を割るように刺さるその剣を、右から左へと、力のままに振り抜いた。

大きく肉を抉り、甲殻を剥ぎ飛ばすその斬撃。同時に飛んだ滅気の衝撃が、とうとう奴の脳を打ち鳴らす。

「プガアツ!?!」

そんな奇妙な声を発しては、奴は再び崩れ落ちた。巨体が埋もれ、砂が金色に舞う光景が何とも美しい。昏倒<sup>スタン</sup>の華は、何とも鮮やかだ。

「やったにや、スタンにやー！」

「イルル、新しい爆弾の準備を頼むー！」

がら空きになったその頭部に、休みなく斬撃を繰り広げる。その傍らで、喜んで飛び跳ねるイルルに声を掛けた。

これまで数発爆弾を使ってきたせいで、生憎俺の手持ちはもう残っていない。残りは少し離れた場所に安置している大タル爆弾Gだけだ。

「分かったにやー！」

そう元氣よく返事をしては、彼女は四つん這いになって走り出した。地面を蹴る度に、金色に光る煙を上げる。

頭に星を並べながら、迫る斬撃を受け入れるハプルボツカ。と思いきや、突然体を動かし始める。意識を取り戻したかと思えば再び激昂し、荒い鼻息を撒き散らすその姿に、俺は思わず盾を構えてしまった。

「チイ、起きるの早いっつの……!」

荒れ狂い、大量の砂を撒き散らす奴から距離をとってはそう悪態をつく。しかしそんなことも露知らず、ハプルボツカはその耳のような鰓のような何かをパタパタとはためかせて――。

ふと、爆弾を取りに行ったイルルの方に目をやれば、そこにはせつせと爆弾を運ぶ彼女の姿があった。懸命に、重いそれを運ぶその足取りは乱雑で、砂の音を大きく立てている。

「プアアツ!」

ハツと、奇声を嘯るさえず潜口竜に目を戻せば、奴の姿はもうそこになく。

ただ大量の砂が、地面を掛け分ける姿だけがそこにあった。一直線に、イルルに向かつて。

「イルルッ! そこを離れろ!」

「にゃ——みゃう!?!」

俺の声に反応して顔を上げた彼女。ずんずんとこちらに迫る巨影に気付いては、何と

も奇妙な叫び声を上げる。だが焦ってもたついているのか、彼女の退避の動作はとても遅い。このままじゃ間に合わないのは、火を見るよりも明らかだ。

「……チツ、いくら小さくても——」

呟いた時には、もう走り出していた。走りながらベルトにぶら下げた小タル爆弾を手にとつて、それを起動しながらそつと背後に投げ入れる。

砂漠に響く破裂音。耳を劈くようなその鋭い音が、俺の鼓膜に襲い掛かった。

同時に感じる、焼けるような背中痛み。そして、俺を力強く押ししてくれるその爆風。「痛えんだよ畜生！」

爆風をものにしたその加速力が、俺と奴の距離を大きく縮めた。

砂を掻き分けるその衝撃のまま、一気に走り込んでイルルを突き飛ばした。

「にやっ、旦那さんっ!」

もたつく彼女は弧を描いて飛び、すんと尻を砂に付ける。微かに黄砂が舞い上がった。

彼女を無事、ハプルボツカの射線から逃した。そこまではいい。

だが俺は？

彼女を失つた空間を埋めるように、その場所には俺がいて、大タル爆弾Gと共に、俺が奴の目の前にいて——。

「あつべ……」

「だ、旦那さーんっ!!」

彼女の悲鳴に応じるように、視界が黒に反転する。

爆弾と共に押し込められた世界の中は暗く、狭く、そして臭かった。ハプルボツカの口の中は砂まみれもいいところで、お世辞にも綺麗とは言えないだろう。

「チィ……糞が。アイツの言つてた通りじゃねえか……ッ！」

お腹の中まで砂でいっぱい。彼女の想像の通りだ。

舌も、喉も、口蓋垂も、喉頭蓋も。ここから見える口腔のほとんどは、煌めく砂でまみれていた。とてもじゃないが、これは食べたものじゃないだろう。

「……いっちょよ、派手にやるか」

噛み潰される前に、飲み込まれる前に。素早く片手剣を抜刀しては、右手の盾を構えたまま鋭く突き出した。目の前の、大タル爆弾Gに向けて。

瞬間沸き起こる熱と炎の奔流は、火山の噴火の如く俺と潜口竜を焼き始める。まるで石窯で焼かれているかのような気分だ。右も左も、前も後ろもない。強烈な熱と衝撃は、掲げる右手だけではあえなく吹き飛ばされてしまいそうだ。

というか、それが目的なのだが。

「——うおッ……！」

「にや、旦那さあぁんっ！」

突然視界が反転した。白と青と金のコントラスト。

乾いた世界へと、外の世界へと景色が変わっていた。炎と煙の軌跡が俺の体から伸び、その元となったハプルボツカは馬鹿みたいに大口を開けては半身砂から出し、苦しうにもがいている。

「イルル、釣竿だ！ ルアーをアイツに投げろ！」

「にやつ、にやつ？ にや……にやつ！」

だが、抜け出したことをそう喜んでもいられない。未だ奴の真上を漂い続ける俺は、俺を見ては尻尾を立てて泣き喜ぶイルルにそう声を掛けた。

一方の彼女はその突然の命令に戸惑いながらも、ポーチからネコ用の竿を取り出す。小さな小さなその竿を、もがく奴に向けてびゅんと振った。

「にや……暴れるにやあーっ！」

彼女はそう吠えては、食らい付くハプルボツカと格闘を始める。猛烈に暴れる潜口竜と、力いっぱい竿を引くイルル。その勝負はまさに一進一退で、まるで綱引きのようでもあった。

そんなハプルボツカの背中に向けて、俺は剣を抜いた。爆風をモロに浴びて軋む盾を振り捨てて、そこに収められていた剣を引き抜いて。

俺を掴む重力のままに、俺は体に力を込める。何度も刃打ちをしたその左右の剣を逆手に持ち替え、今度は身体を捻った。腰から腹へ、腹から肩へ。そうして生まれたその螺旋は、まるでハリケーンのように、左右の剣を一迅の風へと変えたのだった。

「うらあッー！」

「にやつ……す、凄いにゃー！」

無理矢理空中回転乱舞を繰り出した俺は、そのままハプルボツカを叩き伏せる。突然の上顎への衝撃に、奴は無理矢理口を斬り閉められて。

その隙が王手となった。抵抗を失った奴を、イルルが引き揚げたのだ。青く赤い空の中を、青い青い腹の奴が悠然と泳ぐ。

澄み渡る青い空に舞い散る、鮮やかな赤。刃打ちによって撒き散らされたその赤は、テオ・テスカトルお馴染みのあの粉塵だ。それが色のコントラストを映し変えるように、舞い上がるハプルボツカに反応しては白く染まり始める。

「……汚え花火だ」

砂漠を燃やす轟音が、撒き散らすように響き渡った。





「ハンターさん、おつかれ。あつたぜ、二個しか成つてなかつたけど」

「おお………！」

「にやあ………！」

無事ハプルボツカの狩獵を終えて、煙の上がるオアシスに訪れてみれば。

そこには満面の笑みを浮かべた商人の姿があつた。手に、何とも巨大なリンゴを持つて。

「デカいな……。それが噂のリンゴか？」

「ああ。潜口竜の住まうオアシスで確認される幻のリンゴ、ハプルアップルだ！　と  
うとう見つけたぞ」

「ハプル……アップル？」

言葉遊びのようなその名前に、イルルは少し首を傾げる。思つたよりも安直だと思つたのだから。彼女の表情はやや納得がいかないといったところで、鼻をヒクヒクと動かしてはそのリンゴの匂いを嗅いでいた。

ハプルアップル——聞いたことがある。これは旧砂漠の方の情報だが、砂漠のどこかのオアシスに、誰もが唸るようなリンゴがある、と。梨派の人間たちをリンゴ派へ寝返させるリンゴがある、と。

誇張が十分に含まれたその噂だったが、そのリンゴは確かに存在すると言われている

た。それが、これか。

「ここまでデカいとは思わなかったぜ。早速いただいても？」

「ああ、これが獲れたのはハンターさんたちのおかげだ。是非食べてくれ」

「にや、いただきますにや」

鮮やかな赤に、両手でも収まり切れないほどの大きさ。太陽の光を享受するそれは、温かな輝きに包まれて。オアシスの景色を反射するその色は、穏やかな輝きを放つていて。そうして確かにここに存在するこのリングゴは、圧倒的な存在感を放っていた。

貴重な一個を贅沢にも三等分したそのリングゴ。外側の鮮やかな赤とは対照的に、内側は穏やかな色に染められていた。白とも黄色とも言えぬ薄い色に、みずみずしい感触。えもしれぬ甘みがその中で眠っていると、その表面を見て俺は確信した。

そうして、そのリングゴをそつと、いや、豪快に齧る。歯に当たるその張った皮は、固さと柔らかさを混ぜ合わせたような弾力性に富んでいた。生半可な顎の力では弾かれてしまいそうな、そんな固さ。それを力強く齧ると、シャリツと小気味良い音が鳴った。皮と実が綺麗に裂け、その度に果汁が溢れてくる。爽やかで透き通るようなその甘み。清涼感とも言うべきか、そのさっぱりとした味は、食べる人の心を洗い流してくれるかのようなのだ。

噛むと伝わるその食感。張りのある固さに、弾力性のある味わい。噛むのが楽しく、

噛めば噛むほど甘みが溢れてくるのでそれがまた楽しくなる。まさに無限ループ。種から木になり、そこから実がなって再び種が出来るような、そんな味の循環を、このリングゴは俺の舌に刻んでいた。

「いやあ、甘くて爽やかにゃ。シヤリシヤリしてて美味しいにゃ!」

「随分と質の良いリングゴだな。そうそうないぞこんなもの……」

「……っ……っ!」

イルルは甘い声で鳴き、俺は思わず感嘆する。そうして見やれば、商人の彼はといえば感極まったかのように涙ぐんでいた。押し殺した声を漏らしながら、俺たちに向けて頭を下げてくる。

「ほんとに……っ! アンタたちに頼んで良かった! これであつしは、あつしらは……っ!」

積年の願いが成就されたのだ。感動するのも無理ないだろう。

しかしまあ、頭を下げるほどのことでもない。俺たちはやれることをやっただけなのだから。

「にゃ、頭を上げてくださいにゃ!」

「そうだよ、気にすんな。こつちこそ有り難うな。こんな美味しいリングゴを教えてください」  
イルルがぶんぶんと首を振り、俺もそれに便乗する。彼の肩をポンポンと叩き、そつ

とビン突き出した。

砂漠のお供、クーラードリンク——用のビンに詰めた達人ビールを大きく掲げる。

「それよりも、このリングゴ獲得を祝して、一杯やろうぜ！」

その夜、砂原はどんちゃん騒ぎに包まれた。ハンターと、アイルーと、商人によるリングゴを讃えた小宴会。持参した酒やつまみでオアシスを染め、長い長い夜を過ごしたのだった。

クーラードリンクに達人ビールを意識するあまり、ホットドリンクを忘れた俺らが後に地獄を見たのは、また別の話である。

く本日のレシピく

『ハップルアップル』

・ハップルアップル

……1個

## 禍いと飯とは今の間にできる

「にやあー！」

白い空。白い大地。

一面雪景色という——よりは、最早凍り付いていると言っても過言ではないほどに染まり切った世界。高い山々からは氷柱が垂れ下がり、深い洞窟からは不穏な風音が鳴り響く。

そう、ここは凍土。氷海にも勝るとも劣らない過酷な地。絶対零度の世界だ。

「ギユアアアア！」

そんな世界に響いたのは、一匹のネコの鳴き声と、巨大な何が切断された音。肉が骨ごと削ぎ落とされ、凍った地面に打ち付けられる。そんな鈍重な音だった。

それが響いたかと思えば、今度はモンスター特有の猛々しい声と共に、巨体が横転する音が大地を奏でる。その音色は震動となり、覆う氷に罅ひびを入れた。

「おお、マジかよー！」

「にや……き、斬れたにや……！」

そう、何のことはない。イルルが投げたブーメランが、目の前のモンスター、ボルボ

ロス亜種の尾を斬り落とした。それだけである。

ボルボロス亜種とは、この凍土に住まう獣竜種だ。まるで氷で形成されたような強固な甲殻を持ち、強靱な脚力でこの大地を駆け回る。運動能力の高さと危険度の高さはこの凍土に住まうモンスターの中でも上位に君臨し、相応に気性も荒い。

「コイツの尻尾は斬りにくいんだ。よくやったな、イルル」

「にや、にやん！ 役に立てたなら何よりにや！」

獣竜種故の体格、尻尾の位置。リーチが致命的なこの片手剣では、奴の尾を斬ることは些か難易度が高い。段差でもなければ厳しいだろう。

だが、イルルはそんな尻尾を、巧みにブーメランを用いて斬り落としてしまった。これには俺も驚きだ。

「だ、旦那さん！ ボルボルが起き上がったにや！」

「ん、ボルボロスな」

ご褒美の意を込めて彼女の頭を撫でていると、ついさつきまで幸せそうに耳を揺らしていたイルルが、驚いたかのように尾を立たせた。そんな彼女の視線の先には、荒い息で態勢を立て直す氷砕竜の姿が。

「さて、どう来るか……？」

「にや……！」

イルルの頭に当てていた手を離し、再び片手剣に手を掛ける。イルルはイルルでブルーランを構え直し、ボルボロスの動きに注視するが。

奴がとつた行動は何ともひょうきんなものだった。自らの尾を斬られ、戦意を喪失してしまつたのだろうか。あれだけ荒れていた鼻息も静め、逃げるように俺たちから顔を背ける。俗に言う、移動という奴だ。

「……あれれ、随分弱つてたみたいだな」

「にやー、足引きずつてるにやあ」

ボルボロスはもう満身創痍とでも言わんばかりに唸り、ゆっくりその武骨な足を引きずり始めた。

方角からして、奴が目指しているのはこのエリアの東。見るからに脆そうな一角だろ。ということはおそらく。

「にや……何するつもりなのにや？ あつちは壁にや……」

「イルル、伏せるぞ」

「にや？」

不思議そうに首を傾げるイルル。これから何が起るのか、全く見当もつかないようだ。俺は奴が一体何をするつもりなのか、昔嫌というほど見てきたから察しがついた。

しゃがんだまま半身を翻し、イルルの前に立つ。未だ無防備な彼女を両手で覆い、抱

き寄せた。そんな突然の行動を不思議に思ったのだろう。素っ頓狂な声を上げては、彼女は大きな瞳で俺を見上げてくる。

その瞬間だった。

「にやつ……!?!」

突然の轟音、雪崩が起こる音、そして崩れゆく岩。数々の衝撃音が響き渡り、ネコの小さな悲鳴をいとも簡単に打ち消した。同時に巻き上がるのは、まるで波のように飛び交う砂利や木片。

そう、あの巨体が凍り付いた壁を破壊したのだった。その崩壊の余波が、このエリアを包んでいく。

「相変わらず荒っぽいな……」

「にや、い、一体何を……!?!」

「見れば分かるさ、ほら」

思わぬ衝撃に相当驚いたのか、イルルは全身を俺の胸に押し付けては小刻みに震えていた。そんな彼女の背中を撫でながら、そつと轟音の元へ目を向ける。

あの一瞬の衝撃は、既に消え失せていた。まるで吹雪に吹き飛ばされたかのように、あつさりど。

「みや……あれ? み、道ができてるにや!」



「そもそも、実はあの向こうにも道があるんだよ」

俺につられて、恐る恐る顔を上げるイルル。そんな彼女だったが、視線の先にある光景に今度は驚かされていた。

ただ、凍土の壁が聳え立っていただけの景色。それが、一本の細い道への入り口と変貌していたのである。初めて見るならば、驚くのも仕方がないことだろう。

「あの先で休むつもりか。……ん？」

「お、追いかけなきゃだにゃー！」

荒い鼻息と、半ば意識が混濁しているかのような瞳で、ボルボロスは再び歩き始めた。自ら切り開いたその道の先に向けて。

そんな巨体が去っていく光景。それに見ては、イルルが俺を催促してくる。弱りながらも、逃走を図るモンスター。確かにこれは、ハンターとしては逃したくないチャンスと言えるだろう。

だが、そんなことはどうでも良かった。今俺の視界を支配しているのは――。

「じゆる……こりやあ中々上等な尻尾じやないか……」

「旦那さん、何してるのにゃー！」

「ふっふっくん、肉焼きセツト」

氷を塗り固めたような、薄い蒼。凍土を凝縮したかのような、透き通った色。そして

それに包まれた、上質な肉。

そう、氷砕竜の尻尾。ボルボロス亜種の尾、である。先程イルルが切り落としたそれが、凍土の氷の上で静かに横たわっていたのだ。

「旦那さん……旦那さん!!? 何で急に肉焼きセット出し始めるのにな?」

ボルボロスといえ、実は尻尾の味が良いとされ人気の高いモンスターであったりする。ハンター自身はあまり食べることはないが、町の料亭などでは普通に使われる、一般的な食材なのだ。

「にや……追いかけないのにや? ゆ、悠長に火の準備をしちやつてるしにやあ……」

そして何と、ボルボロス亜種の尾は原種よりも高級な食材として認知されている。

何故なら、砂原で育つ個体と比べ、凍土で生きる個体の方が美味なのだ。理由としては寒さによって旨みが凝縮されるとか、食性だとか、凍て付いた甲殻が円熟した旨みを作るだとか、諸説は様々だが。

とにかく、この尾は美味しいのだ。

「さて、取り敢えず焼きやすい形に加工するか」

「だ、旦那さん……。ぼ、ボルボーは……?」

「ん、ボルボロスか? もう十分弱らせたし、後で良いだろ。それよりも今は尻尾だ」

「にや……いや、せめて先に捕獲しようにやあ。尻尾こそ、後で良いんじゃないかにや

「？」

「何言ってるんだ。こんな格言聞いたことあるだろ？」尻尾は鮮度が命……ってな」  
 あたふたしながら俺を論そうとするイルル。そんな彼女に向けて、どこかで聞いたこの格言を押し付けた。何とも響きが美しいこの言葉。俺が好きな言葉の中でも、上位に食い込むクオリティだ。

そんな格言を披露してはどや顔を決める俺に対し、イルルはどこか呆れたような、それでいて困ったような顔で呟く。その小さな一言は、あつさりと俺の思考を止めた。

「……は凍土だから……自然の冷凍庫だから、あんまり関係ないんじゃないかやあ」



そんなこんなで、無事メインターゲットであるボルボロス亜種の捕獲を済ませた俺たち。

勿論俺は自分の意志でボルボロスを捕獲したのであって、論破されたとかそういうものではない。先に済ませた方が効率が良いと判断したのであって、そう大した理由ではないのだ。

とにかく、そんな思いは捕獲用麻醉玉に込めて二発ほどぶつけておいた。

「さて、焼くか」

「にやあ！ これですつきり焼けるにや！」

凍土の最奥で安らかに眠る奴をしつかり見届けてから、俺たちはゆつくりキャンプまで戻ってきた。当然、あの大きな尾をしつかり担いで、だが。

クエストが成功したことへの安心感か、イルルは落ち着いた笑顔をを見せてはそう呟いた。キャンプの椅子に腰かけては、安堵の鳴き声を一つ上げる。

「取り敢えず……邪魔な甲殻を剥がして、焼きやすい形に仕上げないとな」

「にや、一体どうするのにや？」

「剥ぎ取りナイフとデイズアイを使って、いつもの生肉サイズに加工するよ」

凍り付いた甲殻は、火属性の片手剣『デイズアイ』の熱で溶かし、そこから斬れ味抜群のレギオスナイフで斬り込みを入れる。右手左手に収まったそれぞれの刃物を丁寧に振るい、太く大きなその尾をじっくり加工していく。

熱によつて溶かされた氷を、ナイフでゆつくり剥がす。 unnecessary部分を削ぎ落としていけば、その下で眠っていた肉がゆつくり顔を出し始めた。

「お、青緑色の外殻だ。もう少しだな……」

「にやあ……何だか、旦那さんいつも以上に丁寧だにや」

「当たり前だろ。コイツの調理は骨が折れるんだ」

元々ボルボロス亜種の調理は、素人がやれるものではない。不用意に刻もうとすれば、表面の水と内部の肉が混ざり合い、その味を著しく悪化させてしまう。これを調理するには、ゆっくり氷を溶かしながら、それを丁寧に尾から落としていくという精巧な作業を要求されるのだ。

それこそ、本来ならこんな場所ではなく設備の揃った厨房などでやるべきなのだが、所詮無い物強請りだろう。それにやはり、獲れたてが何より旨いのだ。

「だけど、今のところ上手くいつてる。もう少しだ」

「にゃー。何気に凄いにゃ、旦那さん」

感心するイルルの声を聞きながら、再び意識を集中させる。外殻が見えてきたなら、いよいよゴールも目前だ。氷の殻を引き剥がして、外殻を削ぎ落としていけば、旨みの宝庫——氷砕竜の肉が見えてくる。

「にゃあ……ボ、ボク、肉焼きセットの準備するにゃね」

「……ん、頼む。ついでに焚火のところでフライパンも熱してくれないか?」

「にゃ? フライパンかにゃ? もしかして本焼きの前の下準備的なあれかにゃ?」

「そうそう、それぞれ」

何かやれることはないか、という顔でそう言ってくれるイルル。そんな彼女の、細かい要求に快く応えてくれる姿に感謝しながら、俺は最後の仕上げにかかった。邪魔な氷

を全て溶かして落とし、食べれない外殻を肉から剥がしていく。この作業も、ただ力尽くで引き剥がすと肉まで大きく損傷してしまうため注意が必要だ。

ではどうするか？ 答えは単純、外殻と肉の隙間にナイフを這わせ、斬り裂いていけば良い。

「……何か、果物の皮むきみたいだ」

「そ、そんなもんなのかにや？ ……にや、フライパンオツケーにや」

「お、助かる。ナイスタイミング」

丁度フライパンが十分温まった段階で、俺の方の加工も完了した。

青緑の美しい外殻が、音を立てて雪に落ちる。固く重い、その枷を外された氷砕竜の肉。凍土の白い日差しを浴びて、薄く煌めくその桃色に肉に、俺は思わず舌なめずりしてしまった。

「旦那さん、涎！ 涎が垂れてるにや！」

「じゆる……すまん。さて、じゃあ内皮をフライパンにつけてつと」

銀色に輝くそのフライパン。薄く油が敷かれたその表面に、俺は随分小さくなった氷砕竜の尾を押し付けた。肉が焼け、油が弾ける音が凍土に鳴り響く。同時に溢れる、肉の鼻を刺激する香り。ああ、良い香りだ。

「ぎゅと八分ほど。それくらいうつすら焼こう」

「にや、そうすると美味しくなるのかにや？」

「何か料理本にそう書かれてたから……詳しい理由はよく分らんが」

「にや……結構ざつくばらんのにや」

俺の回答に少し呆れたような声を漏らすイルル。

そんな彼女だが、立ち昇る肉の香りは十分に感じているようで、その表情は満更でもなさそう。至近距離で浴びる俺は勿論、口角が上がり行くのを抑えるので精一杯である。

「さて、ここで味付けもしようかな。イルル、ポーチからピンを取り出してくれるか？」  
「にや、分かったにや。……これかにや？」

ベースキャンプの隅で蹲うずくまっていた俺のポーチから、イルルは一つピンを取り出した。光を浴びて輝くそれは、今回のために用意したモガ塩とモガモガリック、そしてハーブ系の薬草を我流黄金比でブレンドした調味料だ。

「おう、センキュー。さて、これらをじっくり染み込ませるか」

「ふにゆ、良い香りだにや」

「さながら、ガリックハーブってな」

薄い桃色の肉に、薄茶色の焼き目が見えてきた頃。そのタイミングで、油が気泡と化すフライパンの上に。その上でじっくり身を躍らせる肉に。俺は静かに、ピンの中身を

振り掛ける。

途端に、香りに変化が起きた。純粹な肉の香りの中に、ニンニクの風情ある香りと、菓草の上品な匂いが混ざり始めたのだ。食欲を否応なしに促進させるその香りに、俺は思わずにやけてしまう。

「うんうん、良い感じだ。さて、イルルよ。肉焼きセットの準備もそろそろいいか?」

「にや、火の準備は完了だにや。熱をしっかりと貯めてるにや」

「よしよし、助かるよ。そろそろそっちに移る時間だしな」

調味料をしっかりと染み込ませたその肉。じゅうじゅうと景気の良い音を立てるそれを、俺はそつとフライパンから摘まみ上げた。

肉から突き出た骨掴み、肉焼きセットへと静かに移し変える。熱を十分に貯めた肉焼きセット——アツアツなそれは、仕上げにはピツタシなのだ。

「さて、あとはこんがりこんがり焼き上げるんだが……イルル、肉焼きセットのハンドルを回してくれないか?」

「にや、ボ、ボクがにや……? 旦那さんはどうするのにや?」

「デイズアイの火を上から当てる。さながらオーブンのように、周りから十分に熱しように思うんだ」

「にや、にやるほど……。分かったにや!」



元より熱に弱いその肉質。それを、まるでオーブンのように熱で囲い、その表面から中の芯までしつかり熱を通す。滴る肉汁は氷のように焔めいて、溢れる香りは肉の匂いも調味料の風味もひとまとめにして。

そうして、どんどん焼き上がっていく氷砕竜の尾。桃色だったはずのそれは、既に品の良い焼き目に彩られていた。

「こんがりこんがりこんがりにや〜、ウルトラ上手に焼つけるかにや〜」  
「む……そろそろ良さそうだ」

「にやっ！ ウルトラ上手に、焼けましたにや〜！」

先程フライパンで焼いた時よりもさらに時間を掛けて、じっくりじっくり火を通したその肉は、気泡と化していく脂を奏でていく。匂いにしても、見た目にしても、もう完成と言っても差し支えないだろう。

イルルはイルルで、ご機嫌そうに歌っては、焼き上がったその肉を装備披露するかのようによく掲げた。

「うんうん、芳醇な肉の香りにニンニクやハーブの上品な匂い。良い感じだな」

「にや、旦那さん。早く食べようにや〜！」

レギオスナイフを取り出しては、焼き上がったそれを均等に切り分ける。その際見えたと肉の断片もよく火が通っており、肉の層にはどこかとろみのある肉汁がたっぷり滴っていた。

待ち切れないと言わんばかりに目を輝かせながら俺を急かすイルルに、切り分けた骨とそれについていた肉を渡し、俺は俺で残ったもう一つのこんがり氷砕竜の尾を持ち上げる。半分に切り分けられていても、どこかずっしりとした重量感のようなものが感じられる。自らが大型モンスターであったことを主張しているような、そんな重さだ。

「よっしゃ、いただきます」

「いったいただきますにゃー」

まず一口。焦げ茶色が美しいその表面に、歯を喰い込ませた。

最初にやってくるのは、焼かれたことよって生まれたその表面の感触。内皮かと思われるその食感。パリッとしており、しかしどこかちつともしていた。まるで柔らかい皮を、お焦げが丁寧包んでいるような、そんな感触だ。

そんな第一ステップを乗り越えた先には、とうとう本番とも言える骨周りの肉が俺を待っていた。中までよく焼けたその芳醇な層。肉と肉が重なる贅沢なその層に、俺は一心に齧<sup>かじ</sup>りつく。

これは、思った以上に固い。いや、固いという表現では些か語弊があるかもしれない

が、とにかくそれくらい力強い感触をしているのだ。いつか食べたグラビモスのせせりにも負けない、強い感触。軟骨とまでは流石にいかないが、砂肝に近い強さだと思う。

噛めば噛むほど、その肉厚な食感を楽しめば楽しむほど、肉汁と、それに伴った氷砕竜の味が口の中で溢れてきた。見た目と、肉汁の量にしてはややあつさりとした味。想像よりも、淡泊な味わい。それが、この肉の特徴だった。よく円熟した旨みではあるものの、食感と比較すれば微妙にインパクトの薄い味である。

だがそれも、かえって好都合だ。主張し過ぎない味は、逆に言えばよく調和する味ということ他ならない。つまり、下準備で染み込ませたあの調味料の味はしつかり残っているのである。

「……ハーブの香りとニンニクの風味が、しつとりと肉に絡んでいくなあ。それでいてあんまりくどくないのも好印象だ」

「塩であつさり味付けしたのも良かったにゃあ。程よい塩味が、肉の味を加速させるにゃ」

はぐはぐと肉を頬張っては、イルルは嬉しそうに顔を上げた。彼女としては、今回の料理に満足しているようだ。満面の笑顔がそう物語っている。

俺？ 俺はなあ、確かに美味しいとは感じるが、もう少し改善できたのではとも思っている。少なくとも、さすらいのコックさんが調理した氷砕竜の尾と比べれば、まだまだ

味が劣っているだろう。

「うーん……まあこんなもんか。料理は奥が深いな、ほんと」

「旦那さん、いまいち満足いつてない顔にや」

「まあな。……こうなったら、捕獲した個体バラシて研究してみるか……？」

「や、やめてにや！ クエスト失敗になっちゃうにや！」

く本日のレシピく

『ボルボテール丸焼き：ガーリッククハープ風』

・氷砕竜の尾 ……一本（要加工）

・我流調味料

・モガ塩

・モガモガーリック

・薬草（ハープもの）……各種適量

突然、耳が張り裂けそうになるくらいの高音が響いた。

崩された壁をさらに粉碎するような、慈悲を感じさせない破壊音。重いものが闊歩する、大地が軋むような足音。そして、その音に溶けるように聞こえてくる、生物特有の唸り声。

その唸り声が、突然弾けた。自らを主張するかのような、特大の咆哮音へと変貌したのだった。

「にやつ!? ……にや、何? 今の……」  
「この声……」

その突然の声に、イルルは恐怖と驚愕を混ぜ合わせた顔で身を震わせる。本能的な恐怖感を煽るような、精神を掻き乱されるような、そんな声だ。彼女のような反応も仕方ないだろう。

だが、俺はこの声に聞き覚えがあった。村の、故郷での最後の記憶に。タンジアギルドでの最後の狩りで。まるで油污れのように、未だ消えない嫌な記憶の奥底にねつたり

と絡みついた、あの怒号。

不意に、以前耳にしたトレッドの言葉が脳を過ぎった。

『……それで、あのモンスターを見失ってしまったんですよ。——君の探し求めた、アイツがね』

雨に濡れたユクモ村で、アシラーメンの香りに包まれて。掠れるように漏れた、彼の言葉。憂うような、困ったような。そんな口振りで、彼は確かにそう言っていたのだ。

つまり、まさか。

「にや……? だ、旦那さん、どこ行くのにや?」

「……確かめに」

居ても立つても居られない、とはこのような状況で使うのだろうか。

頭の隅でそう思いながら、俺はキャンプを後にした。慌てて追いかけて、困ったように声を掛けてくるイルルにも一切振り返らずに。



ベースキャンプに隣接するエリアー。先程まで激戦を繰り広げた、開けた土地。

そんな白い凍土の世界は、おびただ夥しい量の赤で染められていた。鮮血が荒々しく飛び、肉

片やら氷の塊が無残に舞い散っている。そしてその中心に、荒い鼻息で肉を抉る巨大な影が一つ。

黒と緑と紫を混ぜ合わせたような、狂気的な体色。幾重にも重なって伸びる、不気味な牙。細くも力強い二本の脚に、極太の悍ましい尾。どこも傷だらけの、あまり見つめていたくない表皮。

見る者を戦慄させるその影が、先程捕獲したはずのボルボロス亜種——その頭殻を貪っていた。

「にや……な、何あのモンスター……」

「……イビルジョー。まさか、本当に？」

そのあまりに異常な姿に、流石のイルルも普段からふさふさな尾をさらに毛を逆立たせながら二、三步後ずさった。一方の俺は、こちらに気付いて振り返った奴の顔を見て。見て、思考が停止した。左手で握っていた筈のデイズアイはゆっくりと零れ落ち、浅い雪の層に突き刺さる。

——そう、突き刺さっているのだ。奴の片目に、その左目に。龍を滅する片手剣、封龍剣【絶一門】が。

「にや……だ、旦那さん？」

「……まだ、そこに……。親父の——」

獲物を見定めるように、隻眼に色を燈す恐暴竜にも。俺の異変に気付き、恐る恐る顔を覗き込むイルルにも。目に映る光景が全く頭に入っていない。それどころか、まるでフラッシュバックのように俺の記憶が湧き上がる。潰された左目。

そこに突き刺さる、封龍劍【絶一門】。

俺が刺した、その片手劍。

かつてそれを握っていた、大きな手。

その手ごと飲み込んだ、棘の山のようなあの口——。

そんな、思考と記憶に飲み込まれそうなその瞬間。妙に甲高く、それでいて骨のある奇妙な音が鳴り響いた。

巨竜の骨を用いた、ギルドが有する特注の角笛。その厳かな音色が、この凍土を波のように覆っていく。

「……………」の音——、「これ、強制撤退命令の音色にや！」

「——チツ……」

凍土から、俺の頭の中まで。音速で駆け巡ったそれに、俺の意識は無理矢理引き戻さ



れた。

一方で、その音のコードを認識するや否や、イルルは慌てて俺の手を握り締めた。

「だ、旦那さん！ 逃げるにゃ！」

「……ああ、分かったよ」

吹雪に霞む凍土の空。その上で、チカチカと灯りを燈す影がある。ギルドの古龍観測号が、ご丁寧にこの状況を観測しているようだった。

その気球を包む吹雪もいよいよ荒れに荒れ、同時に地団太を踏むイビルジョーのその衝撃に、凍土を覆う氷は体に罅を入れ始める。

戦おうにも戦えない状況、まさにそれだった。

内に湧き上がる感情を、燃え滾る戦意を。マグマのように煮える殺意をも。

この理不尽な状況に唾を吐き捨てながら、処理し切れない思いを無理矢理全て飲み込んだ。自分に言い聞かせるように、抑え込むように。

懸命に俺を引くイルルの手を握り締め、俺も奴から背を向ける。そうして、割れる大地を踏み締めた。氷に突き刺さったデイズアイも置き去りにして。

## 霜を履みて凍土へ至る

その夜、凍土に最も近いこの村は、不穏な空気に包まれていた。村をすぐ出た先に、ギルドが狩猟に規制を設けるほどのモンスターがいる。その思いが、村民の意識をより凍て付かせていた。

耳の中で反響するような音を立てる吹雪は、その勢いをより増して。時間に比例するように増える雪は、さらに背を伸ばしていく。

——誰も彼も家から出ようとしない、そんな夜だ。通りにも、路地裏にも、アイルー一匹すらいない。それが、俺にとっては都合が良かった。

「……何処に行くんだい？」

誰にも気付かれぬ、そう思つてこの時間を選んだのだが、その思いは志半ばで消え去つた。この村に設けられた小さな役場——ギルドの情報を整理するこの小さな施設の外で、俺を待つていた人物がいたからだ。

雪を散らした黒い髪。白と紫を基調とした、如何にもユクモ風の装備。背中に長い太刀を背負つた、若い男。あまり会いたくなかつた奴が、そこにいた。

「……イズモ」

「こんな吹雪の中でお散歩〜ってかい？ ……そんなわけないよなあ？ そんな平和な理由なら、わざわざそんな装備引つ張り出して来ないもんねえ？」

わざとらしい口調で俺を冷やかす彼だったが、その瞳は何時もとは違った。これから起こり得るであろう事態に気付いた、覚悟を決めたような表情だった。

そんな彼の顔を、目深に被ったフードの向こうから見ると、俺は呆れたように笑う。「散歩だよ。ちよつと凍土まで、な」

「七星剣斧【開陽】、そしてネブラXシリーズ……。まだ持ってたんだね。わざわざそんな昔の装備出してまで、凍土へ散歩かよ？」

「片手剣デイスアイ、置いて来ちまったからな。猟場に取りに行くんだ、それなりの装備を着込むもんだろ？」

互いに引かない軽口の交わり合い。だが、お互い腹を探るまでもない。イズモも気付いているだろう。俺がわざわざ、この吹雪の夜に出てきた訳を。

「——何で敢えて昔の装備を使うんだ？ タンジアギルドから離れた君がさ」  
「やり残した……と言うべきかな」

「……やり残した？」

雪が掛かるフードを少しずらし、足まで掛かるコートを揺らしながら、俺はもう一度

イズモに向き直した。住民も、相棒のイルルさえも眠りについたこの時間。そんな中でも俺が来ることを見越していた、友人の誠意に応えるように。

「俺にとつて、タンジアで最後に受けたあのクエストはまだ終わってないんだよ。この手でアイツを仕留めなきゃ……俺は——」

「……アイツとの戦闘はあまりに危険だつて、ギルドがそう定めてるじゃん？ わざわざ規約違反までしてそれを侵すのかい？」

あの個体——隻眼のイビルジョーは、ただの個体ではない。普段よりもより黒ずんだその体に、他に類を見ない筋量、そして圧倒的密度の龍属性エネルギー。

そう。分かりやすく言うならば、あのモンスターはギルドから二つ名を与えられるほどの危険度と認知されているのだ。

「シグがバルバレを——延ひいては大老殿を目指したのは、特別許可証の取得が目当てだったんだろ？ アイツを狩猟するための……」

「そうだな。タンジアギルドが許可に涉る個体だからな。正式に狩るならハンターズギルドの最高機関、大老殿しか方法はないだろう」

「……だったら、今わざわざ行かなくてもいいじゃんかよ？ どうしてそんな危険を冒してまで——」

「ハンターならさ、村に迫った危険を放置するわけには行かないだろう。」

フード越しに村の外の、凍土の方へ目を向ける。

するとそこから、吹雪に混じった竜の遠吠えが村へとやってきた。まるで竜と竜が争っているような、不穏な轟音だ。いつこの村も巻き込まれるか分からない。そう感じるのは、きつと俺だけじゃないだろう。

しかし、そんな俺のもつともらしい言い訳も、付き合いの長いイズモには通じないようだ。

「よくもまあらしくもないことを易々と……。んで、本音は？」

「一刻も早く殺したい」

息を吐くようにあつさり。そうやって漏れた俺の本音に、イズモは困ったように溜息をついた。やっぱりと言わんばかりに頭を掻きながら、いつか会った時のように腰のポーチから紙の束を取り出し、俺に突き付けてくる。

それは、何の変哲もない凍土の採取ツアーに関する書類だった。どこのギルドにも、どこの役場にも基盤として用意されているクエスト。駆け出しからベテランまでお世話になる採取クエストだ。

「……オレにはお前を止める権利がないから、これ以上は口を挿まない。だけど、せめてこれに印を押してきなよ。如何にアイツと言えど、密猟つちやあ密猟になつちやうから  
「さ」

「え、まさか……わざわざ役場から盗んで来たのか？」

「スラムの盗人育ちが、こんなところで役立つなんて皮肉だよねえ。ほら、早く押しな」  
「違う。……助かるよ」

ギルドの管理を介さねば、狩猟地に出向いた狩りは密猟と見なされる。そのためモンスターを狩るには、ハンターとギルドそれぞれ印を押し互いに了承しなければならぬ。

俺は俺が持つ、俺が狩りに行くという証明たる印を。ギルドはそれを認める印を。ただしそれは、今だけイズモの手にあるのだが。

「取り敢えずこれで書類上の正当性は用意できた。あとは……まあ、上手いことやれよな」

「最悪、村の存在を天秤にかけるさ。」ルールを守って村が滅ぶのを黙って見ていました……なんてシャレにならないし」

「それもそうだね。……ま、それも討伐隊が組まれるまでだから時間の問題かな。こんな吹雪だから、いつ到着できるかは知らないけどね」

ギルドからの討伐隊。それが現れれば、俺の行動は異端以外何者でもなくなる。まあ、こんな不正手段で正当性を得ている時点で問題だらけなのだが。

とにかく、今このタイミングを逃す訳にはいかない。昼間こそ、古龍観測号に丸見え

だったため戦うに戦えなかったが、今は違う。

吹雪に包まれた深夜——これなら、ギルドの眼にも映らない。

「この紙は、こっさり戻しておくから心配するな。指紋対策もしっかりしてるしねっ！」

「……お前がこんな頼りになるとは思わなかったよ。んじゃ、行ってくる」

「いいってことよ。……だから、死ぬなよ」

薄い手袋に包まれた両手を振りながら、イズモは俺を見送った。体にかかる雪も気にしないで、むしろこれから起こることばかりに気を掛けて。

そんなどこか滑稽な協力者に感謝しながら、俺は再び歩き出す。前しか見えないように、フードをもっと深く被って。



恐暴竜、イビルジョー。

それは俗に言う古龍級生物であり、全生物にとっての危険そのものでもある。何といても特徴的なのが、そのあまりある食欲だ。動き続けるためには何か食べなくてはならないのは、生物にとって当然とも言えることなのだが、奴だけは度が過ぎている。必要とする摂取量の桁が違うのだ。

なお、これは通常種の話である。

「寒っ……」

だが、この一面銀世界の中で佇むあの黒々しい個体は、今言ったような通常種とは一線画していると言えるだろう。

アイツは、かつて水没林近くにあった俺の故郷を喰らい尽した、俺にとつて最も因縁深いモンスターだ。あの左目に突き刺さった封龍剣「絶一門」が、何よりの証明となっている。あれは紛れもない、俺が奴に刺したものだ。今より十年近く前の話だが。

先程イズモにも指摘された通り、俺がバルバレに拠点を変えたのは、ゆくゆくは大老殿に属し、G級特別許可証を取得することが目的だった。タンジアギルドは奴を危険視するあまり、ハンターに狩猟制限を設ける——つまり奴の狩猟権を外部へ譲渡するとう、頭の固いルールを作ってしまった。故に俺は、変えざるを得なかったのだ。

現時点ではその目的にこそ到達出来ていないが、俺にとつてはそれはあくまでも手段であり、本来の目的はあのイビルジョーの討伐である。段階を飛ばしてしまつたが、これはこれで都合かもしれない。

奴が現れた。ギルドも情報が錯綜しており、規制が追い付いていない。

——狩るなら、今だ。

「久々のスラッシュアックスだな。……だけど、やっぱり馴染み深いね」



当時の俺はギルドマスターや”あいつ”の制止を振り切つて奴に挑み、見事に返り討ちに遭つた。幸い大怪我だけで済んだものの、当然その単独行為はギルドの懲罰対象で。

結果、俺のギルドカードは初期化された。今までの狩猟履歴も、ハンターランクも全て抹消されたのだ。制度的に、俺の行動を制限するために。

「剣も斧も……いけるな、よし」

そんな失つた経歴の中で使つていたのがこの剣斧——七星剣斧【開陽】。あれからこつそり持つていたこの武器。この時のために、持ち続けていた武器。

守りをかなぎり捨てて、ひたすら攻める。それがスラツシユアックスだ。

当時の俺は、そんな謳い文句に惹かれてこの武器を手にした。

その時こそ、いつかグラビモスのシチューを作つた時に漏らした、命に対する感謝などまるで考えなかつた俺だ。トレッドの言つていた、モンスターを殺すことしか考えなかつた、俺だ。

あの時、モガの村で会つた村長の顔が不意に過ぎつた。彼はあの時何を言いかけていたのか、今ならはつきり分かる気がする。

そう。きつと、彼が言いかけていた言葉は——。

復讐だ。

「<sup>まじょうたん</sup>瘡瘵<sup>ゾ</sup> イビルジョー……」

四肢を消し飛ばされた氷牙竜。その血肉を食い漁る奴——瘡瘵と目が合った。

黒紫のコートを浮かし、俺は背中の大斧を突き付ける。一方の奴は、頬張っていた内臓をぐくんと呑み込んで、ゆっくり俺の方に向き直した。

そんな奴の背後には、悍ましいくらいに死体の山が築かれている。昼間に俺たちが相対したボルボロス亜種は勿論、骨が剥き出しになったギギネブラ、そして長い身を引き千切られたアグナコトル亜種まで。

「まさに死屍累々つてか？ 一体どれだけ命を積めば気が済むんだか」  
「グウルルル……」

薄く透き通るような刃。その白に、おどろおどろしい紅が溶け込んでくる。光を失った左目からは、赤黒い血液が垂れ続け、爛々と光る右目は血走りながらも俺を見据えていた。

黒と緑と紫を混ぜ合わせたようなその体には、古いのも新しいのもごちゃ混ぜにした傷が並び、そこから我先にと血が溢れている。ドス黒く、龍属性を纏った不気味な色だ。

「——やっと、見つけた。やっとお前と戦える」

ずっと待っていたこの瞬間に、俺の心は静かに震え始めた。タンジアにいた頃から——いや、タンジアから離れても、ずっとコイツを殺すことだけは忘れなかったのだ。村を、民を、家族を。全て喰らったコイツを仕留めるまで、俺は。

瞬間、俺の目に飛び込んできたのは、奴のその狂氣的な口。俺の殺意も復讐心も、奴には全く届いていない。奴にとつては、俺もただの飯でしかないのだろうか。

そんな忌々しい口を潜り抜け、そのままから空きの腹へと潜り込んだ。筋張った腹が俺へと迫り、垂れる鮮血が降り掛かる。——それを振り払うように、俺は斧を大きく振り回した。

「はっ！……チィ、肉が重いな」

右、左、右と振り回したところで、斧を振る手を止める。鈍い感触をそのままに、今度は横へステップし、その腹の下から退避した。見れば、腹の虫ならぬ腹の下の虫を押し潰そうと地団太を踏む奴の姿が。超質量のそれに踏み付けられたら一体どうなるか——想像するのも容易い。

大きく地を踏み付けた瞬間、再び大地に亀裂が走った。氷が割れ、岩が隆起するその衝撃波。危うく足をとられそうになる。

「ゴアアアッ！」

「……うっぜえ！」

そんなうざったい衝撃は、跳んで避けるに限る。そう判断した俺は、隆起し始める岩を軸に飛び上った。そうして、重力に身を任せながら斧を振る。

振り下ろす瞬間、握りを作動させてモードを変えた。それと同時に、秘められたビンから赤い光が迸り、斧が音を立てて流れ始める。

「ギユアツ!？」

表皮の傷をさらに抉ったその一撃に、奴は身を振らせながら足を纏らせた。俺から一歩離れるように立ち直した奴。そんな奴の血と、ビンのエネルギーで身を染める剣斧。先程まで斧だったそれは、今は剣の形へと姿を変えていた。

「どうだ筋肉ダルマ。この『味』は覚えてるだろ？ 美味かっただろ？」

「グルウ……グラアアアア！」

「……ま、味は味でも斬れ味の方だけど」

挑発するように剣を持ち直した俺に向けて、奴は唸る。その唸り声は怒号へと変わっていく。筋肉の塊とも言えるその体は、まるで一つの砲弾のように身を固めた。そう、タツクルだ。

砲弾という例えの通り、その威力は凄まじい。それこそ、そこらの岩なら簡単に粉砕してしまうほどだ。

だが、如何に奴が巨大でその力が強大と言っても、何処かに必ず隙がある。この瞬間、この場合ならば、奴の隙は——その両脚の隙間だ。

「……だっ！」

荒れ狂う砲弾が、俺の真上を通り抜ける。その砲弾に向けて、光る刀身がざつくりと斬り込みを入れた。強烈なタツクルを、奴の脚の隙間に立つことで避けた、ただそれだけである。ただ少し、刃を添えただけであつて——。

それが引き金となった。小さな体が自分の口に入らない、そんな苛々を募らせた奴がとうとう激昂したのだった。

「ヴオオオオオアアアアアアツ!!」

「……ッ!?!」

肉が弾けた。そう表現すればいいのだろうか。

光を放つ龍属性エネルギーが、奴の体を引き千切るように溢れだしたのだ。頭頂部だけではない。全身の、その小さな傷の一つ一つから。

爛々と光る右目。苦痛に悶えるその体。憤怒に燃えるその心。あのドス黒い体は、龍属性の赤黒い靄へと変わっていた。

「なっ……何だこいつ。滅茶苦茶悪化してる……のか?」

まるで霧のように溢れるもの。雷のように、バチバチと音を立てるもの。溢れる龍属

性は様相こそ様々だが、どれも疎まずにはられない恐怖感を煽ってくる。

まさか、まさか——変わったのは、強くなつたのは、俺だけじゃないということか。



「さて、あとはこれを書類の山に戻してつと。奥の方に突っ込んでけば、発見も遅れるでしよ」

シガレットが後にしたこの村。先程彼を呼び止めたイズモは、見えなくなった彼の姿を確認しては静かにそうぼやいていた。

村の役場からこつそり採取ツアーに関する書類を盗み出したのは、他にもない彼だ。ギルドの許可なく狩猟地で狩りを行えば、それは密猟として扱われる。その対策として、せめて形の上でも正当性を用意しようとした、彼の強かな企みだった。

「ルール違反と密猟の、グレーゾーンだけどね……」

書類の山へ返しておけば、役員が気付くことも遅れるだろう。ただでさえ情報の伝達に滞りが起きているこの事態にそんな細工を挿めば、結果この逸脱行為はやむやにならぬ。彼はそう考えたのだ。

「さーて、今のところ討伐隊が接近してるなんて情報もないし。細かい調整はあのギル

ドナイト様がやってくるかなーっ」

背伸びした彼のそんなぼやきは、ゆっくり吹雪へ溶け込んでいく。その寒さに身震いしながら、彼は役場の扉に手を掛けた。役場の外にも、中にも。誰もいないことを確認した彼は、こっそりとドアノブに手を掛け、その中へ入っていく。

——そんな彼の姿を物陰からこっそり見つめていた一匹の影。彼の独り言を聞いていた影は、意を決するように小さな鳴き声を上げた。

そして、雪の同化するのではと思う程白いその体を、凍土へと続く道へと走らせ始めたのだった。



「ハア、ハア……。こんのツ！」

勢いよく振り上げた斧。疲労を拭いきれないその一撃は、奴の頭を斬り裂いた。震える俺の手に、武器と武器がぶつかり合うような感触が伝わってくる。どうやら、龍のオーラに包まれた頭部の、その左目に当たったようだ。

ただでさえ抉られていたその左眼孔を、釘打つように再び抉られたのなら、その痛みは絶するものだろう。悲鳴を上げて顔を仰げ反らした奴の姿が、それを如実に物語って

いる。

「グアウウウウ……」

「ハア……しぶといな。さつさと死ねよ豚野郎……」

互いに、疲労困憊と言った状態だ。いや、空きつ腹とでも言うべきか。霞む視界に発破をかけながら、俺は奴に切っ先を向けて柄を握り締めるが——どこか力が入らない。

一方それは奴も同じのようで、あの溢れさせていた龍属性オーラは今や萎む<sup>しぼ</sup>ように鎮まっていた。その様子に、俺は少し安心する。

——何故なら、あのオーラには絶対触れてはいけないと分かったからだ。

「……ッ！　痛むな畜生……」

奴のブレスを直撃した左脚。それが、何よりの証明だ。ボロボロの焼け爛れ、半壊しかけた左下半身の装備。あのブレスを受けただけでこの体たらくなんて、何とも情けない。

まあ、元より強酸性の唾液をもったイビルジョーだ。きつと、それも混ざり込んだ吐息だったのだろう。だから、直撃した装備を溶かしてしまった。

「——と思うんだが……変だな。妙に体が怠い……」

まるで毒に蝕まれているような、そんな感覚だ。見る見るうちに体力が減少していくのが分かる。視界が霞む。手に力が入らない。体が重い——。



「……ッ！ 不意打ちかよおい！」

「グルルア！」

そんな俺に向けて、奴は涎で溢れる牙を向けた。疲労していながらも、凄まじい速度で迫り来るそれに、俺は思わず武器を落として跳び避ける。着地もとれず、無様な格好で転がって奴から距離を離れた。

一方のイビルジョーも、左側面<sup>死</sup>に逃げられた獲物を見失ったようで、困ったような声を上げている。

「スタミナの減りがマズいな。……コイツを飲むか」

幸か不幸か、武器を落としたことによつて両手が自由になつたのだ。今なら、ポーチの中身も探ることが出来る。

そう感じた俺は、瞬時にポーチに手を突っ込み、ビンに包まれた黄色の飲料——強走薬グレートを取り出した。

「……ぐくく」

即座に流し込んだそれは、一気に口の中に浸透していく。自ら調査した俺流強走薬グレート。爽やかな酸味と、微量の炭酸を付け足した逸品だ。

そもそも強走薬グレートとは、こんがり肉と狂走エキスを調合することで出来るスタミナ増強ドリンクだ。その味は、狂走エキスのクセの強い酸味がとろけ、その中に肉の

旨みが染み込んだもの。

とにかく、変な味とも言っていないだろう。

「グウアアッ！」

「むっ……」

ようやく俺に気付いたイビルジョーは、その凶悪な顎を地面に擦らせ——凍土の氷をそのまま、氷弾として撃ってきた。巨岩ならぬその巨氷は、凍て付く風を身に纏い、その身をさらに鋭くさせる。

その氷のように鋭い炭酸を喉で感じながら、俺は身を反らしてそれを躲す。ひと手間増やした場合は、微妙な味の強走薬グレートに変革を齎もたらした。

「うざってえ！ どけよこのゴーヤがッ！」

氷を避けたその反動を、口内を刺激する炭酸と特製の旨みを。溢れるその活力を利用して、俺は前へと脚を動かす。

口内から喉へ。喉から胃へ。胃から全身へ。

そうして回り行く強走薬グレートの力が、俺の体に火をつけた。狂走エキスの濃い味を逆手に取った、酸味を生かした味へと調整したこの喉越し。隠し味にポツケレモンを投入したおかげで、後味の悪い酸味は風味豊かに、そして果実感のある爽やかさを秘めている。

「ゴアアアッ！」

全力で走る俺を撃退しようと、奴はその極太の尾を振り回し始めた。風を斬るその様は何とも威圧的で、思わず身が竦んでしまいそうだ。

だが、止まらない。全身を駆け巡る酸味が、そして肉の旨みが俺の尻を蹴り上げているのだから。

自ら魂を込めて焼き上げたこんがり肉。それをまず包丁でブロック状に切り分け、スライスと細切りを重ねがけ、ようやく細かくなつたそれを今度は包丁の背で細かく刻む。そうして出来上がった自家製挽肉をじっくり煮込み、溶かし、抽出する。まるで濾過ろかをするかのような作業の果てに出来上がったのがこの強走薬グレートだ。肉の栄養素が十分に溶け込み、酸味に絡んだ一品である。

この旨みが、この活力があれば、奴の尾などどうということはない。振り回されるそれをスライディングで躲し、地に墜ちた斧を掴み直し——お留守となつたその細い脚を斬り上げるなんて造作もないことだ。

「オラオラオラアッ！」

そんな隙だらけの脚に向けて、ここぞとばかりにぶん回しを叩き込む。強走効果が全身を駆け巡る今、スタミナなど俺には知ったことではない。いくらでもこの重い斧を振り回せる——そんな気がした。

「グウオウツ!?」

三度目だったか、四度目だったか。傷を抉るその連撃に、イビルジョーはどうとう踏ん張り切れず倒れ込んだ。超重量が音を立てて崩れ、凍土の氷に大きな罅を入れる。

最も脆弱な腹を露わにした奴。俺に向けて、弱点を剥き出しにしたイビルジョー。

これ以上のチャンスなど、他にあるだろうか。

「たんと食いな、このクソデブ野郎……!」

そんな腹に向けて、俺は右脚を踏み込んだ。そうして腰を捻り、それを軸に斧を薙ぎ払う。俺の周囲を一掃するかなのようなその軌跡は、ざつくりと奴の腹を斬り裂いた。

勿論、それで攻撃の手を休めるつもりはない。遠心力で大きく唸る斧の柄を回すように握り、再び変形させる。流れるように形を変えた剣は、溢れ出るビンの力のままに走り出し――。

まるでバツを描くように斬り結ばれたその斬撃が、横一文字にさらなる文字を増やしていく。

「コイツで最後だ……ッ!」

ざつくりと斬り開かれたその腹の傷に、今度は切っ先をそのまま突き刺した。ずぶりと、肉を抉る感触が手に伝わってくる。まるで肉を料理しやすいように加工しているかのような、そんな感触だ。料理用の肉より、固く重いという前置きが付くが。

そんな肉の中で、俺は属性ピンを解放させた。ピンから漏れ出る凄まじいエネルギーが剣を伝い、イベルジョーの肉を焼いていく。剣は小刻みに震え、肉からは赤黒い鮮血が飛び出し始めた。

「——喰らいやがれッ！」

とうとう弾けたその光。ピンは破裂するようにその身を引き千切り、切っ先へと集まったエネルギーは集束を経て破裂し、奴の腹に大きな穴を開けた。

スラツシユアックスの奥の手、『属性解放突撃』。

その様を言葉にするならば、赤い光の爆発とでも言うべきだろうか。

「……………くう……………ッ！」

その反動には流石に堪える。痺れる両腕に耐えるまま、俺はその反動に押し切られ、大きく後退した。爆発に吹き飛ばされたと言っても過言ではないかもしれない。

だが、俺は渾身の一撃を奴に与えた。かつてないほどの痛手を奴に負わせたのだ。

奴の腹には大きな風穴が空き、ドス黒く染まった血が川のように流れ出している。奴が痛みのあまり悲鳴を上げた。もう一步だ。もう一步で、アイツに止めを刺すことができる。いよいよ、コイツを殺すことができる。

——そう思って踏み出した、斧を振り上げた瞬間だった。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!」

かつてないほどの怒号。今までの咆哮とは段違いの、大気が震える衝撃波。それと共に、奴の体から龍属性エネルギーが溢れ始めた。

まるで大気に絵の具を落としたかのように。空気の色が、徐々に赤黒く染められていく。

呆然と、その光景が目に入った時にはもう遅かった。逃げられなかった。

「……………ぐつ——ぐあああああッ!」

溢れ出るそのエネルギーは超密度の光へと変わり、瞬時に膨張する衝撃波へと変貌する。先ほどのお返しと言わんばかりに、俺を巻き込んで炸裂したのだった。

全身を龍属性の光が襲い、凄まじい勢いで防具が焼き壊されていく。露出した肌も爛れ、ものの数秒というその一瞬で俺は、地に墜ちる瞬間には既に満身創痕にされていた。

「グオ……………」

薄汚れた視界の中に、血と龍のオーラで原型を失う奴の姿が映り込んだ。やっと獲物が動かなくなった。そう言わんばかりの満足そうな声を漏らし、ゆっくり近づいてくる。そうして、その醜い口を裂けかねない勢いで開いた。一心に、俺に向けて。

動け。このままじゃ、喰われちゃうじゃないか。

そんな忙しい脳の命令にも、身体はそっぽを向いてしまう。立ち上がる力すら、上手く入らない。

やばい。マズい。動けない。立ち上がれない。逃げられない。

まさか。まさか、そんな。

俺は——ここで死ぬ？

「にやあああああつっ!!」

乾きゆく俺の耳に、聞き覚えのある鳴き声が飛び込んできた。

いつも一緒にいたあの声。

俺に温もりをくれたあの声。

一緒にいると何だか落ち着く、彼女の声——。

「グウオツ!」

「だ、旦那さんから離れるにやーっ!」

ネコの鳴き声、それと共に響き渡る加速音。

凄まじい勢いで飛び出した一匹のアイルと、その手にもった王ネコ剣ゴロゴロが耳を劈くような音を立てる。

スパークを纏ったその突進。俗に言う、ネコまつしぐらの術でイビルジョーを怯ませたそのアイルーは、庇うように俺の前に立った。

凍土の雪と同化しそうな、白く透き通った毛並み。氷を固めたような小振りの角が付いたカチューシャと、黒い独特の衣装を身に纏ったその姿。震える足に喝を入れ、懸命に俺を守ろうとしてくれるそのアイルーは。

——紛れもない俺の相棒、イルルだったのだ。

く本日のレシピく

『シガレット流強走薬グレート』

- ・狂走エキス …… 95 ml
- ・こんがり肉 …… 60 g
- ・ポツケレモン …… 1 / 2 個
- ・その他炭酸成分等 …… 適量



## 鍋の中にも三年

—1日目—

とうとう、とうとう雇ってもらったのにや。

片手剣を持った銀髪の男性ハンターさん。名前はシガレットとって、見た目はちよつと恐そうだけど、言動は優しい……のかにや？

今までぶんどりというだけで、通りすがったハンターさんたちからは冷たい眼で見られたけど、この人だけは違ったの。何ていうか、少年のような輝く瞳と言うか……とにかく、変な眼だった。

「お前ぶんどりか？　ってことはモンスターのご飯……素材集めるの得意だよな？　よし、スカウト」

『食ざ……』と言ったのは、何だったんだろう？　素材ならぬ、食材とでも言いたかったのかな？　この時のボクには、旦那さんの意図がまるで分からなかったにや。

ただ、そんなやり取りの後にご馳走になったロールキャベツ。その時に、気付くべきだったのかもしれない。

氷海に降り積もった雪よりも濃厚な白。そんなホワイトソースに包まれたそのロールキャベツは、旦那さん曰くポポの肉とハーブ系の薬草を入れ込んだ、風味豊かな肉とキャベツのハーモニーがウリだそう。その濃厚な香りに、ボクは不覚にもお腹を鳴らしてしまつたにや。

ダメダメ、このご飯は旦那さんが食べるものなんだと思う。ただのオトモが食べるなんて、それどころかスカウトされて間もないボクがお腹を鳴らすなんて、烏滸がましいし、はしたないにや！

なんて自己嫌悪に浸つてたら、旦那さんはボクの方まで皿に盛り付けて用意してくれた。アツアツホカホカで、猫舌のボクにはちよつと厳しかったけど。

でも、凄く温かかったにや。

—2日目—

氷海から時間を掛けて、旦那さんの拠点となる町——バルバレへと訪れたにや。大きな商業地であるその町の端、路地裏を何本も過ぎたところに旦那さんの家があった。一介のハンターらしい小振りの家だったけど、中々風情があるところだったにや。

「安心してくれ。キッチンだけは綺麗にしてるから」

お世辞にも綺麗とは言えないその家だったけど、旦那さんのその言葉の通り、台所だけは整理整頓されていた。それが何よりも印象的だったにや。

その日の夜は、旦那さんが用意してくれた座布団で眠ることにした。旦那さんは「そんなのでいいのか？」って言うってくれたけど、ボクは所詮ただのオトモ。座布団でも贅沢してるくらいにや。

悩むとすれば一つ、旦那さんのいびきがうるさいくらいにや？

— 3日目 —

朝起きたら何故かタオルケットが掛けられてた。

もしかして、旦那さんが掛けてくれたの？ キッチンで鍋とにらめっこしてた旦那さんは、尋ねてみても返事をしてくれなかったにや。

— 5日目 —

本日は初の、旦那さんとのクエストにや。旦那さんの役に立てるように精一杯頑張るのにや！

……そう意気込んでいったけど、そのクエストは何のこともないただのキノコ狩りだったにや。拍子抜けだにや。

バルバレに隣接する遺跡平原という場所が今回の狩猟地。黄金に輝く草が綺麗な、晴々としたところなの。風がとつても気持ちいいのにや。

旦那さんといえば、ビンの中に薬草やらキノコやらハチミツやらをいれて、雑に振り回していた。もしかして、いや、もしかしなくても調合をしてるのかな？

なんて考えていたら、そんなこんなで完成したそのドリンク。深い深い緑色に染まっていたにや。甘いような、酸味があるような。ほろ苦い味もひととめにしたその爽やかな飲み物。旦那さんはボクにも飲ませてくれたのにや。

—8日目—

今日こそ討伐クエストにや。待ちに待ったこの機会、頑張つて旦那さんの役に立つのにや！

そう意気込んで向かったのは地底洞窟。深い地底に、まるで穴が出来たような洞窟。深い深い大地の底だにや。

ターゲットはテツカブラ。鬼蛙と呼ばれる大柄なモンスターだった。カエルはカエ

ルでも、釣りカエルなんかとは規模もスケールも違ったの。大声で吠え、その太い脚で跳び回る、初めて見るモンスターだったのにや。

初見であろうとなんだらうと、関係ない。頑張つて貢献して、旦那さんに認めてもらうことがボクの目的。頑張つて、やつつけるのにや！

「うにやああー！」

そうして出したのは、調子よく大タル爆弾にや。

武器でちまちま殴るより、爆弾で手痛いダメージを与えれば。いつその大きな牙でも折れば、旦那さんはボクを認めてくれるかもしれない。そう思ったボクは、すぐにそれを行動に移した。

だけど、だけど。それは早計だったとしか言えないだろう。大きくて重い爆弾は、小さくて軽いボクには持つて投げるので精一杯で。気付いた時には、遅かったにや。投げた時には、もう遅かったのにや。

弧を描くように飛んだ爆弾の先には、剣を振り回す旦那さんがいて。

あとは、言わずもがなにや。

旦那さんの家には、ルームサービスがない。ボクが来る前までは旦那さん一人しか住んでなくて、ルームサービスどころか他のオトモもないのにや。

「恥ずかしい話、金が無いんだよなあ」

旦那さんは、照れくさそうにそう笑った。確かに、見た感じまだ下位の駆け出しといったところで、装備も拠点もあまり豪勢ではない。

金欠は、ハンターに常に憑き回るものだ。

前のご主人はそう語っていたにや。G級でも、下位でも、それは変わらないのかもしれない。

「……なら、ボクはルームサービスもやるにや！　旦那さんのお手伝いをもっとしたいにやー」

だから、そんな旦那さんの役に立ちたくて、ボクは気付いたらそう宣言してたにや。

この前、テツカブラの時に旦那さんを吹き飛ばしてしまうなんてミスをしたから、余計に……かな。笑って許してくれた旦那さんだけど、ボクはボクを雇ってくれた彼に報いたいのにや。

そんなボクの頭を、旦那さんは優しく撫でた。くしゃつと倒れる耳に触れる手が、少しくすぐったくて。何だか心もこそばゆい感じがしたにや。

— 15 日目 —

この日の夜は、嫌な夢を見たにや。前のご主人が、失敗したボクを折檻する夢。

鳩尾みぞおちに入った靴の先がとても鋭くて、ボクは何度も嘔吐した。顔から流れるのが涙なのか、鼻水なのか、吐瀉物なのか。もうよく分からなかったのにや。

相当魘うなされていたのか、ボクをその悪夢から解放してくれたのは旦那さんだった。目を開ければ、そこにあつたのは、毛布にくるまれたボクの体と、心配そうにボクを揺さぶる旦那さんの姿。

ボクは気が動転して、咄嗟に何度も謝ってしまった。謝らないともつと酷いことされる。そう感じて、旦那さんの姿と前のご主人の姿が混同して、必死にごめんなさいと繰り返していた。

狂ったように謝り続けるボクを、旦那さんは哀しそうに見つめて、そつと抱き寄せてくれたにや。ボクをその厚い胸に押し付けて、背中を擦ってくれたのにや。何度も、優しく、ゆつくりと。

— 22 日目 —

今日は遺跡平原で、何のことはない採取ツアーをしていた。

旦那さんが何やらハチの巣を漁っている内に、ボクは疲れに負けてしまった。我慢していたんだけど、ついに少しサボってしまったにや。フカフカの草に腰を下ろして、青い空を見上げて。

せめて旦那さんに気付かれないように。旦那さんが採集に集中している間に。そう決めていたのに、旦那さんの採集は思ったよりも早く終わってしまった、ボクに気付いた彼と目が合った。

どうしよう、怒られる。ダメなオトモと思われちゃう。

その瞬間、頭にそういった警報が鳴り響いたんだけど、時すでに遅しだったにや。旦那さんはゆっくり僕に近付いて来て、じっくりボクを見下ろした。

叩かれる。そう思って目をギュツと瞑ったら——手は、降ろされなかった。逆に降りてきたのは、旦那さんの腰。びっくりしたボクは、ボクの横で腰を降ろした旦那さんの方へ振り返る。

だけど彼は、涼しい顔でボクを見て、こう呟いた。

「疲れたのか？　ちよつと休もうか。……何か食う？」

そうしてもらったこんがり肉。

程よい焼き加減に塩加減。噛む度に溢れる肉汁に、濃厚で筋のある肉の味。肉汁や脂



を上手く使ったタレが、肉の隙間によく染み込んでいた。とにかく、とつても美味しかったのにや。

—30日目—

今日は久しぶりの狩猟クエストだったにや。

場所は原生林。ボクが流れ着いたチコ村の傍にある、懐かしい場所だ。そこに現れたモンスター、ネルスキュラ。大きな蜘蛛のような姿をしたそれが、今回のターゲットだ。それは、状態異常の雑貨屋とも言えるモンスターだったのにや。乱発する糸に絡まれて、出血毒を孕んだ鋏や睡眠毒をもった針で迫られて。

何とも恐ろしいモンスターだにや。出来るなら、あんまり関わりたくないのにや。

でも、旦那さんは果敢に攻めた。いくつもの糸を潜り抜け、飛び交う毒を跳び避けて、そうして片手剣で蜘蛛の細い脚を斬り刻んでいったにや。前のご主人にも肉薄するよな、旦那さんの手腕。ただの下位ハンターなんかでは収まらない、旦那さんの実力をひしひしと感じたにや。

この人は、本当に下位ハンターなのかと感じてしまうほどに。

「イルルツ！ 何よそ見してんだ！ 前を見る！」

「にや——にやつ!？」

声を荒げる旦那さん。思わず見惚れていたボクを一喝する声。その声に反応した時には、もう遅かった。瞬間目に入ってきた、鉄を迫り上げさせるネルスキュラの姿に、ボクの思考と体は止まってしまったのにな。

逃げれない、斬られる。

「イルル——ッ!」

「ふみやあ……っ!？」

ずぶりと体に入り込む鋭い感触と、そこから溢れる水のようなもの。

それを感じた時には、ボクの体は宙に吹き飛ばされていた。痛みも、感覚も、理解が追いつかない。

「チィ……ッ!」

そんなボクの体が落下する前に、旦那さんは舌打ちしながらもボクをキャッチしてくれたにや。ギリギリの瞬間、ボクの体に負担が掛からないように。

「毒か……! 息が荒い、体温も……!」

毒のせいかな、痛みのせいかな。

霞むボクの視界の中で、旦那さんは焦ったようにボクの体を調べては苦い顔をしていった。

ボクによそ見するなつて言つておいて、旦那さんもよそ見してるのにや——。

そんな言葉も口に来ないボクを抱え、旦那さんはこのエリアから退避し始める。あの蜘蛛の毒牙から、ボクを遠ざけるように。

わざわざオトモのために一度撤退して、解毒薬もくれて、看病もしてくれるなんて。この人は、本当に優しい人なのにや。

ボクは、ボクがこの人が好きになつているのを、何となく自覚し始めていた。

— 411 日目 —

今日は暖かな一日。天気も良くて、でも暑過ぎなくて。心地良い春の陽気が、このバルバレを包んでいたにや。暖かくて和やかな風が、マイハウスの中を流れていく。

バルバレに来てまだ一ヶ月程度だけど、この町もこんなに過ごしやすい瞬間があるのだと、何ともなしに感じていた。

「今日は暖かくていいなあ……」

「ほんとにや。ぬくぬくで幸せだにや」

今日は狩りには行かず、マイハウスでゆっくりしよう。

旦那さんはそう言つて、この日の当たる一角でくつろぎ始めたにや。ボクもそれには

賛成で、彼の横に座っては彼の脚に尻尾を乗せてみたりする。旦那さんは特にこれといった反応は示さなかつたけど、嫌そうな顔もしなかつた。

「みゃあ……」

「あー、昼寝しそう……」

ボクも旦那さんも、眠たげに瞼を擦る。

何気ない瞬間だけど、何だかとても幸せだと思えるにや。ふがふがといびきをかく旦那さんの声も、微睡の中に消えていったにや。

—49日目—

天空山。高地にあつて、それでいて不安定な場所。景色もほとんど灰色に色褪せていて、少し息苦しい場所だ。そんなところに現れたリオレウス。最も代表的な飛竜とも言えるそれが、今この場所に飛来している。

今日のクエストは、リオレウス一頭の狩猟。つまり、目の前のアイツを仕留めることが、今回の任務にや。

「にゃーっ！」

「おっ……おっおっ！」

そんなこんなで旦那さんと一緒に戦って、どれだけ時間が経っただろう。疲弊に疲弊を重ねたりオレウス。その弱々しい尻尾に向けて突撃したボクは、あまりにも拍子抜けした感触を手に受ける。

ざっくり肉に切り込みを入れよう。そう決めて突進したんだけど、どうやら入れすぎちゃったようだにや。肉に受け止められる感触に構えていたものの、それは来なかった。代わりに来たのは、宙に投げ出されるような奇妙な感覚。

「ナイス！ ナイスだイルル！」

「にやっ!？」

旦那さんのその声と、ボクの背後に響く何かの落下音。それを耳で反芻して、ボクは一体何をしたのか理解した。

尻尾を斬った。

もしかして、ボクがこの手で斬っちゃったのにや？

一方で旦那さんはガッツポーズ。ボクの行動を褒め称えてくれる。レウスはレウスで、戦意を喪失してしまったのかな。何とも哀しい仕草で、ゆっくり僕たちから離れ始めたにや。

「おお……立派な尻尾だな。食べそうだ」

「た、食べるのにや!？」

前から薄々感じていた旦那さんの料理癖。

そう、旦那さんは、時々依頼内容をすっぱかして料理に専念してしまう、困ったハンターさんだったのによ。今日もまた、逃げるレウスには目もくれず、火竜の尻尾を切り身に変えてはステーキにしてみました。

肉の繊維が際立ったその食感と、塩胡椒で仕立てたシンプルな調味量。元々がカルビなどの赤身を思わせる濃厚な肉だけに、シンプルな味付けはよく合っていた。肉の甘みと塩の味、そして胡椒の風味が混ぜ合わさる、何とも奥深い味。噛む度に口の中にじゅわわって広がるのが、もう堪ないのによ！

——あれ？ ボクたち、何で尻尾食べてるんだったかにやあ？

—54日目—

久しぶりに、また嫌な夢を見た。

まるで嵐の中に投げ出されたかのように、荒れ狂う海。その中で揺れる船と、その船に伸し掛かる黒い影。目の無い顔を向けては、高らかに吠える。

黒い靄のような瘴気をたくさん撒き散らすその姿は、凄く、凄く怖かったにや。

嵐の海に舞うのは数々の影だった。

応戦する、前のご主人。

恐れ慄く船員。おのの

必死に食らい付くボク。

まるで慟哭のように、黒く吠える巨影。

転覆し始める船——。

「——にやつ……夢かにな」

ボクがこの地方に流れるまでの、最後の記憶。ご主人と散り散りになる前の、最も新しい記憶。あまり思い出したくない、忌々しい記憶。わざわざ夢でまで見せられるなんて、ボクの脳みそは意地悪なのにな。

そんなことを考えながら、頭を起こす。ぼやけた視界に入ってきたのは、何だか変な顔をした旦那さんだった。またもや魘うなされていたようで、旦那さんが心配そうにボクを覗き込んでいたみたい。また心配をかけてしまったのにな。

「大丈夫か……？」

「ん、みゆう……」

寝ながら、涙でも流していたのかな。旦那さんが親指でボクの目元を擦ると、何だか濡れたような感触が走る。

気付けば、ボクの体はまだ震えていた。まだ、あの時のことを怖がっているみたい。「ふにゃ……っ」

どうしよう、震えが止まらない。目元が滲んでくるのを抑えられない。旦那さんに心配かけたくないのに、身体が恐怖に負けそうになる。寂しくて、苦しくて、とつても怖くて。ボクはもう、どうしたらいいのかわからないのにや——。

「……よいしょっつと」

「みい——にやつ？」

ふと、身体が浮くような感覚がボクを支配した。いや、違う。本当に浮いている。

旦那さんに、抱っこされてるんだ。目前に、旦那さんの顔が迫っていた。思わず、素っ頓狂な声を上げてしまったにや。

「だ、旦那さん……？」

動揺するボクの声にも答えずに、旦那さんは静かにボクをベッドへと下ろした。そうして、ボクごと布団で包み込んで、彼はゆっくり横になる。

これは、ボクも一緒に寝ても良いってことなのかにや？

あまり語らなかつた旦那さんだけど、その大きな手でボクを抱き寄せてくれた。始めこそ緊張したものの、言葉に出来ない安心感がゆっくりゆっくり広がってきたにや。旦那さんのいびきも、あんなにうるさく感じていたいびきも、今は無いと逆に不安になつ



てしまうにやあ。

「旦那さん……ありがとにや」

掠れるような声が、この寝室の中で木霊した。旦那さんのいびきに溶け込むように、そつと。

— 61日目 —

あれから、いつも寝る時は旦那さんの横に居させてもらってる。

いつも旦那さんの顔を見て眠り、その顔を見ながら彼を起こす。旦那さんの温かい懐ふところに今日も収まっていたい。

そして、朝は眠たげな彼におはようと声を掛けるの。毎朝彼の顔を覗き込むことから、一日が始まるのにや——。



走馬灯。

今まで感じていたのは走馬灯だろうか。何気ない日々が瞼の中で、まるで星の輝きのように光っては消えていく。動かない体を前に、俺はその感覚を眺めているしかなかった。

——だけど、どうして。どうしてアイルルの鳴き声が。彼女の声が聞こえるんだろう。

今ここにはいないはずなのに。彼女が——イルルが眠ったのを確認して、凍土に出てきたはずなのに。

それなのに、どうして。

「旦那さん！ 大丈夫かじゃ！？」 しつかりしてじゃ！」

あれから毎日、目を覚ませばイルルの顔があった。彼女の可愛らしい顔が俺の視界を覆っているところから、俺の一日は始まるのだ。

そんな彼女の顔が、今目の前にある。マイルームでも、ゲストハウスでもない。凍土というこの寒々しい世界の中なのに。イルルは、俺の目の前にいた。

「……………イル……………？」

「待ってじゃ、今回復笛を吹くにゃ！」

俺の傷を見ては青い顔をした彼女は、懐から緑の紋様で彩られた笛を取り出した。

高らかに響くその笛の音は、ゆっくりと俺の体に染み込んでくる。じっくりと、身体が癒されていくのを感じた。何だか、少し安心する。

いや、待てよ。そんなことより、どうしてコイツがここにいるんだ？

「イルル……お前、なんでここに……」

「みい、実はボクは寝たふりしてたんだにや。だって旦那さん、いつもと様子違ったんだもん……っ」

少し体を起こして尋ねてみれば、腰の装備をギユツと握るイルルはそう絞り出した。

凍土でイビルジョーと遭遇してから。そして村に一時的に帰還してからも。

どこか上の空といった俺の様子に疑問を抱き、彼女はずっと様子を見ていたらしい。寝たふりもして、俺とイズモが話をしているところにもこっさりついて来ていたのか。

「グルルル……」

何故いないはずの彼女がここにいるのか。この予想だにしない状況に対する説明がやっとなつた。

ついたのだが、そうゆっくりとしている場合ではない。少し怯んだだけで、俺を狙うイビルジョーはまだそこにいるのだ。いや、この場合、餌が増えたとも感じているのだろうか？

「……だ、旦那さんをいじめるにや！ 今度はボクが相手だにや！」

そう言うては、イルルは勇ましく前へ出た。俺から離れ、ジリジリとイビルジョーとの距離を縮め始める。

奴が自分に集中するように、俺を庇うように。

「イルル……ダメだ、逃げろ……！」

「旦那さんは、旦那さんは……！　ボクが守るのにやー！」

「グルウ……ヴオオオアアアアアアツ!!」

震える手で武器を握り直しては、イルルは襲い来る牙とぶつかり合った。武器と牙が擦れ、火花が飛び交う。凍土を彩る激しい光に、溢れ出る龍のオーラとイルルの持つ王ネコ剣ゴロゴロの青い雷が混ざり込んだ。

力で圧倒的に勝るイビルジョー。一撃でももらえば、命の保証はない。そんな恐ろしい挙動の一つ一つを、イルルは危うい動きで躲していく。

「うにやーっ！　でっかく行くにやー！　巨大ブーメラン！」

大地を焼く龍のブレスをその地に潜るように躲したところで、イルルは懐から巨大なブーメランを何丁も取り出した。

一つ一つが、普通のブーメランの二倍三倍もあるそのブーメラン。威力も当然倍である。

「喰らえにやーっ！」

「ゴアツ……ヴオオウツ!!」

炸裂する強烈なスパーク。飛び交うブーメラン一つ一つは、吐息を漏らす奴の顎へと直撃した。

これまでのやりとりでガタがきていたのだろうか。そのスパークこそ龍のオーラにかき消されたものの、ブーメランの勢いだけは止まらない。

まつすぐ、一直線に。弧を描きながらも飛び込んだそれは、軋むような耳障りな音と共にその牙を砕いたのだ。

「……や、やったのにやつ!!」

その思いがけない手応えに、イルルは顔を上げた。それが彼女の闘争心に火を付けたのか、再び多丁のブーメランを撒き散らす。目に強い意志を燈しながら。

突然現れた一匹のネコが、自らの牙を折り砕いたという事実。それが相当痛に障ったのか、一方のイビルジョーはその血走った右目を爛々と輝かせ、一心にイルルを睨み始める。未だ上手く立ち上がれない俺なんて、もう眼中にないようだ。

「こつち、こつちだにゃ!」

イルルとしては狙い通りだったのか。奴を誘導するように、俺から距離をさらに離していく。奴も奴で、それを追うように首を動かしては、忌々しそうな声を漏らしていた。

ダメだ。何だか嫌な予感がする。そつちに行くな——。

「イルル……よせ……ッ！」

やっと剣を支えに立ち上がった俺。だけれどそれに精一杯で、声にまで力が回らない。掠れるようにしか出なかつた声は、イビルジョーの重苦しい足音にあつまり飲み込まれてしまう。

一方でイルルは、ブーメランの弾幕を展開しては必死に応戦していた。絶え間なく襲い来る奴の肉弾がそのブーメランを何度も弾き飛ばし、その度に新しいブーメランを投入していく。

「にやつにやつ！」

「グルル……」

一見すれば、イルルがイビルジョーを翻弄している。彼女が優勢である。そう見えた。

だが、本当にそうなのだろうか？ 猛攻を受けながらも、何かを企むように輝かせるその赤い瞳は一体何を狙っている？

嫌な予感は、ゆつくりと——しかし確実に、確信へと変わっていく。

「グルルラアッ！」

不意に、奴が凄まじい速度で首を伸ばした。隙間を縫うような、隙を狙ったかのようなそんな一閃。そんな狡猾な一撃を、イルルは危ういながらも剣で弾く。瞬時に構えた

咄嗟のガードで、体を守っていた。

だが、そんな束の間の安心感も瞬時に霧散する。こちらが本命だと言わんばかりに、イビルジョーはその体を一回転させたのだ。弾かれた勢いをそのままに、周囲一帯を薙ぎ払うようなその衝撃。ガードの反動に耐えていたイルルには、到底避けられるはずもなかった。

「にやつ——」

小さなネコの鳴き声は、一瞬で消えた。

すぐに凍土に溶けたその声。そしてその代わりに響いたのは、小さな体が大地に身を打ち付けながら転がっていく音。

「……あ……ッ！」

転がるように、滑るように。そうして止まった彼女の体。一瞬で全身打撲に持ち込まれ、苦しそうなネコの呻き声が漏れてくる。不思議な加護があるとまで言われたキリン Uネコシリーズでさえ、紙のようだった。

「み、みい……なああ……」

「……イルル、イルル！ おい、しっかりしろ！」

「ヴオオオオオオ……」

消えゆく彼女の声とは裏腹に、イビルジョーは満足そうな声を漏らす。

そうして、ゆつくり彼女に近付いては、その厳めしい右脚で彼女の体を踏み付けた。捕食するために、逃がさないように。

「みやあつ！……ふ、ふにやああああ……！」

その超体重に押し付けられ、彼女は悲痛な声を上げる。痛みからか、恐怖感からか、彼女は完全に戦意を喪失しているようだった。両手両足を震えさせ、怯えるように歯を鳴らす。まるで悪夢に魘されていた時のような、弱々しい姿だ。

そんな彼女に向けて、恐暴竜は無情にも顎を向ける。その小さな体を引き裂かんと、悍ましい口を思いつき開いて――。

「……つつさせるかああああああツツ!!」

気付いた時には、剣を構えていた。気付いた時には、左手で持ったレギオスナイフで、剣斧に付けられたピンを斬り裂いていた。

直後に溢れ出るピンのエネルギー。まるで噴射機構のようなそれは、ガタガタと剣斧を震わせる。刀身が破損するくらいに、荒々しく。

それを押し付けるように背後に回し、そのまま属性を解放した。



「イルルを……離せッ！」

瞬時に溢れ出るそれ。押し上げられる体。急回転する景色。縮まる距離。

要は、ビンのエネルギーを噴射させた掟破りの猛ダツシユだった。着地も受け身も考えない、命知らずな荒業。刀身が剥がれ、内部構造が剥き出しになり、ついには根本から二つに割れる。七星剣斧が、俺の背後で弾け飛んだ。

だけど、そんなことはどうでもいい。今はイルルに迫る毒牙さえ、振り払うことが出来れば。

最後に見えたのは、泣き腫らした目を驚いたように開かせるイルルの顔。そして、恐ろしい勢いで牙を振り下ろすイビルジョーの姿だった。

気が遠くなるような、一瞬の痛みが俺に押し掛かる。明転と暗転を繰り返す知覚と視界の中で、俺は意識が沈んでいくことが分かってきた。

ただ一つ、感覚が消えていく左脚に、違和感を覚えながら――。

## 人はパンのみに生きるにあらず

——何かの音が耳をくすぐっている。

一体何だろう。衣擦れの音？ 捲られるカーテンの音？ ネコの鳴き声？

様々な音が俺の鼓膜をノックしては、飽きたかのように通り去っていく。不思議と動かない体に違和感を覚えながらも、俺は妙にはつきりしている意識を音へと向けさせた。

——誰か、話しているのだろうか？

話し声が聞こえる。

俺が聞いたことのある声。どこか、馴染みのある声が俺の耳に届いてきた。何を言っているのかまではよく分からないが、何を憂うような、覇気のない声だ。

——ああ、そうだ。きつと、イルルが俺を起こそうとしているんだらう。

いつも、俺を起こしてくれるイルル。毎朝俺を覗き込んでいる彼女。今日もまた、わざわざ早く起きては俺を起こそうとしてくれているのか。だったら、早く起きなければ。

— と思ったのだが、妙だ。変に瞼が重い。思うように目が開かない。まるで縫い付けられたかのように瞼が離れず、瞳に光が入ってこない。まるで塞ぎ込んでしまった貝のようだ。

なんて呑気なことを考えていると、不意に違う刺激が飛び込んできた。

—— 何だっけ、この匂い。

鼻孔にゆっくり入り込んでくる香り。脂が弾け、空気に混ざり込んだかのようなこの香り。

溢れるその香りは、不思議と俺の脳を鋭く刺激した。じわりと香るそれは、柔らかな脂のそれを思わせる。焼ける表面から染み出る汗が、その高温によってじっくり気体に変えられ、上昇する熱の気流に乗せられるまま漂い始めて。

不意に、口内に涎が溢れ始めていることに気付いた。それだけじゃない、胃が縮んでは音を鳴らし始める。まるで何かを主張するかのように、その身を震わしていた。

不思議な話だ。この匂いを嗅いだだけなのに、身体がゆっくりと目を覚ましていくのが分かる。あんなに動かなかった瞼も、今ではゆっくり動きだしていた。匂い一つで、ここまで変えてしまうものとは、一体——。

— そうだ、俺はこの香りに嗅ぎ覚えがある。狩りに行った時にも、家で飯を作る時にも。いつも肉を焼く度に、キッチンに立つ度に浴びていたじゃないか。

これは——そう、こんがり肉の香りだ。

「——はっ……！」

突然、目の前が真っ白になった。

いや、違う。大量の光が一気に差し込んで来たのだ。瞬時に開いた瞼を越え、突き刺すような光が眼球を包み始める。その予想だにしていけない刺激に、俺は思わず喉を震わせた。

「…………ツ…………！」

頭をずらし、瞼を動かしては入る光を調節する。閉じて開くを繰り返して、ゆっくり目を慣れさせた。

それを何度もするうちに、ゆっくり輪郭が浮かび上がる。一体何が俺の視界に映っているのか、分かってきた。

白い天井、白い部屋。

清潔感を思わせる薄い白色で塗られた天井と、淡い光を放つ小さなランプ。俺を囲う様に広がった薄いカーテンと、背後に感じる妙に柔らかい感触。俺が凭れ掛かる、白いベッド。

もしや。いや、もしかしなくても。

「——旦那さん……？」

そんな白い視界の中に、別の白が差した。この無機質な白とは程遠い、柔らかな白。豊満な毛並みを思わせるような、淡くも深い色だ。

その淡泊な色に咲いた二つの青い花。くりくりとした大きな二つの花が、まるで海のように深い色で俺を見つめている。

「……イル、ル……」

そう、イルルだ。いつも俺を起こしてくれる彼女が。可愛らしい顔でそつと俺を覗き込む彼女の姿が目の前にあった。

ただ一つ。いつもの困ったような表情ではない、不安に押し潰されそうとも言い上げなくらい歪めた表情が気になるころだが。

そんなことをボンヤリ考えていたら、彼女はそのまま溜まった感情を爆発させるように、突然俺に飛び付いてきた。

「旦那さーんっ!!」

「うおっ!!」

小さく軽い体が俺に押し掛かってくる。ふわふわの毛に包まれた柔らかい体が俺の胸に乗って、その仄かな重みが直に伝わってきた。

その衝撃のせいか妙にあばらが軋んだような気がしたが、堰が切れたかのように泣き始めるイルルを見ては、痛みを訴える気にもなれなかった。

その代わりのように、そつと彼女の背に手を添えては、その柔らかな毛並みを撫でる。ぐずる子どもを宥めるように。

「ふええ……旦那しゃああん……っ」

「イルル……どうしたんだよ……」

どうしてだろう。彼女の姿を見ると、直に彼女に触れると。俺も何だか堰が切れたかのように感情が逆流してきた。心の底で、物凄く安心しているのが分かる。彼女とまた触れ合えることに、筆舌し難い喜びを抱えている自分がいる。

そうだ。俺は確か――。

「……シグ? 良かった、目が覚めたんですね」

「トレッド……」

その瞬間、俺を周囲から仕切っていたカーテンが突然開けられた。乱雑な様子で、や

や手の甲に汗を滲ませるその姿は、閉じているのかと思わせるくらい細い目を、らしくもなく見開いたトレッドの姿だった。



「……あ？ 三日？」

「ええ、丸三日。俗に言う昏睡状態って奴ですかね」

奇妙なくらい重い頭を稼働させ、苦笑いするトレッドの言葉を呑み込んだ。そんな彼が言うには、驚くことなかれ、俺は何と三日も眠り続けていたそうだ。

昏睡状態。言い換えれば生死を彷徨う状態だったらしく、いつそのまま永眠するかも分からないとまで言われていたのだとか。であれば、イルルがここまで狼狽えたのも致し方ないことだろう。

「……そうだったのか。ごめんな、イルル」

泣き疲れてしまったのだろうか。安心故の脱力感だろうか。目元を濡らしながらも、イルルは俺に身を預けるように眠っていた。その小さな両腕を俺の腰に回し、腹に顔を

乗せながら、もう俺を離すまいとしがみ付いている。

そんな彼女の背中を優しく撫でてしていると、部屋の奥からあの香りを引つ下げたイズモが姿を現した。

「よう。やつぱ目覚ましたんだな、シグ」

「イズモ……。お前、それ」

「こんがり肉、焼けば君も起きるんじゃないかってね！」

昔と変わらない、どこか清々しい笑顔を向けながら、イズモは俺が身を預けるベッドの端に腰を下ろした。そんな彼が手に持ったこんがり肉。先程俺が感じた匂いはこれだったのか。

なんて感傷に浸っていると、イズモはその場で肉を頬張り始める。

「……おい、俺にくれるんじゃないのかよ」

「怪我人にこんながつつりしたもん食わせれるかい？ 安静にしてな」

「シグ……。君は自分の体をよく見ておいた方が良いでしょう」

俺を諫めるような口調でそう言う二人。そんな彼らの言葉の通り、俺は自分の体に目を向けてみた。

幾重にも巻かれた包帯。絆創膏や回復薬などでは追い付かない数々の深い傷が俺を蝕んでいるようだ。何かの薬液のようなものが管を通して俺の腕に入り込んでおり、傷



の重みも相当なものだと思う。

そして何より、最も違和感があったのは左脚。あの瘡気が直撃し、唯一防具が剥がれ落ちてしまっていた左脚だ。そこにあるのは、体のもの以上に丁寧に巻かれた包帯。

なのだが、その位置や形が妙だ。膝から下が妙に短い。まるで、形が変わってしまったかのような。

それが何かと不思議に思いながらトレッドに視線を戻すと、彼はその細い目を顰めながらそつと俺から目を逸らした。肉を食うイズモは俺の方を向きもしない。

ああ、そうか。そういうことか。

「——負けたんだな、俺」

「………負けた、で済んだことを喜ぶべきじゃないですかね？」

「そだよ。このギルドナイト様が来なかつたら君、アイツの腹ん中だかんね！」

俺を諷めるように少し声を震わせる二人。

そんな言葉を聞きながらも、目を合わせようとしないう彼らから俺もそつと目を逸らす。そのまま滑らすように、白と赤で染まる左脚へと視線を落とした。

感覚はないのかもしれないが、いまいちよく分からなかった。それもそうだ、シヨック死してもおかしくなさそうなこの傷の前では、麻酔をかけない方がおかしいだろう。さつきから体を支配している気怠さと違和感の正体は十中八九そいつだ。

それにしても、ギルドナイトだと？

「……トレッド？ お前が助けてくれたのか？」

「たまたまあの時の古龍観測号に乗り合わせていたため、ね。あの吹雪の中でも奴の瘴気はよく見えた。となれば、誰かと戦っている——君しかない、という訳ですよ」

「あの猛吹雪の中をパラシュートで下りるとか度胸あり過ぎなんだよねえ……」

聞けば、あの不明瞭な世界の中で、トレッドは俺の単独行動を予想し凍土に降り立つたらしい。

何とか辿り着いた時には、血塗れで倒れていた俺と泣き叫ぶネコの姿があったそう。そしてそれを狙う瘴瘴啖イビルジヨの姿も。

「神ヶ島が火を吹きました。全弾装填してありつたけの拡散弾をぶち込みましたけど……」

「けど？」

「シグはよくあんなのを一人で相手してましたねえ。拡散弾でも倒れないから、仕方なく罠と麻痺弾を駆使しましたよ」

「んで、シグを抱えて撤退したんだってね。流石トレッドだよ」

「そうか……。迷惑かけたな、ごめん」

結局俺一人ではどうすることも出来ず、自分どころかイルルまで危険に晒してしまっ

た。結果を急ぎ過ぎた結果がこれだ。俺は一体何がしたかったんだろう。

どうしようもなく、下げた頭。誠意を見せるのがこれ以外見当たらず、俺は静かに頭を項垂れた。

「全く……」

そんな俺の頭に向けて、トレッドは色の白い握り拳は軽くぶつけては、これでチャラですと笑顔で言った。生憎、目は笑っていないかったが。彼の忠告を無視したのだ、怒るのも当然だろう。

そんな様子を見ながらこんがり肉を綺麗に食べ終えたイズモは、話の流れに合わない率直な疑問を口にした。それも、さも不思議そうな様子で。

「そもそもだけど、アイツって何なのさ？ イビルジョーって、龍属性に弱いんじゃないかったの？」

「ん……まあ、一般的にはそう言われてますね」

「でもあれでしょ？ 渚瘴啖って、全身に龍属性エネルギーを纏ってるんでしょ？ 一体どうなってるの？」

「……共食いと長寿を重ねた個体に、龍属性器官に変調を来たす個体が存在する。ギルドはそれを怒り喰らうイビルジョーと名付けてますよね」

未だ謎の多いイビルジョー。進化の過程で謎の変異を遂げ、現在の姿になったと言わ

れているかの存在は、数多のモンスターの中でも異端中の異端だ。

そんな奴らにも特殊個体と呼ばれるものが存在する。それが怒り喰らうイビルジョーだ。

「ただし、彼らは短命となります。龍の瘴気が自らも蝕んでしまうのだから。……だけど、奴は……瘴瘴啖は少し話が異なりますね」

「……？ 何が違うんだい？」

「ポイントは左目、シグが刺した封龍剣にあります」

「へっ？ 封龍剣って、龍殺しの剣じゃ……あ。まさか——」

核心めいたトレッドの言葉。それを反芻したイズモは眉を顰<sup>ひそ</sup>めながら考え、何かに気付いたように目を見開いた。そんな彼を見てはトレッドも頷き、そつと俺に視線を映してくる。この続きは任せたとでも言うように。

やつと目を合わせてきたかと思えばそれか。思わず溜息が出そうになるが、それを不満共々グツと呑み込み、彼の言葉を繋ぐように俺はゆっくり口を開いた。

「イビルジョーの圧倒的な適応能力は知ってるよな？ それと一緒。眼孔を貫かれながらも龍の力を飲み続けたんだよ、アイツは」

「……それで龍属性にも適応したってか？ にわかには信じられないんだけど」

「信じる信じないは自由。……まあ、ギルドとしては不本意ながらもその事実を信じる

としてますけどね」

感嘆の声を漏らすイズモに、困ったような顔をしながらも自嘲気味に笑うトレッド。そんな二人の様子を見つつも、俺は包帯に包まれた両手をそつと動かした。意識を手放す前までは、しっかりと剣斧を握り締めていた筈のこの両手。今では白と赤に染め上げられ、見るも痛々しいものとなっている。

——敵わなかった。

悪化している。俺が封龍剣を突き刺した時より、タンジアギルドの制止を振り切つて挑んだ時よりも。それが俺の見た感想だ。

全身から龍属性エネルギーを噴出させるなんて思いもしなかった。あの強靱な耐久力も、はつきり言つて俺の想像以上。

あれは本当に、ヒトが狩ることの出来る存在なのか？

「……シグ、あまり思い詰めないでください。奴は今ギルドが全力で監視してます。だから、君はゆっくり休むことを最優先で」

「そうだよ。それに、情報の混乱やトレッドの粋な計らいでシグへのお咎めも特にないみたいだし？ だから安心して寝てなつて」

「……粋な計らいって何だよ？」

「シグが食い止めたおかげでこの村への被害は出なかった。これでみんなハッピーで

しよう？」

俺の様子を気にしたトレッドの言葉。それに便乗するイズモが言うには、トレッドがギルドに口添えをしてくれたようだ。それも俺を庇うような内容で。ギルドナイトの癖に笑わせてくれる。

もちろん気休めの可能性もある。だが、二人の友人の温かい言葉は、俺を安心させるのには十分だった。

そんな彼らの言葉を呑み込んで、俺は再び目を閉じる。俺の体は、まだ俺を自由にさせる気がないようだ。



次に目を覚ました時には、外は夜の闇に包まれていた。

イズモもトレッドももう帰ったようで、病室には俺——と、未だ俺の上で眠り続けるイルルの二人だけ。時折医者や看護師が顔を出していたようで、俺のベッドの横にはラップで包まれた病院食が置かれていた。プレートの上に置かれたいくつもの小皿。内容は、ユクモ風料理だろうか。

「んにゃ……みゆう……」

「ん、悪い。起こしちゃったか?」

「にや……旦那さん?」

その皿の中身をもつとよく見ようと、少し体を動かしたものの、それが刺激となったのか。妙な声を漏らすイルルに気付き、俺は動くのをやめた。

それでも時すでに遅く、イルルは目を覚ましてしまったようだ。しよぼしよぼとさせた目で俺を見ては、今一度俺を離すまいと体を寄せ付けてくる。

「旦那さん……。ボク、ボクね……」

「……うん?」

俺の胸に顔を押し付けるイルルは、こもらせた声で何かを話し始めた。

そんな彼女の言葉を受け止めるように、俺は静かに相槌を打つ。彼女の柔らかな背中を撫でながら、そつと。

すると彼女は、その小さな肩を震わせ始めた。心なしか、こもる声も震え始めているようにも感じる。

「ボク、怖かった。旦那さんが死んじゃうんじゃないかって、すつごく怖かったにや……っ」

「ああ……ごめんな」

悲しそうで、苦しそう。イルルの様子は、そんな印象だ。俺が撫でてでも落ち着かず、彼

女の堰は今一度切れそうにも見える。

それだけ俺は彼女に心配をかけてしまったということか。いつもは俺の失敗も適当にスルーする彼女がここまで取り乱すという事実。それが、彼女の心労を如実に物語っている。

「にや……旦那さんが謝るのは、違うにや。悪いのは……ボクの方にや」

「え？」

ピクリと肩を震わしたイルルは、自嘲気味にそう呟いた。

そうして、そつと俺の体から身を起こす。泣き腫らした目元の目立つ彼女の顔は、苦悩の表情で歪んでいた。

「ボク……もう、旦那さんの傍にはいない方がいいかもしれないにや……」

「はあ？ 何言ってるんだよ」

「だって、だってだって！ ボクのせいで、ボクを庇ったから、旦那さんの——」  
掠れるような声で。

聞き取ることも難しいくらいか細い声で。

——  
足が。



彼女の口から、その小さな言葉が漏れる。そこから先は言葉にも出来ないらしく、彼女はその小さな両手で顔を覆ってしまった。耐えられないとでも言うような悲痛な声が、嗚咽に混じって病室に小さく響き渡る。

「にやつ、あん……………」

「……………イルル」

彼女がここまで取り乱すのは初めて見た。

寂しがり屋で甘えん坊なイルル。時折悪夢に魘されて泣き出すこともあったけど、ここまで酷く自分を追いつめているところは見たことがない。

それだけ負い目を感じているのだろう。俺が片足を失ったことに。

「イルル、おいで」

「……………にやつ？」

だから、俺は彼女に向けて、包帯に包まれた両手を伸ばした。

それを見ては、イルルは涙で濡れた目をパチクリさせる。俺の言っていることがよく認識できていないらしい。

まどろっこしい。そう感じた俺は、棒立ちする彼女の肩を寄せては、再び俺の胸に押

し付けた。

「にやつ!? だ、旦那さん……っ!?」

「——イルル、俺はお前のせいだなんて思っただけよ」

彼女の頬と俺の頬が擦れる距離。ふわふわ柔らかい彼女を感じながら、俺はその小さな耳へと口を近づけ、優しく囁いた。

イルルは、自分を責めすぎている。だけど、俺はそんな風に思っていない。

「……にや、でも……っ」

「考えてみなよ? 先に俺を助けてくれたのは誰だ? 他にもないイルルだろ?」

そう。そもそも俺は、イルルが来てくれなければここにはいなかったのだ。彼女がいなかったら、俺はすでに奴の腹の中にいる。

わざわざ彼女が俺のために駆け付けてくれたからこそ、俺は生きている。こうして、彼女に触れられる。だから俺の脚がどうかなんて、大した問題じゃないのだ。

「旦那さん……」

「俺はイルルに助けられたから、またこうやってお前を感じる事が出来る。もしイルルが傍にいてくれなかったら、俺は今——」

その先の言葉は呑み込んで、彼女を抱き締める。さっきまでイルルがしてくれていたように、より強く。俺だって、彼女をもう離したくないのだから。大事な存在を失いそ

うで怖かったのは、俺も一緒なのだ。

イルルもイルルで、それが心地良かったのだろうか。おずおずと俺の体に頬を擦り付け、満更でもなさそうな声を漏らした。

「にやあ……」

「イルル、有り難う。俺を助けてくれて。……それと、ごめんな。勝手なこととして」

「にや、旦那さんが謝ることなんて、ないにや。ボクが、ボクが悪いのにや……」

「違うよ。お前は悪くないし、俺もお前を突き放したりなんかしない。……だから、傍にいない方が良くいなんて悲しいこと、言うな」

抱き締める手を緩め、彼女の額に俺の額を当てながらそう言った。何の装飾もない、思ったままの言葉。それを文字通り真正面から彼女にぶつけたのだ。

そう言う俺も、何故か自分を抑え切れない。目の奥が熱くなるのを感じる。何かが流れ出てくるのを感じる。

一方の彼女は、信じられないとでも言うように目を見開いていた。口元を小刻みに震わせ、細い髭をピンと張る。そうして、嗚咽の混じった声を再び震わせ始めた。

「ほ、ほんと？ ボクは……旦那さんの傍にいても、いいのにや？」

「ああ。これからも傍にいてくれ。俺は足なんかより、お前の方が大切だ」

その言葉が引き金になったのか。彼女はやっと、笑顔を見せてくれた。

俺が目を覚ましてから初めて見る彼女の笑顔。花が咲くような、輝く満月のような、そんな綺麗な笑顔だった。



「腹減った」

「にや……ご飯、食べるかにや?」

「おっと、俺としたことが忘れてた。食べるとするよ」

先程から、ベッドの横の小さなテーブルに置かれている病院食。イルルを励ますのに夢中ですっかり忘れていた。

数個の小皿が並べられたそのプレートに、イルルがそつと持ち上げては俺の目の前へと運んでくれる。おかげで、一体どんなメニューなのが明らかにってきた。

「はい、旦那さん!」

「サンキュー。……どれどれ? これは煮物か?」

「にや、黄金魚の煮付がメインメニューだよ。あとは麦ご飯とか、野沢菜とか」

「典型的なユクモ食ってか。んで箸ね。……おう、箸かあ」

プレートに置かれた小皿には、ユクモ食らしい風流な品が顔を見せている。そしてそ

の横に添えられていたのは、これまたユクモらしい箸という道具。物を摘むようにして利用する、食事のお供だ。

——なのだが、これを扱う条件として指の自由というものが存在する。

そう。お察しの通り、今の俺はと言えば指がすっかり包帯で固定されている訳で。これはお手上げというしかないだろう。

「にや、旦那さん……」

「参ったな、どうやって食おうか……」

「ボ、ボクに任せてにや。いい考えがあるにや！」

そう言うや否や、イルルはそつと箸を掴んでは、控えめな量の野沢菜を掴み俺へと向けてきた。

野沢菜の微かに濡れた表面が、院内の光を照らし返す。その先では、少し恥ずかしそうに目を泳がせるイルルが一人。

「イルル……これって」

「だ、旦那さん。はい、あーん……だにや」

ピンと立った尻尾を少し震わせながら、イルルは俺に箸を、そこに挟まれた野沢菜を一心に向けてくる。これは——イルルが食べさせてくれるということだろうか。

誰かに食べさせてもらうというのは少し気恥ずかしいが、この両手では一人で食べる

ことも出来やしない。ここは彼女に甘えさせてもらおうかな。  
「……じゃあ、いただきます」

一口入れた野沢菜。シャキシャキとした食感に爽やかな風味を口一杯に広げるこの野菜。植物としての固さをよく残した食感に、漬物風のアツさりとした味がよくマッチしており非常に味わい深い。噛めば噛むほど旨みが増していく。

野沢菜とは、こんなに美味しいものだっただろうか。もつと淡泊なものかと思っていたが、十分色の強い味だ。何より、久しぶりに何かを口に入れたということが大きいのかも知れない。

だが、このアツさりとした味はやはり主役を引き立てる脇役だ。本命は別にある。

「うんうん、次は煮付を取ってくれるか？」

「分かったにや！」

俺の要望に快く応えてくれるイルルは、その本命とも言える黄金魚の煮付を箸で崩し、食べやすい量を摘まんでくれた。

背面の肉でも使っているのだろうか。細い筋の集まったこの部分は、その隅々にまでよく染み込んでいるようで、思ったよりも柔らかそうな肉質が印象的だ。味付けはアツさりとした醤油ベースの出汁なのか。香りも優しく、怪我人にも重くなさそうである。

その魅惑的な一口を、俺は静かに口に入れる。すると、舌の上でその筋が解れ始めた。

そうして広がる黄金魚の旨みと出汁の深み。じゅわつと広がるその風味が、直に俺の脳を刺激する。じっくり煮込まれたために生臭みを失ったこの肉は、柔らかな旨みと淡い甘みのような味を形成していた。しっとりとした食感を歯に刻めば、甘みが俺の舌に染み込んで。その肉をぐつと飲み込めば、魚肉らしい淡泊な後味をそつと口に残していつて。

そこに麦ご飯を投入すると、また違った世界が見える。ご飯のもつちりとした食感に、麦の入ったおしとやかな味。単体では味気ないそれだが、黄金魚の煮付があれば話が違う。その肉の脂と豊かな出汁。それらを口の中で染み込ませると、麦ご飯の風味は格段に上がるのだ。麦の細かい味がそれを助長し、より慎ましやかな味へと変えていく。

「イルル、野沢菜が欲しい」

「にゃ。はい、あーん」

そこに入ってくる野沢菜。主役が輝いた後に現れる脇役。だが、そのあつさりした味が良い。

漬物のような透き通る味は非常に爽やかで、この煮物の世界に新たな光を差してくれる。口の中に残った魚の味を洗い流すような爽やかさ。何とも魅力的だ。

「あー……美味しいなあ」

「美味しいかにゃ？ 食べにくくないかにゃ？」

「大丈夫だよ。有り難うな」

上目遣いで俺を見るイルルにそつと微笑んで、俺は一息ついた。

やはり、生きているというのは美味しい。美味しいものを食べている時ほど生を実感できるとはならない。

俺は死にかけた。左脚を失った。だが、それがどうした？ 俺はまだ生きている。味を感じる事が出来る。だったら、まだまだどうにかなるはずだ。

——俺は食べるために生きているのだから。

く 本日のレシピく

『病院食・煮付』

・ 黄金魚の煮付	……160g
・ 麦ご飯	……1 / 3合
・ 野沢菜	……30g



## 医食同源

——満たされぬ。

いくら息をしても、いくら水を飲んで。知り合いが顔を出して、医師が俺の体を弄つて、俺の体のために東奔西走してくれようが。心の渴きは、一向に収まらない。

「……………ぐッ……………」

まただ。発作のように訪れるこの苦しみ。

定期的に俺の体を蝕むそれは、ゆつくりと、しかし着実に俺の心を食い破つていく。俺一人ではどうにもならない。もう何もかも、全てが崩れていくような、そんな絶望感だった。

「うっ……………くッそが……………ッ！」

薄まつてきた包帯に包まれた手で、懸命に体を支える。両の掌が触れるその感触に、俺の体は少し落ち着きを取り戻した。どうしようもならない感覚が、名残惜しそうに俺から離れていく。またやつてくるぞ、とでも言うように。

「ハア、ハア……………」

まずい。このままじゃ、俺は俺でなくなってしまう。何とかしなければならぬ。

だが、どうすることもできない。俺は今自由に動けない。俺自身の管理は、全て人に委ねなければどうしようもないのだ。自らの意思で、自らが求めることを行うことが出来ない。

「クソ……まだか、まだなのか……」

少しだけ自由を取り戻し始めた両手の指を重ねながら、俺は消え入りそうな声でそう呟いた。俺を苛ませるこの不快感。一人では解決できない無力感。この孤独の病室で、それらが重く重く俺に押し掛かってくる。

——その時だ。

「シガレットキーン。昼食の時間ですよ」

そつと開けられたその扉から、光が差した。



旨みと甘み。ほどよく効いた塩の味が、俺の口の中で花を咲かせる。ほくほくとしたその食感、俺の口の中でほろほろと崩れていった。噛めば噛むほど溢れるその風味に、俺の心はゆっくりじっくりほぐされていく。

蒸かしたヤングポテトは、庶民的らしい優しい味が特徴的だ。病院食ということもあってやや薄味に調整されたこの味だが、かえって芋の味をよく感じさせてくれる。

「ああ……」

ベルナツパは少し癖のある野菜だ。俺の目の前にあるそれは、胡麻で味を整えられた小鉢ものであり、野菜らしい穏やかな香りを放っている。

噛んでみれば、湿ったようなみずみずしい感触が歯茎に響く。苦味を拡散させるその味だが、苦味の中に甘みがあつて、胡麻の風味の良い香りも同時に漂ってきた。時折口に入れるくらいが丁度良い味だ。

「これだ……」

少量のご飯を頬張りながら、俺はどうとうメインディッシュに手を付ける。

本日の昼食の主役は、出し巻き卵だった。ご飯と同じく小振りなそれは、形の良い丸みを帯びて、上品な黄色に包まれて。

そうして口に入れてみると、ふわふわと柔らかい食感が口の中でとろけた。ぷるぷるとしたその食感と共に溢れ出す、甘い甘いこの風味。甘く味付けされたその味は、病人の心を休めさせる。噛む度に甘みを塗り出して、その度に心が穏やかになっていく。

「うんうん、いい感じ……」

俺の目の前で広げられたそのプレートを蹂躪しては、俺は俺の腹を少しずつ埋めて

いった。

先程までの空虚感や絶望感はもうない。俺を蝕む苦しみも、じんわりやんわり薄れていく。空っぽになった俺という器に、清らかな水が注がれていくような。そんな感覚だった。

「さてさて、次は——」

そうして、新たな味に手を伸ばす。

まだ半分にも届いていない俺という器を埋めるため、もつともつと水を求めて、箸を皿へと伸ばしていった。

「——ッ………そ、そんな………ッ!?!」

今度は、皿が空虚を手に入れていた。伸ばした箸が、次の何かを掴むことはなかったのだ。ただただ惨めに、掴むものを失った箸は行き場を無くしたように虚しく揺れる。

目の前に見えた希望を再び失った俺は、またもや絶望感に打ちひしがれた。

——満たされない。



「旦那さん、調子はどうにや?」

ガラリと、扉が開かれた。雪国特有の静かな雰囲気を打ち破る、華やかな声。

ぴよこつと、元気よく顔を出したのは、同じく雪のような体毛に覆われたアイルー、イールだった。

「お……イール、来てくれたのか」

「もちろんにや、旦那さんのためとあらば例え火の中……にや！」

元気よくベッドに飛び乗っては、俺に体を擦り付けてくる。ふわふわとした感覚が妙にこそばゆい。いつもなら適当にあしらっていたそれだが、自由の効かない今ではあしらいようもない。

「やめろつて、くすぐりたいよ」

「にや、ごめんにや。それより、調子はどうなのにや？」

「腹が減った、これに尽きる」

少し身を起こしたイールは、空になった俺の昼食プレートを見ては察したような鳴き声を上げる。

俺が一体何に苦しんでいるか分かったのだろう。どこか呆れたような、そんな鳴き声とも溜息とも区別のつかない憂いを漏らした。

「普通、植皮して背中が痛いとか、何かもつとそういうのだと思うのに。旦那さんらしいといえばらしいんだけど……にやあ」

「悪いが、これより酷い痛みはすでに経験してるんでね。でも、痛みには慣れても空腹には慣れないよ」

彼女の言う通り、左脚の処置のために俺は植皮手術を施された。

背中 of 皮膚を剥ぎ取って、抉れた左脚に植え付ける施術。はつきり言つて中々強烈な痛さのこれだが、俺にとっては痛みより空腹の方が気になってしょうがないのだ。

「病院食はほんとに量が少ないよなあ。腹四分目だ、いつも」

「にやあ、怪我人に食べ過ぎはよくないにや。大人しくしててにや」

そつとベッドから下りては、カーテンを開けるイルル。そこから差し込む日差しを感じては少し眩しそうに目を細めている。同時に部屋にも光が注ぎ込み、白い内装がより鮮やかになった。

「んで、体の調子の方はどうなのにや？」

わざわざ体の、という対象を付け加えてそう言ってきたイルル。俺の腹事情ではなく、体調事情を聞きたいという訳か。

「まあ、ボチボチかな。相変わらず身動きは取れないけど、箸を使えるくらいには回復したぞ。一人で飯が食えるようになったから、上々かな」

「旦那さんらしい基準だにや。でも、脚も背中もまだまだ重体なんだから、安静にしてにや？」

散乱したタオルやら何やらを整理しながら、イルルはそう注意喚起してくる。まるで嫁さんのようなその仕草に、俺は思わず笑みを溢してしまった。その真面目さが可笑しくて、とても微笑ましい。

包帯だらけの手で、再び俺の横で腰を下ろす彼女を撫でながら、俺は小さく息を吐く。気持ちよさそうに目を細める彼女を眺めていると、何だか心が安らいでいくのを感じた。

「……ま、なんだ。毎日見舞いに来てくれるのが嬉しいよ、イルル」

「にやあ。ボクだって、毎日旦那さんと一緒にいたいのにや。一人で眠る夜は寂しいのにや……」

悲しそうに目に涙を浮かべるイルル。思えば、日が落ちれば面会時間が終わってしまいうがために、彼女には宿に一人で泊まってもらっていた。

毎日俺の布団に入り込んできていた彼女だ、そう感じるのももつともなのだろう。

「ごめんな、すぐ治すから。もう少しだけ待っててくれ」

「……にや。待ってる」

きゅっと、その小さな手で俺の指先を握るイルルは、小さく、しかし力強くそう言った。意志の強い彼女らしい、短くとも固い響きだった。

「……でな、ものは相談なんだが、何かおやつとか持つてきてくれないか？ 腹が減つてな……」

「あつ……安静にしてつて、言つたばかりにやのに……！」

呆れたような震え声、病院に咲く。頃合いを見計らつて持ち掛けたその交渉に、当のイルルといえはその大きな瞳を曇らせた。しまった、これは落とし穴を掘つたか。

優しい癖に変なところで頑固な彼女は、そうしてまた俺に説教を垂れ始める。長つたらしい彼女の説教。説教で腹が膨れれば、苦勞はないというのに。

「……ハア、腹減つた……」

「コラ！ 聞いてるのかにやー！」



「——で、僕を使うとは。……やりますねえ」

「いやな、頼れるのはお前だけなんだよ、トレッド」

袋詰めされた小振りなパンを手渡してきては、溜息を吐く男性。先日散々世話になつたトレッドという俺の旧友に、腹の足しの配給を頼んでいたのだ。



野暮用と言つては部屋を後にしたイルルは、先程のやりとりの通り配給をしてくれることは見込めない。腹も満たない説教が返つてくるだけだ。イズモは口が軽いため、きつとイルルに口を滑らすだろう。そうなれば全く意味がない。

であれば、頼めるのはトレッドしかない。それが俺の判断だ。

「ギルドナイトを顎で使う一般人は君だけでしようよ、シグ」

「それだけ俺はお前のことを評価してることさ」

そんな軽口を混ぜながら、彼が渡してくれたものに目を移す。

『米粉<sup>こめし</sup>パン』。彼がくれたものはそれだった。

両の掌に収まる程度のそれは、丸っこい形が特徴的だ。切り込みを入れて焼いたのだろうか、表面には十文字の特徴的な模様がついている。その周りには白い粉末が降り注がれていて、何とも不思議な雰囲気のパンだ。

「ほおー、これは」

「高原米を使つて作られた米粉パンです。先日ベルナ村に行ったので、そのついでに」

ベッドの端に腰かけた彼は、そんな説明口調を垂れ流す。ベルナ村といえば、高地に存在する田舎の村だ。そんなところからの土産をわざわざ持つてくるとは。

とは言いつつも、この前に俺の見舞いに来てくれてから早一月も経っているのだから、時間は十分にあつたと言えるのだが。

「わざわざベルナ村にまで向かわされるなんて、ギルドナイト様は大変だな」

「以前君と狩った獣竜種の特異個体が発見されたとかで、ね。尻尾が体より長いモンスターなんて初めて見ましたよ」

適当な軽口を交えながら、トレッドはそう言っていた。

以前狩ったといえ、霞ヶ草のおひたしを作る前のアレか。山菜ジイさんと一緒にカレーにした獣竜種——確か、斬竜、デイノバルド。その特異個体なんて存在したとは驚きだ。一体どんな味がするのだろうか。

なんて思惑しながらも、ふとその分類について思いを馳せた。獣竜種、また獣竜種か。どうも彼とは、獣竜種を介しての縁があるような気がする。その事例といい、今回のことといい。

そう感じていたのは俺だけではないようだ。トレッドも少し視線を外しながら、アレに関する情報を口にした。

「……肝心な滝瘴啖イビルジョーのことですけどね、今度はしつかりギルドが監視しますよ」

「……そうか」

空気が重くなる。そのワードを口にした途端、彼の発する空気が重苦しくなった。

そういう俺も、同じかもしれない。耳にした瞬間、身体が強張ったのは事実だ。

「ギルドの連中は……また手を出すか？」

「どうでしょう。ギルドナイトも何人か返り討ちに遭ってますし、死者すら出ている始末。当分は見送るんじゃないでしょうかねえ」

「……出来るとしたら、お前くらいかもな」

困ったように両手を広げる彼に向けて、そう呟く。

すると重い空気を発していた彼だったが、今度は薄ら笑いながら「冗談はやめてください」と、俺の質問を一蹴した。愛想笑いと言え、苦笑いをブレンドしたような、そんな表情だった。

「君との契約です。そんな真似はしませんよ」

「……どうだか」

謙遜するようにそういう彼だが、どうにもこうにも胡散臭い。初めて俺とコンタクトをとって、コイツの仕事に巻き込んできた時を彷彿とさせる、そんな表情だ。契約なんでもっともらしく表現するのが、余計に胡散臭さを助長させる。

「……とりあえず、ドンドルマに行くしかかないか。正攻法が一番安泰かな」

「いやいや、君は体のことを一番に考えるべきでしょう。……もうこの際、ハンターなんて辞めたらどうですか？」

冷めた瞳が、俺を貫いた。リアリストの彼らしい、鋭利なナイフのようなその言葉。

それが俺の心をサツと斬り付ける。

考えてみれば、俺は片脚を失ったのだ。ハンター生命が断たれたと言つても過言ではない。普通なら、ハンターを辞めるといふ選択肢しかないはずだ。

「はあ？　ふざけんな。片脚を失つても、俺はまだ……」

「そんな状態で瘡瘻啖を討とうなんて、無謀にもほどがある。どころか、イヤクツクにすら勝てませんよ」

厳しい言葉だった。現実を突き付けられたような気がする。

確かに、片脚が無ければまともな機動力は得られない。両脚が揃つていた頃の動きを足一本でやろうなど、現実的に不可能だ。彼の言うことはもつともである。

だが、それだけで「はいそうですか」と引き下がるわけがない。俺はまだ、自分のハンター生命を見限つてはいないのだから。

「……そんな状態、だろ？　だったら、代わりの脚を用意すればいい」

「へ？　何をそんな……つて。まさか、シグ。君は、もしかして……」

「シナト村で聞いたんだ。伝説の職人は、如何なるものも造り上げると。ナグリ村にも来たことがあつて、土竜族のために義肢を造つたことあるというのよ」

「……つまり、義足を用意するということですか？」

神妙な顔つきでそう尋ねてくる彼に、俺は小さく頷いた。

ナグリ村の住民で、かつて作業中に脚を失った人物がいたらしい。たまたま居合わせた伝説の職人は、彼のために代わりの脚を造ったのだとか。相当前の記録であるらしく、その土竜族も既にいなくなっていたが、機工の脚を携えた村民がいたのは確からしい。

「伝説の職人なんて、雲を掴むような話ですよ。以前はドンドルマにいたそうですが、今となつては一体どこにいるのやら……」

「星のような数のハンターの中から標的を炙ってきたお前なら、出来るんじゃないか？ 情報通のギルドナイトさんよ」

「……はあ」

そんな俺の言葉に、彼は困ったような声を漏らした。呆れと嘆きも含まれているかもしれない。とんでもない奴と組んでしまったと、後悔が表情の中に滲んでいる。

「少し漁ってみます。ですが、あまり期待はしないでくださいね？」

「ああ、助かるよ。生憎俺は友達があんまりいないから、な」

免罪符のようにそう言つては、彼は病室を後にした。何というか、彼の心労を俺がかさ増しているかのような気分だ。あながち間違っていないだろうが。

トレッドなら、ギルドナイトなら、ギルドの一般には公開されない情報にも踏み込める。彼は俺の数少ない友人の中でも、最も事情に融通が利く男だ。きつと、トレッドな

ら。

「……うまつ」

そつと、彼がくれたパンを齧った。米粉パンと言いつつも、そこまで米らしい印象はない。見た目や感触も相まって、パンという印象の方が強い。しかし、香りは従来のパン特有の小麦らしさではなかった。やはり米をふんだんに利用しているようで、米らしい穏やかで落ち着いた匂いがする。

食感、これまた特徴的だった。小麦由来のパンよりもさらに上にいく、その食感。もちもちと柔らかく、まるで餅でも食べているかのような気分だ。噛む度にもちつとほぐれていくその食感に、俺は思わず楽しくなる。噛むのが楽しい。もつと噛み続けている。たい。

食感や香りはさることながら、味もまた米らしいものだった。淡泊で色の薄い味。小麦よりはあっさりとしたその風味に、俺は少し感嘆してしまう。小麦のパンならば、ジャムなりバターなり何かしらのアタッチメントが欲しくなるが、このパンでは話が違った。

薄味であることには変わりないが、何とも珍しい風味。口いっぱい広がるこの風味を楽しむには、このままで食べるのが一番だと、そう感じた。このパンは、このまま食べるのでいい。むしろ、このままでなければならぬ。

「ああ、少しだが満たされる。パンって偉大……いや、米か？　でも、パンだよな？」  
ごくんと呑み込みながら、そんな自己問答が俺の中を走り回る。今俺が食べているのは確かにパンであつて、でもそれは米で出来ていて。パンか米、どちらを讃えればいいのか分からなくなつてきた。

いや、どっちでもいい。どっちもいい。パンだつて米だつて、素敵な食べ物なんだ。貧相な治療生活のお供にはピッタリだ。

なんて考えていた瞬間。突然、目の前の扉がガラリと開いた。

「旦那さん、お邪魔するにゃー！」

その突然の客は、他でもないイルル。——イルルツ!?

慌てた俺は、ゆっくり咀嚼していた米粉パンを呑み込んだ。パンを包んでいた袋は空かさず布団の下に詰め、何事のなかつたかのように表情を作る。一気に詰め込んだパンで、呼吸も詰まりそうだ。

「……………？　どうしたのにな？」

「ふあつ、ふあんでも……………んっ、……………ないよ？」

俺が出来る精一杯の笑顔を浮かべ、不思議そうに首を傾げるイルルを出迎えた。我ながら迫真の演技だと自負している。

——つもりだったが、彼女には通じなかつたようだ。何かに気付いたように、彼女は

悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「旦那さん？ 何だか、変な匂いがするにや」

「うっ……」

くんくんと部屋の匂いを嗅ぎながら、イルルはゆつくりと俺に近付いて来る。パンそのものは隠せても、その匂いだけは隠せないようだ。確かに、俺の鼻にもあのパンの芳ばしい香りが届いている。

「これは……お米かにや？ でも、パンみみたいな香ばしい香りにも感じられるにやあ」  
「いや、これは、その……」

目が全く笑っていない笑顔で、イルルは俺のベッドの上にまで来た。そうして、俺の首筋に頭を擦り付けてくる。

いつもなら何のこともないその仕草だが、今のこの状況ではどうにもこうにも言葉に出来ない圧力があつた。何というか、奥さんに内緒で飲んできたことがバレた旦那のような。そんな気分だ。

「にゃーん、ボクは安静にしててって、言つたにやあ？」

「あ、いや、誤解だ……！」

王手が掛けられたこの状況。どうにもこうにも、俺がこれを覆す方法はなさそうだ。為す術を無くした俺を前に、イルルは困つたような溜息をついた。まずい、このままで



はまた説教が飛んでくる。

そう覚悟した、その瞬間だった。

「……邪魔するぜ」

唐突に開けられたその扉。低い声でそう言つては、一步部屋へと足を踏み入れてくる人物。リオレウスらしき防具で身を包んだ、小さな影。

目深に被つた兜は顔を覆い尽くしており、その表情は読み取れない。黒いマントを翻すその鎧は、そこらのリオレウスの装備より黒ずんでおり、厳つさも物々しさも段違いだった。

そして何といつても、その背丈。俺の腰程度しかない。イルルとどっこいどっこいか、ちよつと彼女より高い程度。その背丈は、シルエツトは、イルルのそれだった。「にゃ……誰にゃ……?」

その突然の来訪者に、イルルも少し身構えた。しがみついていた手を緩め、そつと俺から身を離す。いきなり入ってきた見たこともない人物に、当の彼女は困惑気味だった。

一方の、やってきたそのイルルはというと。

「……ふざけやがって。噂は本当だったツツーわけか……」

ネコらしきとは程遠い渋い声でそう唸つては、その兜の奥の三白眼を光らせる。

そうして、右の肉球を固く握っては、俺に向けて素早く跳躍した。ナルガクルガの跳躍を思わせる、目にも止まらぬその速さ。それが一直線に、俺の頬で破裂したのだった。「何やってんだツツ！ この馬鹿弟子がアツ！」

超速度のネコパンチが炸裂し、俺の視界が激流に吞まれた。喉奥につつかえていた米粉パンが逆流し、口内で溢れる鉄の味が、胃酸の味と共にパンへと塗りたくられる。お世辞にも美味いと言えないその味が、まるで渦潮のように口内を暴れ回った。

「…………ツ…………」

だけど、それよりも衝撃的なものが、今日の前にいる。鉄臭い血の味も、胃酸の酸っぱい味も、まるで気に止めなかった。気に止められなかった。

口の中で溢れかえるものは一気に吞み込んで、揺れる視界を目の前のネコに定める。その声はかつて何度も聞いたあの野太い声で、その拳はかつて何度も打たれたあの力強さで。

目の前のこのネコは、紛れもない俺の恩人——ならぬ恩ネコだったのだ。「いッ…………てえな！ ——こんの、クソ師匠がツ！」

く本日のレシピく

## 『米粉パン（4個分）』

・高原米粉	……	150g
・白ソルガム粉	……	30g
・お湯	……	120g
・古代林塩	……	適量
・砂糖	……	適量
・ドライイースト	……	2g
・サラダ油	……	13g

狩人真生譚　　E a t　　o r　　b e　　e a t e n　　)

旨い物は宵に食え

「——シグよ、黒炎王って知ってるか？」

「あん？　……何か、滅茶苦茶やべえ火竜だよな？」

暗幕のように空に覆い被さった黒。その黒に穴を開けるように輝く無数の光。

夜という静寂に包まれたこの小さなベースキャンプには、二つの影があった。灯る焚火を囲うように座る、二つの影。

「そうそう。何だよ、会ったことあんのかよ」

「閃光玉使つても落ちてこなかったんだよな。強靱過ぎるだろアレ」

舞い上がる火の粉もまるで気に留めないで、小さな影は興味深そうにそう言つては髭を擦つた。敵めしい兜は脱ぎ捨てて、重力に逆らうように立った三角の耳が目立つ頭を、燃え盛る火の光で照らしている。

茶トラ斑点の毛並みに、妖しく光る金の三白眼。俺の目の前であぐらをかく彼は、俺の言葉を聞いては少し興でも削がれたかのように鼻を鳴らした。

「そこしか見てないのか？ あの個体の飛行能力をもっとよく見ろよ」

「飛行能力つつたつて……ただひたすら飛び回るだけで——」

「原種と比べてみたらどうだ？」

「……えーつと？ 何が言いたいんだよ、師匠」

昔と変わらない人を試すような表情で、口角をそつと上げるイルー——もとい、師匠。

年相応なのか、個体としての特徴が激しいのか、何ともイルーらしくない渋い声で俺に問答を持ちかけては、彼は少しばかり楽しそうに耳を揺らした。

「よく飛び回るだろ？ 並のリオレウスより数段飛ぶぜ、アイツは」

「……まあ、言われてみれば。糞みたいな習性だよな」

「糞といえど、閃光玉に対する耐性も持ち合わせてるのものな」

かなり前の記憶を探り寄せながら、混ぜ返ったイメージを何とか形にする。まるで野菜炒めの中からそつと肉だけ取り出すような、そんな感覚だ。

そうして生まれたイメージの中の黒炎王。言われてみれば確かに飛び回っていた気もするが——如何せん、空腹のせいであの時のことはつきり覚えていない。自らを納得させるような記憶は出てこなかった。

「さて、ここが問題だ。何故アイツには閃光玉が効かないんだろうな？」

「さあ。視力落ちてるんじゃないかな」

「おい、適当なこと言ってるんじゃないぞ。アレだって目眩は起こすんだぜ、光は効いてるんだ」

「えー……知るかよ、つーかどうでもいいだろそんなの。効かないなら効かないで、それを使わずに仕留めればいい話じゃないか」

俺が小さい頃から全く変わらない師匠の教え方。質問——いや、この場合目の前の彼は答えを把握しているのだから、発問と言った方が正しいか。その発問を駆使して考えを煽ってくるその態度。懐かしくもあるが、鬱陶しくもある。

「よく考えてみる。原種と比べて、黒炎王のより異質な外見的特徴を挙げてみな」

「……翼か？」

「ここまで言わねえと分かんねえなあ、やっぱてめえは昔と何も変わってねえのな」

呆れたように溜息をつきながら、師匠はそう息を吐いた。期待外れだとしても言わんばかりに肉球を仰がせるその仕草に、俺は少し苛立ちを募らせる。

そうして、何か言い返そうと口を開いた時だった。

「翼爪だよ」

「——あ？　翼爪……？」

それを塞ぐかのように飛んだ、彼の声。答え合わせとも言えるその言葉に、俺の思考

は軸を合わせられる。

翼爪といえ、モンスターに翼に付いているものだ。その骨組みの切っ先となる部分であり、強靱な武器となる部分でもある。ありふれたものである筈のそれが、彼の考える答えなのだろうか？

「……納得いかねえ、って顔だな。例えばさ、お前が足の小指をダンスにぶつけたら、一体どうなる？」

「……痛いからのたうち回る？」

「らしいな、人間って奴はそうだ。俺が言いたいのはな、奴もそれと同じってことだよ」「どういふことだ？」

要領を得ないその言葉に俺が痺れを切らし、考えるのをやめると、彼は困ったように溜息をついた。つきながらも、呼吸を整えて、そつと言葉を繋ぎ出す。

彼が言うには、黒炎王の翼爪は原種のものよりもさらに精密な作りをしているらしい。より苛烈な運動量も、より繊細なコントロールも、そして平衡バランスを失つてもなお体勢を保ち続けることができる強靱さ。それを可能にしているのが、その翼爪なのだとか。

「動物の機動性を司る部分にはな、繊細な神経組織が敷かれてるもんだ。それがあらかしこあんな芸当が可能で、逆に言えばそれを止めさえすれば——」

「……つまり、翼爪を破壊すれば？」

ようやく行きついた答えを口にする、彼は小さな笑みを溢しながら頷いた。

やつとかと言わんばかりのその表情だが、チラリと見えた彼の牙はどこか嬉しそうな様子だ。

「いいか？ ああいつた強靱な個体を狩る時は、まず運動を司る部位を狙え。機動力から殺してやるんだ。そうすれば、狩りは格段にやすくなる——

——つまり、こういうことかッ！」

重厚な盾が、何かをへし折る音を奏でた。舞い上がる体が、宙を舞うその翼を射抜いた。

まるで噴火のように立ち昇るその一閃は、バネのように体を浮かせたその一閃は、一寸の狂いなく奴——黒炎王リオレウスの右翼爪を貫いたのだった。

「にやつ……昇竜撃、炸裂にゃー！」

悲鳴を上げて体勢を狂わせる黒炎王。無様にもがき、地に墜ちる巨体。その横で飛び上つては、嬉しそうに鳴き声を上げる小さな影。相棒のイルルが、手に持った武器を振り回しながら喜びを表現していた。



「まだまだッー！」

そんな彼女に鼓舞されるように、俺は滞空しながら体勢を変える。

俺を吸い付ける重力に身を任せるように、そつと上半身と下半身を入れ替えた。先程まで高く高く突き上げていた右の盾を、今度は低く低く、地に伏せる奴の頭へと向けて――。

「にやつ、罅にやー！ 甲殻に罅が入ったにやー！」

まるで岩でも割れたかのような音と、それを言葉にするネコの声。右手の重い重い感触は、確かに奴の頭を刻む罅を感じていた。

洗練された昇竜撃は、二段構えの打撃となる。その二撃目が、見事に奴の脳天に炸裂したのだった。

「翼爪破壊におまけがついてきたにや、お得だにやー！」

「柵から牡丹餅ったあこのことだなー！」

着地の反動に耐えながら俺は何とか身を起こし、イルルはそれをカバーするかのよう  
に黒炎王の頭へと剣を振りかざす。そんな彼女がブーメランも構え、さながら鬼人突進  
連斬のように回転斬りを叩き込めば、俺はすかさず左の剣を振り抜いた。

イルルが回転の勢いのままに黒炎王から距離を開け、その隙間を埋めるように今度は  
俺の剣が飛んでくる。されるがままに斬られ続けた黒炎王も、そろそろ堪忍袋の緒が切

れたようだ。

「グウルルル……ツツ」

遺跡平原特有の黄金色の草を撫でるように蹴り上げ、その巨体を即座に引き上げる。そうして持ち上がった首を引いては、その大きな口から力強く息を吸い始めた。

咆哮がくる。それを察知した時には、俺の右手は動き出していた。盾の衝撃が未だに響くその腕が、俺の頭のヘッドギアへと伸びる。

フルフェイスではないヘッドギア式にオーダーメイドしたレックスZヘルム。その右側頭部に付いたダイヤルを、俺はキュツと回し込んだ。

「ゴアアアアアアアアアアアツツ!!」

大銅鑼のように大気を打ち鳴らす咆哮音。リオス種はその腰を引かす怒号。

それが届く前に、奇妙な圧迫感が俺の耳を包み込む。

まるで耳の穴を隙間なく埋めるかのような感覚。耳からの情報が閉ざされて、鼻の奥がスツと締め付けられるような感覚。それを感じる頃には、俺は奴の咆哮の中で動き出ししていた。

聞こえないことはない。音自体はこの『高級耳栓』で遮られていようと、空気の振動は伝わってくる。それでも、生で聞くよりは随分マシだ。表皮には鳥肌が顔を出す、体の芯まで震えることはなかった。音が聞こえないだけでも、本能的恐怖を幾分か押さ

えつけることができる。

「……そうなれば、こっちのもんだ」

耳が塞がれた時特有の、体内に籠る俺の声。口がそれを走らせては、俺の右手はポーチへと走る。

そうして取り出された小振りの球体は、奴が口の奥を光らせるその瞬間に、奴の目の前へと飛び出した。

「にやつ、轟音の次は——」

「イルル、目を塞げッ！」

バックジャンプ、同時に放たれるブレス。リオレウスの代名詞とも言えるその動作と共に、着弾点が火を吹いた。まるでリオレイアのチャージブレスを思わせる苛烈な連鎖爆発が、遺跡平原を荒々しく焼く。大気も焦がすその勢いに、俺は思わず顔を覆った。

いや、顔を覆った本命はこれじゃない。この爆発に紛れて身を振らせるあの小さな玉。爆発の光を絵具で白塗りするような、強烈な光。そう、閃光玉だ。

「グアアアッ!？」

本来、黒炎王と呼ばれる種は閃光玉が通用しない。先日師匠が言っていた通り、光によつて目眩は起こすものの落下することはないのだ。その原因は、原種よりもさらに発達した翼。繊細な動作を可能とする神経回路。

原種であれば目を眩ませるや否や、翼のコントロールが全くできなくなる。しかし黒炎王という力を付けた個体ならば、視界を奪われようがその強靱な羽搏はばたきにより身を保持直すことができる。バランスを崩した人間が四肢を用いて体勢を保つように、奴もまた繊細な動きで身を空に保ち続けるのだ。

だが、それも翼が無事であればの話。そして奴の右翼爪は、先程の一撃で見事に砕かれており――。

「うっしやあー！ 好機だ、行くぞオラアー！」

奴の怒りに呼応するように、俺の心も滾り出す。溢れる気力を全身に、俺は思いのままに大地を蹴り上げる。

ようやく痺れが薄れゆく右手でもう一度ヘッドギアのダイヤルを回しながら、左手では腰に備えられた『テオIIエンブレム』を引き抜いた。耳を圧迫する感触が消えたと同時に、黒炎王の巨体が大地を打ち鳴らす音が届く。

「にやにやにや！ でつかくいくの、巨大ブーメランっー！」

先ほどのものより一回り大きなブーメランが奴の首筋を斬り裂き、橙に染まる重厚な剣は巨大な竜の頭部を打ち据えた。

電光を帯びたブーメランの軌跡と、振れば振るほど緋色の粉塵を撒き散らす剣。その斬撃の軌道には、滅気の刃薬が眩しく光る。それが罅の入った奴の甲殻を確実に剥がし

ていった。

「旦那さん、そろそろ起き上がるにや!」

「ああ、そうだな。離れるぞ!」

剣を引いては後ろに跳んで、戻るブーメランを手にしては横にステップして。そうして黒炎王から距離を空けては、起き上がるその巨体に目を当てる。

奴はといえば、怒り心頭といった様子だった。青い瞳は真紅に変色するのではという勢いで血走り、牙の並ぶ口は衝動を抑えきれないかのように震えている。そうして、その奥から青とも赤ともいえない奇妙な光を燈し始めた。

翼を、まるでこの空間を包むかのように広げ、その頭を、まるで鎌のように高く上げる。

それに呼応するかのように燃え立つこのエリア。沸騰するヤカンを思わせる勢いで溢れる熱気の奔流は、静かに、それでいて力強くこの空間を焼き始めていた。

黄金色の草原は、橙色に変色したかと思えば燃え上がり、色のないはずの大気はまるで陽炎のようにその身を振らせた。——この光景を、俺は見たことがある。

「……イルル、離れろ」

「にやつ……旦那さんっ!」

彼女の前に立つては、そつと盾を構えた。溢れる熱気の、その源泉となる奴の頭から

目を離さずに。

ぴよんとイルルが後ろに跳んだ瞬間、まるでそれが引き金になったかのように、奴の口内が弾けた。空間を焼くその灼炎は、着弾するや否や大地を融解させる。さながら火薬岩のように溶け出すその地盤は、ここら一帯を火山地帯へと変えた。

「あ、熱っ！ にや、何にや？ これは一体……っ」

「イルル、あの融解地点は既に限界状態だ！ 間もなく爆発する！」

「にやっ、何それ……っ!？」

騒ぎ立てるイルルが武器を背負つては、慌てて熱源から離れる一方。黒炎王はいえ、ブレスの反動を利用して天高く舞い上がっていた。そうして、燃え上がる口内を振って、その熱を逃して――。

「……あれは……まさか」

俺は見逃さなかった。奴が振り回すその口内。同時に垣間見える、奴の――火竜のタン。口内の許容量をとつくに超えたあのブレスだ。その影響か、奴のタンはこんがりと焼けていた。草の燃える臭いの中に、うっすらと香ばしい肉の香りが紛れ込んでいるよ。うな、そんな気さえする。

なんて見惚れていたら、その光景はすぐさま霞と化した。奴が頭を振って口内の熱を排出すれば、そのタンについた程よい焼き目がどんどん薄れていく。香りも焦土のもの

に全て覆い隠され、気付けばその芳ばしい景色はとつくに消え去っていた。あるのは、ギラギラとした瞳を輝かせる一頭の飛竜のみ。

「旦那さん！ にやあああ！」

「うおっ——」

突然横からイルルが飛んでくる。いつかのネコ式突撃隊を思わせる動きで俺の視界を奪い、同時にその熱源から俺ごと飛び去った。それに続くように響く、爆発音。空気が巻き上がり、同時に溢れる凄まじい熱波に、俺は思わず顔を顰めた。

危うく見惚れていたがために、イルルが飛び付いてくれなければあの渦中に巻き込まれていたのではないか。そう思うと、レックスZメールに包まれた背中に冷や汗が走る。

「何やってるんだにや！ ボクに注意した旦那さんが隙だらけなのにや！」

「わ、わりい……。つい見惚れてて」

「にや？ 黒炎王ににや？」

「いや、アイツのタン」

「……まさか、また食欲でも舞い降りてるのにや？」

「まあな。イルル、アイツのタンを狙うぞ。さっさと狩って食おう、腹減った」

「にや……。あう」

爆風ものともせず、むしろその波に乗るような勢いで滑り込んでくる黒炎王。宙を駆けるその爪は、あの毒々しい液を滴らせている。それを振りかざしては、話し込む俺たちへと突き刺した。

「聞け、イルル！ 黒炎王は熱に強い！ 燃石炭もない今、ただタンを剥ぎ取っても調理の仕様がないだろう！」

「た、焚火があるにゃ！」

「あんなちまい火力で火竜の肉が焼けるか！」

「にゃあ？ じゃ、どうするのにゃ!？」

「考えてみろ！ 燃石炭が無くとも、焚火を使わなくとも焼く方法はある！」

毒爪を躲して、黒炎王の背後に回っては剣を振る。しかしその手もほどほどに、頭は忙しなく動く口の方に集中する。

同じく避けたイルルは、黒炎王から距離を開けつつ何丁ものブーメランを取り出した。俺の言葉に反応しながら、それをバラ撒く彼女。電撃を帯びたその刃が、赤黒い甲殻に傷を入れる。

「にゃあー……にゃつ！ もしや、旦那さん。それって——」

「気付いたか!？」

「にゃ、こ、これかにゃ!？」



飛び交う火球を、イルルは慌てて避けた。そうして、動揺しながらも飛び去るその火球を剣で指す。俺の思惑通りの、それを。

「正解だ！ コイツの肉はコイツに焼かせる、良い案だろ？」

「にや、で、でもそんな都合のいい話にやんて！」

「生半可な火力じゃダメだな。今のただのブレスや、ほら、アレとか」

怒りが未だに収まらない奴は、回復力抜群のその口を振り回しては、凄まじい勢いの熱を振り撒いた。頭を振る度に溢れるその熱気。けれど、これでも物足りない。

「じゃ、じゃあ、まさか……！」

「ああ。アイツの最大出力、地面を融解させるあの熱量が望ましい。つまり……」

「……さっきのアレを誘発して、逆にタンを奪うとも言うのかにや？」

「冴えてるな、その通りだ！」

振り回される巨大な尾。それを躲しては奴を刺激する俺に、イルルは悲鳴に近い声を上げた。「無謀にやーっ！」という言葉が、俺の背中にへばりつく。

「無理にや無理にや！ あんな恐ろしいブレスを掻い潜るなんて！ 夢のまた夢にや  
！」

「チャレンジする前から諦めてちや世話ねえな！」

「だ、だって、あんなの——」

「噂をすれば影が差す！　そうら来るぞ！」

尾を振れば剣が飛び、火を放てばブーメランが返ってくる。そんな状況に嫌気が差したのか。

奴は再び鎌首を擡もたげた。そうして、再び溢れんばかりの炎を燈す。色のない空間に、淡い炎の色が差した。

「俺が突っ込んで隙を作るから、イルルはぶんどる準備をしろよ！」

「にや、にやー！　こうなったらもうなるようになれ、にや！」

暴風のように飛び交うブーメランをキャッチしては、イルルは悲鳴のような声を放つ。

それを上書きするような、劫火の音色。空間を占めるように広がる陽炎。火山の如き熱を持つ、熱波の鼓動。それが、じわりじわりとこのエリアを覆い隠していく。

さて、どうするか。黒炎王はあの強力無比なブレスを放つ度に、その反動を利用して飛び上る。その高度は人間の脚力の限界を超えているということは言うまでもなく、ただ跳び上がったも届くことはないだろう。もう一段、俺と黒炎王を隔てる空間の中に足場がある。

頬の上を、汗が走った。

熱波による汗か、緊張による冷や汗か。それに気に留める暇さえありやしない。擡もたげ

た鎌首はいよいよ破裂寸前となり、赤い炎で青い炎を呑んでいく。呑まれた青は、赤い炎の中で揺らめき、呑んだ赤はこの空間をも呑み込もうとさらに大口を開く。

——その瞬間だ。とうとう、光が弾けた。

「だ、旦那さーんっ！」

聞こえたのは、大気が焦げる音。そして、大地が捲られる音。

揺れる視界。燃え上がる草花。融ける大地。捲り上がる、地盤。

「——これだッ」

前に跳ぶように躲した俺の体を、無理矢理引き上げた。左脚のスプリングを最大限まで引き伸ばし、全身を上へと撥ねさせる。すると、背後から押し上げられるような感覚——いや、そんな生やさしいものじゃない。吹き飛ばされるような衝撃がやってくる。爆風が俺の背中を焼き押したのだ。

そうして浮かび上がった俺の体。空いた右脚は、捲り上げられ、大気を漂う地盤へと辿り着く。そのまま、跳躍するかのように右脚を振り抜いた。

「……ゴアアッ!？」

「口開けるオツ！」

爆炎を貫いて、突然飛び出してきた影。それに驚いたのか、黒炎王は何とも間抜けな声を漏らした。

晒される間抜け面。そこへ、つつかえ棒のように右手の盾を押し込んだ。歯茎に乗せた脚で、それを蹴り詰める。

「ガッ……ッ!?!」

「——いただくぜえ……!」

「いつけーっ! 旦那さーん!」

奥歯に詰められ、口を閉じることができない。そんな呻きを漏らす黒炎王のその舌に。握り締めた左の剣と、盾から抜刀した右の剣を交差する。そうして、その焼き目に向けて一心不乱に振り抜いた。

爆発性の粉塵が溢れ出るのも気に留めず、俺はその舌の根元から目を離さない。研ぎ澄まされた俺の視界は、確かに剣が舌を斬り深めていくのを捉えていた。溢れ出る熱気も、肌が焼けるのも一切無視して。

「千切れるオ!」

同時に振り下ろした、両の剣。その剣圧に、舞い上がる粉塵はまるで風に煽られたかのようにその鳴りを潜める。

——だが、それでも、奴の舌を斬り遂げることはできなかつた。まだ薄皮一枚で繋がっている。

「……くッ!」

「ガアアツツ！」

溢れ出る血と痛みに任せ、無理矢理盾を弾く黒炎王。そうして空いた口で俺を噛み潰そうと、その剣の山を振り下ろしてくる。迫り来る醜悪な歯並びに、俺は反射的に後ろに跳んだ。恐怖より、嫌悪感が前に出た。

それでも、奴の牙は終わらない。宙に跳んで身動きが出来ない俺に向けて、奴は再び牙を放つ。鮮血に染まった真紅の牙が、猛然と俺に覆い被さる――。

「させるかによ！ 貫通」巨大ブーメランだにやつ！」

空を焼く、煌めく青。突然乱入してきたその青い光が、鋭い刃を振りかざす。それは奴の顔に突き刺さる程度では飽き足らず、そのまま斬り裂くように、粘膜から甲殻まで焼き切った。その衝撃に、奴は驚愕の声を漏らす。

「ふうー！ イルル、ナイスだ！」

そんな奴の頭に向けて。重力によって加速する俺の体を、少しばかり操作する。ただ少し、怯む奴の頭へと、左脚を、その踵を突き出す。それだけだ。

――されど、左脚。肉ではない、固く重いその脚は、重力によって鋭さをさらに増した。さながら、振り下ろされる槌のように。銀光りする鎚のように。

「せいッ！」

響く金属音。固いものと堅いものが奏でるその音色。それを塗り潰す、火竜の悲鳴。

衝撃が脳まで伝わったのか、これまで打ち込んだ滅気の効能がやっと回ったのか。奴は滞空しながらも、昏倒を引き起こしたのだった。そうなれば当然、翼のコントロールなど出来なくなる。つまり、墜落だ。

「……にやあああああああつ！」

巨体の落下音を押し退けるように、巨大なにやんにやんぼうを構えるイルルが、獣らしい怒号を上げた。そうして、目を回す奴のその口へと振り被って――。  
炎の色に染められた筈の金の草花は、色の深い紅色へと変貌した。



「いやあ、こりやいいいな。俺が焼かずともすでにこんがり。うんうん、いい香り」

「……下手したら旦那さんがこんがり肉になってたにや」

「むしろコゲ肉になりそうな勢いだったけどな！」

「わ、笑い事じゃないのにや！ 心配したんだから！」

激しく尻尾を振るイルル。大きな瞳を見開いて、俺を諫めようと声を張る。そんな彼女の頭をそつと撫でながら、俺は手にした剥ぎ取りナイフで火竜のタンを切り分ける。ベースキャンプに柵引くそよ風が何だか心地良い。

こんがりと焼けたそのタン。熱を逃しきれなかったそれは内部の芯にまで熱が通っており、切り分けるごとに深い肉の香りを漂わせた。

濃厚で、それでいて爽やかで、鼻孔を掻き揚げるようなその香り。香りが引き金になったかのように、俺の口内では唾液が滲み始める。

「見ろよ……すげえ良い色。苦労した甲斐があつたつてもんだなあオイ」

「むむ、程々にしてほしいのにな……」

「まあそう言うな。ほれ、食ってみろよ」

「んにゃ……」

一枚、薄く切ったタンを摘まんでは、イルルにそつと手渡した。それを受け取つたものの、未だ納得のいかない表情で眉を顰める彼女。しかし、俺の顔とタンを何度も見比べては、ようやくそれを、恐る恐る口にした。

訝しむように囁むイルル。だったが、もぐもぐと顎を動かしては、その度に少しずつ頬を綻ばせていく。大きな瞳を徐々に細めていき、いつの間にか満面の笑顔を浮かべていた。囁む度に聞こえるコリコリという音が、余計に俺の腹を刺激する。

よし、俺も早速食べてみようじゃないか。

摘まんだ一枚のそれを、軽く口に放り込む。そうして、さながらあの火竜のように口を閉じた。歯に伝わってくるのは、タン特有のコリコリとしたこの食感。囁む度に少し

ずつほぐれていき、その度にジューシーな旨みを溢れさせる。

その味わいは、何とも独特だ。旨味も強く、意外に脂分も多い。それでいて爽やかであつさりとした風味も併せ持っている。歯応えのある食感も相まって、肉の部位の中でも独自のポジションを持つタン。その特権をふんだんに使ったこの味は、クセになる要素で満ちていた。

「……こりやうめえ、箸が止まらねえな！」

「ふにゃあ、この噛み応えが堪らないのにゃ。ぐつと顎に力を入れると伝わってくるタンの弾力性、これは上質だにゃあ」

「このままでもいいが、色々付け加えても良さそうだな。レモンとか、トウガラシとか」

「前半賛成、後半断固拒否にゃ」

「……ハア、チビネコちゃんには分かんないかね。辛味あるタンの素晴らしさが」

「にゃむ、わ、悪かったにゃね……」

「仕方ない。この大人の味は、大人な俺だけで堪能しようかね。はっはっは」

「む、むむむ……そんなこと言われたら、ボクだって引き下がれないにゃつ。や、やってやるにゃー！」

「おつ、よう言った！ それでこそ俺のオトモだ！ ほれ、食え」

「ひつ、ひゃう！ つ、つーんとくるにゃ。か、辛そう……」



「その辛みが良いんだって。とりあえず食べてみな」

「……うう、お、女は度胸、にや！ 行くにやあつ！」

意を決したようにタンを口に入れるイルル。赤身の肉が粉末による赤で染まったそれを、勢いよく口に入れた。先程のように、確かめるように咀嚼して、顎をせつせと動かして。

——その一噛み一噛みをこなす度に、イルルは顔を赤らめていく。あの黒炎王のようにイルルが火を吹く様は、それはそれは圧巻だった。

「……爆炎袋かよ」

「ひいい、か、辛いにやーっ!!」

く 本日のレシピく

『黒炎王のタン』

・ 黒炎王のタン

……300g

・ お好みで塩胡椒、レモン、トウガラシなど。

## 蟹で鯛を釣る

ぼんやりとした灯りが空間を照らす。

仄かでいて、薄暗くあつて、淡く柔らかなその光。静かで、厳かで、それでいて和やかなこの空間を照らすその光は、この部屋の雰囲気にどこか合っていた。

——ここはアリーナ。ドンドルマ中央広場奥に位置する大衆施設だ。

ステージを囲うように連ねられた座席と、奥に佇むひっそりとしたカウンター。その座席に座つては酒を仰ぐ数人のハンター。その様子を眺めては、忙しなく動く箸を止めるアイルー。

一体誰が演奏しているかは知らないが、この部屋の中ではどこか心を落ち着かせる安らかな曲が流れ、みなそれに聞き入っているようだった。集会所にはない落ち着きと、静寂。それらを享受するにはピッタリの場所なのである。

ちなみに、ここは飯も悪くない。ブレスワインなんていう高級な酒もゴロゴロ入荷しており、専属のキッチンアイルーを数人雇っているらしく、様々な食材を様々な味で楽しめる。このアリーナで行われる演目を楽しみながら、または闘技大会の前後に一食、

など楽しみ方は人それぞれだ。

まあ、特に用もないのにただここの飯が食べたいという理由で脚を踏み入れる人間も、いないことはないらしいが。

「……む、美味い」

とりあえず注文したカルーアベルナミルク。グラスに注がれた白濁したその酒を、そつと口に流し込んだ。模様のように入り込むいくつもの氷が、互いにぶつかり合つては清涼な音色を奏でる。カランカランとなるそれは、味の良いお供だ。

ベルナミルクの濃厚な味。後味の悪くない甘み。アルコールが含まれていることもあまり意識させない、滑らかな口どけ。氷のそれにも負けないくらい清涼感を持ちながら、同時に深い甘みとコクを形成している。ただのベルナミルクのように、さらつと飲み干せそうだ。

そんな逸<sup>はや</sup>る気持ちを押さえながら、白く光るそのジョッキをそつとテーブルに置く。シンメトリーに並べられた座席の隅。俺しか座っていないその座席を贅沢に使い、俺は隣の椅子へと左脚を乗せた。

「ヤッ……」

ポーチからタオルを取り出しては、カルーアベルナミルクと一緒に注文したぬるま湯にそれを浸す。腕装具を外した素手に訪れる、ぬるま湯特有の熱くも冷たくもない中途

半端な感触。それを感じながらも、十分に浸したタオルを構わず引き揚げた。

俺の左脚は、義肢だ。殺すべき宿敵を殺し損ね、拳句の果てに左脚の膝から下を奪われた。結果を生き急ぎ、周りも友人も、相棒さえも気に留めず先走った代償。それが、これだ。

これを手に入れる——否、脚に入れるには、友人であるトレッドや相棒のイルル、さらには出来れば避けたかった師匠の助けを借りることとなった。リハビリには時間が掛かったが、素材元が素材元だけに性能は十分である。

とはいえ、勿論義肢である限りはメンテナンスというのが不可欠である。日頃から手入れが必要だと、これを造ってくれたあの人物が言っていた。

「うげ、結構傷入ってる。やっぱあの跳躍は無理があつたかなあ」

そんなこんなでカバーとなる装甲部分の汚れを落とそうとタオルを走らすが、汚れに混じって薄い亀裂が走っていることに気付く。

傷自体は浅く大したことはなかったが、この装甲に傷が入っていることが多少なりともシヨックだ。それだけあの黒炎王が強いのか、俺の扱いが雑すぎるのか。おそらく両者とも該当するのだろうか。

なんて嘆いてもこの傷が治ることなどない。無為なことをするよりも、さつさと手入れを済ませてしまおう。そう思つては、もう一度酒を仰ぐ。甘みとアルコールが冴え渡

り、視界が少し揺らついた。

「……シガレット？ シガレットじゃない？」

「あん……？」

そんな俺の後ろから、唐突に俺を呼ぶ声が飛ぶ。

一体誰だろう。イルルはネコの会合があるとかで出掛けているため、ここにいる筈がない。かといってドンドルマに、彼女以外の知り合いがいることもない。俺に心当たりはない。

だが、聞いたことがある声だった。随分前に聞いたような気がする、凜とした声。記憶とにらめっこをする度に、それが思い起こされる。

「……あ」

「やっぱり。やっぱりシガレットだ。久しぶり」

橙交じりの金の髪。癖毛なそれに生えた、犬耳のような頭装備。黒と灰色で構成された獄狼竜装備を身に纏った目の前の少女は、翡翠色の瞳をそつと細めては嬉しそうに笑みを溢した。

見たことがある。会ったことがある。ユクモ村へ旅立つ前に、数回共に狩りに行ったことがある。

そうだ。あのアルセルタスを初めて食べた時や、伝説とも言える存在のキリン亜種と

巡り合わせてくれた少女、その人だ。確か、名前は。

「えと、ハラヘツタさんだっけ……？」

「……前の名前間違いよりは幾分かマシね、うん。五十歩百歩だけど」

笑顔が固まり、額に青筋が浮かぶ。そんな彼女は淡い溜息を洩らしながら、そつと俺の横の、空いている方の座席に座った。

いい加減に名前を覚えろと、不満そうに吐き捨てながらも、彼女は久しぶりの再会を楽しんでいるらしい。澆刺はっらつと達人ビールを注文しては、グツと背伸びをした。その表情は、どこか嬉しそうだ。

「こんなところでどうしたんだ？　ここはバルバレじゃないぞ」

「ふっふーん、このヒリエツタさんを甘く見ないでほしいわね。近々G級ハンターに抜粋されるって話が上がったの。だから今日は講習会。で、その帰り」

「……マジか、知らぬ間に随分頑張ってたんだな。おめでとさん」

「ありがと。……で、アンタはどうしたの？　アンタこそ、ここはバルバレじゃないわよ？」

「ハツ、悪いな。俺は一足先にG級ハンターだ。見ろこの装備」

「うわ、よく見たらそれ、レックスZじゃない！　てか、早いわね。しばらく見ないと思ったらアンタはG級になってたのかあ」

「……ようやく戻ってきたって感じだけだな」

「え？ 何って？」

「何でもないよ。……飲み物だけじゃなんだ、何か食い物頼もう」

適当に彼女をあしらって、給仕のアイルーに注文を入れる。本日のオススメはアリーナ式特製肉じゃがということで、それを二人前頼んでおいた。それと空になったカルーアベルナミルクの入れ違いとして、ポツケレモンサワーも。

「レックスZってフルフェイスじゃなかったっけ？ カタログ読んだ時は、厳つい頭だった気がするんだけど」

「蒸れるからフルフェイスは嫌いなんだ。オーダーメイドでヘッドギアタイプにしても良かった。ほら、レックスSのあれみたいになさ」

「あー、なるほどね。よく見たらしつかり耳までカバーされてるじゃん。耳栓機能もあるわけか」

「そうだよ。前の装備よりはちよつと重いのがあれだけど」

「いいじゃない。私ももつと強い装備が欲しいなあ。これもそろそろ年季が入ってきたし」

「大剣ハンターにはディアブロXシリーズが人気らしいぞ」

「ちよ、ちよつとゴツ過ぎかしら……」

何気ない会話に花を咲かしながら、俺はようやくタオルで汚れを落とし終える。白銀の装甲は、汚れをなくし薄く輝き始めた。錆びないように水滴を落としつつ、そつと一撫で。鋼特有のひんやりとした温度と、滑らかで硬質な感触が伝わってくる。状態は良好、傷は塗装でもしとけ、といったところだろうか。

今度は膝下に巻き付いたベルトを外しつつ、肉と義足の接合部分にタオルを入れる。この部分ばかりは蒸れるのも仕方ないので、念入りに手入れしなければならぬ。不純物との間接であるため、幾分デリケートなのだ。

一方で、その仕草によく違和感を感じたのか。ハラヘツタ——じゃない、ヒリエツタは訝し気に俺に声を掛けてきた。達人ピールの香りが、そつと舞う。

「シガレット、何してるの？ 装備の手入れ？」

「ん？ ああ、ほれ」

「え、何これ？ 脚装備——え、えええ！ あ、脚っ！」

興味をもった彼女に向けて、その左脚を手渡した。銀に光る重厚なその脚。一見脚装備にも見えなくないが、肉の脚を入れる隙間はない。重く精密な作りが、それとは異なることを静かに主張している。

ヒリエツタはヒリエツタで、何となくそれを受け取ったものの、赤らめた頬を震わせた。白銀の鋼で出来たその脚に驚き、重いだ固いだと連呼している。



「折角だ、持つといてくれ」

「はあ!?! ちよ、え、ど、どういうこと?」

「見りや分かんだろ」

「……義足? シガレット、アンタ一体……」

彼女の言葉には応えないで、足先を見る。右脚より随分短くなってしまったそこには、義足同様鋼の器具が取り付けられていた。義足と足の接合部分。最も金属に押し付けられる、左脚最大の急所だ。

如何せん過度の運動をすればそれ相応に負担が掛かり、それは一挙にこの部分へと襲い掛かる。義足自体のメンテナンスと同時に、自分の体を見ることもまた重要だ。特にここは、怪我をしてないか。裂けてはいないか。最悪、壊死してないかなどのチェックを要する。

幸い、大した損傷はなかった。つまり、あの黒炎王戦のような戦い方でも、俺の体は幾分かはもつということだ。その証明は、今の俺には有り難い。

「……ま、アンタも話したくなさそうだし、私もそう聞かないわ。ハンターだもの、怪我なんてよくあることだし。私の師匠も、隻腕だったしね」

「へえ? 師匠がいたんだ。てつきり我流かと思つてた」

「武器の修業はあんまりだったの。師匠、大剣はあんまり使わないし。これは我流よ。」

教えてくれたのは、やっぱり生きることかな。ハンターとして、人間としての生き方」  
「ふうん……。参考までに、その師匠は人間だよな?」

「うん、そうだけど? ゴツツイ親父つて感じよ。い、いくせ……何とかつていう太刀を右手だけで振り回す脳筋だったわ」

遠い目で、されど懐かしそうな目で。どこか嬉しそうに語る彼女の横顔は、彼女が如何にその師匠という人物を信頼しているかが伝わってくる。

人間どころかアイルーだわ、俺とは喧嘩ばかりで最終的に喧嘩別れを迎えているわと、あのクソ師匠とは大違いだ。

「今は何処で何やってるのかなあ……」

「……ハンターなんだ。意外なところで会えたりするんじゃないか?」

「……そうかもね。でも、義肢を用いるハンターは初めて見たわ。初めて会った時からそうなの?」

「いや、あの時はまだ足があつたよ。まあいろいろあつて、義足用意して、リハビリがてらG級まで昇つたわけだ」

「アンタつて人はまた……無茶苦茶ね。まあいいわ。でも、義足なんてどこで用意したのよ? 見たところかなり精巧みたいだし、そこらの加工屋つてわけじゃなさそうだけど」

俺の義足を見渡しながら、彼女は的を射た質問を並べてくる。洞察力のある彼女らしい、筋の通った疑問だった。

一体これを、どこで誰に作ってもらったのか。その質問は、これまでの空白の時間を埋める核心的な答えを導き出す。即ち、トレッドの成果そのものだ。

彼はタンジアギルドの抱えるG級ハンターかつギルドナイトという要職であり、これまでも公私混同しながらも星の数とも言えるハンターの中から標的となる人物を探し、文字通り炙ってきた。人を探し出すことにおいては、彼の右に出る者はいないというのが俺の見解だ。

そんな彼だからこそ、トレッドには、この世界の何処かにいるとある人物の居場所を探してもらおうように頼んでいた。そう、それは。

「……ヒリエツタはさ、伝説の職人って知ってる?」

「もちろん知ってるわ。有名な人物よね、古龍の武器の製作にも大きく関わったっていう。加工職人の中でも一、二を争う有名な人じゃないかしら」

「そうそう。それと同時に、滅多に会える人物じゃないことも知ってるよな?」

「各地を転々としてるらしいからね。会ったことあるってのも、全然聞かないわ」

「そうなんだよ。それでも、彼の技術なら安心じゃない? 頼みたいじゃん?」

「まあ、そりゃ生唾ものだけ……」

「だから、彼なら実用的な義足も作れるんじゃないかってなってね」

「……嘘でしょ？　まさか、じゃあ……その脚は、伝説の職人製の……」

「……と思うじゃん？　会えなかったんだよなあこれが」

「は？」

間の抜けた声が、アリーナに木霊する。凜とした彼女らしからぬ、あんぐりと空いた口が印象的だった。開いた口が塞がらないとはよく言ったものだ。

そう、俺は伝説の職人に会うことはできなかった。トレッドも随分頑張ってくれたが、彼に相見えることはなかったのだ。トレッドの力をもつてしても、伝説の職人は捕まらない。まるで霧のように、霞のように、彼はこの世界の何処かに身を顰めてしまった。流星のオオナズチも驚きだろう。

では何故今ここに義肢があるのか？　ヒリエツタがそう感じるのももつともである。

「やっぱそれ、その辺の加工屋のものなの？」

「いや、そんなちやちなもんじゃない。もつと高性能だよ」

「じゃあ、一体誰が造ったのよ。ワケ分かんないわ——って、ちよつと待つて」

「お？」

不機嫌そうに首を傾げるヒリエツタ。そんな彼女だったが、ふと何かに気付いたように考え込み始めた。艶やかな唇に、そつと人差し指が触れている。

そんな彼女の背後から、大皿を運ぶアイルーが一匹。溢れる鮮やかな香りが、そつとテーブルに舞い降りた。とろりとした光を帯びた肉じゃが、らしき一品。乱切りされたサラミがごろりと入り、よく焼けたタマネギと蒸かされたジャガイモが良い色を帯びている。それらを覆うように被さったあんかけのようなソースがまた珍しい。紅白色の繊維状のものが少しずつ散りばめられ、アリーナ式というだけあって独自性に満ちた肉じゃがだった。

添えるように置かれたポツケレモンサワーもまた心地良い。パチパチと溢れる気泡がまた、食欲をさらに高揚させる。

「レモンサワーにアリーナ式特製肉じゃがお待ちどう、ニヤ！ 肉じゃがはモガニを使ったあんかけソースを使っていますニヤ。ソースに入った繊維状の肉は、モガニの身ですニヤ〜」

「ほう……こりやまた面白いメニューだな。いただきまーす」  
「……シガレット」

噛み応えのあるサラミ。大きく切り分けられたそれは、サラミ特有の噛み応えを色濃く残している。オリーブオイルで加熱されたのだろうか、噛む度に爽やかな風味を生み出して、味わい深い脂を口内に塗りたくっていく。

よく熱されたジャガイモは、ホクホクとした柔らかくも固くもないあの食感を作って

いる。噛む度に少しずつほどけ、口内でじつくり溶けていった。そのジャガイモの控えめな味に、あんかけ特有のとろみと甘みが混ざり合う。

モガニが使われていると聞いたが、もしやモガニの甲殻でも使って出汁を摂ったのだろうか。艶やかで深い潮の味が、しつとりとあんかけに絡んでいるような気がする。噛めば噛むほど、口の中でジャガイモが溶け、タマネギの甘みと絡み合う。時折顔を出すモガニの身も、ジャガイモに鮮やかな旨みを落とすとしていく。風味も相まって、何とも不思議な食感だった。

一方で、ヒリエツタはジャガイモを箸で摘まんだまま静止している。味より思考に耽っているような、そんな印象だ。

「食わないのか？　冷めちまうぞ？」

「あのさ……気になることがあるんだけどさ。伝説の職人って、弟子をとってなかったかしら？　人間でありながらその技術をものにしたっていう、凄腕の……」

「……何だよ、察し良いなあ」

タマネギの甘みと風味、サラミの脂とクセのある味、あんかけの滑らかな食感。それらを染み込ませたジャガイモを何度も噛んで、ごくりと呑み込む。喉を滑るその感触が、何とも心地良い。

そんな口内を、喉を。濃厚な味で満ちたそれらを、爽やかなポツケレモンサワーで洗

い流す。強い酸味と、弾ける気泡。一転変わったフルーティーなその味に、俺の味覚は混乱状態だ。ホロホルもビツクリではなからうか。

蓄積されゆくアルコールを感じながら、ジョッキをドンとテーブルに置いた。口から垂れる水滴を手の甲で拭い、ホッと一息つく。そうして、まっすぐヒリエツタを見返した。

「御名答。この脚は、その弟子である工房のおばちゃんに作ってもらったんだ。件の職人は見つからなかったけど、ジャンボ村にその弟子がいると聞いてね。すつとんでいたよ」

「……その脚で？ 一人で？」

「バツカお前、船に決まってるんだろ。知り合いとかオトモに付き添ってもらったんだよ」  
「アンタ……私以外の友達いたのね。てつきり一人ものだと思ってたわ」

「うるせえ、お互い様だろそれは」

伏せるように笑う彼女の冷やかし。それを適当にあしらうと、彼女は微笑ましそうに笑った。間違っても、手持ちのギルドカードの枚数は聞かないでもらいたい。

解説するが、ジャンボ村とはお世辞を混ぜても辺境にあるとしか言えない、ド田舎の小村だ。近年はある程度発展し、多少なりとも充実した設備を備えた村となったが、ユクモ村などと比べるとやはり見劣りしてしまう。そんな村の工房を切り盛りしている

おばあちゃん。それが伝説の職人の弟子、その人だった。

「でもま、それで無事造ってもらえたんだ。いくら積んだの？」

「人聞きの悪いこと言うなよな。積んだのは積んだけど、ハンターなんだ。依頼との等価交換も織り交ぜたさ。……知り合いとか、オトモとかが」

「人任せね。……ま、その脚じゃしょうがないか。……で？　どんな依頼だったの？」

「この脚を見たら分かるかもな」

ヒリエツタが椅子の横に立て掛けていた俺の義肢を持ち直し、そつと彼女に向けて見せた。白銀色のその表面に、アリーナの淡い光が映り込む。

見た目は、鋼を装甲として用いている。それ以外は至って普通の義肢といったところだ。骨となる柱を中心にスプリングが渦巻き、それが足首あたりまでカバーされている。

人体工学に基づいて設計されたらしいそれは、詳しいことはよく分からなかったが、取り敢えず人間らしい足の動きを八割方再現出来ているらしい。もちろん、リハビリあつての賜物なのだが。

「……鋼かしら？　鉄鉱石の採掘でもしたの？」

「そんな甘つちよろいもんかよ。実はな、これモンスターの素材なんだぜ？」

「はあ？　鋼をもってるモンスターなんて、そんなの鉱石食べてる奴でも……つて、待つ



て。ちよつと待って。それつてもしかして」

まるで喉でも乾いたかのように。彼女の喉はごくりと生唾を飲み込んで、その小さな喉仏が小さく頷いた。

そうして漏れ出た、彼女の言葉。その小さな言葉のために動かされたその小さな口は、弱く、淡く、それでいてはつきりと、その名を呼んだ。彼の者の名を。

——クシャルダオラ。

それは良くも悪くもジャンボ村と縁が深いモンスターだ。古龍の代表格と言つても過言ではなく、最も研究が進んだ種でもある。

リオレウスなどとは違う四肢と一对の翼の強靱な肉体を持ち、その巨大な翼で暴風を巻き起こす。そんな危険な存在が、たまたま俺たちがジャンボ村に訪れた時に同じく飛来したのだった。

「クシャルダオラの別名は知ってるよな？」

”鋼龍”。鋼の如き鱗を纏う龍……。まさか、それが？」

「ああ。俺は療養中だったから見ることは出来なかつたけど、知り合いたちは密林で見事に会つたそうだし」

「そ、その鋼龍はどうしたの?! ま、まさか討伐したの……?」

「うわ、急に乗り出してくん。……アイツらも撃退で精一杯だったよ」

「そ、そう……。ごめん」

「未だ誰も仕留めたことはないらしいからなあ。やっぱ古龍は格が違うや」

突然身を乗り出しては声を荒げたヒリエツタ。俺の両肩を掴んでは、互いの顔が触れかねないほど近くなる。彼女の口から、達人ピールと肉じやががブレンドされた香りが漂ってきた。

一体何に動揺したのか知らないが、返答通りクシャルダオラは討伐できていない。ジャンボ村から追い払ったのは確かだが、飛んで逃げられてしまえばもう追い掛けることなどできなかつた。

工房のおぼちゃんが出した、クシャルダオラの迎撃依頼。村に付いているハンターは修行中だったり、黒狼鳥を追い掛けるので必死だったりと役に立たなかつたらしい。たまたま訪れた俺たちしか頼れる者がいないと、必死の形相で懇願された。

実際に狩りに向かったトレッドにイルル、師匠とたまたま居合わせた覇竜の太刀を背負ったハンター。その四人が、鋼龍の飛び立つ姿を見たと言っていた。

「……でもま、手傷は負わせたし、撃退できたらしい。それで幾つか鱗が剥げた。それが今、この脚になつてるわけさ」

「そう……。私、鋼龍の素材なんて初めて見たわ。鋼龍には会いたいの、なかなかお目に掛かれなくて」

「へえ？ 蒼火竜や幻獣の亜種に巡り会う幸運の持ち主も、鋼龍には会ったことないんだ？」

ボロボロと口の中でほぐれるサラミ。濃く重い脂を絞り出し、肉らしい旨みを口いっぱいに広げていく。それを楽しみながら、からかうような言葉をヒリエツタにかけると、彼女は心外そうに頬を膨らませた。

「会ったことなら、あるの。ハンターになる前に……」

「え……それって、生身で？」

「うん。十年は前の話かな、あの古龍を見たのは」

懐かしむように、痛みを抱えるように。苦悩と懐郷感を複雑に混ぜ込んだその表情で、けれど吐き捨てるような口振りで、ヒリエツタは言葉を綴り出す。

掃き溜めのような毎日だった。彼女の第一声はそれだった。

「歪んだ欲情を押し付けられる毎日でね、外の光なんて感じなかったわ。人口のランプしか見えない薄暗い部屋で、染み付いた臭いの酷い部屋で、私はいつも息を詰めていた」

「……………それって」

「……でもね、あの古龍が、クシャルダオラが。私に光を見せてくれた。建物ごと吹き飛ばして、だけど」

「多分、それは故意じゃないんじゃない？」

「分かつてる。向こうにはそんな気持ちはそれっぽっちもなくて、どころか私にも気付いてなかったと思う。ただ目の前の邪魔なものをどかした。ただそれだけ」

静かに息をついては、彼女は再び達人ビールを口にする。ごくごくぐくと飲む度に、彼女の喉仏は忙しく動いた。その仕草が妙に艶めかしくて、俺は少し調子が狂ってしまふ。所在なさげに、左脚を嵌め込んだ。

「——だけど、その時の景色を私は未だに忘れられない。空はとても広くて、雲は波のよう流れてて。そんな世界を独り占めするように、大きな大きな翼を広げるクシャルダオラ。とっても格好良かった」

「……じゃあ、それが？」

「うん。これが、私がハンターになったきっかけ。もう一度鋼龍に出会って、今度は私の存在を感じてもらいたい」

そう言うては、彼女は照れくさそうに笑った。

雨後の、雨露で煌めく花のような——そんな笑顔だった。

「……もし依頼が回ってくるようなことがあったら、俺も呼んでくれ。力になるよ」

「ん、頼りにしてるわ。シガレット」

白い歯を見せる彼女の笑い方。初めて会った時のあのバサルモスのような仏頂面ではない、快活そうな笑顔。こんな笑い方もできるのか。

あのお堅い印象よろしく、彼女も何かしら事情を抱えたハンターだったわけだ。それも、目標がああのだらうとは。全身が鯛に包まれた古龍であり、書士隊には外骨格と称させるその体——。

「……外骨格つーと、蟹みたいなのを言うんだよな？」

「ふえ？ な、何急に……」

「つまり、クシャルダオラは蟹のように穿ほじれば食える……のかも」

「……はあ。アンタって、やっぱ無粋だわ」

く本日のレシピく

『アーリーナ式特製肉じゃが』

・ドンドルマンポテト ……8個

・モスサラミ	……150g
・レアオニオン	……1／2個
・オリーブオイル	……大さじ一杯
・モガモガーリツク	……1片分
・塩胡椒	……適量
・モガニあんかけ	……300g
・モガニ	……60g

## 小さな小さなネコの舌

「飛竜の卵……無事回収！」

「にゃー、納品して、組織に送って……んで、一つはボクらのにゃー！」

まるで石窯のように照り付ける熱気。乾き切った大気に、砂の擦れる音が響き渡る。閑散としたその空間には、幾多の争いを感じさせる骨の砂が出来上がり、流砂に混じってまた一つ骸が消えていく。

そんな世界、もとい旧砂漠に訪れたハンターもとい俺、シガレットとはいえば、本日は重大な任務でこの場所に訪れていた。

「組織が求めたのは飛竜の卵。一個送りつけときゃ充分だろ」

「にゃ。ボクが運んだのは納品ボックスに入れとくにゃ」

俺が運んだ卵をテントの横に立て掛ける傍ら、イルルは自ら運んだ卵を赤いボックスにそつと入れる。

ベースキャンプに備えられたこの赤い箱は俗に言う納品ボックス。地域の特産品、卵や巨大鉱石などの清算物のために広く利用され、ほとんどの狩猟地には一台ずつ設置さ

れている。本日もまた、この中身を確認するためにギルドのスタッフが訪れるのだろう。

ゆつくりゆつくり、その箱から身を起こしたイルルは、ふと思い返したように言葉を漏らした。先程卵を拝借してきたあの巣について、少し。

「……何か卵、多かつたにやね」

「そうだな。おかげで獲りたい放題だけど」

「でも、あんなに沢山あつたかによあ？　いつもはハンターでも獲り切れる量しか置いてなかつた気がするんだけど……」

「托卵って奴かもな、もしかして」

「にや？　たくらん？」

「他の種類の動物の巣に自分の卵を置いてって、子育てを任せるやり方さ」

「にや、何だか卑劣な方法にや……。自分の子どもを自分の手で育てないなんて、その子が可哀想にや！」

「うーん、それはあくまでも俺らの主観であつてだな……。実際子育てが下手な生き物も多いんだぜ。イヤンガルルガとかもその筆頭だな」

「……もしかして、イヤンクツクの巣に？」

「おお、冴えてるな。ま、なんだ。種の繁栄のための手段って奴よ」



せつせと大鍋を出しては薪の準備をするイルル。その横で適当なテーブルを取り出してはフライパンと具材を並べていく俺。いつも通りの何気ない会話をしながら、着実に料理の準備を整えていく。

リオスベーコン、オリーブオイル、飛竜の卵、白銀に焔めくソースの材料、白ワイン。それらを順々に並べ終え、そつと一息。

その美しい景色に、仄かな感嘆が漏れた。

「良い眺めだ……。さて、イルルよ。鍋もいいがフライパンも一緒に使うぞ」

「にや？ 旦那さん……。今日はパスタにや。先に麺を茹でるんじゃないかにや？」

「いいかイルル、それこそ素人が陥りやすい罠だ。気をつけろ」

不服そうに首を傾げるイルル。そんな彼女の頭をそつと撫でながら、俺はカバンから小物を取り出した。

木製の枠組みに囚われたガラス細工。その中で静かに息を響める少量の砂。旧砂漠の光をガラスが照り返し、その中の砂が静かに焔めいた。

「にや……。砂時計？」

「そう、砂時計。いいもんだろ？ 五分刻みで時間を測れる優れものぞ」

「でも、こんなもの……。どうするのにや？」

「パスタはな、逆算が命なんだよ」

「にや……逆算？」

逆算。

その言葉は、本来の順序とは異なり、終わりの方から前へ前へ数えることを指す。そしてそれこそ、パスタの味を左右する重要なポイントとなるのだ。

確かに、イルルのようにまず麺から用意したくなってしまうのも分かる。単純に考えたらソースを作るより麺を茹でる方が時間が掛かるからだ。だが、今回はそうもいかない。

「ほれ、イルル。持ってきたパスタ見てみるよ」

「にや……り、りんぐ……いね？　って書いてあるにや」

俺に促されるまま、パスタの袋をカバンから取り出した彼女は、その袋に書かれた言葉をたどたどしく読み上げた。ざっと袋を眺めたようだが、その言葉が妙に気になっっているらしい。

「リングイネな。茹で時間は何分って書いてある？」

「にや、九分にや」

「よし、じゃあ一分前……八分で切り上げるぞ、そいつは」

「にや……なんでにや？　早く上げたら固いままにや」

「ソースに和える時間も考えなきゃならんだろ」

フライパンを火にくべながら、背中で彼女に返答する。その言葉を呑み込んではどうにやーだか、ふみやあだか声を上げていたイルルだが、ついにはよく分からなくなつたのか、徐おもむろに砂時計を触り始めた。

パスタをアルデンテ風に仕上げるには、工夫するべき点がいくつがある。

まず、一分早く上げる。これは必須条件だ。さらに、麺の真ん中にうつすらと芯が残るくらいが望ましい。裁縫針の先のような、それくらい繊細な細さでいいのだが。

「ま、とはいえ鍋は沸かしといて損はない。やっといてくれ」

「にやー、何か複雑にや……」

「カルボナーラは分刻みの手順が命なんだぜ。さあさあ、働いた働いた」

「みや、カルボニャーラ……懐かしい響きにや」

少し意味深に呟いたイルルは、せっせと焚火に鍋を寄せ始める。彼女の体に合わない巨大なその鍋は、砂漠にも負けない熱を静かに受け入れては、自らの体内に眠る水に気泡を浮かべた。

上手くパスタを茹でるには、パスタの十倍の量の水が必要となる。卵を運ぶ前にオアシスの水を汲んで持ってきたのだが、それもまた卵に負けず重労働だった。まあそれも美味しい飯のため。そう考えれば自ずと力が湧いてくるものだ。さながら強走薬を飲んだように。

どうせ水を使うなら、ダイミヨウザザミの水ブレスを鍋で受けてそのまま持つて行くのもいいかもしれない。その方が面白そうだし、変わった風味になりそうだ。

「……んなさん、旦那さん！」

「——おっと、何だ？」

「にゃー、また良からぬことを考えてる顔にや。……ま、それはともかく大分煮えてきたにゃー？」

「お、じゃあ塩振るか。塩はどこだったかな」

「いつも思うんだけど、この塩って意味あるのにや？ ケチった方が良い気がするにゃ」

不意に、カバンを漁る手が止まった。

聞き捨てならない言葉を聞いたから。理由はまさに、それだ。

ゆらりと振り向くと、困ったように顔を歪めるイルルの姿があった。ゆっくり近づけば、それに合わせるように少しずつ後ずさりする。俺の顔色を窺っては、少し怯えているような、そんな表情だ。

「イルル」

「だ、旦那さん……う？ どうしたのにや……う？」

テントに背がへばり付き、後ずさる場所もなくしたイルル。そんな彼女にそつと手を伸ばし、小さな顔を両手で包む。

目の前まで近づいたイルルに向けて、その大きな瞳に俺の顔が映るくらいその距離で、俺はそつと口を開いた。

「お湯に塩を振る意味を教えてやろう。よく聞けよ?」

「にや、にやあ……?」

そのまま抱き上げられては、俺の腕の中で手足を硬直させる。その小さな体は、おずおずと戸惑いながらも、静かに俺を見上げていた。俺の言葉を待つように、じつと。

「まず一つ、下味つけ!」

「し、下味付け?」

「そう、湯に塩を入れることで、そこで茹でられるパスタにもさつと塩味を付けるんだ。大差ない程度の違いだが、これがあるとちよつと嬉しい」

「だ、旦那さんの価値基準にや、後半は!」

「二つ目、コシを出す!」

「にや。ちよつと麺類らしいにや、それ」

「そうだな。塩はパスタのデンプンを引き締めるんだ。だからコシが出る」

「みやあ、な、なるほど……」

「そして最後。アツアツになる」

「にや?? アツアツ??」

「塩がお湯の沸点を上げる。故にアツアツだ」

「む、むむ……っ。ね、猫舌の天敵にや！」

最後のポイントだけには相容れなかったのか、イルルは牙を見せた。小さな小さなその口が開き、可愛い牙と塗れた桃色の舌が見える。

鳴き声を上げながら抵抗しようとするイルルを、俺はそつとフライパンの前に降ろした。彼女のその手にリオスベーコンも添えながら。

「……っいでにな、リングイネってのはネコの舌つて意味なんだ。ちよつと可愛いよな」  
「な、何か同胞を料理するような気分だにや……」

「ネコの舌は俺に任せろ。イルルはベーコンをやってくれ。まずこれから焼いて、ソースを作る。頼めるな？」

「にや……」

小包にされたりオスベーコン。既にブロック状に切り分けられたそれを広げては、イルルは無造作にオリーブオイルに手を掛ける。

そんな彼女の姿を確認しつつ、俺は鍋に塩を振り掛けた。ごく少量、それでいい。煮え立つ海に細かな雪が舞う。海に溶けるように消えていく塩の煌めきが何とも美しい。

「にやー、旦那さん。ベーコンを焼けばいいかにや？」

「おう。弱火でじっくり。十分くらいかけて焼いてくれ」

「にやつ？ そんなに？ 強火でさつと焼けばいいんじゃないのかにや？」

「じっくり焼いたほうがカリカリになって美味しいんだ。何かこう、脂がキュツと出てくる感じだな……」

「にや、にやあ……分かったにや……」

渋々了承するや、彼女は油を敷いたフライパンの上にベーコンを落としていく。肉が焼け、脂の弾ける音が響いた。溢れる音色に、燃える香り。肉特有の、脂の燃焼される匂いが堰が切れたように漏れ出してくる。心なしか、腹の虫がぐうと唸った。

一方の俺はといえば、逆立ちをする砂時計を見ながらポウルに生クリームやら塩やら黒胡椒を注ぎ始める。ベーコンを十分焼き、麺を八分茹でる。その誤差二分、カルボナーラのソースを作るには十分な時間だ。

黒点模様の目立つ白いソースをさつと掻き混ぜては、テントに立て掛けておいた独特の模様の卵を持ち上げる。固く、重く、力強い。

「にや、それは何の卵にや？」

「おそらく轟竜だと思う。少し黒みがかつてるから、亜種かもしれないが」

「にやつ、だったら旦那さんの装備とお揃いにやー！」

「そうだな、これの素材元さんだな」

軋む暗色の鎧に目を向けながら、イルルは花が咲くように笑う。風に靡く背中の人

トが、目の前の同胞を前に喜んでいるかのようだ。

彼女の言う通りこれはレックスZシリーズ。ハンターに復帰して、リハビリを終え、やっとバルバレに戻ればドンドルマの修繕も粗方終わったと聞く。そうしてさつさと拠点を移せば、早速入り込んできた依頼がそれだった。地底火山に現れた黒轟竜を何とかしてくれ、と。

「リハビリがてら黒轟竜と戦うなんて、正気じゃないにや……」

「お前と、師匠もいたし。実際何とかなつたし問題ないだろ？」

「でも、珍しく食べなかつたにやね。大人しく装備に換えてて、旦那さんらしくないにや」

「おつとつと……食えない部分は、という訂正が入るぞ」

苦笑いする彼女を余所に、割った卵から中身をそつと別ボウルに流していく。鮮やかな黄色に、透明の粘液。リオスの卵とは違うこれまた派手なその配色に、俺は思わず感嘆してしまった。その卵、量にして五、六人分くらいはあるのではないだろうか。

とはいえ必要なのは二人分。そつと溶いたその卵から二人分の量だけ、優しく生クリームをの眠るボウルへと流し込む。

「旦那さん、二分経つたにや」

「おつと、悪い悪い。パスタ茹でないとな」



取り敢えずボウルは置いて、今度はパスタの袋を手に取った。袋を裂いては、これまた小奇麗な麺の束を突き刺すように鍋に入れる。

両手で持ったそれを、左右逆方向に捻じるように手を放すと、それらは円を描くように鍋の縁を伝って散らばっていった。根元からどんどん熱されて、直線だった麺が弧を描き始める。

「旦那さん、格好つけて入れるにやあ」

「おうよ、格好良いだろ? ……って、そうじゃなくてな。こうやって入れると麺がくっ付きにくくなるんだよ」

「<sup>はや</sup>嘩すような彼女の言葉。それを適当にあしらいながら、鍋で踊る麺を軽く掻き回す。流線形を作りだすそれらを菜箸で混ぜながら、その一本一本を解す作業。気泡に麺が煽られる様が、何とも面白い。」

二分ほど掻き混ぜたら、菜箸を上げて鍋の横にそつと置いた。後は鍋に身を任せながら、俺は再びソース用のボウルを手に取る。

「さて、もうちよい掻き混ぜないとな」

「にや、肉焼きあと七分……長いにや。パスタは混ぜなくていいのにや?」

「茹ってるから、お湯が勝手に掻き回してくれる。俺は混ぜなくてもいいってわけさ」

「にやんと……」

驚くイルルの傍ら、俺はボウルの中身を混ぜ終える。白と黄色が混ぜ合わさり、和やかで温かな色を作り出すそれ。甘く、華やかな香りがした。

それを先程のテーブルに置きつつ、少し腰を下ろす。キャンプに置かれた小さな椅子が、弱々しい悲鳴を上げた。

「疲れたかにや？ 足の調子はどうにや？」

「大丈夫、問題ないよ。……そうだ、この前知り合いに会ったんだけどさ、この脚が鋼龍で出来てるって言ったら大層驚いてたぞ。面白いよなあ」

「……その鋼龍の相手させられる身にもなっってほしいにや。何度も空に巻き上げられて、びつくりしたにや」

「悪い悪い、感謝してるよ。軽いイルルはよく飛びそうだな」

「にやー、腰が痛いにや、あれ」

「はは、古龍はやばいってこともよく分かったろ」

「むう……。旦那さんが好きなその片手剣、それも古龍のやつにやんね？」

「お、そうそう。こっちは炎王龍って奴のだけだな」

キャンプに隅に立て掛けられた片手剣、テオⅡエンブレム。橙色に染まった重厚な剣に、厳かな装飾が施された太い盾。その盾に収納された、第二の剣が特徴的な片手剣だ。

元々は古代の遺物である風化した剣だったが、たまたま掘り当てたそれを磨き、炎王

龍の素材をつぎ込んだ結果出来上がった。素材元だけに性能は申し分ない、大業物だ。  
「て、ておにやんとかってやつだっけ……」

「めちゃんこ強いぞ。G級ハンター四人がかりでも撃退で精一杯だ。俺の前の装備なんて、アイツにコゲ肉にされたからな」

「そ、そうだったにや……。ユクモノドウギが懐かしいにやあ」

どこか懐かしそうに頬を緩ませるイルル。そんな彼女の瞼の裏には、いつかの俺の上位装備が焼き付いているのだろうか？ 生憎ドンドルマに降り立ったあの古龍によって、過剰なくらい熱調理されてしまったが。

そんなこんなでふと砂時計に目を移すと、そろそろその身を果てさせようとしていた。微かに残る砂が、弱々しくその身を落としていく。

「折り返し地点だな。イルル、そろそろ白ワイン入れるから準備してくれ」

「分かったにやー！」



溢れる白い湯気。金色に染まった泉に佇む、絹糸のように美しい麺。それらに巻き取られながらも、淡い赤色と脂の風を送るベーコン。全体に掛かった轟くような卵の色

は、厳かなながらもどこか勇ましい。濃厚な卵黄の香りがクセのあるチーズの匂いに絡まって、余計に風味を増している。

火竜と轟竜のコラボレーション。ティガルボナーラの完成だ。

「にゃ〜！ 美味しそうっ！」

「うんうん、我ながらいい出来だ。さっそく食べようぜ」

二人前のそれを、半分ずつ二枚の皿に落としていく。金色の麺がゆっくり垂れていくその様は、どこか美しい。ところどころに撒かれた黒胡椒の小さな柄もまた金色のソースによく合っており、それがまた良いアクセントとなっていた。

「にゃあ……凄いにゃ。卵がトロトロにゃ。いり卵みたいになつてないにゃ」

「ふふん、褒めても何も出んぞ。さ、いただきますよつと」

「いただきますすにゃんっ！」

右手のフォークで少量の麺を突き刺しては、それをゆっくり持ち上げる。左手のスプーンはその麺に宛あてがい、包むように優しく巻いた。

アツアツのそれにそつと息を吹きかけて、熱を優しく逃がす。息を吹きかける度に、麺に絡みついた鮮やかなソースは少し身を振らせ、その姿が余計に食欲を促進させた。かかる息のお返しのように、カルボナーラ特有の濃厚な香りを返してくるのがまた面白い。粋な演出をしてくれる。

そうして口に入れやすくなったそれを、一口。入り切らず尾のように伸びた一本の麺が、閉じた口から伸びた。つるんとそれを嚙りつつ、奥歯をよく使って麺を楽しむ、咀嚼する。

溢れ出る、濃厚な卵の旨み。甘さと旨さを混ぜ合わせたそれは、肥えた俺の舌を唸らせるには十分な威力をもっていた。卵本来の舌に塗りたくるような味。それが今は麺に塗りたくられ、噛む度にその味を口の中で拡散させていく。リオスベーコンの芳醇な肉の味と脂もその中に混じり、肉らしい味が後からじつくり顔を出してきた。

カリカリとした食感のベーコンは、噛めばその旨みを瞬く間に飛び出させて、混ぜたチーズは爽やかな酸味のような味を広げさせて。散りばめられた黒胡椒は口内を刺激する鋭い辛味を、その身を磨り潰す度に麺に乗せていく。麺という主役を引き立てる様々な味達も、麺に負けない味を、もしくは麺を助けるような味を生み出していた。

火竜の脂と、轟竜の甘み。生物として、争いを避けられぬこの二種が、今このカルボナーラという場では仲良く羽を寄せ合っている。噛む度に、味わう度に、呑み込む度に。口内を過ぎ去る幾つもの麺が、俺にそんなイメージを抱かせた。

「……………うん、これ最高」

「ふうふう、あ、熱いにや。…………でも、美味しいにやあ」

つるつるとして、それでいてコシのある麺。ちよつとやそつと歯に力を入れるだけで

は噛み切れず、麺の力強い弾力を感じさせる。旨味の絡んだそれは、噛む度に染み込んだ旨みを絞り出すため、その食感も相まって何度も何度も噛みたくなる仕上がりだった。そう、噛むのが楽しい。

そんな麺をはふはふと冷ましながら啜っては、イルルは嬉しそうに微笑む。幸せそうで、どこか懐かしそうな、そんな表情だ。

「……イルル、何か嬉しそうだな」

「にやあ、お母さんが作ってくれたカルボニヤーラを思い出したのにや。アレはいり卵みたいになってたから、こっちの方が美味しいけど……にやん」

「へえ、イルルのお母さんか。もしかしてキッチンアイルーだったのか？」

「にや、そうにや。ボクの両親はある猟団に雇われたアイルーたちなの。お父さんがオトモアイルーで、お母さんがキッチンアイルー」

噛む口を休め、懐かしそうに語り始めるイルル。優しく目を細める彼女の姿から、彼女が如何に両親を愛しているかが何となく伝わってくる。

「猟団の人たちは二人の仲を快く迎えて、ボクにも優しくしてくれたのにや。温かい人たちに囲まれて……ボクの人間好きはここからきてるかもしれないにやあ」

「ふうん……。何気にそれは知らなかったな」

「確かに、話したことなかったかもしれないにや」

「イルルはやたら献身的だし、人が好きなんだなあとは思ってたけど、そういう理由があつたんだな」

「にやあ。誰かの役に立ちたい……のかにや」

「役、ねえ。にしても、いり卵風ね。卵入れる前に火を止めるとか、茹で汁を残しておくとか、そうした工夫をすればそうはならないよ。いつかお母さんに教えてあげるのもいいかもな」

「……にやあ、教えてあげたかつたにや」

何気なくそう返したら、イルルは困ったような顔でそう笑った。

教えてあげたい、ではなく教えてあげたかつた。その言葉が指す意味は、口にしなくても察せられる。思わず、両手の動きが凍り付いた。

「……悪い、心ないこと言っちゃまったな」

「にやんにやん、大丈夫にや」

絞り出した声に、イルルは優しく強がりをする。垂らした頭に、そつと肉球が触れた。

我ながら迂闊だったものだ。海を渡っても、故郷から遠ざかつてでもオトモをし続ける彼女だ。家族に連絡する素振りも、手紙を書いている姿すら見たことなかった。いつも傍にいる俺だからこそ、その背景なんて容易に想像できるのに。

「今のボクにも、ちゃんと居場所があるから」

触れていた肉球が離れたと思ったら、フオークとスプーンが皿に触れる音が響く。そうかと思えば、今度は柔らかいものがそつと俺の体に触れた。

隣でパスタを口にしていたはずのイルル。当の彼女は、パスタなんてそつちのけでもぞもぞと俺の膝に乗り始める。胸に頭を預けては、嬉しそうに喉を鳴らした。

「イルル……」

「旦那さん……にやあ」

そんな彼女の、カルボナーラで濡れた口周りをそつとタオルで拭きながら、俺も同じくフオークを置く。

空いた手で彼女を抱き寄せては、そのふわふわの胸の毛に顔を埋めた。そつと、頬に塗れたものが触れる。小さな小さな、ネコの舌だった。

「そうだな……。俺も同じ気持ちだよ」

「にや、旦那さん……ほんと?」

「居場所をなくしたのは、俺も一緒だから。俺たちは似た者同士なのかも、な」

こつんと、温かい彼女の額に俺の額を手繰り寄せる。お互いの顔が目の前に映るその距離で、俺は小さく笑った。それにつられたように、イルルも照れくさそうに笑う。

家族であれ、故郷であれ、はたまた所属ギルドであれ、俺も居場所のない人間だ。そんな俺が求める拠り所、それは彼女も同じなのかもしれない。口にしよう、その名前を。



「卵シンジケートは、最高の居場所だよなあ」

「……………えっ？ にや、え、にやあ……………」

漏れ出したその言葉を聞いた彼女は、まるで見当違いだとも言うような鳴き声を上げた。何だか呆れも含まれているような、そんな気もした。

く本日のレシピく

『ティガルボナーラ』

- ・ リオスベーコン …… 40 g
- ・ オリーブオイル …… 大さじ1 / 2杯
- ・ 白ワイン …… 40 cc
- ・ 轟竜の卵 …… 1 / 5個
- ・ ポポチーズ(粉) …… 10 g
- ・ 黒胡椒(粗挽き) …… 小さじ1 / 2杯
- ・ 生クリーム …… 20 g
- ・ 塩 …… 適量
- ・ リングイネ …… 120 g

☆お好みで粉チーズや黒胡椒などを！

## 餅は餅屋

市街地が、華やかな喧噪に包まれていた。

普段ならさながらゼンマイ仕掛けの時計のように、緩やかな雰囲気の流れに流されていること、ドンドルマ。だというのに、本日はどうも条件が異なるようだ。まるで祭りでも行われているが如く、騒がしい人の群れで溢れているのだから。

「……何だこれ。勘弁してくれよ、歩みにくいじゃん」

「今日は何かのイベントですかね？ 大繁盛じゃないですか」

言葉にするなら、ゴミのように舞い上がる人だかりだろうか。行き交う人々が、流動性の壁のように俺の行き先を塞ぎ続ける。そんな忌々しい光景に、思わず溜め息が漏れた。覚束ない動きで右手が浮き、俺の後頭部を撫でるように搔く。

一方でその光景を見ていた茶髪のガンナー、トレッドは感嘆の声を上げた。タンジアの港とはまた違う騒がしさが、彼には珍しく映ったのかもしれない。

「お祭りですかね？ 楽しそうですねえ」

「そうだな……。つつつても、ドンドルマの広場なんざ毎日屋台出てるから、あんまり新鮮

じゃないが」

「平和ですねえ。巷の噂とはほど遠いじゃないですか」

「巷の噂？」

不穏な言葉が耳に届く。

見れば、眉間に皺を寄せたトレッドが語り出した。

「ドンドルマの都市伝説みたいなものですがねえ。何やら行方不明になるアイルーが僅かながらいるとか何とか」

「何だそれ。初めて聞いたわ」

「僕もほんの少し耳にした程度ですけどね。……ちなみに、お宅のイルルちゃんは大丈夫ですか？」

「今日は眠いそうだから家の座布団でお昼寝中。ま、アイツに限っては大丈夫だろ」

「楽観的ですねえ」

「ここに住んでる俺ですら聞いたことないんだ。大したもんじゃないと思うぜ」  
「……ですね。それより今は、目の前の人だからの方が気になります」

トレッドの言う噂を、まるで単なる噂だと鼻で笑うように。ドンドルマの市街地は、いつも以上の活気で満ち溢れていた。

大老殿に続く大広場に出れば、毎日雑貨屋やら武器屋やらが屋台を出している。クエ

ストボードの前には大多数のハンターが集まり、バーやらパブやらは大盛況。アリーナを求め訪れる客はいざ知れず。ドンドルマという大都会は、毎日毎日がバルバレの大売出しのようだ。

そんな街ではあるのだが、本日の潤い具合はそれをも凌駕する。一体何があつたのだろうか。トレッドの言う、イベントでもやっているのか。

「あ、シグ。あれ」

「あん？」

何かに気付いたように突然指を突き出すトレッド。その指の先には、この人の台風の目となる光景が浮かんでいた。

広場の端、戦闘街ともなり得るこの市街地を囲む堅牢な城壁。その壁に、いくつもの円状の物体が並べられている。何重もの大きさの円と様々な配色を加えられたそれらは、紛うことなき『的』であつた。

つまり、大掛かりな射的。それが城壁をも利用して行われており、この大量の人間を集めていたのだ。そのために出店やらドリンクサービスやらを切り盛りしている、アイルーたちの姿も見てとれる。これが拡大し、この祭りのような騒ぎを引き起こしていたようだ。

「……何だ、ありがちな辻商いじゃんか」

「へえ。安全な武器を使用、ハンターじゃなくても是非挑戦を……ですか」

大量の人間によつて撒き散らされた大量のゴミ。それに混じつて散らばっていた広告用紙を手にとつては、トレッドは薄く笑いながら読み上げる。

少し背伸びしてその射的の様子を見てみれば、なるほどどうしてたくさんの挑戦者によつて賑わっているじゃないか。

如何にもハンターですと言わんばかりの筋骨隆々の男や、日頃商業に精を出していますと言わんばかりの格好をした女が武器をとつて、一心不乱に的を射ている。

「おつ、武器も色々用意しているみたいですねえ。軽弩、重弩、それに弓……。手厚いじゃないですか」

「つつても、仮に人に当たつてもいいように全部ペイント弾になつてるんだな」

「ありや、本当だ。的もインクだらけですねえ」

「ペイント弾とペイントピン……。雑貨屋は繁盛しそうだなあこの企画」

赤色やら青色で彩られた的を見ながら、小さく息を吐いた。見たところ、そこまで突出した記録を出している人間はあまりいないようだ。みな中心から随分と逸れた箇所を射抜いている。

「へつたくそだなあ。あんな腕でよくやろうと思うよ」

「多分、あれがその要因だと思えますよ」

めざといトレッドは、射的の受付台の横にある表彰台のようなオブジェを指差した。そこには、二枚組の鱗が寄り添うように飾られている。燃え盛る太陽のような鮮やかな真紅と、広大な大地を思わせる力強い深緑。

そう、間違いない。あれは火竜の天鱗、そして雌火竜の天鱗だ。

「へえ……G級相当個体の希少素材じゃないか？ あれ」

「ですねえ。確かにハンターからしたら生唾もの。商人にとつても、非常に縁起がよいものです。特にこの街では、ね」

流し目で街を見るトレッド。ここ、ドンドルマは赤と緑の配色を重んじていることで有名だ。彼もそれを知っていたのだろう。自然と力の象徴、リオス科の飛竜の力に肖あやかっていることを。

「それであのイベントに参加ってわけか。ようやる」

「挑戦料は五百ゼニーですか、まあそこそこですね」

「バカバカしい。さっさと飯屋でも行こうぜ」

「あ、二等はゴールドナシリーズのレプリカ模型みたいですよ。等身大スケール」

「興味ない」

「三等は鎧玉一式セットだとか」

「いらん」

「四等は木彫り海竜の置き物」

「どうでもいい」

「ドンケツの五等は……ふーん、極上ザザミソですか」

「よし、参加するぞ」

「……へっ?」

間の抜けたトレッドの声が広場に響く。しかしそれは、騒がしい民衆の声に飲まれ、誰にも気に掛けられることもなく消えていく。

それを無視して受付台に向かえば、受付を担当しているらしい黒のツーサイドアップの少女が快く迎えてくれた。

「いらっしやいませ! 挑戦ですか?」

「ああ。ハンター一人で」

「はい! 頑張ってくださいね!」

金を受け取って、華やかな笑顔を見せてくれる少女。そんな彼女に適当に手を振りつつ、俺は適当にライトボウガンタイプの銃を手を取った。最もスタンダードで使いやすそう、選択の理由はそれだ。

そんな俺の背後からは、困ったように口角を上げるトレッドの姿が。小走りで俺に付いて来ては、何やらグチグチと不満を漏らしている。



「どうして急にやる気出してるとんですか……」

「極上ザザミソだぞ？ 滅多に取れないんだぜ？ 食うしかないだろ。アレは俺のものだ」

「ええ……？ 大体、君が銃使ってるのなんて見たことないんですが」

「タンジヤ時代じゃ一回も触らなかつたしな。こつちじゃ触ってるぞ、三回くらい」

「少なっ……舐めてるとんですか」

「何とかなるだろ、見とけよ」

計九発のペイント弾を装填しつつ、空いている的の前に立つ。射撃ラインらしき白線を確認しつつ、左手で銃身を持ち上げた。使い慣れない重さが、ずっしりと両手にのしかかる。それを無視しつつ、静かに前を見た。

距離にして、二十メートルかそこらだろう。風はなく、地形も平坦。条件としては随分と生やさしく感じる。これくらいなら、俺でも何とかかなりそうだ。

「その白髪の兄ちゃん！ このゲームは九回勝負だ！ 九発の得点の合計点が兄ちゃんのスコアとなるぜ！」

「配点はどうなってるんだ？」

「中心が百点！ その周囲が十点で、あとは一点だ！ 外したらもちろん無得点だからな！」

「なるほど……。ついでに、景品に必要な得点は？」

「二等は九百点満点しか認めないぜ。あとはまあ、入賞は三百点からかな」

「三百、ね……」

目の前の審判の男曰く、五等は最低三百点超えしなければ得られない。つまり、三回は真ん中を射抜かなければ、俺はザザミソを手に入れられないというわけだ。言い換えれば、九回中たった三回のクリアでいい。ぬるすぎる条件なこつた。

小さく鼻で笑い、銃を構えた。白い銃身が、太陽の光を浴びては反射するように輝き始める。そこに映る何の変哲もない的。今からハチの巣にされるといふのに、逃げようともしない。

見えない銃口を、的の中心へと向けた。震える左手を抑えつけ、頭の中で射線を描く。

「……おい。アレって、最近急にのし上がってきたハンターじゃないか？」

「ん……白髪にレックスZシリーズ……。間違いない、シガレットだよアイツ」

「へえ、実力派ってことで有名ならしいな。んで、今からその腕が見れるってわけか」

何やら外野が騒がしくなってきた。野太い声の野次馬たちが集まって、まるで試すような顔で俺の様子を窺い始める。見たところ鎧を着込む者も多く、そのほとんどが同業者のようだ。

一方のトレッドとはいえば、その様子を見ては苦笑いを浮かべている。嫌な注目を浴

びるとでも言わんばかりの、引き攣った表情だ。

「何か、ハードル上がってますよ。シグって有名人ですよねえいつも」

「いやあ、それほどでも」

「……悪い意味ですよ。タンジア然り、ね」

困ったように笑うトレッド。人目を避けたがる彼らしい素振りだった。

それを無視しつつ、小さく息を吸い、それを止める。目線は的から外さないで、静かに銃を構え直した。銃口は真つ直ぐの中心に向き、引き金が引かれることを待っている。的も全く動くことなく、訪れるであろう銃弾を受け入れようとしていた。

右手の人差し指が、軽く引き金に触れる。細く軽いそれを囲うように包み、関節にそつと力を入れた。銃口は、確実に的に向いている。銃身を支える左手は、ぶれることなく銃身を押さえ続けている。

外す要素など、全く無い。そう確信した俺は、静かに引き金を引いた。軽い破裂音が響く。

人の群れに押されていた空気が、小さな発砲音で塗り替えられて。

水気を含んだ着弾音が、静かに、後を追うように弾けた。

「——ふう」

「……マ、マジかよ」

弾けた箇所は、ものの見事。渦巻く的中心——では、ない。

どころか、的の外。石造りの城壁に、赤いインクが張り付いていた。

「やっぱり……」

顔を覆うように嘆くトレッド。予想していたと言わんばかりに眉を歪ませるその姿が、妙に挑発的だった。とりまきのハンターたちも拍子抜けだと言わんばかりに俺から視線を外し始める。

「なんだ、大したことなさそうじゃんよ」

「所詮噂の独り歩きって奴かねえ」

「おつ、三連射……って、全部スカじゃねえか」

ゾロゾロと、俺を囲んでいた人の群れも離れ始め、それと同じようにペイント弾も的から離れていく。いつの間にか、的の周りに四つの模様が完成していた。

「あれ……？ おかしいな」

「おかしいのはむしろ君ですよ……」

騒がしさが薄れ切ったこの場所で、乾いた俺の声が漏れる。トレッドの困惑の声も、俺の耳には上手く入ってこなかった。

四発。射出したそれら全てが、ものの見事に的から外れてしまっている。もう既に三百点を超えているつもりだったのだが。

「四発とも全部外れ！ 兄ちゃん、未だ無得点だ。頑張れよ！」

「……ま、肩慣らしつてことで。次からが本番だ」

「物は言い様ですよねえ、ほんと」

そうして再び銃を構え直した時、俺の横から歓声が沸き起こった。

俺とは違う、別の誰かを囲うようにできた人混み。そこから湧き上がったそれは、その挑戦者の成績を如実に物語っている。

「……なんだ？」

「あつ……凄いですよ。あの人、真ん中を見事に撃ち抜いています。やりますねえ」

視線の先には、人混みの中心には。

そこにいたのは、一人の可憐な少女だった。白とも金とも言えぬ、淡い髪色。伸ばしたそれを後ろで一つに束ね、細い体を白い鎧で包んでいる。青く澄んだ瞳は、一寸の狂いなく物的を見据えており、構えたヘビィボウガンタイプの銃で再び的中心を撃ち抜いた。

「うわつ、やべえなアイツ。……何かあの構え方、操虫棍みたいだな」

「ですね。それにあの鎧……ベリオXシリーズですよ。彼女もハンターのようなですね」

「何だよG級かよ。あつ、また真ん中……待てよ、アイツ今三百点超えたぞ！ やべえ

！」

「おや、四百点目。どうやらザザミソに興味があるようではないみたいですな」  
「ほっ……ならいいや」

歓声が沸き起こる中、俺はもう一度精神を統一する。残るチャンスは五回。その中で三発当てなければ、極上ザザミソは望めない。当てるしかない。

「——ふう」

灰色の城壁。その鈍重な色に囲まれた純白。白い白いその的は、穢れないその体を露わにしている。何とか、何とかその中心を汚したい。そんな思いを込め、俺は再び引き金を引いた。

青色のペイントが、その色を上書きする。またもや灰色を——では、ない。その美しい白を。

「おっ……当たったぞ！ おい見ろよトレッド、当たったぞ！」

「ええ当たりましたね。たった一点のゾーンに」

「兄ちゃんの得点は計一点だ！ 頑張れよ」

再び隣が湧き上がる中で、寒い風が吹いた。

五発目を見事に射抜いたその少女のギャラリが、上げる歓声。それが容易く、俺の声を掻き消してしまう。吹いた風も、たちまち歓声による温風で吹き飛ばされてしまった。

「すげえぜあの子！ とんでもねえな！」

「ああ！ 見た目もあんな可愛くて、それであの腕前たあ痺れちまうぜ！」

「……凄いですね。瞬く間に満点を五連発。そうそう出来ることじゃないですよ」

「お前が言っても皮肉にしか聞こえない」

吐き捨てるようにそう言うと、トレッドは照れるように鼻の下を指で擦る。そのわざとらしい動作が非常に癪に障るが、あえて無視だ。

銃口を伸ばすように、低い体勢で銃を構える少女は、棒でも振り回すかの動作で銃を持ち直し、小さく息を吐く。染み出る汗を拭いながら、的を見直すその姿はとても凛としていて、言葉に表しにくい美しさがあつた。

「シグ、どうせ当たらないからさっさと撃ち切ってくださいな」

「うっ、うるせえ！ 見てろよ！」

そうして撃ち出した弾は、ものの見事に城壁を塗装する。ドンドルマ清掃委員会の仕事をまた一つ増やしてしまった。

そんな俺の横にやってきては、心配するように俺のマントを引っ張るスタッフらしきアイルー。いつもなら抱き上げるなどして対応するも、流石の今はシヨツクのあまり頭を撫でるので精一杯だった。

「ハ、ハンターさん。頑張ってくださいニヤ」

「あ、ああ……」

「おや、そのアイルーさん。ドリンク売ってます?」

「ニヤ、ドリンクはあつちのアイルーに頼んでくださいニヤ」

トレッドがそのアイルーに話し掛ければ、当のアイルーは俺から離れ、トレッドに近寄った。彼と密着しかねない距離で、人混みの向こうを肉球で指す。

「んん……どれですかね?」

「あれですニヤ。あの茶色の毛並みの」

「あ、あの子ですか。分かりました」

合点がいったように笑い、礼を言うトレッド。同時に、再び隣の的から歓声が湧き、その声もそれに掻き消されてしまった。

トレッドがそちらに目を移すと、アイルーはそそくさと彼から離れ始める。その急ぎ足には、少し違和感を覚えた。

「三連発、しかも全弾命中!? やべえぜ、こりや満点有り得るんじやね!」

「格好良すぎるぜ! 俺感動しちまったよ!」

「あと一発だ! 嬢ちゃん、外すなよ!」

いよいよあの少女はラスト一発のようだ。最後の、最高の一打を放とうと、その小さな口でもう一度息を吸い始める。



そんな彼女に負けじと、俺も銃を持ち直した。残り三発。俺に残されたチャンスはそれだけだった。条件なら俺も彼女も変わらない。一発のミスも許されない、そんな条件だ。

「……ん？」

そうして握り締めた左手。力を込めたそれを開き、銃身に再び伸ばして。

その時、違和感に気付いた。左手が、妙に白い。

「何だこれ」

まるで小麦粉に手を突っ込んだような、そんな白さだ。薄い粉が大量に皮膚に纏わりつき、指紋の隅々までに行き渡っている。

何故だ？ 銃を持っていたらこんなことになるか？ 銃身に粉なんて付いていないはず。

俺が最後に触ったものは、なんだ？

銃以外で、最後に触ったもの――。

「……あ、まさか」

左手といえば、先程スタツフらしきアイルーをさつと撫でたばかりだ。まさか、それが原因か？

そんな思いを秘め、先程のアイルーが歩き去った場所へと視線を移した時だった。

——あのギャラリーの中から、突然の怒号が飛んだ。野太い男性の、焦りと怒りを含んだ声。

「さ、財布がねえ！ スリだ！ 誰だゴラア！」

その声に驚いたのか、先程のアイルーは小さく飛んだ。再びあの白い粉を撒きながら、慌てるように逃げ出す。そのあからさまな態度から、あのネコがスリの犯人であることは間違いないさそうだった。

「スリ……あつ、俺のもねえ！」

「私のも！ 誰かあのアイルーを捕まえてー！」

「おい、トレッド！ お前は!？」

「や、やられましたねえ。シグも……みたいですね」

困ったように鼻を鳴らすトレッドは、両手をヒラヒラさせながら俺の所に戻ってくる。

同時に周りの人間たちも、突然の事態に慌てふためき、このイベントは未曾有の大混乱に包まれた。溢れる人の波に、アイルーの姿は溶けていく。

「みんなっ！ 道を開けて！」

その時、少女の声が飛んだ。見た目に違わず、可憐で透き通った声。先程まで銃を握つて的を睨んでいた少女が、その銃を構えていた。人混み——の中を走る、アイルー

に向けて。

「ペイント弾だから、怪我はしないよね！ ごめんね、我慢して！」

そう言って撃ち放った弾。最後の一弾のそれが、空間を、人混みを突き破ってネコへと迫る。風を斬る音が、喧噪も切り裂いた。

だが。そのアイルーはといえば、ギリギリのところその弾を躲した。軽く跳ぶように、そつと。

「的じゃないんだ、避けるよなあ普通」

「シグ、銃を貸してください！ あとあの子を追い掛けて！」

「は？ どうした急に」

「いいからさっさとしやがれですよこのチンカスがア！」

半ば奪い取られるような形で銃を渡し、半ば蹴られるような形で走り出す。いつもの胡散臭い笑みを沈め、あの目つきの悪い瞳を露わにするトレッド。何かしら、策があるんだらう。

アイルーを追い掛けるか、ザザミソをとるか。苦渋の決断だったが、ザザミソを捨てるなんて死んでも避けたかったが、仕方ない。

「……ツちくしょう！ 待てやそこのアイルー！」

「ニャー！ か、堪忍してニャー！」

邪魔な人間を掻き分けて、一心不乱にネコへと走る。肉の脚が大地を鳴らし、鋼の脚がその身を鳴らす。重さの違うそれらを振り回しながら、全力を足へと振り撒いた。

それでも、ネコとの距離は縮まらない。流石はアイルーというべきか、彼らの全速力は人間の全速力より数段上手だったのだ。小さな影が徐々にその身を小さくしていくことに、俺は一抹の焦りを募らせる。

その時だった。間の抜けた発砲音が、この広場に響き渡る。丁度三発、俺の背後から。それが俺を追うように飛んできたと思えば、それは軽々と俺の頭上を飛び越えた。そうして、前を走るアイルーに向けて――。

いや、明らかに高すぎる。アイルーはおろか、人間よりも高い。建物の屋根を射抜かねないほどの高さ。一体何を狙って、トレッドは撃ったのか。

その答えは、簡単だった。懸命に走るアイルーの、その上。市街地特有の巨大な紙広告。棚引くそのの、頭上。紙全体を支えるか細いその部分に、三発のペイント弾は静かに着弾する。

紙が濡れるとどうなるか。そうなれば、当然脆くなる。濡れた紙はその強度を瞬く間に霧散させるのだ。重い我が身を支えきれない程度には、脆く。

脆くなれば、次に待ち受けているのは言うまでもない。それが、覆うようにアイルーへと襲い掛かった。

「……ニヤツ？ な、何ニヤー!？」

「隙あり!」

突然落ちてきた巨大な紙の広告に、アイルーは思わず急停止。目の前のそれに目を丸くしては、ネコの悲鳴を上げた。

そんなネコに向けて両手を伸ばし、その柔らかな毛並みを抱き締める。先程のように、白い粉が舞った。

「あつ、お前! 何だこの粉、石灰か!？」

「や、やめてくださいニヤ! ひつ、ひにやつ!？」

俺の腕の中で暴れるコイツを抑え続けければ、その度に白い粉が舞う。舞う度に、このネコの本当の毛並みが露わになった。

黒く、深い色をした毛並み。光を呑み込むその光沢が何とも美しい。その毛並みは、メラルーのそれだった。

「……お前、メラルーじゃんか。この粉で白く塗ってたのかよ」

「ニヤ、ニヤあん……ふみやつ。か、勘弁してくださいニヤ……」

「スツた財布を出しな、じゃないと悪戯するぞ」

「ニヤウ……みゆう」

尻尾の付け根を軽く叩くと、その度にネコは変な声を上げる。撫でることと搔くこ

と、叩くことを織り交ぜながら攻め続けると、とうとう観念したのか、アイルーはその身を投げ出した。俺にもたれつつ、背負っていたドングリポーチをごろりと落とす。

「ご、ごめんなさいニヤ……ワタシ、お金がなくて……」

「お金がなけりや物を盗んでいいのか？」

「うう、他に方法が浮かばなかつたんだニヤ。群れから追い出されて、どうすればいいかわかんニヤくて……」

財布が入っていたのだろうポーチを回収しつつ、宥めるようにネコの背中をそつと撫でた。その度にネコは小さく泣き、小さな嗚咽を漏らす。

荒れた毛並みに、手入れの行き届いていない尻尾。どうやらこのネコなりに色々あったようだ。

「やるわね、貴方」

「……あん？」

ネコの嗚咽に混じるように響く声。

振り返ると、一人の少女が立っていた。淡い金の髪を揺らす、凜とした少女。先程までの的を狙っていたその碧い瞳を俺に向けては、感嘆するように頷いていた。

「……勘違いしてるようだが、あの紙を撃つたのは俺じゃないぞ」

「違うわ、そっちじゃなくて。そのネコちゃんを宥める手腕。私が驚いたのはこつちよ」

少女はそう言うては俺の方に近付き、そつと屈む。ネコに視線を合わせては、優しく微笑んだ。そうして、両手を伸ばしてはそのネコを優しく撫で始める。その撫で具合が心地いいのか、メラルーは容易く喉を鳴らした。

「……アンタ、もしかして」

「うん、きつと私と貴方はネコ好きね」

「なるほど……。アンタもやるじゃん」

「ふふ、お褒めいただききどーも」

そつと、柔らかくそう笑う少女は、俺からこのネコを抱き寄せる。優しく包んでは、その背中をゆつくり撫でた。ゴロゴロと音を立てるネコに、それを受け止める少女。何だか微笑ましい光景だ。

少し頬を綻ばせていると、彼女は静かに立ち上がった。腕の中で収まっていたメラルーも、驚いたのか喉を鳴らすのを止める。おっかなびつくり、彼女の顔を窺った。

「物を盗むのはよくないよ。ちゃんとこれは返そうね？」

「ニヤ、ごめんなさい……。でも、ワタシどうしたら……」

「……ちゃんと謝ったら、一緒に帰ろう？ 私、今ルームサービスしてくれる子探してるの」

「ニヤ、そ、それって」

そのネコがそう言い終わらない内に、彼女は踵を返す。ドングリポーチを手にしては、再び広場に向けて歩き出した。その前に、少しだけ立ち止まりつつ。

「私の名前はルーシャ。ドンドルマのハンターよ」

「……俺はシガレット。同上、だ」

「あ、じゃあまた会えそうかな？ その時はよろしくね」

「……おう」

彼女の背中に向けて、素っ気なく返す。それを受け取っては、彼女はまた歩き始めた。向こうから走ってくるトレッドとすれ違いながらも、静かに広場へと消えていく。風に揺れる仄かなポニーテールも相まって、その姿はまるで絵画のようだった。

一方、慌ててこっちにやってくるトレッド。走る男の姿など、まるで絵にならない。

「……何とか問題解決したみたいですね」

「まあな。全く、折角のザザミソがパーだよ」

「合計得点一点、お疲れ様でした」

そう言つては、小包された白い固形物を手渡してくる。いや、固形というよりは半固形になりそうな、妙に柔らかい物体。

渡してきたトレッド曰く、これは健闘賞らしい。入賞を逃した者に送られる、申し訳程度の品なのだとか。



悔しさを感じながら、それをそつと噛み千切る。もちもちと柔らかく、歯応え十分なそれ。まごうことのない、餅だ。

ねつとりと、しつとりと、もっちりと。餅特有の食感が、俺の口の感覚を支配する。歯形を描くように柔らかく崩れていくそれを舌で受け止めながら、また再び細かくしていく。柔らかく、それでいて歯応えがあり、固い。簡単には噛み切れないそれを噛み続けながら、そこから溢れ出る味わいに俺は思わず目を細める。

そのもちもちさが拡散するのは、仄かな甘みだった。まるで三色団子を思わせる、淡く、柔らかく、それでいて優しい甘み。とろりと溶けていくその餅から、風味のように溢れ出ては、撫でるように口内に塗りたくっていく。食感とリンクしたその風味は何ともし上品で、それでいて大らかだ。噛む度に甘さが広がって、その度に優しい気持ちになれるような、そんな気がする。

「……餅は餅屋、ですよ」

「……ほんと、その通りだな」

息を吐くように、和やかな気持ちがあるまま口に出た。餅の柔らかさを含んだような、そんな気分だった。

く 本日のレシピく

『健闘賞：餅』

・ 餅 …… 80g

## 弱肉強食

太陽が眩しい。

本日はクエストを受注しておらず、これといった予定も特にない。ドンドルマの新居でゆったり過ごすには最適の休日だった。

ツタの伸びたレンガ造りの、年季の入った住宅。開閉自由な壁に区切られた庭と部屋を行き来しながら、イルルは小さな欠伸を漏らす。そうして、俺が寝転ぶ庭のハンモックにぴよんと飛び乗った。

「にゃー、良い家じゃあ。一日中ゴロゴロしてたいにゃ」

「……だな。良い物件があつたもんだよ」

柔らかな顎を撫でながら、俺もそつと頬を綻ばせる。ゴロゴロと喉を鳴らしながら、俺の上でゴロゴロするイルル。太陽の光も相まって、彼女の体からはお日様の香りがする気がした。

新居は、バルバレのものとは違い、広い。以前のようなベッドルームの他に、リビングとなる広間とそれと同等の広さを持つ庭がある。両者を区切る壁は、スライド式のド

アとなっており、本日のような快晴では全開にすることも可能だ。涼しい風が舞い込んで、リビングのソファアが軽く唸る。天日干しにももってこいかもしれない。

「風が気持ちいいにや……」

「こつちの方は砂漠近くじゃないし、結構過ごしやすいもんだな」

彼女の柔らかい毛並みを感じながら、俺は空を見上げた。

青く澄んだ空はどこまでも広がっており、白い雲が疎らに浮いている。バルバレのよ  
うな、風に混じって砂が飛んでくることもなく、ただ穏やかな風だけが吹いていた。

「さーて、こんないい天気だし、もう一眠りすつかあ」

「みゃんつ、賛成にやあー!」

俺の首筋にくつつきながら丸くなるイルル。そんな彼女の背中に手を置きながら、軽くポンポンと撫でる。その度に彼女は心地よさそうな声を漏らし、また一つ小さな口で欠伸を飛ばした。

何とも和やかな世界だ。気持ちが安らいでいくのが分かる。温かいネコの鼓動を感じながら、俺もゆっくり目を閉じた。

——その時だった。

「しっ、失礼します! シガレット様はいらっしやいますかっ!」

庭に付けられた、木製の扉が乱暴に叩かれる。軋む扉に、鳴り響く金属音。取り乱しては荒げられるその太い声。声の主は、おそらくその辺の守備兵かそこらだろう。

突然のその声に、イルルは尻尾を膨らませながら飛び起きる。俺はといえば、ウトウトしかけたところで起こされたのだから、何とも出鼻を挫かれたような気分だった。

「……一体なんだ？」

「にやあ……？」

「あつ、その声！ いらつしやいますね！ 中に入つてもよろしいでしょうかつ！」

頭を掻きながらハンモックから身を起こし、庭の先にある扉に手を掛ける。それをそつと引いては、声の主とを隔てる壁を取り払った。

大柄な体に、鋼色の鎧。背負った盾と槍はその体以上に大きく、その姿は大老殿近くでよく見られる。このドンドルマを守護する兵隊、その一人だった。

「……えーと、何の用で？」

「ああ良かった暇そうですね！ 本当に良かった！」

「にや？ 暇が何か関係ある……のかにや？」

荒げる息を整える彼は、こほんと小さく区切りをつけ、腰のポーチから一枚の紙を取り出した。丁度、クエストボードに貼られているような、年季の入った古紙だった。

「……まさか、クエストか？ それも俺宛てに？」

「はい、大老殿から直々に！ バルバレの下位ハンターが未知の樹海で消息を絶つたとの連絡がありました。どうかその救援に向かつてくださいとのことですよ」

「にや。それは一大事だにや！ ……でも、何で旦那さんに？」

「他に暇そうにしているG級ハンターがいないからです！」

「……あ？」

もつともな疑問をイルルが口にする、守護兵の男は鼻高々にそう答える。その言葉に俺が少し声を低めるが、彼はまるで気に留める様子もない。壊れた蛇口のように、その理由を次々に並べた。

「G級ハンターというのは誰もが忙しいものなんですよ、あちこちの依頼に引つ張りだこつてねつ。でも貴方は違う！ 大いに時間をあり余らせていらつしやる！ こんな天気の良い日に昼寝に耽るなんて、そうそうできない！ でも貴方はできる！ 貴方は暇人だ！ だから貴方に頼むしかない！ って感じなんですよっ！」

「あつはつは。ふーんそつかそつかあ。おいデクの棒、拒否権行使していいか？」

あまりに適当なその理由に呆れ半分怒り半分で顔に青筋を浮かべると、ようやく自分の失言に気付いたのだろうか。守護兵の男はあわあわと口を震わせ始める。

あの尊大な口振り、とても人にものを頼む態度とは言えないだろう。俺にだって、暇人にだって、拒否権を行使する権利くらいはあると思う。

「旦那さん！ 緊急事態なのになや、変なこと言つてないで行くにやよ！」

「いや待て、俺は行くなんて一言も」

「にや、シガレット行きますにや。救援向かいます！」

「おお、助かります！ 流石はG級ハンター一向だ。オトモも肝が座つてらっしやる！」  
勝手に話を進めたイルルが、守護兵から依頼書を受け取つては、ふにやふにやとそれを読み始めた。

そんな彼女の姿に感極まったのか、守護兵はハンカチを取り出しては目元を拭い始める。全くもつて意味が分からない。状況に頭が追い付かない。

「旦那さん、早く準備するにや！ 助けに行くのにや！」

「家の前に竜車ありますから、早く乗ってくださいいね！」

スツと身を引いた守護兵の後ろ。そこにはアプトノスが牽引する竜車がご丁寧に駐車されていた。俺が暇で、救援に向かうだろうと決めつけているその態度が妙に腹立たしい。その意向にしつかり沿っているこの状況も同様に、腹立たしいのだが。

俺と同じく労働に駆り出されたアプトノスが、虚しそうに鳴く。その声が妙に、俺の耳に貼り付いた。

「どうしてこうなつたし……」

◆ ◆ ◆  
バルバレやドンドルマに囲まれるように座す、広大な森林地帯。別名「未知の樹海」は、本日もけたたましい怒号でその身を震わせていた。

巨体が唸り、大地を蹴り、咆哮を上げる。それだけで木々に止まる鳥たちは逃げ去り、和やかに食事をするケルビたちは巢に逃げ込んだ。

「あーもう、何なのよコイツー！」

「ニヤッ！ お嬢さん、ここはとにかく逃げるぜニヤー！」

駆ける巨体は、毒々しい。紫色に染まった甲殻が何重にも連なり、厳めしい翼を広げていた。その甲殻はもちろん、揺れ動く尾にも鋭い棘が走り、奇妙な声を上げては狂ったように走り出す。

目の前で走る二つの影。それに目掛けて黒狼鳥、イヤングルガは雄叫びを上げた。

「おつ、追い付かれるわ！ だつたら……ッ！」

「お嬢さん!!? 無謀なことよせニヤー！」

迫り来るイヤングルガから逃げきれないと悟ったのか。踵を返したその少女は、背中に付いた巨大な武器を振り下ろす。少女の体と同等か、下手したらそれ以上の大きさの盾を。そこから、これまた長い強固な剣を。鋭い金属音を鳴らしながら、少女はその



可憐な姿に似つかわしくもない、何とも武骨な武器を引き抜いた。

一対となった盾劍。俗に言う、チャージアックスだ。赤く光るクックシリーズを喰らせながら、慌てて構えたその盾に、黒狼鳥の鋭い嘴が打ち付けられる。その反動の余り、少女の体は後ろに飛んだ。少女の長いツーサイドアップが、風に揺れる。

「きゃっ………！」

「けっ、怪我ねえかニヤア?！」

「くうううう………！　だっ、大丈夫………！」

「全く、無理しやがってニヤア!！」

そんな彼女の間を埋めるように、白い毛並みのアイルーはブーメランを飛ばした。骨で作られたような脆いそれが、イヤンガルルガに当たるや否やボロリと崩れる。飛び交う破片に、思わず首を振るイヤンガルルガ。

鎧に負けないくらい紅く美しい髪を揺らしながら、少女は不満を吐き捨てた。まるで苦虫を噛み潰したかのような表情で、そっと。

「もう、何なのよコイツ………！　強すぎだし、竜車とも連絡取れないし、迷ったし。今日は厄日だわ!！」

「命日にならないようしねえとニヤア。さっさとしろニヤ、ほら早く!！」

「う、うん!　そうね………！」

まともにやりあつても勝ち目はない。少女はこれまでのやり取りでそう悟っていた。イヤンガルルガは、鳥竜種の中でも群を抜いて危険なモンスターだ。強力な毒と、イヤンクツク以上の身体能力。そして異常とも言える狂暴性を秘めている。戦うことを楽しんでいないのか。書士隊にすらそう思わせるほど好戦的なモンスターなのだ。

クツクシリーズに精鋭討伐隊盾斧。それが彼女の装備だった。駆け出し下位ハンターのそれである。イヤンガルルガに挑むには、些か心許ないだろう。

じろりと、傷だらけの顔で少女を捉えるイヤンガルルガ。その仕草に怖気でも走ったのか、少女は冷や汗を垂らした。健気にブーメランを振っていたアイルも、思わず顔を青ざめさせる。

「ひうつ……に、逃げるわよ、シロナ！」

「てやんでい、了解だあニヤ！」

慌てて武器を納刀し、踵を返すように逃げる少女。黒狼鳥に背を向けて、全速力で走り出す。忙しなくその様子を窺いながらも、脚は決して止めないで。

「ニヤツ?! ちい！」

空いた距離を一瞬で詰めたイヤンガルルガ。凄まじい跳躍力で舞い上がったと思えば、その鋭い嘴を大地に突き立てる。シロナと呼ばれたアイルごと、貫通させかねな

い勢い。それを、彼は寸でのところで躲す。

それをも見越していたのか、イヤングルガは凄まじい速度で首を振り動かした。左に飛んだアイルーを捕捉し、再度その嘴を振り下ろす。

「ニャあッ！」

「シロナ！ こんの……っ！」

吹き飛ばされるオトモを見ては、怒りを露わにする少女。逃げる足を止め、背中の柄に手を掛けた。そうして、一心に黒狼鳥へと叩き付ける。その巨大な盾を、斧へと変えて。

しかし、所詮は駆け出しハンターの足掻き。百戦錬磨のイヤングルガにはお見通しだったのかもしれない。

「うわっ……!!」

バックジャンプ。振り下ろされるそれを、奴は後ろに飛んで躲した。けたたましい咆哮と共に。

耳を裂くような咆哮と、身体を自由を奪う風圧。それを同時に叩きつけられ、目の前の少女は体勢を崩した。重い斧を落とし、力なく尻餅をつく。跳躍を、そのまま飛行に繋げるイヤングルガを目にしながら。迫り来る恐怖に、歯を震わせながら。

「お嬢——ッ！」

「きゃあつ!!」

少女の悲痛な声が、樹海を木霊した。切り裂かん如き勢いの尾に打ち付けられ、そのか細い体が宙を舞う。

アイルーの悲鳴と共に、その体は地に墜ちた。力なく、受け身もとれず。必死の形相で彼女の元へ走り行くネコ。無情にも、イヤンガルガはそこに火を落とす。

「うっ……シロナ、逃げ……て」

「ニヤ、ニヤに言ってるんだ馬鹿! 逃げられるわけねえニヤ!」

燻らせた火を口内に蓄え、熱と光を湛え。そうして、少女を、彼女を庇うアイルーを。一直線に焼き払おうと、黒狼鳥は雄叫びを上げた。

弾けかねない熱量に、大気が焦げる。

何かが焼ける、鼻を突くような臭いが立ち込める。

火薬の香りが撒き散らされる——。

「自爆しろオ!」

突然、男の声が入り込んだ。かと思いきや、宙を舞う小振りのタル爆弾が現れる。それがゆつたりと、しかし確実に。弧を描くように、イヤンガルガの前へと躍り出た。

弾け飛ぶ火球が、目の前のタル爆弾へと触れる。同時に、凄まじい閃光が樹海を駆け巡った。

「ギヤウツ!？」

「ハツ、馬鹿が! 昼寝の恨みだオラア!」

高台から舞い降りた、黒ずんだ鎧。マントを柵引かせるその影は、燃えるような緋色の剣をイャンガルガの紫色の鎧へと振り抜いた。溢れる橙色の煙も気にしないで、その甲殻を連打する。

「旦那さん! これも追加にや!」

「よしきた!」

片手剣を、まるで剣状態の剣斧の如く両手で持つそのハンターは、白い髪を揺らしながら果敢に黒狼鳥を刺激した。その突然の乱入者に、イャンガルガは視線を移す。激しく自らに襲い来る者。好戦的な奴の気を引くには、十分な条件だった。

そこへ、大タル爆弾を投げ入れる白い影。一匹のアイルーが、その体より大きな爆弾を、懸命に投げ入れる姿がそこにあった。

飛んできた爆弾に向けて、白髪のハンターは跳ぶ。すかさず追い掛けるイャンガルガの様子を窺いながら、左手に持ち直したその片手剣でタルを切り裂いた。

先程の火球以上に凄まじい熱波が、樹海に咲いた。



「大丈夫かによ？」

「ニヤ、た、助かりましたニヤ……有り難うございますニヤ」

しつこく狡猾な黒狼鳥。それをやつのことで仕留め、血抜きして、大木の傍で蹲うずくまる少女とアイルーの所へ駆け寄った。

消息を絶ったバルバレの下位ハンター。十中八九彼女のことだろう。

「……外傷は幸い酷くはない。けど、毒か……」

「ニヤ、フレアお嬢さん……大丈夫ですかニヤ？」

「ん……ごめんね、シロナ……誰か来てくれたの……？」

苦しそうに眉を歪ませる少女は、荒い息で瞼を開けた。

先程とは打って変わって、やたらと縮こまって話すシロナと呼ばれたアイルー。そんな彼に向けて、フレアと呼ばれた少女は弱々しく笑う。血色が悪い、呼吸が荒い、手足の力が抜けている。典型的な毒の症状だった。

大きく破損したクツクシリーズ。大破はしたものの、これによつて致命傷を刻まれることはなかったようだ。それでも、ご丁寧ごとうじんに毒を塗り込まれたようだ。

「救援だ。何はともあれ、命はあるみたいだね」

「あ、あたしを助けに……？ あ、ありがと、ございま……す」

「む、無理しちゃだめにゃ！ で、でもどうしよう。解毒薬は持って来てないにゃ……」  
「ボ、ボクが解毒薬を習得さえしてれば、ニヤ……」

白い毛並みのイルルが、同じく白い毛並みのアイルーと共に一人の少女を心配している。装備は違えど、どちらも雪のように綺麗な毛並みだ。

一方の俺は、何ともなしにポーチを開いた。解毒薬こそ持って来ていないが、それに関連するアレを先程草むらで採取したような。

「あ、げどく草」

「にやつ、ナイスタイミング。早速渡すにゃ！」

手にしたそれを見ては、イルルは嬉しそうに尻尾を立てせる。そうして、それを受け取ろうと俺に向けて手を伸ばし――。

危うく取られたかけたそれを守るように、右手を振り上げる。彼女の手が届かない高さまで。

「……？ にゃ、それは何のつもりにゃ？」

「イルル、ちよつと待て」

「……何でそんな嫌そうな顔してるんだにゃ」

「悪いがこれは今日の飯に使うつもりなんだ」

「……にゃ？」

「食べるなら、料理ができるまで待て」  
「にや——っ!？」

俺のその言葉に、イルルは絶叫。シロナと呼ばれたアイルルは泣き始める始末。フレアと呼ばれる赤髪の少女は、ふっと力が抜けたように目を閉じた。

その様子を見ては尻尾を膨らませるイルル。必死の形相で俺の脚にしがみつき、抗議の声を漏らす。

「何でにや！ 今すぐげどく草を渡せばいいにや！」

「げどく草単体では不味い。料理した方が美味いだろ」

「にやっ？ そんな理由かにや!？」

「他にもまああるけど……やっぱ味の問題かな」

「あ、味の？」

「てなわけで、早速作ろうじゃないか」

血抜き処理をしたイヤンガルガ。

斬れ味抜群のレギオスナイフを用い、その邪魔な頭や翼を削ぎ落とす。足ごと甲殻を剥がし、その中で眠る肉を露わにしていく。



同種の中では比較的小柄なその体軀は、毒々しい甲殻で如何にも鳥らしい肉を隠していた。

「にや、何か……鶏肉っぽいにや」

「所詮コイツも鳥竜種。鳥だかんな」

「でも……こないつぱい素材使つてもいいのにや？ ギルドの職員さんに、剥ぎ取り過ぎつて言われそう……」

「無理矢理働かされてるんだぜ？ これくらいはいいだろ別に」

レックスZメールのマントを剥がし、丸めたそれを枕にする。それに頭を置いては眠る少女と、彼女の看病をするアイルー。滲む汗を拭う彼に看病を全て任せ、俺は料理に専念する。

剥いだ胴体からは邪魔な内臓を抜き取り、香辛料を塗り込んだ。同時に溢れ出る生臭い肉の香りが、益々鳥らしさを感じさせる。

俊敏に暴れ回るイャンガルガ。その生態だけあって、肉はよく締まっていた。

「しっかし、G級相当個体だろうなあコイツ。レックスZも傷だらけだ」

「こんなのに鉢合わせるなんて、あの子たちも災難にや」

「全くだ。……さて、香辛料はこんなもんか。しばらく寝かせると味が整うぞ」

「し、しばらく……？ それって、どれくらい……」

「ざつと半日」

「にゃ？ 半日っ!？」

「も、もつと早くしてくださいニヤ！ お、お願いします、ニヤー!」

看病していたシロナも、思わず目を丸くした。イルル同様必死の形相で、俺に抗議の声を上げる。にゃーニヤーというネコの抗議が、俺に集中砲火した。

「わ、分かったよ。……美味しいのに」

「今はあの子の命の方が先にゃ!」

「はいはい……」

内臓が抜き取られ、虚ろとなったその体。そこにげどく草を詰め込んで、肉の切れ目に蓋をする。中のげどく草が抜け落ちないように、その切れ目を糸で固く縫い合わせてはその入り口を丁寧に絞った。

ここでのコツは、げどく草をみじん切りにしておくことか。細かく、口に入れやすくした方が、全体の食感を阻害しないのだ。

「じゃ、最後はローストだ。よろず焼きセット出してくれ、イルル」

「分かったにゃ!」

寝そべるポーチから、よろず焼きセットを漁り始めるイルル。

その一方で、俺は再び彼女たちの様子を見に行つた。荒い呼吸の少女は、未だ苦しそ

うに口元を歪めている。看病するアイルルも、あわあわと狼狽えるばかりだ。

「調子はどうだ？」

「ニヤ、さつきまで熱くて、で、でも今は冷たくて……ウニヤ」

「体温低下……？　ちよつと失礼」

少女の額に手を当てる。自分の体温と比べてみても、確かに彼女の体温は下がりがつあるようだった。毒の影響で免疫機能も疲労困憊なのだろうか。

「よし、取り敢えずお前……シロナだったか？　この子の首筋にくつついてやりな」

「ニヤ、ボ、ボクがですかニヤ!?　そ、そんな恐れ多いこと、お嬢さんに……!?!」

「お前の雇い主なんだろう？　いいからいいから。ネコの体は温かい。首筋を温めればそれは全身に回るから」

「ニヤ、わ、分かりましたニヤ……。お、お嬢さん、失礼しますニヤ……」

「それとアイルル、この子の傍で肉焼くぞ。熱源は近い方が良い」

「にやー、了解なのになつー!」

よろず焼きセットを担いでは、横たわる彼女の隣にそつと設置。そうして火を焚くべるアイルルに、俺はそつと微笑んだ。

肉焼き用貫通棒に、げどく草詰めイヤンガルガを突き通す。げどく草が入った部分を避けながら、その肉の頭から足まで一直線に貫いた。重く鈍いそれを、そつとセット

に乗せる。年季の入ったその機器は、弱々しい悲鳴を上げた。

「さて、じっくりローストだ！」

「にゃー！」

「お、お嬢さん……調子はどう、ですかニヤ……う？」

「……何か、凄く良い匂いが、するわ……」



「——完成だ！」

焼き上がったそれは、茶色とも焦げ茶色とも言えぬ、風情ある焼き目を浮かべている。溢れる香りは何とも芳ばしく、勇ましい。そんな肉の香りの中に、わずかならかもどく草の透き通るような香りも混ざり、非常に奥深い匂いだった。

「さ、早速ハンターさんに食べてもらおうのにゃ！」

「お、お嬢さん！ 口を開けて、くださいニヤ……！」

「……え？ な、何……」

噛めばジューシー。呑み込めば芳醇。溢れ出る脂は風味良く、量が多く、されど後味も悪くなく。あの毒々しいイャンガルガとは思えない、上品な味わいがそこにあつ

た。

肉厚で弾力性のある食感に、如何にも肉らしい味わい。噛めば噛むほど柔らかくなっていくそれは、噛めば噛むほど旨みを拡散させていく。大した味付けをしていなくても、ここまで濃厚な味が出せるとは。鳥竜種の食材としての威厳を、何ともなしに感じてしまう。

「ど、どうですかニヤ……?」

「あ、脂が濃厚……うっ、お、美味しいわ……あう」

「だ、旦那さん!? これ病人に食べさせる料理じゃないにや!」

「思ったより味濃いな、確かに」

イヤンクツクが比較的淡泊なために、イヤンガルルガもそうかと思えば——どうやらこちらは話が違うようだ。

濃厚で、芳醇とも言える脂。引き締まり、豊かな肉質なこの歯応え。

確かに、病人には不適切な料理かもしれない。至って健康なら、いくらでも食べたい味わいではあるが。

「ん……でも、少し顔色良くなったか?」

「ニヤ、す、少しずつ温かくなってきた……ような気が、しますニヤ」

「にゃー、回復笛吹くにゃ」

そう言つては、イルルは背中の中のポーチに手を伸ばそうとして――。

突然、硬直した。腰に入った笛と、目の前にある香しい骨付き肉。それを見比べては、鼻を鳴らし、喉を鳴らし。終いには、肉を手にとつた。

「……美味しいにや。噛み応え抜群、脂も濃厚！ 呑み込めばするんと落ちていつて、肉の味わいをよく残してる！ その中に染み込んだげどく草はちよつと爽やかさを残してて、くどすぎることもないにや！」

「だろ？ そうそう。げどく草つてさ、単体で食つても効能はあんまないんだ。料理なり、調合なりしなきゃ、な」

「にやあ、だから料理にこだわつたのかにや……」

げどく草は、肉の中で形を残している。奥の方を切り裂けば、肉とげどく草のコラボレーションが見られるのだ。まさに香草焼き。植物由来の優しい香りも相まって、とても風味豊かだ。

また、じっくりローストしたために、げどく草の味わいが脂に溶け、肉に染み込んでいる部分もある。爽やかな味が、肉が肉らしさに走るのを、軽く留めているようだった。その粹な計らいが、これまた憎らしい。

「ニヤ……あ、あの……」

「にや……はっ！ か、回復笛回復笛！」

慌てて吹き鳴らされたそれ。樹海に響く回復の音色が、聴くものの心を癒してくる。その美しい音色がまた、美しい味を引き立てた。

「ふう、随分楽になったわ……。ありがとつ、料理人さん！」

「随分とまあ平らげやがって。全然満足に食べてないんだが」

「にや。この子の体調が良くなったんだから、ここは喜ぶところにや！」

「ニヤア、お嬢さん……。ほんとに良かったニヤ……！」

目を覚ました少女は凄まじい勢いで肉を喰らい、何とか回復したようだった。

先程までの死んだ表情がまるで嘘のよう。快活に笑っては、俺に礼を言ってきた。肉のかすを顔に幾つか残しながら。

「……ま、いいけどさ。よく食う奴は好感が持てる」

「お嬢さん、こ、この方は料理人じゃなくてハンターさんです、ニヤ。ボクたちを助けて、来てくれたんですニヤ」

「え！ そ、そうなの!？」

「……ハンターの鎧着込んだ料理人って、何それ新しいにや」

呆れたようにイルルが呟くと、シロナというアイルーは困ったように髭を揺らした。

一方、そのオトモの言葉を聞いた少女は、驚きの表情で顔を埋める。信じられないと言わんばかりに目を見開き、そうかと思えば俺の両肩を突然掴んできた。

「ハ、ハンター？　つまり私の先輩に当たるとってわけね！」

「うお、何だ急に。先輩だったら何だよ一体……」

「どうしたら強くなれるの!!　貴方、さっきのモンスターを倒せるくらい強いんでしょ？」

「……あ？　強く？　強くなりたいてってか？」

「私が目指してるのもっと高みにあるハンター。今のままじゃてんでダメ。もっと、もっと強くなりたいの！」

迷わない瞳で、俺の目をじっと見てくる少女。熱意と、真摯さと、意志の強さが、そこにあった。純粹に何かを目指している、強い目標を抱いている、そんな印象を抱かせる。

その大きな瞳には、曇りが無い。俺やトレッドのように、復讐心で動くような腐った人間ではないことが分かる。何というか、希望に満ちているような。そんな綺麗な瞳だった。

「……あー、こういうのは苦手なんだがな。まあ、知り合いの受け売りでも教えてやるよ」



「ほんと？　そ、それはっ!？」

「——規則正しい睡眠と食事。これに限るってな」

お礼を言つては竜車に乗り込む少女とアイルー。竜車の行く先はバルバレ。俺と彼女はここで別れだ。

ギルドの気球も訪れ、消息不明のハンターの無事も確認された。俺のクエストも無事達成し、何とか問題なく事を終えることができたようだった。

——剥ぎ取りし過ぎだと、ギルド職員に文句は言われたが。

「……旦那さん。さっきのアドバイスって」

「ん、山菜ジイさんが言つてた言葉だよ。食生活を改善して、生活リズムを正し、適切な運動を行えば、自ずと強い身体が作られるって。……ハンターだし、最後のは省いたけど」

「やっぱりあの人の言葉なのにや……」

そう言つては、イルルはクスクスと笑い始める。まるで俺の言動が可笑しかったかのようなその仕草。何だかくすぐったい感じがした。

「な、何だよ……」

「にや、惰眠を貪つてた人が規則正しい睡眠って言っても、説得力ないにや？」

まるで貫通弾のように鋭いその言葉。そんな彼女の正論を前に、俺には反論の余地が食ベカス程もなかった。

一方、バルバレのとある少女ハンターは、この日を境に食生活と生活習慣を見直すようになったらしいが、これはまた別の話である。

く本日のレシピく

『ローストイャンガルガ』

- ・ 黒狼鳥 ……1羽
- ・ 香辛料 ……適量
- ・ 塩胡椒 ……適量
- ・ げどく草 ……120g

## 淡紅の石鹼がたゆたうか

カランと、グラスが鳴った。

大きな氷が、まるで氷海の氷塊のように浮いたこのグラス。味わい豊かなポコポコーラを滴らせたそれが、落ち着いた店の雰囲気の中で静かに木霊する。

ドンドルマの路地裏。そこに位置する、小振りなパブ。居酒屋と言つてもいいかもしれない。そう思わせるほど、粋なメニューが並ぶ風情ある店だった。

酒、ドリンク、肉、魚、つまみ。

何でもござれと言わんが如く立ち並ぶその圧巻なメニュープレートに、俺は舌を巻いた。初めて入った日のことを、未だによく覚えている。それもそのはず、この店はユクモ村から直接仕入れている品も多くあり、相応に品数も多岐に渡るのである。

「どうよ、産地直送のポコポコーラ。美味いっしょ?」

「……お前のそのうざったい軽口さえなければ最高だ」

ぐいっと飲み込めば、激しい気泡が俺の口内で暴れ回る。その一つ一つが勢いよく弾け、その度に喉を、その奥に潜む神経を刺激する。泡が弾ける度に爽やかな味わいを残

していき、それが非常に心地良かった。

溢れる甘みもまた際立っており、激しい炭酸によくマッチしている。流石はドリンク屋の人気ナンバーワン商品だ。その人気ぶりも頷ける。

それと一緒に口に入れる、刺身のようなもの。お通しとして出されたそれは、柔らかく、芳醇な脂身を持ち、同時に何とも不思議な滑らかさを持ち合わせていた。

そつと口に入れると、サラリと溶ける。滴る脂はまるで上滑液を思わせるような滑らかな口どけで、濃厚な肉の甘みを口の中で広げていった。口内で石鹼を塗りたくるような、そんな勢い。だがその石鹼に、旨味がある。そんなイメージだろうか。

一体何の肉なのかは分からないが、その食感や味は魚の刺身に近かった。魚肉ではないのだろうが、淡泊な味わいやとろけるような口どけは、まさに魚のそれだ。ボコボココーラにはあまり合わないものの、単体として見てもかなり美味い。これも、ユクモ村から産地直送を経てやってきた食材なのかもしれない。

「……大体、お前が作ったものじゃないだろ、イズモ」

「まあそうだけど。でも一緒にドンドルマまで来たしね？」

そう言つては、俺の横の席に座る彼——イズモは悪戯っぽく笑った。

ユクモ村とドンドルマ。この二つの集落は、実は驚くほど近場にある。何と、陸路でも一日あれば到着してしまう程近いのだ。噂には聞いていたが、イズモがそれを利用し

て度々ドンドルマに訪れているあたり、その噂は真実なのだろう。

「……んで、どつたの？ シグが悩みなんて珍しい。それも、オレに相談するなんてねっ」

「うるせえな……。こちとら本気で悩んでんだぞ……」

「折角居酒屋の席までとつたんだしき、ゆっくり話しなよ。……まあ、所詮はカウンター席だけど」

目の前では、筋骨隆々の男が何やら細かな作業をしていた。このパブのマスターらしい彼は、その見た目とは正反対の、何やら繊細な作業を続けている。見たところ、他の客に出す品のようだが。

ふと、彼と目が合った。濃密に髭を生やした彫りの深い彼が、ニコツと笑う。自分のことは気にせず話せ、とでも言うように。

「……あのさ、最近新しい友人が出来たんだ。ネコ好きの」

「お、シグに友達？ やったじゃん！ それでそれで？ 男？ 女？」

「……女」

「ヒュウ！ とうとう新しい女に手を出す気になったのかあ？ 心の整理に時間掛け過ぎだろー！」

「うるせえ、そんなじゃない。問題はそれじゃなくて、そいつから持ち掛けられた相談

なんだよ」

「……はっ」

早くも興味をなくしたように、イズモから枯れた声が漏れる。

そんな彼の様子も気にせず、俺はその件について話し始めた。つい先日友好関係を結んだ相手、あのベリオXシリーズに身を包んだ少女、ルーシャとの。



「——ねえ、シガレット」

「……お、えつと、何だっけ。しゃ……シヤールベツトさん？」

「そうそう、キンキンに冷えた爽やかな甘味……って誰よそれ！ ルーシャよ、ルーシャ！ ……確かに、ベリオ装備は氷っぽいけどさあ」

「ルーシャ、か……悪い。で、何だ？」

「あのさ、この前のこと覚えてるよね？ 私が連れ帰ったメラルー……クウちゃんのことなんだけどさ」

「クウちゃんって名付けたのか、可愛いじゃん」

「でしょ？ もうほんといい子なんだよ！ 毎日頑張って仕事してくれるし、私のこと

も癒してくれるー!」

「……つまり、互いのネコ自慢しようぜ的なそんなノリか? よし分かった、ウチはな」  
「ああ、違う違う。そうじゃなくて、何て言うか、悩みを聞いてほしいの」

「……は? 悩み?」

「そう。えつとね、こういうこと聞いてくれるの、分かってくれるのはシガレットくらいしか思いつかなくて……」

「分かった、聞こう。ネコ絡み、だな?」

「……っ! ありがと、シガレット! 貴方ならそう言ってくれると思ったわ!」

「いいってことよ。で? 何だ?」

「最近、クウちゃんがちよつと臭うの」

「……………あん?」

「何かね、ちよつと臭うの! お風呂嫌いな子だから頻繁にお風呂に入れられてないけど、でも入れてるの。それでもちよつと臭うの!」

「え、えーつと? つまり、ネコのおい相談?」

「そう!」

「はあ……何でまたそんな……。くさい感じ?」

「くさいっていうより、独特な感じ? こう、むわつとくるような。何でかな、暑くなっ

てきたからかなあ？」

「もう夏だもんな、少なからず影響してるのかも。……何か変わった仕草とか、癖とかあるか？　そういうのって、結構関係するやもしれん」

「うーん……どうだろ。至って普通のネコって感じなんだけどなあ」

「あの時の石灰か何かも、ちゃんと洗ったんだろ？」

「もちろん！　……えと、あとは……最近毛繕いしてるのが多いかなあ」

「……うん？　毛繕い？」

「うん、毛繕い」

「……もしかして、それじゃね？」

「……え？」



「……つまり、どういうことなんだ？　オレにはさっぱりなんだけど」

「アイルールの体温調節を知ってるか？」

「え？　えーつと……？」

粗く説明しながら、それとなくイズモに聞いてみた。アイルールら獣人の体温調節の方



法。今回の話のミソは、そこにある。

彼は見当も付かないといった顔で、困ったように眉を曲げてみせた。彼はオトモを雇わないハンターだ。こういった事情にはあまり詳しくないのかもしれない。

「アイルーたちはさ、自分の体舐めて、唾液の気化熱で体温下げるんだよ。夏場では特に」

「それって……つまり」

「ああ。舐めまくるからにおいがするってわけよ」

役に立つかどうか分からない雑学を前に、イズモは少し感心したかのような声を上げた。納得したのか、軽く舌を巻いては感嘆の言葉を漏らしている。

冬よりよく洗っているのに、夏の方がネコが臭う。案外、よくある話題なのかもしれない。ルーシヤの話がそうであったように。

「……あれ？ 謎が判明したからにはそれで問題解決じゃん？ 何でオレに相談なんか？」

「最近、イルルがちよつと……」



原生林。本日もまたジメジメとした熱気に包まれたその世界は、入るもの拒まずと言うように風を鳴らした。所狭しと木々が立ち並び、巨大な滝壺は怒号を上げる。

桃色の鳥が飛び交い、巨大な昆虫が羽音を奏で、どこか森の奥からは何か獣のような声が響き渡り――。

原生林は、本日も平和いつも通りだった。いつもと違う点を挙げるとするならば、少しばかり霞が深まっていることくらいだろうか。

「……なあ、何でここに来たんだよ」

「臭いが原因なんでしょ？ だったら、良い匂いを用意すりゃいい話ってね」

何かの討伐依頼をドンドルマに置かれたクエストボードから受け取って、俺をも巻き込んでこの原生林まで運んできた彼、イズモは屈託のない笑みを浮かべた。水に浸る大地を踏み鳴らしては、興味深そうに辺りを見渡している。

元々彼は、ユクモ地方で活動するハンターだ。こちらバルブレードンドルマが管理する狩場には縁がないらしい。故に初めて見るため、興味が絶えないのだとか。

「良い匂い、ねえ。ババコンガでも探してんのか？」

「ウンコヤローには用はない。何か最近ここのババコンガの情勢が不穏って噂も聞いたけど、まあ関係ないね！」

「……じゃあ一体何だ？ 皆目見当つかないんだが」

「ふっふーん。いやまさかね？ さつき食べたアレが……この装備の元となったアレがね？ この地方にまで来てるなんてね？ 流石のオレも驚いたよ」

そう言つては、装備披露でもするかのように両手を仰がせ、着込んだそれをまじまじと俺に見せつけてきた。

紫色を基調とした毛皮素材に、白とも薄紫とも言えない透き通つた色の材質。赤や黄色の装飾が入り混じり、その統一感は一種の芸術品を思わせる。如何にもユクモ風の、気丈で風情ある装備。

「何だっけ……ミツネシリーズだったか？」

「そのS版！ 動きやすいし高性能だよっ！ 格好良いだろ？」

「……いつそのこと狐の面も被れば？ その方が格好良いぞ」

「むっ、オレの顔に何か文句あるのかよー！」

プンスカという表現を余すことなく活用した怒り方。それを振り上げては不満を垂れる彼の横を通りながら、適当に返事を飛ばす。原生林奥の、エリア3に向かいながら、そつと。

「冗談だ。何で恋人が出来ないのか不思議な顔がそこにある」

「……おつ……ま、まあね。オ、オレイケメンだし？」

「声震えてんぞ」

「う、うるせえやい！」

エリア3は、高台に囲まれた泉の空間だ。紅蓮の花びらが天から舞い降り、麗水で滴るこのエリアを優しく彩る。いつ見ても風流な光景だった。

一方、その花と同じように照れては顔を赤くするイズモ。怒ったり、照れたりせわと忙しのない男である。

「……オレは彼女作れないんじゃないんだよつ」

「いない人間はみんなそう言うよな」

「オ、オレは違うぞつ!? オレはヴェルドにいた頃から——」

「シツ、何かいる……」

このエリアの奥。飛竜の巣へと続く絶壁の前。桃色と紫色を贅沢に纏った影が、微かに動いた。

気配を悟られる前に気配を消す。狩りの鉄則だ。

喋ることに夢中になっているイズモの言葉を妨げてでも、その鉄則を優先する。掌で無理やり閉じた彼の口から、微かに鼻息が漏れた。

「アレか? イズモ」

閉じさせられては開けられない口の代わりに、彼は頭を大きく縦に振る。

花卉のような頭部。狐を思わせる、澄ましたような形の良い顔。優美な背びれに、豊

満な体毛。他の海竜種より、陸上慣れしているかのような体軀に、俺は思わず生唾を飲んだ。

アレがイズモの言っていた、彼の装備の基となったモンスター、タマミツネ。つまり、あの居酒屋で食べたその生きた姿、となるのだろうか。

「ふはっ……シグ、アイツは感覚が鋭い。奇襲は多分無理だと思おうよ」

「……みたいだな。目が合った」

はつと振り向いたタマミツネ。その宝石のような瞳が、一心に俺たちを見た。見慣れないモノがいる、とでも言わんばかりに眉間をひそ顰め、ゆつくりとこちらに近付いてくる。

海竜種の中ではとりわけ大きいわけでもなく、小さいわけでもない。とはいっても、その足取りは修羅場を潜り抜けた者たちのそれだ。このモンスターの強さというものを、垣間見せられる。

「ホオオオオオオオッ！」

吠えた。奴が、その甲高くしゃがれたような声で、吠えた。咆哮がこのエリアを飛び交い、旋風が舞う。

——その旋風に乗って、香りがやってきた。柔らかな甘みを思わせる、澄んだ香り。仄かに香るそれは、俺の鼻孔を優しく撫でる。

花のような、蜜のような、自然らしさ溢れる良い香り。市販の香水のような合成臭さ

が全くない、鼻に優しい香りだった。

「おお……良い香り……」

「でしょ？ コイツを使えば、何とかなるんじゃないかね？」

「可能性あるな……。よし、狩るか！」

「よしきたー！」

タママツネとの距離を埋めるよう、走り出す。俺は盾のベルトを締めながら。イズモは太刀の柄を握りながら。

同時に奴も動き出す。迫り来る俺たちを迎え撃とうと、その体軀を持ち上げた。かと思えば、猛然と突進を繰り出し始める。その四肢で大地を力強く掻きあげて――。

いや、走っていない。滑っている。――滑っている？

「うおわッ!? 何だコイツ！」

「コイツは別名『泡狐竜』って言ってな、泡を使うんだ！」

「泡っ!？」

「泡を飛ばしたり、石鹸みたいにヌルヌルしたり……面白いぞー！」

イズモの言葉の通り、奴は全身に泡を纏っていた。紫色の体毛に覆われた尾を振り撒いては、泡をどんどん沸き立たせる。まるで石鹸を擦ったかのように溢れ出る無数の泡は、この幻想的な世界を眩く彩っていく。

かと思いきや、タマミツネは大きく口を開けた。その口から飛び出たのは、またもや泡。人間のサイズを悠に超えた、巨大な泡。

「やべっ……」

地面と平行線を描くように、横へ大きく跳んだ。迫り来るそれを何とか躲し、ふうつと小さく息を吐く。

全く見たことのない攻撃方法だ。他の海竜種とは似ても似つかないその動きに、俺は冷や汗を垂らした。

泡狐竜、タマミツネ。初めて会った奴は、俺の想像を遥かに超えたモンスターだったのだ。

「大丈夫かい？ あのデカイ尻尾、アレが危険だ。尻尾動かしたら注意してね！」

「尻尾……？ 良い感じにもふもふしてるアレか、了解」

彼が言うのが速いか、奴はその尾を大きく引き絞る。まるで力でも溜めるようなその動作に、俺は警戒を込めて盾を構えた。

瞬間、奴の体が動き出す。長い身体を横に滑らせては、その尾を振り回す大技。生物の運動性能を超越しようなその動きが、俺たちに襲い掛かってきた。

「チィ……なんじゃそら！」

「シグ、滑んなよお！」

その長大な尾と盾が触れる瞬間。そのあまりある衝撃を察した俺は、瞬時に後ろに飛ぶ。そうして何とか躲したその隙を縫うように、回転切り上げを、奴のその頭に打ち当てた。

所詮は片手剣の軽い一撃。奴は我関せずと言わんばかりに、これといった反応を示さない。

それと同時に、気付いていなかった。あの尾を踏み台にして跳んだイズモが、上からお前を狙っていることに。

「隙ありいー！」  
「フオオウツ!？」

鋭い光が閃き、奴の首筋を走るように斬り裂いた。水に滴るこの空間に、雷の激しい光が灯る。

イズモが背負うは鬼哭斬破刀・真打。鋭利な電撃を纏う、優秀な太刀だ。その如何にもユクモ風なデザインが、彼の装備に驚くほどよく合っていた。

そんな彼が、宙を舞う。上空から、その太刀を振るい続ける。怯んだ奴の傷口を抉るように。

「シグ、大回転斬りいくかなー！」

「先に言ってくれて助かるぜ！」



横に大きく切り結ばれたそれは、円を描くようにタマミツネを苦しめた。舞い飛ぶ鱗が、静かに水に落ちていく。

それをも払うように宙を薙いだ太刀は、白い蒸気で覆われていた。イズモが練つたらしいその気が、太刀の鋭さをより洗練させる。高速で振られたそれは摩擦によつて蒸気を生んで、その刀身を静かに唸らせた。俺の斬撃より一層煌びやかな光が、原生林に咲いていた。

だが、美しいだけでは終わらない。同様に華やかな泡狐竜が、大きく息を吸つたのだ。見れば奴は怒り心頭。薄いヒレを真つ赤に充血させ、怒気を込めた咆哮を撃ち放つ。

「フオオオオオオオオオオオツ!!」

「うわっ、耳がっ……!!」

「チツ、鬱陶しいわ!」

瞬時に起動した高級耳栓。それが俺の耳を覆い隠し、その鋭い咆哮から守ってくれた。

こちらの動きが妨げられなければ、奴の咆哮などただの隙晒しにしかならない。喉を震わすことに夢中な奴に昇竜撃を当てるのは、今の状況なら朝飯前だった。

撃ち当てられた、緋色の盾。古龍の骨を埋め込んだその重厚な盾に、奴の花弁が花を咲かせる。下顎を無理矢理押し上げられ、奴は自分の舌を嚙んだようだ。口から鮮血が

漏れ溢れ、泡狐竜は呻き声を上げた。

「おつ、シグナイス！ さつすがあ！」

鳴り止んだそれに気付いては、イズモは再び駆け上がる。

隙を晒した泡狐竜のその前脚を踏み付け、またもや奴の上をとつた。縦横無尽に走る太刀が、タマミツツネに襲い掛かる。

「……ツ、イズモ！ 待て！」

「あえ？ ——あがつ?！」

流石に二度目をやすやすと受け続ける奴ではなかったか。

イズモの大回転斬りと同時に、奴は宙を舞った。自慢の尾を振り上げるようなその一撃は、俺とイズモをまとめて打ち上げる。その突然の衝撃に、防具が悲痛な声を上げた。

「いつてえ！ こんにやろ！」

「すつげえ動きしやがんなあアイツ……って、へ？」

悪態をつきながら身を起こす——はずが、するりと滑る。腕がすつぽ抜けたように、支えが消えた。同時に転がる、俺の体。上手く立てない。体が滑る。

見れば、俺の全身は泡だらけだった。防具もマントも、義足でさえも。全身に泡が纏わり付き、身体の自由を奪っている。転ぶ勢いが収まらず、そのまま滑るように動き出した。

「うおおお!! な、なんだあ!!」

「あつはははは! 何だシグそれ、全身泡塗れじゃんかよお!」

「う、うるせえ! 何でお前は無事なんだよ!」

「この装備のおかげさあ、おつと! ほらシグ、来るぜ!」

「ちつくしよ……! こんな時に……ッ!」

鎌首を上げるタマミツネ。再び口内に何かを燈し始める。

先程の泡とは比較にならない、高密度の何か。もはや泡という範疇を超えた、強烈な水流。それが奴の喉の奥から込み上げていた。

その様は、孤島で見かけたガノトトスを彷彿とさせる。少し違うのは、奴の方がより柔軟で、その長い首を自由に振り回していること。

「つて、薙ぎ払いッ!」

「シグ、背中借りるよ!」

「は? ちよつお前嘘だろ、へぶッ!」

突然、イズモが俺の背中を踏んだ。と、思えばそのまま跳躍。突然の上からの衝撃に、俺の体は地面に押し付けられる。

泡が割れ、水面が弾けて。まるでハンマーの振り下ろしのように全身が水に叩き付けられ、俺の視界はものの見事に水没した。鼻に水が入ったのか、ツーンと鈍い痛みが響

く。

一方のイズモといえば、俺を土台に再び天高く跳躍していた。

薙ぎ払われた水流を、イズモは高く跳ぶことで、俺は水に沈んで躲す。そんな俺を犠牲に、前者の奴は、三度目の滞空気刃斬りを撃ち放った。ブレスの隙を晒す奴の、その喉に。

「キイエエツ?!」

「しゃあ! 手応えあり!」

とうとう血飛沫に染まったその太刀を振りかざし、イズモは雄叫びを上げる。真っ赤な鮮血で滴るそれは、まるで妖刀だ。その悍ましい威圧感に、タマミツネは戦慄したのか、首から血を迸りながらほとぼしも後方へ跳躍する。

——いや、戦慄じゃない。戦意だった。

後方に飛ぶと共に、再びあの泡を作りだす。人間大のそれを勢いよく飛ばし、イズモの視界を覆い隠した。

「イズモツ!」

「大丈夫! この装備の前には、こんな泡無駄無駄あ!」

「違う、尻尾だ!」

「ほっ?」

その泡は、ただの布石。囿でしかない。奴の本命は、その自慢の尾だった。

奴を覆う泡が紫色の光を帯び始める。そうかと思えば跳躍。泡による推進力に回転力を加えたそれは、乱回転しながらかつ確実に、泡を振り払うイズモへと襲い掛かる。ラギアクルスもかくやという凄まじいまでの乱回転に、イズモは。

「そおいー！」

「はっ?！」

刃を、さながら地面を撫でるように構え、尾が触れる瞬間それを振り下ろした。さながら、カウンターののように。奴の呼吸に合わせてるように。

桜の花びらが舞い上がった気がした。いや、そんな可愛いものじゃない。舞い上がったのは、もつと生々しいもの。そう、尾だ。その突然の斬撃に、紫に染まる極太の尾が、何と宙を舞う。同時に舞い散る大量の泡と水が、このエリアに淡い雨を滴らせた。



「イルル！ 風呂入るぞ！」

「にや、にやつ!?! と、突然何にや!?!」

後処理を全てイズモに押し付け、早々とネコタクで帰還した俺は、自室のソファアの

上でせつせと毛繕いをしていたイルルに開口一番そう言った。

何事かと驚くイルルの両脇を掴み、そのまま庭まで運んでいく。軽い彼女を庭に置いたために押し込めて、温かいお湯で隙間を埋めた。状況に頭が追い付いていないイルルは、ただただキョロキョロと忙しなく首を動かすだけだった。

「ふにや……あつたかい。つて、違うにや！ 何にや急に！」

「新しい石鹸を作ったんだ。……石鹸つってもまだ固まってないから、半固体みたいな奴だけど」

「な、何でボクに!？」

「お前が良い匂いになったら俺が嬉しいからだ」

「い、一方的にや……!」

元々お風呂好きのイルルは、他のアイルーのように抵抗することはあまりないが、文句を抱かない訳ではなさそうだ。非難染みた目で俺をじっと睨んでくる。

そんな視線も意に介さず、俺はポーチからカラ骨を取り出した。中にお手製石鹸が詰まったカラ骨を。

「にや、ふやあ……良い匂いにやあ……。旦那さん旦那さん、これ何にや？」

「これはな、タマミツネっていう海竜種の素材を使ったんだ。花みたいに良い香りだろ？」

「これ、これ凄いにや！ 何だか笑顔になつちやう香りだにや〜」

石鹼を完成させるなら、最低でも月単位で寝かせるのが望ましい。しかし俺の手にあるこれは、十分に固まらせるほど時間を与えてはいなかった。骨を裂いて中のモノを出すも、それは半固体状。トロトロと、まるで液体のよう。

それを徐に、イルルの首周りへと擦り付ける。お湯に濡れてべつとりと張り付くそれが、柔らかな泡に絡み始めた。わしやわしやと毛を掻く度に、泡がどんどん溢れだす。同時に舞い上がる、ふわりとした華やかな香り。

透き通るようで、撫でるようで。濃密な花の蜜を凝縮したようなその深い香りは、俺やイルルの鼻を縦横無尽にくすぐった。その美しさは、妖艶なる舞のそれだ。

「にや〜、これたまんないにや。ふああ、幸せ……」

「鼻が良いアイルーには強すぎるかと思つたけど、杞憂だつたかな」

「大丈夫にや！ 全然おつけーだにや！」

イズモが何度も斬り裂いたタマミツネの首。その脂身を火にかけ、油が抽出され始めたら集めた灰と水を混ぜ合わせる。それができたら、濾過した灰汁と泡狐竜から獲れた泡立つ滑液を少しずつ加え、かくはん攪拌。

落とした液体がまるでホットケーキのタネのように、後を残すようになれば、何か手頃な容器に詰め冷ませばいい。そうすることで、この泡狐童石鹸は完成するのだ。

その石鹸をふんだんに使つて全身を洗つたイルルは、何とも嗅ぎ心地の良い香りに包まれていた。抱き締めると柔らかな甘みのような匂いが広がり、とても心が安らぐ。

乾かした毛並みの触り心地も筆舌し難く、いつまでも弄もよほつていたいような、そんな欲求に駆り立てられた。

「にやあ……旦那さん、くすぐつたいにや」

「何かもう、イルルが可愛すぎてな……やばいこれ」

腕の中のイルルがにやんと鳴く。そんな彼女の柔らかな毛並みに包まれ、俺はやつとやつと、息が詰まるような悩みから解放された。

そんな俺の意図を知らない彼女は、困つたように笑いながらも俺から離れようとはしない。心地よさそうに、俺の首筋に頭を摺り寄せる。もちろん、俺とて離す気はない。そつと力を込めて、彼女の小さな体を抱き寄せた。

豊満で上質な毛で覆われ、柔らかく温かい体を持ち、そこから放たれる和やかで艶やかな花を思わせる匂い。俺の腕の中で安らぐイルルは、何とも愛おしく、同時に――

「――美味そう」



「にゃ!? ひゃ、やあ、やつぱ離してにゃーっ!」

く本日のレシピく

『泡狐竜石鹼』

・ 泡狐竜の脂	……	3	0	0	ml
・ 泡立つ滑液	……	3	0	0	ml
・ 草木灰	……	1	5	0	g
・ 水	……	1	5	0	ml

## 極限鎮静力タルシス

「キュアアアア……」

そんな弱々しい悲鳴を上げ、目の前の命が果てた。

物々しい巨体を転がすその影は、微弱の振動と風圧を起こしながらも、地にその体を墮とす。糸が切れたように倒れたその体には、もう動く気配は米一粒も残っていないかった。

「……つたく、なんじゃこれ」

「ふにやああ！ こ、怖いにやあ！ 何にやこのモンスター……！」

金色の鱗に包まれた巨体。刃のように研ぎ澄まされた鎧を着た、鳥のような骨格の竜。羽も尾も無残に引き千切られながら、苦悶に満ちた表情で朽ち果てた奴——

それと全く同種と思われるモンスターが、俺の目の前に立っている。同種殺しも物ともしないくらい血走った眼で、その鎧をドス黒い色に染め上げて。

——千刃竜、セルレギオス。倒れ伏した奴の、そして目の前で唸る奴の名だ。

「……これって、明らかに普通じゃないよな？」

「見れば分かるにや！ 何かおつきいし！」

常時興奮状態にでも陥っているのだろうか。奴の体は、松笠のように全ての鱗が逆立っていた。余りある巨体を揺らし、はつきり見えているのかどうかもよく分からない瞳を俺に向ける。

妙だ。鱗の色も瞳の色も。まるで奇病にでも罹ったかのように不気味な色に染まっている。奴の体からは紫色の瘴気が噴き出し、息はディアブロスもかくやというほどに重く、黒い。奴が生態異常状態にあることは、火を見るよりも明らかだった。

「……まさか、狂竜ウイルスにや？」

「狂竜化……。食えなくなるじゃん、ふぎけんなよ」

「こ、ここので食べれるかどうかはまだこたわるのにや!? 狂竜化モンスターは食べられないにや、旦那さんお腹壊したのもう忘れたの？ 狂竜化はだめにやー！」

「……………なあ。狂竜化にしては、何かやばくね？」

「そんなの、見れば分か——はにや！ く、来るにや！」

イルルの注意喚起と同時に、奴の咆哮が飛んだ。

その声は重く低く、セルレギオスの甲高いそれとは似ても似つかない。まるで慟哭のような、苦しみと悲しみを含ませた声だった。

危うく塞ぎ損ねるところだった耳栓で耳を押さえながらも、その目に見える異常さに

目を見張る。足取りは不安定ながらも、確実に外敵を狙っていた。屈ませた体で、その左肩を引いて――

「……タツクルか！ イルル、飛ぶぞ！」

「んに……みゆあ!？」

咆哮に驚いては体を丸めるイルルを抱き上げて、大きく横に跳ぶ。彼女の小さな重みで飛距離が若干押し殺されたが、鋭い剣閃を躲すことは辛うじて出来た。擦り切られたマントの端が、もの哀しく宙を舞う。

「……旦那さん、あれ！」

着地の反動と義足の痛み。それらに襲われ、吸った息を肺に溜め込んだ。圧迫された呼吸器系が、細い悲鳴を上げる。

一方で、甲高い声を上げたイルル。何かに気付いたように、俺の腕の中で暴れ始める。何事かと目をやれば、彼女はセルレギオスの方を指差していた。小さなネコの手が、虚空に掲げられる――

「……何だ、あれ」

それは、円だった。

黒い渦を描くような、不気味な円。瘴気が地面に溶け込むような、悍ましい絵。

セルレギオスから溢れていたあの靄と同じようなものが、大気に滞留している。黒く

光る粒子とも見えるそれらが、光を浴びてか薄く、青く輝いた。

「瘴気が留まっている……のか？」

「う、嘘……にや、何で……？」

その悍ましくも幻想的な見た目に舌を巻いていると、腕の中のイルルは怯えたような声を漏らした。どうして、と繰り返しながらその手足を震えさせている。まるでいつかの悪夢に魘されていた時のような、弱々しい姿だった。

「イルル……？」

「あれ、あれは……あのモンスターのにや！ 顔の無いアイツが、撒き散らしてたのにや！ い、一体どうしてセルレギオスが……!？」

「あん？ 何言ってるんだ……？」

イルルが何を言っているか分からない。

諤々と震えては、要領の得ない言葉を漏らす彼女。あのセルレギオスについて何か思い当たる節があるようだが、動揺しているせいかわそれを聞き出すことは難しそうだった。

とはいえ、セルレギオスだつて待つてくれない。先程の同種のようにお前も殺してやるぞ、なんて言わんばかりに低く吠えた。かと思えば、その全身を奮い立たせて鱗を放つ。大気を切り裂くその猛烈な勢いに、音が悲鳴を上げた。

腕の中のイルルは、半ば戦闘不能状態だ。今離しても、まともに動けないだろう。降ろすことは出来ない。

そう判断するや否や、彼女を右腕だけで抱え直しては、腰にある剣を抜刀した。

橙色に染まる爆弾もとい片手剣、テオⅡエンブレム。それを振り回しては、飛んでくる鱗へと叩き付けた。

「どっ……っ……せいッ！」

飛んでくるのが火球だったり水流だったりすれば、俺は回避に専念する他なかったと思う。

弾いたのは、鱗というただの固形物だ。直接的な物理攻撃なら、こちらも同じこと。完全に破壊することは出来なくとも、軌道を逸らすことくらいは出来る。

そうして出来た隙間を縫うように、俺は駆け出した。がら空きになった脚の下に滑り込み、左手の剣を振り上げる。同時に噴出する、今の衝撃で湛えた粉塵。視界が、紅蓮に染まった。

「ガアアアアッ！」

鬱陶しいいでも言わんばかりに声を荒げた千刃竜。そうかと思えば、その槍のような尾を振り回し始める。腹の下の害虫を追い払おうと、けたたましい声を上げた。

だが、体格的にそれは奴の周囲を薙ぐことしか出来ないようだ。腹の下で剣を振るう

俺になど、掠りもしなかった。そのあからさまな隙を狙って、俺は奴の脚を打ち続ける。いつもより若干鈍い感触が、左腕の中で反響した。

「うおっと……」

だが、もちろん奴も馬鹿ではない。尾が当たらなければ、次の手段を講じるはずだ。その手段が、飛翔。大きく後ろに飛んだ奴は、俺から距離をとった。同時に凄まじい風を撒き起こし、俺の体を拘束する。

並のセルレギオスより一回り二回りと大きなその体。ここまでの風圧を引き起こせるのも頷ける。

「ふにやつ、にゃあ……っ」

腕の中のイルルが、驚きの声を上げた。それに反応するように、両脚を振り上げるセルレギオス。尻尾を垂直に立て、まるで軸のようにピンと張って――

「……まずいッ！」

何時かの船の上で見た、あの乱回転。降り注ぐ刀剣を思わせる、強靱無比の強襲攻撃だ。あのラギアクルスの尾も切り落とす、千刃竜最大の攻撃法。

気付いたら、後ろに飛んでいた。いつものバックステップのように、速く、軽く。

瞬時に掠める、鎌鼬のような烈風。凄まじいまでの風刃が、俺の鼻先を薄く薙いだ。

後一瞬でも、半歩でも。遅れていたらどうなっていたことか。想像するだけで冷や汗

が垂れる。

そう感じては、軽く息を吐いたその時だ。

「ピイイイイツ！」

着地の反動で体軸がずれる俺の上で、セルレギオスは吠えた。見上げれば、奴の体勢は変わっていない。一步ずらして避けた俺を再び穿とうと、奴もまた一步踏み出しては両脚を上げていた。

まずい。第二波がくる——

「イルル、すまん！」

「みつ、にやあつ！」

第一に優先したのは、イルル。右手で丸まる彼女を投げ、小さな体を射線からずらす。その突然の衝撃に、彼女は驚きの声も混ぜたかのような悲鳴を上げた。

そうして空いた右腕で、重厚な盾を前に出す。獅子の装飾がなされた緋色の盾を、セルレギオスに向けて突き出した。

「だ、旦那しゃんっ！」

危ういながらも着地をしたイルルが、悲痛な声を上げる。それを掻き消さんが如く、セルレギオスが鋭く風を鳴らした。

同時に伝わってきた、凄まじいまでの衝撃。幾重にもなった刀剣が一斉に盾に打ち付



けられるような、とても一人の人間では抑えきれない衝撃が走る。大地を擦っていた両脚が、とうとう浮かび上がった。

「うあッ……」

裂傷に塗れた盾からは煙が噴き出し、振り被った剣鱗からは黒い瘴気が溢れ出し。

黒と白の靄が視界を覆い、そうかと思えばその視界は鋭い流動線を描く。勢いよく吹き飛ばされた俺は、樹海の大木に打ち付けられて急停止した。

背中から腹の中の臓器を全て押し上げられ、辛うじて喉奥で抑えている——そんな感覚だろうか。まるで掻き回されたかのような、心地の悪い痛みで俺の腹は隙間を埋められていた。

「旦那さん……いし、しっっかりしてにや！」

ようやく正気を取り戻したのか、はたまた俺の惨状を見て正気に返ったのか、イルルは慌てて回復笛を取り出す。そうして、高らかに息を吹き込んだ。

その音を聴いて、笛から溢れる緑色の粉塵を吸って。俺の痛みは少しだけ顔を引っ込んで、さながら麻酔のように、心に平静さを呼び戻してくれた。

傷は響くものの、瘴瘴のそれと比べれば大したことはない。体は動く、義肢も含めて五体満足だ。淡い甘みと鈍い苦味を口に残す回復薬グレートを飲み干しながら、俺は小さく息を吐いた。

あのセルレギオスは、笛を吹いたネコに興味が移ったのか、今度はイルルを相手にしていた。イルルもイルルでようやく戦意に火が付いたのか、ジンオウガの素材を使ったブーメランを振り回している。剣とブーメランをそれぞれ持つては、まるで双剣のように飛んで――

師匠のスタイルを彷彿とさせる戦い方だ。ネコ式二刀流、彼はそう呼んでいた。

「イルル……今行くッ」

そう意気込んで、駆け出した瞬間だった。

突然、俺の体がガクンと揺れる。そうかと思えば、全身から鋭い痛みが走った。

目に見える視界は薄赤く染まり出し、目の奥がジンジンと熱くなる。

耳から聞こえる音は、まるで大銅鑼の如く轟音に感じられ、鼓膜を直接ノックされるような、そんな鋭い痛みに襲われた。

鼻から感じられる香りは鋭く、キツく、セルレギオスの異臭がはつきりと感じられるようになる。

防具に包まれた全身も痛み出した。防具が肌に触れるだけで感じられる痛み。体を動かす度に、痺れるような痛みが走る。

「……なっ……一体、どうなって……ッ！」

その突然の痛みに困惑しながら、手を突いた。右手が地面に触れ、俺の体重が押し掛

かり、余計に激痛が走る。

赤くなつていく視界でその右手を見れば、俺の右手は大きく変容していた。手の甲の血管が腫れ上がり、脈打つように蠢いている。グローブ越しに見える姿も、異常だ。

慌てて膝をついて、痛む左手で右のグローブを引き抜いた。

「……………」

血管が、黒い。紫とも、赤ともとれるような血管の色に、まるで粒子のような細かな黒が紛れ込んでいる。淡く青いはずの血管が、血走るように黒く膨れ上がっていた。その狂気的な光景に、思わず引き攣ってしまう。

ふと顔を見上げれば、俺の体は黒い粒子で覆われていた。さながらセルレギオスを覆っていたアレのように。狂竜ウイルスに感染したモンスターのように。

ということとは、つまり――

「旦那さん……………っ、旦那さん！」

何度打つても弾かれては霧散するブーメランをあとに、イルルは泣きながら俺の方に駆け寄ってきた。続けざまに放つダメ押しも、全て奴の甲殻に弾き飛ばされては消える。

散らばるブーメランの破片と、大気に溶ける電撃。それらを見ては、セルレギオスは小さな声を上げた。イルルに対して脅威を全く抱いていない顔で、再びゆつくり、こち

らの方に目を向ける。

「ちっ、ちくしよお……ッ」

どンドン前が暗くなる。瞼が痛いくらい重くなる。

駆け寄るイルルと、ゆっくり歩くセルレギオス。その両者の動きが驚くほど鮮明に映りながらも、俺の意識は痛みに呑み込まれていった。



「お前は戦う時、相手のどこを見てる？」

「へ？ 何だよ、藪から棒に……」

少年のような細かい腕で、ソルジャーダガーを握る俺。

その目の前で、師匠はふんと鼻を鳴らした。薄黄色に斑点模様の毛並みを揺らしては、さあどうなんだと答えを急かしてくる。

「えつと、全身……？」

「そうじゃなくて、その中の特にどの部分って話だ」

「えー……？ そんなの、よく分かんないけど」

声変わりをしているか、していないか。そんな曖昧な声で飛んだ返事に、師匠は困っ

たように首を振った。この聞き方じゃ良くないか、という言葉を添えて。

「じゃ、質問を変えるぞ。お前はパンチする時、どこに力を入れている?」

「え、パンチ? ……腕?」

「……腕、だけか?」

「……ん? うん」

特に考えもしないその言葉に、師匠はまたもや溜息をつく。困ったように首を傾げるが、彼の質問に困っているのは俺も同じだ。俺も、彼のようにそつと首を傾げた。

この聞き方でも埒が明かない。そう判断したらしい彼は、唐突にシャドウのポーズを軽く作り始める。

「よし、じゃあお前、俺に殴りかかってきな。そうすりや俺の言いたいことが分かる」

「え、いいの? アンタには少なからず鬱憤募らせてるから、本気で殴っちゃうよ?」

「調子に乗んなよクソガキ、年季の差ツつーもんを教えてやる」

俺の背丈より少し低い程度のそのアイルーに、俺は小さな握り拳を固めた。そうして、彼のその鼻っ柱に目がけて撃ち放つ。

渾身の打撃は、そのまま彼を打ち砕いて――

「つて、へ? うわっ!?!」

「……そもそも全然腰が入ってねえな」

何て思っていたら、突然後ろから師匠の声が鳴り響く。振り被った拳は師匠に届くどころか、何も無い空間を情けなく穿っていた。

彼は彼で、さも俺の拳を見切ったように軽く躲し、俺の背後に回り込んでいる。子どもをあしらう大人のような、余裕を持った表情で。

「……………、こんのツ」

「ふん、まだまだへっぴり腰だな。下手糞が」

何度撃とうが、彼には当たらない。まるで俺の拳がどこを狙っているか、どのような軌道を描くか。その全てが分かっているようだった。

全く当たらないことにイラついて、大きく踏み込んだ。そうして、今度こそその毛並みをむしってやろうと、手を――

「へっぴつ!」

「ま、そこまでだ」

その手を肉球で挟まれ、さながら背負い投げのような形で振り上げられた。重力が、逆転する。

反対になった景色の中で、同じように反対に映った師匠が満足そうに口を開いた。その表情は、どこか艶やかだ。

「何でお前の拳は当たらなかったか、分かるか?」

「……分かんね。ズルしてたんじゃないの?」

「完全に見切られてるって、感じなかったか?」

その言葉に、俺は改めて見切られていたことを再確認する。悔しさが溢れ、言葉を呑み込んだ。師匠の顔をまともに見れない。

それでも、彼は言葉を繋げ続けた。恐らく、一番伝えたいのであろうその言葉を。

「凶星って顔してんな、その通りだよ。俺はお前の動きを見切っていた。見え見えなんだよ、腕だけじゃない。肩も、腰も、足取りも。その筋肉の動きを見ればお前がどう動こうなんて手に取るように分かる」

「……筋肉?」

「そうだ。生き物ってのはな、筋肉の塊だ。動く際にはその筋肉を使わなきゃなんねえ。そしてその筋肉には一定の規則性がある。それさえ分かれば、その延長線にある体もどう動くか、自ずと分かってくるもんだ」

そう言っつては、彼は一呼吸付いた。そうして、その小さな体を屈ませては、同じく小さな俺の目に顔を近づけてくる。背を地に付けては逆さまに仰向く俺の視界を、師匠の満足そうな顔が占めた。

「……いいか? 敵の動きを見る時は、その筋肉の動きに着目する癖をつけな。よく観察すれば、今日の俺のような見切りも不可能な話じゃないぜ——」

◆ ◆ ◆  
イルルが、叫んでいる。俺の名前を呼びながら、必死に叫んでいる。

剣が弾かれる音が聞こえた。挑発するような千刃竜の声と共に、鱗が弾ける音が響く。イルルが地を駆ける音も、千刃竜が地を薙ぐ音も、俺の耳にはしつかり届いていた。

「ぐッ……」

依然として、痛みはある。半ば意識を失ったように頭がぼうつと響くが、それよりも異常なまでに過敏な感覚に俺は意識を失い切れなかった。

見上げると、相変わらず紅い視界が広がっている。その中で踊り狂う、赤黒いセルレギオス。イルルに向けて、その松笠のような体を震わせていた。

少し引いた体からは、その節々の筋肉の共鳴が見える。右肩上部、左羽の先、右脚大腿部の、その端。どこが動いたか、はつきりと分かった。

「イルル……ッ」

どこからどうくるか判断がつかないらしい彼女は、もはや恐怖にも似た警戒でその意識を満たしている。海のように碧い瞳には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「……イルル、右へ軽く跳べ！」



「にや、え？ 旦那さんっ!？」

「いいから、早く!」

突然飛んだ俺の声に驚いたのか、イルルは驚愕の表情で振り返る。そんな彼女を急かすように、もう一言。

それでようやく分かったのか、イルルは慌てて右へ跳んだ。それと同時に、千刃竜から刃鱗が飛ぶ。宙を斬り裂くその一閃が、先程イルルがいた場所を正確に射抜いた。

「ふにやつ! あ、危なかったにや……!」

「う……おえっ」

「はにやつ、旦那さん、大丈夫かにや!? 旦那さん!」

慌ててこちらに駆け寄ってくるイルルも映し切れず、俺の瞳は痛みで暗く閉ざされる。まるであり余る情報量に処理が追いつかなくなったかのような、そんな気分だ。

——目は異常によく見える。

意識を失いかけても、音ははっきり聞こえる。

痛みが鋭く、俺の体を駆け巡る。

典型的な、五感異常。これが、狂竜ウイルスの症状か。

「……イルル、この前ドンドルマの竜人から貰った石、まだあるか?」

「にやつ? な、何だったかにや……」

「ほら、俺がポーチに飯入れ過ぎて入らなかったから、イルルに持ってもらった奴だよ」  
「……にや、ああ、これかにや！」

軽く身を引いては跳躍、そうして空中で錐揉みするセルレギオス。あの羽ばたき方、脚の引き方、頭の位置——恐らく、両脚を突き出して滑空してくる。

慌てて黒紫色の石をポーチから取り出すそのイルルごと抱えながら、俺は再び背後に跳躍した。ただのバックステップよりも数段伸びたその距離に、セルレギオスは虚空を掴む。

そうしてがら空きになったその脚に向けて、俺は再び駆け出した。盾から引き抜いた直剣と、左手の重剣にその『抗竜石・剛撃』を塗りたくりながら。

「お返しだッ！」

研ぎ澄ました気を剣に移すように、両の剣を交差。そうして、危うげに着地する奴のその細い脚目掛けて錐揉み回転で迫る。乱回転する視界の中で、奴の紫色に染まった血飛沫が飛んだ。

一方投げ捨てた抗竜石を拾ったイルルは、その勢いのまま再びセルレギオスに飛びかかる。剣の鱗と火花を散らしながら。

「にや、や、やつぱりダメにや！ 弾かれるにや、ふにや！」

「……やつぱな。コイツ、『極限状態』だ！」

「きよ、極限!? う、噂の極限状態にや!? こ、これが……」

振り被られる翼腕を滑るようなステップで躲し、か細い脚を執拗に斬り刻む。そこへ落とされる尾は、穿つような回転斬りで弾き躲すもの——こちらの剣まで、勢いよく弾き返された。両者の剣が、鋭い悲鳴を上げる。

これが極限状態。狂竜ウイルスによって変調した体が、異常なまでの肉質硬化を引き起こす。そしてそれは新たな感染源となり、生態系を脅かすという第一級危険生物だ。

「イルル、攻撃は俺に任せろ! お前はブーメランや笛での援護に徹してくれ! 絶対にこの黒い空気は吸うなよ!」

「にや! あつ、でも旦那さん、旦那さん体が……っ!」

「……心配するな、何だか調子が良くなってきたんだ……!」

血走る視界の中で、セルレギオスが吠える。それをもバネに回転斬りを仕掛けながら、俺は口角が釣り上がっていくのを感じた。タンジア時代にただひたすら獲物を滅多刺しにしていた頃のような、そんな高揚感だ。

奴が隙を晒せば、そのか細い脚を斬り刻む。

右脚のつま先が軽く上がる仕草が目に入れば、素早く脚から離れる。鋭い爪が、振上げられるから——その前兆が、それだ。

その隙を狙うように脚を突き続けると、奴は堪らず転倒。その時は、ここぞとばかり

に乱舞を叩き込んだ。

起き上がった奴は、再びその鱗を展開する。カラカラとその甲殻が鳴き、奴の臀部が上があれば、それは尾が振られる証拠。その股下を潜るように、回転斬りで前進する。

体が宙に浮き上がり、その槍のような尾を振り下ろせば、来るのはあの急襲攻撃だ。今度は避けずに、俺は前に出た。

「はあああッ!」

「クキヤアアアアッ!」

打ち付けた両の剣を払い、再び視界を振るう。掘削機のような勢いで、強襲するその刃鱗に飛び込んだ。

切り込む角度は、奴の鱗とほぼ平行線になるように。そう意識して、両の剣で風を薙ぐ。まるで砥石のように、剣が触れるや否や、奴の鱗は景気の良い音を立てた。

それと同時に、両の剣が光る。この状況で、両剣の斬れ味がより研ぎ澄まされたのだ。研いで斬り払う。研ぎ払いとでも名付けようか。

「ピイイイッ!?!」

それが引き金となったのか、奴の体はバランスを崩す。剣閃と爆熱で、奴の鱗は激しく弾け飛び、その奥の肉が大量の血飛沫を上げた。赤い軌跡を描きながら、その巨体が地に穴を開ける。

同時に散らばる、黒い靄。瘴気が霧散したかのように、大量の粒子が風に乗って吹き飛んだ。奴の体から、そして俺の体からも。嫌な気配は、消えていた。

「おっ……鎮静化か！ イルル、作戦変更だ！ 戦え！」

「にや、にやにや、にやーっ！」

いつの間にか消えていた五感異常に気付きながら、ようやく落ち着いた感覚を噛み締めながら。

突然の事態に慌てるイルルに声を掛ける。セルレギオスの極限状態が、今鎮静化された。一時的とはいえ、奴の体からウイルスの気配が消えたのだ。集中砲火するには願ってもないチャンスだった。

同時に掲げられる、ネコの手。イルルが巨大ブーメランの術と貫通ブーメランの術を用いた証拠。その凄まじいまでの斬撃に、千刃竜の肉は容赦なく削ぎ落とされていく。

舞い上がる血飛沫。飛び交う肉片。

その様相は、通常個体のそれだ。感染したあの毒々しさが感じられない、健康な肉そのもの——

——鎮静化された肉は、一体どのような味になっているのだろうか？

そう感じた俺は、自分でも驚くほど静かに、滑らかに。宙を舞うその肉を、ポーチから取り出したビンに落としていた。



「——まッ、不味いッ！」

「にやつ?! 泣くほどまでかにやつ?!」

興味本位で口にした極限状態肉。凄まじいまでの不味さに、俺は思わず涙を流した。

口の中でジリジリするような、酷いえぐみ。舌が焼けるように、鈍い痛みが這いずり回る。香る風味も毒々しく、生の毒テングダケの数倍は不快だ。ただの狂竜化した肉よりも、断然味が悪かった。

「こりやあダメだな、食えたもんじゃない」

「そりやそうにや……。前から分かってたことにや、しょうがないにや」

横たわる巨体。再び極限化しながらも、とうとう耐え切れなくなったかのように倒れ伏したセルレギオス。流石は極限状態だ。討伐する前は上がっていた陽も、いつの間にか落ちていた。まあ、味の方はとても褒められたものじゃないが。

とは言え、ここまでは予想通りである。肉の味も、イルルの反応も。

それを確認しながら、俺はポーチから小振りのピンを取り出した。先程大気に触れた、あのピンを。

「ところがどっこい、極限化した肉が食えないのなら、鎮静化した肉はどうなんだろうな？」

「にや……にやつ?! い、いつの間にそんなの獲つてたのにや?!」

「イルルがブーメラン振り回してる時に、ちよこつと」

「みゃー! もう、この人ほんと信じられないにや!」

俺への文句や不満を露わにするイルルを前に、ピンから出した肉を串に刺し、軽く焚火にくべた。元々巻き上がっただけの小振りな肉片に過ぎない。焼けるのにもさして時間は掛からないだろう。

少し熱しただけで、純粋な肉の香りが溢れ出した。そこらの肉とは全く違う、質と濃度。心を揺さぶるその香りが、ダイレクトに俺の鼻にぶつかってくる。以前適当に焼いた千刃竜の肉とは似ても似つかない、より深い香りだった。

「おいおい嘘だろ……香りからして段違いじゃないか。これって、もしかして——」  
「うっ……おかしいにや、何でこんな良い匂いなの……う?」

「抗竜石って、対狂竜ウイルス効果じゃん? 一時的とはいえ、モンスターに克服を促すんならさ、その分細胞の活力を上げてるんじゃないか?」

「にや、どういうことにや?」

「つまりさ、ウイルスによって遮断されていた細胞の栄養補給が再開され、その勢いに

よって肉の質も一時的に上がるとかそんな感じじゃね？」

「にや……そういうものなの？」

「知らん、思ったただけだ。そういうことを考えるのは書士隊の仕事だし」

適当に話を切り上げながら、くべていた肉を引き上げた。

舞い上がる香り。溢れる脂。円熟しているのであろう肉の上質な色。何を取つても、以前食べた千刃竜とは異なっている。絶対に、こちらの方が美味しい。そう思わせるほど、その様相は圧倒的だった。

「いただきます」

一言添えて、そつと一口。

たったそれだけで、全身の毛穴が開いたような、そんな感覚に襲われた。

美味しい。ただただ美味しい。舌の上で踊るその味わいが、どうしようもなく愛おしい。

様相通り、その味わいは遥か上位に君臨していた。

千刃竜の肉は、比較的淡泊だ。同時に、焼くだけでは少し物足りない味でもある。そのため、軽く蒸して酢醤油にかける、フライにしてパンに挿むなど、食通の間には様々な賞味法が編み出されている食材でもあるのだ。

だがこれは、この肉は、焼くだけでも十分だった。確かに淡泊、されど淡泊。控えめながらも芯の強い味わいが、これまた強く主張している。溢れ出る脂も甘く、深い。口



の中でほどけていく柔らかさの中に、その溢れ出る旨みが凝縮されている。噛む度にほろほろと柔らかくなっていくその食感が、これまた味の質に深みを与えてくれた。

本当に細胞が活性化しているのかどうか、それは俺にも分からない。だが、極限状態のモンスターを鎮静化した場合、その肉質が大きく変容するのは紛れもない事実のようだ。

「……イルル。今度極限化モンスターの目撃情報があつたら、また食いに来ような」「しよつ、食堂感覚で言わないでにや……」

く 本日のレシぴく

『極限鎮静セルレギオス』

・ 千刃竜の大腿肉 ……45g

・ 抗竜石（種類問わず） ……お好みで。

※必須条件：鎮静化

## 五里霧中

「……あれ、ヒリエツタか？」

大老殿。その食事席。

厳かな布で覆われたその丸テーブルは、これまた厳かな食事の数々で埋められていた。

巨大な鶏肉に、白金魚のお頭。桶のような皿に入った小籠包に、様々な副菜。完熟シナトマトの輝きが美しい、これまた見事な野菜の山。

ここは、G級ハンター専用の食事処。それも、これからG級クエストへ向かうハンターが英気を養うための場、である。ドンドルマの財力を担う人物が指揮するここは、市街やバルバレとは比較にならないほどの高価かつ鮮度の良い食材が並ぶ。俺の目の前で輝く食材の数々も、もちろんそうだ。

——それと同時に、その人物が居座る空間でもある。このドンドルマを治める巨大な竜人族、大長老、その人が。

「ムオツホン！ では、主に任せることとする！ 報告待っておろぞ」

「分かりました、行つて参ります」

不毛な頭を振り上げて、豊満な髭を擦る大長老。そんな彼に向けて小さくお辞儀をする、ジンオウウシリーズの少女。

橙交じりの濃い金髪に、翡翠色の鋭い瞳。背に備えた大剣を鳴らしながら、彼女は大長老に背を向けた。あれは、もしかしてヒリエッタじゃないか？

「……あ、シガレット」

「……………よう」

トロトロとした果汁と、富みに富んだ味わい。爽やかな一口を思わせれば、薄く広がるような甘みを口いっぱいに広げてくる。それらを包み込む鮮やかな風味は、完熟という名を欲しいままにしていた。完熟シナトマト、侮れない。

それをごくりと呑み込みながら、俺に気付いては少し頬を綻ばせるヒリエッタに向けて軽く右手を上げる。挨拶の代わりに、そっと。

「相変わらずご飯ご飯なのね。あ、これ美味しい」

「おい、俺が注文した照り焼き丸鳥だぞ。勝手に食うなよ」

俺の横の椅子に腰かけては、勝手に俺の鶏肉串を食べ始めるヒリエッタ。五本セットだからいいものの、これが最後の一本だったら憤怒のあまり抜刀していたかもしれない。

「これが最後の一本だったら剣を抜くぞって、顔してるわ」  
「……何でわかんだよ」

お見通しだと言わんばかりに目を伏せる彼女を前に、俺はバツが悪く感じる。それを誤魔化すように、そつとお茶を飲んだ。

もちろん、大長老の目の前でそんなことはするつもりはない。ギルドナイトの世話になるのもうごりごりなのだ。

「ここにいてるってことは……無事G級ハンターになれたみたいだな」

「まあね。まだまだ成り立てだし大したクエストは回ってこないけど」

「どうせすぐ飛竜や獣竜の相手させられるさ、今のうちにだらだらしとけ」

「そういえば大臣さんが、だらだらし過ぎで働いてくれないG級ハンターさんがいるとかどうとか言ってたわね」

「うっ……」

まるで悪戯でもするメラルーのように、少し細めた目で薄笑いするヒリエツタ。その言葉に、俺は思わず齧っていた魚の切り身を喉に詰まらせた。

控えめながらもじつくり顔を出すその旨み。どうにもこうにも、喉に詰まっても中々美味い。喉を伝って、じつくり口内に旨みを塗りたくっていく——

「ぐほっ！ う、うるせえな。いいだろ別に」

「あら？ 別に私は、それがシガレットとは言つてないけど」

「む……」

してやつたりと言わんばかりに笑うヒリエッタ。と、思えば突然ずいっと、俺に顔を近づけてくる。

何だか、その光景にデジャヴを感じた。いつの日か、バルバレの集会所で魚介を漁っていた時に、こんな光景を見たことがあるような気がする——

「シガレット、暇そうね」

「見れば分かるだろ。俺は飯食ってるんだ、忙しい」

「何かクエストでも行くの？ ボードにはシガレット名義のクエストは見なかったけど」

「……別に、ただ飯食いに来てもいいだろ」

「わざわざこんな重苦しいところでよく食べるわね、クエストでもないのに」

「だって、ここの美味いし」

「まあ、それは分かるけど。……で、つまり暇なのね？」

「……何かこの流れ知ってるような気がする」

無理矢理話を進めるヒリエッタ。そんな彼女に圧されながら、ぼやくようにそう言え  
ば、彼女は満足そうに頷いた。

そうして、彼女のクエスト受注書に勝手に俺の名前を加え始める。さも当たり前とでも言うように、軽く。

「おーい、だから俺は——」

「暇、だよ。分かつてる分かつてる。さあ、さつさと食べて。クエスト行くよ」

意気揚々とそう言った彼女は、お世辞にも綺麗とは言えない字で俺の名前を書き終えて、今度は俺の小籠包に手を付けた。レンジの上に乗せたそれを軽く引き裂いて、そこから内包されたスープをねつとりとレンジの中に滴らせて——

肉汁と脂で満たされたそれに、具と膜は美しく光る。何とも幻想的なその光景を、彼女は一口で闇に閉ざした。

「ん、美味しい」

「……てめえ、後で覚えとけよ」

「はいはい。その熱意はクエストにしっかりぶつけて。原生林の異変調査に、ね」

「——あ？ また調査……？」



調査。

何故か、ヒリエツタとはその言葉について縁がある。

そもその因縁は、二年以上前だ。俺がまたバルバレのハンターで、ユクモ村に旅行に行く前の話。未知の樹海の異変報告が相次ぎ、その捜査に駆り出されたのだった。

奇しくもその時、神出鬼没の希少モンスター、キリン亜種と遭遇することとなったのだが、これはまあ過去の話である。問題なのは、今。またもや、彼女の手によつて俺は無理矢理調査に巻き込まれていた。場所は違えど、同じような樹林地帯に――

「大体よ、一体何が異変なんだ？ 何か霧が濃いくらいしか見当たらないんだが」

「そうね。あと生き物の気配も少ないわ」

「……確かに。あの濃厚な脂の香りもしない」

「へ？ あ、あぶら？」

「おう、ズワロポスのな」

つい先日イズモと一緒に訪れたエリア3。かの海竜種、タマミツネが休んでいたここは、確かに深い霧で溢れていた。

いつもはここでのんびりしているズワロポスも、一頭すら見当たらない。それどころか、他の小型モンスターの気配も薄い。確かにこれは、異変だった。

「……そういえば、前来た時も若干霞がかっていたような」

「最近こうなってきたみたいなの。今回の調査は、その原因調べ」

「目星はついてたりするの？」

「ううん、全。上部の方がもつと凄くて、観測号も観測し辛いらしいの。何か生態系を乱すモンスターがいるかも、程度の認識みたいだわ」

「……またゲネル・セルタスだったりしてな」

「だったら、また唐揚げ作ってね」

カラカラと、からかうようにそう笑ったら、彼女は彼女でそう切り返してくる。悪戯っぽく目を伏せるその仕草は、何とも言えない愛嬌があった。

何ていう冗談はともかく、原生林にここまで影響をもたらした原因が、ただのゲネル・セルタスだとは考えにくい。確かにあれもまた屈強なモンスターだが、小型モンスターがみな逃げ出すほど危険認識されている訳でもない。狂竜化していようが、それは変わらないのだ。

「……とりあえず、このエリアは何もないな。高台の方が霧が濃いつていうし、ちよつと登ってみるか」

「そうね、どつちにする？ 中央のエリア5か、飛竜の巣になつてるエリア8か」

「低い方から行こうや」

「めんどいのね、分かるわ」

適当な掛け合いをしつつ、ツタに手を掛ける。エリアの西、エリア5へと続くそのツ



夕に。

その一本一本が複雑に絡み合い、まるで梯子のように頑丈な道へとなったそれは、ハンターが利用するには非常に都合が良いものだった。ハンターの重い鎧が搦んでも、まるで物ともしない強靱さ。崖を登るにはこれ以上ないほど頼りになる存在なのだ。

「上には何がいると思う?」

「さあ? それより霧が濃くなってきたわ……。ほんと、何なのかしらこれ」

「誰かがケムリ玉落としたとか、そんなところじゃね?」

根拠のない言葉を並べながら、崖の頂点に手を掛ける。あの水没したエリアからは程遠い、高い高い場所。そんなエリアへと、何とか到達したのである。

下を見れば、あの舞い散る幾つもの花がまるで米粒のようだった。霧で霞んで見えるから、余計に認識し辛い。

「……シガレット、何かの音聞こえない?」

「ん、音?」

「うん、まるでいびきみたいな——」

神妙な面持ちで、ヒリエツタはそう言った。何かの気配を感じたように、少し冷や汗を垂らしつつもそつと右手を大剣に添える。

そんな彼女に做つて俺も耳を澄ませてみれば、確かに何かの音が聞こえた。鼻腔の奥

で渦巻くような、喉の奥で荒ぶような、そんな音。彼女の表現が最も適切かもしれない。そう、その音はいびきそのものだった。

「……………つちだ」

「うん、そこから——」

音のする方へ、そつと歩み寄る。

防具が派手な音を立てないよう、小さく、ゆっくり、落ち着いて。足元の水たまりや木の枝などに細心の注意を払いながら、少しずつ音との距離を詰めた。霧で余計に見辛くなっているために、余計に負担が掛かる。

「シガレット……………目の前、だよね」

「ああ。……………この臭い……………」

深まる霧のすぐその向こう。音の正体は、そこにあつた。

同時に伝わる、刺激臭。まるで排泄物のような、鼻にむわつとくる臭い。この臭いに、俺は嗅ぎ覚えがある。そう、原生林に住まうあの牙獣種のそれだ。

「——ゴリ、夢中……………」

ババコング。目の前で眠りこける奴の名は、それだった。

夢中で夢の中。その言葉を欲しいままにしている奴は、目の前にハンターが来ているというのに、全く気にせず眠り込んでいる。度々手を伸ばしては自身の腹をポリポリと

掻く姿。それはまさしく、その辺で昼寝しているおっさんそのものだった。

「下らないこと言つてないで、よく見てよ。これが異変の原因……かしら？」

「……ただのババコンガだろ？　こんなのが？」

「どつちにしろ、この状況下で悠長に寝てるんだもの。関係ないモンスターではなさそうね」

「ま、そうだな。追つ払うか？」

「そうね。私がまず一撃入れるわ。そのあとは連携しながら戦うつて感じで。あ、爆弾は禁止ね。やりにくいから」

「へいへい……」

改めて大剣の柄を握り直す彼女に適当に返事をしながら、俺は数歩下がる。ポーチに忍ばせた爆薬も、今回は活躍の余地はなさそうだ。

一方のヒリエツタは、静かに目を伏せる。軽く息を吐いて、精神統一。

スツと手を伸ばしたその剣を、静かに引き抜く。そのまま、背の裏で支えるように構えては、両腕に力を込め始めた。大地を締めるように脚を広げ、腰を少し落とし、肩を軽く引いて――

「はあっ！」

そうして振り下ろされる、煌剣リオレウス。溢れる炎も相まって、その一撃は豪快で

あると同時に、華やかだった。

突然の衝撃に、ババコンガは目を覚ます。ようやく外敵の襲来に気付いたのか、勢いよく転がってはその重そうな体を起こした。太く丸い下半身で、鋭い爪の生えた両腕で、その巨体を支えて、立ち上がる。見上げるような巨体が、聳え立った。

「……つて、え？」

「で、でつか……う、嘘だろ？」

その大きさは、もはや異常だった。普通の個体の一回り二回りは大きな個体。俗に言う金冠サイズといったところだろうか。その巨体故か、怒りに身を任せて吠えるその姿は、非常に圧迫感がある。

「や、やっぱコイツが原因なのかしらっ!？」

「凶暴なのは確かだな。悠長に寝てたのは、それだけ自分の力が強いという表れか……?」

「……今仕留めた方が良さそうよね。私は右に回るから、シガレットは左に!」

「了解!」

敵めしい大剣を納刀し、小走りで走り出すヒリエツタ。

そんな彼女を見ては、ババコンガは鼻息荒げてその背中を追った。自らを斬り付けた敵、そう認識しているようだ。

そうして、必然的に背を向けられた俺は、そんな奴の黒い尻目掛けて愛用のテオⅡエンプレムを引き抜いた。粉塵溢れるそれが、奴の尻を焼き付ける。

籠もった声が響いたものの、奴はそれをあまり気に留めていないようだ。所詮は片手剣の軽い斬撃。先程の大剣の一撃には遠く及ばない。

「……んにやろ。だったら、コイツでどうだ」

火力が足りないのならば、火力を盛ればいい。そう判断して、軽く後ろに下がった。

そのままポーチから取り出したのは、赤色に光る小さな塊。砥石大の角砂糖のようなそれは、剣に擦れるや否や、小さな呻き声を上げる。

まるで角砂糖が崩れるように。

剣で研ぐ度に崩れゆくそれは、その度にその赤い顆粒を剣へと移していった。刀身が赤く輝き、まるで火を吹くように揺らめいて――

会心の刃葉。それがこのテオⅡエンプレムへと乗ったのだ。

「たあつー!」

剣を振り抜く俺の反対側では、ヒリエツタの掛け声が響く。同時に届く、剣が地を打つ音。振り下ろされたそれが、ババコンガの体毛ごと地を穿っていた。

相変わらずの脳筋女だ。俺が打ってもビクともしない奴が、その一撃で大ききたじろいだ。打たれた箇所を庇うように両手を振り撒くその様に、ヒリエツタは小さく笑みを

溢す。

「しっ、はああああ………！」

劍の腹を振るように打ち付け、かと思えばその大劍を大きく振り上げた。彼女の背後に、さながら鞘に入れるかのように。

大劍の大技、強溜め斬り。いつもより大きく、より力を入れて引いたそれは、より高い破壊力を得る。引いた分増したその一撃が、奴の脳天を撃ち抜いた。

刃葉によつて、より鋭く敵を穿つ片手劍。それよりも圧倒的な力をもつ大劍が、鋭く光る。俺の数回分の傷口を、たった一撃で塗り替えるその余りある威力に、俺は思わず舌を巻いた。ババコンガも痛みの余り悶絶して――

「……つて、うげッ！ く、くっさあ………ッ！」

突然立ち上がったババコンガそうかと思えば、怒りに身を任せてその体を震わせる。同時に、肛門からは放屁が飛び出した。かく言う俺は、そんな奴の背後に張り付いていたために地獄を見ることになる。思わず涙が出るような、そんな臭さだ。

一体何を食べたらかうなるのか。そう感じざるを得ないほど黄色に染まったその色に、俺の目と鼻は壊された。

「あああ！ は、鼻がア！ つ、つーんとするし、目も痛い！ 焼けそうだ！」

「うるさい。ギヤーギヤー言つてないで、少し下がって！」

俺の悲鳴に、さもうざったそうな声が飛ぶ。擦る右目を薄く開くと、涙でぼやけた視界に剣を引くヒリエツタの姿が見えた。振り下ろした剣をそのまま、左手で強く握り締める、彼女の姿が。

薙ぎ払い。溜め斬りの勢いそのままに、彼女がその大剣を薙ぎ払おうとしている。

俺をも巻き込まんとする勢いで、鬼気迫る表情で。煌剣リオレウスが、大きな唸り声を上げた。

「捉えた——つて、えっ?」

原生林に鮮血を撒き散らす。そう感じるほどの威圧感を伴ったその刃。それが、何とも小気味良い音で弾かれた。

斬り裂くはずだった、その腹に。毬のように張った、その腹に。

勢いよく弾かれ、ヒリエツタは大きな隙を晒す。大剣の重さに振り回されるように、その体勢を勢いよく崩した。

「おお、すげえ腹……」

たんまりと空気を吸い込んで、気球のように膨らんだその腹。大剣まで弾くとは、その腹の厚みに恐れ入る。

一方、そうして隙を作ったババコンガはといえば、その細い尻尾を器用に動かした。それを肛門の方に伸ばし、かと思えば巧みに巻いて、そうして、剣を慌てて持ち上げる

彼女の方に振りつけて――

「つて、嘘?! え、や、やめつ、ひゃああつ!」

何とも情けない悲鳴と、半固体が打ち付けられる不快な音が、原生林の木々に響いた。



いつの間にか降り始めていた雨に、俺は解体作業に勤しむ手を止める。

ところ変わってエリアー。木々の浸食を受けない、この開けた空を見上げれば、原生林の空は暗雲に包まれていた。覆う霧をさらに塗り潰すように黒く、重く。

「うーん、こりや本降りしそうだなあ。早めに切り上げるか、ヒリエッタ?」

「うう……まだ臭いとれないよ……」

これで四個目になる消臭玉を弾けさせながら、哀しそうに目を伏せるヒリエッタ。すぐそこで果てたこの巨大ババコンガの投擲したアレを食らった彼女は、防具に鼻を近づけては苦しそうに顔を歪める。

どうやら相当ご立派なブツを受けてしまったようだ。消臭玉では力不足かもしれない。  
い。

「もう、ここうなったら水浴びするわ!」



「はあ？ 水浴び？」

「だってもう、不快な感触が残ってるんだもん。消臭玉じゃ無理そうだし、水浴びしか方法はない！」

「お、おう……？」

「幸い雨も降ってきたし、好都合かも。エリア3行ってくる！」

「待て、ヒリエッタ。防具脱ぐってんなら、そこは危険だ。やっぱ霧の原因はコイツじゃなかったし、生態系も依然として変わってない訳だし」

「じゃあ……ベースキャンプ？」

「……そうだな、そこなら水も豊富にあるしいんじゃね？」

消臭玉の鼻を突くような匂いと共に、ヒリエッタは納得したかのように頷いた。

振り続ける雨は、どんどん勢いを増していく。雨が荒び、風が唸る。妙な気配だった。何かの足音を感じるような、気味の悪い感覚だ。

「そうと決まれば、早くキャンプ行かなきゃ……」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。もう少しでいいものが……」

「……？ いいもの？ ババコンガでしょ、そんな希少でもないと思うんだけど……」

皆目見当がつかぬ、といった顔で眉を顰めるヒリエッタ。軽く首を傾げる彼女の傍ら、俺の右手のレギオスナイフはこれまでとは違う肉の感触を俺にもたらしした。

まるで何かを包んでいた膜を裂くような、そんな軽やかな感触。おそらく、俺が求めるモノに達したのであろうその感触。

「……獲れた。桃毛獣のテツポウだ！」

「う、うえ、な、何それ……。て、テツポウって……。？」

「テツポウってのはな、直腸のことだよ。動物みんながもってる器官、腸だ」

「ちよう……。腸って、お腹の……。？」

「そうそう。同時に、ヒリエツタにぶち当たったアレの産出地でもある」

「ちよっ」

「……つまるところ、ホルモン焼きだな。よし、今日の昼飯はコイツにしよう」

二人分ほど、目測で切り取っては軽く持ち上げた。

流石はババコンガ。よく食べるだけあって腸も随分と立派だ。太く、重く、肉がぎつしりと詰まっているのがよく伝わってくる。中の排泄物をよく洗い落とせば食べても問題ないだろう。

そんな極上の獲物に俺が思わず口角を上げていると、掠れるような声が耳に届いた。見れば、顔を伏せたヒリエツタが何か言っている。まるで呪詛のように、囁くように、ボソボソと。

「……………や」

「あん？ や…………？」

「…………や」

「や、が何だつて？」

一拍置いて、悲痛とも言えるほどの叫びが、原生林を貫いた。



「良い色に焼けてきたな。香りも良い感じだ」

絶対にベースキャンプには入ってくるな。私が顔を出すまでは入ってくるな。

鬼のような形相でそう言ったヒリエツタは、俺に釘を刺してはこのエリアを後にした。アレは相当不機嫌そうだ。そんなにババコンガのテッポウを食べるのが嫌なのか。

「…………きつと美味しいのに」

俺としてもテッポウの処理・調理のためにはそれなりの時間を必要としたために、彼女の言いつけも都合良かった。そのため、俺はこのエリアで準備を進め、今のように焼くに至ったのである。

網上の痕を残して焦げみを見せる肉。

良い焼き目だ。まず第一に思うのは、それだった。

焚火の上で炙られる金網、その上で踊る肉。分厚く、相応に脂が滴ったそれは、焼ける度に程よい味の濃さを思わせるような、濃厚な香りを撃ち出している。

さらに風味がよくなるよう、麗水で洗うことも欠かせない。臭いに関しては消臭玉——では強烈な消臭剤の香りがついてしまうので、今回はこれを使ってみた。

「万能湯けむり玉……便利なもんだぜ」

溢れ出る濃厚な脂の匂い。その中で混じる、仄かな温泉の香り。温泉卵でも埋もれていそうな、淡く柔らかい香りだった。それが肉の臭さや排泄物の臭さを消し、かつ風味も良く仕立ててくれている。

総じて、何とも美味しそうだった。ヒリエツタが来るまで我慢することは——どうやら難しそうだ。俺の脳に直接ぶつかってくるこの香り。俺を食べると、直情的に訴えかけてくる。

「やっぱ肉は焼きたてに限るぜ……。いただきます」

アツアツのそれを、そつと一口。

一口サイズに切り分けられたそれが、ジュウツと俺の舌に乗った。俺の舌まで焼けるのではというくらいアツアツの脂が、俺の舌に乗るや否や一気に拡散する。大気を塗り

潰すように広がる脂とその風味。

濃い。濃い味だ。強く、一途な味。肉の中でも特にクセの強いホルモンの、喉奥を掻き回すような不思議な風味。

されど、美味しい。そのまっすぐな味わいが、何とも愛おしい。情熱的とまで思えてくるその一途さと真摯さ。クセの強い部位でありながら、それでも肉らしさを失わないこの味わい。噛む度にどんどん溢れてくる。

噛む度に。その食感も、これまた独特だ。固く、粘り気のような弾力性ともいうべきか。噛めば噛むほど、その食感が顎に伝わってきた。固く重いが、その歯応えがまたいじらしい。噛む度に溢れる味わいも相まって、噛むのがとても楽しくなってくる。顎が止まらない。

「……うんうん。こりゃあ、随分当たりだな。金冠サイズのババコンガ、その味わいも金冠サイズってか」

程よく形を崩したそれを、軽く喉を引いては食道に落とす。一口サイズに切り分けた甲斐があつてか、飲み込む際に強く反発することもなかった。ホルモン特有のあの強情さを抑え、静かに滑り込んでくる。その燕下の感覚も、妙に心地が良い。

「あー……達人ビールが欲しくなってくるなあ」

濃い脂にクセの強い味わい。きつとビールにピツタシだ。ホルモン焼きを頬張って、

乾いた喉をビールで潤して。そうしてぶはあと詰まった思いを全て吐き出す。それはきつと、とてもとても幸せな感覚なのだろう。まあ、原生林という今の環境であつては、所詮無い物ねだりなのだが。

それにしてもこの味わい、とてもあのババコンガの肉とは思えなかつた。あの品のない野獣が、ここまでの味を作りだせるとは。やはり見かけで物を判断するのは間違つているのかもしれない。そう思う程、洗練された味である。

「……そうだ。折角こんなにも美味しいんだ。ヒリエツタに食わせてやらないと」

唐突に舞い降りた、その思い。衝動的な感覚が、俺を支配する。

一つ、一つ、また一つ。香ばしい肉の数々を、そつと箸で摘まんでいく。そうして紙皿の上に適当に乗せては、俺はベースキャンプに向けて駆け出した。肉は焼きたてに限る。その言葉通りの行動だったと自負している。

——すっかり忘れていたのだ。ヒリエツタの、あの忠告を。

ベースキャンプに入ったあたりで、俺はどうなったかあまり良く覚えていない。

ただ、気付いたら、エリア3で大文字を描いていた。頬に、赤い手形があった。

く本日のレシピく

『桃毛獣のテツポウ焼き』

- ・ 桃毛獣のテツポウ …… 220g
- ・ 塩胡椒 …… 適量
- ・ 万能湯けむり玉 …… 1個

## 鬼も十八、番茶もでばな

艶やかな肢体だった。

透き通るような白い肌に、細く伸びた手足。形の良いその体が、降り注ぐ雨の中で、揺らぐ泉の上で、濡れていた。

雨粒の滴る髪は肩まで伸び、その小さな肩を柔らかく覆う。細い腰回りにも、優美に膨らんだ胸にも、隔たるようなものは布一枚もなく、ただただありのままの姿が目の前にあった。

その体の持ち主と、目が合う。まるで宝玉のような翡翠色の瞳が、真つ直ぐ俺を見た。その端正な顔が、艶やかな唇が微かに震えて——

「……で、これか」

軽く息を吐いて、身を起こす。防具の隅々にまで染み込んだ水が、しつとりと垂れた。見渡せば、そこはエリア3。薄く照らすいくつもの滝と、その波に揺れる花が舞い落



ちるエリア。同時に、ベースキャンプの真下にあるエリアでもある。十中八九、俺はキャンプからここに落とされたのだろう。

「やってくれるぜ、あの女……」

微かに覚えているのは、右手が飛んできたことくらいか。凄まじい勢いで視界が揺れて、かと思えば全身が浮き上がって――

慌てて桃毛獣のテツポウ焼きを庇つたがために、俺は俺自身の受け身をとることを放棄したのだつた。あのホルモンは一体どうなったのか？

「……キャンプに戻らないと」

相変わらず、天気は悪かつた。薄黒く染めたその顔を歪ませ、鋭い雨を降らしている。今はまだ小雨に毛が生えた程度の勢いだったが、雲を見る限り雨が上がることはないだろう。どころか、本降りが来る。もっと強い雨が控えているようだ。

防具の隙間に入り込んだ水を払いながら、脚を踏み出す。雨が強くなる前に戻らなければ――

「……待てよ」

原生林のスコールといえ、まさに滝のような雨になる。如何に安全基準を超えているとはいえ、高台の水源となっているベースキャンプは本当に安全だろうか？ あの程度のキャンプでスコールを防げるのだろうか――

「フニャツ」

「ん？」

突然の衝撃。それと同時に、小さな体が水を跳ねる音。

右足で感じたそれに向けて目を移すと、一匹のアイルーが尻餅をついている姿が目に入った。困ったようにキョロキョロと首を動かしては、俺の方に視線を定め始める。この人は一体何者なのか、と。

「……どうした？ そんな慌てて」

「人間？ 人間さん、誰なの……？」

「俺は通りすがりのハンターだ。お前はここの辺りのアイルーか？」

「そ、そうなの……」

しゃがんで、アイルーの視線に合わせて話を試みると、このアイルーは戸惑いながらも応じてくれた。覚束ない様子でネコの言葉を並べながら。

「随分急いでるみたいだな、何かあったのか？」

「た、食べ物を探して……」

「食べ物……？ わざわざ獲りに？ 集落に貯蓄されてるだろ普通？」

「さ、最近食べ物が頻繁に無くなる事件があったの。原生林の集落は今食糧難なの……」

「何だそれ……犯人は？」

「分からないの。おつきいババコンガとも言われてたけど、誰も犯人の姿を見てないの……」

「ふうん……？ 不可解な話だな、誰も見てないとは」

困ったように目を伏せるその子は、うるつと瞳を濡らす。毛並みを濡らす水滴が、静かに地に落ちた。雨音に溶けて、雨粒に混じって。そうして涙は、原生林に消えていく。見たところ、毛並みも随分と荒れていた。食べ物を得るために相当無理をしたことが伝わってくる。手足も微かに震えていて、もうすぐその集落で休もうとここに来たのかも知れない。俺にぶつかってしまったのも、疲労が原因だろうか。

「……そのババコンガ、めちやくちやデカい奴か？」

「えっ、ハンターさん知ってるの？」

ピクリと耳を立たせ、そのアイルーは目を見開く。ピンと張った髭を振ったその子の頭を撫でながら、俺は少し視線を傾けた。

傾けた視界に映る、小さな洞穴。しゃがまなければ入れなさそうなくらい、小さな穴。アイルーの集落の、その入り口だ。

それを見ては薄く笑う俺に、アイルーは首を傾げた。困ったような声で、ニャアと鳴いた。

◆ ◆ ◆  
「はあ？ ネコタクが出せない？」

「す、すみませんニヤ！ すみませんニヤ！」

ところ変わってベースキャンプ。そこでは、一人の少女が苛立ちを含んだ声で文句を垂れていた。

腕を組む彼女に向かって、ペこりペこりと頭を下げるアイルー。ネコタクを営むその一匹が、困惑と焦りを含んだ声で許しを請い続ける。

「も、もうすぐ大雨が来るのニヤ！ ネコタクは出せないのニヤ！」

「雨くらいどうってことないでしょ？ 取り敢えずギルドに報告しときたいのよ、超大型の桃毛獣がいたことを」

「は、ハンターさんこのスコールを知らないのニヤ!? まるで滝ニヤ！ ネコタクもスタボロになってしまふニヤ！」

「滝……?」

必死に説明するアイルーの言葉を聞いては、用心深そうな声で訝しむ少女、ヒリエツタ。彼女がインナー一枚という非常に無防備な格好で空を見上げた。原生林を覆う雲は

まさに暗雲。不穏な音を鳴らすそれは、低気圧の具現とも言える。

彼女はアイルーの推測通り、原生林の事情には疎い。このスコールがどういったものか、想像つかないらしい。一体このネコは何を言っているんだと言わんばかりの顔で、彼女はじろりとアイルーを見た。その仕草に、当のネコはといえはぶるりとその尾を膨らませる。

「す、凄い雨なのニャー！ 散弾みたいニャー！ 散弾の超速射なのニャー！ ハンターさんみたいなインナーの姿じゃハチの巣ニャー！」

「……嘘……ではなさそう、ね」

キャンプに備えられた物干し竿。それに吊るされては水滴を垂らすジンオウウシリーズの防具を見比べ、ヒリエツタは小さく息を吐いた。

このアイルーがここまで取り乱すならば、おそらく言葉通りの雨が来るのだろう。そう感じた彼女は、これ以上言及するのをやめる。やめて、アウトドアチェアに腰かけた。「……ネコタクが仮に出せたとしても、飛行船は飛ばないのニャ。どのみち戻れないのニャ……」

「分かったわよ。大人しく待機してればいいんでしょ」

「わ、分かってもええましたかニャー！ よかったニャ〜」

ようやく納得したヒリエツタに向けて、ネコタクアイルーは満面の笑みを溢す。

そうかと思えば、安心故の脱力感か、彼のお腹から気の抜けた音が漏れた。きゆるるる……という、可愛らしい音が。

「あ……。は、ハンターさん、そこのお肉、食べちゃ……ダメかニヤ……？」

「あーん？ お肉……？」

せがむような顔でそつとヒリエツタを見上げれるアイルーに、彼女は苛立ちを露わにした顔でその皿の方に目を移した。

そこには、金網状の焼き目を付けた厚い肉が静かに佇んでいる。ぶるりとした質感に、滴る脂が美しい。よく焼けた色合いも眩しく、漂う香りも鼻孔を直接穿ってくる。

「勝手にしていいわよ。私は食べないから」

「やったニヤー！ いただきますニヤー！」

許可をもらうや否や、勢いよく飛び付くアイルー。その仕草を見ながら、彼女はどのようなもなさそうに溜息を吐いた。

どうしてこうなったのか、そんな行き場のない思いを溜め込んだ、重い溜息。肉を齧ることで精一杯なアイルーは、そんな彼女の様子にも気付く気配はなさそうだが。

「ニヤツ、ぶるぶるお肉ニヤー！ 固くて、強くて、でも柔らかい……。脂も濃厚で、とつても美味しいニヤー！ ニヤ、もひとつ……」

さも美味しそうに食べるアイルーの、またもや伸びたその小さな手。それが肉を掴む

前に、その皿が宙に浮き上がった。何かに持ち上げられるように、するりと。

「——おっと、そこまで」

「ニヤ、ニヤニヤツ？」

「……おかえり」

「おう、ただいま」

風に揺れる白い髪。緋色に染まった鋭い瞳。黒ずんだ鎧に身を包むそのハンターは、悪つぼく口角を上げては皮肉めいた声でそう答える。

現れた人物は、このホルモン焼きを用意した張本人、シガレットその人だった。

「早速で悪いんだけど、もうすぐスコールがくる。避難するぞ」

「……え？」

「……ニヤ？」



「……で、ネコの巣ね。そこまでこのスコールって凄いの？」

「全部が全部って訳じゃないけどな。でも、物凄い低気圧の塊がこつちに來てる。凄いい雨になるのは間違いないし、用心するに越したことはないだろ」

湿っぽい風が舌に靡くのを感じながら、俺はそう吐き捨てた。

ところ変わって、ここはエリア3の端。ネコの巣に繋がる、巨壁の麓だ。

俺は皿に盛った桃毛獣肉の山と、ついでにネコタクを営むアイルーを抱え。ヒリエツタは、脱ぎ捨てた自身の防具を抱え。

そうしてそれぞれの荷物とネコを手にしながら、俺たちはベースキャンプ真下のこの場所に来たのだった。

「……大体、ネコの巣なんて入れてもらえるのかしら？ 普通に考えて、部外者がゾロゾロ入ってきたらアイルーだって嫌がると思うんだけど」

「心配ない。交渉済みだ。このババホルモンを条件にな」

「えっ……？ それで……？」

訝しむような眼で俺の手の上にある肉の山を見ては、全く信用を含んでいない瞳でそう疑いをかけてくるヒリエツタ。

思えばこの肉の山も大した量が減っておらず、彼女が全くと言っていいほど口にしかつたのが分かる。精々、ネコタクアイルーが食べた程度しか減っていないのだ。

まあ、今となつてはその方が都合が良いのだが。肉の量は、多ければ多いほどいいのだから。

「何だか食糧難らしくてな、このババホルモンは願ってもない恵みだつて言ってたんだ」



「食糧難、ね。……世知辛いなあ」

しやがまなければ入れないほど小さな穴。不便な図体を屈ませながら、何とかその穴に身を入れる。

入るや否や、すぐさま消える雨の感触。岩肌特有の冷たく静かな空気に包まれ、俺は少し小さく息を吐いた。雨の脅威から逃れることができたからか、安心感を含んだ息だ。

洞窟らしい、ひんやりとしたどこか現実味のない香りが鼻を通る。雨に濡れたこともあつて、少し肌寒い。

「お邪魔しまーす」

「あ、ハンターさんニヤ！ みんな、来てくれたのニヤ！」

「おう、持ってきたぞ。さあみんなで食いな」

「わああああ、素敵な肉の山ニヤア……」

わらわらと現れるアイルーたち。その中のリーダー格らしきアイルーが、俺の右手から紙皿を受け取る。

その皿に乗った山のような肉に彼らは目を輝かせて、嬉しそうにそれを集落の方へと運んでいった。

この洞窟を直進すればネコの集落へと出る。ネコ地蔵やら、お供え物という名の窃盗

品が並ぶ、所謂ネコの巢の中枢だ。腹をすかせたアイルーたちは、どうやらそこへ集まっているらしい。

「さて……少しばかり休ませてもらおうか」

「そうね……。とりあえず鎧を干さない」と

「ニヤ、じゃあボクが干してくるニヤ。奥に物干し竿あるからニヤ」

そう名乗り出たのはネコタクアイルー。俺の腕からするりと降りては、ヒリエッタの手から防具を受け取った。

彼女は彼女でそれを無言で手渡しては、そつと地面に腰を下ろす。

「ネコタクはしばらく出せないそうよ」

「だろうな。今はしばらくここで待機してようや」

「そうね……ここなら大丈夫かも。不本意だけど、ゆつくりしてましょ」

「……何か、意外だな」

「え？ 何が意外なのよ？」

「もつと怒ってるかと思っただけど。案外普通なんだなあって」

随分といつも通りな態度で俺に接するヒリエッタ。その仕草に、俺は少なからずの違和感を覚えていた。

俺をあの崖から落としたくらいのだ。次は無視でもされるかと思っていたが、別段変

わりなく会話をする彼女の姿に、どこか拍子抜けめいた感情を抱いてしまう。

一方の彼女はといえば、そんな俺の言葉にきよとんと首を傾げた。

「だってもう殴ったし、終わったことだし」

「……随分あっさりしてんな」

「私は別に見られてもいいんだけどね。ただ、約束を守らない奴が嫌いなだけ」

「……悪かったよ」

そう言つてはクスリと笑うヒリエツタ。そんな彼女を前に、俺はバツが悪く感じた。

まるで大人に諭されたような、そんな気分だ。荒く頭を搔いては、バツの悪さをごまかした。

「ニヤー、ハンターさーん」

微妙な空気が流れたその時に、数匹のイルーの足音が耳に入ってくる。見れば、随分と満足そうな笑顔を浮かべるイルーたちの姿があつた。

そんな彼らが俺たちの周りに集まつては、ぺこりと頭を下げる。どうやら、無事腹を満たすことができたようだった。

「ありがとニヤー。おかげでボくら元気になつたニヤー。何かお礼できることはあるかニヤー？」

「いや、（ ）を借りさせてもらつてる訳だし、大丈夫だよ」

「ウニヤ、それじゃボクたちの気が済まないニヤ！ 何かするのニヤ！」

「……じゃあ、そこのお姉さんにひつついてやってくれ。インナーで寒そうだから」

「えっ？ 私？」

突然引き合いに出され、驚くヒリエツタ。そんな彼女にも構わず、やって来たアイルーたちはニヤニヤ言いながらヒリエツタにひつつき始めた。

困惑気味の彼女に構わず、もふもふと柔らかいネコ団子が現れる。ぬくぬくとした彼らの表情も相まって、何とも温かそうだ。心なしか、無性にイルルが恋しくなってくる。

「……何か、私の方も意外だわ」

「ん？ 何が意外なんだ？」

「怖い顔して行くせにネコの扱いは上手いんだなって」

寄ってきたアイルーの顎を撫でつつ、彼女の言葉に耳を傾ければ、心底意外そうな言葉がやってきた。

どこことなく優しい表情でそう言う彼女。そんなに怖い顔をしているだろうか、俺は。雇いたてのイルルは少し俺を怖がっていたような気もするが、まさかこの顔が原因だったのか？

「上手いこと交渉するし、ネコちゃんたちの扱いにも慣れてるみたいだし。どこで鍛えたのよ、そんなスキル」

「うーん、鍛えたつもりはないんだけどなあ」

返答に若干困りながら、それをごまかすように頭を掻く。訳を話すと長くなりそうだから、答えるのは少し億劫になるのだが――

ふと、彼女の肩が微かに震えているのが見えた。それもそうだ。彼女はインナー一枚しか着用しておらず、外は大雨。洞窟内の涼しい空気も相まって、彼女は相当寒いはずなのだから。ネコの力をもつてしても、温まるには時間がかかりそうだ。

「……どうせしばらく待機しなきゃだし、話してもいいか。とりあえず、これ飲みながら話そうぜ」

「え？ 何これ」

「ホットドリンクよ。俺特製、のな」

ポーチから手渡した小振りのビンを、ヒリエツタは戸惑いながらも受け取った。

赤い粒子が舞い、深い色に染まり、独特の香りを漏らすそれ。まだバルバレにいた頃から研究に研究を重ねた逸品、俺特製ホットドリンクだ。

「シガレットの手作り？ 市販のじゃなくて？」

「そう。味は保証するよ。寒いだろ？ 飲みなよ」

「……あ、ありがと」

思いがけないフオローに驚いたのだろうか、彼女は戸惑いながらもそれを一口飲み込

んだ。

艶やかな唇に、ほんのり赤く染まったそのドリンクが流れ、優美に水滴が一つ、舞い落ちる。その姿は妙に絵になった。

「ん、何この深い香り……！ 辛い。辛いけど……ピリ辛？ それよりもこれ、何？ 仄かに酸っぱい。出汁のような匂いもするし、何だか奥深い……美味しい」

「嬉しい」と言ってくれるじゃん。美味いだろ？」

「うん、そこらのホットドリンクとは全然違うわね。それでも、何だか体がポカポカしてきたわ……あつたかい」

愛おしそうにピンを両手で包んでは、彼女は恍惚の表情でそう呟いた。

特製ホットドリンク。それが開花したのは、ユクモ村遠征がきっかけだった。

従来の強い辛さをピリ辛程度に抑える。仄かな酸味は、ユクモ地方で親しまれているとある食材より。出汁のような香りは凍土に住まう飛竜の幼体、ギイギを出汁にしたもの。その出汁は、まるで昆布出汁のように料理の味に深みを与えてくれるのだ。

——そう、モデルとなったのは、梅昆布茶である。

「あんまり辛くないし、苦味も抑えてある。飲みやすくなつたと自負してるぜ」

「いやこれ、ほんとに飲みやすいよ！ 凄い……。これだったら、ギルドストアのよりシガレットのを買うわね」

そつと飲みこめば、深い深い出汁の香りが顔を出す。凍土という極寒の環境で凝縮された旨み。それをじっくり煮込み、濾過し、抽出する。孤島の個体では到底出せないその味を贅沢に用い、干したユクモウメとトウガラシをブレンド。このホットドリンクの味の主役たちは、そうして生まれたのだ。

もちろん、こんな味になろうともかの重鎮、苦虫ももちろん忘れていない。苦味が強すぎるその味わいは、予めハチミツに漬けることで、何とかごまかしている。要はその栄養素を取り入れることができればいいだけの話なのだから――

ん？ 参考にしたはずのロックラック製ホットドリンクはどうなったかって？

要はコーヒー豆のハンドピックと同じだ。よりよい一杯のために、クズ豆は摘まれる。つまりそういうことだ。

「ふう。一服するのにも丁度いいんだよなあ」

「……じゃあ、その一服ついでに話も戻そうかしら？」

「はいはい。えつと、何の話だっけ？」

「どうしてシガレットが、こどもアイルーたちの相手が上手いのかって話」

ああそうかと納得しつつ、ホットドリンクを飲み干した。

液体に漂う粒子が、ビンの縁にしがみつく。まるで天の川のように筋を作るそれは、トウガラシとユクモウメによる彩鮮やかな赤で染められていた。

そんな味わい豊かな温もりをそつと流して、いつの間にか眠りこけていたアイルーをそつと撫でて。そうして、俺はゆつくり口を開く。ヒリエツタが求める話を綴るために。

「——俺さ、アイルーに育てられたんだ」

「……え？」

「正確には住んでた村が無くなって死にかけてたところを、アイルーに拾ってもらったんだけど」

「……育ての親がアイルーってこと？」

「いや、十歳くらいまでは自分の村で暮らしてたよ。アイルーたちと共に暮らすようになったのはそれから……何年になるのかな。十八くらいまではいた気がする」

「えつと、つまり長いこと一緒に暮らしてたから、ネコの扱いにも慣れたってこと？」

「そうだな。狩りの師匠もアイルーだしな。ネコ語も少しなら分かるぞ」

「……ちよつと待って。ツツコみが追いつかないわ」

困ったように頭を抱えるヒリエツタ。俺の言っていることについていけないのか、困ったように唸り声を上げた。

眉を歪めながら、俺の言葉を反芻。そうして、その情報を整理しているのだろうか、悶々と考える彼女の姿は、そんな感じがした。



「……そもそも、村はどうして無くなったのよ？」

「モンスターに襲われたから、だが？」

「やつぱり、アンタもそういうクチなのか。初めて見た時から何となくそうだと思つてたけど」

「そうだなあ、因縁つっの？ ハンターやろうとするような変わり者には、それ相応の理由がある奴も少なくないと思うよ、俺は」

彼女の方を見ながら嗜めるようにそう言うと、彼女は少し不満そうに口を窄める。私  
のことか、と小さな声で文句を垂れる彼女。少し照れくさそうだ。

「アイルーの集落でお世話になったハンター、か。しかも師匠までアイルーとはね……」  
「アイルーつてさ、基本小振りな剣を使うじゃん？ 師匠はそれに加えてブーメランで  
二刀流する変なアイルーでな、俺もそれを教え込まれたんだよ」

「ああ、だからあの時双剣もしてたのね！ 逆手で持ってたのもその影響？」

ようやく納得がいったという表情で、ヒリエツタは俺にそう問いかける。それに頷き  
つつ、俺は少し肩を竦めた。そこまで俺の二刀流技術が引つ掛かっていたのか。

納得がいつて少し落ち着いたのか、彼女は少し浮かせた腰を下ろした。そうして、ま  
わりで丸まるアイルーたちを抱き寄せる。アイルーたちはこれといった抵抗もせず、た  
だニヤンと鳴いた。

「……アイルーだって、人間だって、心があって言葉がある。通じ合えるんだから、そこに姿形は関係ないってのが俺の持論だ」

「シガレットって、相手によって態度変えたりしないもんね。アイルーとか人間とか、分け隔てない感じ」

「ま、アイルーならもふるといふ決定的な違いがあるけどな」

俺にもたれ掛かるアイルーの顎。ふにふにと柔らかく、かつふわふわとした毛で覆われたそれは、非常に撫で心地が良い。人間には出せない感触だ。

指先で掻くように撫でると、それが心地いいのかそのアイルーは体をくねらす。ネコ特有の柔軟な動きが、俺の体の上を蛇行した。軽く、柔らかく、温かい。

「何だか、少しアンタのことが分かった気がする」

「お前が分かったのは所詮容器に乗ったチーズの部分だけだよ。その下がドリアなのか、グラタンかまでは分かってない」

「……何その例え……。やっぱよく分かんないや」

呆れたように首を傾げるヒリエッタ。そんな彼女の膝の上に、俺の上で這いずついていたアイルーを乗せる。突然持ち上げられ、そのアイルーは困惑の声を上げていたが、彼女の柔らかい膝に乗っては再び落ち着いた表情を見せた。そんなネコの頭を一撫で。くしやりと、ふくよかな毛が揺れた。

口開ける洞窟の入り口からは、ぼたりと水滴が落ちる。一粒、もう一粒と。その反面、あのおびただしい雨音は止んでいた。凄まじいスコールもいつの間にか消え失せ、ただ雨上がりの空気だけがそこにあつた。

依然として霧は止んでおらず、むしろより霞深くなっているような気がするが——  
「まあ、外に出る分には不都合はないだろう。」

「あー、腹減つた。こんがり肉食おう」

「わ、肉焼きセットだ。こんなのも持つて来てたの?」

「ニヤ、お肉ニヤ!」

「ハンターさん、お肉焼いてくれるのニヤ?」

ネコの巢から出て、広げた肉焼きセット。それを見てはギャラリーが声を上げる。

呆れ顔のヒリエツタと、目を輝かせるアイルーたち。そんな彼女らに向けて適当に頷いておいてから、ポーチに入れた袋詰めを生肉を取り出した。

本当ならばそこらのズワロポスの肉を獲りたかったが、いないものはしょうがない。

新鮮な肉とは言い難いが、せめて焼きたてを味わおう。

「やっぱ肉を焼くには屋外に限るって……ん?」

——なんて思っていた、その時だ。

不意に、奇妙な感觸が舞い降りる。右手に乗った生肉に絡みつくような、不快な振動

と粘り気。そして、ぬめりを併せ持ったような何か、俺の神経を逆撫でした。そう。その感触は、まるで舌のような――

思わず振り返った視線の先。何も無いはずの、誰もいないはずの空間が、ずずずと音を立てて動いた。靄もやのようにうねる“霞かすみ”が、唸り声を上げた。

く 本日のレシピく

『シガレット特製ホットドリンク』

- ・ ギイギの干し肉（粉末加工） ……ひとつまみ
- ・ トウガラシ ……0.6g
- ・ ユクモウメ ……1／2個
- ・ ギイギ出汁 ……0.3g
- ・ 苦虫（要ハチミツ加工） ……1／3匹
- ・ お湯 ……お好みで

## 食い物の恨みは恐ろしい

空間が走る。何も無いはずの、誰もいないはずの空間が、這いずるように走ってくる。それは、四本の脚をもっていた。太く力強い形に、粘つくように不気味な表皮。それが、忙しなく動いては巨体を走らせる。

背中には、一対の翼。薄い膜を羽ばたかせ、エリアを覆う霞をふわりと舞い上げる。伸び切った首には、ギョロギョロと光る二つの目が。全く同調しない動きで周りを見ては、ゆっくり俺に向けて焦点を合わせてきた。

そうして撓る、細い舌。まるで蛇のようにくねるそれは、俺の腕から奪った肉を舐め直し、静かに口に入れた。くちやくちやくと、持参した生肉が奴の口の中に消えていく。俺が食うはずだった肉が、奴の体に溶けていき――

「……てめえ……ッ！」

即座に抜いたテオⅡエンブレム。霞を塗り潰すように濃厚な橙が、大気が染め上げた。滑るように走るそれが、湛えた粉塵をそのままに、忙しなく動くその双眼へ向けて吠える。

——原生林に、爆破の花が咲いた。

「ニャー！ な、何ごとニャー!?!」

「ば、爆発ニャー！ 誰ニャ爆弾使ったの!」

「な、何!?! どうしたの!?!」

霞が爆風によつて吹き飛ばされ、このエリアが澄み渡る。霞を塗り替えるような爆風に、湧き出る泉を波紋を描く。

手応えを感じる左手で頬についた水滴を払っては、小さく息を吐いた。その後ろから現れる、突然の事態に驚いたヒリエツタたち。舞い上がる水滴を浴びては、さも不思議そうに口を開けている。

「シガレット……一体……」

「——俺の肉が盗られた」

「……は?」

間の抜けた声が飛んだ。

一体何を言っているんだと言わんばかりの彼女の声。周りのアイルーたちも、同様に動揺を含んだ鳴き声を漏らしている。ニャア、ミャアと、忙しなく。

「今から食おうとしてた肉を、アイツが盗ったんだ！ 許せねえ!」

「アイツ……?」

唐突に、羽ばたく音が響いた。バサバサと、邪魔なものをどかさような荒い音。そうかと思えば、煙たくも舞い上がっていた粉塵が舞い散っていく。視界を汚す色が抜け、目の前が鮮明に映った。

奴の姿が露わになる。湿っているような、潤っているような、不思議な質感が目立つ皮膚。毒々しい紫に彩られたそれが、ゆったりと動いた。

見たことのないモンスターだ。喉を震わせるような声も、聞いたことがない。

「……嘘、まさか」

「あ？ 知ってんのか、コイツを」

「シガレット、分らないの!? これ……これは……!」

キヤアアと、不快な声を漏らした奴。かと思えば、その後足で立ち上がる。体高を伸ばし、一体何をするのかと身構えれば、飛んできたのは再び霧。

例えるなら、凍土や氷海にいる時に吐く息が白くなる、アレだろうか。そう思わずにはいられないほど露骨に白い息が、奴の口から漏れた。そうしてみるみると、消えたはずの霞がこのエリアに沸き立ち始める。

まさか、まさかこの霞は。

「……コイツが吐いてたのか……?」

「ま、間違いないわ……シガレット、あれはオオナズチよ!」

「何だそれ」

「嘘、ほんとに知らないの!? オオナズチってのは別名霞龍って言ってね——」

彼女の言葉を繋ぐように、オオナズチと呼ばれた目の前のモンスターは唸った。かと思えば、ゆつくり後ずさり始める。一步、また一步と俺から離れていき——

その一步を踏み出す度に、色が薄くなっているように感じた。気のせいだろうか？ 目の錯覚だろうか？ そう感じるや否や、慌てて俺は目を擦る。

開いた両目。一度体勢を立て直した視界。

だが、そこに奴の姿はなかった。霞のように消えていた。

「……は？ アイツどこへ……上か!？」

「違うわ、消えたのよ！ 聞いて、オオナズチってのは古龍なの!」

「……古龍?」

「そうよ、霞隠れする身体機能があるの。簡単に言うと、見えなくなる!」

見えなくなる。

前にも横にも、後ろにも。上を見上げてても奴の姿はない。下も、生き物が潜るあの特有の振動はない。文字通り奴は消えている。否、見えなくなっている——?

「ニヤ、ハンターさん！ 後ろニヤ!」

「うし——うおッ!」



ネコの声に尻を蹴り上げられ、ハツと振り返った。

そんな俺の視界に肉薄する、鋭い何か。まるで鞭のように撓り、風のように唸る。それが浅く、俺の腹を突いた。

「うがっ……つてえな！」

「背景同化……いや、透明化……!?!」

「どっちでもいい！ とにかく見えなくなるんだろ！ ……つて、あれ？」

「え、何、どうしたの？」

「——ホットドリンクが、なくなってるう?!」

「へ？」

ポーチが少し軽くなったような感触。それに気付くと同時に、ポーチに空気ができていることに気付く。

帰りの童車で飲もうとしていた分のホットドリンクが、ポーチから消えている。代わりに、糸引くような謎の液体が、まるで涎のようなものがべっとり——

ぱっと上げた視界には、確かにピンを噛み砕くオオナスチの姿があった。魂込めて調合した赤い飲料が、虚しくも奴の喉を滑っていく。パリンと、ガラス瓶が地に落ちた。

「……ツツツふっぎけんアアクソがアアアツツ!!」

抜き放った両の剣。霞を滑るように、俺の両手が走り出す。

若干引きながらもじりじりと後ずさるヒリエツタ。オオナズチのせいかな、はたまた俺のせいかな。怯えるように、巢に逃げ込むアイルーたち。

それらが全て、流線状に流れていく。超速度の視界が、激しく揺れる。

回転するように斬り込んだ刃は、鈍重な感触を腕にもたらした。まるで分厚いゴムでも斬っているような、そんな気分だ。斬撃というより、もはや叩き付け。そんな気さえしてくる。血は確かに吹き出ているが、逆に言えばその程度である。

右の剣を振り抜いて、それが肉の上を走り切れれば、次に左手の剣を振る。両の剣が十字を描き、両腕が交差したならば、今度はそれを返すように振り払った。

「……うおつ、前脚か！」

突然振り上げられる、紫色の物体。そうかと思えば、まるでゴムの塊のようなそれが、邪魔なものを持ち払わんと飛んでくる。古龍骨格特有の前脚だ。

横に伸ばし切った両腕を、瞬時に戻す。そうして右の剣でその太い爪を迎え、左の剣で手首らしき盛り上がり方を滑らせて――

その鈍重な動きに対し、どうしてここまでの威力をもっているのか。異様に感じるほどの衝撃が、俺を殴り付けた。だが、俺は敢えてその衝撃を受け入れるように、後ろに跳ぶ。同時に奴の腕に当たった剣でその軌道をずらし、襲い来る衝撃をいなした。

いなし、跳び、奴との距離を開ける。その勢いで右の剣を盾に戻し、空いた右手を左

の柄に添えて――

「――来るッ!」

瞬時に伸びた、舌。俺のポーチ目掛けて飛んでくるそれを、横に跳んで躲す。その勢いのまま走り出し、奴の側面に回り込んだ。

がら空きになったその脇腹。そこへ向けて、この重厚な剣を振り上げる。

片手であまり斬り込めないなら、両手ならどうか。飛び上って、重力も加えた斬撃ならどうか。そういつた思考をまとめ、一太刀に変える。

「はあッ!」

そうして振り下ろした斬撃は、本日一番の手応えを俺にもたらした。両腕に、肉を斬るあの何とも言えない感触が伝わってくる。皮だけではない、その奥の肉も裂く、重苦しいあの感触。

――それと同時に、奴が動く。迸る傷が、原生林に溶けた。吹き出た血だけが残り、緑を赤に塗り替えていく。

「また消えたか……! どこだ、どこに……ッ!」

「シガレット、危ない!」

突然響いた、ヒリエッタの声。それと同時に、奴の甲高い声が耳に届いた。それに反応して振り返った先には、かぱっと口を開ける奴の姿。薄く霞んだ紫色の何かが、水蒸

気のように舞う。何かが飛んでくる――

「どっ……せいっ!」

それを浴びかねんとするその瞬間、唐突に奴がよろけた。ヒリエッタの力のこもった声と共に、奴がよろけた。

長い首が痛みに悶え、激しく揺れる。そうして照準が乱れ、見当違いな方向に散らされた霞。白い霞を塗り替える、毒々しく染まった紫煙。宙を舞う赤い花卉が、水蒸気状に舞うその液体に塗れ、激しく爛れていく。

「……何だありや。毒か?」

「シガレット、無事!」

「おう、助かったぜ。すまないな」

奴がよろけたのは、ヒリエッタの一撃のおかげのようだった。あの奇妙な形に歪曲した尻尾。そこへ溜め斬りを叩き込み、ものの見事に奴を怯ませる。ヒリエッタのとつた手段は、これだった。

見れば、いつものジンオウUシリーズを身に纏ったヒリエッタの姿がそこにある。まだ若干湿ったそれに、心なしか彼女は落ち着かないようだが。

「何でまた古龍なんか……」

「お前が呼び寄せてるんじゃないか? 運が良いのか、はたまた悪いのか」

「少なくとも、狙われる分には良いとは言えないわね……っ！」

突然の乱入者に鼻息を荒げるオオナズチ。そのギョロギョロとした瞳を見ては、ヒリエツタは憂鬱そうにそう呟いた。

古龍なんて、そうそう会えるものじゃない。一生の一度に数回か、そこら。一度も会えずにその生涯を閉じるハンターだって少なくない。大変珍しいときれる亜種モンスター、その上をいく希少さだ。

そんな存在が、今日の前にいる。俺の飯を奪った不屈き者として。

「食べ物の恨みは恐ろしいってことを分かせてやる……手を貸せ、ヒリエツタ」

「馬鹿なの？ コイツがここの異常の原因、それも古龍よ。ここは撤退する方が懸命だわ……っ！」

「……じゃあいいよ、俺だけでやる」

霞が溢れ、防具に水滴が垂れる。

いや、霞のせいではない。いつの間にか、再び雨が降り出していた。土砂降り一歩手前のような勢いで、雨が霞を深めていく。

そんな悪条件に塗れた景色の中で、鎌首を擡もたげる奴。そこから、ごぼつと何かを吐き付ける。液状の何か、俺を目掛けて飛んできて――

「ちつ、ゲロかよッ！」

その上を、跳躍回避。背後から、水が水に落ちる重い音が響いた。

その水しぶきを背中で感じながら、俺は左の義足で大地を強打。縮まったスプリングが伸び上がり、俺の体を上へと押し上げる。

突然肉薄するハンターに驚いたのか、当のオオナズチは奇妙な声を上げた。

「これならどうだ……ッ！」

俺の生肉を、そしてホットドリンクを飲みこんだ、憎き口。そこへ向けて、粉塵を充分に湛えたテオⅡエンブレムを叩き付ける。

口内は外皮ほど固くはないのか、思ったよりも刃が入り込み、その分大きく血が舞った。歯が欠けたのか、折れたのか、小さな破片が飛び散って——

同時に弾ける、その粉塵。一振りの斬撃は猛烈な爆風となり、その頭を吹き飛ばした。「ああもうしようがないわね！」

怯み、隙を晒したオオナズチ。そんな奴の背後に回り、ヒリエッタは愚痴をこぼしながらも剣を振った。太く、奇妙に巻いたその尾が、激しく軋む。

ゼンマイのような、軟体生物の足のようなそれが、煌剣リオレウスの炎でじゆうっと焼けた。心なしか、良い匂いがした。

「おお！ 信じてたぜ、ヒリエッタ！」

「うっさい！ 軽口叩くな！」

「来てくれたなら丁度良い。ヒリエッタ！ 背後から力いっぱい刻んでくれ！ 俺はコイツの注意を引く！」

「何さ、アンタが囹役をやるの!? まあ私は構わないけど、さっ！」

斬撃より、爆破より、炎の方がよく効きそうだ。そう判断した俺の言葉に、強溜め斬りを叩き込んだヒリエッタは荒っぽく、されど力強く返事をする。一方のオオナズチはといえば、何とか立ち上がり、ギョロリと俺を見た。

口の中で爆破を受けたというのに、奴はそれもあまり気にしていないようだった。カアツと口を開け、その中で潜む長い長いあの舌をチラつかせる。ポーチの中身を狙うように、ゆっくりと。

「……もう食いもんはやらんからな！」

振った頭と共に振り回される、鞭のようなあの舌。右から左へ、凄まじい勢いで振り払われるそれを、三角飛びで跳び避ける。俺の腹スレスレで、舌が宙を薙いだ。

そうして開けた、奴との距離。上下が反転する視界。

危機を避けたことに対する一時の安心感で小さく息を吐いた瞬間、奴がもう一度頭を振った。今度は左から右へ、舌が走り出す。

「チィ……！」

その後ろで立ち上がる炎の熱に顔を歪めながら、今度は右手の盾を振り上げた。滑る

ように磨かれたその盾で、奴のその撓る舌を防ぐ。

直接弾くのではなく、表面を走らせるように。そうして衝撃を押し殺し、俺はその反動をバックステップで受け流す。舌をいなし、距離を開けた。その向こうで、また一つ熱が湧く。ヒリエッタによる、強烈な溜め斬りだ。

「うっ……やっぱバレるっ?!

その衝撃にとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、オオナズチはゆつくりと背後に首を向けた。しかし、そのまま体まで向かないように、再び剣を握り締め――

いなしの反動をそのままに、俺は前へと駆け出した。そうして、今度は両手の剣をスツと抜く。チラつかせる両刀に気付く、オオナズチの右目。ぎよろつと動いたそれが、もう一度俺に意識を向けた。

「オラア! こっつち見ろオ!」

振り上げた両の剣。

右の剣を振り下ろし、左の剣を振り払った。初手で奴の皮を剥ぎ、その鈍重な皮膚に切り込みを入れる。

振り払った勢いのまま、今度は身体を左に一回転。その勢いに釣られ、右の剣も風を薙ぐ。遠心力のままに、走る切っ先はその切り口をさらに開いた。

「うらあッ!」



浮いた右脚を、大地に擦り付ける。それを軸に、今度は逆方向に体を回した。ただ少し、今度は左脚を前に出して――

前へ切り込む、回転斬り。広げたその切り口をえぐるように、前へ。

「たあつー！」

反対側からは、ヒリエツタの威勢のいい声が響く。溜め込んだ力を解放するように、渾身の一撃を奴の尾に執拗に与えていた。

燃え盛る火炎も相まって、手痛い傷を与えているらしい。甲高い悲鳴を上げる奴が、それを証明している。ただの煌剣リオレウスでここまでの火力を引き出すとは、つくづく恐ろしい女だ。

俺が注意を引き、ヒリエツタが斬る。単純なようで理に適ったこの戦法は、目の前のオオナズチに充分通用した。このままいけば、きつと――



「ハア……た、タフ過ぎだろ……」

「ダメだわ……持久戦じゃ、負ける……」

肺が苦しい。視界が霞む。鎧を打つ大雨が、痛い。

何度も何度も斬り付け、何度も何度も焼いた。俺が注意を引いて、ヒリエツタが振り被って――

それでも奴は、倒れない。体中に傷を刻もうと、尾の先がえぐれようと、奴は全く衰えを見せなかった。

「いい加減、倒れなつ、さいよー」

何時かのキリンの時のような状況に嫌気が差したのか、ヒリエツタは声を荒げる。そうして、後ろに振り上げた剣を叩き伏せた。鈍い刀身に奴の尾が触れ、その傷をさらに斬り開く。

直撃だ。尻尾、というよりその傷に。丸見えになった中の肉を、さらに裂くようなその一撃。会心の一太刀であることは、間違いなかった。

だが――

「――え？」

「――は？」

立った。ヒリエツタの言葉とは裏腹に、奴は突然立ち上がった。

頭に血が昇り、濃霧を撒き散らしたあの動き。頭を高く上げる姿は、始めに見たそれとよく似ている。唯一違うのは、その口に含まれているのが、紫色の何かであること――

「——ッ!!」

直後、何かが俺を打った。

凄まじい風圧——いや、水圧だ。水蒸気状に拡散された奴の毒液、それがあれの正体らしい。その勢いはもはや気体の範疇を超えており、粒子化した水ブレスのような、そんな錯覚さえ覚える。ガノトトスの水ブレスと何ら変わらない激流だ。体が二つに分かれそうなくらいの、猛烈な勢い。

——だが、本当に恐ろしいのはここからだった。

「……チツ……うっ、何か、気持ち悪っ……!?!」

モロに浴びた俺は、衝撃と共に猛烈な吐き気に襲われた。

鼻腔の奥に腐った果実を詰められたような、そんな奇妙な感覚。全身が震える。痛い、寒気がする。

「……くうっ、シガレット……!」

苦しそうな声が、原生林に響いた。背中を崖に叩き付けられたのか、崖下で伏せているヒリエツタ。彼女が悲痛な声を絞り出している。

一方で、真上から響く、喉を震わすような声。吐きたいものを吐いてすつきりしたと言わんばかりの表情。それで顔を埋める奴——オオナズチは、満足そうな声を上げた。

「何だったんだ……今の、ツ……」  
撒き散らした。

散布するように放ったあの毒霧を、首を振り回しては撒き散らした。奴がとつた手段は、それだろう。

あまりの衝撃に、一体何が起こったのか分からなかった。気付いた時には、これだ。

——これが、オオナズチか。

足音が響く。

巨体が大地を踏み締める、力強い音。歩く度に水が跳ね、波ができる。それが地に伏せる俺の頭を撫でた。

霞龍、オオナズチ。姿を眩まし、強烈な毒を操る龍。珍妙な見た目をしているくせに、名に恥じぬ強さを持つようだ。あの瘡瘴と同等か、もしくはそれ以上か——

「ニヤー、ハンターさん！ これを！」

霞みゆく意識の中で、ネコの声が響く。どこか気の抜けた音色と共に。

この音は、聞いたことがある。イーオスの涎を浴びせられた時。リオレイアの尾を受けた時。そんな時に聴こえる、あの音。オトモアイルーがよく吹いている、あの笛の音色だ。

薄く青い粉塵が、笛から舞い散った。音色によつて大気に拡散されるそれが、空気に

紛れ込んで俺の中に入り行く。少し、身体が軽くなったような気がした。

「……解毒笛、か。お前ら……」

若干和らいだ痛みを抑え込み、何とか体を起こす。軽くなったように思っても、まだまだ重い。立ち上がるには、もう少し時間が掛かりそうだ。

——不意に、水が飛び跳ねた。オオナズチが、歩き出したのだ。驚いては笛を落とす、アイルーに向けて。

「ニヤ、ニヤニヤッ!?!」

「……チイ、待てこの泥棒が!」

「や、やめて……っ!」

伸びる舌。ぎらつく眼光。舞い上がる、巨体。

俺が起き上がるより、早く動いた奴。ヒリエツタが立ち上がるより、速く駆ける奴。その魔の手に怯え、動くことのできないアイルー。

絶体絶命だった。このままではあの子が、オオナズチに——

「——うあッ!?!」

その瞬間。オオナズチが大口を開ける、まさにその瞬間。

耳の奥が、キンとなった。まるで気圧が変わったかのような、鋭い感覚。何かが詰まったような、気持ちの悪い痛み。唾をぐつと飲み込んで、その感覚を慌てて打ち消

す。

それと同時に、突風が舞った。

大気を穿ち、風を裂いて、視界を掻き回す。そんな猛烈な突風が、このエリアに弾け飛んだのだ。本能を露わにして走る、オオナズチ——の、その尾に向かって。

「キュアアアツ?!」

瞬く視界の中で、派手に横転する奴の姿が見えた。霞を押し退け、水を撒き散らし、紫色の巨体が倒れ込む。

同時に舞い上がる、一つの影。まるでゼンマイのような、イカの足のようなそれが、ドボンと、俺の目の前に着水した。

——奴の尾が、斬れた？

「……なツ……?」

「——え?」

驚愕のあまり体が凍り付く俺。それに対し、どこか現実味を感じさせない声を漏らしたヒリエツタ。

騒ぎ立てるように増えゆく雨に、鼓膜を打ち付ける騒がしい雨音に、左脚の付け根が軋んだ。傷が疼く。いつの間にか本降りに戻っていた雨。凄まじい豪雨に、霞も散らさ  
れていって——

——不意に、鋼の唸る音が耳に届いた。擦れるような、響くような、耳障りな音。そうかと思えば、凄まじい突風が舞う。ヒリエッタの見上げる、エリア8——の、その崖の上の方から。

「きやあつー！」

「ぐあツー！」

認識も追いつかない、その瞬間だ。目も開けていられないような、凄まじい衝撃が襲い掛かってくる。

耐えられないように、ヒリエッタは尻餅をつく。俺は俺で、立ち上がれない。視界が風で、激しく瞬く。

——そんな視界の中で微かに映ったのは、銀色に輝く何かだった。過剰なまでに広げた翼に、鎧を繋ぎ合わせたような強靱な体躯。この強風もまるで物ともしない、龍の姿。

「まさか……あれって」

「……嘘。もしかして——」

まるで鎧が擦れるような、そんな音。錆びついた空洞に吹雪がなだれ込むような、そんな空虚な咆哮が漏れる。

それは俺の脚と同じもの。この義足の基となったあの存在。ヒリエッタが会ってみ

たいと眩いていた、あの古龍。

「……クシャル、ダオラ……か」

悠然と現れた古龍、クシャルダオラ。突然の乱入者が、軋む鋼のような唸り声を上げる。

一方のオオナズチも、黙つてはいなかった。あの凄まじいまでの突風。それで自らの尾を切り裂いた外敵。崖の上のクシャルダオラを、そう認識しているようだ。

一步、また一步。オオナズチは歩き出す。もう俺にも、ヒリエッタにも、アイルーにも、全く関心を抱いていない。ただ一心に、高台で見下ろす敵だけを見ている。

「……クシャルダオラ……やつと、やつと——」

「伏せろ、ヒリエッタ！」

半ば放心状態でクシャルダオラを見る、もう一人の人物。念願の古龍にやつと会えたためか、まるで周りの状況が見えていない。鎌首を上げて、その喉奥で空気を圧縮している奴にも、彼女——ヒリエッタは全く警戒していなかった。

あの気圧は、何かマズい。きつと、何かが起こる。

そう直感した俺は、立ち上がりつつあるヒリエッタを再び押し倒した。背後で弾ける何かから、覆うように彼女を庇つて。

「ひゃっ——」



「チツ………」

凄まじい風だ。まるで台風がいきなり現れたかのような、そんな突風。立つこともま  
まらない、強烈な風圧。そのあまりの威力に背中のマントが軽々と千切れ、無残にも  
粉々になった。

「——黒い、竜巻………」

ボソツと、ヒリエツタが声を漏らす。

俺の背後に現れた風。ゆっくり近づくとオオナズチを狙ったのであろう、気圧の塊。そ  
の様は、一体何を固めたのか分からない、真っ黒に染まった風だった。大気中の塵でも  
混ぜたのか、煤けた鋼の粉末でも入れたのか。

だが、そこにオオナズチの姿はない。大地を掘削するその竜巻の中には、いやその周  
りにも、オオナズチの姿はなかった。一体どこに行ったのか——

「……ッ！ 上か！」

飛翔する、半透明の何か。

ぼやけた輪郭線に、曖昧な色。半透明の奇妙な物体だが、それは確かにオオナズチの  
姿をしていた。先が欠けた尾を振り撒いて、崖上のクシャルダオラに肉薄する。

——同時に、クシャルダオラも飛んだ。その巨大な翼をためかせ、豪雨の中を泳  
ぎ始める。二頭の古龍が、空を駆けた。

唸りながら、吠えながら。そうして二つの影は、瞬く間に原生林の闇の中に消えていく。あれだけの巨体が、空を覆う雲の中に溶けてしまった。俺たちのことなどまるで覚えていないように、あつさりど。

このエリア3には、もう奴らの気配は無い。あるのは、うつすらと残る霞と、未だ激しく振り付ける強烈なスコールだけだった。



「……凄い。アレが古龍……アレがクシヤルダオラ。……かっこいい」

夢心地な様子で空を見上げるヒリエツタは、微かにそう呟いた。

どんよりとした雲で覆われる原生林。古龍の気配こそ無くなれど、未だここには他のモンスターは現れていない。依然として異常な状況だ。

——それでも、目に見える脅威は撃退できたと言っただろう。この原生林の異常、それは巨大化したババコンガなど全く関係なく、あのオオナズチ。そして突如乱入してきたクシヤルダオラが原因だったのだ。

まさか二頭の古龍による影響だったとは。今頃古龍観測隊も大慌てだと見える。

「大丈夫か？ ぼーっとして」

「……うん、大丈夫」

「何か、夢見る乙女みたいな顔してんぞ」

「え、そう？ えへへ……」

「……良かったな、クシヤルダオラに会えて」

「うん……っ！ 嬉しかった！ 格好良かった！」

「お、おう。流石だな……。俺は少し寒気がしたぞ」

「え、まあ、そりゃあ私だつて怖かったわよ。……古龍の前では、人間なんて蟻みたいにちっぽけな存在なんだね」

「……そうだな。あんだけ懸命に戦ったのに、オオナズチだつてクシヤルが来たら俺らのことガン無視だもんな」

「まあ、そのおかげでネコちゃんが助かったのは、結果オーライだけど」

「間違いない、終わり良ければ全て良しだ」

「うん。……だからといって、さも当たり前のように古龍まで食べようとししないで欲しいな」

「ん？」

じっくり丁寧に焼き上げた、オオナズチの鞭尾。串に刺しては火にくべていたそれを見て、ヒリエツタは呆れ声を漏らした。

見た目は、紫色のゲソだ。ゼンマイのようにも見えるが、弾力性のあるその身がどうも軟体生物らしさを感じさせる。渦巻いているその様は、タコ足のようにも思えるが。醤油、砂糖、酒、そして生姜おろしと山菜組大根おろしのブレンド。それらでじっくり味付けしたオオナズチの鞭尾焼きは、色さえ除けば巨大化したゲソ焼きそのものだった。香ばしいその香りは、屋台で見かけるゲソ焼きのそれ。ダイレクトに食欲を刺激する、凶悪な香りだ。

「見ろよこれ。うんまそうだなあ……！」

「……オオナズチよ？ 毒持つてるのよ？ 普通食おうとしないわ」

「旨そうなものが目の前にあるのに、それを食わないのが普通なら、俺は異常で構わない。いただきまーす！」

思いきりかぶりついたそれは、何とも言えぬ弾力を顎にもたらした。

じゅうじゅうと香り溢れるその表面が、照り付けた炎によって香ばしく焼けている。その焼き目からは醤油や生姜の奥深い香りが飛び交い、その豪快な食感からは独特な味わいが溢れてきて――

苦味と渋味。何とも言い難い、奇妙な味わい。見た目とは裏腹にねつとりとした味が溢れ出す、そのクセは中々に強かった。しかし、そこからじっくり、えも言えぬ旨みが溢れてくる。マカ壺で熟成させた肉のように、旨味が隅々にまで染み込んだ旨み。苦

味やら渋味やらで口の中を掻き回された後で舞い降りるその旨みは、それらを考慮しても十分すぎる味と言えよう。

見た目はゲソ焼きのようでも、その味わいは随分と違った。あつさり、だつたり淡泊さ、だつたりとは程遠い、ねつとりと執拗に感じさせてくる旨み。えぐみといったクセの強さは、まるでホヤのようだ。黄金芋酒あたりと食べ合わせても、美味しくいただけそうな気もする。万人受けはしそうにないが、知る人ぞ知る珍味になり得るだろうか。「ん……うん、なるほどなるほど……」

ごくりと呑み込んで、齧った身を胃に落とす。

中々どうして、満足感のある食べ応えだ。オオナズチの肉、悪くない。

「お、骨だ」

「え？ あ、ほんと……」

「案外、尻尾って骨が太いんだな。食べられるところ、見た目より少なそうだ」

「……オオナズチに食材としての需要はないからどうでもいいわ」

齧っていくと、それほど間を開けず骨が顔を出した。この渦巻いた尾を描く、太い骨の太さに対して驚くほど軽いのは、この骨の内部は空洞——ということか？

中々どうして、面白い食材だ。飛竜の肉とも、頭足類の肉とも言い難い独特の感触。貝類のような奥深さを感じさせながらも、長い時を掛けて仕込んできた重みを感じさせ

る肉の味。それは何といつても、肉らしさを感じる味だった。

キリン亜種に続いて、古龍を食べたのは二度目だが——古龍の肉というのも、悪くはない。他の肉では味わえない、何とも希少な風味——

「……ん？ 何か、腹が——いてえッ!? いで、いででで……ッ!」

「ニヤッ? ハンターさん、どうしたのにや!」

「ニヤ、ニヤ。だ、大丈夫かニヤ?」

「……はあ、やつぱり。当たったのね……」

呆れたように頭を掻くヒリエッタ。驚いて、尻尾を膨らませるアイルーたち。

それらが視界に映りながらも、俺はどうすることもなく膝をついた。立てない、膝が動かない。体中が痛い。皮膚が剥がれ落ちてしまいうさだ。

まさか、毒? 解毒効果と名高い山菜組大根まで混ぜたのに、それでも毒は打ち消されていかないというのか? 古龍の毒には、この大根じゃ通用しない——?

「ニヤー、ネコタク再開だニヤー! ……って、早速仕事ニヤー!」

狂竜症にも負けないくらい、訳の分からなくなつた感覚の中。ガタガタとネコタクを引きずつてやってきたネコタクアイルーの、驚いたような声が耳に届く。

言わんこつちやないと、呆れたヒリエッタの吐いた盛大な溜息が、妙に耳に残っていた。

——オオナズチなんて、もう二度と食うものか。

倒れゆく視界の中で、霞ゆく意識の中で。猛烈な寒気と内側から炙られるような痛みを味わいながら、俺は静かに、そう誓った。

く本日のレシピく

『霞鞭尾のゲソ風焼き』

- ・ 霞龍の鞭尾 …… 1本
- ・ 醤油 …… バケツ 1杯
- ・ 砂糖 …… 超大さじ 3杯
- ・ 酒 …… バケツ 1 / 2杯
- ・ ヌクモ生姜 …… 2く 3本
- ・ 山菜組大根 …… 1本

## げどく草に塩

「う、うう……オオナズチ……こわい……」

「旦那さん、しつかりするにや」

ベッドの上で大の字になっては、うんうんとうな覽されている旦那さん。何やら苦し気に寝言を漏らしては、また一つ額に脂汗を浮かべた。

ベッドの横に置いたバケツは、今はもう綺麗なままだ。つい此間までは旦那さんが吐き出したもので溢れていたけど、今はまあ随分と落ち着いている。ようやく容態が安定してきたみたい。

「タオル変えるのにや。ちよいつと失礼、にや」

そんな旦那さんの額に乗ったタオルを手取る。しつかり冷やしたはずなのに、今ではすっかり温くなつてしまつていた。まだまだ旦那さんの熱が下がっていない証拠にや。

そんなタオルを隅に寄せつつ、新しいタオルを冷や水で満たした桶から持ち上げる。しつかり、しつとり、旦那さんのおでこに当てて――。



「……毒……毒液……うつ」

「にや、一体どんな体験をしたのにやこの人……」

突然だった。

旦那さんがこの状態で運ばれてきたのは、本当に突然だった。

大老殿から知らせが来て、何でも旦那さんが成り行きで狩りに行ってしまったとか。旦那さんに限ってはよくある話なので、ボクは特に気にすることもなくいつものことだと思っていた。

だけど、まさかあんなことになるなんて。

「……オオナズチを食べるなんて。旦那さん、チャレンジャーにも程があるにや」

ギルドの職員と、一緒に来てくれた女ハンターさんが説明してくれた。何でも、遭遇した古龍、オオナズチの尻尾を食べたとか。

オオナズチといえは、強烈無比な毒を操ることで有名な古龍にや。とてもじゃないけど、人が食べるものじゃないの。

それでも食べてしまうのが、うちの旦那さんなのだけれど。

「まあ、命に別状はないみたいだけど。流石旦那さんにや」

お医者さんと呼んで、そして旦那さんを診てもらって。

そしたら物凄いことを言われたにや。古龍の毒が、ほぼ腹痛みたいな症状で済んでい

る、と。

お医者さん曰く、旦那さんの内臓が非常に強靱なため、だそう。こんがり肉を食べてれば強走薬なんていらぬ、秘薬が無くなってもマンドラゴラを直食いすればいいんじゃないかとさえ言われたにや。どんな早食いにも対応できる臓器、それが旦那さんのものらしい。つくづく、恐ろしい人にや。

「う、うーん……お腹、苦しい……減った……苦しい……」

「どつちなのにな、全く……」

それでもやはり古龍の毒は相当な消化不良を起こしているらしく、流石の旦那さんもこの状態にや。嘔吐はなくなってきたし、そろそろ何か食べれそうな気はするけれど。

不意に、部屋の中でまるで地震のような音が響いた。ベッドで眠る、旦那さんのそのお腹から。

「……やっぱり減ってるんにやね」

帰って来てからは何も食べてない旦那さん。そろそろ限界かもしれない。ここは一つ、オトモであるボクが何とかしなければ。

持ってきた桶を持ち直して、眠る旦那さんの鼻に、そつとボクの鼻を押し当てて。そうして、ボクはこの部屋を後にした。静かに、旦那さんに一言添えながら。

「ちよつと、行ってくるにや。精のつくもの用意するから、待つててにや」

◆ ◆ ◆  
街頭は、にぎやかだった。

今日もまた商売で繁盛しているドンドルマの街。ボクたちがこの街に訪れるずっと前に、鋼龍クシヤルダオラの襲撃があつたと聞いているけれど、そんな過去の出来事を微塵も感じさせないにぎやかさだ。その出来事がむしろ作り話じゃないかと、そう思えてしまう程に。

さて、どうしよう？ 精のつくものとは言ったものの、どういったものを作ればいいのか。病人のための食べ物といえば、おかゆが頭に浮かぶけれど——ただお米を炊くというのは、やっぱり味気ない気がする。

「……何か良い具材売ってないかにや？」

大通りに出て、いくつもの露店を回って。

それでも、目ぼしい物は見当たらなかつた。

もちろん、候補はある。解毒作用のあるげどく草だったり、旦那さんや山菜お爺さんが愛用している山菜組大根だったり。そうしたものをおかゆに混ぜるのは、きつと模範解答の一つなんだと思う。

だけれども。些かパンチが足りないような気もするの。もう少し何か、インパクトの  
ような何かが欲しい。そう感じてしまう程度には旦那さんに毒されているんだなあ、と  
改めて感じてしまうけれど、やっぱり何か欲しかった。

「精のつくもの……何かのお肉とかがいいんだけど……」

生憎、家のボックスのお肉は使えない。あれは旦那さんが回復した時に、と決めてい  
るのによ。だから、今はここで何かお肉を手に入れたいところ。

なんて考えていたら、いつの間にかクエストボードの前に出ている。数人のハンター  
さんたちがたむろしているクエストボード。屋外カフェのような場所に併設されたそ  
れに、ボクは思わず注目する。

「旦那さんも元気だったら、ここで一緒にご飯とか食べれたかにやあ……」

お茶やお酒を並べたり、大量のお肉を掻き込んだりするハンターたち。そんな光景を  
見ながら、ボクは小さなため息を吐いた。

——だめだめ。気弱になってちや、治るものも治らないにや。旦那さんがこうなつて  
いる今、ボクがしつかりしなきや。

「……何かモンスターの肉でも狩ってくる、とか？　でも、時間がかかるもんによあ。  
やつは無難に、お肉屋さんを見てこようかにや……」

ここから狩場へ移動するにしても、かなりの時間が掛かる。一番近い未知の樹海に行

くとしても、少なくとも一日近くの時間を要するだろう。旦那さんを放つて一日も家を空けるのは、あまりにも不安要素が大きすぎる。

そう思つて、ボクはボードに背を向けた。

まさに、その時だった。

「——大変だ！ 飼育していたウルクススが檻を壊して逃げ出した！ 闘技場で暴れてる！ 誰か、ハンターの誰か！ 討伐でいい、手を貸してくれ！」

だぼつとした清潔感の無い色の、動きやすさを重視した服装。幾つものポーチやカバンをぶら下げては、声を荒げて言葉を繋げる男性。そんな彼は、まごうことなき闘技場の飼育員だった。旦那さんに以前そう教えてもらったのだから、間違いないと思う。

それにしても、脱走とは。檻が老朽化していたのか、飼育員のミスなのか。どっちにしろ、これはハンターの出番のようだよ。彼の言葉に、ここに居合わせた数人のハンターが何かしらの反応を見せている。所詮はウルクスス。皆の顔に、そう書いてあるにや。

ウルクスス。

兎獸下目の牙獸種で、寒冷地に生息する中型のモンスター。寒さに耐えるためかその体には多くの脂肪分を保有しており、永久凍土の世界を活発に動き回るといふ。雪遊びのような行動も見られ、一部の愛好家には可愛いと評判なモンスター。

白兎獸の肉。多くの脂肪分。もしかして、美味しく食べれるかにや？ 兎肉というのもまた乙なものかもしれないにや。

——よし。

「はいにや！ ボクがいくにや！」

「お、本当か——つて、君はアイルーじゃないか」

「にやあ。巷で有名になりつつある、ニャンター——つて奴にや。ウルクススの討伐、任せてほしいにや」

「い、いやあ……でもなあ。君みたいな子じゃあ、ちよつと信用しにくいっていうか、ハンターに頼みたいっていうか」

「むむ、人を見た目で判断してほしくないのにや。こう見えても経験豊富にや！」

「気持ちは有り難いけど、やはりハンターの方が適任だと思うよ。だって君、アイルーでしょ？ 人間よりも小さくて非力だし。安心して任せられないなあ」

「うっ……にやう……」

訝しむ目でそう言ってくる飼育員さんに、思わず僕はたじろいでしまった。

仰る通りだと思う。ニャンターという概念はつい最近できたようなもので、このドンドルマにもあまり浸透してはいない。名も知らぬ小さなネコが鼻高々に名乗り上げて、白い目で見られることは必然だろう。

闘技場なら、時間を掛けないで済む。お肉を手に入れるのに願ったり叶ったりだと思っただけで、やっぱりそう美味しい話はない。期待しただけ無駄だったにや。

——なんて、肩を落とすボクのその肩に。細く白い綺麗な手が、ポンと乗った。

「……じゃあ、ハンターが同行すれば問題ないよね？」

そう言つてはにつこり笑う、ボクの肩に手を置いた女性のハンターさん。

薄い金色の髪を後ろに束ねたその容姿はとても美しく、騎士を思わせる白銀の鎧も相まつて、まるでお人形さんのようだったにや。

突然現れた彼女の姿に、目の前の飼育員さんも、周りのハンターさんたちも大きく騒めき始める。そんな彼女の右腕にひつついた大きな虫さんが、小さな声を上げた。



「あ、有り難うございますにや。助かりましたのにや」

「いいのよ。困ったアイルーちゃんがいたら助けるのが私の主義だから」

闘技場の控え室。そこで銃剣のような武器の手入れをするあの女性ハンター、ルーシャさんは、ボクにそう言つては優しく微笑みかけてくれた。そつと伸ばした手でボクの頬を撫でては、彼女は「それに」と言葉を繋ぐ。

「君のような可愛い子がいたら、お姉さんはほっとけないの。もうほんとに可愛いなあ」  
「にや、にやあ……」

いきなりボクにもふもふをかまし出したルーシャさん。その突然のスキンシップに、ボクは思わず困惑してしまう。

だけど、そのもふり方にはどこか既視感を覚えた。旦那さんのそれに近い、優しくて柔らかな触れ方。悔しいけど、少し心地いいと感じてしまうにや。

「ウルクスの素材が必要だったのね？ ふふん、お姉さんに任せなさい。さあ、行くわよ、イルルちゃん！ イリス！」

「にや……」

「ぴー……」

青まだら模様の銃剣を背にかけて、イリスと呼ばれた猟虫を腕に呼び。ルーシャさんは力強く、そう喝を入れた。ずんずんと進んでいくその姿。何だかとても頼もしいにや。

飼育員さんも納得し、他のハンターさんたちが名乗り出ることを抑えた。ルーシャさんの登場の効果はとも大きかったと見える。それは多分、それだけルーシャさんの知名度があるということなんだろう。多分彼女は、ドンドルマ有数の凄腕ハンターさんなんだにや。



「にや、ウルクススにや！ あれが今回のターゲットにやね」

「あちやー、何か氷まで散らばってるわね。さては檻に用意されたものを持ってきたのか、ドジな飼育員が落としたのか……」

歯車の悲鳴が鳴り響く控え室。そこを出れば、闘技場でのんびり散歩するウルクススに鉢合わせた。いくつもの氷塊を周りに敷いてはそのそと歩くその姿。何ともマイペースなモンスターだにや。

そんなウルクススに向けて、ルーシヤさんは背中中の銃剣を構えた。猟虫がいるってことは、あれは操虫棍に属する武器なんだろう。銃剣タイプは珍しいけれど。

「とりあえず、一発！」

その銃剣の先から、インクの塊のようなものが射出される。猟虫を操るに当たって重要になるもの——印弾だ。

それが鼻ぱっしらで炸裂し、ウルクススは仰け反るように悲鳴を上げた。そうしてボクたちに気付いたようで、のっそりと立ち上がっては低い唸り声を奏で始める。

同時に伝わってくる、印弾の刺激臭。猟虫の目印となるその強烈な臭いに、ボクは思わずたじろいってしまったにや。

「来るわよ、イルルちゃん！」

「にや、にや！」

突然、散らばる氷に腹を這わせ始めるウルクスス。そうかと思えば、勢いよくこちらに突進を繰り出した。氷海でスカウト待ちしていた頃によく見た、ウルクススの滑走突進だ。

ルーシャさんの発破を受けながらも横に跳んでその射線から退避するボク。しかし、ボクにそう発破をかけたルーシャさんはといえば、余裕の表情でウルクススを迎えようとしていた。ふふんと、小さく鼻を鳴らしながら。

「さあお行き、イリス！」

「ピュイー！」

甲高い声で返事をするイリスという猫虫は、羽を震わせては腕から飛び立つ。その小刻みな羽音と共に、こちらに滑ってくるウルクススの、その鼻へと突撃した。印弾の着弾点に、正確に。

それと同時に、ルーシャさんも前へ出る。ウルクススが猛然とこつちにやってきているといふのに、勇ましく前へ。

そうして、彼女もまた、ウルクススの鼻へ跳んだ。

「はあっ！」

「にや、にやあ!？」

踏み出したのは、その細い右脚。白い装甲で包まれたそれで、彼女はウルクススの鼻を踏み付けた。そうして、勢いよく跳躍する。

何ということか。彼女はウルクススを踏み台にして、上に跳ぶことで避けたのだ。そうして、がら空きになった兎の丸いその背中に、長い長い銃剣を叩き付けた。回転する刃が、鈍い音を立てた。

「にや、にやんて無茶な……!？」

「これくらい普通よ! さあ、どんどん行くわよ!？」

縦回転をしながら着地を決めたルーシャさん。そこから、棍を振り回す連撃を叩き込む。

ルーシャさんの持つランポス武器は、斬れ味があまり鋭くない鈍重な武器。旦那さんはそう評していたにや。でも、鈍器として扱った時、それはあまりある威力を放つと一。

「むっ……!？」

左肩の上を薙ぐように、力強く振り回した銃剣。それを地面に擦るように止めると、ルーシャさんははつと顔を上げた。その視線の先には、鋭い氷爪を振りかざすウルクススの姿が。

瞬間、彼女は振り抜いた棍を背後に突き刺した。そうして、その棍を軸に跳躍。蝶のように、白い曲線が宙を舞う。

バックジャンプ。棍を用いたバックジャンプで、迫り来る爪を躲したのだった。そのまま、宙で再び銃を撃つ。

「にゃあ、格好いいにゃ!」

「なんのつ、もういつちよ!」

ボクが歓声を上げる中、ルーシャさんはさらに棍を振った。刃先とは逆の、肩当となった銃の先端。ぼうつと、そこを光らせる。

その瞬間、再びイリスが羽を鳴らした。一直線に滑空するイリス。その小さな体が、ウルクススの身に傷を入れる。

着地するルーシャさんの腕に、役目を終えたイリスが舞い戻った。ふうつと、銃口から溢れる煙を散らすルーシャさん。とつてもスタイリッシュなのにな。

「むむ、ボクも負けないのにゃ!」

爛々と対抗意識を燃やし、ボクも背中中の武器を振り抜いた。勢いよく宙を裂くそれは、ウルクススの柔らかい肉を斬る。肉の感触は、柔らかい食感の出るお肉のそれにや。

なんて旦那さんのようなことを考えながら、ブーメランを二本取り出した。すれ違うように振った剣を口で咥えつつ、両手のブーメランを投擲する。新たな外敵を認知した

ウルクススのお尻突進。そのお尻に、二本の刃が勢いよく突き刺さった。

「やるじゃない、イルルちゃん！ よし、その調子で畳みかけるわよ！」

「了解ですにやつ！」

ルーシャさんが銃を乱射し、隙を作る。その隙を縫うように、ボクは剣を振り、ブーメランを投げた。

振った反動で少し硬直するボクに、ウルクススは容赦なくその巨体をぶつけようとしてくる。そこに入り込む、イリスの猛突進。ルーシャさんとの波状攻撃。ナイスなコンビネーションだにや。

「……っ！ イルルちゃん、ガードして！」

「みやつ？ にや、はいにや！」

振り被った剣を、言われるがままに顔に寄せる。鋭い注意喚起に応えるようにして翳した剣。ボクの小さな体を覆って、巨体との間に壁を生やした。

突如訪れる、横滑りをするようなタツクル。ウルクススが周囲を薙ぐように滑走したのにや。

地面に散らばった氷を削るように繰り返したそれは、激しい砂埃を上げながら乱回転する。巨体も相まって、その勢いは強烈の一言だったにや。ボクの体が軽く吹っ飛んでしまうくらいに。

「にやわっ!？」

「イリス! イルルちゃんをカバーするわよ!」

「キュピー!」

一回転したその体を、鋭い爪で地面に留める。そうして急停止したウルクススをキツと睨みつけたルーシャさんは、再びイリスを飛ばした。ウルクススに負けじと乱回転するイリスに、兎の小さな悲鳴が上がる。

そうして気を引いて、逆に自身から注意を逸らしたルーシャさん。その隙を縫うように、彼女は力強く剣を刺した。ウルクススに——では、ない。彼女の足元の、その先に。

あんな場所から跳躍かにや? 距離が空きすぎて、そこで跳んでも届かないのでは。そう思った、その瞬間だった。

「やあっ!」

ただ少し違ったのは、彼女が勢いよく走っていたこと。

それが功を奏したのは、跳んでからだだった。ただ前へ、できるだけ前へ。

ネコの剣術の中に、大車輪のように縦回転を繰り返す技がある。彼女の動きは、それに瓜二つだった。走る勢いを、操虫棍の伸縮性を利用した大ジャンプ。それが前へ前へ、剣を振り回す突風へと成り変わった。

「凄いにゃルーシャさん……。旦那さんとは違う、繊細な身のこなしにゃ……。ゴリ押し旦那さんとは違うにゃ。にゃ、ボクだって、カバーされてばつかじや嫌にゃ！」  
剣を口に咥え、両腕を地に付ける。

二本足じゃ、遅いにゃ。追い付くためには、四本足の全力ダツシユなのにゃ。

「——え、ちよつ、跳ん……。っ!？」

慌てて走る矢先、勢いよく飛び上るウルクススが見えた。丸い巨体が宙を舞い、その豊満な肉付きのお尻を落とす。あまりの勢いに、地面が揺れ響いたにゃ。

その衝撃で体勢を崩されたルーシャさん。受け身もとれず尻餅をついて、大きな隙を晒す。そこへ牙を剥くウルクスス。まるでハグでもするかのように、その両腕を大きく広げた。アオアシラにも見られる、牙獣種特有のあの動き。それが一心に、ルーシャさんへと襲い掛かったのにゃ。

「ちよつと待ったにゃー!」

右手で武器を持ち直し、左手でブーメランを引き抜いて。

そうして繰り出した突進回転乱舞。ハグをする瞬間のウルクススのその腹に、ボクは両の刃を叩き付けた。

悲鳴を上げるウルクスス。

舞い上がる血飛沫。

赤く染まる白毛。

突き刺さる、ブーメラン。

「(ハハ)にやー」

ルーシャさんの真似をするように、ブーメランに足を掛けてみる。それを踏み台にして、ボクは兎のその上へと跳躍した。

——旦那さんの真似をするかのように。旦那さんのお師匠さんに教わったように。

背中ของポーチからまたブーメランを取り出して、左手に収める。右の剣も、左のブーメランも。逆手で握り直したそれを、今度は重力に従うままに、ウルクススに振りかざした。ざっくりと、肉を断つ感触が手に残った。



「……うんうん、良い感じの味だにや」

ドンドルマ居住地の、一軒家。そのキッチンで鍋と向かい合っては、ボクは思わずそう漏らした。

そんなボクの目の前には、小振りな鍋が一つ。そこで煮え滾るおかゆの柔らかな香りに、ボクの髭はピクピクと靡なびいていた。



細かく刻んだげどく草に、おろし状に擦り下ろした山菜組大根。お腹に優しい野菜の中で一際目立つ、白兔獣のもも肉。食べやすいように細かく刻んだそれを落とし、じっくり炊いたそのおかゆは、柔らかで温かい、優しい香りで満ちていた。

「ちよつと味見にや……」

猫舌には厳しいアツアツなそれを、レンゲでそつと掬う。ふうふうと小さく息を吹きかけながら、ボクはゆっくり口を閉じた。

閉じられた世界で充満する、おかゆの香り。トロトロになるまで煮込まれたウマイ米の香りが、すうつと、ボクの鼻孔を突き抜けた。お米が炊けるあのクセになる香りとは違う、柔らかさが強い仄かな香り。それと同時に広がる、お米の薄い旨み。いつものもちもちした食感がないために少し困惑してしまうけれど、その味わいはお米そのものにや。

味付けは、醤油とごま油。そこに出汁と生姜やネギをちよつと入れて、とどめにウルクススの肉汁をじっくり融かす。そうしてできた味わいは、インパクトが薄いながらも、しつとりと舌に塗りたいくるような旨みでできていた。良く言えば淡泊、悪く言えば味が薄い。でも、病人のためのご飯なのだから、食べやすさが一番なのをや。

すつかり柔らかくなつたげどく草も、お米とお肉に溶けた大根も、温かなおかゆに溶けている。まさにこれは、お腹に優しいご飯なのをや。これなら旦那さんも、きつと食

べれるにや。

「……旦那さん、お邪魔しますにや」

こそつと、旦那さんの寝室にお邪魔した。

お腹を痛めて苦しそうに唸っていた旦那さん。そんな彼に、少しでも早く元気になつてもらいたい。そんな想いを込めて作ったのにや。

何とか起こして、これを食べさせてあげたい。旦那さんは、起きてくれるかな？

「……イルルか」

——けれど、そんな心配は杞憂だった。部屋に入れば、上半身を起こして窓を見る旦那さんの姿があつたの。相変わらず顔色は良くないけど、平静を保てるくらいには回復しているようにや。

そんな彼がボクの方を振り返る。少し落ち着いた表情の旦那さん。何だか久しぶりに見た気がするにや。

「旦那さん、ボクおかゆを作ったのにや」

「ああ、匂いで分かったよ。何だかともいい香りがするな。心が安らぐような……」  
「にやー、味の方も自信ありなのにや。それはそうと、調子はどうにや？」

「まだまだ気持ち悪いし、頭が痛いよ。それ食べたらまた寝させてもらうな」

「わ、分かったにや……。早く良くなつてにや、旦那さん」

左手には器を乗せて、右手にはレンゲを持つて。

そうしてベッドに腰かけては、旦那さんのすぐ隣を陣取つた。肩が触れるくらいの距離に身を置いて、早速器にレンゲを落とす。ホカホカとしたおかゆを乗せては、それを旦那さんに向けて伸ばした。

それをさもいつも通りのように、旦那さんは口にする。目を閉じてはもぐもぐと顎を動かす彼の姿。何だか、テストされてるような気分だにや。

「ん、あつたけえ。……何か、あつさりしていいな。食べやすいや」

「そう言つてもらえて良かったにや！ 安心したにやあ」

「これは……げどく草か？ ずんぐりとした苦味が良い感じ。んで、これは……肉？

何の肉だこりや」

「ウルクススのお肉、入れたのにや。柔らかく煮込んだから食べやすいとは思うけど……」

「へえ、白兔獣か。もしかして、獲つて来てくれたのか？ 有り難うな」

「にや……」

そつと、旦那さんがボクの頭を撫でてくれたにや。優しく、ゆつくり、擦るように。いつもより熱い旦那さんの手だけど、やっぱり大きくて、逞しくて。そのくせ優しい

手付きで撫でてくれるのだから、そのギャップが何だか微笑ましいのにや。旦那さんに撫でられるの、大好きにや。

「二人で狩ってきたのか？ 氷海まで行って？」

「にやにや、闘技場の子にや。それも、成り行きでハンターさんに手伝わってもらったのにや。友達になつてくれたから、今度紹介するのにや」

「……俺が寝てる間に、色々あつたんだな。イルルの友達か、楽しみにしてるよ」

一人前のおかゆを、ペロリと平らげた旦那さん。気持ち悪いとか頭痛いとか言う割に、お腹は正直なのにや。

軽くボクをもふもふしてから、旦那さんはまた横になつてしまった。

今では、ボクの目の前で小さな寝息を立てている。いつもの豪快なびききではない、小さな小さな寝息。やつぱりまだまだまだ苦しそうなのにや。

そんな旦那さんの寝顔を、ボクはしばらく見つめていた。顔色が悪いとはいえ、どこか安心した様子で眠る旦那さん。ご飯を食べたからか、ボクをもふもふしたからか。

後者だったら、嬉しいな。

「……イルル……」

「うにゃ?」

「大………ず………」

「ず?」

「………大好きだぞ………」

「にゃつ?? え、旦那さん?」

「………ん(ん)………」

「………何だ、寝言かにゃ………」

もぞもぞと身を振りながら、旦那さんは再び小さな寝息を立て始める。いつもの旦那さんらしくない、弱々しい姿だ。だけど、それが悪いとは思わない。それどころか、何だか庇護欲が掻き立てられるような、そんな気さえしてくる。

そつと添えた肉球に、微かに触れた旦那さんの頬。ぴくつと身じろぐ旦那さんのその鼻に、ボクはもう一度自分の鼻を押し当てた。

「旦那さん………ボクも、旦那さんのこと大好きなのにゃ」

——それはきつと、旦那さんの“好き”とは違う“好き”なんだろうけど。

それでもボクは、旦那さんのことが“大好き”なのにゃ。

く本日のレシピく

## 『イルル流毒消し粥』

・ウマイ米	……1.5合
・醤油	……適量
・水	……2L
・ごま油	……5cc
・山菜組大根	……40g
・白兔獣のもも肉	……25g
・お出汁	……適量
・塩	……お好みで
・生姜	……8g
・ネギ	……6g

## 鯛も一人じゃ旨からず

「旦那さん、はいあーん、にゃー！」

「……何だこの状況」

晴天のドンドルマ。浮かぶ雲が美しく、吹き抜ける風は穏やかだ。暖かい外気に、我が家のソファアは満足気な軋み声を描く。

そんな視界から、香ばしい肉の香りが照り付ける。その香りの源を箸で掴んでは俺に向けるイルルが、満足気に微笑んでいた。

溢れる香りは鼻孔を突き抜けるように鋭く。舞い上がる肉汁は、砂金のように滴つて。

そんな鮮やかな肉と、ニコニコと華やかな笑顔を浮かべるイルルを見比べて、俺は小さく言葉を繋げた。

「……えつと、イルルさん？ これは何なんだ？」

「にゃんにゃん。旦那さんが元気になったからその祝いに、焼き肉パーティーなのにな」

「……焼き肉パーティー……祝い……」

「旦那さん、この前こんがり肉の食べ比べしたいって言ってたにや。それでボックスにお肉貯めてにやね？ 今日それを使っちゃおうにや！ はい、あーん！」

「いや、えつと……それはそうだけど、こんな形にするつもりじゃ……」

「いいからいいから！ ボクの育てたお肉にや、さあ食べて！」

「もぐう!!？」

突然焼ける、俺の唇。じゅうつと、肉汁滴るそれが俺の口の中に猛突進を繰り出した。

よく焼けたそれは、弾力性のある身が特徴的だった。若干ハリを無くした弾力性。ゴムのようでありながら、何とも言い難い柔らかさを秘めている。そして、噛む度に溢れる肉汁が、脂分の多いそれがくどいながらも、確固とした肉らしい味わいをもたらした。

その脂分のためにそうたくさんは食べられないくどさだが、少量ならば問題ない。俺の口の中に、脂をどんどん塗りたくっていくそれ。その味は、この肉は——。

「……ズワロポスカ？ これ」

「そうにや、豊富な脂が魅力のお肉にや。美味しいにや？」

「うん、美味しいよ」

その一言であつと顔を輝かせるイルルに、そつと手を添える。俺の手に頬を摺り寄せては、満足そうな声を上げる彼女。その様子はといえ、心の底から喜んでいるかのよう。どうやら、相当心配かけてしまったようだ。



互いの頬と頬を寄せるようにその柔らかさを享受していると、庭からすつと横槍が飛んでくる。ランスの突進よろしく突っ込んできたそれ、もとい男は、やれやれといった感じに手の甲を額に乗せた。

「はあく、相変わらずアツアツだねえ。焼き肉より熱いやこりや」

「……イズモ、お前何でここにいるんだよ」

「イルルちゃんに呼ばれたからに決まってるっしょ？ あそこで野菜焼いてるアイツと同じく、ね」

後ろで長髪をひとまとめにして、長い黒髪を靡かせる男、イズモ。ユクモ村を拠点として活動するコイツが、今俺の目の前にいる。

その背後には、金網とにらめっこしながら野菜を焼くトレッドの姿が。イズモの言葉でこつちを振り向いては、右手のトングをゆっくり揺らした。

「トレッドまで……。イルルが呼んだのか……」

「ボクの知る限りの旦那さんの知り合いを呼んでみたにや。ギルドカードを漁って、にや」

「……枚数の少なさに驚いただろ？ どうせ友達はいないよーだ」

「……って旦那さんがいじけると思って、ボクも友達を呼んでおいたにやん」

「友達……？ この前言った、ウルクススと一緒に狩ったっていう？」

自然と口から流れ出た疑問を、イルルは首を摺り寄せて肯定する。

先日、俺はオオナズチの毒によって腹をやられ、数日間床に臥すこととなっていた。その際、イルルが作ってくれた特製おかゆの製作に関わったハンターがいるのだから。

一体どんな奴かと思っていたが、まさかこうも早く相見える日が来るとは。まあ、イルル曰くその人物は遅れてくるそうだが。それまでは、折角イルルが催してくれた焼き肉パーティーを楽しむことが吉だろうか？

「……待てよ、俺のギル力を見たってことは、ヒリエッタまで呼んでるのか？」

「いやあ、この前旦那さんを運んでくれた人にやね？ 誘ってみたにや、来るかどうかは分からないけど」

「——ヒリ……エッタ？」

首を傾げては困ったように言うイルル。その言い分に納得して、小さく息を吐く俺。

そんな折りに、やや不可解そうな色に染まった声が飛んできた。肉を焼いていたイズモの、その口から。

「どうしたんだ？ 知り合いか？」

「いや、ちよつと……聞いたことある名前だなあつて」

「……ふうん？」

彼らしくない、歯切れの悪い返事。それで口を満たしながらも、彼は少し戸惑うような素振りを見せた。

そんな彼の焼く肉からは、悲痛な悲鳴が舞い上がる。

「……イズモ、肉が焦げてますよ」

「うえっ!!? やべえ!」

慌てたイズモが肉をひっくり返すが、そこには黒蝕竜もかくやという程漆黑に染まった塊が。グズグズに崩れるその肉塊に、注意を促した当人、トレッドは小さなため息をついた。

料理に関しては定評があるイズモだ。認めたくないが、今の俺を作った大きな要因の一つにアイツはあるのだと思う。だからこそ、アイツがそんなミスをするのは何だか珍しいと感じた。それほどまでに、彼にとつてヒリエッタという言葉に因縁でもあるのだろうか。

「……ここね。お邪魔するわ、シガレット。……うわ、何この臭い」

噂をすれば影が差す。

その言葉を証明するが如く、庭の門が突然開け放たれた。そこから足を踏み入れてくる、ジンオウウシリーズの少女。ヒリエッタ、その人だ。

「おつす、本当に来たんだな」

「シガレット……随分顔色良くなったじゃない。元氣そうで何よりね」

「おかげさんで。ま、折角来たんなら肉食ってけよ」

「うん、そうさせてもらうわ」

どつさりど、持参したのであろうアプケロスの生肉を取り出すヒリエツタ。先日オオナズチと共に挑んだ時より幾分良い顔をしている彼女は、それらを取り出しては金網の空き地に並べ始める。

そんな彼女に釘付けになっていたイズモ。彼は何度も彼女を見ては、何かを思い出すように首をひねっていた。

「んー？ あれー？ ……何か、何だろ。うーん」

「……？ 何、どうしたのアンタ」

「え、いや、え？ ……お宅が、ヒリエツタ……さん？」

「ええ、そうよ。アンタは？」

「い、イズモだ」

「そう、イズモね。覚えとくわ」

簡素な返事で会話を切ろうと、ヒリエツタは足首をずらす。半身翻すようにずらされた足首。それに伴って、胴体も足の向きに同調する。

しかしそのまま体が動く前に、彼女の動きは止められた。すつと伸ばされた、イズモ

の手によって。

「あ、ちよつ、待ってくれ」

「……………？ 何よ？」

「……………あのさ、オレら……………どつかで会ったこと、ないかい？」

「……………はあ？」

あまりにも唐突に飛び出した、イズモの言葉。それを飲み込んで、ヒリエツタは怪訝そうに眉を動かした。

トレッドは啞然とトングを落とし、イルルはあんぐりと口を開ける。俺はといえば、突然過ぎるその言葉に俺自身の言葉を失った。何とも使い古された台詞回しだと、そう判断せざるを得ない。

そう感じているのは、ヒリエツタも同様なようだが。

「……………そんな古典的なナンパ法、今じゃ通じないわよ」

「い、いや、ナンパじゃなくてさ、その……………何でも、ないです……………」

「……………？ まあ、いいわ。ついでに、そっちのガンナーさんは何て言うの？」

「え、僕ですか？ 僕はトレッドと申します、どうぞよろしく」

所在なさげに言葉を失ったイズモと、不思議そうに彼を見るヒリエツタ。何だか、奇妙な組み合わせだ。

一方で、トレッドとの自己紹介も終え、ここにいる全員が顔と名前を一致させる状況ともなった。こんな一癖も二癖もある奴らを集めたイルル。我が相棒ながら、恐れ入る手腕だ。

当の彼女は、イズモの突然のナンパに困惑気味なようだが。

「にやにや……何にやこの状況……」



「ちよっバカ！ 何冷やした肉をそのまま焼いてくれちやつてんの!？」

「何よ、うっさいわね！ だったら何だっっていうのよ」

「常温に戻してから焼くのが鉄板でしょーがっ！ 折角の肉がゴムみたいになるって分かんないのかなあ!？」

飛び交う怒号に、けたたましい喚き声。

焼き肉を巡って、俺の目の前には波乱万丈な光景が浮かんでいた。

見事に焼き肉奉行を発動させたイズモ。この状況は、その一言に尽きる。

「……はあ」

「いやいや、トレッドお前ひとごと他人事ひとごとみたいなの溜息ついてんなよっ！ 自分のレアオニオン

見てみる！」

「え？ いやよく焼いてますけど」

「バツカ！ 焼け方が枯葉まつしぐらなんですけど！ ホイル使つてホイル！」

爛々と輝かせる瞳。それを当てられて、トレッドは困ったように眉を顰めた。

イズモは、食にうるさい。俺がタンジァギルドにいた頃から、こんがり肉の焼き方にもいちいち口出ししてくる奴だった。

付き合いの長いトレッドは慣れたものだろうが、ヒリエツタはそうはいくまい。現に、彼女はものの見事に苛々している。俺がいつかの熱いお茶の話をした時よりも、幾分か酷く。

「ヒリエツタ、ピーマンは丸ごと焼くべきだよっ！ センスもつてセンス！」

「扇子う？ 焼き肉するのに扇子なんか……使えないこともなさそうね」

「使えるじゃなくて、もつもんでしょセンスつてのは！」

「持つて使う、でしょ？ てか扇子じゃなくてもうちわの方が向いてるんじゃない？」

「その扇子じゃなーいっ！ もつところ、なんだ……研ぎ澄ます方！」

「扇子研いでどうすんのよ!？」

「ミツネ片手剣ですね本当に有り難うございました！ じゃなくて！」

「何が言いたいのか全然分かんないんですけど」

「もつと調理の仕方しつかりしてくれよってことさあ！」

「だあああ！ シガレットみたいなこと言ってんじやないわよ！」

「えっ」

突然やり玉に上げられ、素つ頓狂な声が漏れる。

見れば、凄まじい火花をぶつけるイズモとヒリエッタの姿があつた。お互い肉を焼きながら、熱い主張をぶつけ合う。

ヒリエッタは干渉されるのを嫌う、ネコみたいな奴だ。しかしイズモは料理に関しては過干渉。この上なく相性は悪いのかもしれない。

だが、あれだけ素を出して怒るヒリエッタには、少し引つ掛かるところがあつた。人見知り気味な性格だと、俺は認識していたのだが。

「……何か、犬猿の仲に見えて息ピッタリだなお前ら」

「にやあ」

「夫婦漫才みたいですなあ」

「誰が夫婦だ誰がっ!?!」

「ちよつとやめてよこんなのと！」

しかしヒリエッタの様子は、どうもいつもと違うように思えた。

俺とゲネル・セルタスを狩った時より、自我に忠実に動いているように見える。その



様子は、少し楽しそうだ。イズモの迷言も、あながち間違いでもないのではと、そう感じてしまう程に。

そんな当のイズモはといえば、焼き上げた肉を一つ摘まみ上げ、ヒリエツタ用の皿に落とした。食えと言わんばかりの顔で、凶々しく。

「……いいわ、食べてあげる。アンタの言う調理法つてのがどんなもんか、見てやるわ」「おうとも。しつかり味わってほしいね。イルルちゃんにも、ほいっ」と

「にや、有り難うにやイズモさん」

イルルにも手渡しながら、イズモはしてやったりとあくどい笑みを浮かべる。

見たところ、ファンゴの肉とガーグアの肉だろうか。丁度いい焼き目に、金網色のついた表面。炭火焼特有の鼻孔を貫くような爽やかな香り。何とも芳ばしい。

「……うにや、ファンゴの肉、美味しいにや！ 柔らかな歯応えに、丁度良い塩加減！

噛む度に溢れる肉汁がまた美味しくて、何度も噛みたくなくなってしまいうにや。だんだん噛むところがなくなっていくの、寂しいにや」

「うっ……何このガーグア!? 私が焼いたのと全然違う……食感も、風味も。え、何これ、ほんとにガーグア？ 肉の臭みとか全然感じられないし、すっごい食べやすい……！ 何これ!!」

「ふっふーん。これがオレの実力よ……」

二人の迫真染みた感想を耳にしては、イズモは満足げに鼻の下を指で擦った。

イルルはともかく、ヒリエツタも唸る味とは。何だか気になったので、俺も一つ肉を口にしました。イルルの皿から、そつと一つ拝借する。

「うもツ……これは……」

決め手は、生姜だろう。それが一口入った感想だった。

タレに染み込ませたのは、間違いなく生姜。念入りに混ぜ込んだのためか、違和感なく自然な味わいを形成している。それをよく肉に漬け込んだらしい、後付け感のない爽やかな味わいを作りだしていた。

ヒリエツタの言う、肉の臭みがないというポイント。その立役者こそ、この生姜なのだろう。

「はーん……ファンゴはともかくとして、ガークアに生姜とは斬新だな。でもまあ、良い感じじゃん」

「溪流直々のお肉たちだかね、美味さは保証するよ」

「くっ……悔しいけど、この味は私には出せないわね……」

「でしよでしよ？ もつと褒めていい……って、ヒリエツタ！ 君が焼いてる肉、焦げてる！ 焦げてる！」

「はわっ!？」

バタバタと、慌ただしくも金網に向き始める二人。やはり何だか、同調するものがそこにあつた。とても今日初めて会つたようには見えないくらいに。

イルルもそれに驚いて、ぴよんとそちらに跳んでいった時、奇しくもトレッドが俺の横に座り込んできた。ぎしつと、古びた我が家のソファアアが唸る。

「シグ、食べますか？ アプトノスにモスを持ってきましたよ」

「おつ、センキュー。美味そうじゃん」

「アプトノスは脂たつぷりサーロイン、モスはバラ肉です。焼き加減はイズモには劣りますが、ね」

紙皿に乗せられたそれは、大振りに切り取られたアプトノスの肉と、段々状が美しいモスのバラ肉だった。

アプトノスのサーロイン。見た目はもはや、ステーキである。切り分けられ方も、焼き目も。網焼きステーキ、そのものだ。

バラ肉の方は、滴る肉汁が美しい何とも魅惑的なものだった。脂身の輝きが、太陽光を享受して。それが眩しくて堪らない。溢れる唾液が止まらない。

「んじゃ、いただきまーす」

まずは一口、サーロイン。

口に入れた瞬間、じゅわつと溶けるその食感。ズワロボスとは違う脂の味に、不覚に

も感嘆の声が漏れた。

まず何と言つても、柔らかい。新鮮な大トロのように、口内の温度でさつと溶け始める。唾液が肉汁に絡んでは、濃厚な脂肪が一気に放出された。そこにはズワロポスのような歯応えある食感はなく、ただただかなりの脂肪分があるだけ。しかし、その味わいは滑らかで、喉越しもいい。新鮮な肉であることは間違いなさそうだ。

「ふむふむ……」

続いて口に入れたバラ肉。もちろん一度お茶で口内を洗淨してから、である。

階層のように味が連なつたそれは、まさに肉の塔だ。

細い繊維を束ねたような、強靱な塊となつた層。それらを繋ぐ。ぷるぷるとした脂身。噛めばその階層が崩れ落ち、分け隔てられた部屋あじが一つになる。まるで建造物を容赦なく破壊する、ティガレックスになつたかのような気分だ。

サーロインの溶けゆく脂肪分とは違う、ねっとりとした脂身。こちらはいくつもの層が絡まつた、独特の歯応えが売りだろう。柔らかく、されど固くもあり。そうして噛む度に、甘い甘い脂がどんどん放出されていく。肉の塔の名は伊達じゃない。

「……うんうん、まあまあいいんじゃないの？」

「イズモに食わずと文句言われそうですがねえ。焼き加減が甘いとか、火の量は意識したのか、とか」

「めんどくさい奴だよなあ。よっしゃ、ここは俺も少し凝ってやるかあ」

俺は意気揚々とソファアールから腰を引き上げた。そうして、タレに浸したリノプロスの肉を金網へと突き落とす。

じゅうじゅうと、落ちるや否や豪快な音を立て始めたリノプロス肉。似たようなアプケロスの肉同様、この肉は顎を鍛える力強い感触が売りの肉である。あちらはもはや砂肝に近い、ゴリゴリとした感触なので、肉の味として並べるのは少しお門違いではあるが。

そんな俺に向けて、背後からトレッドの音が飛んできた。薄く、淡く、囁くような声だ。

「焼きながらでいいです。少し報告したいことがあるので、耳を傾けてくださいな」

「……件のことだな？」

「ええ。滝瘴啖……ですが、今も元気に過ごしていますよ。先日また一人、同僚が撃退されました。ガンランスが食べられちゃったそうですね」

「ふーん。まあ、生きてるようで何よりだ。他の奴には食わせない。アレは俺の獲物だかんな」

「……またあの時みたいなの暴走はして欲しくありませんが。回収する方の身にもなってくださいよ」

あの時。

突然現れたイビルジョー。長年追い続けてきた、瘡瘻啖イビルジョー。

それを目にした時には、俺はいつの間にか七星剣斧【開陽】を手にしていた。逸る気持ちは抑えられず、いつの間にか奴と対峙していた。

——その代償として、左脚を失ったが、それで分かったこともある。

「大丈夫、もうあんなことはしないよ。……分かったからさ」

「……？ 分かった、とは？」

「イルルにあんな思いを二度とさせたくないって、分かったからさ。あんな独りよがりなことは、もう二度としないよ」

泣き腫らした顔。痛んだ毛並み。

あの時を思い出すといつも浮かび上がる、痛ましいイルルの姿。俺が左脚以上にショックを受けた、彼女の悲鳴。もう二度と、あんな姿は見たくない。

「……それに、失礼だとも思ってたんだ」

「失礼……？ それは、イルルちゃんに？」

「いや、それもあるけど、一番には瘡瘻啖にさ」

「へえ……それはまた突拍子もない心境の変化というか、何というか」

「うん、まあ。アイツだって、ただ必死に生きているだけなんだから。一方的に憎しみを

ぶつけるのはお門違いなんじゃないかって、思った訳さ」

例えば、俺が今焼いているリノプロス。

地底洞窟で群れで暮らしていた奴らを、俺が片手剣を振りかざして仕留めたものだ。今やただの肉片となり、炙られた金網の上で悲鳴を上げている。

俺のやっていることは、淆瘴啖と何ら変わらない。

生きることとは、食べること。食えることとは、生きること。そのサイクルの上では何ら変わらないのだ。俺がモンスターを狩ることと、モンスターが人を襲うことは。

所詮世界は弱肉強食。生きるか死ぬかは己次第。そんな師匠の言葉が、俺の脳裏を過ぎった。

「だから俺は、決めたよ。今度は復讐者じゃなくて、ハンターとしてアイツの前に立つ。そんなもってアイツを狩って、食ってやる！」

「え……アレを？」

「旨いまずいは塩加減って言うだろ？ この肉みたいに美味くしてやるぜ」

「……なーんか、微妙に使い方間違ってるような気もしないでもないですが……どれどれ」

そんなこんなで焼き上がったリノプロミート。

まずは強火でこんがり炙り、焼き目がついて来たら少し位置をずらす。そうして弱火

へ移し、ゆつくりじつくり優しく焼き上げていけば、仕上げとしてアルミホイルに包む。十分に中まで火を通せば完成。目の前のリノプロミートの出来上がりである。

それを目の前にして喰るトレッドに、何だ何だと俺の肩にへばりつくイルル。夫婦漫才を続けながら寄ってくるイズモとヒリエツタ。幾つもの視線が、目の前の肉へと注がれる。俺の取り分が、減った。

「にや、旦那さん！ それからとつても良い匂いがするにや！」

「おうイルル。俺の魂込めたこんがり肉だぞ。食べてみるか？」

「……酒に、ハチミツに、醤油に——あと、林檎かな？」

「御名答。流石イズモだな……香りだけで当てるとは」

「林檎？ この肉に林檎が使われてるの？」

「おろした林檎は肉を柔らかくしてくれるんだよねえ。色々と重宝するのさあ。オレ林檎大好き」

俺から解説という役割を奪ったイズモの言葉のままに、ヒリエツタは興味深そうにリノプロミートを持ち上げた。イルルはイルルで興味津々な様子で、俺が摘まみ上げた肉に小さな口を寄せてくる。トレッドはといえば、既に咀嚼し始めている始末。

豚肩を思わせる、豊富な肉回りのリノプロミート。それを丁寧にタレ漬けて、中までしっかりと焼いたのだ。その出来栄えには多少なりとも自信がある。



「うーん、美味しいですね。何かこう……美味しいですね」

「トレッドのボキヤブラリーは相変わらずだねえ。もつとこう香りが、とか食感が、とかないの？」

「香り……何か、フルーティーな感じだにや。爽やかで、食べやすいにやあ。醤油タレのあつさりとした味付けもまた良好というか」

「でも思ったより柔らかいのね、これ。噛む度にほぐれていくし、その度に淡い風味が鼻を抜けていくわ。美味しい……」

それぞれが俺の育てた肉を味わって、恍惚そうな表情を浮かべていた。

ただ一人、イズモを除いては。

「悪くはない。……けど、林檎じゃ些か力不足かもねえ。肉の臭いがまだ少し残ってる。生姜とかニンニクとか使っても、もつと美味しくなりそうだねっ！」

「……何でタンジアの人たちはこうもご飯にうるさいんでしょうねえ」

満足そうに肉を頬張るイルルと、また始まったと言わんばかりに溜息をつくヒリエツタ。

その視線の先で肉とにらめっこをするイズモを見ては、トレッドが虚しそうにそう呟いた。トレッド自身が、その言葉の例外でありながらも。



「どうでもいいけど、ケルビの肉とかもあれば良かったのにね」

「あー、あとガウシカとかなあ」

「そういえば、そんな肉たちもありましたねえ。すっかり忘れてました」

昼下がりに。

みなそれぞれが肉を焼き、食べたい肉を摘まんだ頃。そろそろ肉に対する探求心も薄れ、みな食欲が落ち着いてきた頃だった。

ふと、ヒリエツタがそんな言葉を漏らした。

言われてみれば、網に転がっているのはモス肉、ファンゴ肉、ガーグア肉、アプトノス肉、アプケロス肉、ズワロポス肉、そしてリノプロス肉。そこにケルビやガウシカの姿はない。

そんな肉たちを眺めていると、俺の膝の上でもぐもぐし続けていたイルルが、ふと思いついたように口を開いた。

「にゃー！ そういえば、ボクの友達ケルビの肉持つてくるって言ってたにゃ」

「友達？ そういや、まだ来てないな。流石にもう……やっぱ来ないんじゃないか？」

「ううん、狩りに行ってからって言ってたから。多分、もうそろそろ……だと思っにゃ」

この焼き肉パーティーが始まって、もう随分と時間が経っている。それだというのに、イルルの友達だという人物は現れない。本当にここに来るのだろうか。

なんて考えていると、ビンに入ったお茶を飲み終えたイズモが、軽く息を吐きながらイルルに問いを投げかけた。ネコの耳が、ピクリと動く。

「ちなみにちなみにイルルちゃん。その友達って何て言うんだい？」

「にやつ。ルーシャさん、っていうのにゃ」

「んー？ ……ルーシャ？ どつかで、聞いたことがあるような」

「イズモ……君、女性の名前に対して聞いたことあるって言ってばかりですなぁ」

「いや待って。まるでオレが軟派野郎みたいじゃないかよう」

「あら？ 間違っていないんじゃないかしら、ナンパさん」

呆れるように首を振るトレッドに、悪戯っぽい笑みを浮かべるヒリエツタ。それに慌てては身の潔白を証明することに勤しむイズモを見て、イルルはよく分からないとばかりに首を傾げた。

一方で、俺は彼女の言葉を聞いて思考が一瞬止まる。

ルーシャ。俺も聞いたことがある、その名前。ルーシャといえば、ここ最近ネコ談義で花を咲かせている同業者じゃないか。そんなアイツが、イルルの友達？ いや、まさかそんな。

「——ここ、ここかあ！　ごめんねイルルちゃん、遅れちゃった！」

「あ、ルーシャさん！　いらつしやいにやあ！」

　　またもや影が、我が家を差した。

　　突然開け放たれた扉。光差すそこから、白い鎧に身を包んだ人物が現れる。

　　後ろで結ばれた、薄い金色の髪。白銀の鎧を着こなす、凛とした姿。そんな少女が担

ぐ、宙に四肢を投げ出したケルビ。異様過ぎる光景だ。

　　そんな彼女に向けて、イルルは嬉しそうに声を上げた。一方、イルルを見ては幸せそうに顔を綻ばせる彼女。その姿は間違いなく、俺の知るルーシャ本人である。

「……ルーシャ……お前」

「うえ!?　シガレット!?　何でここに!?!」

「いや、ここ俺ちだから」

「嘘!?!　じゃ、じゃあ……イルルちゃんの旦那さんって、貴方だったの!?!」

　　一人騒がしく荒れるルーシャに、俺は若干気圧される。かと思いきや、膝の上のイルルはぴよんと飛び下りて、心配そうにルーシャの傍へと駆け寄った。

　　先程まで集中砲火を食らっていたイズモは、もうそつちのけ。本人すら、俺の目の前の状況に釘付けになっている。

　　そんな一人舞台の主演女優はといえば、駆け寄ってきたイルルを突然抱き寄せ、おも

むろに正座し始めた。一心に、俺の瞳を見つめながら。

「イルルちゃんのだ旦那さんに、折り入って頼みがあります」

「……何だよ。改まって」

随分賑やかな女だ。そう感じながら、今度は静かに佇む彼女に向けてそう声を掛ける。

すると、彼女は小さく深呼吸した。まるで何か大きなことでも言うように。態度を改めるかのように。

そうして、そつと放った。テオ・テスカトルもかくやというほどの、衝撃的な言葉を。

「旦那さん！ お宅のイルルさんを、私にくださいっ！ 絶対に、幸せにしてみせますか

らー！」

「……………は？」

く本日のレシピ〜

『ごんがり焼き肉セット』

・ごんがり肉

……お好みで。

- ・モス
  - ・フアンゴ
  - ・ガーグア
  - ・アプトノス
  - ・アプケロス
  - ・ズワロポス
  - ・リノプロス
  - ・ケルビ
- ・野菜詰め合わせ

……お好みで。

## 魚懸甘餌

「……どうしてこうなったし」

「ふふふ、そんな余裕ぶってる暇はあるのかしら？ イルルちゃんは、私が貰うわよ！」  
目の前で、ガタガタと歯車が喰る。

幾層にも重なったそれらが野太い音を奏で、外からは大衆の歓声にまみれ、思わず耳を塞ぎたくなるくらいには気の滅入る空間だった。

一番の原因は、隣でけたたましい声を上げる女なのだが。

「畜生、勝手に話を進めやがって。何で闘技場なんだよ、俺ここ嫌いなんだよ……」  
「トレッドさんの言葉に則ったままでよ。やっぱり年長者は違うわー！」

そう。事の発端はトレッドの何気ない一言だったのだ。

元々はイルルに惚れたらしいルーシャが、イルルをオトモにしたいということと俺に頭を下げ始めたのが始まりだった。彼女の雇用権を譲渡してほしい、と。あの日の、焼き肉を並べていたあの瞬間に。

薄桃色の肌が見え隠れする可愛い耳。

その全身を覆う、上質なバナラクリームのように美しい毛並み。

文化と味のアクセントを差すが如く舞い降りた、桜餅を思わせる蠱惑的な肉球。

そして何より、タンジアの海を映したかと思わせるほど青く、澄んだ大きな瞳。

イルルが誰をも虜にするような魅力をもつネコであることは、もちろん俺も把握している。そんなイルルを、俺が黙って引き渡すことなどありえない。だが、それで引き下がるルーシヤである筈がなく――

――ハンターというのは、誰もが我が強いですからねえ。今のような状況が続くなら、いつそのこと何か勝負に出た方が良いんじゃないでしょうか？ 例えば、闘技場とか。そうやって白黒はつきりつけた方がいと思いますよ。

そう言い放ったトレッドの言葉に感化されたルーシヤが、わざわざ俺の分までこの大会にエントリーした。これまでの顛末は、これで説明できる。

そんな主犯格は、ふふんと得意気に鼻を鳴らした。それに同調するように、腕の猟虫も甲高い声を上げる。

「ここで勝つたら、私がイルルちゃんをいただくからね！」

「……まあ、一週間も立て続けに願ひ込まれちゃ、俺としてもこうするしかなかったしなあ。勝てばいいんだ、勝てば」

「勝つのは私よー！」



「うるせえ俺だ！ イルルも渡さねえし、お前の賭けたもんもきつちりいただくかな！」

「くっ……高級お食事券三十回分とは、大きく出たわね……！ でも、イルルちゃんのことを思えば……！」

支給された防具を軋ませ、渡された武器を背に担ぐ。いつものものとは違う慣れない感覚に、俺は辟易とした。これだから闘技場は嫌いなんだ。慣れた武器を使えない。これは無視することのできないハンデイキヤップなのだから。

同じ条件で、それでも悠然と歩くルーシャ。心なしか、その足取りは軽やかだった。そんな気取ったような足取りで、彼女はゆつたりと進む。控え室に描かれた大きな入場口から、眩しい外の光が漏れた。

「……やるからには、本気でやるからな」

「……望むところよ」

互いの右拳を軽くぶつけつつ、俺も前へ踏み出した。

控え室に設けられた二つの入り口。右には黒が、左には白が。それぞれの色が、淡く門を彩った。



まるで大瀑布のような歓声が沸き上がる。

楯円状に区切られたエリアを、囲うようにしてできた観客席。そこへ群がる群衆が、囃し立てるような声を上げていた。楯円にこれから現れるであろう、二つの影に向けて。

「さあさあ盛り上がって参りました！ 本日の闘技大会、いよいよ開幕です！」

そこへ割って入るアナウンス。良く響く澄んだ声が、この会場を風の如く突き抜けた。

客席の一部を陣取った女性。その規律めいた衣装は、間違いなくギルドの職員のものだ。丁度バルバレあたりの集会所で見ると、慣れ親しまれた格好である。そんな彼女の拡声器越しの肉声が、またもやこの会場を駆け抜けた。

「私は本日のアナウンス役でございます！ 大会の実況を精一杯やらせていただきますので、どうぞよろしくお願いします！」

その挨拶で再び熱を上げる会場。熱い歓声に包まれ、いよいよ開戦の狼煙が上げられようとしていた。

そんな客席の中央部前列に腰かける少女は、小さく溜め息を吐く。それに気付いては、隣に座っていたアイルーがそつと首を傾げた。

「ヒリエツタさん、どうしたのにや？」

「……シガレットの奴、腹痛治ったかと思つたらすぐこんなのに巻き込まれてさ。何か、憐れだなあつて」

「にや、にやあ……。確かに不憫にやね、旦那さん」

「一番不憫なのはあんたよ、イルルちゃん。まさかアイルーを賭けの対象にするなんて、どうかしてるわ。あんたも何か言つてやれば良かったのに」

「むにや、それは……。そうだけど」

やや俯き気味に顎を引いたネコの姿を見ては、ヒリエツタは不満そうに鼻を鳴らす。甲斐性のない旦那だと、その小さな鼻息が主張していた。

それでも、イルルは「でも」と言葉を繋げる。何か言いたいことがあるかのように、強い意志を秘めているかのように。

生憎その言葉の続きは、後ろから現れたイズモの声で掻き消されてしまったが。

「お待たせ。アイスクリームはイルルちゃん、チーズバーガーはヒリエツタだね。買つてきたよー」

「にや、有り難うございますにやー」

「あ、おかえり。ありがとパシリ」

「あれっ!? ヒリエツタだけやけに辛辣だなあ!？」

両手をプレートで埋めたイズモは、その上に乗せられたカップアイスと包装されたチーズバーガーを突き出した。

それぞれが求めるものを手に取ったのを確認して、彼はヒリエッタの隣へと腰かける。プレートに残された別のハンバーガーとフライドポテトが、からんとプレートを小突いた。

「ルーシャ、ルーシャね……。どこかで聞いたことあったと思つたら、前にシグからされた相談の子かあ。なるほどなるほど。ん、ポテトうつま」

「あ、ポテトじゃん。もーらい」

「あつ……。まあ、いいけどさ。それよりも、状況はどうだい？ まだ始まってなさそうだけど」

「もうすぐ挑戦者の入場つぼいわよ。ほら、アナウンスの人が解説しようとしてる」

口の中で細かく砕ける食感と、その奥に眠るふわつとした食感。芋特有の柔らかささと、仄かな甘みが口の中で一杯に広がる。そこに振り掛けられた淡い塩の数々が、控えめながらも味にアクセントをもたらしていた。

サクサクと、カリカリに焼き上がったポテトを口に入れつつヒリエッタは腕を上げる。その先の指の延長線上には、拡声器を片手に立ち上がるアナウンサー、もとい大会司会者の姿が。

「さあ、今一度本日の大会模様を説明させていただきます！　メインターゲットはティガレックス一頭の討伐！　使用武器は狩猟笛にガンランス、スラッシュアックスと操虫棍、とどめの弓でございます。いやー、曲者揃いですねえ」

「え……ちよつと待って！　片手剣も双剣も入ってないじゃない！」

「あれま、ほんとだ。一癖二癖のあるものばかりだねえ」

「これエントリーしたのって、ルーシャって方よね？　あの子、策士だわ……」

ヒリエツタは焦りの声を漏らした。

いつだって、彼女が見てきたのは片手剣を振るうシガレットの姿だ。愛用のテオⅡエンプレムを度々双剣として扱うことはあるものの、基本的には片手剣。彼女はそう認識していた。

しかし今回の演目とはいえ、その二種は含まれていない。その上でイルル曰くのルーシャが得意武器とする操虫棍はしっかり含まれている。

これ以上ないほど不利。そう判断せざるを得ない。

——そう思っているのは、この場では彼女だけのようだが。

「まあ、見てなよ」

「旦那さんは、大丈夫にゃ」

その声とともに、闘技場の門が空いた。北門南門がそれぞれ開き、そこからハンター

が現れる。

一人、白髪を揺らした男性。苦虫を嘔み潰したような顔で携帯食料を呑み込みつつ、さも不機嫌そうな溜め息を振り撒いた。その背には、武骨な剣斧が一つ。

一人、長い金髪を後ろで一まとめにした少女。その右腕にはこれまた大きな甲虫がしがみ付き、背には似合わぬバヨネットを携えていた。もちろん、操虫棍だ。

同時に下ろされる、宙吊りにされていた檻。そこから、一頭の飛竜が顔を出した。

血走った瞳に、それを覆う黄色の鱗。それらを染め上げる、薄い青い模様。絶対強者という名で知られる飛竜種にして本大会のメインターゲット、ティガレックスだ。

「いよいよにや」

「……どちらが止めを刺すか、それが勝敗を分かつかんな。オレらがよく見とかないとね」

「にや、運営者さんには伝えてないにやんね？」

「こそ。あくまでも彼らはただのペアハントだと思ってるから。オレらが真の審判って訳さあ」

「旦那さんたちはトドメバトルとか言ってたにやね。へんてこりんなルールだにや」  
「全くだねえ。観客なのに審判させられる方の身にもなれってのー」

「え、えーつと、え？ え？ あの、武器についてのツッコみはなし……なの？」

戸惑い気味のヒリエツタには目もくれず、イルルはその尾を膨らませ、イズモはゆつくりと固唾を飲んだ。

左右に現れた人間。それを察知するや否や、ティガレックスは叫び出す。キンと耳に鳴り響く轟音が、闘技場内を木霊した。

「シッ……」

アナウンスが開戦の声を上げる前に、剣斧を担いだハンター、もといシガレットは大地を蹴る。それに察知したのか、ティガレックスはシガレットの方へと振り向いた。やや遅れて動き出したルーシャには、数秒の目もくれず。

剣斧。シガレットが担いでいる武器は、それだ。

一人はかつて共に組んで狩りを行なっていた頃を。一人はかつての凍土で、荒ぶ風のように剣を振っていた姿を。刃を地に擦らせて走るシガレットの姿を見て、それぞれ思い描く模様を浮かばせていた。

もう一人は、皆目見当がつかないといった様子で眉を顰めているが。

「先に仕掛けたのは南門、シガレットー！ 怒涛の二連斬り上げで、ティガレックスに肉薄するウッ！」

ピンのエネルギーを振り撒いたその切っ先が、鋭くもティガレックスの顔を裂く。斧の成りを顰め、剣へと姿を変えたその刀身は、収まったかと思いきや再びピンの炎を噴

出した。

同時に振りかざされる、牙。目の前の外敵に向けて突き出した強靱な顎は、そこを埋め尽くすように並んだ牙の山を、シガレットへと押し付ける。

「旦那さん、危ないにゃー！」

だが、その牙が噛んだのはただの空気。敷き詰められた肉の感触を、その顎にもたらすことはなかった。薙ぎ払われた剣撃が、シガレットを背後へと押しやったからである。

言うなれば、ビンのエネルギーを用いた斬り払いといったところか。そうしてティガレックスとの距離を開けたシガレット。その隙間を縫うように、今度は砲弾のようなものが縦横無尽に飛び込んでくる。

「シガレットの隙をカバーするルーシャだア！ 操虫棍を巧みに使って虫を操るその姿、何とも言えない美しさを感じさせられます！」

アナウンスの実況通り、後退するシガレットの隙を埋めたのはルーシャだった。猟虫でティガレックスの注意を攪乱しつつ、その鋭い切っ先を天へと掲げ、振り下ろす。

バヨネットが打つのは、ティガレックスの丸みを帯びたその背中。頂点から落下まで、回転運動で振り下ろされるそれが、その背中を鈍く穿つ。同時に浴びせられる剣斧の二連斬りに、轟竜は悲鳴を上げた。



「な、何アイツ……スラッシュアックス、使えたのね……。要らない心配かけさせて、全く……！」

「シグはこつちに来るまでずっと剣斧使ってたのさ。やっぱあっちの方がシグらしいや。今回は支給された剣斧だから、無茶な使い方出来ないけど」

「確かに、ちよつと息苦しそうにや。ピンをあんまり無駄にできないし、しようがないけど、にや」

「……何よ、二人とも知ってたのね。私だけ焦っちゃって、バカみたいじゃない」

そう言つて、荒つぽくチーズバーガーを口に入れるヒリエツタ。心なしか、その食べ方も苛立ちを含んでいるように見えた。

溢れる肉の味は、まるでティガレックスの突進のよう。荒々しく、武骨で、直接的。

潰して、捏ねて、焼き上げて。そうして出来たそのハンバーグの味わいは何とも直情的だ。染み込ませたトマトソースも相まってどこかフレッシュユな風味も残しつつ、それでもその味は肉そのもの。舌を刺激する旨みが、焼き固められたその一つ一つが零れる度に溢れてくる。まるで、地形を壊すティガレックスのようにダイレクトに。

「トレッドさんもよく知ってるみたいだったにや。今日は来てないけれど」

「何か、召集がかかったとかでタンジアに帰ったよ、アイツ。忙しいみたいだねえ」

「はあー、知り合いつてのはやっぱ大事よね……。むう。あ、これピクルス入ってる」

縦横無尽に走り回るティガレックス。そんな奴が、斬り結ばれたバヨネットの一撃でとうとう激昂した。大きく後ろに跳んで、その形相を大きく変える。まるで、ピクルスの酸味が突然口内に現れたかのように。

チーズのように黄色い鱗の節々に、赤い筋が現れる。激昂し、血流が盛んになり、それが表面へと現れる。濃厚なとろみが見え味のアクセントになるように、ティガレックスはその動きにアクセントを加えたのだった。

「キレイだなコイツ、ルーシャ！ 目を塞げ！」

「えっ、あつ、ちよつ待つ……！」

闘技場を、一瞬で白染する光。同時に響く、観衆の悲鳴と轟竜の呻き。

シガレットが投げた支給用閃光玉は、見事にティガレックスの視界を塗り潰した。突然目の前が真っ白になった当の本人ならぬ本竜は、一体何が起こったのかと悲鳴を上げる。どうすることも出来ず、顎の開閉を繰り返しながら。

——その下からは、鈍い斧が迫っていることにも気付かずに。

「オオラアアアアアッ！」

猛烈な斬り上げに、そこから繋げられる振り回し。縦横無尽に走る斧が、まるで八の字でも描くように轟竜の頭部を撫でる。シガレットの息の荒さに比例して、ティガレックスに刻まれる傷は増えていった。

シガレットとルーシャの勝負は、どちらがあのだ。ティガレックスに止めを刺すか。その条件の下行われている。であるからにはルーシャには、止まっている理由もない。アナウンスの声に身を任せるように、彼女も再び駆けだした。

「隙を作つては連撃を叩き込むシガレットオ！ 横から横へ、斧で斬る斬る斬るウ！ おつとオ、ルーシャだつて負けてないぞつ！ 勢いよく飛び込んでいくウつ！」

天高く舞い上がり、勢いよく剣を振り下ろす。鈍重な刃が一層、二層と轟竜の背鱗を打ち砕き、その口からは甲高い悲鳴が漏れた。

このままではマズい。そう感じたのか、ティガレックスはおもむろにその前身を屈ませる。そうして、滑るように大地を蹴つて――

「がっ……!?!」

「ティガレックスの手痛い反撃だア！ シガレット、思わず吹き飛ばされてしまうウ！」

この隙を、ルーシャはどうカバーするのでしょうか?!」

「にやつ、旦那さーんっ！」

スタミナを犠牲にしたその乱打で、腕の痺れに怯んでいたシガレット。それを前にして乱回転したティガレックスの猛攻は、到底避けられるものではなかった。

そんな旦那の姿に、オトモのイルルは悲鳴を上げる。不意にも手の力が緩んだことで、その肉球からするとカップアイスが零れ落ちた。会場の床に、白い模様が出来上

がる——

——その瞬間。すつと伸びた肉球が、そのカップを受け止める。白——では、ない。黒い体毛に覆われた、肉球だった。

「……危ないですニヤ。アイス、落としたりもつたいたないですニヤ」

「にや……にや？　だ、誰……にや？」

そこに現れたのは、黒いネコ。俗に言う、メラルーだった。そんな相手に向けてのイルルの素朴な疑問に、当のメラルーは静かに微笑む。突然現れたその人物に驚きを隠さないイズモやヒリエツタにも向けて、そつと。

闘技場では、轟竜の尾を踏み台にしてその背中を奪ったルーシヤの姿があった。アノウンスも、その姿を取り上げては白熱の実況を展開している。そんな彼女の勇姿からメラルーは視線を戻しつつ、小さく頭を下げた。

「ワタシはあそのルーシヤのもとでルームサービスをしています、クウと申しますニヤ。この度は、うちのご主人がご迷惑をおかけしましたニヤ」

「……へえ、君ルーシヤんとこのネコ？　可愛いじゃん」

「何よあの子、ちゃんとネコがいるなら別にイルルちゃん欲しがらなくてもいいじゃない」

「ニヤ、ご主人は何やらねこは、はーれむ？　とかいうのを作りたいそうなのでニヤ。」

ネコを大切にしてくれる良いご主人ですが、ネコ好きが度を過ぎているのが玉にキズなのですニヤ……」

「にや、苦勞してるのにやね……」

困ったように苦笑するクウからアイスクリームを受け取るイルル。憂いのこもったネコの溜息が、会場に溶け込んでいく。

その体毛のように白く、透き通ったバナラアイス。それを口にしたイルルは、何とも甘いその味わいを、溜息の如く口の中でさらりと溶けていく感触をもう一度確かめた。するり、するりとその甘さは抜けていく。所詮はアイス。常温ではその形を留めることができないそれは、確固とした形をすぐ失ってしまう。痛みの余り転倒する轟竜よりも、もっと早く。だからこそ、矢継ぎ早にスプーンを動かしたいものなのだが――

そのスプーンより早く振られる剣斧。そしてバヨネット。突き立てられた剥ぎ取りナイフの痛みに耐えきれず、隙を露わにしたティガレックス。ここぞとばかりに、ハンターたちは武器を振り回した。

片や、ピンから炎を振り撒いて滅多斬りを繰り返すスラッシュアックス。その斬撃音たるや、さながらイズモの手にあるエビフライオバーガーのよう。ザクザクと音を鳴らすレタスや衣が相まって、景気のない食感だ。

片や、まるで鈍器のような鈍重な刃で轟竜の肉を打ち付けるバヨネット。鱗が剥が

れ、弾力性のある肉が露わになったそれはさながら剥かれたエビのよう。プリップリのその感触に、溢れ出る磯の香り。ほどよく染み込んだ脂も相まって、噛めば噛むほど爽やかな味が溢れ出てくる。

「エビフィレオうまい」

「……アンタ、緊張感ないわよね」

ヒリエッタの呆れも他所に、イズモはエビフィレオの味にご満悦な様子。濃厚な麦の味を固めたマスターベージュの風味を鼻いっぱい吸い込んで、幸せそうな感嘆の声を漏らした。エビフィレオの香りがついた、深い深い溜息と共に。

そんなパンの色を反映したかのような鱗で全身を覆うティガレックス。二人のハンターにされるがままに、抵抗も出来ずにその四肢を投げ出している。

「何よう、シガレットが剣斧使えるなんて聞いてないわ!」

「あん? 使えなかったら何だったんだ?」

「不得意な武器しか選べなかったら私の勝利は確実……って、ウソウソ! 今の無し!」  
「……お前が狡賢い奴ってことがよく分かった、よッ!」

止めと言わんばかりの属性解放突き。それがティガレックスの喉仏を穿つように炸裂した。その余りの威力にティガレックスの視界は大きく揺れ、消え入るような悲鳴が小さく漏れる。断末魔のような、か細い悲鳴だった。

そうして、耐え切れなくなったかののようにその鎌首を地に落とした轟竜。ずんと、巨体が大地を打った。分銅のように落ちた首が、地面に罅を入れる。

「スラツシユアツクスの奥の手、属性解放突きだア！ これは決まったかアっ!？」

「あああ！ 嘘、待って！ まだ死なないでよおー!」

「薄々気付いてただけど……お前、相当なクスだよな……。この勝負のルールといい、  
「さ」

若干涙目で銃剣を振り回すルーシヤの姿に、シガレットは呆れ気味にそう呟いた。死してなおさらに殴られ続けるティガレックス。不憫もいいところである。

ルーシヤが取り決めたこの勝負のルール、俗称トドメバトルとは、モンスターのどどめを奪った方が勝利となる、極めて単純な判定基準をもつ。よってこの場合、属性解放突きによってティガレックスは事切れたために、勝者はシガレットと決まったことになる。

——と、思われたのだが。

「うあーん！ 認めたくないっ!」

「……あん？ ……この感じ……」

「頑張れ、頑張れ！ まだいけるでしょティガ君!」

「……この感じ、この臭い……まさかッ！ ルーシヤ、下がれ!」

「うえ!？」

何かに気付いたように声を荒げたシガレット。未だに銃剣を振るルーシヤの肩を荒く掴み、そのまま後ろへと投げ捨てる。それと同時に睨み付けた。異臭を起こし始めた、ティガレックスの、その骸に。

黒い湯気、沸き立つ臭い。

まるで瘴気のように、火柱から溢れる黒煙のように。横たわったティガレックスから、名状し難い何かが溢れ出した。閉ざされたその分厚い瞼が、ピクリと動く。

あつ、という声が漏れたのは観客席のヒリエッタだ。その姿に既視感を覚えたのか、降ろしていた腰を反射的に浮かしては、驚愕の念を露わにしていた。

「……まさか、嘘、そんな!？」

「え、何? ナニナニどうしたの?」

状況に頭が追い付かないイズモ。そんな彼が、媚びるような声を上げたその時だ。

キンと、大気が弾け飛んだ。先程の咆哮より幾分低く、ドス黒く染まった声が駆け巡る。試合終了を感じ、安堵していた観衆の息を止めるくらい鋭い声。大タル爆弾もかかやという程の轟音だ。

爛々と妖しく光る双眼。黒く染まった血管。息が荒く、正気を失ったかのようなその表情。ルーシヤの要求通り、ティガレックスは起き上がったのだ。ただし、その様を大



大きく変貌させて、だが。

「……狂竜化個体じゃない！　こんなの聞いてないわ！」

「え？　な、何そのきょりゆーって……」

「病気に罹ったモンスターにや、イズモさん！　何て言うか、とにかく危険な個体なのにやー！」

「ニヤ、ご、ご主人……！」

運営すら予想外のその事態。アナウンスが絶句している中、観衆の一部は戦慄の声を上げる。

それが通じたのか通じていないのかは分からないが、シガレットは静かに、スラツシユアックスに取り付けられたピンをナイフで斬り裂いた。

「良かったな、ルーシヤ。コイツ起きてくれたぞ」

「いや、いやいやいや！　こ、こんなのは流石に勘弁してほしいよお！」

「道理で呆気ないと思っただよなあ。ま、何にせよ試合続行だな」

「くつ。……これは逆にチャンスなんだ。ここで、ここで私が——！」

そう意気込んで、力強くパヨネットを地に打ち付けるルーシヤ。そんな彼女の周囲が淡く光り、まるで粒子のように彼女に向けて集まってきた。そう、それはさながら大雷光虫のような——

俗に言う蟲纏いと呼ばれるその技で新たな相棒を用意しつつ、再びバヨネットを彼女は構える。シャンと鳴ったその虫笛で、目の前の脅威に向けて己に発破をかけていた。

一方で荒々しく剣斧から火を吹かせるシガレット。斬り裂かれたビンからは、まるで歯止めが効かなくなつたかのように内なるビンエネルギーが溢れ出す。剣にビンの力を強制的に纏わせる、剣鬼形態という荒業だ。

「ご主人……ご主人……」

「旦那さん、負けないでにやー！」

それぞれのネコが悲痛な声援を送る中。会場内が突然の事態に困惑する中。

暴走状態に陥ったティガレックスを前に、二人のハンターは勢いよく走り出す。凄まじい衝撃音が、ドンドルマの闘技場を駆け巡った。



晴れ渡る空。和やかな風。それに運ばれる、鼻孔を撫でるような潮の香り。

静かな波の音が飾るここは、タンジアの港。タンジア地方最大の商業都市だ。ドンドルマとは打って変わった活気に満ちたこの街を、あの闘技場に現れなかつた彼が歩いていた。

「はあ、全く唐突ですなあ。いきなり呼び出しとは」

揺れるテンガロンハットに、風に靡く薄茶色の羽織。独特の意匠が目立つフロギイXシリーズで身を覆った彼、もといたレッドは、愚痴のような口調でそう呟いた。独り言のように、割り切れない思いをそのままに。

——ところがそれに、相槌を打つ声が飛んでくる。相槌と共に、タンジアチップスのサクツとした咀嚼音も。

「緊急事態ですから、仕方ないのです。急な召集は申し訳ないと思つてますよ。タンジアチップスあげるから、機嫌直してくださいな」

そうしてタンジアチップスの袋を差し出したのは、光を映す金の髪が美しい少女だった。白を基調とした服装に、赤と青の彩色を施している。その金の髪をお下げのようにサイドでまとめては、快活そうな表情で爽やかな笑顔を浮かべるその姿は、まるで品のある人形のようなのだ。

そんなことをトレッドは考えながらも、敢えてそれは口には出さずタンジアチップスを受け取った。

「どうも、キャシーさん。……わざわざ酒場から抜け出てまで……僕のお出迎えですか？」

「いえ別に？　ただお昼休憩だったのでぶらぶらーっと」

キャシー、と呼ばれた彼女はそう言うつてはその小柄な体で精一杯伸びをする。トレッドの軽口にはあまり関心を抱いていないその態度に、彼は空回りをするような微妙な気分を胸中に燈した。

……まあ、『元』とはいえ人の女に手を出す気はないけれど。

そんな言葉で胸中を洗い流し、もう一度彼女の方に目を向ける。自分がここに呼ばれた理由を話せと、そんな言葉も添えて。

「……ドンドルマギルドが仕切ってるんですけど、アカムトルムに関する情報が上がってるんですよ。どうも火山地帯で暴れているらしくて」

「へえ。覇竜……ですか。それは中々。でも、それだったら僕がここに呼ばれる意味ってあるんですかねえ？」

「話は最後まで聞いてくださいね。それでタンジアとドンドルマの連合部隊で覇竜の侵攻を止める作戦が上がってるんですけど、したらもうあのモンスターが暴れ出す暴れ出す！」

「……まさか、それって」

「はい。瘡瘴啖イビルジョー。あの子が、孤島で自由を謳歌しているとの情報が入ってきました。トレッドさんには、そちらの対応に回ってもらいたいのです」

よりにもよってそれか。そんな意を込めた溜息が、タンジアの潮に乗る。

損な役回りもいいところだろう、と反論したいトレッドだったが、先日同僚が返り討ちになったことを思い出すとその言葉も言うに言えなかつた。対応できる人員が限られる。それがあのモンスターの特徴だった。

できるならば、必要最低限、少数精鋭、一騎当千。つまり条件に当てはまるのはギルドナイトである。

「……はいはい分かりました。撃退する程度には真面目にやらせてもらいますよ」

「仕留める、とは言わないんですね。……まだ、あの人はアレにこだわってるんですか……?」

「それは、君が嫌という程思い知っているでしょう?」

嫌味のように、質問を質問で返すトレッド。その言葉に、キャシーは小さな頬袋を膨らませた。弄り甲斐がある。トレッドの心中は、それだ。

なんて寄り道はともかく、そうと決まれば準備をしなければならぬ。そう己に言い聞かせたトレッドは、港のマイハウスに向けて踵を返した。手に持ったタンジアカップスを、口に運びながら。

そつと口に入れたタンジアカップスから溢れる、磯の味。ドンドルマにはない慣れ親しんだ味と香りを感じ、トレッドはうつつすらと笑みを溢すのだった。

——『君』にはまだまだ利用価値がある。折角だから、使わせてもらいますよ。

潮の香りに、爽やかな海風に溶ける、トレッドの小さな引き笑い。それが耳に届かなかったキャシーは、ただ彼の後姿だけを見て、小さく首を傾げていた。

## 雨後春筍

風を撫でる音が、温い熱を纏った。大地を毆打するような地響きは、その熱を旋風のように巻き上げる。その度に、飛行船の接合部は嫌な悲鳴を上げては軋んでいた。

ギルドが支給した高速飛空船。それがまるで真つ赤な絨毯のようなこの火山地帯を駆け抜けていく。目指すは溶岩島。地底火山をも超えた、火山地帯の深奥だ。

「あつっ……」

身に纏わりつくその熱を払うように両の手で宙を仰いでみても、その不快感は全く解消されない。どころか船が進む度に、その熱の量は増えつつあるようにも感じられる。

不意に膨れ上がった地表。同時に聳え立つ、一本の火柱。否応なしに主張を続けるその暑さに、俺は溜息を吐いた。

「何が溶岩島だよ、どこだよそれ……。吐きそう」

「だらしないわね。ここら一带の存亡が懸かっているのよ、そんな調子でどうすんの」「いやー、でもこれ、暑すぎでしょ。私の装備も溶けそう……」

俺が仰向けに甲板に寝そべれば、その向かい側ではうつ伏せるように腹を這わす白い

鎧。薄い金の髪を一つに束ねた少女、ルーシヤが苦しそうにうめき声を上げる。

一方の橙染みた髪を下ろした少女は、やれやれと言わんばかりに首を振った。対照的な黒い鎧に大剣を乗せたその少女。彼女、ヒリエッタは同乗者の様子に呆れ一色に染まっている。

飛空船に乗ったハンター。それは俺——シガレットを含め三人だった。全員がドンドルマで活動するハンターであり、それも大老殿への立ち入りが許可されるG級ハンターである。

「ルーシヤ、アンタの装備は火に弱いもんね。もつと別の着て来たらいいのに」

「うう……上位装備のひよっこに言われたくないやーい……」

「そうだヒリエッタ、お前大丈夫なのかよ？　それで覇竜の相手はちよつときついんじゃないね？」

「二応、剛鎧玉で強化はしてるけど……ま、サポートに徹するわ。それに覇竜、見てみたし」

少しむすつとした顔でそう言つては、ヒリエッタはそっぽを向いた。その様子は、少し不満そうだ。ルーシヤも軽口を言えども、ヒリエッタの様子を少し気に掛けているようでもある。そんな二人の様子を見ながら、俺も小さく溜めた息を吐いた。

覇竜——アカムトルムといえば、黒き神とも呼ばれる超大型モンスターだ。飛竜種



でありながら古龍に迫る力を持ち、その全身を覆う黒く強靱な鱗と棘は見る者を戦慄させる。古文書にも名を馳せた、強大なモンスターなのだ。

それが、今回のメイנטアーゲット。俺たちが目指す溶岩島に居座っている、目に見える脅威——そして未知の味である。

この度、ドンドルマギルドはタンジアギルドと連合し、覇竜の討伐隊を火山に派遣した。大多数のその部隊はそれ相応の犠牲をあげながらも、覇竜をこの溶岩島まで撤退させることに成功したのだ。とはいえ、奴を討伐した訳ではない。彼らでも奴を仕留めることは叶わず、辛くもこの溶岩島に後退させることしか出来なかった。だが、それでいい。ここから攻めるのは、俺たちハンターの仕事なのだから。

「ハンターさん！ もうすぐ溶岩島上空だ！ そろそろパラシュートの準備をしてください！」

そんな飛空船技師の声飛び、同乗した女性陣二人はいそいそと準備に取り掛かった。

安全な区域ならまだしも、溶岩地帯のご真ん中であるここでは飛空船を直接陸に繋げることが出来ない。狩場に降りるには、パラシュートでハンター自身が降りるしかないのだ。上位、もしくはG級と位置付けられた危険度を有するモンスターと相見えるには、この方法が最も合理的である。そうギルドに判断されていた。

「さて、ここであつちよ腹ごしらえといこうじゃないか」

「……は？」

「……へ？」

そう言つては取り出した、小振りな鍋。

まるでパラシュートの代わりのように、船に取り付けられたボックスから抜き取つたそれを掲げ上げると、パラシュートを背に乗せていた彼女たちは間の抜けた声を漏らした。

その鍋に入っていたのは、ごろりと肉の塊がいくつも入つたスープ。黒く染まつた肉がこんがりと焼け、されど火山の熱に負けない鋭い空気を放つその様相は、どこか料理らしくない雰囲気を漂わせている。その不思議な光景に、ヒリエツタは首を傾げた。

「何これ……冷気？」

「おう。クーラーミートつて奴だな」

「クーラーミートでスープ？ 何それ、熱が中和されないのー？」

「実はこれ、冷製スープなんだよ。冷麺的な、あつさりとした奴。麺は入ってないけど」

「入ってないんかい。それじゃあただの冷えたスープじゃんよお」

「ところがどっこい、体はすつきり冷えるぜ。クーラードリンクの代わりになるくらい

に」

「へえ……食べて体も冷やせるって訳ね」

興味を惹かれた彼女たちは、それぞれ受け取ったフォークで鍋をつつき始めた。ちやつかりパラシユートの準備を終えつつ、そわそわと。

そのスープに浮かぶ黒い肉。それにフォークを突き刺しては、不思議そうに見つめている彼女たち。何の肉かと尋ねられれば答えたくなってしまうが、それをすぐバラしてしまうのも面白くない。そう判断した俺は、沈黙で食べるように催促した。

「あむ……固い肉ね。結構匂いが強いというか、クセがあるというか。割と筋張ってる感じ?」

「脂はそんなに多くないんだねえ。とりわけ旨い訳でもないけど、まあ悪くないみたい  
な」

「肉質は牛肉のものにも近い感じがしたけど、こっちの肉はクセが強いよな。さして美味い訳でもなく、ただただ固いし。顎が疲れるよ」

「あ、でも寒冷効果はあるみたい。何か喉がキンキンに冷えてきたあ……」

呑み込むごとに、ひんやりとしたものが胃に落ちる。そうして出来上がりつつある耐熱感覚を感じながら、俺はもう一つ肉をかじった。

感触は分厚いステーキのように固く、しかしそれほど脂が出る訳でもない。噛めば噛むほど顎は疲れるが、脂がたくさん染み出るといった期待に応える様子も見られなかつ

た。さして美味しい肉ではない。これがこの肉に対する感想である。

「これ何の肉よ？」

「ラージャン」

「は？」

「いや、だからラージャンだって」

つい先日現れた、遺跡平原の脅威。金獅子ラージャン、それがこの肉の正体だ。

奇しくも、その存在はこの状況の立役者でもあった。クエストに関しても、そして料理に関しても。

そもそもこのクエスト——アカムトルムの討伐は、俺にとつての緊急クエストに相当する。つまり、これをこなせば俺の昇格が認められるのだ。それも、バルバレに渡ってきた到達目標である『G級特別許可証』を取得できるランクの昇格だ。これを逃さない手はない。

「この前出てた奴かあ。そういえばシガレット、狩りにいつてたもんねえ」

「お前との勝負のすぐ後に、な。まあおかげでこうして覇竜討伐を許可してもらえたんだから、上々だけど」

「……それでそのラージャンも、今や鍋の中つて訳ね。もうツツコむ気力も湧かないわ」  
呆れ気味のヒリエッタの言葉。それにルーシヤも同調する。

先日の闘技大会に加え、金獅子ラージャンの討伐。その事實は、俺の實力を大老殿に知らしめるいい機会だった。こうして、俺の昇格のチャンスが与えられるくらいなのだから、その効果はさぞかし大きかったのだろう。

また一つ肉をかじりながら、俺はゆったりと甲板から外を見た。

燃え上がる大地。ここで繰り広げられるであろう決戦を掌握すれば、俺の到達点は果たされる。それはすなわち、目標に迫る手段を得ることになる。そう考えると、自然と笑みが零れ落ちるのだ。

——いよいよ、合法的に<sup>アイツ</sup>淆瘴啖と戦うことが認められる。アイツを喰うことができ  
る——

「……あ?」

満足気に笑みを溢していた、その時だった。

不意に、赤黒い景色の中に何かが浮かび上がった。それはまるで、いつかカレーにしたサボテンのようにびっしりと棘を生やした何か。黒い大地に溶け込むような、漆黒の塊。されど、爛々と輝かせる二つの光が、自らを火山ではないことを主張している。あれは、あれはもしや——

「伏せろッ!」

そう言うが早い、船が大きく揺れた。

まるで旋風のような、竜巻のような。急激に乱れた気流が筒のように撃ち放たれ、この船を穿つ。その光景は、俺にはそう見えた。

突然の衝撃に、甲板の上の二人は悲鳴を上げる。それにも飽き足らず、二人を揺らす甲板はいよいよ傾き始めた。見上げれば、飛空船の要である気球部分に大きな穴が開いている。否、あの旋風でその身を大きく引き裂いていた。

「……墜ちる」

「嘘、待つて！ ば、パラシユー……うあつ！」

「くうつ、いきなり何なのよ！」

「まさか、アカムトルム!? こっちはまだ飛んでるのに！ 冗談じゃないよおー！」

「……そういえば、師匠が言つてたわ。霸竜つて、船とか撃墜する事例が多いらしいつて。まさかこの身で体験することになるとは思わなかつたけど！」

悪態づきながらも、着々とパラシユートを着こなしていた二人は、落下に対する準備を始めていた。飛空船技師も、この事態に慌てつつ重い舵をとっている。俺もパラシユートの準備をしなければ。そう思った、その時だ。

——アレが、ない？

先程まであつたはずのそれ。みなで楽しんでいたはずのそれが、無くなつていた。確かに俺の目の前にあつたはずなのに。先程まで、みんな食べていたはずなのに。

「…………あ」

ふと、外を見た。すると、それは確かにあった。弧を描きながら、宙を漂っている。中に貯めた具材を、この大地にばらまくようにして飛んでいる。

——俺が丹精込めて作った、金獅子ひんやりスープが、落ちていく。

「…………あんのトカゲエ…………やってくれるじゃんかよ…………！」

パラシュートは——— いらぬ。

気付けば、高度を下げた飛空船はアカムトルムの目と鼻の先まで地に寄せられていた。甲板に立つ俺たちのすぐ傍に、奴がいる。俺の作ったスープを台無しにした奴が、すぐ傍にいる。パラシュートなど、必要なかった。

「——— てめえを代わりに喰ってやろうか…………ツツ!!」

甲板を蹴った左脚。そのスプリングで、俺の体は宙に浮く。同時に肉薄する奴のその頭に向けて、俺は剣を二本振りかざした。

紅蓮に染まるその双剣が、火山に新たな火種をもたらした。



「なあ、トレッド！ あのモンスターがここに来てるって、マジなのか?!」

「マジです。機密事項ですが、ね。君とは契約関係に当たるから教えましたが、流布は厳禁ですよ。したら殺しますからね、デクの棒が」

「……容赦ない暴言なこと。相当心に余裕がないみたいだねえ」

「何分、モガの村民に悟られる前に事を終えねばなりませんので」

潮風香る山岳部。切り立った崖が海を囲うようなこの場所で、イズモは困ったように首を振った。

そんな彼の目の前には、金色の装飾が為された宝銃の手入れをする人物が一人。フロギイの皮を贅沢に使ったテンガロンハットを目深に被った男性、もとイトレッドだ。

「大体なんで君はここにいますか?」

「拠点に戻ろうと船に乗ってきたからだけど? モガの村は中継地としての役目もあるし、乗り継ぎにきただけさあ。何となく船に乗りたくなる時って、ないかい!」

「じゃなくて。君がわざわざ件のモンスターに対峙する理由はないはずですか?」

「いや別に一緒に狩りに行くつもりはないけど?」

「……はあ?」

イズモの率直な言葉に、トレッドは眉を潜ませる。

この場にながら何を言っているんだコイツは。トレッドの心中は、まさにそれだ。何食わぬ顔で村と島を隔てる門に背を乗せるイズモの様子に、トレッドは思わず銃を手



入れする手を止めた。

「だつて一般ハンターじゃ即時撤退が原則じゃん。オレ戦えないよ」

「……ああ、そうでした。君がルールをすっかり把握してると、何か調子狂いますねえ」  
「何だよその言い草。オレ、いつも超真面目じゃん？」

「ハゲタカ野郎がよく言いますよ……。一回そのへらさず口に徹甲榴弾撃ち込んでやりましょうか」

「ちよ、待つて！ 落ち着け！ 天下のギルドナイト様が武器を人に向けてどうすんだよっ！」

「ギルドナイトだからこそ、ですよ。殺しは僕の専売特許つてお忘れですか？」

慌てふためくイズモの様子に、辛辣な笑みを溢すトレッド。冗談じゃないと言わんばかりのその表情を見ては、彼はふうつと小さく息を吐いた。

もちろん、引き金を引くつもりなど毛頭ない。そもそも、引き金に指もかけていない。そう言いながら銃を下ろすトレッドに、イズモは冷や汗を静かに垂らす。今は緩みつつあるものの、かつての契約関係を思い出した彼は、笑う膝をそつと崩した。

腰を地に落とすイズモの様子を横目に、トレッドは銃を地に置いて調合用の風呂敷を広げる。さも、何事もなかったかのように。

「……君が相当な悪徳ギルドナイトつてことはよく思い出したよ。権力もつた逸脱者つ

て一番性質悪いよなあ」

「人聞き悪いですね。僕は僕の目的のために少々色々やっただけで、至って普通のギルドナイトですよ」

「はっ、普通……ねえ。そんな君がああモンスターの相手させられるのは、何とか滑稽じゃん。大体、残りの標的は見つかったのかい？ 君の目的の方の、さ」

「……いいえ。足取りは掴めつつあるんですが、追いつけてはいませんね」

並べたいくつもの魚類たち。カクサンデメキンやハレッツアロワナといった爆発性質をもった魚類たちの肉を磨り潰しながら、トレッドは低く暗い声でそう答えた。心なしか、魚を磨り潰すその手に力がこもる。顔を覆う前髪が、彼の表情に影を落とす。

そんな彼の様子に、イズモはかつてのトレッドの姿を想起した。初めて会った、その時の。

——数々の窃盗事件。その犯人が、君ですね。

そう話しかけてきたのは、トレッドの方だった。まだイズモがユクモの地で駆け出し始めたばかりの頃。培ってきた盗みの技術で生計を立てていた、その時に。

ギルドナイト。それはこの世界の法の番人だ。統治者であるギルドの犬であり、忠実な手足。その役目はハンターの指揮、国や自治体同士の外交、交渉など現実的なものもいくつがある。しかしそれをも超えて都市伝説として流れていたのは、ハンターを狩る

ためのハンターであるという噂。そんな当事者である人物が、目の前に現れたのだ。

——君の技術には利用価値がある。僕と組みませんか？

自分を殺しに来た。そう身構えた彼に言い放ったトレッドの言葉は、予想外という言葉葉すら生易しい。そんな思わぬ展開にイズモが狼狽したのは、言うまでもないだろう。

——トレッドの話はこうだった。

彼には、殺したい人間がいる。その情報収集にあたってイズモの窃盗技術は重宝するため、イズモをここで殺すのは惜しい。自分の管理下に置くことで命の保証をする代わりに、その技術を利用させてもらえないか、と。

「——復讐、ねえ」

「ええ、復讐です。至って合理的な行動原理ですよ」

「シグといい、トレッドといい、何で身近な人間はこうも復讐好きなのかなあ……」

「……シグ。シグですか……」

トレッドの憂うようなその言葉。それを聞いたトレッドは、静かに目を伏せた。調合を止めた手を、微かに震わせながら。

「僕は、シグの見解に理解ができません。下らない理由付けですよ、合理性を求め妥協してしまっている」

「……ええつと？ 何の話？」

「あんな心持ちで為せる程度なんですかね、彼は。実に下らない……」

右手に残っていたハレットアロワナ。冷凍保存されたそれを、トレッドは力のこもった手指で握り潰した。破片となった鱗が宙に舞い、調査する筈だったその材料が地に墜ちる。

幸か不幸か、それは冷凍品。爆発こそしなかったものの、氷の破片でトレッドの右掌には薄い傷がついていた。

「彼の傷は、そんな軽いものなんでしょうか。心の底から殺したいと思ったなら、そんな妥協はしないはず。シグには、そんな覚悟も無かったということなんですかね……」

「……君は何の話をしてるんだ？」

唐突に手を止めたと思えば、影ある表情で顔を満たすトレッド。まるで堰が切れたかのように言葉を並べる彼の姿に、イズモは少し違和感を覚えた。その声のトーンも相まって、より不穏な雰囲気を感じさせられる。

それに少し戸惑いながらも言葉を返すイズモ。そんな彼の言葉に投げ返したトレッドの言葉は、これまた突拍子のないものだった。

「——僕は、楽しかった」

「へ？」

「追い求めていた獲物をやっと狩れた時、本当に楽しかった。切り裂かれた己の腹を見

て、そこに詰まった糞尿を喉に流し込まれ。そうして窒息死する奴の姿は本当に滑稽だった。痛快だった！ 心の閉め切った窓が開いたような、そんな感覚がした……！」

縛り付けられた四肢。麻酔を入れ込まれ、痛みを感じなくなった体。そんな腹を引き裂いて、中のモノを抜き出されたあの表情。

脳裏に浮かぶその光景を瞼の裏で映しては、トレッドは恍惚の表情でそう言った。流れるように。溢れる思いを止められないかのように。

そんな彼の姿を見ては、イズモは少し後ずさった。彼も、そして今ここにいないシガレットもその現場に立ち会っている。肅清という名の、とても正気とは思えないその光景を思い出しては、イズモは喉奥から込み上げてくる何かを必死に押し留めた。

「……失礼。シグには少し失望しました。彼は、僕の良き理解者だと思っていたんですがねえ」

「うっ……結局、何が言いたいの？ シグがどうしたんだよ？ 折り合いをつけたとか、そんなこと？」

「心を入れ替えた、そうですよ。僕に言わせれば、妥協としか思えませんけどね」

「……君は、ぶれないなあ。そんなに奴らがまだ憎い？」

「——ようやく見つけた体が、上半身だけだった時の気持ち」

「へ？」

「爪痕が喰い込んで、凍結した何かで皮膚が覆われて。そうして食い千切られたように残っていた上半身。行方不明になって、必死になって凍土を回って。やつとのことで見つけたモノがそれだった時、僕がどう思ったか。君には分かりますか？」

全く笑っていない瞳で。開いているのか、閉じているのかも分からないくらい細まった瞼のその奥で、爛々と輝くその眼光。

それを前にして言葉を失ったイズモ。そんな彼を見ては、トレッドは薄く笑った。吐き捨てるような、淡い響きを乗せながら。

「僕は、ただ殺してやりたいと思いました。……リンが受けた以上の苦痛をただ味わわせたい。それだけです」

「……ああ、そうか。それが君のギルドナイトとしての動機だったね……。何と言うか、シグとそう変わらない感じの」

「ええ。ただ主犯が人間だった、という点を除いて、ね。やはり僕には、シグのようには割り切れません」

「人間とモンスターじゃ行動原理が違うからしょうがないよ。欲望を満たす、といってもそれは生きるためか快樂のためかで全く違うもんね」

どこか達観したかのような口振りでそう繋げるイズモの言葉に、無言を返すトレッド。そのまま、慣れた手付きで調合用風呂敷へと手を掛ける。

全種類の徹甲榴弾と拡散弾を調合し終えたトレッドは、それらを懐のポーチへと溜り込ませた。その中からレベル1の徹甲榴弾だけを取り出し、彼の持つ銃の中へと装填する。煌びやかな装飾が為された銃が軽やかな機械音を放ち、少しだけ重さを変えた。

一方で、丁度崖下の森から甲高い鳥の鳴き声が響く。見下ろせば、鳥の群れが勢いよく羽ばたく姿が目に入った。その様子は、まるで何かから逃げるかのよう。その一言に尽きる。

「……あと、二人」

「お、おい！ トレッド！」

「君はさつさと村へ戻ってくださいね。アレは手つ取り早く海の方へ追いやります」

——今は、目の前のことに集中しよう。目の前のアイツを、けしか嚇けることだけを考えよう。

そう思うや否や、トレッドは崖に向けて踏み出した。足場を無くした体をそのままに、宙へと身を落としていく。崖の先々に生えた木々に掴まっては、その速度を落としながら。

そうして瘴気溢れる森へと溶けたトレッドの姿を見ては、イズモは困ったように溜息を吐いた。いつかの、雪に塗れた村の中でシガレットと向かい合っていた時と同じような、重くやるせなさを含んだ溜息を。

「……その愚直さが、いつか君を殺しそうだなあ、トレッド……」  
 異常極まる咆哮音が響く青い空に、彼の溜息は呑み込まれる。ただただ無情に流れる潮風だけがそこにあつた。



「おつ、良い香り……」

じゆうじゆうと、火に炙られてはその身を温める一枚肉。溢れ出る肉汁は煌びやかで、まるで大海のきらめきだ。しつとりと表面を塗りたくる濃厚な脂が、熱によつて気化され、香りが変わる。強く、太く、逞しい。そんな香りだ。

王道も王道。大きく切り取つた一枚肉を、そのままフライパンで焼き上げる。先に塗りにたくつた牛脂ならぬ竜脂に、薄くスライスしたニンニクの香り。肉より先に入れたそれらの香りが、今焼けつつある一枚肉へと襲い掛かる。その光景は、溶岩島の光景よりも、それはそれは圧巻だつた。

—— 覇竜、アカムトルムのステーキ。今作っているのはそれだ。

「まあーだ話し合つてるのかねえ……」

「ここは溶岩島——ではなく、ドンドルマのマイハウス。自室の一角を占め上げた、



キッチンだ。その向かいにある庭では、二つの影が話を続けていた。

一人、白い鎧に身を包んだ少女。薄い金髪をひとまとめにした線の細いその少女は、はにかんだような笑顔を見せていた。つい先日俺と激闘を繰り広げ、ついさつきまで俺と覇竜討伐に参加していた少女、ルーシヤだ。

そんな彼女が手を差し出すのは、彼女の腰程度の身長に収まった小柄な影。透き通るような淡い白色で全身を包んだその影には、三角の耳とふさふさの尻尾がついている。言わずもがな、俺のオトモのイルルである。

「あいつらが話し終わる前に焼き上げちゃうか！」

そろそろ両面に焼き色がついたところだろうか。なんて見えない裏側の状態を想像しながら、俺はプレスワインの瓶を手を取った。それをそのまま口を傾け、燃え盛る大地へと降り注ぐ。その様は、まるで火山から噴き出た溶岩が大地に流れ落ちるよう。

フランベと呼ばれるその手法は、いよいよ熱を最大限にまで引き上げた。プレスワインの香りと共に、肉から凄まじいほどの煙が上がり始める。さながらケムリ玉を撒いたかのように。オオナズチの吐息のように。

「さて、蓋をして、と」

そんな大地を覆う、分厚い壁。俗に言う鍋蓋をフライパンの上に乗せ、上記溢れる大地を密閉した。そんな世界で眠る覇竜肉。さぞかしその身を昂ぶらせるだろう。

一方で話し込んでいた二人の影は、片方の影が消えることでその姿を変えた。イルルに軽く手を振っては、庭の扉に手を掛ける。軽い足取りで、ルーシヤはその姿を町へと溶け込ませた。

そんな彼女に名残惜しそうに手を振っていたイルルだが、ようやくルーシヤの姿が見れなくなったところでこちらに向かってくる。その表情は、どこかすつきりとした様子で満ちていた。

「何だ、ルーシヤの奴帰ったのか。折角だから食ってほしいのに」

「目の前の光景は私には理解できないから、見なかったことにしとく……つて言つてたにゃ」

「はあ……？ 何だそりゃ」

丁度その時、フランベの火が消えた。それに気付いた俺は、蓋を下ろしては中の肉を箸で掴む。彼女の真意が分からず、首を傾げながらも。

肉の感触は重く、中まで繊維が敷き詰まっている様を想像させる。そんな魅力的な一枚を、あらかじめ温めておいた皿へと移した。

「よし、あとはニンニクを乗せれば……完成だ！」

「にゃあ〜！ 何だか、すつごくいい香りにゃ！ ……まさか覇竜のお肉まで用意するなんて、流石旦那さんにゃ」

「ふっ、よせやい。そんなことより、食べようぜ！」

「賛成にやつ！」

肉をそつと切れば、中から我先にと肉汁が溢れ出す。あの海のようなきらめきは、肉の繊維をより一層強調した。その細かな隙間という隙間に入り込んだ濃密な脂。それが切り裂かれる度に顔を出すのだ。

同時に広がる、肉の強い香り。赤みを帯びた、強靱な肉の色。レア加減で焼けたそれらが、肉の切れ目から現れる。とうとう本性を現したかのような、そんなインパクトだ。「おお……見ろよこの肉。火竜なんかとは訳が違うぞ。香りがダイレクトに俺の脳にブレスを吐いてきやがる……ッ！」

「凄いにや、重いにや……。中までぎっしりとお肉が詰まってるの、分かるにや……！」  
摘まんだそれらを見てみると、いよいよ食欲が抑えられない。俺もイルルも、涎を拭わずにはいられなかった。

いただきます、とはつきり口にしては、その言葉の代わりのように肉を一つ、口に入る。重く、大きなその肉が、瞬時に俺の口内を埋めた。まるで足りなかった最後のピースがはまったパズルのように、ピッタリと。

「……うっま……ッ！」

噛めば噛むほど、強い感触が顎に伝わる。強靱な肉繊維は、生半可な力では噛み千切

ることなどできやしない。ただただその弾力性に、歯が押し返されるだけだった。

その肉の厚みに負けじと顎に力を入れると、あの脂が溢れ出す。匂いに変わって、海のようにきらめいて。先程まで見ることに、そして嗅ぐことしかできなかったそれらが、俺の口の中で染み出した。とうとう、とうとうこの旨みを味わうことができる。そう思うだけで、悦びに打ちひしがれそうだった。

適度な脂肪分を含んだそれは、嘔む度にその旨さを降り注ぐ。それはもう、覇竜の吐息のように猛烈と。あの太い四肢が支えていた体の中で眠るこの肉は、火山という過酷な環境でじつくりとその身を円熟させていたのか。そう考えざるほど尋常ではない味だ。

甘味も渋味も、苦味も酸味もそれらを全て取っ払った、ただ肉としての味を追求したようなその旨み。旨味という旨みをただただ求めたような、濃厚な味わい。霜降りが入り込んだ部分は芳醇で、繊維の絡まった部分は強い噛み応えがあり。そうして口の中で混ぜ合わさる度に、とろけるような味わいを残していく。

まさに旨みのソニックブラスト。何という満足感。——これが覇竜肉か。

「……旦那さん、これの味付け、何にや?」

「ああ……えっと、ただニンニクと塩胡椒を入れただけだよ」

「ほ、ほんとにや?」

「俺がお前に嘘ついたことあるかよ?」

「にやあ、旦那さんが嘘ついたことのは……結構あるけど……でもこれ、凄いにや。それだけの味付けだとしても、凄く強い肉の味にや……!」

「ニンニクの香りや風味も混ざってて、こりや最高だな……」

あらかじめ熱したニンニクが、凶悪なくらい味を擦り付けている。ニンニク特有の、鼻を抜けるようなあの香り。クセが強いながらもどこか爽やかで、肉の旨みを引き出す力強いそれが肉汁に混ざり込んでいた。

その焼き揚がったニンニクを、肉と一緒に食べてみる。興味本位で行ったそれは、興味本位でやるべきではなかった。

脳天に直撃する。肉の味が、ニンニクの味が。舌を通して、脳を狙い打っている。まるで神経を覇竜が潜行して、脳を突き破るが如く現れたかのような、そんな感覚だ。

肉の脂がニンニクの味わいを、ニンニクの風味が肉の旨みを。互いに高め、互いに引き出すそのコラボレーションに、俺は唸る他なかった。

「美味しいにやあ……。ルーシャさんも食べればよかったのに」

「だな、もつたないよな」

何が目の前の光景が理解できない、だ。ただ美味しい飯を作っているだけだというのに。それも覇竜の肉という、希少もいところな食材だ。俺には、食べない方が理解で

きない。

「……そういえば、二人で何を話してたんだ？　これが焼けるまで、随分と話し込んでいたよな？」

「にやつ？　にや、えつと……勝負には負けたからオトモにはできないけど、友達だよって話にや」

「……意外にあつさり引き下がるんだなあ、アイツ。もつとねちつこいかと思ったけど」  
つい先日の闘技大会。イルルを賭けて行われたそれは、辛くも俺の勝利という形で幕を閉じた。運営すら予想外の狂竜化個体ということで、それはそれは混戦模様だったが、まあ終わったことだしもういいだろう。

問題なのは、彼女。美味しそうにステーキを頬張る彼女だ。ルーシャという友人を得て、その関係性に一悶着があったものの、結局元の形に落ち着いた。ここまではよい。しかし、気になることもある。

「大体よ、お前何でルーシャの誘いに応じたんだ？　お前が断ればそれで終わりだったのに。……もしかして、俺よりルーシャの方が良いのか？」

「そ、そんなことないにや！　ボクは旦那さんの傍じゃなきや嫌にや！」

「じゃあ何でだよ？」

「にや、そ、それは——」

聞き取れないような声で、イルルは言葉を溶かした。まるで蒸発する竜脂の如く、そつと。

何を言っているか分からない彼女の様子。だが、その真意を言葉にしたくないらしい。それだけは、はつきりと分かった。

「……ま、言いたくないなら無理して言わなくてもいいよ。それより肉食おうぜ」  
「にやっ……にい……」

俺としては気を遣った上でのその言葉。しかしそれを聞いては、イルルは少し不満そうに顔を歪ませる。言いたいことはあるのに、気付いてほしいと言わんばかりのその表情。その様はまるで、「何か気付かない？」だとか「どこが変わったでしょー？」とか言うては無理難題を強要してくるアイツのようだ。

——とはいえそんな顔をされても、一体何を意図しているのかは一向に分からないのだが。まるで味付けのされていない豆腐を食べているような、そんな感覚さえしてくる。

「……でも」

「ん？」

「でもね……ボク、旦那さんが勝つって、信じてたから」

ただ、その一言。何も加えていない豆腐の中に、そつと落とした醤油のような。そん

な一言を前に、俺の箸は止まった。

照れくさそうに、訴えかけるように。そうして静かに微笑む彼女の姿。加工も調味もしていないその一言に、体に擦り寄せらるるようにして巻いた尻尾。

嘘は吐かないイルルだ。ルーシャのオトモになりたかつた訳ではないのだろう。何となくだが、そう感じた。

「……肉、冷めるぞ」

「にやつ」

皿に盛られた肉が、寂し気に香りを放つ。所在なさげな俺の意識は、その香りの方へ逃げた。思わず、右手の箸が伸びる。俺の視線は、横へとずれる。

何か言いたげなイルルの様子。俺にはその意図が分からず、ただ食事を促すことしかできなかつた。ただ肉を噛むことしかできなかつた。

——一体コイツは、何を考えているんだろう？

く本日のレシピ

『アカムステーキ』

・ 覇竜肉（リブローズ） ……200g

・ 塩 ……小さじ2杯



・黒胡椒

……小さじ1杯

・竜脂

……30g

・ブレスワイン

……適量

・モガモガーリック

……1片

## 一汗一菜碗一つ

徐々に終わりを迎えた、夏の夜。あの湿っぽい風もどこかへ流れ去り、妙に冷えた風が街を撫でた。荒涼とした、どこか寒々しさを感じさせる風だった。

ドンドルマの夜は早い。日が傾き始めれば、幾つかの店舗は既に営業を始める。もちろん、居酒屋だってそうだ。それどころか、夏が終わりゆくこの季節。日が沈む時間もこれまで以上に早い。

そんな店舗がずらりと並ぶこの路地は、ドンドルマに慣れた住民たちで色を染めていた。仕事上がりの商人たち、食材を買い集める主婦、狩りを終えたハンターなど、ここら歩き渡る人物は様々だ。かく言う俺も、その一員なのだ。

「……夕飯、どうしようかなあ」

冷えた風が首筋を撫でた。店と店の隙間を縫うように荒ぶその風に、俺は思わず肩を竦ませる。

一人。今日の俺は一人なのだ。

どうしようもなく、時間を持て余したかのように路地を歩く。当てもなく、目的もな

く。それが今の俺だ。

「せめてイルルがいてくれれば、話は違つただらうけど」

そう、今日はイルルがいない。

何やらネコの集会があるとか何とかで、彼女は今朝家を後にした。夜には戻ると言つていたが、何時になるかも分からない。彼女と一緒に飯を食うことは、今日は叶わなさそうだ。

——— といえば、彼女の生まれ故郷はここだったような気がする。ともすれば、彼女の旧友などもここにいるのかもしれない。それこそ、前の主人のところの同僚なども。

「……アイツ、美味しい飯でも食つてそうだなあ」

ぼんやりと放つた独り言。返してくれる人物などどこにもいない。元より返事など求めていないが、何とも言い難い虚無感を感じずにはいられなかつた。

自分の分だけ何か料理するというのも、妙に憚はばかられる。何だか面倒だし、今日は外食で済ませるのが吉か。

「——— ん？ うどん……屋？」

ふと止めた足。流れが滞る視界。そんな中に映つた、控えめな暖簾のれん。

そこには、確かにうどんと書いてあつた。主張の弱い、色合いも穏やかな暖簾。それ

が被さった小さなその建物は、個人経営が精一杯な居酒屋そのもの。何とも奇妙な店じゃないか。

——それにしても、うどんとは珍しい。うどんといえは、ユクモ地方で慣れ親しまれた麵類だ。小麦粉由来の太い麵を出汁の効いた汁で包み、薬味や具で彩つては勢いよく啜る。そんな魅力をもつ、独特な一品だ。

まさか、ドンドルマにまでそれが流通しているとは。久しぶりに見ると、何だか食べたくなつてきた。

「……むつ、この香り……」

鰹節、だろうか？　モガ近海で活きの良いカツオを用いた鰹節。それを用いたうどんが、ユクモ村では庶民に慣れ親しまれた味だった。ふと、店から香る懐かしき匂いに、ついつい顔を緩ませてしまった。

あつさりとした味わいに、出汁の深い香りが口いっぱいに広がる。その香りだけで、涎が浮かんだ。

——よし、今日の晩飯はここにしようじゃないか。

「いらっしゃい」

そう決めるや否や、すぐさま開けた店の扉。それと同時に飛び込む、出迎えの声。

入つてすぐ左手にあるカウンター。その奥でせつせとネギを切る女将さんが、温かな

笑顔で迎えてくれた。そんな彼女に向けて俺は軽く会釈しつつ、店内を見渡す。

木造建築の、小柄な家屋。女将さんが一人で切り盛りする、庶民のお供。そんな印象だ。

木目が目立つカウンターテーブルが店の左側を埋める一方、右側には団体用のテーブルが三つほど並んでいる。客の数はあまり多くなく、どこの席にでも座れそうだった。日が傾き始めたという時間帯だけに、それも当然だとは思うが。

右手前、丁度壁に貼り付けられたメニユー表が見やすいその位置に、俺は静かに腰を下ろす。二人用のテーブル席が、小さく軋んだ。

「さて、何にしようかな」

ただうどんだけ、というのは味気ない気もする。折角来たのだから、いくつかのメニユーを楽しみたい。そんな思いを込めて、視線を壁のメニユープレートへと移した。

「……こりやまた。呑み屋にもなるのか、ここ」

見れば、並んでいるのは数々のうどん——と、おつまみ。焼き鳥やら、卵焼きやら、しめ鯖といった呑み屋でよく見かけるような顔がいくつももある。酒もビールや酎ハイはもちろん、地酒や年代物と豪華な顔ぶれだ。

なんてその予想外の様相に目を見開いていると、女将さんが俺に声を掛けてきた。穏やかで、どこか懐かしさを感じさせるような声で。

「ここに来るお客さんはね、飲んだ後さらさらつとうどんで締める方が多いのよ」  
「へえ……締めにうどん、ねえ」

「それとか、おつまみの品をうどんにトッピングしたりするお客さんもいるわねえ」

チラツと横目でそう言う女将さん。そんな彼女の視線を追うと、そこには一人うどんを啜るお客さんの姿があつた。そんな彼の腕の中には、おおよそうどんには似つかないたこ焼きが浮いており――

つまるところ、アレもつまみの一つなのだろうか。そう思いながら目線をメニューに戻すと、確かにそこにはたこ焼きの文字が並んでいた。

一見謎の組み合わせだったが、そう言われてみると見方が変わってくる。まず始めに適当なつまみで胃を慣らせつつ、最後にうどんを頼んではさらさらつと締める。そこにトッピングを加えればなおよし――と。中々どうして、面白い店じゃないか。

「……じゃ、女将さん。枝豆にキムチ、あと……唐揚げちようだい」  
「はいはい」

目に付いたものを軽く言葉にすると、女将さんは快く承ってくれた。カウンターの奥で、油の溜まった鍋に火をつける。

その隙間には小皿に枝豆を乗せては軽く塩を振り掛けて、漬け込んだのであろう自家製キムチをタッパーから皿へと移している。その手際の良さに、俺は思わず見惚みとれてし

まった。

「枝豆とキムチ、お待ちどう。唐揚げもすぐ揚げるかんねえ」

「あ、どうも」

そのまま流れるように、枝豆とキムチがやってきた。

緑。何といつても緑。深く鮮やかな色に染まった三日月形の豆の束は、うつすらと透明な塩でその身を濡らしながらも力強く小皿の上で君臨していた。何だか田舎に帰ったような、そんな匂いがする。

一方のキムチは、これまた赤い。斑点のようについた唐辛子の切り身に、真つ赤に染まった出汁。それらに身を浸した白菜が、ゴロゴロと並んでいる。大きさはまばらであるものの、どれも食べ応えのありそうな大きさだ。

「うんうん、お通しにはちょうどいいよなあ」

今夜はどうも酒の気分ではない。ただでさえお通しのおつまみにうどん、そしてトツピングを重ねるのだ。腹を膨らませる酒はあまり良い選択とは言えないだろう。呑み屋のようだが、俺はあくまでもうどんを食べにここに来たのだから。

今日の俺には、お冷辺りが丁度良い。そう思いながらテーブルのお冷をコップに注ぎ、割り箸を手に取った。それを縦に割きつつ、右手で構える。食べる準備は、万端だ。「いただきますーす」

箸が掴んだのは、白菜の塊だった。キムチ特有の酸っぱい香りに包まれて、赤い液体に盛大にその身を溺れさせるそれ。それを二重三重と箸で重ねては、一思いに口に入れた。

入るや否や、伝わる食感。嘔む度に鳴る、シャキシヤキとしたその野菜の歯応え。

キムチは、ただ辛いだけではない。舌にピリツと来るタイプに辛さに、鼻孔を通り抜けるような酸味をもっている。嘔めば嘔むほど、その楽しい食感を味わう程に、それは溢れ出てくるのだ。つまり、嘔めば嘔むほど美味しくなる。

「ほほう。雑貨屋や八百屋のとは違うね、こりや……酸味というか、クセが強いや」

独特の味わいでも言うべきだろうか。八百屋にあるようなありきたりなキムチよりは幾分か辛味を抑え、代わりに酸味を強めてある。恐らくこの店オリジナルの味付けなのだろうが、これまた面白い味わいだ。フレッシユさというか、風流な味付けである。

「む……枝豆もいいね」

箸休めならぬキムチ休めに口に入れた枝豆。これもまた穏やかな味の華を俺の口の中で咲かす。

軽く指で押し出すと、軽い感触が口に転がり落ちる。玉が転がるように、砲弾が撃ち出されるかのように。そうして入ってきたそれは、あつさりとした塩の味をじっくりと



舌に滲ませた。

塩加減は控えめ——振り掛けた量は少ないようだが、それが逆に枝豆の味を押し殺さない。むしろ、程よい塩味が枝豆の淡泊な、豆の青い味を引き立てる。

ぽりぽりと、口の中でその身を崩す枝豆——塩の掛かった房でさえも爽やかな味わいだ。

「ふう……」

そんな美味たちを口の中で贅沢に転がした後、そつとお冷で喉を流す。残った断片や塩が流れ落ち、すつきりとした感触だけが口に残った。流石はお冷。たかが水だとは侮れない。

「はい、唐揚げね。お待ちどうさん」

「お、きたきた……」

じゆうじゆうと音を立てる、黄金色に輝くそれは、紛うことなき唐揚げだった。食材もシンプルに、養鶏場の一般鶏でも使われているのだろうか。狩場で調達できるガーグアやライヤンクツクばかりを食材にしていた俺にとって、ただの鶏というのはむしろ珍しいかもしれない。

カラカラに揚がったその表面。そこから垂れる、柔らかい脂。溢れる湯気は、調理に使われたのだろう油の香りをダイレクトに湛えていた。食べ、とシンプルに主張するそ

の香り。そのあまりの直情さに、俺は逆らえなかつた。

「……くう、たまらんなこりゃあ」

肉を細い細い繊維状にして、それを綿密に束ねたような、そんな食感。それが一口大に揚げられているのだから、噛めばじゅわつと旨みが溢れ出てくる。初めこそ、かりつと衣が削られるが、そこからじっくり肉の柔らかさが現れるのだ。そんな二段階攻撃に、俺は思わず唸り声を上げる。

量の割に随分あっさりとした仕上がりを見せる油は、衣の香りによく合っていた。その香りこそあまり強いものではないが、肉の旨みを強調するには丁度良いくらいだ。味付けは塩やハチミツなどの下味付けくらいなのだろうが、それも脂の香りによく合っている。硬派な味付けが、唐揚げには適切なのかもしれぬ。

「いいじゃん、この店」

旨いつまみを嗜めて。酒なり水なり、自分の好きなものを楽しめて。そうして締めうどんに辿り着く。中々に、面白い店じゃないか。

「うどんに乗せるつまみは何にしようかなあ」

つまみを次々に口へと放り込んで、一息つく。そうして壁に掛けられたメニューに目を向けながら、何ともなしにそう言葉を漏らした。

キムチ——ここにキムチをうどんに乗せるというのも悪くない。さながらキ

ムチうどんだ。他にも、あの客のようにたこ焼きを乗せるのも斬新だな。その他、無難な温泉卵だとか、しゃぶしゃぶだとか、色々面白そうだが——

「ん？ とろろ……」

とろろ、という言葉が、ふと視界に入った。

とろろといえば、長芋を擦って混ぜた白い半固体状の食材だ。ねばねばとした食感に、とろーりと伸びる感触。そして鼻を抜ける、長芋特有の田舎臭くも穏やかな香り。

それをうどんにかければどうなるだろうか。アツアツの麺に絡む、ひんやりとしたねばねば。啜れば麺のコシととろろの風味がブレンドされて、噛めば噛むほど柔らかい味に満たされて——

「うん、うん！ それだ！」

想像したのがいけなかった。もう口の中がとろろうどん状態だ。とろろうどん、食わずにはいられない。

テーブルの上のつまみたちはまだ残っているが、俺の腹が依然として唸っている。早速注文しよう。女将さんに、伝えよう。とろろうどんという、シンプルながらも神々しい、その言葉を。

——そうして口を開けた、その時だった。

「ちわー。二人、いける？」

俺の言葉を遮るよう鳴った扉の音。突然現れた、二人の人物。

一人、ギザミシリーズに身を包む男。先導するようにカウンター席に座つては、もう一人の人物を招き寄せた。

そのもう一人といえ、ザザミシリーズを着た少女。ギザミ男が中年相応な容姿に対し、こちらはまだ若い。見たところ、ギザミ先輩とザザミ後輩——といったところだろうか。

「おばちゃん、達人ビール二つ」

「あいよ」

「あ、せ、先輩……ウチ、お酒は……」

「何だよ、折角のフルフル討伐の記念なんだぜ？ いいから飲め飲め」

受け取ったビールを後輩に手渡しては、飲むように催促するギザミ先輩。ザザミ後輩は、それを断り切れずに少しジョッキに口を付けた。苦行のように歪ませるその表情、そして口振りから酒が苦手なのだろうか。

——まあ、俺には関係のないことだが。

「女将さん、うどんお願い。あ、とろろも添えてね」

「はい」

「お、こつちもポピ酒頼むわ。あと適当におつまみも」

「あいよー」

「え、ぼつ、ポピ……っ？」

加えた注文に、負けじと重ねてくるギザミ先輩。酒豪なのかどうかは分からないけれど、早くも達人ビールを飲み干したようだ。ジョッキなのだから、それなりの量であるはずなのだが。

続く注文は、ポピ酒。庶民に慣れ親しまれた一般的な酒だ。その特徴は、何といても安くて酔える。そこそこの値段にそこそこの度数を併せ持った酒なのである。

一方、その注文で顔を青くする少女が一人。ちよつとしか減っていないジョッキを抱えながら、眉毛をへの字に曲げた。

「何だ、もつとグイツといけよ。ほら、次が来てんぞ」

「う、うう。もう無理ッス……」

「たかが達人ビールだろ。もつとジョッキ傾けてホラ」

苦しそうなザザミ後輩に向け、ジョッキを押し付けるギザミ先輩。流れ来る金色の液体を受ける度に、ザザミ後輩の顔色は次第に青に染まっていく。

相当酒が苦手なのか、そもそも下戸なのか。いずれにせよ先輩に逆らうことはできないらしく、必死の形相で酒に耐えていた。

「うええ……ウチ、もう水がいいッス……」

「何言つてんだこれくらいで。まだ半分残つてるぞ」

「ひいい、ビール怖いツス……」

苦しうにビールを浴びては、死にそんな表情で噎せ返る少女。そんな彼女に向けて、ギザミ先輩は無慈悲にもポピ酒を注ぐ。カラカラと氷を打つその音が、無情さをよく表していた。

——関係ないとは言つたけれど、目の前でこうも苦しまれるのも目に障る。

「あ、もういいツス。こんな飲めないツス！」

「何がキミみたいなこと言つてんだ。いいから飲めつて」

うどんが煮え立つ香りがする。

それはいい。俺が食べたいと思つたものが、もうすぐ現れるのだから。

しかし、どうにもこうにも、先程まであつたあの熱烈なまでの激情は、既に消えかけていた。噎せ返るような酒の香りに、横柄な態度で後輩に酒を飲ます目の前の男の姿に。

「……いい加減にしろよ」

「……あん？」

だから、言葉は自然と漏れた。空になった皿も、掴む物がなくなつた箸も置いて、俺のテーブルに残つたのはただただ虚しい溜息だけ。

一方、ギザミ男は、そんな俺の囁くような声に反応を示す。じろりと、こちらの方に振り向いた。

「何だア？」

「……だからさ、いい加減にしろって言ってるの。無理に酒飲ませて楽しいのか？」

「何だお前、関係ないだろお前にはよ」

テーブル越して火花が散る。振り向いたギザミ男の深い眉間に、苛立ちが浮かび上がった。一方の俺だって、苛立ちを隠せない。小さく舌を打ってから、言葉を繋げた。

「目の前でやられると目障りなんだよ。食い気が削られる。ふざけんな」

「そんなこと知るか。部外者は黙ってな。さあ、もつと飲め！」

「うう、もう勘弁してほしいツスう……」

助けを乞うような目。ザザミ少女の瞳は、まさにそれだった。俺を足蹴にするギザミ後輩と酒を見比べては、苦しそうな声を上げる。

目の前でこうもつまらない茶番を見せられれば、飯も不味くなるというものだ。先程まであったあのうどんへの渴望は、今や一片たりとも残っていなかった。

「やめろって言ってるんだろ。酒は飲まずもんじゃない、飲むもんだ」

「うるさいな。変わんねえだろうがよ」

「人に無理矢理飲ますのは酒の飲み方じゃないってことだ。押し付けんな、強要すんな」

「俺に命令すんなよ若造が！」

酔いが回っているせいか、はたまた後輩を前にして気が昂ぶっているせいか。

ギザミ男は声を荒げた。血走った眼を俺に向けては、苛立ちを隠さない様子でキツと睨みつけてくる。

これだから酔っぱらいは。そんな行き場のない思いを溜息に乗せながら、俺は言葉を繋ぎ続けた。

「いいか？ 食事つてのはな、かけがえのない楽しみなんだ。美味しい物を喰って腹を満たす。それは生き物みんながもった代え難い特権なんだよ」

「何言つてんだお前」

「……だけどな、それを邪魔する権利なんざ誰ももってない。嫌いなものや苦手なものを押し付けるなんて尚更だ」

「それは俺のことか？」

「当たり前だろ？ 食から楽しみを引いてしまつたら、それはただの作業なんだよ」

眉を曲げて、鼻を鳴らして。そうして俺への苛立ちを募らせるギザミ男。俺の説教もよく聞かないで、ただ荒々しく酒を喉に流す。

一方のギザミ後輩はといえ、突然の口論に戸惑いつつも、止まった酒の強要に安堵してかこつそりお冷を汲んでいた。思ったよりも凶太い性格をしているようだ。



「……ハア。ま、言つても分かんないつてことは分かつてる。女将さん、悪いけど、勘定頼んでもいいかい？」

「あら、うどんはいいんですか？」

「申し訳ないけど、ちよつと食欲失せちゃった。お釣りは良いからとつといてくれ」

うどん込みで、ちよつと多めに五千ゼニ。それを女将に渡しては、俺は店を後にしようとした。もうこれ以上あの光景を見ていたくない。食欲もやる気も、何もかも失せてしまう。

——しかし、そんな俺の切なる願いも容易く叶うことはなさそうだった。踵を返せば、仁王立つギザミ男の姿が目の前にあつたからだ。

「何だお前、言いたいだけ言つてとんずらすんのか？」

「これ以上アంతタの顔を見たくないもので。食べ物で粗末にするような、燃えないゴミ同然の顔なんざな」

「何だとてめえ！」

すれ違いざまにそう言うと、奴はあからさまに声を上げた。顔を真っ赤にしている。見なくても、何となく分かつた。

扉に手を掛けて、外に歩み出て。同時に響く、床板を蹴る音。ずんずんと奴が追いかけてくる。

「ちよ、先輩！」

「待ちやがれてめえ！ 黙って聞いてりや好き勝手言いやがって！」

「俺より酒の方が、もっと言いたいことがあったと思うぜ。先輩のいびりに使わされた、可哀想な酒たちがな」

「ばッ……馬鹿にしやがって……ッ！」

とうとう、ギザミ男が怒りを露わにした。完熟シナトマトもかくやという程の顔で、拳を振り被っては俺の方に突っ込んでくる。

引いた肩、高く踊る肘、握られた拳。

駆け寄る足取りは覚束なく、睨む目線は俺の視線と合わさらない。右少し下を見ていることから察するに、俺の右頬を殴ろうとしているようだ。

—— 師匠の教えが、こんな時にまで出てしまうことに、俺は少し苦笑した。とはいえ、これによってトレッドに声を掛けられたのも事実。笑うに笑えない。

「おっと」

「ぐっ?! く、くっそー！」

半身ずらしたその勢いに、彼は空を振り被った。

危うい足取りで勢いづいた体を止めるギザミ男。酒に強くとも、多少なりに回つてはいるようだ。そこらの犯罪者や兵士より、動きが分かりやすい。手に取るように分か

る。

「なめんじやねえ！」

左利きなのだろうか。再び左拳を握り締め、彼は猛然と走り出す。今度は俺の腹を狙ってか、幾分か低い射線を展開していた。

——だから、その射線上にそつと手を添えてやれば。彼の拳を受け流して、体の軸をぶれさせる。非常に簡単なことだった。

「おつ、おおつ……!?!」

風を斬る拳の、その手首。そこに添えた左手が、そのまま左に優しく薙いだ。

同時に、彼の体は左へと流れ始める。目線が追い付いていない。どうなっているのか、把握できていないらしい。

今度は、右手を奴の胸へと軽く添える。前のめりに倒れそうなその体を、掬うように止めた。

「せいッ！」

その瞬間。

から空きになった左脚の、その膝裏に。軽く足払いを仕掛け、そのまま振り抜いた。もちろん、義足ではない右脚でだが。

「うあつ!?!」

今度は腰の支えが蹴り落とされて、後ろへとバランスを崩すギザミ男。そのまま右手で、添えたその手を振り払った。

支えを失って、腰の重心から転げ落ちて。そうして派手に横転する奴の姿。道行く人の、注目の的になる。もつとも、当人は痛みのあまり転げ回って、それどころではなさそうだが。

「いっつででで……！」

「せつ、先輩……！　大丈夫ツスか!?!」

路上の中心で背中を地面に擦らせるギザミ男に、ザザミ少女は慌てながらも駆け寄っていった。その表情は、困惑と焦り、そしてどこかスツキリとした何かをトツピングしたかのよう。

酔いと痛みで混乱状態な先輩を見つつ、後輩少女は俺に小さく頭を下げた。今度は少し、申し訳なさそうな顔も加えながら。

「……何か、どうもスイマセンした」

「いや、こつちこそ。……悪かったな。そいつに水でも飲ませてやってくれ」



「あー……やっちゃまった」

誰もいない自宅にて、俺は小さな溜息をついた。後悔と後味の悪さを混ぜ返したような、そんな溜息を。

人と取っ組み合いの喧嘩をするなんて、一体何時ぶりだろうか。ドンドルマ——どころか、バルバレに来てからもしていない気がする。やはり、タンジアでの日常が最後だろうか。

トレットと出会う前から——そもそもこの対人戦能力が買われてスカウトされたような気もする。それからトレットに頼まれたり自発的に喧嘩したりして——

そんなこんなで淆瘴啖と剣を交えるその直前まで、かもしれない。それまで、俺は拳を振るっていた。

「……何にせよ、人と戦わないで越したことはないけどね」

人と戦ったところで、碌なことにはならない。今回のことで改めてそう確認した。あの悪徳ギルドナイトは今日も今日とて人を殺す算段を立てているのだろうけど。できることなら、彼の計画にはもう触れたくないものだ。

「今触れたいのは、むしろこのアツアツな麺だなあ」

お湯を注いだ丼。そこから、温かな香りが舞い上がる。

お湯を注げば出来上がる乾燥麺を用いた疑似うどん。カツオ由来の出汁を効かせた

スープに満たされたそれは、ぎこちないながらも麵らしくその身をゆったりとほぐしていた。

そんな世界に乗せた、薄緑色の繊維。薄い線が絡まったようなそれが汁へと身を浸し、その色を濃く塗り替える。厚く重い身へと、その姿を変容させた。

「……とろろならぬとろろ昆布、か」

我ながら落ちぶれ具合が酷いものだ。暴力に身を任せなければ、美味しい店で立派なうどんをすすれたかもしれないというのに。

シンプルな出汁に、くすんだような白さを見せる麵。深緑色へと変わっていくとろろ昆布。諸行無常を感じつつ、俺は安いその一杯に乾杯をした。

どこまでいっても安っぽさを残す味わい。よく言えば、庶民的なのだろうが、そのあっさりとした控えめなスープはやはりそこらのうどんのスープだった。うつすら染みる魚介系の出汁が、いい塩梅を醸し出している。

そんなスープに絡んだ、乾燥麵。乾燥させた麵を再び湯通しして戻しているのだから、その感触は思った以上に柔らかく、同時に歯応えもなかった。ふにやふにやと骨の抜けたような食感だけが続いていく。ずずつとすすると勢いよく口の中に滑り込んでくるのだが、言い換えればそれくらいだ。店の麵には完敗と言えよう。

とろろはとろろで、昆布特有のねっとりとした香り——粘り気があるともいえるべ

きだろうか——を口の中で撒き散らす。山芋でできたとろろとはまた違った味わいだが、その食感はどうどんによく合っていた。スープが進む。味わいが重なる。

「ま、即興の品なんざこんなもんだよなあ」

良くも悪くもない出来の一品を前に、俺の小さな溜息が木霊した。

人と戦つても碌なことにならない。しかし、不満を麺と一緒に呑み込む気にもなれなかった。割つて入つたのは英断だったと、そう信じたい。

「……やっぱ乾燥麺じゃ少ないや」

浸すものが無くなった器を前に、俺の腹は小さく鳴り続けていた。心の満足感はあるても、腹の満足感はそうでもないようだ。

く 本日のレシピく

『お手製簡易うどん』

・乾燥麺 ……一人前

・とろろ昆布 ……お好みで。

・出汁(スープ) ……300cc

・醤油 ……大さじ1杯

・みりん ……大さじ1/2杯

・塩

……大さじ1／2杯

一方その頃、大老殿に一匹の伝書鳩が舞い込んだ。

緊急通知のために駆り出される白色の鳩。その姿を確認するや否や、受付の竜人族の女性はその脚に括りつけられた文書に目を通す。先程まで手にしていた、大量発生したガブラスの書類を乱雑に放りながら。

「……大長老」



読むや否や、その細い瞳をさらに細めるその女性。その仕草に訝しむ大長老に向けて、彼女はそつと口を開いた。

「……とうとう、来ました」

「そうか……。とうとう来おつたか。来る可能性はないこともないと思つていたが、まさか本当に来るとは、な」

「ああ、そんな……。如何致しますか……。？」

やや狼狽しかける彼女に向けて、大長老は悩まし気にその豊富な髭を擦る。

予定外の事態。そう言わんばかりに憂いに満ちた声を漏らす彼に、受付の女性は不穏な空気を感じ取つた。しかし、今は待つ。大長老が一体どのような判断をするか。その細い瞳を震わせながら、彼の答えを静かに待つた。

そんな彼は、髭を擦る手を止めて、静かに言い放つ。彼女の待つ、この事態に対する最も適切な対応の仕方を。

「——シガレットを、早急に呼んでくれんか」

## 含哺鼓腹

じゆうじゆうと焼ける、深い深いキノコの香り。

氷海という自然の冷蔵庫の中で、串に刺さったキノコたちは何とも芳ばしい悲鳴を上げていた。吹雪のように肌を切り裂く雪風に、その刃を優しく溶かすような煙。氷海には全く似つかない白い煙が、吹雪く白を染め上げる。濁ったような白で、透き通るような白を。

燃えるが如く、染まった赤。それを充分に湛えた表面を撫でる、光を映したような何か。いや、赤だけではない。渦巻くような黄色に、萎びたような水色にさえ降り掛かっている。とろけるように、包み込むように色を満たすそれ。一般的な、照り焼きのタレだ。

「ああ、寒い場所にや、美味しい飯が一番だよな」

「きつとそう言うのは旦那さんだけだと思うにや。普通もつと、温かい服とかそういうのを求めるにや」

「ホットドリンクと根性さえあればどうってことはない。いや、今回はホットドリンク

すら必要ないかもな」

「にや？ まさか根性だけでこのままキャンプから出るつもりにや？」

「まさか。見ろよ、目の前でキノコ焼いてるだろ」

「何でこんなところでキノコ串なんかしてるのにやこの人……」

「美味そうだから、これに限る」

ねつとりと垂らした照り焼きのタレを、そのまま糸を引いては落とさないように、じつくりと串を回す。糸を巻き取るように動かしたそれは、糸の代わりに糸を引いたタレを巻き上げた。

鼻を優しく突き上げる、シンプルながらも力強い照り焼きの香り。甘く、そして辛く。相反するようなその味わいを一つに仕立て上げたそれは、もはや秘術の領域だ。そんな秘術を、一心に身に受ける三つの影。

一つ、紅蓮に染まるニトロダケ。火山地帯などに主に生息するこれらのキノコは、発火性を含んだ危険なキノコだ。しかし、ハチミツを染み込ませるといった処理を済ませれば、その発火性を幾分か鎮めることができる。力強い味わいが特徴の、クセのあるキノコだ。

一つ、鮮やかな黄色に包まれた、丸いキノコ。麻痺弾に重宝される、マヒダケだ。麻痺性の物質を多く含んだそれは、もはや麻痺毒の領域。しかし、そのぴりぴりとした味

わいがまたクセになる。痺れるような旨みがたまらない。

最後に一つ。萎びたような、どこか元気のなさを感じさせるキノコ。薄い水色に浸したそれは、クタビレタケという名で知られている。しかし、その名に反し、滋養強壯成分が実は多く含まれているのだとか。これは食通の中ではある程度認知された、クタビレタケの良さの一つだ。

「ニトロダケ、マヒダケ、クタビレタケ……。この人、何でこんなの焼いてるのじゃ」「美味そうだからに決まってるじゃないか」

「これ、調合用の素材だにや。本来食用じゃないのにやあ……」  
「ただ調合ばかりに使ってももったいないじゃん？ 美味そうだから食う。これが真理だ」

一層吹雪の音が荒れ、それに俺の言葉も吞まれかける。イルルはイルルで、少し身を丸めながらも両の肉球で耳を包んだ。

まるで、唸り声を上げているみたいだ。氷海という世界が、おの震えているような。そんな気さえしてくる。

——ふと、吹雪の中から何かの咆哮が微かに響いた。まるで慟哭のような、そんな咆哮。氷海を打ち鳴らすように、力強く。

「……イルル、聞こえたか？」

「……にや。確かに聞こえたにや。……ほんとに、あの子がここにいるのにやね……」  
「だな。孤島からほど近い氷海に流れてきたつてのは、本当みたいだな。流石はギルドの情報網だ」

「あんな体で海を渡るなんて、にわかには信じられない……けど、今ここにいるんだもんね。信じるしかないにや」

少し身を振るわせながら、悟つたように口を開くイルル。そんな半目の彼女を見ながら、俺はふつと笑みを溢した。ばちんと、焚火が吠える。俺の笑いを茶化すように。

「旦那さんは、今日は大丈夫そうにやね。……ボクの方が緊張してるみたいだにや」

「それでもないさ。やつとのことで辿り着いた目標が今、そこにいるんだぜ？ 動揺しないってのは嘘になる。……だけど」

「——だけど？」

俺の言葉に釣られるように、首を傾げるイルル。そんな彼女に向けて、俺は言葉を繋ぎ続けた。胸の内にある思いを、味も整えずそのままに。

「だけど、変な気分だ。ただ殺そうとしてた頃よりだいぶ心が落ち着いてる。食べてやるって思った方が気合が湧くよ」

「……味への渴望ってやつかにや？」

「そうかもな。きつとこれは復讐なんかじゃなくて、ただの俺の趣味。ただ味を追求し

ただけ。そういうことなんだろ」

「——恨みとか、憎いつてのはもう無いのにや?」

「無い訳じゃないが、それだけでもない。過去を塗り替えるのは、ただ恨みの対象を潰すんじゃないくて、狩つて糧にする方がいいつて思つたのさ」

そう言いながら、焼き上がったキノコ串を引き上げる。茸肉の焼ける音、照り焼きのタレが大気に混ざる香り。その全てが愛おしい。味という華は、どうしてこうも美しいのか。

死体の山を築くより、料理の山を築きたい。キノコの串を見れば見るほど、その渴望は大きくなる。自然に滑つた視線の先に、氷海を貫く山の頂が映つた。

——次のメニューは、あそこだ。俺が本当に求めていた味が、すぐそこにある。

「……ドンドルマの方は、大丈夫かにや?」

「筆頭ハンターやルーシャたちがいるんだ。きつと大丈夫さ」

「にや、心配するべきは、ボクたちなのかもしれないにやあ……」

「大丈夫。今回は、前のようなへまはしない。お前を絶対に傷つけさせない」

「にやつ……」

信頼してるぜ。

それを最後に言葉を紡ぎ、俺は前へと歩き出す。雪特有のこもるような陥没音が、四

つずつ鳴り響いた。



「……渚瘴啖、イビルジョー？」

「ええ。タンジアギルドからの情報でね、孤島で行方を眩ました後、氷海周辺で目撃されたようなの」

氷海に訪れる数日前のことだった。

警報が鳴り響くドンドルマ。霞がかかったこの街に、ぼんやりとした炎が灯る。

城壁の上には、何人もの近衛兵が控え。街を走る移動式大砲は、ガタガタとレールを震わせながら、町の奥へと消えて。そうして、筆頭ハンターたちの声が響き渡る。街ぐるみの防衛線を、鼓舞するが如く。

そんな街を見下ろしながら、ドンドルマ最高峰の位置するこの大老殿で、俺は少し奥歯を噛み締めた。手に持った依頼書が、くしやりと悲鳴を上げる。

「……それで？ どうして俺に？」

「大長老からの指示でもあるんだけど……それとは別にね、推薦があつたのよ。交戦経験があると聞いたのだけど、本当？」

そんな俺の視線の先で、どこか継るような目を向ける女性。俺たちハンターにクエストを紹介してくれる、妖艶な竜人族のギルドカウンターだ。

トレッドか、タンジアのギルドマスターか。はたまたキャシーだろうか。俺を推薦したというその人物の顔を浮かべながら、小さく顎を縦に振った。すると彼女は、困ったように目を伏せる。

「そう……じゃ、貴方が一番適任ってことなのかしら」

「……不満そうな顔だな」

茶化すようなその言葉。それに反応しては、竜人の彼女は小さな溜息をつく。耳を走る大きなイヤリングが、しゅらんと鳴った。

「こんな状況で貴重な戦力を送り出すのはねえ。でも、トタン村をはじめ氷海周辺の集落からは救難要請が届いているし、背に腹は抱えられない、か」

「……オオナズチがドンドルマに向かってるってのはマジなんだな」

「そうよ。今全力で防衛体制を敷いてるのはそういうこと。これまで突然ガブラスが大量発生したりと予兆はあったんだけど、まさかオオナズチが現れるとは思わなかったわ」

先日俺が床に伏した元凶、オオナズチ。それが今、この街へと向かっているらしい。

俺が相対した個体なのかどうかまでは分からないが、どっちにしる関係のないこと



だ。それよりも、問題なのは淆瘴啖の方。

——何故、氷海に現れた？

タンジアギルドの勢力外を抜けて、バルバレギルド管轄内に現れる。そんな大掛かりな移動は、これまで見かけられなかったはずだ。俺が初めて会ったその時から、奴はタンジアギルド管轄内を根城としていたはず。

そもそも、何故海を渡ったのだろうか。過酷な氷海よりも、温暖な孤島の方が過ごしやすいはずだ。豊富な土地資源をもつあの場所ならば、餌も氷海より断然多いのだから。それなのに、あえて海を渡ったその理由とは。餌が無くなるほど、喰い尽してしまつたのだろうか。それとも——

「……逃げざるを得なかった、とか？」

「え？」

「あ、いや、何でもない。それよりも、俺はどうすればいいか教えてくれ」

モンスターがどう動かないかなんて、人間が全て把握できるはずがない。喰うものが無くなっただけかもしれないし、ただ単に気まぐれだったのかもしれない。そんなこと、考えるだけ無駄なことだ。

そう息を整えて、竜人の彼女に視線を戻す。今考えなければならぬのは、すでに起こったことではなくて、今何をしなければいけないか。俺も彼女も、その意思を瞳に燈

した。

「そうね、率直に言うと、貴方には瘡癩の討伐に向かつてもらいたいの。並のハンターじゃ危険すぎて任せられない。交戦経験のある貴方しか頼れないわ」

「……その言葉を待ってたぜ」

タンジアギルドにいた頃から、ずっと。

そんな言葉を呑み込みながら、俺は依頼書に印を押す。それを彼女に手渡しては、俺は少し微笑んで、食事テーブルの方へと踵を返す。彼女は小さく俺に手を振っては、もの憂げに目を伏せた。

バルバレに渡ってまで用意したその到達点に、今俺はいる。とうとう、この時が来た。やっとアイツと戦える。——アイツを喰うことができる。

「ムオツホン。もう単独行動はしないのか？ シガレットよ」

「……地獄耳かこのジジイ……」

鋼の重圧を埋め込んだような声。それが響いたかと思えば、頭上から鼻息が風を撫でた。

見上げると、そこには巨大な竜人族が鎮座している。まるで卵のように整った頭と、相反するかのように蓄えた顎髭。俺の何倍も大きなその男が、太い声を滲ませた。

「タンジアの方では随分とやんちゃをしたそうなの」

「ま、そこそこって感じっすかね……ボス」

「ボス、ではない。ここでは大長老と呼ばんか」

俺の言葉に不満を漏らすその巨体。軽く咳払いを混ぜながら、話題を切り替えようとするその姿は、どこか滑稽だ。本人曰く、狩人の緊張をほぐす、だそうだが。

「……大丈夫つすよ。卵でも運ぶような、繊細な狩りをしてきますから」

「うむ。……アレは大きな脅威だ、頼んだぞ。どうか卵のような、大らかな狩りを。……決して踏み込み過ぎないようにな。深迫いは禁物だからの」

「ボ……じゃなかった、大長老。今回は何も、俺一人で行くとは言ってませんぜ？」

カマを掛けるような俺の口調に、大長老の眉がピクリと動く。軽く傾げた頭が、卵の殻のように光を映した。

そんな彼に向けて、俺はもう一度口を開く。麗しい卵を口にするかのように、そつと。

「——最も信頼できる相棒を、連れていきますから」



「にゃああああつー！」

氷海に吠える、ネコの声。それがこの大地に木霊する。

同時に震える、氷の山。地団太でもするかのよう巨体が震え、その度にこの氷の塊は悲鳴を上げる。雪に混じって剥がれ落ちた氷の欠片が舞い、その景色は非常に幻想的だ。

ただ一つ、あの巨体さえ目に入れなければ、だが。

「つしやあッ！ 狩るぞイルルウ！」

「にやあああ！」

「目指すはあの黒胡麻和え野郎だア！」

「んにやあああッ！」

「斬ってバラシて調理してエ！ あの巨体でバーベキューすつぞオ！」

「みやあああッ！ こ、こつちきたにやーッ！」

お互いがお互いを鼓舞するように、吠えるように下った坂。氷海中央部に位置するこの傾斜を駆け下りて、その先で鼻を鳴らす奴——瘡瘡啖イビルジョーへと肉薄する。

かと思いきや、もちろん向こうも俺に気付いてはこちらに向けて脚を出した。肉の締まった巨体が地を砕き、そのおぞましい棘の山を突き立てる。

「——よう。久しぶりだな、瘡瘡啖」

ビックリしては尾を逆立てるイルル。そんな彼女の前に立ち、手にした剣斧——叛逆斧バラクレギオンを持ち直した。風を薙ぐように右手で振りつつ、切っ先を奴へと向

ける。

金色の光が、雪の光に溶け込んで。そうして金と銀のコントラストを生み出すその光景に、イビルジョーは唸り声を上げた。不味そうな餌だ、とでも思ってるんだろうか。

「……今日こそだ。今日こそ俺が、お前を喰うからな。覚悟しろよ!」

自らを急ぎ立てるように吠え、右脚を大きく踏み込ませる。雪が潰れ、氷は割れ、固い金属音が響き渡り――

そうして駆け出した俺の姿が、発破になったのだろうか。奴は、勢いよく吠え始めた。天を仰ぐように、持ち上げた巨体。空を呑まんと開いたその口から、凄まじいまでの音の爆弾が放たれる。それと同時に、奴の傷口という傷口から、おどろおどろしい龍の瘴気が溢れ始めた。大気を塗り替えるかのように、激しく強く。

「イルル、このくすんだトマトソースみたいなのは奴には触れるなよ! 融かされっぞ!」

「にや、にやあ! だ、旦那さんそのまま突っ込む気かにや!」

「俺のことは心配すんな! そのためのコイツだかな……!」

枷が外れたその瘴気は、まるで爆風のように大気を侵す。それはそのまま、イビルジョーへと潜り込む俺をも巻き込もうと、黒々しい牙を剥いた。

そんな黒に迫る、赤。剣が跳ね返るように反り返って、四重にも重なった斧はその身を小さく縮ませて。そうして柄のすぐ上にまでスライドしては、その根元の口を勢いよ

く開く。

——一瞬だけ蓋が開いたビンからは、猛烈な勢いでエネルギーが外に漏れた。剣を振る時の量とは段違いの、濃密な紅蓮色のエネルギー。気体のようにビンから漏れ出たそれが、剣斧を伝って刀身を滲ませる。その瞬間、俺はグリップに力を込めた。

「はあッー！」

全体を支える左手で、その柄を力強く握り締めて。かつ右手で、剣斧の変形機構を司るグリップを捻る。捻ることで、剣斧の奥の手が顔を出した。剣の切っ先が刀身のレールを焼き付け、眩しい火花を散らす。

——その瞬間だ。小ぶりの火花が、ビンエネルギーに火を付けた。溢れ出た緋色の靄は、さながら炎王龍のような爆破の渦へと変貌した。

「にや、解放突きの反動を……!?!」

「くっ……やっぱ肩にくるなこりや……!」

破裂したビンエネルギーによって、俺は勢いよく後方に飛ばされる。同時に龍の瘴気から身を躲し、斧モードに移行した剣斧を構え直した。

一方で全身から力を溢れさせる奴は、血走った眼で俺を見る。属性解放突きも物ともしないその巨体は、片側しか灯らないその瞳に、渴望で満ちた色を燈した。食欲しか頭がない。そう感じさせるほど激しい色だ。

「……イルル、左目を狙うぞ」

「にやつ？ 左目って……あの剣が刺さった方の？」

「ああ。あの瘴気に覆われた体を狙うのは非効率だ。それよりも、内側にえぐれたあの目を狙った方が良い」

「……た、確かにあんなに龍のオーラが溢れてたら、属性も何もなさそうだにやあ……」  
「だな。それに、視界が潰れてる分死角になる。左側面を意識しろよ」

「わ、分かったにや！ いくにやーっ！」

奴の頭から生えた、一本の柄。いつか刺した封龍剣【絶一門】が、瘴気の海に残された孤島のように、弱々しくもその存在を主張していた。

そこに向けて、イルルは大量のブーメランを展開する。一丁投げて、その勢いのままもう一つ。さらに振った体を遠心力に任せ、とどめの三つ目を放った。

あの剣は、奴の眼孔を貫いている。固い皮膚に穴を開け、奴の内側の組織を引き裂いているのだ。だから、それが少し動くだけでも尋常ではない痛みが走るらしい。

この情報があの凍土での戦いで俺が得た、僅かな戦利品だ。確証はないが、疲労困憊のままに斬り上げた斧でも奴は大きな悲鳴を上げた。間違いはないだろう。

「……さあ、暴れようじゃないか」

グリッブを右に回しては、剣斧を再び唸らせる。再び斧の刀身をスライド。ピンの蓋

をこじ開け、そうして剣斧を俺の左後方部——丁度左脚の後ろあたりに、低く構えた。内部機構が激しく動き、機械らしい音が響き渡る。かと思えば、再びあの香りが漏れ始めた。赤い靄のように大気を染める、剣斧に秘められたビンエネルギーの、あの香りが。

「にやー！　動かれると当たらないにやー！」

視線の先では、飛び交うブーメランを振り払おうとしているのか、大きく尾を振るイビルジョーの姿があった。それにブーメランを弾かれては、イルルは悲鳴を上げている。

目に見える悪戦苦闘の風景に苦笑しつつも、俺はもう一度グリップに力を込めた。先程属性を解放させたように、切っ先に火花を散らすあの握り方で。

「イルル、一旦下がれよ！」

簡潔に一言だけ添えて、俺は駆け出した。否、加速した。

ビンの蓋を閉め切らず、一定の量だけ放出し続ける。そうしてビンの炎を湛えながら、それを背後で解放。するとどうだ、ビンの反動を動力にした加速装置の出来上がりだ。

そうして、燃えるように背中を押されれば、俺は両脚を前に踏み込んだ。ただ走るよりも圧倒的に加速するそれに、俺の頬は大きく風に揺れる。加速のあまり荒れる視界



は、まるで線を描くように流れ始める。その線が、あつという間にイビルジョーのあの黒い色を描き出していった。

「はあッ！」

俺の声で横に跳んだイルルの、すぐその奥を。奥で唸るイビルジョーの、その左目を。勢いそのままに振り上げた剣斧で、飛び出た柄の、そのすぐ根本を斬り付けた。大気を撫でる尾を掻い潜つたことで、奴の視界に入ることもなかったのか。奴は予想外だと言わんばかりに悲鳴を上げる。怯んだ奴は、その動きに歪ひずみを入れた。

ここぞと剣を斧に戻し、そのまま勢いよく振り下げる。あの斬り上げに勝るとも劣らない速度で走つたそれは、もう一度その瞳孔に罅を入れた。

もちろん、奴も黙つてはいない。今度は怯まず、俺に向けてその牙を向ける。涎で溢れた大きな口が、一心に俺へと迫つた。

「おっとー！」

今度は、斧を右から左に振る。振りながら、グリップを再び捻つた。

斧の姿を収め、瞬く間に剣へと変貌したその刀身は、再びその身からビンの光を撃ち放つ。それはそのまま、ビンの反動のままに俺を右へとずらした。右へ、右へ、イビルジョーの牙が届くよりも速く、右へ。

そうして虚を喰らつたイビルジョー。その隙を穿つように、イルルから大量のブーメ

ランが放たれる。皮を薄く裂く程度の刃だが、確実に奴に当てていた。

——力が湧いてくる。先程食べたニトロダケの旨みだろうか。

固く、歯応えのある食感。それがニトロダケの特徴だった。ほどよい辛味を含んだその味は、照り焼きのタレの甘さを引き立てる。ゴリゴリと、顎を喰らせる食感と共に、あの鼻を抜ける照り焼きの味を口の中で撒き散らすのだ。甘さ際立つその中に、ちよつとした辛みを添えるその味わい。それが俺に力を与えてくれる。

「オラアー！」

ビンの反動で斬り下がりながら、それをそのまま前進する力へと昇華させる。勢いのままに二連斬りを繰り返しては、再びグリップを握って剣斧を変形。縮んだ刃が伸び上がり、四枚の斧が連なるように姿を見せた。

その連撃に呻き声を上げるイビルジョー。しかし、負けじとその脚を振りかざしてくる。捕食者は俺だ、と。そう言っているかのようにだった。

「旦那さん、下がって！ 危ないにや！」

「え——うおッ!?!」

唐突に飛び上ったイビルジョー。かと思えば、その鋭い爪が肉薄した。イルルの言葉を認識するより、ずつと早く。

その脚に押されるままに、背を雪に落とした俺。それに対し、その醜悪な口を曝け出

す奴。根元まで裂け切ったそれが開き、俺へと振り落とされる。寸でのところがかざした剣斧に、奴のその敵めしい牙が穴を開けた。

「……んのツ！ 口くっせえなお前！」

細い繊維を束ね、一つの形にまとめ上げたような食感をもつキノコ、マヒダケ。ピリピリと痺れるその味は、俺に強靱さという活力を与えてくれそうな、そんな気にさせてくれる。

口の中で弾けるその刺激は、思わず両目を瞑ってしまふほどだ。しかし、同時にどうしようもない快感が伴う。まるで炭酸の弾ける刺激のような、そんな気さえするほどの。それが不思議なことに、体が麻痺することはなく、むしろその旨みが俺に活力を与えてくれるのだ。照り焼きの甘辛さの中で溢れるその風味に、俺は全身を鼓舞する。キャンプで食べて、俺の腹に収まったそれらの力を一挙に解放した。

「旦那さんを離せにや！」

「お前が俺を喰うんじゃねえ！ 俺がお前を喰うんだよッ！」

イルルの決死のネコまつしぐらの術。雷光を纏ったそれが一直線に奴へと走る。

剣斧で何とか奴の口を留めていた瞬間、白い光がそのまま視界を埋め尽くした。体毛を光に変えたようなその閃きは、一寸の狂いもなく奴の左目を穿つ。抉られた傷をさらに抉り直すその一撃に、奴は堪らず悲鳴を上げた。

仰け反った顔。苦しみを吐き出す口。解放された俺。

牙が喰い込み、歯形がついた剣斧を俺はそのまま振り上げた。イルルの斬撃を繋ぐようなその一閃に、奴は堪らず横転する。そうして露わになったその腹に向けて、俺は斧を勢いよく振り回した。

右へ、左へ、はたまた右へ。八の字でも描くかのような連続攻撃で、奴の腹を斬り裂く斧。いつかの凍土で俺がつけた傷を、早くも痕しか残っていないかったその腹を、俺は手を休めずに斬り続ける。

——スタミナがなくなってしまうのではないか。そう感じるほど荒々しい動きだ。だが、俺はその心配は一切していなかった。

「クタビレタケ、最ッ高かよー」

全く疲れを感じさせない味わいだった。

柔らかく、歯を入れ込めば簡単に裂けてしまうクタビレタケ。焼いたことでより一層柔らかくなったそれは、噛めば噛むほどトロトロと口の中でほどけていく。それが照り焼きのねっとりとしたタレによく絡みつき、クセのない味を練り広げた。

出汁にでもしたら美味しいのではないか。そんな、優しくも控えめな味。それが照り焼きの濃い味に埋もれ、しかし控えめながらもその味をより強調する。埋もれるのではなく、合わせることで美味しくする。クタビレタケは、そんな味だった。

「旦那さん、瘡瘻啖が起き上がるのにや！」

「ああ、踏み込むなよ。ゆっくり、そして堅実に狩るぞ」

「……ステーキでも焼くように？」

「そうだな。弱火でじっくりだ！」

再びその細い脚で氷の大地を踏み砕く奴。転がるように起き上がったは、その狂気に満ちた瞳を爛々と輝かせた。一步下がって、回復薬を飲む俺に向けて。苛立ちと焦燥を込めた色で。

怒り心頭。その言葉が相応しい奴に向けて、俺は再び剣斧を構える。イルルも右手に剣を、左手にブーメランを握った。緊張の高まった表情で、キツとイビルジョーを睨む。この氷の大地はまな板だ。そして、俺の持つ剣斧は包丁。食材は奴。豊満な肉をぶら下げたイビルジョー。本日のメニューは、随分とじゃじゃ馬のようだ。だが、それでいい。美味しい飯なら、それ相応に調理し甲斐がある。そう考えると、俺の心は静かに踊った。

「……さあ、調理を再開しようじゃないか」

——狩りはまだまだ、始まったばかりなのだから。

く本日のレシピく

## 『照り焼きキノコ串』

- ・ニトロダケ …… 1個
- ・マヒダケ …… 1個
- ・クタビレダケ …… 1個
- ・特製照り焼きのタレ …… 適量

## えぐい渋いも味のうち

——親父は、強かった。

小さな小さな、水没林の中で佇む小さな村だったけど、その村付きのハンターは強かった。モンスターの脅威に晒されるその立地に、されど水没林の資源で生計を立てていた村だ。

その村の護衛として派遣されたハンターは、ロックラックギルドに身を置いていた凄腕のハンターだった。何でも、ジエン・モーランという超巨大古龍の撃退にも貢献したとかで、その腕前を買われあの村に派遣されたらしい。

水没林は、湿気と沼で溢れた独特の密林地域だ。まるで潮の満ち引きのように沼の高さが変動し、それに合わせて生態系も変わる。ドスフロギイやクルペッコからナルガクルガにドボルベルク、そして沼で森が没した時は、ラギアクルスでさえ現れる。簡単に言えば、モンスターたちの楽園なのだ。

危険なモンスターが多ければ、その分村にも危険が及ぶ。そんな村民を守るために派遣されたハンターは、村と共に苦難を乗り越え、そのうちに村との交流を深めていった。

果てにはそこで子どもを儲けるほどに。そう、俺だ。

「——お前は将来、何になりたいんだ？」

「……ハンター？」

「おいおい、俺と同じかよ。……んじゃ、その理由は？」

「んー、かつこいいから！」

そんなガキの言葉を聞いては溜息をつく親父。無精髭を生やしたその顎から、困ったような声が漏れる。

リオソウルシリーズを身に纏い、片手剣を腰にぶら下げたその男は、俺の憧れだった。村を守り、人間の何倍もあるモンスターと戦い、それに勝つ。まさに英雄だ。憧れを抱くな、という方が無理があるだろう。

「あのなあ……。ハンターってのは、ただかつこよくても務まらないんだぞ」

「いいじゃん、かつこよくて！ 村に来るモンスターを片っ端からやつつけてさあ！」

「おっと。何もハンターはモンスターを見境なくやつつけてる訳じゃないぜ？」

「え？ 違うの？」

「おうともさ！ ハンターってのは、よく見なきやいけないんだ」

「……見る？」

「そう。そのモンスターが狩るべきものなのか、どうかをな」



親父はよく、ハンターの理念を口にしていた。俺は、ハンターは狩りたいものを好き  
なだけ狩るものだとずっと思っていたけれど、それを口にする度に親父からつまらない  
説教を喰らったものだ。

ハンターは、自然と共に生きるのであって、決して自然を破壊するものではない。そ  
れが親父の口癖だった。自然と共存することが大好きらしい親父は、モンスターにも命  
があり、彼らの生活があることを俺によく語っていた。何となくだが、臍氣に覚えてい  
る。

「一度、本当の大自然って奴を感じてみるといい。樹海とかに、一人で行ってな」

「自然なんて、そこらへんにあるじゃん」

「そうじゃない。人間は自分以外誰もいないところさ。そこで自分がどれだけ生きられ  
るか試してみる。そうすると、いずれ気付くもんだ」

——自分自身も、自然の一部になっていることにな。

そう言つては薄く笑う親父の言葉に、子どもだった俺はただ首を傾げることしかでき  
なかつた。

それから——俺が十回目の誕生日を迎えた年だっただろうか。村の周辺で、特異な  
影が見られるようになったのだ。

緑色の外皮。それを裂くように生えた不気味な棘。限界まで裂けた口に、さながらヒルのように太く発達した尾。水没林に現れるようになったその影に、住民は怯えていた。親父がその対処に当てられるのに、そんなに時間はかからなかった。

「あんなモンスターは見たことないが……まあ、体格から見ると獣竜種だろうか」  
「……狩りに、いくの？」

「ああ。あれは完全な肉食性だ。それも、食い過ぎのな」

「つまり、狩るべきモンスターってこと？」

「そうだな。あれはこの水没林の外から来た奴だ。これ以上は見過ぎさせないぜ」

親父が狩ると断言したそのモンスター。その時まで、俺はそのモンスターの姿を見たことはなかったのだけれど、きつと悪魔のような姿をした奴なんだろうと思っていた。自然との共存が口癖の親父が、狩ると断言するほどのモンスターなのだから。

村人からたくさんのアイテムを受け取って、親父が丹精込めて研いだらしい封龍剣【絶一門】を持って、母親と抱擁を交わして。そうして村長の鼓舞の下、親父はそのモンスターの討伐に向かった。誰も、親父の勝利を信じて疑わなかった。

——結局帰ってきたのは、腕の一本だけだったけれど。

親父が帰ってくるには遅いと、村民が危惧し始めたその次の夜だった。森の方から、まるで大銅鑼のような何か響き渡ったのをよく覚えている。同時に緊急事態を告げ

る鐘が鳴って、村民が慌て出して。

気付いた時には、村の一角が潰されていた。そこにいたのは、黒い皮で全身を覆った紛れもない悪魔だった。

「——え？」

親父は？

自然に漏れたその言葉。それに応じるように、悪魔の口から零れ落ちた何か。

それは、青と黒を混ぜ合わせたような何かだった。それが腕を包んで、その先からは剣を握った指がずらりと伸びている。

見覚えがある配色。親父がよく着用していた、リオソウルシリーズの腕装備。それが握り締めていたのは、昨日親父が腰に携えたはずの、封龍剣【絶一門】。

それを認識してからの記憶はあやふやだ。気付いたら、傷だらけの状態でアイルーの集落にいた。ただ何人もの肉の塊が、あの悪魔の腹に収まった光景だけはうつすらと覚えてる。

——この時俺は感じたんだ。生きていてはならないモンスターだって、この世界には存在するのだと。



「……なんて、思ってたのになあ」

荒い息を整えながら、俺は振り下ろした斧を持ち上げる。刀身に纏わりついた雪を落としながら、再びそれを構えた。

その先には、瘴気をまるで燃料切れのように収める渾瘴啖の姿。あの悪魔の姿が、そこにあつた。

「……俺から全てを奪ったくせに、なんて弱々しい姿なんだお前」

氷海を駆け回り、懸命に餌を探す奴を追い掛けて。一度山頂にまで逃げた奴を追い、その流れで島を回るように洞窟を抜けて、再びこのエリア3で相対する。

そんな激戦の中で、奴がとうとう疲弊したかのように瘴気を収めた。餌を喰おうにも目の前の餌は口に入らず、別の餌を探そうにもこの餌が邪魔してくる。そんなジレンマに苛立ちを示すような、微かな唸り声。喘ぐ奴のその口から、それが漏れた。

——弱っている？

何となくだが、そう感じた。

初めて会った時ならまだしも、今は無き七星剣斧を担いで戦ったタンジア時代、そして数年前の凍土での戦いに比べて。

「……にやあ、少しプレッシャーが引いた……にや」

「エネルギー切れなんだろう、たぶん」

七星剣斧もネブラXシリーズごとバラバラに打ち砕かれた、あの凍土の戦いが最も記憶に新しい。けれど、あの時のような余裕が、奴にはない。切羽が詰まったかのように、焦燥の念に駆られたかのように、必死の形相で戦っている。それこそ、目の前の敵を無視してでも糧を得ようとするほどに。

「オーラも無くなったにや……。こうして見ると、傷だらけにやね、あの子」

「……そうだな」

そう、傷だらけなのだ。

何もイビルジョーが傷だらけなのは不思議なことじゃない。正面突破で戦いに挑む奴らはいつも生傷だらけだ。モンスターの爪痕、牙による切り傷とその様相は様々である。

——だが、奴は違った。端的に言えば、火傷だ。それも火薬による火傷。人工火薬特有の、傷痕に塗りたいくるような黒々しい煤すすの痕。それが物語っている。あれは火竜が吐くようなものではない。人間が好む——それこそ拡散弾など、そういったものによつてつけられる傷だ。

となると、奴が孤島から退去したのは、もしかして——

「旦那さん！　ここはチャンスにや！　攻めるが吉にや！」

俺の思考を打ち破つて、ケモノの雄叫びを上げるイルル。そうして身を屈め、後足で雪を蹴り上げながら、息も絶え絶えのイビルジョーに向けて走り出す。

「……おっと、待てイルル」

「むにゃんっ!?!」

そんな彼女を、後ろから抱き上げた。突然ひよいと持ち上げられて、彼女からは素つ頓狂な声が漏れる。

「な、何するにや旦那さん！」

「俺もそう考えて、この前痛い目を見た。いつまた暴発するか分からんからな」

「にやつ、このチャンスを無駄にするつもりかにや？」

「そうじゃない。もちろん俺は戦うさ。だけど、ここでイルルには別のことをやってほしいんだ」

——　畏は、もう仕掛けれそうか？

その言葉と共に、彼女にタルや爆薬を手渡した。それと俺の顔を交互に見ては、イルルは何かに気付いたかのように口元を引き締める。そうして、力強く頷いた。

しゆたつと着地する相棒に、も一つキノコの串を啜えさせて、俺はもう一度イビルジョーの方に振り向いた。背後から聞こえる雪を掻く音を確かめながら、俺もキノコの

串を咥え、走り出す。

激戦でエネルギーを使い果たしたピンを弾き飛ばし、新たなピンを装着。懐から取り出したそれは、強撃のエネルギーをもったピンだ。簡単に言うとうと、最も推進力のあるエネルギー。

剣モードの剣斧は、ピンのエネルギーを背から噴出することで爆発的な加速力を得る。大剣のような構えをとるのに、圧倒的に振る速度が違うのはこのピンに依るものだ。中でも強撃ピンは最も加速力に優れ、数あるピンの中でも最も単純火力を高めるものと捉えられている。七星剣斧に、そしてこのバラクレギオンに設定されたピンも、それだ。

「どうした淆瘴啖！ もう疲れたのかよッ!」

噴出したピンエネルギーで飛び出した俺と、その手に持った出力の塊。それをそのまま、斧の振り回しへと変貌させる。周囲を円でも描くように薙ぐその一撃が、奴の体を引き裂いた。爆破の痕をよく残すその皮膚が裂け、奴から悲鳴が飛び上がる。

それでも、奴は倒れない。強酸性の涎を振り撒きながら、必死に脚を大地に縫い付ける。そうして、邪魔な蠅を打ち払おうとその巨大な尾を薙ぎ払った。

斧の薙ぎ払いからの、尾の薙ぎ払い。薙ぎ払い勝負も面白そうだが、生憎人間とモンスターでは体格が違い過ぎる。鼻先を薙ぐ恐ろしいその一撃に、俺は思わず斬り払いに

移行した。左肩から、右脚に。そうビンの軌跡を描きながら、その反動で俺は後ろに跳ぶ。そうして空を斬った奴に向けて、再び剣斧を振り上げた。

剣モードではリーチが足りない。その尾先を見ながらそう思った俺は、柄のグリップを再び握る。剣が斧へと姿を変えた。

「……何も食えねえつてのは、辛いもんだよなあ」

宙を舞うように、巨大な尾先が飛び上がる。同時に支えを無くしたかのように転がる。滑障啖の姿を見ながら、俺は小さくそう呟いた。

奴が常に苛まれている空腹。それが拍車を掛けて、今の奴はあの体たらく。本当に、空腹とは恐ろしいものだ。

空腹は、時に命を絶つ。最高のスパイスであると同時に、最悪の敵でもある。そう、俺たち生き物にとって最悪の敵とは、それだ。

「だけど、飯を美味しくしてくれるのもそれなんだよ」

何という二面性。まさに天使と悪魔の具現だ。

俺は口に啜えたキノコ串を力一杯噛み締めながら、その天使へと手を振った。

美味い。何といっても、ただひたすらに美味い。マンドラゴラを丸々一本贅沢に使ったそのキノコ串は、えも言えぬ旨みに満ち溢れていた。

石付きを切り取って、笠には十字の切り込みを入れて。そうして軽く塩茹でしたそれ



を、味わい深いフライパンへと投入する。何が味わい深いかと言われれば、それはフライパンの中で先にくつろぐ品の数々だ。

塩と胡椒、そこにバターを加え、さらに怪力の種と忍耐の種を加える。それらを軽く炒り、種の香りとバターの匂いをブレンドさせてから、そこにマンドラゴラを投入。バターのとろける香りが混ざった、上品なキノコ串の完成である。

数時間前キャンプで生まれたその、熱が冷めても冷めない味を、俺は一心に頬張った。

「ああ……美味しいなあ、これ」

歯応えある食感に、口の中で香るバターの濃厚さ。茹でたことにより柔らかさを得たキノコに、うっすらとついた塩味。それが胡椒やバターの味を引き出して、香りをさらに引き立てる。

一方で、怪力の種や忍耐の種の味わいもまた、控えめながらキノコに染み付いていた。旨み、甘み、渋み、えぐみ——といった数々の味を混ぜ合わせたかのようなそれは、塩の辛さと合わさり何とも複雑な味を描く。

例えるなら、ローズマリーの香り付けだろうか。マンドラゴラといえど、キノコの臭みは十分に強い。それを、炒った種たちは品の良い香りで上書きしている。舌にピリピリと残るえぐみが、バターの甘さを強調する。それが芳醇なキノコの旨みを、さらに昇

華させていた。

「グルルル……」

「あん？　欲しいのか？」

吹っ飛んだ体を引き上げて、無くした尾先からは血を振り撒いて。

そうして、恨みがましく俺を——いや、俺の持つキノコを見る瘡瘵啖。氷海の凍て付く空気を優しく撫でるその香りに、奴は思わず前に出た。

「——やらねえよ」

一口でキノコを全て口に入れ、そのまま剣斧を構える。立てるように上げたそれで刃先を奴に合わせ、その牙が触れる瞬間に引く。衝撃から身を引くように、そのまま背後に跳んで、納刀。奴の牙は再び氷海の風を嘔み締めた。

「旦那さん！　準備完了にや！」

同時に、イルルの声が飛ぶ。見れば、落とし穴を設置し終えたイルルが俺に向けて手を振っていた。美味しそうにキノコを頬張りながら、ぶんぶんと。

そんな彼女の足元には、ネットによる紋様が浮かんでいる。降りしきる雪を被りながら、それでもその存在を主張するそれ。罾の設置が、彼女の言葉通り完了したようだ。

——あそこには、キノコと一緒に手渡した爆薬も仕掛けられている。落とし穴の奥に仕込んだ爆薬。罾の起動と同時に起爆する、まさに狩猟技術の集大成だ。

あとは、奴をそこに誘い込めばいい。罨で動きを封じて、爆薬で体力を削って。疲労困憊な奴を仕留める、まさに仕上げだ。

「よっしゃー！ イルル、今からこいつをそつちに誘い込む！ 少し離れるよー！」

「にやー！ 分かったにやあー！」

そうして、イビルジョーへと振り返る。コイツを挑発して、注意を引いて、そのまま罨に誘い込めば――

なんて思った瞬間だった。

――突然、奴の姿が消えた。

「……は？」

同時に、地面が軽く揺れる。雪が舞い上がり、視界が白く染まる。風が、何かによって掻き乱されるのを感じた。

気のせいかな？ 突然雷雲が現れたかのように、何かを空を遮っている気がした。巨大な影が、白い視界に差し掛かっているかのような、そんな感覚。そう、まるで巨体が空に跳躍したかのような――

「――まさかッ!?!」

剣斧からエネルギーを噴出させて、舞う雪を吹き飛ばす。そうして、慌ててイルルの方へと踵を返した。

——そうして見えたのは、巨体をさながら流星のように落とすイビルジョー。まるで岩穿テツカブラのような大ジャンプで空に舞い上がったらしい奴は、その全体重を氷海に落とそうとしていた。罨を埋めたイルルに向けて。

「……にやつ!？」

「イルルッ！ 避けるオー！」

いつかのドボルベルクの時の如く、突然の事態に動きを強張らせるイルル。奇しくも同じく獣竜種が飛び上がるという事態に、イルルは回避をし損ねた。

幸い、奴の爪が直接彼女に届くことはなかったが、それでも彼女は未だに罨の傍にいた訳で。そうして、その爆破罨に超体重が飛び込んだとなれば——

氷海に響く、凄まじい轟音。仕掛けた爆薬が一瞬で炸裂し、氷海の傾斜を太陽の如く照らした。雪をも解かす熱波が生まれ、それが爆風と共に波紋を描く。イビルジョーを爆心地に、ここら一帯が吹き飛んだ。あまりの風圧に、俺は思わず腕で顔を覆う。

「イルル……ッ！」

まさか奴に罨を利用されるとは。分かっていたのか、はたまた偶然か。いずれにせよ、状況は一転したことには間違いない。

——いや、そんなことより、イルルは。彼女は——

「……くう、どこだ……ッ！」

淆瘴啖などどうでもいい。罨が台無しになったことも大した問題じゃない。イルルが、イルルさえ無事ならば。

舞い上がる雪の中で、同じく雪のような白い毛並みが宙を舞う。ところどころ毛先を焦がしては、ぐったりと重力に身を任せる彼女の姿。爆破の熱を直接浴びた訳ではなさそうだが、その衝撃は十分に吸収してしまつたらしい。意識なく、そのままエリア2へと続く空を墜ちていく。

考えるより、先に体が動いた。剣斧のグリップを握り、属性解放モードに移行。それをそのまま、背後に回してはピンの蓋を全開にした。剣の刃先と斧の刃先が擦れ合つて、エネルギーに火を付ける。噴出機構が激しく吠えた。

「イルルーツー！」

さながら、ガンランスのプラスチックダッシュのようだ。駆ける地すらない氷海の空へ、剣斧だけを頼りに飛び出したのだ。そのまま、火を湛えたまま身を投げるイルルへと己を飛ばす。

あまりの速度に氷の破片が頬を切り裂いたが、それに気を回す余裕もない。今はただ、ただイルルを抱き寄せることだけを考えて――

「……………にやつ!!? ボ、ボク……………ツ!!?」

「イルル……………ツー！」

左手を伸ばした。右手で剣斧を支えながら、イルルに向けて左手を伸ばす。それが彼女に触れた瞬間、それが引き金になったのだろうか。彼女は、唐突に目を覚ます。

「にや、にやあ!?! 何これっ!?! な、何でボク落ちてるのにやー!?!」

「イルル、目え閉じてな!」

そんな彼女を力一杯抱き寄せた。ようやく触れた彼女の体。温かく、柔らかく、命の炎を精一杯湛えた小さな体。イルルが無事だったことに、俺は小さく安堵の息を漏らす。

——だが、依然としてピンチであることには変わらない。俺もイルルも、未だに宙を舞っている。このままではエリア2の水へと全身を叩き付けられるだろう。そうならば、どうなるかなど想像するのも御免だ。

「ど、どうするのにや旦那さん!」

「イタチの最後っ屁!」

左手で、イルルを胸に押し付けて。右手で、剣斧を振り回して。

先程まで俺の背に向けていたそれを、今度は下へと向ける。ビンの推進力を、ブレーキに変えるために、その刃先を下へと下ろした。そこに左脚を掛けて、もう一度ビンの蓋を全開にする。新しいビンの内容量はおおよそ六割ほど。一回の属性解放で約三割ほどのエネルギーを失うため、属性解放は残り二回のみ。

それを今、衝突寸前の大地に向けて撃ち放った。

「にやあああああああつ!!」

「ぐツ……………」

まるで空中で振り回されるかのような、そんな感覚だ。落ちていた体が急停止して、かと思えば横に吹き飛ばされるような。視界が急激に荒れ果てて、自分の体がどうなっているのか全く認識できない。

ただ、剣斧が地面に激しく擦れ、左脚の鋼鉄を軸に体を大地に留めていることだけは分かった。ピンの光が、バラクレギオンの金の破片が。氷海の、銀色の氷が舞い上がって、俺の体は氷に激しくその身を擦らせて——

「……………止まった」

「……………にや、にやあ」

「……………生きてる、な」

「……………にやむ……………」

海へと落ちるギリギリの地点。そこで、左半身で氷を薙いだ俺の体。激しく擦れた後を残しながらも、俺の体は生きていた。単純な痛みと、重力に振り回された頭痛が激しく走る。思わず腹のものをぶちまけてしまいそうなくらい、強烈な吐き気が口を満たし

た。そう、まるで重度の酔いのような。

それでも何とか身を起こす。すると、びくびくと俺の胸の上で体を丸まらせるイルルの姿が目に入った。震えてはいるものの、目立つ怪我は見当たらない。爆風による毛の火傷程度だろうか。

「イルル、大丈夫か？」

「び、ビビったにや……。ボ、ボクたちどうなったのにや？」

「淆瘴啖が爆破罫に飛び込んでな、それで一気に大爆発よ。その爆風で俺らはここまで飛ばされたって感じかな」

「うう……旦那さん、ボクを庇ってくれたのかにや……」

「傷つけさせないって、言っただろ？」

「にや……っ」

ピクリと耳を動かして、髭をピンと張るイルル。そんな大事なオトモを一旦地に降ろして、立ち上がろうと足に力を入れた。

いつまでもここにいる訳にはいかない。俺もイルルも無事なことが分かったなら、狩りは続行だ。淆瘴啖も、俺たちの罫を利用したとはいえあの爆風を零距离で受けているんだ。無事であるはずがない。一旦キャンプに戻るのも手だが、ここは敢えて攻めに徹しよう――



なんて思いながら曲げた右脚を軸に左脚を踏み込んだ瞬間、俺の視界は再び横転した。またもや宙に投げ出されたかのような、そんな錯覚さえする視界。ふわっと、腹の奥が締め付けられる。

「えっ……」

「だ、旦那さん!」

慌てて跳び込んできたイルルの、ふわふわのお腹。それがスライディングするかのようには俺の体を支えてくれた。固い氷の代わりに、俺の頭は柔らかかなネコの体に包まれる。痛みはなかった。むしろちよつと心地いい。

「……まさか」

「にやあ!? 旦那さんの左脚、無いにや!」

脳裏を過ぎった不安。それを、イルルの声が現実に変える。

思えば、剣斧の軸を整えるために俺は左脚を利用したのだった。それが、剣斧の次に大地に近いところにあった。その剣斧自体も氷に削られ、今や刃先が無残にも零れてしまっている。脚が同様のことになっているのも、考えてみれば至極当然のことだろう。

——それにしても、脚が無いとは。命があつてこそなのだから、左脚を犠牲にしたのは後悔していないが、このままでは狩猟続行は不可能か。不本意だが、撤退するしか

「……つて、そうは問屋が卸さんぜつてか？」

「にや？ ……いい、イビルジョー……っ！ 追つてきたのにや……っ！」

不意に、大きな影が氷を染める。黒い色が銀の光を塗り潰し、そうかと思えば赤黒い塊が全てを押し潰した。影の色に染まった氷が勢いよく割れ、澄んだ海水が染み出してくる。

それも全く気に留めずに、落下の衝撃を全て吸収し切った滝瘴啖。開いた足を構え直しながら、ゆつくりと、俺たちに向けて牙を定める。爛々と、狂気に満ちた隻眼を輝かせては、低い唸り声を上げた。

「にやあ、またあの瘴気が溢れてるにや……！ 怒つてるにやあ……！」

「あの爆発の中にいたくせに、ピンピンしてんなコイツ。……マズいかも、これ！」

爆破の渦でさらに皮膚を焦がしながら、しかしそれに全く気に留めずに、ゆつたりゆつたり脚を踏み出す滝瘴啖。その巨体が歩く度に氷海の氷には罅が走り、氷が軋む音色を奏でた。

——マズい。このままでは逃げることも出来ない。後ろは、氷点下の海だ。とても人間が生きることのできる環境ではない。かといって目の前には奴がおり、しかも俺には片足が無いときた。逃げることすら、ままならないだろう。

「……イルル、逃げるなら今の内だぞ」

「にやつ!? 何言ってるのにや旦那さん!」

「俺はもう走れないけど、お前はまだまだ大丈夫。今だったら逃げることだってできる。だから、今なら——」

「イヤにやイヤにや! 旦那さんを置いてくなんて、絶対イヤにや!」

「でも、このままじゃ死ぬぞお前」

「そ、それでも……旦那さんから離れたくないのにや……っ!」

ひしつと、俺にしがみつくるイルル。強張った体で、震えた声で。

それでも必死に俺にしがみ付いている。絶対的に生きる可能性がある逃避より、俺と一緒にいることを選んでくれるなんて、旦那冥利に尽きるじゃないか。

—— だったら。

「……だったら、さ。最後の賭けをしよう」

「……にや? 賭け……?」

「ああ。——イルル。一つ頼みを、聞いてくれないか?」

ゆつたりと歩くイビルジョー。もはや動けない獲物に向けて、その牙を鳴らす捕食者の影。それが、今俺の目の前へと迫っている。

奴は、自分の勝利を確信したのでらう。だから、これだけゆったりと歩み寄る。攻撃の手、ではなく捕食の手を選んでる。あとはその鎌首を、凶悪な顎を下ろせばいい。そう考えているようだった。心なしか、その唸り声もどこか満足そうだ。

両手で剣斧を握る。それを構えては、ビンの蓋を開ける。それも、奴には威嚇にしか見えないのか、全く気に留めていないようだった。目前に剣があることも構わず、どころか剣ごと喰ってしまおうと、その醜悪な口を開く。視界が、暗い暗い竜の喉で染まる

——その瞬間に。その、喉奥に。

「はあああああッ!!」

地に付けていた腰を浮かした。そうして右足で踏み出して、腰に力を入れて、肩を引いて。渾身の属性解放突きを、最後のピンエネルギーを撃ち放つ。

全身を使ったその刺突が、深々と奴の喉を穿った。開いた口を埋めるかのように、斧の刃は舌を裂いて、剣の先は喉奥をえぐって。そうして直に、奴の内部へとピンエネルギーを放出する。

もう抵抗する力も無いと思ひ込んでいた餌が、最後の抵抗を見せた。それが予想外だったのか、奴は驚愕の声を漏らした。

それでも、口の中が裂けているにも関わらず、奴はそのまま牙を齧<sup>かさ</sup>す。俺を呑み込ま

んと、その口を引かなかった。それどころか前に出て、思わず俺は押されそうになる。

「旦那さん……ッ！ 耐えるのにやあ……！」

「当つたり前だ……ッ！」

イルルが、俺に発破をかけた。俺もそれに応え、痛む全身に鞭を打つ。両足を開いて、奴に負けんと腰に力を入れ続ける。

氷を削る右脚。黒轟竜の装甲が軋み、激しく氷の破片を撒き散らす。

一方の、左脚。足先を無くしたそれは、もはや立つこともままならない——

「ボク、精一杯支えるにゃ！ だから旦那さん……勝つて……っ！」

そんな脚を支えてくれる、イルル。膝下に力一杯抱き付いて、そのネコの足を大地へと擦らせる。無くした俺の脚の代わりをするように、彼女は懸命に俺の体を支えていた。

——これが、俺の言う最後の賭け。無くした脚をイルルが支え、それを軸に俺が剣斧の残りの力を撃ち放つ。できるかどうかも分からない土壇場の苦肉の策だ。

だけれども、今なら。イルルが悲鳴を上げながらも耐え抜いて、俺の剣斧が深々と奴の中を穿っている、この瞬間なら。

「……ッ……御馳走様、だアッ！」

ピンが空になる。全てのエネルギーが放出される。赤い靄が剣先から溢れ、それが奴

の喉を満たしている。

そんな喉奥へ向けて、バラクレギオンは吠えた。剣と斧の切っ先が擦れ、眩しい火花が溢れ出る。それが、強撃ビンエネルギーへと火を付けた。

瞬間、強烈な爆破の渦が奴を焼く。限界まで引き絞られたエネルギーが集束し、一瞬で解放。その猛烈な加速力に、奴の体内が弾ける。あまりの衝撃に、奴は勢いよく吹き飛んだ。さながら、口内のマグマが暴発した斬竜の如く。

口から鮮血と瘴気を撒き散らし、勢いよく横転する淆瘴啖。余りある巨体が、罅の走った氷へと打ち付けられる。その衝撃で、いよいよ氷海の氷が割れた。エリア2が、淆瘴啖が、海へと吞まれ始め――

そんな光景が、ふと大きく揺れる。少し驚いたものの、何もおかしなことではない。限界まで力を振り絞ったせいか、身体の力が抜けたのだ。

「ふにやつ、旦那さん！」

それをイルルが慌てて押さえ、俺は何とか身を転がさずに済んだ。左手で剣斧を突き立て、イルルが俺の胸を押し止めて。そうして何とか、体勢を立て直す。

割れゆく氷に、離れゆく大地を見ながら、右手の甲で汗でも拭うように頬を擦った。

「……………あ」

ただその色は、赤の絵の具に黒を思い切り混ぜたような、ドス黒く染まった色だった

が。

口から鮮血を撒き散らしたイビルジョーだ。その大量の血飛沫が、俺の体に纏わりついていた。頬についていたのも、きつとそれだろう。

拭った手の甲のそれを、俺はそつと舐めた。ドス黒く染まったそれは、何とも珍妙な香りがして。舐めてみると、痺れるような苦味が溢れて。鉄臭さよりも何よりも、生臭さと言いやうのない苦味に満ちていた。

「……渇瘵啖。お前、やっぱ不味いなあ」

く 本日 の レシピ く

『炒り種風マンドラ串』

・ マンドラゴラ	…… 150 g
・ 怪力の種	…… 15 g
・ 忍耐の種	…… 15 g
・ 塩	…… 適量
・ 胡椒	…… 適量
・ バター	…… 10 g

## 沖のサシミウオ

足取りが重い。

いや、そもそも片方は重いどころか無いのだが、それを加味しても足取りはやはり重かった。

家にももっていても憂鬱になるだけだから、せめて外の空気でも浴びようと。そうして家から出て、ドンドルマの路地を歩き回って。それでも、気分は一向に晴れない。

「……松葉杖って、結構疲れるのな」

膝から下を失った左脚を自嘲気味に見ながら、俺は小さな溜息をついた。

左脚は、元から義足だ。失ったのは義足部分だけだから、特に怪我也痛みもなかった。とはいえあれは狩猟用の特注品だったため、あれに代替するようなもの手元に無い。製造元はジャンボ村であるため、簡単に行くこともままならない。何とももどかしい日々が続いていた。

両手の平を開いて、松葉杖を手放す。それを片脇に寄せながら、木製のベンチに腰掛けた。ドンドルマを掻き分ける水路の傍に立つそれは、大通りから外れた小さな路地に



なる。街道の騒音は弱まり、水の流れる音や鳥のさえずりが響く穏やかな場所だった。

「ふう、休憩……つと」

随分と落ち着いたドンドルマの空気を胸いっぱい吸い込んで、吐き出す。とてもつい先日まで古龍の襲撃に遭った場所とは思えないくらい、澄んだ空気だった。

オオナズチ。霞龍とも呼ばれるあの古龍がここに訪れて、早一週間が経っている。それも、至って平和なままに。

筆頭ハンターや我らの団ハンターの活躍もあり、このドンドルマは事なきを得たらしい。俺自身はその場に居合わせなかつたために、一体どのような戦いになったかまでは分からないが——今のドンドルマを見れば、その結果はよく分かる。

一方の、俺が抜擢された淆瘴啖の討伐はといえば、このドンドルマのように華やかなものであつたならよかつたのだけれど。

「……はあ」

取り逃がした。

討伐——とまではいかなくて、しかし奴に圧倒的な手傷を負わすことはできた。撃退としては成功だったのだろう。しかし、その肉を全て手に入れることはできなかった。みすみすと、奴を逃がしてしまった。いや、海に全て奪われたと言つた方が正しいか。

氷海で横転した奴に、氷の大地を打ち砕かれたのだ。そのまま奴は海に落ち、俺たち

も危うく海に吞まれそうになった。凄まじいまでの泥仕合だったと言える。

「何で動けなかったんだろなあ……」

動けなかった。奴が海に吞み込まれていく様子をただ茫然と眺めることしかできなかった。拳句の果てには、海に流されかけたところを乱入してきた師匠に助けられしまった。

散々なのもいいところだろう。俺を心配して様子を見に来たらしい師匠だが、アイツに借りを作ってしまったことが情けない。凍土の一件でやや過保護気味になってきたのが、余計に鬱陶しい。まあ、助けてもらった手前文句は言えないのだが。

「尻尾、折角斬ったのになあ」

本体こそ取り逃がしてしまつたが、何とか奴の尻尾は斬つたのだ。辛くもそちらを得ることができたと思つた矢先、その妥協した心を易々と打ち砕く事態に遭遇した。

不味い。

何と言つても、非常に不味い。

生は勿論、煮ても焼いても、その不味さは消しようがなかった。血抜きをしたというのに、腐敗とはまた違う舌を焼くようなえぐみは抜けず。焼いたら焼いたでその強烈な風味をその肉に押し留めて。そうして溜め込んだその味を、さながらあの拡散龍ブレスの如く口の中にばら撒いていく。

抹茶とは程遠い、吐き気を催すような濃厚な渋みを作りだし、さらには渋柿もかくやという程の口の中を強張らせる猛烈な後味を塗りたくるその味。肉の食感こそ固く歯応えがあったが、噛む度に猛烈な不味さを拡散されてしまったては噛む気力すら現れなかった。凄まじく不味い肉。それが、淆瘴啖だった。

「……救えねえ」

あの不味さは、興味本位でそつと舐めてみたジンオウガ亜種の毛のそれとよく似ている。何となくだが、そう感じた。

おそらく、あの不味さを作りだしているのは龍属性エネルギー。あのドス黒く染まった血液そのものが、肉にあの味わいを練り込んでしまっている。

元はといえば、俺が奴に封龍剣を刺したから、だろう。それが奴の体に刻々と龍属性エネルギーを刻み続け、果てには弱点属性であるはずのその龍属性エネルギーに適應してしまった特異個体。それがあの淆瘴啖イビルジョーなのだから。

つまり、奴をあのような味にってしまったのは俺のせい。元はといえば、全て自業自得なのかもしれない。

「うーん、何かないものかなあ……」

つまるところ、ただ料理しても食べたものじゃないのだ。普通の料理法では全く通用しない。何か、何か他の手段を使わなければ、俺は俺の目的を一向に達成できないだろ

う。それに思考を費やす日々が、悶々と続いているのである。それにしても。

瘡癩啖を取り逃がしてしまつたが、その様子は何とも異様だつた。ただ海に溺れるだけではない、まるで悪夢のようなその光景が、妙に俺の脳裏に焼き付いている。血と酸素を失つて、焦点が定まらない視界だつたけど、それでも、あれは。あの光景は、まるで――。

「……あれ、シグ？ シグじゃん！」

「……あ？」

不意に飛んできた声に、俺の思考は中断させられる。カラカラと笑う快活な声に、俺の神経は若干逆撫でされた。

顔を上げれば、そこには黒い髪の男。手には真っ赤なリング。俺に声を掛けたその人物は、ユクモ風の衣装で身を包んだ青年、イズモだつた。

「……何でお前こんなところにいるんだよ」

「いいじゃん、どこにいてもさあ。しばらくこつち来れないから、ドンドルマ観光してんだよう」

「こつち来れない？」

「うん。ほら、これ見てくれよなっ」

どすんと俺の横に腰を下ろしては、懐からギルドカードらしきものを取り出したイズモ。

ギルドカードといえば、言わばハンターの名刺みたいなもので、ハンターが持っていることは何も不思議なことではない。どころか、イズモのギルドカードは俺も持っている。淡い装飾がなされたユクモギルドのギルドカード。俺が知っているイズモのカードは、それだった。

ところが、今俺の目の前にある物は。

「……あれ？ ユクモのカードって、こんなデザインだったっけ」

「ふっふっふ。実はこれ、龍歴院カードなんだよね！」

「は？ ……龍歴院って、あの？」

俺が訝しむ目を向けると、彼は自慢げにそのカードを俺に手渡してくる。署名、柄と、それは間違いなく龍歴院印のものだった。

龍歴院とは、ベルナ地方に本部を置く研究組織だ。ハンターズギルドと友好関係を築き、かつ専属のハンターを雇っては連携をとる大掛かりな組織である。地方に人材を固定するのがハンターズギルドとしたら、有用な人材を各地に派遣するのが龍歴院。

最近では、何やら空飛ぶ研究施設を開発しているとか、そんな噂まで実しやかに囁かれている。それも起こり得ると思わせるほど、大きな力をもつ組織なのだ。

「オレもそろそろランクアップしなきゃなつて思つてき。そしたらユクモ村に何やら強  
そうな龍歴院ハンターが来るじゃん？ んで紹介してもらつた訳よ」

「へえ、龍歴院のハンターかあ。各地を転々とするつて聞くけど、よくやるよなあ。俺に  
は真似できないや」

「ギルドの籍を移しまくつてる奴がよく言うよねえ」

そんなイズモの冷やかしを適当に舌打ちで返すと、彼は特に気にする様子もなく澄ん  
だ笑いに変えてきた。

ひとしきり笑つたあと、彼は突然真顔に戻る。しやりつと、手にあるリングを齧りな  
がら、幾分か落としたトーンで言葉を繋いだ。

「……ま、オレは各地に行くつもりはないけどね」

「え？ そういうのもありなのか？」

「龍歴院はさ、古代林つていう未だ謎の多いフィールドを研究してるんだよね。とりあ  
えず、オレはその研究に携わろうと思う」

「……どういふ風の吹き回しだよ？」

「みんな頑張つてるじゃん？ オレもそろそろ頑張らなきゃつて、思つた訳よ」

あと、トレッドにこき使われるのもちよつと嫌だしね。そう繋げた彼は悪戯っぽく笑  
う。同様の思いを抱く俺としても、それに関しては同意するしかなかった。その思いを

苦笑いに変え、それを相槌代わりにする。

「……だからさ、シグも足無くしたからって気を落とし過ぎるなよな」

「……何だよ、知ってたのか」

「知ってたっていうか、見たままなんだよなあ」

ベンチから立ち上がっては、清々しく笑うイズモ。

その口振りに、俺は思わず溜息が出た。何だかんだ色々見ている友人に対して、少し困ったような、同時に嬉しさも混ぜたような、そんな溜息が。

「その脚じゃ、色々大変だとは思うけどさあ」

「不便だよ、やつぱ。今はイルルがニャンターとして稼いでくれるけど、ほんと申し訳ないしな」

「何だよ何だよ。いい嫁さんに来てもらって、幸せものだねえ」

「嫁さんじゃなくてオトモだけだ」

「……オトモ」

ダメだこりや。そう言わんばかりに、俺の返しにイズモは困ったように眉毛を曲げたが、それ以上言及することはなかった。

その代わりのように、かかと踵を軸にきびす踵を返す。俺に背を向け、後ろでひとまとめにした長い髪を靡かせた。

「……ま、いや。それより元氣出せよなつ。美味しい飯でも食ってさ」

「おう。お前もまあ、龍歴院頑張れよ」

ひらひらと、手を振っては返事を破棄するイズモ。そんな彼の背中が路地に消えていくのを見ながら、俺は小さく息を吐く。

アイツが何を言いたかったのかはよく分からなかったが、いずれにせよアイツはユクモ村から離れるようだ。古代林の調査に赴くとはこれまた急の話である。いつかのタマミツネの時のように、思い立った時に狩りに行くというのは当然お預け——なのかもしれない。

ふと、ぼちちゃんと水が鳴った。見れば、ドンドルマの用水路を泳ぐサシミウオが水面を跳ねている。潤う鱗に光沢が鮮やかに浮かぶ、何とも美味しそうな魚だった。

「腹減ったなあ。……釣り堀でも、行こうかな」



それは、青い青い何かだった。

氷海を覆う氷が割れ、海水が飛び出し、そうして海に吞まれていく大地。氷が幾重にも剥がれ、渚瘴啖の巨体に海が大口を開ける。



朦朧とした意識の目前で繰り広げられたその光景。力を失ったスラツシユアックスにも目もくれず、淆瘴啖イブルジョーは、ただひたすら海に向かって吠えていた。大量の血を撒き散らしながら。必死に、負けるものかと叫ぶように。

海に呑み込まれる。溺れていく。傍から見たら、そう見えた。しかし、淆瘴啖の様相はそんなものではない。何かに自由を奪われるように。まるで引きずり込まれるように。いないはずの何かに、牙を向け続けていた。

吠えては、おの慄いて。

何かに牙をかざしては、やられまいと血を吐いて。

断末魔の如く、渾身の力で怒号を上げる奴の姿。

端から見ても、とてもただ溺れているとは思えなかった。

黒く染まった体が、青い青い海へと堕ちていく。濟んだ海の青さではない。まるで水に絵の具を溶かしたような、隙間ない色で染まった青。その鈍重な色の中へ、奴は――

「――おいッ！ かかつとるぞ坊主！」

「……んあ？」

「んあ、じゃないわ！ 卷け、はよ卷け！」

思考の海から引きずり出してくる、突然の声。そうかと思えば、勢いよくしなる釣竿が目に入る。

手に収まった竿が、その直後に引つ張られた。引き上げられた意識をそのまま、突然のその衝撃に合わせる。両腕の筋肉を締め、片側を失った脚で踏ん張つて。腰を下ろしたアウトドアチエアが唸り、金属の鋭い悲鳴を上げる。

しかし、立てない状態では十分に腰に力を入れることもできないようで。そうして、不意に竿を引く力が抜けた。拍子抜けするくらい軽くなったそれを引き上げてみれば、先を失った釣り糸が現れる。まるで俺の左脚のように、空虚で満たした姿だった。

「……あーあ。逃げられちった」

「ぼーつとしとるからじゃ。そんなんじや、釣れるものも釣れんぞ」

そんな俺の横で、呆れたようにそう言う人物。一体何者だろうか。青い帽子を目深に被り、低い背丈を独特の意匠の衣装に包んでいる。そして何より、長い耳。四本の指。その姿は、間違いなく竜人族だ。

不釣り合いなくらい大きなその帽子を少し、親指で押し上げて。そうして俺と視線を交える彼。その顔に刻まれた深い皺は、彼が悠久の時を生きた証明であった。そして何より、その瞳。まるで達観したような、全てを見通すような底の知れない色に染まっている。

「魚は鏡、釣りは己との戦いじゃ。気を抜いたり、諦めたり。その瞬間、お前さんはお前さんに負けるんじゃないよ」

そう言うってはカカカと、しゃがれた声で笑う彼。そのまま、俺の返答も待たずに歩き出す。若者をからかうような、そんな素振りだった。

「……何だあの爺さん」

突然話し掛けてきたと思えば、語るだけ語って去っていく。何とも身勝手な人物だ。

「……魚は鏡、か」

ふと、彼の言葉が蘇る。魚は鏡、釣りは己との戦い。俺の目前で悠々と泳ぐ魚たちは、俺を映している。

狭い釣り堀だ。ドンドルマの郊外に佇む、小さな店だった。水路の一部が流れ着くこの池に、その狭い世界しか知らない魚たち。その池を囲うように組み立てられた木のデッキは、今日もドンドルマの風を浴びては小さく軋んでいる。

何となく、餌を撒いてみた。本来釣り針に仕込むはずの釣りミミズを数匹、指で摘まんで池に落とす。そうするや否や魚たちは一斉に動き出した。我先にと、水面を漂うミミズに喰らいついている。

「あー……」

不意に、腹が鳴った。ふと空を見上げれば、陽も頂点からすでに下り始めている。い

つの間にか、随分と時間が経っていたようだ。

「鏡、ねえ。その通りじゃないか」

餌に食い付く魚と、空腹を主張する俺。あの爺さんの言っていたことも、あながち間違っていないのかもしれない。

そんな思考を引き下げては、俺は顔を上げた。デッキに寝かした松葉杖を手に回し、それらを肩へと引き上げる。

何か食べよう。そう思考を切り替えては、俺は釣り堀の横にひっそりと佇む小さな食事処へと歩き出した。

「——あ」

「おう坊主、また会ったな」

こじんまりとした、随分と古い造りの食事処。

釣り堀の一角を占めるその建物の扉を開けると、先程あったあの竜人の爺さんが目に入った。小さなとつくりとエイヒレのようなつまみを並べ、優雅に酒を嗜んでいる。

「坊主も何か食いにきたのか？」

「坊主はやめてくれ、そんな年じゃない」

「ワシから見ればまだまだ坊主じゃよ」

俺の言葉も酒に流し、またカカカとしやがれた声で笑う彼。その姿は、優雅に余生を過ごす老人そのものだった。

店内は、どこか閑散としている。元より利用客が少ないのか、常連客の根城となつてゐるのか。いずれにせよ人はあまりおらず、この爺さんと俺の貸し切り状態であった。そんな店内の、適当なテーブルに身を寄せつつ壁にかけられたメニユーへと視線を移す。

キレアジの塩焼き。黄金魚のあんかけ煮。釣りカエルの唐揚げ。壁に犇ひしめくメニユーには、魚にまつわる料理がずらりと並んでいる。流石は釣り堀。魚に関しては死角無し、か。

そんな中でひとときわ目についたのは、サシミ親子丼という名前だった。

「……サシミ親子丼？」

「そいつはな、サシミウオを贅沢に使った料理じゃよ」

つい言葉にしてしまうと、それを捕捉するようにあの爺さんから補足が飛んでくる。固く締まったエイヒレを、年の割に立派な歯で噛み千切りながら、彼は言葉を繋ぎ続けた。

「サシミウオの刺身とな、その魚卵を使つとるんじゃ」

「あー……だから親子丼ね」

「それだけじゃないぞ。ご飯の方はな、何とサシミウオの骨で出汁を効かせた炊き込みご飯じゃ。絶品じゃぞ」

「サシミウオ尽くしじゃないか……」

あまりのサシミウオっぷりに思わず呆れてしまったが、同時にそれがどんなものなのか、非常にそそられた。

サシミウオと魚卵の親子丼に、ご飯にはサシミウオの出汁を染み込ませているという。その味わいが一体どのようなものか、考えるだけで涎が出てくる。気付いた時には、俺はそれを注文していた。

「お前さん、どこかもやもやとした顔をしとるな」

「……めざといなこの爺」

「見たところ、その脚が原因かの？」

「それでもあるし、そうでないとも言える」

「ふむ……初対面の相手に中々心を開かんタイプじゃな、坊主は」

「いや、普通こんなもんだと思うぜ……」

戸惑う俺のその言葉にも、彼はふむと適当に返しただけだった。その代わりのように、少し俺に近付きつつ、この虚ろな左脚を凝視する。彼の瞳に職人めいた色が灯った

ような、そんな気がした。

「お前さん、ハンターじゃな？　その脚は、仕事のせいかな？」

「……よく分かったな」

「カカカ！　仕事上、そういうのにめざとくてな。バツクリやられたようじゃの」

「がぶり」と一噛みだったよ。全身に痕残ってんだぜ？」

「男なら、怪我は勲章よ。それだけ努力の証になる。……とはいえ、その脚ではもう満足に狩りもできんだろうがのう」

憂うような口振りで、淡々と言葉を並べる竜人。そんな彼に向けて、俺は左脚を覆うズボンを捲った。

その中に包まれた脚が、そしてポロポロになった金属製の部品が剥き出しになる。それを見ては、彼は「なるほど」と小さく笑った。

「お待たせしました」

何か言いたげだった彼を遮るように、若い店員がどんぶりを持つてくる。米が仄かな熱気を放つ、淡い橙色に染まった世界が現れた。どんぶりという池に囲まれた、狭くも美しい世界が。

鮮やかな橙色に染まったその身は、眩しい光沢を描く。薄く切られたサシミウオ、このどんぶりの主役の一人である。その表面に浮かんだ艶やかな脂が、これまた食欲を増

幅させる。

そんな刺身に囲まれるように、真ん中に集まる魚卵の数々。さながらイクラのように、薄橙の玉がその半透明の卵黄を湛えている。膜に包まれたその中身は、トロトロとした色を帯び、その彩りも相まって非常に鮮やかだ。

そんな親子を乗せる米。一般的な白い米ではなく、こちらも薄く、暖色に染まっていた。ほかほかと温かな香りを放っては、その一粒一粒にサシミウオの出汁の香りを主張する。さながら布団のように、親子を包み込むご飯。その優しい香りで、サシミウオ尽くしのこのどんぶりを一つにまとめていた。

ふと顔を見上げれば、あの竜人が優しく頷いている。まずはそれを食べなさい。話の続きはその後だ。まるでそう言っているかのようだった。

そう勝手に解釈しつつ、俺は小皿に醬油をそつと垂らしては供えられたわさびをそこに溶かす。箸を繰っては、緑色が深い深い紫色に溶け込むのをよく確認して、そこに少量刻みネギと胡麻を添えて。そうして魅惑的な一杯を、どんぶりに向けてゆつくり注いだ。心なしか、醬油と出汁の香りが混ぜ合わさり、その深みが増したような気がする。

「ヤッ」

いただきます。そう唱えては、俺は割り箸を右手で回した。

ブリッブリのサシミウオ。繊維に沿って綺麗に捌いたその一品は、爽やかな味わいを



一瞬で拡散させた。舌に乗った瞬間、しっとりとした感触を伝えてくる。その身に乘った脂を一気に溶かしてくる。甘く、優しく、艶やかだ。芳醇な脂がしっとりしっとり、口の中で溶けていく。

一方の魚卵は、噛めばその身を弾けさせた。何十個も口に含んで、一気に咀嚼。するとどうだ、プチプチという快音に口の中が満たされていくじゃないか。同時に、とろりとした中身が一気に垂れ流れ、その濃厚な甘みを口の中に塗りたくり始める。刺身と合わされば、その脂の味わいを一層刺激し、より強い風味を描いていく。

「うつま……」

「何だかんだ良い品を仕入れてるのがこの店じゃ。ええもんじゃろ？」

「ああ……」飯と魚が猛烈に絡みついてきやがるよ……」

ほかほかのご飯を頬張れば、すうつと鼻を抜けるように、サシミウオの香りが現れる。一粒一粒に染み付いたその味わいに、ご飯の温かさが相乗効果。噛めば噛むほど、その柔らかな味が溢れ出した。出汁とは言えど、魚の旨みは十分に刻まれている。いや、むしろ出汁だからこそご飯の控えめな味わいと上手く合わさっているのだと言えよう。

そんな米と刺身を合わせれば、芳醇な脂がすぐさま米に舞い降りて。魚卵と合わせれば、そのとろりとした濃厚な卵黄と混ぜ合わせて。どう食べても、出汁が米と魚をひとまとめにする。全く違う食材とは思えないほど、違和感の無い味わいを作り出してい

た。

「カカカ！ 坊主は良い喰いっぷりをするのお！ 何だか知らんが、見てると痛快な気分じゃよ」

「もぐつ、何だそれ……」

「そう不貞腐れるな、褒めたつもりじゃやて」

そう言つてはもう一度しゃがれた声で笑い、彼は席を立つた。

ゼニーを置いては、机に置いていた青い帽子を持ち上げる。

「何だ、もう帰るのか？ 話の続きは？」

「ふむ、まあ近いうちまた会うじやろ。そんな時でええ」

「近いうち……？ 何だそりや？」

「カカカ！ 爺の戯言じゃ。適当に受け取っておけ！」

つかつかと床を鳴らし、気力の衰えを感じさせない歩きを刻む彼。小柄な影が、俺の隣を通り過ぎていく。

彼が一体何を考えているか、俺には分からない。しかし、間違ひなく何か意図があるんだらう。少なくとも、彼は俺の左脚を見て目の色を変えたのだから。

「……なあ、最後にいいか？」

「なんじゃ、坊主」

「爺さんは今日、何匹釣れたんだ？」

ただの興味本位。それだけの言葉は何となく口にする。すると彼は、ゆっくりこつちに振り返った。外の光を背に映しながら、白い歯を大きく見せる彼。快活な笑みがそこにある。

「今日は、0匹ボウズじゃったよ」



あの爺さんが去ったものの、俺の目の前の池は一向にボウズではない。まだまだ美味い魚たちで満ちている。俺はもう一度気を引き締めて、二度目の食事約りに挑んでいた。

刺身と、魚卵と、炊き込みご飯。それを一度に味わったら、どうなるか。そんなことを試しているうちに随分と時間が経っていた。魚の脂と、魚卵の卵黄が、一度にご飯に絡みつく。パンチの足りないご飯の味に、強い風味を刻んでいく。ご飯の優しい香りが、親も子どももひとまとめにする。

そんな味わいを楽しんでいけば、再びこの食事処の扉が開かれた。あの爺さんと同様、随分と小柄な人物がそこに立っている。

ネギと胡麻を添え直し、植物由来の落ち着いた味わいを浸透させて。ネギ特有のシャ

キシヤキとした食感を。ゴマの凝縮させた甘みを。それらを親子丼へと加えながら、そつと背後のその人物の方へ目をやった。

「……あつ」

小柄は小柄。竜人族と大差ない、小さな姿。しかし、彼らとは決定的に違う、豊かな体毛を湛えたその影に、俺は思わず変な声を漏らしてしまった。手に持った箸が、カランカランと机に落ちた。

「おう、シグ」

「……師匠」

黒を差し直したような、赤黒い鎧。銀色のフェイスガードを持ち上げた、斑点模様のアイルー。そこにいたのは、紛れもない俺の師匠だった。

そんな師匠は、一步、二歩と店内に足を踏み入れては、キヨロキヨロと周りを窺い始める。まるで誰かを探しているかのように。待ち人と時間を合わせているかの如く。

「シグ、竜人の爺見なかったか？」

「え？」

「実はよ、旧友と待ち合わせてしててよ。まさかアイツ、また途中でめんどくさくなりやがったか……」

「旧友？」

「おう。伝説の職人って大層に呼ばれてるが、単なる酔狂な爺だ」

「は？」

「あ？ 見たのか？ あの爺をよ」

「……伝説の？」

「職人……だが？」

「……は？」

かつて本当の左脚を失った時。凍土で、滑瘴啖と対峙した時。

懸命に情報を集め、探し求めた人物。その名を、師匠が今口にした。旧友と称していた。

そんな彼が言う、竜人族とは。俺が先程見た竜人族など、一人しかいない。自分がボウズでありながら、俺を坊主だとからかったあの爺、ただ一人。

まさか、いや、そんな。

首を傾げる師匠を前に、俺はそんな言葉を漏らすしかなかった。

く本日のレシピ

『サシミ親子丼』

- ・サシミウオ ……120g
  - ・サシミウオの魚卵 ……30g
  - ・ご飯(出汁で炊き込み) ……1合
- ☆つゆ、わさび、ネギ、胡麻などお好みで。

## 星に願いを

風が宙を舞った。

頬を切り裂くような、鋭く凍てついた風。それが渦を巻き、雪を掻き揚げ、旋風を描く。まるで柱のようなそれらが聳え立ち、凍える俺の肌を容赦なく刻んでいく。

そんな吹き荒れる景色の向こう。そこから光をぎらつかせる、白い巨影。まるでグライダーのように、その大きな翼で大気を裂いては、それは一心にこちらに突っ込んできた。さながら流れ星のように、鋭く、勢いよく。

「うおおおッ!」

氷の竜巻で荒れる視界にも関わらず、俺は無理矢理横に跳んだ。同時に、丁度俺の背後から雪を大きく掻き乱す音が鳴り響く。氷海の氷を、その翼から生えたスパイク上の爪で荒々しく剥がすその姿。同時に氷が舞い上がり、まるで散弾のように奴の周囲に穴を開けた。

氷牙竜、ベリオロス。つい最近氷海での生息を確認されるようになった大型飛竜。それが俺を食い千切らんと、その勇ましい牙を鳴らしている。

「なんつーアクティブな飛竜だよ。骨格に反して随分と飛ぶのが上手だねえ」

「にやにやにや、雪の上でもすばしっこいにや！ これは苦戦しそうだにやあ……」

向かい合つてはテオⅡエンブレムを構える俺。その横へと顔を出したイルルは、憂うように溜息をついた。

「ま、何だかんだ言つて狩るんだけどな。つい先日のミスみたいなのはもうしないぜ」

「にやつ、脚……気をつけてにや」

「おう、そつちこそ頼むぞ。よく耳研ぎ澄ましといてくれな」

荒れた雪を「両脚」で踏み締めて、左手で剣をしつかり握る。再び雪の中へその雪にような毛を埋めるイルルを横目に、俺はゆっくり歩き出した。

それに反応してか、ベリオロスも鼻を鳴らす。吹き出た鼻息が氷点下に触れては白く染まり、それが開戦の合図のように奴はその喉を震わせた。

「……おうおう、気合入れちゃつて」

震える大気に、響く声。渓谷とベースキャンプを挿んだこのエリアに奴の咆哮が響き渡り、雪の塊がいくつも流れ落ちてくる。その声に驚いてか、離れたところからイルルが顔を出した。にやん、だかふみやん、だかと声を上げては、ビクビクと耳を揺らしている。

一方で、俺は歩くのを緩めない。思わず耳を抑えたくなる咆哮も無視し、ゆっくり



ゆっくり奴に近付いていく。

ミヅハ真【頬当て】。俺の頬を覆うこの防具はそう呼ばれている。いや、頬どころか首を、そして耳まで覆っている。レックスZのヘッドギアに代わる、俺の新しい頭防具だ。「そんなんじやビビんないけどな！」

耳まで覆ったこれが、奴の咆哮を妨げてくれる。ビリビリと大気が震えるのは感じるが、音が聞こえないだけでも随分とマシだ。そうして空いた両手をそのまま、斬撃に変える。

橙色の粉塵が雪の色を染め、そのまま奴の琥珀色の牙を打った。渾身の力を込めたのに、全く傷の入らないそれ。随分とご立派な牙なもんだ。少しばかり、羨ましい。

もちろん奴も、そんなものでは怯まない。少し身を引いては、まるで息を吸い込むかの如く、その首を大きく縮ませる。何か来る。何か吐く。震えるその喉が、それを如実に物語っていた。

——あれか。

先程奴がダイブしてきた時に起こった雪嵐。不自然に発生したあの氷点下の塊。それが今、再び大気を凍て付かせようとしている。

「おっと……ッ！」

瞬時に構えた右腕。重厚な盾を、奴と俺の間に滑り込ませた。

同時に襲い来る、凄まじい風圧。押し飛ばされるような勢いと同時に、大気に混じる細かな氷が舞い飛んできた。頬当てが擦り切れ、額に薄い切り込みを入れられる。

右手の盾のベルトが悲鳴を上げたが、それが必死にしがみつくGXハンターアームを軸に腕を引く。緩まるベルトもそのままに、体を後ろに飛ばし、衝撃をいなした。

「お返しだオラァー！」

浮いた体を雪に滑り込ませながら、半身翻す。緩まった盾のベルトを、むしろそのまま全て解いた。盾から伸びた剣の柄を握り、そのまま右半身を後ろに引く。さながらあのベリオロスのように。

そうして、そのまま。バネのように縮ませた体を、その反動のままに、奴に向けて解放した。腰の捻り、脚の開き具合、肩の取り回し、振り被る腕。全ての運動を遠心力へと乗せ、ベリオロスのその頭へと振りかざす。

すると、剣が抜けた。いや、抜けたのは剣ではない。盾だ。細身の剣を収納した、テオIIエンブレムの盾。それがそのまま、収納された剣の柄を軸に弾き飛ばされたのだった。

支えを無くし、土台を無くし、そうして力に振り回されたその盾は、氷海の宙を華麗に舞う。それが一直線に、さながら砲弾のように。ベリオロスのその頭へと、跳びかかった。

「ヴオウツ!？」

「ハアツ! ビンゴォ!」

砲弾、という比喩はあながち間違っていないのかもしれない。奴の頭へと直撃したその盾は、着弾の衝撃で湛えた粉塵に火をつけた。盾に盛り込まれた大量の粉塵に、奴の頭部へと付着した少量の粉塵。それらが交わり、強烈な爆破へとその姿を変えたのだ。

それを受けてか、堪らず奴は悲鳴を上げる。奴に急襲するには充分な隙だった。

「お前の肉は何味だア、ベリオロスウ!」

雪を散らすように切つ先が地を擦る。両手から伸びた橙色の剣が唸り、それが抜刀ダツシユの軌跡を描いた。二本線が俺の後を追い、ベリオロスに近付くや否やそれらは二本の斬撃へと姿を変える。橙色の粉塵が舞い上がり、斬り上げた刃は奴の頭部へと傷を走らせた。

もちろん奴も、やられつ放しではない。すぐさま反撃に出ようと、俺の死角を縫うかのように横に跳ぶ。そうして横から、その巨体を弾けさせた。見上げるような巨体が、跳びかかりへと変貌する――

「なんのツ!」

そんな奴の腹下を縫うように、両の剣を振り回す。奴の爪を避け、避けた勢いで上体を反転させる。下半身には渾身の力で地を蹴り上げさせ、その飛びかかりをくぐり抜け

た。

その錐揉み回転に少し。少しだけ、刃を添える。それがすれ違いざまに奴の分厚い皮膚を斬り裂いていく。跳びかかりを多用する奴に、それに対応するように錐揉み回避でいなす俺。凍える世界で息が上がっていくのは、どうやら俺だけではないようだ。

そんな応酬を繰り返す中、奴が再びその喉を鳴らした。氷点下の塊が圧縮され、それが奴の息によって吹き飛ばされる。防具を凍て付かせる極寒の縮図が、俺へと襲い掛かった。

「うげえッ!? さ、さむっ!!」

避けようと体を横に跳ばしたが、着弾直後に炸裂するその息は俺を逃がしてはくれないうようだ。さながらタジンと呼ばれる鍋のフタのように、その吹雪をばらまく吐息。その端に触れた俺の体は、たちまち氷に丸め込まれた。ガルルガXメールも、斉天ノ帯・真も。俺の新たな防具が氷のダルマへと生まれ変わる。

その様子を見ては、好機と見たのか。ベリオロスは満足そうに唸り声を上げ、体勢を低く構え直した。大きく引き伸ばした手足は、突進姿勢の表れ。満足に動けない敵に目がけて、その巨体を再び走らせようとしている――

だが、そうはいくものか。

「イルルッ! 今だ!」

俺の発破と共に、突如雪が盛り上がる。まるで雪の下を泳ぐように、そんな動きでそれはベリオロスの下へと潜り込んで――

次の瞬間、それが弾け飛んだ。雪から、まるで雪のように白いアイルーが飛び出してくる。意気揚々と、手に持った剣を構えながら。

「にやああつ！ 牙一本もーらいっ、にや！」

地中から飛び出し、その勢いのまま空中急襲を繰り返すネコの技。俗に言う地中まっしぐらの術で奴の上をとったイルルは、強烈な回転をしつつその牙へと襲い掛かった。それが奴の琥珀色の牙へと、鋭い罅を入れる。

まさに思わぬ方向からの奇襲、だろう。全く予想だにしないその衝撃に、ベリオロスは悲鳴を上げてのけぞった。その隙を突いて、イルルは俺の方へと降りてくる。

「旦那さん、これでどうだにやっ！」

着地と同時に剣を振り、俺へと纏わりつく氷を打ち砕くイルル。一閃が走ればそれは一筋の罅となり、一筋の罅は氷の塊を破片へと変える。

「おっ……助かった！ めっちゃ寒かったよ……」

「うにや……あ、後であつたためてあげようかにや？」

「それは嬉しいな！ そのためにも、まずアイツを仕留めるぞ！」

何とか痛みを振り払ったかのように、体勢を立て直すベリオロス。そんな奴の頭へ向

けて、俺は再び走り始める。

かつてステーキにしたアカムトルム。その肉を剥いでは、ボツクスの肥やしにしていた重殻を用い生まれたこのアカムトXケマルで。そのアカムトルムの素材を用いて作った、伝説の職人印の新たな義足で。

あの鋼龍の脚より数段重いそれを振り上げ、全体重を乗せた踵落としへと変える。それが奴の頭へと、罅の入ったその牙へと叩き付けられ――

氷海の空に、何かが折れる嫌な音が響き渡った。



「有り難うニヤ、ハンターさん！ これでやっと怖い思いしなくて済むニヤ！」

「ニヤツ！ ベリオロスすつごく怖かったニヤ〜」

「ニヤ〜。氷海で暮らすの、やめたくありませんもんニヤ〜」

口々に言葉を並べては、安心しきった表情で頬を緩ませるアイルーたち。氷海に建てられたネコの集落から見える、事切れたベリオロス。彼らの生活を脅かしていた張本人のその姿を見ては、ネコたちは安堵の声を漏らしながら俺へと駆け寄ってきたのだ。た。

「さあ、これで俺は契約内容を果たしたぞ。そっちも俺の頼みを吞んでくれるよな？」  
「ニヤツ、任せてくれニヤ」。このお肉はボクたちが責任もって保存するのニヤ」

その巨体の半分を失った淆瘴啖の重尾。赤黒く濁ったその肉を丁寧に、巨大なアイスボックスに詰めた。そのアイスボックスを受け取っては、氷海という自然の冷凍庫への扉を開け始めるアイルーの一団。そう、俺が彼らに持ち掛けたのは、この尻尾を冷凍保存してかつ管理してもらうこと、である。

焼いてみて、揚げてみて。蒸してみたり、漬けてみたり。様々な調理法を試したが、全く美味しくならなかった淆瘴啖の肉。舌を焼くような独特なえぐみは、普通の料理法ではどう足掻いても消すことは出来なかった。何度も試行錯誤してみたが、気付いた時にはもう半分。

このままでは、大した成果も残せずに淆瘴啖の貴重な肉を失ってしまうだろう。おそらくもう二度と手に入らない——ギルドから死亡と判断された、淆瘴啖イビルジョー。その数少ない肉をただ失ってしまうのは、とてもじゃないが耐えられなかった。だから——

「また何か分かったら、ここに取りに来るよ」

「ニヤ、お待ちしますニヤア！」

「契約は契約ニヤ。ボクらが責任をもって保存するのニヤ」

氷海で淆瘴啖の肉を保存・管理してもらう。その代価として、彼らの平穩を脅かすベリオロスを討伐する。それが俺と彼らが交わした契約なのだ。

「よし、交渉終了。俺らも、俺らのやるべきことをすつか」

「……」飯、にや？」

「おう、飯だ飯だ」

せつせと作業に移るアイルーたちの傍らで、俺はベリオロスの亡骸へと近づいた。

アイルーたちと交渉する横で、せつせとその解体作業をしていたイルル。ようやく俺が戻ってきたことに気付いてか、細い髭を静かに揺らしつつひよこつと顔を出してき

た。

「粗方解体終わったにや。あとこれ、旦那さんオススメの肩回りロース肉、にや」

「相変わらず手際良いな。さんきゅ」

彼女から受け取ったベリオロスの肩回りロース肉。それを一c m程度のステーキ状にわざわざ切り取ってくれた彼女に感謝しつつ、俺はフライパンのために火を付けた。なるべく早く、血流を失って肉が冷え固まってしまいう前に火にかけなければ。

「契約は、上手くいったのにや？」

「おう、淆瘴啖の肉は彼らが責任をもつて管理してくれるそうだ」

「つまみ食いとかが、されないかにやあ」



「そもそも喰えたものじゃないし、喰おうともしないだろきつと」

「にや、それもそうにやね……」

憂うような彼女の表情に苦笑が漏れる。何だかいらぬ苦勞をしているような、そう言わんばかりの困った顔をしていた。

「ま、ギルド曰くもう手に入らないだろう肉、だからな。無駄にはしたくない」

「……瘡瘻啖、あれで死んだのにや?」

「気球から見てた観測隊も、そう判断したらしい。あの傷だし、様子も何か変だったし。きつとそういうことなんじゃねえの?」

「にや……何だか、消化不良な感じだにや」

「はつきりしないのは気持ち悪いよな。でも、トレッドも大層驚いてたぜ」

「にや、トレッドさんも?」

「ああ。予想外というか何というか。あれは絶対狼狽してるだろうなあ。計画が上手くいかなかった時と同じ顔してたし」

「にや、計画……にや? トレッドさんの?」

「何となく、そんな感じがしたただけだな。今まで見たことあるそれと、よく似てたんだ」

——おおよそ、間違つてはいないとは思ふ。一体何を企んでいたのかは知らない

が、あの顔は仕掛けたシビレ罠には目もくれず、モンスターが逃走してしまった時の奴の表情によく似ていた。何かしら、奴の計画通りにはいかない結果になっていたのだろう。

そもその奴との「契約」の報酬が瘡瘻啖の情報だったのだから、事実上の契約解消となつてしまったことに驚愕を禁じ得なかった——だけだったのかもしれないが。

「ま、そんなことは何でもいいや。今は料理料理つと」

イルルが用意してくれた肉にナイフを近づけては、赤身と脂肪をつなぐスジを切り離していく。火の準備ができるその瞬間までに、肉の手入れに精を出した。

「相変わらず器用なのにな、旦那さん」

「ま、手慣れてるしな。イルルこそ解体上手くなつたじゃん。あ、フォークとつてくれ」「はいにな。……まあ、この新しいナイフがとつても良いものだから……かにやあ?」

そう首を傾げては、俺にフォークを手渡してくれるイルル。それを受け取つて、肉の表面へと突き立てる。

「にや、肉にぶすぶす刺して、どうするのにな?」

「ミートテンダーがあれば良かったんだけどな。とにかく、肉に穴を開けてスジを切るんだ。あと味が染みやすくなる」

「にや、にやるほど……」

「それはそうと、イルルのそのナイフ、新しい奴なのか? ……あ、火の対応も頼むわ」  
「にゃー。これはね、トレッドさんが紹介してくれたお店のにゃの」

「……へえ、そりゃ珍しい」

次々と肉に穴を開けては、そのスジを断ち切っていく俺。その横で、せつせと火の調節をしてくれるイルル。そんな彼女曰く、今回投入した新しい用具を紹介したのは、数日前トレッドが教えてくれた雑貨屋らしい。

それにしても、トレッドがそんなイルルに優しい態度をとるとは珍しいことがあるものだ。まあ、雇用主としては有り難いことには変わりないから、別に文句をつけるつもりじゃないけれど。

「シヤドウアイに、凄いモヒカンのおじさんにゃ。見た目は怖いけど、気の良い人なの  
にゃ」

「……ふーん、初めて聞いたなあ。今度紹介してくれよ」

「もちろんにゃー。おつきな鍋とか売ってたし、たぶん旦那さんも気に入るにゃ。……  
ところで、火はこれくらいいいかにゃ?」

「お、良い感じ。有り難うな」

わしゃわしゃと、イルルの頭を撫でる。指が毛並みを掻き回す度に、幸せそうに喉を鳴らすイルルに頬を綻ばせながら、俺はフライパンにサラダ油を投入した。

イルルの話も気になるが、今は目の前の肉に強く引き付けられる。何よりも、この肉を美味しく調理したい。

「さて、軽く塩胡椒を振って……つと」

「にや……何にや、その塩の振り方」

左肩を引いて、軽く腰捻って。そうして高く上げた右腕を曲げ、さながら肘をつき出すように。高い高いその位置から、指に挟んだ塩胡椒を振り掛けた。親指の腹と、人差し指の腹。それらで擦り合った塩胡椒が、ぼらりぼらりと肉へと落ちていく。その高さも相まって、肉全体に白と黒の紋様が刻まれた。

ちよつとカツコいい塩の振り方をすれば、呆れたように耳を垂れさせるイルル。そんな彼女に気も留めず、肉をフライパンへと落とす。塩胡椒をかけていない面がフライパンに触れ、じゅうつと心地良い悲鳴を上げた。

「さて、一分くらい焼こう」

「二分でいいのにや？」

「焼き目がつけばいいんだ。さらつとな」

「さらつとにやー」

氷海の凍で付く空気に、溢れる肉の香り。凍土、そして氷海という極寒の地に耐えるために、分厚い脂肪を蓄えたベリオロス。その柔らかな肉が炙られれば、脂肪の弾ける

心地良い音が響き渡る。イルルだけでなく、他のアイルーたちも声を上げた。

「さて、こんなものかな。んじや、ひっくり返して——」

「にやあ、良い焼き目だにやあ〜」

白かったその肉も、灰色と茶色を合わせたような、良い焼き色に染まっている。塩胡椒で彩られた面を焼く間、先程まで炙られていた面が露わになって、イルルは歓声を上げた。

脂肪の気泡が湧き出るその面に、さつとバターの塊を乗せる。フライパンの熱が肉越しに伝わって、冷えたそれがじつくりと溶け出した。黄色の個体が、透明な液体へと変わっていく。

「イルル、蓋フタとつてくれ」

「にや、蓋フタにや？ はいにや」

「あとはさつと蒸して、特製タレをかければ完成だ」

「特製タレ、にや？ これかにや？」

「そうそう、それそれ」

いつの間にか、俺の周りを囲み始めたアイルーたち。みな興味津々な様子で、湯気を散らすフライパンを見つめている。

そんな中で一際白い毛並みを見せるイルルが、鞆から一つのピンを取り出した。薄透

明の、細かく刻まれたタマネギが浮いた魅惑的なピンを。

「ごま油とレアオニオンを混ぜた特製タレだ。これをかけて強火にして……」

「うにゃー！ 凄く良い匂いなのにな！」

バターを吸い込み、艶やかに光るベリオロス肉。そこに被さる特製タレに、飛び散る脂が輝いた。

肉のありのままの香りに、つんと鼻を突く胡椒の香り。強く甘いバターの香りに、それらをまとめる大らかなタマネギの香り。四段階の香りの連鎖に、取り巻きのアイルーたちも思わず唸り声を上げた。

「ニャー、良い香りだニャー」

「美味しそうなニャー」

「……こりや、あと数枚は焼かないとな」

「にゃあ、そもそもここで作るのが間違ってたと思うにゃ」

おこぼれをもらおうと上目遣いで俺を見てくるアイルーたちと、不満気に尾を揺らすイルル。食べる量が減ってしまうからなのか、イルルはムスツとした顔で紙皿を出した。

そんな紙皿の上に、じゅうじゅうと湯気を立てる肉を置いていく。仕上げにさつと強火で水分を飛ばしたその肉は、余計な水気を取り払った分宝石のように煌めく脂で満ちた。

ていた。

「ステーキも、久しぶりだな」

「にや、アカムトルムの時以来……かにや」

「そう……だな。確かにそうだ。ありやあ美味かったよなあ」

一口サイズに切り分けて、紙皿を埋めていくその肉たち。ステーキ肉といえば、先日食べたアカムステーキが記憶に新しい。

「にや、アカムトルムといえ……旦那さん、脚の方はどうかにや?」

「前より重い。でもすつげえ頑丈だ。流石は覇竜の重殻だなあ」

この目の前のペリオステーキとは対照的に、黒く黒く染まっていた覇竜の重殻。脚装備と同様アカムトルムの素材で作られたこの新義足は、あの伝説の職人の手によって造られた一級品だ。

鋼龍のものも頑丈だったが、これはそれを数段上回る。その分重くもなったが、性能も段違いだ。何やら、廃棄されていた砦の技術がどうか、あの爺さんがそんなことを言っていたが――

ともかくにも。何にせよこの脚のおかげで俺は活動再開が可能になった。そうして、今この美味そうな肉の目の前にいる。俺はそれだけで満足だ。

「どうせなら、最初からあのおじいさんに造ってもらえれば良かったのに、にやあ」

「あん時は、旧友らしい師匠ですら行方は分からなかったからなあ。無い物強請りだろ、結局。それよりほら、肉食おうぜ」

新たな一枚肉をフライパンに落としながら、俺は一つ肉を口に運ぶ。それを見習って、イルルもその小さな口で肉一つに歯形を入れた。

塩胡椒の鋭い辛さだろうか。バターの特な旨みだろうか。タマネギの爽やかな風味だろうか。口に入れた瞬間広がったのは、肉を囲んだ取り巻きの数々。それらの味が何かと考えているところに、ベリオ肉の直情的な味わいが溢れ出してきた。

「にやつ、にゃんて濃厚な脂にやのにや……っ！」  
「うんうん。やらかいなあ」

何と言つても、柔らかかった。食感も、そして味も。

イルルの言う通り、味わいはとても濃厚だ。この永久凍土の環境で育て上げた濃密な脂肪分。それが柔らかな肉となって、とろける脂になって。この綺麗な焼き目の中に溜め込まれたそれらが、そつと噛めばまるで堰が切れたかのように溢れ出してくる。

甘みの強い濃厚なその味が、胡椒の辛さで引き立てられ。バターの旨みで助長され、タマネギの香りで整えられ。濃厚なその味だったが、同時にとてもなめらかだ。

「にゃー、美味しいのにゃあ」

「ニャー……！ ボクらも食べてみたいニャー……！」



「はいはい、ちよつと待つてな」

もぐもぐと咀嚼しながら、フライパンの肉をひっくり返す。せがむアイルーたちの傍ら、新たな肉にフォークで穴を作りながら肉の第二陣、第三陣を作りだした。

同じようにもぐもぐと口を動かしながらバターを肉に乗せてくれるイルル。そんな新たな肉を見ていると、ふと今回持つてきたもう一つの味のことを思い出した。

「イビルジョーつてよくゴーヤつて揶揄されるけどさ、俺はこれにも似てるような気もするんだよね」

「にや? ……アボカド……かにや?」

「そうそう。色合いが、だけど」

「……確かに肴瘴啖は、これくらい黒々しかったもんね」

懐から取り出したビン。そこに収められたアボカドスライス。その蓋を開けては、一つずつ肉の上に乗せる。

「こんなに濃厚な肉だ。アボカドとよく合いそう」

「にや、何だか珍しい組み合わせにやあ。……食べてみても?」

興味津々な様子で尾を立てるイルル。そんな彼女に向けて軽く頷くと、その勢いでさばつと肉が一つ消えた。もちろん、その上に乗ったアボカドも。

もぐもぐと、その新たな組み合わせを確かめるイルル。しかし、確かめる内にその表

情は次第にとろけ始めた。まるであの濃厚な脂肪が溶けるかのように、じつくりと。

「にやにこれ……にやにこれ！ アボカドの香りが鼻を抜けるにや！ お肉にも負けない濃厚な甘み……だけど、くどくないにや。どころか互いの脂が溶け合って、混ざり合って……。にや、にや、にやんだが不思議な味わいだにや〜」

「うう………迫真の解説ニヤ……。お腹空くニヤ……」

「早く食べたいニヤ〜」

イルルの魂がこもった実況に他のネコが悲鳴を上げる。早くしろと言わんばかりに、凶々しくも順番待ちを始める彼ら。そんなネコたちの姿に苦笑しつつ、俺も一つそのアボカドコンボを口に入れた。

確かに、不思議な味わいだ。どちらも濃厚な味わいだ、あまりくどくはない。むしろアボカドの、よりクリーミーな濃厚さがベリオ肉の脂に上手く混ざっていた。まるでアボカドが脂を吸い上げ、味を作り直しているかのような、そんな気さえしてくる。何となくでやってみたこの組み合わせだが、即興な割りによくできているものだ。

そんな感想を鼻歌に変えて、咀嚼の傍らタレを肉にかける俺。その横で、ギラリとアイルーたちは目を光らせる。

「ニヤ………とつても美味しそうなニヤ。これくれたらあの尻尾の管理、もつと頑張るニヤ」

「全く、抜け目ないなあお前らは……」

「ニャー！ お仕事頑張るからー！ だから食べさせてほしいのニャー！」

「もうちよつとでできるからもう少し待つてくれよ。焼き上げ総時間はざつと三分ほど

……楽勝！」

最後の仕上げだと、焚火に細かく砕いた燃石炭を少量ばらまいた。水気を飛ばす最後の強火。氷海にはない業火が、フライパンの上の哀れな肉を焼き上げる――

そうして、それをさつと紙皿に移し変えたその時だった。

「旦那さん旦那さん、空見て！ 空！」

「あん？ 空？」

その紙皿をアイルーたちに渡していると、不意にズボンの裾が引つ張られる。見下ろせば、イルルがキラキラとした瞳で空を見上げていた。

そんな彼女に促されるまま、俺も空へと視線をずらす。

「――あ」

流れ星。一見、俺にはそう見えた。

藍色に染まった夜の氷海。疎らに光るいくつもの星の中で、一際目立つ赤い星。赤い光の軌跡を描きながら、まるで夜空を泳ぐかのように。その流れ星は、静かに空を刻んでいた。

「流れ星かによや？　彗星かによや？　とつても綺麗によや！」

「——ように」

「によや？　旦那さん……？？」

「——淆瘴啖を美味しく喰えますように！　淆瘴啖を美味しく喰えますように！！　淆瘴啖を美味しく喰えますようにツ！！」

星に願いを。

流れる星が見えたなら、それに願いは授けるものだ。今最も求めているそれ。かつての、淆瘴啖討伐という積年の願いに代わる、新たな俺の行動原理。それを夜空の星にぶつけては、興奮の念を鼻息に変えて吐き出した。

一方のネコたちは突然の俺の大声に、尻尾の毛を逆立てる。驚きのあまり飛び退く奴までいたけれど——まあ、そんなの関係無い。思いを吐き出せて、俺は大満足だ。

横で、相棒が呆れたように苦笑する。焼けた肉の、絶え絶えの音色。イルルの優しい笑い声。さながらあの流れ星のように、それらが俺の叫びの尾を引いていた。

——不味いなら、美味しくしちやおう、淆瘴啖。

く本日のレシピく

『ベリオとアボカド盛り合わせ』

- ・氷牙竜肩ロース …… 400g
- ・塩胡椒 …… 適量
- ・ベルナバター …… 適量
- ・レアオニオンの特製タレ …… 30g
- ・アボカドスライス …… お好みで

## 狩人望濬抄 〔Best of joy〕

## 魚遊釜中

竿が唸った。

それに伴い、竿の先の糸が張り上がる。ピンと張ったそれは、その先にただならぬ何かを掴んだかのように。厳かで確かな重みを啜えたのだった。

要は、獲物がかかったのだ。

「おっ、きたきたきたアッ！」

ここは旧砂漠。その中央砂漠に面した小さな洞窟だ。その奥には小さな泉が湧き立ち、魚たちの楽園となっている。

そんな泉に垂らした俺の釣竿は、何か大きな獲物を捉えたのだった。映る魚影はとも大きく、傍で髭を揺らすイルルと同等か、それ以上である。

勢いよく竿がしなり、その影は己の全体重を乗せてきた。俺はそれに負けじと腰を少し落とす。体勢をやや後方に反らせながら、生身の右脚を前に出し、重い左脚を後ろに出した。両足を開いてその体重に拮抗する。霸竜製の厳つい義足が静かに軋んだ。

「にやつ。あの影……ドス大食いマグロだにゃ！」

「はっはあ！ こりや大当たりだなオラア！」

ぴよんこぴよんことイルルが跳ねる。ドス大食いマグロも、吊り上げられまいと跳ねる跳ねる。

しかし、所詮は魚の足掻き。ガノトトスやチャナガブルさえ引き上げる、鍛えられた俺の釣り技術の前には、あえなく吊り上げられるしかなかったようだ。

屈折された光ではない、ありのままの光を浴びて輝くその鱗。艶めかしく輝くその光沢が、何とも美しい。照り付けるようなその輝きの奥には、一体どのような脂が眠っているのだろうか。そう考えれば思わず涎が溢れてきてしまうほど、魅惑に満ちたマグロだった。

「あーうまそ。とれたてマグロはそのまま食うのがいいらしいなあ。食っちゃまおうかなあ」

「にやつ？ そのままって……刺身どころか、捌かずに食べるのにや？」

「おうよ。このままがぶりといったくのがハンター流らしいぜ。ドス大食いマグロの踊り喰いつてな。イルルも食うか？」

「にやつ、にゃー……。ボクは遠慮しとくにや。全部食べちゃっていいにゃ……」  
「なら遠慮なく。いただきます」

がぶりゆつと音を立てて。張りのあるその腹を、勢いよく引き裂いて。

まだ生きたままの大食いマグロは、その痛み故か大きく体をバタつかせた。それを両手の指で押さえつけ、それでもなお顎の力は一切抜くことはない。その歯の隙間から鮮血が溢れ出し、そして肉厚な身が飛び込んでくる。

マグロ特有の濃厚な赤身。柔らかく、されど弾力性があり。軽く噛んでは歯が押し返されてしまいそうな、そんな食感だ。その肉を噛んでいくごとに、血と、その奥にある別の肉がどんどん現れる。まるで終わりの見えない食材だ。イルルより大きなその体。流石はドス大食いマグロである。

味に関しては、活け作りも同然であるため鮮度抜群である。

甘い。脂が甘い。溢れる血と肉が、脂によって混ぜられていく。醤油のような辛めの味付けがない代わりに、マグロ本来の味が広がってくる。甘い。何といっても甘い。マグロって、こんなに甘かったのか。

噛めば噛むほど、その旨みは広がってくる。肉の深部に行く度に、その濃厚な風味はさらに増していく。溢れる血潮を、とろみある脂を、張りのあるその肉を。もつと食べたい。どんどん食べたい。もつと、もつと、その身の奥を――

「――つがッ!! いったッ!!」

「にゃっ!! 旦那さん、どうしたのにゃ!!」



突然、痛みに襲われた。どんどん、どんどん奥へと顎を動かしていたのに。その次の噛んだのは、あの歯応えある肉ではない。何か固い——そう、まるで金属のような、そんな固さをもった何かだった。旨い肉とは程遠い、歯を打ち鳴らすような、固い固い何か。

それは何かと、えぐれた肉の内部に指を突っ込んだ。柔らかく温かいその肉の奥で、何か異質な感触が指先に伝わる。細く、小さな何か。まるで人工物のような、奇妙な物体。

「これは——」

「……にや? 何かの、部品かにや?」

それは、小さな金属品だった。薄く紫を差したような銀。それで全身を覆ったそれは、鋭い刃のようなものを先端から左右にそれぞれ伸ばしている。しかしそこには斬れ味はない。鈍重なそれは、まるで鉱石を砕くために加工されたかのような。そして、それを支える小さなその身。俺の掌で収まるサイズのそれは、さながら柄のような形をしていた。

その形自体は、見覚えがある。主に火山や高山でとれる希少な鉱石。それを採取するために欠かせないあの道具。それに、この物体の姿は酷似していた。

「まさか、これ、フエールピッケルか?」

「にやつ、えっ!? こゝ、これがかにや!」

フエールピツケル。

それは、平たく言えば未知の物質である。一体何で出来ているか、一体誰が作ったのか。それすら未だに分かっていない、謎の物体。しかし、その名の通り『物を増やす』力があると言われている。その方法は謎に包まれており、ある人は調合することによってできると言うが、またある人は錬金でなければならぬという。つまり、科学的な実証はまるで出来ていないのだ。

古代技術の結晶だとか、竜人族の秘術などと謳われているが、依然として何も分かっていないこのフエールピツケル。そんな希少なものが、まさかマグロから出てくるとは。何でも食べると言われているドス大食いマグロだが、こんな物まで食べているとは誰が想像しただろうか。流石の俺も驚きを隠せない。

「……ま、損はないよな。有り難くもらったところ。何かに使えるかもしれないし」  
「……マグロに、フエールピツケル。何だか、変な縁だにやあ」

少し憂いを利かせた瞳を伏せて、イルルは尾を左右に軽く振った。

そんな彼女を横目に、マグロを平らげる。残った部分を土に還しながら、出てきたピツケルはイルルに手渡ししておいた。

「旦那さん、顔が血塗れにや。洗った方がいいにや」

「だよな。ちよつと泉で洗つてくるわ」

「にやあー。全く、相変わらずマイペースな旦那さんだにや」

「いいだろ別に。良い腹ごしらえになったしよ。これで狩猟再開つてもんよ」

「ターゲットは、ちゃんと覚えてるにやあ？」

「当たり前じゃん？ そのために、コイツを買ったんだからな」

肌を冷やす麗水。それで顔を濡らしつつ、俺は背中に背負ったそれをチラつかせた。その黒光りする巨大な物体を前に、イルルはまた呆れたような溜息をつく。フェールピッケルをポーチにしまうその仕草も、どこか哀愁を感じさせるような、そんな印象を抱かされた。



「おっさん、この鍋、いくらだ？」

旧砂漠へ赴く、前日のことである。

俺の身の丈近くある、巨大な鍋。黒光りするその鍋を前に、俺はそう言った。

それに対し、俺にその値を聞かれた男——薄茶色のモヒカン頭とシャドウアイで顔を作ったその男は、意気揚々と言葉を返す。

「おう、それは一万五千ゼニーだぜ」

「は？ 一万五千!? そんなにすんのか!？」

「何たって、砕竜の重殻を加工した特注品だぜ？ 耐久性に優れ、熱伝導率も良い。そして何よりこの大きさ！ むしろ、この値段でも安いくらいだ」

「むむむ……確かに、確かにそうだが」

その店は、最近イルルが通い始めたという雑貨屋だった。ドンドルマの下町近くに位置する小さな店。その品揃えは、日常品からハンターのお供まで幅広い物が揃っていた。回復薬といったメジャーなアイテムはもちろん、この巨大鍋という特注品すら様々な珍しい品が揃っている。

それにしても、一万五千ゼニーもするとは。そんな金があれば、防具を一つ注文することができらう。ただでさえ瘡癩の戦いを経て装備を買い替えたのだ。そんな俺に、その出費は大きかった。しかし、相応にその鍋の魅力も大きいのである。

「にやあ……旦那さん、こんな鍋、どうするのにや?」

「バツカお前。明日から砂漠へ狩りにいくだろ? アレを喰うなら、この鍋がピッタシって分かるだろ?」

「にや、にやー。相変わらずなのにな……」

「ん? なら、買ってくれるのか?」

雑貨屋を営むには似合わない、そのガタイのいい体。それを震わせながら、店主の男は嬉しそうに笑った。

「いや、待て。もう少し……何とかならないか?」

「おいおい、これは適正価格だぜ」

「……ほんとにそうか? 碎竜の重殻、売却額は四千五百ゼニーだろ?」

「むつ。……か、加工にお金がかかってんだよ」

「いや、それを差し引いても高いよな? 三千! それだけまけてくれたら買おう!」

「三千……だと? 馬鹿野郎それは大きく出過ぎだろ」

「いやいや、冷静に考えてみるよ。なあイルル、お前が初めてこの店に来た時、この鍋はあつたか?」

「にやつ? ……あの時も、売ってたにや」

「だよなあ。その時教えてもらって、俺はこの鍋のことを知ったんだもんな。で、それは、一体いつだったっけ?」

「にやー、瘡瘻啖と戦った後だから……一ヶ月くらい前?」

「……つまり。一ヶ月以上、誰にも買われず残ってるんだよな?」

そう俺が確認すると、店主の男は言葉を詰まらせた。

あれだけ巨大な鍋だ。見るからに、在庫一つの限定品だろう。店の規模から察する

に、奥の倉庫にまだある、というのは考えにくい。何より、分かりやすい店主の反応から、この鍋は前から売れ残っているということが分かる。

「そもそも、これに用がある奴なんてそういなさそうだもんなあ。並のハンターは使わないし、キッチンアイルーならもつと専門店とかで買うだろうし」

「うぐつ……。そ、そうじゃない物好きだつていないことはないだろう……。？」

「わざわざこんな下町で、この鍋を買う奴なんかいるかつての」

ドンドルマの街は広い。広い街ならば、当然落差というものがある。

大老殿付近は、まさに中心区だ。様々な出店が並び、商業で日々潤っている。いつかの射的の辻商いが行なわれていたのも、そういった地区だ。

その反面、影も存在する。見上げれば大老殿が映るこの下町も、その一つである。表にはない活気があり、しかしそれは少し異質なもので。何というか、異様さとも言うのだろうか。そんな雰囲気をもった街が広がっているのだ。

ドンドルマという大都市に住む人全員が、裕福な暮らしをしている訳ではない。この地区に住む人々は、こんな鍋を買う用も余裕もないはずである。

「ところがどうだ。今は俺がいる。だつたら、多少値切つてでも売れる時に売っておくというのが、賢い選択じゃねえかな？」

そんな俺の一言に、店主は小さく息を吐く。シャドウアイに覆われた目を伏せて、呼

吸を整えた。

そうして、覚悟を決めたかのように喉を震わせる。俺の求める、その言葉で。

「……二千ゼニー。それ以上は無理だ」

「……まあ、いいだろう。買うよ」

「くそう……。まいどありがたい……」

懐から一万三千ゼニーという重さが消えた。とても軽くなってしまったが、その代わりにとても重い、大きな鍋がやってきた。大きな出費だったが、後悔はしていない。

「店主さん、なんか、その、ごめんなさいにや……」

「いいってことよ……。それはそうと、兄ちゃん。そんな鍋で何しようってんだい」

何故か申し訳なさそうに謝るイルル。それに応えつつも苦笑いを浮かべた店主は、俺にそう聞いてきた。

この鍋を、わざわざ買ったその使い道。あえて多大な出費を重ねても手に入れたこれを、一体何に使おうというのか。

そんなこと、決まってるじゃないか。

「——蟹を茹でるんだよ」



「うらアアアアアアアッ！」

渾身の力で、右手を振り下ろす。

重力に掴まった体を、あえてそれを利用して叩き付けへと変えた。

昇竜撃の第二打。アツパーを繰り返した盾を、そのまま蟹の殻へ打ち付ける。

同時に、何かが砕ける音が響いた。テオⅡエンプレムの盾ではない。奴——ダイミヨウザザミが着込んだ、その殻。モノブロスの幼体の頭蓋骨であろうそれを、打ち砕いたのだ。

「にやっ、ナイスヒットにや！」

背中を守りが無くなって、ダイミヨウザザミは大きく転倒する。そうしてその小柄な体が露わになった。

ダイミヨウザザミ——というには小さく、おそらく脱皮を多く繰り返したダイミヨウザザミになる前のヤオザミ、と言った方が正しいかもしれない。それも、遺伝的な影響故か、大きくはなれなかった個体。ギルドの言い方を真似するならば、極小個体と言うべきか。

そんな小さなダイミヨウザザミが、苦しそうに歩き出す。ドス大食いマグロから元気をもらった俺の猛攻に耐え切れず、傷だらけの節々から体液を漏らしていた。



「ふん、オアシスに逃げようって腹かな」

「にや、旦那さん。あっちって——」

「おう。準備はもうできている。先回りするぞ」

閃光玉で奴の視界を白く塗り潰す。それに驚きの声を上げる奴を横目に、俺とイルルはそのまま奴の前を走った。

目指すは、旧砂漠エリア3にある小さなオアシス。盾蟹たちが好むその水辺である。

そんなオアシスへダイミヨウザザミより先に入った俺は、奇妙な文様の砂を飛び越えた。そうして、その紋様をダイミヨウザザミとで挿むように立ち、ポーチの捕獲用麻醉玉へと指を忍ばせる。

程なくして、奴が現れた。懸命にその形の良い脚を動かして、その砂の紋様へと踏み込んでいく。

「かかったー！」

「かかったにやー！」

小柄な体だが、確かな体重はあるようだ。その紋様おとしあなは奴の重さを感じ取り、砂に絡むネットへと引き込んだ。同時に足場を無くし、奴は悲鳴を上げて穴へと滑り落ちる。細かい脚が災いし、勢いよくネットを絡まらせた。

そんな奴に向けて、麻醉玉を二個ほど投げつける。麻醉液を中に閉じ込めたその弾

は、着弾の衝撃でその身を弾けさせ、中の液体を散布した。それが奴の体の傷に浸り、染み込んでいく。抵抗できない奴を、無慈悲に深い眠りへと陥れたのだった。

「……よし、捕獲完了。さあ食べようか!」

「ダイミヨウザザミの活け作り……ならぬ、活け鍋……かにや?」

「さっきのマグロもそうだけど、新鮮さはやっぱりでかいからな。茹でる直前まで生かして、そのままの状態で茹でて、食べる! 今日メニューはこれで決まりだな……!」

俺の言葉に呆れつつも、イルルはダイミヨウザザミの方へと近付いていった。漏れ出る体液をタオルで拭き、纏わりついた砂も払い始める。何だかんだ調理の準備を進めてくれるオトモの姿に少し頬を綻ばせつつ、俺は背中に背負っていた鍋を下ろした。

黒く光りつつも、藍色の光沢を残すそれ。その大きな口にオアシスの麗らかな水を含ませる。その広大な表面積に注がれた水は、あのダイミヨウザザミを丸々呑み込んでくれそうなほど大きく、力強かった。

一方で焚火を作り、砂漠に光を燈す。太陽光とはまた違う温かみに、俺はほつと息が漏れた。

「あー、何気にこの蟹を調理するのは初めてかもしれん。楽しみだなあ……」

「意外にやあ。結構食べやすそうにやのに」

「タンジアギルドでも、バルバレギルドでも扱ってないモンスターだから、な。つと、イ

ルル。その鞆から塩取り出してくれ。でっかいビンに詰めてる奴」

「にや、これかにや?」

「お、それそれ」

他愛のない会話をしながら、ダイミヨウザザミを綺麗にし終えたイルル。そんな彼女に、取ってもらおうよう頼んだ塩を肉球から渡してもらおう。両手に収まり切らないほど大きなビンに詰まったその塩は、ずつしりとした重さを有していた。その輝きは白く、そして何とも神々しい。

一方で火を浴び、沸き立ち始めるオアシスの水。砕竜の重殻の、耐熱性と熱伝導に優れたその鍋は、さほど時間をかけず水を沸かせ始めたのだった。なるほどどうして、いい品である。

「こりや、確かに一万五千ゼニーでも安かったかもしれないな。よし、イルル。フタを持っておいてくれるか?」

「にや、了解にや!」

塩を振りかけつつイルルにそう頼むと、彼女は快く応えてくれた。そうしてとてとてと鍋の方へ歩き出す彼女を横目に、俺はぐつすと眠りこけるダイミヨウザザミへと手を掛けた。そうして、その小さな体を持ち上げる。

「むっ。小さい癖に、結構重いな。それだけ中身を詰めてるんかね。こりや期待できそ

うだ」

「……にや、旦那さん。どうするのにや？ 流石にこんなお湯の中入れたら、蟹さんも起きちゃうにや」

「そんなん、上からフタして盾で押さえつけるに決まってるだろ。でもまあ、ただでさえ弱ってるからそんな心配しなくていいと思うけど」

なんて言いながら、沸き立つその灼熱の海に蟹の体を投入した。

瞬間。さつと、その甲殻の色を変える。突然の熱が襲い掛かり、厚い甲殻もたちまち熱く煮詰めていく。

そのあまりの熱さに、奴の意識は覚醒したようだった。しかし既にその身に抵抗する力はなく、静かに熱湯の中で沈んでいく。漏れ出た泡が、無念さを表しているような、そんな気がした。

「——ごめんな。お前の肉は、美味しく喰わせてもらおうよ」

上から盾で抑える必要は、ないようだ。

イルルが静かにフタを閉める傍ら、俺は両の掌を合わせ、そつと目を伏せた。



「にやつ、むう。うみゆみゆ……」

「どうだー？ 上手く喰えそうか？」

「だ、ダメにや。全然ダメなのにやあ……！」

茹でること、十数分。十分に中まで熱したと判断し、フタを開けたところ、すっかり白くなったダイミヨウザザミの姿があった。塩の香りを余すことなく取り入れたそれは、爽やかな仕上がりになっていた。

調理と言つても、行つたのは塩茹でなのだから。爽やかも何も素材そのものの味なのだ。とはいえ、ダイミヨウザザミ自体の味を楽しむのなら、この方法が最適だろう。そんなダイミヨウザザミの脚と、イルルは懸命に格闘していた。何とかフォークを使つてその身をほじくり出そうとしているのだが、如何せん脚が細くフォークが入らない。柄の方を使つてもそれでも柄が太く、かえつて身を奥に押ししてしまうようだった。

「……あつ、そうだ」

「にゃっ」

それでも頑張つて、何とかして食べようと爪でぐりぐり殻をほじっているイルルだったが、俺の素つ頓狂な声でその試みを中断する。そうして、助けを乞うように俺の方を振り向いてきた。

そんな彼女に向けて、俺はあれを見せつける。先ほどマグロの腹から見つけた、あの

物体を。

「これなら上手く取り出せるんじゃないやね？」

「にやつ!? フェールピツケル!? まさかそれを使う気かによ!?」

「煮沸消毒すれば大丈夫だろ、たぶん」

「そ、そういう問題にや……? 流星に勿体ない、とかないのによ?」

「ない」

「そ、そうかにや……」

ピツケルの邪魔な突起の部分を指でへし折る傍ら、未だ燃え続けている火にもう一度鍋に乗せた。そうして、再び熱を灯させる。こんこんと湧き上がれば、その湯の中にピツケルを突っ込み、熱で不必要な菌を消毒。仕上がりは上々だ。

引き上げたそれを清潔な布で拭き、イルルに手渡す。その持ち慣れない感触に彼女は戸惑いながらも、ゆっくり甲殻の中に詰まった肉へと、それを捻じ込んだ。

「……どうだ?」

「……にや、とれやすい……」

くるつと巻いて、さっと引き抜いてみれば、そこにはピツケルに絡まった繊維状の肉があった。

紅白色が美しい、照り付けるように眩しい蟹肉。まるで細く細かい身を固めたかのよ

うなその見た目は、触れれば簡単に崩れてしまいそうな、そんな危うさがある。しかし、それでも簡単にはほじけずに、力強くピツケルに絡みついていた。

「はい、旦那さん」

「ん？」

「旦那さんが頑張つて仕留めたんだから、最初は旦那さんが食べるのにや」

「いいのか？ 第一号をもらつても」

「にやー、まだたくさん食べるとこあるし大丈夫にや。それより、食べてあげてにや。

じゃないと蟹さんも報われないにや」

「……そうだな。じゃ、いただきます」

「にや。はい、あーん、にや」

目を伏せて、ダイミヨウザザミへの感謝を述べつつ、俺はその肉を頬張つた。

フタを開けた時にも感じた、爽やかな塩の香り。塩茹でとシンプルな調理法をそのまま享受したこの味は、何とも一途で、直情的だった。

蟹特有の、喉の奥に籠もるような旨み。噛んだ途端に現れる、風味とでも言うべきだろうか。塩の旨みと蟹自体の味を混ぜ合わせ、あつさりとした旨みを口いっぱい広げていく。

その食感は柔らかく、細い肉の束をゆっくり崩していくかのようにだった。噛めば噛む

ほど柔らかな抵抗を歯に返し、同時にその旨みをどんどん染み出していく。弾力、という言葉が相応しいだろう。そんな優しい食感が、この爽やかな味わいによく合っていた。

「……うん。すつげえ旨い」

「ほんとにや？ にやー、楽しみにやー！」

何とも優しい、ダイミヨウザザミの味。

そんな俺の反応を見ては、嬉しそうにイルルもぽくつとそれを口にす。そうして広がっていくその旨みで、彼女は頬を綻ばせた。みゆうつと、多幸感に満ちた声を上げる。

「いやほんと美味しいな。これは大当たりだよ。ザザミソと一緒に食うのも旨そうだ」

「にや、それは魅力的だにや。やってみたいにや〜」

「よしよし、ちよつと待ってな」

脚とは別の、胴の部分。そこから、濃い灰色に染まった物体を掬い取る。

ザザミソ。別名、中腸線。つまり、ダイミヨウザザミの内臓だ。

ザザミソは、ダイミヨウザザミから獲れる素材であり、時折市場でも流通する人々に慣れ親しまれた食材でもある。当然購入するには誰かがダイミヨウザザミを仕留めなければならず、安定した供給がされている、とまではいかないが。故に、欲しい人間にとつては希少なものになり得る食材でもある。射的に挑戦した俺が、そうだったよう



に。

「……うん、こりや旨いや」

「にやー。どんな感じにや?」

「そりやお前、自分で食つてみないと。はい、あーん」

「にやあ。にやーん!」

スプーンでザザミソを掬い、その上にほじつた脚の肉を乗せる。そんな不思議な配色のそれを口にしては、イルルは幸せそうに尾を立たせた。髭が、ピンと張っていた。

俺も彼女に負けじと、また一つ口にする。

脚の肉とは対照的に、濃厚な旨みを示すのがこのザザミソだ。多少の生臭さを含むこの味わいだが、塩っ気を多く含んだ深みのある味でもある。先程とは打って変わり、ザザミソの濃厚な味わいが、脚の弾力性に富んだ食感に絡んでいく。舌に塗りつけるような強い旨み。それがまた、柔らかな肉によく合っているのだ。この組み合わせも堪らない。

「やべえ……こりややめらんねえや。旨すぎるだろ……」

「にやあん。何て言うか、中毒性のある味だにや。うみや、美味しい……」

甘い、脚のあつさりとした味。

柔らかな肉の感触。

塩で彩られた、爽やかな風味。

柔らかいながらも歯応えのある、楽しい食感。

ザザミソと和えれば、味を一転。濃厚な旨みを携えて。

噛めば噛むほど、味わい深くなっていった。

あつさりとした塩味と、ザザミソの深い旨みがとてもよく合っている。

もつと。もつとこの味を楽しみたい。そう思えば思うほど、噛む力はどんどん強くなつた。

もつと。もつと。もつと。

もつと食べたい。もつとこの旨さを味わっていたい。そう思つて、新たなザザミソを口にして。それを、思いのまま頬張つて。

「——ッあがッ!? いって……ッ!?」

「にゃ!? だ、旦那さん!?!」

不意に、何かがこの快樂に横槍を入れた。まるでランスの突進で真横から轢かれたかのように、鋭い衝撃が走った。

何か、何か。何かが歯に挟まっている。柔らかい肉の中に紛れて、俺の歯を阻害している。がりつと、固い固い何かが——

「……あ? 何じゃこれ」

「にゃ……………これ、真珠かにゃ?」

黒い、黒い、小さな粒。

薄暗い色に染まったそれは、淡い光沢を控えめながらも浮かべているような、そんな色をしていた。俺の指先ほどもない、本当に小さなその塊。

そう。それは、イルルが言う通り、真珠のようなものだった。

ヤド真珠。ダイミヨウザザミの体内で、時間を掛けて形成された物質。強度はあまり高くないが、希少価値のある宝石の一つと数えられる素材である。

——それと同時に、ある人が欲しいと言っていたものでもある。そもそも、この極小ザザミを狩猟して欲しいと俺に依頼した、あの人が。

「……………いけね。忘れてた」

「……………にゃ?」

「これ、今回のメインターゲットだったわ」

「……………にゃ?」

く 本日のレシピく

『塩茹でダイミヨウザザミ』

・ダイミヨウザザミの上半身

……………1匹分

・ 盾蟹の小鋏  
・ 盾蟹の小脚  
・ 塩

……1対  
……4本  
……たつぷりと

## オムライスに鋏

何もない空間が吠える。

大気が震えた。霧がかかり、静寂に包まれていたはずの塔の秘境。そんな霧を震わせ、何者かの叫び声。

瞬間、風が薙いだ。空間が牙を剥くかのように、刀さながらの何かが走る。

その刃の先には男が一人。軽く身を引いて、首を右に曲げた。そうすることでその切っ先を躲す。

漂う霧も押し流すような、そんな鋭い一閃だ。その勢いによって、目深に被っていたフードが翻る。

——まるで灰のように白く染まった髪を靡かせる、陰鬱な男だった。冷めた目でその刃の主を流し見て、小さく舌を打っている。そうして、右手で回していた剣斧に左手を添えた。

「……ナルガクルガ希少種、ねえ」

霧に溶かすような声で、彼はそう呟いた。かと思えば、その巨大な斧の切っ先を揺ら

ぐ霧の先へと向ける。

その先では、まるで靄がかかったかのように蠢く影があった。その影は次第に輪郭線を鮮明に描いていき、果てには一匹の飛竜へと成り変わる。

銀色に輝く体毛に、朧月を映す刃翼。血走るように痕を残す二つの眼光が男を捉えては、苛立ちを示すかのように尾を鳴らした。

そう。月迅竜、ナルガクルガ——その希少種である。

「お前に恨みはないけど、人間様が言ってるそうだ。死ねてよ。だから、死ね」

冷たくそう言い放ち、男は地を蹴った。静脈と動脈を一緒に切り裂いて、それを墨汁と混ぜ合わせたかのような。そんな色をしたコートを、秘境の風に靡かせる。

ネブラXシリーズと呼ばれるその鎧に染み付いた、拭い切れない血の臭い。嗅覚に優れた月迅竜は、その男のただならぬ雰囲気に唸り声を上げた。

——この二本足は、獲物ではない。天敵だ、と。

耳を劈くような咆哮。それと共に、ナルガクルガは身を引いた。その引いた勢いで、鞭のような尾を撓らせる。空気と擦れ合うように唸るそれは、見た目よりも何倍の長さで膨れ上がり、曲線を描きながら男へと襲い掛かった。

しかし彼もハンターである。この程度は想定内だと言わんばかりに、前に出た。どころか跳び上がり、撓り切って速度を落とした尾を踏み台にする。

「——ハッ！」

振り上げられた斧が、月の光を淡く照らした。蒼く染まったその刀身は、月の光によつて薄く煌めいている。そんな、まるで永遠に続くかのような情景を描き出して——

直後、一直線に叩き付けられた。それが、月迅竜の右肩を勢いよく抉り取る。

突然の衝撃に、月迅竜は驚愕の声を上げた。自らの尾を踏んでは跳び上がり、そのまま懐に潜ってきた人間。そんな、今まで全く見たことがない動きを前に、驚きを隠せないようだった。

しかし、そのまま抵抗をしないなどあるはずもなく。月迅竜は、肩から血を噴出させながらも真横に跳んだ。跳んで、再びその姿を霧へと溶かす。銀色に輝く体毛が、次第に大気と混ざり合つていく。

そんな竜の姿を前に、男は斧を引き上げつつも特に動くことはなかった。軽く周囲を見渡すように首を振りながらも、歩き出そうとはしない。ただ、周囲の霧の動きを眺めていた。

——ざら、ざら、と。

まるで何かを掻き回すような音が響く。かと思えば、突然何かが飛来した。紫色の液体に塗れた、細い針の塊だった。

「チツ……！」

横へのステツプでそれを躲しつつ、男は前へ駆け出した。そうして、その勢いのままに、斧を横へ振り回す。周囲を薙ぐようにして振り払われたそれに、ナルガクルガは反射的に跳躍。左の刃翼に一撃受けたものの、小さな傷で済んだ。

再び行われた月隠れ。その月に溶けた迅竜は、男の背後に回るかのように三角を描いていく。

一方の男はといえば、斧の遠心力に振り回されて体勢を崩しかけていた。危うく斧の刃を地に滑らせて、脚を開いては体のバランスを整えている。

ナルガクルガは、動いた。これを好機と見て、跳びかかりを繰り出したのだ。

宙を舞う巨体。原種よりも大型化したそれが、気流を攪拌かくはんするかのように両の腕を投げ出した。そうして一心に、体勢を立て直す男に向けてその身を落とす。

「——はっ」

結果的に言えば、ナルガクルガの行動は浅はかだったと言わざるを得ない。

彼はハンターだ。モンスターモンスターの動きを読むなんて朝飯前なのだろう。そう言わんばかりに、ふつと。そんな軽いバックステツプをしては、月迅竜に宙を噛ませたのだ。そうして、隙だらけになったその頭に向けて、鋭い斧を振り下ろした。その形を、剣へと変えて。



先程まで月を蒼く映していた、斧の刃。それが影を帯び、その代わりに桜色に満ちた剣が現れる。細く鋭い切っ先が霞を裂いて、そのままナルガクルガの顔をバツを描くように斬り伏せた。

剣斧——スラツシユアックス。彼が持つ武器は、その桜剣蒼斧【花天】という銘を与えられた一振りだ。その名の通り、桜火竜と蒼火竜の素材を用いた、特に『毒』の扱いに秀でた武器である。

剣モードに変わり、ピンの蓋がこじ開けられたそれ。そこから溢れる強属性エネルギーによって、刀身に塗りたくられた火竜の毒は気化し始める。極めて揮発性の高いそれが霧に溶け込んで、月迅竜を侵していく。

「まだまだアツ！」

獣のように犬歯を見せる、その男。バツの字を描いたそれを、その勢いのままに突き出した。

剣モードに変わって、フタが空いたピン上部。しかし、それも三分の一ほどしか開けられていない。そういう造りになっているのだ。

だが、この刺突。この時だけは、話が違う。この、俗に言う属性解放モードになった場合、ピンのフタは全て開けられるのだ。文字通りの全開、まさに解放である。

そうして突き出されたその切っ先は、深く月迅竜の左目を穿った。元々、切っ先を鋭

利に造られたこの武器だ。それはそのまま、月迅竜の眼孔を深く深く貫いていく。

「ギイイツ!？」

思わぬ激痛に、突然消えた半分の景色。それに悲鳴を上げては、ナルガクルガは大きく顔を仰げ反らした。痛みのあまりに暴れ狂い、両腕の爪で地面を搔いては、尾を激しく地に擦り付ける。

しかし、それでも痛みは一向に去らなかつた。それもそうだ。その痛みをもたらしした張本人が、未だ剣を支えに月迅竜の頭部へと張り付いているのだから。

両足で竜の頭と背中を抑えつげながら、腕でグリツプを握り続けている。属性解放モードは依然として続き、強属性エネルギーの流出はさらに加速していく。その反動で剣斧は諤々と震え、その度に抉る傷口から鮮血を撒き散らしていた。

「——死ねよッ」

瞬間、剣の根元と斧の切っ先が擦れ合う。そうして火花が散って、それが漏れ出た強属性エネルギーに火を付けた。

揮発性の高い、火竜の毒液。気体となったそれは、極めて不安定な可燃性を帯びるようになる。毒と炎を用いるリオス種が獲得した、生き残るための武器だ。当然、それを閉じ込めたこの剣斧もその例外ではない。

気化した毒は溢れ返り、切っ先が擦れて火花が散る。するとどうだ。まるで火竜の吐

息のような、灼熱の渦に早変わりするのである。

「ギヤアウアアツ!？」

毒のガスと。

火花と。

燃え盛る火炎と。

霧を散らす爆風と。

それらによつて吹き飛ばされて、ナルガクルガは衝撃のあまり全身を大地へ叩き付けられる。光を失つた左目からはとめどなく血が溢れ、その口からは慟哭のような声が漏れた。

一方で、ナルガクルガのその頭で爆発を起こした張本人はといえば。

爆発の衝撃で剣ごと上に跳び、宙を舞っていた。切っ先から零れ落ちる鮮血で線を描きながら、再び剣を光らせる。残り僅かなビンの中から、青白い光が漏れ始めた。

「オラアアアッ!」

重力を乗せた、渾身の力での振り下ろし。ビンの光と月明かりで、桜色の刀身がさらに輝く。それはまるで、鮮血に濡れたかのように。しかし桜という温かみを残して。残光を描くその斬撃には、一種の美しさがあつた。

そんな斬撃を、何度も何度も。男は執拗にその首筋へと、鋭い軌跡を刻んでいく。懐

に潜り込んで、深い体毛を掻き分けて。その奥で走る血管を裂いて、そのまま骨まで砕いてしまおうと。そんな明確な殺意を持った斬撃だった。

しかし、ナルガクルガも無抵抗ではいられない。例え片目が見えなくなっても、このまま殺される訳にはいかないと、いたるところから血を噴出させながらも懸命に立ち上がった。

「……へえ」

その頃には、ビンのエネルギーは枯れ果てていた。一方で枯れ果てまいと必死に抵抗する獲物の姿を見て、狩人は静かに笑う。笑いながら、再び蒼い斧を描き出す。

それはまるで、レースのようだった。

一人は獲物が立ち上がり、行動に移す前に仕留める。そんな意思をもって斧を振り回した。八の字を描くその斬撃で、確実に獲物の命を削っていく。

一匹は、自分が果てる前に立ち上がり、逆にこの天敵を返り討ちにする。そんな強い思いで立ち上がり、会心の一打を放とうと尾を鳴らす。全力を込めて、己の最大の武器を研いだ。

先に、ゴールへと届いたのは――。

「キアアアアアアッ！」

「……ッッ！」

鋭い咆哮。飛び上る巨体。まるでバネのように跳ね上げて、遠心力まで上乘せした尾。さながら大剣のように、地面を砕きかねない振り下ろし。

そう、先に届いたのはナルガクルガだった。その渾身の力が、ハンターへと襲い掛かる。

「うっぜえ！」

しかし、それをそのまま受ける男ではない。振り回していた斧を、そのまま渾身の振り下ろしへと変貌させる。

尾の振り下ろしと、斧の振り下ろし。奇しくも、互いに己の身も省みないその応酬で、戦いの幕は閉じたのだった。

——塔の秘境で、月夜に輝く紅い花が咲いた。

動かなくなった、銀色の塊。それを背に、男はふつと息を漏らす。

額から血を多く流しながらもそれを拭こうとはせず、回復薬すらも口にしない。

フードを棚引かせるその顔は、まだ二十年の歳月を重ねたかどうか、といったところ。まだ幼さが垣間見えるその顔を歪ませては、動かぬ死体に唾を吐き付けた。

そんな彼は、秘境の上を漂う飛空船に向けて信号弾を放つ。帰還の意思を示す、信号

弾を。

早く帰って、「彼女」に会おう、と。

——いつもの言葉で迎えてもらおう、と。



「——おかえりなさいーいつ、シグさん！」

「……は？」

旧砂漠から大老殿に戻って。

厳かな鈴の音が鳴るこの舞台に帰って来て。

そうして、とりあえず腹ごしらえに何か食べようと、何ともなしに足を踏み入れた、その時だった。

不意に、聞き覚えのある声に出迎えられた。数年前に何度も聞いた、あの声に。

「えへへえ、久しぶり……ですねっ！」

そう言つて、目の前の少女は花が咲くように笑う。

金色の髪を、左右に結った小さな頭。綻びした碧い瞳に、嬉しそうに伸ばした口角。翻すように立って、青いスカートを靡かせて。

その姿は、見間違えるはずがない。タンジア時代と一緒に過ごした少女。そして俺が最も深い関わりをもった人間——。

そう、キャシーだ。タンジアギルドの受付嬢であるキャシーが、ここにいた。

「……キャシー……」

「そうですよう。もう、間の抜けた顔して」

「お前……何でここに」

「あれ？ パティちゃんから聞いて……ないみたい？」

あれ、と困ったようにキャシーは首を傾げた。

本来タンジアの港にいるはずの彼女が——おそらくもう二度と会うことはないだろうと思っていた彼女が、目の前にいるのだ。首を傾げたいのむしろこっちなのである。

そんな彼女の背後から、困ったように顔を出す少女。あの極小ダイミヨウザミ討伐——さらには極小ヤド真珠の取得を俺に依頼した少女だった。

「あ、あはは……お二人は知り合いだったんですね……」

「にや……旦那さん。知り合いなのになや？」

パティ、と呼ばれた少女はやや引き攣った笑みを浮かべ、イルルはイルルでこの人は誰なのかと小首を傾げている。

そんな非常に面倒くさい状況の中で、ただ一人空気を読まずにここにことするキャ

シー。そんな訳の分からない状況に向けて思わず顔を顰<sup>しか</sup>めていると、依頼主の少女が口を開いた。俺が疑問に思っている、キャシーがここにいる理由を。

「えつと、えと……あの！　今、私たちギルドガールは休暇中なんです！」

「あ？　休暇？」

「はっ、はい……っ」

「こら！　まあ貴方は人にガンを飛ばして。この子をいじめたらお姉さん許しませんからね！」

「飛ばしてないし……。話こじれるからちよつと黙つててくれるかな」

ぎゅつと、パティを庇うように立ちながら俺を諫めてくるキャシー。そんな昔と変わらない悪ふざけに呆れつつも、話を戻そうとする。軽く、その額にデコピンを収めながら。

ところで、パティと呼ばれる少女が妙に俺に話にくそうにしている気がするのだが。これは俺の単なる気のせいだろうか。

「イタイ！」

「悪いな。続けてくれ」

「わ……わっ、私と、キャシーさんと、あと一人ベッキーさんっていうんですけど。休暇をとった三人のギルドガールで旅行を、旅行をしてたんです。それで、それでですね



……」

旅行。確かに彼女は、旅行と言った。

ギルドガールと言えば一日中ハンターズギルドで働く人たちだ。ギルドの酒場からアイテムシヨップ、果てにはキャラバンに配属されたソフィアのように、それぞれの職場で休みなく働いている。

そんな彼女たちが、今回は休みをとって旅行を楽しんでいる。そう言われれば、キャシーがここにいるのも納得できないことはなかった。

ところが、パティはその先で言葉を詰まらせる。恥ずかしそうに顔を覆って、ごにごによと口元をまごごつかせていた。

「……それで？」

「えっと、えっと。突然ベツキーさんが勝負よ、とか言い出して……」

「勝負？ 何を？」

「あう、あうあう……えと、ギルドの女のアレの大きさで……」

「アレ？ アレって？」

「はううう……」

「……あれかにや、旦那さんの顔ってやつぱり怖いのかにや」

「それ結構傷つくからズバツと言うのやめてくれ」

「にや。ごめんじや」

そんな彼女も姿を見て、困ったように髭を揺らすイルル。そうして口にしたその言葉に、俺は思わず本音を漏らした。俺の顔が怖いから、なんて言われたら俺はどうしたらいいのだろう。この顔は生まれつきのもだから、変えることなどできないのに。

一方の、タンジア時代によく見た、何かを訴えかけるようなジト目。それで睨んでくるキャシーを前に、俺はやれやれと頭を掻く。乱雑に掻いて、このやるせなさを吐き出そうとした。もちろん、そんな程度では吐き出せる訳ないのだが。

このままパーティに聞いても、どうも埒が明かなさそうだ。これ以上言うのは憚られると、全身でアピールする彼女の姿から俺はそう判断する。

「……まあいいや。一緒にいたなら、キャシーも分かっているよな。教えてくれよ」

「えっ、あ、うん。分かるけど……折角だし、何か食べにいかない？」

「は？」

「昔みたいに、さ。ねえ、ドンドルマの美味しいお店、教えてよ」

昔懐かしい手付きで俺の右手を掴んでは、キャシーは強引に歩き出した。俺の意思はもちろん、パーティもイルルも置いてけぼりに。

「いやお前、旅行中なんだろう？　この子置いていつていいのかわ」

「しばらくここに滞在するから、各自自由行動なの。ほら、ベツキーさんもいないでしょ

う？」

軽やかな足取りでそう話す彼女。言われてみれば、この大老殿の中を見渡してもベッキーと呼ばれるギルドガールの姿はなかった。聞けば、その勝負とやらのために我らの団を訪ねていったのだからか。

だから自分も自由に動こう、だとは。相変わらずマイペースな女だと、心の中で溜息をついた。こいつを先輩に置いてしまったパテイにも、浅くない同情をしてみよう。

「……しゃあねえなあ。イルル、悪いけどクエストの報告とか頼んでいいか？ ほら、真珠」

「いや、にやあ……旦那さん、行っちゃうの……？」

「大丈夫、夜には帰ってくるから」

やたらと哀しそうに顔を歪めるイルル。とてとてと俺についてきては、尻尾を左右に振り回していた。

そんな彼女にヤド真珠や依頼文書を手渡しして、俺は荒くその頭を撫でる。何故そんな顔をするのか分からない、と思うほど哀しそうな表情だった。



「——はあ、足のタコ、ねえ」

「ギルドガールって立ちっぱなしでしょ？ だから足にタコができるんですよ」

「それで、その大きさを比べようってか。なんつうか、しょーもないっていうか」

「むうっ、しょーもないって何ですかあ！」

酒気を帯びている訳でもないのに赤らんだ、キャシーの頬。俺の言葉に反応しては、納得いかないとその赤い頬を膨らませている。

つまり、ギルドガールのタコ比べに巻き込まれた。この状況は、その一言に尽きる。パティが依頼した極小ヤド真珠もそのタコの大きさの比喩だった、という訳だ。

「だってそんなんで猟場に駆り出されてよ。しかも蟹全部食ったらギルドに怒られるしよ。ほんと堪ったもんじゃねえよ」

「蟹全部食べちゃったのはシグさんが悪いですう！」

キャシーのその大声で、周囲の客からの視線が集中する。思わず立ち上がって声を荒げた彼女だったが、周囲の視線を感じては恥ずかしそうに座り直した。

ここはドンドルマの商店街。そこで経営される、オムライスに定評がある小さなレストラン——『雪兎亭』だ。俺たち以外にも数組の客がそれぞれの会話を楽しんでいたが、キャシーの大声がそれらを静寂に塗り替えた。

「……大声ではしゃぐと痛い目見るぞ。ここは酒場じゃないんだから」

「……………うう。言うのが遅いよお……………」

今度は羞恥に顔を赤くするキャシー。若干潤んだ瞳で、俺に非難の視線を浴びせてくる。今のは俺が悪いのだろうか。

お冷を飲みながら何ともなしに溜息をつくとき、キャシーが「でも」と呟いた。先程までの百面相とは打って変わった、どこか優しい表情で。

「何だかシグさん、変わりましたね。何て言うか。優しくなった気がします」

「……………なんだ、急に」

「ぶつきらぼうなのは相変わらずだけど、棘がないっていうか。今のシグさんを見たら、ギルドマスターもきつと驚きますよ」

「……………言つとくけど、タンジアに戻るつもりはないからな」

「あちやー、先に言われちゃったかあ」

少しふざけるような仕草で、冗談っぽくそういう彼女。とはいえ、それは本心で言っている訳ではないだろう。俺がタンジアに戻ることもなんて、元から期待していないように見える。

「……………飯。興味もってくれたんですね」

「あ?」

「蟹、食べちゃったんでしょ?」

「あー……」

「お腹いっぱい食べれるなら、アプトノスの餌でも何でもいって豪語してたのになあ。人って変わるんですねえ」

「ぶっ!？」

適当に聞き流そうと、お冷を口に含む。興味が無い振りをするにはこれが最適だ。なんて行なったそれが裏目に出た。思わず吹き出してしまった。

「やめてくれよ……。若い頃とか黒歴史ものだから」

「えー? そうなんですか? “左目潰し”さん」

「……そんな古い渾名、よく覚えてるよな」

「だってシグさん、有名だったんですもん。討伐したモンスターの左目を、必ず潰してくるんだから」

懐かしそうに、思い出すように。キャシーは、はつらつと昔の俺のことを口にした。それを前に、俺はやるせなくお冷を口にする。冷たい、きんとした香りが喉を舞う。

考えてみれば、彼女はクエストを回転するギルドガールだ。達成された依頼の詳細を知るなんて朝飯前だろう。ましてや毎日酒場に勤務していたのだから、様々な情報に触れられるのは言うまでもなく――。

目の前で悪戯っぽく笑うこの少女が、そんな大きな仕事をしていたとはおおよそ思え

ない。しかし、事実であるから笑えない。

「ましてや、貴方の元カノですしねっ。シグさんのことはよく知ってたつもりです」

「……けっ。今更恋人面か？ よく言うぜ全く」

「むー。久しぶりに会ったのに、そういうひねてるところはほんとに変わらないなあ」

「ひねてないし」

「ひねてる」

「ひねてないよ」

「ひねてるよ！」

「ひねてないって」

「ひねて——」

再び熱が入り、勢いよく立ち上がったとしたキャシー。しかし、大声を出し切る寸前に、隣に人が立っていることに気付き、慌ててその生意気な口を閉じた。

「あ、し、失礼します。お待ちせいたしました。明太子オムライスと、デミグラスソースのオムライスでございます……」

二人用のテーブル席。その横で立つ店員は、苦笑を浮かべた顔で手に持ったプレートから二つの皿を寄こしてくる。

一つ、橙色と桃色を混ぜ合わせたような、鮮やかな色合いのクリーム。明太子の香り

が溢れるそれを充分に身に纏った、黄色の塊。ガーグアの卵をふんだんに使ったらしいそのほかほかの塊は、とても柔らかそうだった。

明太子のは私です、とキャシーが小さく手を挙げる。そうしてその皿がキャシーの前に舞い降りる傍ら、俺の前にはもう一つのデミグラスソースオムライスがやってきた。

溢れる焦げ茶色のソース。店内のランプの明かりを反射して、これまた美しい光を放つ。濃密な色を差したソースから、濃密な香りが立ち昇って。鼻を撫でるような、贅沢なスパイスな香りを振り撒いて。

そんなデミグラスソースの海に浮かぶオムライス。中のチキンライスにまでそのソースが染み込み、赤と茶色のコラボレーションの完成だ。

「……とりあえず、食べようぜ」

「……うん、そうだね」

「小皿あるから半分ずつ分け合わないか？ そっちのも食べたいし」

「あ、それ賛成っ！」

テーブルの端にあつた皿を取りつつ、自分のオムライスをスプーンで掬う。三度、四度と盛り分けて、それをキャシーの前へと置いた。

同様に自前のものを小皿に取り分けるキャシー。スプーンでオムライスを真ん中で割いて、その半分を器用に下から掬い上げては俺の前へと置いてきた。



「うわあ。シグさん相変わらず雑ですなあ」

「悪かったなあ不器用で」

「ううん……。なんか、懐かしいな」

そう言つてはふにやつと笑うキャシーを前に、俺は思わず言葉に詰まる。そうして、あえて視線を彼女から逸らした。懐かしいのは、俺も変わらないから。あんまり見ていると、懐郷病に駆られそうだったから。

今は、目の前のオムライスに集中しよう。そう決めては、スプーンをオムライスに突き刺した。

手に伝わってくるのは、まるで抵抗力のないその感触。スプーンを差しただけでも分かる、そのふわふわとした柔らかな卵。中に詰まったご飯が乗つて、その上にふわとろの卵が垂れ落ちて。焦げ茶と黄色と橙色。そんなコントラストが、何とも美しい。

それを一思いに口に入れれば、より一層その食感が、それもダイレクトに広がってきた。デミグラスソースの濃い味付け。辛さではない、しかし酸味とも違う。そんな不思議なスパイスを旨みに漬け込んだ、何とも言えない味わいだ。

それによく合うこの食感。何といつても柔らかく、噛まずとも自ずと溶けていくような、そんな感覚だった。米のもちもちとした食感が絡み、より一層味の深みを描いていく。

口内の熱だけで蕩ける、そんな甘い口溶けだ。その優しい食感、何となく懐かしさを感じさせてくれた。

「わーっ！ すっごいこれ！ ふわとろ！ 何これ、とつても美味しい……っ！」

「ふっふーん。キャシーが好きだろうと思つてな。この店を選んで正解だったぜ」

「シグさん凄い、これほんと美味しい！ ドンドルマにもこんないいお店があるんですねえ……」

「まあ、流石に魚介類はタンジアに劣るけど。でもま、ドンドルマも悪くないぜ」

その魚介類である明太子を贅沢に使つた明太子クリーム。嵩増しではない。調和を重視したであろうそれは、明太子の辛さが過剰になるのを抑え、マヨネーズでまろやかさを加えたような。そんな味付けだった。

とはいえ、辛味が失われた訳ではない。ピリツとした辛味と、マヨネーズによる酸味。そんな刺激がじつくりとオムライスに溶け込んでくる。清々しいくらい、デミグラスソースの味付けとは正反対の明確さだ。はつきりとした辛味や酸味が感じられる。それが柔らかな卵に絡みついて、より一層味わい深くしてくれる。

キャシーが盛り分けてくれた皿を軽くしつつ、その味わいに舌鼓したつづみを打っていると、キャシーが目を輝かせながら乗り出してきた。昔のような、天真爛漫なあの顔で。ご飯の話になると途端に夢中になる、あの表情で。

「シグさん良い店知ってるなあ。他にもオススメとかあるんですか？」

「よくぞ聞いてくれました。俺的にはな、大通りの店はあまりお勧めしない。ここは例外だけだな。実は路地裏にある居酒屋とか、そういうところが当たりなんだぜ」

「ほうほう！ 裏をかく……ってことですね？」

「おうよ。中央地区にある路地のバーとか、この店の奥の小路にあるうどん屋とか、または郊外にある釣り堀とか」

「はあ、色々あるんですねえ」

今度ギルドガールたちで色々回ってみるといい。そう締めてはお冷を口にした。

冷えた水が勢いよく口内に流れ込み、張り付いたソースの味を流していく。カランと鳴った氷も相まって、口も気分も爽やかだ。

一方、そんな俺の言葉に耳を傾けていたキャシーは、微笑ましそうに笑っていた。まるで子どもの成長を見守る親のような、そんな優しい顔だった。

「……何だよ」

「ふふつ。やっぱり、シグさん変わったなああって。そんな嬉しそうに顔するんだなあ」

「むっ……」

「やっぱり、あの時卵のことを話して良かったなあ」

——あの時。

タンジアギルドのG級ハンターとして、滝瘴啖に返り討ちにされたあの時。

ギルドマスターも、トレッドも、キャシーの言葉も無視をして。そうして挑んで、全身スタボロにされて帰った俺をさらに痛めつけたのは、ハンターズギルドからの懲戒処分だった。

ハンターランクもギルドカードも、全ての記録を抹消されて、ただの下位ハンターに戻された。制度で縛って、勝手な行動をさせないようにと。

「……懐かしいな。ソルジャーダガーを携えて、孤島に行ったっけ」

「だって、あの時のシグさんの打ちひしがれようはほんとに酷かったんですもん。何か、何かないかなあって」

「それで、ご飯の話を出すのがお前らしいよ。……でも、あの時作ったゆでたまごは、今でもよく覚えてる」

飛竜の巣から担いできた卵。それを、キャシーに言われるがままに鍋の流し入れたのだ。覚束ない手付きで茹でて、調味料を振って。持ち込んだ砂時計とにらめっこして。そうして食べたその卵は、何だか不思議な味だった。

特別美味しかった訳じゃない。不味くて食べたものじゃなかった、という訳でもない。

ただ、目の前の景色が広がったような、そんな気がした。モンスターは殺すもの、と

しか思っていないかった俺に、新しい景色を見せてくれたのだ。今まで見えてなかったものがたくさんあったんだと、教えてくれた。

「やり方はイズモの見よう見真似だったけど。それでも、あの感覚は今もよく覚えてる」「イズモさんと、私のおかげですかねえ」

「……トレッドにも言われたなあ、それ。でも、否定できないから悔しいな」

「ふふふ。シグさんの世界が広がったんですね。そのまま新天地に行っちゃうのは流石に予想外でしたけど。でも、こんなに良い顔をしてるシグさんが見られたなら」

言って良かった、ともう一度口にして。今の顔の方が素敵です、と彼女は静かに微笑んだ。

昔懐かしいその笑顔。今はもう、俺だけのものではなくなってしまうたその笑顔。

「言っておきますが、よりを戻す気はないですよ」

「あん？」

「あれれ。ここは、そういう話を始めるもんじゃないの？」

「馬鹿馬鹿しい……」

「むう、冷たいなあ」

「仮に俺がそう言ったら、お前は どうするんだよ？」

「うーん……。でもまあ、私たちはもう、きつと無理ですよ」

——私より、瘡瘻啖を選んだ時点で。もう、私たちは駄目なんだ、と。

憂いに満ちた瞳で、キャシーは静かにそう言った。色を無くしたような彼女の瞳に、俺は何も言えなかった。

曇天に満ちた水没林。ギルドのルールも、マスターの制止する声も。全て無視して、俺は瘡瘻啖に会いに行つた。ギルドの船が出せなくとも、アイルーを買収すれば移動なんてどうとでもなる。密猟とされても構わない。そんな意思で、俺は水没林に赴いたのだつた。

しかしそこに、先回りしていたキャシー。ギルドの仕事を放棄して——いや、むしろそれが彼女の本来の仕事とすべきものだつたのかもしれないけれど。とにかく、彼女は俺を止めに来てくれた。自暴自棄な俺を止めようとしてくれた。

——あの日の彼女の悲痛な叫びが、俺の脳裏を過ぎる。

「それが、お前の仕事だつたんだろ？」

「ハンターを守るのは、ギルドとして当然——」

「俺を抑制するために、俺に近づいたんだろ？」

「……………」

先に裏切つたのはどいつだ、という言葉が口の中まで登ってきたけれど。

俺は黙って、それを呑み込んだ。

「悪い。……俺が悪かったよ」

「……別に。謝らなくたって、いいです」

出来ることなんてほとんどないし、尽くせることも何も無い。

俺に出来るのはこの自分勝手な頭を下げることに。それだけだ。

そうして見えなくなった彼女から、数秒経って言葉が漏れる。じゃあ、と何か思うような、そんな声だった。

「——じゃあ、一つ。私の頼みを……聞いてくれますか？」

「……頼み？」

そつと顔を上げると、いつもの悪戯っぽい顔をした彼女があつた。

無邪気な子どものようににっこり笑い、人差し指をそつと唇に押し当てている。

「勝負」

「は？」

「私の、ギルドガールの勝負に。力を貸して？」

「……あん……？」

何だか、面倒臭そうなことに巻き込まれたぞ。

清々しいくらい変わっていない彼女のマイペースさに、俺は再び溜息をつく。

カランと、空になったコップの氷が、虚しそうな音を上げた。

く本日のレシピく

『オムライス』

・雪兎亭お手製のオムライス。レシピは企業秘密である。



## 竜の目にも涙

「グオオオオオオオツツツ!!」

凄まじい轟音。それと同時に、まるで巨岩のような何かが降り掛かる。

それはまるで、苔がこびりついた岩のような。緑色に染まった流星のように。一心に、俺に向けて弾け飛んだ。

着弾の衝撃と、同時に広がる謎の粉塵。巨岩の如きそれが地面に叩き付けられたと同時に、淡い粒子が舞い上がった。

「にやつ……これ!？」

「爆発する……ッ! イルル、右へ跳べ!」

俺の掛け声と共に、イルルは慌てて右へ跳ぶ。大地に広がる緑の模様。ただごとじゃない雰囲気の中から逃れるように。

同時に、その緑色の光は次第に色を薄めていった。かと思えば、燃えるような赤へと変貌する。この地底火山のマグマにも負けない、芯まで染まった赤色に。

瞬間、爆ぜた。火柱のような炎が、このマグマもないはずの岩肌に聳え立つ。

「にやーっ!? 何にやーっ!?」

「粘菌だ」

「ねっ……菌!?!」

「ああ、菌。この舞い上がってる淡い粒子はアレだ、孢子」

「孢子っ!?!」

「菌類を身に纏うちよつと不潔なモンスター、ブラキディオスさんだっ!!」

そんな俺の言葉に応えるように、目の前の獣竜種——碎竜ブラキディオスは雄叫びを上げた。

最近購入したあの鍋と同じの、藍色の光を映す黒曜石のような甲殻。緑色に染まった、丸みを帯びた頭部。腕はまるで、殴ることに特化したかのような。そんなハンマーの如き光を放っている。

なんて思っていたら、奴は突然駆け出した。獣竜種特有の二足歩行を存分に活かしたその俊敏性で、瞬く間に俺の背後に回り込む。

「後ろだッ!」

「にやーっ! 勘弁してにやー!」

今度は、その腕の何倍はあるのだろうかというその頭を。まるで自分の体を顧みず、思いのままに叩き付けた。

ずんと、鈍重な衝撃が大地を揺らす。同時にその頭にこびりついた粘菌が、その衝撃に乗るかのように大地に滑り込んだ。このエリア2の、焦げたような色に染まった大地が、緑の粘液に染まっていく。

「やつ、やばいにややばいにや!」

「チツ……退避するぞ!」

まるで、ご飯にとろろでもかけたかのように。どろりどろりと、どんどん色を変える粘液が地面を覆い尽くしていつて。

踏み込んだら間違いなく巻き込まれる。そう判断しては、俺もイルルもブラキディオスから距離をとった。一方で大地に頭を叩き付けた奴は、そんな衝撃をまるで気にしていない。冷静に俺とイルルの動きを察知しては、腕を荒く舐め始める。

「にや……何してるんだにや、あれ」

「怪我したら唾つけとけっていうアレじゃね?」

「にやむ、モンスターがそんなこと……ってにや!?! 跳んできた!?!」

イルルの悲鳴。同時に響く、着弾音。

突然視界を埋めた藍色に、余りある質量。目の前に、ブラキディオスが舞い降りた。腕を舐めたと思ったら、突然跳んではこの開いた距離を詰めてきたのだ。

あの巨大な粘菌が爆発した。そう見えた時には、今度は俺の目の前で爆発が起こる。

もう、何が何だか分からない。

「え——」

瞬間、純白に染まった視界。

何も見えない。かと思えば突然身体が浮き上がった。自分の足で飛び上がった訳ではないのに。自らの意思で動き出した訳でもないのに。

「旦那さん!? 旦那さん……っ!」

爆破の衝撃で、急回転する視界。洞窟の天井と地面を交互に映しては、そのまま景色が遠のいていく。頭が引き千切れそうな、そんな感覚と共に俺の意識は掠れていった。慌てて駆け寄ってくる白い塊が、薄い靄へと変わる。肌を撫でる熱も、擦り寄る温かさも。風のように消えていった。



「——竜の大粒ナミダ?」

「うん、ナミダ」

ドンドルマの小路。雪兔亭から出た、すぐ後のこと。

キャシーが、俺にそう言った。竜の大粒ナミダが欲しい、と。

「それが、お前の足のタコか？」

「うん。私のはそれくらい……つてことにします。だから、それをシグさんに持つて来てほしいの」

足のタコ。

キャシーが属しているギルドガールの旅行集団。そこでは、少女たちの仁義なき戦いが勃発していた。すなわち、立ち仕事だからこそできる足のタコ。その大きさ比べである。

そもそもこの事の発端は、キャシーの後輩にあたるパーティが俺に仕事の依頼をしたからだ。自分の足のタコは極小ヤド真珠くらいだから、それを持つて来てほしい、と。それが奇しくも、この目の前のキャシーとの邂逅に繋がったのだ。

「パーティが真珠なら、お前はナミダかあ。よくわかんねえなあ」

「ベツキーさんが何を持つてくるかは分かりませんが、私だつて負けません！ 是非とも、強いモンスターのナミダで勝負したいです。つてことで今のモンスターの出現情報を調べてたんですけど……」

「用意周到過ぎるだろお前……」

何分、ギルドガールですので！ と控えめな胸を張るキャシー。そんな彼女が、メモ帳をバラバラと音を立てる。まさかギルドガールの立場を利用して、ドンドルマギルド

の情報にも干渉するなんて。相変わらず、あどけなさそうに見えてやり手な女だ。

なんて呆れていると、彼女はメモを閉じた。そうして、懐から依頼書を一枚取り出してくる。勢いよく俺の目の前に突き付けたそれには、藍色に染められたモンスターの絵が載っていた。

「ずばり！ ブラキディオスなんてどうですか！」

「は？」

「シグさんがG級クエストで苦労したあのモンスターですよ。何やら、地底火山で暴れてるそうです」

「……そのブラキディオスを、泣かせてこいと？」

「はいっ！」

ニッコリ笑顔で、キャシーは俺の言葉に頷く。思わず顔を顰めた俺のことなど、まるで気にしない屈託のない笑顔だった。

ブラキディオス。碎竜と名付けられた、危険度の高い獣竜種モンスターだ。

ジンオウガのように、他の生物と共生するモンスターは珍しくない。ブラキディオスもその一種である。しかし、その共生している生き物は、雷光虫などという可愛い存在とは程遠いものだった。

爆発しては孢子を飛ばすという物騒な菌類——そう、粘菌だ。同時にブラキディオス

も、その爆発を利用して狩りを行うという極めて危険なモンスターなのである。

本来、ブラキディオスは火山に生息するモンスターだ。なのだが、時に全く正反対の環境——例えば凍土であったり、氷海であったりと、そんな地域に姿を現すこともある。キャシーの言うように、俺もタンジア時代でお世話になったものだ。

「仕留める必要はないです。左目も潰しちや、駄目ですよ。泣かせるだけでいいんです」  
「泣かせるだけって、口でいうのは簡単だけどき……」

「あれれ。さつきあんなに頭下げたのに。もしかして、私の頼みを聞いてくれないの？」

「やるよ！ やればいいんでしょうが！」

目を細めては、挑発的に笑う彼女。俺の弱みを握ったかのような、悪戯っぽい笑みを浮かべてくる。

流星に言われるままでいたくはない。そんな思いを込め、荒っぽくその依頼書を受け取った。契約金も報酬金も大したことのない依頼書だ。こんな儲からないことを、味の開拓も満足にできない仕事をやらなくてはならないとは。つくづく数年前の自分の行動に悔やまれる。

「——シグさん」

「あん？」

不意に、手を取られた。キャシーが、その小さな両手で俺の右手を握り締めていた。「……………何だよ?」

「……………ブラキデイオスは、危険なモンスターです。無理は、しないでくださいね」その仕草は、何だかとても懐かしい。

狩りに行く度に、わざわざ俺の手を握っていたキャシー。俺の身を案じてくれる、その優しい声。凍土に現れたブラキデイオスを狩りに行く際にも握ってくれた、その温かい手。

我ながら、女々しいと思う。こんなことで安心感を覚えてしまうことを。やっぱり、もの淋しさを感じてしまうことを。

——だから、俺はその手を荒く振り払うのだ。



目を開けた。場所は、地底火山のエリアー1。

先程までいたはずの火山地帯とはうって変わり、溶岩のない穏やかな世界が広がっている。転がった体を起こしてみれば、ところどころ痛むものの不具合がある訳ではないようだ。頭の打ちどころでも悪かったのだろうか。



なんて考えながら身を起こすと、困ったように俺を見るイルルの姿があった。心配そうに尻尾を振っては、俺に擦り寄ってくる。

「イルル……ここは？」

「旦那さん、吹っ飛ばされたのにや。吹っ飛ばされてここまで転がってきたのにや。傷は痛むかにや……？」

「……まあ、大丈夫。多少痛いくらいだから。回復薬飲んでは問題ない」

「にやー、無理はしないでにや……」

きゅつと俺の手を肉球で包みながら、イルルは心配そうにそう呟いた。そんな彼女の頭を撫でながら、俺は小さく笑う。

「大丈夫大丈夫。少し、昔のことを思い出した」

「にや？ 昔のこと？」

「……ブラキディオスは、今まで何回か狩ったことがあるんだ。イルルを雇う前……タンジアにいた頃にも。だから、次は失敗しないよ」

「大丈夫なのにな？ あんな動きするモンスター、ついていけないにや。勝てるのにな……？」

「ああ。俺に任せてくれ。イルルはサポートに回ってくれるか？ 俺の言うタイミングであの爆弾を投げて欲しい」

「それって……旦那さんが調査してた……。キャンプから、持ってくる？」

「そうだな。様子見はもう終わり。そろそろ本気でいこう」

立ち上がり、踵を返す。一度ブラキディオスに背を向けて、高台にあるベースキャンプへと歩き出した。

そんな俺についできては、危う気な足取りで俺を見上げてくるイルル。若干耳を垂れさせて。どうしようかと言わんばかりに鼻を鳴らして。何だか、どこか納得がいかなさそう。そんな表情で顔を染めていた。

「何か言いたそうだな」

「……昔のことって、あの女の人にや？」

「……キャシーのことか。気になる？」

「にやあ……」

髭を揺らしながらも頷く彼女は、どこか複雑そうだった。

「何のことはないよ。元ガールフレンド。それだけだ」

「そ、そうなのにな……？」

「気になるんなら、また今度話してやるから。とりあえず、今はアイツを泣かせるぞ」

「にや……にやん」

俺に完全に同意した、という訳ではなさそう。未だにイルルは少し煮え切らないと

いった顔をしている。一体彼女が何を思っているか、俺には到底分からないが。

とりあえず、クエストを達成することを考えなければ。そう決めて、俺はベースキャンプへと続く崖に手を掛けた。



「うおおおおおおらあああああッッ!!」

重力を込めた、高台からの抜刀斬り。それを繰り出しては、エリア8を屯たむろしていたブラキディオスに肉薄する。

ガシヤン、と。機械音を立ててはその姿を剣へと変える、ギガフロストアンバー。氷牙竜ベリオロスの素材を用いたスラッシュユアックス——アンバーズラッシュユの究極形だ。霜のような煙を発し、琥珀色の刃が剥き出しになる。

「ゴオツ!」

渾身の一打。それが深々と奴の背中を斬り付け、その固い甲殻に亀裂を入れる。

思わず弾かれてしまいそうな、そんな強度だ。手に伝わる感触も重く固く、ジンジンと指の先が震えてくる。しかし、スラッシュユアックスの剣モードならば。ビンのエネルギーで斬撃を加速させる、この剣ならば。

「オラオラア！ どうしたブラキディオスッ！ 黒曜石が豆腐のようだぜ！」

ぶんと剣を振り、刀身に染み付いた血潮を振り払う。氷点下に冷えた刀身に、シャーベットののように纏わりついた赤い霜。それが紙吹雪のように地底火山に溶けていく。

青い光が、剣から漏れた。ペリオロスが宿す氷結袋。その氷属性をさらに加速させる強属性エネルギー。この剣斧に内蔵されたピンから、淡い青色が迸る。

「グルル……ッ！」

一方の、さらに黒い青で身を染めたブラキディオス。憎々し気に俺を見ては、低い唸り声を上げた。そうして、再び腕を舐め始める。砕竜の唾液を浴びて、その腕を覆う色はさらに鮮やかさを増した。

「イルル、今だ！ タマネギ！」

「はいにゃ！」

そうだ。ブラキディオスの唾液だ。

粘菌は、奴の唾液を浴びてその成分を活性化させる。もつと言えば、胞子を拡散するその最終段階まで身を成熟させるのだ。そして、ブラキディオスはそれを武器にしようとする。つまり、あの腕を舐める動作は何も傷口に唾をつけているのではない。攻撃するための準備なのだ。

そんな隙だらけの瞬間を見逃す手があるだろうか？ いや、ない。

「喰らえにやーっ！」

大タル爆弾サイズのそれを、イルルは懸命に持ち上げた。キャンプからせつせと持ち運んできては、このエリアの隅に設置した三つの大タル爆弾。その一つ、タマネギと名付けられたそれを。イルルは危うい足取りながらも、ブラキディオスに向けて投げつけた。

瞬間、ボンつとその身を弾けさせる。同時に、大量の金色の光が漏れた。千刃竜が身に纏う、あの鋭くも美しい金の光が。

「……どうだッ!？」

舞い上がる、千刃竜の飛刃。数十枚詰め込まれたそれが、内蔵されたスリンガーによつて射出。同時にぶつかり合い、その鱗特有の脆さも相まって大量の欠片へと成り変わる。一つ一つが鋭い斬れ味をもったその欠片。それが、鱗と同時に飛び出したタマネギをみじん切りにした。

「ひいい、目が痛くなりそうにやっ」

「レアオニオン二十個分の催涙爆弾だッ！ 泣いていいぞ！」

舞い上がるタマネギ。粉々になったその身と、中に貯まった多量の水分。キラキラと輝く千刃竜の粉末に、ブラキディオスは白い光に包まれた。

あの中は、タマネギを切ったまな板——いや、その数十倍は威力のある空間だ。おそらく、人間が突つ込めばまず涙と鼻水が止まらなくなる。流石のブラキディオスといえど、大タル爆弾分のタマネギを喰らえばただでは済まないはず。

そんな俺の期待を、軽々と吹き飛ばす黒曜色。

「グオオオッ！」

「……マジかよ?！」

タマネギ爆弾もまるで気にせず、ブラキディオスは跳んできた。先程俺を弾き飛ばした、あの強烈無比な急襲攻撃で。

危うく、その股下をくぐり抜けるようにスライディング。そのまま剣を斧へと変えて、奴の脚を薙ぎ払う。背中ほどではないものの、重い感触が手に伝わってきた。

「にやあー!? 効いてないのにやー！」

「慌てるな! まだ策はある。次! コシヨウ! 装填準備だ!」

「はっ、はいにやっ!」

拳を地面に突き立てては、それを軸にするかのようにブラキディオスは身を滑らせる。巨体に似合わぬそのフットワークで、たちま忽ち俺に向かい合った。

ヘド口のように纏わりついたその色で、残光のように線を描く。かと思えば、その筆先は勢いよく俺へと走り出した。要は、右ストレートだ。

「……ツチイ！」

その余りの速度に、俺は思わず武器変形を中断。斧をそのまま振っては、その遠心力に身を乗せる。そうしてストレートを躲し、斧を奴の右足で止めた。

「イルル！ 俺はこいつの足を斬って動きを止めるから、そのつもりで！」

「わっ、わかつたにゃ！」

あの俊敏性だ。属性エネルギーで震える剣を抑えては、そのまま押し殺されてしまふ。ここはビンのフタを閉じてでも、斧モードで立ち回るしかないだろう。

続く左フック。

邪魔な小虫だと言わんばかりに振られたそれが、俺の頬を掠める。同時に舞い上がる粘菌が、このガルルガXメールのマントにこびりついた。

「……いい気になんや……ッ！」

纏わりついた粘菌を、振り払うように前転。そこから斧を斬り上げへと繋げる。しかし、奴はその程度では怯まない。今何かしたかと言わんばかりに、再びその頭を振り下ろした。

響く衝撃と、広がる波紋。深い深い緑色が、先程俺のいたところを侵食する。判断が遅れていたならアレに巻き込まれていたと思うと、嫌な汗がどつと溢れてくる。

しかし、爆発の規模がでかいというのは、奴に影響が無い訳でもないようだ。爆発の





「へっへーん。ずるいじゃない、賢いと言ってくれ。……おっ、ブラキが顔を上げ始めたぞ……よし、よし！ これは成功したんじや——」

瞬間、大気が弾け飛んだ。これまでの粘菌の爆発とは比べ物にもならないほど、超音量で鳴り響くそれ。

呻くように首を振ったと思いきや、ブラキディオスから飛んだのはくしゃみではなかった。怒り心頭という言葉を感じたいままにした、大咆哮。顔まで緑に染めて激昂する奴の姿が、そこにある。

「——してないみたいだなあ」

「うっ、うにやあ……！ すっごい怒ってるにや……！」

「グオオオオツ！」

くしゃみなどとは程遠い、怒りに満ちた声。それと同時に、素早く後ずさるブラキディオス。

逃走などではない。怒りに満ちたその瞳は、溢れんばかりの闘争心を放っている。ならば、一体何を。

「……ツ！ イルル、右へ跳べ！ 止まるな！」

「にやっ、えっ!?!」

「いいから、速く！」

そう俺が言い終わる前に、奴はその頭を大地に擦り付けた。緑どころか、橙色に染まったその頭を。

瞬間、光が進る。ブラキディオスは擦り付けた大地。それが、注入された粘菌によって炸裂した。白く、眩しい光の螺旋が立ち昇る。

しかし、それだけでは終わらない。まるで連鎖するかのよう。これまで散布されてきた粘菌が、大地で眠る粘菌が。その爆破の衝撃に便乗するかのよう。直線状に弾け飛んだのだった。

「にゃーっ!？」

「もう一回くるぞー!」

「うにゃあああ! 怖いにゃーっ!」

再び聳える、爆破の壁。その怒涛の一手に、俺とイルルはエリアの隅に追いやられた。奇しくも最初に爆弾を備えておいた、あの場所に。

「……残るもこの爆弾だけか」

「旦那さん! もうだめにゃー! これじゃどうしようもならないにゃー!」

「いや、まだ策はある」

唸り、ゆつたりとこちらに近付いてくるブラキディオス。その威圧感に震えるイルルは、半ば戦意を喪失しているようだった。

一方の奴はといえば、これが最後だと言わんばかりに再び唾液を吐き始める。腕を舐め、その腕で全身を激しく擦り付けていた。全身の粘菌を一度に解放させる、ブラキディオスの大技。凍土で何度も見せられたそれを、こいつもやろうとしているようだ。「いいか、イルル。あいつはこれから広範囲に爆発を起こす。けど、地下ならその影響を受けない。熱いだろうが、我慢して懐に飛び込んでくれないか」

「にやつ、この中を!？」

「これだけ爆発を受ければ、地面も隙間だらけだ。きつと通れる」

「にゃあ、でも、でもっ」

「時間がない。そのまま、背中への傷に向けて剣を振れ！」

そう言うのはイルルのお尻を軽く叩いて、彼女に喝を入れた。なんて無茶ぶりだ、と彼女は唾然と口を開いている。しかし、いよいよ炸裂寸前に染まったブラキディオスを見ては、その不満を口にする気にもなれないようだ。せつせと、その固い地面に穴を開け始めた。

そんな彼女を見送りつつ、俺はタル爆弾の前に立って斧を構える。爆破の衝撃を受け流すための、イナシの構えを。

「——あつつツ！」

斑点状に立ち昇った、高密度の炎。もはや衝撃波の塊とも呼べるそれが、ブラキディオ

オスの周囲を覆うように広がった。同時に、それは俺の目の前にまで広がってくる。

荒く斧を振り、その風圧で爆風を反らす。流石に全てを反らし切ることなどはできないが、直撃するよりはマシだ。なんて考えながら、振り払った斧を腰のマグネットに咥えさせる。そうして空いた両手で地を蹴って、ブラキディオスから距離をとった。距離をとって、同時にタル爆弾との距離を詰める。

「うにゃああああっ!」

同時に、イルルが跳んだ。焼けた大地を掘り返し、白い閃光が現れる。

それは螺旋を描きながら、一直線にブラキディオスの背へと斬りかかった。俺が最初に斬り付けた、あの背の傷へと。

「ゴオオツ!」

「にゃ、背中いただきにゃ!」

穿つようなその一閃に、奴は思わず悲鳴を上げる。同時に先程俺が斬り刻んだあの右脚が軋み、そのまま流れるように倒れ込んだ。

その隙を、当然イルルが逃すはずもなく。藍色のその背中に、白い毛並みが飛び乗った。

「ナイスだイルル! そのまま抑えつけてくれ!」

「ううう……! な、なるべく早くしてにゃ……!」

懸命な表情でしがみつくイルル。そんなイルルを振り払おうと、ブラキディオスは一心不乱に暴れ始めた。何とかして背中の毛玉をとろう。そんな意思を込めて、頭や両腕を振り回している。

その一方で、俺は剣斧を劍の形に変えて抜刀。そのまま、その鋭い切っ先を最後の一個のタル爆弾へと突き刺した。

「グオオオオオオオオオオオオオツツツ!!」

唐突に響いたその爆音。体を振っても毛玉が取れないなら、叫べばいい。そう言わんが如く、ブラキディオスは天高く咆哮を上げた。

しかし、そんな咆哮も高級耳栓のついたこのミツハ真「頬当て」の前では、ただの隙晒しでしかない。ご丁寧に大きく開けてくれたその口に、俺は剣斧を突き付けた。

詰めた距離。

大気を震わす咆哮。

唸るタル。

ビンのフタを開ける、ギガフロストアンバー。

「召し上がれッ!!」

わさびタル爆弾。

端的に言えば、すりおろしたわさびを大量に詰め、氷結晶やバクレツアロワナで加工

した大タル爆弾。それがこのわさびタル爆弾だ。

わさびといえ、ユクモ地方で嗜まれる薬味である。唐辛子とはまた違う、鼻をツンと引き絞るような。そんな辛味が特徴的な、緑色の植物だ。当然鼻の粘膜を強く刺激されれば、涙腺も激しく刺激される訳で。そんなこんなでユクモ料理初心者も文字通り泣かせてしまう、通な食材なのである。

そのわさびを。この大きなタルに詰めて。さらに新鮮さを重視し、属性解放突きの刺突でさらにすり合わせて。それをそのまま、ブラキディオスの口の中で解放する。

これが、このわさびタル爆弾の真骨頂なのだ。

「グオ……ガアアアアアアツツ?!?!」

凍土でも聞いたことのない、凄まじいまでの悲鳴。それがブラキディオスから飛び上った。かと思えば、まるで縮むかのようにその声を萎びさせていく。

耐えている。俺やイルルを振り払ったのにも関わらず、奴は必死に何かに耐えている。かと思えば、それは静かに顔を出した。奴の武骨な甲殻を伝って、静かに地面に舞い降りる。

たほん、と。小さな小さな、水滴が落ちるその音を。ブラキディオスから出たそれは優しく奏でたのだった。

「——出た。竜の大粒ナミダだ!」

「や、やつと……いー やつとだにやー！」

危うく火山の熱気で蒸発しかねないそれ。それを慌てて、懐から取り出したビンに収める。透明なビンに零れ落ちた、やや緑がかったようなその液体。竜の大粒ナミダ、無事ゲットである。

ようやく手に入れた、このクエストのメインターゲット。どつと安心感が込み上げてきて、肺から空気が一気に漏れた。頬を覆うミツハ真の頬当てを取り外し、深呼吸をしたい。そう思うほどの安心感だ。隔てるものが何もない呼吸とは、こんなに心地の良いものだっただろうか。

なんて深い溜息をつくとき、ブラキディオスは再び声を上げた。

「ガアアアッー！」

もう辛抱堪らない。

そう言わんばかりにブラキディオスは泣き叫び、そのまま火山の奥地へと姿を消した。今まで感じたこともない痛みを、何とか振り払おうとするかのように。何度も頭を地面に叩き付けては、そのままエリア9へと潜っていく。

「にやー……あのブラキディオスがあんなに乱れるなんて。どんな味だったのにや

……」

「辛さは痛みでもあるからなあ。結構なダメージになったんじゃないかねえの？」

飛び散った涎に粘菌、そして暴発したわさび。赤黒いはずの大地を緑に染めたその景色。エリアから消えたブラキディオスの、哀愁漂う痕跡が広がっていた。

そんな中、一際目立つ塊。とろとろと、粘り気をもったそれが足元に落ちていた。

「……………こうやって見ると、粘菌ってあれみたいだな。わさび混ぜたとろろみたいな。……………喰えるかな？」

「にやつ……………何言ってるんだにゃ！　こんなの食べたらお腹破裂しちゃうからやめ——  
——ふみやつ!？」

なんて俺を諷めようとしたイルル。慌てて駆け寄ってくる彼女が、突然ひっくり返った。足を滑らせ、お尻や足の肉球が露わになる。

何故足を滑らせたか。答えは簡単だ。わさびタル爆弾の残りが、大地にこびりついていたので。それをそのまま、イルルは思いきり踏み抜いて。流れるように、足を滑らせて。

同時に、そのわさびを蹴り上げた。体が倒れる反動で、ものの見事にそのわさびを蹴り撃つたのだ。それがご丁寧に、丁度俺の口へと飛び込んでくる。

景色が変わった。

ユクモ農園で丹精込めて育てられた、そのわさび。そんな田園風景が浮かんできたよ  
うな、そんな気がした。



まず何と言っても、鼻を突き抜けるようなその風味。辛いとか酸っぱいとか、そんな刺激の範疇には収まらない。思いつきり鼻を突き上げられたかのような、そんな錯覚さえしてしまう。つーんと、鼻の奥が引き絞られる。痛い。本当にこれ、痛い。

涙。そう、涙だ。つーんとくるその感覚に耐えていれば、目頭がどんどん熱くなってくる。何とかしてその痛みから逃れようと、目が涙を絞り出した。いや、涙どころではない。鼻水まで勢いよく溢れ出してくる。顔の大洪水とでも言うべきその感覚に、俺は五感を全て奪われた。

ブラキディオオスもこんな感覚を味わっていたのだろうか。逃げたくなる気持ちもよく分かるような気がする。

風味は——風味自体は、爽やかだ。わさびの後腐れのない、辛くも優しい味わい。この鼻を貫くような強烈な香りさえもう少しマイルドならば、万人受けする味になるだろうにと。蕩ける視界の中でそう感じた。次第にそれは、涙や鼻水で何も見えなくなっていく。

「涙が……止まんねえ！」

「ふみゆ、旦那さん!! 旦那さーんっっ!!」

〜本日のレシピ〜

## 『わさびタル爆弾』

- ・ 大タル …… 1個
- ・ ユクモ産わさび …… 5kg
- ・ 氷結晶 …… 150g
- ・ バクレツアロワナ(粉末) …… 40g

☆お好みで属性解放突きを行うと、より風味良くいただけます。

## 尾ひれがつく

拝啓 ヒリエツタ様

そちらの様子はどうだい？ オオナズチに続いて、今度は塔にリオレイア希少種が出現したって噂を聞いたけど、大丈夫？ ヒリエツタなら大丈夫だよ！

こっちは古代林で元気にやってるよ。ベルナ村っていう高原にある村から調査に行ってるんだけどね、そのチーズがとっても美味しいのよ。多分、シグとかすつごく気に入ると思う。……っていうか、もうすでに取り寄せて使ってるような気もするけど。

古代林はさ、孤島みたいな離れ小島なんだ。だから独自の生態系があつて、今まで見たことのないような植物やモンスターがいる。オレが加わった龍歴院って組織も、それを調べてるのさ。最近、その飛空船が古代林上空で行方不明になるって事件が時々起こつてさ。ちよつと奇妙だよね……。

ほんと言うとき、オレ追い付きたいって思ったんだ。気付いたら上位ハンターなのオレだけだし。シグもトレッドも、君までもG級に上がっちゃつてさ。流石にオレも、このままじゃ嫌だなあつて。みんなに追い付きたいよ。だから、古代林で手柄を立てて一

気にG級まで認めてもらうぜ！ おっと、心配はしなくていいよ！ オレはこの通り元気にやつてるからさ！ ……まあ、君は言っても心配なんてしなさそうだけど。

とりあえず、明日からまた調査再開だ。いよいよ古代林の奥に足を踏み入れるんだ。ちよつとわくわくしてる。また一区切りついたら手紙送るよ。それじゃあ、元気でね。

敬具 イズモ



空を走る、幾千もの星。まるで黒い布を喰い破る虫のように、藍色に覆われた世界にいくつもの光を灯していた。

その中で、一際目立つ星がある。一言で言えば、流星だ。赤い帯を引きながら、この闇を引き裂かんと数多の光を漏らしている。その赤い紅い軌跡が何とも美しかった。

「おー、良い眺めだなあ」

そんな遺跡平原の星空を見上げながら、俺は感嘆の声を漏らす。

その横で静かに溜息をつく少女。手に持った手紙を読み終えて、少し困ったような彼女——ヒリエツタは、そんな声を上げた。握られた手紙が、くしゃりと音を立てる。

「はあ……。心配しないなんて、そんな訳ないじゃない」

「どうしたんだよ。何読んでんだ？」

倒れ伏した狂竜化ライゼクスの鱗を剥ぎながら、俺はそう問いかけた。しかし、彼女はどこか上の空。先程討伐した電竜のことなどまるで気に留めず、手紙を丁寧に折り畳む。

「手紙。……イズモからの」

「は？ イズモ？ あいつ手紙とか送るのかよ……もらったことないぞ」

「そうなの？ 結構な頻度で送ってくれるから、そういう人だと思っただけけれど」

きよとん、と首を傾げたヒリエツタ。そんな彼女に聞いてみれば、どうやらイズモは定期的に彼女に手紙を送っているようだ。俺には一枚も送ってこない癖に。

狂竜化。

黒蝕竜ゴア・マガラによって拡散された狂竜ウイルス。それに感染してしまったモンスターは、凶暴性を刺激され非常に獰猛になる。同時に細胞を酷使させ、その肉質を著しく劣化させてしまうのだ。この遺跡平原に舞い降りたライゼクスも、その感染個体だった。急なクエストを当てられたため、ろくに狂竜石の準備も出来ず、こうして実食出来ないでいる。何とも不甲斐無いものだ。

そんな俺とは違う意味で、何ともやるせなさそうに眉を曲げるヒリエツタ。その表情は、どこか心配そうな色を差していた。

「……なんか、なんだかんだイズモと仲良くなったみたいだな」

「意外に、ね。最初はなんだこいつって思ってたけど」

「でも息びったりだったよな。漫才みたいだったし」

「……懐かしいなあ。あの人、あの時はまだドンドルマにも来てたのに」

憂うようなヒリエッタの声。それを聞いては、俺も言葉を紡いだ。

イズモは今、気軽にドンドルマに來れない場所にいる。一体何が目的かは知らないが、ユクモ村のギルドから離れ龍歴院へと籍を移したそうだ。何やら、どこぞのフィードを調査するとか言っていたが――

「近くにいると騒がしいけどさ、いざいなくなると物足りないもんだな」

「うん……」

「まあ、世の中そんなもんばつかだ。人も、飯の味も、さつきヒリエッタが作ったあのタルだつて」

「最後のは、こじつけじゃない?」

若干冷えた目でヒリエッタは俺を見る。そんな彼女の横には、沈黙する小タルが一つ。

「レンキン癒シタル……ねえ。生命の粉塵を蒸気に乗せて、継続的に散布する……。使えるのこれ?」

「持つてる側としては、ひたすらタルが熱いわよ。蒸気がどんどん出てくるし、あつためるのもしんどいし」

レンキンタル。

それは最近ハンターの道具として開発された、新たな秘密兵器である。その特徴は、何と言つても振ること。振ることで摩擦熱を起こし、内部温度を向上させる。そしてその内部温度によつてより高度な物を錬成させることができるという、新しい狩りのお供なのだ。

例えば、振り始めの微熱程度ならば、砥石を嚙猛化エキスに浸すことで、特殊な砥石を錬成させることができる。

充分に温度を上げたならば、爆薬や飛甲虫の羽、バクレツアロワナなどを加え爆発物を錬成させることができる。

内部温度が最高値まで上がれば、タルから蒸気が吹き上がる。そこに生命の粉塵を加えることで、衝撃に乗せ粉塵を散布するレンキン癒しタルの完成——という訳だ。

「まあ、癒しタルについては目を瞑ろう。俺が許せないのは……これだ」

「あ、私が作ったレンキンフード……。つて、半分残してるの？ 全部食べなさいよ」「いやいやいや。何だよこの苦いだけの固形物。誰が食うかこんなもん」

固く、苦く、ただひたすら嘔み応えだけがある物体。それがヒリエッタの作ったレン

キンフードであった。

レンキンフードとは、レンキンタルが微熱程度の時に作るスタミナ増強剤だ。大した手間もいらず簡単に作れ、かつ大きさも人差し指程度であるため携帯食料より食べやすいと定評がある。当然、味という大きな犠牲が伴っているが。

「口の中パッサパサになるわ、喉めつちや乾くわ。何なんだよこれ……」

「しよ、しようがないでしょ。……料理苦手なんでもん」

「お前が料理してるとこ、見たことないなあそういえば。この前の焼き肉パーティーくらいか」

「焼き肉……というかバーベキューでしょあれ」

「あの時も焦がしてたよな」

「うっ……うるさいわね。いいでしょ別に、料理が苦手だつて」

「……まあ、適材適所つて言葉もあるしな。——ということ、俺が真のレンキンフードというものを見せてやろう」

なんて言いながらヒリエッタのレンキンタルに手をかけた。すると、不意に妙な視線を感じる。さながらジンオウガのような、鋭く冷たい視線。そんな少し非難染みた視線が、彼女から送られてきていた。

おずおずと、料理が苦手だと主張したはずの彼女。そんな姿とは打って変わったその



態度。

「……相変わらず、強引で自分勝手よね。あの彼女さんにもいつもそんな感じなの？」

「……………は？」

「この前、雪兎亭に入ってたの……見たわよ」

してやったり。彼女の顔にそう書いてある。

いや、もちろんそんなはずないのだが——今の俺にはそう見えた。思わず硬直した俺とは正反対の、随分と楽しそうな顔である。

「あの子も大変ね。こんなめんどくさい奴の相手しなきゃならないなんて」

「……………お前……………何で」

「あれ？ 私に気付いてなかったの？ アンタでも見える、大通りにいたんだけどなあ。それだけ彼女さんに夢中だったのね、うんうん」

「ちよつと待つて。まずそのへららず口を閉じようか閉じてくださいお願いしますすみませんでした」

そこまで言うてようやく口を閉じてくれたヒリエツタ。それでもその攻勢に出た態度は変わらないで、次に俺は何を言うかと期待しているようだった。形の良い唇を上げて、俺の言葉を待つている。

一方で俺は深呼吸。呼吸を整えて、正しい言葉を頭の中で並べていく。

「……あー、えつと、えつとな。別にあいつは彼女じゃないんだ。そこは弁明したい」  
「見え透いた嘘ついちゃつて。セイラーシリーズを着たハンターちゃんでしょ？ 紹介しなさいよ」

「……セイラーシリーズじゃ、ないんだよなあ」

「え？」

「その原型そのものなんだよなあ、あれ」

「……………えっ？」



それは、遺跡平原に赴く数日前の出来事だった。

ドンドルマの東区。そこで街の外の街道へと繋がる門の前で、ガークアの率いる貨車が停まっていた。その周りには、先日俺を振り回したギルドガールたちの姿がある。

俺に極小ヤド真珠の入手を依頼した少女、パティ。そして、件の面倒事に引き込んだ張本人、キャシー。何故かわたがしをしているが、確かに彼女の姿はそこにあった。「シグさん、ごめんなさい。結局実物比べになっちゃいました……」

「……………ということはアレか？ もう竜の大粒ナミダはいらないってか？」

「そ、そうなりますねえ……あははは」

「……はあ」

困ったように笑う彼女と、やや意気消沈するもう一人の姿。赤いエプロンに茶色の髪を下ろした、キャシーよりも年上と見える少女だった。格好からしてギルドガールであることは間違いないだろう。

そんな彼女が溜息をつく度に、パティは申し訳なさそうに目を伏せる。その雰囲気から察するところ、少なくともこの少女はタコ比べに敗北したようだった。

「結局、勝負はどうなったんだ？」

「はっ、はい！ え、えつとえつと……」

マイペースにわたがしを食べ始めるキャシーの傍ら、困惑するパティへと俺は声を掛けた。そんな俺の声に、彼女は驚いては跳び上がる。

相変わらずだとしても言うべきだろうか。まごつきながら頭を回転させる彼女の姿を、俺は何ともなしに眺めていた。すると、ようやく言葉がまとまったらしい彼女が喋り出す。少しずつ、俺に委縮し続けながらも。

「キャシーさんが竜の大粒ナミダを選んだり、ベツキーさんは我らの団ハンターさんに頼んでどうやら金火竜の鱗を用意したりしたみたいなんですけど。け、結局実物を比べることにな、なっつてしまいました……」

「ええ……金火竜つて。リオレイア希少種のことだろ？ そんな珍モンスターの情報よく手に入れたもんだなあ……。しかも我らの団ハンターつて……」

意気消沈する少女、ベッキーの想像を絶する行動に、俺は思わず溜息をついてしまった。

リオレイア希少種といえ、リオレイア亜種のさらに上をいく希少性をもったモンスターだ。まるで夜空に輝く月のように、煌めく金の鱗を身に纏った伝説級の飛竜。その希少性は、まさに古龍にも迫るほどである。

そんなモンスターをわざわざタコ比べで利用するのは。それを依頼する彼女も彼女だが、そんな依頼を受け取る我らの団ハンターも大概である。聞けばかつてドンドルマが鋼龍の被害に遭った際も、また先日霞龍が現れた時もそのハンターは活躍したと聞く。相当凄腕なのは明確だろう。金火竜といえど、彼がそのクエストを請け負ったとなればまた見方が変わってくるが――

それにしても、そんな代理狩猟も今や意味を為さないと。俺も、そのハンターも。つくづく無駄な時間を過ごしたものだ。

「お嬢さん方。そろそろこのガークアタクシーは出発するニヤ。ユクモ村まで快適な陸の旅を提供するニヤよ」

「あつ……シガレットさん、色々お世話になりました。ご迷惑をおかけして、本当にごめ

んなさい」

「いや、いいよ。道中、気をつけてな」

ベツキーがブツブツ言いながら貨車に乗り込み、それに続いてパティが足を掛ける。礼儀正しい彼女らしく、丁寧に俺にお辞儀をしながらも。そんな彼女に手を振りつつ、次はキャシーだと後ろの方に目をやれば。

意外にも、キャシーはイルルと話をしていた。俺の後についてきたイルルと、丁寧にしゃがんではネコの視線に合わせている。一体何の話をしているんだろう。

「あつ、もう行っちゃやう。それじゃ、私はもう行くね。バイバイ、イルルちゃん」  
「にや……帰り道、気をつけてくださいにや……」

しかし馬車の様子を見ては立ち上がり、優しくイルルに手を振り掛ける。イルルもイルルで、困惑気だったものの小さく肉球を振り返した。

そのまま、俺の真横を抜けるキャシー。面と向かって挨拶をすることはない。ただ、少しだけ。すれ違いざまに、小さく口を開いた。

「……バイバイ、シグさん」

「……おう」

そつとわたがしを舐めては、悪戯っぽく笑う。

相変わらずの彼女の様子に、俺は愛想笑いを返した。

ガーグアの強靱な足腰を利用したガーグアタクシー。その速度は随分と早いもので、彼女たちの姿はあつという間に見えなくなってしまうた。

いつの間にか米粒のように小さくなってしまったその背中を見ながら、俺は小さく口を開く。俺の横で小さく耳を動かしているイルルに向けて、そつと。

「……行つちまつたな」

「にや」

「……キャシーと、何話してたんだ？」

「なんか、よろしくとか何とか言ってたけど……よく分かんなかったにや」



「……つまり、あの子はタンジアギルドの受付嬢で、シガレットの昔馴染？」

「そうそう」

眉を擡めてはそう口にするヒリエッタ。そんな彼女に向けて、俺は首を縦に振って肯定する。

別に嘘は言っていない。昔馴染であることには違いないし、現時点でキャシーはもう俺の恋人でも何でもない。間違ったことは何一つ言っていないのだ。

「なあんだ。期待して損しちゃった。じゃああの子は、そのままタンジアに帰っちゃったってことね」

「ああ。ユクモ村経由で、な。また受付嬢再開だそうだ」

「……忙しいのね。全くもう、紛らわしいなあ」

折角のネタが空回りしてしまった。そう言わんばかりに彼女は掌を空に向けて、呆れたように首を振った。

呆れたいのはむしろこつちだ。余計な好奇心でこちらの事情に首を突っ込まれ、さらにはいらぬ弁明しなければならぬ。余計な気苦労をさせられたのは、俺の方ではなからうか。

なんて首を捻っていたら、彼女が少し小さく息を吐いた。そうして、どこかスッキリとしたような顔を向けてくる。何だか意外だった、とでも言いたげな顔だった。

「……それにしても、シガレットがタンジア出身だったとはね。知らなかったわ」

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「んー、そういえばトレッドさんがそんなこと言ってた……：……：……ような気もするけど、あんまり覚えてないや。……でも、外から来たってのは親近感あるかも」

「……ん？ どういう意味だ？」

「言葉通りの意味よ。私もそうだってこと」

意外なヒリエッタの言葉に、俺は問いを重ねかけた。すると彼女は困ったように微笑み、その整った顎を小さく頷かせる。

「私だって、元々はヴェルドのいいところのお嬢様だったのよ？　まあ、今はこんなだけど」

「ぶつ。お嬢様あ？　お前があ？」

「むつ……失礼ね。こう見えても、昔はもつと御淑やかだったんだから」

不満げに頬を膨らませるヒリエッタの姿に、俺は笑いを抑えることができなかった。このお転婆な唐揚げ女がお嬢様だなんて、笑いをこらえる方が無理難題だろう。

——それにしても、ヴェルドか。城塞都市にして最も経済格差が大きな都市。その街での「いいところ」であるならば、それはかなりの上位層だったのだろう。ならば、どうして彼女は今ドンドルマでハンターなんてしているのだろうか？

「御淑やか、ねえ……」

事の顛末は予想できる。

ヴェルドの貴族の娘ならば、ハンターなんてしなくても暮らしていけるはずである。とはいえ彼女の表情から察するに、それらの事情はあまり詮索して欲しくないのだろう。

きつと、一家の没落が免れなかった。そして、財産を失った貴族の娘の行く先なんて



——想像するのも容易いものだ。

「……それにしても、ヴェルド……ヴェルドか。うーん、何だったかなあ？」

「……？ どうしたのよ？」

「いやさ。この前ヴェルドって、どっかで聞いたんだけどなあ。どこでだったかなあ……」

「ふーん？ まあ、結構有名な都市だから、そんなに珍しいことでもないんじゃない？」  
「……それもそうか。それより、大事なのはこっちだもんな」

彼女の言葉に乗っては話を切り上げようと、再びレンキンタルを手を持った。

今ではすっかり軽くなったレンキンタル。癒したルのために蓄えられた熱も、今では見る影もない。ただ静かに沈黙を保っていた。

「相変わらずブレないのね……。話戻るけど、アンタがいつもそうならイルルちゃんは大変だろうなあ」

「なんだよ、今度はイルルかよ」

「毎日こんな旦那の相手して……心中お察しするわ」

「おい待て。人聞きの悪い言い方すんなよ」

「それはそうと、イルルちゃんは今日はどうしたの？ いつも一緒にいるのに」

「それはそうとって……。今日はたまたま、アイツ買い物に行つててなあ。それで一人

でだらだらしてたら召集されて、今に至る……って感じ？ 家にメモ置いといたから、状況は把握してくれてると思うよ」

あの砕竜の重殻を用いた鍋。それを購入させてもらったあの雑貨屋。

どうやらイルルはあの雑貨屋を相当気に入ったようで、給料を使つては何か買つてきたり、はたまた店主と他愛のない雑談をしたりとよく足を運んでいるようだった。

拠点を移して、新しい環境で過ごすことを強いてしまったが——彼女にとつての楽しみともなる場所が、どうやら見つかったようだ。雇い主としては、喜ぶべきことだろう。

——ところが、ヒリエツタは少し顔を曇らせる。何か思案しているような、そんな表情だった。

「……どうした？」

「……あのさ。最近、時々。ほんとに時々聞く噂なんだけど、知ってる？」

「あ？」

「アイルーが、行方不明になる噂」

俺がタルにベルナバターやベルナチーズを投入する傍ら、ヒリエツタが言葉を綴つた。砂糖や塩で味を調とろえながら、そんな彼女の言葉に耳を傾ける。

どうやら、最近ドンドルマではアイルーが行方不明になるという噂が流れているらし

い。特に毛並みの良い子がいなくなる、と。若干心配そうな表情で彼女は語った。

「イルルちゃんって真っ白で、ふわふわで……とつても綺麗な子じゃない？ だからちよつと心配で、さ」

「あいつが器量いいってのは大いに賛同するが、まあ……大丈夫じゃないの？」

「そんな……楽観的な」

「イルルはしつかり者だから、黙っていなくなるなんてしないだろ。それにイルルってのは元々気まぐれな奴が多いから、思い立ったら誰にも何も言わずどっか行くつての結構あるし」

「……それはネコの集落で暮らしてた経験？」

薄力粉とチココーンスターチをタルに混ぜ、小さじ一杯ほどのベルナミルクを入れては混ぜる。少し粘度のあるそれを泡だて器で掻き回しながら、ヒリエツタの問いかけに頷いた。

「その他に、メラルーが石灰とかで体を白く染めてイルルに化けるつてこともある。そうやってイルルと思われた奴がメラルーに戻ったとか、住処に帰ったとか。案外そういうのが噂の元なんじゃねえの？」

「それって、ルーシャのとこのネコみたいなの？」

「そうそう。何だ、知ってんのか。なら話が早いや」

「この前ルーシヤから聞いたのよ。でも……そつか。そう言われるとそうかもって思っ  
ちやうわね」

どこか納得したようにヒリエツタはそう口にする。少し安心感を抱いたかのような、  
そんな表情だった。

案外、噂など真相は大したことがなかったりするものだ。一人歩きなんてよく言われ  
るが、噂が噂を重ねる内にどんどん尾ひれがついてしまう。そしてそれは、知らぬ間に  
原型を大きく超えたものになっている。ヒリエツタの言う噂も、きつとそういうものだろ  
う。深く考える必要はない。

——今考える必要があるのは、このレンキンフードだけなのだから。

レンキンタルの中で、乳製品特有の芳ばしい匂いが溢れ出す。薄黄色に混ざったそれ  
は、とろりとした質感で満ちている。これは言わば焼き上げる前のタネなのだが、これ  
でも随分と美味しそうだっただけだ。

「さて、後は型にはめて焼き上げるだけだな……」

「……本格的過ぎない？ よくやるわほんと」

「不味い飯で腹を満たすより、旨い飯で満たしたいだろ？」

「アンタはそれにこだわり過ぎなのよ……」

銀色の型をはめ、レンキンフードのタネを一平方センチメートル大に区切る。型の奥

底まではおおよそ六センチほど。大きさは、既存のレンキンフードと変わらない。まあ、使っている型が同じなのでそれは当たり前のことなのだ。

そうして区切り終えたそれを、タルのフタを閉めることで外界から隔離させる。後は高温で一気に焼き上げること。もちろんそれには、あれが欠かせない。

「さ、あとはヒリエッタにお願いするよ」

「……え？ 私？」

「さつきもたくさんタルを振ってただろ？ あんな感じに、これを力一杯振ってくれ。癒しタルを錬成するくらいの勢いで」

「……ああ、もう。しょうがないわね……！」

日頃から大剣を振り回しているからか、彼女の腕力は相当なものだ。何より、身体を使い方が上手い。どう力を込めれば剣の威力が増し、どう力を抜けば反動や衝撃を抑えられるのかを理解している。考えてやっているのか、はたまた無意識にやっているのか。それは俺には分からない。

しかし目の前で必死にタルを振り回す彼女の姿を見れば、やはりその技術に感嘆してしまう。

掌、腕、肩、腰、足。それらの動きを、無駄なくタルを振れるよう総動員させているのだ。この体の使い方は一朝一夕で身につくものではない。天性のもの、そしてこれま

での経験があつて為せる技なのだろう。流星は上位装備で覇竜と渡り合つた女である。「……………ふう、こんなものかしら」

蒸気を発し、熱で若干膨張したレンキンタル。その温度と激しい運動によつて漏れ出した汗を、彼女は赤い手甲で、そこから伸びたグローブで拭う。

いつかのジンオウウシリーズはもうなりを潜め、彼女の姿は真紅の鎧へと変わつていった。

——レウスXシリーズ。空の王、リオレウスの鎧だ。

「うん、もうよさそうだ」

赤いスカートのようなその鎧を風に靡かせながら、ヒリエツタは疲れたようにどつと腰を下ろした。そんな彼女からタルを受け取りつつ、そのフタを開ける。

途端に、熱が加わつたことでより濃厚になつた香りが溢れてきた。タネのものとは比べ物にならない、深く甘いチーズの香り。すつきり鼻を抜けるのではなく、むしろしつとりと鼻孔に纏わりつくような。そんな強い香りだった。

中を見れば、見た目は上々。あの薄黄色だったタネは橙色に染まり、あの半固体状とは似ても似つかぬ固形へと変わつている。

「さあ。早速食べようぜー」

「……………じゃあ。いただきます」

そのタルからレンキンフードを取り出して。俺とヒリエッタは、一つずつそれを口にした。

同時に広がる、チーズの濃厚な香り。カリツと歯が音を立てれば、充分な熱を宿したそれが簡単に崩れていく。それと同時に、その中に秘められた味を一挙に解放したのだった。

あのタネとは全く似つかぬその食感。超高温で凝縮されたそれは、固い固い食感を形成している。それ自体はヒリエッタの錬成したレンキンフードとあまり変わらぬ。問題は、その味である。何といっても、噛めば噛むほどその中に詰まった味が出てくるのだ。

チーズの濃厚な、舌にとろけ落ちるような強い旨み。

バター特有の、塩気と甘みを混ぜ合わせたかのような、されど後腐れのない優しい味わい。

それがベルナミルクによってひとまとめになって、一種のコクとも言えるような風味を残していく。

そんな、乳製品のコーポレーション。元々同じものだったそれらを、再び邂逅させたレンキンタル。その焼き具合は、同じ乳製品だったからこそその仕上がりだろう。この優しくも強い味わいは、兄弟だからこそ為せる味なのだ。

「……結構、美味いんじゃない？ これ」

「……うん。確かに、このレンキンフード、凄く美味しい……」

黙々と食べていたヒリエツタも、悔しそうな顔でそう言った。

自分が作ったレンキンフードでも思い出しているのか。美味しいという割にその表情は、どこか納得がいかなさそうだった。

「俺が思うに、やっぱ超高温で焼き上げるのがミソだ。癒しタルが錬成できるくらい、タルを振る。これが美味しいレンキンフードを作る技。これで、美味しくスタミナを増強させれるな！」

「……スタミナ増強剤にこんなタル振るくらいなら、その分大剣振った方がマシだわ」

く本日のレシピく

『ベルナ風レンキンフード』

・ベルナバター	……50g
・ベルナチーズ	……50g
・薄力粉	……150g
・砂糖	……適量



- ・ チココーンスターチ …… 20 g
- ・ ベルナミルク …… 小さじ1杯
- ・ 塩 …… 少量

## 星が願いに

「よっしやよっしや。やっぱ未知の樹海って色々あるなあ!」

「旦那さん……いつまで探索続けるつもりかによ。そろそろ帰ろうによあ。もう夜になっちゃったによ」

暗闇に包まれた未知の樹海。空には藍色の膜が浮かび、満点の星空が映し出されている。奇しくも正円の満月に照らされた今宵は、未知の樹海も温かな闇を帯びていた。

そんな星空の中で、一際目立つ赤い星。まるで空を泳ぐようなように輝くそれは、本日も眩しい色を放っている。

「いくらクエストじゃないからって、制限時間もないからって。まさか夜になるまでここにいるなんて。流石のボクもびっくりだによ」

「俺もびっくりしたぞ。水源で食材集めてたらイヤクックが乱入したからなあ。それも二頭」

そんな俺の言葉に、イルルは困ったように髭を揺らす。

俺の背後で沈黙を貫く塊。今や解体され、原形を留めなくなったイヤクック。その

一方で原型をほとんど留めたまま、静かに眠るもう一頭のイヤンクック。こちらは死してなお、その体を黒く染めているが。

「普通のイヤンクックならともかく、狂竜化まで来たのはびつくりだにや」

「抗竜石また忘れちまったのが悔やまれるなあ。素材は剥ぎ取ったけど……まあ、無理だろうな。でも一頭は食えるから、そっちを食おう」

「……それで、その鍋なのにあ。それは一体何にあ？」

「今回は、パエリアに挑戦してみようと思う」

「パエ……？」

聞き慣れない言葉だったのだろうか。イルルはその意味を察することができず、きよとんと首を傾げた。

パエリア。

それは、豊満な海産物資源を欲しいままにしてきたタンジアの港で栄えた、最も有名な米料理の一つだ。その特徴は何ととっても、女帝エビやモガモ貝を贅沢にそのまま使ひ、それを出汁が決め手のウマイ米と共に炒める。海産物を贅沢に使った米料理なのである。

とはいえ、もちろんそれらを一緒に炒めれば良いという訳ではない。サフランと呼ばれる黄金色の調味料を加え、酒や塩と黄金比率で味を付け。さらには米の一つ一つに芯

が残らぬよう、丁寧に炊き出ししなければならない。俺自身も食べたことはあれど作つたことのない、素人では中々手が出せない代物だ。

「タンジアのパエリアは素材の都合で作れないから、今回はオリジナル。未知の樹海風パエリアだ」

「にや……? それでイヤクックを使うのにや?」

「おう。それとこの河でとれたエビとか貝もな。さあ、素材を並べていくぞ」

未知の樹海の一角に、風呂敷を広げていく。滝によつてもたらされる水源が静かな音色を奏でる中、その風呂敷の上に今夜の具材たちが舞い降りた。

一つ、メインともなる食材。ウマイ米。

一つ、持参したジャンゴネギ。

一つ、同じく持参した四つ足ニンジン。

一つ、その辺から採取したキクラゲらしき形をしたキノコ。

一つ、この樹海で手に入れたエビや貝などの魚介類。

——そして、先程狩猟したイヤクックの胸肉。

「さて、もちろんイルルにも手伝ってもらうぞ」

「……このまま帰るって選択肢は……」

「ないなあ」

「やつぱりにゃ……」

少し疲れを見せるかのように、イルルは肉球で目を擦る。その眼にはうつすらと涙が浮かんでおり、やはり疲労の色を差していた。

疲れているのは、俺も同様だ。しかし、どうにもこうにも腹の虫が鳴ってたまらなかった。折角美味しそうな怪鳥を手に入れたのだから、それを使って料理をしたいのだ。

「とりあえず焚火を作って……ネギやキクラゲ、肉を食べやすいように切り分けてくれ」  
「にゃあー。旦那さんは、どうするのにゃ？」

「ここにサフランはないからな。折角だから特製の味付けにしちやうぜ」  
剥ぎ取った狂竜化怪鳥の素材とは別に、俺のポーチを重くしている原因。そのポーチを埋める数々の調味料を並べ立て、ボウルへとそれを注ぎ始める。

要は味付けだ。未知の樹海風パエリアにするために必要なもの。それをボウルへとまとめていった。

この水源から溢れる麗水を沸騰させたもの。

持参した、ドンドルマの料理酒。

イヤンクツクの身を使った出汁に、採取した樹海貝の身を使った簡易オイスターソース。

そこにみりん、醤油、胡椒、そして豆板醤といった調味料を混ぜていき、一心不乱に掻き混ぜる。麗水を主体としているため、それはどこか汁っぽい。しかしその濃厚な茶色は、月明かりを優しく反射するほどの輝きがあった。随分濃い色になってしまったが、香りは不思議と穏やかだ。

「旦那さん、火ついたにや。あと、お肉とかも切れたにやー」

「おお。相変わらず器量がいいな。じゃ、鍋に油敷いて今切った奴と米を炒めてくれるか？」

「分かったにやん」

諦めたかのようにせつせと鍋に具材を投入し始めるイルルの傍ら、俺は海老の殻を剥いては貝の殻をこじ開けた。

じゆう、じゆうと。途端に湯気が舞い上がり、そこから随分と良い香りが溢れ出す。肉の脂が弾ける音と、それによって震えるお米の音。ネギの鼻を突くような香りと、肉の脂の深い香り。それらが混ざり合う、何とも贅沢な香りだった。

「イヤンクック、良い香りだなあ。ああ楽しみだ」

「旦那さん結構怪鳥の肉は食べてそうな気がするんだけどにや」

「あー。そういえば、ユクモ村目指す時の船で出されたな。まあ、あれはセルレギオスに邪魔されちゃったけど」

「にゃあ……そういうえば、そんなこともあったにゃあ」

どこか遠い目でそう呟いて、イルルは鍋を掻き回し続ける。その横で、俺は四つ足ニンジンへと手を掛けた。

先が四つに分かれたそれを切り崩し、切り込みを入れては上から包丁を下ろしていく。おおよそ一センチという幅の狭い感覚で切り刻んでいけば、ニンジンは小さな立方体の集まりとなっていく。そう、俗に言うみじん切りである。

「……良い感じに焼けてきたにゃ」

「お、いいじゃん。そろそろ煮詰めてもよさそうだ」

見ればジャンゴ―ネギは香ばしい飴色へと姿を変え、キクラゲは油を吸って煌めくような黒色へと変貌していた。溢れる肉の脂は、いよいよこの満点の星空のようで、焼き加減も充分なものだと思われる。

そんなイルルが炒めていた鍋に、俺はこの特別調合した調味料を垂れ流す。脂を吸って若干黄色に染まったウマイ米。そこへ、濃い茶色が降り注いでいった。

「さて、あとはエビと貝を並べてつと……」

「にゃ〜。これは、結構凄いにゃ。凄く美味しいものになる予感だにゃ」

調味液で浸っていく米の中に、エビと貝を落としていく。

エビ、貝、エビ、貝とその魚介類を交互に並べていけば、イルルは幸せそうに頬を緩

ませた。元々魚介好きの彼女のことだ。目の前のエビと貝を見ると、やはり嬉しくなってしまうのだろう。もし俺がタンジアギルドとの採め事がなければ、是非ともあの港に連れて行ってやりたいものだが――

つくづく、俺の過去の行いが悔やまれる。

「……旦那さん、どうしたのにや？ そんな苦い顔をして」

「……いや、何でもないよ。それより、後はフタをして煮込もうか」

「にや！ どれくらい煮込めばいいのにや？」

「そうだなあ。ざっと二十分くらいかなあ」

懐から砂時計を四つ取り出して、それを一列に並べた。

一つずつ、順番にひっくり返す。そしてそれを四つ目まで終えた時、この鍋は丁度良い炊き上がりになっている――

砕竜の重殻の熱伝導性を考慮した、完璧な計算だ。これでこのパエリアは、未知の樹海の旨さを凝縮した唯一無二の味となるだろう。

「それじゃ、ちよつと待ってようか。イルルも少し休みな」

「うにやゝ。じゃ、そうさせてもらうにやあ」

どすりと、焚火の前に腰を降ろす。その横でイルルが横になり、俺の右腿に頭を乗せてきた。寝心地はそこまで良くないだろうに、俺の足に頼ずりしてはゴロゴロと喉を鳴



らしている。相変わらず物好きな奴だ。

何てことを考えながら、俺もそつと上半身を後ろに倒した。そうして大地に仰向けに寝転んで、満点の空へと視線を移す。

五分、といえどそれは結構時間が掛かるものだ。それまで星空を眺める、というのも悪くないだろう。

「……今日も綺麗な空だなあ」

白色であつたり、はたまた橙色であつたり。この空に輝く星は、様々な色を見せていた。一つ一つが懸命に自分の存在をアピールしているような、そんな輝きだ。その眩しさが何とも健気で、美しい。

ふと、目に付いた赤い星。一際目立つ流れ星だ。それはまるで、いつぞやに見た流星のように。赤い軌跡を描いては、この藍色の空を静かに切り裂いている。

「……ん？」

——ただ少し、いつもと違った。

空の遠く彼方を走っている。それは間違いないだろう。しかし、少しずつその大きさを覚えていっているような。そんな錯覚を覚えたのだ。

妙だ。氷海や遺跡平原で見た時よりも、少し大きくなっている気がする。その輪郭線を少しずつ太くしていくような、そんな風にも見えた。

「……ええ？ 疲れてんのかな」

手甲を外したグローブで、乱雑に自分の目を擦った。疲れのあまり涙が潤んで、視界をぼやけさせる。そんなことはよくあるのではないだろうか。

何て思いながら涙を拭い、もう一度空を見上げた。

——光の帯は、確実に大きくなっていった。

「え——ちよつと、ちよつと待て……」

そうだ。過去に見たそれとは、見え方が違うのだ。

今まで見てきたものは、地平線の彼方を目指す赤い流星だった。しかしそれは、今はまるで地平線の彼方など目指してはいない。一心に、その身をこちらに向けて大きくしている。

——つまり、こちらに向けて飛んできている？

「……イルルツ！ 危ない！」

「にやつ!? にゃ——」

ハツと意識を改めて、イルルを、そして鍋を庇うように身を伏せた。その突然の俺の行動に、イルルは驚きのあまり体中の毛を膨らませる。

そうして続けざまに飛んだ彼女の声。それは、俺の耳に届くことはなかった。

——  
ツツツ!!!

空気が張り裂けるような、凄まじい轟音。

それはまるで、耳の奥に滑り込んで反響するように。強烈な耳鳴りを発生させては、さながら大銅鑼のように大気を打ち鳴らした。

ビリビリと、空気が震えている。音、という範疇には収まらないその震動。それと同時に激しい衝撃波が巻き起こる。暴風雨にも負けない旋風を引き起こし、それはそのまま未知の樹海へと襲い掛かった。

燃え上がる、赤い炎。いつぞやに感じたような、身体から立ち昇るオーラ。

銀色に光るそれは、月の光を反射して。されどそこに、鮮血のような色を差していて。衝撃によって抉れた大地。そこから噴出するその赤い何かによって、銀色に輝く体に、薄い赤を燈していた。

「……何だ、こいつ」

最初に見えたのは、まるで手のような形をしたそれ。指先を森へと向けては、そこから赤い光を噴出している。逆に手の甲は鋭い槍を思わせるような、そんな形だった。

しかし、それだけが全貌ではない。その突然落ちてきたものの姿が、徐々に見え始める。次第に粉塵が散っていく、同時にその姿を鮮明にしていった——

細く鋭い頭部。そこに輝く、冷たい碧眼。銀色の鱗に包まれたそれは、どこか生物感のない異質な輝きに満ちていた。あの手に見えた何かは、どうやらこの生物にとつての

翼に当たるらしく。その銀色の背中から一對、天を穿つように伸びている。その下には四本の足が生え、細く長い尾が大地を撫でるように音を立てた。

落ちてきたのは、流星——などでは、ない。まるで見たことのないモンスターだったのだ。

「にゃ……にゃ……何、あれ……」

腕の中のイルルは、怯えるように身を震わせていた。休息の時間を、突然の衝撃と共に訳の分からないものに邪魔されたのだ。驚くな、という方が無理があるだろう。

幸い、俺とイルルが踏ん張ったおかげで背後の鍋は無事だった。しかし軽い砂時計は全て吹き飛ばされ、今や見る影もない。安くはない品だったが、流星にあの衝撃には耐えられなかったのか——

「……ッ！」

不意に、奴がこちらを見た。じろりと、その冷徹な碧眼を俺の方に向けてくる。

瞬時に構えた俺の頬。そこに、嫌な汗が垂れる。

まさか、狙いは俺の背後の鍋だろうか。あまりにも美味そうに見えて、ここに降りてきてしまったのか。いや、それは考えにくい。確かにこのパエリアは、モンスターでも唸るような良い香りを出しているが——

グツグツと、焚火の火に煽られてはその身をさらに焦がすパエリア。炒めていた時の

からつとした香りとは違い、オイスターソースと豆板醤を込めた深く濃厚で、刺激的な香りへと変貌している。その湯気も、煮込み特有の厚く重いものへと昇華していた。

そんな香りだが、流石にこのモンスターが飛んできた超上空にまでは届いていなかったと考える。もつと、もつと何か。もつと別の何かが、奴をこの場所にまで飛来させたのだと思うのだが――

不意に、奴が歩き出した。そうして、動かなくなったイヤンクックへと手を掛ける。ふんふんと鼻を鳴らしては、その肉の塊の様子を窺っていた。

「……あいつまさか、イヤンクックを食いに来たのか……？」

「にや……そ、そうなのにや？　そ、それなら良かったにや……」

「良くない！　良くないぞ全然！」

「にやっ!？」

イルルを膝から降ろし、俺は腰のテオIIエンブレムを抜刀した。そうしてそのまま、肉を物色する奴の下へと走り出す。

「漁夫の利なんざ認めるかよ！　あれは俺の肉だ！　渡さねえ！」

「だ、旦那さん!？」

「イルル、お前は鍋の方を見ててくれ！　絶対に守れよ！」

「そ、そんなにやあーっ！」

泣きつ面にランゴスタ。そう言わんが如く、彼女は半泣き状態で剣を構え出した。

そんな彼女を背後に、俺は目の前のモンスターへと肉薄する。イヤンクツクにまたがるその腹に向けて、腰から抜いた勢いのままに。この橙色の刀身を振りかざした。

その衝撃に、奴は勢いよく首をこちらに向ける。そうして少し後ずさり、大きく喉を震わせた。

「キイイイイイツツ!!」

「……ツ！　うるせえよ！」

金切り音とも言える、その咆哮。金属の中で反響させた鳥の声とでも形容すればよいのだろうか。なんて思うほどけたたましい声だった。張り裂けるように、大気が牙を剥いていた。

かと思えば、奴は突然前へ出る。牙も爪も、俺に振りかざすなんてことをせず。しかし奴は、前に出た。

「……がつ……?!」

突然襲い来る、その衝撃。

上から何か落ちてきた。それは理解できた。しかし、それが何かは、吹き飛ばされなければ分からなかった。

——翼？

そう。奴の、その鋭利な銀色の翼。それが、今度はこちらを向いていた。あの赤い光を飛ばす指先が、こちらを向いているのだ。

まさか、アレを叩き付けてきたとでもいうのだろうか。

「……………くっそ！ 調子に乗んなよ……………ッ！」

体に纏わりつく違和感を感じながらも。痛みで軋む頭に、吹き出る血を無視しながらも。

受け身をとって、再び奴へと駆け出した。

——すると、その翼の向きが突然変わる。今度は、あの鋭利は先端を俺の方へと向けてきた。一体、一体何を——

「……………おうッ!？」

瞬間、飛び出したそれ。僅か一秒も満たない速さで伸びたそれは、俺の眼前へと肉薄する。寸でのところで体を捻ったため、何とかそれを躲すことは出来た。

——出来たのだが、隙だらけな避け方をしてしまった。

「旦那さん！」

「ぐっ……………ッ！」

突き出された左翼。俺が躲したその隙を拭うかのように、今度は右翼が飛び出した。それはそのまま、乱雑に着地する俺の腹を穿つ。

ガルルガXメール。その頑丈な造りもあつてか、幸いそのまま肉まで裂かれることはなかった。しかしその刺突の威力は凄まじく、俺の体はそのまま宙に投げ出される。

——そこへ合わされる、あの指先。その掌のような翼が、再び俺の方を向いていた。燃え上がるような赤い色が、俺に狙いを定めるかのように引き絞られる。

そう認識した時には、俺の視界は弾け飛んでいた。



「いっつつつ……」

「だ、旦那さん……大丈夫なのにや?」

「ま、まあ何とか……。イルル、まだ俺に触らない方がいいよ」

「にや?」

反転し、地面を抉り取った視界。激しい衝撃波と身を引き裂くような痛みを受けては、俺の体は大地に穴を開けたようだった。

一方の、奴。身体を起こした頃には、奴の姿はもう見当たらない。イルルが言うには、イヤンクツクの身を四肢で挟み、背中の羽で飛び立ったそうさ。まるでグラビモスのブレスのような、そんな勢いだったと。彼女は遠い目をしながら語っていた。



——それにしても、この感覚。俺の体を蝕むこの感覚は、淆瘴啖の時のとよく似ている。どこかで感じたような、とは思っていたが——

「……これ、龍属性だな」

「にや？」

「龍属性が俺の体に滞留してる……。うえええ頭いつてえ……」

「だ、大丈夫なのにや……？」

「あー、まあ。慣れてるし。ほっときやそのうち大気に溶けるから、まあ大丈夫だろ。それより、あの鍋は無事か？」

「にや、大丈夫にや。あの子、この鍋には全く興味を示さなかつたにや……」

「へえ……それはまあ、不幸中の幸いなあ。……でも、イヤンクツクは持つて行つてしまつたと」

「にやー。狂竜化していた方を、だけどにや……」

そう。イルルの言う通り、なくなつたのは狂竜化したイヤンクツクの方だつた。

この未知の樹海に現れたイヤンクツクは二頭。しかし、正常な個体は俺が解体してしまつた。原型のまま残っていたのは、狂竜化して痛んだ方のイヤンクツクなのだ。

それをわざわざ、あのモンスターが持つて行つてしまつたという。一体何を考えているのだろうか。

「……旦那さん、鍋の方はどうにや?」

「……これ、丁度良い感じ。何だよあいつ、まさか時計の代わりをしてくれただってか?」  
龍属性の浸食を防ぐと言われている、ウチケシの実。それを幾つか摘まみながら、俺は鍋のフタを開けた。

渋く、辛く、不思議な刺激臭のするその味。抵抗感のないその感触は、噛む度にその果肉を頼りなく潰していく。そんな、何とも食べ甲斐のない味だった。

一方、そのウチケシの実の不味さを打ち消すような、魅惑に満ちた香り。フタを開けるや否や、その鍋からやつと解放されたと言わんばかりにそれは溢れ出た。

「にやあああ。良い香りだにやあ!」

「……出汁も全部米が吸ってる……お焦げも良い感じに出来てる。完璧じゃん、あいつ」  
「にやー、運が良かったか悪かったか分かんじにやいにや」

「いや、悪かっただろ。俺痛い目みたし、砂時計どつかいっつたし」

パエリアの香りを存分に嗅いで、幸せそうにイルルは顔を緩ませる。そんな彼女と軽口を交わしつつ、俺は紙皿にパエリアをよそっていった。薄い紙を通して、その魅惑的な温かさを俺の掌に伝えてくる。

その皿に、スプーンを添えて。ピンと尻尾を立てたイルルに、本日一品を手渡した。未知の樹海風パエリア、完成だ。

「色々あったけど、何はともあれつてな。いただきますーす」

「いただきますすにゃー!」

パツと肉球を合わせては、勢いよくパエリアをぱくり。そうしてもぐもぐと顎を動かしては、イルルは目尻をとろんと下げた。逆に口角は大きく上げて、長い髭を頻りに揺らしていた。

そんな可愛らしい相棒を見ながら、俺もパエリアを口に入れる。さて、この出来栄えはどうだろうか。

瞬間舌を照り付ける、豆板醤の深い香り。生憎タンジアの港のような様々な香辛料を手に入れることは出来なかつたため、市販の豆板醤に甘んじてしまったが——しかし、それがインスタントオイスターソースや怪鳥の出汁とよく合っていた。双方、味に深みを出すアクセントである。そこに、豆板醤の辛さと甘さが差し掛かる。それが旨みを引き立てて、結果味の深みを重ねているのだ。

そんな味付けを充分に吸い取ったウマイ米。事前に炒めておいたそれは、パラリパリとした食感に溢れている。しかし、噛んでみればその食感は一転。もっちりと柔らかい、炊き上げた米の食感を贅沢なまでに齒に練り込んできた。噛んで、味を染み出して。再び噛んで、またその味を楽しんで。そのような味覚の応酬に、俺の顎は堪らなく震えてしまう。時折顔を出すお焦げの食感と、控えめな苦味がまた旨い。パリツと音を立て

ては、よく焼けた米の渋い香りを引き出してくれる。それがまた良い刺激になって、より一層俺の食欲を掻き立てた。

投入された具材はそれぞれ、非常に豊かな味わいを醸し出す。パラパラに炒めたジャンゴ―ネギは噛むと甘い汁をじゅわつと溢れさせ、キクラゲはカリカリとした歯応えのある食感を顎に刻んでいく。エビは小振りながらもプリプリとした食感をもたらし、貝は甘い脂を舌に塗りたくっていく。そんな蕩ける食感が、これまた米によく合っていた。

「ふにゃあ、美味しいにゃあ……」

「……うんうん。怪鳥の肉も良い感じだな。歯応えもあって、脂も甘くて。柔らかい鳥皮の部分を貝と合わせても旨いや」

「にゃー。色んな味の組み合わせができるのにゃね、これ。とつても美味しくて、楽しいにゃー!」

「エビと米つてのも最高だ。堪らん……!」

甘い怪鳥の脂を楽しみながら、また一つ米を口に入れる。そこにエビを投入すると、強靱な繊維を絡めたようなエビと米のもちもちさが合わさって、顎の感覚が非常に豊かになる。

未知の樹海風とはよく言ったものだが、言ってしまうえば有り合わせの素材で作ったた

だの米料理だ。シー・タンジニヤのシェフたちに言わせれば、これはパエリアではないと言いかもしれない。

しかしタンジアの力を借りずとも、未知の樹海のみだけでもこれほどの味を作り出せる。俺はそれを、声を大にして言いたい。

「そういえば、イルル。猫舌は大丈夫か？ 結構アツアツだけど」

「にゃー。ふうふう冷ましてるから大丈夫にゃ。旦那さんこそ、頭痛はもう大丈夫なのにゃ？」

「おう。いつの間にか抜けてたわ。頭もすつきりしたし」

「良かったにゃあ。大事にならなくてよかったにゃ〜」

安心したように頬を綻ばせるイルル。そんな彼女に微笑みかけつつ、俺はスプーンを置いては右手を閉じたり開いたりした。

俺の体を蝕んでいた龍属性エネルギー。それはもう見る影もなく、いつも通りの俺の手があった。あの忌々しい頭痛も消えている。滑瘴啖を彷彿とさせる、あの鼻を焼くような臭いも既に霧散していた。

「……結局、アイツは何だったんだらうなあ」

「分かんないにゃ……。でも身体つきからして、飛竜……じゃあないような気がするにゃ」

「そうだな。四本の脚に一对に翼……もしかすると、もしかするかもしれないな。アレは」

「結局、狂竜化したイヤンクツクを全部持つて行かれちゃったけど……。でもまあ、大きな怪我がなくて良かったにや」

「おっと。全部、じゃないぜ？ しつかり剥ぎ取ってるんだからな」

憂うように、されど安心したかのよう。イルルはそう呟いた。

そんな彼女に向けて、俺はポーチから肉の塊を取り出す。何も、全ての肉をあつ謎のモンスターに奪われた訳ではない。少量とはいえ、イヤンクツクから肉は剥ぎ取っていたのだ。喰えるかどうかはまた別の課題、ではあるが。

——なんて思っていたのだが。

「……あれ？」

「にや？ どうしたのにや？」

ふと、そこから舞い上がる香り。

狂竜ウイルスに感染した肉特有の、グズグズになった刺激臭。酸味のような、渋味のような。そんな鼻を突くような香りを放つのが、狂竜肉の特徴だ。

——しかし、これは。

このイヤンクツクの肉は——

「……イルル」

「にや?」

「前言撤回だ。むしろ、ラッキーだったかも」

「……にや、にやあ……?」

その溢れんばかりの、肉の良い香り。さながら活性化したかのようなその肉の輝きを前に、俺は静かに微笑んだ。

何を言っているのか分からない。そう言わんばかりに首を傾げるイルルに向けて、俺は静かに言葉を繋ぐ。これからの、指針となるであろうその言葉を。

「——イルル。あのモンスターを追うぞ。ひよつとしたら、アレが淆瘴啖を美味しくできる……かも」

「……にや……?」

く本日のレシピく

『未知の樹海風パエリア』

・ 樹海の麗水

……300cc

・ ドンドルマ製料酒

……40cc

・簡易怪鳥ガラスープ	…… 30cc
・簡易オイスターソース	…… 大きじ2杯
・みりん	…… 大きじ3／2杯
・醤油	…… 大きじ3杯
・塩	…… 適量
・胡椒	…… 適量
・豆板醤	…… スプーン2杯
・ジャンゴネギ	…… 1／3本
・樹海キクラゲ	…… 20g
・四つ足ニンジン	…… 1／4本
・樹海エビ	…… 6匹
・未知の樹貝	…… 4匹
・ウマイ米	…… 4合
・怪鳥胸肉	…… 60g



## 桃栗三年柿八年

からつとした熱気が、頬を撫でる。

木製の壁で囲われたこの空間は、独特な香りで満ちていた。優しさのような、どこか甘ったるい香り。されどその香りを纏う熱気は、優しいとは言い難かった。

汗が垂れる。

こめかみから、もう辛抱堪らぬと噴き出した汗。それが力なくその身を投げ出しては、俺の頬を荒く走っていく。それに続くかのように、髪をすり抜けていくつも汗が溢れた。目を守るための眉もいよいよそれを防ぎ切れなさそうで、俺は思わず額を手で拭ってしまう。

「……………うっわあ……………」

そこへへばりつく、大量の汗。べつとりと乗ったそれを見ては、少し辟易とした色の声漏れた。

一方、俺の向かいで足を組む男。涼しい顔で薄く唇を釣らすその男は、俺に向けて小さく笑う。

「良い感じに汗が出ていますねえ。重畳、重畳」ちようじよう

「うるせえよ。何だよここ、拷問部屋？」

「違いますよ、サウナです。サウナ」

サウナ。

彼——トレッドが、何やら「汗を流しに行こう」と言つて俺を連れてきた。その場所がここだ。

普通、汗を流そうなんて言われれば水浴びか公衆浴場かと思うじゃないか。それが、サウナ。この訳の分からない熱気の密室だ。もしかしてこいつ、俺に恨みでもあるんじゃないだろうか。

「サウナはね、体を温めるのにいい場所なんですよ。別名、蒸し風呂。寒いとこの知恵が詰まつてるんです」

「蒸し風呂……だあ？ 汗流すだけじゃねえかよ」

「充分に体を温めた後、この外の水風呂で体を冷やすんです。生まれ変わったような感覚になれますよ」

「馬鹿々々しい……。むしろ風邪ひきそうなんだが」

「元々凍土近くの里で考案されたらしいですね。あつちでは、湖に飛び込むそうです」  
「いや別に聞いてないから」

「その後で飲むビールは格別だとか。グリツリ・マツカラと言うらしいんですけどね。一緒に、その香花石サウナストーンの余熱で焼いたソーセージを頬張るともう最高らしいですよ」

「おいおいそれを先に言ってくれよ。持ってきてないぞ、ソーセージは……」

「そう言うと思ひまして、持ってきてます。ポポのソーセージ」

「いやあトレッドくん！ 君は最高だ！ 俺の永遠の親友だ！」

思わず感極まって、トレッドのその肩を叩きに行ってしまった。生憎、その手は払い除けられてしまったが。

「……で？ この場所を指定したのは僕ですが、僕に用があると云ったのは君ですよ。どうしたんですか？」

「あー……」

唐突に冷静な話題にすり替えられ、俺の言葉は宙を斬る。ぱちんと、虚しく香花石が鳴った。淡い火種が石の山を飛び跳ねる。

すうっと息を吸って。乱雑に頭を搔いて。そうして一呼吸置いてから、俺は言葉を繋げようと口を開いた。

「あのさ、銀色のモンスターを探してるんだ。多分、古龍」

「銀色……？ クシヤルダオラか何かですか？」

「いや、もつと異色な奴。彗星みたいに飛んでる奴だよ」

その言葉に、トレッドはびくりと眉を動かした。彼は何か知っている。相変わらず分  
かりやすいその反応に、俺の頬からふつと笑みが漏れた。

トレッドはギルドナイトだ。ギルドの上層部である彼らは、並のハンターでは知る由  
のない情報をいくつも隠し持っている。古龍観測隊とのコネクションも太い。もしか  
したら、先日見たあのモンスターのこととも既に知っているかもしれない。

「……他に特徴は？」

「え？ ええつと……何か噴射口のような翼に、赤い龍属性……かなあ」

その言葉を呑み込んで、トレッドは困ったように目を伏せた。線のように細い目  
が、さらに細い線を描いていく。

そうして右手でその線を覆い、深い溜息をついて――

「さては、ギルドの書庫にでも侵入しましたか。この犯罪者が」

カチャツと、黒光りする何か。香花石の光を浴びて、その筒は暗い深淵をを覗かせる。  
ボウガンをさらに小型化したもの――俗に言う、銃だった。

「まっ、待て！ 落ち着けトレッド！」

「これが落ち着いていられますか。また調査段階のモンスターですよそれは。一介のハ  
ンターが知ることなんてできないはずのに。まさかそこまで落ちぶれるとは、見損ない  
ましたよ」

「違う！俺がそんな器用な真似できると思うか!? 遭遇したんだよ！ 遭遇！」

「……遭遇？」

慌てて弁明すれば、その言葉が引つ掛かったよう。トレッドは、訝しむような顔をしながらも右手の銃をそつと仕舞った。一体どこから取り出して、どこに仕舞っているのか。謎が深まるばかりである。彼はタオル一枚しか、腰に巻いていないというのに。それとは別に、詳しく話せと言わんばかりにトレッドは顎を動かした。いつもの柔らかな表情が消え去ったその顔に萎縮しつつ、俺は言葉を足していく。

「十日前の未知の樹海。多分、観測隊なら記録してるんじゃないか。そのモンスターが、降りてきたんだよ」

「……十日前、か。確かに奴は未知の樹海に降り立っていますね。君がその場にいたというのなら、奴が何しに降りたか分かってますよね？」

「……まだ疑ってる？」

「ええ、もちろん。ギルドの書庫を無断で覗いたビチクソヤローは生かしてはおけませんので」

口角を上げて、しかし目は全く笑わないで微笑むトレッド。デインバルドもかくやというほどの威圧感である。

しかし、俺はトレッドの言うようなことはしてかしていない。本当にその場の居合わせ

せたのだ。だから、あのモンスターが一体どんなことをしてくれたのか。それははつきり覚えている。

「——イヤンクック。イヤンクックをがつり持つて行きやがったんだアイツは」  
「……ほう」

その言葉を聞いて、むしろ感心したかのような顔でトレッドはそう声を漏らした。いつもの柔らかい色を顔に戻し始め、ようやく俺は詰まっていた息を吐き出す。そうして、胸を撫で下ろしつつ話を続けた。

「あのイヤンクックはな、俺が仕留めたんだ。だけど、あの変な彗星野郎が持つて行っちゃまいやがった。ああー、今思い出しても腹が立つ」

「確かに、古龍観測号の記録と一致します。かのモンスターは未知の樹海からイヤンクックを持ち去った。それで、そのモンスターのことが気になるってことですね」

「大方トレッドのことだから、書庫から自分の悪事を知られるのが嫌なんだろう？ ほら俺潔白じゃん？ 問題なくない？」

「やっぱり殺していいですか？」

再び目をぎらつかせる彼を前に、俺は慌てて口を閉じる。

仕方ない。信じます。

そう不満そうに口にしては、彼は溜息をついて前髪を掻き分けた。汗に塗れた茶髪を

熱風に乗せるその姿。やっと俺に話してくれる気になったようだ。

「……実は、まだ名前は決まっています」

「え？」

「発見されたばかりなんですよ。元々、ギルドはずっと彗星だと認知していました。しかしシグのように遭遇する例が最近報告されるようになりまして。まだほとんど情報がまとまっていないですよ」

困ったようにそう話すトレッド。への字に曲げた眉から汗を拭いつつ、小さな溜息をつく。

そのまま続く彼の話はこうだった。

流星。

彗星。

銀翼。

凶星。

様々なものに準えて、まとまりのない名前と呼ばれているあのモンスター。今もなお各地の超々高度を飛び回り、赤い軌跡を残しているそうだ。時には俺が遭遇したように、地上へと降り立つこともある。また、その甲殻の一部が剥がれ落ち、流れ星のように大地を抉るという性質もあるのだとか。これが完全に予測して対策することは難し

いようで、観測隊も頭を抱えているらしい。

最近龍歴院の研究が活発になったおかげで少しづつ情報が明らかになり、それがハンターズギルドにも伝えられている。一通りは知っているが、逆に言えばその程度の情報しかもっていない。トレッドはそう締め括り、桶に満たされた水を少量、香花石に投げ入れた。

瞬間、熱いフライパンに油を注いだような、凄まじい音が響き渡る。

「おー、あつつい」

「あつつ！ 何だ!? 何これ!」

「ここに水を入れると一気に気化するんですよ、熱いから。それでこの熱気。湿度も混ざって良い感じでしょう?」

「……あれだ。火山の溶岩が染み出してる地面みたいな。そんな気分」

じゅわああつと。凄まじい音を立てて、香花石は咆哮した。その表面を撫でる水を、激しい水滴へと変えて。中に秘めた薄い橙は、より強烈な赤色へと塗り替わる。

そこから溢れる激しい熱気は、俺の肌を焼きかねない。そう思わせるほどの熱量だった。話の締めにしては、些か派手すぎるのではなからうか。

「……しっかし、あれだな。ギルドすら全然分かってないんだな」

「期待に添えれず申し訳ありませんね。それで? どうしてそのモンスターが気になっ



てるんです?」

「あー……それには見せたいものがあるんだが。そろそろ、上がろうか? 熱いし」

立ち上がって、親指で出口を指差す。そうして顎を少し浮かすと、トレッドもやれやれと言いながら立ち上がった。

背筋を、汗が伝っていくのが分かる。まるで急流のように、突然出来た傾斜を流れていった。それはトレッドも同じのようで、かいた汗を見ては満足そうに頷いている。

彼のオススメするサウナの良さとはよく分からなかったが、確かに充分な汗はかいただろう。後は、上がった後のビールとソーセージ。そのメインディッシュを想像しては、汗に負けないくらいの涎が口内に溢れ出てきた。

——例のモンスターの話? それはあくまでも、ついである。



「……ふはあつ! やつぱり、風呂上がりのビールは最高だな!」

「感謝してくださいよ。わぎわぎこのために氷結晶ボックスごと持参したんですからね」

キン、と。喉を、爽やかな何かが滑り降りる。

それはまるで、麗らかな水流のように。弾ける気泡はポツプアートのように。優しく、派手に、煌びやかに。その爽やかな輝きで俺の体を潤していく。

深いコクだ。金色に輝くその味わいは、喉奥を引き絞るような旨みを引き出してくれる。そこへ、鼻から通り抜ける程よい苦味を投下した。コーヒーのような、酸味の伴う苦味ではない。程よく、優しく、喉を締める炭酸に溶け込むような。そんな爽やかな苦さだ。それが味わい深いコクになる。喉越しとでもいうべきか、そんな飲み応えのあるそれを俺は勢いよく飲み干した。

ドン、と。ジョッキをテーブルに勢いよく押さえつつ、手の甲で唇を拭う。この瞬間が堪らないのだ。

「つかあー、うめえ！ 達人ビール最高！」

「おっさんですか君は」

「うるせえな、良いだろ別に」

グビツとジョッキを空にする俺の傍らで、ちびちびとビールを口にするトレッド。半分も減っていないそれに眉を蹙めながら、彼は呆れたようにそう呟いた。

サウナで十分に汗をかき、水風呂でその汗を流す。全身をひんやりとした水に浸からせるのは、何とも心地が良かった。熱された体が冷却され、体の芯から生まれ変わったような、そんな気分だ。

そこに注ぎ込む達人ビール。深みとコクがマッチして、より一層心を爽やかに洗い流してくれる。

「ソーセージも良い色に染まってきましたね。もう少しでしようか」

「……結局俺ら以外の客、全く来なかったな。大丈夫なのか、ここ」

「……あれですよ。ドンドルマでは、まだサウナの良さが浸透してないですよ」

サウナが閉じられ、余ったサウナストーンに刺さる二本の串。それに貫かれ、その色を徐々に黒くしていくソーセージ。あまりある大きさのそれだったが、サウナストーンの上ではその巨体も小さく見えた。

「……で？ 見せたいものって？」

「ああそうだ。これこれ」

俺とトレッド以外誰もいないこのサウナ外で、寒い風が吹き抜ける。

そんな言いようのない空気を変えようとしたのだろうか。トレッドは、話を逸らすかのように口を開いた。

トレッドの求める、俺が見せたかったものは、それを上着のポケットから取り出しては、彼に手渡した。

「……缶詰？」

「保存食にしたかったから詰めてあるだけだよ。開けてみてくれ」

怪訝そうな顔で、トレッドは缶詰を舐めるように見る。俺は空いた手でソーセージにマスタードを塗りながら、彼の動向を眺めていた。

すると、見るだけでは全容が掴めないと思ったのだろうか。彼は、俺の言葉通りにその缶を抉じ開けた。

「……鶏肉ですか？」

「それさ、イヤンクック。……この前例のモンスターが持つて行った個体の一部」

「……これが？」

疑い深く、その缶詰の中身を見るトレッド。匂いも嗅いでみては、納得がいかなさそうに俺を見た。

「それさ、元々狂竜化したイヤンクックだった。……なんて言ったら、信じる？」

「……嘘でしょう？」

カマをかけるように聞いてみれば、トレッドは困ったように笑みを浮かべる。

聞けば、やはり彼は知っていた。あのモンスターが持ち去ったのは、狂竜ウイルスに感染したイヤンクックであるということ。

きつとそれも古龍観測号からの報告なのだろう。だからこそ、この缶詰がこんなにも美味しそうなのが不思議で堪らないのだ。

「味見してみたけどさ。下手したら素の状態より旨いよ、それ。あのモンスターから出

てくるエネルギーにそういう作用があるのかなあと思うんだよ」

「……以前君が、極限状態を解除出来たら肉質が良くなるなんて話してましたけど、そんな感じですか？」

「うーん、それとはまた方向性が違う味だなあ。そっちは肉の味を元に戻して、その反応が強いからより旨くなるって感じ。これは……何て言うんだらう。肉そのものにスパイスを注ぎ足して、別のアクセントある味に塗り替えちゃうって感じかなあ」

俺としても、どうして味が変わるのかよく分かっていない。故に何とも歯切れの悪い表現しか出来なかったが、それを聞いてはトレッドは興味深そうに口角を上げた。そうして、その缶のフタを丁寧に閉める。

「ちよつと、これ貰ってもいいですか？ とてもいいサンプルになりそうです」

「ああ、是非研究に役立ててほしい。それで立証してくれ。アイツのオーラは、飯を旨くする作用があることを」

それさえ分かれば、チャンスが来る。滑瘴痰を旨くすることができる、千載一遇のチャンスが。

——なんて言葉を呑み込みながら、ぽきゅつと。そんな音を立てながらソーセージにかじり付いた。

溢れ出る肉汁を感じながら顎を動かしていると、トレッドもその細い顎を縦に振りな

がらソーセージへと手を伸ばす。

あのモンスターが放った赤い光。それを全身に浴びた俺は龍属性に蝕された。溢れる疲労感と頭痛だったが、清瘴啖のそれよりは幾分か透き通っていたような。そんな気さえもする。そして、それを浴びたがために俺が懐に隠していた狂竜化イヤクツクの肉も変質したのだろう。

剥ぎ取ったばかりの頃は黒ずんで、とても食べたものじゃなかった。しかし、あの龍のオーラを浴びてからは一片、まるで細胞が脈動し始めたかのように活性化したのだ。肉質も向上し、味も良い。少しピリツとする刺激が顎を唸らせる。

「……狂竜ウイルスってさ、元々ゴア・マガラが散布したものだつたよな？」

「ええ、そうですね」

「つまり、あのウイルスも龍属性を帯びている可能性ってあるのか？」

「……まあ、微弱にならあるみたいですが。しかし武器に転用できるレベルにも満たない量だと思いますよ。それがどうかしたのですか？」

「いやさ。龍属性って未だに未知のエネルギーだけどさ、龍の生命力の物質化みたいな説もあるじゃん？ 詳しくは分かんないけど、その生命力によって細胞を活性化……みたいな感じなのかなあって」

「ふうん、面白い解釈ですね」

あからさまに馬鹿にしたような口調でそう返すトレッド。それに少し苛立ちを覚えるが、自分でも滑稽なことを言っているような自覚はある。反論は出来ず、そのまま言葉ごとソーセージを呑み込んだ。

景気の良い音を立てる皮。張った繊維を一気に縮ませ、がぶりゆと心地の良い音を奏でる。薄すぎず、かつ厚すぎないその皮は、ソーセージ咀嚼そしゃくの登竜門だ。

その皮を歯が超えると、いよいよ中に詰まった身が溢れるように現れる。皮の張りとは一転、ほぐした肉を練り合わせたような、柔らかく脂分も豊富な肉だった。炭火焼とはまた違う、サウナストーン香花石の仄かな香りを充分に吸収したその香り。それが肉の甘みと相まって、非常に柔らかい、優しい味わいになっていく。

同時に広がる、マスタードの主張の強い刺激。瞬間溢れる、そのさっぱりとしたフレーバー。酸味と辛味を合わせ持ったその味わいが、その優しいソーセージを彩った。マスタードに含まれた粒粒がこれまた良いアクセントになっている。

「あー……うつまあ……」

「ふふ、そうでしょうそうですね。サウナ、いいでしょう?」

「サウナはよく分かんないけど、このグリッリ何とかって奴最高だわ」

皮と身を口の中で混ぜ合わせ、それをごくりと喉へ押し込む。そうして口内にこびりついた脂を、キンキンに冷えたビールで洗い流す。

ぐび、ぐびと。喉がそんな音を鳴らしながらビールを奥へ奥へと追いやった。その度に汗を流し乾き切った心と体を潤していくような、そんな感じがする。

「……あれだな。サウナって、飯を旨くする秘訣なんだな」

「主旨変わってますよ」

呆れたように溜息をつくトレッド。

余熱を残したサウナストーンは、掠れた声を虚しそうに漏らしていた。

く本日のレシピく

『グリッリ・マツカラセット（一人前）』

- ・ 達人ビール（中ジョッキ） ……1杯
- ・ ポポソーセージ（極太） ……1本
- ・ マスタード ……適量
- ・ サウナストーン ……30kg
- ・ 余熱 ……適温



## 一網打尽

「うおおおおお！ よつしやあああああッ！」

思わず飛び出た歓喜の咆哮。開いた口を震わせるそれに、俺の横にいたイルルはビクリと体を震わせた。

珍しいことに、ペンを握っては紙とにらめっこしていたイルル。そんな彼女が、ただでさえ大きい尻尾をさらに膨らませ、一体何事かと俺の方を注視している。

一方、その視線の先には、歓喜に悶える俺——と、一通の封筒。俺を歓喜の渦に呑み込んだ張本人の姿が、そこにあった。

「な、何にや旦那さん……いきなり大声出して」

「当たったんだ！ 当たったんだよ！ クジの一等賞が！」

滾る心を抑え切れず、俺はその封筒から一枚の紙切れを取り出した。

——どんな重さのゼニーよりも価値がある、たった一枚の紙切れを。

「……ちよ、超……高級……お、お食事券……にや？」

「そう！ 超高級お食事券！ とうとう当選したんだ！」

思えば、長い道のりだった。

ドンドルマに移住して、アリーナのレストランに通い続けて。通う度にスタンブカードに印を押して、一定量貯まったらクジを引く。何が当たるかは分からない、勝率も低い高難度のクジだ。これまで何度も挑戦してきたが、便所紙や巾着袋など値打ちの低いものしか当たらなかった。一等賞である超高級お食事券を狙って何度も挑戦してきたが、一向に当たらなかったのだ。

それが、今。今、ここに。

「……夢みたいだなあ。これをずっと待ち望んでいたんだもんなあ……ツー」

「にゃー、高級お食事券と何が違うのにゃ？ 新鮮なご飯が食べれるとか、そういうんじゃないのにゃ？」

「バッカお前、そんなしよぼいもんじゃないぞこれは。これはな、貴族やギルドのお偉いさんしか食べないような、超！ 超!! 超!!! ……高級な食材を食べることができる、非常に貴重な券なんだよ」

「にゃ……そんな、そんなに凄いのにな？」

「おうともさ。噂によると龍頭をさらに厳選した龍之鱉谷こめかみだとか、真紅蓮鯛とか、そういうのが食えるらしい。一線級のハンターでさえ滅多にお目に掛かれない超高級食材なんだぞー。凄いだぞー」

俺の熱弁に困ったように髭を揺らしては、イルルは控えめに苦笑する。少し熱く語り過ぎてしまっただろうか。引き気味の彼女を前に、俺は小さく咳き込んだ。

「……こほん、まあ、なんだ。こいつが使える日は丁度五日後だ。その日は、何があつても俺は狩りに行かないし他の予定も入れないからな。ラオシャンロンが空飛んできても、俺は絶対この日はアリーナに行くからな！」

「わ、分かったにや……。好きにしてくださいにや……」

呆れたように返事をしては、イルルは黙々と自身の作業に戻る。お食事券を大事に封筒に戻し、それをそつと鞆に潜り込ませて。丁寧丁寧にそれらをこなした俺は、ふと思いついたかのように彼女の姿をじつと見た。

潮風香る、この空間。チコ村の海岸沿いに作られたこの海小屋は、一般的なリビングをそのまま再現したような、そんな形だった。窓からは青く澄んだ空が映り、白く眩しい光が飛び込んでくる。さざ波の音が部屋中で木霊して、優しい潮の香りが鼻孔をくすぐつて。何とも穏やかな世界だ。

そんな部屋に備え付けられたテーブルの上で、イルルはせっせと何かを書いている。足が地面に届かない椅子に座つて。ぶらぶらと、後足の肉球で潮風を蹴りながら。一心不乱に何かを書き続けていた。

「なあ、何書いてるんだ？ さつきから」

アイルーは言葉こそ巧みに話すものの、いざ文字を書こうとなると尻込みする者が多い。やはり話し言葉と文字の認識は異なるようで、文字を上手く書くことができるアイルーはあまり多くないのだ。この目の前のアイルーに関しても、これまで何かを書いてある姿なんて、滅多に見たことがなかったのだが。

なんて思いながら、彼女の後ろから覗き込む。一体、彼女は何を書いているのだろうか。懸命にペンを擦らせるその紙へと、俺は視線を伸ばし——

「みつ、見ちゃダメにやつ！」

ナルガクルガもあつという瞬発力で、イルルはその紙を覆い隠した。俺が見ようとしたその紙は、ふわふわの体毛に瞬く間に呑み込まれてしまった。

「お、おう……どうしたんだ、急に」

「み、見ちゃダメなのにや……」

じつと、その碧い瞳に力を入れるイルル。何故そんな頑なに拒むのか。そう尋ねようとしたものの、懸命な彼女の表情に俺はその言葉を呑み込んだ。

——心なしか、彼女の頬が紅潮しているようにも見える。うつすら滲み出した瞳の影響だろうか。

「お願い……み、見ないでにやあ……」

「あ、ご、ごめん。ごめんって。泣かないでくれ。ほら、俺あっち行くからさ」

耳を伏せて、尻尾を下へ下へ垂れさせて、そうして懸命に俺に訴えかけてくるイルル。彼女が一体何をしているのかは分からなかったが、どうやら地雷を踏んでしまったことだけは分かる。じゃあ、俺に見られたくないものを俺の横で書くなよって言いたかったが——ここは敢えて我慢した。

そつと彼女の頭を撫でて、俺は踵を返す。とりあえず距離を置こうと、俺はドアノブへと手を掛けた。



照り付ける太陽。鼓膜を蹴り付ける、爽やかな波の音。

チコ村の浜から少し離れた小島。ぽかぽか島と名付けられたそれは、今日も活気に満ちたアイルーたちで賑わっていた。

「おっす」

「ニヤー！ シガレットさんだニヤー！」

「いらっしやいだニヤー！」

この島には、原生林に狩りに行く際に度々立ち寄っている。そうでなくても過去にオリジナルネコまんまを提供したこともあって、このアイルーたちからは随分な信頼を

得ることができたようだった。

そんなこんなで、アメシヨ柄だったりトラ模様だったりするアイルーたちが近寄ってくる。もふもふとした生き物たちが足に擦り寄ってくるので、俺はしゃがんで彼らの目線に高さを合わせた。

「よー、元氣してたか？」

「ニヤー、みんな元氣だニヤー」

「島に流れてきたガノトトスを挑発するぐらいには元氣だニヤー」

「えっ」

びよんびよんと跳ねる彼らの言葉に沿うように、そつと島の奥へと目を追いやってみれば。

そこには、確かに特徴的な背びれが悠々と海を泳いでいた。魚竜種を代表する水棲モンスター。そう、ガノトトスだ。

「ニヤー、お久しぶりですニヤ、シガレットさん」

思わぬモンスターの姿に驚いていると、今度は横から別の誰かが現れる。

桃色のエプロンを着こなした可愛らしいアイルー。手にした箒で砂を擦りながら、彼女は髭を少し揺らしていた。

「……管理人さん、あのガノトトスはいつから？」

「三日か、四日くらい前……ですかニヤ」

「最近やってきた感じなんだ。被害とかは？」

「今のところは……。でも、水ブレスを一回吐いてからは、若い子たちがあんな感じに挑発し出す仕舞いですニヤ」

憂うように溜息をもらす管理人さん。そんな彼女の瞳の先には、まだまだ若いアイルーたちがお尻を叩いてはガノトトスに挑発を繰り返している。

「何やってんだあいつら……」

「危ないからやめてって言っても、やめてくれないですニヤ。多分、自分たちの方が強いって思ってるんですニヤ」

「……危ないなあ。いつか痛い目見るぞあいつら……」

「ニヤン。シガレットさんは丁度いい時に来てくださいましたニヤ」

横を見れば、キラキラとした顔で俺を見つめる彼女の姿がある。「もちろん、あのガノトトスを何とかしてくれるよね」と顔に書いてあるかのような。

「ごめん、俺泳げないし」

しれっとそう言っては踵を返す。そもそも水の中に潜り続けるモンスターを狩るなんて、カナヅチの人間からしたら無理な話だ。であるならば、ここにいるアイルーたちの雇用主である、我らの団ハンターにでも頼んでくれと。俺はそう言いたい。

——そんな俺のマントを掴む肉球。逃がすまいと深く爪が喰い込むそれに、俺は思わず足を止めた。

「……管理人さん？」

「……泣かせたそうですニヤ？」

笑顔。

とても華やかな笑顔で、彼女はそう言った。

——全く目が笑っていない、威圧感溢れるその笑顔で。

「先程海小屋で、イルルちゃんを泣かせたそうですニヤ？」

いつぞやの俺の頭についた菌形を思い出す。まるでピースト状態にでもなったかのようなあの管理人さんの姿を想起したからだろうか。喉が勝手に、生唾を飲み込んだ。



「よっしやあ！ ガノトトスを獲るぞお前らア！」

俺の掛け声に応えるかのように、背後からはネコの重ね色が飛び交っている。釣竿を掲げ、尾を立てたせ、ふんすと鼻を鳴らすイルーたち。頼りないが、勇ましくもあつた。

そんな彼らの前に立つ俺——と、古ぼけたバリスタ。海岸沿いに備えられた甲板の



上に、それはあった。

「まさかこんなもんまで用意しているとは……ほかほか島、恐るべし」

「矢は撃てないけど、網は撃てるようになってますニヤ。みんなで頑張つて修理したんですニヤ〜」

一方、俺たちの様子を見ては満足そうに髭を揺らす管理人さん。錆びが見えるバリスタを撫でては、豊満な毛に覆われた胸を自慢げに張った。

そんな彼女を適当にあしらいつつ、並び立つ若いアイルーたちに向き返る。一連の流れをもう一度確認しようと、ワクワクの表情を抑えられない彼らに向けて口を開いた。

「……よし、作戦はこうだ。まず俺がこのバリスタを撃つ。それまでお前たちは精神統一でもしていてくれ」

「ニヤ〜！ 何だかつまらないニヤそんなの！」

「おっと、お前たちの見せ場はその後だぜ？ さて問題だ。その釣竿の先の糸は、どこに繋がっているでしょうか」

彼らにそう確認すると、みんな小首を傾げ始めた。勢いだけで集まったのがよく分かる光景だ。改めて作戦を確認したのは正解だったようだ。

「このバリスタは何を撃てるか分かる奴」

「矢ニヤ〜！」

「話聞いてたのお前」

「網ニヤ！」

「ん、正解」

空回りしたトラ模様の子の横で、正答を発したアメシヨ柄のイルー。二人の頭をさつと撫でつつ、俺は問いに問いを重ねた。

「じゃあ、俺はこのバリスタで網を撃つけどさ。それでガノトトスを絡めて……その後はどうなる？」

「……ニヤ？ 暴れる……ニヤ？」

「そうだな。そりゃ死に物狂いで暴れるだろうなあ」

「網にかけるだけじゃ、ダメなのニヤ？」

「網なんてそんな頑丈じゃないぞ。ほっといたら抜けられちゃうよ」

「ニヤ！ じゃあ、逃げられる前にガノトトスを捕まえればいいのニヤ！」

「捕まえるって、もう網に捕まえてるのニヤ」

「それじゃ何も変わってないんじゃないかニヤ？」

「ニヤー。何て言うか、そのままガノトトスを引き上げるっていうか、何て言うか」

口々に話し出しては議論を始めるイルーたち。ああでもない、こうでもないと思見を並べては答えを探し求めている。その横で、まるで我が子の成長を見守るかのような

顔をする管理人さん。知恵を絞る若いアイルーたちを前に、完全に保護者目線になって  
いるようだ。

ワイワイと盛り上がる彼らを見ながら、俺はそつと彼女に声を掛けた。

「さっきの説明じゃ、やつぱりよく分かってなかったんだなこいつら」

「ニヤー。シガレットさんは先生みたいですニヤ。あの子たちもあれこれ考えることが  
できて楽しそうですニヤ」

「いやー、この子たちは誘導しやすく助かるわ。うちのオトモは時々何考えてるか分  
かんないことが多くて、さ」

「……それはきつと、見方が変わったからですニヤ」

「見方？」

目を伏せて、溜息をついて。管理人さんは、妙に引つ掛かる口振りでそう呟いた。ま  
るで意図の分からないその言葉を穿つように、俺は首を傾げる。

『ただの旦那さん』じゃ、なくなつたからですニヤ」

「……うん？ それってどういう——」

「分かつたニヤツ!!」

だが、その先の言葉はアイルーの雄叫びによつて遮られた。隠し切れない喜びを如何  
なく撒き散らすその姿。愛嬌のあるその仕草が、俺の思考を引き戻す。

「シガレットさん、分かったニヤ！ ガノトトスを引き上げればいいのニヤ！」

「そのための釣竿なのニヤ！」

「つまりボクらの釣竿でガノトトスを釣り上げるのにや！」

どうだ、と言わんばかりに胸を張るアイルーたち。思考の結果辿り着いたその答えに、俺は思わず顎を擦って頷いた。そうして、彼らの頭を一人ずつわしやわしやと撫でる。

「うんうん、その通り。じゃ、もう分かるよな？ この釣竿の先の糸は、どこに繋がっているでしょうか？」

「網ニヤー!!」

最後は一齐に、元気の良いネコの声が轟いた。花マルを上げたいその答えを受け止めて、俺は改めて立ち上がる。そうして向かうは、我が物顔で海を裂くガノトトス。これから釣り上げられ、さらには調理される憐れな獲物。

「よし……じゃあ、始めるぞ。全員準備！」

了解ニヤ、と口々に飛ばしては、彼らはその可愛らしい口を引き締めた。一方の俺はバリスタを構え、その照準を悠々と泳ぐガノトトスに向ける。

そう。あとはガノトトスに網を当てればいい。アイルーたちの準備は完了している。

あとはこれを、俺がアイツに当てれば全てが終わる——

——何か忘れているような気がするの、気のせいだろうか。

「よつと……ッ!」

瞬間射出される網。弾丸上に丸められたそれは、瞬く間に大気を切り裂いていく。そうしてそれは、一心に深い青に。深い深い青色に飛び込んだ。

「……やべ、外した?」

そう、それはまるで見当違いなところに。宙をスローモーションで漂うそれは、僅かにガノトトスの尾びれに触れるかどうかという位置へと——

「問題なしですニヤ! みんな、引き上げ開始ですニヤ!」

突然声を張り上げる管理人さん。それに沿うように、今度はアイルーたちが一齐に竿を引いた。

同時に。弾丸上になっていた網が広がる。それは俺の予想していたものの三倍はあろうかという大きさで、勢いよくガノトトスの尾びれを絡み取った。

「え、えつ、何これ」

「ニヤ、イルルちゃんから貴方のノーコンぶりは聞いているのですニヤ。そのための、一網打尽の術なのですニヤ!」

一網打尽の術。

そう呼ばれたこの網は、確実に従来のものよりサイズの大きいものだった。もしこの

網が普段のものだったら、俺はあのガノトトスを逃がしていただろう。しかし、従来のものより大きく作られたそれは、ガノトトスの半身に何とか食らい付いている。

同時に奴は自由を奪われ、アイルーたちからは竿で引き上げられて。バシャバシャと水面を荒く掻き回していたが、ついには激しく飛び上った。

「ウニャーっ！ っつけえーっ!!」

アイルーたちによる全力の引き揚げ作業。小柄な彼らも、集まればそれは大きな力となる。そう証明するかののように、その何倍もの大きさのガノトトスを吊り上げた。

「おっ……おおおッ！ やったぞ!!」

ドタン、と。大柄な魚が甲板に打ち付けられる。ピタン、ピタンと跳ね回るそれは、紛うことなき魚だった。ただ少し、かなり大きい。俺の知っているガノトトスに比べる、かなり小さいが。

それが、何度か跳ねた後にぐったりと首を落とした。ヒレの血の気も、黒ずみつつあるようにも見える。

「……ニャ、動かなくなっちゃったのニャ」

「ニャー、死んじゃったのニャ?」

元々急な衝撃に弱いガノトトスだ。それも、この体格から察するに、コイツはまだまだ未成熟な子どもな個体なのだろう。突然網にかけられて、いきなり宙に引き上げられ

て。そうしてそのまま、固い甲板へと叩き付けられた日には、ショックの連続でストレス死してしまってもおかしくないのかもしれない。

微動だにしなくなってしまうたその体に触れながら、俺は一呼吸を置く。そうして、この戦いの功労者であるアイルーたちへと振り返って、一言だけ添えた。

「……さあ、食べようか！」



「……うん、良い感じ。ガノトトスープの完成つと」

「ニャー！ 良い匂いだニャー！」

「ニャニャニャ……早く食べたいニャ〜」

島に備えられた釜戸から、力強い熱気が漏れる。その上で悲鳴を上げていた鍋のフタを開ければ、瞬く間にその匂いを拡散していった。

切り身のように解体されたガノトトスの身は、煮込まれることよって薄桃色の柔らかそうな塊へと変貌している。その横では、ゴロゴロと乱切りされた四つ足ニンジンやヤングポテトがスープへと身を浸し、繊維に沿って切り分けられたオニオニオンがスープに淡い脂を浮かしていた。そこから溢れる、どこか酸味のある優しい香り。ガノトト

スープの完成である。

「はい、順番だぞー。ちゃんと一列に並ぶんだぞー」

「ニャー」

一人ずつ木の器を持つては、この釜に向けての列を形成するアイルーたち。その子たちから器を受け取つて、ガノトトスープを注ぎ込んだでは、また肉球の元へと返す。ニャーにやー言いながら浜辺の方に歩いていくアイルーたちは、喫食する姿を少しずつ増やしていった。

そんな中に、慣れ親しんだ白い毛並みが現れる。

「……にや。お、お願いしますにや」

「おう、イルル。さつきは悪かったな。これ食つて機嫌直してくれ」

「にやー、別に怒つてないから大丈夫にや。旦那さん、ありがとにや」

優しく微笑んでは、彼女は俺から器を受け取つた。そうして、浜辺の方へ向かう——  
—と思いきや、俺の横にすんと座り込む。

「……どうした？」

「にや。旦那さんが食べるまで、待つてるにや」

「……そうか。じゃ、さつきと済ませようかねえ」

前を見れば、アイルーの列も尻尾が見え始めていた。残りは僅か。器にスープを注ぐ



速度も、次第に上がっていく。

そうして最後の器にスープを注いだ時、それを渡す肉球はそこにはなかった。そう、自分の分である。

「……よし、食べようか。お待たせ、イルル」

「にゃー。いただきますにゃ」

俺の横で座り込むイルルの、その横に俺も座り込む。彼女に微笑みかけつつも、俺は木製のスプーンを握った。彼女もまた、その肉球でスプーンをきゅつと握り、その中身を口の方へと流し始める。

まず、一口。スープを口へと流し込む。そこへ、瞬く間に溢れる旨み。

ガノトトスの骨を長時間煮詰めたその出汁の風味が、あつという間に鼻孔にまで拡散された。ガノトトスの出汁ブイヨンをベースに、その身や野菜で煮立てることによって出来たコンソメスープ。それが、このガノトトスープのコンセプトである。魚らしい淡泊な出汁がベースとなつているためか、スープの色は淡い橙色で、非常に澄んでいる。味もまた、優しく、そして大人しい口どけだ。べつとりと口内に残るようなものではなく、さらりと喉の奥に流れていくような、そんな味わい。そこに隠されたポツケレモンの刺激的な酸味が、スープの甘さを際立たせる。

「あー、いいなあこれ。シンプルにうめえ」

「にゃー。ガノトトスって、結構柔らかいんにゃね。ほろほろと身が崩れて食べやすいにゃ」

スプーンでガノトトスの切り身を崩しながら、口に運ぶイルル。俺を待っている時間を利用しては、良い感じにスープを冷ましていたらしく、はふはふとその切り身を口にしながらも満足そうに喉を鳴らしていた。

そんな彼女の姿に誘われるように、俺もガノトトスの肉を口に入れる。その味わいは、一言で言えばクセのない白身だった。その身自体の味は淡泊だが、スープの味を崩さない、調和のとれた味わい。そんなところだろうか。また、その身は柔らかく、歯を立てれば瞬く間にほろほろと崩れていってしまう。その断面からは、凝縮したスープの旨みを染み出してくる。ガノトトスの骨を出汁に利用しただけあって、その身との相性は抜群だ。

また、野菜ともよく調和している。ヤングポテトは柔らかく煮込まれ、甘い口どけによく合っていた。四つ足ニンジンの甘さにも唸るものがあり、切り身の合間の口休めに入れた味だ。スープによく浸されたオニオンの甘さも、これまた折り紙付きである。柔らかく煮込まれたそれは、スープの甘さを優しく助長してくれていた。

「……なんか、ほっこりするな。実家のような安心感っていうか、家庭的な味がする」  
「うにゃあ。優しい口どけだにゃあ」

ほうっと一息ついて、イルルの方を見る。彼女もその視線に気付いては顔を上げて、にこっと微笑んだ。そんな可愛らしい口に残った切り身の一部を指で掬いつつ、俺も口元を綻ばせた。

先程のせいで彼女の機嫌を損ねてしまったかと思っていたが、そうでもないようだ。恥ずかしそうに髭を揺らしつつも、照れた表情で笑う彼女を見ながら、俺は心の内でほっと胸を撫で下ろした。そんな様子を見ては、バターのように柔らかな毛並みを風に揺らすイルルが、こてつと小首を傾げている。

「なんか……あれだな」

「うにゃ？」

「このスープ、パン浸して食べたい味だな」

「にゃ、にゃあ……」

ふっと思ったことを口にしてみれば、イルルは困惑した様子で首を傾げた。釜の横のテーブルに器とスプーンを置いて、俺は立ち上がる。先程の海小屋に、パンやバターがあつたはずだ。それを取りに行つてくると、彼女に向けて言葉に変えた。

バターをたっぷり塗ったパンに、あのスープを浸したらどうなるのだろう。バターの塩っ気のある味と、甘みに溢れるスープの味わい。そこにレモンのアクセントが加わると、一体どのような味になるか、想像もつかない。イメージするだけで、涎が溢れてき

てしまう。

なんて考えながら口元を拭っていると、ふと見たことのある影とすれ違った。

小柄な体。アイルーらしい、淡い色の体毛。臆病一色に染めていたあの表情。それを、力強い表情に変えている。さらに、甲冑のような装備を身に纏っていた。

「……あれは、ニコか？」

思えば、あのネコまんまの時以来ではないだろうか。委縮した様子で、チコ村の浜辺に座り込んでいたあのアイルー。臆病なあまり、管理人さんからも呆れられていたあのアイルー。顔つきと装備こそ変わっていたが、その姿はあの時のままである。

そんな彼が向かったのは、器を持って座り込むイルルのところだった。ふと、イルルが彼のことをあやしていた当時の光景がフラッシュバックする。あれからも、チコ村であつた時は交流があつたそう。二人が並んでいる姿を見るのは、俺としては随分久しぶりな気がするが。

まあ、そんなことはどうでもいい。今は、あのスープにパンを浸すことが重要だ。そう感じながら、踵を返した、その時だった。予想だにしなかつた言葉が、背後から飛んできた。

「——イルルさん……僕、イルルさんが好きニヤ！ 僕と……僕と！ つ、付き合っ

くださいニヤ！」

く本日のレシピく

『ガノトトスープ』

・ガノトトスの骨類	……	300g
・ガノトトスの切り身	……	800g
・四つ足ニンジン	……	6本
・ヤングポテト	……	8個
・オニオニオン	……	7玉
・ポツケレモン	……	2個
・水	……	6L
・塩	……	……大さじ3杯
・昆布	……	……1枚
・草食竜の卵（卵白）	……	……1個
・胡椒	……	……適量

## 睡眠朦朧

ニコは、とても臆病なアイルーだったにや。モンスターどころか人間にすら怯え、チコ村から出ることができない。いつも砂浜で空を見上げて、流れゆく雲を眺める毎日を通<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>している。それが、ニコというアイルーだった。

でも、彼は変わったの。一人のハンターさんと出会った、その時から。

我らの団ハンターさん。

バルバレやドンドルマを中心に各地を飛び回るキャラバン隊の専属ハンターにして、両ギルドから厚い信頼を寄せられるハンター、その人にや。何でも、シナト村に伝わる古龍の討伐に成功し、ドンドルマの復興にも尽力した上に、襲来したクシャルダオラやオオナズチの撃退にも貢献したらしい。

ドンドルマギルドの最大戦力のうちの、三本の指に入る人材と言っても過言ではないと思う。それと同時に、その人に雇われるということは、オトモアイルーからしたら最も高級の名誉でもあるのにや。

そんな人にニコは勇気付けられ、ついには雇われることとなつたらしい。父親の形見

という武者ネコ装備を身に纏い、今日も今日とてハンターさんと共に狩りにいく。覇竜をも打ち破ったという我らの団ハンターさんに憧れるその姿は、かつての臆病な姿など見る影もないにや。管理人さんをはじめとしたチコ村のアイルーたちにも認められ、さらには女の子からの評判も良いみたい。

「——なんか、知らない間に凄く奴になってたんだなあ」

カーペットの掃除をする旦那さんは、ボクのこの説明を聞いて感嘆の声を上げていた。ブラシに絡まる白い毛を集めては、驚きの色で顔を染める旦那さん。彼にそうさせるのはその毛の量か、それともボクの話か。

一方、その毛を受け取ってはゴミ袋に詰めていたボクは、困惑の意を込めて耳を垂れさせる。ドンドルマの自宅の窓には、秋の終わりを感じさせる風が小さく唸っていた。「うにや……あの子も狩りで忙しくて、あんまり会う機会はなかったけど。でも、会った時はおしやべりしてたにや。でも、でも……まさか突然、あんなこと言われるなんて」目を伏せながら、行き場のない思いを溜息に乗せて吐き出す。そんなことをしても、その思いは一向に晴れないけれど。それでも、吐き出さずにはいられなかったのにや。ふっと、頭に触れる温もり。旦那さんがボクの頭を撫でながら、優しく微笑んでいた。

「確かに突然だったよな。イルルのように、パツと逃げちゃう気持ちも分かるよ。つか、あの時どうして即座に告白になっちゃったんだ？」

「い、一応少しは会話はしたのにな……」

——イルルさん、久しぶりニヤ。

————凄いいモンスターと戦ったって聞いて心配してたけど、元気そうで何よりニヤア。

——ニヤ？ 僕は、この通りピンピンしてるのニヤ。これでも強くなったのニヤよ？

——ニヤ、心配は、するニヤ。だって、だって僕は、僕は……！！

「……で、『イルルさんが好きニヤ！ 付き合ってくださいニヤ！』ってなった訳かあ」

「にやあ……そ、そうにや」

気恥ずかしさが勝ってしまつて、ボクの視界をボクの肉球が埋めた。相変わらず旦那さんは優しく頭を撫でてくれるけど、ボクは顔を上げれなかった。

まさか。あんなタイミングでいきなり告白されるなんて。どうすればいいか、分かんなかったにや。器もスプーンも放り投げて、思わず逃げ出してしまったにや。

「……ニコは、本当にイルルが好きなんだろうなあ」

「……にや？」



「好きな相手のことはさ、ついつい考えちまうもんなんだよ。今何してるのかな、とか、元気でいるのかな、とか。中々会えない相手のことなら尚更な」

「にやあ……」

「だから、ニコはイルルが心配だったんだと思う。肴瘴啖とか、この前の謎の古龍とか、こつちもこつちで波乱万丈だからなあ」

「……それで、告白にや？」

「イルルと一緒にいたかったのかもな。それでゆくゆくは一緒に我らの団に行こう、とかさ」

穏やかに、諭すようにそう言う旦那さん。優しい瞳で、ボクの目をじっと見てくれる。

——きつと、きつと旦那さんはボクのためを想って言ってくれてるんだと思う。普通のイルルとして考えたら、凄いことだもの。将来の相手が見つかると同時に、凄い職場も紹介してくれる。きつと、俗に言う玉の輿ってやつなんだと思う。

でも、それは普通のイルルだったらの話にや。ボクの気も知らないでボクに語り掛けてくれる旦那さんには、申し訳ないけれど少し苛々が募ってしまう。

「やったじゃん。今夜は赤飯でも炊くか」

「うにや……ボクは……」

「おめでたいことだなあ。大出世だし、将来も安泰するじゃん。俺は嬉しいよ。他に食

「いたいものはあるか？」

「にや、違うにや。違うにや、旦那さん……。ボクは……」

「ん？ あ、そつか。まずニコに謝らないとだもんな。返事も何もしないまま帰ってきたもんな」

「にや、それもあるけど、あるけど……。その……」

「大丈夫、俺も一緒に行くよ。謝罪の内容も考えないとなあ。……またネコまんまでも作って持って行くか？ それとも——」

「——ボクの話聞いてにやつ!!」

思わず、大声を出してしまった。

気付いた時には喉が震えた後で、あつと口に手を当てたけれど、もう遅い。突然の大声に、驚いたかのように目を見開く旦那さんの姿が、目の前にあつたのにや。

彼の言葉を遮ってしまった手前、このまま黙り込むことはできない。そう思つては、ボクは続きとなる言葉を繋げ始めた。

「……ボク、ボクね。違うの、そうじゃないの。ニコのことは好きだけど、でもそれは、友達としてなのにな。彼には申し訳ないけれど、付き合いたいとか、そういうのじゃないのにな……」

「……えっ」

「好きな人は、別の人……なのにな」

「……へえ。もつといい相手がいるのか？」

「う、うにやあ……それは……」

核心に迫るように、ずいっと旦那さんの顔が迫る。より近くなったその紅い両目に、ボクは思わずたじろいでしまう。でも、そんなボクの様子を見ては、旦那さんは静かに目を伏せた。そのまま、ボクから距離をとる。

「まー、その相手つてのがどうい奴かは知らないけど……よく考えた方がいいかもよ」  
「……にや？」

「一時、凄く熱を上げる時つてあるじゃん。あーいうのつて、冷めるのも早いんだよ。相手のことをよく知りもしない癖に全部肯定的に捉えちゃつて、あとあと現実が見えてきて……つてね。で、その後がめんどくさいんだよなあ。それよか、互いのことをじっくり知った上で付き合った方がいいと俺は思うけどね」

どこか懐かしむような目で、そこに少しの後悔の色を添えて。旦那さんは、諭しの色を露わにした口振りでボクにそう語りかけた。

彼がどんな経験をしてきたのかは、ボクには分からないけれど。でも、旦那さんの言葉は暗にボクの言葉を否定するもので、想いを反芻するうちに、ボクの瞳には涙が滲んできたのにや。

「ふにやつ……うにやああん……」

「えっ……おい、どうした。悪い、言い過ぎたか」

「にやつにやああ……どうせ……」

「あん？」

「ろうせえ……」

「……ろうせ？」

「——ろうしえっ！ らんなしちゃんには、ボクの気持ちはわかんによいのにやあっつっつ！！！」

涙と一緒に堰が切れたように、感情が溢れ出した。それを止めるのはもう不可能で、ボクは顔がぐちゃぐちゃになるのも、呂律が回らなくなるのも止められない。

——愛憎がごちゃまぜになった気持ち、止まらない。

「ボクがろおしてこんらになやんでるのとか、ほんとにすきにやのにい、らんなさんはいつもいつつもむとんちやくだし！ はぐらかして、あしらって、しよれで今にやつてわけわかんによいこと言いらして！ らんなさんは……いつも、いちゅもお！」

「なっ……なんだよ急に、何キレてるんだよ……」

「うっしやいにや！ いちゅもボクがろんな想いでいると思ってるのにやあ……」

「はあ………知るかよ！ 人の考えてることなんざ分かる訳ないだろバカ！」

「うにゃあ！ バカってゆつたにゃ！ バカってゆう方がバカなのにゃ！ バカー！」  
「あーもう！ お前なんだよこつちは氣遣ってんのに！ 何突然キレてるんだよ!? 意味分かんねえよ！」

「ほらにゃー！ ろうせ、ろうせ分かってにゃいつて分かってたにゃあ！」

ボクの感情の荒波に刺激されて、旦那さんの心も大荒れにゃ。感情は激しさを増していくのに、そんな旦那さんの様子をどこか冷静に眺めてしまう。でも、それでも心の激流は止まらない。目に映る旦那さんも荒れて、それがまるで大きな波と波がぶつかるように、互いの気持ちをどンドン荒らしていつてしまうのにゃ。

「何に怒ってるんだよ!? 赤飯が嫌なのか!? 奮発して寿司の方がいいのか!?」

「らんなさんはあ、らんなさんはあ……! いったちゆもご飯のことばかりにゃあ! もっと、もっとお! ボクのことを見てほしいのにゃあつ!」

—— あんなに、察して欲しいと思っていたのに。

旦那さんの要望の通り、ボクの口からつい本音が零れ落ちてしまったにゃ。あつと氣付いた時には、もう遅い。心はこんな荒れているのに、感覚だけは不気味なくらい冷静で。そのまま旦那さんを見ることができなくなつて。

「……はあ? 見てるだろ、いつも」

「違う、違うのにゃあ……そうじゃなくて、そうじゃなくてえ……!」

「……違うって言われても……どういふことだよ？」

「も、もう！ し、知らないにやあ!!」

「あつ、おい！ 待てよ、イルルツ！」

肝心なところでいつも頭がいっぱいになつちやうところ。ボクの悪い癖。

この前のニコの時も、そして旦那さんの前でも。ボクは脱兎の如く逃げてしまったの  
にや。



「はあ……やつてしまったのにや……。どうしよう……」

とぼとぼと、ドンドルマの路地を歩く。

旦那さんを大いに困惑させて、ボクもボクで頭がいっぱいになつちやつて。どうしよ  
うもなく家を飛び出してしまったけれど、このままじや旦那さんのところに帰ることも  
できない。問題を先送りにしてしまっただけなのになや。

「みやあ……でも、旦那さんに謝らなくちやにやあ……」

いっぱい、いっぱい。旦那さんに酷いことを言ってしまったにや。絶対に、旦那さん  
にしつかり謝らなきやいけないのになや。

でも、今は。今はその勇気がないのにや——

「おや？ イルルちゃんじゃないか。今日は一人かい？」

「にやつ？」

突然、後ろから声をかけられた。それにびつくりして、思わず尻尾を膨らましてしまったにや。

——けれど、その声は聞き覚えのある声で。恐る恐る振り返ると、そこには見覚えのあるシャドウアイ。モヒカンと筋肉質な体を携えた、顔なじみのおじさんが立っていたにや。いつかの、ブラキディオス製の鍋を買ったお店の店主さんだったのにや。

「あの兄ちゃんはいない……みたいだな。それに、どうしたんだい？ 目がとつても赤いぞ」

「うにや、うにやあ……」

しゃがみこんで、そつとそのシャドウアイをずらして。そうしてボクの顔を覗き込んで、優しい声でそう尋ねてくれる店主さん。その声に安心してしまったからかな。また、涙が溢れてきたのにや。

「——落ち着いたかい？」

路地を抜けて、少し開けた十字路の隅。そこに置かれたベンチで、ボクは店主さんのハンカチを借りては顔を拭っていた。ボクが足しげく通うそのお店のおじさんは、いつもと変わらない優しい笑顔でボクの話聞いてくれたのだった。

ニコのこと。

旦那さんのこと。

——ついさつき、旦那さんと喧嘩して、家を飛び出してしまったこと。

どこか薬品のような匂いを残すハンカチから顔を上げながら、店主さんを見上げた。心配そうにボクの背中を擦ってくれる店主さんの手。その武骨な手が、ボクの気持ちえを優しくほぐしてくれたのにや。

「そんなことがあったんだ。……大変だったね」

「うにや……旦那さんに、とても迷惑をかけてしまったのにや……」

「……まあ、喧嘩なんて、誰しもあるもんよ。おじさんだって、昔は喧嘩ばつかしてたしなあ。折が合わないってことは、何も異常なことじゃないんだよ」

「……そういうものなのかにやあ？」

涙も枯れてしまったかのように止まって、ようやくボクはハンカチを顔から離すことができた。濡れてしまったそれを快く受け取ってくれた店主のおじさんは、困ったよう



に微笑んでいる。旦那さんだけじゃなくて、この人まで困らせてしまうなんて。ボクは本当に罰当たりなのにな。

「それより、こんな路地で一人だと危ないよ。最近、物騒な噂とかもあるんだから」

「うにや……そうなのにな？ でも、今は店主さんがいてくれるから大丈夫ですよ」

店主さんの困った様子は、ボクの心配からなっているのかな。それは旦那さんと喧嘩したことが、それともその噂というものに関することか。

そのどっちなのかは分からなかったけれど、どちらにせよボクは有り難かったのにな。胸の内を話せて、またそれを聞いてくれる人がいるっていうのは、とても大きいのにや。

「……で、これからどうするんだい？」

「にや……旦那さんに、謝るにや」

「……今すぐ、できる？」

「…………にやあ……」

これからを考えると、どうも胸が苦しくなってしまう。店主さんは優しくボクの様子を窺ってくれるけど、どうしても、今すぐは行動できそうにないにや。

旦那さんは怒るかな。呆れるかな。ボクのこと、嫌いになっちゃったかな。相変わらず人の気持ちには無頓着だから、ボクが何に怒っているかもよく分かってない様子

だったにや。きつと、きつと今行っても——

「……じゃあさ、少し気分転換しようぜ」

「……にや？」

「この路地の奥の方にさ、出店が結構並んでるんだ。そこで何か食って気持ち切り替えて、その後あの兄ちゃんのとこに行こうじゃないか」

そう言つて立ち上がる店主さん。その武骨な腕が指差す通りは、ボクもまだ足の踏み入れたことのない狭い路地だった。でもその奥には赤い提灯のようなものがいくつか浮いていて、店主さんの言うように出店が並んでいるようにも見えた。

どうせ、ここで立ち往生していてもしょうがないにや。それよりは、店主さんの言う通り気分転換してみるのもいいかもしれない。

「とりあえず、おじさんは少し飲み物買つてくるよ。その間にどうするか決めといてくれ」

「にやっ……」

未だベンチに腰掛けるボクの返事もまたず、店主さんは出店の方へ歩き出した。通りの入り口あたりに位置する小さなコーヒーハウス。「ビーンズレター」と書かれた看板を掲げたそのお店の前で、店主さんは立ち止まる。

「……そうにや、手紙……」

ふと、チコ村で書いていた手紙のことを思い出した。旦那さんに見られそうになつて、慌てて隠した手紙。旦那さんが海小屋を後にしてから、何とか書き続けた手紙。

それでも、完成はしなかつたけど。だけれど、ボクの気持ちは書いたのによ。未完成だけど、文章で伝えた方が、ボクが言葉にするよりもずっといいかもしれない。

——そうしよう。今は少し気分転換して、その後はちゃんと旦那さんに謝ろう。そして、自分の気持ちをちゃんと旦那さんに伝えるのによ。

「……店主さん、ごめんなさいによ！ ボクもいきますによ！」

「おっと、座つてていいのに。イルルちゃんはこれでよかつた？」

「によ、抹茶ラテによー！ ボク、これ好きですよ。有り難うございますによあ」

店主さんの渡してくれた紙コップは、妙にひんやりしてて。そこからは甘く優しい抹茶の香りがして。旦那さんとユクモ村に行つていた時を思い出すよな、そんな香りだつたによ。

「どうする？ 出店、行つてみる？」

「によあ。行きますによ。その後は、ちゃんと旦那さんに謝りにいきますによ！」

「そつかあ。じゃあ、こつちこつち」

店主さんに誘われるまま、ボクも足を踏み出した。そつと喉に流し込む抹茶ラテが、ボクの気持ちを後押しするによ。

柔らかく、優しく広がる甘み。そこに残る、控えめな渋み。抹茶単体だったら、もつともつと、ボクがぎゅつと目を瞑るような渋みが溢れてくるにや。でも、これはラテにされてるからかとおもってもまるやかになっている。香りもどこか、抹茶とは違う上品さを残してて、何だか異文化交流を感じさせられる味だにやあ。ひんやりした氷もまた甘さを引き立てるのにや。

「イルルちゃんは何を食べたい？」

「にや、何でも大丈夫……にや、しまったにや。財布……」

うっかりしていたにや。家を飛び出してきたのだから、財布なんて持ってきている筈がなかったにや。

財布がないことに気付いては青ざめる。そんなボクを、店主さんは快活そうに笑い飛ばした。

「いいよいよ、今日はおじさんの奢りだから」

「にや、でも……」

「イルルちゃんはお得意さんだからね。おじさんの大事な大事なお客様ってな」

そう言つては、店主さんはイカ焼きを渡してくれる。金網で炙り焼いたのがよく分かる表面に、甘い香りのするタレが滴っていた。小ぶりな体を輪切りのように切り込みを入れられて、さらには串を通されたその姿。立派なイカ焼きにや。

「にや……いいんですかにや?」

「たまにはこういうのもね。こつちだつていつもお世話になつてるし。それにこれからもお世話になるつもりだからなあ。さあさあ、食べな」

そんな風に言われたら、断れないのにや。でも、店主さんがそう言つてくれるのなら

店主さんに促されるままに、ボクはイカをかじる。満足そうに頷く店主さんの様子を見ながら、イカを少しずつ口に入れていくのにや。

甘辛く仕上げたタレは、炭火焼の香りによく合っている。一口食べて、鼻孔で香りを感じること、ボクは改めてそう感じたにや。イカ特有の弾力ある身に、輪切りされたその断面に。濃厚なタレがよく染みていて、とつても美味しいの。タレと身を、炭火で結びつけるように焼いたような、そんな味。この甘辛さがクセになるにや。

「こういうのはどうだい?」

「にやあ、ベビーカステラにや!」

それは小さくて、丸っこくて。外はさつくり焼けているけど、中はふんわり甘い香り。ほんのりとした砂糖の甘さが、口いっぱいに広がってくる。小さいから食べやすく、一つ、また一つと口に運んでしまうのにや。このお手軽感が魅力なのにや。

「ほらー、たこ焼きもあるよ」

「にやゝ、いい香りだにや……」

店主さんが見せてくれたのは、ソースの掛かった八つのかたまり。湯気のせいかな。何だかボヤボヤとしてよく見えないけど、香りはたこ焼きのそれなのにや。

かじると、外はかりつとしてる。でも、そこからとろつとした中身が流れ出てくるのにや。とつても熱い。猫舌のボクには、とつても熱い——はずなんだけど、今日は何だか大丈夫にや。熱いんだけど、何だか舌が鈍いつていうか。このまま食べることができそうにや。

そんなとろとろになった小麦粉に、ソースの旨みと鰹節の風味が絡まって。終いにはぷりっぷりのタコの足を取り込んで。カリッとした快音と、とろつとした味わいと、ぷりつとした食感が混ざり合う。凄い食べ物にや。

「熱かったかい？　じゃあこれ、今度は冷たいやつ」

「にやあく、かき氷にやゝ。これはなに味にや……？」

「オレンジだぞゝ」

「ふみやあく、オレンジにやゝ」

出されたかき氷は、ひんやりしてる——

はずなのに。どこか、ぬるいような、温度が分からないような、そんな不思議な感覚だった。少しづつ、瞼が重くなってきたような、そんな気さえしてくるにや。

しやりしやりとした氷の食感も、オレンジの爽やかな酸味も、かき氷特有の爽快感も、どこか上の空のような、そんな気がした。

「——にやーん、あまいにや〜」

ふわつとしたそれは、とつても甘くて。そのくせ、舌に乗るとさらつと溶けちゃう。わたがし、と店主さんは呼んでいたにや。いつかのキャシーさんが食べていたものも、これだったような気がする。夢うつつのような頭を思い起こしてみたものの、いまいち明確なイメージは出てこなかったけど。

旦那さんは、何を考えながらボクを諭そうとしたんだろう。キャシーさんは、どんな想いで旦那さんと一緒にいたんだろう。ベンチに腰掛けては、ふわふわとわたがしを見るけれど。そんなことをしても、一向に何も浮かんでこない。何も分からないのにや。「イルルちゃん、わたがしは美味しいかい？」

「はいにや〜。あまくてふわふわで、おいしいのにや〜」

そんなボクの横に腰かける店主さん。相変わらずのシャドウアイに光を映しながら、口角を्यानわり上げていた。

そつとわたがしを舐めると、甘さが直接口の中に入ってくる。そのふわふわの通り、

食感は口の中で霧散して。その代わりのように、飾り気のない甘さだけを残していく。少し甘ったるいのかもしれないけど、これはこれで美味しいのいや。心も、気持ちも、ふわふわしていくのいや。

「にしても、イルルちゃんは相変わらず綺麗な毛並みをしているねえ」

「にやー?」

「毛が細くて、きめ細かくて。本当に器量がいいねえ」

「ふにやあー」

「もし噂が本当なら、イルルちゃんは誘拐されちゃうかもしれないねえ」

「にやー。うわさにやあゝ」

「知らないのかい? アイルーが行方不明になつてゐるっていう噂」

「ゆくえ……ふめい? ふにやゝ、はじめてきいたにやゝ」

「そつかあ。まあ所詮噂だしねえ。あの兄ちゃんも触れなかつたんだねえ」

「うみやあ、だんなさん……だんなしやああん……」

何だか、とつても瞼が重いや。凄く、頭がぼーつとするにや。

——さつきまで。さつきまで、あんなに覚悟を決めていたのに。店主さんと少し気分転換してから、旦那さんのところに謝りにいくつて、あんなに決意したのに。今はどうにもこうにも、身体が重いや。頭が重いや。どうしてだろう。



「……そろそろ、か」

「ふにやく……?」

「そろそろ、効いてきたな」

「にゃー?」

店主さんが、何かボソツと呟いた。だから、店主さんの方を振り向いて――

不意に、何かか足を擦った。薄く鋭い何か。それが、ボクの右脚を撫でている。それは、店主さんの手から伸びた何か。その武骨な手で握られている、何か。

「……抹茶ラテだよ」

――何度か、狩りの中で見たことがある。ハンターさんが投げているのを、見たことがある。

「やつと、回ってきたみたいだな。……ラテに入れた、睡眠薬がよ」

「……にゃ……?」

捕獲用投げナイフ。捕獲用麻酔液に浸された、鋭い刃物。店主さんが持っていたのは、ボクの足を裂いていたのは、それだった。あの麻酔特有の鼻に突く臭いが、やんわりとボクの鼻を撫でる。

痛い、とは感じなかった。他の感覚も分からなかった。ただ、頭だけが重くなる。体が遠くに行ってしまうような、そんな気がした。

目の前が暗くなって、路地の風の音も消えていく。足を擦るナイフも、もう何も分らない。

——そんな中、店主さんが溢した最後の言葉が、ボクの耳にこびりついた。

「……危ないって言ったろ？ 誘拐されちゃうよ、ってさ」

## 拉麵食いの若死

熱い麵をすすする。なめらかで、艶やかで、それでいて深みがある。そんなきらめくスープの海に身を浸す、黄金に染まった線の集まり。ただ小麦粉をこねて固めただけで、本当にこんなものができるのだろうか。なんて疑いたくなるほど、精巧にできた麵。その味わいは甘く、優しく、そして主張が少ない。主張が少ない故に、様々な色に染まることができる。

例えば、あつさりとした塩ベースのスープと共に。その時は、スープに浮いた丸鳥の脂をいくつも取り込んで、あつさりとした、されど粘り強い味わいへとその身を変貌させる。

時に、煮玉子で。半熟になるよう計算しつくされたその卵は、裂けば甘く溶けた卵黄をスープに滲ませる。それを、そのまま逃さないように。柔らかく、されど頑丈になった卵白に、その出汁の旨みを充分に吸った卵白に乗せ、溢さないように口に含むのだ。さらにそこに麵を投入すれば、その麵は卵の形容出来ない旨さと一体化するだろう。

また、肉ならば。丹精込めて育てた焼豚。モスの旨みを逃さぬよう、特産キノコの戻

し汁を利用したモスチャーシユーを、この麺と同時に口に含む。それはうどんのような太さではなく、かといって細麺というほどの細さでもない。標準サイズの、もちもちとした食感とのどごしを併せ持った極上の太さである。そこに、肉の脂と食感を混ぜ合わせればどうなるか。想像するだけで心が騒ぎ立ってしまう。

「……美味い……」

そう、それは盾斧のように。剣と盾という別の存在が、まるでパズルのピースの如く一体化し、斧となる。そんな感覚が襲い来る。

この麺と肉も、全く別のものである。しかし口の中で含めば、抜群の相性を発揮する。それも、元々は全く別のものであると、にわかには信じられなくなるほどの。

麺の主張の弱さを、肉の勇ましい味が覆い尽くし。肉のクセの強さを、麺のまろやかさがカバーする。互いが互いの弱点を補い、強さを補強する。言葉にするのも憚られるような、最高の相性だ。

「こりゃ、箸が止まらんねえ！」

そこに、スープを投入した。丸鳥を香味野菜を丁寧炊き出したそのスープ。濃厚な豚骨スープや、一般的な醤油ベースのものとはまた異なった、落ち着いた味わいだ。塩ラーメンとはよく言ったもので、醤油、味噌、豚骨といったものとは一線を画す、あつさりとして切れのある旨みに満ちている。それが、口の中の麺と肉に絡んできた。

肉の脂が唾液と共に喉に落ちたものの、その身や麵は口内でまだ咀嚼されている。その結果水分が失われていくこの状況下に待ったをかけるのが、このスープだ。旨みと甘み。そして、細かく刻まれた酢橘による、柔らかな酸味。それらがスープの味をより光らせていた。味の強い豚骨や味噌では難しい、塩ラーメンだからこそでできる味だろう。そんなこんなで潤いを得た肉と麵は、潔く喉の奥へと消え去っていった。それでも足りない水分は、お冷で補給する。この麵を呑み込んだ後の水が堪らない。ただの水とは思えない旨さが、そこにある気がする。

「……ありやりや、もう麵がないや」

夢中になって頬張っていたのだらうか。気付けば、どんぶりの中にはもう麵がほとんどなく、刻みネギやメンマが寂しそうに浮いているだけだった。

「おやつさん。替え玉一丁！ あ、あと『青さ』も頼む」

「へいまいどー」

足りなくなつたなら、増やせばいいじゃないか。そんな思いで、替え玉を追加する。

ドンドルマで稀有なラーメン屋を営むこの店は、替え玉に少しばかりのアクセントを加えている。少量の胡麻と香りネギの追加。生姜仕立てのまだらネギの刻みを、そして胡麻の風味を。替え玉の麵へと添えて出すのである。

また、このあつさりとしたスープには、青さが非常によく合う。青さとは、ヒトエグ

サとも呼ばれ、主にユクモ地方で親しまれている海苔の仲間だ。海藻の一種であるため、ここドンドルマでは食材という認知がされていない。このように食べられる店も、滅多にないのではないだろうか。

「お待ちどうー！」

茹で上がった麺を器に乗せ、そこに胡麻とネギを少量加える。最後に生姜エキス配合のゴマ油。当店自慢の替え玉の完成である。

「おー……このポリウムが、またたまんねえや……！」

左手で持った器を傾けて、中で眠る麺の塊をスープへと落とす。橙と黄色を黄金比率で混ぜ合わせたかのようなその泉へ、まるで純金のような麺が舞い降りた。

当初よりも麺が多いような、そんな気さえする。スープから身を乗り出すそれらを箸とレンゲで抑え込みながら、その圧倒的なポリウムに俺の口内はいよいよ大洪水を起こし始めた。肴瘴啖の奴もかくやと言うほどの、圧倒的な唾液量だ。

そこへ追加の青さも投じてみれば、黄金の世界に少量の闇が生まれる。これまでの、丸鳥と野菜の世界に。この塩ラーメンの世界に待ったをかける、大革命の始まりである。

「……………っ、これは……これは旨すぎる……ッ！」

海だ。大波が苛烈に岩肌を打ち付ける。荒々しくも煌びやかな世界が、そこにあつ

た。

麵をすすった瞬間鼻を突き抜ける、直情的な磯の香り。青さの一枚一枚がスープに身を浸し、どころかスープの旨みをバネにその味を増幅させている。勢いよく吹き抜けたそれは、一瞬で俺の口の中を磯へと変貌させ、鼻を介して鮮明なイメージを俺の脳に叩き付けた。

この味は、海苔のそれに近い。しかし、一枚一枚が細かいために食感のほとんどがスープに溶けて、ただその柔らかな風味だけを残している。麵のまろやかな噛み応えを邪魔せず、それでいて味わい深さを増幅させる。見た目は地味だが、その力強さは希少種レベルだ。これがまたあつさりとした塩ベースのスープによく合うのである。いや、潮ベースとでも呼んでしまおうか。

「やべえ、手が止まらねえ……！　麵が、麵が……ッ！」

気付けば、俺の右手は狂暴走状態だった。体が麵を求め続け、顎は休むことを知らず、右手はそんな俺の欲求のために器の中の麵を掻き集め続ける。あんなにポリユームのあつた麵も、気付けば半分ほど消えていた。

「待て、落ち着け。ここでもう一つアクセントを入れないと……」

そう。俺はその右手を必死に抑えては、視線を器から離れた。目の前の、当店の説明を書き綴ったプラカードへと。

——<sup>ガーチンタン</sup>丸鳥青湯は、丸鳥と香味野菜をゆつくり丁寧に炊き出したスープです。あつさりとした切れのある旨み特徴的！ 青さを加えると磯の香り漂う旨みに。胡椒を振り撒けば、スパイシーな世界が広がります！

そう。ラーメンの中には、清湯<sup>チンタン</sup>と白湯<sup>バイタン</sup>と呼ばれるスープが存在する。それはユクモ地方より西側の都市で開発され、俺が愛用するガルルガXメールのデザインとは同郷の友とも言える存在なのである。

俺が今食べているのは、前者。つまり清湯だ。丸鳥の鶏ガラを沸騰しない程度に沸かしては、時間をかけて旨みを凝縮していく。その後強火で沸騰させて白濁とさせたものが白湯スープとなるが、不思議なことに清湯の方が旨み自体は濃いのである。当店ではそこに香味野菜も加えているため、香りも相当に強い。

そんな、淡い色のこのスープに。切れのあるこの旨みの中に。胡椒が詰められた筒を、倒しながら振る。中に詰められた香りと辛味の粉塵を、このスープの海へと落とししていく。

「おいおいおい……嘘だろ。ここに来てまだ香りが変わりやがる。より一層、刺激にあるものになってんじゃねえか……ッ」

箸に絡ませる黄金の束。そこに乗ったネギ、胡麻、そしてあの胡椒。胡椒の鼻をくすぐるような、香辛料らしい爽やかな香りが。今、この麵に乗っているのである。



何度も変容を繰り返すこのラーメン。その変身つぷりは、ザボアザギルを思わせる何かがある。そんな、奴のように荒々しい香辛料の香り。その香りの塊を、俺は一思いに口へと放り投げた。

一瞬で、香りが弾ける。喉が辛味で熱くなり、口の中は一気にタンジアの市場へと変貌した。

磯が。荒い岩肌だった磯が、一瞬で港町に発展したような。その一口は、俺を旨みの大市場へと導いていった。



「ふう〜、喰った喰ったあ〜」

最後のスープを飲み干して、お口直しにお冷を投じて。

——どうしてラーメンを食べた後のお冷はこうも美味しいのか。口の中を清らかに洗い流してくれるそれは、やはり何度口に含んでもただの水とは思えない。どこかの食通が、「まるでラーメンの一部のようだ」という言葉を残していたが、まさにその通りだと思う。

そんなこんなで、俺はラーメン屋を後にした。ドンドルマの路地裏へと再び身を投げ

た俺は、家へと続く一本道へ脚を踏み入れる。

沈みゆく日を眺めながら。

左右で異なる足音に耳を傾けながら。

ぼんやりと物思いに耽りながら——

——そろそろ、帰って来てるかな。

昨日、家を飛び出してしまった相棒。何故か大泣きして、俺に怒り心頭といった様子だったオトモアイルー。彼女は、結局昨日は家に帰ってこなかった。どうやら相当怒っているようだ。あの甘えん坊が、一日帰ってこないとは。

それでも、家を飛び出してからもう二日目の夜である。流星に、流星に今には帰ってきているだろう。

「……どうやって仲直りしようかなあ」

一体彼女が何に対して怒っているのか、俺には分からなかった。元々、人の気持ちに關しては考えることが苦手な性質だ。きつと、このまま考えていても分かることはないだろう。それならばいつそ、直接彼女に聞いた方が早いし確実とも思う。

——まあ、帰ってきてきたら聞けばいいか。

「やつほ—— シガレット——」

なんて物思いに耽っていたら、突然後ろから肩を勢いよく叩かれる。驚いて振り返れ

ば、純白の鎧に薄い金の髪を柵引かせる少女の姿があった。

「いつてえ！ ルーシヤお前ツ、何で話し掛ける時に叩くんだよ！」

「なんかシガレット、ボーっとしてたからつい」

「つい、じゃねっての……」

全く反省の気のない様子で笑う彼女は、俺と同じくG級ハンターとして活躍しているルーシヤである。夕陽の光をその金の髪が反射して、どうにもこうにも目に痛い。いや、痛いのは肩だけでも。

一方で、彼女は俺の横へと並ぶようにしては歩を進め出した。その姿は、さながら俺と同行するかのよう。

「……なんだよ？」

「イルルちゃんに会いたいから、シガレットの家に行ってもいい？」

「えー……。まあ、別にいいけどさ。でも、あいつ家にいないかもよ」

「え？ 今日はどこかおでかけしてるの？」

「おでかけっていうか、なんつーか……家出？」

「は？」

あのおちやらけた様子からは一転、途端にドスの効いた声が飛んできた。ケラケラ笑っていたあの顔は、一体何処に行ってしまったのか。威圧的な表情だけがそこにあ

る。目が全く笑っていない。

「いや、え、どうしたんだよ……」

「アンタ……イルルちゃんに何したの……？」

一体何をしたか詳しく話せ。そう言わんばかりの恐ろしい目に、俺は小さく息を吐く。

ここの態度を変えられてしまつては、俺としても不服である。しかし俺一人では、イルルとお互いが満足できるような仲直りをするのが難しいような。そんな気がするのも事実だ。ここは、彼女の友人であるルーシャの力を借りるべきなのかもしれない。

「……あのさ、実は——」



イルルがニコというイルルに告白されたこと。

そのためか彼女は困った様子だったこと。

俺はそれを祝福したこと。

そしたら、彼女と喧嘩してしまつたこと。

どうしてイルルが怒っているのか。何も分かっていないと言われたが、本当に俺はそ

れが何か分からないこと。

それらをまとめ、話し終えた後、俺はもう一度息を小さく吐いた。

目の前のルーシヤは、ただ無表情で俺の話を聞いていた。何とも冷めた表情で、俺の言葉を反芻している。

さて、何て返してくるか。そう思いながら彼女の様子を窺つてくると、不意に何かか飛んできた。それは随分と鋭い何かで、俺の頬に当たっては、張りの良い音を立てながら弾けた。

——飛んできたのは彼女の右手。俺の頬が、熱を帯びては痛みに吠える。

「……なっ……なん、だよ……」

「——カ」

「は?」

「——アンタ、バツカじゃないのっ!!?」

ビンタに、突然の怒号。普段の彼女の様子じゃ全く想像できないその剣幕に、俺は思わず言葉を失う。しかし、そんな俺の様子もお構いなしに、彼女は俺の胸倉をつかんできた。ずいっと、その碧い両目が俺を睨む。

「呆れたわ……アンタ本当に何も分かってなかったのね! イルルちゃんがあんなに頑張ってたのに、アンタは全く考えもしなかったっていうの!? 信じられない……っ」

「……………何が……………えっ、何を……………」

「私とアンタが闘技場で戦った時だつてそうなのに！ アンタ、それでもイルルちゃんの相棒なのっ!？」

「は……………え……………?」

一体何を言っているのか、まるで頭が追い付いてこない。碌な返しもできないまま、俺の口は音のない開閉を繰り返すだけだった。

そんな俺の様子に嫌気が差したのか、彼女は俺の胸倉から手を離れた。その華奢な肩は、静かに震えていた。

「……………アンタはさ、イルルちゃんのことどう思ってるのよ?」

「えっ……………そりゃ、頼れる相棒だよ……………」

「……………それだけ?」

「……………自慢のオトモだ」

「それで?」

「……………あんな器量のいいイルルは、そういない……………凄く良い子だと、思ってる」

先の見えない問いを投げかけてきた癖に、彼女はうんざりとした様子で溜息をついた。その瞳には、諦めの色が差しているような。少しだけ、色が変わったようにも見える。

「……分かったわ」

「……うん？」

「アンタが、イルルちゃんのことをただのオトモとしか思ってたことが、よく分かったわ」

「ただのオトモって……。そうじゃなくて、俺は——」

「旦那！ 雇い主！ 狩りの相棒！ どうせそんな風にしか考えてなかったんでしょ！ だからイルルちゃんが何に悩んでいるのか分からないのよ！」

物凄い剣幕だった。本当に、心の底から怒っているのが伝わってくる。

しかしその言葉は、確かに俺の胸を正確無比に貫くもので。どうしてそこまで分かっているのか、と。俺の気持ちにも波が立ち始める。

「もうこの際だから、私が言うわ……」

だって、待ってくれよ。それ以外にどうイルルに向き合えばいいんだろう。

俺は人間で、ハンター。彼女はアイルーで、オトモアイルー。俺たちはそれ以外誰になることもできないんだ。

俺は彼女に給料と衣食住を提供することによって、狩りの支援を得る。彼女は給料と衣食住を得る代わりに、俺の狩りをサポートする。そういう関係だったじゃないか。他にどんな見方があるというのだろう。

「イルルちゃんは……イルルちゃんはね……っ！」

だって、まさか。そんなまさか。

俺は人間で、彼女はアイルーなのに。そんな——

「——イルルちゃんは……っ！ アンタのことが好きなのよ！ 旦那とか、雇い主とかじゃなくて！ 一人の女の子として、アンタのことが好きなのよっ!!」

たまたまいルルは、甘えん坊な気質だと。俺はそう思っていた。

まだまだ年若い彼女だ。若いアイルーほど、人間に対しても懐っこい傾向がある。だから、よく擦り寄ってくるのは、俺のことを雇い主として信頼してくれているのだと。俺はそう認識していた。

けれど、考えてみれば辻褄が合わないことも多々あった。

ルーシャと闘技場で戦った時の、不可解な言動。キャシーと一緒にいた俺に対する、困惑に満ちた表情。そして、先日の大喧嘩。全て、もしイルルが俺のことを好いているとしたら、と仮定してみれば、みな辻褄が合うのではないか。

「……嘘だろ、そんな。いや、だって……」



「……私はね、イルルちゃんがああの時の焼き肉パーティーに誘ってくれた時から、あの子の相談相手なの。当初こそ、私だつてイルルちゃんに凄く惹かれていたけど……今は、今は……」

「……………直接アイツの口から聞かないと、信じられねえや……」

「……………そうね。そのためにも、アンタたちは直接会つて話しなさい。特にシガレット。アンタに関しては、反省文が何か書いた方がいいわ。反省文とまではいなくても、謝罪の手紙、とかさ」

手紙。ルーシヤはそう口にした。

手紙。どこかで見たような、何とも既視感のある響きだった。

手紙。それもまた、イルルのよく分からない言動に関わつていたような——

「……………そうだ、手紙……………ッ！」

その言葉を認知した瞬間、体中に電気が走つた、なんて錯覚する。その電流に乗るかのように、俺は思わず走り出した。その動きは反射的で、考えるより先に足が出る。後ろから、ルーシヤが何か言いながら後を追いかけてくるけれど、俺は構わずに自宅への距離を縮めることに集中した。

そうだ。チコ村で、イルルは手紙を書いていたじゃないか。何故だか分からなかったが、俺に見られることを頑なに拒否していたじゃないか。

もしかしたら、あの手紙に答えがあるかもしれない。未完成のまま、ドンドルマに持って帰ってきたあの手紙。あれになら——

見えてきた自宅。その門の前に佇む、赤い鎧の少女。

橙混じりの金髪に、翡翠色のその瞳は。纏う鎧こそ変わっているものの、見慣れた友人——ヒリエッタだった。

「あ……シガレット。あの……」

「悪い、後にしてくれ」

何か言いたげだったが、今はそれに気を回している余裕がない。荒い手付きで門の鍵を抉じ開けて、そのまま自宅の庭へと踏み出した。

「ちよつ、こつちも大事な話なの！ 聞いてよ！」

「ああもうツ、何だようるせえな！」

負けじと、ヒリエッタも俺へと詰め寄ってくる。構わず自宅の戸棚を漁っては、イルルの書いた手紙を探す俺。そんな俺の背中を、訴えかけるように揺する彼女。

「イルルちゃんが——」

「ああ！ 今そのイルルの手紙を探してるんだ。悪いけど後にしてくれねえかな!」

戸棚へと釘付けた視線。それが、とうとうそれらしき手紙を捕捉する。丁寧に織り込まれたチョコ式のレターカードに、まだまだ拙いイルルの字。間違いない。彼女の手紙

だった。

やっと見つけたそれを手にとつては、ほつと息を吐いた瞬間。ヒリエッタの叫ぶような声が、再び俺の胸を貫いた。

「——イルルちゃんが、行方不明なのよっ!!」

く本日のレシピく

『<sup>ガーチンタン</sup>丸鳥清湯ラーメン』

☆スープ

・ 丸鳥ガラ	…… 2 kg
・ まだらネギ (香味野菜)	…… 1本
・ 生姜	…… 1欠片
・ にんにく	…… 1欠片
・ 水	…… 5 L
・ モガ魚醤	…… 超微量
・ 干し特産キノコ	…… 3本
・ ワカメクラゲ	…… 20 cmほど

## ☆一杯分

- ・ 酢橘（刻み）  
……………適量
  - ・ 塩  
……………2 g
  - ・ 料理酒  
……………小さじ2杯
  - ・ にんにく（すりおろし）  
……………少量
  - ・ モスチャーシュー  
……………30 g
  - ・ 特産キノコの戻し汁  
……………適量
  - ・ まだらネギ（刻み）  
……………20 g
  - ・ ユア水菜  
……………8 g
  - ・ 特産タケノコ（メンマ）  
……………10 g
  - ・ 煮卵（一般鶏）  
……………1個
  - ・ 麺  
……………130 g
  - ・ 青さ  
……………10 g
- ☆替え玉
- ・ 麺  
……………150 g
  - ・ まだらネギ  
……………15 g
  - ・ 白ごま  
……………少量

・生姜配合ごま油

……適量

## 食生夢死

だんなさんへ

だんなさん いつもありがとうにや

このおてがみも 日ごろのかんしゃのきもちをこめたのにや ぜひよんでほしいの  
にや

なんでてがみかかっていうとね なかなか口ではいいにくいことをだんなさんへつた  
えたいのにや

ボクね だんなさんのことがすき

つよくてかつこよくてやさしくておもしろいだんなさんがだいすきなのにや

このすきは だんなさんだけのすきにや

だんなさんとずっといっしょにいたい

いっしょがいのばーとなーでいたいのにや

だんなさんはいつもいっしょじゃないかーっていいそうだけど

わかるかにや わかってくれるかにや

ボクは――

「――ツツツんの、畜生がッ!!」

思わず気持ち先走る。怒りとも、焦りとも、高揚ともとれないそれは、もはや一つの感情として名付けることができなさそうだ。それが俺の体を駆り立てるが、状況は全く進展しない。器に入り切らずに溢れ出した思いは、壁を蹴りつけるという行動へと変貌した。

壁がへこみ、表面が割れる。奥に詰められた石材には亀裂が走った。俺の右脚にも、鋭い痛み亀裂が走る。

「ちよ、ちよつとシガレット……少し落ち着きなつて」

「これが落ち着いていられるかよ!?! くっそ……くっそッ!」

困惑した様子のヒリエッタを余所に、今度は左脚で壁を蹴りつけた。流石に覇竜の足には耐え切れなかったようで、奥の石材も音を立てて割れ落ちる。足の方はといえば、義足の付け根こそ痛むものの、足先への痛みは全くなかった。その代わりのように、俺の心が刺されるように痛む。

——イルル。

俺のオトモアイルーで、大切な相棒。いつも笑顔で、俺のことを気に掛けてくれて、優しく俺のことを旦那と慕ってくれていた。

そんな彼女の、本当の想い。俺が考えもしなかったその気持ち。アイルーであるのに、人間の俺のことを好きだと想ってくれていた。慣れない手紙で、その気持ちを書き綴ってくれた。

それに全く気付かないで、空回りもいいところなアドバイス押し付けては、彼女の気持ちを殺そうとした俺。無神経な自分の言動に腹が立つ。彼女のことを分かったつもりでいて、何も分かっていなかったのだ。俺はなんて最低な相棒なのだろう。

「あ、あのさ……さっき郵便屋のアイルーが手紙持って来てくれたよ？ アンタのこと怖がって、逃げちやっただけだ」

「手紙……誰からだッ!？」

少し引き気味にそう話しかけてきたのは、俺に発破をかけてくれたルーシャだった。ヒリエツタより色の薄い髪を棚引かせながら、俺に一枚の手紙を手渡してくる。

手紙。

イルルが書いてくれた手紙。慣れていないのがよく分かる、拙い言葉のあの手紙。それを読んだばかりのせい、手紙と聞いただけで俺の意識は反応した。ルーシャからそ



れを受け取っては、慌ててその包装を破り開ける。

「……………ツツ師匠かよああもう！ 今雪山とかどうでもいいわくっそー！」

そこに書かれていた手紙は、師匠から送られてきたもので、ご丁寧にも今の状況報告と雪山のオーロラの自慢に満ちていた。苛々が募りに募った俺は、その手紙を勢いよく破り捨てる。

「ちよ、アンタ荒れ過ぎでしょ……………」

「これが荒れずにいられるかってんだ……………ッ！」

師匠の状況なんて、今はどうでもいい。

イルルが、イルルが無事かどうか。それが問題なんだ。

—— 全ての原因は、数刻前のヒリエツタの話。彼女は、イルルが行方不明だと言った。それが始まりだった。

「……………どういうことだよ？」

「あのさ……………イルルちゃん、家にいないよね？ シガレットは、今あの子がどこにいるか分かる……………？」

「いや……………訳あって昨日喧嘩してさ。あいつ昨日から家を飛び出しちまったんだけど

……」

「……じゃあ……やっぱり……」

悪い予感が当たった。そう言わんばかりに眉を歪ませるヒリエツタに、俺は困惑する思いを隠すことができなかった。

イルルが行方不明。確かに彼女はそう言った。イルルが昨日から何処かへ行つてしまったのは事実。しかし、それを行方不明とするには些か話が飛躍し過ぎなのではないだろうか。

「……昨日、イルルちゃんがこの奥の路地にいるの、見たんだ」

「……何?」

「知らない男の人と一緒にいて、さ。何か話し込んでる様子だったけれど」

「……それが、行方不明の話にどう関係すんのよ?」

そう口を開いたのは、俺に罵声を浴びせながらついてきたルーシャだった。思いがけない顔にヒリエツタは少し言葉を選び直したようだったが、静かに目を伏せた。

「その時は、別段気にしてなかったのよ。イルルちゃんの知り合いなのかなって。でも、考えてみたらシガレットなしであんな治安の悪い路地にいるのも変だし、何だか様子もおかしかったし」

「様子……?」

「うん。まるで、睡眠弾でも撃ち込まれたみたいだな……」

その言葉に、俺の背筋が静かに震えた。まさか、という思いが脊髄から脳へと駆け登ってくる。

その先の言葉は聞きたくない。そんな思いが、異様な速度で俺を蝕んでくるような。この感覚は、言いようのない不気味さで満ちていた。それでも、ヒリエツタの言葉を遮る訳にはいかない。次の彼女の言葉のために、俺は耳の神経を研ぎ澄ませる。

「……それで、もしここに来てイルルちゃんがいなかったら。シガレットが、行き先を知らなかったのなら思って。ほら、あの不穏な噂があるからさ……」

「いや……そんな、まさか……」

俺も、そうは思いたくない。いつかの辻商いの時にトレッドの言っていたあの噂。先日ヒリエツタと狩りに行った時に聞いた、あの噂。

——アイルーが、行方不明になる話。昨日まで元気になっていたアイルーが、ある日突然姿を消している。誰にも見つからず、どこに行ったのかも分からない。そんなもの、アイルーにはよくある話だと一蹴した俺を嘲笑うかのように、その噂が確かな輪郭を帯び始めていた。

「……その、知らない男ってどんな奴だったの?」

その言葉を繋げたのは、ルーシャだった。頭の中が白く染まりつつある俺の代わり

に、彼女は冷静に話を組み立ててくれる。

俺を論してくれたあの姿。それも相まって、今は彼女がとても頼もしく見えた。いつかの闘技場の時とは大違いだ。

「えつと……遠目だったからよく見えなかったけど、モヒカンにシャドウアイをつけたでかいおっさんだったわ……」

「……はっ」

飛んできたのは、見覚えのある響き。

「くっそ！ あの野郎なんで店にいやがらねえんだ！」

ヒリエツタの言葉を聞いて、俺はすぐさま家を飛び出した。

モヒカンにシャドウアイ。それだけ聞けば充分だった。かつてブラキディオス鍋を買ったあの雑貨屋。その店主で間違いないだろう。

考えてみれば、イルルはあの店主と仲が良かったはずだ。足しげく通っていたような気もする。で、あるならば。もしかしたら、彼女はそこに身を寄せているのではないだろうか。

そんな思いで店を訪ねてみれば、俺を迎えたのは冷たく沈黙する鉄のシャッター。今

まで夜にも営業していたはずのあの店は固く口を閉ざしており、何度叩いても反応はなかった。そう、まるで誰もいないかのような——

「その周りの出店の人に聞いてみたけど、確かにイルルちゃんはそのこにいたみたいよ。みんな、モヒカン男といったところを見たって言ってたもん」

流石のルーシャも焦った様子で、右手人指し指を曲げては悔し気な様子で噛んでいた。その表情は、非常に歯痒そうだ。

そんな彼女の補足の通り、俺たちは付近にある出店に聞いて回っていた。昨日、ここに真つ白なイルルは来なかったか、と。そう。師匠の手紙を破り捨てる、ほんの少し前のことだ。

確かに、彼らはイルルを見たと言っていた。モヒカンの男——あの雑貨屋の店主と一緒にいた、とも。つまり、イルルは昨日あの通りにいたのだ。しかし、店主と会って以降は、行方が全く分からなくなってしまっている。あの男と会ってから——

「……まさか。まさか、あのクソグラサン野郎……」

考えたくはない。考え過ぎかもしれない。しかし、今は他に手掛かりになるものがない。もし仮に彼がああのイルルが行方不明になる噂の核心に触れる人物だとしても、そうではないとしても。今は、彼にすぎるしかないのだろう。

「……ねえ。もう一回、あの店に行ってみない？　もしかしたら、今はそのモヒカンの人

が戻って来てる……かもしれないし」

「……まあ、そう、だな。行くしか……ねえよな」

絞るような声でそう言うヒリエツタに、俺も小さく頷いた。

正直なところ、あの店主が帰って来てるような気はあまりしなかった。しかし、今はそれ以外全く手がかりがない状況なのだ。藁わらにもすがりたい。そんな思いが俺を覆い尽くしている。

ルーシヤにも視線をやれば、彼女もおおずと頷いた。この思いは、おそらく共通のものだろう。とりあえず、あの店に行くしかない。そんな考えが、俺たち三人を繋いでいる。

「——話は聞かせてもらいましたよ」

そこへ割って入ってきた、落ち着いた声。思考に溺れ、気配に対して鈍感だった俺たちは、その声を聞いては慌てて振り返る。

家に門の横に立っていたのは、橙色のテンガロンハットに、細い目を神妙な様子でひそめる男。タンジアギルドのギルドナイト、トレッドだった。

「……トレッド……お前……」

「何だか酷く慌てた様子の郵便屋アイルーとさつき会いましたね。話を聞いてみたら、もしかして……?」

そう言つては、俺たちに向けて歩を進めてくる。そんな彼の右手には、奇妙なものがぶら下げられていた。

丸みを帯びた体に、細く長く伸びた首。その首にはいくつもの突起がついて、首から体に向けては鋭い弦がいくつも伸びている。その姿は、まごうことなき楽器だった。

「……トレッドさん……それ、何なの……?」

「前にシグに話してた噂のことなんですけどね、やつと尻尾が見えてきたんですよ」

そう言つて、トレッドは俺に向けてその楽器を突き出してきた。

おずおずとそれを受け取つては、奇妙な手触りが掌を襲う。漂う香りはどこか嗅ぎ覚えのあるような、そんな気がした。

「連中の狙いは、きつとこれです」

俺の手の中にある楽器。それに向けて物憂げに指差した彼は、細い目を薄く顰めては言葉を繋ぐ。

それは、この楽器の名前を告げる小さな小さな一言。

「——『三味線』、ですよ」



——擦れるような音が聞こえたにや。

それは金属が擦れるような、耳を搔き鳴らす嫌な音。じやららと音が響くのは、まるで鎖のような——

——鎖？

「……にや……ふにやあ……」

真つ暗だった目の前に、何とか光を灯そうとして。ボクは、頑張つて目を開けようとした。でも、瞼がとつても重いのにや。まるでくっついてしまったみたいに開かない。何とか頑張つて開けようとするけれど、いつものようにぱちつとはいかないのにや。

「う、ううん……にやああ……」

重いのは、たぶん瞼だけじゃない。何だか頭もとつても重い。夕ご飯を食べる前とかにうつかり眠ってしまった時の、あの気怠さ。あんな感じに、頭も体もとつても重いのにや。

ボクは、ご飯の前に眠ってしまったのかにや？

なんて思いながら、やっと瞼を全部開けた。だけど、見えてきたのは見覚えのない景



色。見たことのない建物——の中だった。

「はいは……」

とても薄暗い。ロウソクくらしいの薄明りだけが少し見える程度の、そんな薄暗さ。その弱々しい灯りが石造りの壁や天井を控えめに照らしていて、天井や床を伝う鎖に影を残していた。暗闇に合わせようと必死に目を凝らしてみれば、大きな竈から巨大な木のテーブル、朽ちた蒸気式の鋸などが見えてくる。

——もしかしてここ、工房にや？

なんて首を傾げようと思つたら、強烈な違和感が首に走った。じやらら、とさつき聞こえたあの音が、また耳の近くで騒ぎ立つ。それどころか傾げる首に何かが引つ掛かり、上手く首を傾げない。足も足で包帯が巻かれて動きにくかったけど、それ以上に首が変なのにな。

不思議に思いながら、ボクはそつと目線を首へと滑らした。そうして目に入ってきたのは、にわかには信じられないもの。

「にや……え……なに、これ……」

それは、首輪だった。金属製の鎖が伸びた、皮で出来た地味な首輪。それがボクの首に巻き付いては、鎖を介して壁のパイプに括りつけられていた。

見間違いじゃない。夢でもない。本物の、首輪。

——え、なにこれ。一体どういふことなの？

旦那さんが、ボクに悪戯をした？　まず最初に、そう考えた。いやでも、こんな不気味な部屋は家にはなかったはずにや。そもそも、あのご飯しか考えていない人がこんな手の込んだ悪戯をするかどうか。それも怪しいところにや。

「……にや、そうにや。ボク、旦那さんと喧嘩してたんだったにや……」

ふと蘇る、あの光景。困惑した旦那さんを前に、泣き崩れては訳分からなくなつてしまったボク。そんなボクに煽られて、怒つた顔をしていた旦那さん。そうだ、ボクは旦那さんと喧嘩中だったのにや。

じゃあ、これは罰なのかにや？　我儘言つて旦那さんを困らせたから、ボクはここに閉じ込められてしまったの？

いや、まさか。旦那さんがそんなことをするなんて。前のご主人ならいざ知れず、シガレットさんはボクにそんなことはしないのにや。

——だったら、これは——

「気が付いたかい、イルルちゃん」

「にやっ……？」

不意に、声が飛んできた。その声は、ボクが何度か聞いたことのある声で。思い違いじゃなければ、ボクが眠る前にも聞いていたような、そんな気がするにや。

鎖を鳴らして、首輪と首を擦らせながら、ボクは声が飛んできた方へと首を向ける。見えてきたのは、特徴的なモヒカンと、妖しく光るシャドウアイだった。

「……店主さん……？」

「うんうん、元気そうで何よりだ」

満足そうに頷いた彼は、手に持っていたお皿をボクに手渡してきた。

どうして店主さんがいるの？

ここはどこなの？

どうしてボクは首輪をつけられているの？

いろんな疑問が化け鮫のように膨れ上がってきたけど、店主さんの様子がこの部屋とは不釣り合いなくらいに普段通りに見えて。ボクはおずおずと、そのお皿を受け取ってしまったにや。

「にや……ご飯……にや？」

「おじさんが作ったんだ。さあさあ、食べてくれ」

その皿に盛り付けられていたのは、大振りなスプーンと、ホカホカお肉に小さな野菜。中央に咲いた卵黄に、上品なオリーブオイルの香り。名前は当てにくいけれど、あえて言うなら、お肉と野菜の和え物というのが近いかな。

「輸入食材なんだけどな、トウゲンチョウっていう鶏の胸肉とその卵を使ってるんだ。

この辺じやお目に掛かれない、レア物だぜ」

「にやあ……お野菜は……ブロッコリーにや？」

「おう。ボルボロツコリーっていう荒地の村の特産品さ。あと細かく刻んだユクモヤシも入ってるんだぞ」

店主さんがいうトウゲンチョウという鳥は、今や小振りな胸肉に。その子の卵は卵白を取り除かれ、皿の中央に卵黄を咲かせるだけとなっていた。そんな薄橙ろ鮮やかな橙色の世界を彩る、細やかな緑色の欠片。半透明に何か。店主さんの言う、ボルボロツコリーとユクモヤシという野菜なんだろう。こつちも、お肉のように細かく刻まれている。

味付けは、ブラックペッパーと塩、そしてオリーブオイルでされているのかな。とってもシンプルな料理だけど、シンプルだけに美味しそうに見えた。この状況はよく分からなかったけど、店主さんがじっとボクを見ているから、仕方なくボクは一口含んだのだった。

「……むにやつ」

柔らかく炙られたお肉。それが口の中で、優しくほどけていったにや。多分、普通に焼いただけじゃクセが結構残るお肉なんだと思う。旦那さんと一緒にいろいろ料理をしているうちに、そういうことがだんだん分かってきたにや。でも、これにはオリーブ

オイルがついている。その上品な香りが、お肉のクセをペロリと呑み込んでしまったにや。

細かくなったブロッコリーには、あの頭のもしやもしやとした歯触りや、茎の歯応えある食感があまり残っていないかった。モヤシもそうにや。大きさがとつても細かいだけに、しゃきしゃきとした食感があまりない。オリーブオイルに混ぜたって、よりあの固さがふやけていつているようにも思えてくる。それでも、ブラツクペツパーの風味と合わさって、お肉の味を支えているのにや。そこに溶いた卵黄を混ぜ合わせれば、味は一気に大変身になや。

「どうだい？　美味しいかい？」

「にやあ。美味しい……ですにや」

まろやかな味わいになったお肉を、また一つ口に入れる。卵黄の甘さが、オリーブオイルのとろける旨みに混ぜり合ってくるにや。そこにお肉が入ると、口の中までとろけてしまうのにや。

「いやー。肉と野菜を切って、炒めてはオリーブオイルとかで味を調えるシンプルな料理なんだけどね。でも、体にはいいよ。どんどん食べてくれよな」

「にやあ……あ、あの、店主さん……」

「ん？　おかわりかい？」

「いえ、その……ここはどこですにや？ それに、この首輪は……」  
「ここは一体どこなの？」

どうして、ボクは首輪をつけられているの？

店主さんは、何故ここにいるの？

そして、どうして店主さんが、突然こんなことをするんだらう？

ボクには、彼の意図がまるで分からなかったにや。ご飯のことを話してくれている彼には悪いけど、溢れ返ってくるたくさんの疑問を、ボクは抑えることができなかった。

一方で、その疑問を受け取った店主さんはいえ、どこか神妙な顔つきで、シヤドウアイの位置を指で整え直しては、その逞しい顎を動かした。

「……これには深い訳があるんだ。食べながらでいいから、聞いてくれるかい？」

「にや……は、はいにや……」

そんな店主さんの言葉に、思わずボクも改まってしまつて。膨らむ尻尾を何とか抑えながら、彼の言葉のために耳をぴんと立たせたにや。

でも、その耳に入ってきたのは、予想外の言葉だった。

「ネコの毛並みをよくするのに、重要な栄養素って何か知ってるかい？」

「……にや？」

「毛を作るにはメチオチンやシスチン、んで潤いにはアラキドン酸やビタミンAが必要

なんだ」

「……にや、にやあ……?」

「それらを摂取するには動物性タンパク質……特に鳥肉や卵、あとは野菜類が適している」

「にや、な、何の話なの……?」

「分からないかい? 今イルルちゃんが食べてるご飯。それだよ」

毛並みをよくする? 毛を作る? 毛の潤い? 店主さんは、一体何の話をしているの? どうしてボクの毛並みにこだわるんだろう。

「まあ、元々イルルちゃんには毛並みがいいから、気休め程度のご飯なんだけどね。というかそもそも、毛並みのいいオトモアイルーを中心に狙ってたんだけどさ」

——にや? 狙ってた?

狙ってたって、何を?

「分からないって顔してるね。おじさんたちが欲しいのは君——」

店主さんが伸ばした腕は、ボクの方を指していて。でもそれは、次第にボクのお腹の方へ降りてくる。そうして、ボクのお腹へとおもむろに手を入れてきた。

「……ひやつ、やつ!」

ざわつとする。旦那さん以外の人に、身体の大事なところを触られるのは、とつても

嫌にや。お腹の毛を梳いて、その下の肌を撫でる彼の手に、ボクは思わず爪を払ってしまふ。

「……おーいて。何してくれんだ全く……」

「にやつ……店主さん……一体これは、どういう……」

薄皮に三本線が走る腕。彼はそれを苦々しく見て、おずおずと腕を引つ込める。嫌な感触がようやく消えたと一安心する一方で、冷たく見下ろされる感覚が体を走った。

何て怖い目をするんだらう。シャドウアイの奥で佇むその両眼は、酷く冷酷な色でボクを見据えていた。今までの店主さんとはあまりにも違うその雰囲気、ボクの尻尾は大きく膨らんでしまふ。

——怖い。とつても、怖いのにや。

「おじさんたちが欲しいのは、君——正確に言えば、君の『皮』なんだよ」

あの温かい声は、すっかりなりを擧めてしまつて。じろりと見てくるその眼は、かつてのご主人と同じ色になつていた。

——ボクを道具としか見ていない、無機質な色。

どうしよう。

怖い。怖いよ。

助けて——旦那さん。



く本日のレシピく

『ネコの毛並み術ランチ』

- ・ トウゲンチヨウの胸肉 …… 100 g
- ・ トウゲンチヨウの卵（卵黄のみ） …… 1個
- ・ ボルボロツコリー …… 30 g
- ・ ユクモヤシ …… 25 g
- ・ ブラツクペツパー …… 小さじ1杯
- ・ 塩 …… 適量
- ・ オリーブオイル …… お好みで

## 画餅充飢

「オラアこのクソグラサン野郎がア!! 開けるゴラア! ぶつ殺すぞ!!」

ガシャンと悲鳴を上げるシャッター。あのイルルが通っていた雑貨屋は、夜が明けた今になっても沈黙を保っている。そんな固く閉じた口を抉じ開けようと蹴りを入れるものの、ただ鉄が虚しく軋むだけだった。

「ちよ、ちよつとシグ! やめてくださいよ!」

「うるせえな! あの野郎を引つ張りださなきやならんだろ! 離せ!」

「いや待つて! そのスラッシュアックスで何するつもり……つてちよ、属性解放!」

「あの扉をぶち破る……。あのムカつくグラサンごと、目玉えぐつてやるよ……ッ!」

背のマグネットから取り外したスラッシュアックスを構えようとすると、後ろからトレッドが俺の腕を掴んでくる。珍しく彼も焦った様子で、俺を抑え込もうと嫌な汗を垂らしていた。

ハンターと言えど、彼はガンナーだ。剣士の俺からしたら、大した力ではない。振りほどけない訳ではない——

「離せ……離せクソ！」

「離しませんよ……今はその機じゃないんですよ……っ！」

それがどうもこうも、中々離れない。俺の右手に対し彼は両手だから、というのもあるかもしれないが、それでも彼の腕力は俺の予想以上のものだった。ライトボウガンを使っている奴に、ここまでの腕力があるものなのか。

「落ち着いてください！ そんなことをしても余計騒ぎが大きくなるだけです！ 少し冷静になって！」

「冷静になんかいられるか……ッ！ 離せよハゲ！」

「ハ——あ？」

ドツつと、何かが鳴った。

それは火薬の香りを振り撒くもので、擦り付けたような鼻につく香りを残している。先から出る煙は、まるでたばこの残り香のように、静かに空に溶けていって。

片手が離れたかと思いきや、何かが俺の胸を撃ち抜いたような、そんな気がした。

「……てめ……撃ちやがつ……」

突然、体中が重くなる。意識が体を抜けて、煙と共に空に舞い上がってしまいそうな糸が切れた人形のような感覚が、俺に襲い掛かってきた。

一方で、離れた手で小さな銃を握っていたトレッド。あのか細い目を薄く開けては、

物凄い形相で俺を睨んでいる。

「言つていいことと悪いことがあるんですよクソ野郎。気にしてること言いやがつて……眠つとけダボが」

真つ暗闇になる景色。倒れる体。捨て台詞のようなトレッドの声が、俺の耳を穿つていった。



イレル。

どうしたんだ？ そんな、俺の腹の上に乗つて来て。

甘えたいのか？ よしよし、相変わらず甘えん坊だなあお前。

お前のほっぺの毛……ほんとにもふもふしてんなあ。でも、風呂入ると分かるけど、ほんととは結構小顔なんだよなあ。

ん？ 背中？ 撫でてほしいの？ ほしい。

心地いい？ そつかあ。……相変わらず良い毛並みしてんなあ。

今日は……もうこのまま昼寝でもしようか。うん、そうだな。

ん？ そりやもちろん、俺の上で寝てたいならそうしていいぞ。

——やっぱりお前、あつたかいなあ。

「……旦那さん、旦那さあん……」

ふと、懐かしい光景が目の奥で広がっていた。

紅葉も散り行く秋の空。秋も終わりがけていたけれど、その日は妙に暖かくて。だから、庭のハンモックで読書していた旦那さんのお腹に飛び乗って。そうして甘えるボクを、旦那さんは優しく受け入れてくれたのによ。

——あの後はお昼寝をして、夕方の前には起きて、おやつでも作ったにやあ。ホイップクリームにカスタードクリーム。それをさくつとした生地包んだおやつ。

旦那さんは、シュークリームと呼んでいたにや。焼き目が綺麗な生地に包丁を入れて、器とフタのように分離させた旦那さん。その中に、たつぷりとカスタードクリームを入れてたにや。半分埋めたその横に、今度は真っ白なホイップクリームを注ぎ込んで。

生地の中をクリームが敷き詰めてしまったら、最後に切り分けた生地を被せて、完成にや。隙間から溢れ出てくるクリームが、何だか魅力的だったのによ。

「……あのカスタードクリームも、旦那さんが作ってくれたんだっけ」

ぱくつと食べてみると、サクサクとした生地が歯を擦る。その直後に、とろーつとクリームが口の中に流れてくるの。ホイップの柔らかい香りが、カスタードのコクのある甘みが、生地の食感と混ざり合う。そのハーモニーは何とも言えず、つつい食べ進めてしまうの。

ほつぺたが落ちちやうなんていう言葉があるけれど、思わずほつぺを手で押さえちやうような、そんな美味しさに満ちていたにやあ。特に、ボクはあのカスタードが好き。主張の強い甘さと香り、あとに残る口どけ。どこをとつても、最高のものにや。

—— やつぱり、旦那さんとまつたり過ごす時間は幸せにや。一緒にご飯を食べてる時が、大好きなの。一人で食べる時より美味しいなんて、錯覚しちやうくらいに。

旦那さんが、一緒にいてくれるからかな。旦那さんはいつも明るくて、優しくくて、とってもあつたかくて。一緒にいてくれるだけで、ボクもとってもあつたかい気持ちになれるのにや。とつても、とつても——

「……んや」

だけど、今はとつても暗い。とても寒いし、凄く——怖いのにや。

あの温かい部屋はここにはなくて、優しい旦那さんもない。狭く、暗く、無機質で。

廃工房のようなここは、外の光が全く入ってこなくて。ただ、いくつかのロウソクの漂う光と、男の人の話し声や笑い声が時折聞こえてくるだけだった。

凄く心細いのにな。一人ぼっちで、押し潰されてしまいそう。

「……なんだ、全然食べてないじゃないか」

そこに投げかけられた、聞き覚えのある声。ボクが足しげく通っていた雑貨屋の店主さんが、いつの間にかボクの前に立っていた。

彼が見ていたのは、ボクの前に置かれたお皿。お肉や野菜が盛り付けられた、小振りなお皿。

「食べなきや体によくないんだぞ。ちゃんと食べなきやダメだろう？」

「……………」

「全く、急にぶてぶてしくなっちゃって。おじさんのこと、嫌いになっちゃったのかい？」

そう言つては、急にボクの首に手を入れてくる。首輪と武骨な腕に挟まれて、ボクの喉はきゅつと鳴った。

突然のことで反射的に両手の爪が走ったけど、今日の店主さんは手にレザーのアームガードを付けていて。それに傷を入れることはできても、店主さんの腕に爪は届かなかった。

「にやつ……離して！ 触らないで……っ」

「おーおー、やつと口聞いてくれたねえ」

にんまりと笑った店主さんは、そのままボクの胸の毛をまさぐり始める。手荒く、雑に、ボクの毛並みを掻き乱すその手。気持ち悪くてたまらない。でも首を掴む手はとつても強くて、ボクは逃げようにも逃げられなかった。

「いやあ……やだあ……ひああ……」

「うんうん、やつぱり君は上質だよ。こりやいい三味線ができそうだ」

ようやく離してもらって、ボクは慌てて後ろに跳んだ。少しでも、この人から離れたい。そんな思いがボクの頭の中を埋める。

一方の彼は、そんなボクも気に留めず、満足そうに掌を開閉させていた。ボクの体を無遠慮に触る、あの厭らしい手を。

「毛が細かくて、その下の肌も張りがある。やつぱり俺の目星は間違ってたね。きつと君は高く売れるよ」

「嫌にやあ……聞きたくない……」

「その毛を全部とって、皮を剥いでなめしたら……どんな音がするんだろうな？」

「いやあ……なんで、なんで……」

「ん？ どうしたんだい？」



「……なんで、アイルーで……」

どうして、ボクなんだろう。どうして、アイルーを使うんだろう。

他にも、もつともつと良い素材はたくさんあるはずなのに。この人は、どうしてボクを選んだの——

そんな疑問に答えるように、彼は小さく溜息をついた。荒くモヒカンを掻きながら、呼吸を整えて、ボクの方を見た。シャドウアイ越しの目が、じつとボクを見据えている。「そりゃなんでつて、アイルーの皮が凄く良い音を出すんだよ」

「……音？」

「もしかして、三味線は狩猟笛の一種とでも勘違いしてたのかい？ おじさんたちが用意するのは武器じゃないよ。楽器。芸術品さ」

「……芸術……品？」

「そうさ。三味線っていうのはね、元々はユクモ地方からかなり南に行った島国の楽器だったのさ」

店主さんは、おもむろに楽器について語り出す。さも、自分の武勇を語るかのような口振りで。思い出すように、それでいて、誇らしげに。

彼の話はこうだった。

元々は、小型の蛇竜種の皮を使っていたその楽器。時代の流れと共に島から流れ、と

うとうユクモ地方にまで流通するようになった。しかし湿度の違いがあり、ユクモ地方では蛇皮が痛みやすいという難点が生まれてしまう。そのため皮自体を変える必要があつたそうなのによ。

「んで、雷狼竜とか迅竜とかの皮を試すこともあつたそうだけど、毛が太くて皮も厚い。大型モンスターの素材は強靱過ぎて、音色という面では不十分だった訳さ」

「……………どうして、それでアイルーなのによ!? ネコの皮じゃなくたって……………」

「おう。ファンゴやケルビでもいいんじゃないかって実験はされたそうだけ？ でもな、それじゃ良い響きは出ないんだよ。肝心なのは、胴体全部つてとこだね」

「……………胴体、全部?」

「大きな生き物だと、厚みに変化のないところ一部しか使えない。それじゃダメなのさ。胴体全部を使用して、なおかつ小柄で、さらに言えば大型モンスターほど入手が困難じゃないもの……………」

「それで……………アイルー、によ?」

「そう。アイルーがベスト。この業界じゃ、これが常識だぜ」

「そんな……………そんなの……………あんまりだよ……………」

思わず、吐き気がした。ボクたちアイルーのことを、そんな風に見ている人たちがいるんだなんて。まるで——まるで、モンスターの素材のような、そんな扱いなんじゃない

いか。

「酷い……酷いにや！ こんなこと……っ！」

「酷い？ 何がだ？ 君らの毛皮を使うことがか？ それの何が酷いんだ？」

「だって、らつて！ まるでボクらを道具のように……素材のように……！」

涙ながらにそう訴える。心の底から湧いた怒りを、彼にぶつけた。

——けれど、返ってきたのは、さも不思議そうな声。シャドウアイを被ったその顔は、ボクの訴えを気にも留めていなかった。

「——だって？ 君が貰ったその防具だって、同じことだろ？」

響いた店主さんの声に、ボクは思わず固まって。頭を埋めてた罵倒の言葉も、全部真っ白になっちゃつて。

恐る恐る、ボクは自分の身を覆う防具へと目をやった。白と黒で彩られたこの防具は、旦那さんが仕留めたというキリン亜種からできている。あの子の皮や体毛、角を使つてできている——

「俺たち人間はな、他者を食つて生きてくんだよ。使えるものは全部使う。モンスターも、全部ね」

「……でも……それでも、どうして……」

頭が、思考が追いつかない。店主さんの言葉に、ついていけない。

ボクがしていることは、店主さんと何も違わないの？ 店主さんがボクを楽器にしようとしているかのように、ボクもモンスター素材を武器や防具をしていたの？

でも、でも。そこは一緒じゃなくて。ボクはアイルーで、あの子たちはモンスターで、だからボクらを素材にするなんてことは――

「……アイルルちゃん、何か勘違いしてないかい？」

「……にゃ？」

頭がぐるぐるになっていくボクに向けて、彼は訝しむような目で言葉を投げかける。一体何のことだろう。

そんなことを思いながら、彼に目を向けるボクと――吐き捨てるような、彼の言葉。「お前らアイルーは、人間じゃない」

店主さんの冷たい一言が、静かにボクの心をえぐる。触れないようにしていたことを。ボクがそつと、まるで鍋のフタをしめるかのように隠していたものを、無理矢理抉じ開けられたかのような。そんな感覚がどつと襲い掛かってくる。

「まるで人間のようない口振りじゃないか、ネコ畜生の癖によ。人に並ぼうなんて、烏澁がましいぞ？」 分かったら、大人しくご飯食べてようね」

そう言つて、彼はズいっとボクに皿を押し付ける。そこに乗せられたお肉は、バラバラに解体されたお肉。原型も何も残つておらず、ただ肉ということだけが分かるよう

な、そんな無残な姿だった。

それを焦点の定まらない眼で見るボクに、店主さんは思い出したかのに口を開く。立ち去ろうと踵を返していた足を、すつと止めながら。

「あつ、そうそう。君の解体人だけどね、明日こつちに到着するみたいだ。わざわざユクモ地方からこつちに来てくれてねえ……。いよいよ、明日だよ。楽しみだなあ！」

明日。

明日は何の日の？

ドンドルマの、何でもない一日。休日でも祝日もなくて、当たり障りのないただの一日。

何かの行事もある訳でもないし、みんながそれぞれの生き方をする、いつも通りの一日。

——旦那さんが言っていた、超高級お食事券の日。

「……………にゃあ……………」

——こほん、まあ、なんだ。こいつが使える日は丁度五日後だ。その日は、何があつても俺は狩りに行かないし他の予定も入れないからな。ラオシャンロンが空飛んできても、俺は絶対この日はアリーナに行くからな！

確か、旦那さんはそう言っていたにゃ。何があつてもアリーナに行くつて、彼は豪語

していたにや。だったら、もう——

器を満たすお肉を見つめる瞳からは、ほろりと涙が零れてくる。大粒のそれが、ボクの頬の毛並みを重く湿らせた。

あの甘いカスタードクリームが懐かしい。そんなことを思いながら、ボクは静かに目を伏せたのだった。



「……あれ、シグ。目を覚ましたんですか?」

「おう、トレッド。……悪いな手間かけて。もう落ち着いたよ」

熱せられた鍋が淡い香りを放っている。真つ白になったそこで泳ぐバニラビーンズ。その様子を眺めながら、俺はボウルの中身を無心に掻き回していた。

そこへ声をかけてきた人物。先程俺に何らかの弾を撃ち込んだ男——トレッドだった。

「一応、対人用に調合した睡眠弾なので負荷は軽いと思いますが……どうです?」

「何が対人用だよ全く……でも、この通り料理できるくらいには何ともない」

鮮やかな黄色が目を差すその光景。とろりとしたそれがボウルの中央で渦を描き、端

には白い色を塗りたくっていく。そこから溢れる、チョコーンスターチの爽やかな香り。砂糖を練り込んだ、濃厚な卵の香り。

「……何作ってるんですか？」

「……カスタードクリーム」

「……何で今？」

「……イルルが、これ好きだから……」

——いつか作ってあげたシュークリーム。それを頬張る彼女の姿が、脳裏に浮かぶ。

もしかしたら、イルルはお腹が空いているかもしれない。

好きなものも食べれず、ひもじい思いをしているかもしれない。

家に帰ってきたら、好きなものを食べさせてやりたい。

我慢させてきてしまったんだから、目一杯甘やかしてあげたい。

そんな思いで俺は鍋を掻き回していたが、一方のトレッドは、憐れむような視線を俺に投げかけてきた。その顔には、「これは悪手だったか」とでも書いているかのような――

「……ま、まあ落ち着いてくれるならいいんですけどね。あのまま騒ぎになつては色々あれなので」

「だな。まだあのモヒカンが犯人って決まった訳じゃないし。仮にそうだったとしても、騒ぎを起こしたら警戒されるし、下手したら逃げられちゃう」

「……驚いた。随分冷静ですね……」

少し感心するような口振りだった。そんな言葉を漏らしながら、トレッドは部屋のソファアールへと腰かける。少し癪に障るものの、今はそんなことにいちいち反応してられない。

「今は穩便に行動するのが吉、でしようね。犯行グループの目につくような行動は避けるべきです。……で、他に何か収穫はありそうですか？」

「ヒリエツタやルーシャも情報収集してくれてるけど……今んとこ目ぼしいものはないな。畜生……」

彼女たちも、それぞれの生活があるというのに。親身になって、イルルのことを案じてくれている。ドンドルマの路地を駆け回って、彼女のことを探してくれている。

それでも、現状はあまり進展していないと言ってもいい。トレッドがああシャミセンとかいう楽器を持って来てくれた日から、既に一日が経過していた。

「……それにしても、不快な楽器だなあこれ。アイルーを使うなんて……」

「まあ、ユクモ地方の著名人にはこの楽器の奏者って人も多いですからね。芸術品としての価値も高いですし、ギルドも見えて見ぬふりをしているというのが現実ですよ」



憂うようにそう話すトレッド。どうやら、以前からユクモ地方では流通されていた楽器のようだ。しかし、俺が知らなかった話でもある。ひよつとすると、アイルーが使われているという事実は、流布されていないのかもしれない。そんなことを考えながら、俺は手に持っていたボウルを台に置き、鍋を熱する火の元を断った。

卵の凝固を抑えるグラニュー糖。白い雪を降らす薄力粉。さらに、先程鍋で熱していたベルナミルクとバニラビーンズをボウルに投入する。白と黄色が混ぜ返ったそれに向けて、仕上げと言わんばかりに混ぜる手に力を込めた。

「……で、これからどうします?」

「……………」

「ここで料理してただけじゃ、始まりませんからね。どうやって、イルルちゃんを探るか。何か策はありますか?」

「……良い案があったら、こんな悠長に料理してる訳ないだろうが」

正直なところ、この料理は気を紛らわせる以外の何者でもない。何もせず座っているだけじゃ、気が狂ってしまいそうなのだ。頭がおかしくなりそうなのだ。

吐き捨てるようにそう返し、今度は鍋にザルを乗せる。そのザルに向けてボウルを傾けては、混ぜ返したその中身を再び鍋の世界へと追いつ返した。ザルによって濾し出され、より純度の高い素がとろりと滑り落ちる。

そんな俺の目に映るように、トレッドはとん、と何かをテーブルの上に置いた。それは、淡い光を放つ円柱状の何か。そう、まるで虫かごのような――

「……何だ、それ？」

「シグ。痕跡です」

「あ？」

「よりイルルちゃんに繋がる匂いが残ったもの。そんな痕跡を探すんです」

「……痕跡？ それで、どうやってイルルにまで辿り着くんだよ」

「そのための、これですよ。『導蟲』と言うんですけどね。この子たちは匂いを覚えると、それに関連するものに反応するよう訓練されているんです」

「へえ……それはまた……ただの蟲じゃん」

「いやいや。これ、ギルドの最先端技術ですよ。精度は抜群。匂いを嗅がせればちよちよいのちよいです」

「……つてことは、部屋にあるイルルのものを嗅がせたら――」

「はい。きつと、イルルちゃんに辿り着けるはずですよ」

「あああ！ お前ほんとに最高だ！ もう親友だわ！ マジで！」

「ですから、シグ。すぐに持って来てくれませんか？」

「あ、スルー？ でもいいや！ 分かった！ 待ってろ！ その間お前は鍋を頼む！」

中火で、こげつかないように掻き回しておいてくれ！」

「えっ」

無理矢理ヘラを押し付けて、俺は寢室の方へと飛び込んだ。

イルルが使っていた部屋着。ブラシ。爪切りばさみ。武器に防具。そして、いつもお昼寝に使っていた座布団など、様々なものを掻き集めてくる。それを担いではリビングのソファアーの上に投げ出した。

一方で、おっかなびつくり鍋を掻き回すトレッド。彼らしくないどこかへっぴり腰の様子に苦笑しながら、俺は彼に声をかけた。

「すまねえ。持ってきた！ 変わるから、匂いの方を頼む！」

「あ、わ、は、はい……。これすっごく焦げやすそうで怖いですね……」

ヘラを受け取って、鍋へと刺す。とろりと、ヘラに絡まってくるそれは、何とも重い。濃厚な甘みそのまま質量をもったかのような、そんな感触だった。

そんな鍋を横目にしながら、俺はトレッドの様子を窺った。円柱状の箱を開けては、細かな蟲を外へと飛ばすトレッド。蟲たちは淡い光を放ちながら、イルルの道具の匂いを探っているが――

「……何か、妙にくすんだ色してんな」

「……………あれ？」

「……おいおい、ここまで期待させといてももしかしてっつて奴……? 流石に冗談だろ?」

「……君たち、どれだけ仲良しなんですか」

「は?」

「どうやら、君の匂いも強すぎて蟲たちは混乱してるみたいですね……」

「……は?」

——考えてみれば。

イルルの道具の多くは寝室に置いてあって、なおかつ俺もそこを毎日利用している訳で。装備を入れたボックスは共用しており、衣服に関してもいつもひつついていたから俺の匂いも付きまぐる訳で。座布団も元々は俺の物であって、ブラシといった道具も大体俺が使ってイルルの毛並みを整えていた訳で。

「……っつかえねえなあその蟲」

「……いや、新大陸調査団の英知の結晶ですよ、一応。うーん、普通の関わり程度なら問題ないんですけど、どうやら君たちは過剰にくつつき過ぎなようですね……」

「うっ……うるせえ! いちいち突っ込んでくんないで!! 他にどうすりゃいいんだ!?!」

「でしたら、最後に目撃された路地の方で匂いを探すしかないですね……」

「……また分からない、とかにならないか?」

「その時はシグがいなかったと聞いているので、多分大丈夫でしょう。アツアツですねえほんと」

「もういいい！ やめて！ それ以上言わないで！」

思わず顔を覆いたくなる。しかし、覆ってしまったら鍋を見れなくなる。恥ずかしさに顔から火が出そうだったが、カスタードクリームのために俺は必死に耐えた。

鍋で熱せられるクリームからは、ふつつつと気泡が湧いていた。ヘラを上げてみれば、とろりとろりと、糸を引くようにクリームが後を残していく。

もう十分だろう。後は火を止めて少し掻き回して慣らしたら、冷やしてしまえばいい。

なんて考えていた時に、勢いよく門が開けられる。このタイミングで都合よく現れたのは、長い金髪を後ろでまとめあげた少女。ルーシャだった。

「あー！ 収穫が全然ないよー！ もう、もううー！」

「ルーシャ、丁度良かった！ コイツを頼む！」

「はっ、へっ？ ちょよ、何!？」

そんな彼女にヘラを受け渡し、鍋の前へと押し出した。混乱する様子だったが、今はそう構っていられない。本当は最後までこのクリームの面倒を見たかったが——背に腹は代えられないのだ。

「いいか？ 数分コイツを混ぜたら、鍋の外から氷結晶で冷やしてくれ！ んで、ある程度温度を下げたらパックに詰めて、氷結晶ボックスに入れる。よろしくな！」

「は？ ちよ、え、何？ 何これ？ どういう状況？」

「ボックスは棚の上にあるから！ じゃ、俺たちは行ってくる！ いくぞトレッド！」

「はいはい、そういきらないでくださいよ」

トレッドは導蟲とかいう昆虫の箱を持って。俺はルーシャに仕上げを全て押し付けて。

そうして、門を抜けては駆け出した。あの話にあった路地はそう遠くない。走れば数分もかからずに着くだろう。最後の手がかりとも言えるこの手段に希望を乗せて、俺は走る脚に力を込めた。

背後から、「二体何なのよー！」と叫び声が聞こえてくるが——今は、無視だ。  
蟲だけにな！

く本日のレシピく

『カスタードクリーム』

・丸鳥の卵（卵黄のみ）………1個

・砂糖	………40g
・チココーンスターチ	………35g
・グラニュー糖	………50g
・薄力粉	………20g
・ベルナミルク	………200cc
・バニラビーンズ	………1/2本

## 絶体絶命

「……イカ焼き」

「はいはい、タレの香り」

「……ベビーカステラ」

「甘い香りですねぇ」

「……たこ焼き」

「何か、タコ小さそう」

「……かき氷」

「うーん、これは氷結イチゴ味でしょうか」

「食い物の匂いにしか反応しねえじゃねえかッ！」

ドンドルマの路地で響く俺の声。それが出店の街並みで反響し、人々は何事かところらを見る。しかし、今はそれらに反応している余裕などない。

一方で、様々な色を灯す『導蟲』とかいう生き物。トレッドの持ってきたそれは、痕跡に残された特定の物質や匂いに反応し、それを辿るといふ生態を有しているのだとい



う。

しかし、今こいつらが反応するものは、出店に並んだ食べ物の匂いばかり——  
「シグ、落ち着いてください。この子たちもまだこちらに来たばかりなので、本調子じゃないんですよ……きつと」

「じゃあ早く鼻を慣らしてくれよ！ イルルが待つてんだよ！」

「ここは食べ物の香りが蔓延してるのも、原因の一つでしょうね。元々導蟲は、自然界の痕跡ばかりを追ってましたし。知らない匂いが多過ぎるのでしょう……」

困ったようにトレッドはそう言った。

彼の話では、新大陸調査団とかいう連中はペイントボールを利用しないらしい。その代わりに、この導蟲の性質を利用してモンスターの調査を行うのだとか。故に、自然界の痕跡の匂いを追うことはお茶の子さいさいなのだと思われる。

しかしこのような市街地で、それも自然界には存在しない匂いが充満しているとなると。それでは彼らも本調子ではいられないのは、無理もないことなのかもしれない。

「困りましたねえ……もう少し、良いものがあればいいんですけど」

「うーん……。この路地って、ドンドルマの深奥付近に位置しててき、環境的に風通しが悪いんだよな」

「秋風も、あまり通らないんですね。そりゃ、匂いも溜まる訳だ」

風はなく、匂いが溜まる。枯葉なども舞い上がることができず、路地で沈黙し続けた。  
いた。

どこを歩いても、美味そうな香りが鼻を突いてくる。小さな路地だが、出店の数は多く、密度もそれ相応に高い。より濃縮された様々な香りに、俺は思わず顔を顰めた。

——イルルも、ここを歩いていたのだろうか。あの店主と、出店巡りでもしていたのだろうか。

俺が、酷いことを言ってしまったから。心ないことを言ってしまったから。彼女も、俺に呆れてしまっただろう。とても傷ついたと思う。もしかしたら、愛想を尽かされてしまったのかもしれない。

「イルル……」

ごめんな、ダメな相棒で。

お前のこと、全部分かったつもりでいた。お互いが理解し合えている、最高の相棒のつもりでいた。だけど、実際は全然分かってなかったんだ。お前が俺のことをどんな風に思ってたか。俺はずっと、勘違いしていたよ。

でも、でもさ。同時に俺は感じたんだ。お前のことを全然分かってなかったからこそ、もつと。もつとお前のことを知りたい。お前のことをもつともつと知りたくて、たまらない。こんな形で終わりたくないよ。

——できることなら、もつと。ずっと。お前と一緒にいたいんだ。

「……仕方ない。導蟲が慣れるまで待とう」

「おや？ 意外に辛抱強いところあるんですねえ……」

「だって、急かしたつてしょうがないじゃん。それより、確実に一步一步進むことが大切な……ん？」

「うんうん。シグも、ようやく僕の美学が分かってくれましたね。そう、それが標的を追い詰めるコツの——」

「……導蟲、反応してね？」

「えっ」

ふと、トレッドの方を見た瞬間。丁度出店街から出つつ、その先の広場へと足を踏み入れた、その瞬間だった。

突然、ぶわつと導蟲が舞い上がる。その身を照らす光は、先程までのくすんだ色ではない。自信なきげの、弱々しい色ではない。

——何とも鮮やかな蛍光色。今までとは段違いの輝きを、その身に灯していた。

「……なあ、トレッド」

「……これです」

「……今度こそ、マジ？」

「今度こそマジです！ やつと本調子を取り戻したようですね！ これでイルルちゃん探索が捗りますよ！」

嬉しそうにトレッドはそう吠える。自分の持ってきた最終手段が、やつと良い反応を示したのだ。それはきつと、抑え切れない喜びが伴うものなのだろう。

「うーん、何だかなあ……」

だが、俺は少し違和感を覚えていた。

ついさつきまで、微妙な反応しか示していなかった導蟲だ。それが、突然色を変えた。それも、出店街を抜けた直後に。

——これは、本調子を取り戻したというのだろうか。

「……あれ？」

「シグ？ どうしました？」

ふと、鼻を何かが刺激する。広場の奥から、いつか嗅いだ——いや、飲み込んだ覚えのある香りがする。

「……なあ、トレッド」

「はい？」

「導蟲は、匂いに反応するんだよな？ もしかして、嗅いだことある匂いならばつと反応したりするの？」

「え？ えーつと、どうでしょう……。僕もあまり詳しい訳ではないのですが……。うーん」

俺でも、嗅ぎ覚えがあると感じた香り。もしかすると、導蟲も過去に嗅いだことがある香りなのかもしれない。ともすれば、突然反応し出したのも説明がつくような、そんな気がする。

——しかし、これは何だ。

嗅ぎ覚えはある。口に入れたこともある気さえもする。随分と前のことだったと思うけど、それでもとても印象的だった。

一体、何の香りだろうか。俺の頭は閉じたフタのように、口を固く塞いでしまう。

「……シグ？」

「……この臭い、嗅いだことあるんだよ。多分、俺も。何だっけ……」

「イルルちゃんの匂い、じゃないんですか？」

「馬鹿野郎。こんなキツイ臭い、イルルの匂いな訳ないだろう。あいつのはもつとふわふわしてて柔らかい匂いなんだ」

「あつ……。そ、そうですかあ……」

若干引き気味にそう返してくるトレッドだったが、今はそんなことどうでもいい。この臭いにこそ、ヒントがあるような気がする。

いつだったのだろうか。思い出せ。思い出せ——

——瘡瘻啖の時か？

いや、あの時はもつと鉄臭い香りに満ちていたはずだ。ドス黒い血の匂いだった。

——オオナズチに会った時か？

何か、イメージが出てきそうな気がした。でも、違う。これでもないような気がする。

——師匠と会って、黒炎王リオレウスに挑んだ時か？

あの時は、香ばしいタンクの匂いしか鼻に残っていない。

——もつと前の、バルバレにいた頃だろうか？

タンジアからバルバレに流れてきて、安い住居を介してはギルドと猟場を歩き来する日々。下位ハンターとして一から始めて、色んなモンスターを見てはその味を確かめてきた。

そんな何でもない日々の中、ある日氷海に行つて。その時イルルと出会ったんだ。フルフルに襲われていた彼女を、見つけたんだ。

それからは、いつも食卓にイルルがいた。あいつと一緒に冒険して、狩りをして、モンスターを食べて。それは俺が上位に昇進しても変わらなかつた。

遺跡平原の、火竜の巢。そこからくすねてきた卵を、キャンプでオムレツにした日。そこから帰ってきて、我らの団料理長のところでごちそうになって。その日は、オリジ

ナルのホットドリンクを作ろうと意気込んで。

——そうして、初の試飲ということで氷海に持ってきたあの日。

ティガレットクスの討伐依頼を請け負って、勢いよくそのホットドリンクを飲み込んだ、あの日。

「……あ」

そうだ。そうだった。この臭いは、あれだ。

この薬品臭い、鼻に突く香り。俺をそのまま夢の彼方へと送りやった、あの香り——

「おーい、シガレット。トレッドさーん」

突然目の前に現れた、橙交じりの金髪。リオレウスの鎧を身に纏ったその少女が発破となり、俺の頭を塞いでいたフタは、勢いよく弾け飛んだ。中に溜まった水蒸気が、いよいよ収まり切らなくなる。そんな、激しい勢いで。

「分かったあああああッ!!」

「うわっ、うるさ……」

「えっ、何、どうしたの」

しかめっ面で耳を塞ぐトレッドと、顔を見るや否や突然叫んだ俺に困惑する彼女——  
——ヒリエッタ。

しかし、今はそんなことに構っていられなかった。一人ひとりに反応していられなかった。

「この臭い、あれだ！ 捕獲用麻酔薬だ！」

「えっ？」

「俺それ飲んだことあるもん！ めつちやどぎつかったもん！ 間違いねえよ！」

「え……じゃあ、導蟲はイルルちゃんに反応した訳じゃ、ないんですか……？」

信じていたものが真実ではなかった時。人は酷く絶望する。そう言わんが如く目を見開いたトレッド。ヒリエツタは、話の流れについてこれていないせいだろうか。きよとんと、首を傾げていた。

「バツカ！ これじゃあ意味ないだろ！ イルルの匂いに全然反応できてないじゃんか

この蟲！」

「むっ……むむ。どうしてでしょう……やはりドンドルマでは環境の条件が違い過ぎるのでしょうか」

「あーギルドナイト様がねえ。天下のギルドナイト様がこんな使えないとはなあ！」

「ああん……？ 聞き捨てならないんですけど……？ 使えないのは、何も出来ずお菓子作りに励む君じゃないんですか？」

「んだとこのハ……は、はんぺん野郎ッ！」



「黙れ爛れた精子が。練り潰しますよ」

互いに苛々が募っていたためか。お互いに腹いせをし合おうと、罵る言葉が加速する。思わず青筋が浮かんでしまいそうになり、トレッドに皺寄せた眉間を向けた。彼も同様に、その細い目を薄く開けては俺を睨みつけている。

——そんな中に、おずおずと飛んだか細い声。若干引き気味のヒリエツタが、小さな声を上げた。

「あ、あのさ……こんな出店街に麻酔薬の臭いがするなんて、不自然じゃない？　ここらで売られてるつてのも、ハンターがこんなところで使うのも変だと思うし。……それより、これがさ……」

「……まさか、麻酔薬を使ってイルルちゃんを捕らえたと……？」

「うん……そう考えるのが自然だと思う」

こんなことは言いたくない。そう言いたげなヒリエツタだったが、確かに彼女の言うことは一理ある。

このような場所で麻酔薬の香りがするのは、非常に不自然だ。一般の人間やハンターなら、ここで利用する訳がない。モンスターだって、こんな場所には滅多に現れないのだから。仮に現れたとしても、ここ最近ではそんな情報も、痕跡も全くなかったのだから。

——つまり、イルルはここで麻酔を入れられた。そうして眠らされたところを、誘拐された？

「つてことは、この麻酔の臭いを辿ればいいんじゃないか？」

「うーん……どうやら、臭いが弱いみたいです。もしかすると、投げナイフか何か麻酔を浸して使ったのか、それとも麻酔弾を使ったのか。どちらにせよ、臭いが弱すぎるようですね……」

「ええ……」

結局、導蟲は覚えのある香り——つまり捕獲用麻酔薬に反応しただけだった。イルルの匂いに反応したという訳ではなく、なおかつ麻酔薬の臭いも弱いために追跡ができるほどでもない。

こんなところで、再び壁に直面してしまった。またもや八方ふさがりになってしまったなんて、我ながら情けない。

「……とりあえず、お腹空いたでしょ？ 肉まん買ってきたから、これ食べて少し頭休めよう？」

宥めるように、ヒリエツタは丸く膨らんだ包み紙を渡してくれた。

灰かに白い湯気を振り撒き続ける、アツアツのそれ。ずしつと手にかかるその重みから、中にまでぎっしり具が詰まっていることがよく分かる。そんな、何とも魅力的な肉

まんだった。

「さつきそこの出店で買ってき、シガレットの家にひとまず戻ろうとしてたんだけど……ね」

「そう……か。……ヒリエッタの方は、何か収穫あったか？」

「……ごめん」

「……いや、ごつちこそ……ごめんな」

申し訳なさそうに目を伏せるヒリエッタ。そんな彼女を前にして、俺の心は痛みを訴える。きつと、彼女もドンドルマを必死に探し回ってくれていたのだろう。若干、目の下に隈が浮かんでいるのが、それを如実に物語っていた。相変わらずのお人よしだが、今はそれが俺の心を痛ませてくる。

導蟲を使った手も駄目だった。次の手を考える時間が必要である。そのためにも、腹ごしらえをしなければ。気付けば、昨日から何も食べてない。結局あのカスタードも、味見すらしてなかった。

「……いただきます」

包み紙を開けてみれば、途端にむわつと香りが溢れ出す。紙で出来た密閉空間の中で、溜めに溜めたこの香り。生地と肉の香りを濃縮した、何とも味わい深い香りだった。生地は、真つ白ではなかった。肉まん特有の白く張りのある生地には、うっすらと色

がついている。それは黄色なのか、茶色なのか。何とも判断しにくい色だった。そう。例えるなら、魚の煮付を作る際に乗せた紙が、煮汁を吸って染まったかのような、そんな色。

それが、ふわりと俺の口内に舞い降りる。もちもちと言うよりは、ふわふわだろうか。見た目は張りがあるものの、食感は随分と柔らかい。逆に言えば、弾力性はやや薄かった。それがまるで歯の隙間を塗りたくるように、口内へと染み込んでいく。

「……………」

不思議なことに、生地には味があるのだ。肉まんの生地といえば、ほとんど味がないのが特徴だ。故に肉と口の中で混ぜ合わせることが、一番の醍醐味とも言える。しかし、この肉まんはどうか。出汁を充分に吸ったかのような、そんな深い味が広がってきた。甘みと旨み。控えめながらもそれらに満ちたこの味は、生地特有の味のなさなど見る影もない。

その奥から出てくるのは、ぎっしりと詰まった肉。甘い出汁で丁寧に蒸かしたその肉には、切り身となったドスシイタケやオニオンなどが溶け込んでいる。噛み応えのある脂身部分をよく利用した肉のようで、噛む度にかりつとした歯応えを歯に残していった。それが、より鮮明に柔らかい生地との色を分ける。そのギャップが、食欲を加速させた。

「……美味しいですね、これ」

「ね、生地もとっても甘くて美味しい。……あ、そういえばルーシヤの分もあるんだけど、あの子は今どこにいるの?」

「彼女なら今シグの家でカスタードを作ってますよ」

「ええ……何やってんのよ……」

呆れるような声を吐くヒリエツタ。そうして、また一口肉まんを齧<sup>かじ</sup>る。トレッドも、自らを落ち着かせるように肉まんを咀嚼し続けていた。

肉と生地を、口の中で混ぜ合わせるのが醍醐味。それは、生地に味がついていても変わらない。どころか、その生地の風味がより一層肉の旨みを加速させる。噛めば噛むほど、風味が重なっていく。

——こんな美味しい肉まんが、家の近くで売られていたなんて。俺は知らなかった。本当に、知らないことばかりだ。

「……これも、イルルに食べさせてやりたいなあ……」

ふっと漏れたそんな言葉。

それを聞いては、そろそろやばそうだと言わんばかりに、二人は眉を曲げる。ひそひそと、何かを話し出しては、憐みの視線を投げかけてきた。

しかし、今はいちいち反応している余裕はない。ただ、イルルが恋しい。それだけ

だった。

何となく見つめた、広場にあるベンチ。導蟲が反応した、年季の入ったそのベンチ。日の光を浴びては妙に白く光るそれを、俺は何となく見つめていた。

風が吹かず、埃の溜まったこの広場は、風の鳴き声すら上げることにはなかった。



旦那さん。

旦那さんに会いたい。

ただ、ただ。ただただ旦那さんに会いたいのにや。

「……旦那さん」

何となく、名前を呼んでみる。

でも、それに応える声はない。当たり前だよな。だって、ここに旦那さんはいないんだもん。

ひとしきり騒がしくなった店主さんたち。それ以外には、ボク的首輪から伸びた鎖が軋む音しか聞こえない。目の前は薄暗く、外の光も感じないにや。ただ口ウソクが淡く光っているだけで、今外は夜なのか、昼なのか。それすらも分からない。

店主さんは、明日と言っていた。でも、外の時間なんて分からないから、今が昨日なのか今日なのか、それとも明日なのか。全然、全然分からないのにや——

「……話し声が、一人増えてるような気がするにや……」

もしかしたら、それがあの解体人というものなのかもしれない。だとしたら、もう今日は明日になっていて。それはつまり、ボクはもうすぐ解体されてしまうということ。

そう考えるだけで、心が締め付けられるように痛む。尻尾が立ち上がらない。毛がぶわつと膨らんでしまう。

「怖い……怖いよお……」

ボクの体は、あの人たちにバラバラにされてしまうの？

あの人たちに好き放題されてしまうの？

あの訳の分からない楽器にされてしまうの？

——まるで、モンスターみたいに。

今まで、深く考えたことはなかった。モンスターを武器や防具にすることに、特に疑問を抱いたことはなかった。だって、それが当たり前だったんだもの。ボクが生まれる前から、みんなそうやって生きてきたのだから。

だけど、いざ自分が解体される側になると、ボクの心は情けなくしぼんでしまう。

モンスターたちも、こんな気持ちだったのかな。ハンターを見るとすぐ襲ってくるのも、自分がバラバラにされないうために必死だったからなのかな。

料理も、一緒にや。ボクたちは生き物をバラバラにして食べている。装備を作るのと、何も変わらない。そうしなきゃ、生きていけないから。

——今なら、あのモンスターたちの気持ちも分かるかもしれない。

怖い。とつても怖い。人間って、こんなにも怖かったんだ。

「にやああ……旦那さん……旦那さん……っ」

おかしいよね。それでも助けを求めてしまうのは、旦那さんなの。彼も人間なのに、ハンターなのに。人と並ぼうとするなんて鳥澁がましい。そんな風に罵られても、やっぱりボクは彼のことを求めてしまう。だって、ボクは貴方のことが好きだから。

その大きな手で撫でて欲しい。

温かい声で、ボクを甘やかして欲しい。

眠くなったボクをそっと抱き上げて、ベッドで寝かしてくれる旦那さん。隣で横になつて、静かに布団をかけてくれる旦那さん。あの「おやすみ」と言ってくれる、貴方の優しい顔が、今は何よりも見たい。

——ボクは、いつから旦那さんのことが好きだったのかな。

初めて認識したのは、凍土で瘡瘻啖に会った時だと思う。旦那さんが死んじやうかも



しれないと思つた時、ボクはこの人のことが本当に大切なんだと気付いたの。

でも、ひよつとしたらもつと前からなのかも。大鍋をお風呂にした時や、モノブロスをホイル焼きにした時。グラビモスをシチューにした時かな。それとも、初めて布団に入れては抱き締めてくれた、その時かもしれない。ずっとずっと、好きだったのかもしれないにや。

でも、ごめんなさい。ボクは自分に自信がなくて、勇気がなくて。ずっと本当の気持ちを言うことから逃げてました。

アイルーが人間のことを好きになるなんて。人間の男の人を愛してしまうなんて、本来ありえないんだもん。この想いを伝えたら、きつと旦那さんは困ってしまう。ボクは、避けられてしまうかもしれない。もしかすると、嫌われてしまうかもしれない。そう思つたら、とてもじゃないけど言えなかった。

それでもちゃんと伝えようと勇気を出したけど、空回ってしまったのも、ごめんなさい。手紙、結局完成させられなかった。旦那さんに渡すこともできなかったのにや。

伝えようとして、頭が一杯になっちゃって、旦那さんと喧嘩しちゃって。本当に、本当にごめんなさい。

もう、我儘は言わないのにや。

旦那さんの言うことはちゃんと守るし、自分の気持ちを知ってほしいなんて子どもみ

たいに泣いたりしない。

貴方の隣にいたなんて言わないにや。ルームサービスでも雑用でも、何でもいい。旦那さんの邪魔はしないようにするから。貴方の世界の、本当に端っこでもいいから。そこで生きることが許してください。貴方を見ることのできる範囲で生きることが、許して欲しいのにや。

——もうボクには、旦那さんしかいないから。

「……………さて、始めようかア」

うづくまるボクに向けて、聞いたことのない声が飛んでくる。腫れた目を向けると、ロウソクとは比べ物にならないくらい眩しい光。ユラユラと揺れる炎を呑み込んだカシテラが、この暗い部屋を照らしていた。

その光に当てられた、見覚えのない影。ユクモ風の衣服に身を包んだ男の人が、ボクの前に歩み寄ってきた。

「ようネコちゃん。俺がお前の解体人だ。君はイルルちゃんで合ってるかい？」

「……………」

「ふっ。全く、お高くとまっちゃってエ。毛並みがいい子はプライドも高いんかねエ」

無精髭を蓄えたその人は、深く刻まれた皺を曲げながら、不敵な笑みを溢している。服の上には黒い髪を、頭の高い位置でひとまとめにしていた。大柄でも小柄でもないその体に背負うのは、これまた長い太刀。それを眩しいカンテラの光で照らしながら、鋭い目でボクをじろりとみる。

その目は、店主さんと一緒だった。ボクを道具としか思っていない、人間の怖い色。思わず、尻尾が膨れ上がる。

「俺はアスマってんだ、よろしくな。……じゃ、ちやつちやとやつちまうかねエ」

そう言うと、奥から男の人が三人現れる。一人は店主さん、もう二人は同じくシャドウアイをつけた、大柄の男の人。剃り上げたそのスキンヘッドが、カンテラの光を淡く灯していた。

そんな彼らが、勢いよくボクを抑えつける。慌てて抵抗しようとしたけれど、首輪と鎖のせいで逃げる事ができない。爪を振るおうにも、彼らのアームガードを裂くことはできなかつた。

「離して！ 離してにやつ！」

「どうどう、そう暴れるなつて」

「さあネコちゃん、まな板にいこうねえ」

まな板。スキンヘッドの人がそう呼んだのは、彼らが運んできた木製のテーブルだつ

た。

——鼻を抉るような、血の臭いがしたにや。それどころか、そのテーブルにはドス黒く染まった赤色がこびりついている。死の香りが、より一層濃くなった。

「……つやだ！ いやつ、いやにやあつ!!」

怖い。怖くてたまらない。あそこで、一体どれだけのアイルーが悲鳴を上げたんだろう。そう考えただけで、ボクの頭は真っ白になった。

体中から水分が溢れ出る。

呼吸がおぼつかない。

動悸が収まらない。

でも、大人の男の人の力はとっても強くて。旦那さんのような、優しい抱き上げ方じゃない。ボクの手足をきつく握って、暴れないように持ち上げてくる。体中がとっても痛いのにや。

「お願い……やめてつ、やめてよお！」

「何をバカな。こんな金になること、やめる訳ないだろお？」

「オラ暴れんな！ 手え出せ、手つ！」

ろくな抵抗もできないまま、ボクはテーブルに押さえつけられた。胸を押し付けるその手が、とつても痛い。骨が軋む。息ができない。

そうして力が抜けたボクの手足を、店主さんがベルトで縛り上げる。右手につけられたベルトは、そのままテーブルの足に括りつけられたロープと繋がっていて。同様に左手、右足、左足にそれぞれ別のベルトが喰らい付いた。

ようやく押さえつけられていた手が離されて、ボクは荒く息を吐き出す。喉が熱い。ガラガラと、嫌な感触が走っている。でも、そんなことには気を回していらなかった。両手両足が縛られている。身動きができない。

——逃げられない。

「……じゃ、俺は見張りの方いつとくぜ」

「ああ、頼んだぞ」

スキンヘッドの片割れが、おもむろに踵を返しては壁の方へ歩いていく。よく見ればそこには壁に備え付けられた梯子があつて、彼はそれを登つては上層に上がつていった。

一方で、満足気に頷いていた店主さん。ご機嫌な様子で鼻を鳴らしては、ボクの頭を荒く掻き回す。

「これからもよろしくな、イルルちゃん」

「……はあつ、はあつ……にやああ、これ、から……う？」

「これからお世話になるつもりって言ったろ？ いい三味線になつてくれよな」

「う、ううう……やだ、やだあつ！ 嫌つ、いやだよ、旦那さん！ 旦那さんっつ！！」  
もうなりふり構っていられなかった。恥も外聞もかなくなり捨てて、ボクは大声を上げた。自分の力ではどうしようもできない。大好きな人に、助けを求めるしかできない。

——その人は、ここにはいないのに。

「はははア、おかしな奴だ。ここにはお前の主人もいない。お前はもう、俺たちの商品なのさア」

「商品なんかじゃないっ！ ボクはアイルーにや！ 楽器になんてなりたくないのにやあー！」

必死に叫ぶボクだけど、この人たちはどこ吹く風で。スキンヘッドのおじさんは、後ろからボクの頭に布を被せてきた。

「うるせえネコだなあ……これでも被つてろ」

「ひっ……やだつ、やだよお……」

「おお、いいじゃないか。何も見えないってのは、それだけで充分恐怖だからなア」

「おうおう、静かになつちやつて。じゃ、アスマさん。さつさとやつちまいやしようや」

「よしきた。ほんじゃア、パパツと剥いじやおうかねエ」

真っ暗。真っ暗な世界。

目を閉じていても、開けていても真っ暗な世界にや。例え目の前が見えたとしても、

そこにいるのはあのおじさんたちで。本当に真つ暗な世界だった。

——もう、ダメにや。

せめて、最後に。最後に、旦那さんに会いたかった。あの優しい笑顔に触れて、わしやわしやと撫でてほしかった。

旦那さん。

ごめんね、旦那さん——

何か重いものが落ちてくる。そんな鈍い音が響くのを感じながら、ボクは何も映さない目を閉じた。

——人のように重いもの。そう、あのスキンヘッドのおじさんくらいの。それが奇声を上げながら、落ちてくる音。

## 脂肪遊戯

扉を開ければ、立っていたのはスキンヘッドの男。あの忌々しいシャドウアイが目立つものの——クソ店主とは違う奴のようだ。

彼は、俺に気付くや否やあつと口を開ける。一体何事だ。お前は誰だ。どこから入っていた。そう言いたげに、あんぐりと開いた口。

こいつが、一連の関係者である確証はなかった。——扉を開ける、その時までには。開けるや否や聞こえてきた、ネコの悲鳴。イルルが悲痛な声で、俺を呼んでいる。それだけで充分だった。こいつを蹴り飛ばすには。

「——なつ、なんだ!?!」

突然降ってきた、大柄の男。それが音を立てて、工具の詰まった木箱を押し潰す。気絶でもしてしまったのだろうか。彼は起き上がることもなく沈黙し始めた。

一方で、その様子に驚愕の色を差した顔が三つ。あの忌々しいモヒカンは、驚愕の声



を上げる。太刀を背負った無精髭の男は、訝しむような目でこちらを見ていた。嫌な目だ。自分勝手に生きることが伝わってくる。他人を何とも思っていない、嫌な目だった。

「……………」

やや高台に位置した入り口から、奴らの土俵へと跳び降りる。背後の壁には、埋め込まれたような梯子が列を成していた。

「どうやらここは地下のようだ。まさか、こんなところに廃工房があったとは。」

「おっ、お前……!?!」

「探したぜ……………このクソダサモヒカンウンコヤロー」

「んの……………曲者があー!」

モヒカンの横から、同じくスキンヘッドに頭を染めた男が飛び出してきた。さつき蹴り飛ばしたハゲとよく似ている。双子だろうか。

今度は、ナイフを携えていた。剥ぎ取りナイフほどの大きさもない、小振りなナイフ。それを振りかざしては、俺へと迫りくる。

「くせ者はお前だよ。セリフがくせえつての!」

風を斬る切っ先は、俺の目頭を狙っていることがバレバレで。スツと首を傾けるだけで、それは俺の真横を通り過ぎていった。

そのまま、俺の背後へと流れた後頭部。空いた右腕を持ち上げては、勢いよく後ろに肘を出す。肘が頭を、まるで鐘のように打ち鳴らし、小気味良い音をこの地下空間に響かせた。

「がっ……っ！」

随分いいところに当たったのだろうか。彼はそのまま前のめりに倒れ込んで、ピクリとも動かなくなる。

そもそも、こいつ誰だ。さっきのハゲも誰だ。

「……イルル」

いや、こいつらが誰かなんて、どうでもいい。それよりも、今はイルルだ。イルルさえ、イルルさえ無事ならば。

俺が名前を呼ぶと、モヒカンの背後にあったテーブルが軋んだ。布をかけられた白い塊がうなり、その先から伸びたこれまたふわふわとしたものをピンと立たせた。

「……ヒリエツタ。気絶した奴らを縛ってくれるか？ また動かれたらめんどくさい」

「う、うん……！」

「あとルーシャ。俺はあのクソモヒカンをやるから、イルルを助け出してやってくれ」  
「分かったわ……！」

背後の壇上の気配に向けてそう声をかけると、戸惑いを含んだ返事が返ってきた。

それがそのまま着地の音になる前に、俺は前へと駆け出す。あの忌々しい、シャドウアイの男に向けて。

「おっ……このッ！」

慌てて構えるその男。駆ける勢いを維持しては右手を掲げると、奴は瞬時に左腕を盾にした。

よく見ている。俺が手を出した瞬間、左頬が狙われていることをすぐ察知したようだ。

——惜しむらくは、それをブラフと理解していないところであるが。

「バーカ」

そうしてがら空きになった右頬。そこに向けて左脚を振り抜いた。突き出すように見せかけた右腕を、勢いよく後ろへと振る。その勢いのまま、俺の体は時計回りを繰り返して。遠心力は、伸ばした左脚へと乗りかかる。

流石に覇竜の義足で顔を蹴るなんて、非人道的なことをするつもりはない。その代わりと言っては何だが、俺は膝を突き出した。

「ガッ……!?!」

浮いた体を、振り抜いた足で縫い止める。じやりつと音を立てながらも、石造りの床は俺の体を受け止めてくれた。

一方で右頬を打ち抜かれた奴は、その巨体を勢いよく転げさせる。シャドウアイは耐え切れずに飛び出して、地面を激しく削っていった。

石造りの床には生々しい血痕が付き、齒が数本その色を彩っている。しかし、この店主はあのハゲ二人よりは多少鍛えているのだろうか。血反吐を吐いて、よろよろと膝をつきながらも、彼は何とか身を起こした。

「かはっ……お、お前……どうやってここに……っ！」

シャドウアイが消え、露わになった奴の両目。黒目が小さなその三白眼で、俺を憎々し気に睨んでいる。

「それお前に言つて意味あるか？」

その鼻つ柱に、今度は右膝を。何か折れる音がした。

「あッアアッ……っ！」

声にならない声を上げては、奴は後ろへと倒れ込む。鼻から、これまた黒い血の塊を噴き出しながら。

流石にこれは堪えたのだろうか。奴は呻き声を上げるものの、起き上がることはなかった。ただ、苦し気に胸を震わせている。そんな奴の、露わになった右手に向けて。

「イルルを触った汚え手は、これか」

振り下ろしたのは、左脚。重殻の踵を、その掌に向けて。

野太い悲鳴が響き渡る。先程よりもさらに鮮明に、何かが砕け散るような音が聞こえた。丁度軟骨を噛み砕いた時のような、そんな快音だった。

腕を抑えては呻き声を上げるそいつを、蹴りつける。ただただ雑に蹴りつける。

「まあいいや、教えてやるよ。お前、イルル捕まえるのにナイフ使ったよな？ ベンチに毛が少し残ってたぜ」

「あぐつ、はあつあツ！」

「そうじゃなくても、今は季節の変わり目だ。換毛期つつつてな、抜け毛が多いんだ。だから、毛が少し残ってたのさ。あの風通しの悪い路地によ」

「あつあつ……ああ……ツ……」

「だからそれを蟲に嗅がせた……んだけど、これだったら別に路地いなくても自宅に残った毛使えば良かったかもなあ。……って、もう聞いてないか」

既に意識をなくしては、白目を剥き出しにした店主。その邪魔な肉の塊を蹴飛ばしては道を作り、奥にある血生臭いテールへと足を進めた。

困惑した様子でこちらを見ていたルーシャだったが、俺の視線に気付いては慌てて布へと手を伸ばした。イルルの顔を覆い尽くす、その黒い布へ。

「……イルル」

「————だん……な、さん……？」

大きく見開いた目は、俺の姿を傍げに映していた。

信じられない。夢なんじゃないか。そんな思いを映したかのように、揺れ動く瞳。小刻みに震える彼女に傍に寄っては、その柔らかい頬へと手を伸ばした。

「……遅くなって、ごめん」

「……だんなさん。……だんな、さん……旦那さん……っ！」

俺に跳び付こうとしたのだろうか。テーブルをぎしりと軋ませたが、手足を縛るロブがそれを許さず、イルルはきゅんと小さな悲鳴を上げる。

そんな小さな体を、テーブルの上からそつと覆い込んで。彼女の耳元で、俺は小さく囁いた。

「もう大丈夫だ。……会いたかった」

「旦那さん……っ！ 旦那しゃあああん……っ！」

ポロポロと。その大きな瞳から、これまた大粒の涙が零れ落ちる。震える体で、可愛いらしい口元で、彼女は嗚咽を漏らしながらも俺のことを何度も呼び続けた。

イルルに、本当に怖い思いをさせてしまった。ストレスからか毛並みはやや乱れており、足には包帯が巻かれている。何とか解体される直前に滑り込めたようだが、だからといってなかったことにはできない傷が、彼女に刻まれてしまったような。そんな気がした。

「——無視してんなよオ！ 兄ちゃんツ！」

突然の疾風。

乾いたような男の吠え声。

思考の隙をついたかのように、あの和装の男が飛び出した。その背の太刀が、しゃらんと音を立てては風を薙ぐ。

思わず反応が遅れた。避け切れない——

「……ッ！」

その太刀筋を、赤い鎧が覆い隠す。よく見れば、その鎧は大振りの剣を構えていた。瞬間、刃と刃が擦れる、耳を劈くつんぎような音が響き渡った。

——厳めしい大剣。それで俺たちを庇ってくれたのは、焦ったように冷や汗を垂らす少女。ヒリエッタだった。

「バカ！ まだ残ってるのにイチヤつかないでよ！ くっ……ッ！」

「おオ……やるねエ、姉ちゃん。おっぱいでけエな！」

「つるっさいなあ！」

苛立った様子で大剣を、滑らせるように薙ぎ払う。そんな返し手を、あの和装の男は後ろに跳ぶことで軽く躲した。そうして、興味深そうな様子で俺たちを眺めてくる。

「……姉ちゃん、可愛いねエ」

静かに、声を。

にんまりと笑つては、声を。

「——この俺と闘えると思つてるところがさア」

瞬間、風が吹く。あまりにも一瞬で、奴はその太刀を振つた。ヒリエツタもそれに反応するものの、一度の斬撃を防いだ瞬間に次の斬撃を入れられる。一秒にも満たないその一瞬で、彼女の体から血飛沫が飛んだ。

「うあ………っ!? 嘘………っ!」

「一般ハンターが俺と闘うなんざア、足りてねエよオ……頭がな」

その斬撃は、太刀にしても早すぎる。さらに、防具の薄いところを正確に狙つて刃を撓しならせていた。

ヒリエツタの持つ大剣は、重量級武器の筆頭だ。あの太刀を相手にするには、挙動の一つ一つが重すぎる。覚束ない様子でその斬撃を受け止めるものの、それ以上の量の傷が刻まれた。

「まず一匹!」

「ぐっ………っ!?!」

振り上げようとした大剣を、太刀の薙ぎで止められて。そうして露わになったその隙を縫うように、あの男は蹴りを入れる。それをモ口に腹にもらつたヒリエツタは、肺の



空気を全て口に押し戻されたかのような、そんな苦痛に満ちた表情を浮かべた。

しかし、それも一瞬。そのまま彼女は壁へと叩き付けられ、滑るように地に伏せる。強く頭を打ったのか、嫌な音が響いていた。

「ヒリエツタ……っ！　ちよっ……」

「やつはア。子宮潰れちやつたかな？」

「……てめえ……」

ルーシヤは悲鳴のような声を上げ、一方の奴は気分良さげに口笛を鳴らした。

一度にならず二度までも。今度はヒリエツタに手を上げたあの男。おちやらけたその態度に唾を吐き付けながら、俺は静かに立ち上がる。

「改めましてご主人さん。俺はアスマってんだ。よろし……」

「何勝手に自己紹介始めてんだ。てめえなんかに興味はねえよ」

そう斬り返してみれば、奴はその気急そうな目を丸くする。何か思い当たることがあるかのような素振りです。俺を二、三度見た。

「……お前、どっかで会ったことないか？」

「は？」

「昔、タンジアの港にいたよな？　俺のこと覚えてないかい？」

「んだそりゃ。お前なんか知らん」

背後では、ルーシヤがヒリエツタの様子を庇っている。体中から漏れた赤い色に、俺は思わず顔を顰めた。俺が巻き込んだばかりに、ヒリエツタにこんな怪我をさせてしまふとは。自らの不甲斐無さを痛感する。

だが、反省会は後だ。目の前の、このアスマとかいう男。俺が会ったことがあるかどうかは別にして、その戦闘能力はただものではなかった。防具の隙間を性格に狙うあの太刀筋。あんな技は、殺し屋のそれだ。

「とにかく、どいてくんねエかな？　俺ア、これからそのネコちゃんをバラさなきやならんのよ」

「それ聞いてはいそうですかって言うと思う？」

「何？　お前も俺と闘うつもりかよオ？」

そう言うや否や、奴はその太刀を振るった。目の前を、横一文字の風が走る。それを後ろに跳んで避けては、俺はルーシヤの横へと着地した。

「……ヒリエツタと、イルルを頼む」

「し、シガレット……アイツ、やばいわ。トレッドさんはどこ行ったのよ……」

「知らん。ギルドへ応援要請をするとか何とか。それに、アイツがいなくなつて別にいい。——あのクソは、俺がやる」

背後の壁に向けて、左脚を振るう。それが難いだのは、壁に取り付けられた鉄のパイ

プだった。重殻がその接続部を叩き壊し、パイプが外へと飛び出した。

その重く長いモノを携えては、俺は前に出る。その様子を見ては、アスマは静かに太刀を鞘に戻した。そうして、静かに腰を引いてはその横へと鞘を伸ばし、構えるように足を開く。

俗にいう、抜刀術の構えだった。それも、待ち一片の。俺の攻撃に対してカウンターを合わせ、後の先を取ろうという魂胆だろうか。

「……なめんな」

抜刀の構えは、確かに強力だ。鞘の内部を滑らせたその一閃は、鋭く、速く、そして苛烈に敵を薙ぐ。威力に関しては、数ある剣技の中でも上位に君臨するだろう。

——しかし。所詮は一閃だ。その一撃を打ち損じれば、あとは隙だらけ。その一閃を、この鉄パイプで止めてしまえばいい。

「——そりゃア、俺の台詞だよ」

そんな思いで、剣筋を見計らった兜割。それを、奴に叩き込んだその瞬間だった。

囁くような、奴の声。

それが聞こえた。そう思った瞬間。右腕が、空気をえぐる。

「……ツなっ……ちっ！」

すつと体を右に引く。たったそれだけの動作で、奴は俺の振り下ろしを軽々と避けた

のだ。隙を晒したのは、俺の方だった。

まずい。そう思ったと同時に、俺は慌てて鉄パイプを引き上げる。丁度それが俺の腹の前まで浮かび上がった時、凄まじい衝撃が腕を走った。

「ぐっ……………」

それを、後ろに跳ぶことでいなす。いなした衝撃を、さらに後転へと繋げることで何とか受け流した。

見れば、鉄パイプに鋭い傷が走っている。視認することも困難な速度の抜刀術。速さに付随する、凄まじい衝撃。慌ててパイプを戻さなかつたら、俺の下半身はおさらばしていたのではないだろうか。そう考えると、冷や汗が薄く浮いてきた。

「……………そもそも、太刀で抜刀術って何だよ。化け物かよ……………」

「お前さんこそ、よくあれを防いだな。正直決まったと思っただけだな……………」

鞘を投げ捨てた左手で、ボリボリと頭を搔いて。呆れたような声でそう呟きながら、されどより好戦的になった眼を、じろりと俺に向けてくる。

その直後、先程ヒリエッタに攻めよった時のようなあのスピードが。瞬時に肉迫する、鋭い斬撃が。俺に向けて、万華鏡のように瞬いた。

「んのやろ……………」

あの抜刀術より幾分か遅いものの、依然としてその速度は類を見ない。筋肉の動きを

見て攻撃を予測するのも、ままならない程だった。袈裟斬りに向けてバツを描くようにパイプを突き出せば、奴はそれに滑らせるようにして次の斬撃を繰り出す。

横一文字、逆袈裟、斬り上げと、多種多様な斬撃が迫ってきた。それも、俺の防具の隙間を狙った正確無比な連撃だ。

「くっそがッー！」

やられるばかりで収まるものか。防ぐばかりでいられるものか。

奴の斬撃を捌きながら、振り抜いた袈裟斬りに力を込める。そのまま、奴へ向けて振り上げようと――

「甘いねエー！」

覆い被さるような鏑迫り合い。それで、奴は俺のパイプを抑え込んだ。互いに肉薄しては、互いの肩を擦らせる。

「……うざっつてえー！」

「うおッ!？」

そこへ、右肩ごとのタックルを。慌てて当て身をとる奴に向けて、間髪入れずに左の裏拳を入れた。それが功を奏したのか、奴の太刀からパイプが抜ける。そうして自由を得た右腕の肘を、そのまま突き出した。

同様に右手の自由を取り戻した奴は、その肘を受け止める。再び硬直へと突入する

が、今度は正面から対抗はしない。右肘に込めた力を、そつと抜く。

「むッ……！」

それを察知しては、奴の右手はその手の中の太刀を斬り上げへと派生させた。びゅんと、再び風が悲鳴を上げる。逃がすまいと、その薄い刃が俺へと迫る。

それをくぐり抜けるように。俺は腰を下ろし、身体を半回転させながら斬撃から逃れた。どころかその勢いに乗って、奴の背後まで回り込む。そうして振るのは、鈍い風切り音を鳴らす鉄パイプ。

「なんのオー！」

しかしそれは、奴の太刀に吸い込まれた。斬り上げたそれを瞬時に逆手に持ち替えて、背後に回したアスマ。さらに左手を添えたこの堅牢な壁は、易々と俺の打撃を受け止めたのだ。

このまま抑え込んでしまおう。そう思つては力を込めようとしたその瞬間。俺より早く、奴が力を解放した。腕を背後に回しているというのに、そのまま俺のパイプを上へと跳ね上げる。そうして隙を露わにした俺の腹には、奴の回し蹴りが迫っており――

「ぐっ……ッ！」

威力を抑えようと何とか後退するも、鈍い音が響く。腹は静かに痛みを訴え、唇の端

からは血が漏れた。鉄特有の鼻に突く酸味のような奇妙な味。それが鼻孔を荒く撫でてくる。

痛みを逃すように、二、三步に踏み分けながら後ずさりする俺。いつの間にか、イルルやルーシヤたちの真横を踏んでいた。

「ちよつ、シガレット……大丈夫？」

「……問題ない」

「だ、旦那さん……っ」

「イルル、もうちよつとだけ待つといてくれ。それまで、これ食つてな」

ルーシヤが完成させてくれた、カスタードクリーム。パックに詰めては懐に入れていたそれを、ルーシヤが渡したのであろうタオルケットに包まれたイルルへと手渡した。その時に少しパックを開けては、そつと中のカスタードを指で掬う。

「うにやつ、だ、旦那さん……ボク……っ」

「お前、これ好きだったろ？ ……うん、美味いや」

それをそつと舐めながら、俺は再び前へと飛び出した。

振り被った鈍器。それはまるでカスタードの甘さに後押しされたかのように、猛烈な勢いで風を鳴らす。小さく跳ねては体を斜めに回転させて。そうして重力を上乗せ——いや、このカスタードの深みを乗せた打撃を、奴へ向けて振りかざす。

「おッ……とオ！」

口だけは、とてもまろやかだ。そつと舌の上に乗っては、高々四十度未満の微熱できらりと溶けるそれ。クリームと銘打っているだけあって、そこには食感や歯触りといったものは皆無。たださらりと溶けて、唾液と混ざり合う。柔らかな甘みが、口いっぱいに広がっていく。

この甘さは止まらない。この広がりは、誰にも止められないのだ。

「うらあ！ くたばれクソ野郎ッ！」

振り下ろしたパイプを、奴は真横から太刀で受け止めて。

だが、相変わらずの剛腕で、奴はそれを押し返してきた。瞬時に迫ったそれを、渾身の力で引き止める。俺へと迫る鈍器は大いに減速するものの、ミリ単位でなお迫り続けていた。

「……つらあッ！」

だが、カスタードの力は止まらない。一瞬浮かせた左手で、パイプを底を突き上げて。そうして奴の剣筋をずらし、すかさずパイプが上を取る。この鏢迫り合いは、再び俺がマウントを取る形へと変貌した。

コクのある甘み。ただ甘いだけではなく、濃厚な深みを下に残していく。さつと溶けることで、それを口全体へと広げさせる。その優しい甘さが、何よりの力となった。と



ろりと喉に流れ込んでくる。その感覚すら、たまらない。

——だが、溶けやすいということは、流れやすい訳でもあって。人差し指分しかないカスタードクリームは、さっと溶けてしまった訳で。俺の口内に残っていたのは、ただの唾液。ただただ、唾液。

「——よつと」

そんな一瞬を突いたように、奴は太刀を横へと流す。そうしてできた斜面を、鉄パイプは勢いよく滑り降りた。何とも無様に隙を晒した、俺の手首に。奴は、鋭い手刀を打ち下ろす。

痛みは、それほどでもない。骨が折れたとか、そんな傷を負わされた訳でもない。

——ただ、パイプを落とされた。

「……ッ！」

即座に繋がられるタツクル。それを受けた瞬間に、奴は太刀を二、三度横へと振った。俺の首筋を狙ったその斬撃が、耳の真横で囁くのを耐えながら。身体を無理に捻じつては、その軌跡から何とか逃れる。

しかし、そんな俺の虚を突くように——いや、蹴るように。奴の長い脚が、俺の脇腹を穿った。

「絶体絶命、だなア。……さアて、死ぬか？」

何とか体勢を立て直す。そのまま徒手空拳で構える俺に向けて、奴は再び肉迫した。守るものが何もない俺に、剥き出しの刃が襲い掛かる。

身を躲し、腰を逸らし、剣の脇を肘で打って。その斬撃をいなしていったが、次第に防御体勢へと追い込まれていった。何とかいつても、あの正確無比な斬撃だ。奴に反撃するどころか、少しずつ俺の体から血飛沫が上がる。

「だつ、旦那さん！ ダメにやつ、逃げて……っ!!」

イルルのか細い悲鳴が聞こえてくる。しかし、それに反応している余裕はなかった。何とか首や脇などの急所は守ったものの、体中から血が溢れている。ボタバタと、無機質な色の床を鮮やかな赤が彩っていく。

痛みにガクツと膝が崩れた。立つこともままならず、俺の膝は血糊を地面に擦らせろ。回避をする余裕はないと、奴は踏んだのだろうか。とどめと言わんばかりの振り下ろしが、俺の脳天に向けて弾け飛んだ。

「……逃げられるかよッ!」

寸でのところで、両手を広げてはその刃を止めた。真剣白刃取りなど、まさか自分はやることになるとは思わなかったが——今はそれのおかげで、何とか命を留め繋げている。

ぎちぎちと刃が鳴り、少しずつその鋭い光が迫ってくる。血に塗れた掌は妙に滑りや

すく、力が入れにくい。どころか、掌さえ少しずつ裂けていつているのだろうか。漏れ出る血潮は、拍車がかかったかのようにさらにさらに激しく溢れ出した。

「しつこいなア！」

そんな俺の右足へ、奴は忌々し気な様子で蹴りを入れる。それがさらに俺の体勢を崩させて、俺の視界は荒くぶれた。それでも、太刀は振り下ろさせまいと両腕への力は和らげない。

ところが、そこに飛んできたのは再び蹴りで。足へのガードを疎かにした俺は、そのまま背後へと蹴り飛ばされる。鎧を軋ませながら転がって、それでも即座に起き上がってみるけれど。

背後には、沈黙する灰色の壁。

「もう逃げ場はねエ。あと、勝ち目もねエよ。さあ、大人しく斬られてくれよなア」  
「……誰が、てめえなんかに」

ゆつたりとこちらに歩きながら、兜割の姿勢へと移行するアスマ。少し息を乱しているようだが、平静を保った様子で俺にそう語りかけてくる。

奴の言葉は受け流すものの、この状況は容易に受け流せるものではない。傷だらけで壁際に追いやられ、必殺の一撃を放つ敵を前にする。窮地もいいところだろう。このままでは、俺は負けるかもしれない。

ふと、奥を見た。剣を構える奴の、その奥を見た。

ルーシャに応急措置をされるヒリエツタ。彼女は未だに目を覚ますことなく、静かに沈黙を保っている。処置をしながらもこちらの様子を窺うルーシャは、焦った様子ながらもアスマを憎々しげに睨んでいた。

——イルルは。

ずっとずっと会いたかった、大事な大事なパートナーといえば。

静かに俺を見ている。不安げで、哀しげに、その三角の耳を力なく垂らしながら。

けれど、その目は。青い光を映すその綺麗な目は、真摯に俺を見ていた。俺のことを信じてくれている。そう感じさせるくらい綺麗で、安心させられる瞳だった。

——そう、だよな。負ける訳には、いかないよな。

一步、軽く後ろに跳んだ。より一層、背後の壁との距離を短くする。後ろに伸ばした足の裏が、ピタリと壁に密着するくらい、近くする。

何を企んでいる。そう言いたげな様子で眉をピクリと動かしたアスマは、いよいよその構えを完成形へと移行させた。これでいつでも斬りかけられる。そう言わんばかりの殺気だった。

速さだ。

俺がやろうとしていることには、並外れた速さがある。それも、奴の剣速をも超える

速さ。

ほとんど、賭けと言っていていいだろう。少しでも怯えたら、死ぬ。躊躇したら、俺の体は真つ二つだ。

——だから、ビビんなよ、俺。

「……ッ！」

そう息を飲んだのは、奴。激しく揺れる視界の中で微かに映る、奴のその厳めしい喉仏。

背後の壁を、蹴った。痛みも全て無視して、渾身の力で蹴った。壁の反動を利用しては、初速から全力で前に出る。そうして、剣を振り下ろそうとする奴に向けて走り出した。

いや、走り出したというのは語弊があるか。走ったのは、最初だけ。その後は、この滑らかな覇竜の装甲を利用したスライディングだ。できる限り姿勢を低くしたスライディング。

もちろん、空気抵抗を弱めるという意味もある。だけど本命は。この動きの本命は——

「……なッ……!!？」

——可能な限り、奴の太刀の下に潜り込むこと。

今日一番の驚愕の色が、奴の顔に差した。それもそうだ。まさかこの兜割が止められるとは思っていなかっただろう。それも、太刀そのものではなく、剣を握る手を封じられることよってなante。

スライディングで肉迫した俺は、その低い体勢を利用しては奴の腕の下へと潜り込んだ。剣の間合いの、その内側へ。そこに入ってしまったえば、いくら剣を振ろうがまるで意味がないのである。

そんな奴の、隙だらけのその腹へ。今までのお返しと言わんばかりに、肘鉄を二度入れる。鳩尾を深く抉ったそれに、奴の口からは何かが飛んだ。

「ぐッ……この……ッ！」

腕を振り上げて、風のように撓らせて。俺の頸動脈を狙った新たな斬撃が、一寸の狂いなく軌跡を描く。

だがそれは、再び俺の腕に阻まれて。腕の装甲に直撃した奴の手首が、鈍重な悲鳴を上げた。そうして隙が出来た奴の頬に向けて、払うように拳を入れる。右へ、左へ、再び右へ。振り被った左拳を疊んではそのまま肘鉄へと変貌させ、奴の鼻つ柱を穿つ。奴の視界を潰した隙に、今度はそのまま奴の後頭部を荒く右手で掴んだ。

空きつ腹に、拳。今度は左の握り拳を、何度も何度も奴の腹へ入れる。吐き出るものが唾液から血反吐に代わっても、俺はその手を止めなかった。

「うオあアツ！ 離せエツ！」

何とか俺を振り払い、太刀を低く構える奴。

引いた右肩。落とした腰。地を蹴るために強く踏んだ右脚に、軸を果たすために大地を刺したその左脚。

太刀の奥義——大回転斬りの構えだった。

「があアツ！」

そうして振り払ったそれは、まるで台風のように。斬撃の嵐が、この狭い廃工房を激しく掻き回す。

けれど、それは砂利しか巻き上げることができなくて。宙へと跳んだ俺に触れることはなくて。斜めに回りながら振り上げた俺の右脚は、まるで台風の目に飛び込む鳥の如く。奴の、その間抜けな面を打ち抜いた。

さながら風船が割れるような、そんな強い音が響く。奴はそれに弾き飛ばされ、赤い軌跡を残しては体を地面へと擦り付けた。それがようやく停止したかと思えば、ピクリ、ピクリと体を震えさせる。呻き声は、次第に沈黙へと変わっていった。

——もう、起き上がらないだろうか。

「……ふうっ！ あー、ひやひやした……」

大きく息を吐いて、身体を伸ばす。ところどころから血が滲むそれに少し気が滅入る

ものの、気持ちはどこかすつきりしていた。

もうそろそろ、トレッドがギルドの衛士を連れてこちらに現れるだろう。見渡せば、スキンヘッド二人は壁に縄でくくり付けられており、モヒカンが床で沈黙していた。アスマとかいう男は今し方俺が仕留めたため、これで奴らは全滅したと言える。後は、ギルドの連中に彼らを捕らえてもらえればそれでいい。

勝ちだ。

これにて、一件落着だ。

拳を振り上げてガッツポーズを見せると、ルーシヤは安心したかのように胸を撫で下ろす。イルルは尻尾をピンと立たせながら、瞳に涙を滲ませた。

よろ、よろと。覚束ない足取りで、イルルは俺に歩み寄ってきた。ロープのついたベルトや包帯を地に擦らせながら、一步一步、俺へ向けて懸命に踏み締めている。

やつと。やつとだ。

やつと彼女に触れ合える。

やつとその可愛い口から、直接声を聞くことができる。

——やつと、一緒にいられる。



乾いた破裂音が、響いた。

それはこの狭い空間を反響し、耳を激しく掻き回す。

一体何の音だろう。俺の背後から聞こえたような、そんな気がする。

その音の元を知りたくて、俺は半身を後ろに反らそうとして。

——その時、ごぼっと。

俺の腹から、赤い何かが飛び出した。

「  
ッ!!??」

声にならない悲鳴を上げたのは、俺ではなかった。目の前の、表情を一変させたイルルだった。

その白い毛並みが、安っぽいタオルケットが。真っ赤な色に染まっては、青い瞳を驚愕の色で染め上げられる。

熱いものが腹から飛び出してしまったかのような、そんな気がして。半身反らしかけ

た俺の体は、無様に崩れ落ちて。妙に体が軽くなったような、不気味な感覚が襲いくる。まるで砂嵐のように横線が流れる視界は、ゆらりと立ち上がる影を映した。あの血塗れの黒い髪が、静かに揺れた。

「(ぼ)ぼッ……あがッ……て、てめえ……ッ」

「……あア、いてエ。いてエよ畜生。すッげエ蹴り入れてくれちやつて」

奴の手に、太刀はなく。そこに握られていたのは、過去に数回見たことのある、小振りな筒で。

鼻に突く火薬の臭い。湧き上がる白い煙。筒から伸びたその持ち手は、小柄ながらも機能性を重視した作りになっていて。

——トレッドに何度か向けられたことのある、非公式の武器。アスマが握っていたのは、銃だった。

「こうなつたら、権力行使してお前らを抹殺するしかないなア……」

「てめっ……一体……」

「(ぎ)つき言つたらオ？ 頭が足りてない、つてさ……」

再び照準を向けられたそれ。煙を吐き出すその深淵は、底が全く見えなかった。まるで地獄に繋がる穴のようだと、ガンガン鳴り響く頭でふと思うもの——  
バカバカしいと、どこか自嘲気味に目を伏せる。

血を流し過ぎた。もう、満足に動けそうにない。こんな人間に、まさかここまで追い込まれるなんて。瘡瘻啖と闘った時のような頭の重さに、俺は反吐が出そうになる。だけれど、あきらめてたまるものか。やっとここまでできたのだから。もう少しで、イルルと一緒にいられるのだから。

何とか、反撃の糸口はないか。こんなボロボロだけど、それは奴も一緒なはずだ。なりふり構わない、何かを叩き込まなければ。体を起こさねば。

——目を、開けなければ。

「……っ、イルルちゃっ……！」

瞬間、ルーシヤの声が響いた。それが一体どんな意図のものかは分からなくて、でもそれが知りたくて。俺は伏せた目を、何とか開ける。

——映ったのは、あの赤い斑点が染みついたタオルケット。

「死ねエ、このクソがアッ！」

血走った眼で引き金を引くアスマ。

火を吹こうとするその銃の先に。

俺の目の前へと飛び出した、白いかたまり。

——待ってくれ。

そんなことをさせるために、俺はお前を助けたんじゃない。

——やめてくれ。

お前のことが大切なんだ。お前が何よりも大事なんだ。

——俺の前に、飛び出さないでくれ。

やつと。やつとお前と一緒にいられると。俺はそう思っていたのに。

小さな体が、弾け飛んで。

ネコの小さな悲鳴が、俺の耳を貫いて。

火薬の張り裂けるような音だけが、ずっと俺の耳の中で響いていた。

## 猫心あれば人心

弾ける体。

小さな毛玉が、まるでパチンコのように後ろに飛ぶ。一瞬、その毛のかたまりが一体何だったのか。本当に、分からなくなった。

弾け飛んだそれは、白い毛に覆われていて。その毛並を、安っぽいタオルケットに包んでいて。三角の突起や手とおぼしきものからは、薄い桃色が垣間見える。そんな小さな体が、苦しそうに息を吐いた。

「あ、ふっ……っ！」

その声は、俺がいつも耳を傾けていたあの声で。

ある日突然いなくなってしまう、聞くことができなくなってしまうあの声で。

また聞きたいがために、死に物狂いで闘ったあの声で。

華やかな笑顔は、今や苦悶の表情に染まっている。

体を覆う毛は、毛先が荒れて、汚れも目立っている。

その口から漏れる声はもう、あの柔らかい響きがない。内臓を絞り潰したような、今

にも血反吐を吐きそうなの。

——イルルが、苦しそうな声を。

「——イルル……イルルッ！ イルルーツ!!」

抱き留めたその小さな体は、かなり軽くなってしまったのではないだろうか。なんて思いが頭の中で走るものの、今はそれには構っていられたなかった。

大きく咳き込みながら、身体を小刻みに跳ねさせるイルル。俺の腕の中で、痛みを何とか体から逃そうとしているように見える。けれど、そんなことをしても痛みは逃げる訳がない。

ただただ、このまま彼女の体は止まってしまおうのではないか。そんな思いが俺の心を蝕んでいく。

「イルル……ダメだ！ 死ぬな！」

「にやつ、はうつ、はあ……つ、あああううう……！」

必死に宙を掴むその手を強く握り締めると、彼女も同様に俺の掌に力を込めてきた。小さな肉球が掌と擦れ、指先の爪は軽く俺の皮膚を突き破る。だが、今はそんなことを気にしてられない。

「俺は……こんなッ！ こんなつもりじゃあッ……！」

——イルルは、俺を守ってくれたのだ。

突然太刀から銃へと切り替えたアスマの凶弾から、イルルは身を挺して俺を庇ってくれた。銃弾を全身で受けて。彼女の小さな体には、あまりにも重いその弾を。

どうして。どうして俺が守られているんだ。

俺は、何故ここにいる。

イルルを助けるために、ここにきたんじゃないのか。

なのに、なのにどうして。

何故俺は、イルルをこんな目に。

「あつ……ああ……ッ」

タオルケツトを介して触れる俺の手と、彼女の体。ずれたその布から、彼女の毛並みが俺の掌に触れて。その掌にはべっとりとした何かが。べちよりと手を濡らす何かが。

まるで体から溢れてくるようなその正体を、探ろうとする俺の頭。それを必死に止めようと、俺の理性は心を抑圧する。

嫌だ。考えたくない。認めたくない。

「俺はッ……これからもずつと、ずつと一緒にいたかったのにッ！　こんな、こんな

……ッ」

「あつ……にや、にやああ……だ、だんな、さ……」

不意に、頬に柔らかいものが触れる。

あの桜色の肉球が、弱々しくも俺の頬を撫でていた。ただ、俺を慰めるように。子どものように涙を流す俺を、あやすように。

彼女は苦悶に顔を満たしながらも、必死に笑顔を浮かべていた。こんな優しい表情は、今まで見たことがなかったような、そんな気さえした。情けなくも、俺は言葉を失ってしまう。

「……………だんな、さんを……………まも、れて……………うれしい、にやあ……………」

「……………イルル……………」

「……………この、まえあ……………ひどい、こといって……………ごめ、なさ……………い……………」

「……………そんな、そんなのツ！ お前が謝るんじやねえよ！ 悪いのは俺なんだ！ イルルは、イルルは何も悪くない！ ……ツ、ごめんつ、ごめんな……………！ ごめんな……………ツ」  
ただ、抱き締めた。

その小さな体を。今にも全てが途切れてしまいうような、その体を。

他にどうすればいいか、分からなかった。どうしたら彼女を助けることができるのかが分からない。もう無理だと、心の中で泣き喚く俺が、だんだんと大きくなっていく。

だから、俺は想いを口に乗せた。何としても彼女に伝えたい、この胸の内を。

「イルル……………好きだ。俺、お前のことが好きだよ……………。いつも有り難うな、俺なんかと一緒にいてくれて有り難うな……………つ。もう、離さないから……………絶対、離さない。ずっと一



緒だ……ッ！」

「にやあ……だんな、さん……っ、だんなさあん……い！」

摺り寄せてきた頬に、俺も負けじと頬を押し付けた。ふわふわとした毛並みが、俺の頬をくすぐつてくれる。昔は当たり前だったそれが、今ではとても懐かしい。本当に、本当に懐かしい。

ぼろぼろと涙を流す彼女の額に、俺はそつと唇を落とした。人間特有の愛情表現は、アイルーに通じないかもしれない。そんなことを思いながらも、その柔らかな口元に自分の想いを押し付ける。きゆう、と小さな声が漏れた。

「……っ……」

「……ん……にやあ……」

静かに口を離せば、目を丸くしたイルルの顔がそこにあり。

心なしか、頬が紅潮しているようにさえ見える顔だった。だけど、それを少しずつ綻ばしていつて。

嬉しい、と言わんばかりに目を細めた笑顔。それが何よりも綺麗だと、どこか他人事のように感じた。

好き、好き。そんな言葉を漏らしながら、彼女は俺に体を密着させる。先程まであった小刻みな体の震えは、今はもうない。ただ、小さな鼓動だけが伝わってくる――

「——いい加減にしろやア！　この異常者どもがアッ！」

瞬間、発砲音。

思わず、その小さな体を包み込んではその場で身を伏せた。それでも間に合わず、俺の頬が勢いよく裂ける。どつと、血が吹き上がった。

「気持ち悪い……気持ち悪いなア。お前人間だろオ？　何ネコ畜生に求愛してんだよ。狂ってんの？」

反吐が出る。そう言わんばかりに、唾を吐き捨てるアスマ。青あざと血の痕が目立つその首を振っては、憎々し気に俺のことを睨みつけている。

意味が分からない。目が、そう訴えていた。

その突然の発砲に、今まで沈黙を保っていたルーシャが腰を上げる。武器を構えようと、地面を力強く踏んだ。

——踏んだのだが。

「おっと、動くなよ嬢ちゃん！　下手なことすると、そちの姉ちゃんに穴が開くぜ？　これ以上余計な穴増やさせたくないだろオ？」

「……………！」

銃口を向けられ、彼女はその場に押し留まった。悔し気に歯を剥いて、ヒリエツタを庇うように彼女の前で体勢を低める。

手は出すつもりはないらしい。代わりに、彼女は口を出した。

「ネコ畜生って言い方はないわ……っ！ アイルーだつて、私たち人間と同じよ！ 生きてるんだもん！」

「同じな訳があるか。ネコなんざア、アプトノスやクルペッコと変わらない生ごみさ。その生ごみを有効活用してやろうって言つてんだよ！ 人間様に感謝しろよオ！」

「……最低よ、アンタ……っ！」

ルーシヤの言葉に、彼は過剰に反応する。まるで自分の許せないものを主張するような、そんな血走った眼で。

「モンスターの癖に人間ぶりやがつて、それで人間の男を誑たし込むたア……畜生もいいところだぜ。お前らみたいな異常な奴らは……虫酸が走るよ」

吐き捨てるようなその台詞に、俺は思わず体を起こした。腕の中のイルルが哀しそうな声を出すから、その小さなおでこにもう一度唇を落として。そのまま、背後に立つあの男へと視線を滑らせた。

「……異常ってなんだよ？ じゃあお前の言う正常ってなんだ？」

「人間の男は、人間の女を愛する。これが真理じゃねエか。その逆も然りな。それができない奴らは異常だよ。お前らもだ。反吐が出るね」

「……つるせえな……」

「アん……?」

不審げに目を細める奴に向けて。俺は、腕の中の毛並みが逆立つような声で、吠える。「——うるせえつつつたんだよツ!! 俺らが誰を好きになろうが、お前にやどうでもいいだろうが! 当事者でもない赤の他人がツべこべツべこべ言いやがって……ツ」

頭が沸きそう。こんなに頭が熱くなるのは、久しぶりだった。

「大体、正常って何だよ! いちいちそんなルールに縛られてしか、お前らは生きられないのか!? 馬鹿馬鹿しいとは思わないのかよ! わざわざそんな無駄なものを取り決めて、世界を狭めて! お前らはそれで満足なのか!」

何か言おうとするアスマのその口を遮るように、俺は言葉を重ねていく。無駄なことなど、言わせてたままるものか。

「それでも、それでも俺が異常だというなら、俺は異常で構わない。つまらない世界にいるよりは、俺は自分らしく……こいつと生きることを選ぶさ」

吐いた息を、もう一度強く吸い込んで。まっすぐ、アスマの目を見て。

「だって、俺はこいつのことが大好きだから。これは、誰がどう言おうと覆すつもりはない。……お前に好き勝手言われる謂れも、ないんだよ」

そう言つては、もう一度イルルを抱き締めた。きゆう、と腕の中の温もりが声を上げて、その身を静かに寄せてくる。それが愛おしくてたまらない。

好きな奴を好きになって、またそいつも俺のことを好きになってくれる。それに対して上げられる誹謗の声など、何の価値があるのだろうか。

確かに、この世界にはそれは異常だと声を上げる人間が一定数存在する。つまらない常識や価値観で、人の気持ちを軽々と踏みにする奴らがごまんといる。

俺は、何が正しいとか、正しくないとか。そんな概念は、『好き』っていう感情に伴わないと思うんだ。その『好き』の形は千差万別で、その一つ一つがまるで一品料理のように素敵なものだ。中には不味かったり、味の濃すぎるものもあるだろう。だけれど、そこに正否なんていう調味料は、必要ないんじゃないだろうか。

「……アイルーも、人間も……心があって、言葉がある……」

ふと、そんな言葉が飛んできた。

見れば、気怠げに目を開けながら、唇を上下させる少女が一人。白い包帯やガーゼをほんのり赤く染め上げたヒリエツタだった。

「通じ合えるから、そこに姿は関係ないって……言つてたもんね、シガレット」

そう言つては優しく微笑んで、また痛みに耐えるように顔を歪ませる彼女。その横にルーシヤは屈んでは、ヒリエツタを支えるようにその紅い鎧へと手を伸ばす。

どうやら目を覚ましたらしい彼女は、随分と懐かしい言葉を俺に返してくれた。あのオオナズチに肉を盗られた直前。その時に俺が吐いた言葉だったような、そんな気がす

る。

一方で、押し黙っては苛立ちを主張していたアスマ。ヒリエツタを気絶へと追い込んだその張本人は、不満を盛大に込めた溜息を吐いた。ガスを溜めに溜めたような、そんな大きな溜息を。

「……くだらねエツ！　くだらねエくだらねエ！　むかつくぜエほんとによオ……お前らは悪だ、悪なんだよ……ッ！」

不満を吐き捨てるアスマ。その形相は凄まじく、彼の過去に何かがあったのではないか——なんて感じさせるほどに、鬼気迫る色で顔を染め上げている。

そんな彼に向けて、ルーシヤは呆れたように言葉をかけた。馬鹿な奴だと、そう言わんばかりに頭を振りながら。

「悪ってさ……。それが誰かを不幸にしてる訳？　それが、人を脅かすようなことをしてる訳？」

「なにをオ……」

「彼らは彼らで好きに生きる、それでいいじゃない。そこにいちいち介入なんかしないでいいの。そういうのを、余計なお世話ってゆうのよ」

どこか清々しい顔で、俺たちの方へ目を向ける彼女。イルルに向けて「良かったね」なんて、そんな言葉を投げかけているかのような顔だった。

その優しい視線に、イルルはピンと尻尾を立たせる。ぐったりとさせていた体だったけれど、ふわふわとした尾だけは綺麗に立ち上がった。

——の、だが。

ルーシャの言葉にアスマは。俯いては言葉を閉じ込めていたアスマは。

「……もう、いいよオ」

そう、小さく呟いて。

「どつちにしろ、お前らは皆殺しだから」

すつと、少女二人に向けてその銃を。俺の腹に穴を空けたあの銃を。

耳が張り裂けそうになるようなあの発砲音。それが、再びこの狭い空間の中で反響する。瞬発力にものを言わせてヒリエツタを庇ったルーシャから、鮮血が飛ぶ——。

と、思いきや。赤い色が飛び跳ねることはなく。代わりに、石造りの大地が激しい悲鳴を上げて、二つほどの傷痕を作り出していた。

「……えっ?」

「……なッ……!?!」

片や、穴が開くはずだった体を見ては驚く少女。片や、突然逸れた弾道に驚きを隠せない男。

怯えたように震えるイルルをぎゅつと抱き締めて、俺は視線を上へとずらす。鳴り響

いたもう片方の発砲音の、その出所へと。

そこにあつたのは、煌々と煙を吐いたもう一つの筒。それを手に持つては、何食わぬ顔で立っていたテンガロンハット。

「……遅えよ」

「申し訳ありません。申請が色々と手間取つてしまつて。……でも、もう大丈夫ですよ」  
トレッドだ。後ろに数人の衛士を引き連れて、やつと追い付いてきてくれた。

それにしても、相変わらず人間離れした奴だ。おそらく、アスマの撃つた銃弾を自らの弾で撃ち落としたのだらう。だから発砲音が二回響き、床には二つの爪痕があつて――

それを理解したのか、アスマはトレッドを血走つた眼で見た。まるで威嚇をするジンオウガのような目で、あの飄々とした男を見た。

「なんツ……だアツ！ てめエー！」

即座に、激昂。怒りだけではない、動揺を強く含んだその声で、彼は銃身をトレッドへと向ける。先程自らの弾を潰した張本人に、自らの存在を主張するために。体を大きく見せようとする、モンスターのように。

「……五月蠅いなあ」

そんな奴の虚勢も、一瞬で散つた。



アスマが撃つよりも速く、トレッドは自らの銃を震わせる。そこから飛び出した弾は、一直線に奴の銃口へと飛び込んだのだった。

銃声。続いて、カン、なんて音が一瞬間こえたかと思いきや。それは、即座に火薬の弾ける音へと変貌する。そうして内部から弾け飛んだ奴の銃は、全身をバラバラに撒き散らし、その血管の浮いた肌を焼き付けた。

「ぐツ……なツなあアア!？」

驚愕の表情。今日一番のその表情が、奴の顔を埋め尽くす。

だが、それもまた一瞬だった。何が起こったのか分からないといったままに、奴の顔は吹き飛ばされる。踏み込んだトレッドが振るった銃身が、奴のその無精髭を殴打していた。

「ハンター数名への暴行及び殺人未遂。並びにアイルーの誘拐、傷害致死と今回の未遂……ですかね。現行犯で逮捕ですよ……つと」

パチン、と指を鳴らし、それを合図とするかのように数人の衛士が流れ込む。そうして呻くアスマを拘束し、床の上で沈黙するあのモヒカン店主や、壁に縛り付けられたスキンヘッドの二人組を取り押さえていった。気絶する者も痛みに悶える者も、一切の容赦なく引きずり始めるその動きは、どこか作業的に見えた。

そんな様子を眺めながら、トレッドは俺の前へと歩み出す。腕の中のイルルがその様

子に気付いては耳を立て、それで俺は彼女の現状を改めて認識した。

「トレッド！ 医療班だ！ 医療班はいないか!? イルルが、イルルが……ッ！」

「にや、あの……旦那、さん……」

「ん？ どうかしたんですか？」

「どうした、じゃねえだろ！ 分かってんだろ!? イルル、撃たれたんだ……大怪我して

んだ！ 早く医療班を！」

「……怪我？ どこです？」

「どこって、見りや分かんだろ！ ほら、こんなにも血がべっとり——」

「それ、カスタードですよ」

——は？

これまでの人生の中で、ここまで拍子抜けした声を出したのは初めてだったかもしれない。

イルルから、べっとりとしたものが出ていることには気付いていた。でも、彼女の真つ白な体が真つ赤に染まっているところなんて見たくない。だから、俺はタオルケットの下を見ることができなかった。せめて、せめて医療班が来るまで彼女を抱き締めよう。そう思っていたんだ。

だけど、飛んできたのは、呆れたようなその言葉で。恐る恐るタオルケットを持ち上

げたら、そこには中身が漏れたパックが一つ。先程イルルに渡した、カスタードだった。「こんな甘ったるい香りがするのに。シグの鼻も、墮ちたものですねえ。ていうか、血がべつとりはむしろ君なんですが」

「えっ……えっ……？」

「うにゃあ……旦那さん、無理しちやダメ、にゃ……」

「……え、あ……っ」

心配そうに俺を見るイルルを下ろし、俺も自らの重い腰を下ろす。

そういえば、俺も奴に撃たれていたんだった。それを忘れていたのは、何て言うか、色々危なかったかもしれない。思い出した途端、腹がじんじんと痛み出してきたような、そんな気さえた。

医療班らしき白衣の集団が流れ込み、この狭い地下の中で分散する。そこから数人がこちらにやってきた。そうして応急処置が開始される傍ら、俺は心配そうにこちらを見るイルルへと目を向ける。

彼女は、タオルケットの中でパックを抱き締めていたのだった。あのカスタードを包んだパックを抱き締めて、俺の前へと飛び出したのだった。

確かに、確かに彼女は被弾した。アスマの凶弾をその身に受けた。でもそこには、小さなカスタードのパックがあつて。それが銃弾を受け止めていたのである。

「……イルル、途中で気付いてたのか？」

「うにや、確かに痛かったけど……穴は空いてなくて。でも、それを言える雰囲気じゃなかったにやあ……」

「ああ……ごめんな」

申し訳なさそうに目を伏せる彼女を、俺はもう一度抱き締めた。医療係が、動くなど注意してくれるが、今は聞こえないふりをする。

毛並みこそ荒れているが、その体からは出血している様子もなく。その柔らかな胸へと顔を埋めると、小さな鼓動が耳に伝わってきた。小さいながらも、とても温かくて、優しい鼓動だった。

別の医療班数人が、ヒリエツタを担いで外へと連れ出していく。ルーシヤもそれに付き添って、あの梯子に足をかけて。でもその前に、イルルに向けてウインクをした。イルルは、嬉しそうな、花が咲くような笑顔を浮かべていた。

「……ダイラタント流体ですかねえ」

「あー……なるほど」

「にや……？ だい、らっ？」

こてん、と彼女は首を傾げる。聞き慣れない響きに髭を震わせていたが、そんな彼女を、俺はもう一度強く抱き締めた。

◆ ◆ ◆  
ダイラタント流体。

それは、柔と剛が同居した物体である。

強い力を与えれば、その身を鋼の如く固くして。弱い力を与えれば、まるで液体のように柔らかく応じる。それが、この物体の性質だ。

つまり、手でこねるといった柔らかい力には、それ相応の弱い抵抗力を見せ、銃弾といった強い衝撃に対しては、それを受け止めてしまうほどの抵抗力を発揮する。イルルの懐に収まっていたカスタードもまた、そのダイラタント流体の一つなのである。

「——ってな感じでな、その懐にあったカスタードがお前を守ってくれたんだよ、たぶん」

「にや……カスタードが？ 銃弾をにや？」

「ああ。カスタードの中のコーンスターチと水がな。普段はバラバラな癖に、急に負荷がかかると突然密着するんだ。だから固くなる……って感じ？」

「ふにやあ……なんか、凄いのにな。カスタード……」

そう感嘆の声を漏らすイルル。ソファで横になる俺の横へと腰を下ろしては、驚い

たように尾を立たせていた。

——あれから。

あれから数時間経って、俺たちはようやく解放された。自宅へ何とか帰らせてもらえた。

ギルドとしては、今まで明るみになかった問題のために、やつと重い腰を上げたそうだ。何やら大長老の鶴の一声だとかで、元老院かそこからは反対の声も多かったそうだが。

とにもかくにも、一連の事件の実行犯が捕まった。証拠も揃っていたために彼らは拘束され、俺たちは重要参考人として取り調べを受けることとなる。とはいえ、俺もイレルも、さらにはヒリエツタも怪我人だ。特にヒリエツタに関しては、大老殿の医務室をも解放するという大盤振る舞いだった。俺は意識がはつきりしているということで、自宅療養をさせられたが。一番怪我が少なかったルーシャは、今も事情聴取されているらしい。御愁傷様である。

とまあ、そんな感じで今は自宅で療養中。ようやく戻ってきた温かい日常を噛み締めているところだ。

そこでカスタードの話をする傍らに、例のカスタードを使ったタルトを雑貨に発注して、配達してもらった。

俺たちを守ってくれた、あのカスタード。それをふんだんに使った香ばしいタルトだ。それが詰められた箱を、ソファアの上で雑に開ける。

嬉しそうに尾を立てるイルルの姿を見ていると、二人でこうして自宅でのんびり過ごすことが嬉しくてたまらない。自宅療養になって良かったとさえ思う自分がある。

「いや、旦那さん。タルト……食べれそうかによ？」

「いやー、両手が裂けちゃったから手が使えないなー食べさせてほしいなー」

「にやあ……すつごい棒読みにや。うにや、しようがないにやあ」

包帯が巻かれた手を振りながらそう言うと、イルルは溜息をつきながら俺にタルトを差し出してくれた。

困ったような気持ちと、呆れたような気持ち。そこに、嬉しさをたくさん詰めたような、そんな溜息だった。

薄い茶色を固めたようなそのタルト生地からは、焼いた片栗粉特有の優しい香りがする。その奥から土台を貫くように、濃厚なカスタードの香りが閃いて。カスタードの他に、控えめな甘さを振り撒くもう一つの香りが瞬いて。

そんな砂糖とがっちり握手した奴らの上には、砂糖と手を組もうとしない頑なな赤い集団の姿があった。

「……イチゴにや？」

「ああ、熱帯イチゴ。折角だから乗せてくれって頼んだんだ」  
「にやー、美味しそうにや」

キラキラと部屋の照明を跳ね返す、艶々な肌が美しいイチゴたち。タルトの茶色の世界に舞い降りたその鮮やかな赤色は、潤いに満ちた香りを振り撒いている。砂糖にはどうやつても出すことのできない、爽やかな香りだ。

そんなイチゴをスライスして、まるでてつさのように並べては、一輪の赤い花のように咲いたそのタルト。俺はまるで、花の蜜に誘われた羽虫のように、肉球の上で輝くそれにかぶりついた。

上顎には、イチゴの張りがある食感が伝わって。下顎からは、タルトのサクツとした快音が伝わってきて。イチゴによる、果実特有のすつきりとした甘みに酸味。それが口の上半分に広がったかと思えば、今度は下からじつくりと。粘り強い砂糖の甘さが、ゆつくりと広がってくる。

サクサクと崩れていくタルトからは、次第にその奥に眠るものが目を覚まし始めた。二つの勢力による口内戦争は、タルトの中から現れた新勢力によって、凄まじい激戦区へと変貌する。まるで山芋と木馬を使って敵の陣地に味方を送り込んだという、『トロ口の木馬伝説』の一幕のようだ。

「……………ん、んれ……………」



「にゃ、これって……」

「……マドレーヌ？」

「マドレーヌにゃ？」

カスタードの濃厚な甘さの中で、穏やかな甘みが広がってきた。タルトの噛み応えある食感の中に、柔らかいながらも歯に残すそれは、優しい甘さをイチゴの中に溶かしていく。その味は、マドレーヌのそれだ。

先程までの総力戦は、今や和平を結ぶまでに落ち着いていた。ただ、柔らかな甘さと爽やかな酸味、そしてほぐれるような歯触りが、口の中を彩っていく。呑み込む瞬間まで、その宴は続いていた。

「……………」馳走様。凄く、美味しかった」

「にゃあ、ごちそうさまでしたにゃ！」

濡れタオルで手を拭いては、イルルは嬉しそうに顔を綻ばせる。そうしてソファで横になる俺に添い寝するかのようになり、彼女もその白い体を横にした。

「イルルもほんとにグルメになったなあ」

「にゃー、旦那さんのせいにゃ」

「そうかなあ。まあ、そうかも shouldn't けど」

「そうにゃ。絶対そうにゃあ〜」

イルルのほっぺをむにむにすると、彼女は負けじと俺の頬を肉球で撫でてくる。手には柔らかい感触が残り、頬には優しい温もりが灯っていた。互いに互いの頬をいじりあつては、その頬を綻ばせ合う。物凄く、幸せに感じる瞬間だった。

「……楽器になんてしなくても、イルルはこんなに綺麗な声で言葉を贈ってくれるのに。アイツらはほんとにアホだなあ」

楽器で金儲けがしたいなら、炎剣リオレウスにでも弦を張つとけよ、なんて。そんな思いが溢れてくる。きよんとした顔のイルルの頬を撫でながら、俺はそう呟いた。すると、彼女はその目を少しだけ細めて。

ちよつと小悪魔的な微笑みで、俺の耳元に顔を寄せてくる。そうして囁くように、俺の耳のすぐ側で。

「——それは、旦那さんにだけ、にや。大好きな貴方にしか、贈らないよ」

そう言つては、照れくさそうに微笑んだ。そんな彼女が、とても。とても愛おしくて。俺はもう一度、包帯だらけの手で彼女をそつと抱き寄せた。お互いを繋ぎとめるように、そつと。もう離さないように、ぎゅつと。

そのまま、俺も言葉を贈るのだ。

やつと戻つてきてくれた、最愛のパートナーに向けて。

これだけは言っておきたい。

—— 彼女が飛び出した日から、ずっとずっと言えなかったあの言葉を。

「……おかえり、イルル」

「うにゃあ。ただいまにゃ、旦那さん！」

く 本日のレシピく

『熱帯イチゴのカスタードタルト』

- ・ 薄力粉 …… 130 g
- ・ 片栗粉 …… 20 g
- ・ 砂糖 …… 40 g
- ・ 丸鳥卵黄 …… 80 g
- ・ 垂皮油 …… 50 g
- ・ ポピミルク …… 小さじ1杯ほど
- ・ 熱帯イチゴ …… 5個
- ・ カスタード …… 150 g
- ・ マドレーヌ (市販) …… 1個

## 白い魚は尾びれも白い

「イルル、そっちはどうだ？」

「にやー、良い感じにやあ」

一連の騒動があつて一週間ほど経つたある日。俺の傷も順調に回復しつつあり、狩りにはいけないものの、元気に毎日を過ごしていた。

自由気ままに起きて、好きなものを作つては食ひ、最愛のパートナーとまつたり過ごす。こんな時間がずっと続けばいいのに、なんて思つてしまうくらい穏やかな毎日だ。

——あの一週間前が、嘘のようだ。おちやられた太刀の男と斬り合つたことなんて、夢だつたんじゃないかとさえ感じてしまう。けれど、今も俺の体中を覆う包帯やガーゼが、それが夢ではないことを静かに主張する。そして、心に大きな傷を負つてしまつたイルルも同様に。

「にやあー、旦那さん。こんな感じでいいかにや？」

「おう。上手く盛り合わせたなあ。完璧じゃん」

「にや、にやあ……えへへ」

大きな弁当箱に、唐揚げやエビフライ、ポテトサラダにコロツケなど、様々な食材を詰めていたイルル。秋の終わりにしては妙に暖かい風に尻尾を揺らしながらも、彼女は照れくさそうに微笑んだ。

イルルは、当の事件の渦中にいた。悪い人間たちに連れていかれ、その悪意に晒されて、心に大きな傷を負ってしまったのだ。人間のことが好き、なんて言っていた彼女にはあまりにも酷なその仕打ち。それが彼女を蝕んで、結果彼女は暗闇と一人の時間を過ごす怯えるようになってしまった。昔の、悪夢に魘うなされては涙を流していた頃のような、弱々しい姿だった。

そんな彼女に、少しでも心を休ませてあげたくて。俺は二人でピクニックに行くことを提案した。ピクニックといっても山に行ったりする訳ではなく、ただドンドルマの大きな公園に行つてそこでまったり弁当を食べようというものなのだが。

「にゃー、あとはおにぎりにゃ?」

「そうだな、おにぎりだな。イルルは何個くらい食べれそう?」

「にゃ……に、二個くらい?」

「じゃ、三個な」

「ふにゃつ!?!」

ぴよんこぴよんこと抗議するイルルを放っておいて、俺は袖を捲つては腰巻のエプロ

ンの紐を締める。

ただでさえあの事件で食が細くなってしまったんだ。なるべく、たくさん食べてもらいたい。

そういえば二個という言葉で思い出したが、ニコにも謝らなきゃいけなかったんだっけ。でも今はイルルの精神状態も不安定だし、もう少し後でもいいだろうか。それに、彼にしてみれば俺は最低最悪な人間でしかないし、俺もまだ心の準備ができていないし

話が逸れた。今はこの目の前の魚を捌くこと。それに集中しよう。

「にや、スネークサーモンなんて珍しいにや」

「そうか？ 市場でよく見るだろ？」

「うにや。そうじゃなくて、有り触れてるから旦那さんあんまり買わないのにや」

「あー……それは、確かに」

スネークサーモンとは、まるで蛇のように長い体をもつサーモンである。安直も良いところな名前のそれは、するりと長く、優美な橙色が美しい。とはいえ、特に高級というほど値がつく訳でもなく、多くの人に慕われる庶民のお供となっている。

そんなスネークサーモンは、捌き方が少々特殊であることも有名だ。サシミウオなどの一般的な魚とは少々異なるその捌き方に、調理を避けてしまう人も多い。それ故、

丸々一匹よりも、切り身に加工されたものの方がよく売れてしまう。俺が今捌こうとしているものも、不人気故に売れ残ってしまったありのままの個体である。

「さーて、捌くかあ」

「……にや？ 旦那さん、そんなところに包丁を入れるのにや？」

そう首を傾げるイルルの疑問ももつともだろう。何故なら、俺は包丁を、ひっくり返しては腹を見せるスネークサーモンの、その肛門へとあてがっているのだから。

「肛門から上の中骨が太くて、たくさん詰まってるんだ。逆にその下は少ないし。もう割り切つて落としちゃった方がやりやすい」

「にやあ……そ、そうかにや」

すばつと切れた断面は、薄い橙色を刺した白身、なんて表現の似合う淡い色をしている。サーモンには様々な種類があるが、こんな淡泊そうな見た目のサーモンはまた珍しい。

なんて考えつつも、今度は胴へと手を伸ばす。細長いそれを左手で掴みつつ、前ヒレの付け根より後ろへと刃を当てた。そのまま刃を下ろしては、この細長い体を三分分する。

「さて、味付けはどうしようかな。醤油漬け……は間違いないんだけど、何かもう少しアクセント欲しいなあ」

「にゃー……柑橘系とか？ レモンみたいな」

「おお、いいねそれ。確かボックスにポツケレモン入れてたような気がする」

「にゃ、じゃあボクそれ作るにゃっ」

ととととボックスの方へ向かつては、そこからレモンを取り出して、味付けのための小鉢などを取り揃えてくるイルル。相変わらずの器量の良さに感心しつつも、その嬉しそうな様子に思わず頬を綻ばせてしまった。

「……な、何にゃ？」

「んー 何でもないよ」

もうちよつと眺めていた気もいたが、今は目の前のことに集中する。

前ヒレより前、つまり頭とのつながりが断たれたその断面からは、どろんと内臓が零れ落ちていた。それを包丁でまな板に抑えつつ、中に詰まった臓器を引きずり出していく。

とろんとこぼれたそれらを避けつつ、今度は頭側に残った臓器を包丁でえぐり取る。仕上げに歯ブラシを通しては不要なもののある程度取り除いて、ひとまず下処理は完了だ。

「さて、頭はよけといて……残りを捌こうかな」

「にゃ？ 頭はいいのにゃ？」



「ほら、見てみろよ。中身すつかすかだぜ。これは明日の朝汁にしよう。いい出汁がとれそうだし」

「にやあ、な、なるほど……」

「それより、醤油の方はどうだ？　できた？」

「にや、ばつちりにや！」

尻尾部分の骨に沿わせるように包丁を入れては、右側の身、左側の身、そして太い骨の残る真ん中の身へと、三枚おろして切り分ける。

そんな作業をしながらイルルの方へと目をやれば、彼女は得意気な様子で小鉢を俺に見せてきた。澄んだ醤油の色の中に浮いた爽やかな果汁。それが醤油の甘い香りを清々しく彩っている。これなら、このスネークサーモンにもよく合いそうだ。

「うんうん、いいね。じゃ、イルルはおにぎりの準備してくれるか？」

「にや、ボクでいいのにや？」

「何か、女の子が握った方がおにぎりが美味しくなるとか、そんな話聞いたことあつてな」

「にや？　なにそれ……。でも、ボクが握ったら毛がついちやうにや」

「じゃ、その辺の清潔な手袋使っていいからさ。ほら、あの生地の薄い奴」

「みやあ……さっきの話、何だったのにや」

「あんなの迷信だろきつと。それより、俺はイルルが握ってくれたおにぎりを食べたいな」

「にやつ……が、頑張るにやつ！」

ピンセットで残った骨をとる傍らにそう囁いてみれば、彼女は強く意気込んだ。そうしてせつせと手袋をしては米を掻き集め始める。相変わらず可愛い奴だ。

一方で俺は胴の腹を裂いて、中に残った血合いを取り除く。不快な感触を残すものがなくなれば、それも尾の部分同様三枚卸しで骨身を分けた。

「じゃ、俺はこれを小さめに乱切りしてはこの醤油につけてくな」

「にゃー、じゃ、ボクはそれをおにぎりの中に入れていいにゃね。よーし、やるにゃあーっ！」

ぶつ切りにしたそれに、縦横無尽を刻むが如く包丁を入れる。そうしてできた小さな塊を醤油に落としては、ぐりぐりと箸で捻じ込んだ。表面に箸で穴を空けては味の染み込みを促しつつ、また別の塊に包丁を入れる。

一方でイルルは醤油を充分に浸した身を箸で持ち上げては、それを大事に米で包んだ。白く温かいその米たちは、スネークサーモンの欠片を優しく抱き締めては、その身に滴る醤油をゆつくり吸い上げていく。

「あ、そういえば高菜もあつたなあ。あの漬け込んだ奴」

「にや? あの大きな葉っぱのやつにや?」

「そうそう。あれ、海苔の代わりに巻いてみるか。爽やかな風味になりそうだし」

捌き終えた包丁を流しに置いては、俺は両手を洗い、アイスボックスへと投げ入れた。そこから取り出した高菜の葉。ユクモ地方で採れた、細かく刻む前のそれで、イルルが握ってくれたおにぎりを包み込む。純白を深い緑が覆い、香りがより層を増した。

そんなこんなでできたおにぎりを一個、また一個と増やしていつては、弁当箱に詰めていつて。気付いた時には、箱一杯に米の山が築かれていた。

「おお……八個もできたのか。随分作つたなあ」

「にや、随分たくさんあるにや……。食べ切れるかにやあ?」

「無理だったら夕飯にしようぜ。とにかく、これにて弁当の準備も完了だ。さあ、行こうか」

「うにやあつ」

おにぎりとおかず。箱二つに収まったその弁当箱を重ねては、風呂敷に包む。それを丁寧に鞆に下ろしては、傾かないようにゆっくり持ち上げた。

一方のイルルは、壁のボードに取り付けられた鍵を持ち出してきてくれる。俺は弁当を落とさないように集中し、彼女に扉を閉めることを全て任した。

天気はよく、気温もこの時期にしては温かい。絶好のピクニック日和になりそうだ。

◆ ◆ ◆  
ドンドルマの西部にあるこの公園は、控えめな湖と芝生、そして小規模の林といった自然の風景を残している点が特徴的だ。大都市に居ながら、自然を楽しめる。そんなコンセプトの下、設計されたようだった。

その公園を縦横無尽に区切った歩道は、湖脇の小さな小屋へと繋がっていて。日差しを浴びては柔らかな熱をもったその木製の座席に、俺たちは腰かけた。

「にゃー、今日はほんとにいい天気じゃ。湖もキラキラしてるにゃ」

「ほんとだな。たまにはこうやってピクニックに出てみるのもいいもんだな」

「にゃ。獵場じゃないから、落ち着いて食べれるのにゃ」

弁当を広げては、それを一つ膝の上に置いて。もう一つはイルルの足の間に置いて。そうして二人で分け合っては、秋の陽気を楽しみながら箸を振るう。

「早速おにぎり食べよつと。いただきますーす」

「にゃ、いただきますにゃー！」

ぱくつとそれを口に入れるイルル。俺も負けじと、それを大きく頬張った。

カリッと音を立てる高菜は、じっくり漬け込んだだけあって爽やかな香りを振り撒い

てくる。まるで浅漬けのような、甘みと酸味を混ぜ合わせたその味は、高菜らしいカリカリとした食感をより引き立てていた。

その奥には、醤油の香りをよく含んだウマイ米が飛び出して来る。高菜の旨みと醤油の甘み、そしてそこに潜んだポツケレモンの酸味による属性の混入。それによつて彩られたその米を噛んでいると、思わず旨い旨いと叫んでしまふそうだ。

そうやってじっくり食べ進めていると、おにぎり深奥に眠つた主が現れる。自らを困つていた米を失つて、外の光に気付いては奴は目を覚ましたのだつた。あの醤油漬けスネークサーモンが。

「にやあ……鮭……いや、蛇？ うにや？ 鮭にや？」

「……なんか、一二つを足して二で割つたような味だよな、これ」

ぷにゅつとした食感のそれは、間違いなく魚の刺身のそれだ。新鮮で張りがあつて、艶がある。そんな柔らかい食感である。

しかし、味はといえば鮭のような気もするが、鮭らしくもないものだつた。どちらかといえば、フレークにしたような鮭の味に近いだろうか。一般的によく食べるような、鮭の刺身の濃厚な甘みとは、少々異なる気がする。いや、むしろ味としてはガララアジャラアの肉に近い。淡泊で、しつとりしていて、主張の控えたあの旨み。それ自体が強くないがために、他の味と上手く調和するあの旨み。

「まあ、高菜は思い付きだったけど。でも、鮭の味が控えめだから潰し合わなくて良い感じだな」

「にやあ。ちよつと酸っぱいのが、また美味しいのにや〜」

はぐはぐとおにぎりを食べては、幸せそうに頬を綻ばせるイルル。そんな様子を眺めながら、俺はぱくぱくとおかずは手を付ける。

コロッケは衣がややパサパサとしており、揚げたての時の活気はすっかり消沈してしまっている。エビフライも同様で、やや湿ったような食感が口に残った。その分、エビの張りのある食感際立っているが、お弁当といえば揚げ物がよく採用されるものの、味の良さでいえばその選択にはやや疑問が残るかもしれない。

「旦那さん、唐揚げにや」

「お、センキュー」

なんて考えながら頬張っていると、イルルがおもむろに唐揚げを突き出してきた。日光を浴びて輝く脂。それに身を染めた肉の塊を、俺はそのまま啜え込んで。

もしかもしやとしたその食感は、唐揚げとしては何だか頼りない。やはり弁当は、握り立てのおにぎりに限る。なんて思いながら、また一つおにぎりを口に放り込んだ。

高菜の酸味がよく映えたその一品を味わいながら、俺はふと彼女に言葉を投げかける。頭によぎった、過去の情景を。

「……そういえば、ふと思い出したんだけどさ」

「にや？　なあに？」

「ルーシヤがこの前変なこと言つてたんだよ。闘技大会のあれはどうたらこうたら、なんて」

「……にや」

「いやあ、あれつて何だったんだらうなつて。イルルは、当事者だったから何か分かるか？」

本当に、単純な疑問を投げかけた。俺は、そのつもりだった。

ルーシヤが俺に発破をかけた時に、意味深に呟いたその言葉。過去に彼女と闘技大会で手合わせした時に関する、その言葉。それが一体何のことを意味するのかが分からず、俺は何気ない気持ちでイルルに尋ねてみたのだが。

当の彼女は、何か考え込むようにその白い尾を揺らした。困つたと言わんばかりに、その尾を左右に振っている。

「……イルル？」

「にや……言わなきや、ダメにや？」

「え？　なんだそれ……なんかまずいこと聞いちまった？」

「うにや、そうじゃないけど……にやー。言うにや。いつかは言わなきやだめだもん」

そう言つて、イルルは一度箸を置いて。そんな改まった姿を前に、俺も思わず箸を置いてしまう。そのまま、彼女が話し始めるのをじつと待った。

数拍置いて、口を開いたイルル。その言葉の真相を、彼女は口にした。

「ルーシャさんと旦那さんが戦うのに、ボクを賭けた話……覚えてるにや?」

「え? ああ、まあ。あいつもそこまでするかつて、あの時は思ったなあ」

「そ、それで……旦那さんはボクに聞いたにや。どうしてお前も応じたんだつて」

「……そうだつけ?」

「そうにや。たぶん、ルーシャさんが言つてるのはそのことにや」

まるで話が見えなくて、俺は思わず首を傾げてしまう。その様子にイルルは耳を少し垂れさせて、しかしもう一度俺の目をじつと見て。その細い髭を揺らしながら、その先の言葉を繋いでくれた。

「ボクがあの話に応じたのはね、もちろん旦那さんが勝つて信じてたにや。でも、旦那さんが本気になつてくれるかどうか、知りたかつた……だと思ふ」

「……本気に、なる?」

「旦那さんにどう思われてるのか、知りたかつたにや。……わがままな理由で、ごめんなさいにや……」

「……はあー、なるほど」



聞いてみれば、それは随分とシンプルで。ただ、相手が自分のことをどう思っているかを知りたい気持ち。

人の考えなんて、簡単には分からないから。それでも、何とかしてその心に触れたくて。そうして大胆にも実行に移すその姿は、何だかとても女の子らしく見えた。人とか、アイルーとか。そんな区切りなんて関係なしに。

「俺がイルルのことをどう思っているか。まあ、これを見れば分かってくれるかな」

そう言っつては、ポケットに入れたままだったあれを取り出した。くしゃくしゃに縮んだそれは、汗や埃を多く吸い込んでしまったようだ。原型も上手く留めておらず、ただくすんだ姿を掌に残している。

「……超高級お食事券……」

「期限切れだよ。もうただの紙切れさ」

「にゃ……ごめんなさい。ボクが、旦那さんに迷惑をかけたせいで……」  
「気にすんな。どつちが大切か、ただそれだけの話さ」

その紙切れをぎゅつと握り締めて。そのまま、ゴミ袋へと突っ込んだ。

そうして、困惑した様子のイルルを抱き寄せて。そのおでこに、自らの額をくつつける。

「にゃつ……」

「最高級の食事より、イルルと一緒に食べる飯の方が……美味しいよ」

俺なりの、精一杯の言葉。口下手だけど頑張ったんだ。気恥ずかしいけど、でも向き合ってみた。

目をパチクリとさせては、俺の言葉を彼女は反芻する。一生懸命、俺の言葉を整理しているようだった。花が咲くような笑顔を見せてくれるには、もう少し時間がかかりそうだ。



「いやあ、無事に釣れて良かったですよ」

光の入らない薄暗い空間で、そう言葉を漏らすテンガロンハット。ドンドルマギルド地下に造られた狭苦しい牢屋で、手を背後で縛られた男に向けて彼——トレッドは、清々しげにそう語った。

「……釣れたア？」

自由を奪われているその男、アスマは訝しげに首を擡げる。

「ええ、君が釣れて良かったです。色々と、策を張った甲斐がありました」

「何だア？ アンタ、俺のファンか何かかイ？」

からかうようにそう言うアスマに、トレットは無表情で金槌を振り下ろした。鋼鉄と頭蓋がぶつかり合う、けたたましい音が響く。

「ファン……そうですね、ファンかもしれないですね。君の斬り口にとっても興味がありました。三味線に使われた、ネコ皮とか」

目を見開いては呻き声を漏らすアスマの頭に、再び金槌を振り下ろして。しかし清々しい顔のトレットは、語ることをやめない。もう片方の手で持った三味線を、呻く彼の目の前に置きながら。そのまま、言葉を繋げ続けた。

「本当に細かいところですが、人の癖なんてよく現れるもんですよ。こんな、刀の斬り口にまで、ね。君のは比較的分かりやすかった。大振りながらも繊細で、非常に正確な斬り口だ。まるで、細胞の隙間を縫うように、綺麗に断面を立っている」

「……ああ……？」

「……『彼女』の遺体に残った斬り口と、一致しましたよ」

「……彼女、だア……？」

頭から血を垂らしながら、アスマはゆっくりと首を上げる。そんな彼に向けて、トレットは一枚の紙切れを取り出した。少女の姿を描き留めた、古い紙切れだった。

「この子に、見覚えはあるでしょう？ 君たちが凍土で殺した子ですよ」

「……………」

「耳が聞こえないけど、素敵な音色を奏でる狩猟笛使いでした。筆談やジエスチャーでコミュニケーションをとるんです。忘れないと、思うんですが」

「……ああ、いたなあそんなの……」

「そんなの……?」

革靴の先が、アスマの顎を穿つ。そうして打ち上げられた彼の頭部を襲う、恐ろしいまでの殴打。まるで刀を鑄造するかのように、激しい乱打がこの牢屋を埋め尽くした。

「よくも、よくもリンを……あの子がどんな思いで、どんなに苦しんだか……」

「……ッ……」

「死ねよ……この腐れが……」

「……あぐ……ッ」

先程までの清々しい顔はどこへやら。血走った眼で彼は激しく息を刻み、カランと金槌を掌から落とした。一方で、より一層血飛沫をあげるアスマは、灰色の床を赤黒く染めていく。絶え絶えの意識で、必死に痛みを耐えていた。

「……ふう、失礼。少々取り乱してしまいました」

声を荒げていたトレッドは、慣れた手つきでそのテンガロンハットを整えて。息を休めては、その見開いた目をいつものように細める。

「……君にも、特別なコースを用意してあります。リンが受けた屈辱以上の苦しみを、与

えてあげましょう。苦しんで、泣き叫んで、そして死ぬ」

そう言つては、トレッドは手元の資料へと手を伸ばした。

それは、ハンターズギルドが所有するハンターの登録リスト。そして、その名簿に名乗せたアスマの、ギルドカード。そこに描かれた情報に彼は満足げに目を通しては、湿つたような笑い声を漏らした。

「くつくく……君、ロックラックギルドに登録してたんですか。なあんだ、案外近場にいるんだですねえ。いや、そりやそうか。今回は、随分手間をかけたことをしてしまつたなあ」

しゃがんで、アスマの頭へと体を寄せて。その髪の毛を掴んでは、トレッドは無理矢理彼の顔を上げさせる。血で湿つた髪からは、滲むような色がトレッドの肌に差した。

「リンの体に残つた傷と、君が捌いたアイルーの皮の斬り口。それが非常によく似ていたことから、僕はこの三味線を売り捌いている業者に目をつけました。君の情報は、なかなか出なかつたですけど。でも、アイルーが行方不明になる噂を知れたのは幸運でしたよ、ほんと」

もはや、痛みもろくに感じる事ができないのか。どこか不安定で、またどこか余裕そう。眼球を揺らしては小さな呻き声を絞り出すアスマに向けて、トレッドは饒舌に語り続ける。

「だから、その噂から獲物が釣れるように、餌を撒いた。いやあ、無事に釣れて良かった」嬉々として。彼の様子を表すなら、その言葉が最も適切だろう。何ともこやかに、穏やかに、彼は頷いていた。満足そうに、微笑んでいた。

「君で、二人目です。あと一人。あと一人、リンが死んだあのクエストに同行した奴がいる。とうとう、今日でリーチがかかりましたよ」

にこやかな笑みは、次第に狂気的な色を差していつて。アスマの頭を荒く振りながら、彼は白い歯を露わにしながら笑う。どのように殺してやろうか。そう思案する、何とも悍ましい笑顔。

そこへ、アスマが口を開いた。か細い声で、絶え絶えの息で。しかし、嘲笑うかのよう。トレッドに向けて、口を開いた。

「…………おし、エて…………やろう、か…………？」  
「…………あ？」

それに、トレッドは眉間に深い皺を刻んで。しかし、金槌へと伸びる手を留めては、アスマの言葉を待った。

「あの時、いたハンターの…………最後の、一人…………教えて、やろうかア…………？」

この前殺した奴は、どれだけ痛めつけても吐かなかったこと。どれだけ屈辱的な目に遭わせても、守り抜いたもの。「知らない」と一点張りだったそれを、奴は今軽々と手放

そうとしている。

その事実を前に、トレッドはその細い目を大きく見開いた。そんな彼の変容を目にしているのは、アスマは小さく笑う。まるで大きな契約をする前に、しかし余裕そうに口角を上げる商人のような。そんな、貫禄のある笑みだった。

—— アンタのよく知ってる奴だアよ。

トレッドに向けて、アスマはそう囁いた。

く 本日のレシピく

『スネークサーモンおにぎり（一個あたり）』

- ・ ウマイ米 …… 100 g
- ・ モガ塩 …… 0.5 g
- ・ スネークサーモン …… 20 g
- ・ 醤油 …… 適量
- ・ ポツケレモン …… 1 / 6 個
- ・ 高菜（葉） …… 1 枚

## お上手ですね。

氷が割れる。

大地を覆うような。いや、海を瞬時に凍らせたかのような。

そんな、白く白く染まったそれが、音を立てて割れた。

割れた先から飛び出した、巨大な影。

「うおおおおお!! 出たああ!!」

「にやああああ!! て、手足のある……サメにや!」

どすん、と重々しい音を立てる奴——ザボアザギル。化け鮫とも呼ばれるそれが、俺たちに向かい合うように四肢を広げる。

見た目は巨大なサメだ。俺を軽く丸呑みしてしまいそうなほど大きな口の、でつかいサメ。しかしそこにはヒレがなく、太い手足が並んでいる。四足歩行するサメ。それがあのザボアザギルだ。

「話は聞いてたけど、ほんとに歩くフカじゃん。旨そうだなあ!」

「にやあ……その前に、ボクたちが食べられそうにやあ」



「大丈夫だつて、俺たちなら。イルルは奴の右側面に回つてブーメラン！」

「にやつ、にやあ！　だ、旦那さんは?！」

「俺は反対から奴を転ばすよ。んで挑発して頭に血を上らせたなら、爆弾ポイントまで退避！」

「りよ、了解にや！」

イルルはびよこびよこ奴の右側へと走り出す。一方の俺は、奴の左側へと躍り出した。

本当に、太い手足だ。力強い前脚が、荒く氷の床を削っていく。その爪以上に発達した水かきは、陸上の活動を阻害しそうなものなのだが——

「……なんだ、その構え。なんかナルガっぽい……」

不意に、奴が身を屈める。まるで跳躍前のナルガクルガのように、前脚を立てて後足を引いた。

——まさか、跳ぶ？

「やべやべ、回避回避……つて、は?！」

溜めに溜めたそれを、解放。解放して、放出。

奴の体は、跳ばなかった。代わりに飛んできた、白い渦。細かな氷がまとめて放たれたかのような、白い柱。

——ブレス?

「おおおおおおお!??!」

突然の遠距離攻撃に、俺は走らざるを得なくなった。白い氷の塊が、俺に迫ってくる。肌を擦る小さな破片が、とても痛い。体中を撫でる白い冷気が、とても冷たい。迫るその柱は横薙ぎの吐息で、徐々に徐々に俺は追い詰められた。

迫る。細かい氷の渦が、迫ってくる。

「ああああ冷てええええッ!!」

まさに氷だるまになる瞬間だった。

唐突に、その氷の奔流が弱まる。全てが水に溶け、大気に霧散していった。

「にやあ! 大丈夫にや、旦那さん!!」

「おお! イルル!」

イルルが、化け鮫の背中に飛び乗っている。飛び乗って、魚型のナイフでぎくぎくと背中を刺していた。

突然誰かが自分に馬乗りになり、さらにそこへ刃物を突き立てる。そんなことをされては、とてもとても我慢できたものではないだろう。ブレスなんて吐いてられない。大きな口をばくばくとさせて、必死に抵抗を示す彼の姿を見ればよく分かる。

とにかく、おかげで助かった。流星は俺の相棒だ。

「じゃあー！ 反撃だッ！」

もがく奴の足元で、片手剣を抜き放つ。紅蓮の刀身と金色の装飾がなされたその剣——テオIIエンブレムは、奴の青い鱗は激しく穿った。

舞い上がる、橙色の粉塵。炎王龍の素材を贅沢に使ったその切っ先から、爆発性の物質が零れ落ちた。それが、まるで花火のように、奴の足元で炸裂する。

「ゴアアアッ!？」

「にゃあ、旦那さん！ 倒れるにゃあー！」

「おお、ナイス！」

悲鳴を上げては、横転するザボアザギル。びよんとその体を蹴って、宙を舞うイルル。彼女のウィッグが、風に靡く。

青と紫と、赤と白と。様々な色を雅に縫ったその服は、氷海の冷気をもものともしない。その背についた尻尾のような装飾が、小さく揺れていた。

先日たまたま遭遇し、辛くも撃退したタマミツネの特異個体。龍歴院では天眼と呼ばれているそいつの素材を用いた、イルルの新しい防具だ。

しかし、そんな可愛らしい見た目に反して、イルルは懐からブーメランを取り出した。無慈悲なまでに鋭いそれを、化け鮫に向けてばら撒いた。

空から降り注ぐブーメランを浴びながら、ザボアザギルは悲鳴を上げる。しかし腹に

は劍の刺突が走り、背中では激しい弾幕の真つただ中。とてもそれを避けることは出来ず、ただ奴は手足をバタバタとさせていた。

「はっはア！ お前の腹、結構柔らかいなあ！ どう食つてやろうか！」

しゅたつと、着地したイルルが、変なものを見る目で俺を見てくる。だがそれを無視しながらも、俺は左手を止めなかつた。

「キノコと一緒にバターでサツと炒めるとか！」

遠心力を乗せた回転斬り。ばさつと、その腹が大きく開く。

「目玉くりぬいて、スシのネタにしたりとか！」

大きく刺突。開いたその身のさらに奥へ、刃を突き立てた。

「————それともシンプルに、刺身。どうよ!？」

悲鳴を上げて、血飛沫を上げて。

そんな化け鮫を前に一旦後退しながら、イルルにそう問いかける。

「……にやー。あのサメ、刺身で食べれるのかにや？」

「さあな。やってみな分かんないし」

「相変わらずにやあ……」

「まあそう言うな。それにほら、あいつ怒つたみたいだぞ！」

がばつと大地を蹴つて、奴は起き上がった。そこから、咆哮。甲高い声を上げ、奴は

前脚に力を込める。

すると突然、ひんやりとした空気が流れた。この場所が、この空間が。奴の周りが、急に冷たくなったかのような。そんな気がした。

直後、奴は全身に冷気を纏う。氷結袋の冷気を、そのまま全身に転用したのだろうか。青い肌を白い氷が多い、鋭い頭部には巨大な銚が形成された。

「おお、カツコいいなあ……！　ほんとに変身するんだ」

「だ、旦那さん！　た、退却するにや!？」

「おう。爆弾ポイントまで、誘導するぞ！」

剣をしまい、少しずつ後退して。しかし、奴とは目を離さない。

少しずつ後退する俺たちに、ジリジリと詰め寄るその巨体。再び、ナルガクルガのように身を屈める。

「げっ、またあのゲロ吐く気かお前！」

あの顎が開いて、中の氷結袋が解放される。氷結の渦が、再び俺に襲い掛かる――

そう思った、瞬間だった。

「うおわっ!?!　突進!?!」

唐突に駆け出す化け鮫。荒く大地を蹴って、その巨体は大口を開けながら迫ってきて

た。思わぬ迫力に、俺とイルルは横に跳ぶ。

奴はそのまま、俺たちの間を走り抜けるように跳んだ。大量の氷が削られて、キラキラと結晶が舞っていく。そうして、氷に滑るままに止まらない奴は。俺たちが事前に設置した、爆弾ポイントへと――

「にやつ……」

「やつべ、伏せろ！」

白い世界に走る、燃える衝撃。

紅蓮の炎がそり立ち、氷はその熱量に表面を滴らせる。その爆心地にいた奴はといえば、凄まじい悲鳴を上げていた。

全身が焼かれる痛み。凄まじい衝撃を、その巨体で吸収した痛み。纏っていたはずの氷は、全て炎に呑み込まれていた。

「だつ旦那さん！ 火薬の量間違えたかにや!？」

「確かに、よく燃えてんなあ」

「にゃー！ た、大変にゃ……!？」

このまま、あいつは焼けてしまう。抵抗も出来ずに爆弾に衝突し、そのまま全て失ってしまう――

なんて考えた、その瞬間だった。ふっと、影のようなものが俺に迫る。

「…………ん？」

突然消えた奴の姿。そうかと思えば、何か光を遮って。

一体なんだ。なんて考えながら、俺は空の方へと目を向けた。

空を覆う、巨体。まるで風船のように膨らんだ、魚のような何か。あの氷の鎧を全て砕いて、全身を毬のように膨らませたザボアザギル。

「…………は？ はあああああツ!?」

「にやっ、にやあ!!? なににやー!!」

どすん、なんて可愛さの欠片のない音が響く。あまりの衝撃に氷が割れて、大地が揺れる。

巨大。巨大だ。先程の二倍はあるんじゃないかというほど、奴の体は膨れ上がっている。それが、毬のように飛び跳ねて。その巨体を使って、俺をこの氷ごと踏み潰そうとしたのだろうか。化け鮫は化けるとは聞いていたが、ここまでの変身をするとは思ってもいなかったなあ。

「…………はは。なるほど、化け鮫ねえ。化けまくりだろ」

「にやあ…………変装パーティーとかに出たら、きつと人気者になれるにやこの子」

イルルの冗談めいた一言に、奴はぐるりとこちらの方を向いて。そのまま、俺もイルルもぺちゃんこにしようと、ぐるりぐるりと転がってきた。

あまりにも巨大なそれが、視界を覆う。横に避けることも不可能なほど、巨大。

「イルル！ 潜れ！」

「にや、だ、旦那さんは!?!」

「俺は大丈夫。折角だから、盾で肉の具合を確かめてやらあ。イルルは潜って、あいつの背後に回ってくれ。挟み撃ちするぞ」

「うっ、うにや、にやっ……き、気をつけて、旦那さん……!」

少し戸惑っているようだったが、イルルは意を決して氷に穴を空けていく。俺のことが心配そうだった。相変わらず、優しい奴だ。

さて！ 盾を構えるぞ。全身に力を込めるぞ。さあ、ザボアザギル。お前の肉は、どんな感じだ！

「うおっ……!」

ぶよん、とした感触が腕に伝わってきた。先程斬っていた時とは、またまた異なるその感触。なんだか、本当に風船のようだ。空気が詰まっているかのような、奇妙な感触が跳ね返ってくる。

これは――

「……空気？ これ、空気が詰まってるのか？」

膨張している。大量の空気を吸い込んだのか、それとも体内の水を気化させたのか。



原理は分からないが、奴の体は空気によつて膨張しているようだった。つまり、風船  
というのは例えには収まらない。そのものだったのだ。

「……膨らんでいる。ということ、この時皮膚も薄くなっている……?」

そう考えた瞬間だった。奴が、再び全身を転がしてくる。俺の視界を埋めるように、  
悪い笑みを浮かべるように。

またか。そう思いながら。盾を構えた。構えたもの——迫る口。俺も軽く丸  
呑みのできるくらい大きな、その口。

「——えっ」

ぱくり。

そんな音が響いたような、そんな気がした。視界が突然暗転し、猛烈な臭いが鼻を穿  
つ。

「……はっ!? ちよ、こいつまさか……って、くっさ……ッ!!」

慌てて、左脚を突き出した。右手の盾も突き出した。上と下から、牙が迫る。それを  
両者で押し留め、噛み潰されるのを危うく回避する。

それも束の間。今度は、舌が根元から動いた。俺を呑み込もうと、どんどん傾斜を描  
いていく。

「くっそ……がッ!」

右手に巻かれたベルトを解き、盾を解放する。そうして、その盾に備え付けられた剣を引き抜いて、俺は重力に身を任せた。

どろりとした粘液がまとわりつく。凄まじい悪臭が、全身へと広がってきた。

「おえっ……くっせええ……ッ！　なんだこの臭い、くっそッ、ふざけんよ……！」  
剣を構える。両手の剣を交差させ、胃の壁らしきものを見定めた。

臭すぎる。

ただただ、アンモニアというか尿というか、なんかもう不潔なものをまとめ上げたよ  
うな臭いが、ただひたすらに俺を襲う。もうダメだ。こんな空間、いられるか。

「穴開けやがれッ、このフカヒレ野郎……！」

膨張したザボアザギル。体積が増えて、薄くなった奴の皮膚。そこへ向けて、俺は両  
の剣を突き出した。どろどろの壁を蹴って、全身を激しく螺旋させて。

ただひたすらに、回転する。地面を割って進むアグナコトルのように。ただひたす  
ら、全身を錐揉み回転させた。手の先についた刃ごと、とにかく奴の皮膚を穿った。

回転に回転を重ねたその刺突は、まるで斬撃のような刺突と化した。刺した部分の刃  
が走り、肉を裂いてさらに奥に突き進む。その勢いのまま、切っ先は刺突を繰り返す。

それが続けば、膨張によって薄くなった奴の皮膚は当然――

「はあッ！　出れたッ！」

視界が、突如白く染まる。あの息苦しかった空間が消え、寒々しい世界が俺を迎えてくれた。

血飛沫が舞う。白い世界を染めるように、赤い軌跡が宙を舞う。

視界の先には、イルルがいた。呑み込まれた俺が飛び出して、安堵するかのようには頬を綻ばせる――

が、着地して彼女の方に転がった瞬間、その表情は一変した。

「……ふみやっ?! うなっ、うななっ……くっ、くっ、臭いにやーっ!!」

彼女の絶叫が、氷海を震わせた。



「……意外にピンクっぽいなあ、こいつ」

動かなくなった巨体。風船がしほみ、だらしなく崩れたその姿。

ザボアザギルは、無事討伐された。あの膨らんだ姿のまま、奴は静かに息絶えている。なんだか、疲れ果てた肥満気味のギルド職員に見えないこともない。どうにもこうにも滑稽な姿だった。

「皮が分厚くて色が濃い分、身は随分透き通ってやがるぜ」

随分と浅黒い色をした分厚い皮。素直に青とは言いにくいそれに包丁を沿わす。その下に眠っていた肉は随分と白く、薄桃色がとても綺麗だった。まるで上質な白身魚のようだ。

「……尾びれ近くのお肉とつたけど、ここでいいかなあ」

膨らみ上がった腹には、余分な皮という大きな壁が聳え立っていた。これによってお腹の肉を取るのは非常に困難となっている。

——何より、俺が腹を突き破ってしまったせいで胃の中の臭いが外に放出されてしまった。あまりの臭いに、流石の俺も食欲がそそれなかった。なんというか、ほんとに吐きそうだ。

「……………」

「あー、イルルー。そろそろ寄って……つぶ、おえつ。……きてもいいんじゃないか?」  
「え、えずきながら言わないでほしいにやあ……」

肉を斬って皮を剥いでる俺と、一定の距離を保ちながら俺を見るイルルー。

あまりの臭いに、彼女はサメの傍に寄れないでいた。いや、本当に臭いからイルルーには厳しいだろうとは俺も思うけど。なんというか、アンモニア? ほんと、アンモニアと下水の臭いをブレンドしたところにモンスターのフンと縄張りのフンのパウダー混ぜましたっていう感じの臭い。臭過ぎる。この世のものとは思えん。

「う……おえっ!!」

「ぜ、絶対近寄らないにや!!」

あー。臭い。本当に、意味が分からないくらい臭い。

けれど。けれど、こいつがどんな味するかって考えたらさ。そんなの、どうだってよくなってくるだろ？

「どれどれ、早速刺身にしてみよう」

持ってきたまな板の上に転がした、化け鮫のブロック肉。丁度掌に収まる程度の大きさのそれは、皮を引いたおかげで市場に売っているような、刺身用のブロック肉のように見える。

とはいえこれは化け鮫だ。一体どんな味なのかは分からない。香りに関しても——  
——残念ながら、胃液の臭いで塗り潰されてしまった。

「よしよし。それじゃ、いったきまーす」

すんと剥ぎ取りナイフを落として、刺身状に切り分けたその肉を、そつと醤油につける。ユクモ村から取り寄せたそれは、芳醇な旨みを溶かした香りを振り撒いた。胃液の臭いでいまいち鼻が麻痺しているけれど、それもこの未知なる味の前では大したものじゃない。

ということ、一口。小さな刺身を、口に入れた。それから、咀嚼。咀嚼——

「……うーん」

「ど、どうにや？ 旦那さん……」

「なんか……水っぽいな」

「水っぽい、にや？」

「うん。柔らかすぎるし、さらつと溶けちまうし。サーロインみたいな溶け方ならいいんだけど、脂っていうより水分だなこりや。味が薄いというか、深みがないというか……」

「……美味しいか、美味しくないかで言うど？」

「まずい」

「そ、即答にや……」

湿っぽい。

水っぽい。

味がな。

噛み応えも味も微妙で、なおかつ風味が良い訳でもない。醤油を薄めた水分の塊を口の中で溶かしているみたいだ。ああ、なんだこりや。

「……これ、刺身で食えなんて言ったらただの罰ゲームだな」

「そ、そんなになや？」

「ああ、このままじゃ食えん。……うーん、どうしようか」

「……必要なもの剥ぎ取って帰還、でいいんじゃないかにや?」

「いやいや、折角だ。美味しく喰いたいだろ」

「にやあー」

生のままでは、あまりにも味が微妙過ぎる。食べ応えもないし、不快なだけだ。

何か、何か別の調理法を考えなければ。

まず、絶対に火は通さなければならぬだろう。生は無理だ。

ただ、焼いたところでこの感触がマシになるかという疑問が付きまとう。柔らかすぎる肉のように、焼いてもさつと崩れてしまうのではないか。それじゃあ面白味も何もない。

うーん。食感を。何か食感を加えられるようないい方法はないものか——

「……あ」

「にや、何か閃いたのにや?」

「揚げてみればいいんじゃないやね?」

「……フライ、にや?」

「フライ。うん、フライ。ザボアフライ。……結構良い響きじゃん」

「にやあ……」

若干引き気味のイルル。またかと言わんばかりに溜息を吐いていた。

フライ。フライならいいかもしれない。揚げたてのぱりつとした食感に、油の香りの良さがマツチする。この柔らかい食感も、衣の噛み応えと組めばまた変わる可能性だけである。

「よし。じゃあ俺はもう少し剥ぎ取ってからキャンプで調理するよ。イルルはどうする？」

「じゃ、じゃあ……先にキャンプで油沸かしておくにや」

「おう、助かる」

どうやら、是が非でもこの臭いには近付きたくないらしい。まあ、それで役割分担ができるならあまり問題ないが。

よし、じゃあもう少しお肉もらっちゃうか！



「なんで、パン粉とか卵とか小麦粉とかあるんだにや……」

「ハンターの必需品だろうが」

「にやー。初めて聞いたにやそんなの」



もう少し掻き集めた肉を、丁度白身魚フライサイズに切り分ける。それらに塩胡椒で下味付けをする傍ら、イルルはフライのための準備をしてくれた。

「結構。ふるふるなお肉にやね」

「コラーゲンとか多そうに見えるよな。たぶん見えるだけだけど」

少しずつ感覚が麻痺してきたイルルは、恐る恐る肉をつつく。その姿に苦笑しながら、俺はそれらを一つずつ箸で掴んだ。

感触はやはり柔らかい。水気が多いからかもしれない。なんか、冷凍させたら縮みそう。今日ここで食べてしまうのが吉だろうか。

「まず小麦粉につけてっと」

「うにやあ、ねりねり」

「次に卵をさつと塗る」

「にやん。えいえい」

「最後にパン粉につけて……」

「にやー。フライっぽくなってきたにや」

三つの小鉢に入ったそれぞれのフライの元を、身のひとつひとつに丁寧につけた。それらを、今度はイルルが沸かしてくれた油の中に落とす。ぶくぶくと箸に泡がつくそれは、フライに丁度良い温度のようだ。

しゅわわ、という快い音が響く。うんうん、揚げ物はこの音がほんと最高だな。

「いやあ、旦那さん。どうせサメなら、フカヒレにすれば良かったんじゃないかにや？」  
「うーん、あいつ手足あるせいでヒレが少ないんだよね。でも、良さそうだと思つて背ビレはちよつと剥ぎ取つてみたんだけど」

「だけど？」

「なんか、対向流組織……つていうのかな。フカヒレとは少し作りが違ったんだよ」

「にや……た、たいこうりゆー……つてなににや？」

「うーん、なんて言うのかなあ。体温調節のための器官？ あの過度にでかい背ビレは、たぶん凄い風が当たると思うんだ。海水に浸したそれを風に当てることで、氷結袋を調節するんじゃないのつていう奴」

「……むにや、難しい話にや」

「とにかく、フカヒレとは少し違うから美味しくないよつて話。今日はもう冒険したくないし」

「にや、にやあ……」

そうこう話しているうちに、良い感じに肉が揚がつてきた。金色を超え、橙色へと届き始めた衣の色。もうそろそろいいだろう。

「よしよし、盛り付けよつと」

一枚の皿に油を吸いとる紙をひく。その上に、一つ、また一つと肉を並べていく。数にして六個。六個の、眩しい光を放つザボアフライができた。からんと上がったそれらは、何とも香りが良い。油の香りを吸って、あの吐きそうな臭いを食い尽してしまつたようだ。

「うんうん。これなら食べそうだな。イルルも食うだろう？」

「にや、にやあ。折角だから……」

「ここまでされては仕方ない。なんて言わんばかりに、彼女はおずおずと箸を取る。どうやら観念したようだった。

俺も箸を取って、フライを掴まむ。さあ、今度はどんな味になつてるだろうか。

「よし。いただきますーす」

「いただきますすにやあー」

アツアツのそれを、さくつと一口。揚げたて特有の、ぱりつとした食感が歯茎を襲う。

「……………」

「にや、あ、あつあつ、あつにやにや……」

さくさくとした衣とは対照的なそのお肉。随分と柔らかい。歯に少し力を込めただけで、するつと身が裂けてしまう。ふわふわしているようで、少しばかりぼそぼそした食感だ。なんというか、とても中途半端である。

「うーん……」

味も、やはり薄い。本当に薄い。白身魚のような、薄味ながらもじつくりと油に溶かしてくるようなあの風味とは違う。

本当に、味ががない。美味しいと思えるような味ががない。

「食感はまあよくなつたけど、塩胡椒程度じゃダメかあ。なかなか手強いな、こいつ」

「頑張るところがおかしいと思うけど、よくよく考えればこれが普通だったにや」

「イルル的にはどうだ？ これ」

「うにや……魚の中では、言っちゃなんだけど下の方にや」

「だよなあ」

唐揚げとかトンカツとか、エビフライとか。そういったものはなるべく何もかけずにそのものの味を楽しみたいとは常々思っているけれど——これは、ちよつときついな。

仕方ない。今日はいろんな味にお世話になろう。たまにはこういうのも良いだろう。

「イルル、ソースとマヨネーズつけようぜ」

「にや？」

「これだけだとあんま味しなくて美味しくないだろ？ たまにはジャンクな味付けもい

いかかもしれないし」

「にや、にやあ、確かに」

「ついでだ。カバンにレモン入ってるからそれ取ってくれ」

「にやー！ 了解にや」

ぴよんと跳ねてはカバンをごそごと漁るイルルを尻目に、俺はソースやらマヨネーズを取り出した。それらをもう、豪快にかけていく。

焦げ茶色の波が揺らぎ、白い風が吹いた。橙色に近い世界に、ひんやりとした味が降る。さらに、酸味を含んだ滝を流した。イルルが持ってきてくれたレモンを半分にかットし、ぎゅつと握ることで出来る滝。あの味のない世界に、花が咲いた。

「まあ、こんなもんだろ」

「にや、いただきますにやあ」

「おう。いただきますよつと」

味のなかったはずの世界は、一変した。

ソースの甘い香りと、それに伴う甘い味。マヨネーズの優しい甘みと、そこに溶け込んだ柔らかな酸味。そして、ただただ直情的なレモンのすっぱい風味。

それらが混ざり合って、ザボアザギルの肉に絡み合っていく。サクサクした鱗の奥の、ふわふわとした食感。そこに味が染み込んでいく。やや甘めのその味は、衣の油の味によく合っていた。仄かな塩辛い味と、それを覆い隠す甘み。ほんのちよつぴりアク

セントが効いたかのようで、なかなか悪くない。

それにこの感触とマヨネーズのとりりとした食感が、非常によく合っていた。なんというか、柔らかさを掻き合わせた感じというか。ふわふわととろとろが掛け合って、ふわとろになったといったところだろうか。混ざり合う衣も相まって、だんだんほぐれていく食感がとても面白い。噛んでて楽しいかもしれない。

「……うん。これなら良い感じだわ」

「にや。マヨネーズ、よく合うにや」

「なかなかいい配役と思わないか？ これなら全然旨いわ」

「うにやー。味付け上手にやー」

素材の味を生かせた、とは言いにくいけれど。でもたまには、こういうのも悪くないもんだ。

とにもかくにも、ザボアザギルか。もう少し勉強しなきゃいけないと痛感させられた日だ、今日は。

「もう一つもーらい。イルルも食うだろ？」

「にや、じゃあ半分だけ……」

そう言いかけた瞬間、イルルはピンと耳を立てる。かと思えば、俺にさっと飛びついてきた。

その一方で、氷海のベースキャンプに寄つてきた船。そこから伸びた棒には、小さな旗がバタバタと揺れている。描かれた紋章は、ドンドルマギルドのもの。どうやら、ギルドから送られた職員用の船のようだ。

「イルル、大丈夫だ。あれはギルドの船だよ。ザボアザギルの確認と回収に来たんだ」  
「にや……にやあ」

「さつきクエストクリアの信号弾撃つたからなあ。ようやくの御到着みたいだな」

少し皮肉を混ぜながらそう言っていると、船が氷に繋げられる。

そうして、中から現れたギルドの人間。あのザボアザギルのように、随分と膨らんだ腹が目立つ職員だった。

「やーやー、シガレットさん。信号見ましたよ。相変わらず狩りが手早くてお上手ですね——」  
「つて何この臭いくっさあああつ!?!」

あ。この臭いのこと、すっかり忘れてたわ。

氷海に鳴り響く、職員の絶叫。それを聞きながら、イルルは「慣れつつ恐ろしいにや」と妙な顔で呟いていた。

く本日のレシピく

『ザボアフライ』

- ・ ザボアザギルの肉（尾部付近） …… 200g
- ・ 塩胡椒 …… 大さじ2杯
- ・ 小麦粉 …… 少量
- ・ 卵（一般鶏） …… 1個
- ・ パン粉 …… 少量
- ・ 濃厚！ ドンドルマソース …… お好みで。
- ・ ガーグア卵のマヨネーズ …… お好みで。
- ・ ポツケレモン …… 1／2個



## ゆく飯くる飯

「うおらあ！」

俺の吠える声と共に、斬撃音が響く。

豪快に振り切られた片手剣。テオⅡエンブレムの橙色の軌跡が、眩しくきらめいた。

「ゴアツ!？」

「うにゃー!　そこにゃー!」

振り切つて硬直する俺を庇うように、背後からイルルが飛び出してくる。まるでランスの突進のような勢いで、目の前の竜の目元を穿った。

悲鳴と共に仰け反る竜。かの卵の番人と名高い深緑の飛竜、リオレイア。彼女が痛み  
のあまりに悲鳴を上げる。

「よっしや、いいでイルル！」

「うにゃんにゃ!　噛み付きくるにゃ！」

「対処頼む！」

「了解にやつ！」

後ろへと跳躍し、そのまま剣を腰に収納。イルルが竜の牙を弾く傍らで、俺は金色の平原に仕込んだロープへと手を掛けた。

この遺跡平原を覆う金色の草は、俺の膝丈にも届きかねないほど背が高い。それらを掻き分けたロープの先には――。

「イルル、下がれよ！」

「にやーっ、ば、爆弾きたにやっ！」

音を立てて転がり始める、大タル爆弾G。ロープをくくり、高台に置いておいたそれを今、俺は勢いよく手繰り寄せた。少々頑丈に作ったために、転がる程度の衝撃では炸裂しない。

これは爆発させようと思っただけ――そうだな、爆発性の粉塵とかが欲しいところだ。

「らあっ！」

自らに向けて猛突進する大タル。それに弾かれる寸前で、俺はロープを手放した。そのまま真横に跳躍。跳躍し、右足を軸にして急旋回だ。勢いに乗るように、剣を携えながらリオレイアへと襲い掛かる。

目の前に、巨大なタル。

中に詰まった、大量の火薬。

側面から迫るハンター。

粉塵を湛えた、紅蓮の切っ先。

斬撃音が、爆音に全て呑み込まれた。

飛竜の頭部を斬り裂いて、その摩擦で粉塵へと火花が走る。その火花によって小さな爆発が生まれたかと思いきや、それは一直線に大タルへと手を伸ばした。

あとは深くは語るまい。とにもかくにも、起爆成功だ。

「ガア……ッ……」

あまりの熱量に、奴の鱗は黒く焦げていた。ふんわりと、どこか香ばしい匂いすら漂い始める。

季節は寒冷期へと入りつつあった。温暖期を終え、あの一連の事件のあった季節の変わり目も越えて。肌寒い時期へと入ったこの遺跡平原で、爆破の熱と底冷えする寒さに襲われる。肌がぴりぴりとして、剥がれ落ちるが如く嫌な感覚だった。

リオレイアも、流星に今のは堪えたようだ。寒さもあつてだろうか。動きが、やや緩慢のようにも見える。

「業炎袋とかがあれば、あれで無理矢理体温上げそうだけれど……この子は上位個体相当かな。まだ若そうだ」

「にやあ、いつまでも体あつたためれる訳でもないと思うし……たまたまいタイミングなだけだったのかもしれないにや？」

「ある程度年齢重ねて円熟してる奴の方が旨いし、そうだと嬉しいな！」  
「や、やつぱりそこが判断基準なんにや……」

話しこむのもいいが、今は奴を仕留めるのが先だ。

怒りに満ちた顔で唸る奴に止めを刺すのが、先だ。

強く大地を掻き鳴らす爪。不自然なほど高く振り上げる尾。大きく、翼を掲げるその筋肉。

やることは一つ、雌火竜の奥の手だ。

「来いやあぁッ！」

力一杯叫んで、俺も左の剣を強く引き絞る。腰を捻り、迎撃態勢を整えた。

一瞬だ。一瞬のミスが命取り。刹那のタイミングを逃した方が負けだ。

どんなタイミングがかっていえば——奴の巨大な尾が、俺を薙ぐ瞬間。

「ガアアアアッ！」

跳躍する竜足。舞い上がる巨体。草の根ごと巻き上げる、毒液を滴らせた尾。

リオレイアの奥の手、サマーソルト。それが俺に向けて襲い掛かってきた。

狙い目は、尾の先から片手剣一本分ほど。毒腺が多く含まれて肥大化した尾を繋ぐ、まさに首の部分だ。そこを横から断つように、俺は引き絞った体を解放する。俺の周囲を二度薙ぎ払う軌跡を、今奴に向けて叩き込んだ。

一撃目、その恐ろしい尾を弾く。

二撃目、その首の部分を引き裂いた。

「決まったにゃ！」

真つ先に、イルルがそう言った。

次いで、支えを失った尾の先が落ちる音が響く。

そして響くのは、バランスを失った飛竜の落下音。

俺の何十倍とある質量が墜ち、凄まじい風圧がかかる。思わず吹き飛ばされてしまいそうだったが、剣を突き刺しては何とか耐えた。

「……解毒、完了……ッ！」

「何にや、その決め台詞……」

「ついでに背中 of 棘とか残ってるから実はまだ完了してない」

「ぜ、全然しまらないにゃ！」

断ち切られた断面からは、どくどくと血潮が溢れ出す。放っておけば、彼女は出血多量で死ぬだろう。そうでなくとも、しばらくはろくに動けまい。

とはいえそれを悠長に待つ意味がある訳でもなく。あえて彼女を長く苦しませる必要もない。心苦しいが、俺は自分が食べるために左の剣を振るう。

「……いただきます」

この世の全ての食材に感謝を込めて——なんて、ちよつとくさすぎるかもしれないが。

とにもかくにも、狩猟完了だ。

振り下ろした切っ先が雌火竜の首筋を断ち切る。

金色の平原が、赤黒く染まった。



「飛竜と鳥竜って似てるよな」

「にやあ、まあ確かに……骨格は似通ってるにや」

「そんでもってさ、鳥竜と鳥って似てるよな」

「にや……そりや、”鳥”竜だから？」

「じゃあさ、飛竜と鳥も、似たようなもんだよな？」

「……今、自然な流れのようでものすごい飛躍が入ってきたような気がするにや」

「マンドラゴラと栄養剤グレート」

「それ秘薬にや」

イルルに呆れられる横で、俺は肉の塊をまな板の上に置いた。

先程狩猟した飛竜、リオレイアから剥ぎ取ったもの——雌火竜のむね肉。ベースキヤンプの簡易キッチンに良く似合う、武骨ながらも野性味溢れた美味そうな肉だ。

大きさは、俺の両掌から若干はみ出す程度。重さにして、五百グラム程だろうか。

「じっくり血抜きしてたけど……それどうするにや?」

「欲言えば卵と絡めたりしたいんだけどな」

「にやあ、季節が季節だからにやあ。卵は無かったにやあ……」

「つてことで、この肉はロースにする。レイアロース」

「レイアロースにや?」

「鴨っているじゃん。鳥の。あんな感じだよ。鴨ロースならぬレイアロース」

「にや、にやるほど……?」

納得したのかしていないのかよく分からないイルルだったが、まあそれは置いといて。

まず始めに、余計な肉や皮、脂を丁寧に取り除く。

「にやあ、処理するのにや?」

「おうよ。薄皮とか脂とか、余計なものが多過ぎるからな」

包丁を使って少しずつ肉を裂く。弾力性がありつつも柔らかい、良質な感触が手に届いた。

うつすらと血の色が刃の中に溶けていく。まだまだ新鮮な証拠だろう。

「……………」

「旦那さん、肉を見る目がマジにや」

「当たり前だろ。薄い膜とか残ってたら食感マジ最悪だからな。白い脂とか膜とか、一つも残したらクエスト失敗なんだぞ」

「にや、にやあ……………」

「そうだ、イルル。鍋とフライパン用意してくれるか？　鍋は気持ち小さめで」

「にや？　分かったにや」

パタパタと彼女がテントの中へと潜るのを横目に、俺はさらに余分な皮を剥ぐ。それから竜肉を手にとって、均等な間隔で包丁を走らせた。

端から端へ、横長の肉のその長さをなぞるように、横へ、横へと切り込みを入れていく。その間隔もなるべく均等に、見栄えの美しさも忘れない。

「…………旦那さん、何してるのにや？」

「こうすることで脂が出やすくなるんだよ。焼いた時にな」

「にやあ…………焼くの、鍋も使うのにや？」

「味付けのためにはこいつが必要なのさ」

イルルから受け取った鍋に、ポーチに詰めた調味料をばらまいていく。



まず醤油。大きじ五杯ほど。

次にみりん。これも大きじ五杯ほど。

最後に酒。今日は贅沢に、大吟醸・龍ころしだ。これも大きじ五杯。

「それくらい鍋で大丈夫かによ？　ちよつと小さすぎたかもしれないによ……」

「大丈夫大丈夫。熱すると縮むから、これくらいが丁度良い。さてさて、鍋を熱しつつフライパンにも火をかけてつと」

竜脂で表面を擦り付け、香ばしい匂いを昇らせる。焚火のパキパキと弾ける音に、雌火竜の品の良い香りが合わさってきた。

「味の煮汁は、肉が焼けた頃合いにぐつぐつ煮えてるが望ましい。つてことでイルル、鍋の火加減は任せた」

「うにゃー。やってみるにゃ」

「おう。じゃあ俺は、レイアの肉をつと」

肉を手で持ち、皮目の部分を下にする。それをぐつとフライパンに擦り付けると、激しい音が弾け飛んだ。

「にゃー、良い音にゃあ」

「肉焼く音つてこう……病みつきになるよな」

始めに皮目を焼けば、美味しそうな焼き色がつく。さらに余分な脂も焼いて落ちる。

まさに一石二鳥だ。鳥だけに。いやこれ竜肉か。

さて、焼くのはざつと二分ほど。そこまで長い訳でもない。懐から取り出した砂時計を見つつ、空いた手でキッチンペーパーを拝借。それを丸め、溢れ出た脂を吸い上げていく。

「そろそろかな」

「にやあ、お肉の焼ける良い香りにや〜」

「ひっくり返すとどんな色かな……よっこいせつと」

「にや、こんがりとしていい色にや!」

橙色にほんの少しの黒色を混ぜた、発色のいい茶色のような。脂できらきらと光るその色は、まさに芸術的だ。何とも綺麗で、美味しそう。

裏返して、肉の方を焼いて。それでも要領は同じ。少しばかり火から離しつつ、溢れ出る脂を吸い取るのだ。

飛竜の肉は、鱗や甲殻に包まれている。そしてその接合部には、脂と弾力性に富んだ膜がついているのだ。そう、まるで鳥皮のように。

これがまた、歯応えがあつて美味しいんだ。やはり、飛竜と鳥はよく似ていると感じさせられる。

「にや、にやあ。旦那さん、そろそろこつちが沸くにや」

「……おお、了解。じゃ、この肉を今度はそっちに入れるぞ」

「にや? まだ中までは焼けてないんじゃないかにや?」

「いいんだ、これから蒸し煮するから。あくまでも焼き目がつけばそれでいい」

「にやあ……それでこの鍋なのにな」

「おうよ。それにほら、焼いて若干縮んだら? ……ぴったりだ」

持ち上げた肉をそつと落とせば、鍋はそれをすつぽりと呑み込んだ。

焼く前であれば少しばかりはみ出てしまいそうだったが、今はぴったり入り切るほどへと縮んでいる。故に、これくらい小振りな鍋が丁度良いのだ。

煮汁の中で溺れる肉に、そつとキッチンペーパーを被せた。少しばかりはみ出た部分を包み込むように。肉の全てを煮汁で満たすかのように。真っ白なそれは、少しずつ煮汁の色に染まっていく。

「さて、こつからが大変だ。心してかかるぞ」

「にや? どうするのにな?」

「まずは当たり前、鍋にフタをする」

「にやあにや、フタになね」

イルルが被せてくれたフタを見て、俺は小さく頷いた。嬉しそうに微笑むイルルの頬を撫でながら、もう片方の手で砂時計を握る。

「さて、今から三十秒の間弱火にかけるぞ」

「にや、三十秒にや?」

「これまでで六秒ほど経ったからあとぎつと二十秒ほどだな」

「うにやあーん、小刻みにやあゝ……」

「で、三十秒経ったら、火から一旦遠ざけるんだ」

「にや、熱するのをやめるってことにや?」

「そういうことだな。はい三十秒」

「にや、にやっ!」

俺の掛け声に、イルルは慌てて鍋を掴む。その小さな手に俺も自らの手を添えて、一緒に鍋を持ち上げた。ちゃぽんと、肉が揺れる音色が響く。

「さて、これからこいつを一分半放置する」

「にや?」

「フタはしたままだけど。そして一分半経てば、また三十秒火にかける」

「にやにやっ……?」

「それを計三セット行うぞ」

「にや、なんでまたそんな面倒くさい方法を……?」

「やんわり火を通した方がよく味が浸みる。手間を惜しまない料理が旨さの秘訣だ」

「にや、それはそうだけど……」

「ついでに、三セット終わったら今度は一度竜肉を取り出して、ひっくり返すんだ」

「ふみや？」

「それから煮汁を沸騰させて、沸いたらまた入れる。もちろん、ひっくり返したままでな」

「……まさか」

「そのまさかだよ。同じことをまたやる。今度は上下裏返した状態でさ」

「……また三セット？」

「おう、また三セット」

「……にや、にやあ……も、物凄い手間暇というか、何というか……」

「さあそろそろ一分半だ。この鍋をまた火にかけるぞ」

「ひにやあ……」

憂いに満ちたイルルの溜息が、竜肉の蒸される香りの中に溶けていく。

彼女がこの工程の意義を消化するまでは、もう少し時間がかかりそうだ――。

「――さて、そろそろいいだろ」

「にや、やつとにやあ……」

「まあそう言うなつて。さて、と……とりあえず肉出さなきや」

「火が通り過ぎちやう、的にや?」

「そうそう、そういう的にや」

語尾を真似したら、イルルが少しだけむつとする。怒っていても可愛らしい。しかし頭をなでなですると、すぐににへらと顔を綻ばせた。相変わらず、表情豊かな奴だ。

しかしまあ、いつまでも可愛い相棒を愛でている訳にもいかず。ここまで丁寧にこなしてきた肉を無駄にすることは、できる限り避けたいところ。そう考えながら、この肉の塊をさつと取り出した。

「つとと……イルル、ボウル! ボウル取ってくれ!」

「にや、は、はいにや!」

ぴよこんと跳ねては、慌てて持つてきてくれたボウル。そこに肉を落としてつつ粗熱を取る。鍋も火から避けて、少しばかり冷めさせる。

「……両方とも冷めたら、どうしようかな。肉に黒胡椒でもまぶしたいけど……うーん」  
「にや、まぶしたらダメなのにや?」

「この後は弁当箱に詰めるんだ。この煮汁と肉を一緒にな。だからまぶしても、全部煮汁に落ちちやいそうだなあつて」

「にや、なるほど……。って、それじゃ、汁漏れとかもしそうだにや」

「だな。汁漏れ防止のためにこんなものを持ってきたぞ」

「にや、何にや……?」

困惑した様子で俺を窺うイルルに向けて、俺はボックスから巨大な皮を取り出した。

彼女の青い瞳を埋め尽くすほど大きく、びよんと伸びる重厚な皮。心なしか、触れている指先がひんやりと冷えてくるような気さえした。

「にや……それって」

「ヒント。最近刺身にした奴」

「にやっ……」

「でも不味かったから、フライにした奴」

「にやあーっ！ サボアザギルにや!?!」

「正解。これ、化け鮫の皮」

俺が取り出したこの一枚の皮は、化け鮫ザボアザギルの皮だ。

体内に貯めた液体を漏らさず、なおかつ通気性は悪くなく、温度が低いための食材の保存にも役立つ優れたもの。これがあれば、汁漏れ対策はばっちりだろう。

「さて、どっちにしろ肉の熟成には数時間かかる。そろそろ家帰るか」

「にや、にやあ……今は食べれないのにや」

「食いしん坊さんだな。珍しい」

「あんなに手間暇かけたから、どうせなら今すぐ食べたいっていうあれにや……我慢するけど」

「よしよし、お預けさせてごめんな。……そうだ、折角だしこいつをメインにした料理を、今日の晩飯にしようか」

「にや？」

「この寒い季節にびったしの、あったかい奴。さ、帰ろうぜ」

「にやあ……？」



目の前でほかほかと湯気を立てるどんぶり。

米か？ いや、違う。どんぶりには並々と汁が注がれている。

パンか？ いや、違う。パンとはまた異なった、深い出汁の香りに溢れている。

スープか？ いや、違う。具と汁の分量が、スープの比ではない。具が、明らかに多い。

「……麺、にや？」



「おう、ユクモ地方ではよく食われてたもんだ。ソバっていつてな、まあ……なんだ、穀物の一種だな」

「にやあ……それが、麦みたいに麵になるのにや?」

「そうそう。味や香りは麦のそれとは全然違うけど。さ、食べようか」

今俺たちの目の前にあるもの。マイハウスをほかほかと温めてくれるそれは、ソバと呼ばれる麺料理だ。しかもネギと件の肉をたっぷりと乗せた贅沢な一杯。カモネギソバ——ならぬ、レイアネギソバ。語感はいまいちだな。

大鍋に濃淡それぞれの醤油と出汁、さらにドスシイタケの戻し汁。そして酒とみりんを加えためんつゆにソバの乾燥麺を湯掻き、どんぶりへと盛り付けるだけ。至ってシンプルな、されど上品な一品である。

とにもかくにも完成だ。温かいうちにいただこう。

「にやつ、喉越しが独特にや……っ」

うどんとは違う食感だ。拉麺のそれとも大きく異なる。

少しばかり麺が細いのだろうか。食感はやや簡素とも言えるもので、さらりと喉へ流れていく。噛み応えもコシがあるとは言いにいく、簡単にほぐれてしまう。口の中に一度入れればその押し固めた身を全て崩してしまうような、そんな感覚だ。

しかし、味はどうだろう。麦とは違う、独特の味わいが口いっぱいに広がってくる。

「……うん、このつゆ、即興の割に結構良い感じじゃん」

「どこかキノコの香りがするにや。美味しいにや」

「だな。戻し汁入れて正解だったわ」

醤油ベースの風味に出汁の味の深み。さらにキノコの香りと旨みがじっくりと顔を出す。湯掻いて味を染み込ませた麺は、噛めば噛むほどそのつゆの味を口の中で撒き散らした。噛むのに苦勞しないから、口の中が即座に出汁とキノコの香りでいっぱいになる。これはたまらない。

「ドスシイタケの戻し汁ってほんと旨味が強いよな」

「うにや。はふ、はふ……そんなもって、お肉が美味しいにやあ……」

あつあつの一切れを、イルルは一生懸命口にする。

レイアロース肉から染み出る煮汁と脂が、めんつゆに光沢を上乗せしていた。

「どうよ。手間暇かけたからこそ、この味なんだぜ。頑張った甲斐があつたら？」

「うにや、これ凄いにや。リオレイアがこんな味になるにやんて。何て言うのかな、こういう味……」

「ユクモ風の味って奴か？」

「そうにや、それにや。やっぱりこれ、全部ユクモ地方の味付けなのにや？」

「そうそう。俺の故郷もユクモ地方だったからなあ。なんだかんだ、こういうのをつい

作っちゃまった」

持ち上げた肉は、ぷりっぷりだ。新鮮で、脂のきらめきが美しい。桃色の肉につゆと煮汁の濃い色が足されて、見ているだけで食欲がそそられる。

それを早速一口。つゆが跳ねるのを感じながら、一枚丸ごとを口に入れた。

「……うん、うん」

これだ。

口に入れた瞬間に、勢いよく広がってくる香り。

甘さと旨みを溶かしたような味わいに、豊富に含まれた脂身の独特の風味。それらをひとまとめにする煮汁の甘辛い匂い。鼻を通して、より一層香りが増してくる。噛めば噛むほど、増してくるのだ。

食感も、何と例えればいいのか。柔らかい。かといって、噛み応えがない訳ではない。身はしっかりとしているために歯に適度な食感を残し、脂身は柔らかいため簡単にほぐれていく。その度に肉の旨みと煮汁の味が染み出してくるため、もつともつと噛みたくなってしまう。

もつとだ。もつと頬張りたい。

「こりや最高だ。ソバによく合うわ」

「ネギもいいにや。この爽やかな味にシャキシャキ感が輝くにや！」

「斜め切りにしたから、歯応え抜群だよな。よく出汁を吸ってやがる。うめえもぐもぐと、肉を噛む音が響く。」

かと思えば、シャキシャキとネギが刻まれる音色がやってきて。

そこにずるるつ、とソバがすすられる音も追加。まるで食事の大合奏だ。

「麺料理つてのは音を出して食べてもいいってのが変わってるよな」

「にゃあ、作法的にそれはオツケーなのにゃ?」

「オツケーだよ。あ、でもパスタは駄目だ」

「にゃあ?」

「ユクモ地方の麺料理だけオツケーなんだ」

「にゃ……なんかよく分かんないにゃ」

困惑した様子でイルルは首を傾げ、そんな彼女の姿に俺は苦笑いする。

確かに、音を立てて食べてもいいなんて変な食べ物だ。とはいっても、麺をすするといっなのは結構コツがあるんだけど。アイルーの口で出来るかどうかは、生憎俺も知らないが。

「……ユクモ地方では、この寒冷期の中に歳末っていうものがあってな」

「にゃ?」

「要は、年の変わり目のことなんだけど。俺らもバルバレにいた頃に祝ったりしただろ

「？」

「にやあ……なんか、粥とか食べたにやあ」

「そうそう、それそれ」

七草粥を作るとか言つて、いろんな具材を入れた頃が懐かしい。

何年前だつたかなあ。トウガラシも入れてしまつて、イルルは少し不満そうだったのをよく覚えている。

「あの時も、食べたような気がするけど。その歳末に食うソバを、年越しソバつて呼んでたんだ」

「年を越すソバ、なのにな？ ……なんで、あえてソバなのにな？」

「いろんな意味があるらしいよ。体にいいから、いろんな毒を取り除くとか」

「にやあ。体にいいのになあ、これ」

「家族の縁が長く続きますように、みたいな意味もあるらしい」

「にやあ。縁、にやあ……。ボクたちの縁も、入るかにや？」

「入るんじゃないかな。俺らも家族みたいなもんだろ」

「うにやあ」

イルルに手を差し出すと、彼女も小さな手を寄せてきた。すつぽりと、その小さな手が掌に収まつてしまう。ふわふわな毛並みと柔らかい肉球が、俺の肌をくすぐつてき

た。

「にや、旦那さんくすぐったいにやあ」

「……肉球、ぷにぷにだなあほんと」

桃色のそれを擦ると、イルルが嬉しそうに笑う。天眼装備の尻尾を揺らしながら、きやつきやと子どもみたいに笑っている。

「……あと、断ち切るみたいな意味もあるらしい」

「にや?」

「去年のしんどいことを断ち切ってリフレッシュしよう的な? そんな意味もあるらしい

いぜ」

「……にやあ?」

「だから噛み切りやすいソバが年越しに選ばれたとか、何とか」

「……何か、さつきのと矛盾してないかにや?」

「それは俺も思った」

長続きさせたいのか断ち切りたいのかよく分からない。諸説あるのは分かるけど、確かに矛盾の塊のようだ。

「まあ、所詮は験担げんかつぎみたいなもんだしな。俺あんまそういうの信じてないし」

「……それより、味が大事っていうつもりにやね?」

「流石イルル。よく分かってんな」

「ずず、とつゆを啜る。」

醤油の甘さと若干の辛さを、出汁がひとまとめにしている。キノコの香りが、すうつと鼻を抜けていく。

「良い味わいだ。これくらいの味があれば、新年を快く迎えれそうだ。」

「年明けの一杯は、旨いソバに限るぜ」

「……旦那さん、ドンドルマはまだ寒冷期に入ったばかりにやあ」

く 本日のレシピく

『レイアロース』

・ 雌火竜のむね肉 …… 500g

・ 醤油 …… 大さじ5杯

・ みりん …… 大さじ5杯

・ 大吟醸・龍殺し …… 大さじ5杯

・ 黒胡椒 …… 適量

『レイアネギソバ（2人前）』

・レイアロース	……	500g
・ジャンゴーネギ	……	1本
・料理酒	……	50cc
・みりん	……	50cc
・薄口醤油	……	50cc
・濃口醤油	……	50cc
・出汁	……	小さじ1杯
・ドスシイタケの戻し汁	……	大きじ4杯
・乾燥ソバ麺	……	2玉



## 美食眠りし福袋

「イルル、シッ！」

「にやっ？」

太陽の光を遮る樹木。まるで柱のように立ち並んだそれらが覆い尽くした空間の中で。

俺は、探し求めていた『あるもの』をようやく発見した。

「静かに……音を立てるなよ」

「……?？」

未だ未開拓な部分が数多く残るここ——未知の樹海。

そこを我が物顔で歩き続ける、とあるモンスターの群れ。

彼らに気付かれないように、イルルを抱えて大樹の陰へと身を隠す。

「……旦那さん、どうしたのにや？」

「シッ、静かに……」

彼らは、数多い脚を忙しなく動かしている。

何かを求めるように、一心不乱に動かしている。

その一本一本の動きを凝視しつつ、彼らの後を追跡だ。イルルの言葉も、今だけはあえてスルーする。

その頭部には、強靱な顎が供えられていた。

脚は六本にも渡り、鋭い鉤爪が大地を荒く掻きむしる。

太く逞しい胴体は、青色の紋様に彩られていて。

その胴体の先には、鋭い針が伸びている。恐ろしく光る針が、伸びている。

「……ただのオルタロスにや？」

「ただのとはなんだ、ただのとは」

そう、今俺が凝視しているのは——オルタロス。一見何の変哲もない甲虫種のモンスタード。

オルタロス。

遺跡平原や地底洞窟を闊歩する、小型の昆虫。

小型といえど、それは他のモンスタースターに比べた時の話。アルセルタスや、ゲネル・セルタスのような、あれくらい大きな種に比べればまだ小さいだけである。人と並べば、その体軀はそう変わらない。ドスヘラクレスやセツチャクロアリののような昆虫とは一線を画すモンスタード。

とはいえ、それほど脅威のあるモンスターという訳でもない。好戦的でもなければ、恐ろしい毒をもっている訳でもない。性質は比較的温厚で、危害さえ加えなければ人を襲うことも滅多にないのである。

「……どうして、オルタロスを追いつけてるのにや？」

「なんだイルル、知らないのか」

オルタロスがようやく『例のブツ』を発見し、嬉しそうに鳴き声を上げた頃合いだった。ああなると奴らは周りへの注意が散漫になるため、俺はようやくイルルと目線を交わす。

「アイツ、たぶん食べれるぞ」

「……………」

久しぶりに、イルルのドン引きする顔を見た。

「……あ、流石に尾の針は食わないからな」

「そういう問題じゃないにや」

続いて呆れ顔。

何だか、こういうやりとりも懐かしい。

「オルタロスを食べる……？ 旦那さんはボルボロスなのにな？」

「俺をあんな石頭と一緒にするな。ちゃんと論理的に話している」

「普通の人はいれを食べようなんて考えないと思うにや。野良のイルルだったら……  
思いかもしれないけど」

「虫つて意外に栄養価高くて、食材としては優れてるんだぜ……つと。ほら、イルル。あれ見てみな」

「うにや?」

俺に促されるままに、彼女は首を動かした。

その視線の先には、思いのままに顎を動かすオルタロスたちの姿。

そんな彼らの足元には、青みを帯びたキノコの群れが。

「……食事中にや?」

「うーん、半々なあ」

「半々?」

一見すれば、確かに食事中のようだった。

虫の群れがキノコに群がって、取り憑かれたかのように顎を動かす。確かに、食事中と言つても差し支えないだろう。

しかし、俺はそれに異議を唱えたい。

確かにそれは食事中のようだけれど、実は彼らはそれだけではないんだ。

「あれは宝探しだ」

「宝探し?」

「そう、宝探し。それもとっても素敵なヤツ」

俺の言葉の意図がよく分からないらしく、イルルはこてんと首を傾げた。

その仕草に頬が綻びつつも、彼女の頬を右手でもふもふとしながら言葉を繋げる。

「あれはな、特産キノコを探してるんだ」

「にや?」

「俺たちハンターもよく探すだろ? あれだよ」

「旦那さんがいつもキノコの群生地漁って持つてくるやつ?」

「そうそう、それぞれ。味良し、香り良しの万能食材だな」

「……あの子たちも、それを探してるのにや?」

「おう。オルタロスはグルメでな、しかもその味の良さをみんなで共有しようっていう

心意気の持ち主なんだ。いやまあ俺の想像なんだけど」

「にや、にやあ……?」

もふられて、くすぐったそうに目をパチパチとさせるイルル。その目には、まだ『何言っただコイツ』の色が抜け切っていない。

「特産キノコは、小指ほどの大きさしかない小さなキノコだ。それ故に、発見するのなかなか骨が折れる」

「……旦那さん見てると、そんな感じしないんだけどにやあ」

「それは俺がキノコ探しのプロだからな。これだけ場数踏むと匂いで分かるぞ」

「……そ、そうかにや」

「話が逸れたな。そんでな、あいつらオルタロスはな、見つけた特産キノコを丁寧丸呑みするんだよ」

「にや？」

「そしてそれを巣まで持って帰る。それが奴らの習性だ」

「……もしかして、それを群れみんなに分けてあげるために？」

「たぶんな。いやあハートフルストーリーなモンスターだぜ」

甲虫種であつても、仲間を思いやる姿には尊敬の念を覚える。

旦那を砲弾にしてぶっぱなすあの虫も見習ってもらいたいもんだぜ。

まあ、どうであろうと結局食べるんだけど。

「さて、そろそろいいだろ。イルル、オルタロスの様子、見てみなよ」

「にや？ さつきより、お腹が膨らんでるにや？」

「だな。お腹がパンパンに膨らんでるよな」

「……もしかして、あの中に？」

「うん、特産キノコがぎっしり詰まってるんだ」

細身だった腹は、今や見る影もない。

随分と張りの良い、鞠のような姿へと変貌していた。

あの中に詰まっているのは何か？ 明白だ。奴らが一生懸命探し集めた特産キノコが、ぎっしり詰まっている。

「ちなみに、特産キノコってそのまま食べてたらどんな味がする？」

「にや？ ……キノコらしく歯応えあって、けれどクリーミーでマイルドな旨み？」

「うんうん。そんな特産キノコだけど、ちよつと変わった食べ方が実はあるんだ。食通の中で定評のある、とある魔法を使つてな」

「……魔法？」

「ズバリ、熟成」

そう言いながら、ゆっくりと立ち上がる。

腰に携えた大包丁に手をかけながら、オルタロスに向けてゆっくり歩み寄る。

「熟成は、いいもんだ。肉でも魚でも一緒。鮮度はもちろん大事だが、じっくり素材を熟成させるのもいい。また違う味の深みが出る」

「……それとオルタロスが、どう関係するのにや……？」

「オルタロスの腹袋には、どうやら特殊な酵素があるらしい」

「にや？」

「それが体内の特産キノコを熟成させ、グレードを格段に向上させる——食通は、それを『熟成キノコ』と呼ぶ」

そこで一旦言葉を区切って、一気に駆け出した。

目指すは、キノコの群れから離れようとする甲虫種たち。

腹に大量の特産キノコを詰めて、満足そうに唸るオルタロスども。

そんな彼らに向けて、俺は大包丁を解き放った。突然の襲来に彼らは驚きの声を上げるものの——その腹が邪魔して動きが遅い。

もはや、まな板の上のガノトトス。

「一匹目！」

振り下ろした包丁で、胴と腹を両断する。司令塔と支えを失った腹はどすりと落ちて、重りを無くした胴体は勢いよく横転した。

振り切った勢いを、そのまま遠心力に上乗せて。弧を描く刃を振り払い、威嚇音を上げる個体の頭を叩き割る。背後から針をチラつかせる奴には、回し蹴りを入れた。

「旦那さん！」

はつとイルルの声が届いたかと思えば、彼女が放ったブーメランが風を斬る。俺の隙を突こうとした残りのオルタロスを、一瞬でバラバラにした。

とつと着地しては、天眼装備の裾を風に揺らすイルル。相変わらず器用な奴だ。



「わりの、助かった！」

「うにや、切り込み過ぎにや」

そう窘められつつ、残った最後の一匹の頭部を砕く。

右手に備えた鍋が鈍重な声を上げた。



「……六匹分かあ。まあ良い量集まったな」

「だ、旦那さん……それ何にや……？」

「ん？」

手を合わせて深く目を瞑った後、早速解体作業に取り掛かった俺。

そんなこんなで取り出したその部位を見ては、イルルは引き攣った声を上げていた。

掌に収まる大きさの塊。

妙に柔らかい質感に、ゴロゴロとした感触。

剥き出しになった、深い青色の物体。

「腹袋だよ。オルタロスの腹袋」

「……腹袋？」

「そ。胃袋とは違って、一時的に食べたものを保管する器官……なのかなあ？　ここにたくさんの特産キノコが詰まってる」

「……もしかして」

「そう。例の酵素があるのもここだ。今この中で、特産キノコは熟成キノコへと進化を遂げつつある」

「……じゃあ、今からそれを……？」

「ああ、調理してみよう。きつと旨いぞ！」

幸せな重量を感じる俺。

その一方で、深い溜息をつくイルル。

やっぱりこの人、頭おかしいにや——なんて。

そんな言葉が聞こえたのは、気のせいだったかな。



「これ盾にや？」

「鍋だ」

「でも旦那さん、さつきこれ右手に持って盾として使——」

「盾として使えないことはないけど鍋だ」

「でもこれでオルタロスを」

「どうせ今から料理しちゃうし。結果は一緒一緒」

片手剣として一応武器登録がされている大包丁。そのペアとして供えられた大鍋は、盾としても鍋としても使える優れものだ。

そんな盾に——訂正、鍋に勢いよく油を注ぐ。

「……そんなに油入れてどうするのにや？ 揚げるのにや？」

「うん。キノコは天ぷらにすると旨いんだぞ」

「天ぷらにや？ 天ぷら粉がないと——」

「持ってきたぞ」

「……愚問だったにや」

さっとポーチから天ぷら粉を出せば、彼女はどこか諦めたように笑う。そんな彼女に向けて、菜箸をずいっと押し付けた。

「油の様子見といてくれ。箸に気泡がついてきたらいい頃合いだ」

「にや、にやあ……っ」

わたわたとした様子で鍋に箸を突っ込み、ぴちよんと油が跳ねる。

そんな彼女を横目に、俺は汚れを落とした腹袋を手を取った。

計六個の腹袋。オルタロスから丁寧に剥ぎ取ったそれを、塩揉みして汚れを落としたもの。

腹袋の感触は、何とも言えない弾力性に満ちていた。ぶよぶよ、とまではいかないが柔らかく、しかし一定に固さもある。形はどうも崩れにくいようで、たくさんのキノコを詰められるだけの頑丈さはあるようだ。

一般的な個体の腹袋は透明度が高く破れやすいが、これはどうも違うらしい。破れにくいことで定評のある、極上の腹袋だろうか。

拳ほどの大きさのそれには、小指ほどの大きさのキノコがたくさん詰まっている。これを水溶き天ぷら粉に浸し、高温の油の中に落とすとなれば。

一体どんな料理になるか、楽しみでならないぜ。

「さて、と」

金属製のボウルに天ぷら粉を注ぎ、さらに適量水を注ぐ。それを箸で混ぜ合わせつつ、ダマが無くなり次第腹袋を投入。もちろん、下味付けに塩胡椒は忘れない。

青色のそれに、淡い黄色が差していく。上から塗りたいように、腹袋は少しずつその色を変えていった。

「……こんなもんかな」

「旦那さん、油ふつつつしてきたにや」

「お、どれどれ」

イルルの呼ぶ声に鍋を覗いてみれば、黄金色の油は鼻をくすぐるような香りを熱気に乗せて飛ばしてきた。菜箸にまとわりつく気泡も、程よく小さいものが大量だ。温度にしてみれば、百七十度に近いと見える。

「うんうん、良い感じ。じゃ、早速一つ」

静かに獲物を待つていた油は、腹袋が投入された瞬間にその牙を露わにした。

じゅわわ、と激しい音が樹海に反響する。菜箸についていたのとは比べ物にならないほどの気泡が、一心に腹袋へと喰らい付いた。それと同時に天ぶら粉は激しく悲鳴を上げ、全身を黄色い鎧で覆おうとする。

まるで本性を現したアリジゴクと、必死に抵抗するアリのような。何とも奇妙な光景だ。

「良い音だなあほんと。揚げ物は音色も最高だ」

「うにや、油飛んでくるにや……」

「ああ、嫌だったら離れてていいぞ」

「にや、じゃあボク、ポーチの整理でもしてるにや」

イルルが無念そうな顔で鍋から離れる。やっぱり、毛並みに油がつくのは嫌なのだろ  
う。

彼女が離れる間も、ぱちぱちと激しい音が鳴り続ける。衣は徐々に固まりつつあったが、中身がどうかは分からない。ちゃんと火は通っているのだろうか。

「旦那さん旦那さん」

「ん？ どした？」

「ポーチにこんなもの入ってるにや」

煮え滾る塊を転がす俺を呼ぶイルル。彼女の方を振り向けば、そこには小さな封筒が一枚あった。

「ああ、それって……」

「お師匠さんからの手紙にや。もしかして、まだ読んでないのにや？」

「うん。こういうのって何かあんまり開けたくないじゃん。めんどくさいし」

「折角送ってくれてるんだから……それに、もしかしたら何かあったのかもしれないのにや」

「はっはー。師匠に限ってまさかまさか。ついでにそいつも揚げちまうか」

「ば、馬鹿言わないでにや！」

ギョツと庇うように、イルルは手紙を隠す。天眼の鮮やかな衣の中で、茶封筒がくしゃつと悲鳴を上げた。

「ま、冗談はともかくとして……そろそろいいだろ」

あんまり揚げ過ぎてもかえって不味くなる。程よく水分を含んで、程よく張りのある食感にしたいものだが——如何せん、この食材は初挑戦だから勝手が分からない。

ころつと、皿に上がった腹袋の天ぷら。見た目は上々だ。肉団子を天ぷらにしたようにも見える。

とりあえず、割って中身を見てみよう。なんて考えながら、包丁を取り出して。衣に刃をあてがってから、さつと両断。中の腹袋も、一振りで二分割する。

「……おお」

ほくほくだ。ほくほくと、湯気が溢れてくる。

断面からは零れた衣、柔らかくなつた腹袋の皮、そして中に詰まつたキノコが顔を出していた。中のキノコにまでしつかり熱が通っているらしく、上品なキノコの香りが樹海の中へと溶け込んでいく。

淡い暖色に包まれたキノコは、特産キノコとは訳が違う。香りが段違いだ。出汁にタングシア地方の昆布を使つたか、適当な市販のものを使つたか。それくらい確固たる違いが存在する。深みだ。香りの深みが違う。

衣はカラツと仕上がっており、鼻を通り抜ける柔らかい匂いがする。それがキノコの香りと混ざり合つて、非常に鼻が心地良い。さらに腹袋も良い香りを——と言いたいが、どうやらそんなことはなかった。腹袋に関しては、少しばかり酸味のような臭い

がする。うーん、香りはちよつと残念だ。

「食べれそうだな。イルル、半分どうだ？」

「にや、じゃあ……」

アツアツのそれを手に取りつつ、皿の方をイルルへと手渡して。

おずおずと彼女が受け取る様子を見ながら、俺は一口、天ぶらを頬張った。さくつと、小気味良い音が響いた。

歯触り、良い感じ。天ぶら特有のさくさく感が、口いっぱいに広がってくる。さく、さくと顎を伝って耳に音が届いてくる。その固さと唸るような歯応えに、噛むのが止まらない。固い衣を噛み砕くのが楽しい。

「……んお……っ！」

何だこれ。もちもちだ。

さくさくの下から、もちもちが溢れ出てきやがった。

何だこれ。何だこの、大根餅みたいな食感。これって、これって――。

「んにやー、何だかもちもちしてるにや。これ、オルタロスのお腹なのにや？」

「……イルルもやっぱりそう思う？」

「んにや」

極上の腹袋は、破れにくい。



そんな話は確かにあったけれど——まさか、こうももちもちになるなんて。破れない訳じゃない。ぐつと噛めば、簡単に断ち切れてしまう。けれど、俺の歯には柔らかさと弾力性を持ち合わせた独特のもちもちさが、否応なしに伝わってくる。これは何とも、面白い食感だ。

とは言っても、これ自体にはあまり味がないらしい。ちよこつとだけ、変な臭いもするし。油の匂いに紛れつつも、酸っぱい香りは鼻の奥を舐めるように広がっていく。

——のだが。

「……あー、キノコ最高」

それをも塗り潰す、圧倒的なまでの香りの良さ。

品格。

風味。

後味。

どれをとっても申し分ない、後を引かぬキノコの香り。

艶つややかで、嫺たおやかで、渋さと甘さを溶かしこんだような贅つや沢な香りだ。

もちろん、熟成キノコの良さはこれだけではない。噛み応えもまた素晴らしい。繊維に沿って噛めば、さらりとその身はほぐれていく。繊維に逆らってみれば、バツンと景気の良い音が響く。それと同時に、キノコの奥深い味が広がってきた。

「うにゃー！ 美味しいにゃ！ キノコの味が濃いつ、濃いにゃあー！」

「だろ！ 特産キノコとは段違いだろ！ 長い時間丁寧に汁を染み込ませたような味だろ！ 旨みが、喉の奥でギュツと濃縮されるだろ！」

「凄いにゃ凄いにゃ！ 高級なお吸い物みたいにゃ……甘い寄りの旨みなのにゃ。うにゃ、凄い……」

「あー、これは天つゆいらぬな。というか、無い方がいい。キノコの味だけでもう十分だ」

女帝エビとタンジアの昆布にノブナガツ才節でとった出汁にじっくりと浸してきました、なんて。そんなデマがついて回りそうなほど、濃い旨みが染みついている。ほつれた繊維から染み出すように、旨味が際限なく溢れてくるのだ。

こんな満足感のあるキノコなんて、他にあるだろうか。肴瘴啖の前で食べたキノコたちも、これには及ばない。毒テングダケはそこらのキノコの十倍旨い、なんて噂も聞いたことあるが、これとどっちが上なのか。いつか是非とも検証してみたいもんだ。

「こりやたまんねえや。残りもどんどん揚げようぜ。キノコ祭りだ！」

「うにゃ、賛成にゃー！」

乗り気になったイルルがせつせと皿の準備をし始める。

そこに俺が、揚げた塊をどんどん乗せて。その傍らに天ぷら粉を十分に腹袋に練り込

んで。

どんどん出来上がる腹袋の天ぷらに、未知の樹海はキノコの香りで満ち溢れていた。

「何か、福袋みたいだなあこれ」

「福袋？」

「色々お得なものが詰まった袋さ。何が出るかは分かんないけど。この味はもう、幸福そのものだなんて」

「うにゃ〜。確かに、こんなのをたくさん食べれるならとっても幸せなのにゃ」

「……そういえば、お腹が金色に輝くオルタロスが、稀に見られるらしい」

「金色……？ にゃ？」

「ああ。それはきれいな腹袋と呼ばれ、高級食材としての価値があるとか何とか」

「旦那さん、これ金色のにゃ？」

「なっ……！！」

いくつもの腹袋がからつと揚がった頃。イルルがポーチの影に隠れていたものをそつと取り出してきた。

そこには、黄金色に輝く一つの物体が。眩い色に満ちた腹袋の姿が、そこにあった。

まさか、知らぬ間に手に入れていた？ それを、ポーチを整理していたイルルが幸運

にも見つけてくれた？

「まさか……まさかこれって……！」

「うにや、まさかまさかにな……!?!」

幸福そのものだなんて言っただけれど。

まさか本当に、幸福を運んでくるなんて——。

慌てて天ぷら粉を塗りたくって、さつと油へ落とす。

じゅわわ、なんて音が鳴り響いたと思えば、衣には丁度いい色が差してきて。

そろそろ熱も通っただろう。アツアツのそれを取り出しては、さつと一刀両断。片割

れ即座に口に入れた。

「んもっ……!?! これは……!?!」

「にやっ、にやっ……!?!」

咀嚼。

金色のそれを、思いのままに咀嚼する。

じゅつと、中身が俺の口の中で溢れ出す。

——これは。

これは、もしかして。

「……甘い」

「……にや?」

「……これ……ハチミツ……うおお……」

「にや、にやあ……」

金色の腹袋に見えたそれは、黄色の腹袋。

黄色の方に詰まっているのは、大量のハチミツだった。

ただただねつとりとした甘さが、舌を全て塗り潰していく。揚げ物にハチミツつて、何というミスマツチ感。

「……ま、福袋にも当たり外れあるし……」

「……旦那さん、どんまいにや」

甘すぎるハチミツの香りは、それはそれは熟成キノコのそれを塗り潰すほどだった。世の中そんなに甘くない。

オルタロスの腹袋を食べて、俺は改めてそう実感した——。

でも案外、これはこれで悪くないかも?

く 本日のレシピく

『熟成キノコ入り腹袋の極上天ぷら』

☆一人前

- ・ 極上の腹袋 …… 1つ
- ・ 熟成キノコ …… 腹袋次第
- ・ 天ぷら粉 …… 適量
- ・ 水 …… 適量
- ・ 塩胡椒 …… お好みで

## グルメの顔も三度まで

あの時——オルタロスの腹袋を天ぶらにした時。

イルルが、ポーチから取り出した手紙。揚げようか、なんて冗談で言っていた師匠からの手紙。

そういえばずっと放置していた。あの嫌な事件の時も、どうでもいい現状報告で苛立って破り捨てて、返事も書かないでいた。

そんな師匠の手紙を、俺は何ともなしに開封して。この前は今雪山を拠点に活動している、みたいな話だったけれど。じゃあ今度は一体何なんだと。そんなことを考えながら、俺はその手紙に刻まれた文字を見た。

その内容に、思わず目を疑った。

『わり、下手打っちゃまった。銀色の龍が、空から降りてきた。とりあえずお前、ポツケ村に来い』



「ばっはっは!! 来るのが遅えよ、シグ!」

「……何だよ、全然ピンピンしてんじゃん」

慌ててポケット村に出立して。到着と同時にすぐ集会所へと駆け込んで。

そのこの医務室で横になっていた師匠は、野太い声で俺を迎え入れる。豪胆な彼らしい、快活な表情だった。

「にや……お師匠さん、大丈夫にや?」

「おうイルル。俺あこの通りだ。ボロボロだが、ピンピンしてるぜ」

そう言う師匠の鮮やかな毛並みは、今や白い包帯に包まれた奇妙なものとな化していた。その包帯もところどころ赤い色を滲ませており、彼の表情とは真逆なまでに痛々しい。

「……一体何があつたんだ? 師匠が、そんな怪我するなんて」

「なあに。未知のモンスターと遭遇しちまつてな。そいつに腹をずぶり、だ」

「未知のモンスター?」

「おう。手紙に書いたろ? 銀色の龍だ。翼から赤い炎を撒き散らす、見たこともないヤツだ」

「……………ツ!!」



その言葉に、俺の全身の毛が逆立ったような感覚が走る。

銀色の龍。

銀色の――。

「銀色……？ それは、クシャルダオラじやなくてにや？」

「鋼龍なら、最初からそう呼んでらあ。見たことも聞いたこともない奴だったね、ありやあ」

「……手」

「あん？」

「その翼は、まるで手のようだったか？」

「……！ ……ああ」

「そいつの手足は、まるで猛禽類のように鋭いものだったか？」

「ああ、そうだ」

「……そいつはまるで、流星のように空から飛来した？」

「……もしかしてお前、アイツと遭遇したことあんのか？」

訝しむように、師匠は俺の顔を見た。

その言葉に俺が頷くと、イルルははっとした表情で俺を見る。

「旦那さん……！ ……もしかして――」

「ああ。未知の樹海で遭遇したあの古龍……だろう」

いつかの、パエリアを作った時だった。

イヤンクツクと、狂竜化したイヤンクツクを二頭同時に討伐して。非感染個体を調理しつつ、感染してしまった個体をどうしようかと考えていたその時だった。

あいつが、空から墜ちてきた。

「ほーう？ それでどうなったんだ？」

「戦ったけど、負けた。俺が気絶してる間に、イヤンクツクの肉を取られた」

「ははは！ そりゃあ災難だなあ！」

「笑い事じゃねえつての。食い物の恨みは恐ろしいんだぞ」

話を総合すると、どうやら例の古龍がここに来たらしい。

俺の調理を邪魔して、イヤンクツクまで盗んでいき、挙句の果てに師匠に怪我を負わせた。そんなアイツが、このすぐ近くに——。

「旦那さん、あの」

「分かってる、イルル。俺もアイツを放っておく気はない」

「……！ にやつ！」

「ほう……師匠のけつを拭いてくれるって訳かい。流石我が弟子。話が早——」

「アイツは淆瘴啖を美味しく調理するヒントになるかもしれないからな。分かってる

ぞ、イルル」

「……………にや」

以心伝心を感じて、俺は良い顔でそう返す。

けれど、返ってきたのは呆れ返った彼女の表情。何でだろう。

あの古龍が発した赤い光は、確かに龍属性エネルギーだった。けれど、滄瘴啖のそれとは大きく異なる。奴のものが腐敗した肉とするならば、例の古龍のものは新鮮なままに刺身にした肉だ。

素材が活きている。肉を、細胞の脈動を活性化させてくれるような光。それがあいつの龍属性エネルギーなのだ。

「…………で、師匠。その龍はどこ行ったんだ。どの方角に飛んでった?」

「まあ待て。話は最後まで聞け。ほれ、コイツでも食いながらさ」

「にや? 缶詰?」

宥めるように手渡されたもの。

それは、イルルの言う通り缶詰だった。

「何だこれ。何の缶詰?」

「ガウシカだ。この地方は、ガウシカの肉をよく食べる。燻製にして缶詰に詰めれば、保存も効いて狩りの相棒にピッタシだ」

「へえ……ガウシカか。いいじゃん」

手に取ったそれに向けて、ナイフを突き立てた。平たい円柱状のそのの、表の面の端を這うように。手に取ったナイフでその隙間を穿ち、少しずつ刃を奥へと這わした。

ぎちぎち、と耳障りな音を奏でる傍ら、俺は師匠の話に耳を傾ける。

「俺とてな、ただやられた訳じゃない。襲われたからには、俺もアイツを仕留めようと努力したさ」

「うにゃ」

「それでまあ、俺も結構な怪我をアイツに与えたぜ。ほれ、見ろこの鱗。甲殻だつて何枚か剥いてきた。それに、尻尾もな」

穴の空いた腹を痛がりつつも、師匠は大きな革袋をどんと置いた。ベッドからはみ出そうなそれに、イルルはそつと手を伸ばす。その口を大きく開ければ、確かに白銀に輝くあの古龍の鱗がそこにあつた。

「……すげえ。師匠、アイツ相手にここまでやったのか」

「ま、その代償として俺はこうなっちゃったんだけどな。さて、問題はここからだ」

「こやっ？」

一旦話を改めるかのように、師匠はすうつと息を吸う。

それにイルルは首を傾げながらも、彼の言葉を待った。興味深そうに、細い髭がゆら

ゆらと揺れている。

俺も缶のフタを開けるのに奮戦しつつ、彼の言葉を待った。

すると、耳に入ってきたのは、予想だにしていなかった情報。

「俺にやられて相当気が立ったのか、アイツはこの雪山を根城にしちまいやがった」

「は？」

「大方俺を待つてるんだろ。自分の尻尾を切った憎き獣人を仕留めようと、血眼で探してるんだろ」

「……………」

「おかげでこの村は商売あがったりだ。危険すぎて山に向かえない。常駐のハンターじゃとても解決できない。ギルドもさぞ困っただらうなあ」

「……………まさか」

「おう、そのまさかだよ。この状況を何とかさせようと、俺がお前を呼んだ訳だ。師匠からの推薦だ。シガレット、アイツを追い払ってくれねえか」

そう言つて、師匠はニツと不敵に笑った。俺のことを信頼しているような、そんな色が垣間見える瞳だった。

いつもなら、ふざけんな、だとか。勝手に俺を巻き込むな、だとか。そんな反応をしていたらどう。

けれど、けれど今は――。

「……つまり俺は、アイツと戦える訳だ」

「旦那さん……」

「師匠、今回ばかりは感謝するぜ。俺も、アイツを仕留めたかった」

「そうか。なら話が早え。決まりだな」

師匠が突き出してきた肉球。黒く固いそれに俺も自らの手を差し出して、固い握手を繰り出した。

触り心地は、やっぱりイルルの圧勝だった。



「……で？ 他にも話がありそうな顔してんな？」

「まあそう慌てるなよ。とりあえずそれを食え。ガウシカ食え」

やっところさ開いた缶を片手に、俺はベッドの横の椅子へと腰かける。懐から箸を出して食べる準備をしながら、師匠からの言葉を待った。

「今からお前に、俺が身をもって知ったアイツの癖を教えるぞ」

「出たよ。師匠お得意の筋肉見極め説」

「おうよ。役に立つだろ？」

「まあ……たまには」

箸で摘まんだ肉は、燻製らしいくすんだ色をしたものだった。

香りとしては、控えめな塩らしいあつさりとした香り。独特の癖のようなものも広がるが、これが味付けのせいなのか、それともガウシカの肉の香りなのか分からない。如何せん、ガウシカはあまり食べたことがないのだ。

「奴は、あの翼が一番の武器だ。あれを自由自在に操って狩りをする」

「……だな。俺もあれには手痛くやられたよ」

「にや……」

以前突かれた箇所を軽く手で擦る。するとイルルが、心配そうにきゅつと服を掴んできた。

彼女には笑顔で大丈夫と返し、師匠の方へと視線を滑らせる。

師匠は、にやりと笑った。

「あの翼だよ」

「何がだよ」

「あの古龍の仕留め方。奴の翼を凝視しろ」

燻されて水分を失った肉が、きらりと光る。それは雪の光の反射のせいなのか、それ

とも師匠の鋭い眼光のせいなのか。俺にはよく分からなかった。

「—— ツツツ!!」

「にやつ……!」

「うるせ……ツ!」

雪に閉ざされたフラヒヤ山脈。

一面雪に覆われた銀世界。

そこへ差し掛かる銀色、そして鮮やかな赤色。

——あの古龍が、今日の前で雄叫びを上げていた。

「……普通に考えたらさ! 相手は古龍じゃん!? 俺ら二人に押し付けるってなかなか酷くないか!」

「ほんとにや! クシャルダオラだって、四人でも相当きつかったのにや!!」  
泣き叫ぶようにイルルも吠える。

俺も負けじと声を張る。

一方の例の古龍。奴はその碧く鋭い瞳で、じつとこちらの様子を伺った。

確かに、体のところどころの鱗が剥がれている。尾は随分と短くなり、爪もいくつか



折れているようだ。師匠、随分と健闘したんだな。

「……にゅっ」

奴は、イルルを睨んだ。

睨んで、じやりつと雪を搔く。

「ボ、ボクお師匠さんと同じアイルーだから……もしかして勘違いされちゃってるにや  
!?!」

「どうなんだろうな。飛行に特化してそうだから目は良さそうなんだけどなあ。単純に  
気が立ってるだけじゃね?」

「う、ううう! 来るにや旦那さん!」

「よしきた!」

走り出した。

例の古龍が、走り出した。

四肢を使って全力疾走。猛禽類のような足で、雪に激しい傷跡を残す。体格はそこら  
の飛竜と同じくらい。それが走って迫ってくるのは、やっぱり圧巻だ。怖いものである。

とにもかくにも、全力回避。俺とイルルは反対方向へ、奴を挿むようにして避けた。

「とりやつ!」

「うみゃん!」

そのまま後足へ突進。勢いに乗せた切っ先で、奴の剥げた皮膚を穿つ。

小さな悲鳴と同時に、その古龍は身を翻した。羽のように軽々と浮かび上がるその様は、奴の異質さを際立たせる。

「……しかしなんだ、見れば見るほど変な奴だなコイツ。異質と言うか、無機質と言うか」

「にやあ……確かに、生き物らしくないのにや」

「古龍って、ほんとに変な奴ばかりだなあ。……つと。イルル、今の翼の動き見たか」  
「にやっ……!」

翼が、ぐるりと旋回した。

銀色が美しいそれが、翻って裏を向く。赤い色が滲んだ、気色の悪い射出口。例えるなら、ボウガンの銃口のようなものが、ずらりと立ち並んでいる。

「あつあ、あの形態だと……にやっにやっ……!」  
「龍属性エネルギーを撃つてくる!」

そう言うや否や、翼が瞬いた。球状に押し留められた赤黒い塊が、風を斬って飛んできた。

——奴の翼には、二つの形態がある。

それが何かって? 馬鹿野郎。奴は形態ごとに行動を切り替えるんだ。逆に言えば、

それさえ把握しとけばある程度の予想がつくっていう話。

翼の赤い方……そうだな、掌と呼ぼうか。あれがこちらに向いている時は、奴は龍属性エネルギーを放ってくる。気をつけな。

回避する俺の頭に、師匠の言葉が反響した。あのガウシカの味と共に、俺の口内を廻り始めた。

塩漬けとは何たることか。燻製とは何たることか。

シンプルで実用的ながらも、旨味を忘れることはない。痛みやすい食材を塩漬けし、煙に当てることで保存の効く形態へと変化させる先人の知恵だ。

木材を完全燃焼させると、煙に含まれる殺菌・防腐成分が失われてしまう。故にあえて不完全燃焼させて、それらを潤沢なまま食材へと当てるのだ。煙の香りを十分に吸った食材は、独特の香りを得る。あのガウシカの燻製も、それはそれは独特だった。

「いやー……」

雪山に響く、ネコの雄叫び。

イルルがブーメランを撒き散らす傍ら、俺は奴の懐へと潜り込んだ。そうして、隙だらけの腹に剣を入れる。右へ、左へ、はたまた右へ。左腕にものを言わせ、その固い鱗に傷を走らせた。

「旦那さん！ 羽ー！」

「うおっ……!」

不意に、頭上に染み出す赤い色。

見上げれば、奴の翼が派手に瞬いている。血流が溢れ返ったかのように瞬いている。翼の裏側——掌が向けられている時。

それは、奴のエネルギーが照射されるということ。

「ぐあっ……!」

直撃は避けた。避けたが、衝撃からは逃れられなかった。

奴が放った光は、足元を焼いて炸裂。自らも巻き込んで、雪に鮮血のような色を焼き入れる。

その衝撃に吹っ飛ぶ俺。雪の上を転がった。防具の上から、ひんやりとした感覚が襲い来る。

——いや、これは。

「旦那さん!」

てってつと、駆け寄ってくるイルル。

彼女は心配そうにしゃがみ込んで、俺を抱き起そうと手を伸ばした。桃色の肉球が、俺に迫ってくる。

「……イルル、俺に触っちゃダメだ」

「にやつ……………」

「あー……………体が怠い」

龍属性エネルギー。

鮮血が撒き散らされたかのように、その赤い色が俺の体にこびりついている。体の怠さはこれだ。龍属性やられ。奴のエネルギーが俺の体を帯びている。

「今はダメだ。龍属性エネルギーが、まるで帯電してるみたいに俺についてる。今触ったら、イルルにも移るぞ。静電気みたいにビリッとくる。たぶん」

「にや……………」

「俺は大丈夫だ。それよりも、気をつける。翼……………」

ぐるりと、奴の翼が再び旋回した。

空の光を淡く反射する眩しい甲殻。それが俺たちの方を向く。鋭い切っ先は、まるでランスだ。ぞくりと、嫌な予感がした。

——翼の切っ先がこちらを向いたら、気をつける。

奴の翼は、剣にも槍にもなる。一瞬で倍の長さに伸ばして突いてくることもあれば、そのまま薙ぎ払ってくることもある。

一番厄介なのは、急旋回からの突き下ろしだ。速度が尋常じゃない。懐に潜り込んだからといって、油断しちゃダメだ。俺のようにはなるなよ。

再び、師匠の声が反響する。

ガウシカの味わいが、溢れ返ってくる。

それらに——いや、肉の旨みに後押しされて、俺は何とか起き上がった。防具の隙間から、白い雪が零れ落ちた。

刺突。

回避。

薙ぎ払い。

しゃがんですり抜ける。

ガウシカの肉は、何と言っても筋張っていた。柔らかな味わいは、もちろん最初から期待していなかったが——例えるなら、あれはモスジャーキーに近い味だったな。

乾燥させて燻しているのだから、似通うのはある程度仕方ないだろう。塩漬け状態にして缶に詰めてあるのだから、そこそこの潤いこそあったけれど。けれど、筋張っているのは変わらない。ボソボソの肉という点では、食感は微妙としか言いようがなかった。

けれど、味は別だ。香りもまた別だ。

「……そうだよ。香りがいいんだ」

「にや？ 旦那さん？」

「何て言うか、すつきりしてきたぞ。体の怠さなんてどこかに消えちまった」

「……うにゃ!? 旦那さん、血! 血!」

どろりと、頭から血が流れてきた。衝撃で、防具のどこかとぶつけたのだろうか。

慌てて回復笛を取り出そうとしてくれたイルルだったが、俺はそれを手で制止した。

何だか、体の調子が良い。全身の感覚が研ぎ澄まされているような気がする。

そう、まるで活性化でもされているような――。

「――はあっ!!」

一閃。俺を貫かんとする銀の槍。

それを俺は、研ぎ払った。

盾の剣を抜いて、両の剣で研ぎ払った。

剣には、あの赤い血潮がべつとりとついている。龍属性に塗られたくられて、このテオ

||エンブレムは粉塵をばら撒けなくなってしまったようだ。後始末が面倒臭そうだと

辟易するものの、今は考えないようにする。

それよりも、研ぎ払った勢いで刺突を受け流す。そのまま斬り込んで、奴の首筋を裂

いた。甲殻の隙間を撫でるように裂いた。

「――ツツ」

一瞬小さな悲鳴を上げて、銀の古龍は後ろへと飛ぶ。そして、今度は掌を俺に向けて

きた。

「旦那さん、またあの光が来るにや！」

「分かつてら——つて、おつとおつ!？」

飛んできたのは、ジャブ。前脚を使って、俺を殴りにかかつてきた。

翼に比べれば小さな手だが、その爪は凶悪だ。危うい動きで、何とか躲す。身を振るようにして、その切っ先から逃れた。

——逃れたものの。

「上にやー！」

「……っ!」

今度は、奴の翼が空を覆った。

光を放つ？

それだけではなかった。

まるでアイアンクローでも仕掛けてくるかのように、奴はその掌を振り下ろしてきた。

「がっ……!!」

慌てて両の剣を交差する。交差してはその衝撃を受け止め、腕を振り払うようにして受け流す。背後に跳ぶのも忘れない。



しかし、真上からの攻撃だ。とてもいなし切れるものではなかった。

「旦那さん!!」

再び赤い光が、俺の体をじゅつと焼く。翼の鋭い爪に引つ掛けられ、防具が悲鳴を上げた。その下で、血が滲み始めているのが分かる。まずい、下手打った。

「ぐっ……」

再び雪の中に転がって。白い雪が、じんわりと赤い色を灯し始める。

やっぱり、強い。

流石は古龍だ。本当に強い。

「旦那さん、待ってにゃ! 今回復薬グレードを……!」

「うぐ……肉……」

駆け寄ってきたイルルは、慌てて雪の中を探り始める。いきなり何してんだと、軋む頭で思うものの――見れば、荷物が雪の中で散乱していた。どうやら、今の衝撃でポーチが破れたらしく、中身が飛び散ってしまったらしい。

何とか回復薬グレードを探し当て、ピンと尾を立てるイルル。しかし、そんな彼女の背後では、バルファルクはぐるると声を上げていた。

イルルを狙っている?

いや、違う。

俺を弾き飛ばした衝撃でばらまかれたポーチ。そこから転がったあれを、しきりに嗅いでいた。

「あつ…………てめえ…………!!」

師匠から貰って、食べ終えてしまったガウシカの缶詰。

つつい、もう一缶買ってしまった新しい缶詰。

狩りの後でじっくり食べようと思っていた、最後のお楽しみ——。

がりつと、嫌な音が響く。

奴の鋭い嘴が、缶に穴を空けた。

中に詰まった肉を、するんと口の中に滑らせた。

小さな咀嚼音が、銀世界に響き渡る。

「……………ツツ!!」

—— 奴の翼は、前を向くか後ろを向くかで行動を変える。形態変化みたいなものだ。

つまりな、前を向いている時と後ろを向いている時の行動は、同時には出来ないんだ。翼を武器のように扱う時はエネルギー放射が出来ないし、掌を向けている時はそれを剣にすることも出来ない。

それを覚えておくと、戦いはぐつと楽になる。翼の向きを、よく見ておくんだな。

師匠の言葉と共に——いや、それをも押し退けて俺の中に入り込んだガウシカの肉。特有の香りが、噛んだ瞬間に広がって。臭みというか、強い癖のような特異な香りだったけれど。しかし決して臭くない。肉らしい、直球の香りとも言える。煙を吸い込んだ肉の香りというのは、他の何物でも例えにくい香りだった。

確かに食感は微妙だ。歯応えを取るなら普通の草食種のものの方が優れている。

だが、ガウシカはガウシカだ。他の何物でもない、ガウシカだけの味。他の何物にも代えがたい味なんだ。

塩つ気が効いていて。随分と硬派な味付けなのに、不思議と味わいは広がってくる。噛めば噛むほど、燻製に閉じ込めた旨みが溢れ出てくる。ポソポソとした肉が唾液を吸って、肉の繊維を少しずつほどいって。その隙間に溶け込んでいた脂の味わいが、飛び出すのだ。肉の甘みが、上品な煙の香りが、染み出てくるのだ。

ああ、燻製。ああ、ガウシカ。

これはこれで、美味しいものだ。ビールによく合うかもしれない。オーロラを見ながら、山頂でじっくり食べるのも、悪くないかもしれない——。

そんな計画を、奴はぺろりと平らげた。

俺の楽しみだった缶詰を、ぱくつと食べてしまった。

ぼすつと、雪の中に缶が落ちる。中に湛えていたはずの肉を空虚で満たし、ただ虚し

そうに雪を迎え入れる缶が、静かに泣いていた。

俺の肉が、目の前から消えた。

「……………も……………」

「にゃ？」

「一度ならず、二度までも……………ツツ!!」

「にゃ……………旦那さん!?!」

立ち上がって、両の剣をより深く交差させて。

そのまま、解放。虚無感を打ち払うように、剣を強く振り抜いた。

腹が減った。

楽しみにしていた肉を失って、俺はただただ腹が減った。

まるで餓えた狼に憑りつかれたような気分だ。不思議と、視界が赤く染まる。

「絶対許さねえ……………丁寧に圧力鍋で骨の髄まで煮込んでやるツツ！」

猛然と飛び出して、そのまま段差を踏み抜いた。空中で剣を逆手に持ち替えて、右の刃を打ち当てる。うなじを裂いたそれを軸にして、俺はとにかく回転する。

回転すれば、それだけ威力がのしかかる。それを勢いにして、転がるように奴の背中を走った。右手が肉を感じれば、即座に左手を振り抜いて。左手に重い感触が走れば、右手を思いきり振り上げて。

ただそれをひたすら繰り返せば、気付けば尾の先まで俺は走っていた。銀の古龍は、悲鳴を上げていた。

「今のは……お前に食われたガウシカの分だ」

血走った眼で、奴は俺を振り返るように睨む。そのまま身を翻して、尾を天高く掲げた。

俺に背を向けていたはずが、一瞬の跳躍でその身を翻す。俺に向かい合うようにして雪を掻き鳴らし、翼を唸らせた。一拍遅れて、銀の切っ先が振り下ろされる。まるでハシマーのように、俺を穿った。

「はっ！」

ギリギリで、それを躲す。頬がずばっと裂けたが、今は無視。

翼が雪に埋まって隙を見せた奴の頭部に、渾身の乱舞を叩き込む。逆手の刃の乱回転に、奴は堪らず悲鳴を上げた。

「今のもガウシカの分！」

振り上げた翼で大回転。まるでデイノバルドのように、奴は周囲を薙ぎ払った。

それを、俺は跳躍して躲す。

「これもガウシカの分！」

重力に任せて落下する。その軌道に剣を添えて、ただひたすらに身を捻る。

鋭い切り傷がさらに増えて、古龍は忌々しそうに悲鳴を上げた。

「だ、旦那さん……」

落下からの、空中回転乱舞。その勢いで奴の体を通り抜け、スライディングしながら着地する。

その横で、イルルが呆れたように口を開けていた。

「ガウシカに分ばっかにか……」

「食い物の恨みは恐ろしい。だろ？」

「……………」

同意を求めて振り向いたものの、彼女は何も言わず苦笑いした。

苦笑いしつつも、回復笛を吹いてくれる。音色に乗って生命の粉塵が舞い上がり、視界がうつすら緑色に染まる。

「……どうやら、師匠はコイツをかなり削ったみたいだ」

「にゃ？」

「どうも消耗しすぎたらしいな。お前も俺も」

ふらふらと、古龍は脚を引きずった。翼から放つエネルギーも枯渇し始め、その足取りは不安定。

尾を斬るほどののだ。師匠は、コイツ相手にも随分と健闘したのだろう。

だからこそ、コイツを仕留めるのは弟子である俺の役目だと。そう思っていたのだが

不意に、奴が吠えた。

「……まさか」

「にや?」

奴の翼に、再び赤い光が灯る。

龍の光を撃つのは、少し違った。まるで炉のように、内側で炎を押し留めるような揺らぎ。

まさか、まさかまさかまさか。

「……てめえ、このまま……あぐつ!」

奴に肉迫しようとして脚の前に出す———と思いきや、それは俺の体を支え切れなかった。膝が笑って、腰が大地に吸い寄せられる。そのまま前のめりに、俺の体は倒れ込んだ。視界が真っ白だ。

「旦那さん、大丈夫にや!?! 血流しすぎにや!」

「……つた」

「にや?」

「腹、減った……」

「……………」

ポーチをばら撒かれ、お楽しみ肉の目を目の前で奪われて。

餓狼の如く奮戦したが、俺もどうやら限界らしい。腹が減って体に力が入らない。

「くそ……………目の前で、みすみすと……………畜生……………」

何とか頭は上げるものの、もう体は持ち上げれなかった。

そんな俺の視界の先には、力強く炎を噴射させる古龍の姿。掌を背後に向けて、そこから赤い火花を描き出す。

もう一度、甲高く吠えてから。

奴はこの空に向けて、飛び立った。ものの数秒で炎を爆発させて、空の彼方へと消えていった。

「にゃ……………凄……………」

ちりちりと、赤い光の欠片が舞い散っている。肌を焼くように、ぴりぴりとした感触が伝わった。

見上げれば、もうそこには奴の姿はない。空には赤い軌跡が絵の具のように残り、それが白く空の向こうへと続いていた。

撃退は、どうやら出来たようだ。

撃退は出来た。出来たには出来た。けれど、これじゃあ——。



「……とけよ」

「にや？ 旦那さん？」

「——覚えとけよッ、鳥野郎!! お前絶対泣かしたるからな!!  
お前、淆瘴啖を旨く  
しないと承知しねえから! お前食つたるからなあーツツツ!!」

渾身の魂の叫びが、雪山に反響する。

一度ならず二度までも、飯を奪われ逃げられてしまった。

三度目は、なしだ。

く 本日のレシピく

『燻製ー ポツケ印のガウシカ肉』

☆ポツケ村土産の定番。塩漬けガウシカ肉を燻製させた缶詰。その味わいから愛好家は多いものの、観光価格が足元を見過ぎているとも言われている。一缶130ゼニー。

## 我が名はヴォルガノス

ドドドド……!!

激しい音を立てて、噴き上がる溶岩。

この地底火山の奥深くで、粘度をもった激しい炎が噴き上がっていた。

その奥には、溶岩を優雅に泳ぐ黒い影。

溶岩を泳ぐモンスターといえは？

白ければ、多分グラビモスだろう。黒かったら、その亜種かもしれない。

けれど、今日の前にいるそいつは違った。本来なら、ここには生息していないはずの  
モンスター——。

「ちよ……っ、飛び出してくるよ!!」

「うにゃっ……っっ!!」

「うおっ……!!」

それは、溶岩の海から飛び出した。

そう、まるで水を跳ねる魚のように。海から飛び出すガノトトスのように。

黒い体に、二本の脚。飛竜骨格のように見えて、翼はなくヒレがある。顔は古代魚さながらの魚のような風貌をしており、溶岩を溢す口からは小さな歯がずらりと並んでいた。

——溶岩竜、ヴォルガノス。今、目の前にいるモンスターの名だ。

それが、跳ねる。跳ねて、這いずるように突進を繰り返して来る。

「うおおおおお!!」

「わあああああ!!」

俺はイルルを抱えて猛ダツシユ。

一方の彼女——ルーシヤもまた、猟虫を抱えながら全力疾走していた。

「何で! 何でここにこんなモンスターがいるのよ!」

「依頼書見たときは書き間違いかと思ってたけど……マジじゃん!? マジでヴォルガノスじゃん!」

「うにやつ、ドリフトしてまた突っ込んでくるにや!!」

「くつそお……誰かガンランス! ガンランス持つてきて!」

「持つてきても使えないでしょ! アンタもあたしも!」

俺たちを器用に捕捉して、猛スピードで岩を滑る溶岩竜。その巨体をギリギリまで引き付けて、俺たちは左右それぞれに身を投げた。

何とか直撃を回避しつつも、熱い地面に肌がじゅつと焼ける。相変わらず、ここは過酷な環境だ。

「……にや。突然、地底火山に迷い込んだヴォルガノスが発見されたから、生態系が狂う前に狩猟して欲しい……にやんて。何か凄い依頼がきたにやあ」

「あたし、ヴォルガノス見るのは初めて。素材しか見たことないかも」

「実は俺も初見だ。……けれど、こいつ——」

何とも魚らしいシルエット。

表面の黒い甲殻は、どこか岩を彷彿とさせる。溶岩が冷えて固まっているのだろうか？ 溶岩から飛び出したばかりの時は、もう少し赤い色だったようにも見えた。

体格からして、おそらく魚竜種だろう。そして、溶岩を自由に泳ぎ回るといいう体質。なかなか強力なモンスターなのだろうが、それ以上に、それ以上に——。

「……美味しそうだよな」

「は？」

「にやあ……」

呆れるイルルと、かつてないほど変な顔をするルーシャ。

けれど、今はそれにいちいち構っていられない。

あれは外来種扱いだ。所謂、駆除の対象だ。

だつたら、俺が食べても問題ないな！

「さあ、狩るぞー！」

「にやあー！」

イルルを下ろし、猛進。イルルも四つ足で駆け出して、ブーメランをずらりと構えた。ルーシヤは置いてきぼりな様子でぼかんとしていたが、まあ問題ないだろう。とりあえず、頭部に一撃を叩き込む。

先程塗りたくった『重撃の刃薬』。盾と擦り合わせて着火させた結果、テオⅡエンブレムには緑色の炎のようなもやがかかっていた。斬れ味が一時的に鈍くなるが、その分刀身の表面積が付着物によつて広がって、微量だが大きくなる。その分重くもなつて、俺の左腕にはずっしりとした感覚が走った。溶岩竜の頭部を殴る感触も、それはそれは重かった。

「旦那さん、嘯み付き来るにやー！」

「おうよー！」

すかさず出した右手の盾で、奴の牙を弾き返す。その分俺も後退するが、その隙はイルルが埋めた。

二丁のブーメランを投げ入れて、ヴォルガノスの胴を裂く。とはいえその甲殻は固く、ろくな傷は入らなかつた。

「イルル、タツクルだ！」

「うにやつ！」

今度はネコが煩わしくなったのか。ヴォルガノスは、ガノトトスを彷彿とさせる動きで身をよじらせた。側面の敵を打ち払う技、タツクルだ。

それにイルルは慌てて武器を構えるもの——突如割り込んできた虫に、溶岩竜は怯ませられた。

「うにやつ、イリス……！」

「あ？ あ、ルーシヤの虫か！」

ひゅんひゅんと、風を斬るように飛ぶその甲虫。ヴォルガノスの頭に向けて回転しながら突っ込んで、体を掻い潜るようにして何度も殴打を加えた。

背後から、しゃらんと鈴が鳴るような音が響く。虫笛を巧みに使う、ルーシヤの姿がそこにあつた。

「イルルちゃん、大丈夫!？」

「にゃ、助かりましたにゃ！」

「ありがとな、ルーシヤ！」

「気にしないで！ 可愛いアイルーを守るのが、あたしの信条だからさっ！」

そう言いながら、ルーシヤは駆け出した。駆け出して、その勢いを利用して跳躍。

熱風が吹くこの空間も物ともせず、ヴォルガノスに向けて肉迫した。

縦回転。根を重力に乗せた縦回転。それに奴は、仰け反るように悲鳴を上げた。

「……シガレット、本気？　こいつ、食べるの？」

「え？　うん」

「……そういえば、この人ラージャンをスープにしてたっけ。アカムトルムも、ステーキにするとか言ってたよね……」

すつと立ち上がったルーシヤは、どこか冷えた視線を投げかけてきた。ここは地底火山なのに、彼女の視線は凍土のようだ。

「ルーシヤさん、いつものことじゃ。気にしちゃダメにや」

「イルルちゃん……苦労してるのね。今からでも、あたしのところ来ていいからね」

「おい、勝手に俺の相棒を口説くなよ」

隙だらけの奴の頭に向けて肉迫。数回殴打を重ね、右手の盾で殴り付けた。

重撃の刃葉は、確かに乗せてはいるけれど——それでも、奴の頭を砕くのは簡単ではなさそうだ。

「旦那さん、援護するにや！」

「あたしは後ろを取るわ！　おいで、イリス！」

「びゅいつ！」

奴の猛攻をすり抜ける傍ら、俺はしつこくその大きな頭を殴打する。

一方のイルルは死角に回り込み、ブーメランを投擲。先程ので学んだのか、今度は近づきすぎることなくある程度の距離を保っていた。

ルーシャは背後に回り、根先の刃を叩き付ける。そのまま薙ぎ払うように飛燕斬りを放ち、ヴォルガノスの脚を薙いだ。同時に跳び出すイリスが、数回同じ箇所へ突進する。主とよく息が合った、ナイスコンビネーションだ。

ヴォルガノスは、唸る。

きつと、自分を取り囲むハンターの姿に困惑しているんだろう。

新天地を目指して溶岩に乗り、そのまま流れに流れて辿り着いたこの場所で、自分より小さい存在に襲われる。それが、奴にはよく理解出来ないのかもしれない。

自分の周りに羽虫が寄ってきたら、どうするか。

俺ならきつと、鬱陶しいから振り払うだろう。全身をもって、その嫌な存在を追い払う。

こいつもきつと、同じような心境だ。

だと、すれば。

だとすれば、次にこいつがとる手って――。

「……………なんか、嫌な感じ……………！ 退却！」



ルーシヤがそう溢し、勢いよく後ろに跳んだ。根を棒高跳びの要領で用い、背後へ高くジャンプする。そのまま、棍先から弾を放ち、その反動で溶岩竜との距離をさらに開けた。

「イルルちゃん、そこは危ないよ!!」

「にやつ……!?!」

身を屈めるように隙を晒すヴォルガノスに向けて、イルルは両手にもったブーメランで斬りかかるもの——ルーシヤのその声に、急ブレーキをかけた。

それでも奴との距離は近い。もし奴が今尾を振り回せば、弾き飛ばされかねない距離だ。

「ルーシヤ、何を——」

「シガレット、あいつの動きをよく見て! 何か狙ってる!」

「何……っ?」

はつと見る。甲殻の奥の、奴の筋肉の動きを凝視する。

脚が、膨らんでいた。まるで力を込めているかのように、大きく膨らんでいる。身を屈め、脚を膨らませ、上半身をバネのように縮ませる。

まさか、まさかこいつ——。

「にやつ……跳ねたっ!?!」

イルルが上げる驚きの声のように。ヴォルガノスは、何とその場で垂直跳びをした。そのまま、空中で体を振らせる。大柄なそれを振り抜いて、地上の俺たちに向けて落下を始めた。

「イリスッ！ イルルちゃんを！」

「ひゅい！」

「ふみやつ!？」

突然飛来した猟虫が、イルルの背中に張り付いて。

そのまま、飛翔。軽い彼女を持ち上げて、勢いよく飛び避けた。

一方の俺は、このまま転がっても生死が怪しいくらいだ。奴の体がかすぎて、避け切れない。まさか、まさかこんな行動をしてくるだなんて。

「……ちつ、痛いけど、しょうがねえ！」

ベルトに付けていた小タル爆弾を振りかざし。ぱつと目の前に投げ、それを迷いなく剣で振り抜いた。振り抜くと同時盾を構える。なるべく最小限のダメージで、俺は吹き飛んだ。

「ぐあつ……!？」

「旦那さん!!」

墜落するヴォルガノス。誰もいないところに勢いよく落ち、ピタンピタンと跳ね回

る。まるでまな板の上の鯉のようだ。

焦げ痕を残す防具から黒い粉を振り払いつつ、何とか起き上がるものの——あと少し遅れてたら危なかったな。

「旦那さん、大丈夫にや!？」

「うん、何とか……。つておい、ルーシャ！ 助けるなら俺も助けてくれよ！」

「イリスが運べるのはイルルちゃんで精一杯なの！ それより、離れて！ 今から隙を作るから！」

跳び上がったルーシャは、射撃の反動を今度は前進に利用した。そのまま棍を振り回し、仰向けになった奴の腹に斬り込みを入れる。

何度目かの斬撃が、奴の皮膚に埋まったら。彼女はそれを軸にして、再び真上へと跳び上がった。跳び上がり、今度は真下に目がけて落下する。縦回転する根を乗せて、無防備なその腹を打ち抜いた。

「ギユオツ……!！」

ヴォルガノスの小さな悲鳴。そのままつれて転がる体。

何とか起き上がるものの、ルーシャの姿を見失ってしまう。一体どこへいったのかと、キョロキョロとその頭を振り回す。

愛嬌たっぷりなその仕草だが——残念ながら、奴がルーシャを捉えることはな

かった。

何故なら彼女は、その頭の上に乗っていたのだから。

「はあっ!!」

高く掲げた根を掲げ、そのまま激しく振り回す。手首で器用に回転させ、溶岩竜の頭を激しく削った。少しずつ、その甲殻が剥がれていく。溶岩が固まったかのようなその黒い鎧に、小さな亀裂が走っていく。

「……………だッ!」

「旦那さん!?!」

その隙に、俺は走り出して。

そのまま滑り込むように奴の腹下を陣取って。

さっきのアイツを思い出せ。

全身を使って、真上に跳ねたアレを思い出せ。

あの嫌な攻撃を、コイツに返してやれ——!!

「どりゃッッ!!」

跳躍。

右手の盾を構え、跳躍。

奴の腹下を殴り付けるように、俺はそのまま跳び上がる。

盾と甲殻が擦れ、勢いよく罅が入った。ルーシャのそれは頭を刻み、俺の一撃は腹下を砕く。

「——まだまだツツ!!」

跳び上がった勢いで、奴の上をとった俺は。

空中で身を翻し、右の盾をもう一度振り抜いた。

奴の無防備な背中に向けて、再度それを叩き付けた。

「にゃっ……凄いにゃ……っ!!」

二度目のそれが、決定打になって。

全身に罅を走らせた奴の体が、とうとう砕けた。黒い鎧がバラバラに崩れ落ちて、奴のその下の鱗が露わになった。

まるで黄金魚のように、鮮やかな金色に染まっていた。



「ふいー……よいしょっと」

「ちよ……急にキャンプ戻ったと思ったら、何持ってきてるの!?!」

「え? 大剣にランスとハンマー」

「??」

「?? 何か変か?」

「何その素な感じ。え? これあたしがおかしいの?」

「旦那さん……わざわざそんな武器まで持参して、何する気なのによ?」

「そんなの、ヴォルガノスを解体するために決まってんじゃん!」

外殻を失って眩しい金色の鱗を露わにしたヴォルガノス。

二人にその亡骸を守ってもらおう傍ら、俺はキャンプへ、この三本の武器を取りに戻っていた。

一つ、長く重い刀身がシンボル——バスターソード。

一つ、シンプルで武骨なランス——アイアンランス。

一つ、木の色と香りが素晴らしい——ユクモノ木槌。

「……どう使うのよ、それ」

「こうするッ!」

うつ伏せるように転がるヴォルガノスに駆け上がり、その頭にランスを突き立てた。巨大な槍が頭蓋を貫き、奥まで沈み込む。

「うわっ……」

「ん……まだ浅いな。ハンマーとってくれ」

「え？」

「ランス埋めるから。ハンマーとって」

「は……………」

「うにや……………にや、お、重いにや……………」

啞然とするルーシヤに対し、イルルはぽつと動いてくれた。流石は相棒、俺のことをよく分かってくれている。

けれど、ハンター用のハンマーはイルルには重すぎる。折角頑張ってくれたイルルだが、その重い木材の塊は持ち上がらなかつた。

イルルが苦しむ姿を見て、ルーシヤの魂がようやく帰ってくる。はっと気付いて、イルルの代わりにその木製ハンマーを持ち上げた。

「……………埋めるって……………どうするの？」

「岩までランスが食い込めばいい。これはただの杭みたいなもんだから」

受け取ったハンマーを握り、振り被る。そのまま渾身の力で、飛び出たランスの柄を打ち付けた。一回、二回、三回と。地底火山に、甲高い音が響く。

「……………む、感触が変わった。上手く刺さったみたいだ。よし、次は大剣持って上がってくれ、ルーシヤ」

「……………え？」

「この先の工程は一人じゃ難しいからな。今日は狩りに同行してくれて感謝してる」  
「違う！ そんなことのために同行したんじゃないから！」

「イルル、もうちよつと待ってな。ヴォルガノス、美味しく捌くからな」  
「うにゃ。待つてるにゃ」

「いや待つて！ イルルちゃん、なんでそんな自然体なの!?!」

「いいから早く。熱で肉が劣化する」

「……あーもう、しょうがないなあ！」

嫌々上がってきてくれたルーシャに、次にかける言葉。彼女と獲物を交換しながら、俺はこの次の行程を口にする。

「今から俺が、この大剣をこいつに叩き込むから。そしたらルーシャは、刃の背をハンマーで殴ってほしい」

「はい？」

「肉が重すぎるから、一太刀じゃ斬れないんだ。釘打ちの要領でどんどん肉を斬る補助をしてほしい」

「……帰りたい」

狙いは、背骨のすぐ隣だ。要は三枚おろし。背の横を綺麗に刈り取って、左右の身と背骨に切り分ける。サシミウオなら包丁でぱぱつと出来るのだが、ヴォルガノスとなる



とそうはいかないだろう。如何せんでかすぎる。けれど、綺麗に身を剥ごうとするならば、やはり解体手段にもこだわりたいのだ。

ともかくにも、大剣を構える。大きな剣は剣斧で慣れているが、中にビンの制御装置を搭載しているアレとは異なり、大剣は内部まで高密度。まさに質量の塊だ。非常に重いために、構えは同じでも違和感は大きかった。

けれど、戦う訳じゃない。動かない相手に、じっくり狙いを定めればいいだけだ。慣れていなくても、そう難しいことではなかった。どすりと、鈍い感触が腕を走る。

「……よし。まあいいだろ。じゃあルーシャ！ 俺はこの剣を操作するから、とにかく殴ってくれ！」

「ううう……何でこんなことになっちゃったのかな……」

「早く！ 肉が劣化する！」

「はあーっ、やればいいんでしょ、やれば！ こんのっ!!」

肉を裂くバスターソードに、ルーシャの振り被る槌が迫る。

ランスとは違う、これまた小気味良い音がこの地下空間に響いた。

「そう、その調子！ どんどんこい！」

「やってやるわよ！ はあっ!!」

入射角に気をつけながら、俺は大剣の柄を必死に操った。少しでも気を抜けば、途端

に刃がずれてしまいそうだ。思ったより難しい。これがこの捌き方の感想だった。

とはいえ、不可能ではない。やけくそになったルーシャの連打も、大剣を確実に肉の中に埋めてくれる。順調だ。ヴォルガノスの解体は、非常に順調だ！



「……良い感じだな。おつかれさん」

「はあ、はあ……何か、狩りするより疲れたわ……」

背骨の両サイドの肉に斬り込みを入れ、それをそのまま尾びれの根元まで突き通す。そんな作業の果てに、ルーシャはようやく解放されたとぼやいた。

ヴォルガノスは、首元から三枚に枝分かれた姿へと変貌していた。サイドに広がった肉は、まるで奴に翼が生えたかのようにさえ見える。

「さーて、最後に仕上げっと」

腰に携えた千年包丁を取り出して、その太い背骨を削る。

仕上げだ。肉、骨、肉と三方向に分かれたこの獲物の、真ん中の骨を抜き取るのだ。頭蓋と背骨の接続部分に刃をあてがって、何度も何度も押し引きする。ガリガリと、骨の欠片が陽炎に溶けた。

「そうかにや、分かったにや。わざわざ縦に捌いたのは、上手く肉と骨を分けるためにや？」

「正解だ。巨体過ぎて、横にしたまま三枚おろしは骨が折れるからな」

「……そのために、そんなランスや大剣まで持ってきたっていうの？」

「そうだけど？」

「……………」

「流石旦那さんだにや。用意がいいにや〜」

「イルルちゃん、目を覚まして！ あなただいぶ毒されてるからっ！」

「失礼な奴……っつと。ほっ」

パキッと、軽快な音が響く。

削られた骨は見事に外れ、大きな音を立てながら地に落ちた。今度はそれを、尾びれに回って引きずり出す。そうすることで、ヴォルガノスは完全に肉の塊へと変貌するのだ。

「全く、相変わらずキーキーうるさいなあ。ちゃんと肉は分けてやるからそうカリカリすんなって」

「違う！ 別に欲しくないし！」

「うにや……」

威嚇するネコのようにうがーつと吠えるルーシャだが、おどおどするイルルをはつと見てはバツが悪そうに頭を掻く。

「……はあ。こんなふざけた奴がイルルちゃんを助け出したとは思えないわ……」

「あん？」

「イルルちゃんも、ほんとにこんな奴でいいの？ 今でもウチは大歓迎よ」

「にやあく。有り難いお話だけど……ボクは旦那さんの傍にいたいにな」

「うっ……」

イルルの全幅の信頼を溶かしこんだ瞳に、ルーシャは目を背けた。

分かり切っていた答えだろうに。失礼な上にしつこい。

「……そういえばお前、あの後だいが事情聴取されてたよな？ あの事件の後始末、結構

聞いてるか？」

「え？ なんで？」

「いや、こつちがあまり知らされてないからさ」

「ふーん？ トレッドさんからとか、聞いてないの？」

「あいつ何か知らんけど音信不通なんだ。手紙返してくれないし」

「ええ……何か、キナ臭いわね」

「大方予想ついてるけど……今回は当たりだったんだろうなあ」

「え？ 当たり？」

「いや、こつちの話」

「うにゃー、本当に、ボクらあまり知らされてないのにや。あの人たち、どうなったのにゃ？」

話はずれるのを察知したのか、イルルがそう口を挟んだ。

「えーつとね、みんな逮捕されたよ。彼らの処遇は、トレッドさんに一任するって」

「うわ。ガチじゃん」

「??? ガチ？」

「にゃ、それで……？」

「ああ、えーつと、でもね？ あの……三味線？ っていうのは、結構権力者だったり文人だったりする人が愛用しているらしいの」

「……そういえば、トレッドも言ってたな。王家の人間とかも実はコレクションしてたんだろ？」

「うん……。だから、あの事件は表沙汰にはしにくいんだって」

「うにゃ……俗に言う、裏のビジネスって奴だにゃ……」

イルルが、哀しそうに目を伏せる。

俺は骨を抜き終えて、手を拭いつつ彼女の傍まで近づいた。そうして、そつと頭を撫

でる。天眼のウィッグの感触が、ふわりふわりと指に絡んできた。

「にや……旦那さん」

きゅつと、肉球が俺の腰巻を掴まむ。

「……シガレットは、さ」

「あん？」

一瞬の沈黙。それを、ルーシヤが破った。

「シガレットは、アスマと知り合いなの？」

「は？」

「だって、何か喋ってたじゃない。向こうは、アンタのことを知ってるみたいだったけど」

「……そうだったけ？」

「そうだよ！ 何か、会ったことがあるって話だったじゃん！」

「……うーん……残念だけど、記憶にないな」

アスマ。

イルルを狙った、解体者。

太刀を背負った、ユクモらしい雰囲気あの男。

確かに、何故か親し気に話し掛けてきた。以前会ったことがあるような口振りだっ

た。

「……もしかして、タンジア時代に会ったことがあつたかな？ それくらいしか、検討つかないね」

考えるだけ無駄だろう。俺は興味のない人間のことは全然覚えられない。

そんなことに頭を使うより、今は目の前の飯だ。

ぷるりとした白い肉が露わになったヴォルガノス。火山に住まうだけあつて、熱に強い耐性があるようだが——やはり、捌くには早いことに越したことはない。イルルの頭から離れた手で、剥ぎ取りナイフを掴む。

「覚えてないの？ ほんとに？ 全く？」

「タンジアの頃つて、基本一人で狩りに行ってたしな。時々、誰かと組まなきゃいけないつた時もあったけど、ほとんど別行動してたから。酷い奴は、キャンプに籠もつてる奴もいたよ」

「ええ……ほんと？ それ」

「いつの間にか、俺と組めば楽に報酬を受け取れる、みたいな噂も立つてたらしい。俺、いちいち人の顔も名前も覚えないうし、俺はモンスタースキルさえ殺せれば何でも良かったから。都合が良かったんだろうな」

「旦那さん……」

だんつと、響く肉の音。ヴォルガノスの、脂がたっぷり乗った腹の肉が手に零れ落ちる。

「……アスマも、そんな関わりの中で会ってたのかも。それ以外に思い当たるところはないよ」

「ふーん……」

「ま、なんだ。とにかく俺が言いたいの——」

「……言いたいの？」

「初めて食べるなら、とりあえず刺身でしよってことだ」

「……は？」

「はい、ルーシャ」

「は？」

「それで、ほら。これイルルの分だ」

「わーい、有り難うにや旦那さん！」

切り分けた肉の塊から、さらに薄く肉を削ぎ落とす。先程まで脈打っていたその肉は、まるで透き通るように白い。手触りも滑らかで、きめ細かな色合いが特徴的だ。例えるなら、上質な白身の魚。あの淡泊ながらも深い肉によく似ている。

それを刺身同様、一口サイズに切り落として。それを二人にそれぞれ、小皿ごと手渡



して。

快く受け取ってくれるイルルの傍ら、ルーシャは固まった。何故か思考停止してしまつたようだ。

「……??」

「ルーシャ？」

「……??」

「……何だコイツ。まあいいや、食べようぜ」

「にゃー、いただきますにゃー！」

小皿に醤油を注いで、ピンに詰めたわさびをひとつまみ。白い肉を醤油に浸し、その白をひたすらに汚す。反面、醤油にはどつと脂が浮いた。キラキラと、溶岩の明かりを浴びて醤油が輝いた。

一口。そつと口に入れて、上下の歯を押し当てて。

瞬間、感じる。その柔らかさが、弾力性が。ちよつとやさつとじや噛み切れない、肉の繊維の細かさが。滑らかなながらも程よい固さを残した、この肉の上質さが。

「うまつー！ こりや旨いー！」

こりこりと、噛む度に心地の良い音が響く。心地の良い感触が、顎を走る。

淡泊だ。白身の魚のように淡泊だ。

けれど、ジューシーだ。脂の乗った旨みは、とてもジューシーで味わい深い。何とも竜らしい旨みだ。

淡泊さと、ジューシーな味わいが同居している。こりこりと、噛む度に淡泊な風味が鼻を抜け、醤油の味を拡散させる。けれど、噛む度に脂が染み出して、それが醤油と絡み合うのだ。あの甘辛い味に、独特の深みを与えてくれる。とろりと、舌に纏わりつくような食感を。脂特有の、思わず舌なめずりしたくなる旨みを。

「にや……不思議にや。魚のような、お肉のような……」

「魚竜種は魚に近い味が多いけど、こいつは良い感じに中間って感じだな。魚比率のガノトトス、中間にヴォルガノス。……じゃ、ガレオスとかはどうなんだろう」

「今度試してみるにや?」

「それもいいな。今度砂漠に行ったらやってみるか」

ヴォルガノスは初めて見るモンスターだったが、これもまた旨い。最高だ。

次、次と肉を下ろす。待ち切れず、数枚薄く削ぎ落とす。

それを各々の小皿へと置いていった。俺の分、イルルの分、皿を手にしたまま固まってるルーシヤの分。

「……あ」

「あ?」

「……あ、の……さ」

「あん？」

ぼちやつと、醤油に浸された刺身。それが刺激になったのか、ルーシヤはゆつくり口を開いた。

「……初めてなんでしょ？ あのモンスター」

「？ うん」

「それをいきなり……生で？」

「うん」

「危くない？」

「……毒はなかったし。いけるだろ」

「いや、でも」

「それに生の方が、よりその味が分かる！ 見ろこれ！ 刺身最高だろ！ すげえ旨いぞー！」

「……ごめん、あたしは遠慮しとく」

「そうか……じゃ、お前の分はもらうな！」

偶然にも食べられる分が増えた。この幸運を噛み締め——いや、幸運よりも肉を噛み締める。

甲殻と肉を繋ぐ内皮は、特に強い歯応えがある。脂もよく乗っている。まるで鳥皮のような、顎を喰らわせる食感が特徴的だ。肉も白身の魚のようで、よく締まった鳥肉のようでもある。甘い脂には、わさびよりも生姜の方が、案外合っているかもしれない。

「はっ！ ……イルル、俺は重要なことに気づいてしまった」  
「にや？」

「わざわざ薄く切ってちまちま食べるより、この大きな肉にかぶりついた方が満足感があるのでは……？」

「……にや？」

刺身という形式上、特に考えることなく薄く切ってしまった。

けれど、今はどうだろう。少ない肉を多くで分けるのではなく、あまるほどある肉を好きに食べることが出来る。ならば、わざわざ肉を薄く切らずに、好きに噛み千切るのも一興なのではないだろうか。

「ということ、これはこのままいただく」

「にやっ、そんな大きいのを!? ワイルド過ぎるにや……」

「ねえイルルちゃん、こいついつもこうなの？」

「いただきます！」

両手にやっつと収まり切るほどの肉の塊。それをたっぷり醤油を滴らせ、一思いに噛

む。

嘸む。

嘸む——。

「……………」

「にゃ？ 旦那さん？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「ねえイルルちゃん、こいつほんといつもこうなの？」

刺身は切る。

何故なら、食べやすいから。

先人の知恵は、意地汚さを超えていたことを痛感した。

「うぐつ、うぎぎぎ……………」

「ばかだにゃ……………」

「馬鹿ね……………」

「ぐつ、ぐおおお……………」

固い。

噛み切れない。

刺身のように、すつとは食べられない。

口の中にも、口の外にも肉が続く。目の前を、鼻先を撫でるように、肉が舞う。生の肉が、凝縮される。

生肉の香りが、まるで未加工の魚のような香りが濃縮して、俺の鼻を貫いた。一直線に、貫いていた。

「……………心なしか、なまぐさひ……………」

「……………旦那さん……………」

「ほんと、救いようのない馬鹿だわ……………」

く本日のレシピく

『ヴォルガノスの刺身』

・ヴォルガノス ……1頭

・醤油 ……適量

・わさび ……お好みで

☆その他ネギや生姜、ポン酢にんにくなどとも美味しくいただけます！

●解体道具

- ・バスターソード
- ・アイアンランス
- ・ユクモノ木槌
- ・千年包丁

## 流行りとはかくも厳しきもの

「にやあーっ……」

往来を通る人々。

にぎやかな町並み。

高らかに笑う、若い女の人たち。

「あれ、何にや……」

そんな女の人たちが手に握るのは、何やら太いストローが突き刺さったビンだったにや。

その中には、やや薄茶色に濁った不思議な飲料に、黒いつぶつぶがたくさん。あんな飲み物、見たことないにや。

「きやはは！　ね、これ美味しいでしょ？」

「うん、美味しい！　何これ、つぶつぶー！」

「流行りのやつよね、これ！　月刊『狩りに生きる』でも紹介されてたわ」

「最近じゃ、女性のハンターもよく飲んでるそうよ。そろそろ食事メニューにも登録さ



れるんじやないかって噂！」

きやいきやいと、女の人たちは楽しそう。

ひとしきり笑つて、またストローに口をつける。すると、あの黒いつぶつぶがすぽぽ！と音を立てて吸い込まれていった。

何だろう、あれ。凄く、凄く不思議な食べ物にや。

「あー、おいしく!!」

我が家のポストを確認しに、庭へ乗り出したボク。それだというのに、ポスト越しに見えたあの人たちの会話に、必死に聞き耳を立ててしまった。でも、結局そのビン名の正体前が耳に届くことはなかった——。

「————つてことがあつたにや」

「ふーん……何だそれ」

特に手紙は届いてない。トレッドから何か来てないかと旦那さんに頼まれたものの、収穫はなしだったにや。

けど、それよりも！

さつき見た食べた食べ物のことが気になってしょうがないにや。そんな胸の声の命じるま

まに、旦那さんに投げかけてみた。

「黒いつぶつぶ……？ そんなもん市販であつたかな」

旦那さんは、ギルドからもらつてきた大量の依頼書とにらめっこしていたにや。

たぶん、この前逃がしてしまつた古龍だと思ふ。あれの情報がないか、ここ最近いつも探してるのにや。

一応、何か目ぼしい情報があつた？ 　つて聞いてみると、彼は「龍歴院が……」と口にするものの、どうもまだ曖昧な感じだつた。あんな神出鬼没な古龍なんだから、探すのも大変にや、きつと。

「だー！　ダメだ！　全然分からん！」

「にや……」

「龍歴院の管轄内でそれらしき飛影あり？　只今返信文書待ち……だつてさ！　くそう！」

「にやあー。あんな子、滅多にいないんだから見つけるのも大変にや、きつと」

「傷痕を照らし合わせれば同一個体かは分かる。けど、尻尾も掴めなければ全くの無意味だよ」

「あの子、尻尾斬つちやつたからもうないにや」

「どうせ生えてくるだろ。掴み直してやる」

この前のヴォルガノスを狩る前から、この人はずっとこんな感じにや。

お腹の欲求と金欠に悩まされたら狩りに行って、それ以外はこうやってギルドから情報 wait している。それだけ、旦那さんはあのモンスターを食べたいのかな。それとも、やっぱり瘡瘻啖を食べるために――。

「……そういえば旦那さん、あの古龍の素材、どうしたのにや?」

「ん?」

「お師匠さんが渡してくれたやつにや。尻尾まであったけど」

「あー……そういや返してないな。あーあ、これ使って調理器具でも作ればいいのに。そしたらすぐにでも氷海に行つてバーベキューだ」

「にや……」

相変わらずにや。

相変わらずぶれないにや、この人。

「……で、イルルの話は何だっけ。なんか、変わった食べ物見つけたんだろ?」

「にや、そうにや。不思議な食べ物……ていうか飲み物? にや。薄茶色の液体に、黒いつぶつぶが入ってたのにや」

「……何か、想像出来ないんだけど。何? 泥水?」

「ち、違うと思うにや。……色合ひ的に、たぶんミルクティーなんじゃないかにやあつ

て」

「ふーん。ミルクティーか……」

薄茶色の液体。

でも粘り気はなさそうで、さらさらつとしてた。

それにあのまろやかな甘い香り。ボクの鼻が正しければ、あれは間違いなくミルクティーなのにな。

「すると問題は、黒いつぶつぶの方だな」

「にや……アレに関しては、全く見当もつかないにや」

「もう一度聞くけど、そのつぶつぶは小さな玉だったんだよな？」

「うにや。ボクの肉球よりちっちゃな、黒い玉にや。それがたくさん、たくさん入ってたのにな」

「固そうか？ それとも柔らかそうか？ 黒豆……なんてことはないよな？」

「にや、違うにや。何て言うか、ぷよぷよしてて、弾力性があるっていうか。ストローで吸うと、すぽぽ！ つていい音がしてたにや」

「……うーん……心当たりは、ないこともない……かも」

「ほ、ほんとにや？」

「地底洞窟で、それらしきものを見たことがある」

「にや!?! 地底洞窟で!?!」

「ああ、時期にもよるが、あそこにたくさん転がってるぞ」

「たくさんにや!?!」

「……今の時期はどうも違うような気がするけど、あそこ火山地帯だし、季節はあんまり影響ないかも。この前から溶岩が引いてるし、しばらくは干熔かんようらしいから……もしかしたら」

「にや……?」

「その例の飲み物、最近の流行りなんだよな?」

「にや、お姉さんたちはそう言ってたにや」

「じゃ、可能性はあるな。つつても、大きさが少し引つ掛かるけど」

「?? 大きさにや?」

「……まあ、このまま根詰めててもしょうがない。ちようどいいや。狩りに行くか!」

「にや!」

そう言つて、旦那さんは書類を部屋の隅においやつた。

狩りにや。それも、ボクが食べたいって思ったものにや。流石旦那さんなのにや。

寝室にあるアイテムボックスから、狩り用の天眼ネコシリーズを引つ張り出す。旦那さんも、自前の防具を早速装着していたにや。ミツハ真の頬当てが、相変わらずカツコ

イイのにや!



「……旦那さん?」

「しっ。静かに……」

岩陰に隠れた旦那さん。

地底火山の採取ツアー。

しばらく探索したところで、彼はボクをゆっくり岩陰に引き寄せた。

「……お目当ての奴だ」

「にやっ……」

先日の光景とは打って変わり、随分と涼しくなったこの地底世界。近隣の火山が活発化すると、その溶岩がここまで流れってくるのにや。その影響で、この前はヴォルガノスまでやってきてしまった。

それが今では、溶岩のよの字もないにや。静かで、涼し気で、少しひんやりとすら感じるにや。

そんな、武骨な地底の中で、真っ赤な何かが闊歩していた。

鮮血のような赤に染まった体。

下顎から伸びた、大きな牙。

太い手足に、丸みを帯びた白い尻尾。

「……テツカブラ、にや?」

「ああ、そうだ」

テツカブラ。別名、鬼蛙。

いつか、ボクがまだ旦那さんと一緒に活動し始めたばかりの頃に、一緒に狩りに行ったことのある両生種のモンスター。

旦那さんごと、爆弾でどかんとしてしまった嫌な記憶が蘇る——。

「……で、でも旦那さん。テツカブラ、さつきも見なかったにや?」

「さつきもいたな」

「あれはスルーしてたにや。何でこの子は?」

「さつきの奴、喉が黒かったんだ」

「にや?」

「オスの蛙は、繁殖期に喉が黒くなる。地底火山は、しばらく干涸が続く。気候も安定する。案の定、あいつらは繁殖期に入ってる」

「にや? 繁殖期?」

「あいつを見てみな。あれの喉は黒いか？」

「……黒く、ないにや。つてことは」

「ああ、あれは雌だろう。間違いない」

「この岩陰の奥を闊歩している子。確かに、喉は黒くない。尻尾同様、白い色に染まっているにや。」

それよりも、あの大きさが気になるところだけど——。

「予想通りだ。このチャンスを逃すまいと、奴らは今繁殖期に入っている。地底火山の風物詩だな。……ということは、あの個体の痕跡を探せばもしかすると」

「……もしかすると?」

「如何せん小さすぎるかもしれないが……まあ、試してみる価値はあるだろう。たぶん」  
小さすぎる。

旦那さんの言った通りにや。

目の前の個体は、他のテツカブラよりも一回り、二回りは小さい。旦那さんとそう、体格が変わらないのにや。

「さ、行くぞ! あいつの痕跡が欲しい!」

「うにゃ!」

駆け出すにや。そのまま、のっそのっそと歩くあの子まで急接近にや。



本当に小さい。極小個体って奴かにや？　いつか、こんな風に小さな鳥竜種を狩って鳥団子スープにしたような気がするにや。こういう個体、時々いるんだにや。

でも、こんな小さいならきつと楽勝にや！　テツカブラはその強靱なアゴで地中の岩を捲り上げるけど、こんな小さいならきつと。きつと——。

はつと、ボクたちに気付いたテツカブラ。

その小さな顎を、大地に打ち付けて。

次の瞬間、目を見張るほどの巨大な壁が聳え立つ。通常個体と大差ないほど、大きな岩。

「うにや!?!」

「うおっ!?!」

それに気を取られた瞬間、岩の影からテツカブラが飛び出してきた。

「イルル!」

「みゅっ!」

いち早く気付いた旦那さんが、ボクを突き飛ばして庇ってくれたにや。そのまま、彼は右手の盾——というか鍋で、あの太い牙を抑えつけた。体格にそれほど差がないためか、通常個体のように吹き飛ばされずに踏み止まったけれど。

ぐぐぐ、と旦那さんの体が持ち上がる。

「……え、ちよつ……」

続いて、暴投。盾を噛んだまま首を振り回し、旦那さんを真上へと放り投げた。

「おわあーっ!!」

「だ、旦那さーっ!!」

宙を舞う旦那さん。体格に見合わず怪力のテツカブラ。その目の前に残されたボク

。「うわああ!! 旦那さんに何するにやー!!」

とにかくブーメランを並べた。旦那さんから気を逸らせようと、精一杯挑発しよう  
と。

すると、上から、旦那さんの声が飛んでくる。

「イルル! あ、のブーメランを使え! そいつをそこへ留めてくれ!」

「にやっ!!」

「さつき調合した奴だ! マヒダケの!」

「にや、にやあ!!」

はっと思ひ出し、ポーチから取り出したそれ。マヒダケをみじん切りにして煎じた汁に浸したものだ。お手製の麻痺ブーメラン! 計五本にや!

それを、落ちる旦那さんを迎え撃とうとしていたテツカブラに叩き付ける。前脚、後

足。ぱつと尻尾を踏んで跳躍し、反対側の後足へ。三本の手足に痛みが走り、テツカブラはようやくやくボクを見た。ちよこまかとするネコを憎々しげに睨んで、再び跳び出そうとする。

「させないにや!」

それより早く、膨らんだ右前脚にブーメランを突き刺した。空中からの投擲だったけど、見事にヒット。深々と、外皮の奥に突き刺さる。

四肢に麻痺性の毒液が回り、この子はようやく動きを止めた。諤々と顎を震わしながら、その場で痙攣をし始める。

「ナイスだ、イルル!」

「にや、旦那さん!」

ようやく落ちてきた旦那さん。毎度便利な千年包丁を、両手で逆手に構えながら、テツカブラ目掛けて刃を下ろす。

——テオⅡエンブレムじゃなくて包丁を持ってきてるあたり、仕留める気ではないのにやね。

「とうつ!」

振り下ろされたその刃は、テツカブラの目の隣にある鼓膜——の、となりにある黒い線状の部分を引き裂いた。それが刺激になったのか、そこから黄色の粘液が染み出し始

める。

「よっしや、上手く耳後腺に入ったぜ！ カワズの油が大量だ！」

「にや、あれカワズの油にや!?!」

「そそ！ さ、痕跡回収だ！」

さつと、その武骨な体躯によじ登り、旦那さんは剥ぎ取りナイフで器用に油を掬い上げた。それをそのまま、ビンへと落とす。透明なビンは、あつという間に黄色の粘液に満たされた。

ずるりずるりと、どろりどろりと、不思議な液体が落ちていくにや。

「……何か、鼻水みたいにや」

「思ったけどやめてくれ！ 食欲が削がれる！」



「……………こだな」

「にや、やつと見つけたにや……」

旦那さん曰く、カワズの油の臭いは、個体によって微妙に異なるらしいにや。

個体差があるからこそ、臭いの判別さえ出来れば特定の個体の足取りも掴めるらしい

にや。そんなの、食に対してのみ嗅覚がイルルを凌ぐ旦那さんにしか出来なさそうな芸当——なんて思ってたけれど。

彼は確かに、あのテツカブラの巣を割り出した。

「あー、臭かったあ……」

「お疲れさまにや、旦那さん……」

地底洞窟のエリア8。そこに流れる水の元を辿っていくうちに、小さな亀裂を見つけたの。あのテツカブラくらいしか入れなさそうな、小さな隙間。

その奥に、小さな水たまりがあった。それを見つけて旦那さんは顔を綻ばせたのだから、きつとここにあの黒いつぶつぶの正体があるに違いない——。

「イルルー、もふもふさせてー」

「にやー!?!」

突然ひよいっと持ち上げられて、もふもふをかまそうとする旦那さん。それを、ボクは両手の肉球で断固拒否。

「ダメにやー! 狩りの途中にや、そんなのダメにやー!」

「うぐつ、イルルさん爪! 爪立ってる!」

本当に、いきなりにやこの人。

ボクに対する態度、本当に変わらないにやこの人。

折角勇気を出して全部曝け出したのに、もしかして全く通じてないのにや、とすら感じてしまう。

「いててて……」

「全くもう……。お、おうち帰ってからにや」

「え？」

「……で、旦那さん？ 本当に、こんなところにあの流行りの飲み物があるのにや？」

「ん、ああ……正確には、例の黒いつぶつぶだ」

旦那さんはゆっくり歩き出し、水たまりへと駆け寄った。そうして、腕の防具を外し、ぼちやんと水の中に手を入れる。

「黒いつぶつぶ。すぼぼ、となる不思議な物体。思うにそれは、非常に弾力性があるんじゃないだろうか」

「にや？」

「つまりだ。水分の中に浸されてなお膨らみ、弾力性をもつて不思議な食感をもたらす食べ物。一つ一つが小さく指先ほどもない小さな小粒——」

そう言いながら、旦那さんは腕を持ち上げた。

水底に溜まった何かを掬い上げるように、優しく掌を返しながら。

「間違いない。その物体の正体は、これだ」

「にや……そ、それは……!!」

「サイズが少し気になってたんだが、流行りというだけあつて極小個体もしっかり生息していた。安心したぜ」

「もしかして、もしかしてそれは、あのテツカブラの——」

「そうだ。テツカブラの……『卵』だよ」

どろり、とそれが現れる。

半透明の膜に包まれた黒い色をした塊。小さなそれが、無数の塊となつて水を滴らせているにや。

「これをミルクティーに沈めて飲むなんて、俺も考えもしなかつたなあ。負けてられないぜ」

「……うつ、なんか……にやあ、なんかこれ……」

「しかしこれが流行るとは、世間つてよく分かんないな」

旦那さんは、剥ぎ取りナイフで膜を裂いて、卵をざつと手に取つた。それをビン落とし、旦那さんは満足そうに頷く。

「極小個体の卵は小さい。産卵は出来ても、残念ながらこの卵は孵らないだろう。それに、この場所は溶岩が戻り次第また沈む。残念だけだな」

「にや……この子たち、みんな死んじゃうにや?」

「……だから、極小個体の卵を、せめてただ見放すのではなく、少しでも何かしてあげようとして、あの例の飲み物は生まれたのかももしれないな」

「……そう考えると、何だかにやあ」

「仕方ない。この世は弱肉強食なんだから。さ、帰ろうぜ。帰って早速、ミルクティーに入れよう」



ボウルに麗水を浸し、ザルに卵塊を乗せる。

ザルごと卵塊を水に沈め、一つ一つを手を取った。

「とにかく、しっかりと洗わないとな」

「にや、塊もほぐすのにや?」

「おう。これじゃストローにも通らないだろうし」

卵は一つ一つがバラバラな訳じゃなくて、くつつき合って一つの塊みたいになつてるにや。

それを旦那さんは、ほぐす。水に浸して、塊から卵を一つ一つ分けていく。

「蛙の卵は、それが産み付けられたところの水を吸って膨らむんだ。だから、この後は一



旦那火を通す。熱湯消毒だ」

「にやあ……じゃ、鍋やつとこうかにや？」

「うん、頼んだ」

旦那さんの作業の傍ら、ボクは鍋を手に取るにや。

キツチンの鉄の輪にそれを置いて、固形燃料を柵から取り出す。怪鳥の火炎液と口ウ、その他アルコールなどを混ぜて固めたドンドルマ印の固形燃料にや。それに火打石を擦らせて、火を付けて。鍋には桶から汲んだ水をそつと流した。

「にや〜」

そんな作業を終えて、ふつふつと煮立ち始める水を見る。

テツカブラの卵を使った料理、なんて流石に初めてにや。どんな味になるんだろう。女の人たちが美味しいって叫ぶくらい、美味しいのかな。これを飲んだら、女の子らしくなれるのかな。

「よし！ まあ、こんなもんだろ」

「にや、終わったのにや？」

「おうよ。……お、鍋ももうそろそろ沸くな。じゃ、もう入れちゃうか」

そう言つて、旦那さんはザルを持ち上げた。ボウルの水からざぱつと顔を出し、淡い水の色を振り撒くそれ。たくさんの、ぶるりとした塊に満たされたそれ。

それが、泡立つ熱湯の中に沈んでいくにや。泡と熱に持ち上げられ、あわあわと踊る卵たち。

「さて、あとミルクティーだが……よいしょっと」

「……ミルクティー、結構値が張るのにやね」

ボクと同じくらいの大サイズのタルを、旦那さんが持ち上げる。

市場で買ったミルクティー。特殊な薬草を使ったお茶とミルクをブレンドしたという、不思議な品にや。ベルナ村っていうところで飼われてる動物のミルクを使ってるから、まろやかさが特徴ってお店のおばちゃんと言ってたにや。

「ワイン樽にミルクティー詰めるか普通」

「凄く斬新だにや」

「ま、持つて帰りやすくて助かるけど」

旦那さんはそう眩きながら、鍋の中身を掻き回す。つぶつぶがそれぞれほぐれていて、少しずつ白く変色してきつた。

すると旦那さんは、ザルを持ち上げる。ざばっと湯を切つて、そこに乗った卵たちを冷水にさつと浸した。

「さて、いよいよだな」

「いよいよにや……」

しつかり冷えたそれらを適量、スプーンでビンへと落とす。半透明の黒い塊がビン底を埋めたところに、ボクはミルクティーを流し込んだ。

とぶとぶと、薄茶色の液体が落ちていく。テツカブラの卵を、しつとりと覆い隠していく――。

「……………」

「……………にやあ」

「……………何か、これ、旨いのか…………？」

「卵……………沈まないにや……………浮いてくるにや……………」

卵が、沈まない。

プカプカと浮いてくる。たくさん卵が、ミルクティーから浮かび上がってくる。

あれ？

街で見たのは、全部全部沈んでたのに。

おかしいにや、何でだろう。

「……………ま、何はともあれ完成だな。食べてみようか」

「にや……………」

ピンを手にとって、太いストローを差し込んだ。ユクモ竹林の竹を薄く加工したそれは、ひんやりとした感触をボクの口にもたらしてくれる。

匂いは、至ってミルクティーなのにや。別段異臭はしない。臭いの面は問題ないけれど――。

「……問題なのは味だな」

「こや」

「……よしー」

強く意気込んだ旦那さん。次の瞬間、彼は勢いよくストローを啜った。ずぞぞ、と中のミルクティーが勢いよく吸い込まれていく。

「にゃー！　だ、旦那さん！」

「う……ミルクティー！　香りも味もミルクティー！」

底に沈んだストローは、底のミルクティーをどんどん吸い込んでいく。上に浮かんだ卵に届くのは、もう少し先――。

なんて思っていたら。

じゅぽん、なんて音を立てて。

あの卵がストローに入り、瞬く間に旦那さんの口に飛び込んだ。

一瞬目を見開く旦那さん。ゆっくりと顎を動かして。冷や汗を、ぞわつと浮かび上がらせて。

「……………」

「……だ、旦那さん……?」

「……………」

「え、えつと……お味の方は……?」

数個の卵が、今旦那さんの口の中で弾けたはずにや。道行く女の人が美味しいと言ったあのつぶつぶが、旦那さんの舌を刺激したはずにや。

歪んでいく。旦那さんの顔が、苦しそうに歪んでいくにや。

「……こんな」

「にや?」

「こんなのが今流行りなのか!? まずい!! めちゃんこまずい!!」

「そ、そんなに!」

「これのが旨いんだよ! ぶちゅつと割れたらにつがぁーい味が溢れ返ってくるぞ……すげえ生っぽい肝みみたいな味……うええ……」

「うにや……そ、そこまでかにや……」

旦那さんはこれ以上飲もうとはせず、膝が崩れたように座り込む。何だか、悪いことしちやつたような気分になや。

「女はこういう味が好きなのか……? 意味分かんねえ……」

「むむむ、もしかしたら、男女で好みが分かれる味かもにや! ボ、ボクも!!」

意を決して、ボクもストローを啜る。

「にゅっ……うみゅ……」

「ストロー、使いにくいか？ これ使いなよ……」

「あ、ありがとにや旦那さん」

けれど、口の形があんまり合わず、上手く啜れなかった。

見かねた旦那さんがくれたスプーンで、再挑戦にや。さあどうにや！

「イルル……悪いことは言わん、やめとけって……」

「うにや！ ボクだつて女の子にや！ 流行りに乗りたいお年頃なのにや」

ミルクティーと卵がたつぷり乗ったスプーンを、思いきり嘯む。ぎゅつと目を瞑りながら、口の中に入ったそれらをよく嘯んだ。

まず甘いミルクティーの香り。

柔らかで、滑らかで、とつても品の良い香りにや。それがすうつと鼻を抜けていく。まろやかな甘みを乗せながら、喉の奥へ落ちていく。口から入れたはずなのに、鼻と喉が爽やかなのにや。トンネルが開通したかのような爽快感にや。

そんなミルクティーの風味に乗って、つぶつぶとした食感が舌に乗る。歯を当ててみたところ、ぶよぶよと程よい弾力味を感じた。

あの、女の人たちが美味しいと悶えたものにや。

流行りのものが似合う女の子になりたい。

そんなちよつとした思いを、旦那さんがここまで発展させてくれたけど。

その味は、この不思議なつぶつぶの味は——。

「……………つっ!!　　~~~~~……………つ!!　　に、につがいにやあー!!!」

「……………ほら見たことか」

ぶちゅつと潰れた瞬間、ねつとりとした何かが溢れ出てきた。それが舌に絡みつくの  
にや。苦い苦い、生臭い味を塗りたくつてくるのにや。

何にやこれ!!　肝にや!?　脳みそにや!?　生臭くてべちよべちよしてて、苦くてどこ  
か酸っぱいになや!　しかもえぐ味が凄くて、嘔吐感が半端じゃない。ミルクティーの風  
味なんて、全部塗りたくられちゃうの。全部全部、この卵の苦味でいっぱいになや。苦い  
苦い!　とつても苦いのにや!

ふよふよだったそれが、噛めば噛むほど混ざり合う。なんかドロドロした食感になつ  
てきたになや。まるで、鼻水を咀嚼しているような気分になつてくるにや——。

「にやああ!　これが流行りなのになや!?　信じられないになや!」

「お前これ、街の女が美味しそうに飲んでたんだろ?　ほんとなのかよ?」

「ほ、ほんとになや!　ほんとにだけど……………これは……………うになや」

「あー待て待て!　無理に食うな!　そんなことしてもしんどいだけだろ!」

せめて無駄にしないようにと食べようとしたけど、旦那さんに止められた。えぐえぐと、気づけば涙まで出ていたにや。

「感謝無き食事に意味あらず！ 無理に食うのは、命に対する冒瀆だ。嫌いなものを無理に食べる必要はないよ」

「うにや……でも……」

「俺らの舌にはたまたま合わなかった。そこは悲しい。けれど認めよう。だったら、他の人に味わってもらえばいいじゃないか。これは今の流行りなんだろ？」

「にや……じゃあ……」

旦那さんはボクを膝に乗せて、得意気な顔で頷いた。

「ああ！ その、例の店に贈呈してやろうぜ！ 向こうは食材が増える、俺らはその分の報奨がもらえる。完璧だろ？」

「にやあ……！」

流石旦那さんにや。そんな、完璧な解決方法を思い付くなんて。この卵には悪いけど、やっぱり二度と口にしたくない味だったから。

そう考えていると、ほっとしてきたにや。安心しきつて、旦那さんにもたれかかる。流行りのものが似合う女の子にはなれなさそうだけど、こうやって旦那さんが優しくしてくれるなら、これはこれで満足なのになや——。



「旦那さん……もふっていいにや〜」

「何だよ全く。気まぐれなやつだなあ……」

旦那さんが、両手でボクのほっぺをもふもふしてくれる。やっぱりボクは、こっちの方が好きにや。

ついでに、そのお店にこの卵を贈呈したら、ギルドに迷惑行為で注意されたのは別の話、にや。

〜本日のレシピ〜

『テツカブ卵のミルクティー』

・ 鬼蛙の卵塊 ……適量

・ 雲羊鹿ミルクティー ……200ml

## 託せ目映いゴールイン

「くううう……良かったなあイルル！」

「にやあ、ほんとにや旦那さん！」

「ギルドに嚴重注意された時は意味分かんなかったけど、結果オーライだったなあ！」

「にやー！ テツカブラの卵なんか使わないって言われた時はビックリしたにや」

「全くだ。こんなもの誰も食わんって言われて、むしろ納得しちゃったしな」

「にや。本物、美味しいのにや！」

イルルが、嬉しそうにスプーンを振っている。

彼女の手にあるのは、先日試した例の飲料だ。それも、市販の正規版。その見た目と

言えば、泥水に沈んだ鬼蛙の卵——とりたいところだが！

実はこれは、どうも芋を使ったでんぶん由来の食材だそう。こんにやくのようだがま

るで違う、初めて見る食材だった。

「にやーん。もちもちの歯応えが、ミルクティーの甘さによく絡まってくるにや」

「イルル、俺にも一口くれよ」

「はいにや。あーん」

「ん、あむ……お！　こりや面白いや！」

噛めばもちもち。舐めればごろごろ。

独特の柔らかさと程好い歯応えが、俺の口の中で咲き乱れる。ミルクティーの深い甘味が喉の奥まで染み込んで、それを吸わせたつぶの一つ一つがきゅつと音を鳴らせた。噛む度にミルクティーの香りが深まる、と思いきや、つぶ本来の香りが顔を出してくるのだ。上質な香料のような味のある香り。それがするりと鼻を抜け、心地のよい風味を残していく。

ミルクティーの甘さが消えてきたら、スプーンで掬って追加すればいい。そうやって、これは何度も味を重ねるスイーツなのだろう。

「ふみやー。甘いにや〜、これ好きにや〜」

「良かったな。流行りのものが似合う女じゃん」

「にや！　目指せ流行の最先端……！」

キリツと顔を改めて、決めポーズをばっちり決める。かと思いきや、またスプーンで黒いつぶを掬い、一口。にへら、と嬉しそうに顔を緩ませるイルル。

「さて、と」

尻尾をピンと立たせながら、つぶつぶを頬張るイルルをよそに、俺は背後の木箱から

あるものを取り出した。

木屑に包まれたそれは、つるつるとして美しい。その曲線美は、この世のものとは思えない。手に伝わるひんやりとした温かさは、まさに全ての命の祖と言えるだろう。

「……美しい」

「にや？」

「なんて素晴らしいんだ」

「……旦那さん、その『卵』どうしたのにや？」

びつくりしたような顔で、イルルがそう聞いてきた。

卵。

今俺の手の中にあるそれは、卵だ。それも、何とも珍しい獣竜種の卵。旧砂漠に住み着いた斬竜ディノバルドの巣から見つけたものらしい。いつかのサボテンカレーの味が、不意に蘇る。

「いやな、上からの直々の命令なんだよ」

「にや？」

「テツカブラの卵も、確かに卵だ。けど、調理法は明らかに失敗したよな。それがしつかり大長ろ……じゃなかった、組織の上役に伝わってしまったな」

「にや……」

「だから、卵への感謝を思い出すためにこれでスイーツを作れて怒られちゃったんだよ」

「にやにそれ……」

「でもま、斬竜の卵なんて珍しい。あんな武骨な奴からスイーツが出来たら、って考える……面白くないか？」

「にや……スイーツ！」

「まあそういう訳だ。早速こいつを料理してやりたいもんだけど——」

「……じゃあなんで、ボクたち往来でゆっくりしてるのにや？」

不思議そうに、イルルが言った。

あのドリンクを持ちながら、ドンドルマの往来のベンチで、彼女はそう言った。

目の前は、大通りだ。ドンドルマ市場の大通り。奥には大老殿がそびえ、行き交う人々は忙しくカゴを揺らしている。

「ある料理をしたいんだが、それにはある物があるんだよ。それが生憎、うちにはなくてな。だから、それを持つてる奴を探してるんだけど——」

「ある物？　どんなのにや？」

「俺やイルルには縁のないやつだ」

「にやー。調理器具でうちがない……なんてものは考えにくいにや。全く別のものにや

「？」

「そうそう。着るものなんだよ」

「着るもの？ ……エプロンじゃないにやよね？」

「おう。そういうのじゃないな。俺やイルルは、まず身に付けないようなもの——」

「あれ？ シガレットに、イルルちゃんじゃない。何してるの？」

不意に、声が届いた。

俺が探していた人物の声が。

「ヒリエッタ！ 良いところに来た！ お前を探してたんだ！」

「は？」

「にや？」

挨拶の返事も忘れ、俺は彼女の前に飛び出した。そのまま、考えていることを口に出す。言いたいことを、簡潔に伝えた。

「お前のインナー……ストッキングが欲しいんだ！ 貸してくんね？」

一瞬の静寂。

続いて平手打ちとネコ爪乱舞が飛んできた。



「……まあ、どうせ料理のことだとは分かってたわよ。卵持ってたし」

「じゃあぶつことなくね？」

「腹立ったからよ」

「最低にや、旦那さん」

「うっ！ イルルの冷やややかな目は凄く痛い！」

呆れた様子のヒリエッタと、むすつとむくれたイルルさん。

イルルさんご機嫌斜めっぽい。参ったな。

「飯のことになるとつい他のことを考えなくなるのは俺の悪い癖だよな」

「……まあ、もう慣れてるけどにや」

「で？ ストッキングをどう使うのよ。返答によっちゃぶち殺すわよ」

「物騒だなあ。普通に料理で使うだけだよ」

「大体、わざわざ私の使わなくても買えばいいじゃない」

「ばっか。恥ずかしくて買いに行けるかっての」

「イルルちゃんにお願いしたら？」

「にや……アイルーもなかなか買わないにや」

「それにそんなんつけたら、イルルのふわもこの毛並みが台無しになっちゃうからな」

「なんでボクが着る前提の話になってるのにや」

ジト目のイルルの頭を撫でつつ、俺は例の箱を取り出した。

その中身を、この自宅の自慢のキッチンに置く。灰と茶色の波模様が美しい。

「で？ 一体どうするつもり？」

「ストッキングでプリンを作る」

「は？」

「聞こえなかったのか？ プリンを作るんだ」

「……聞こえたけど、まるで意味が分からないわ」

「うにゃ……一体どうやって？」

二人は不思議そうに首を傾げていた。

プリンといえば、卵を使った甘くてとろけるスイーツだ。男女問わず、種族問わず人気が高い。かく言う俺も、プリンは好きだがいかんせん作るのに手間がかかるイメージがある。

だが、これはどうだろう。

「とりあえず、まずは卵を包むために……あつたあつた」

「うげ……」

「フルフルの皮、にゃ？」



「そうそう。下手な扱いしたら卵割れちゃうからな。まずこれで包むんだ」

フルフル特有のブヨブヨとした皮を手にとって、卵を満遍なく包み込む。

この弾力性が、卵を衝撃から守ってくれる。もしも落としてしまっても、これがあれば割れることは防げるだろう。

「……もしかしてこれを、ストッキングに入れるとか言うんじゃないでしょうね」

「御名答！ 流石ヒリエッタだ！」

「はあ!? 嫌よ！」

「頼む！ そこを何とか！ これは大人二人がかりじゃないとできない料理なんだ！」

「なんでフルフルの卵入れなきゃなんないのよ！」

「違うこれはデインバルドの卵！ 包んでるのがフルフルだ！」

「ややこしいのよ！」

怒った犬のように怒鳴るヒリエッタ。

思った以上に怒らせてしまったようだ。

「……なあイルル。なんであいつそんな怒ってるんだ？」

「誰だって、自分の衣服で変なことされそうになったら怒るにや」

「そうか……」

イルルのたしなめるような声色に、流石に俺も少し反省した。

「……ついでに、これを作ったらギルドから多額の報奨金がもらえるぞ」  
「はあ？」

「実はこれ大長老直々の依頼なんだ」

「一体何を言ってるのか分かんないんだけど」

「あつやべこれ内緒だったっけ」

「旦那さん……」

例の組織の話は、一般人には内密なのが鉄則である。

組織の幹部たる俺がそんなことを違えてしまうなんて、ヤキが回ったものだ。

だが――。

「大丈夫だ。法には抜け道があるもんだ」

「……うにゃ？」

「ヒリエツタ。これに協力してくれば、お前にギルドの裏の顔を教えてやろう」

「……どういうことよ？」

「実はこれにはある組織が関わっていてな。こうなった以上、お前ももう無関係ではない。だが、これだけは断言できる。そこには、素晴らしい世界が待っている」と

「……それがあつたら、何か良いことはあるの？ 具体的に」

「え？ えーつと……ギルドの上役と繋がりがりできるから、仕事がしやすくなるぞ」

「ふうん……じゃあ、まあ聞くだけ聞いてやるわ」

交換条件を聞いて、ヒリエツタは目の色を変える。

相変わらず、こいつは何が好きなのかは分からない——唐揚げを除く——が、一応拒否の姿勢は崩してくれた。

こほん、と咳払いしながら彼女のストッキングを受け取り、中に卵を入れていく。

「やることは簡単だ。真ん中に卵を詰めて、俺とヒリエツタでストッキングの両端を引つ張るんだ」

「はい？」

「要はブンブンゴマみたいなものだな。十数秒引つ張って、とにかく高速回転させる。伸縮性と耐久力に優れたストッキングはまさに適役なんだよ」

「……………」

「竜の卵となると、とても一人じゃできないからなあ。剣士二人は必要なんだ。特に力のある奴」

「……………それで私って訳？」

「うん。それに、ルーシャよりヒリエツタの方が足がふ……………」

「ふっ」

「……………いや、何でもない。さあ、そっち持って」

流石の俺も、今回は何とか押し留まった。ここで足が太そうだからとか卵が入りやすそうだとか言ったら絶対殴られるしこの話もおじやんになつてしまふだろう。危ない危ない。

ストッキングの両端を持ちながら、俺とヒリエツタは庭に出る。そして、ソファアームに座つていたイルルに手招きした。

「さて、イルルはよく耳を澄ましといてくれ。何度も回転させると、卵から何か割れる音がすると思うから、それが聞こえたら教えてほしい」

「にや？　卵、割れちやうのにや？」

「いや、卵は割れないよ。ただ、中の卵黄膜が破れるんだ。要は、この工程によつて卵の卵黄と卵白を混ぜるのさ」

「にや、わかつたにや！　しっかり聞いておくのにや！」

ぴこぴこと耳を動かしながら、イルルはふんすと鼻息を立てる。

さあ、準備は完了だ。

「よし、ヒリエツタもいいか？　一二の三で、引つ張るぞ」

「分かつたわよ……つと！」

「うわっ、ちよ待てつて！　やっぱり怒つてる？」

「怒つてない！」

「うおっ、引つ張り過ぎ……い！」

気を抜けば引きずられそうなほどに引つ張られる。

やはり普段から大剣を振り回しているだけあって、腕力は俺より上のようだ。片手剣はおろか、スラッシュアックスだつて機構部分のせいで軽い。大剣なんて質量の塊であるため、それをあんな風に扱っているならばこの力も納得だが。

「ふん……っつ」

「甘いわよ！」

「うおっ!? もうちよつと手加減してくれ！」

引つ張る度にストッキングは引き伸ばされ、それに伴つて卵が高速回転を始める。

その両端に大量のねじれが生まれ、引つ張り直すのと同時に逆回転。反対方向への高速回転を始め、さらにそこから逆回転を重ねていく。

イルルがその耳をぴこんと動かすまでに、そう時間はかからなかった。

「にや! 今ぶちんつて聞こえたにや！」

「お、ほんとかイルル！」

「にやあ! 聞き間違いないにや！」

「よしじゃあそろそろ——うおっ！」

「はあっ!!」

「ちよつ、ヒリエツタさん!? 話聞いてた!？」

「たあつ!!」

「うおわ——へぶつ!」

「だつ、旦那さーん!」

ヒリエツタの怪力に引つ張られ、とうとう俺は地面に顔を擦り付けた。

やっぱり、相当怒つてたみたいだ。

「……ふう! すつきりした!」

「……それは良かったな……」

倒れた俺と同様に、卵も地面に転がってしまったが——その姿は一片の狂いもない。

フルフルの皮、恐るべし。



「さて、そろそろ沸いたかな」

「にやあ、旦那さん。これ、そろそろ入れるかにや?」

「おう、そうだな。一旦火止めよう」

イルルの声にそう頷きつつ、俺はキッチンの五徳——火元にある円状のあれ、鍋とか

置くやつ——の中から、火種となっている怪鳥印の火炎液皿を取り出した。

爛々と燃えるそれを一旦横に置きつつ、イルルから白濁した水が並々入ったお椀を受け取る。

「それ、何？」

「これは水溶き片栗粉だよ」

「これ入れると、お湯にとろみがついて温度が下がりにくくなるのによ」

「……イルルちゃん、ますますこいつみたいになつてきてるわね……」

微妙そうな顔のヒリエッタを横目に、鍋の下に火種を戻す。

鍋は、パスタを茹でるような縦長の手柄なものを用意した。竜の卵をまるまる茹でるのだから、それなりに大きなものでなければならぬ。

「さ、ヒリエッタ。その抱えた卵を入れてくれ」

「……………」

彼女は無言で、ぼとんと卵をお湯に落とす。

お湯が大きく飛んできた。

「うおっあちっ！」

「うにゃ！ あちやちや！」

「……………ほんとによく似てきてるわ」

そう言いながら、頭を抱えるヒリエツタ。

頭を抱えたいのはこっちなんだが。

「……で、これってただのゆで卵じゃないの？」

「ばっかお前。さっきの苦労を忘れたのか？」

「……なんだっけ。あれで、中身を混ぜたんだっけ」

「そうそう。ああやって回転させることで、殻を割らずに中身を混ぜ返すことができるんだ。まあ、ゆで卵つちやあゆで卵だけど。でも、味の仕上がりは全然違うぞ」

「うにや、どれくらい茹でればいいのにや？」

「うーん。これだけのサイズとなると、しばらくはかかるな。火は見てるから、二人はしばらく休んでいいぞ」

「そ。じゃ、ソファアで座ってましょ、イルルちゃん。ちよつと疲れたわ……色んな意味で」

「うにや……それじゃ、お言葉に甘えるにや」

ふつふつと泡立つ鍋の中で、卵は優雅に踊っている。煮え滾る湯の香りの中に、どことなく甘いような香りを混ぜていくような、そんな気がした。

かなり大きな鍋であるのに、サイズはギリギリだ。それだけ、こいつの卵がでかいのだ。なんと頼もしい。なんて素晴らしい卵なんだろう。



「ヒリエツタさん……あれから、傷の方は大丈夫にや？」

「え？ もう平気よ。ほら」

ソファーでは、イルルが心配そうにそう尋ねていた。

それに対し、ヒリエツタは防具の一部を外して見せる。確かに、傷は完全に癒えていた。

「うにや……あの時はごめんなさいにや。迷惑かけてしまつて……」

「いいのよ。私は、こうやつてまたイルルちゃんとお話しできて楽しいわ」

「にや……」

「それよりシガレット。アンタ、あの時の奴と知り合いなの？」

「あー……それルーシャにも聞かれたよ。けどお生憎様、あんな奴記憶にないね」

「ふうん……？ 向こうは、アンタの顔も名前も知ってる様子だったけど？」

「たぶんタンジア時代に、一緒に狩りをしたことがあるとかだろ。つつても、俺は狩りに同行してもあんまり他の奴と関わりとうとはしなかったからさ。ヒリエツタも分かるだろ？ ほら、はじめて一緒に狩りした時とかさ」

「ああ……確かに、アンタハブられてたよね」

「はぶ……違う、俺が孤高なんだよ……うん」

「で？ それじゃあアンタ達は会ったことあるけど、シガレットが一方的に忘れてるっ

て感じ？」

「たぶんな。少なくとも、バルバレに来てからの関わりではない。絶対」

「ふーん……」

少し納得のいつていないような顔をするヒリエツタと、若干不安げに尾を揺らすイルル。

「あと、もう一つ気になったのがアイツの持ってた変な武器よ。小さい筒みたいなの、ポウガンみたいなの」

「あの時お前意識あったのか？」

「何とかね。動けなかったけど」

「旦那さん……あれ、トレッドさんも……」

「あー……そうだな。あれは銃だよ。装填数は少ないし、モンスターの甲殻を貫くこともできないけど、人間は確実に撃ち抜ける武器さ」

「嘘でしょ、つまり、対人用ってわけ!? 何よそれ……!」

「あんな代物、犯罪者と一部のお偉いさんしか持つてない。あいつの場合、前者だと思っ  
が」

「……きつとそうでしょ。明らかに、表社会の感じじゃなかったし」

「ま、何にせよトレッドが処罰に当たってるらしいし。もう大丈夫だろう」

それはそれは、惨いことをされてるんだらうなとは思うけど。

今はそれには触れないでおこう。

それにしてもあいつ、手紙をいくら送つても全く送り返してこない。一体、どこで何をやってるんだか。

「……つと。そろそろかな」

「にや、もうできるのにや!？」

「おつと待ったイルル。今のままじゃアツアツだぞ。これから流水に数分晒して冷やす」

「……うにや」

ぴんと立った尻尾が、へなへなと垂れていく。

甘いもの好きな彼女らしく、待ち遠しそうな様子だ。

「……このまま食べてもいいんだけど、甘さが足りないと思うからロイヤルハニー、開けようか」

「……! 分かったにや! 取ってくるにや!」

そう言つて、彼女は庭の奥にある倉庫へと駆け出した。

「……ま、何にせよイルルちゃんが元気でいてくれて何よりだわ」

「そうだな……」

す。じゃぶじゃぶと流水で卵を冷ましていると、ヒリエツタがほつとしたようにそう溢す。

そんな彼女の顔を見てみると、ふとした疑問が湧いてきた。

「……そういえばお前、今もイズモと手紙のやりとりしてるのか？」

「うえっ!? えっ、ま、まあね……」

「……?? なんだ、その反応」

「別に、いいでしょ！ 私が誰とどんなやりとりしてたって」

「うん別に何でもいいんだけど……イズモは元氣そうか？」

「うーん……何か、古代林ってところ？ の生態系が最近変らしくて。その調査に忙し

いらしいわ」

「へえ……古代林、ねえ」

古代林。

ベルナ村付近に位置する孤島だったか。確か、デインバルドもそこで独自の進化を遂げたとか何とかと聞いたことがある気がする。

からん、と、注ぎこんだ氷が音を鳴らす。

卵に触れてみれば、随分とひんやりした温度が伝わってきた。内部温度がどうかは不明だが、そろそろ割ってみてもいいだろう。

「旦那さん！ 持ってきたにや！」

「よし、じゃあそろそろ食べてみようか。ヒリエッタ、その棚の中から一番でかい皿を出してくれ」

「え？ 大きいのがいるの？」

「昔、樽でプリンを作ってみたことがあるんだけど、重すぎて、でも柔らかいから自重で崩れちまつてな。これもたぶん、崩れるだろうから」

「分かったわ……」

彼女は頷いて、棚を漁る。

そこから、まるでガンランスの盾ほどのサイズの皿を取り出してきた。

「うわ、こんな皿買ってたっけ。でかすぎだろ」

「何よ、これじゃダメなの？」

「いや、十分だ。イルルは、そのの木槌取って。この卵、割ってくれ」

「了解にや！」

大皿の上に置いた卵に向けて、イルルは木槌を振るう。

二度、三度と打ち付けていくと、卵に何重もの罅が走っていった。それを指で擦ると、ぼろぼろと剥がれ落ちる。

その奥から見える、優しい黄色に満たされたもの。ぷるりとしたそれが、日の光を浴

びて目覚めた。

「おお……」

「わあ……」

殻が剥がれる度に、中身が露わになる。

卵黄と卵白を混ぜることによって、鮮やかな黄色と白色が混ざったその色。薄い橙色のようなそれは、何とも優しい色味になっているなど感心させられる。それでいて、そのフォルムはゆで卵のそれだ。何だか情報が錯綜しているような、奇妙な感覚に襲われた。

「……崩れないわよ?」

「……ほんとだ。竜の卵だからかな。つっても、まだ半分も殻を剥がしてないからじゃないか? 殻、分厚いし」

「ここから、スプーンで欲しいだけ掬い取ったらいいんじゃないかしら?」

「確かに! 賢いな!」

「にや、小皿三枚にや〜」

ヒリエッタの提案を受け、イルルは戸棚から新しい皿を取り出した。

とりあえず、ということとでそれぞれ適当な量を取り分けた。どうしても、雑貨屋で売っているようなプリンほど見た目は綺麗にならないけど、それは御愛嬌だ。

「良いなこれ……。プリンを詰めた瓶みたいだ。オブジェとして飾っておきたい」  
「腐っちゃうからやめてにや」

「……で、これにロイヤルハニーかけて食べればいいわけ？」

「これは何にも味付けしてないからな。これだけでも美味しいとは思うけど、ハチミツかけるとより甘さが深まる……と思う」

スプーンを配りつつそう言うと、ヒリエツタは少量、イルルは大量のハチミツをかけた。

ふわふわとした尻尾がびんと立たせたイルルは、もう早く食べたそうだ。

「よし、じゃあ……。食べよっか」

「にやあー！ いただきますすにや」

「……いただきますす」

二人がスプーンでプリンを裂く様子を確認しつつ、俺もプリンをつつついてみる。

プリン、というにはあまり柔らかくなくない感触が伝わってきた。というより、やはり感触はゆで卵のそれだ。完全卵白の部分よりは幾分か柔らかいかもしれないが、確かにこれは自重でも崩れないかもしれない。

それをそつと裂いてみると、当たり前だが中までしつかり薄い橙色に染まっていた。これは卵黄と卵白がしつかり混ざっている証拠だ。

香りもよし。斬竜とは思えない、どこか甘い香りがする。

それをそつと口に入れてみると、ふんわりとした食感が瞬いた。

「ん……」

「うみやゝ甘いにやゝ」

「イルルちゃん、それはハチミツの甘さじゃないかしら……」

卵単体では、それほど甘くはない。いや、甘いには甘いのだが、プリンのような真っ直ぐな甘さではなく、卵らしいどこか控えめで、それでいてまろやかな甘さというか。

プリンというイメージで食べてみると、ちよつと印象が違うかもしれないが、それでも卵本来の甘さは十分楽しめる。食感もゆで卵みたいかと思いきや、それよりもふんわりとしてこれはこれで面白い味わいだ。卵黄も卵白もすっかり混ざり合っているからだろうか。

そこに、少しハチミツをかけてみる。皿の端に少量のハチミツを落とし、卵を絡ませながら食べてみると——これはいい。

「うん、ハチミツの甘さが合うな！ この物足りなさを埋めてくれるっていうか」

「確かにね。ハチミツがあると、よりプリンらしいっていうか。いやハチミツにプリンってあんまり聞いたことないんだけどね」

「甘いにや。甘いっていうのはほんと嬉しいのにやゝ」



イルルは満足げに頬張り、ヒリエツタもこれはこれで嬉しそうな様子だ。

ハチミツのとりりとした食感が、卵に絡む。口の中で溶けるのを、より加速させているような感じさえする。

そして、何よりもその甘さだ。ハチミツは甘い。甘いのは甘いのだが、どちらかといえば甘ったると言いたくなるほど甘さに振り切った食材だ。単体では甘すぎて、口にならないハンターも多い。そのため薬草やアオキノコと調合して摂取する話をよく耳にする。

その甘さが、卵の優しい味わいに絡んで、まろやかになる。甘すぎない。強烈な甘みを、柔らかなものへと変えてしまう。

「これはいいなあ。回復薬超グレートだ」

「調合の手間がかかり過ぎて絶対売れないわ」



「……で？ これでどんな仕事やりやすくなるって？」

「え？」

調理器具を洗っていると、ヒリエツタがそんな質問を投げかけてきた。

「アンタ言つてたじゃない。協力したら何とかって。ギルドの上役が何とかって」  
「……ああ」

洗いの手を止めて、俺は一度手を布で拭いては水気を落とす。

そうして、ヒリエッタの方へ向かい合った。

「ようこそ、卵の世界へ」

「はい？」

「お前は今卵のすばらしさを味わったんだ。実力も申し分ない。うちの組織の一員にスカウトしたい」

「……それが、例の組織って奴？ 具体的に、どんな良いことがあるの？」

「卵運搬のクエストがたくさんやってくるぞ」

どや顔でそう言ってみると、彼女は額に青筋を浮かばせた。

そうして、ずんずんとこちらに歩み寄ってくる。

「ん？ ——ぐはっ!？」

バチコン！ という音が響いた。

ヒリエッタの強烈なビンタを受けて、俺は吹っ飛ばされた。

「はあく……そんなことだろうとは思ったわ。少しでも信じた私が馬鹿だった」

「だ、旦那さん！」

「いつてえ！ 何でだよ！ 卵選びたい放題だぞ！ 最高だろ！」

「そんなこと考えながら卵運搬する奴なんてたぶんアンタだけよ！ みんなあの手にクエスト苦手なのよ知ってる？ 親は飛び回ってるし、よく落石事故が起きて道塞がれる

しー！」

「それは……！」

「しかもどうせ、悪食の依頼者が満足するだけじゃない……私はパス」

「待て！ 組織のことを知ってたで帰れると——へぶっ！」

「邪魔よ！ 邪魔！」

「にやー！ 旦那さーん！」

出口へと歩き始めるヒリエッタの道を塞ごうとして、再びビンタされた。

ビンタで人を吹っ飛ばすってどういう力してんだこの女。

「あーあ、私の休日を返してほしいわ……って、ん？」

そうぼやくヒリエッタが、門の扉へ手をかけようとした瞬間だった。

突然、その門が開く。

「シガレット様！ シガレット様は——おお！ いらっしやった！」

日の光を映す銀の鎧に、青い刺繍。あの皿のように大柄な縦に、高く伸びる鋭い槍。

その姿は、このドンドルマを守る衛兵だ。それも、大老殿を行き来する位の高い者。

そいつが、俺を名指しして叫んでいた。

「……………にや？」

「何……………どうしたの……………？」

「ああん……………何だあ？ 俺にご指名か何かか？」

「その通りです！ 至急、大老殿へお越し願います！」

龍歴院より、貴殿宛てにクエスト

が！

龍歴院、だって？

カランと崩れた皿の音が、俺の家の中で反響する。

どこか、嫌な感じがした。

く本日のレシピく

『デイノエッグプリン』

・ 斬竜の卵 ……………1個

・ ストッキング（インナー） ……………1着

・ ブヨブヨした皮（大サイズ） ……………1枚

☆お好みで、ロイヤルハニーなど

## 雲と羊とチーズと甘露

「ベルナ村……なつつつかしいな！」

「にやあく。風が気持ちいいにや」

飛行船から降り立った俺の足を、ふんわりとした緑が迎えてくれる。

どこまでも広がっていきそうな草原に包まれたこの高原は、とても空気が澄んでいた。息を吸う度に、肺の中が洗われるような、そんな感じがした。

「観光気分してんじやないわよ。龍歴院ってどこかしら……」

「あれじゃない？ ほら、奥になんかでかい白い建物あるじゃん」

背後で周囲を見渡すヒリエッタと、奥にある石造りの建物を指差すルーシヤ。

普段ドンドルマで活動している俺たちハンター四人は、今ベルナ村にいる。ドンドルマとは違う風を浴びて、飛行船を後にした。

「お待ちしておりました、ハンター殿」

そんな俺たちを迎え入れてくれたのは、橙色に近い茶色の髭を豊満に生やした初老の男。杖を手にしている割に、ぴんと伸ばした腰で俺たちに相対した。

両手を広げて、俺たちを歓迎するその姿。彼の後ろには数人の村民らしき姿もあり、彼がその代表であることが窺える。十中八九、この村の村長なのだろう。

イルルが少し、俺の後ろに回って腰布をそつと掴んできた。そんな彼女の頭を撫でながら、この男へと向かい合う。

「ベルナ村へようこそ。どうだろう、ドンドルマのような都には敵わぬとも、ここの風とチーズには大きな自信がありますよ」

「……確かに、芳醇でいて芳ばしいこの香り……。チーズだ。チーズの濃厚な香りがある……ッ！」

「旦那さん、どうぞどう」

「私たち、龍歴院に呼ばれてやってきました。龍歴院には、どう行けばいいですか？」

村中を洗う風に紛れて、確かにチーズの香りが漂っている。

思わずその匂いの元に誘われてしまったが、イルルがお腹に引っつく形で止めてくる。

一方のヒリエツタは、せっかちにも村長らしき男に道を尋ねた。眉間に皺を寄せ、とにかく急いでいる様子だ。

「話は聞いております。龍歴院は、あちらの奥にある建物……。この道を、まっすぐ進むとよいでしょう」

「……有り難うございます」

「ちよ、ヒリエッタ！ もう行くの？」

「救難信号出てるんでしょ!? 急がなきゃ……!」

「どつちにしろ、古代林までは空路で二日かかるって聞くぞ。そう急いでもあんまり変わらんないんじゃないか？」

キツと、ヒリエッタは俺を睨む。

しかし、何か言うことなく歩き続けた。

「……ありや相当だなあ」

「イズモ……さん？ が、行方不明なんだっけ。あの二人、そんな仲良かったの？」

「さあ……手紙のやりとりをしてる、とは聞いてたけど」

「へえ……」

「にや……ふみゃん!?」

ヒリエッタの後姿を見てルーシャとひそひそ話していたところ、突然のイルルの悲鳴が響く。

振り向いてみれば、俺と同じ目線にイルルの瞳があった。首根っこを、白くふわふわとした生き物に啜えられながら。

「にゃー!? 何にゃ!?」

「うお、なんだこいつ。旨そう」

「二言目にはそれなの……イルルちゃん、大丈夫?」

「なんだっけ……ムーファだっけ、これ」

「よくご存じですな。そう、これがムーファです。この村の特産として毛や乳製品が有名なのですよ」

「へえ……」

村長らしきこの男の話を聞きながら、イルルを抱いてムーファから離す。

びつくりしてしまったイルルは、覚束ない手付きで俺の鎧の紐を掴んだ。心なしか、尻尾が大きく膨らんでいるように見える。

「ムーファかあ……何か、ミルクなりなんなりをこれまで使ったことがある気がするな。そうか、チーズが絶品だつて聞いてたけど、発祥はここだったなそういえば」

「ええ。あの、火竜の装備をしたハンターさんが向かった先……龍歴院にも、専属のコックがいますよ」

「ああ……あのキッチンアイルー希少種か……思い出した」

「キッチンアイルー希少種?」

「見れば分かる。いろいろやばいぞ」

「こてんと首を傾げるルーシャ。」



あの姿は、初見では度肝を抜かれるだろう。アイルー愛好家の彼女も、あれにはどのような反応を見せるのだろうか。

「……ヒリエッタに置いてかれちゃったな。俺たちも行くこう」

「だね……。龍歴院から直々の指名だなんて、凄いことだよ。遅れちゃまずいよね」

そう。龍歴院からの直々の指名。

彼らはわざわざ、ドンドルマの俺を名指しして、こんな遠方のハンターを呼び寄せたのだ。

それは三日前のあの日。イルルと、ヒリエッタと、卵でプリンを作っていたあの日の出来事だった。



「古代林に、謎の古龍が現れた？」

「うむ……」

届いた書類の、大まかな内容はそれだった。

ハンターの活動圏に古龍が入ることは、確かに頻度こそ少ないが別段珍しいことではなかった。

とはいえ、それによってクエストの受注にも大きな制限が掛かるため、一生かけても古龍と巡り合えないハンターも多い。

一方でG級ハンターともなると、こういう時にお呼びがかかるもの。これも、その一つなのだと思いますが――。

「この古龍って」

「そうじゃ。主が樹海で遭遇したという例のものに酷似している……」

銀色の甲殻。

流線形の、鋭利な体。

火を噴く翼に、流星のように跳び回るといふその特徴。

クエストボードに貼られたそのスケッチの主は、俺が今追い求めているあの姿そのものだった。

「間違いない……あいつだ。古代林にまで飛んでるのか……」

「龍歴院は、奴に正式な名前をつけた。天隼籠——『バルファルク』とな」

「バルファルク……ねえ」

トレッドに話した時も、まだ名前はないと言っていた。

ギルドも未だ未確認だったその古龍。しかし、未知の樹海に雪山、そして今回の古代林。どれも隣接しているわけでもなく、大きく距離が離れたロケーションだ。それだと

「いうのに奴がこうして姿を見せているということは、奴の活動範囲がそれだけ広い証拠だろう。」

あの、これまで確認されているどの飛竜や古龍とも全く類似しない飛行方法は、それだけのスピードを生み出せるということなのか。

「龍歴院の話では、最近古代林の生態系に異常が見られるということだな、調査を長い間続けているそうじゃ。それで、奥深くに謎の古龍を発見したらしい」

「古龍？ こいつとは別の？」

「うむ、そちらはもつと大柄だな。全身に骨を纏った双頭の龍だったと聞く」

「双頭!? 蛇みたいだな……。突然変異か何かなのか？」

「分からん……。それが、調査用の飛行船を何機も墜としてしまったようじゃが……。討伐は果たせず、海に消えたらしいの。そう、ちょうど主が氷海で瘡瘵を討った数日前のこととのことじゃ」

「へえ……」

あの時、龍歴院はそんな事態になっていたのか。

イズモも、それに関わっていたのだろうか？

「それで、しばらく古代林は落ち着いたそうじゃが……。最近、再び同様の事件が起きておる。調査用の飛行船が、行方不明になる事例が増えたのじゃ」

「それって、またその古龍が戻ってきたのか？」

「その可能性も十分あるじやろう。それで、龍歴院はまた調査部隊を向かわせた……その矢先に、これじゃよ」

「そうか……最悪のタイミングで、古代林に飛来したんだなこいつ」

「そう、それもすぐ飛び立つこともなく、長く居座っていると聞く。シガレットよ、主はこの古龍との交戦経験があると聞くが、この事例に思うところはないか？」

「……こいつ、自分が手酷くやられると、悔しいのかその場に居座る傾向があります。以前雪山で戦った時も、そんな素振りが見られたし」

「ふむ……そうか」

「……で？　なんで、わざわざドンドルマのハンターなんて指名してるんすか？　龍歴院にも、優秀なハンターはいるでしょうに」

「うむ、どうやら天慧龍の乱入によって、調査部隊の一部が行方不明になったようじゃ。龍歴院の精鋭を出しただけに、外部の力、それもこの古龍との交戦経験がある者の力を借りたいそうだな」

「それで、俺かあ……。行方不明っていうのは？」

「四名で調査に赴き、バルファルクと遭遇したそうだな。一人が殿を務めて他三名は帰還できたものの、その一人が戻らんようじゃ」

「なるほど……」

「その残った者が、シガレット……主の旧友じゃよ」

「え？」

「イズモ、という男じゃ」

「えっ……」

「イズモですって!?!」

これまで黙って食卓についていたヒリエツタが、突然大声を出した。

と思えば、大長老の目の前まで駆け寄って問い詰め始める。

「どういうこと!?! イズモって……ユクモ村のあの……!?! 彼が行方不明なの!?!」

「落ち着くのじゃ……。彼とて経験豊富なハンターじゃ。きっと、森から抜けられずとも生き延びているはずだろう。それよりも——」

「そこに居座ってる古龍が問題……。だな。分かりました。行きましょう、ベルナ村」

「うむ……。頼む。できる限り、優れたメンバーを集めて向かってほしい。これは、龍歴院とハンターズギルド双方の問題でもあるじやろう」

古龍の存在は、どの機関においても大きな障壁となる。

それも、どちらも新種の古龍だ。一つはようやく名前がついて、もう一つは全貌もまるで掴めていない。

龍歴院がハンターズギルドに助けを求めたなら、ギルドもそれに応えたいのだろう。そうすれば、今後交渉を有利に進めることができるから。貸しを作れる状況というのは、願ってもないことに違いない。

なんて考えていると、ヒリエツタがずっと俺に近寄ってきた。表情を強張らせて、強い意志を瞳に宿しながら。

「シガレット！ 私も行くわ！」

「お、おう……分かった」

「早く！ 早く準備するわよ！」

「待て待て。メンバーが足りない。イルルと……ルーシャが来てくれそうかな。トレッドが来てくれたら頼もしいんだけど、あいつ相変わらず音沙汰ないしなあ」

「うん……でも、それで四人ね。時間が惜しいわ！ 返事を待ってるなんて」

「分かってる。俺はイルルを呼んでくる。ヒリエツタは、ルーシャに声をかけてくれるか？」

「うん、行ってくる！ 大長老さん、今日中にも便は出せる？」

「うむ、取り計らおう」

大銅鑼が、まるで景気づけのように鳴り響く。

イズモが行方不明、なんて。しぶといあいつのことだ。こんなことでくたばるとは思

えないが――。

それでも俺は、前に進むしかない。

ついでに、古代林の旨いもんでも探させてもらおうか。



「とりあえず……状況を……ん、うまつ……聞かせて、くれ……ごくん」

「アンタ……なんでさも自然に食卓についてるのよ……」

「ミイの飯を早く食べたいということですよニヤ？ ならば！ 腕によりをかけて作りま  
すニヤ！」

そう意気込むのは、俺よりも背丈のある大柄なアイルー。ニャンコックと呼ばれる  
キツチンアイルー希少種だ。

糸目に巨体、野太く荘厳。アイルーの可愛らしさを捨て去り、料理のみを求めたのだ  
ろう。どことなく、チーズを思わせるにおいが毛穴の奥から漂っているような気がす  
る。

「ふああああ……何このアイルー……」

「ニヤ？ ミイの顔に何かついてますかニヤ？」

「でっかい！　大きい！　たくましい！　何このアイルー！　一周回って可愛い!!」

「マジかよ」

「守備範囲広いわね」

「うにゃ〜……」

龍歴院前広場は、この組織に所属するハンターたちの憩いの場となっている。

言わば、ありふれた街で言うところの、酒場に近い役割を果たしているのだろう。

ハンターや研究者らしい竜人の往来で溢れ、書物とチーズの香りが漂うこの広場。野外にあるだけに、風が全身を優しく撫でていく。酒場のような喧噪とは程遠い、風と草の香りに包まれた良い空間だ。

何より、外で食べる飯というのみなかなか乙なものである。

「あぁ、街の中にながら狩猟飯してる気分。相変わらず良いなここ」

「旦那さん、ここに来たことあるのにや?」

「随分前だけだな。ここの教官の狩猟講座を聞きに来たことがあるんだ」

「そうだったのにや……知らなかったにや」

「ここのチーズは絶品だぞ。マジで、何絡めても旨い」

「にゃー！　このウインナー、絡めちゃうにゃ」

「お、いいじゃんモスソーセージじゃんそれ最高!」



食卓に並んだ俺とイルルはチーズを舌鼓し、ルーシャは鍋をかき混ぜるニャンコックに見惚れている。

そんな状況に呆れているのか、頭痛の種なのか。ヒリエツタは頭を抱えながら、それでも例の調査から帰還したらしいハンターに事情聴取を続けていた。

「……それで、生還者は三人つてことで間違いないのね？」

「ああ、間違いない」

そう答えるのは、赤い髪を襟足で一つ結びした大柄な男だった。

年齢は随分若そうだ。俺より一回りは下だろう。背にはガンランスを背負っており、槍使いには珍しく盾を槍に重ねるように、背中に収納していた。盾のしまい方だけ見れば、盾斧を背負っているようにさえ見える。

「例の古龍とは、戦ったの？」

「ああ、戦ったさ……。だけど、とてもじゃないが敵わなかった。俺と共に戦った二人は大怪我しちまってな。しばらく狩りはできないだろう」

「そう……」

「足をやられて、俺はそいつらを担いで、逃げるので精一杯で。その逃げる時間を稼いでくれたのが、イズモなんだよ」

「……あいつ、ほんと無茶ばっかして、もう……」

ヒリエツタは、齒痒そうに唇を噛んだ。

何か、思い当たるところでもあるのだろうか。

「……イズモは、死んだのか？」

「ッ！ シガレットッ！」

「悪い。だけど、確認しなきゃダメだろ。それで俺らの対応も変わってくる」

「……くう……ッ」

「……俺は、死んだとは思わない」

銃槍使いのその男は、はつきりとそう言った。

「例の古龍は未だに古代林に居座っている。シガレット……さんの話が事実なのだとして、奴は自分に一矢報いた存在を探し続けているということだ」

「……その一矢報いたのが、イズモっていうことね」

「ああ、そうだ。その彼を今もなお探し続けているということは、イズモは今も生き延びている可能性が高いだろう」

「……なるほど」

確かに、納得できる。

雪山の時もそうだったのだ。あの古龍は、相当根に持つ性格をしているのだろう。

となると、奴はイズモの死亡を確認できていないということだ。イズモが生きている

可能性も十分あり得る。

「……しかし、イズモがあいつと戦えるなんてなあ。俺、あいつには刃に巻き込まれたり踏まれたりした記憶しかないからイメージ湧かないや」

「……確かに、あんまり強そうな印象はないわよね」

「いや、彼は強い。大丈夫だ。俺が保証する」

「……ま、そうだな。あいつすげーしぶといし、何があつても折れないから」

赤髪の彼は、力強くそう頷いた。それに、俺も同調する。

龍歴院で共に戦ってきた仲間だからこそ、言える言葉なのだろう。その自信の満ちた彼の響きに、ヒリエッタも少し安堵したようだ。うつすらと、口元を綻ばせた。

「……それじゃ、私たちは救出に行くわ。すぐにでも向かうわよ」

「おいおい、もう行くのか?」

「空路で二日はかかるんでしょ? 船の中で休めばいいじゃない」

「マジかよ……。イルルは、それでもいいか? 寝にくくないか?」

「いやあ、旦那さんの傍で寝られたら、ボクはなんでも」

「そっか……。分かった。ルーシヤは?」

「ほああああああ……。鍋掻き回してる……。肉球おつきい……。たまりませんなあ……。でへへ」

「……………。とりあえず飯だ飯！ 喰わなきややってられねえ！」

「…………。しようがないわね。飛行船の準備ができるまで、各自食事と準備！ それで行くわよ！」

ヒリエツタはそうまとめると、工房の方へと歩き出す。武器の最終調整でもするのだろうか。

ルーシヤは相変わらずニャンコックに釘付けだ。そんなに可愛いか、あれ。

「旦那さんは…………」

「俺は腹の最終調整をするぞ」

「…………。うにや。知ってた」

とろりとした、芳醇なチーズ。それに、乱切りにカットされたヤングポテトをくぐらせる。

黄金のその身に、さらなる黄金が降り掛かった。全身に纏うように、チーズがポテトを埋め尽くしていく。何と言うことだろう、なんて美しい浸かり具合だ。

「…………。美しい。完成された食っていうのは、ある種の芸術だな」

「もったいなきお言葉感謝ですニヤ。さあ、存分にお召し上がりくださいニヤ！」

ニャンコックにそう促されるままに、俺はチーズを滴らせたそのポテトを一心に頬張った。

熱々のそれが、口の中で瞬いた。

とろりとしたチーズの香り。

ほくほくのポテトの食感。

それが、口の中で混ざり合う。全く異質のそれらが、さも一体であるかのように口の中で溶け合った。

甘い。芋の甘みが、チーズの甘さと一体化する。

何て言うんだろう。ほろほろと口の中でほぐれる食感が、チーズのとろみに包まれてまろやかになるというか。その甘みがポテト由来のものなのか、チーズ由来のものなのか分からなくなる。

とにかく甘いのだ。どうしようもなく、甘いのだ。

「にゃあ、チーズとお肉も相性抜群なのにゃ〜」

「チーズって、めちやくちや味を深めてくれるよな!!」

とろみとほくほく感が一体化するそれを飲み込んで、イルルが堪能するモスソーセージを串に刺した。

大きさは、俺の親指よりも太く、中指よりも長い。そんな立派なソーセージを、芳醇なチーズに海に絡ませ、その柔らかな金の繊維を一本一本絡めていく。

引き上げてみれば、それはまさに黄金の塊だ。鼻孔をくすぐる濃厚な香りに、俺は我

慢できずかぶりついた。

「うもっ……!!」

脂。脂の甘みが、チーズに溶ける。

まず歯茎に絡みつくのはチーズの柔らかさ。その奥から、張りのいいソーセージの食感が歯茎に届く。パリッと割れて、中から肉汁が溢れ出した。それがチーズと絡み合い、濃厚な旨みに昇華していく。

なんとということだ。咀嚼が止まらない。

「歯応えある肉が、チーズによってとろけていく……。これは、なかなか味わえないぞ」「にや、にや?」これ、へブンブレットにや?」

「おお! それ、めちやくちや合いそうだな!」

『天にも昇りかねないほど旨い』がキャッチフレーズの有名ブランドパン、へブンブレット。どこのギルドの食堂とも提携され、世界中のハンターが今もどこかで頬張っている。

それほど慣れ親しんだこのパンだが、当たり前のようにトーストすると旨い。どこの店でも、トーストされたものが一般的だ。俺が知っている味も、その大部分がトーストによるもの。

だが今は、目の前にチーズフォンデュがある。このパンを贅沢にも黄金のチーズの海

にくぐらせるなんてしたら。

「おおお……ツツ！」

「にやあ……パンにチーズが浸みこんでいくにや……!!」

「繊維の一つ一つがパンに絡まっていくようなそんな感じだな……美し過ぎる……」

ぶつ切りにされたそれをフォークで突き刺して、チーズの海に浸してみれば。

光を白く照り返すほど純白だったその生地が、チーズの金色に染まるまで漬け込んでみれば。

「うにや……これ好き……っ」

ぱくつと口にしたイルルが、幸せそうに身悶えしている。口元の可愛らしいひげが、ふるふると揺れていた。

パンの鼻を抜けるような香りは、チーズの情熱的な匂いに全て塗り替えられていた。ふわふわの食感は、滑らかさと口どけの良さに埋め尽くされている。

そして、その甘さは。パン特有の、そのままではどこか物足りない甘さを、全て浸し尽くしていた。後を引かない、直情的ながらも優しい甘み。鼻孔を吹き抜ける、上品なフレーバー。

「これ好きにや。もう、パン一本まるまる食べちゃうにや」

「そんなに気に入ったのか？」

「にゃん！ これほんとに美味しいのにゃ！」

このパンとチーズのコラボレーションに感動したのか、イルルはぶつ切りにされたパンを大量に皿に乗せ、さらなるチーズとの掛け合いを楽しもうとしている。量にしたら、パン一本分くらいは確かにありそうだ。

そんな、嬉しそうな相棒の姿を眺めながら俺も適当に具材を串に突き刺していった。

ボルボロツコリーは、緑色の細かな芽と芯のある茎が特徴の野菜だ。

その鮮やかな緑に、黄金のチーズを絡ませる。口に含めば、チーズを被ったわしゃつという食感から、その奥のぼりつという食感が混ざり合うのだ。細かな芽の部分はとても柔らかく、チーズをよく染み込んでいる。茎の部分は、歯応えある食感の中に微かな甘みを感じさせた。

噛むのが楽しい。食感がとても不思議だ。火を通すために塩ゆでをしてあるおかげで、ほんのり塩っ気もあるような気もする。甘くて、しょっぱくて、面白い。

塩っ気といえば、女帝エビもだ。海という天然の塩漬け器で育ったこのぷりぷりの身は、ほどよい塩味ときめ細かい繊維の束で満ちている。

噛めば快活。呑み込めば快感。生でも、焼いても、茹でても、なんでもいける。海の代表食の一つと言えるだろう。今回は、このボイル済のものをいただこう。照り付けるような赤が眩しい。輝かしい。



「ふっ、ふっ……」

それを、贅沢にもチーズに絡める。

俺の拳よりも大きい、この立派な身に黄金が降り注いでいる。

「んあ……」

その大きさに合わせ、俺も大口を開けた。

食べやすい大きさに切り分ける、なんてことはしない。

がぶりゅっ！

咀嚼した瞬間、そんな小気味良い音が響く。

隙間なく重なっていたエビの繊維が、噛む度にほどけていく。とろとろとしたチーズ

が、それに絡み合っていく。

へブンブレットドやボルボロツコリーとは違い、エビの繊維はきめ細かい。チーズを絡

めても、染み込ませるような隙は与えてくれないのだ。

しかし、口の中でそれをゆっくりほどいてやると、話は別である。

チーズの甘さを、芳醇さを、そのあっさりとした身が受け入れ始めた。程よい塩気と

濃厚な甘さが、互いに溶け合っていく。張りの良い身が口の中で減る度に、その溶け

合った新しい旨みは、俺の舌を海原と草原の共振へと誘った——。

「——はああ、食った食った！」

「うにやゝ。満足にやゝ、幸せにやゝ」

出されたものをチーズに絡め、頬張って。

さらに出されたものを絡めては頬張って。

全て平らげた俺たちは、ようやく食卓から腰を浮かす。口元にチーズを残したイルルの顔を布で拭きながら、俺は満腹になった腹を軽く叩いた。

「ニヤ！ お粗末様でしたニヤ！」

「ふわあああ！ 喋ってるゝ。カワイイー!!」

「なあこのチーズフォンデュどうやって作るんだ？」

「ノンノン。これはとつても大事な企業秘密、お答えできませんニヤ」

「ふはつ……むっくりした指を立ててる……かわつ……」

「そうか……残念」

「この味が恋しくなったら、是非またここへお立ち寄りくださいニヤ。たつぷりサービスいたします故！」

「ふっほー!! サービス!? どんな!? どんな?!?! あつちよつ鼻血が……ふひやあ

あーっ!!」

俺とイルルが食べている間もずっとニヤンコックに釘付けだったらしいルーシャは、

鼻血を垂らしながら後ろに倒れ込んだ。

いろいろな思うところはあがあるが、周りのハンターも驚いたように彼女を見ている。俺はあえて、他人の振りをしておこうと思う。

## 鳥の皮の一枚張り

木々の隙間を縫うように、そいつは飛んだ。

青い甲殻にふさふさとした羽毛。

体長よりも長いその翼を広げ、慌てるように飛んでいる。

シルエットは太く、どこかずんぐりとした体が特徴的だ。細く鋭い嘴からは、羽ばたく度に甲高い音を漏らしている。

「こいつが……こいつつ、なんだっけ！」

「ホロロホルル！ 古代林に生息する鳥竜種よ！」

「そうだ！ それだ！ なんか幹の隙間に隠れてやがんなって思ったら、こいつだったんだな！」

「古龍の気配を感じ取っているのね……。あの慌てよう、やつぱり普通じゃないわ！」

「にやあ、ハンターに怖がってる……って訳でもなさそうにや」

「だな。ヒリエッタの言う通り、古龍のせいだろ。やつぱり、あの銀色の奴がここにいる……」

天犍龍、バルファルク。

そう名付けられたあの古龍が、今この古代林にいる。

イズモは、仲間を逃がすために自ら囿になり、今もこの古代林のどこかを彷徨っているのだらう。

生きているか、死んでいるかは分からないが——あいつはきつと生きている。

「この森は広いな！ 奥を見渡せば火山まであるし、すげえ環境だ！」

「これを、たった四人で探索するってなると厳しいわね」

「ああ。——だから、おびき寄せるぞ」

「にやつ、ルーシャさん！ 今にや！」

「任せてっ！」

頭上を飛び回る、ホロホルルとかいうこのモンスター。

木の幹に気配を感じ、その虚を覗き込んだ時に目が合った。

突然現れたハンターに驚いたのか、古龍のせいでピリピリしているのか、目が合うや否や牙を剥いたのだ。いや、俺が奴のシエルターを暴いてしまったからそれも当然かもしれないが、それとも、古龍に怯えるあまり混乱している可能性も否めない。

が、どつちにしろ、こうなってしまう手前放っておくわけにはいかなのである。それに、こうなってしまったのなら、利用できるだけ利用してやろう。

大地を走る俺と、イルルト、ヒリエツタ。

その真上を飛ぶ、ホロロホルル。

それよりもさらに高い木の上で、棍を構えて待ち伏せる少女。

淡い金髪を揺らしながら、氷牙竜の白銀の鎧を柵引かせ、真つ逆さまにダイブした。振り回される刃先。勢いを増す斬撃。

ルーシヤは、真上からその青い翼の付け根に刃を突き立てる。

「獲ったー！」

ホロロホルルは、甲高い声を上げた。

突然、真上から肩に穴を空けられたのだ。その衝撃で飛ぶこともままならず、荒々しく墜落する。

そこに襲い掛かる、二つの大きな刃。

「たあっ!!」

火竜の翼を思わせる刃が火を噴いた。

ヒリエツタの掲げる大剣が、溜めに溜めたその刀身を解放する。

それにもう片方の翼に傷を入れ、奴の自由をさらに奪う。

「そらあッー！」

俺もそれに合わせて斧を叩き付けるが、奴は身を翻すようにして躲した。翼を傷めた

というのに、それでも奴は舞い上がる。

「……すげえ、旨そうな鳥だな」

「は？」

「こいつ、どんな味がするんだろうなあ……!!」

俺の頭より上に浮かぶそいつに向けて、俺は重いこの斧を振り上げた。

当たらない。

躲される。

これほど活きが良いのなら、きつと味も格別であるに違いない。

「イルル！ ここのだ！」

「うにゃ！」

イルルが繰り出す多丁巨大ブーメランが木々の隙間から瞬いた。それがこの鳥の羽毛を荒く削り取る。

「そこっ！ イリス！」

同時にルーシャは印弾を撃ち抜いて、そのポイントに彼女の猟虫イリスが迫った。

そんな、二人の猛攻撃にホロホルルは――。

「あの黄色の粉……っ、イルルちゃん危ない！」

「はにゃ!？」

ヒリエッタが何かに気づいたように叫んだが、もう遅かった。突如急降下する奴の動きに合わせて、黄色のような橙色のような特異な鱗粉がばら撒かれる。

着地点にほど近くいたイルルは、それをモロに受けては大きく咳き込んだ。

「うにやつ、けふつけふつ!! 何にやこれ……はうあつ!! ふああああ!!」

「イルル!? 待ってろ……ッ」

咳き込む彼女は突然狼狽えて、千鳥足を刻み始める。

前も後ろも分からなくなったかのように、ふらふらと明後日の方向へ歩き出した。

一方のホロロホルルは、その力強い脚で大地を踏み抜いた。

俺の斧が届く距離で、その脚を引き抜こうとその翼を再び大きく広げる。

「飛ばせないわよ!」

「イルルちゃんに何すんのこの鳥!」

その羽に向けて、ヒリエッタは抜刀した大剣を叩き付けた。

ルーシヤが、乱回転するイリスと共に飛燕斬りを仕掛けた。

その二人の斬撃によって、為す術もなく飛翔を阻まれたホロロホルル。

眼前に迫る斧を見ては、その目を大きく見開かせる青い肉厚の鳥。

「ごめんな——お前の命、いただきますッ!」



斧から聳える金と黒の山脈が、牙を剥いた。

その頭に、俺は太く重い斧を振り下ろす。

命の手応えと共に、鮮やかな血飛沫がこの深緑の世界を彩った。



「ふんふふ〜ん」

「シガレット……それ、何？」

「ん？ ホロロホルルの鳥コンフィだ」

「んにゃ……？ ホロホロ鳥の……？」

「イルルちゃんごちや混ぜになってるよ」

「鱗粉の影響が残ってるのか。おい、イルル？」

「うにやく空から木が生えてるにやく」

「……大丈夫なの？」

「トリップしてるみたいだけど……そんなに持続性のある毒じゃないらしいわ」

「マタタビ酔いみたいなものだろ。数分で収まると思う……つと、よし、こんな感じかな。良い薪だこれ」

「……とここで、いつ言おうか迷ってたけど、なんで当たり前のように料理始めてるの？」

鬱蒼とした木々の合間を、白い煙が抜けていく。

古代林の樹海部分。鳥の鳴き声一つも聞こえないこの空間で、俺は薪を立てては調理を始めていた。

手頃な太い枝を、剣斧を用いて薪割りの要領で割った。

四等分にしたそれを、あえて隙間を作りながら縦に並べる。丁度、元の枝に十字状の隙間が空くようにして、その隙を埋めるように細かい枝や樹皮、布のほつれから生えた糸屑を入れていく。そこに火をつければ、あとは自然と薪に火が移って長時間持続する簡易コンロの出来上がりというわけだ。

ああ、それにしても――。

「腹が減った」

「腹が減ったのね……」

「あと、バルファルクはたぶん近くにいますぞ」

「え？」

きよとんと、ルーシヤが首を傾げる。

「こんなに広い島なら、とにかく古龍から離れればいいだろ。火山の奥なりなんなり、逃

げれるところにさっさと逃げるのが道理だ。飛べるならなおさらな」

「……でも、あのホロ口ホルル、木の幹に隠れてたわよね？」

「ああ。逃げ遅れたか、それとも長距離飛行に適さない種類なんじゃねえかな」

「……もしかして、逃げるで見つかるから、それくらいなら隠れとこうって感じ？」

「だと思う。逃げるにはリスクが大きすぎるくらい、奴は近くにゐるんだらう」

「じゃあこんなところで料理なんかしてたら、見つかるくない？」

困ったようにそう指摘するルーシャに対し、ヒリエツタは「なるほど」と小さく声を上げた。

「そうか、だから」おびき寄せる」なのね。他の生き物が逃げる、もしくは隠れてる中でこうやって私たちが派手なことをしてたら——」

「そっか、きつと気づくよね……。羽むし取り取られたお肉まであるし」

「でもこれ、名案かも。こんな深い森を探索するのは非効率だし、分散して探すのも危険だわ。未知の古龍なんですよ？」

「確かに。一人で出くわすのはごめんだもん」

ヒリエツタの言葉に、ルーシャも同調する。

そんな二人を見ながら、俺もうんうんと頷いた。奴の習性を考えたら、この方法は最も効率的だとしみじみ思う。

「それにあいつは、俺の飯を二度も奪いやがった。きつと、今回も来るぞ」  
「……一体どんな戦い繰り広げてるのよ」

呆れたように頭を抱えるヒリエッタを横目に、ホロロホルルの肉を掴む。

脚の部分を切り取ったそれは、小柄ながらもたくましい筋繊維をしていた。張りがあり、しかしみずみずしく、そして思った以上に生臭くもない。

それに塩やらハーブやらを練り込んで、油を敷いたダッチオーブンの中に入れ込んでいく。

ダッチオーブン。最近買ったこの料理器具は素晴らしい。狩猟飯との相性はさることながら、この蓋ふたが特に素晴らしいのだ。

「一、二……つと。足は二本しかないし、焼き上がってから切り分けるってことで、いいよな?」

「馬鹿なの?」

「あたしはいい……」

「……………」

ホロロホルルの足は二本だけなので、周りを気遣ってそう提案したというのに。

ヒリエッタとルーシャは、それぞれ冷やかな目とおぞましいものでも見るような目を俺に向けてくる。

「じゃあいいや。俺とイルルで分けような」

「にや、にやあ……」

ふらつきが覚めてきたのか、あたりをキョロキョロしているイルルにそう言うと、彼女はどこか困ったように鳴いた。

薪の左右に、Y字に先が分かれた太い枝を二本突き刺し、その叉にポールとなる枝をかける。ビンに入れてきた水を少しかけて、湿らせて。それに潜らせるようにして、ダッチオーブンを吊り下げた。

揚げ物のような高温ではなく、百度未満の低温でじっくり熱を通すのだ。油の中に、さらにハーブを投じるのを忘れない。これをするとう香りが全然違う。

「特産ゼンマイ……どんな味がするんだろうな」

「なんか、葉膳っぽい雰囲気するのにな」

「いいなそれ。体に染み渡る優しい味か。最高だ」

中の油が高温になりすぎないように、ポールの高さを調節した。

薪の炎を調節するのは難しいため、火から距離を離してじっくりと火を通す。時間になると、三十分くらいはこのまま熱するのが望ましい。

「さてと……それじゃあ、しばらく鍋はそのままにして、と」

「結構かかるのにな？」

「そうだな。長期戦だ」

「お腹空いてるって言ってたのに、そんな時間かかる料理するなんて珍しいにや」  
「おっと。俺が律儀にただ待つてると思おうか？」

そう言いながら、俺は蓋をがっちり閉めたダッチオーブンの上に火元の一部、そして新たな薪を加えた。蓋の上でも収まり切る、短いながらも太い薪を。

足元からも燃やされ、さらに蓋の上からも燃やされる。その様子に、イルルは興味深そうに感嘆の声を上げた。

「にやあく。周りから焼くのにや？ 蒸し焼きにや？」

「そうだな。こうやってしっかり蓋を閉めれば、中に圧が掛かるんだ」

「にやあーっ。すごいにや、すごいにや！」

「すごい？ いや、まだ早いぞイルル。このダッチオーブンのすごいところは、これだ！」

燃え盛る火に当てられるダッチオーブン。

その上で、小さな火が懸命に燃え上がっている。それに向けて、俺は新たなフライパンを繰り出した。

食パンが入り切る程度の大きさのそのフライパンには、作業の片手間に切り分けたホロホルルの皮が入っている。一口サイズに切り分けた、夜鳥の鳥皮だ。

「にやー！ 二段焼き？ 前代未聞の二段焼きにやー！」

「そうだろそうだろ！ こうやって同時に料理ができるのがこのダッチオーブンの凄いところだ！」

「にやー！ これ最高にやー！」

「……この二人はなんでこんなテンション上がってるの？」

「さあ……」

作るのは、夜鳥の鳥皮せんべいだ。

燃える炎に当て続けられれば、この小振りなフライパンは容易く熱を通す。ほら、言ってる傍から火が通って脂がたくさん染み出してきた。カリカリに焼けるのも、時間の問題だろう。

「……これで本当に、例の古龍は来るわけ？」

「さあね……」

「絶対来るよ。あいつ、マジで食い意地張ってるからな。さ、この間に武器でも研いでおこう」

フライパンを一時イルルに任せ、俺は太い幹に立て掛けておいた剣斧を手を取った。

「それ、新しい剣斧？」

「にやあ……筋繊維がすごいにや」

「恐暴竜よね、それ」

「うん。なんて名前だっけ。そうだ、”業彗斧グラバリダ”だ」

ドス黒い血肉が脈動している。

イビルジョーの筋肉の一部をもぎ取って、そこに牙や爪などを埋め込んで鎖で繋いだような代物。

俺が長い間滝瘴啖と戦い続けたなかで手に入れた細かな部位や、例の尻尾の一部を使って作られた剣斧だ。とはいえそれだけでは武器を作るには足りなかつたので、師匠からもらったバルファルクの素材も一部投じている。そのため、黒い刀身の一部には銀色の装飾が施されていた。

「まあ、願掛けだな。ここでバルファルクを仕留めて、滝瘴啖を美味しく食べれるようにするために」

「……まさか、この斧も後で食うの?」

「いやいや俺のことを何だと思ってるんだよ。防腐処理施されたものは流石に喰わない……けど、その発想はなかつたな。狩りの後に食べられる武器……悪くないな」

「ちよつと真に受けないで! 実行させたくて言ったわけじゃないもん!」

滝瘴啖由来の金色の牙と、天彗龍由来の黒い爪を丁寧研ぐ。

これが実際にどれだけの力を発揮するかは分からないが、今までのどの剣斧よりも重



く、遅しい。そして何より、龍属性を内包した初めての武器だ。

斬撃に伴って噴き出ることのドス黒い血は、きつと古龍の命にも届くだろう。今度こそ、今度こそあいつを仕留めてやりたいものだ。

なんて思いながら、武器に陽の光を映した時だった。

かすかに、地面が揺れる。

「……ん？」

「うにゃ、地震……？」

大きな揺れではなかった。

歩いていたら気づかないくらい、ほんの少しの揺れ。ただ、釣られたポールが震え、

ダツチオーブンがカタカタと音を出すから気づいた。

「モンスターの足踏みとかじゃないの？」

「でも、地の底からくるような感じがしたわ」

「どつちにしろ、バルフアルクは震動を起こすような重いモンスターじゃない。……と

なると、他に何かいるのかな」

「……もう一匹いるって噂されてた、古龍にや？」

「大長老も言ってたな。以前、この古代林の底に古龍がいたって」

「……キナ臭いわね」

「不気味な話だよな。双頭の龍だって。そんなの本当にいるのかねえ」

「龍歴院のハンターの話じゃ、まるで動く骨の塊のようだったらしいわ」

「そんなのとはや怪談の部類にや……ぶるぶる」

「まあ不気味な話ではあるけど……でも、今のあたしたちには関係なくない?」

「そうだ、関係ないな。関係あるのはこの鳥皮せんべいだけだ」

「……そうね。例のバルファルクを、早くどうにかしないとね」

ヒリエツタは冷やかなスルーを決め込むが、俺は構わず焼き上がった肉を摘まんだ。

ちよつと焼き過ぎてしまったくらいがちようど良い。

皮の表面はカリカリに炙られ、眩しい肉汁を垂れ流している。薄底のフライパンだとはいえ、その表面を容易く覆ってしまうほどに溢れた脂は、この皮が新鮮で上質である証拠だ。

そんな、魅力的な一枚を前に、俺はたまらずかぶりついた。

「……ん! こりゃ旨いぞ!」

噛めばサクサク。味わえばふわふわ。

一噛み目は、確かに程よい焦げ目がついた表面のぱりつとした感触が伝わってくる。同時に広がる、皮に含まれた大量の脂。味付けは塩胡椒とモガモガーリック、ナツメグあたりなのだが、それら調味料がこの皮の旨みを大きく引き上げている。

物凄い脂肪分だ。鳥の中でも皮はかなりカロリーが高い部位だと聞くが、この皮を食べているとそれは本当なのだと実感させられる。噛めば噛むほど、脂が染み出してくる。

そしてそれに合わせて、表面の焦げ目が剥がれ落ちて、鳥皮本来の弾力性が顔を出してくるのだ。このふわふわな食感がたまらない。塩胡椒の塩分に当てられ、脂の甘みが随分締まっている。ニンニクの香りに合わせて肉の旨みが数倍に高まっていく。

おやつ感覚でポリポリと摘まめて、それでいてビールのお供にもぴったりだろう。何というスナック感。なんというおつまみ感。

これが、これがホロロホルルか！

「ホロロホルル、ベルナ村でも食用にされてるとは聞いてたけど、こりゃ旨いや。ほら、食べてみなよ。あっちの方じゃ慣れ親しんだ食材ってだけあるって！」

「にやあく、いただきますにや」

「おう！ たくさん食えよ！」

「……じゃ、私も」

「うえ!! ヒリエッタ!?!」

肉の弾ける音に少しだけウキウキとしていたヒリエッタが、一つまみの肉を口にしたら。

それを見るや、ルーシヤは悲痛な表情で顔を歪ませる。まるで親友の裏切りに遭ったかのような、そんな顔だった。

「パリパリのサクフワにゃ！ こつてりとしてて、スタミナつきそうな味にゃあ」

「ほんとね。おやつみたいだと思っただけ、思っただよりくどいというか……でも、美味しいかも」

「……さあ、ルーシヤ……」

「うっ……うううう……」

未だ俺の作る飯を一度も口にしていなかったルーシヤに向けて、俺はフォークを差し出した。

それを見るや、彼女は冷や汗を大量に溢し始める。

「おかしい、こんなの絶対におかしいよ……モンスターを直食いって、そんなの……」

「ベルナ村公式食材だぞ」

「それはっ、それは分かったけどさあ！ やっぱり雑貨屋に並ぶ肉と、目の前で解体された肉はなんか気持的に違うって言うか！ うう……」

「ルーシヤさん……これ、すっごくおいしいにゃ？」

「うっ、イルルちゃん……！」

「お腹が空いてたら戦える敵とも戦えないにゃ。これ食べて、狩りがんばろ……？」

「うううう〜！ イルルちゃんにそんなこと言われたらっ、あたし……！」

ルーシヤはそう唸って、何度も頭を抱えたり眉間に皺寄せたりと百面相していたが——とうとう、フォークを手に取った。

そのまま、思い切ったように鳥皮を突き刺して口に運ぶ。

もにゅもにゅと、どの独特の食感に両目を閉じて咀嚼し始め——。

「ん……ん……んっ!? これっ、おいし……えっ、うま？ 何これうまくない？ えっやば」

「にやー！ そうにやのにやー！」

「だろ？ 狩猟飯も、やってみたら案外悪くないだろ？」

想像以上の味だったのか、彼女はさらに二、三きれを突き刺して口へ運ぶ。

大量の脂に舌鼓を打って、満足そうに頷いた。

「……うまいっ！ ホロロホルル、最高ー！」

「調子のいい奴ね……」

「食わず嫌いは良くないってな。ほれ、イルルももつと食べな」

「にやー！」

嬉しそうなルーシヤの様子に、イルルも嬉しそうにひげを揺らす。

そんな彼女に向けて、俺は肉を突き刺したフォークを向けるのだが——彼女はそれを

口にする前に、小さな悲鳴のような声を上げた。

「……にやうんっ」

イルルが、ぎゅつと自らの耳を塞ぐ。

一瞬の揺れもどこ吹く風で、ただ葉を風に揺らせていただけの木々。

そんな、一見いつも通りのこの空間なのに、イルルは痛そうな表情で耳を塞ぎ続ける。

「イルル、どうした」

「イルルちゃん!? 大丈夫……?」

「……お、音が」

俺とルーシャがその声をかけると、イルルはおずおずとした様子で言葉を繋いだ。

「すごい、キーンってする音がするにや……」

「耳鳴り……?」

ヒリエツタは、訝しむようにしながらイルルの視線に膝を合わせる。

そうして、次の彼女の言葉を待った。

「うにや、どんどん近づいてくる……この音……旦那さん!!」

はつと顔を上げるイルル。

それにつられて、俺たちもそちらを慌てて向いた。

青く鋭い瞳。

噴き上がる緋色の炎。

光を反射する銀色の体。

奴が——バルファルクが、木々の上で翼を広げて滞留している。

その鋭い瞳で、俺たちを見ている。

「……………いつつー！」

「シガレット！…これが!？」

「出たな……………バルファルク！」

太陽の光を反射するそれは、まるで神話に出てくる神のようだ。

それとも、下らない物語に出てくるからくり仕掛けのおもちやか。

いずれにせよ、奴は現れた。

まるで肉の香りに引き寄せられたかのように、この場に現れたのだ。

奴の甲高い、鳥のような鳴き声が、この古代林の山々に木霊した。

く本日のレシピく

『夜鳥の鳥皮せんべい』

・ 夜鳥の皮（腿）……………150g

・ 塩胡椒……………適量

・モガモガーリック …… 1 / 2 片  
・ベルナツメグ …… 適量



## 空腹、人情、天彗龍の炎

俺たちが一齐に武器を構えると、奴は翼からより一層強く炎を吐き出し、地面へと舞い下りた。

天彗龍、バルファルク。

俺たちが探していたそれが、今日の前にいる。

「……元氣そうだな」

師匠と俺が以前つけた傷は、今やすっかり癒えてしまったらしい。うつすら痕はあるものの、動くことには何不自由なさそうだった。

その代わりに、俺や師匠のものとは違う、鋭い切り傷が新しくできている。あんな傷をつけられる武器は、ただ一つだけ。

「……刀傷」

「やつぱり、イズモがやったのね。あいつは無事なの……？」

「こいつさえ排除できれば、あとは落ち着いて搜索できる。やるぞー！」

「がってんにゃー！」

「よーし！ 行くよつ、イリス！」

俺は剣斧を構えて、ダツチオープンを庇うように立つ。

ヒリエツタは背の大剣の柄に手をかけながら、奴の背後に回るように駆け出した。

イルルとイリス——と呼ばれたルーシャの獵虫は、奴の気を引くように前へ出る。

それを、翼で叩き潰そうとするバルファルク。

「見えてるにゃ！」

イルルはそれを察知していたようで、さつと横に跳んで躲した。イリスもまた、軽々と掻い潜ってその鋭い頭部を全身で殴りつける。

「俺の言ったことは覚えてるな！ あいつの翼をよく見ろよ！」

「先端が向いたら刺突！ 翼口が向いたらエネルギー放射！ もしくは今みたいな平手打ち！ 覚えてるよ！」

そう言いながらルーシャは飛び出して、空からバルファルクへと斬りかかった。

それを、奴はひらりと躲す。横に跳んで、啄つばむように鎌首を上げた。

「たあつ！」

その頭に向けて、ヒリエツタは重い大剣を振り下ろす。

攻撃の体勢に入れば、咄嗟の防御も回避も難しい。バルファルクは避けることも叶わず、悲鳴を上げながら仰け反った。

「ヒリエッタナイスー！」

「軽口叩いてないで！　すぐ来るわ！」

地面を穿った大剣を引き上げながら、ヒリエッタはそう叫ぶ。

彼女の言葉通り、バルファルクは既に体勢を整えていた。あの翼をぐるりと反転させ、槍のように鋭い切っ先を向ける。

「うっ……………」

それが、瞬時に突き出された。

一瞬で倍近い長さまで伸びたそれに、ルーシヤはぎりぎりのところで躲す。鎧の右肩当てだけが躲し切れず、その部分が勢いよくは弾け飛んだ。

「あっ……………ぶなあ……………」

相当ひやつとしたらしい彼女は、ふらりと体勢を崩しかける。

「……………ッ！　薙ぎ払いがくる！　しやがめ！」

「えっ……………」

「ルーシヤさん！」

奴の翼の動きは、未だ止まらない。仕留めきれなかった刺突を、周囲を薙ぎ払う斬撃へと変えた。

ヒリエッタが奴から距離をとる一方で、足をもつれさせたルーシヤは大きく隙を晒

す。そんな彼女に向けて、イルルが飛び付いた。

飛び付いて、うつ伏せになるように地面に転がって。

「わっ!」

「顔上げちゃだめにゃ!」

二人の頭上を、双剣のような両翼が駆け抜ける。

そんな銀の一閃が振り切ったところで、俺は駆け出した。勢いを失ったその翼を踏み台にして、高く宙へ跳び上がりながら。

その頭に向けて、俺は両手を伸ばす。

「頭がから空きだあッ!」

「旦那さん!」

掴んだ甲殻からは、どこかひんやりとした感触が伝わってきた。

思わず滑りかねないそれに爪を喰い込ませながら、両脚には首を絞めるように力を入れる。

突然頭を掴まれて、甲高い声を上げるバルファルク。それに負けないように、俺も声を張った。

「イルル、ルーシヤを離れさせろよ! ヒリエッター! こいつの尻尾をよく見てくれ!」

「尻尾!」

「新しく生えてる部分があるはずだ！ この前一度切ったから、軟骨になつてると思う！そこを見つけてくれ！」

「……分かった！」

そう言つて、ヒリエッタは奴の背後をとろうと駆け回す。

その様子を見ながら、俺は斧を高く高く掲げた。

「おらあつ！」

先程ヒリエッタがつけたその傷痕に、俺は重ねるように斧を立てる。

その衝撃にバルファルクは悲鳴を上げた。痛みのみか、俺が斧を叩き付けた方向に体を仰け反らせる。

ここはダメだ。目の前にルーシャとイルルがいる。もう一撃必要だ！

「もつと左向け！」

ダメ押しのおかわりを受け、奴は苦しげに叫ぶ。

ぐるりと仰け反った奴の体に合わせて、俺の正面には太い幹が聳え立った。同時に振り切った斧の反動で、俺は大きく背後に弾き飛ばされるが――。

構わず、喉を震わせる。

「今だ！ ヒリエッタ！」

「見つけたわ！ 切れろっ!!」

振り下ろされる大質量が、奴の細長い尾を叩き潰した。

師匠に斬り落とされ、新しく生えてきた仮の尻尾。飛竜は軟骨で出来た仮の尾を生やすとは聞いていたが、それは古龍も同様のようだ。

所詮は軟骨。大剣の重さに耐え切れず、簡単に断ち切られた。

尻尾が突然軽くなり、バルファルクはバランスを崩す。

それに、尾を斬られるとなると相当な痛みが伴うのだろう。奴は驚いたように前に駆け出して、あの太い幹に激突した。

「つつしやあー！ ビンゴー！」

「すごいや旦那さん！」

「チャンスね！ それっ！ お返しよ！」

自ら頭部を強打させ、昏倒したバルファルク。その羽に向けて、イルルとルーシヤは刃を振るった。

ヒリエツタも俺も、自らの武器を振り被る。大剣が奴の甲殻に罅を入れて、俺の重斧は甲殻の隙間を穿った。

とはいえ、それもものの数秒で、バルファルクはすぐに起き上がる。そうして、憎々しげに俺たちを見て、甲高い声を上げた。

「んこやー！」

「うっ、うるさい!!」

「………こいつ、もしかして!」

喉元を震わせながら、奴は標的を定めた。

俺や、イルルたちを見ているわけではない。俺たちの背後にあるあれを、じろりと見つめていた。

薪の火を浴びて、悠然と熱を散らすダッチオーブン。

俺の努力の結晶そのもの。

「ちっ、三度目はねえぞ!! あれはこのあとフライパンで焼き目をつけるんだ!!」

「この状況でまだ料理のこと気にしてたの!?!」

奴が動き出す前に、俺は走り出した。

しかしそれに触発されたのか、奴もまた駆け出す。俺の背後から、どすどすと重い足音が近づいてきた。

「だああああ!!」

飛び出して、この鉄鍋を抱えて、横に跳ぶ。フタを思いきり手で絞めたもんだから、防具越しにじんわりと火傷してしまいそうだ。

それでも、奴に食われるよりはマシだった。

「ぐっ………!」

熱々のオープンと共に地面を転がる。

しかしそれを追い掛けるように、奴は啄みを仕掛けてくる。その一閃が鉄の表面を擦り、その衝撃に俺の力は思わず緩む。

中の肉が、露わになった。

同時に漏れ出る、低温ながらも十分熱い油。

「うおおあっちゃあッ!!」

防具の隙間から入ってくるその熱さに俺は思わず飛び上がって、ダッチオープンを放り投げてしまった。

しまった。

やらかした。

折角煮詰めていた肉が、宙を舞う。

「くっそ……せめてこいつだけでもッ!!」

舞う一本の肉に向けて、俺は手を伸ばした。

熱々のそれを掴む——と同時に、奴の翼の平手打ちが飛んでくる。

こいつ、肉が舞ったことに気づいてないのか。

「うおお——らあッ!!」

掴んだ骨を握り締め、その骨付き肉で奴の炎を振り払った。



片手剣のように炎を受け、逸らし、そのまま受け流す。

翼自体には何とか触れなかったようで、肉は弾け飛ぶこともなく無事だった。どころか、奴の炎を浴びてほんのり表面が焼けている。

「……………ん？」

なんだろう。

この鼻を通る香りはなんだろう。

「シガレット！ 前！」

思わず匂いを確かめていたところで、ヒリエッタの声が響く。

はっと顔を上げれば、翼口をこちらに向けている奴の姿があった。体内の龍属性エネルギーが充填され、俺に向けて射出される。

「うおっ……………ブレス……………!!」

想像されるブレスとは随分違うが、これもまごうことなきバルファルクの吐息だ。

淆瘴啖とは違う、随分澄んだその息吹は俺と、俺の手にあるこのホロホルルの鳥コンファイへと襲い掛かる。

澄んでいるといっても、それは熱と衝撃の塊であることには変わりない。思わず直撃してしまい、俺は大きく弾き飛ばされた。

「がはっ……………！」

ちりちりと、腰の金獅子由来の腰巻が焦げている。鎧自体は熱に強い素材なため、体が受けたのはほとんど衝撃によるダメージだ。

ただ、頬当てだけは熱に弱いため損傷が激しい。これは後から手入れしないといけないだろう。

「くっそ……」

ゴロゴロと転がって、衝撃を逃がす。肉を庇いながら転がるのは身体の負担も随分大きいものだ。節々が痛む。

それでも何とか起き上がって、頬当てを取り外した。焦げてしまったのか、少し嫌な臭いを感じたのだが。

同時に、露わになった俺の鼻孔に芳ばしい香りが入り込んできた。

「ん……？ んんっ!？」

焼けている。

左手で握っていたこの肉が、丁度良い焦げ目を浮かべて焼けている。

俺ごと巻き込んだあの炎で焼かれたのだろうか。程よい炙りが聞いており、随分といい香りがする。

「……まさか」

目の前にバルファルクがいるというのに、俺は自分を止められなかった。

恐る恐る、その肉を噛む。

パリッと張りのよいその皮と、中のもちつとした油の香りをよく含んだそれを、噛み締める。

「……なんだ、なんだこの旨さは……!？」

素材が生きている。

食材が活きている。

細胞の一つ一つが脈動しているようだ。噛む度に溢れる肉汁と、噛み締める度に筆舌し難い幸せな感触を顎に残す肉。

固いのか？

柔らかいのか？

そんなありきたりな言葉では当てはまらない。例えるなら、いや、それは例えでも何でもないかもしれないが——幸福感だ。噛む度に、幸福感を覚える。俺が今噛み締めているのは、肉の形をした幸せだ。

低温の油でじっくり火を通したおかげで、肉は骨の周りまで優しい桃色に染まっている。皮は油を十分に吸って、橙色や黄色に近い。わざわざ垂皮油を加工して香りを高めただけあり、噛んでいる時の鼻を抜ける風味の良さも尋常ではない。

ホロホールの身は、肉厚でコクがあり、ジューシーでいてとろけるように旨い。特

産ゼンマイやタイムの葉、その他さまざまな野草を加えてみたが、それが肉の臭みを打ち消し、それでいて脂のくどさを紛らわせているようにも感じる。ホロロホルル、これは単体でも旨い鳥に違いない。

だが、これは。

これは明らかに、異常だ。

「…………お前ッ！ お前の炎は…………ッ、まさか…………」

肉が生きている。

奴の龍気に当てられて、死んだはずの肉が、細胞が眠ったはずの肉が目を覚ました。

まさに活性化だ。

あの時のイャンクッククの肉をふと思い出す。狂竜ウィルスに当てられて細胞が劣化したはずなのに、奴の炎を浴びて命をぶり返したような味になったあの肉を。

奴の炎は、もしや最高のスパイスなのだろうか。

龍属性は、命の源だ。その龍属性のなかでも、特に鮮度の高い奴のあの炎は、もしや素材を活性化させる力がある？ 素材の旨みを、何倍にも引き立てる力があるのか？

「これは…………これはピッタリじゃないか、あの食材に…………!!」

どう足掻いても、旨く調理することができなかったあれ。

流石の俺も諦めて、氷海の氷の中で眠らせるしかなかったあれ。

こいつの炎ならば、淆瘴啖を美味しく食べることができると、俺は確信した。

「——よそ見してんじや、ないわよ!!」

ヒリエツタの声が響く。

それが、俺を食い破ろうとしているバルファルクの目元を穿った。

大剣に弾かれて、バルファルクは血走った眼で彼女を見る。

一撃の威力が最も大きいのは彼女だ。それにより、頭部を殴り付けられ、さらにはやっとなえてきた尻尾まで切り落とされた。

バルファルクが怒るのも、もつともだろう。

「わっ!」

「にゃあ!」

再び、奴が甲高い声で吠える。

吠えて、その全身から龍の炎を噴き出させた。

「……ッ!? なんだ!」

「形態変化……っ!」

日の光を跳ね返すだけだったその甲殻は、どこか藍色を帯びたような色だったのに。

今やそれは、全身から出る炎の緋色を映していた。

「ヒリエッタ！ 避ける！」

「ぐっ！」

奴は、全身を翻す。体を捻らせて、その槍のような翼を振り上げた。

狙うは、側面にいる赤い鎧の少女。大剣を収める彼女に向けて、その太い杭を叩き付ける。

「くう……！ 私狙いつてわけね、上等！」

ダイブして避けたそれを横目に、彼女は駆け出した。

バルファルクから距離をとる。しかし奴も、それをただ見ているわけではない。

「ヒリエッタ！ 後ろから来るよ！」

「にゃー！ こつち向けにゃー！」

イリスと、イルルの投げるブーメランがバルファルクの体を削る。

その後を追うように跳ぶルーシャ。操虫棍に備え付けられた射撃機構の反動で、前へと空中を駆けた。そのまま、奴の背中に向けて渾身の連打を叩き付ける。

だが。

「……うそつ、痛くも痒くもないの!?!」

奴は、それもまるで気に留めなかった。

彼女の攻撃なんてまるで始めから無かったかのように、喉を「くるる」と鳴らしながら赤い鎧の背中を見つめ続ける。

直後、咆哮。同時に、走行。

全身から炎を迸らせ、ヒリエッタに向けて走り出した。

「受けた痛みは、倍で返すっ！ 来い！」

ヒリエッタは、特殊な構えで大剣を引き抜いた。

あれは、例のベルナの講習で実演を見たことがある。

剣の前に構えることで前方からの衝撃を受け止め、むしろその衝撃を生かして大振りの叩き付けをするという狩りの技。確か――。

「『震怒竜怨斬』か……ッ！」

駆け足で迫るバルファルク。光を弾く鋭い上下の嘴を、奴は忙しく叩き続ける。

おそらく、ヒリエッタは啄みが来ると読んだ。

先程から何度もそれをやっていたのだ。ルーシャに向けても、俺に向けても。

だからこそ、彼女はそう読んだのだろう――奴の足取りは、啄むための走りとして見るには少し違和感を覚えた。どころか、翼から勢いよく炎を噴かせ始める。

「……ッ！ ヒリエッタ！ ダメだ避ける！」

「――え……」

一瞬。

バルファルクはたった一瞬で炎を噴かせ、目にも止まらぬ速さで急加速した。走るのではない。地上擦れ擦れで、飛んだのだ。

点が面となって迫ってくる。彼女の視界は、きつとそんな風景が映つただろう。

あまりの威力に、彼女の構えた大剣は容易く折れた。それによつて弾き飛ばされた彼女は、勢いよく地面を転がっていく。

「ヒリエッタ！」

「ヒリエッタさん!!」

大地を激しく削りながら、バルファルクは自らの加速を止めた。

その爪を軸に方向転換し、奴はうつ伏せに倒れ伏すヒリエッタを見定める。

それがどんな気持ちの表れかは分からないが、奴は甲高い声を上げてもう一度加速した。再び、あの炎を瞬かせながら。

「にやつ、ダメ——つっ!!」

俺も、ルーシヤも、イルルも走り出す。

だが、バルファルクの速度には到底追い付けない。

武器を砕かれ、体中から血を流すヒリエッタは、起き上がることもできず迫る奴の姿を見るしかできなかつた。あのまま二度目をぶつけられたら、きつと——。



「……イズ……モ……」

彼女のか細い声を呑み込むように響く、轟音。

「——ッ！」

木が、音を立てて倒れる。

バルフアルクが駆け抜けたことよって、あの太い幹が大きく削られた。倒れる巨木と共に、大量の花や葉が舞い散った。

どこかこの風景に似つかない、桜のような花びらが混じって風に舞う。

チン、と刀が鞘に納まる音が響いた。

それと共に、木をえぐったバルフアルクが、大きく血飛沫を上げる。

「なっ!？」

「今、何が……!？」

ヒリエッタは、無事だった。

全身を留めたまま、その花びらに見惚れるように刀の持ち主を瞳に映す。

「……『桜花気刃斬』……?」

遅れた斬撃で分からなかったが、あの刀は確かに奴の軌道を逸らしていた。

ヒリエッタを薙ぐそのギリギリの距離を刀で切り上げて、あの超加速に巻き込むのを避けていたのだ。

その斬撃の張本人が、納めた刀を杖のように地面へと突き刺す。長い太刀を支える腕が、微かに震えていた。

「にやつ、あれは……」

「——イズモツ!？」

全身を泥と傷で汚した、泡狐竜の装備をまとう黒髪の子。

すらすらとした長身で、長く伸ばしたその髪をひとまとめにした彼は、溜まりに溜まった思いを吐き出すように、大きく息を吐いた。

震えた声が、腕と同じように諤々と震えた声が響く。

「……っはあつ、やった! やつてやったぞこのヤロー! はっ、はあああ……やつたつ、やったんだあ、オレえ……!」

耐え切れなくなつたように尻もちをついたその男は。

この情けない表情で顔を満たすこの男は。

「イズモ……! 生きてたな全く!」

「イズモさん……! 良かったにやつ、ほんとに良かった……!!」

「はあ、はあ……シグ、イルルちゃん……へ、へへ……」

長い間この森を彷徨っていただけあつて随分肌荒れも進み、髭も伸びているけれど——こいつは確かに、俺の旧友で間違いないようだ。

「イズモ……アンタ……」

ヒリエツタは、呆然とした様子で手を伸ばす。

イズモは荒い息ながらもそれに気づき、へらつと笑いながら同じように手を伸ばした。

「……ヒリエツタ……元氣？ 生きてる……？」

「生きて……る……」

「へへへ……良かつ、た。追い付いた時には、こんな風でさ……オレもう無我夢中で……」

「アンタ……そんなボロボロになつてまで……」

「やつと、やつとだあ……今度こそ、君を……守れ、た——」

その手をとつて、噛み締めるようにそう言つて——イズモは、糸が切れたかのように倒れ伏す。

「ちよつと……イズモ……っ！」

倒れるイズモを揺すろうとするヒリエツタを制し、ルーシャは彼の脈を確認した。

「大丈夫、疲労がたまつてるだけ！ 死んではないよ！」

彼はまだ死んでいない。生きている。

その事実、俺とイルルはほつと息をつくもの——。

「……このままじゃ戦えねえ。さてどうやって退散しようか……」

イズモの斬撃を受けてなお、バルファルクは倒れなかった。探していた者をようやく見つけたのか、憎々しげに唸り声を上げる。

「俺がイズモを担いで、ルーシャがヒリエツタを担ぐ。あとは隙を作りたいが……」

「旦那さん！ ボクに任せて！ そのために、この樽を持ってきたのにや！」

イルルがぱつと前へ躍り出て、その背中の樽を手を取った。

彼女の体とそう変わらぬほどに大きなそれを、その小さな体が大砲のように構える。

それは明らかに、小型の大砲だった。

「ドングリ閃光弾にやー！ みんな、ぼるふあーくの方を見ちやだめにやー！」

「バルファルクな！ 分かった！ 走れ!!」

火薬の弾ける音と共に、大粒の弾が飛び出した。

アイルーお手製の火薬と航空技術を用いたそれは、予想とは随分と違う、鈍い速さで飛び出すけれど――。

一体これは何だ？ と言いたげにバルファルクが首を傾げたところで、一気に炸裂した。

「うおっ……!!」

「うひゃあつ!!」

「んなあ!!」

イズモを担いで走る俺。

ヒリエツタを担いで走るルーシヤ。

殿を務めながらも背後を見ないように前を向くイルル。

そんな俺たちの背中を凄まじい閃光が焼いた。

バルファルクは、超高高度に生息するモンスターだ。

そのため、リオレウスよりもさらに視力が発達していると俺たちは推察していたが――

――どうもビンゴだったようだ。

「バルファルクの悲鳴が聞こえる! やっぱり閃光に弱いんだね!」

「やったな! ナイスだイルル!」

「にやー! このままキャンプまで退散だにやー!!」

背後からは、奴の悲鳴が聞こえてくる。

目をやられ、視界を閉ざされて狂乱する奴の声が。その暴れる様子はきつととても恐ろしいが、奴は俺たちを視認できていない。視界に頼り切っていたからこそ、他の手段で俺たちを追い掛けることはできないのだろう。

今なら、人を担いでも逃げられる。

奴のおかげで他のモンスターも出てこない。イズモの救出は、これでなんとか遂行完

了だ——。

「——なあ、シグ……」

「あん？　喋らない方がいいぞつ、黙って眠つてろ！」

「……オレ、おかしくなっちゃったのかな……」

自嘲するように、肩に担がれていたイズモが言葉を溢す。

その言葉は、バルファルクの声に掻き消されるほどか細いはずなのに。

俺の耳には、よく届いた。

「……聞こえるんだ。地の底から、あいつの声が……」凍土の時”みたいに、さあ……」

く本日のレシピく

『ホロロホルルの鳥コンフィ』

・夜鳥のもも肉（骨付き）……………2本

・垂皮油……………たっぷり

・特産ゼンマイ……………20g

・タイムの葉（古代林産）……………1枝

・ベルナローリエ……………1枝

・モガモガーリック……………1片

・塩胡椒

……適量

☆バルファルクの炎に当てると旨みが格段に増す。

## 旨みと野望を挟み込め！

パチパチと火が跳ねる。

古代林の夜は、随分と静かだった。

「……それ、本当なのにな？」

「さあ、実際どうかは分かんねえけど……」

森を抜けた高台に設置されたこのベースキャンプでは、月明かりと焚火の灯りだけが視界を確保できる材料だ。

そんな焚火を囲うようにして、俺はくるとフライパンを回した。

裏返ったフライパンは、重力に則ってその中身を焚火に落とす——なんてことはなく。

裏返った面も、そしてその裏も、どちらも金属のプレートで埋め尽くされている。いわば、両面のフライパンだ。それが二枚、貝のように重ね合わせるようにして、中のものへと静かに熱を伝えている。

「……潰瘍瘵、死んだんじゃないのにな？」



「俺もそう思うよ。あの状態で生きているとは思えない——けど、俺はあいつがくたばる姿を想像できない」

「……絶海の孤島なのに……」

「俺たちが前戦った場所はどこだ？」

「にや……氷海だったにや」

「そういうことだ。あいつには陸も海も関係ない。……と言つても、今回は流石に距離が開き過ぎているのは気になるけど」

そう言いながら、再びフライパンをひっくり返した。

焚火を受けて、静かに炎の色を映している。

「……でも、イズモさんがそう言つてたんだにや？」

「ああ……『地の底から、あいつの声がある』って。あいつは冗談ばかり言うけど、こんな状況でそんな冗談を言うほど腐つてもない」

「もつと詳しく話が聞けたらいいけど、にやあ……」

「仕方ないさ。十日近い間、バルファルクを避けながら一人で食い繋いできたんだ。今は休ませてやろうぜ」

イズモは、一人でこの森を生き抜いていた。

未知の古龍がうろつく森で、仲間を逃がすために囚になつて耐えていたのだ。奴の気

を引くために戦つて、隠れて、戦つて、隠れての繰り返し。精神をすり減らしながら、必死に囹役をこなしていた。

俺たちと再会した時も、次の戦闘に向けてバルファルクを追い掛けて——辿り着いた瞬間が、ヒリエツタが大きく吹き飛ばされた時だったらしい。

「うにゃ。イズモさん、無事でいてくれてほんとに良かったにゃ」

「だな。あんなおちやらけてたのに、すっかり腕上げてたなあいつ。負けてらんねえぞ」  
「にゃあ。やつぱり旦那さんの友達は凄いのにな」

「友達……そうだな。友達だな」

あのバルファルクとの戦闘から、随分と時間が経った。

古代林を夜が包み込み、あたりは静寂に飲まれてしまっている。バルファルクは今もこの森のどこかで俺たちを探し回っているだろうが、流石にここまで追ってくることはなかった。イルルのおかげで上手く撒けたらしい。

本当に、目に頼り切った生き物なのが功を奏したようだ。もし鼻が利くとしたら、こゝも簡単に逃げることはできなかっただろうから。

「……ヒリエツタさんは、大丈夫かにゃ……」

「ルーシャが診てやつてくれてるが……今回はもう、狩りは無理だろうな。でも、二人とも生きてる。それが一番だ」

「あとは、このまま無事に帰れたらいいんだけどにやあ……」

飛行船の操縦士たちは、夜が更けても真剣な顔で話し合いを続けていた。

このまま全員乗せて、脱出すればいいのではないか。

バルフアルクに見つかった場合、対処の仕様がなから危険だ。

怪我人もいるのだから、早く拠点に戻るべきだ。

バルフアルクがここに留まっている以上、誰かが囹にならない限り逃げることはできない。  
——などなど。

それぞれの意見をぶつけ合い、この状況を打破するために頭を働かせている。

「とりあえずみんな旨いもん食べばいいのに。それから考えたら頭もきつとよく働かせ」

「それでさつきお米炊いてたのにや?」

「そうだな。とりあえずみんなおにぎりにしといたけど、誰一人食おうとしねえ。飯を食わなきや何にもならないのにな」

「じゃあ、旦那さんは今何を焼いてるのにや?」

「これはホットサンドだ」

「ホットサンド?」

「あつたかいサンドイッチつていうの？ この両面フライパンで、パンに焼き目をつけて中に火を通すつていうね。どれどれ焼け具合は……んー、もう少し焼いても良さそうかな」

フライパンの留め具を外して開いてみると、ほんのりと薄茶色に染まった生地が目に見える。

もう少し火を通して良さそうだ。そう思いながら、俺は再び両面を丁寧に合わせて。

「……」飯炊いたのに、パン？」

「いやー、重くなるからつて米はあんまり積ませてもらえなかつたからさ。全員分を考慮したら俺たちの分がなくてな。いや、正確には二個俺の夜食用にとつておいてあるんだけど」

「そ、そうかにや……」

「で、折角だしベルナ村でシモフリトマトとか山羊鹿のチーズとかいろいろ買い込んだから、それでキャンプ飯でもしようかなと」

「確かに、サンドイッチとよく合いそうなラインナップにや」

「挟んで焼いたら旨そうだよ。てか、イルルもパン好きだよ？」

「にや……うん」

そう尋ねてみると、彼女は照れくさそうに頷いた。イルルは案外、ご飯よりパン派な

のかもしれない。

「食材にして、カットしたマスターベীগルを二枚、シモフリトマトの輪切りにホロロースの切り身、砲丸レタスの葉を数枚、そしてムーファチーズ。味付けはこれも特注、黄金印のマキシ・ママにオニキスペツパーだ。旨いぞ〜これは」

「名だたる高級食材が並んでるにや……単価いくらなのにやこのサンドイッチ……」

「チーズも溶けてきたし、トマトの果汁も良い感じかな。隙間から汁が染み出してきてる。中身はつと……どれどれ」

「にやあ〜つ、良い焼き目にや!」

とてとてとこつちに回つてきたイルルが、俺の膝に手をつけてフライパンを覗き込む。

その中身は、彼女の言う通りこんがりとした焼き目がついたホットサンドの姿があった。香りも十分。チーズの溶け具合も最高だ。レタスは焦がしたくないのでざく切りにしたものをホロロースとチーズの間に挟んだが、これもほどよく脂と果汁を吸っている。

「うん、良い感じだな。じゃあこれをひっくり返してと……。イルル、半分に切つてくれるか?」

「がつてんにや!」

砂を拭きとった平面の石の上に向けて、フライパンをひっくり返しながら押し付けた。

引き上げてみれば、そこには十分に焼けたホットサンドが横たわっている。それに向けて、俺の腰のポーチから剥ぎ取りナイフを引き抜いたイルル。

綺麗に二等分。俺たちのホットサンドの完成だ。

「へっへっへ……こうやって少し贅沢できるのが料理担当のいいところだな」

「料理担当……担当っていうか、旦那さんが勝手に作ってるだけにや？」

「それを言うな。ともかく、食べようぜ」

重さが半分になったそれを掴むと、とても熱い。

焼き立てのサンドイッチなのだからそれも当然なのだが、やっぱり熱い。

「あっちやっちや！」

「にやあ！ 肉球が焼けちゃうにや！」

「うーん、これは……ほれ、ナイフとフォーク」

「にや、にやあ。ありがとうにや旦那さん……旦那さんは？」

「まあ、持てないことはないし。イルルの肉球だと辛いだろ？ 遠慮しないでいいから、

使いなよ」

「じゃ、じゃあ……お言葉に甘えて……」

熱々なそれを手づかみで、俺はわしゃっと口にした。

イルルも食べやすいサイズにそれを裂いて、そっと口へ運ぶ。

「……ん！ 旨いなこれ！」

「んにゃあ、おいしい！ あったかいサンドイッチって、何だか新鮮だにゃ〜！」

サンドイッチのはずなのに、熱い。

中の具に至るまで、しっかりと熱が通っている。とろけるチーズの具合は、もはやチーズトーストのそれに近かった。両面トーストされたサンドイッチ。まさにその一言が尽きると思う。

サクツとフワツが二重螺旋構造のように織りなすマスターベーグルの旨み。甘く、まろやかで、それでいて後腐れのない。

そのパンの壁を突破すると、シモフリトマトの柔らかな温もりに辿り着いた。よく火を当てたおかげで熱をこもらせたその身は、噛む度にジューシーな果汁を搾り出す。生野菜特有の青臭さはとうに消え失せて、脂とバターで混ざり合った旨みに満ちた香りを解き放っていた。

同時に現れるのは、ホロロースだ。ホロロースの胸肉を薄く切り身にしたそれは、シンプルな味わいながらも非常にあっさりとしており、くどくない脂をトマトに染み込ませている。食感は皮とも腿とも異なり、噛み応えのそれほどの柔らかなもの。これ

はこれで、サンドイッチの噛み心地とよくマッチしているだろう。

その奥から顔を出すのは、レタスのシャキシャキとした食感。これがまたいいアクセントだ。チーズに溺れてまるやかになっていく食感のなかで、最後の抵抗を見せている。みずみずしい野菜の香りを懸命に広げようとするが——最後には、全てチーズに呑まれていった。

「んなあ。ほんとに美味しいにや、チーズ。パンとの相性が抜群にや！」

「ほんとだな。チーズフォンデュの時といい、素晴らしい。あー、たまらん」

「おいしいから、これくらいならペロリと食べちやいそうにや」

「もうペロリと食べちまったよ」

「にやっ、早すぎるにやあっ」

嬉しそうにハグハグと食べるイルルを見ながら、俺は空になった両掌をふりふりと見せた。

パン二枚分とはいえ、半分にカットされたサンドイッチだ。大の大人なら、そう苦しむこともない量だろう。

「旦那さん、そんだけで足りるのにや？」

「俺には夜食があるからな」

「そうだったにや……。でも、夜食なんて、何でまた？」



「このまま立ち往生してわけにはいかないだろう?」

そう言いながら、俺は革袋に溜めた水をフライパンに注ぐ。表面にこびりついた焼き目を水が潤わせ、汚れを浮かせようとし始めた。

キャンプでは、洗いものもままならないものだ。とりあえず最低限の汚れは取り除いて、本格的な洗浄と手入れは帰還してからにしよう。

そう思いながら、俺はテントに向けて歩き出す。

「……旦那さん」

「腹ごしらえはできたな」

「……行くのにな?」

「何だか、あいつの臭いがする気がするんだ——」

荷物を取りにテントを開けると、おにぎりを口にしてているイズモと目が合った。

「あ。シグ……」

「イズモ……もういいのか?」

「うん。久しぶりに、すっかり眠らせてもらったよ。おかげで、夜中に目が冴えちゃった」

そう言って屈託なく笑う彼の奥には、ベッドで横になって包帯に身を寄せるヒリエツタと、彼女の手当てで疲れ切ったのかベッドに突っ伏して眠るルーシャの姿があった。

助けに行つた奴らが眠りこけて、助けられた奴が元気に飯を食べている。いや、これでいいんだろうけど、何だかいろいろ言いたくなる光景でもあつた。

——全員、元気に生きているのだから。そう思うからこそ、俺はそれ以上何か言うつもりもないけれど。

「おにぎり、旨いか？」

「うん、旨い。流石シグだ。ユクモの心がよく出てる」

「俺はユクモ村出身じゃないけどな」

「でも、関わりは深いでしょ？ オレの好きな味付けだよ。てか、オレもユクモ村出身じゃあないけどねっ」

懐かしの味、なのだろうか。

包帯に包まれた体で、嬉しそうにおにぎりを頬張っているイズモ。その様子を見ると、俺も無性に腹が減ってきた。先程ホットサンドを平らげたばかりなのだが——やっぱりあれじゃあ足りないな。

「あーでも食い足りないよシグ！ もっと高カロリーな奴でもいい！」

「いつかみたいに、こんがり肉にしてやれば良かったか？」

「いいねそれ！ ほしいな！」

「無えよバーカ。皮肉も通じないのか」

「え？ 皮肉？」

「俺が手負いになった時は、お前これ見よがしにこんがり肉食ってただろ」

「……あー……いつの話してんだか……言われるまで気づかなかったよ」

「食い物の恨みは恐ろしいってな」

イズモは、ちよつと困ったように笑った。

俺の意図に気づいているかのように。

いや、きつとこいつは分かっている。

「……行くのかい？」

「……行くさ。ここまで来たなら、俺は前へ進むだけだ」

「俺の幻聴かもしれないよ」

「それならそれでいい。俺はバルファルクを退けて、飛行船を飛び立てるようにしてやるさ」

「……」

「……バルファルクには、勝てるのか？」

「お前が随分削ってくれたからな。それにあいつの動きはもう覚えた。古龍といえど、

三回も動きを見せられたらな」

「そりゃ、頼もしいことで……」

「くんと、おにぎりを呑み込んで。」

イズモは、その包帯だらけの顎を動かした。

「……今回ばかりは、俺はもう何の力になれないよ。それでも、君は行くのかい？」

「……ああ」

「誰も助けに來ない。深い森の中で一人ぼっち。それでもまだマシな方さ。生きているんだから。最悪——いや、口にするのはやめとくけど。それでも？」

「行くさ。長年求めてたものが、すぐ傍にあるんだ」

「……君はまだ、復讐に憑りつかれているの？」

憂うように、イズモは言った。

哀愁に満ちた眉の曲げ具合。昔から、この手の話になるとこいつが見せるいつもの表情だった。

だが、今は昔じゃない。

今は今だ。

俺は、彼の言葉を真つ向から否定する。

「いいや、違う。俺は知りたいだけなんだ」

「……知りたい？」

「ちゃんと調理された肴瘴啖はどんな味がするのか。俺はあいつを殺して、否定したいんじゃない。ちゃんと味わって、あいつの生きた証を肯定したい」

「シグ……」

「やってることはみんな同じさ。みんな、生きるためには誰かを殺さなきゃいけないんだ。だから、淆瘴啖は悪じゃない。あいつはただ生きているだけだ。そういう意味では、俺もあいつも変わらない。生き延びて、生き延びて、こうして古代林にまで辿り着いんだろう、きつと」

「……………」

「あいつは島を滅ぼすほどの力を持つてるから。だから、ハンターとして俺はあいつを狩る。でも、ただの道具として扱いたくはない。鬱憤を晴らす肉の塊としても見たくない。俺はあいつを、旨かった命として心に刻みたいんだ」

「認めたい、ってことか?」

「認めたい——そうだな。認めたい。俺はハンターとして、あいつをただの一モンスターとして、命として認めたい」

「……………そうか」

「んで、強いて言えば美味しく味わいたい」

「……………ぷつ。ふははつ、シグらしいや。……………うん、シグらしい」

イズモは、笑った。

愉快そうにそう笑った。

「……うん、安心した。行つてきな。んで、ぜひ確かめて来てくれ。死ぬなよ、親友」  
「親友とまではいかないけど、任せろ。友よ」

「さりげなく辛辣……」

互いの拳を軽く打ち合つて、俺はキャンプを後にした。  
いつかの凍土のような後ろめたい気持ちはない。

逸る思いを抑えようとする胸の痛みもない。

俺はただ、食べたいだけだ。

淆瘴啖を、食べたいだけなんだ。

必要な荷物を手にしてテントから出ると、心配そうにこちらを見つめるイルルの姿が目に入った。

「……旦那さん……」

「イルル。俺は、森に戻る。バルファルクをこの島から追い出して、淆瘴啖の声を辿る」  
「……にゃ」

「ついてきてくれ、とは言わないよ。危険は承知だし、イルルを巻き込みたく——」  
そう言いかけたところで、イルルがひしつと抱き付いてきた。

彼女の身長では、背伸びしても精々俺の胃袋くらの高さしか届かない。

それでも、彼女はその小さな体で必死に俺にしがみついた。

「……ついてく。ボクは、旦那さんとずっと一緒にいたい」

「イルル……」

「旦那さんを一人にしたくない。ボクは、あなたを守りたい……から」

たどたどしくも、彼女はアイルーの訛りを必死に消して言葉を伝えてきた。

そんな彼女を抱きかかえる。

視線を同じにすると、月の光を呑み込む彼女の瞳がよく見えた。

本当に、海のように綺麗な瞳だ。

「お前が俺の相棒でいてくれて……嬉しいよ。行こうか、一緒に。バルファルクを追い出すぞ」

「……うにゃ! ……あつ」

「はは、無理して人間語に合わせなくてもいいって。気持ち、十分伝わったから」

そう言いながら、俺は彼女の額に唇を押し付ける。

ふんわりとした柔らかい感触が伝わってきた。

わたあめのように、柔らかい。



「らあッ！」

大斧を振り被って、奴の頭を殴りつける。

それに呻き声を上げながら、しかし奴は翼を振り続けた。

「にやつ、にやつ！」

繰り返される鋭い刺突を得意の小回りで躲すイルルは、懐からブーメランを取り出して投げつける。それが集中的にバルファルクの前足の先を切り裂いて、奴は苦しそうに腕を引っ込めた。

夜闇に包まれていると、奴の体から溢れる炎がよく分かる。

深い森の中でも、この炎のおかげで奴を探すのには苦労しなかった。日中の戦いの場に未だに居座っていたのも、見つけやすかった理由の一つだが。

ついでに、俺が溢した残りの肉は見事に無くなっていた。こいつに食われたのだろうか。

「……三度目だ、この野郎」

「旦那さん……」

「まあ状況が状況だったしな。今回は勘弁してやる」

「旦那さん……！」

前脚をふりふりと、痛みを逃がすような素振りをするバルファルク。



その妙に人間染みた動きが気になるが、奴は古龍だ。人じゃない。

だから、こうやって話し掛けても無駄なのだろうが——それでも俺は、こいつに言葉をかけ続けた。

「この前の雪山みたいに、お前をここから追い出してやる。覚悟しろよ!」

「……そういえば、旦那さんはこの子を食べてみようとは思わないのにや?」

「うーん、興味ないことはないが……それよりこいつには、スパイス的な役割を優先してほしいな。次は氷海に降りて来い! マジで! 淆瘴啖の肉を旨くするの手伝ってくれ!」

「……これはこれで、欲望がダダ漏れだにや……」

バルファルクは、淆瘴啖の肉を旨くする唯一の手掛かりだ。

ここで俺が狩ってしまうわけにはいかない。こいつはここで良い感じに弱らして、撃退させなければ。

バルファルクは、昼に見せたあの状態のままだ。全身から、緋色の炎を噴き出している。これまでに見せたことのない、こいつの真の姿——なのだろうか。

「目には目を、歯には歯を……龍には、龍だ」

剣斧のグリップを握り、回転させた。

ぶしゅつと、斧から蒸気が噴き上がる。同時に刀身のレールを二つの刃が走り、一本

の長い刃へと繋ぎ合わさる。じやらじやらと鎖が唸り、グラバリダは真の姿を現した。  
「さあ、踊ろうぜ！」

ざんつ、と剣を振り下ろし、そのままグリップを解放。

直後に剣斧に内蔵されたビンの蓋が開き、中に込められた赫い龍液が煮え滾る。同時に大きな負荷がかかり、その負荷に背中を押されるように、俺は走り出した。

ただの走行か？ いや、違う。奴の真似ではないけれど、ビンエネルギーによつて加速する超速ダツシユだ。

『滅龍ビン』——このスラツシユアックスに内蔵されたビンは、バルファルクから得られた液体を主として作られた龍属性の塊だ。あの澄んだ炎が清瘴啖の血肉と混ざり合い、濁った色を映し出す。

「らアツ！」

振り上げた剣斧に肩を斬り裂かれ、奴は悲鳴を上げた。

しかしそのまま跳躍。俺の真横をとり、その翼を大きく振り上げた。

「させるか！」

翼を広げた叩き付け。あの筋肉の動きはそれだろう。これだけ見せられれば流石に覚える。

グリップを捻り、剣形態から斧形態へ移行。同時にリーチが格段に伸び、その斧は奴

の翼の付け根を弾いた。

「うみゃんっ!」

それにより狙いを外された奴の腕は、真横の大樹に突き刺さる。その轟音にイルルは思わず跳び上がるが、それでもブーメランを投げ続けた。

一つ一つが奴の甲殻に突き刺さる。超硬質のそれは、普段ならばネコの力のブーメラなどにはまるで応えないだろう。しかし今は、俺たちに、ヒリエツタに、ルーシヤに、そしてイズモにつけられた大量に傷痕がある。特に、大剣と太刀による傷は深い。小さくか弱いブーメランも、その傷を抉ることでバルファルクに確かなダメージを蓄積させていった。

「……ッ! キレてんな……ッ!」

バルファルクが怒りのあまり吠える。

その甲高い咆哮と共に、奴は一心不乱に翼を繰った。

真上からの刺突。

背後へ跳んで躲す。

もう片方の翼での追撃。

今度は奴の懐に潜り込んで、剣状態で二度斬り上げた。

奴は懐の俺を射抜こうと、翼から赤い光を漏らす。

その閃光を、剣で振り払って凌いだ。

ところが奴は、そのブレスの反動で後ろに跳び、さらにもう一度翼を瞬かせる。

散弾のようにバラバラと飛ぶそれは、前に走ることで回避。同時に剣を構えて首下へ潜り込んだ。

「隙ありだ！」

「旦那さんっ！　そこにやー！」

首筋に向けて、二回。ビンの力で加速する斧を叩き付ける。

それに奴が仰け反って、さらなる隙が現れる。

「ここだ。ここしかない。」

「食らいやがれッ！」

踏み込んだ。斬り結んだ脚をそのまま、前へ。

覇竜の足が古代林を激しく踏み均し、同時に剣を、奴の胸元へ深く深く突き立てる。

ビンの蓋は、開き切った。

中に詰められたエネルギーが、溢れ出す。

どん、と弾けたエネルギー。スラッシュユアックスの真骨頂。属性解放突きだ。

それに当てられ、バルファルクは悲鳴を上げる。

「——まだまだだッ！」

さらにもう一度、エネルギーが炸裂した。

グリップを捻り、絶妙なタイミングでピンと刀身の接続を断つ。それによってエネルギーの供給が途絶えるため、本来一度で全て解き放つはずが、二度の炸裂になるのである。

確かに、一撃当たりの威力は下がるかもしれない。しかし、立て続けに二度叩き込むことで、傷にさらなる傷を重ねる。これがこの技の正体だ。

「……さて、どうだ」

「にやあ……直撃だったにや。まだ、立つのにや……う？」

反動を小分けにしたことで、普段の属性解放ほどの反動もない。俺の体への負担も少ないのが特徴だ。

斧形態に戻し、ピンを排出。かなりのエネルギーを消費してしまったため、新たなピンに取り換える。

一方でバルファルクは、今の二発が相当堪えたらしい。ふらふらと覚束ない足取りで、俺たちから距離をとった。

「……朦朧としてるように見えるにや」

「ほんとだな。おい、お前！ もうやめとけ！ 早くここから去れ！ あと肉を美味しく焼け！」

「たくさん注文したらこの子も困っちゃやうにや」

「そうだな……おい！ 肉を旨くしやがれ！」

「順序が逆にや！ まずはこちらから——」

イルルがそう言いかけた、その時だ。

奴が、その傷だらけの胸から妙な金属音を立てる。

そう、それはまるで深呼吸でもしているような。壊れた機械が、あたりの空気を取り込んでいるような、そんな音。

同時に、翼に激しく炎が灯る。

「にや……」

「イルルっ！ 危ねえ！」

「ふやっ……!!」

はっと気づいて、イルルを抱き締めてダイブ。

真横に跳んでいなかったら、俺たちはきつとバラバラになっていたに違いない。そんな恐ろしい勢いで、奴は飛び立った。あつという一瞬で、大地を抉って天高くまで舞い上がる。

「……」

「……び、びっくりしたにや……」

「……はあく、なんだよあいつ……やべーだろマジで……」

「旦那さん、ごめんなさいにや……ボク、動けなかつたにやあ……」

「気にするな。あのままじゃ二人仲良く挽肉だったな。いや俺も、よく動けたもんだよマジで……」

この藍色の夜空に、奴の眩しい緋色が吸い込まれていく。

ぐんぐん小さくなっていくその影から、奴はここを後にして飛んでいったのが分かる。最後はしてやられたが、奴の撃退はこれにて完了だ。

「次は氷海に降りて来いよ……。いや、氷結晶ボックス使えばあの尻尾も持ち運べるかな」

「うにや……まだ追う気かにや?」

「当たり前だろ。あいつにや三度飯を食われてるからな。肉を焼いてもらうか、ホットサンドにでもしてやらないと気が済まん。肉焼いたら許す」

「そ、そうかにや……」

腕の中で、イルルが呆れたように鳴く。

その柔らかな毛並みにさりげなく頬ずりしつつ、立ち上がった——その時だった。

「……ん?」

「旦那さん、どうしたのにや?」

「……近づいてきてる？」

「にや？ ……うにやつ、耳が……痛いにやつ！」

「……おいおい……おいおい待て待て！ あいつ……嘘だろツ？」

あの赤い点が、どんどん大きくなる。

空に吸い込まれたはずのそれが、超上空で大きく旋回し、再びこちらに戻ってきた。

落下速度を上乗せし、さらに長距離飛行によって地上の滑空とは比較にならないほど超加速したその全身を、今、ここにぶつけようとしている。

「うっ……うおおおおおツツ！」

「にやううつ、これはもうダメにやー！」

とにかく走った。

とにかく、奴の射線上から外れるように。

しかし現実は無情にも、俺たちを奴の破壊の渦へと巻きこませる。

超爆音。超質量が、地上に衝突した。

急降下攻撃とか、体当たりとか、そんな次元のものではない。もはや隕石だ。隕石落下の瞬間だった。

「がっ——」

「旦那さっ……！」



左後ろから感じた衝撃に、俺の体は思わず宙に浮く。

同時に割れた地盤に叩き付けられ、背中が激しく悲鳴を上げた。

イルルを抱えて体を丸め込んだおかげか、頭は無事だ。しかし、あまりの衝撃ですぐには立てなかった。防具が無かったら即死は免れなかったに違いない。

「旦那さんっ！　旦那さん！」

「ぐ……イルル、無事か……」

「大丈夫にや、ボクは大丈夫……旦那さんっ……」

「いって……直撃しなかっただけ、マシだなあ……」

落下地点に、ボロボロになった龍が一頭。

奴を中心に地盤が割れ、木々が薙ぎ倒されていた。

「……馬鹿野郎。そんなことしてたら死んじまうぞ。　ったく、親の顔が見てみたいもんだぜ」

「にやあ……まさに特攻にやあ……」

バルファルクは、渾身の一撃を繰り出したのだろう。

もう戦う気力は残ってなさそうだった。ただ覚束ない足取りで歩き出す。もう、俺たちが生きているかどうかを考えているほどの余裕もなさそうだ。

「……早く元気になれよ」

「旦那さん……」

「んで、いいスパイスを振り撒いてくれ」

「……………」

弱々しく、バルファルクが飛び立つ。

俺たちの声が届いているのか、届いていないのか。それすら俺には分からないが、最後には確かに目が合った。

飛び立つ直前に、目が合ったんだ。俺の顔を見て、「くるる」と鳴いた。

「……………あいつ」

「どうしたのにな？」

「……………いや、何でもない。さあ、そろそろ行くか」

「立って大丈夫にな……………？ 傷は……………」

「うーん……………動けるし、問題ない。ただまあ、回復薬は飲んどこうかな——」

そう言いながら、ポーチに手を伸ばした瞬間だった。

どん、と大地が揺れる。

昼間感じたような地震が、まさに俺の足元から鳴り響いた。

「な……………!？」

「にやあつ!？」

それはいつかの、凍土の壁を叩き壊すあの感触に似ている。

大地の底から、それは確かに伝わってきた。

木々が曲がる。枝が軋む。割れた地盤が、崩れ始める。

「……………うっ……………!?!」

割れた地面の奥から、大穴が顔を出した。バルファルクの一撃によって緩んだ地盤が、崩れ始めたのだ。

悠然とした古代林の底に形成された、まるで地獄の入り口のようなその大穴。

それが大口を開けて、俺を呑み込もうと地盤ごと引き摺り始める。どうやら、この下には地下空間があるらしい。あの一撃で、言わば覆い被さっていた蓋が割れたのか。

「畜生が……………こんなものっ……………あぐっ!?!」

「旦那さんっ! 脚が!」

左脚が、地盤の一部に挟みこまれている。

頑丈な覇竜の足だ。壊れることはないだろう。

しかし、立ち上がれない。動くこともままならない。この崩落の渦から、逃れることができなかった。

それに気をとられていた、その瞬間だった。

大気が、振動によって割れる。

「……………」

「……………今の声……………」

地の底から、声が轟く。

あの叫び声のような、断末魔のような、俺の記憶の奥底にべつとりとこびりついたあの声が響いた。

間違いない——奴は、”渚瘴啖”はここに、この地の底にいる。

「ぐっ……………」

落ちる。

このまま落ちて、どうなるか？

この穴は一体、どこまで続いているのか？

奴がここにいて、俺は——。

「旦那さん……………っ！」

イルルが、必死に俺を引き上げようと奮闘している。

その小さな体が俺を持ち上げようとして、しかしとてもじゃないが持ち上がらない。

このままじゃ、イルルまで巻き込まれて落ちてしまう。こんな、何が待っているかも分からない虚に、彼女も巻き込むなんてことは。

——そんなのは、絶対受け入れられない。

「イルル……っ、頼む！ キャンプに走れ！ 救援を呼んでくれ！ ルーシャなら動けるはずだ！」

「旦那さんっ、でも！」

「この穴は使えないよ！ どうなるか分からん！ 滑瘡啖がこの下にいてるってことは、どこか別の入り口があるはずだから！」

「やだっ、いやにや！ らんなさん……っ！」

彼女はボロボロと涙を流しながら首を振る。俺を離すまいと、必死に爪を喰い込ませるが――。

それでも、俺は。

「イルル……すまん！」

「にやっ——みやうんっ！」

彼女を掴んで、投げた。

この地盤沈下の渦から放り投げ、外の草地に転がる白い毛玉の姿を確認する。

「だっ、旦那さん……っ！ 旦那さ——んっっ!!」

叫ぶイルルの声と、崩れ落ちる地盤の悲鳴。

ふわつと浮くような感覚に思わず顔を顰めしかたくなるが、今はそれは我慢だ。

彼女に向けてグーサインをして、俺はこの虚に臨む。

滑瘴啖——本当に生きてやがった。  
 待っていてやがれこの野郎。今度こそ、お前を美味しく喰ってやるからな。

く本日のレシピく

『ベルナ風ホットサンド』

・ マスターベーグル	…… 2枚
・ ホロロース	…… 100g
・ シモフリトマト	…… 1切れ
・ 砲丸レタス	…… 40g
・ 雲羊鹿チーズ	…… たつぷりと
・ 黄金印のマキシ・マム	…… 適量
・ オニキスペッパー	…… 適量

## 旨いものは最後に食べる

「げほっ！ ペっペっ！ うわ何か口に入った！ 何だこれ！」

壁に剣斧を突き立てて、落下の衝撃を押し殺した。

そうして辿り着いたこの地の底は、光も満足に届かない薄暗い空間が広がっている。

落下と同時に何かが舞い上がり、跳ねる水の音を聞いた。

「ペっ……何これ……骨……？」

口の中に入り込んだ、小さくて固いもの。

石かと思つて吐き出してみれば、それは確かに骨だった。噛み砕かれて、劣化に劣化を重ねた骨。

「……何だ、これ」

水の音を感じた通り、そこには確かに水が広がっていた。

古代林の地下に広がる地底湖、もしくはは地下水脈。この広大な地下空間は、大量の水を含んだ湖だったのだ。

——そこまではいい。地底湖なんて、よくある話だ。大老殿の管轄内であるデデ砂漠にも、かつては地底湖があったと聞いたことがある。

だが、ここの光景は、そんな他のフィールドとは比べ物にならないほど異様だった。「……骨？ みんな、骨なのか？」

その地底湖を覆い尽くすように、骨の山が広がっている。

壁にも、天井にも、地底湖の底までも。全て白く濁った骨が隙間なく敷き詰められている。

竜一頭分なんて、そんな生やさしい量ではない。数にして、一体何十頭分になるのだろうか。考えるだけで頭が痛くなる。

「はは……なんだこりや。俺、頭がおかしくなったのか？ それとも、落下の衝撃で死んだのか？」

だとしたら、ここは地獄か何かだ。

もしくは墓場かもしれない。名前を当てるとすれば——『竜の墓場』、だろう。

「……はは……はあ」

しつかりしろ、俺。

ここは一体どこだか知らないが、俺は自分が生きているかどうかを確かめる術を知っている。

俺の感覚に従え。俺の全てを呑み込むんだ。

「……うおっ、さむっ！」



ビュオオ、と洞穴が笛のような音を奏でる。

どうやら、俺の推察通りこの洞穴にはいくつもの入り口があるらしい。それが風の通り道となり、まるで慟哭のような不気味な音を立てていた。

とはいえここは、太陽光が満足に届かないほど地下深い。海拔が一体どれほどなのかは分からないが、この湖はもしかすると海に繋がっているかもしれない。闇のように深いそれが、随分と冷えた風を伝えてくる。

「……これをそのまま食べるのは、もったいないよな」

ポーチに忍ばせた手が、夜食として入れてきたおにぎりに触れる。

しかし今はあえてそれを離し、俺は別のものを取り出した。

がちゃん、と音を立てながら、それは骨の上に聳<sup>そび</sup>え立つ。

ドンドルマのハンター支援事業の一環として作られた便利アイテム『ネルスキュリン』。影蜘蛛をモチーフとした、金属製の六本足が伸びた七輪だ。その用途はずばり、野外調理。中心に火炎液ストープを押さえ、六本足の上に小型鍋を置く。

マツチに火をつけ、ストープの口に着火。まるでワイングラスをひっくり返したようなその構造は、下層の液貯めと上部の搾り口に分けられる。下層に貯まった火炎液を少しずつ上部へ輸送し、それが炎に反応して長時間燃焼を起こす仕組みである。

そこから伸びる炎に鍋の底を当てて、水を注ぐ。

「感覚に従う唯一の方法——旨いもんを食う。これしかないよな」

旨い、を感じれるなら、俺はきつと生きている。

だつたら俺は、ここでまず飯を食うのだ。

この地下水の水は随分と濁っており、骨のカスと肉片で汚れきつていた。飲料水として空きビンに水を詰めてきたが、正解だつたようだ。

「……さて」

炎を見て落ち着きを取り戻す。

やはり料理は偉大だ。

火の獲得こそ、人間の最大の功績と言つても過言ではない。

「さあ……どうしたもんかな」

落ち着きを取り戻し——まずは現状分析。

ここは一体何なんだ？ 見渡す限りの骨、骨、骨。

あの自然豊かな古代林の地下に、こんな空間が広がっていたなんて。とてもじゃないが、想像が及ばなかった。

「瘡瘻は、ここにいて、か……？」

今は、奴の声は聞こえない。だが、さつきまでは確かに、この地下から奴の声が響いていた。あの地震のような振動も、奴が壁に全身を叩き付けていた音だろう。凍土で対

峙した頃から、よく見てきた奴の癖だ。

骨が固まってできたこの地下の壁は、随分と弱く、壊れやすい。その震動が、微かに地上に伝わっていたのだらうか。

「……あ。これ、魚竜種の骨だ」

そこには、比較的劣化の少ない魚竜の骨が流れ着いていた。

鋭いながらも頑丈で、細いながらも折れることはない。力を加えても柔軟に弧を描きつつ、しかし力強く元の形に戻る。この形状からして、おそらくガノトトスか、もしくはその近縁種か。それにしてもサイズが小さいから、もしかするとこれは幼体のものかもしれない。

「これ出汁に使えるかも……。ん、おっ！ 貝もいるじゃん！」

辺り一面は骨ばかり——とすっかり思い込んでいたが、どうやらここにも命の連鎖はあるらしい。親指と人差し指で作った輪より一回り大きな貝が、骨と岩の隙間に佇んでいた。

殻だけかと思いきや、持ち上げてみればずっしりと重い。

裏返してみれば、ぷりぷりに締まった身が露わになる。ちよつと不気味なビジュアルだが、どこか懐かしい感じがした。

「市場で見かける奴に似てるなあ。こいつの方がデカいけど。近縁種かな……。煮れば

食つても大丈夫だろ、うん。それに良い出汁が出そうだ」

市場で買った貝と同様に、殻の凹凸が少ない面からナイフを忍ばせた。これが近縁種なら、こちら側に貝柱があるはずだが――。

「……ペン」

手応えを感じてナイフを引き戻してみる。剥ぎ取りナイフでは些か大きすぎたようだが、貝柱は確かに断つことができた。

隙間から指を入れて、身と殻を剥がす。ペリペリと剥いでいくと、肉厚な手が手に乗った。思った通りだ。俺の記憶にある貝とよく似ている。こうして剥がすと、身と肝が分離してしまうのも一緒だ。満足に砂抜きをさせてやる余裕はないため、こうやって肝だけ取ってしまうか。

「……もつたいない、けど、まあじやりじやりを食つてもなあ」

外せば、まるで烏竜種の頭のような形だった。そんな肝を自然に還し、身の方はナイフで細かく切り込みを入れていく。

鍋に入るようにカットした骨と、刻んだ貝の身をさつと下茹でし、一度水を入れ替える。今度は最初から煮出し、たつぷりと出汁を出してもらおう。同時に、地上の探索で拾っていた深層シメジ、そしてチルテピン種のトウガラシを指で潰して入れる。あとは、申し訳程度の塩と薬草を少量。

「うんうん、いい匂いが漂ってきた」

煮詰めていくと、少しずつ鍋の中身が白濁していく。どうやら、この貝からは相当良いい出汁が出るらしい。貝の旨みを含んだ香りが、この地下空間で溢れ始める。魚竜の骨の出はいまいちよく分からないが——いずれにせよ、この出汁の主役はこの正体不明の食材たちだ。一体、どんな味になるだろう。

煮だつて小さな気泡をいくつか浮かべ始める鍋を見つつ、俺はポーチからようやくあれを取り出した。

見た目は、巨大な深緑の葉の塊だ。しかし中身は、俺が夜食用に作つておいたおにぎりが一つ。古代林に群生していたバナナの葉を包みに使わせてもらったのだ。

「よしよし、骨は取り出してつと。シメジは……やつぱりシイタケの戻し汁みたいにはいかないよな。茹でてるだけだし」

トウガラシのおかげでほんのり赤みを帯びたその出汁の中に、おにぎりをそつと落とす。

お湯を浴びてその形を崩す米の塊は、その中身に詰められたものをぼろりと解放した。

「ふっふっふ……中に詰めた焼きサシミウオの切り身……ちよつと乱切りしちまつたけど、こうやって汁の中でほぐせば問題なし。うんうん、良い感じ」

白濁した汁に、白い米が溶けていく。

ほんのりとした朱色に、サシミウオの鮮やかな橙色がほぐれていく。

少しだけ炊いて、味と熱が通ればいい。それほど長い時間火を付けている必要もない。

「うん、完成だ！」

バルファルクとの戦闘で疲れた俺を、心身ともに癒してくれる最高の一杯。名付けて——『深層出汁のおにぎり雑炊』だ。

旨みと甘みが溶け込んだ香りが、鼻腔を抜ける。同時に、この豊かな香りが地下空間に広がっていった。

「いただきます……」

ずずつと、その出汁をすすする。

瞬間、深い海の香りが、俺の体中を駆け巡った。

「あつ……いい……これ好き」

これはまた、濃厚な味わいだった。もつと薄味を想定していたのだが、貝の旨みがふんだんに詰め込まれた風味がとても強い。口全体が魚介になったような気分だ。

貝の旨みに隠れつつも、魚特有の優しく、それでいて弱々しい風味が舌に残る。だが、これはあの骨のものか、それともサシミウオのものか。あの骨からこんな旨みが出るよ

うな気も正直しないので、サシミウオのものかもしれない。ほんのり感じるピリ辛具合がまた絶妙で、体の芯からポカポカ温まってくるような気がした。

それらに浸されたおにぎりの味わいは、もう筆舌し難い。普段なら冷めてどこか固い食感が残るおにぎりだが、再び水を吸って柔らかくなっている。しかも、その吸った水が最高に旨いのだ。ともすれば、その米が一体どうなっているか——もう説明するまでもないだろう。

「うおっ、この貝すげーな！ 身がぷりっぷりだ！」

噛むと、とても力強い歯応えを感じる。噛む度に、中に込められた旨みが溢れ出す。海のしよっぱさと、甘さと、苦さと、抱えきれないほどの旨みを混ぜ合わせたかのような、そんな味。噛む度に染み出す。海そのものの旨みのようなそれが、出汁に乗って溢れ出す。まるでこの世の旨みを凝縮したような、そんなきめ細かい味だ。味の密度が、他のものとは段違いであると言わざるを得ない。

「はあく……あつたまる。身に沁みるう……」

ほぐれたサシミウオの塩気が米によく絡む。シメジの独特の歯応えが、これまた心地良い。キノコの香りが、ちょうどいいアクセントだ。うん、この味、小さい頃は苦手だった味だ。

貝もそうだ。この独特のクセが、俺は昔苦手だった。だが、今になって思うと——こ

うして苦手だったものほど、美味しいんだよなあ。

”美味しい” いうのは、今俺が生きている証そのものだ。

「心も体もあつたまる。これは雑炊にして正解だあ……」

風が、独特の香りを運んでくる。

骨が、カタカタと音を立てる。

心も体も満たされた。バルファルクとの戦いで少々痛手は負ったが、もう気にならな  
いくらいだ。

とはいえ、所詮はおにぎり一個分。物足りない量でもある。

「……さ、メイソディッシュだ」

ネルスキュリンからストーブを外し、その六つ足を重ねるようにして置く。

鍋の中身は最後の一滴まで飲み干して、空いた空間を埋めるように調理器具を詰め込  
んだ。

パキパキと、背後から骨が踏み砕かれる音が響く。

「お前も、匂いにつられてきたのか？」

ポーチに全ての道具を詰め込んで、口に残った魚の骨を吹き出して。

俺はそつと、背後から歩み寄る巨体に向けて身を翻す。

「会いたかったぜ。——瘡瘻啖」



隻眼の恐暴竜が、そこにいた。

黒々しい体色に、全身傷だらけのイビルジョー。

間違いない。この顔、この傷痕、べつとりとこびりついた血の痕は、まさにあいつのものだ。

奴は低い唸り声を上げる。ようやく獲物を見つけたと言わんばかりに、口から変色した涎を溢らせる。

淆瘴啖、イビルジョー。俺が探し求めたアイツが——氷海で逃して、そのまま死んでしまったと思うっていたアイツが今、目の前にいる。

骨の山を強く踏み締めて、奴は吠えた。あの耳の奥にまで染みついた声が、この地下空間で反響する。

「随分気が立ってんな……い！ どうしたお前、ガリガリじゃねえか！」

淆瘴啖は、随分やせ細っていた。

あの筋骨隆々とした姿は、今や見る影もない。一本の糸に何とかしがみ付いて生に執着しているような、そんな状態だ。普通のイビルジョーならば、もう既に餓死していてもおかしくはないだろう。

限界状態か、極限状態か。何と言えbaikか分からないが、いずれにせよ奴は極度の飢餓状態だ。あの血走った眼は、もう物の判別も何もできていないのかもしれない。

振り上げられる鎌首。それを、俺は横に跳んで躲す。

しかし奴は、構わずその顎を力強く咬み慣らした。骨が木屑のように割れ、奴の口内に溶け込んでいく。骨であっても口にせずにはいられない状態——いや、むしろこいつは骨を食つても生を繋いでいたのか？

「……いや、まさかな」

ポリポリと骨を砕いて呑み込む奴の姿を見ると、あながち間違いではないかもしれない。

こいつがずっとこの地下空間にいたのだとすれば、一体何を食べてきたのか。この骨しかない空間で一体どうやって。

「……その様子じゃあ、これはお前が積んだ屍じゃないってことか」

これだけの数を口にできているとすれば、瘡瘻啖がこれほどやせ細っているのが説明できない。いくら代謝が激しいといえど、これだけの骨の量があれば瘡瘻啖でも十分食い繋げることができる量だ。

と、すると。

「じゃあ、この骨の山を作ったのは誰なんだ……」

あの氷海の戦いからは、随分と時間が経っている。その間をこいつはこの空間で過ごしてきたとすれば、今こうして骨と皮だけ残った死霊のような姿になっているのも頷け

る話だ。

じゃあ、この骨の山は一体誰が？ 生態系を食い尽くすこいつがやせ細っているなら、ここは一体何が原因でこんな環境になったんだ？

——いや、そもそも、こいつはどうしてここにいるんだ。

「うおっ！」

考える時間は、与えてくれないようだ。

矢継ぎ早に、奴はその極悪な牙を振り下ろしてくる。避ける度に奴は骨を噛み砕き、その欠片を弾き飛ばした。

「……ッ！ ……は厄介だな！」

例えるなら、奴が動く度に、その顔周りに細かな散弾が舞い散るような——そんな状態だ。

俺は奴の股下をくぐり抜け、腹下と尾を狙う。とはいえ、尾を満足に再生させる栄養も取れなかったようで、随分と短い尾なのだが。

「ハアツ！ ……ちっ、相変わらず皮が厚いな！ 切っ先が重い！」

あの脂肪も筋肉も随分萎んでいるというのに、振り上げた剣には重い感触が残る。傷を受け続けて厚くなった皮は、相変わらず剣士の難敵だ。

振り回される尻尾。

大したことはない。短い。

「とうっ！」

斧に変えた獲物を抱え、屈むようなステップでそれを回避。

肩に乗せた斧をそのまま振り上げ、左脚の付け根へ食い込ませる。

「ぐっ……い！」

じいん、と腕が痺れるように痛んだ。確かなダメージは与えているのだろうが、こちらへの反動も相当に強い。

しかし、そう悠長に腕を慣らすわけにもいかなかった。

渾瘡啖が、吠える。

逆鱗に触れたかのように、凄まじい怒号を上げた。

——同時に、溢れんばかりの龍属性のオーラが顔を出す。血中に含まれた龍属性が古傷を破って表出し、その凄まじい体温によって気化。それがドス黒いオーラとなって舞い上がる。頭頂部どころか体中の傷痕からそれが溢れ、奴は獣竜の姿から一変、魔霧を纏った悪魔と化した。

「出たな……い！」

死にかけだというのに、奴はそれも厭わないで吠え続ける。こんな状態を続けていれば、奴は間違いなく死ぬだろう。

「賭けに出たか……いいぜ、来い！」

このままゆっくり餓死するか。

それとも、寿命を縮めるリスクを負ってでも、ようやく見つけた餌を口に入れるか。奴がそれを考えて選択できるとは思えないが、いずれにせよ後者をとったのだ。

俺も奴に合わせて剣斧の姿を変える。滅龍ピンを解放。そのエネルギーを剣斧内部に留まらず、外へと放出させた。

ナイフで切り裂いたピンの隙間から、奴とは打って変わって随分と澄んだ龍のオーラが溢れ出る。

「剣鬼形態だ。お前の肉を、浄ってやるよッ！」

——生憎、食べられるほどの肉は残ってないかもしれないが。

それでも俺は、お前を狩る。

今日ここで、決着をつけてやる。

地団太をバックステップで躲し、振動が届く前に跳ぶ。

そのまま奴の膝を起点に上をとり、切り上げながら跳躍。同時に、真上から振り下ろし。

奴は怯むように足をもつれさし、しかしその勢いを反転。空中の俺に向けてその口を振りかざした。

「ちっ、こんのッ！」

宙で体を逸らし、奴の左目に向けて刺突を放つ。それが眼孔から伸びた封龍劍の柄を弾き、奴は甲高い悲鳴を上げた。

「くっ……お前ッ！」

仰け反つて、頭を大きく振り回して。

それと同時に、奴の口内からドス黒い光が渦を巻く。

閃光。続いて、衝撃波。

「うおっ……！」

螺旋を描くように吐き出されるそれは、もはや奴の血反吐かもしれない。あるいは、ただの吐瀉物か。

しかしそれは間違いなく龍属性そのものであり、涎と共に拡散。それが気化し、黒い霧となつてばら撒かれる。

劍斧を背にしまつてとにかく走つた。背後の骨が、その霧に吞まれて黒く染まる。大気が、ドス黒く焦げていく。

「お返しだッ！」

その霧が晴れたところで、俺は駆け出した。

奴に向けて。大量に吐いて視界が狭くなつた奴の、その頭に向けて。

「ハアッ！」

ビンのエネルギーをばら撒きながら、その剣を地に擦らして走る。大量の骨が俺と共に舞い上がり、一瞬奴がきよんとした気がした。

その目元に向けて、剣を振り上げる。エネルギーの放出がその斬撃を後押しし、続げざまにもう一度切り上げた。

「オラアッ！」

顎の牙が何本か砕け、細かな破片が舞い散るが、今はそれも気にしない。振り上げた剣を斧に変え、そのまま振り下ろす。

打点の高い斧の一撃。それに頭頂部を叩き付けられ、滑瘴啖はその頭を骨の山へと突っ込ませた。

ハンターの攻撃でも、ここまであからさまに抵抗力も見せないなんて。やはりこいつは、弱っている——。

「——いや、この感じ……ッ！」

斧を再び、剣の姿に変えようとグリップを握った瞬間だった。

骨と、そこに埋め込まれた頭の隙間から、一際強いスパークが走る。

慌てて出すのは、イナシの構え。同時に、足元から赤黒い波動が溢れ出した。

「ぐあっ……!!」

物理攻撃ならイナせるものの、足元が炸裂したとなればどうしようもなかった。弾け飛んだ衝撃で、俺は背後に強く飛ばされる。

まるで噴火するかのように、奴のオーラが炸裂。大量の骨が舞い上がる。湖の中に溢れ出した龍の瘴気が、何かに反応して暴発したらしい。まるで、水中で誤爆させたタル爆弾のようだった。

「あぐっ……くそッ!」

背中から落ちて、バルファルクの最後っ屁の痛みを思い出す。骨の凹凸が防具越しに俺の背中を激しく叩き、余計に痛んだ。

それでも素早く体勢を整えて、奴に追撃しなければ――。

「……ッッ!!」

迫る牙。

轟く怒号。

顔をずぶ濡れにして、水気を魔霧に溶かし込んで、奴は迫る。

その口が俺を食おうと開き切った。

「させるかッ!」

腰にぶら下げていた小タル爆弾のフックを外し、投擲。奴の口の中に放り込む。

同時に俺は空いている腕で顔を庇い、武器を持つ手を起点に跳躍。爆風と共に背後に



跳んだ。

奴は、吠えた。口の中で炸裂する爆薬もまるで気に留めず、俺が一拍前にいた空間を  
抉り取る。同時に、骨を激しく咬み慣らした。

炸裂する骨。

虚しく噛み砕かれる骨の屑。

散弾のように舞うその破片。

白濁した色のそれが、俺の左半分に迫った。

「——ッ!?!」

最後に、骨が舞う光景が目映って。

次の瞬間、視界が半分になった俺。

「ぐあッ……あ……ッ!」

反射的に動いた手に、どろりと生温かい感触が伝わってくる。

左目が、燃えるように熱い。

「あつ、があああああッ!! 目がッ……ッ」

血が止まらない。

眼球がまるで心臓に脈動し、信じられないほどの痛みが襲い掛かる。

左の顔面が跳ねまわっているみたいだ。

脳髓の奥までほじくられているかのような、そんな痛み。

「——ッはッ、ハアッ……くそつ、くそくそくそッ！ くそが……ッ！」  
水面に、俺の顔が映る。

鋭く尖った骨の破片が、左眉から真下に俺の顔を薙いでいた。どくどくと血が溢れ続ける。

目は——開けない。深々と抉られて、眼球はきつともう——。

「……ッッ!!」

半分映る視界の端に、その巨体を大きく屈ませる奴の姿があった。

同時に跳躍。あの巨体が俺に襲い掛かる。

痛みあまり足がもつれ、思うように動けない。奴の足の爪が俺を羽交い絞めるのも、ほんの一瞬だった。

「ぐッ……」

片目を失った奴と、目が合った。

左目を穿たれた奴と、目が合った。

「てめえ……」

どうだ、と奴が言っているような気がした。

俺と同じになった気分はどうだ、と。

「……最悪だ。くそ……」

左目潰しが、最後には自分の左目も潰されたか。

俺がお前にしたように、お前も俺の左目を潰したか。

「——最悪にいてえんだよ、クソツ……。やりやがったな……ッ！」

ミシミシと、俺の体が悲鳴を上げる。奴の体重がかかり、防具の凹凸が割れていく。

やせ細っているとはいえ、瘡痍は大柄だ。その重さに俺の肺は圧迫される。

ひゅーつ、ひゅーつ、と力ない息の音が聞こえた。

なんだ。これ、俺の息の音か。

「どけ、どけよ……」

ようやく食にありつける。

そう言わんが如く、奴は涎を滴らせて大口を開けた。強酸性のそれが俺の髪や周囲の

骨に垂れる。オオナズチの頬当てが、音を立てて溶けていく——。

「——どけよこの野郎ツ!!」

その大口に向けて、剣斧を突き出した。

もはや残量も半分となったビンが迸り、奴の口の中で瞬く。

口内で弾ける波動に、流石の奴の悲鳴を上げた。同時に足の拘束も緩み、俺は身体を

転がしてそこから逃れる。

左目は相変わらず猛烈に痛い。

視界も何も映さず、俺は右半分しか見ることができない。

しかし、今はそれで十分だ。右目だけでも、奴の姿はよく見える。

「けつ、いい意趣返しじゃねえかよ……あぐつ、いつてえな……」

渾瘴啖は、忌々しそうに唸る。

ずっとずっと、自分の口に入らない獲物を、牙を剥き出しにして睨んでいる。

「いいぜ。手向けだ。俺の左目はくれてやる。——だけどな、意趣返しっていうなら、俺も黙ってねえぜ!!」

迫るタツクルを躲し、剣で薙いだ。

振り回される尻尾をスライディングで躲し、手にした骨を投げつける。

それに一瞬怯んだ奴の左半身へ、駆け出した。奴の死角に潜り込むもの——しかしその動きを視認した奴は慌ててその首を振り下ろす。

——ビンゴだ。いつもいつも死角ばかり狙われて、奴はそうはさせまいと直線的な攻撃を仕掛けてきた。こうくるだろう、と思っていた手は見事当たり、俺は半身だけ逸らすことでその牙を躲した。

「——お返しだッ」

そうして、がら空きになった下半身。

奴のやせ細った左足を駆け登り、この巨大な剣を振り上げた。

ビンの底に少しだけ残った緋色の液体が、激しくスパークを上げながら剣斧全体に行きわたる。奴のオーラにも負けないほど、鮮明な赤を。その赤を、刺突として奴の左脚へと突き付けた。

手に帰ってくる感触は、鈍く、とても重い。それでも、刺突を後押しするバルファルクの炎のままに、俺は両腕にさらなる力を込めた。

「斬れるオオオッツ!!」

左膝の、その下へ。切っ先から伸びた瘡瘡啖の牙と天彗龍の爪が、奴の分厚い皮を引き裂いていく。

中の骨まで届いた感触が、金属のように固い何かを削った感触が腕に届く。

俺は、そのまま剣斧を解放した。負荷のあまり諤々と震えるそれを、必死に突き立て続ける。奴の膝のその奥に詰めたまま、暴れ狂う奴の猛攻に耐え続ける。

瘡瘡啖は、この世のものとは思えないほどの悲鳴を上げた。

それはまるで、この地下空間を吹き抜ける慟哭のようだ。泣いているような、嘆いているような、悲痛な声。

その声を、弾ける剣斧が全て呑み込んだ。

「……………っっ！」

支えを失い、俺は宙を転がって骨の山へと落ちていく。

響いたのは、重いものが崩れ落ちる音。支えを失って、為す術もなく朽ち果てる音。

メキメキと、柱が折れるような音だった。悲鳴は呻き声へと変わり、散乱する骨の騒音へとなり変わる。

体格の割に細いその膝まわりが、力なく折れ千切れている。剣斧の爆破の衝撃で皮も弾け飛んで、奴の足は骨の上を転がっていった。

「……へっ、どうだこの野郎……俺と同じになった気分はどうだ」  
淆瘴啖は吠える。

あの時——俺が奴の左目を潰した時のような、怒号と慟哭を混ぜ合わせたような声が響いた。

左目を潰した。

左目を潰された。

左脚を潰された。

左脚を潰した。

「——似た者同士だよな、俺ら」

淆瘴啖は、唸る。

「俺たちは互いに、互いを食い合ってるだけ。生きるためには、誰かを殺さなきゃいけな

いんだから」

低い唸り声が、この空間を震わし続ける。

「市場で切り分けられた肉を見て、それだけで全て分かった気になってなりたくない。他者を食うことは、そいつの全てを背負うことだ。俺の今の体は、たくさんの命が糧になってくれたからこそある……んだと思う」

動けない奴は、唸りながらも俺を睨む。

「お前もそうだろう。お前も……ただ生きてきただけなんだ。生きて生きて、ここまで来たんだ。だから、俺はお前を恨んでいない。もう、な」

剣斧を引きずりながら、一步、また一步と歩く。

自由を失って身を伏せる奴に向けて、一步ずつ強く踏み締めた。

「俺はハンターだ。ハンターとして、お前を狩って……お前を食う。俺が生きるために」  
渾瘡啖のその頭に向けて、ピンの枯れ果てた剣斧を突き付ける。

とうとう、この時が来た。

いろんな思いを胸に武器を取ってきたけど、今はどこか晴れやかだった。

本当にいろんなことがあった。哀しいことも、辛いこともたくさんあったけど、そのおかげで今がある。そう思うと俺は、どうしても奴にこう言いたくなってしまうんだ。

「ありがたいな、渾瘡啖。お前の命、いただきます——」

く 本日のレシピ く

『深層出汁のおにぎり雑炊』

・ おにぎり (サシミウオの切身)	…… 1個
・ 水	…… 400 ml
・ 深層の謎の貝 (身のみ)	…… 1個
・ 深層シメジ	…… 20 g
・ チルテピン種トウガラシ	…… 10 g
・ 葉草	…… 少量
・ 塩	…… 適量
・ 深層の謎の魚竜の骨	…… 40 g



## 骨の功より飯の功

「……鳴り止んだ」

古代林のベースキャンプ。

満点の星空に包まれたこの場所で、イズモはフライパン片手に夜空へ耳を澄ましていた。

いつかの凍土で聞こえたような声が、先ほどまで鳴り響いていた。

森の中を彷徨い続けていた時に聞こえた時は、流石に自分がおかしくなってしまったかと思っていた。が、今の今まで聞こえたことを認識し、その疑惑は湯気の如く雲散霧消していた。

「イズモ……?」

「ヒリエツタ、起きてたの?」

「今日が覚めた……。アンタ……。そんな起きてて、大丈夫なの……?」

「オレのはただの疲労だから。ぐっすり休ませてもらったし大丈夫さあ」

そう言って、彼は屈託なく笑う。

ベースキャンプのベッドで横になる包帯だらけの彼女——ヒリエツタも、そんなイズモの様子を見て安心したかのように浮かせた肩を再び寝かした。

「……みんなは？」

「……いろいろあつて、それぞれキャンプを出て行ったよ」

「いろいろ……？」

「とりあえず、シグがバルファルクを追い払ってくれた」

「えっ………本当!？」

「わっ、安静にしてて。傷が開くよ」

「う、うん………」

驚きのあまり起き上がりかけた彼女を、イズモは押さえて寝かしつける。

彼女はバルファルクの猛攻を受け、大怪我を負っていた。助けに行つたはずのイズモに何故か看病されている今の状況を前に、ヒリエツタは恥ずかしそうにタオルケットを鼻までかける。しかし、不思議と嫌な気分でもないことを心のどこかで感じていた。

「オレもずっとキャンプにいたから、詳しいことはよく分らないんだけど……シグとイルルちゃんがバルファルクへ追撃を仕掛けてくれて、そのまま撃退できたみたいなんだ。赤い彗星が空に消えていくのは、オレも飛行船技師の人たちも見てる」

「そうなんだ………」

「だけど、その後シグが地盤の崩落に巻き込まれたみたいだね」

「え…………？」

「イルルちゃん慌てて助けを呼びに戻ってきた。ルーシャさんと一緒に、今はシグの搜索に出掛ける」

「地盤の…………崩落？」

「うん。実は、ここには地底湖があつて、巨大古龍の縄張りになつてたんだ」

「えつ、それつて…………」

「オレたちも、一度その撃退をしてさ。その時に使ったポイントを教えたから、二人とも地下には辿り着けると思うけど…………」

そこまで言つて、イズモは先程まで響いていた“声”については触れなかった。

ヒリエツタは、あの件については部外者だ。眠つていて聞こえていなかったのなら、無理にその話を聞かせる必要もない。そして何より、この戦いはシグのものだから――。

彼はそう思い直して、フライパンの上のものに薄茶色の細かな粉を振りかける。

「とりあえず、オレたちは大人しくしようよ。ヒリエツタも食べる？」

「…………それ、何？」

「古代林は熱帯気候だからさ、バナナが良く育つんだ」

「バナナ？ あ、ほんとだ……」

フライパンの上で音を立てているのは、縦に両断された身をさらに三等分に分割されたバナナだった。

バターの香りを十分に吸って、黄色と茶色の比率を濃くしたその身は、先ほどイズモがかけた粉末を吸い上げ、より香ばしく仕上がっている。

「奥地に群生しててね。オレもバルファルクの気を引く傍ら、これ食べてたんだ」

「……バナナって、生で食べるイメージがあったんだけど、焼くの？」

「うーん、まあ生でもいけないこともないけど。でも完全野生のものだから、ちよつと固いかな。それに種も太くて気になるし。切って取り除いた方が食べやすいなっ」

「そうなのね……」

「バターと砂糖で絡めて焼いて、シナモンパウダーをかけたら完成。柔らかいし、甘くて美味しいし、栄養も抜群！ どう？」

「……ありがと。いただくわ」

ヒリエッタが頷くと、イズモは嬉しそうに頷いて、フォークでその身をさらに小さく切り取った。

それを、ヒリエッタの方へと差し向ける。

「はい、あーん」

「えっ……」

「手、使えないでしょ？ いいからいいから」

ヒリエツタは、自分の手を見て、イズモの顔を見て——頬を少しだけ、恥ずかしそうに染めた。

包帯だらけの腕を引っ込めて、彼女は大人しく口を開ける。

「……どう？」

「……甘い」

「そっか。オレも食べようつと」

目を逸らしながらも咀嚼し続ける彼女を見て、イズモは嬉しそうにそう言った。そのまま同じようにフォークでバナナを摘まみ、口に入れた。

焦げ目のついたその表面は、パリッとした感触をまず届けてくる。続いて広がるのは、バターを含んだとろっとした味わい。それにヒリエツタは驚いて、その翡翠色の瞳を大きく見開いた。

バナナ特有のまろやかな甘さが、バターとシナモンの香りで際立ってくる。ただただ包み込むように、柔らかい。暖かな毛布にくるまれるような、そんな甘さだった。どこか安心感を覚えるその味に、イズモは二つ目を口に加え入れる。見れば、ヒリエツタの口ももう少して空きができそうで、彼はさらに別のバナナをフォークで突き刺した。

「……すごい、甘い」

「ほんとだね。焼くと香ばしくて、悪くないかも」

イズモの言葉に頷きながら、彼女は目を閉じて咀嚼する。凝り固まった心がゆつくりほぐれていくような、そんな感覚に身を浸していた。

イズモを助けようと必死になっ

まわりを急かすようにとにかく声を荒げていて。

——昔から、いつも一つのこと

に頭がいつぱいになっ

ていたなあ、と彼女は何となく思った。哀しいことや辛いこと

の向こうに、よく果物を食べながら街を家族で歩いて

たことを思い返す。今では考えられないような、綺麗な衣装に身を包んでいた、帰って

こない日々。そんな記憶を呑み込むように、口の中で溶けたバナナを呑み込んだ。

バナナを食べ終えて、喉を小さく、ごくんと鳴らしたヒリエッタ。

彼女が、おずおずと、イズモに向けて弱々しい声をかける。

「……イズモ」

「ん？」

「ごめんね、私……アンタを助けに来たはずなのに、こんな風で」

「何言ってるの。気にしなくていいよ。オレはこうして、君の力になれるのが嬉しい」

彼がそう言うのと、ヒリエッタは困ったように質問を重ねた。

「……なんで?」

「え?」

「あの時——私を助けてくれた時も、そうやって言ってくれたけど、なんで……?」

その言葉にイズモは少しだけ眉をびくりと動かして。

それでも、フォークに刺したバナナを口に入れる。それを黙って咀嚼し続けた。ヒリエツタは、彼が食べ終わるのを、真摯な瞳でじつと待つ。

「ごくん、とそれを呑み込んで。盛り上がった喉仏が大きく上下してから、彼はゆっくり口を開いた。」

「……あー、やっぱり果物っていいなあ」

「え?」

「ちよつとだけ、果物の話をさせて? 話したいんだ」

「……イズモは、果物が好きなの?」

「うん。特にリンゴが好き」

「リンゴ?」

「そうだよ。本当に腹が減って、もう死にそうだと思つてた時に初めてリンゴを食べたんだ。それが本当に美味しくて……それからずっと、ね」

「ふうん……」

イズモは、どこか懐かしむようにそう言った。

その言葉に、ヒリエツタは何とも言えない表情で歯切れの悪い相槌を打つ。

「オレ、ヴェルドの孤児だったんだ。スラム街でゴミを漁って暮らしてた」

「……ヴェルド……」

「盗みをよくやったよ。パンを盗んで、ハムを盗んで。店の人に殴られることもあれば、グループの頭に殴られて奪われることもあった」

「……」

「あつちは特に、ここより冷えててさ。もうお腹が空いて、動けなくて、凍えそう。本当に、もうオレ死ぬのかな……って思ってた」

「……それで？」

「その時に、一人の女の子が俺にリンゴをくれたんだ。綺麗な服を着た、鮮やかな金髪に翡翠色の瞳……その子が、真つ赤なリンゴを手渡してくれた。あれがなかったら、オレはあそこで死んでたと思う」

「……それ……って」

「……あの時、君がリンゴをくれたから、オレは今があるんだよ」

そう言いながら、イズモは彼女の手を取った。包帯だらけのその手を優しく包み、じっと彼女の瞳を真つ直ぐ見る。



ヒリエツタも、どこか信じられないと言いたげな瞳で彼を見た。エメラルドみたいだ、とイズモは脳の片隅でどこかぼんやりとそう思った。

「イズモ……つて、そんな、うそ……」

「覚えてる？ それから、オレのことをよく気にかけてくれた貴族の女の子。暇を見つけては、会いに来てくれたよね」

「……覚えてるわ。ちっちゃくて、やせ細つてて。どうにかしてあげたいって、幼いながら思ってた」

「一緒に遊んだり、お菓子を貰ったり。本当に楽しい時間だった。オレ、幸せだった」

「……うん、うん……」

「君の家がなくなつて、君がいなくなつて……だからオレは、ヴェルドを出たんだ。もう一度会いたくて。ハンターになつて、トレットとキナ臭い契約までしてね」

「そう……そうだったんだ……っ」

「会えてよかつた。ずっと君を探してた。あの時救えなかつた君を、救えて良かった」

「……だから、かあ。どこかで会つたことないか、なんて変なナンパしてきたのね」

「……あれは、自分でも恥ずかしいこと言つたなあと今でも反省してます。忘れて

……」

「ふふっ、やだ。忘れない。ずっと覚えてる」

ヒリエツタは、そういたずらっぽく笑つて、彼の手を握り返した。傷の痛みでその力はとても弱々しかったが、イズモにとつてはそれだけで十分だった。

ぼろぼろ、と彼の瞳から涙が零れ落ちる。

「あ……ごめ、ん」

「……いいよ。大丈夫。大丈夫だから」

同じように瞳を潤わせていたヒリエツタが、優しくそう言った。

馬鹿みたいに優しい声だ、とイズモはその声を頭の中で反芻させた。

「——ふふ。でも、よかったあ。イズモが無事でいてくれて」

「こう見えてオレ、しぶといからさ」

「うん……知ってる……」

それなりの時間が経つてから、ヒリエツタがほつと一息ついてそう言った。

イズモはちよつと得意気にそう言うが、そこにもう少しだけ言葉を加えつける。

「……あ、でも、もうちよつと早く来てくれたらいいのに、とは思つたよ」

「え？」

「三日前に、飛行船が降りるのを見たんだ。だけどみんなが来てくれたのは昨日だったからさ。オレ、二日間辛かった！」

「……………」

「二日はやつぱり長かったよー！ オレ頑張った！ もっと褒めてくれていいよ！」

「……………どういうこと？」

「ん？」

「私たちが着いたのは、つい昨日よ……………」

「……………なんだって？」

「三日前は、私たちじゃない。その時は、私たちはまだベルナ村を経ったばかりだわ」

「……………ほんとに？」

「ええ、間違いないわ」

「……………じゃあ、その飛行船、一体誰が……………」

三日前に来た飛行船が、てつきりシガレットたちだと——イズモは、そう思い込んでいた。しかし、彼らが到着したのは昨日のことであり、別の誰かがそれより前にこの古代林に足を踏み入れている。

何気なく口走ったことが、どこかすつきりとしない事実を明らかにした。どこか後味の悪い思いを感じたイズモは、それを口にしたことに若干の後悔を覚えるのだった。



「——な、何が……？」

吹っ飛ばされて、骨の山を転がった。

確かに俺は、淆瘴啖に引導を渡そうとしたはずなのに。あの頭に、劍斧の切っ先を向けていたはずなのに。

気付けば、俺は骨の山を転がっていた。

一体何が起こったのか。一瞬のうちに脳に叩き込まれた情報を、必死に整理する。突き付けた劍斧が、弾かれる。

突然暴れ出した淆瘴啖によって、その切っ先が奴を仕留めることはなかった。

淆瘴啖は、まるで死を拒むかのように暴れ狂う。

あの時、氷海で見せたような半狂乱の状態に近かった。本当に、恐怖に怯えているかのような慄おのき具合だった。

そんな奴の巨体が、骨の中に引きずり込まれる。

この地底湖の底へ、骨の山から伸びた長い骨に絡みつかれて——。

「……そうだッ！ あれは一体……」

俺の記憶が正しければ、まるで蛇のような骨だった。

いや、骨でできた蛇って言った方が正しいか？

「……………うっ!?!」

突然、俺の足元が青く光り出す。

俺の立つ骨の隙間から、青い粘液が溢れ返ってくる。

「何だツクそツ!」

慌てて、横に跳んでそれを避けた。

畜生、動く度に左目がぐじゅぐじゅと痛みやがる。

「……………な……………」

粘液の噴出は拍子抜けなくらいあっさりと終わり、かと思えば背後から骨が割れる音が響く。

慌てて振り返った俺が見たのは……………。

「……………つつ」

異形としかいいようのない奇妙な物体だった。

骨だ。

骨の塊が動いている。

まるで亀の甲羅のような巨大な骨と、そこから伸びる二本の骨。まるで双頭の生き物が、骨の奥から悠然と現れる。

「……………何だ、(こいっ)」

正直なところ、化け物以外なんでもなかった。

骨が動いている。骨が、意思をもって動いているようにしか見えないのだ。

これが、例の双頭の龍か？ とふと思う。

龍歴院が調査していた古代林。そこで飛空船が行方不明になる事件が多発し、調べてみれば地下に巨大な古龍がいたとのことだったが——もしかしくなくても、これがそうなのかもしれない。

「……けど、何だ、これ」

長い首の先には、これまた見慣れない竜の首がついている。それも、頭蓋骨だ。カタカタと顎を鳴らす姿は、獲物を前に心躍らせているようにも見えるし、一方でどこか傀儡めいているようにも見えた。

しかし、それよりも気になる点があった。

「首が、ない……？」

双頭のうち、片側があまりにも短かい。まるで半ばで噛み千切られたかのような、そんな風貌だ。

砕かれた骨の中からは、不気味な肉の断面と、そこから滴る青い血が顔を見せている。竜にしては、鮮明なくらい青い色だ。

——いや、よく見ろ。あの噛み痕を、俺は何度も見てきたはずだ。あの噛み痕を、俺

は追い続けたはずだ。

「淆瘴啖……淆瘴啖が、食ったのか」

乱立した牙に抉られたその断面図は、イビルジョーによるもので間違いない。それに、あのサイズとなると淆瘴啖ほど長寿な個体に違いないだろう。

——じゃあ、こいつか？ こいつが、淆瘴啖をここに連れてきたのか？

その骨が、吠える。

まるで慟哭と怨嗟が織り交ざったようなその声が、この地下空間を震わした。

「ぐっ……っ！」

耳が痛む。その衝撃で、左の眼孔も酷く痛い。

その咆哮に身を竦ませたその瞬間に、右だけになった視界が奴の首を映す。その喉奥から溢れる、まるで絵の具のような色に染まったその青を。

「んの……ッッ！」

横に跳び避けた瞬間、青い軌跡がこの暗闇を塗りたくった。

絵の具のような青。

ひたすらに深い青色に染まったそれが、骨を絡み取るようにして水に溶けていく。

あの青を、俺は見たことがある。

「あの時の、氷海の時のあれか！ あの時いたのかっ！ あそこに！」  
応、とても答えるように骸の頭がうねり、俺に目がけて落ちてくる。

頭突きか？

いやむしろ、打撃のようだ。頭を、まるで道具のように粗末に振るう。

「おいおいおい、何だコイツ!!」

まるで鞭のようにしなるその首。

しかし、太さは鞭どころではない。大木だ。骨でできた大木が、眼前に迫る。

「うらアツ!!」

構えた剣斧を振り上げて、弾くようにいなした。

頑丈な滝瘴啖の素材だけあって剣斧はまだ無事だが、俺の肩には多大な負担が襲い掛かる。ここまでの体格の相手には、やはりイナシは厳しそうだ。

なんて考えていた瞬間だった。

奴の頭が骨の中に沈み込む。頭の重さに骨の大地が耐えられなかったようで、奴は大きな隙を晒した。

「(ッ)だッー」

剣斧を振り下ろす。

その目元に向けて振り下ろす。



骨が割れ、青い血が溢れ出した。

左目が、穿たれる。

左目が穿たれたというのに——奴は、まるで反応を示さない。

「……何だ、この違和感」

続けざまに斧で連打し、さらに剣で斬り付ける。それでもその頭は、まるで意に介さずゆつくりと骨の海から顔を出した。

おかしい。

どんな生物であれ、目は急所はずだ。

目のないフルフルでもない限り、目元を穿たれたら大きな反応を示すはずだ。あの瘡啖ですらそうだったんだから。

それでもコイツは、深々と目に穴を空けられても何も気にせず打撃を繰り返している。一体、どうなっている？

「死角取ったぞ——」

それでも、俺は奴の側面に回り込んだ。

奪った左側へ入り込み、再び剣を構える。

その瞬間だった。

「——なっ、嘘だろ！」

奴は、そんなこともまるで関係ないと言わんばかりに首を振る。死角の俺も、見えていないはずの眼で捉えたとでもいうのか。

「ぐっ……」

振り上げられた腕に当てられ、そのまま骨の大地を転がった。

舞い散る破片と、バルファルクにやられた痛みが俺を苦しめる。左目に至っては、もはや痛い痛くないという問題ですらない。感覚がほとんど分からなかった。

「くっそ……この野郎……」

まずい。

バルファルクに続いて渾身が痺れ、休憩の隙間もなくこいつが現れた。

しかも、古龍だと？ バルファルクやクシャルダオラどころではない。体格から考えれば、超大型モンスターと捉えてよさそうだ。

そんな奴と、こんな逃げ場のない地下空間で鉢合わせるなんて。

いや、むしろ俺が軽率に奴の縄張りを踏んだのか。

「……つかあ。下手こいたもんだぜ、俺も」

このまま、俺は死にまうのだろうか。

ようやく渾身が痺れを止める、というところで再びこいつに漁夫の利を取られちまつた。

ああもう、俺は本当に肝心なところでダメな奴だ。

「……淆瘴啖、食いたかったなあ」

深い眼孔の奥から、赤黒い光を見せるその骨の塊。

先程の青い粘液とは一変、龍光らしきものが溢れ始める。

畜生。俺もここまでか。

イルルル——悪い。淆瘴啖、俺の代わりに食ってくれよな——。

赤い光が集束する。

その光ごと、一筋の線が穿った。

直後、炸裂音。火薬の弾ける炸裂音だ。

奴の頭を突いて、胴体の奥までその線は貫いた。同時に、その弾道が激しく炸裂する。骨の鎧もものともしないその一撃に、奴は野太い悲鳴を上げた。

「な……」

一体何が？

何が、奴を仰け反らせた？

「……だが！ 今は！」

考えている暇はない。

折角できた大きな隙だ。これを逃す手はない。

剣斧を大きく振り振り、斧から剣へと姿を変える。その切っ先を解放させ、ピンのエネルギーを放出。内包するエネルギーが一つの出口から溢れ出した。

その衝撃が、俺を後押しする。その流れに身を任せ、俺は駆け出した。

「らあああああッ!!」

骨に足を取られる。剣に擦られ舞い上がる骨が鬱陶しい。

それでも俺は、走り続けた。奴の喰い千切られたもう片方の首に向けて走る。

その断面を向ける。その骨の下の肉を見せる。

この剣斧を突き立ててやる——。

「——あ」

もう片方の首が、うねる。

俺を認識して、その空虚な瞳で俺を見た。

骨の太木が、再び俺に迫ってきた。

剣斧の反動で走る今、俺にそれを避けるなんて細かな芸当はとてじやないが不可能だ。

まずい。しくじった——。

カン、と甲高い音が二度響く。

同時に、その大木の骨が激しく炸裂した。

「……ッ！」

今のは、見えた。

斬裂弾だ。斬裂弾が首の骨を裂いた。奴の首が痛みに暴れ、その度に青い汁が降り注ぐ。

一体誰だか知らないが、誰かが俺を助けてくれている。

今分かるのは、それだけで十分だった。

「さあ——」

跳躍。続いて、首の断面に向けて剣斧を突き立てる。

肉の奥まで埋まったそれを、解放だ。詰まった属性を、今解放するんだ。

澄んだ龍炎が、チリチリと肉の隙間から溢れ出る。

剣斧が震える度にその量は増えていく。

「——たとと喰えッッ!!」

炸裂。

奴の首の中で、剣斧が擦れ合って着火。漏れ出た龍炎は、爆風と高熱に成り変わる。

その反動で俺の体は弾かれて、剣斧を突き立てるようにして受身を取る。

大きく引き裂かれたその首からは、どす黒い色の粘液が零れ落ちていた。青色と、く

すんだ龍の色。裂けた身は黒く、どこかぬめりを帯びている。  
「……………いつは、一体何なんだ」

先程撃ち抜かれ、さらには俺が患部をえぐったというのに。  
奴は悠然と、動き出す。

その骨の首を海に沈め、ゆつくりと体の向きを変え始めた。それはまるで、船が旋回するかのよう——。

淆瘴啖はどうなったのか？

あの狙撃の主は誰なのか？

そんな疑問を置いてけぼりにするかのように、奴は本性を現した。

恐ろしいまでのその雄叫びに、この地下空間が青く染まる。

それはまるで、物語に出てくる死者の国のようだと。

後から思い返すことがもしてきたとしたら、俺はきつとそう思うのだろうな。

く本日レシピス

『古代林印の焼きバナナ』

・バナナ（古代林産） ……2本

- ・バター（雲羊鹿製）……………適量
- ・シナモンパウダー……………適量
- ・砂糖……………極少量

旨いものには神経を締めよ

「うおおおお!! なんだあ?!!」

「ほっほほ。こりゃあ、コダイオウイカじゃなー!」

まだバルバレで狩りを始めたばかりの頃――。

俺が釣り上げたのは、白く巨大な軟体生物だった。

ギョロギョロとした瞳に、吸盤だらけの長い手足。その中でもとびきり長い二本が、俺の体に巻き付いてくる。防具にギリギリと、吸盤痕が刻みつけられていた。

「爺さん! 爺さんっ、これ何とかしてくれ!!」

釣り場で獲物が掛かったと思いきや、出てきたのはコイツだった。

完全に魚を想定していた俺は、度肝を抜かれる思いで今パニックに陥っている。傍にいた山菜ジイさんに助けを求める始末。

「いででで!! 何だコイツ!! 痛い!」

「ほっほ。動くなよ小僧」

そう言いながら、山菜ジイさんは鉈を出す。



背中の籠を置いて、すつと構えた。俺もいるというのに、彼は構わず銛を構えた。

「ちよつ、待て！ 早まるな爺さん！」

「どうどう、暴れるな若いの。お主を刺すつもりはないが、動く保証できんぞ」

俺に絡みついてうねるこの軟体生物。

イカ。イカか。そういえば、タンジア鍋に入っているのを見たことがある。この足の形を見たことがある気がするが——本体はこんな姿なのか。知らなかった。

なんて感心している場合じゃない！ 爺さんが、爺さんの銛が——。

「動くな、動くなよ……」

その切っ先が眩い光を俺を照らす。

山菜ジイさん——その眼光は、捕食者のそれだった。

「……大丈夫か、若いの」

「……あ、どうも……」

すつかり意気消沈した俺に、爺さんは竹筒の水汲みを渡してきた。

いただいたそれを一気に飲み干す。爽やかな水の香りが鼻を抜ける感じ。何というか、生きていることを実感する。

「ほっほほ。アロイシリーズ、新調せねばならんの」

「あ……吸盤痕が酷いなこりや……。モンスターどころかあんな生き物にやられるなんて」

「駆け出しか？ 若いの〜」

「……駆け出しじゃあ、ないんだけど」

言い訳がましくなるから、それ以上は何も言わないが。

まだまだバルバレに来たばかりだ。右も左も分からない。駆け出しと言っても差し支えないだろう。事実、俺のハンターの活動歴はゼロだ。ゼロに書き換えられてしまったのだから。

「まあ、苦勞したじやろうが……。苦勞の後の食事は、それはそれはたまらんじやろて」

「……これは？」

「イカ刺しじや。旨いぞお」

爺さんが見せてきたのは、あのイカの刺身だった。

白く透き通るようなその色味には、どこか心が落ち着かされる。あの謎の生物が、まさかこんな美しい姿に変貌するとは。ぷるりとした質感が、光を反射して俺の心を揺れ動かしてくる。

「……食べていいのか？」

「主が釣らんと取れんかったからな。さあ、食べなさい」

「じゃあ……。いただきますー」

思わぬ形で飯にありつけたと、刺身を一切れ指で摘まむ。

匂いを嗅いでみると、ほんのりレモンの香りがする。透き通った白の中に、薄い黄色がかかっていた。擦り下ろしたレモンがかかっているのか。

口に含めば、レモンと潮のハーモニー。海の潮つ気が、十分な塩つ気を含んでくれる。

「あつ……。海……」

口の中に、磯が生まれた。

ぷりぷりとした歯応えが、口の中で咲き誇る。

何だろう、これは。噛む度に、じゅわつと甘みが広がってくる。潮の香りに引き寄せられるように、イカの甘みが溢れ出る。脂の甘さというか、砂糖や果物とは違う、動物性の肉特有の甘さだった。とろけるような、と例えてもいい。事実、噛む度にその甘さが溢れ、その度に歯応えある身がとろけていく。とはいえもちろん獣や竜の脂とは違う。何というか上品で、直情的ではないというか。少しひねったような、それでいて安直のような。例えるのが難しいが、この深みを醸し出す感じは、海産物特有のまろやかで贅沢な風味なのだ。

そして鼻孔に、喉に広がっていくレモンの香り。擦り下ろすとこれだけ香りが増幅されるのか。果肉はもちろん皮も含まれているようで、酸味と香りが非常に高レベルでま

とまっている。それでいて食感を邪魔することはない。味を引き締め、イカの甘みを引き立てる。何とも素晴らしい配役だった。

「……旨い。めっちゃ旨いぞこれ！」

「そうじゃろうそうじゃろう。自分が得た獲物は、それはそれは格別じゃろう」

「いやほんとにすげえよこれ！ 爺さん、どうやってあのイカを捌いたんだ？」

「包丁で切り分けただけじゃよ。イカの解体の仕方はな……」

山菜ジイさんは得意気な様子で語り出そうとしたが、生憎それは俺の聞きたい話ではなかった。

何といえよ、良いのだろうか。あの荒ぶるイカを、彼はどうやって無力化したのだろうか——。

「あ、いや。そうじゃなくて……えっと、何と云えばいいのか。どうやって、捌けるようにしたんだ？」

「ん？ 神経締めじゃよ。知らんのか？」

「初めて聞いた……神経締め？」

「神経を締める——魚介の新鮮さを保つためには欠かせない手段じゃやて」

うんうん、と頷きながら噛み締めるようにそう言う山菜ジイさん。

神経締め、か。

まだまだ俺の知らないことばかりだ。本当に、思い知らされる。

「……どうやって締めるんだ？」

「ほっほっほ。イカは簡単じゃよ。本当にシンプルじゃ」

「もったいぶらず教えてくれよ！ 知りたい！」

「料理に興味があるのか？ これはなかなか、見所ある若造に出会えたのう」

山菜ジイさんは、そう感慨深そうに言ってから。

先程俺に向けてきた、あの鉗を取り出した。

「ならば、主に伝授しよう。イカを締めるには、ある場所を突けばいい」

「ある場所？」

「おうとも。簡単じゃ。知れば誰にでもできる。その肝心な部位というのはな——



「……こいつツツ……」

金色の瞳が、俺を見る。

骨に包まれた頭部が、余りにもでかい。口の占める範囲も、あまりにもでかい。

口に体がおまけのように張り付いて、そこに骨を付け足したかのような、そんな姿

だった。

それにしても、こいつの姿は見たことがある。

骨でできた双頭の龍、ではなかったのだ。

「……イカ、か？」

あの双頭は、触腕か。

貝殻を纏うように、骨を身につけているのか。ということは、コイツ自体は甲のような骨は持ち合わせていない？

一体、何なんだコイツは。

「……チツ、マジで強そうだなコイツ……」

黄土色に硬化した骨に、青黒い粘液質の肌。二本の触腕と、迸る龍の光。

ただのイカではない。明らかに脅威となる古龍だ。

「俺が生きて帰るには……お前を、食うしかなさそうだッ！」

骨を食うとなると、何も気持ち盛りが上がらなかった。

だが、イカとなれば話が違う。いつか食べたコダイオウイカは旨かった。

お前も——旨いだろ？

「ヤッ……」

改めて、剣斧を構えた。

コイツと戦うために、グラバリダに新たなピンを装着させる。同時にその側面をナイフで裂いて、中身を刀身に浸透させた。最初から、剣鬼形態だ。

このまま斬り込もう、とも思ったが。それよりも、まずは。

「……トレットだろ？ 俺を助けてくれたのは」

光を呑み込む虚に向けて、そう声を掛けた。

「コイツはやべえ。手を貸してくれるな!?!」

そう問い掛けると、背後から骨が割れる音が響く。

高台から跳び降りてきたかのような、そんな音。

「……久しぶりですね、シグ」

「……お前、手紙くらい返せよな」

そう悪態をつくも、彼はそれを無視して背中中の獲物を取り出した。いつもより大きな獲物を展開するのだが——俺はそれ以上に、彼の異様な姿に目を奪われた。

その肌はいつも以上に色白で、薄い瞳には淡い色の隈を湛えている。元々細身だったはずが、さらにやせ細っていた。顔の半分を血塗れにしている俺が言うのも何だが、久しぶりに会ったトレットは、随分と変わり果てていた。

「お前……」

「シグ、左目が」

「あ、ああ……いやお前、人の心配よりもまず自分を気にしろよ……」

「……如何せん、資料探しに追われていましたので、ね」

見れば分かる。こいつはろくに寝てないし、食べてもいない。不健康そのものだ。それほどまでに、例の人探しに熱中していたのか。

そんな彼が構えるのは、いつもお馴染みのライトボウガン——ではなかった。

くすんだ銀色は、まるで鋼鉄のよう。長い銃身の根元には、レンコンのような丸いパーツを備えたその姿。彼の身長ほどもあるその銃は、間違いなくヘビィボウガンだ。

「お前、ヘビィも使うのか？」

「こういう時だけですけど、ね」

彼がポーチから取り出したのは、弾が十二発、円状に連なった奇妙なパーツ。それを、彼は半分折り畳んで露わにしたレンコンの後部に押し当てた。

ボタンを押し込むと、ガシュツツという音が響き、あの円状の弾が全て装填される。

「スピードローダーというのは、便利なものですね」

「あん？」

「コルムⅡダオラ用に特注開発されたのですが、あらかじめ用意しておくことで素早いリロードが可能になるんです。さ、やりましようか」

そう言って、彼は『コルムⅡダオラ』と称した重弩を構える。



見たことのある質感だ。以前俺が使っていた義足とよく似ている。ダオラと言うだけあって、おそらく鋼龍由来の武器なのだろう。

なんていう、俺の捻りのない考えを掻き消す発砲音。腰を落として、両脚を広げて。前転と共に銃を構えた彼は、恐ろしい勢いで連射を始める。撃つ度にあのレンコンは回転速度を速め、鋭く穿つような弾を撒き散らす。彼が引き金を振るう速度も、数撃つ度にさらに速まっていく。

「注意は引きます。シグは、回り込んで隙を狙ってください!」  
「……分かった!」

撃ち切ったレンコンから空になった薬莢を落とす、トレッドは新たなローダーを注ぎ込んでいく。

そんな彼を狙って、あの骨の龍——もといイカはその隻腕を振るうが、彼は驚いたことに走り出した。ヘビィボウガンを抱えているというのに、彼は構うことなく走り出した。

あんな力があつたのか、なんて今更ながらに思う。長い付き合いのはずなのに。この前アイツの腕を簡単には振るえなかつたのは、もしやあれが理由だろうか。

「相変わらずすげえな、あいつ……!」

隻腕を振るうイカ。その腕を軽々と避けて、再び連射を始めるトレッド。

あの骨の鎧に軽々と穴を空ける感じからして、彼が放っているのは貫通弾か。通常弾では弾かれてしまうだろう。貫通弾と言えど骨に穴を空けるので手一杯のようだが、奴の気を引くには十分だった。

その隙を突いて、俺は斧を振り下ろす。奴の顔を縦一文字に大きく薙ぐ。薙いだ瞬間感じる、強烈な生臭さ。

「うっ……何だ!? くっさ……ッ!」

青黒い息が漏れていた。奴の口から、悪臭を帯びたガスが漏れていた。

「シグッ! 上から来ます!」

「っ! くそっ!」

奴の頭部を覆う骨が、震える。

慌てて背後に転がると、その骨が勢いよく水面を打ち鳴らした。イカの頭突きとは随分滑稽な光景だが、あまりの質量にその威力は笑えない。直撃していたら、全身が粉碎骨折だ。

なんて思いながら転がった瞬間だった。

俺の体が、急激に重くなる。

「ん……なっ!? 何だこりゃ!」

俺の鎧に、骨がこびりついていて。まるで接着剤でも纏ったかのように、鎧に大量の

骨が纏わりついていてる。

そのあまりの重さに、俺は満足に動けない。

あのイカは、そんな俺をじっと見つめた。

「うげっ………！」

奴の隻腕が、赤黒い光を帯びる。

その先端から迸る、黒々しい龍のオーラ。

「シグッ！ 動かないで！」

「うわっ！」

瞬間、響くトレッドの声。同時に轟く発砲音。

直後に、俺にへばりついた骨が崩れ落ちた。トレッドが撃ち抜いたのだろう。一部残った骨には、貫通弾特有の捻じったような弾痕が残されている。

「いきなり撃つなよ！ 怖いだろう！」

「うるさいですね……感謝してもらいたいもんです！」

そう言いながら彼は前転し、再びボウガンを構えて引き金を引く。

彼が冗談めいた悪態や罵倒もせずになんか言うのは、目の前の古龍がそれだけ危険だという証。俺も改めて斧を構え、奴の隙を伺った。

攻撃手段は、主にあの触腕だ。

隻腕となったそれも、骨を纏った超質量であることには変わりない。それを鞭のように振るうのだから、危険極まりない存在だ。

だが、根元はどうだ。先端は激しく振り回されているが、根元は骨の大地から顔を出しているだけで大きく動く気配はない。トレッドに気を取られている今、あの根元はまさに隙だらけだった。

「そこだッ!!」

全体重を乗せた、斧の振り回し。

周囲を薙ぐその一閃が、骨を砕いて中の身を引き裂いた。

イカは吠える。吠えて、痛みに耐えられなくなったように横転した。頭部が沈み、その頂点が露わになる。

「……っ、何かありそうだなッ!」

あれだけ丈夫な骨で纏っているのに、その頭頂部は執拗に隠していた。本性を表す前から、今戦っていた時でさえも。

あの頂点には何があるのか? 俺は気になって、斧を剣に変えて走り出す。龍属性の軌跡が、奴の背中中の骨を焼いた。

「シグッ! 上から見ていた時に気づきましたっ! 奴の頭頂部には色の異なる部位がありますっ、もしかしたら急所かも!」

「あつたつ！ これだな！」

黄土色の骨の海に沈む、玉虫色の甲殻。いや、奴の身が剥き出しの部分か？ どちらにせよ、じっくりと考えている暇はなさそうだ。

俺は剣斧の勢いをそのままに脚を踏み切った。大きく跳躍し、そのまま切っ先を下に向ける。属性エネルギーを高めつつあつたその刃を、深く奴の急所——と思われる部位——に向けて突き刺した。

「うおつ、暴れんな！」

それが効いたのか、奴は悲鳴を上げてその身を仰け反らせる。

俺はとにかくグリップを握り続け、属性解放の手を止めなかつた。溢れ出る光が炸裂するまで、とにかく剣を突き刺し続ける——。

直後、奴の周囲が激しい光を放った。

この光は、拡散弾のものだ。トレッドが、奴の周囲を拡散弾で覆い尽くしている。

「シグっ！ そのまま離さないで！」

「助かるツ！ オラアツ！ 喰らえこのイカツ！」

溜めに溜めた龍のオーラは、そのまま奴の内部で炸裂する。

俺が吹き飛ばされたのはその反動か、それとも痛みのみならず海老反りになった奴の剛力のせいかな。

骨の山を転がりながら奴を見定めると、トレッドの放つ弾幕がその身を削る光景が目に入ってきた。

「いつてえ！ どうだトレッド！ 効いてるか!？」

「……どうでしょう……奴の隻腕が、骨の底へ沈みました。これは……」

本当だ。体勢を立て直す奴のあの腕が、どこにも見当たらない。一体どこに消えてしまったのか。

なんて、辺りを見渡したその時だった。

突如、骨の山が弾け飛ぶ。同時に引き上げられる奴の腕。骨を撒き散らしながら現れたそれは、赤と青の甲殻を纏っていた。

「——あれは!？」

「ディノバルドの……尻尾!？」

骨に擦られ炎を灯すそれは、まるで大剣のよう。

力強く振り被られ、炎の軌跡をこの地下空間に走らせる。

「うおおっ!？」

慌てて転がって避けるものの、若干の熱を浴びてしまった。あれは間違いない。ディノバルドの火炎そのものだ。奴は尾骨を利用して、発火現象を起こしているのだ。

「あちち……クソ、この頬当てはもうダメだな」

瘡瘡の涎で損傷していたこの頬当ては、もはや形を成せなくなるほど溶けていた。仕方なく乱雑に引き剥がし、改めて剣斧を構える。

息がしやすい。生臭い海の香りが、より感じやすくなった。

「トレッド！ 無事か！」

炎の壁の向こうへと声を張り上げる。返事のように返ってきたのは、耳を劈く炸裂音と硝煙の香り。

トレッドは炎の壁をくぐり抜け、冷静に重弩を構え直していた。再び鳴り響く連射音に、斬竜の亡骸が激しく火花を散らす。

「所詮は劣化した骨ですね。燼紛が多少残っているとはいえど、何発か撃ち込めば壊れそうです。シグは構わず、本体に攻撃を！」

「おうー！」

相変わらずの精密な射撃により、奴の炎は封じられた。この隙に、俺は駆ける。赤い光を迸らせる奴のその頭に向けて、剣斧を引きずりながら走った。

奴は、デインバルドの骨が炎を発することを学習したのか？ それをそのまま道具として、武器として使っているのか？ 考えれば考えるほど奇妙な古龍だ。知能の高いモンスターは数多くいるが、こいつはその中でも特に危険な存在だろう。

——そしてそれだけ頭の良い生き物というのは、どんな味がするんだろうな。

「喰らえッ！」

走る勢いをそのままに、腰を捻って遠心力を上乗せする。振り被った斧を奴の口元に叩き付けると、奴は鈍い悲鳴を上げた。

先程のような青い靄もやは、もう出てこない。代わりに、滞留する龍のオーラが光を増しているかのように見えた。

「……いっ！」

背後から、骨が碎ける音がした。トレッドの放った弾が、斬竜の亡骸と奴の腕を繋ぐ骨をバラバラに砕く。

それに奴は唸り声を上げ、身を屈ませて——するとその瞬間、纏う龍のオーラがさらに一際大きくなった。

「トレッド、こいつ何か——」

「シグッ！ 気を付けて！ この龍、再び腕を沈めています！ 骨を出す気……」

「——骨……骨じゃ、ねえッ!？」

再び盛り上がる骨の山。それによって水流が乱れ、俺たちは姿勢を保つのに精一杯になる。

次の瞬間だ。有り余るほどの巨体が引き上げられた。赤と、黒と、緑と紫を混ぜ返したような、そんな色。金色の牙が立ち並ぶそれが、隻腕によって持ち上げられる。



「……潰瘡啖ッ!」

先程水の底へと引きずり込まれたはずの、潰瘡啖。俺が仕留めるはずだった潰瘡啖が、今高く高く持ち上げられて——そのまま、俺に目掛けて叩き付けられた。

「うがつ……!」

やせ細っているとはいえ、あの巨体だ。重さも相当なもので、骨の大地に穴を空けた。それによつて激しい水しぶきが舞い上がり、俺は衝撃のあまり飛ばされる。

骨の大地を転がる中、左手では剣斧の柄を握り続け、右手はとにかく骨を掴んだ。籠手越しに爪が剥がれるのが分かる。痛むが、それでも放す訳にはいかなかった。俺は泳げないから、落ちたらまさに一貫の終わりだ。

「シグ……生きてるんでしようね!」

「ぐつ……ツツつうぐ! 生きてるよ! 何とかな!」

左目の血も止まらない中、右の籠手の中にも血が滲むのを感じた。それでも何とか体勢を立て直し、もう一度剣斧を構える。握る拳に、鈍い痛みが走る。

脚、無事だ。義足、問題なし。体はきついが、俺はまだ戦える。まだ、食える。

「トレッド! 俺はもう一度、あの隻腕の付け根を狙う! 援護頼む!」

「……今度ばかりはあの巨体を振り回されてますからね、さっきのようにはいきませんよ!」

「構わねえ！ やれるだけでいい！」

そう叫んで、深く深呼吸して。

グリップを捻り、再びピンを解放する。背後に回した剣斧から、強烈な負荷が伝わってくる。それをそのまま、加速のエネルギーへと換えて——俺は走り出した。

沈黙した瘡瘻啖は、もう既に息絶えてしまったのだろうか。ただ動かぬ肉塊として、俺たちを苦しめるように骨の大地を掻き鳴らす。舞い上がる骨の欠片は痛い、俺はとにかく走り続けた。残った右目に当たらないことを祈るばかりだ。

トレッドは、これまでも増して重弩を激しく鳴らしている。甲高い射撃音が反響し、その度に奴の隻腕から青い血飛沫が舞うが、それでもこのイカは止まらない。俺たちを薙ぎ払おうと、瘡瘻啖を振り回す。

「当たるかッ！」

その巨体をくぐり抜け、俺は全身全霊を持って滾る剣を叩き付けた。澄んだ龍の光が、奴の青黒い肉をぶちぶちと引き裂いていく。

「らあッ！」

そのまま振り抜いた。

重い肉を裂く手応えが腕に届く。切り裂いた。切り裂いたが、固い骨の感触までは届かない。

「ちっ………！」

奴の腕を斬り落とすまでには至らなかつた。

先程斬りつけた箇所、重ねるように叩き付けたというのに。

「………これでもか………ッ！」

「シグッ！ 離れて！」

「うっ!？」

諦めかけたその時に、トレッドの音が響く。振り向こうとした瞬間、あの骨をいとも簡単に貫いた軌跡が走る。

半分になった視界の端に映つたのは、伏せるように重弩を構えるトレッドの姿だつた。さながら狙撃の体勢のような彼に言われるがまま、とにかく離脱しようと足腰に力を入れる。

背後に跳んだ、その瞬間に。あの弾道が炸裂し、奴の腕を根元から引き裂いた。

同時に落ちる、渾身震るの巨体。悲鳴を上げる奴の目の前に落ち、大量の骨を舞い上げた。

「やっ——」

喜んだのも束の間だつた。俺たちの声を掻き消すかのように、凄まじい怒号が響く。大気が怒りに震えている。

片腕を淆瘴啖に喰い千切られ、残ったもう片方の腕も俺たちに奪われて。凄まじい量の血飛沫を上げながら、それでも奴は俺たちを睨んだ。あの金色の瞳で、憎々しげに睨んだ。奴の骨を走る光が、どこか虹色を帯び始める——。

「これは……」

「やっぱりだ。密度が濃くなっている。これって、もしかして……」

「龍属性の収束ですね。プレス、でしようか」

「おいおい嘘だろ。こんな高密度のプレスって、一体……」

骨を走る光が、一心に集まっていく。奴の口元は光を集め始め、それが徐々に徐々に赤黒く染まり始めた。

その様相は、さながら太陽か。

まるで火球のようなそれを、奴は唾えるようにして俺たちに向けた。

「……退避っ！」

「これはやべえ!!」

俺とトレッドは直ちに離散した。離散して、骨の窪みへとダイブする。

果たして、そんなことで逃れられるものなのか。

そんな俺の疑問を掻き消すかのように、光の玉が放たれる——その直前だった。

淆瘴啖が吠えた。

「えっ!？」

「なっ……!!」

生きていた。淆瘴啖はまだ、生きていた。

左目が潰れ、左脚を失っているというのに。口から大量の水を吐き——目の前で光を解き放とうとする骨の龍に向けて、牙を突き立てた。

「伏せろッ!」

喉元——と言えいいのかは不安だが、淆瘴啖は奴の喉元へと食らい付く。

力の収束に躍起になっていたのである。死角からのその衝撃に、あのイカは思わず体を仰け反らせ——溜めた光をこの地下空間の上へと解き放った。

波動が押し寄せる。空気が引き裂かれて、赤い赤い色が全てを塗り潰した。その轟音はもはや衝撃の塊となり、この骨の大地を吹き飛ばした。

解き放たれたそれは、もはやブレスというレベルじゃない。グラビモスの熱線を極限まで太くしたような、超質量の波動そのものだった。それが宙を舞う骨全てを掻き消して、天井部分の地盤を融解させる。

「上からも来ます……っ!」

「俺……生きてるのかこれ……ッ!」

崩れた地盤は、熱でポロポロに融けながらこの地底湖に降り注いだ。それを武器で弾

こうとするものの、ブレスの衝撃で水面も波打ち、思うように踏ん張れない。

まさに、永遠とも思える時間だった。いつ死んでもおかしくない——むしろ、自分が今生きているかどうかすらも自信が持てないほどの、恐ろしい時間だ。

だが、それも永遠ではない。奴のブレスがか細くなつていくにつれ、大気を打ち鳴らすその怒号は次第に成りを潜めていった。

「……生きてる」

「生きて、ますね……」

赤い光が途切れる。息がもたない、と言わんばかりに奴は滞留する光を弱らせる。ロボロと、纏う骨のいくつかが音を立てて剥がれ落ちた。

同時に、重い音が響く。至近距離からあの波動を浴びた淆瘴啖は、力なく牙を離し、ずるりと倒れ込んだ。あの波動をすぐ隣で浴びたのだ。恐らく奴は、今度こそ——。

「……淆瘴啖」

淆瘴啖は、うつすらと瞼を持ち上げた。残った右目で、俺を見た。

口に残った古龍の肉を、呑み込む力もないらしい。ただ静かに、その瞳から光を手放した。そのまま、動くことももうなかった。

溶けて穴が空いた天井からは、夜明けを思わせる光が彼を優しく照らしていた。

「——シグフ、気を付けてください！ 奴が潜ります！」

「何ッ!？」

はっと気づいた時には、骨の山へ沈み込む奴の姿が見えた。あれだけ巨大な生き物が、瞬く間に水中へと姿を消してしまふ。

いや、どう動いているかは分かる。奴が動く度に水流が発生し、骨の大地を掻き分けていくのだから。

「逃がしてたまるか……ッ!」

「こいつをこのまま逃がす訳にはいかない。ここまで追い詰めたんだ。俺とトレッドと、渾瘡啖で追い詰めたんだ。このまま食わず仕舞いなんてこと、認めてなるものか。」

「……ッ! なっ!？」

逃げる、ではなかった。

奴は、体勢を立て直したのだった。

再び浮上した骨の山。

その奥に佇むイカの頭は、再びあの光を集め始める。

虹色にも輝く骨と、収束していく赤黒い光。

「第二放射……っ!」

「嘘だろ……!!」

あれだけのエネルギーを、こいつは再び集め始めていた。今あれを撃たれたら、逃げ

ようがない。淆瘴啖はもういない。照準がずれることもないだろう。ブレスという範疇に収まらない、ただただ高密度の質量の塊。避ける術は、もうなかった。

「かくなる上は——」

「撃たれる前に狩る!!」

トレッドは重弩のシリンドーを回転させ、再び硝煙を上げ始める。

俺は、剣斧を振り被って再び走り出した。

どうすればいい？

このまま闇雲に攻撃して勝てるのだろうか。

俺たちがどれだけ肉を抉っても、淆瘴啖が急所に喰らい付いても、奴はまだこうして力を溜め続けている。

どうしたらいい。

どうしたら、こいつを仕留められる。

——ならば、主に伝授しよう。イカを締めるには、ある場所を突けばいい。

いつか聞いた、山菜ジイさんの声が脳裏をよぎった。

——おうとも。簡単じゃ。知れば誰にでもできる。

あの時、俺を羽交い絞めにした巨大なイカをたやすく無力化した彼の技。たった一撃



で、あのイカを食材へと変貌させたあの技。

そうだ、確か”神経締め”だと言っていた。

——その肝心な部位というのはな——

思い出せ。

彼が突いた場所を。

思い出せ。

イカの急所を。

「……そうだ」

今は銚がない。奴もただのイカじゃない。

今あるのは剣斧だけだ。奴は、恐るべき古龍だ。

剣斧には、ピンがまだ十分残っている。奴は、触腕を奪われ肉を引き裂かれた手負いだ。

「思い出した……!」

この方法なら、もしかしたら。

アイツを止めることが、できるかもしれない。

——イカ・タコを締める時は?

「——目と目の、間アツツ!!」

骨を踏み付け、跳躍。溜まる光も無視して、奴の眼前へと迫る。

そして、その金色の両目の真ん中に、俺は剣斧を突き刺した。

「らあああああああッツ!!」

グリッブを捻り、ピンエネルギーを全て解放する。渾身の、属性解放突きだ。

奴の動きが、明らかに止まった。体中が硬直しているのが分かる。光の収束が、一瞬

緩む。

まだ、まだだ。

神経締めは、神経を断つ行為だ。イカならば、目と目の間に神経が通っている。角度をつけて、分厚い肉の奥の神経を断ち切らなければならぬ。

もつと奥に。もつともつと奥に突き刺さなければ——。

「……………うあつ!」

奴が、突然暴れ出した。

ダメだ。コダイオウイカのようにはいかない。奴の皮が分厚過ぎて、俺の力では神経を断ち切るとまではないかない。

剣斧は深々と刺さっている。だが、それも刃の半ばまで。根元まで刺さらなければ、奴を止めることはできないだろう。

「放すか……………つ、ぐっ!」

力を込めた右手に、鋭い痛みが走る。

「あッ!! しまっ——」

その一瞬に、俺は奴に薙ぎ払われるままに跳ね飛ばされた。

剣斧の柄が、遠くへ行つてしまふ——。

「——トレッド!! 柄だ! 柄を狙え!」

「っ!」

「剣斧を、根元まで突き刺せば奴を神経締めできる! 何とかできねえか!」

「全く君つていうやつは——」

トレッドは、ポーチから新しい弾薬を取り出した。

それを中折れした重弩へと装填。すぐさま構え直し、照準を奴に——奴の目元に刺さつた剣斧へと向けた。

「——無茶を言いますねッ!!」

とりわけ重い火薬の音が響く。貫通弾よりもさらに重いそれが、鈍い音を立てて剣斧の柄へと着弾した。

その衝撃で、剣斧が進む。だがその弾の真髄は、着弾したその後だった。

「徹甲榴弾……!!」

続けざまに三発放ち、その全てが見事柄に着弾する。

そして、突き刺さったその弾薬が、とうとう炸裂した。

爆破の連鎖が、まるで金槌のように剣斧を打ち鳴らした。

剣斧は深々と沈み込み、青い血液が勢いよく飛び出した。

「やった……!?!」

「……いやー!」

奴は光の収束を——止めなかった。

まだ、まだ届いていない。剣斧の根元まで、あと少しだというのに。

「徹甲榴弾は……今ので……!」

「……いや、十分だ!」

あと一発。あと一発だけだ。

とどめは刺し切れていない。しかし、今のが効いているのは確か。奴の動きが、格段

に鈍くなっている。

これなら、俺は近づける。

「神経締めは——」

走って、走って。

骨の山を掻き鳴らして、俺は骨を撒き散らす奴の体を登り上がる。

走る勢いをそのままに。疲労に襲われる体に鞭を打って。

重い重いこの左脚を、俺は勢いよく振り上げた。

「——鮮度の維持に最適だツツ!!」

霸竜の足が、鈍い音を立てる。

重い肉の感触が、義足に伝わってくる。奴の太い神経を断ち切った感触が、義足を通して体全体に伝わってくる。

奴の全身が、青黒い体がどんどん白くなっていく。

剣斧が、その根元まで押し込まれていた。神経締め、完了だ。

「いやった!! 今度こそッ!」

宙を舞いながらガツツポーズする俺に合わせるかのように、奴の金色の瞳は、力なく灰色に染まっていった。

——骨の龍が、まるで糸が切れたように崩れ落ちる。

骨が、まるで奴を死に迎え入れるように、激しく舞い上がり、雨のように降り注ぐのだった。

く本日のレシピく

『コダイオウイカのレモン刺し』

- ・コダイオウイカ(身) ……100g
- ・ポツケレモン ……適量

「——そういえば、親父が言ってたな」

動かなくなった古龍を背に、俺は淆瘴啖の亡骸へと歩み寄った。

「仕留めた獲物の口に食べ物を入れてやれば、そいつは死後の世界で食べ物には困らないって」

力なく開いている淆瘴啖の顎を、俺は左手でぐっと押した。

やせ細って軽くなった顎は、ゆっくりと閉まる。口の中では、あのイカの肉が静かに佇んでいる。

旨いかどうかは分からないが、淆瘴啖のことだから、腹が満たせればいいだろう。

「……こつちでは喰えなかつた分、向こうで存分に喰えよな……」

淆瘴啖に、随分と振り回されたもんだ。

俺の左脚に、さらには左目まで奪いやがって。

でもまあ、コイツの存在があつたから、俺は今こうやって世界に満ち溢れている『旨い』を知ることができたんだよな。

そう考えると、何だか感慨深くもなってくる——と、奴の右瞼を閉じさせながら感じていた。

「……で、それは何の真似だ？ トレット」

背後から、金属が擦れ合う音が響く。

振り向くと、随分と冷たい目をしたトレットが俺を見ていた。

「さて、そろそろ本題の話をさせてもらいましょうか……」

その手に握られていたのは、何度か目にしたものだった。あの地下工房で。いつかのサウナの中で。

——ギルドナイトとして初めて俺の前に現れた彼が、手にしていたもの。

「僕がここに来たのは、三日前」

「あん？」

「資料探しがようやく終わり、君が古代林に飛ぶという情報を仕入れたので、突貫で飛行船を用意しました」

「どうした？ 急に……」

彼の唐突な自分語りには、思わず首を傾げた時だった。

困ったように、それでいて悲しそうに。震えるような声を振り絞って、彼はその先の言葉を繋ぐ。

「……完全に盲点でしたよ」

「あ？」

「まさか、最後の一人が——君だったなんて、ね」

そう言って、奴は躊躇なく引き金を引いた。

この地下空間に、火薬の弾ける音が甲高く木霊した。



## 生きることは食べること

タンジアの港は、その日にもぎやかな喧噪に包まれていた。

「へい！ 揚がったよ！ 今朝の漁は貝がよく獲れたぜえ！」

「いらつしやいいらつしやーい！ うちの魚は安くしとくよー！」

「そこのお兄さん！ 一晩どう？ 休んでかない？」

「女帝エビのロースト、焼き上がったよ！ 注文してたあんちゃん、どこだい！」

ロックラック地方で唯一“G級”を取り扱うのは、ここタンジアの港に位置するハンターズギルドタンジア支部だ。それはこの街が地方の要所という他ならない事実である。それ故この街は、人々の往来と船舶の出入りでいつも満ち溢れていた。

最も活気づいた港——誰もが、海に聳える灯台と共に、この街を誇りに感じている。ただ、だからといって良識に満ちた人間ばかりが集まるという訳ではなく。

「——ああ!? おかしいんじゃないのかそれ!!」

街の奥の、人々がごった返しになっている中で響く、野太い声。

「俺たちは死ぬ思いでクエストをこなしたんだぞ！ それなのに、報酬がこの額ってい

うのはどういふことだ!？」

「ですから、クエスト前にも説明してたじゃないですか! 捕獲した場合に報酬が上乘せされるって」

「いや、聞いてないねえそんなこと。僕たちは、狩猟さえすればその報酬分がもらえるって話しか知らないなあ」

「おうよ! ちゃんと狩猟してきたじゃねえか。報酬満額払えよ!」

二人組の男が、声を荒げていた。

統一したように、二人とも火竜の防具を身に纏っていた。火竜を仕留めたともなれば、熟達したハンターであることの証となる。それが、彼らの声を大きくさせるのか、彼らは報酬に対する不満を受付嬢へとぶつけていた。

「働いたからには報酬を払ってくれないと困るねえ……」

「詐欺じゃねえか! ギルドが詐欺なんかしていいのか?」

「依頼書に印を押したことで、契約の内容には同意したってことになるんですけど……! そんなこと言われても、こっちが困ります!」

そう言つて反論するのは、おさげにした金の髪と波風のように澄んだ碧い瞳が美しい、受付嬢のキャシーだった。他の受付嬢がたじろぐのに代わり、毅然と主張を退けている。

丁度、酒場にはギルドマスターがいなかった。彼の不在に乗じて、このハンター二人は言いがかりをつけたのだろう。

「おめえ……何でも言えばそれで通るって思ってたのか？ 同意だあ？ 聞かされてねエのに同意っておかしいだろ!？」

「それもこちらはちゃんと説明してます!」

「ふうん……説明は、してたかもしれないけどねえ、こちらがそれを聞けてなかったなら、それは説明と言えないよねえ。そちらの不手際ではありませんか？」

「そんなこと……!!」

言い淀んだ彼女の胸倉を、声を荒げる大男が掴む。筋骨隆々なその腕に引き寄せられ、彼女は小さな悲鳴を上げた。

「屁理屈ばっかこねんなよ、嬢ちゃん……その可愛い顔を、めちやくちやにされたくはないだろ?」

暴力と脅しに出たその男に、周囲がざわついた瞬間だった。

止めるべきか、と躊躇う人の群れを、一人の青年が掻き分ける。

ナルガシリーズを身に纏った白髪の彼は、背の剣斧をカウンター横の壁に立てかけると、一歩下がって理的に振る舞う男の肩へと手を掛けた。

「ん……?」

「邪魔」

振り向かせるように肩を引き、その兜ごと、頬骨に向けて拳を振り抜いた。

吹き飛ぶ相棒を目で追う大男の、その後頭部に向けて、防具で包んだ足の裏が叩き付けられる。

「……後ろ、詰まってるんだよ」

「シガレットさん！」

迅竜を模した仮面をつけたその青年を、キャシーは歓喜の表情でそう呼んだ。

シガレット。タンジァギルドの”上位”ハンター。

「ぐっ……てめえ！」

「いちやもんつけるなら余所でやれ。ギルドマスターに言え」

「んだと……っ！」

大男は、ためらわず拳を振り上げた。赤い飛竜の籠手が、風を切ってシガレットへと迫る。

彼は、顔をずらすだけで拳を躲した。右頬を狙ったそれは、彼の頬の横を、肩の真上を通り過ぎる。振り抜いた拳を収められず、大きな隙を見せる火竜装備のその男。冷や汗を垂らすその頭に向けて、シガレットは右手を当てた。

そのまま、地面へと叩き付ける。勇猛なレウスヘルムの後頭部が、嫌な悲鳴を上げた。

「ひつ……」

相棒が地に伏せてしまい、理知的な男はたじろいだ。

彼に挑もうとはしない。この男も、彼の噂はよく知っているのだから。痛む頬を押さえながら、淀む心を言葉に変える。

「シガレット……！ いつもいつも、暴力に訴えるのか君は……！」

「いちやもんつけるお前らとどつちがマシだ？」

「酒場で騒ぎがあれば、いつも君が全員殴り倒す……！ 殴れば全て思い通りになるとでも思ってるのか！」

「どうでもいいけど俺もクエストの報告をしたんだよ。早くどけ」

そういう彼の左手には、乱雑に握り締められた依頼書があった。

至極真つ当なその理由に、男はたじろぐもの——白髪の後ろから現れた糸目の男の言葉に、反論する機会も奪われる。

「僕も、同じく待つてるんですよ。早くどいてくれませんか？」

フロギイ装備のその男は、たかがフロギイと侮ることなかれ。見覚えのないその衣装は、G級ハンターであることの何よりの証明であった。その背に担がれるライトボウガンも、また上位のそれとは異なる。その事実、火竜の男にのびた相方を担がせる十分な理由になった。

「く、くそつ……」

「いちやもんつけるからですよ。依頼を全て達成できなかったのに報酬をよこせだなんて、反吐が出る」

「……………」

バツが悪そうに立ち去る背中に向けて、そう吐き捨てる糸目の彼を、シガレットはじつと見つめる。

まるで印象のない男だった。またすぐ忘れるだろう、彼はそう思った。

「ふう、全く困ったもんですね。いやー、助かりました！ シガレットさん、トレッドさん！」

「いえいえ、礼には及びませんよ」

「依頼書。処理頼む」

キャシーの言葉に、トレッドと呼ばれた糸目の男は柔和に応える。

一方のシガレットは、依頼書を彼女に突き付けたまま踵を返した。

「え、もう行っちゃうんですか？ 報酬の計算とかは……」

「任せる。また同じような依頼が来たら連絡してくれ」

「ぶー。愛想ないんだから」

剣斧を背負い直し、雑踏に消えるその背中。それを見ながら、キャシーは不満げに頬

を膨らませた。

トレットと呼ばれた男は、同じようにシガレットの背中を見る。

「随分、人相手に慣れてしている様子ですね、彼」

「そうですね。元々港町なんで荒っぽい人が多いんですけど、中でも彼が一番ですね。喧嘩魔ですよ、喧嘩魔」

いつも荒つぽいんだから。

と、か細い声で付け加え、キャシーはどこか上の空の様子で言葉を区切る。

「……あんなに慣れてるのは、珍しい。面白い。面白そうなんだ」

トレットは、そう言いながら笑った。

屈託のない表情だった。



海は夕陽を浴びて、橙色を帯び始める。

水面にはきらきらと反射するいくつもの光を波に浮かべ、それを穏やかに陸地へと贈っていた。

夕方になれば、漁に出る船は一隻もおらず、多くの漁師は酒と食事に明け暮れていた。

一方のハンターは、夜に姿を現す獲物に向けて、武器を研ぐ。

このタンジアの酒場には多くの人がごった返しになり、随分とにぎやかな風が吹いていた。

「……………」

そんな喧噪に背を向けて、酒場に隣接する『シー・タンジニヤ』の一席を陣取るシガレット。

きらめく水面を眩しそうに見つめながら、骨についた肉を噛み千切る。

——復讐にかられてんのか、お前は。

——モンスター相手に復讐だあ？ それこそお門違いって奴だ。

——恨み恨まれなんて考える生き物は、人間くらいだろうなあ。

——ハンターやるってんなら、そういう感情を切り離せ。じやなきや話にならん。

——師匠の言葉が、彼の頭の中で反響していた。

長年過ごした獣人の集落を後にし、師匠とも喧嘩別れのような形で、彼はこのタンジアの港にやってきた。

一匹のモンスターを追い求め、とにかく目の前の獲物を狩る毎日。気づけば、彼は上



位ハンターになっていた。例のモンスターの目撃情報は、未だ挙げられていない。ただの恐暴竜として処理されているのだろうか。恐暴竜自体の討伐依頼もあまり多くはないため、彼は空回る日々を送っているのだった。

「……一体、いつになったら」

なんてぼやいていた、その時だ。

「君、一人？ リノプロスの卵運搬の依頼に興味ない？」

若い女性の声が響く。

かと思えば、それに続いて防具の擦れる音が二重、三重になって鼓膜を逆撫でした。

「俺らのパーティー、一枠空いててさあ。お、君は剣斧使いか。珍しいな！」

「一緒にやろ！ 報酬は山分けでさ！」

三人組のハンターが、彼の背後に立っていた。卵運搬の依頼書を突き付けながら、その中の二人がまくし立てる。

矢継ぎ早なその言葉が、彼を思考の海から無理矢理引き上げた。

遮られたも同然のシガレットは、彼らと視線を合わせることにすらしない。何か返す訳でもなく、海を見ながら肉を噛む。

「……えと、あのー……」

最初に声をかけた女性が、おずおずと再度話し掛けるものの、シガレットは答えな

かった。

「……なんだよアイツ！」

「無視ね……。感じ悪いな〜」

「ほっとこうぜあんな奴。他の人探そうぜ」

誘いを無下にされては憤慨する二人。

一方で、黙っていた三人目のハンターは、シガレットの姿をじつと見て、思い出したかのように口を開いた。

「……アイツ、もしかして”左目潰し”じゃないか？」

「え？ あれが……？」

その言葉に、シガレットは若干眉を動かすものの——生憎夜闇と彼の揺れる前髪によつて、三人組のハンターに気付かれることはなかった。

左目潰し。

タンジアで活動するハンターにとつては、有名人だった。

報酬もリスクもまるで省みず、ただ憂き晴らしのようにモンスターを殺すハンター。毎回、強迫観念染みた様子でモンスターの左目を潰すことから、そう呼ばれていた。

特定の誰かと組むことはない。一人でも、成り行きでできたパーティーでも、彼の態度は変わらない。彼が考えていることは、モンスターを仕留めることだけ。実力はある

が、近寄りがたい。おまけに手が早い。多くのハンターは、彼に近づこうとはしなかった。

「……危ない雰囲気の奴ね」

「同じように、不穏な奴らに利用されてるって噂も聞かぜ」

「どういうこと？」

「アイツを連れてけば楽しんで仕留められるって、報酬稼ぎに利用しようとする奴がいるとか何とか」

「……そんなのに、釣られるの？」

「モンスターを仕留められさえすれば、何でもいいんだってさ。行こうぜ。俺たちの関わる相手じゃない」

そう言つて、三人組は雑踏の奥へ消えていった。

シガレットは、何一つ構うことなく、肉を食べ終える。残った骨は、そのまま海へ投げ捨てた。

そんな彼の横に、勢いよく腰を下ろす男が一人。長い太刀を背負った、無精髭を生やした男だ。

シガレットは、その男の姿から目を逸らすように、迅竜の面で顔を覆う。

「よーウ、左目潰しくん」

「……誰だお前」

「オイオイ、もう忘れちゃったのか？　前の温暖期？　もつと前？　一緒に狩りに行つたじゃねエかよ」

「忘れた」

「手厳しいねエ……」

そう言いながら、彼はギルドカードを懐から取り出した。

シガレットは小さな溜息をつき、その手を払いのける。ハンターネームすら、見なかつた。

「いらねえ」

「そうか……また一緒に仕事をしたくてなア、ロックラックから来たんだぜ？　交換と

しとくと色々楽だぜエ？」

「お前がいてもいなくても関係ない」

「……じゃ、逆に言えば今回も引き受けてくれるってことでもいいかい？」

下卑た笑みを浮かべる彼に、シガレットは少々の沈黙を向けた。

過去に、狩りに同行した相手かもしれない。多くのハンターは兜を被っているため、顔が見えないことが多いのだ。そのため彼は、同行者の顔をいちいち記憶しない。

とはいえ、狩りの依頼があるならば彼はそれにすがりたかつた。何かを狩っていないけ

れば、おかしくなりそうだから。焦燥感と強い強迫観念が、彼の思考を支配していた。

「……獲物は？」

「おッ、受けてくれるのか！ 嬉しいねエ」

「獲物は何だ」

シガレットの問いに、その男は笑う。

コイツの顔も、またすぐ忘れるだろうとシガレットは思いつつも、嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

「……ペリオロス、さア。場所は凍土だ。同行者は、俺と、アンタと……あと二人」

そう言つて、彼は握つた拳から親指をすつと差し出した。

後ろに向けて差されたその先には、ガタイの良い男と、華奢な女が立っている。

どうも、土砂竜の鎧で全身を覆つたその男に誘われてきたらしい。クルペッコの装備に身を包んだ彼女は、身の丈ほどある笛を背負い、ぎこちない様子でシガレットたちの様子を窺っている。

「ハンマー使いの旦那は俺の仲間。つい昨日この港に来たばかりさア。で、あの子はまだまだ新人。なるべくベテランが、守つてあげた方が……良いだろオ？」

そう言つて、彼は兜を被る。ラギアシリーズに身を包み、二人の方へと歩き出した。

シガレットもまた剣斧を背負い、立ち上がる。立ち上がりながら、仮面の奥で口を開

く。

「……俺は」

「分かつてる分かつてる。モンスターを殺す、だろオ？ 頼むぜエ。あの子の手助けは、俺たちがやるからよ。何なら一人で気兼ねなく戦ってくれよなア〜」

「……………」

「さ、印を貸してくれ。書類の手続きは俺たちがやつとくからよ」

ハンターたちが成り行きでパーティーを組み狩りに出る。

タンジアでも、どここのギルドでもよく見られる光景だった。

——どうせ、同行した奴の顔も、すぐ忘れてしまうだろう。

シガレットは何の気もなしにそう思い、クエスト受諾の印鑑懐から出す。それを、顔も見えない男に向けて、ためらいもなく渡すのだった。



頬が、熱い熱を帯びる。

どろりと溢れ出たそれは、まるでトマトソースのようだと、どこか他人事のように感じていた。

目の前で銃を向ける彼の前では、そう思わざるを得なかった。

「……よく避けましたね」

「てめえ……殺す気——」

「ええ殺す気ですよ。もちろんね」

続く発砲は、背から引き抜いた剣斧で防いだ。

火薬の爆ぜる音に続き、甲高い音がこの地下空間で反響する。

「今話した通りですよ。僕の探し続けていた最後の一人。皮肉にも、まさか君だったなんて」

「……は？」

「あの時は、僕も他の依頼で砂原に行っている最中でした。まさかあんなことになってるなんて、思いもしなかった」

「ちよつと待て！ 何で俺が……！」

「君は自分の利益のためだけにパーティーを組んだ。そのパーティーで、彼女は——リンは死んだんですよ！」

火薬が弾ける。

剣斧に、鋭い刺突が届く。

「死んだ……いえ、殺された。惨い話ですよ。最後にはギギネブラの餌にされてました。」

君たちに、君たちに……っ！

「俺……が？ だつたら、何で！ 何で今になって！ お前のことだから、調べてたんじゃねえのかよ！」

「おかしいと思つたんですよ。何故リンが殺されたクエストの受注記録が残つてないか」

「……あ？」

「記録がないから、僕は一つ一つの状況証拠を手掛かりに犯人を探し当てるしかなかった。君やイズモの手を借りたのも、そのためです」

「そう、だつたのか……？」

記録がない？

クエストは誰が受注したか。誰が参加したか。そういうことは、ギルドが書類を保管し、管理している。問い合わせれば、その足跡を確認することができるはず。

それができないのは、何らかの理由で書類が紛失した時だ。事故で焼失したか、はたまた不正な行為によつて書類をなかつたことにされたか——。

「君ですよ、シグ。君がいたから。君が指令も無視して勝手な行動をし、ギルドカードを抹消されたから。君を法的に拘束するために、ハンターとしての記録を抹消されたからですよ」



「……………」

滑瘴啖が出た。

その情報を聞いた俺は、ギルドの指令もキャシーの声も無視して、獵場へと向かった。船が出せないから、アイルーを買収して赴いた。

結果タンジアでは対処できない事案であるという汚点を残し、さらに危険な行動をさせないためにと、俺のこれまでの記録を全て廃棄された。勝手に狩りに行かないように。新人が、誤って俺を送り出さないように。

だから俺は、タンジアを離れざるを得なくなつたんだ。

「ふふつ、笑つちやいますよね……………」犯人捜しのために雇つた君が、実はその犯人だつたなんて。君のせいで、捜査が余計に難航してたなんて」

「……………」じゃあ、今になって、なんで俺だつて……………」

「アスマが、口を割りました。あつさりだね。前のあのガタイのいい男……………」そうそう、自分の便で窒息死したあのお笑い物。今思えば、彼は本当に何も知らなかったのかもしれないね。主犯はやはりアスマ……………」それは間違いないでしょう」

「……………」アスマ……………」

あの下卑た笑みが脳裏に浮かぶ。

思い出すだけでも忌々しい。

「それからは、タンジアに戻って資料の山とにらめっこですよ。他の全ての受注記録を漁って、空白の記録を探し出す。そしてそれが、以前聞いた君の狩りの記録と概ね一致した。アスマの言ったことは、信憑性が高かった……」

「……それで、お前、そんな顔に」

痩せこけた頬に限だらけの目。

不眠不休で限界な状態であることは間違いない。まるで死人が歩いているかのようだった。

「リンの仇……関わった奴らはみな殺す。僕はそう決めて、この数年間生きてきたんです」

そう言って、彼は銃を握る手に力を込めた。

「……だったら、俺に手を貸さず放っておけば良かっただろうよ」

「僕が、殺すんです」

大気が弾ける。

銃弾の衝撃で、俺の両手から剣斧の柄が逃げた。

銃弾の威力は高くない。精々、人体に穴を空ける程度だ。それを使って対モンスター用の武器を弾くとは。力の入れにくい部分を、的確に撃ち抜いたのか。流石トレッドとしか言いようがない。

しかし今は、その正確な射撃が恐ろしかった。

「……チッ！」

四発。四発だ。

奴の銃はこれで四発撃った。

見たところ、コルムⅡダオラの機構が流用された銃らしかった。以前トレッドが使っていたものは火打石を用いた単発式の銃だったが、今日の前にあるものは、あのレンコンのような物体が銃身に埋め込まれている。

回転式連発機構、という奴だろう。形状からして、装填数は恐らく六発だ。残りは、おそらく二発。

「ツツらアッ！」

「……！ 君は……ッ！」

後ろに逃げたところで、逃げられるような相手じゃない。

俺がここを切り抜けるには――。

「前に出るしかつ、ねえんだよッ!!」

鎧を身に纏っている今、一番無防備なのは頭だ。

G Xハンターアームの左手は、まるで盾のように分厚い装具が用いられている。それを頭の前に掲げながら、トレッドに向けて走り出した。

「くっ……!!」

轟く二発の銃声。焦ったトレッドが引き金を引いた。

銃口の位置を見た。トレッドの目線、腕の位置。それらから、射線を予測する。

「いッ!!」

左腕に、とんでもない衝撃がかかる。まるで肩ごと後ろに弾け飛んでしまったかのような、そんな衝撃だ。

左腕でも、防ぎきれなかった。装甲を割った鉛弾が、俺の左目横を切り裂いている。感覚を失いつつあった左目が、無理矢理叩き起こされた。

「……ふっ、ぬうううッ!!」

トマトジュースが溢れ出す。

だけどもまだ、走れる。

「シグ……ッ!」

「らああああッ!!」

残弾は——ゼロだ。

空の葉莖を溢すトレッドに向けて肉迫し、俺は残った右手を振り抜いた。

やせ細った彼の体が、まるで枯れ木のように舞い、骨の床へと転がり落ちる。

まるで手応えのない感触だった。

「……………いつてえ」

「ぐ……………くそ……………っ」

垂れる血を拭い、トレッドの方へ歩み寄る。

頬を赤く腫れ上がらせた彼は、痛みに呻きながらもその身を起こした。フラフラと、今にも倒れそうだった。

「シグ！ 僕は君が……………許せない！」

色白のやせ細った拳。

力ないその拳が、空を切る。

「リンが死んだところに同行してたというのに、何も知らずのうのうと暮らしていたことが！ 何も知らないまま、僕に加担していたことが！」

「……………俺がアスマと狩りに行ったとしても、俺は殺害に加担なんかしてねえぞ！」

「それでも……………何もしなかったんだ……………！」

懐に潜り込んだ彼の拳が、俺の顎を擦った。

「うっ……………!?!」

避けようとしたが、避けれなかった。疲労困憊といえど、彼もまたG級ハンターだ。その実力も折り紙付きだった。

「奴らと、罪のない彼女を襲った奴らと同罪……………同罪なんですよ！」

顎を揺らされて体勢が崩れた俺に、トレットは馬乗りになる。

まるで子どものように叫びながら、彼はその白い拳を振るつた。頬骨に、拳が響いて酷く痛む。

「君はアスマと同じだ！ 周りを顧みず、自分の欲望のままに生きる！ 反吐が出る！」「アイツと同じだ!!? ふざけんな！ 俺がやるのは他人を貶めることじゃねえ！ 肉を無駄にしない方法だ！」

「ハッ！ 弔いと言っても言うのですか？ 下らない……そんな君たちの身勝手さに、リンは!!」

「うるせえ!!」

拳を振り抜いた。右の拳で、奴の左頬を再度打ち込む。

息も絶え絶えだったトレットの手が、緩む。

「……っの……っ！」

「少し落ち着けこの野郎!!」

再び握られた拳を左腕で受け流し、がら空きの腹へと右手を叩き込んだ。

流石のトレットも、動きが止まる。吐き気を催したように沈黙する奴の腕を振り払い、その顔を見上げた。

本当に、死にそうな顔だった。

死体がかろうじて息をしているようだ。

こいつ、本当は。もしかしたら。

「トレット」

だから俺は、拳を取めた。

そのまま、仰向けの状態で彼に向けて語りかける。

「……確かに、俺はそこにいたのかもしれない。何も干渉しなかった。何もしなかったから、お前をこうしちまった……のかもしれない」

涙ぐんで頬を押さえるトレット。

彼に向けて、まとまらない思考を繋げ続ける。

「……悪かったよ。俺は結局、自分の利益のためにお前を利用してただけだったのか。淆瘴啖を追うために……。お前の気持ちに寄り添ったことなんて、一度も無かったな」

「……………」

「俺は、そのリンって奴が死んだことすら知らなかった。G級に上がった頃に、ギルドナイトとしてやってきたお前に話を持ち掛けられてからだ。まさか同じクエストの中で死んでたなんて、今初めて知った。そんな奴がのうのと生きてたんだ。お前の気持ちも、分からないでもない」

馬乗りになっていたトレットを、突き飛ばす。

身を起こして、へたり込んだ奴の前でもう一度立ち上がった。義足が骨を踏み、耳障りな音で軋む。

「俺もそうだった。瘡瘻啖を殺してやりたくてたまらなかつた。アイツが今も好きに寝て、好きに食つてると思うと、いてもたつてもいられなかつた。他の何かを痛めつけてないと、おかしくなりそうだった。トレッドも……そうなんだろう」

問い掛けると、彼はギリツと歯を食い縛つた。

「あの時の君が……僕はたまらなく好きでした。リンを失つてからしばらくして、G級に上がった君を見た時、僕と同じだと直感した。復讐者の目をしていると気付きました」

そう言いながら彼は立ち上がり、俺の胸倉の布を掴む。

様々な感情が渦巻いた目をしている。良いも悪いもごちゃ混ぜにした目。

「なのに……なのに君は、達観したように瘡瘻啖を見つめ直した。いつの間にか、僕と違う目をしていった。何故……何故!?! 何故、それも許せるんだ!?! 僕は、僕はとても、許すことができない……!?! できないんだ……っ」

「……許した訳じゃ、ないさ。復讐が悪いとは言わないよ。それだけのことをされたんだから、それを返すだけ。復讐して心が晴れるなら、すればいい。ただ——」

「……ただ……?」



嗚咽と震えを押し留めるトレッドが、縋るように俺を見た。

「ただ、それを目的にして生きるのはダメだ。それしか考えなくなったらダメだ。他の何もかもが見えなくなっちまう。ふとした瞬間に飲んだ回復薬グレートの味が、空腹を感じて齧ったこんがり肉の味が、全部全部分からなくなっちまう」

シー・タンジニヤの飯を味を思い出せと言われたら、俺は正直、鮮明に思い浮かべることができない。

あの頃食べていた肉の味も、魚介の旨みも、何もかも分からない。ただ固く乾燥した携帯食料の味だけが、舌の奥で燻るだけだ。

「……そうなたらもう、人として終わりだよ。何もかも楽しくなくなって、やっと復讐を遂げたら……空っぽになっちまう。俺はお前に、そんな風になってほしくないんだよ」

「……空っぽ……」

トレッドは、その言葉を反芻するように口にした。

ひよっとしたら、今の自分の姿に立ち返っているのかもしれない。水面に映る自分の顔が、酷くやつれているのに気付いたのかもしれない。

「飯だ、トレッド。まずは食わないと。何かするのは、その後だ」

「……飯？」

「旨いものを食べると、人は気持ちの前に向くもんさ。一旦飯にしようぜ」  
「旨いもの……が、なんだ……」

俺の胸倉を強く引き、彼は拳を振り上げた。

「どうせ死んでしまうなら、旨いものを食べたって意味ないじゃないか!!」

——リンとタンジア鍋を食べる約束をしてたんですよ。彼女、あれが好きだったんです。

と、懐かしそうに話していたトレッド。まだ俺と組んだばかりの頃にそう言つて、しかし彼自身は一度も手を付けなかつた。彼の時間は、あの時既に止まっていたんだらう。

だから俺は——。

「ふんッ!」

「うあッ!」

頭突いた。

その不健康な頭に向けて、俺の石頭を思いきり叩き付けた。

やせ細つた彼の体は、勢いのまま背後へと崩れ落ちる。

「馬鹿野郎!! どうせ死ぬからこそ、それまでに旨いもんをたくさん食つとくんだらうが!!」

額を押さえる彼は、酷く弱って見えた。あの機然としたトレッドの姿はなく、ただ悲観している少年のような姿だけがそこにある。

彼の時間は、あの時止まってしまった。それだけ、彼は変わらなかつたのだろう。純粋なまま、ここまで汚れてしまったのだろう。

「……………くそう……………」

「あん？」

彼のか細い声が耳に届く。嗚咽交じりの、今にも途絶えそうな声だつた。

「くそ……………くそつ、くそお……………。こんなに、辛いのに……………こんなに苦しいのに……………。それでも、何で腹は減るんだ……………」

「トレッド……………」

分らないでもない疑問だ。俺も何度か、そう考えたことがある。答えが出なくて、辛くてたまらなくて。

今なら分かる。とにかく食わねば。生きることとは、食べることだ。食べるから、人は生きるのだ。

「食えよ」

「……………」

「俺の夜食のために一個取つといたんだが……………やるよ」

彼に差し出したのは、深緑の葉に包まれた一つの握り飯。キャンプで作った俺の間食だ。狩りの衝撃に耐えられるようにと、フルフルのなめし革でさらに上から包んでいたのだが、それが功を奏したようだ。握り飯は、握ったままの姿を残している。

鼻と口の前に差し出され、彼は耐え切れなくなったように大きく深呼吸した。少し、頬が綻んだようにも見える。どこか安心したようにも見える。そうして、覚束ない両手で、俺の手からその握り飯を受け取った。

バナナの葉の香りを吸った米の良い匂いが、俺の鼻にまで伝わってくる。

もう辛抱たまらない。そんな様子で、トレッドは握り飯を口にした。

「……!!」

口にしたそれを咀嚼し、彼の動きが止まる。細めを見開いて、その細い肩を震わしていた。

それから、もう一口。さらに一口。続けざまに米を口に含み、咀嚼を続ける。どこか涙ぐんでいような、そんな風にさえ見えた。

米の柔らかな食感に、噛めば噛むほど溢れてくる旨み。炭水化物特有の、脳を直撃するその旨みに彼は耐え切れない様子だった。

「……っ」

米に包まれた中身が顔を出す。その一片が米と共に彼の口の中に入り込み、塩だけで

はない握り飯の深みを生み出した。

俺がキャンプで作った握り飯は二つ。一つはサシミウオの切身を入れて、先ほど雑炊にした。さて、今トレッドが食べている握り飯に入れたのは何だったかな。

「……すっぱい……でも……」

「でもっ。」

「……美味しい……」

ウメと呼ばれる実を干したものの。塩漬けして、赤紫蘇を加えて数日干したものの。酸味を強く蓄えており、それが米の塩味とよく合うのだ。

ユクモ地方でよく見られるものだが、どうもベルナ村はユクモ村との交易が盛んらしく、雑貨屋に売られていたものを見つけたのは幸運だった。肉と合わせても、意外と旨い。肉の腐食を遅らせてくれる効果もある、まさに縁の下の力持ちだ。

トレッドは、米とウメを合わせて頬張っている。酸味に少し眉をへの字に曲げ、しかし後から続いてくる米とウメの融合した味わいに舌鼓を売っているようだ。あのとろりとした果肉が、米の食感と合うのだろう。ウメが現れてから彼の食べる速度は上昇し、あつという間に平らげてしまった。

「……良い食いつぶりだったよ」

「……僕としたことが」

はつと気付いて口を腕で拭い、頬についた米を取り除く彼。

その不健康さは握り飯一つじゃ変わらないだろうが、精気が幾分か戻っているような気がする。

「……君には敵いませんね。覚悟を決めてきたはずなのに、結局僕にはできなかつた。僕も、その程度の人間だったのかもしれない」

「あのまま俺を殺してたら、きつと、自分も撃つただらろ？」

そう問い掛けると、トレッドは思いつめたように眉間に皺を寄せる。

分かりやすい反応だった。

「……自分の手で、俺を殺したかつたって？」

「……そうですね」

「俺思っただけで、殺すチャンスはたくさんあつたんじやないか？ あの骨の龍と戦つてる時も、その前の淆瘴啖と戦つてる時も」

骨の龍と戦っていた時はトレッドを味方と思つて接していたし、淆瘴啖と戦っていた時はトレッドの存在すら認識していなかつた。

殺そうと思えば、いつでも殺せたはずだ。

「そうしなかつたのは、トレッドが俺を殺そうとしないでくれたからじゃないのか？」  
「……それ、は……」

「踏み止まってくれたんだと、俺は信じたいな」

一瞬だけ、トレッドと目が合った。

後ろめたそうだったが、どこか憑き物が落ちたような、そんな目をしていた。

彼は立ち上がる。覚束ない足取りで立ち上がり、放置されていたヘビィボウガンを抱き上げた。

「……もう一度、よく考えようと思います。自分の身の振り方を」

「そうか」

「それでも、もし君が許せなくなったら……僕はもう一度、君を殺しに行きます」

「それは勘弁願いたいんだけど」

「……だから」

「……だから？」

少しだけ振り返り、しかし目を合わせないまま彼は言う。

「……それまで、死なないでくださいよ」

返事を待たぬまま、彼は跳ぶ。腕から伸びたワイヤーが、高所の骨に巻き付いて彼を引き上げた。

そのまま、彼の姿は見えなくなる。天井に空いた穴の向こうへ、夜明けを思わせる藍色と緋色の織り交ざる空へと消えていく。

「……死ぬなよ、か」

ハンターは、環境の調和を保つだとか、生態系のバランスを調整するだとか、耳触りの良い言葉で濁されがちだ。

だが、実際には生き物を殺す仕事である。そしてそれは、自分が死ぬ可能性も大いにあるということだ。だから、俺が彼に次会う時まで生きている保証は何一つない。

「じゃあそれまでに、旨いもんを鱈腹食わないとな」

明日、俺は死ぬかもしれない。

一分後、俺は死んでいるかもしれない。

だから俺は、旨いもんを食べる。いつ死んでもいいように、いつ死んでも後悔がないように、一回一回の食事に全力を注ぐんだ。

生きることとは、食べることである。

今は、果てしなくそう思う。

く本日のレシピく

『シガレットお手製握り飯』



- ・高原米 ……100g
- ・ウメ(干したもの) ……1個
- ・塩 ……適量

## 医食同源G

「……さて」

なんだかんだで生き残ることができたら、やることは一つ。

「飯、食うか」

狩ったものを現地で食す。ハンターの特権だ。

俺は今、この時のためにハンターをやっている。

俺の背後に鎮座するのは、突然現れた謎のモンスターだ。

見た目は、全身に骨を纏ったイカである。青黒い肌に青い体液。骨の山に倒れ込み、今もどくどくと体液を水に溶かしている。いつかの氷海で見た光景と同じく、水は絵の具を混ぜられたかのように、青く染まりつつあった。

「こいつが、滝瘴啖をここに引きずり込んだのかあ……」

氷海に現れた滝瘴啖は、そのまま溺死したと思われた。

しかし今こうして、この古代林の底で横たわっている。この龍のプレスを浴びて焼け爛れたその体は、酷くやせ細っているが——左目を穿つ小さな柄は、何よりの証拠であ

る。奴が淆瘴啖たる所以だ。

この龍が、淆瘴啖をここへ連れてきた。海中を潜行してきたのだろうか。それとも、淆瘴啖が生きていたのだから、海面を泳いでいたのか。詳しいことは分からない。ただ、淆瘴啖が生きたままここへ連れられたという事実だけがそこにある。

「……にしても、よく仕留められたな」

俺が会った時には、既に片腕がなかった。淆瘴啖に喰い千切られたのだろう。となると、この地下空間でお互いに消耗していたのだろうか。

転んでもただでは起きぬ。実に、淆瘴啖らしい。

「ふふっ……。どうだ淆瘴啖、最後に生き残ったのは俺だぞ。ようやく、じっくり食わしてもらうぞ」

イカと淆瘴啖のフルコースだ。はてさて、どんな味がするのやら。

「こいつは……。ちよつと、生で食うのは憚られるかなあ」

青い体液が滴るそれは、絶妙に食欲がそそられなかった。

イカといえは、あの眩しい白身が魅力的だが、こいつは斑点模様がついた青黒い肉だ。生臭さも相まって、これをそのまま口に入れるのはどうも憚られる。

とはいえだ。ここで食べなければ、次のチャンスはないかもしれない。冒険してみる価値はある——ように思う。

「……うえつ、三日間置いた魚の肝にお酢を振りかけたような匂いだ」

ほんの少しだけナイフで身を削って、鼻に近づけてみるとこれだ。

正直なところ匂いはあまり魅力的ではなかった。

問題の味は——。

「まつつつつつつ……!! ……ずう……ツツ！」

思わず顔が歪んだ。顔がしわくちやになる、という奴だ。

酷いえぐみが飛び出してくる。舌の上で剣山を擦り付けられているような感じ。チ

リヂリする苦味と辛味が、俺の脳を酷く締め付ける。

正直に言つて、めちやくちやマズい。

「これは……生食しちやダメな奴だな」

肴瘴啖のえぐみにも近い気がする。これも、龍属性による影響なのだろうか。

「焼いたらどうか……火種火種」

火種を探そう——とポーチの中を探してみるが、水が浸みこんでしまっていた。

トレッドに渡したおにぎりは、バナナの葉になめしたフルフルの皮を加工したもので

覆つて、しつかり浸水対策をしていた。しかし他のものはそうでもない。怪鳥の火炎液

も、この乱闘の中で水に溶けてしまったようだ。

「……ん？ あの骨……」

骨の残骸の中に、一際目立つ藍色があつた。光沢放つ藍色に、勇ましい緋色のライン。この骨を、俺は見たことがある。

ついさつきまで生きていたあの古龍が振るつていた、炎を生み出す野生の剣だ。

「ディノバルドの尾骨……こいつはありがたい」

斬竜の骨を寝かせ、剣斧を構える。

もちろん骨はイカの腕の傍に置き、剣斧を振る摩擦をそのまま火花として腕の肉に送る寸法だ。題して、イカの丸焼きだ。

当然、纏わりついていた骨は剥がしてある。トレッドが撃ち砕いてくれたからか、案外簡単に剥がれ落ちた。

「とうっ！」

ガリツと固い感触が腕に走る。同時に、強い熱気が俺の頬を撫でた。

火は出る。まるで鞆ふいしに当てられた炎のように、大きく火花が舞い上がる。

しかし、一度では火が着かなかつた。だから俺は、何度も剣を振って火花を散らす。五回目か、六回目くらいだろうか。ようやく、イカの肉が燃え上がった。

「おっしやあー！」

あの青い体液が火に炙られ、まるで汗のようにその身に滴っていく。

直接燃え上がったその肉は、何と言うか、やはり食欲にまでは火を付けてはくれな

かった。

「……青い煙が立っている……何だこれ」

取り敢えず携行していた鉄製の小瓶から、醤油、みりんを振り掛け、さらにスキットルに入れていた龍ノコハク酒を加える。スキットルは、ベルトに吊り下げていたものだ。酒は楽しむもよし、消毒にもよしと素晴らしい狩りのお供なのだ。

とにもかくにもそのような味付けを試みたが、はてさて一体どうなるだろう。

「せいッー」

火が通ってきたところで肉の一部を剣で一刀両断。それを切っ先に突き刺して、海水にサツと晒すことで消化する。ほんの一瞬、火が消えればそれでいい。

これにて、醤油の香りが染み渡ったイカの丸焼きの完成——とはならなかった。醤油の香りは一片たりともしない。生臭い香りが、ふんぞり返って漂っている。

「これは……」

嫌な予感しかしなかった。

それでも俺は、その身を齧る——。

「——あああああああッッッ!!!」

焼いて風味がより濃くなった、「三日間置いた魚の肝にお酢を振りかけたような味がした。



「イルルちゃん、ちよつと待つて！ 待つてえ！」

「臭う、臭うのにや。生臭い煙の臭いがするにや……」

岩肌を掴みながら、ところどころから飛び出した骨へと脚をかけるハンターが一人。

金色の髪を一纏めにした、氷牙竜の鎧を身に纏った彼女は、どンドン先に駆け下りる小さな白い影に向けて、呼び止める声を掛け続けていた。

「ルーシャさん！ きつとこの先にや！ この先に旦那さんがいるにや！」

「分かった！ 分かったから!! 待つて！ 私イルルちゃんほど早く降りれないから！」

ルーシャと呼ばれた少女は、半泣きの状態で必死に岩肌を這いずり回っている。

一方で、イルルと呼ばれたアイルーの少女もまた、懸命に両手足の爪を使って岩肌を滑り落ちる。

深く、底の見えない縦穴を、二人は下っていた。

「さつきまでの地響きはもうないにや……それでこの煙つてことは、旦那さんは勝ったのかにや」

「ふ、普通に考えればそういうことになるじゃないかしら……っ、あつ！ この骨脆つ！  
ほんと無理!!」

脚を乗せた骨が崩れ落ち、ルーシヤは半泣きで喚き散らす。

縦穴を下る無茶な行為に、彼女は困り果てている様子だった。

「ルーシヤさん、もうちよつとにや！ 底の方がうつすら見えてきたにや！ ……あれは、炎……?」

「なんでこんな地下の底が燃え上がってんのよ!!」

地下に見えるのは、うつすらと張られた水色。そしてくすんだ色の塊。燃え上がる、赤。

イルルは目を凝らして、その異様な風景を観察する。

「……水にや。底の方に、水が貯まつてるにや」

「地底湖……つてことなの?」

崖を突き破るように聳えた巨大な骨に、ルーシヤは降り立ってイルル同様底を見る。彼女よりも視力が優れるルーシヤは、交替するように底を見定めた。

「骨、ね。ここらと一緒。大量の骨が、水の上にまで浮かんでる。ううん、もしかして、積もつてる……?」

「あの火は何にや?」



「……まるで、プレスで燃やされた獲物のような……」

「一体何が……旦那さん!!」

抑えきれなくなつたかのように、イルルは飛び出した。

骨から骨へ、跳び移りながら底の方へと駆けていく。

「まつ、待つてー! あわわわわ!」

ルーシャもまた、置いて行かないでと言わんばかりに慌てて次の骨へと足を掛ける。とはいえ、アイルーとの身体能力の差は歴然だ。あつという間に、距離が離されていく。

イルルは、とにかく下へ下へと駆け下りた。

シガレットが無事かどうか。それだけが、彼女の思考を支配していた。

「あれは何にや、長い何かが燃えてるにや……」

次第に見えるようになったのは、蛇竜種のように長い何かが燃える様子。

青黒い身と、それを燃やす炎。その横で、死んだように伏せる一人分の人影。

「……!! あれは……!!」

白い髪に、紫色の鎧。恐暴竜を思わせる質感に、黒い棘が連なつた剣斧。

何度も見た後ろ姿が、彼女の脳裏に浮かんで消えた。

そこに横たわるその背中、間違ひなく彼女が見つけてきた背中だった。

「だんつ……旦那さん!! 旦那さんつ!!」

「えっ……シガレット!?」

イルルの悲鳴のような声に、ルーシャは素つ頓狂な声を上げた。

しかし、その先の答えを追求することはなかった。イルルの様子を見て、事態を何となく察したのだろう。

「……シガレット……。あんだ、こんなところで……」

虚しそうにそう呟いて、降りる速度を緩める。

少しでも、二人だけの時間を作つてあげようと、彼女はゆっくり岩の突起に足を掛けた。

「旦那さん……!! やだっそんなのっ、そんなの嫌にや……!!」

跳び降りて、ようやく底の骨へと降りたイルルは、その碧い瞳に涙を浮かべながら伏せる影へと駆け寄つた。

何度も見た背中。

何度も見た横顔。

左目を失い、全身を赤く染めた、変わり果てたシガレットの姿がそこにあつた。

「うう、うううう……!! 旦那さん……!! ボクを置いて行かないで……」

生氣のない彼の頭を抱え、イルルは強く抱き締めた。

重いその頭を、彼女の柔らかな体毛で包み込む。彼女もまた、彼の白い髪に顔を埋め、零れる涙を拭った。

「旦那さん……旦那さん……っ」

それはまさに、今生の別れを惜しむ光景だった。

愛する者を失った悲しみが、この深き虚をマカ鍊金壺のように浸していく――。

「オロロロ……」

「ぎにやーっ!! 何にやー!? ゲロにやー!!」

一転、ネコの悲鳴。

突然動かされた衝撃で彼の三半規管が悲鳴を上げ、結果胃の中に入っていた劇物を逆流させた。

要点をまとめると、シガレットはイルルの体に向けて吐瀉物を撒き散らした。

「にやー!! うにやー!! えっ、何これ!! 何これにや!!」

「イルル……今はちよつとだけ、そつとしといて……」

「旦那さん、生きてるのにや!! うにや……よかつたつ。ボク、ボク……っ……うにや?

すんすん……ぎにやあーっ!! めちやくちや臭いにや!! 三日間置いた魚の肝にお酢を振りかけたような臭いにやー!!」

「うっ……声が頭に響く……オロロロ」  
「ぎにゃー!!」

骸龍の血肉を逆流させたシガレットと、その吐瀉物を浴びせられたイルル。一人の呻き声ともう一人の甲高い叫び声が、この地下空間に反響する。

その阿鼻叫喚の囃を上から見ていたルーシャは、静かに思うのだった。  
あたしの心遣いを返せ、と。



芳ばしい焼き加減。

醤油をベースとした味付けは、ゲソを焼くにはぴったしだ。

かじってみれば、その奥深い味わいが口の中に広がっていく。なんてことは、なかった。

独特のクセの強さが溢れ返る。肝の燻製というか、熟成というか、そんな味わいが近い。喉の奥から吐き気が込み上げてくるような味。甘いような、苦いような、ねっとりとした味が口内を支配する。醤油も、みりんも、龍ノコハク酒も。まるで機能していない。

ゲソ焼きとはまるで思えない、強烈な酸味が突如現れた。口の中を全て化学物質で塗り替えるような、恐ろしい酸味。ウメやレモンとは程遠い、舌を引き抜かれるような味わい。

目が開けていられない。

地獄のような苦しみ。

俺は今、俺は今——。

「うわあああああ!! やめてくれ——ッッ!!」

思わず叫んだその瞬間、俺の視界は一転した。

青と赤の布を重ね合わせた石造りの天井。

ぐつぐつと煮える鍋。石積みの棚に簡素なベッド。

間違えるわけがない。この独特な内装は、いつかの狩猟講習の際に利用した家屋とよく似ている。

そうだ、ベルナ村の家屋だ。

「……あ? 何だ、これ……」

「旦那さん!!」

半分閉ざされた視界の向こうから、可愛らしい声が響く。

はつと振り向けば、そこには飛び込んでくるイルルの姿があった。

「うおわっ！ イルルかつ、あでっ、いででで!!」

「みゆわっ、はみやつ！ ご、ごめんなさいにや……っ」

包帯だらけの体が痛む。イルルは慌てて俺から離れ、申し訳なさそうに上目遣いでこちらを見てきた。

「……旦那さん、だ、大丈夫にや？」

「うん……だっ、大丈夫。心配かけたな、イルル」

伸ばした手に、イルルは愛おしそうに頬ずりをする。ふわふわとした柔らかな毛並みがくすぐつたい。同時にとても温かくて、俺の頬は思わず綻んだ。

天井には、ランタンがゆらゆらと揺れていた。隙間から入り込む風を受けて、静かに軋んでいる。

悪夢か。さつきまで俺が見ていたのは、悪夢だろうか。

いや、違う。夢のはずなのに、あれは確かに味がした。あの味を、俺は知っている――

なんて、まどろみのような思考に嵌まりそうな時だった。

不意に、外から響く騒がしい声が耳に届く。

「……外、騒がしいな」

「旦那さん、ずっと眠ってたから……。外では、今宴会状態なのにな」

室内外は、布一枚だけで隔てられている。

それ故、外の喧噪がしつかり耳に届いてきた。

「宴会？」

「行方不明のハンター……イズモさんが帰ってきて、旦那さんが例の古龍を仕留めてくれたから研究も再開できるって、みんな大はしやぎにや」

「例の古龍……」

「旦那さんが食べて、お腹壊してたあのイカさんにや。龍歴院の人たちは……何て言うてたかにや。おす……と、なんとかにや」

イカ。

恐ろしく巨大な、イカ。

食べたら、食べてはいけないような味がした、イカ。

「お酢……確かに、三日間置いた魚の肝にお酢を振りかけたような味だった」

「臭いも凄かったにや。旦那さん、やつぱり古龍は食べない方がいいにや。オオナズチといい、旦那さん古龍食べるとお腹壊すのにや。やつぱり人間じや分解できないのにや」

「いやいやいや。キリンという反例もある。俺はまだまだ味の探求がしたいぞ。残りの肉はどうなった？ それに、滑瘴啖の亡骸も……」

「どちらも龍歴院が回収してるにや。研究のため、だそうけど。一部の素材や部位は、討伐者として旦那さんに提供されるみたいにや」

「そうか……。滑瘴啖の可食部が欲しいな。最優先で」

「あの生き物に可食部なんてあるのかにや」

「あるさ。調理法も、確立してある」

「にやあ……」

何となく察しがついたのか、イルルは微妙な顔をして髭をしなだらせた。

「……にしても、俺ずつと寝込んでたのか？」

「にや。あの地底湖から持ち上げるの大変だったにや。飛行船を穴の上まで手配して、下ろしたロープに括りつけて持ち上げたのにや」

「おいおい嘘だろ。よく生きてたな俺」

「古龍が暴れてたから、飛竜がみんな島から逃げてたのが幸運だったにやあ」

「……いろいろ、苦労かけたな」

そう言うのと、彼女は途端に瞳に涙を溜めた。

堰き止められない。そんな様子で、耐えられなくなったように飛び付いてくる。

「旦那さん……本当に死んじゃったかと思つたのにや！ すごく怖かつたんだから

……っ！」



「ごめんな。俺はこの通り、大丈夫だからよ」

「ううう……。ボクを、一人にしないで……っ」

「うん。悪かった。それに、ありがとうな」

腕の中で震えるイルルを抱き締めると、随分と心が温かくなる。

柔らかくて、ふわふわしてて、温かいイルル。また無茶をして、こいつを悲しませてしまったようだ。

「旦那さん、目が……」

「……そうだったな」

不安そうに彼女が見るのは、俺の顔の左半分。

瘡癤瘖に左目を潰され、その後も何度も攻撃を受けた。視力は戻らないだろう。包帯に包まれた左目の奥は、鉛のように固まった感触がした。

思い返してみれば、今回の狩りは本当に危険だった。今更ながら、自分が生きているかどうかさえ不安になってくる。

なんて思っていた時だ。彼女が、俺の胸に耳を寄せてきた。

「……心臓の音がするにゃ」

「えっ……」

「旦那さんのこの音、大好き。とても安心するもん……」

俺の胸に頬を擦り付けながら、彼女は嘔み締めるようにそう言った。

「ただの心臓の音だぞ」

「ボク、いつもこの音を聞きながら寝るのにや。ボクにとっては、幸せの象徴みたいなのにや」

「そういうもんか……」

俺からすれば、イルルの柔らかさとか温かさみたいなものか。気持ちが満たされるよ  
うな、そんなもの。

意外にも、飯の他にもそんなものがあるみたいだ。残念ながら、腹だけは満たされな  
いが。

「……ま、悪くないよな」

「んにや?」

イルルの頬を軽く上へ向かせて、そのおでこに唇を埋める。

ふわふわとしていて、いい匂いがする。

「イルル」

「なあに? 旦那さん」

「お前つて……美味しそうだよな」

「にや……ひ、久しぶりに聞いたにやそれ。ボクは食べ物じゃないにや」

そう言いながら彼女は両手で俺の頬を押さえ、同じように額にまふまふとした口を当ててきた。

何だかくすぐつたい感触だった。

「お返し、にや」

「……なんか、むず痒いな」

「えへへ……ボクもにや……」

何だか照れくさくなってきたところで、ふと横の気配に気づく。

イズモが、むしゃむしゃと何かを食べながら立っていた。

「うおっ!! お前いつの間!!」

「……あ、いいよ続けて続けて」

「続けられるか!」

「い、イズモさんいつからそこに……」

「美味しそうのくだりからだよっ」

「……………うにや」

イルルは顔を真っ赤にしてしまい、俺の懐に潜り込んだ。

俺はといえば、無心に香ばしいものを食べているこいつにむかむかしてきたところだ。

「ヒリエツタといい、シグといい、みんなボロボロになってまでオレのことを……くう!! 持つべきものは友っ!」

「うるせえ糞野郎。今度こそ刻んでなますにしてやろうか……!!」

「怖い怖い! 助けた相手をいきなり殺そうとするのやめて! サイコパスなの君は!」

イズモがビクついて、手に持った香ばしいものを庇うように胸に隠す。

何だかどつかの誰かさんの顔がちらついていたが、それはあえて掘り返さないようにした。

「……で、それは何だ。すげー良い匂いじゃんか」

「ピザ、って言うんだって。ニャンコツクがたくさん焼いてくれてるよ」

「あのでかい奴がか! おおう……チーズの香ばしい匂い……たまらんな!」

「ベルナ村は今宴会状態さ! 何せ、ようやくオストガロアが討伐されたんだからな!」

「オストガロア……? それって、例のイカか?」

「そう、イカだったんだよ。驚きだよな。俺初めて見た時、頭二つある首長竜だと思ったもん!」

オストガロア——随分荘厳な名前がついたものだ。

骨を纏い、骨を使い、骨に擬態する狡猾な古龍。それでいて、恐ろしいほどの食欲と

力を秘めていた。できるなら、二度と会いたくはない奴だ。食べるのも、正直なところもう御免である。

「もちろん、功労者は君だよ、シグ。院を代表して例を言うよ。ありがとね」

「院を勝手に代表するんじゃないやねえよ。元はといえばお前が……あー、もういいや。それより、礼なんていい。俺にそのピザをくれ」

「あ、言い忘れてたけど胃の粘膜が痛んでるから、あと二日は龍歴院特性の薬膳料理しか食べれないってさ」

「は？」

我ながら、間の抜けた声が出た。

「シグ、オストガロアの肉食べたでしょ？ 人間には毒性が強いみたいだよ。研究職たちは顔真つ青だ。医者も、何で生きてるか不思議って言ってたよ」

「マジで？」

「んで、それを整えるためにも薬膳……あ、古代林で獲れる薬草数種を使ったゼリーみたいな奴なんだけどね。それを経口摂取しろってさ」

「……ということとは、そのピザは……」

「オレが代わりに食べとくねっ」

俗に言う、てへぺろの表情でピザを口に入れるイズモ。腹が立ったから布団を丸めて

ぶつけてやった。

葉膳だ？ 葉草のゼリーだ？

このベルナ村の問題を解決したっていうのに、そんな俺が今、目の前のピザも食べることができないのか。

「……あんまりじゃねえかよ……っ！」

俺は少し泣いた。

「シガレット、調子どう？ んっ、ベーコンとチーズうまつ！」

ルーシヤが尋ねてくる。片手にピザを添えながら。

「シガレットさん。本当に助かった。ありがとう」

今回の依頼を説明してくれたあの赤髪のハンターが、握手を求めてきた。

もう片方の手に、チーズのとろけるピザを乗せながら。

「貴方のおかげで研究が進んだよ。無事戻ってきてくれて、よかったよかった。龍歴院の長として、礼を言うよ」

龍歴院の長を名乗る竜人の老婆が、深々と頭を下げる。

両手を重ねながらの、丁寧なお辞儀。その手とともに、ピザも一枚重ねている。

「ヒリエッタの傷も治ってきてるよ。ピザも食べれて嬉しそうだった。いやー、よかつたよかつた〜」

鼻の下を伸ばしながら、そう報告してきたイズモ。相変わらず、ピザをむしやむしやと食べている。

室内には、ピザの香ばしい匂いが立ち込めていた。

来る人来る人、ピザを持ちながら入ってくる。俺が食べられないのを知ってか知らないでか、悪気もなしにどいつもこいつも——。

「……………」

「ん？ シグどつたの？ 何て？」

「くそ……………」

「くそ？」

「くそつたれ—— ツツ!!!」

「旦那さん、お口開けてにゃ」

「ん……………」

木製のスプーンに乗った、ぷるんとしたゼリー。

イルルが、例の薬膳ゼリーを食べさせてくれる。俺の両手は爪が剥がれたとか何だとかで包帯だらけなので、彼女が甲斐甲斐しく世話をしてくれていた。

「あいつら言いたいだけ礼言つて後腐れなく去つてく……。悪気もなさそうだし余計に性質悪い」

「挨拶するようにみんなピザ食べてたにや。みんなチーズ好きにやのね」

「もう日付越えてるはずなんだけど、未だに騒いでるしな。チーズ好きで、祭り好き。陽気な連中だよほんと」

「みんな嬉しそうなのは良いことにや。……旦那さんは、辛そうだけど」

「このゼリーすげえ苦いもん……」

薬草と一口に言つても、様々な種類がある。

煎じて飲めば茶のように深い味わいを残すものもあれば、子どもの嫌がる苦薬を生み出すものもある。料理に入れて味が深まるものもある中で、今回出されたこの薬膳ゼリーは特に苦味が強いものだった。

見た目は、緑色を差した半透明の物体だ。数々の薬草を、液体になるまで煮込んで作ったのだろう。特産ゼンマイを使ったゼンマイ茶とも通じる苦味がある。古代林の薬草が主材料と聞いたが、そのゼンマイも含まれるのかもしれない。

「うげえ……にがぁ……しぶう……」



干し柿、というものがある。

あれは渋柿を丁寧長時間干すことで甘みを貯めた、高級な甘味だ。とろける果肉と濃縮された甘さがたまらない逸品である。一方で、干す前の渋柿はといえば、恐ろしいほどマズい。口の中がしぼむような味がする。食べた瞬間、まるで口の中に一枚の膜が張られて、それがじわじわと収縮していくような感覚。味はない。いや、味が感じ取れない。

この薬膳ゼリーは、それに近かった。

とてもじゃないが、旨くない。胃にも貯まらない。

「あと二日か……しんどいな」

「旦那さん、頑張ろうにや。二日なんて、すぐ終わるにや」

「……そういや、イルルはピザ食べないのか？ みんな食べてるぞ」

「にやあ……ボクは、旦那さんと一緒に食べたいから……。治ったら、一緒に食べようにやっ。」

「イルル……お前つて奴は……！」

「そのためにも、今はこれを食べるにや。はい、あーん」

「うぐう……ッ！」

相棒の優しさに泣けてきた。

苦いけど、何だかどこかほんのり甘いような、そんな気がした。

「……長かった気がするけど、終わってみるとあつという間だったな」

イズモが行方不明になったという知らせが届き、その捜索願いが俺宛てに届けられた。

ヒリエツタとルーシヤに助力を願い、数日かけてベルナ村まで飛んで。

古代林には、あのスパイスの権化、バルファルクが我が物顔で暴れ回っており。

そいつと交戦中にイズモの無事が発覚し、しかし淆瘴啖がこの地にいることが判明する。

夜に急襲を掛けて、バルファルクをようやく撃退するが、しかし地盤の崩落に巻き込まれて地下に落ちて。

その地下で、変わり果てた淆瘴啖を見た。生きる屍のようだった。

淆瘴啖をここまで引きずってきた張本人、オストガロアもまた、骸が這いずり回っているような姿をしていた。そこに現れたトレッドも、徘徊する死体を思わせるほどやせ細っていた。

「……今度こそ、マジで死ぬかと何度も思ったな」

バルファルクはやはり危険な古龍だ。淆瘴啖は言うまでもない。

オストガロアは一人では絶対に勝てなかったし、最後の最後には頼りになる仲間を命を狙われる始末。

「でも、俺はまだ……」

扇状に切り取られた一片のピザを頬張る。

甘いチーズが、一瞬でとろけた。

「旨い……」

釜戸で丁寧丁寧に焼き上げられたそれは、とろける食感を表面の焼き目の中に閉じ込めている。

ぱりつとしたチーズのおこげは大変香ばしく、そして塩気が凝縮されているような気さえた。しよっぱさと甘さが、文字通りとろけていく。

「旨い……つてことは、俺は生きてるんだな」

チーズが乗った生地は、これまたモチモチしている。

小麦粉を練って作られた生地にチーズを満遍なく広げ、窯焼きしたもの。そう聞けば随分とシンプルな料理に聞こえてくるが——この味は、そんなシンプルさとは程遠い、複雑に絡み合った絶妙な旨さをしていた。

「ああ……チーズ、たまんねえ……」

その一口を呑み込み、満足感に酔いしれようとしたその時だった。死角から、肉球パンチが飛んでくる。

「こらー！ 旦那さん！ まだ二日目にや！ 一日早いにや!!」

「うげ！ イルル!!」

ぽふんと頬を叩かれ、右手に持っていたピザが没収されてしまった。

「イルル、後生だ！ ピザを、ピザを食わせてくれえ……ッ！」

「あと一日……もうちよつとだから耐えてにや。薬膳ゼリーの時間にや」

「うわああああ!! 嫌だア!!」

宴会はもはや祭りと化し、三日三晩続いている。

俺の苦しい薬膳ゼリー奮闘記も、三日間続いたのである。

く本日のレシピく

『骨イカの丸焼き — ユクモ風味 —』

・ オストガロアの触腕 …… 1本

・ 醤油 …… できるだけたくさん

・ みりん …… できるだけたくさん

・ 龍ノコハク酒 …… スキットル1本分

・斬龍の尾骨（火種）  
……1頭分

## 狩猟飯 — モンハン飯 —

風を切る。

猛烈な吹雪が頬を撫でる。

白く塗り潰された世界で、鮮明な緋色が舞い上がる。

「上から来るぞー！」

「みやあーっ！」

上空から急襲し、その鋭い前脚を振りかざす影。

天慧龍——バルフアルクが、この氷海の厚い氷に穴を空けた。

「ちっ、氷が……っ！」

「みやっ、びしびしして痛いにや!!」

氷が破片となつて舞い上がる。

俺は右手の盾を構えてそれを防ぎ、イルルはびよんびよんと飛び跳ねながらそれを躲していた。彼女の纏う天眼ネコシリーズが、ビシバシと破片を弾く。

「さあ来いっ！ やつて来い！」

「うにゃ、羽が——来るにゃ旦那さん!!」

バルフアルクは、その強靱な右の翼を振り上げた。その先から、燃えるような炎を噴かせながら。

あの動きを、俺は見たことがある。あの掌のような翼を振りかざし、まるでビンタのように振るう技。翼から燃える炎が、敵を容赦なく燃やすのだ。

——だが、俺は燃やされるつもりなど毛頭ない。

「てめえが燃やすのは、これだ!」

振り払われる腕——のような翼。

その筋肉の向きは? 動きは? 他の部位との兼ね合いは?

恐らく薙ぎ払われるであろう位置を目測で測り、そこから抜け出るように背後に跳ぶ。

同時に、左手の片手剣をその射線上に振り払った。

奴の翼には触れず、その炎だけを浴びる場所へ。

「……つしゃあッ!」

「すごい……ほんとにやったにゃこの人!」

じゅつと音を立てて、片手剣が燃える。

奴の緋色の炎を浴びて、表面が著しく熱された。芳ばしい香りが、この氷の風に溶け

ていく。

「もつと……もつとだッ！ もつとその火をちようだい!!」

俺の声に触発されたかのように、バルファルクは翼を構えた。

まるで背中に大砲を並べるかのように、その翼の先端を全て、俺へと向ける。直後、燃え上がるような火が瞬いた。

「旦那さんっ！」

「イルルっ、下がれ！ いなす！」

一直線に、俺へと飛んでくる光の群れ。それに向けて、俺は左手の片手剣を振り被った。

斬撃が、熱に当てられ軌道が曲がる。その力の流れに身を任せ、腰を落とした。背後に滑るように力を逃し、落とした腰で炎の群れをくぐり抜ける。

「とうっ」

やり過ぎしたところで、そのまま後転。黒紫色の防具に、さらさらとした雪が纏わりつく。頭を覆うフードに乗ったそれが、風に乗るように落ちていった。

さてさて。奴の炎を十分に受けることができた気がする。どんな具合かと視点を滑らせてみれば、左手のそれは、煌めくような脂を滴らせていた。

「うんうん……良い香りだ。やはりこれだ、これが最適な調理法なんだ！」



「うにや、すごい焼けてきてるにや。淆瘴啖の肉とは、思えない匂いだにや」  
そう、淆瘴啖。

俺が左手に持っているのは、片手剣のように持っているのは——。

「やつぱり、ハンターといえばこれに尽きる。淆瘴啖の、こんがり肉だ!!」  
握っているのは、骨。生肉を纏った骨を、柄のようにして持つ。

当てるのは、天慧龍の炎。奴の龍属性の活性作用で、くすんだ淆瘴啖の肉に命を灯す  
!

再び放たれる炎を受け、そしてそれをそのまま、淆瘴啖の翼の先へと押し当てた。

「おつ、おつ、おおおお……ッ!」

「旦那さん!」

さながら、乗りの攻防という奴だ。

バルバレのハンターが広めた、モンスターに乗って剥ぎ取りナイフを突き立て、大きな隙を作るといふ技。俺が今しているのは、まさにそれに近い。

——ただまあ、ナイフを突き立てるんじゃないやなくて、翼の先端に淆瘴啖の肉を押し当ててるんだけど。

「うおつ!」

「うにやにや! 危ないにや!」

踏ん張り切れず吹き飛んだところを、イルルが身を挺して止めてくれる。氷海の氷に滑るところを、彼女が何とか止めてくれた。

「いちち……こうも冷たいと左目がいてえなあ」

「大丈夫にや……？」

「うん、まあ問題なし。それより見てくれこの肉を！」

眼帯に覆われた左目を憂いつつも、俺は残った右目で左手の肉を見つめた。

掲げたそれは、この世の何よりも尊い。

「渻瘴啖のこんがり肉——」

「ウルトラ上手に、焼けてるにやーっ!!」

こんがりとしたその身は、肉らしい赤い焼き目を輝かせていた。

滴る肉汁は、まるで砂金のように。太陽と、それを映す雪の光を反射させて、この世の何者にも負けない輝きを灯していた。

「それじゃあ、もう一本……」

腰にぶら下げていたもう一本の生肉を取り、代わりに今焼けたものを腰に吊るす。

俺とイルルで、一本ずつ。もう一本焼くために、もうしばらく付き合ってもらおうじゃないか。

「……さあっ！ バルファルク！ もう一本頼むぜ！」

いつか獲れた、淆瘴啖の尾の肉。

そして、先日獲れた淆瘴啖本体から、足の部分を切り取ったこの二本目。天彗龍の炎で活性焼きをしたら、果たしてどうなるのだろうか。

俺は口の中で溢れる涎を、留める術を知らなかった。

「来い！ バーナー野郎!!」

バルフアルクは、甲高い叫び声を上げた。

この吹雪に満ちる氷海に木霊するその声は、まるで肉の仕上がり喜んでいるかのようだと——。

俺には、そんな風に聞こえた。

「好意的解釈が過ぎるにや!! バルフアルク、怒ってるのにやー!!」  
全身から緋色の光を吹き出す奴の姿。

怒っている？ 危険な状態？

いや、焼き加減が、変わるツ!!

「バルフアルク、お前は最高だツ!!」



「……で、シガレットはどうするの?」

「あ?」

地獄の薬膳期間が終わり、ようやくピザにありついていたその時だった。

ところどころ包帯を巻きながら、それでも防具を着て龍歴院の広場に訪れていたヒリエツタが、そう尋ねてきた。

「お前、傷はもういいのか?」

「お互いさまでしょ。アンタもボロボロじゃない。よく歩き回れるわね」

「ピザを食べるためなら、俺は這いつくばってでも行くぜ」

「あっそ……」

思う存分頬張るピザは、最高に旨い。

とろりとしたチーズの食感と、生地の柔らかさがマッチする。甘みと旨みを、石窯の中で芳ばしく混ぜ合わせたような芳醇な味わい。これは食わなければ、もったいないと思ってしまうほどだ。

「……で、何だっけ」

「シグは、これからどうするのって話」

再度問い掛けると、返答は別方向から飛んできた。

むしゃむしゃとピザを食べながらやってくる、長身の男。

「イズモ……てめえこのやろ、散々俺の前でピザ食いやがって!」

「どうどう、落ち着け落ち着け。今シグはピザを食べられるつ、これで万事解決!」

「ふざけんな! ……むっ、旨い……!」

あの時の理不尽を融かすように、チーズが口の中でとろけていく。

この甘露とも言える口当たりには、俺の心は穏やかにとろけていく。

「……ま、いいけどよ。で、俺がどうするかって? この先のことか?」

「うん。肴瘴啖、とうとう仕留めたんでしょ?」

「おうよ。肴瘴啖の素材をたんまりもらったぞ。肉も貰ったし、ようやくじっくり食える」

「そういえば、ここに来る前に加工屋で何やら話し込んでたわね」

「うげ、見てたのかよ」

ヒリエツタが思い出すようにそう言って、俺は思わず苦い顔をしてしまった。

準備中の姿を見られるのは、何だかむず痒い。

「シグ、もしかして?」

「ああ……。俺はアイツの全部を奪ったから、それを背負おうと思う。アイツを纏うことに、するよ」

「つてことは、肴瘴啖シリーズって感じ?! いいじゃん熱いねえそういうの!」

「……そういうもんなの？」

不思議そうに首を傾げるヒリエツタに向けて、イズモはうんうんと頷いている。

淆瘴啖シリーズ、か。

アイツを防具一式に変えるとなると、どんなものになるんだろう。デザインは、昔懐かしのあれに寄せてもらったが、はてさてどうなるか。

「納具はいつなの？」

「まだ加工の段階だから何とも。それが終わったら採寸して、うーん……十日はかかると言われたな」

「……ま、シグは凄い狩りをしてきたんだからさ。十日くらい、ゆつくりしなよ。ここはご飯も美味しいしさ」

「そうだな。旨い」

ピザの耳は、空気が膨張したかのように膨れ上がっている。その分生地が薄くなり、焼き上がりはパリパリだ。囓むとどこかお菓子のようで、生地の簡素な味わいがまたよく合うのだ。

なんて、ピザの奏でる音色に耳を傾けていた時だ。

だらしない嬌声が耳に届く。

「あぁーん、ニヤンコックたん可愛いー、愛おしいー」

「ルーシャさん、意外に大きい子がタイプなのにな？」

「いやいや！ 私はどんなネコちゃんも平等に愛するタイプ！ でも、あんなに大きい子は新鮮で……ハッ、髭が日光を映している、眩しい……っ」

ルーシャとイルルが、準備エリアと呼ばれる商店の奥からやってきた。

その道中でへらとチーズを格闘させるニャンコックに、ルーシャは夢中のようだ。

「相変わらず守備範囲広いわね、あの子」

「ニャンコックつて中におっさん入ってる感じしない？」

呆れるようなヒリエッタと、唐突に意味不明なことを言い出すイズモ。

相変わらず、夫婦漫才をしているみたいだった。

「よ、イルル」

「旦那さん！ 防具のお話、終わったのにな？」

「まあな。十日はかかるつてよ」

「じゃ、それまではベルナ村に滞在にや……？」

「そういうことになるな。ピザ、食べるか？」

「食べるにや！」

俺の持っていたホールのピザから、その一片をイルルに手渡す。

彼女は嬉しそうにピザを齧り、はふはふと熱さに抗った。

「……そういえば、このチーズピザ、メープルシロップかけても美味しいんだよねっ」  
「何だつて……? そんなスイーツみたいなの」

「あまじよっぱいは正義、つてイズモ言つてたわね」

「うん。あまじよっぱいは正義!」

そう言いながら、シロップの入ったピンを懐から取り出すイズモ。

準備は万端のようなので、それを受け取り、スプーンを使つてとろりとした黄金をピザに振り掛ける。なんてことをしていると、イズモら三人も自然にピザを手を取った。

「おい待て。そのピザは俺のだぞ」

「いいじゃん折角だし。シグもヒリエツタも、こうして歩けるようになっただし」

「ケチなこと言わないで、私も食べたい」

「ニヤンコックたんが作ってくれたピザ……あたしも貰うわね! うひょく!」

「……旦那さん。みんな揃つて食べれば、その方がきつと美味しいにや。人情つて奴にや」

「まあ……そうだな。それも悪くない」

そう言いながら、俺は自分のピザを高く掲げる。

それに合わせて、各々ピザを掲げた。さながら、達人ビールのジョッキのように。

「肴瘴談討伐を祝して……あつついでに、イズモの無事も祝して」



「ついでっ!?!」

「——乾杯ッ!」

俺の声に合わせて、それぞれ「乾杯」と声を上げる。

上ずった声、落ち着いた声、嬌声、それとアイルーの可愛らしい声。

——ここに、トレッドの声はない。

あいつはもう、俺の前に姿を現さない気なのかも、しれない。

「甘いにああ〜」

「あつ、これ意外と合うわね」

「ん〜! ニャンコックたん、天才〜!」

「いやこの組み合わせ考えたのオレだよ?」

「は? だまれ」

「え、こわ……」

嬉しそうに食べるイルルと、意外そうに頬張るヒリエツタ。

だらしのない顔を冷やかな表情へと一転させるルーシャと、それに怯えるイズモ。

そんな仲間たちに後押しされるように、俺もピザを口に入れた。金色のチーズに、黄

金のメープルシロップがかかった一品だ。とてもゴージャスな見た目だが、味は何とも

複雑だ。

とろけるチーズの塩気の前に、メープルの濃厚な甘さが襲い掛かってくる。  
甘い。甘さの奔流に吞まれそうになる。

「……………これは……………ッ！」

しかし、そこで顔を出すのはチーズだ。

噛むごとに。噛めば噛むほど、チーズとメープルシロップが混ざり合っていく。食感が、とろけ具合が、甘さと甘さが、甘さと塩気が混ざる。

何とも複雑な甘さだ。直情的ではなく、情熱的でもなく。例えるなら、それは文通相手に送る秘めた思いのように複雑で控えめな、それでいて芯の詰まった甘さだった。

三日間の休養期間に暇すぎて読んだ恋愛小説のフレーズが想起されるくらい、甘い味わい。チーズとメープルの親和性、悔りがたし。

「チーズの動物由来の甘み、メープルの植物由来の甘み……………合うんだよねえこれが」

「メープルって植物由来なの？」

「そだよ。カエデの木からとれる樹液を濃縮させるんだ。この辺りだと、コウゲンカエデとか、そんなところ」

「ふうん……………」

イズモとヒリエッタがそんな話をしている中、ペろりと平らげてしまった。

甘い。口の中に、甘さが広がっていく。

「……何か肉々しいのも食べたくなってきたな。その辺のムーファって食べていいのかわかる？」

「何言ってるんだよシグ！ ベルナ村は牧畜文化の村なんだよ？ ダメダメ！」

「そういえば、確かに見えないわね。マトンとか、食べれそうなのに」

「うちの特産はチーズだよ。家畜ってのは、丁寧に丁寧に面倒を見て、一緒に生きていくもんさ。今うちにいるムーファたちはみんな若い個体だから、食べるなんて絶対ダメ！」

「食べたいなら孤島にでも行ってきて！ 野生の個体が生息してるから！」

「マジか。探してみるわ」

珍しくイズモが焦ってそう言うのなら、ムーファはこの村にとってそれだけ大切なものなのだろう。

名残惜しいが、ここは潔く諦めておく。野生の個体を探してみるのも、悪くない。

「美味しかったにや〜」

「うんうん。ニャンコックたん感謝。ああつ、なでなでモフモフしてあげたい……！」  
満足そうな二人の様子を見ると、俺も頬が綻んだ。何だかんだ、こうやってみんなで囲む飯も悪くないな。いつかの自宅で焼き肉をしたことを思い出す。

——トレッドは、一体どうするのだろう。

なんて考えていた時だ。イルルとルーシャが食べ終わったところで、ヒリエツタが改

めて口を開く。

「……で、さっきの話に戻るけど。シガレットはこれからどうするの?」

「あん?」

「目標は果たせたんでしょ? アンタはこの先も、ハンターをやるの?」

もつともな質問だった。

「旦那さん、瘡瘻啖は……」

「ああ。やつと仕留めることができた。俺の目標は、これで完了だ」

「シガレットがハンターをしてた理由って、それ?」

「そう、だな。それが理由だったな……」

ルーシャの問いかけに、以前の自分ならはつきりと答えることができただろう。

でも今は、それが理由だと断言することはできなかつた。

そんな俺を見てか、イズモはにやりと笑う。

「……今は違うって顔してるね、シグ」

「そうか?」

「うん。満足してないって顔してる。今のシグは、それだけじゃないでしょ?」

彼の言葉に、ヒリエッタもルーシャも、そしてイルルも頷いた。

「シガレットといえは?」

「料理？」

「飯！」

「飯にやつ」

言いたいことは、みんな同じのようだ。

「……そうだな」

それが何だかすぐつたくて、それでもどこか心地いい。

俺は目を閉じながら、次の言葉を紡ぎ出すのだ。

「俺はこれからもハンターをするよ。俺はまだまだ、食べ足りないッ！」

———というところで、まずはこれを食わなきやな」

あれからさらに時が立ち、俺とイルルは氷海に降り立った。

理由は一つ。例の古龍——バルフアルクがここに現れたからだ。

「バルフアルク、恐かったにやあ……」

「だが、あいつのおかげでこれが食べれるんだぜ」

そうやって掲げたのは、全てのハンターがこよなく愛する狩りの親友、こんがり肉だ。と言つても、アプトノスやアプケロスのものではない。あの肴瘴啖の尾とも肉を

使った至高の一品だ。

「仕上げにパセリでも散らそう。ほれほれ」

「うにやにや、きつね色の焼き目に緑が差し掛かって、とてもいい感じにや。匂いも、あの肴瘴啖とは思えないのにや」

「見ろよ……肉が踊ってやがる。龍気で活性化されて、肉が生きている……！ 肉汁が眩しいぜ。丁寧に漬け込んだ甲斐があつた。ニンニクの香りもしてきやがるぜ！」

「漬けてた時は全部生臭い香りだったのにやあ……！ 龍気の炎バンザイなのにや  
！」

「ああ……現地で、現地の素材を生かして食べる。ハンターの特権だな。たまらねえ」

「狩猟飯、つて奴なのかにや？」

「そうだな。これが狩猟飯だ。これだから、ハンターはやめられねえんだ」

狩猟飯。

良い響きだ。

狩猟飯。何度でも口に出して言いたい。何度でも反芻して言いたい。

それでも今は、その思いに少しだけフタをして。目の前の命の輝きに、向き合ってみようじゃないか。

「……いただきますッ！」

「いただきますにやつ」

がぶりゆつと、とても耳触りの良い音が響く。

音は震動となり、俺の顎から直接脳を揺さぶった。

溢れ出す肉の味わいは、まるで奴の地鳴らしのように重く、太く広がった。噛むだけで溢れるその旨み。生きていた頃よりも、さらに新鮮になったかのように。

旨いのだ。旨いという言葉は、この時のためにあつたのだと。そんな風にすら感じてしまう。肉の脂が、その食感が、鼻を抜ける香りが、その全てが相まって、旨いという思いを作りだす。俺はもう、俺はもう——。

「……旨い」

もうそれだけしか、言えなかった。

「か、固いにや……」

イルルは、その歯応えになかなか苦戦しているようだ。

確かに、噛み応えはそこらの肉とは大違いだった。あの、『重い』とすら感じる肉の厚さが伝わってくる。龍気の活性性によって幾分か柔らかくなつてはいるものの、この肉の繊維の多重構造は、顎を喰らせるには持つてこいだった。そしてその繊維がほぐれるほど、旨味が溢れ返る。

その旨みがまた、たまらないのだ。この肉は、あらかじめ調味液に漬け置きしたものだ。それを先程バルフアルクに焼いてもらったのだ。調味液には、ニンニクを始め、雪山草やトウガラシ、天空山で採れた薬草や霞ケ草といった香草と、隠し味に落陽草の根の擦り下ろしを加えている。それをオリーブオイルとバター、塩で炒めて、解凍した淆瘴啖の肉をじっくり一日漬け込んだ。マカ錬金の壺が、今回の影の功労者だ。

「んんん……香りが鼻を抜けるッ」

噛むと、旨味と共に撒き散らされる香り。

ニンニクの臭くも旨い味わいが、香草の深く味のある風味が、オリーブと塩のシンプレな味わいが脳を直撃する。これがまた、肉の旨みを引き立てるのだ。

味付けは、味を塗り足すことで食材を覆うのではない。食材の味を引き立てるためにある。今俺は、猛烈にそう思う。

「……淆瘴啖、旨いな」

「美味しいにや。あれが、こんなに美味しくなるなんてびっくりにや」

「だな。頑張つて仕留めた甲斐があつたなあ……」

また一つ、新しい味を知った。

たくさんの旨いものを鱈腹溜め込んで、蓄積してきた淆瘴啖の味。とても食べたものではなかったその味が、今龍気によって活性化し、旨味の束とも言える力を発揮してい



た。

「あー……旨い。生きてて良かった」

渚瘴啖、俺はお前のことを忘れない。

ずっとずっと、お前は確かに旨かったと、心に刻んでおくよ。

「旦那さん、これで一区切りついたって奴にやね」

「一区切り？」

「ずっと食べたがつてた渚瘴啖をようやく食べれたにや。でも、旦那さんの旅は、ここで終わりじゃないんだにや？」

「……そうだ。渚瘴啖を食って、俺は今新しい俺になった。さらなる『旨い』を探す俺にな」

俺が着込む、『渚瘴啖シリーズ』。

かつて俺が着用していたネブラXシリーズに準えて、フードとコートを基調にした鎧に仕立ててもらったもの。男性用のグリードXRシリーズの如くコート型の鎧ながら、頭から肩にかけては女性用のタイプもモデルにしている。動きを阻害する肩部分は、装甲を薄くする代わりに、動きやすいものに変えてもらった。この方が、今の俺には馴染むのだ。

「渚瘴啖を糧にして、俺は前に進むよ。俺はハンターを続ける」

「にゃ!」

「イルル。この先も、一緒に来てくれるか?」

「うにゃつ。ボクはずつとずつと、旦那さんと一緒にいるにゃ」

イルルは、そう頷いて、持っていた肉を俺に向けてくる。彼女に渡していたのは尻尾の肉だ。

俺も同じように、もも肉のこんがり肉を彼女に差し出し、お互いに肉を分け合った。まるで盃でも交わすかのように。

「尻尾、特に固いな……。でも、この噛み応え、病みつきになるぞ!」

「うにゃ、もも肉の繊維すごいにゃ! 口の中でほどけていくのにゃ」

狩猟飯。ああ、狩猟飯。

たまらない。俺は今、生きている。生きているんだ。

この世は弱肉強食だ。食うか食われるか、そこには上も下もなく、ただ生き残ったものに『食』が提供される。

食事とは、生の特権なのだ。

この世界には、俺の知らない味がまだたくさんある。未知なる味に、満ちている。

俺は今も生きているから、これからもハンターを続けていこう。

武器や防具を作るため？ 大金を稼ぐため？  
いや、違う。俺がハンターをするのは、新しい『旨い』に出会うためだ。

〜本日のレシピ〜

『こんがり肉』

- ・ 淆瘴啖（もも肉、尾肉等） …… 600g
- ・ オリーブオイル …… 400ml
- ・ ユクモニンク …… 6個
- ・ 薬草（天空山産） …… 60g
- ・ 霞ケ草 …… 120g
- ・ 雪山草 …… 100g
- ・ 落陽草の根（擦り下ろし） …… 55g
- ・ 塩 …… 大さじ7
- ・ ムーフアバター …… 30g
- ・ パセリ …… お好みで

☆天彗龍の炎を使い、強火で焼くことがポイント！

☆マカ錬金の壺で漬け込むとより美味しくいただけます。

「いやあ、助かったぜ。まさか、タンジアギルドの人が救援に来てくれるなんて」  
「ほんと、俺たち死ぬ思いしたんですよ〜！ お兄さんのボウガン捌き、すげー頼もしかったです……っ」

未知の樹海の奥地で、夜営を行うハンターが三人。

グラビドシリーズを纏うランサーと、バサルシリーズを着込んだ弓使いの二人組が、ボウガンを背負った男に頭を下げている。

「いえいえ、間に合ってよかったです。あのセルレギオスは、確かに異常でしたからね。ドンドルマギルドが救援を要請するのも分かります」

理知的にそう返すのは、フロギイXシリーズを身に付けた糸目の男。

そんな彼が、キャンプの火に向けて、おもむろに小さな鍋を向け始めた。

「傷、大丈夫ですか？ 裂傷ですよね」

「う……恥ずかしながら。いつ、いてて……」

弓使いの男が、腹部を押さえる。

包帯を巻いてはいたが、そこには痛々しい裂傷が血を滴らせていた。

「これ、タンジァギルドで良く販売されてるものなんですが……意外に滋養強壮効果があつて切り傷の回復を早めてくれるんですよ。効能は、ほら、モスジャーキーとかに近いです」

「これ、チップスか？ 芋を薄く揚げた」

「そうです。タンジァチップス、ですね」

糸目の彼が示したそれは、タンジァギルドの名物、タンジァチップスだ。

紙袋に詰められたそれが、薄く香る芋の香りで、確かな存在を主張している。

「で、その鍋は？」

「このまま食べてもいいんですけど、ちよつと一工夫すると美味しいんですよ」

そう言いながら彼が取り出したのは、オリーブオイルの入った小瓶と、にんにくの薄切り、トウガラシの輪切りの袋詰め。

それらを全て鍋に入れ、火にかけた。

「トウガラシは、この樹海で自生したものです。食べれる種類のもので大丈夫。

題して、ガーリックチップスでしようか。今日はこれを食べて休みましょう」

具材を混ぜながら、焼き加減を確かめる糸目の男。

そんな彼の姿を見ながら、弓使いの男は困ったようにぼやく。

「そのまま食べれば早いのに……」

「最近、知ったんです。こういうひと手間が、実は一番楽しいんですよ。効率重視より、無駄を楽しむのがいいんです」

「そういうもんかなあ……」

「それに何より、この方が美味しいですしね」

その言葉を前に、反論材料を持ち合わせていない弓使いは、困ったように頭を掻いた。糸目の彼は、鍋を火から離し、満足そうに微笑む。そこへ、タンジアチップスを紙袋から鍋に向けて投入した。ザクザクとした小気味良い音が、オリーブとにんにくの香りに包まれる。

「……なんか、アンタみたいなことをしてるハンターに会ったことがあるよ」

ひと手間かけるその様子を見て、槍使いの男は思い出したようにそう言った。

その言葉に感化されたように、弓使いの男も「あつ」と声を上げた。

「そうだ！　なんか、アルセルタスを唐揚げにした奴！　その場でモンスターを料理する変な奴いたな！」

「あれ旨かったよな……。あの片手劍使い、今どうしてるんだろ」

「へえ……。良いですね。同じようなことをする人がいるもんですねえ」

「そうだよ。お兄さん、きつと仲良くなれるよ。ウマが合いそうだ」

「ふふっ、合うと……。嬉しいですね」

懐かしそうに語る二人の話を聞いて、糸目の男は微笑んだ。

屈託のない、憑き物の落ちたような笑顔だった。

狩人飯道中　　＼　T o　l i v e　a n d　e a t　a s

I　p l e a s e　＼

## 沼地の山海鍋

「歩いてくるキノコってないのかな」

「……何を言ってるのにや？」

沼地でキノコ狩りに勤しむ傍ら、俺はそう呟いた。

その言葉に、狩りの相棒は辟易したような声で応える。

「いやさ、キノコ欲しいんだけどさ。自分で集めるのも……もちろん楽しいぞ？　でもな、でも………」

「でも……」

「キノコからこつちに歩いてきてくれたら、それはそれで嬉しいなって」

この人は何を言ってるのか。

そんな表情で顔をいっばいにするアイルー、イルル。

雪のような毛並みを天眼ネコシリーズで包み込む、俺のオトモアイルーだ。大海のよ



うな青い瞳がクリクリとしていて可愛らしい、俺の人生のパートナーでもある。

「また旦那さんの妄言が始まったにや。もしくは世迷言にや」

「待て、人を気軽に狂人扱いするな」

こんな顔をされるのは、もう何度目か分からない。

おかしいな、俺は至って真面目に話しているというのに。

「あれかにや？ それは……名付けるとしたら、歩きキノコって感じかにや？」

「おう、それは良いな。足が生えてるキノコな。その足も食えたりしてな」

「旦那さんのことだから、この足が美味いんだとか言いそうにや」

「そんなキノコがいたら、ぜひこちらにやってきて欲しいもんだぜ」

今俺が沼地に出掛けているのは、逼迫した依頼だとか、街の危機だとか、そんな状況からは程遠い。

沼地の採取ツアー。俺が欲しい素材のために、ギルドに申請してこの地に訪れているだけ。言ってしまうえば、趣味の領域である。

ハンターであれば、自前の武器の強化だとか、鎧の修繕とか、そんな理由で緊急性皆無の猟場へ赴くことも少なくない。まあ、俺のように食材を求めて出向いてくる奴は、少数派なのだろうが――。

なんて、物思いに耽りながら、本日の釣果をカゴに入れていく。

「アオキノコ、特産キノコ、毒テングダケ、ニトロダケ、マヒダケ、ドキドキノコ……」  
「随分拾ったにや」

「こんだけあれば、十分な炊き出しができそうだ」

「ちよつと待つにや、これ全部入れる気にや?」

「今なら、何でも食べられそうな気がする」

かの因縁のモンスターを仕留め、その素材を用いて作った新防具——瘡瘴啖シリーズ。

黒く染まった暗緑色の厚皮と、金色の鋭い棘を集めたそれは、フードとコートのような形で構成されていた。

よくある男性向けのグリードシリーズは、いわゆる重装備であり俺には扱いにくかった。軽装を好む俺にとっては、かつて愛用していたネブラXシリーズのような物が着慣れている。そんな俺の相談に、加工屋は丁寧に応えてくれた。

するとどうだろう。この装備を身に纏うようになってから、妙に腹が減るんだ。今の俺だったら、そのままのキノコだって、生肉だって、何でもペロリと食べられそうな気さえする。

「ボクは毒キノコもマヒダケも食べたくないにや……。毒でやられるのは勘弁にや」

「そうか……。ニトロダケは?」

「爆発しそうで怖いにや。今はいいにや」

「残念、旨いのに。なら、アオキノコと特産キノコと……ドキドキノコだけにしとくか」  
「最後のが一番怖いのにや！」

イルルが、如何にドキドキノコが怖いかを熱弁し始める。

ドキドキノコといえ、食べれば一体何が起こるか分からないという、ある意味一番毒キノコらしいキノコだ。

食べたらず中毒になったという男の話もあれば、麻痺して動けなくなったという貴族の話もある。かと思えば、死に際に口にしたところ体が活性化し、奇跡的に生還できたハントナーの話すらある。

そのキノコの根付いた環境や、吸い上げた養分によつて様々な效能を得るらしい。まるで夢のようなキノコだ。是非とも口にしたい。

なんて思いながら、イルルの熱弁を妨げようとしたその時だった。

ドスンと、背後に何か降りてきた。

「……あ？」

「……にや？」

白い柔皮。

血走るように全身を覆う血管。

ブヨブヨとした皮膜に、一對の白い足。

不気味に伸縮するその頭は、今まさに俺が求めていたものを体現しているかのようだった。

その存在が、目のない顔で俺を見る。

「にゃあつー！」

イルルがひしつと俺に飛びついてきた。

無理もない。彼女にとっては苦手なモンスターだったはずだ。

「ふ、ふるふる……フルフルにやー！」

フルフル。

またの名を、奇怪竜。

飛竜に属するとは思えないその奇怪な見た目は、言ってしまうえば口だけある顔が伸び縮みする化け物だ。

「どうどう、俺たちに気付いてはいるが、興奮している様子はない。おそらく、空腹ではないだろう。散歩中か、それとも寢床を指摘しているのかな……」

「お、襲われないにゃ？」

「今のところは、な」

忙しなく鼻を動かす——鼻があるかどうかは知らない——フルフルだが、こちらに向

けて威嚇する様子はない。

狩りを終えて満腹になっているのだろうか？ いずれにせよ、俺たちには興味なさそうだ。

「……なあ、イルル」

「な、何にや、旦那さん」

左右に揺れるフルフルの頭部を見ながら、俺は思ったことを口にする。

「……いつこそ、まさに歩きキノコじゃないか」

「……にや？」

この人は何を言ってるんだらう。

イルルの顔に、そう書いてあった。

「だって……いつさ」

思わず指差した先にある、フルフルの頭部。

目がなく、鼻の位置も分らない。

ただ伸び縮みする首の先に、横に裂けた口が付いている。

それ以外は、何もなし。丸みを帯びた頭部のみ。

伸びたそれはまるで頭部が丸みを帯びたかさ、首が石付きのようにも見えた。

その姿は、まるで。まるで——。

「キノコみたいじゃん。ご立派なやつ」

「にや、言われてみれば……?」

「でかいキノコが歩いてら。まさに歩きキノコだ」

「き、キノコ……なのかにや」

「ま、どつちかというとキノコって言うよりもろ男の——」

「やめるにやつ、それ以上は言っちゃダメにや!」

慌てて俺の言葉を遮るイルル。

赤面した顔をそっぽに向かせては、尻尾を左右にふりふりと揺らす。

泡狐竜を思わせる白く豊かな毛並みが、俺の視界を埋め尽くしてきた。

何を今更照れているのかと、俺が呆れようとした時——今度は、反対側の地面が大きく盛り上がった。

「何だ……ッ!?!」

フルフルの真正面。

俺とイルルを中心として、歩きキノコと相對するように現れる者。

青い甲殻に、それが背負う摩耗した骨。

長く鋭い鋏と、その巨体を支える複数の脚。

甲高い声を上げながら、両手を振り広げて威嚇するそいつは、まさに蟹だった。

「シヨウグンギザミ！ こいつの縄張りかここは！」

「にやつ！ この子は怒ってる！ 怒ってるにや！」

俺やイルル程度では、大して気にも留めなかつたらしい。人間やイルルは、自然界では上位に君臨する。もちろん、小さい者の序列として。

おそらく、ふらりと現れたフルフルに、危機感を抱いたのだろう。シヨウグンギザミは、唸り声を上げながらフルフルを睨み続けている。

「……若いな。まだギザミになりたてか、どうかって感じだ」

「にやつ？ どういうことにや？」

「出世魚みたいなものだよ。ギルドはガミザミかギザミか、体格で判別する」

「にやつ……確かに、モンスターストで見るとよりは少し小さい気がするにや」

言うなれば、ガミザミ以上ギザミ未満といったところだろうか。

その小柄な体躯は、まだ脱皮を多く繰り返していない証である。そしてそれを悟られぬよう、必死に体を大きく見せている。

今にも攻撃を仕掛ける。あまりにも、分かりやすかった。

「……来るぞー！」

「にやつー！」

両手の爪を、激しく擦らせる鎌蟹。

これは、大きく跳躍して獲物に飛び掛かる合図だ。彼はフルフルを排除しようと躍りになっている。その間にいる俺たちにはお構いなしに。

とにかく、イルルを抱き上げては、即座に横に跳んだ。

その直後、シヨウグングザミが勢いよく跳ねる。

降り掛かる刃。

鍔とも鎌とも呼べるそれは、フルフルの外皮を容易く引き裂いた。

思わぬ挑戦者にフルフルは驚くが、それも束の間、恐ろしい形相で咆哮する。

沼地に、女性の叫び声を何倍も悍ましくしたような声が響き渡った。

「うにゃつ、怖いにゃあー!」

「相変わらずすげえ声だな……ッ!」

浮き出た血管がさらに赤みを増す。

それが身体中から顔へ、フルフルの口周りへと充血が迸っていく——終いには、青白い電光へと変貌した。

「伏せろ!」

その電光はまつすぐ、自らを挟み込むシヨウグングザミへと放たれた。

ゼロ距離でそのブレスを浴び、將軍の名に似付かわしくない悲鳴が響く。引き裂かれるような、焼き付けるような。雷属性特有の衝撃は、容易く青い甲殻を破るのだった。



「ひえっ、恐ろしいな……」

「ボクたちの防具、どっちも雷は苦手にや！ おつかないにやあく！」

そう、俺もイルルも、雷を苦手とするモンスターの素材を使った防具を着用している。そしてシヨウグンギザミ。彼もまた、雷を苦手とするモンスターである。

「フルフルが動く……ッ！」

首を大きくしならせ、その鋏へと齧り付く。

雷を浴びて傷んだ甲殻に、鋭い牙の山が襲い掛かった。

「にやつ、このままじゃ！」

メキメキと音を立てるその様子に、イルルは思わず声を上げるが——今は静かに見守った。

俺たちは採取ツアーに来ているだけだ。無闇に戦いを繰り広げたり、目に付く者全てに襲い掛かったりするわけではない。

確かに、気になったものは味を確かめずにはいられない。そんな時期もあったものだ。——今は、生態系での自分の立ち位置を考えたい。あの瘡癩啖との戦いを経た今は、そう思う。

なりふり構わずというのは、得てして自分を追い込むものだ。

「これは、フルフルの勝ちにや？」

「まあしょうがないな。相性が悪い」

フルフルの牙が、とうとう鋭い鋏を断ち切った。

自身の腕ごと削ぎ落とされ、ショウグンギザミは悲鳴を上げる。

体制を崩した相手を逃すことなく、フルフルはその身を生かしてのし掛かった。そして、蟹の頭へと喰らい付く。

まさに、縄張りが奪われる瞬間だった。まだガミザミに毛が生えた程度のギザミでは、飛竜には到底敵わない。暴れていた青い手足は、次第に小刻みに震え、最後には動かなくなった。

勝利したフルフルは、興味を無くしたように口を離し、沼地の奥地へと歩き出す。もし奴が空腹だったら、そのままギザミを食い散らかしていただろう。

「……歩きキノコの勝ちだな」

沼地を、生ぬるい風が撫でる。

ここに残ったのは、俺とイルルと、崩れ落ちた新鮮な蟹の肉だけだった。



「……………これでよし、と」

ふう、と吐息を添えながら、俺はナイフをまた板に置いた。

そのナイフの横には、薄く切られたキノコが立ち並ぶ。

石付きを取り、かさに対して垂直に薄く切り分けていくこの調理作業。相変わらず、心が落ち着くもんだ。

「旦那さん、とても綺麗にや。キノコの飾り盛りにや!」

「キノコは縦に繊維が走ってるからな。上から薄切りにするとやりやすい。折角だから、今日はキノコ鍋にしようか。沼地もなんだかんだ冷えるしな」

アオキノコ、特産キノコをざつと十個ほどだろうか。

薄く切り分けたそれらを、鍋へと入れていく。

さらさらと、薄いキノコが舞い降りる光景は、何とも表現し難い魅力がある。まるで、緩やかに舞う秋雨のような。鍋に降り積もるキノコを見ていると、思わず心が躍ってしまふ。

「さて、と……次はコイツを」

鍋底のキノコを少し端に寄せつつ、その空いた隙間に薬草やげどく草を敷いていく。

今回は手持ちの野菜がない。その野菜代わりだ。

とはいえ、薬草は霞ヶ草のように青々とした葉野菜に近く、げどく草は大根のような根菜である。その葉と、白い根の部分をいちよう切りして入れれば、これらは立派な野

菜に見える。

ちなみに、げどく草の解毒成分はこの根の部分に集中しているらしい。見た目も良い。美味そうだ。

「旦那さん、こつちも切れたにや」

「おう。切るの大変だっただろ。悪いな」

イルルがせつせと手入れしていた物を受け取った。

青い甲殻が、ひび割れてしまっているが——それは紛れもない蟹のものである。

「とつても固かったにや。そのまま入れるのじゃダメなのにな？」

「切り口から出る出汗がミソだ。それに、この方が身に火が早く通る」

輪切り状に切られた、シヨウグンギザミの鉢。

そして、剥いた足を数本。

開いた腹部の甲殻も少々。

その中身は、青い甲殻とは裏腹に透き通った白身であった。そして何とも瑞々しい。

「……じゅるり」

「……ちよつと味見してみるにや？」

「確かに興味はあるが……ガミザミは毒を吐くからな。一応、加熱した方が良さそうだ。そしてその付け合わせにげどく草。完璧だ。俺も随分賢くなったもんだなあ、うんう

ん」

「そもそも、賢い人は毒のあるものは食べないと思うにや」

イルルのやれやれと言わんばかりの声は無視して、蟹の身を鍋に入れていく。もちろん、殻は付けたまま。出汁のためではあるが、こちらの方が風情があつて旨そうにも見える。

さて、そんなこんなで鍋が出来上がった。

キノコの薄切りの山。

薬草とげどく草の深き森。

そして鎌蟹による、青く透き通る海。

名付けて『沼地の山海鍋』だ。

「あとは味付けをして……」

その山海に、水と酒を注ぐ。

さらに塩、みりん、そして醤油——最後は隠し味にロツクラツク製ホットドリンクを少々。

何を隠そう、ロツクラツク製ホットドリンクは醤油味である。多少の癖はあるが、鎌蟹の甲殻から滲むであろう出汁とは相性抜群なのはななかうか。

「さて、火にかけるぞー！」

ベースキャンプを照らす焚き火を、三本の棒で作った三角錐で取り囲む。

俗に言うトライポッドと呼ばれるそれ。その頂点には、鎖が取り付けられており、それが静かに焚き火に向けて垂れ下がっていた。

鎖の先に、山海鍋を括り付ける。

この鍋は、蓋に仕掛けがあるため、蓋に鍋を固定できるのだ。つまり、鎖にぶら下げても中身を溢すことなく宙吊りにできる。なんとという便利な鍋だ。いや、ダッチオーブンと言った方が分かりやすいだろうか。

「とりあえずは強火だ」

「にゃー、楽しみにゃ」

ごうごうと燃える焚き火に、鍋をとにかく近付けた。

ひとまず煮立つまでは静かに待つ。俺とイルルは、そつと腰を下ろした。

「……にゃあ、ちよつと安心したにゃ」

束の間の静寂に、イルルが小さくそう溢す。

「何がだ？」

そう問い返すと、彼女はポーチから肉片を取り出した。

白く弾力性のあるそれが、沼地の曇り空をうつすらと映す。

「フルフルの皮にゃ。鉄に付いてたやつ、てつきり鍋に入れたがると思つてたにゃ」

「そりゃあフルフルの味には興味あるよ。何せ奴の肉は絶対に市場に流通しないからな。火竜や角竜は時々見掛けるが、フルフルだけは一度もない。食べてみたいとは思う」

「……でも、あれにや？ 人間には食べられないって話にや？」

「らしいな。毒があるのか、それともめちやくちや不味いのか。興味が尽きないね」

このブヨブヨとした皮は、湯引きすれば食べれるだろうか――。

確かに、これを目にした時はそう考えた。湯引きして細く切れば、麺のようになるのではないか。それを鍋に入れれば、大層華やかなものになるとさえ思ったが。

「……どうせなら、フルフルのあれを食べたいね」

「あれ？」

「霜降りってやつさ」

フルフルには、霜降りと呼ばれる部位が存在する。

果たしてそれがどんな味なのか――誰に聞いても、知らないという答えしか得られなかった。

食べた者がいないのか、それとも食べてなお生きている者がいないのか。はたまた、食べた事実を隠しているのか。

しかし、秘密とは甘いものだ。未知というのは、非常に食欲をそそるものなのだ。

「いつかフルフルの狩猟依頼に出会えた時に、やってみたいもんだな」  
「にやー。悪いことになる予感しかしないにや」

呆れるように、イルルは耳を垂れさせた。

「ま、今回は運良くギザミの缺が手に入ったんだ。コイツの味を教えてもらおう。ザザミは食べたことあるが、ギザミは初めてかもしれない。楽しみだぜ」

「夢の食べ比べにやあ」

「ザザミは相当美味かったが、こちらはどんなもんか……つと。鍋が煮えてきたな」

ふつつつと、蓋の隙間から気泡が漏れる。

見れば、白い蒸気が沼地を染め始めていた。

それと同時に、深い出汁の香りが鼻腔を優しく撫でてくる。

「おおっ！ これは良い香りだ！」

「にやー！ 旨いより甘い系にやー！ たつぷりふくよかな香りにやー！」

ダイミヨウザザミは、歯応えばつちりの、深く旨い味わいだつたことを覚えている。

塩茹でというシンプルな調理法が、最もその旨みを引き出すのではないか。そんな、蟹らしさを追求した旨みだった。

そこへ双壁をなすかのように、甘い香りを漂わせるシヨウグンギザミ。あのイカつい見た目からは想像できない、繊細な香りが俺たちを綻ばすのだった。



「さて、もうしばらく火を通そう。少し弱火で……」

そう言いながら、トライポッドの鎖を手掛ける。

もう片方の手には厚手の手袋を付けて鍋を支え、蓋に引掛けた鎖を外した。そのまま、もう少し上の鎖へと鍋を付け直す。

火から距離を空けられた鍋は、沸々と漏らす気泡の勢いを静めた。それでも、白い蒸気は絶え間なく漏れ続ける。

「にゃー、楽しみにゃ。ウキウキにゃ」

「もうしばらくの辛抱だな。今のうちに、酢のビンでも出しとくか」

蟹といえば、酢でしょ。

ユクモ村やタンジアの港で、イズモがそう言っていたのを思い出す。

もしくは酢味噌、だろうか。俺は少し食べ慣れなかったが、イズモは好んで蟹を酢味噌に付けて食べていた。

「お、あったあった」

ポーチの中から取り出したビンは、バルバレの市場で仕入れた酢で満たされている。

鍋自体塩や醤油で味付けはしているが、こうしたアクセントも良いだろう。いわゆる『味変』というやつだ。

「そういえば、昔山菜ジイさんに怒られたことがあつてな」

「山菜ジイさんにや?」

「ああ。今と同じように鍋に甲殻付きのモンスターを入れたことがあるんだ。まあ、甲殻種ならぬ、甲虫種だけだ」

「む、虫……」

山菜ジイさんといえば、猟場のベースキャンプをよく彷徨っている竜人の老人だ。

親切にしてくれたかと思えば突然怒り出すと、ハンターたちからは疎まれていことも多い。しかし、料理に関しては人一倍こだわりがあり、同好の士には理解を示してくれるのだ。

「一体何を入れたのにや?」

「クンチュウだ」

「……えー」

遺跡平原などを転がっている甲虫種、クンチュウ。

丸みを帯びた甲殻が美しい、小型モンスターだ。

それを俺は、鍋に丸ごと入れた。

「丸ごとじゃ!?!」

「食べ方が分からなかったから、とりあえずな」

「あれをそのまま食べようとしたのにや!?!」

その時だった。

山菜ジイさんが現れたのは。

「切り分けた方が旨いと、ジイさんが教えてくれたんだ。身に早く火が通るし、殻からは出汁が出るってな」

「にや、それさつきも聞いたようにや……」

「俺がイルルに、鉄を切ってくれて頼んだ時に同じこと言ったんだよ」

「にやあー、そうだったにや」

まだバルバレでの狩りを始めて、季節が移るにも満たない時期だったと思う。

あのクンチュウスープは恐ろしく不味かったが、今となつてはいい思い出だ。

何より今の俺は、あの時とは違うから。

この鍋の出来が、それを物語っているだろう。

「……うん、もう良さそうさ」

香りが深みを帯び出した。

鍋を下ろし、蓋に手を掛ける。イルルと視線を合わせ、頷き合った。

「いくぞ」

「にやー」

蓋の留め具を外し、勢いよく蓋を取る。

舞い上がる湯気。

その湯気を覆い尽くす、甘い蟹の香り。そしてそこに深みを加えるキノコの香り。ぐつぐつと煮える鍋の中には、淡い色合いのキノコと、よく煮えた薬草たち、そして透き通る白から柔らかな赤へと変貌した蟹の身が躍っていた。

美しい。その一言に尽きる。

「シヨウグンギザミも、火を通すと赤くなるのにや」

「甲殻は意外にも青いままだ。青と赤のコントラストが美しいな」

「他の具材もよく煮えてるにや！ 美味しそうにや〜」

早速鍋をおたまで掬い、具材を器に盛り分ける。

冷えた沼地の空気を、温かな湯気が塗り替えていく。そんな気さえした。

「さあ、食べようか」

「にや！ いただきますにや！」

「いただきます」

箸で蟹をつつくと、簡単に殻からほぐれ落ちる。

山菜ジイさんの言う通りだ。切り分けて入れると、驚くほど身によく火が通る。

そして、溢れる出汁が素晴らしい。鍋のスープに、殻の旨みが溶け出しているのがよく分かる。煌めく脂の輪が美しいのだ。

「はふっ……んー」

熱々の身を口を含むと、まずその柔らかな歯触りに驚いた。

弾力性と、噛むほど溢れる旨みが売りのザザミに対して、ギザミは柔らかで繊細な味わいだ。甘く、上品な仕上がりととも言える。少し力を加えるだけで簡単に解れる身から、脂の甘みと出汁の旨みが染み出してくる。

「うん、旨い」

「にゃー、ほくほくしゃわしゃわで、美味しいにゃ〜」

鯨の肉は、よく使う部位だけに筋繊維が発達しているのだろう。

細かく短い繊維がとにかくたくさん殻に押し込まれている——。

そんな表現が似合うかもしれない。

それが、口の中で解けて、深い甘みに変貌していく。何という幸せだろうか。

「にゃー、キノコも美味しいにゃ。鍋の出汁にもなってるかにゃ？ この深みは、蟹さんだけじゃない気がするにゃ」

「確かに……。そうかもしれない」

キノコの歯触りも、これもまた楽しい。

柔らかいが、簡単には噛み切れない弾力性。少しづつほぐれていくため、何度も咀嚼することができる。噛むのが楽しい。そして、染み込んだスープの旨みが溢れてくるの

がまた楽しいのだ。

というか、スープそのものがかなり旨い。それはそうだ。蟹とキノコをふんだんに使っているのだから。

「うん……こりやあつたまるな」

「にゃー、ぽかぽかしてきたにゃ」

隠し味に入れた、ホットドリリンクの効能だろうか。

じんわりと、体が温まってきた気がする。このドリリンクの醤油味も、鍋の旨さに一役買っていると思うと嬉しくなる。俺の予想通り、蟹との相性は抜群だった。これなら、沼地の寒さも怖くない。

そして、その旨みをたっぷり吸った葉草類といえば。じゅわつと溢れるエキスに、俺は思わず口角を上げてしまう。げどく草の根は、蟹とキノコの出汁を吸ってまろやかな味わいとなっており、俺を容易く笑顔にさせる。ほろほろ崩れ、蟹の甘みを吸った出汁が溢れ出す。

味がよく染みており、美味しくて、さらに体に良い。文句なし。

「あー、こりや良いな。今夜はこいつをゆつくり食べよう。イルルもまだ食うだろ？」

「にゃー！ おかわりほしいにゃ」

器に持った分が早くも空になってしまった。

続くおかわりを、俺もイルルも喜んで盛り付けていく。

夜の沼地は冷え込むが、この鍋があれば怖くない。

ベースキャンプの火は、いつまでも絶えず俺たちを照らすのだった。

「……にしても」

「にや?」

「何も、変なこと起きないな。……ドキドキノコも、入れたのに」

「にや!?!」

しれっと混ぜたドキドキノコ。この薄切りキノコの山に溶け、その成分を鍋にしつかり溶かしていることだろう。

食べたら何が起こるか分からない。そんな触れ込みだったのだが――。

今のところ、俺もイルルも何も起きてない。

「おかしいな。下手したら毒や麻痺になったり、全身臭くなったりするのかなって思ってたんだけど」

「うにや……」

俺の言葉に、イルルも自身の体を確認する。

彼女もまた、特に何も起きていない。いつも通りのふわふわもふもふだ。

「そういえば、よろず焼きって最近流行ってるにや」

「ああ、飯屋がやってるサービスだよな。素材持ち込んだら焼いて弁当にしてくれるっていう」

「あれのメニュー表見たことあるけど、そういえば書いてあったにや」

「……もしかして？」

「ドキドキノコにや」

よろず焼きの公式メニューとして、ドキドキノコがある。

つまり、ドキドキノコは食材として市場に認知されている。

熱を通せば、奇妙な効果は現れない——ということだろうか。

「……ならば」

ポーチから取り出した、もしものためのドキドキノコ。

それを、生のまま齧ってみた。

「な、何してるにや旦那さん！」

「うおっ……!!」

全身に電流のような感覚が駆け巡る。

麻痺か、と思ったが痺れはない。むしろ体が活性化してる感覚さえある。

ただ、その味わいは——。

「秘薬みたいだ」



「秘薬？」

「めっちゃ不味い……」

渋柿を煮詰めて固めたような、そんな味だった。

舌に粘土を塗りたくられたような、奇妙な感覚が残る。

「良薬口に苦し、にや？」

「俺は体に良くてもまずいものより、旨くて体に良いもんが食べたいぜ」

「そんな都合のいいもの……あ、この鍋にや」

「本当だな。まさにこいつがそれだ」

そう言いながら、蟹の身を酢に浸して口に入れた。

酢をつけて、味変させた蟹の味わい。

柔らかな出汁の甘みと、酢の酸味が交叉する。甘いのに、酸っぱい。いや、酸っぱいが追い上げ、口いっぱいに鋭い酸味が広がっていく。そうかと思えば、出汁の深みが——キノコと薬草の滋養成分が、蟹を包み込んでいくのだ。

追従してくるその旨みが、酸味を優しく塗り替えていく。確かに、今ならイズモの言うことも分かる気がする。

「ああ……旨い」

旨い。

旨くて、優しくて、体に良い。

これこそが、良薬口に旨しだろうか――。

「ご馳走様でした」

食べ終わりを、この一言で締める。

命を戴くのは、いつだって尊い行為である。

く 本日のレシピく

『沼地の山海鍋』

・ ショウゲンギザミ（脚、鋏、胴）	……	800g
・ アオキノコ	……	4個
・ 特産キノコ	……	4個
・ ドキドキノコ	……	2個
・ 薬草	……	100g
・ げどく草	……	50g
・ 水	……	1000ml
・ 黄金芋酒	……	大さじ3
・ みりん	……	大さじ3

- ユクモししょうゆ …… 大さじ2
  - ロックラック製ホットドリンク …… 半量
  - 塩 …… 適量
- ?? お好みで酢も付け合わせるもオススメ!